tomogon

秘するが花

掌編

余香

捧げ持ちて毎日余香を拝す（大鏡より）

■01

シャルル・ドゥ・アルディの不定期な休暇に合わせて自分の予定を立てることはやめようとマリナ・イケダは思っていた。
彼にはほとんどオフと言えるような休暇はない。
あっても、一日のうちの何時間か自由に過ごすことが出来る程度の時間しかなく、よほど計画して綿密な予定を立てなければならない繁忙さを、彼は長いこと受け入れてきた。

これまで財閥の御曹司だった若い頃とは違って、彼の思い通りにならないことも多くなった。
それはフランスの華と称されて、人が出来ないことをやり遂げる知性と意志と環境を持つ彼であっても、省略できない手順と拘束される時間があるのだということを、マリナは充分よく学習したつもりだった。

彼が「ちょっと遊びに来た」と言って、若い頃、ふらりと日本にやってきたことさえも。
本当は、その時でさえ、彼のスケジュールはかなり調整されてきたのだと思う。
今は一族の事業を承継して、彼だからこそできることを成している日々を、マリナは決して否定するつもりはなかった。
それは彼が長い苦難の道程を乗り越えて、一度失いそしてもう一度手に入れた場所だから。

けれども。

「・・・今日はクリスマスだから、というつもりはないけれど」
マリナは呆れて言った。
館の使用人達が飾ったクリスマスツリーの脇を、表情に横切りながら、シャルル・ドゥ・アルディが入室してきたとき。
彼女はさすがに口を出すことにした。
今日はかなり冷え込んでいる。
昼間には、珍しく、地理的にありえないのに、パリに風花が降ったくらいだ。
シャルルはコートを脱ぎ、タイを緩めて、戻るなり開口一番「出かける」と言い出した。
次の出先でこの格好は相応しくないので、着替えに来たと言う。
マリナの言葉に、シャルルは青灰色の瞳を彼女にむけて、つまらなさそうに、素っ気なく言った。
「何か意見したいのなら、オレは聞かないよ。・・・時間がない」
そう言って、豪奢に飾った居間を抜けて、さっさと自室に向かって行く。
マリナは「ちょっと！」と言って、彼の背中を追ったが、追いついたのはようやく部屋の中に入った時だった。

いつになく不機嫌だ。
彼は上機嫌のときは余りよくわからないが、不機嫌のときにははっきりと見て取れる。
・・・攻撃的になり、そのくせむっつりと話をしない。
何を言っても取り合わない。

ーーーまるで子どものようだわ

非常に小柄で、若いと言うより幼く見えるマリナがそう言おうものなら、シャルルは冷笑しながら、辛辣に次から次へとマリナに皮肉と嫌味のシャワーをたっぷり浴びせることだろう。

しかし、せめて、使用人達が用意したクリスマスの準備をねぎらったり、ジルが用意したクリスマスカードを眺めたり・・・
平々凡々な日本の家庭に育ったマリナが納得できるようなクリスマスの夜を過ごして欲しかった。
シャルルは常々「イベント」と称してこういったことは軽視する傾向にある。
でも、こういった日は、これを口実とするというと言い方は悪いが、ゆっくりと、シャルルが躰を休める機会になるのであれば、それはそれで良いと思う。
とにかく、シャルルは忙しすぎる。
シャルル・ドゥ・アルディというブランドが一人歩きしているような気がする。
彼は一個の人間であり、彼自身には休息が必要な時もある。

それなのに。
世の中が漫然とした時間を楽しんでいるというのに、シャルルは着替えた後にまた出かけると言う。

マリナは唯一、彼に許可を求めなくても居室に入ることが出来る人間だった。
シャルルの後ろから部屋に滑り込む。
そして、彼女は彼の背中に、声をかけた。
「シャルル。ねぇ、聞いているの？」
「ああ、君は・・・一体何が言いたいんだよ」
彼はちょっと苛々した口調で、緩めたタイと上着をソファに放り投げた。
よく響くテノールが部屋に響き渡った。
空調はよく効いていたが、人の居ない部屋というのはどうにも寒々しい。
彼女は、クリスマス用に薄手のワンピースを着ていた。
本来なら・・・シャルルと一緒にディナーを楽しむ夜になるはずだったが、彼からは急用ができた、と言われていた。
でもその時にはその服はすでにシャルルから贈られていたから、彼も相当楽しみにしていたのだろうと推し量り、シャルルと一緒に過ごせないのだけれど、せめて贈られたワンピースくらいは、着てみようと思って身につけていた。
でも、その出で立ちを見ても、シャルルはちらりと彼女を一瞥するだけだった。

・・・・何も感想を言わない。

クリスマスの恋人達のように、彼と過ごしたいわけではない。
不平を言っているわけではない。

「どうして私に背中を向けるの」
こっちを向いて、と彼女は言った。
こういう雰囲気は好きではない。
一方的な意見も思いも、相手を追い詰めるだけだと、彼女はよくわかっていた。
だがしかし、シャルルの回答は明瞭だった。
「急いでいるから。マリナ。オレは着替えるから、部屋を出て行け」
彼はそう言って、やおら服を脱ぎ始めた。

・・・どこかのパーティーに出席した、と言っていた。
彼の脱ぎ着する服からは、わずかに・・・煙草の香りと、もっと違う香りがした。
シャルルの香り。
彼の愛用する香り。
そして・・・もっと違う何かが混じった香りがする。
彼女の嗅覚は鋭い方ではない。
でも、間違いなく、誰か別の人の余香が彼女の統覚を刺激した。

シャルル・・・
誰と、一緒だったの？

マリナは小さく呟いた。

強く生きるあなたの背中を見るのは嫌いではない。
でも、こういった拒絶した背中は見せないで欲しい。

朝は変わらずに、シャルルは薄い唇を寄せて、彼女の額にキスをして出て行った。
今日を一緒に過ごせないことをたいそう気に病んでいた。
それなのに、彼に何があったのだろう。
嫉妬はしない。
彼女はそう決めていた。
その感情がもたらす結果はいつも哀しいものでしかなかったから。

だから、そっと、彼を見た。

シャルルは、白金の髪をかき上げて、シャツを脱ごうとして・・・
そしてもう一度マリナを見た。
「マリナ。オレは時間がないから。すぐに出発する。・・・ディナーの続きでも楽しんでおいで」
とても優しい声音であったけれど・・・
シャルルは拒絶の言葉をマリナに投げかけた。

■02

「シャルルはすぐ出かけるのでしょう？だったら、ここで待ってる」
「話も出来ないし、支度もある。・・・マリナと話す時間はないよ」
マリナは肩をすくめた。
「ねぇ、シャルル。会話をすることだけが・・・時間を過ごすことではないでしょう」
マリナはそこまでいうと、口をつぐんだ。
彼がシャツをはだけて、逞しいけれどよく鍛えられた鋼のような体躯を露わにしている様が視界に入ったからだ。
顔を赤らめて、眼を反らす。
「同じ空間に居ることだけが、時間を過ごすことだとも思わないけれど」
辛辣な彼の答えが返ってくる。

「じゃ、待ってるよ。・・・戻ってくるまで」
「マリナ。今日は戻れないかもしれないから、先に休んでいて」
シャルルはそこで初めて彼女に振り返った。
彼女はシャルルのすぐ傍に立っていた。
でも彼に寄り添ったり、抱きついたりするわけでもない。

シャルルはマリナのために振り返ったのではなく・・・彼は脱ぎ捨てた上着から、煙草を取り出したのだ。
やめたと思っていたのに。
彼はマリナの視線に気がついたようだった。
シャルルは薄く笑った。
「今日は特別」
そしてこの上なく美しい笑みで、彼は少しだけ困ったな、という顔をした。
いつもは老成した彼であるのに、その表情がひどく若く見えて、マリナはかつての「青春の輝き」の頃の彼を思い出した。
少女と見紛うほどの美しい面立ちはそのままに、今の彼はとても男性的であるにもかかわらず、ふと、時折中性的な表情も見せる。
何かに想いを彷徨わせている時ほど、そうなる。
マリナはそれを「発作」と呼んで、彼が思考の深淵に沈む様を見つめることがあった。

遠い記憶になってしまうほど、それほど昔の話ではないのに。
彼はあの頃を懐かしんで話をすることはあるが、焦がれて戻りたいとは言わなかった。

「さ、本当に行ってくれないか。それとも・・」
シャルルはそこまで言うと、言葉を句切り、煙草を銜えた。
「一緒にシャワーでも浴びる？」
「結構です！」
マリナは顔を赤くして、横を向いた。
彼が一瞬だけひどく寂しそうに見えたが、今、目の前にいる彼は、マリナの知らない男の人だった。

喫煙して、そして胸をはだけて次の仕事に向かう準備をするために、腕時計をはずしながらしきりに煙草を燻らせる目の前の人物は、本当に、朝キスを交わした相手と同一人物なのだろうか。

「ね、シャルル。何か・・・あったの？」
「いや・・・」
彼は溜息をついて、白金の髪をかき上げた。
絹糸のような髪がこぼれ落ちて、彼の雄偉な容貌をますます際立たせたものにしていた。
「だって、おかしいよ」
マリナは会話を拒絶されたのに、シャルルに話しかけた。
シャルルが答えてくれなくても良い。
でも、彼の持って居る闇間の苦悩を聞くのは自分なのだと判断したからだ。
今「そちら側に居る」と、告げる相手がシャルルには必要だった。
彼は光と影の狭間を行ったり来たりする。
本人は意識していないのかもしれないが、彼の狂気は鎮まったわけではない。
だから、その狭間に脚を踏み入れて、うっかり進むべき路でないところに行きそうになることが多々あった。

・・・今日も何か、彼を憂慮させることがあったのだろうか。
仕事で嫌なこともあるかと思う。
特に、彼は繊細で人間嫌いで有名だ。
気むずかしく、瑣末なことと誰もが思うことでも非常に敏感に反応し、鬼胎を抱く。
アルディ家の当主になるということは、つまり、そういうことなのだ。
分裂気質のシャルルが彼を理解できないと彼が思い込んでいる、大勢の人々の波間を渡りきる程の大様さを必要とされるのだ。
彼は聡敏すぎるのだ。

「おかしい？」

うっかり言った言葉に、今度はシャルルがむっとしたように彼女に言った。
「オレのどこがおかしいのかな。
　・・・それとも、もうおかしいから、狂っていることさえわからないのかもしれないけれど」

マリナはしまったと思った。
彼の誇りを酷く傷つけたと思った。

「ごめん、そういう意味じゃない」
「それなら説明してくれ、マリナ。オレの・・・何をそんなに畏れているのか」

彼は面白そうに乱れた格好のまま、煙草を勢いよく吸い出した。
この格好で、煙草に耽る様はもう尋常でない。
そう伝えれば簡単だった。
でもそれでは駄目なのだ。
彼にはそれでは伝わらない。

「出かけることを窘めているわけではない。
一緒に過ごせないことを怒っているわけではない。
・・・
シャルルがこちらを見てくれないことがイヤだ」
「見ているよ、オレは」

シャルルは短く答えた。
そして、じっと・・・しばし無言のまま、深く切り込まれたような青灰色の双眸で、目の前の運命の人を見た。

「いつも、いつも。君を見ている。君だけを見ている。君だけしか見ることが出来ない」
「それなら」

マリナは茶色の瞳で彼を仰視した。
彼女よりずっと背の高い彼を見上げた。

「それなら、私に教えて欲しい」
「何を？はっきり言え」

マリナは一度口をつぐんで、それから拳を何回か両手で開いたり閉じたりしていた。
だが、彼がそのまま微動だにしないで彼女の様を披閲していると感じると、思い切って切り出すことにした。

「シャルル。遠回しは良くないからはっきり言う。
　・・・今日のシャルルはおかしいよ。
　なぜ、声もかけてくれないの？どうして、視線を反らすの？
　そうして煙草を吸って何の香りを誤魔化そうとしているの？
　私と・・・話をしたくないとか、過ごしたくないとか思うのなら、それこそはっきり言って欲しいのよ」

ああ、今、自分は見返りを求めている、と思った。
これは・・・見返りを待つばかりの身勝手な愛なのだろうか。
それなら、シャルルを苦しめているのは、他ならない自分なのだろう。

かつて、小菅で彼は彼女に背中を向けた。
その時は、そのまま彼を見送ってしまった。
だから今度こそ彼と向き合って生きていこうと思ったのに。

背中を見せられることがこんなにも辛い。

強く生きるあなたの背中を・・こんなにも愛しているのに
その背中を向けられることが苦しい。
マリナにどこまでも優しいシャルルに甘えていたのだろうか。

「誰と一緒に居たの、とか。私と過ごして欲しい、とか。
そんなことはどうでも良いよ。
ただ、シャルルがそうして気を沈める理由があるのであるならば、話して欲しい」

「マリナ、はっきり言えと言っただろう。オレは繰り返さない」
「・・・じゃぁ、言う」
マリナは涙ぐみながらシャルルをきっと睨み付けた。
彼の冷たい態度を悲観しているわけではない。
・・・悔しいのだ。
彼が何も空かさないこと、自分に何を求めているのかわからないこと、そして・・自分がどうしたいのかさえわからないことに、苛立っているのはマリナのほうだった。

■03

彼女の気性は今に始まったことではない。
大人になって随分と堪え性が出てきたが、それでも彼女の中で、何かが弾けると、相手の言葉を待たずして言い募る。
マリナは間接照明の中で、薄暗い晄の下で淡く光る白金の月夜見の精に早口で言った。
今言わなければ残香が薄れていくとともに、うやむやになってしまう。
でも、彼と彼女の間に潜む溝は、決して消えない。
それは・・・それだけはいやだった。

「シャルル。シャルルからは誰か他の人の香りがする。近く寄らなければわからない程度だけれど。私はそれが我慢出来ない。
その香りを持つ人に対して、じゃない。
シャルル。シャルルがそれを説明しないで、煙草を吸ったりシャワーを浴びたりして誤魔化そうとしていることが・・堪えられない・・・」

心にもないことを言って困らせる愛はいらない。
でも、心から言った言葉が届かない愛なら、それもいらない。

自分はいつからそんなに貪欲になったのだろうか。
この人の香りも孤独もなにもかも愛したいと思った自分は嘘だったのだろうか。

マリナは泣きそうになった。
でも堪えた。

泣いたら、伝わらない。
泣いたら言葉が濁る。

「マリナ・・オレはね、確かに怒ってるよ」

彼は静かに言った。
煙草はまだ吸いかけだったけれど、常用の灰皿がなかったから、彼は応接用として飾られるだけだった灰皿を手元に引き寄せて、煙草を揉み消した。
じゅっと音がして、煙だけが部屋に燻る。

「なぜ？私に怒っているのね？」
「そう・・・・いや、違うな」
シャルルはそこまでいうと、彼女に大きな手の平を上向きにして、差し出した。

「おいで」
「・・・シャルル」
「・・・来てくれないか」
マリナは少し躊躇った。彼はこういう物言いはしないから。
おいで、と言って彼女が傍近くに行かなければ、彼は自ら彼女の手を引いて自分の元に寄せる。
残り香を含む彼の傍に近寄ることは、マリナを酷く臆病にさせた。
自分の知らない面を知ることになる。
彼が・・・誰かを残り香が移るくらい、近くに寄せたことは明白だ。
そして煙草を吸う。

朝、彼女に甘く優しい抱擁をしたシャルルではなかった。
寂莫とした顔をして、マリナにおいで、と言って手をさしのべているが、彼は来て欲しいと言い直した。

マリナは一度だけ大きく息を吐き出すと、目を見開いてゆっくり瞬きした。
涙腺の上に乗った涙を押さえる。

彼は・・怒っているのではない。悲しんでいるのだ。
シャルルの上機嫌な様子はなかなか窺い知ることが出来ない。
その代わり、彼が不機嫌だったり・・・そう、憂えている時はすぐにわかる。

シャルル。
あなたは・・・ひどく何かに絶望しているの？
そう理解できた瞬間に、マリナの躰は自然に動いていた。
ゆっくりではあるが、迷って足を止めることはしなかった。

彼女は彼の元に足を進めた。

「・・・マリナ」
彼と彼女の距離が短くなると、シャルルは彼女の肩を抱いて・・・
マリナの小さな肩を抱いて、彼は素肌の胸を彼女に重ねた。
シャツを脱ぎかけていたから、彼の温かい肌に触れて、マリナは緊張して身を固くした。
それよりも何よりも、彼から漂う、彼の香りと誰のものだがわからない、高雅な香りが彼女の押しとどめていた感情を大きく揺さ振った。

彼女はシャルルに言った。
誰のものかわからない香りを纏ったシャルルに抱かれるのは・・ひどく虚しい。

「離して・・・」
「いやだ」

彼はそう言って、最初は柔らかい抱擁だったのに、彼女をきつく抱きしめた。

「もう、離さない。そう言っただろう」

どうして君はそうしてオレにくり返し同じことを言わせるんだ、と彼は恨めしげに言った。

マリナが拒絶の言葉を放っても、彼は動じなかった。
それなら、何に失望していたのだろう・・・

「シャルルは狡いよ。酷いよ。・・・私はシャルルにあげるものがない。捧げるものがない。
こんな日に・・・シャルルが願うことを聞くこともできない」
マリナは彼の胸の中で、くぐもった声で言った。
いつもなら、彼のそんな抱擁には困ったように受け止めるだけなのに。
彼女は、両腕を回して彼の背中を包んだ。
小柄な彼女の腕は彼の背中を周回することはできない。
「随分と困ったサンタクロースだな」
シャルルは苦笑していた。
マリナの茶色い髪に、彼は顔を埋めて、そして深呼吸した。
また彼からあの香りが漂う。
同時に、彼は彼女から芳る甘い香りに目を細めた。

彼女はわかっているのだろうか・・・

「オレが不機嫌だったのはね、マリナ」
彼は彼女を離さずに言った。
「君が・・・きっと、オレのこの状態について、何も言わないでいるだろうな、と思ったから。・・・オレは君に嫉妬して欲しかったんだよ、マリナ。
でもね、オレは帰邸するときに考えた。
マリナはきっと何も聞かないだろうって。だから、がっかりした。
君の恪気を期待したのに・・・そうはならないだろうな、と予測した自分にうんざりしたんだ」

彼はそう言って、彼女の額にキスを落とした。
希ったものがときの苦悶を、彼はよく知っていた。
それでも、これは手に入らなくても良いと思った。
彼の気持ちに、彼女が気がつけば、それで良いと思う一方で、彼女が自分をどれだけ激しく求めているのかを知りたくなった。

彼は試すことも、測ることもやめたはずなのに・・・・

「でも、君はオレのことを気にかけた。
誰と会っていたかは問題でない、と言った。
説明しないオレに対して苦しいと・・・それだけで充分だよ、マリナ」
「どういうことなの？」
マリナが顔を上げた。
シャルルは彼女に微笑んだ。
そしてくすくすと笑うと・・・
ポケットから、小さな瓶を出した。
「はい、プレゼント」
彼はそう言ってマリナに手渡した。

それは小さな手のマリナでもすっぽりと包み込んでしまえるような小瓶で、「SAMPLE」とシールが貼られていた。
蓋は今にしては珍しく、コルク栓で封緘されている瓶は、中身が半分だった。
「これは・・・」
「マリナの憂鬱の原因はこれ」

彼はそう言って、彼女から躰を離した。
そして、シャツの裾のカフスをはずすと、部屋の隅にあった内線電話を取って、ひとことふたこと接続中の相手に何かを伝えると、すぐに受話器を置いて、戻って来た。

・・・非常に、上機嫌だった。

彼の同慶についてはほとんど判別できないのに。
マリナはこのとき、シャルルが何かに気を良くしたのだと思った。

「さて、これでゆっくり話が出来る」
「何を伝えていたの？」
「今日の外出はこれで終わりってこと」
「え・・・」
マリナはあやうく、手に持っていた硝子瓶を取り落とすところだった。
「だって、はずせない用事だって・・・」
「マリナ」
シャルルは彼女に最後まで言葉を紡ぐことを許可しなかった。
淡い笑いを浮かべて、白金の髪をかき上げる。
秀でた額が見え隠れして、笑いながらその仕草をした時だけ、彼は年相応の青年の姿になるのだと思った。
そしてそれを見せるのも・・・マリナだけであって欲しいと思った。

「オレには、どうにもできない事情もあるけれど、どうにかなる事情もあるんだって、そろそろ、わかって欲しい」
そのために、日々、スケジュールをこなしているんだよ、と彼は言った。
そしてまた、中断していたとでも言うかのように、マリナを引き寄せて、彼女の肩を抱いた。
「種明かしは必要ないの？」
「・・・それは・・・」
シャルルがおかしそうに言うものだから、マリナはそれまでの激昂をどこに納めて良いのかすっかり困ってしまって、彼に抱き締められるままになっていた。

「今日、オレははずせないパーティーがあるって出かけただろう？」
「うん」
「・・・それはその製品の発売決定を記念するパーティーだったんだ。それはね・・・オレが品種改良した薔薇から精製されたトワレ。・・・名前は勿論『ファム・ファタル』だよ、マリナ」

マリナは喫驚して声を出した。
彼が品種改良の薔薇を何種類も作っている。
でもそれは決してアルディ家の薔薇園から持ち出されることはなかったし、どんなに乞われても彼は決してそれらを商品化しようとしなかったのに。

「この薔薇は、香りが強くてね。・・・満開の季節の香りは刺激的過ぎるから、成分を精製して、トワレにしたんだ。もっと淡い感じになるように開発したんだよ。
今日はその記念イベントだったわけ。
・・・・それで、サンプルを回付されたのだけれど、コルクの締め具合が甘くてね・・零れてしまったから、一度着替えに来た」

「それならどうしてああやって誤解を生むようなことをするの。・・・どうして言うのよ」
マリナはシャルルに抗議した。

「ディナーの最中に、付けたばかりの女物のトワレをまき散らしてマリナにキスをするほど、オレは野暮じゃないよ」
だからマリナの勘違いだね、と彼は声を漏らして笑い続けた。

彼はマリナから瓶をもらい受けると、コルク栓を空けて、少しだけ指に取った。
高雅で豊潤で甘い香りが漂った。

ああ、確かに彼が漂わせているのはこの香気だった。
そしてそのまま、細くてしなやかな指をマリナに伸ばして、耳朶の後ろに指先を押し当てた。
一瞬、ひんやりした感触の後、マリナの体温で、ふわり、と何かが沸き立つような初香がマリナの鼻腔をくすぐった。

「だからこれは他の誰かのものではない。それにね、マリナ」
そこまで言うと、彼は瓶をマリナに今一度手渡しながら、彼女を愛おしげに抱き締めて、彼女の背中をそっと摩った。
「君は気付いていないかもしれないけれど・・・君からはこの香りがするんだ」

香気が強い薔薇ができたとき。彼は失敗作として廃棄しようとした。
アルディの家に咲く薔薇たちは、常にファム・ファタルを連想させるものでなくてはならない。
この花はここには副わない。

でも、この香りが、彼のこよなく愛する人に傍近く寄った時に感じる懐かしい芳香の成分を含んでいると知った時。
彼は廃棄処分を取りやめて、その種を残すことにした。
薔薇にしておくには強すぎるから、でも、捨てられないから、彼はそれを別の形に変えることにした。

マリナは自分について、良く知らなさすぎる、とシャルルは言った。
だからこれを彼女に捧げることにした。

「言っただろう。・・・全部を君にやる、と」
シャルル・ドゥ・アルディは薄く笑った。
マリナの名前を冠するものはすべて彼のものであり、それらすべては彼女に捧げられるものなのだから。

それにオレは今日、贈り物をもらったよ。
オレガ欲しいと思うのは、君だけだ・・・
シャルル・ドゥ・アルディは囁いた。

君の嫉妬が欲しかった。
君がオレだけを見てくれないかと思った。
でも君はそれ以上のものをオレに与えた。

この余香は、本当は彼と彼女が溶け合った香りだ。
彼女が合歓の瞬間に最も強く彼に訴えかける、あの香りにいつもシャルルは酔い痴れる。

これほどまでに溺れているのに。

彼女はわかっていない。

その時だった。
マリナは・・・ぎゅっと、彼を抱き締めた。
シャルルの抱合と同じくらい、強くきつく。
彼の素肌に頬を寄せて、良かった、と言った。

強がりしか言えないけれど、私は・・・あなたの背中も胸の中も優しく包む腕も・・・すべてが愛おしい
強く生きてきたあなたの弱さも狂気も誇り高さも、何もかもが愛おしい

彼女は囁いた。
彼に何も贈ることが出来ないけれど、彼女は嫋やかな想いを香気に乗せて、彼に伝えた。

香水というのは、つける者によって違う。経過した時間によっても違う。
でも、この馥郁として咲く、ふたりの創り出す香りは、誰にも模倣することはできない。

彼女は囁いた。
「煙草の香りはいらないわ」
「そうだね」
彼は笑って、彼女にいい？と声をかけた。
シャルルはマリナに接吻を求めるとき。
いつもそうして尋ねる。

彼は少し微笑んで、彼女を見つめた。
「よく似合うよ、そのドレス」
そして頬を寄せて、マリナの顎を少しだけつまんで、薄い唇を少しだけ開き彼女の唇に重ねた。
先ほど耳朶に触れた側の指で彼女に触れたから、ぱっと強い香気が彼らを刺激した。

「・・・ディナーどころじゃない」
シャルルはそう言って、妖しく笑った。
たまらない甘く香る誘いを彼はそのまま受け入れることにした。
彼女に、ダイニングに戻れという気持ちは失せた。
腰を落として、彼女の首筋に顔を埋めると、シャルルは怪訝な顔をするマリナに囁いた。

「マリナ・・・・君からもうひとつ、贈り物をもらおうかな」
彼はそう言うと、彼女の背中に手を回して、ファスナーを一気に引き下ろした。

「シャルル・・・！」
マリナが声を上げる。
「シャワーを浴びるのでしょう」
「いいや・・その前に、マリナ、君の余香を味わいたい。これは許可を求めないよ」
彼は先ほどの接吻を求めたときと違うと、宣言をした。

この後の外出は中止だ。
そしてディナーも後だ。
イベントと称した今宵も・・・みな、マリナにやろう。

その代わり、オレの欲しいものは・・・ひとつだけだから
彼はそう言って、シャツを完全に脱ぎ捨てて、マリナの素肌に彼の肌を重ねる。
これから、開発した商品がオレの指示通りに仕上がっているか、検品しなければならないね。
そう言って、彼はまた・・・この上なく美しく微笑んだ。
その笑みは、マリナにだけしか見せない、年相応のシャルル・ドゥ・アルディの貌だった。

（FIN）

余香【白夜】

余香　【白夜】

シャルルは微笑んだ。
魅惑的で、かつてはこの笑みを間近に見た者は男女問わず彼に見惚れてしまった美しい微笑みだった。
今はたったひとりだけにしか向けない解顔だった。
マリナは彼のその表情の意味を解して、言葉に詰まった。
青灰色の色素の薄い瞳が彼女をのぞき込んだ。
彼のこの妖しい燦めきは、合図だ。
彼女にいつも、いい？とキスの許可を求めるシャルルではなかった。
残香とはとうてい言えない閑雅な空気に酔ったような、そんな表情を浮かべていた。

マリナは慌ててシャルルの名前を呼んだが、彼はそれを無視して、彼女の肩を抱き、強く抱き締めた。
そして、とても小柄な彼女を、彼の長身ですっぽりと覆ってしまう。
加減をしないと、彼女を壊してしまいそうになる。
恋の眩暈とでも言うべき甘美な軽雷が彼の躰を駆け巡った。

マリナが彼の名前を繰り返して呼び、彼の情動を窘めるために声をかけた。
シャワーを浴びてきて、とマリナが言ったが、彼は可笑しそうに首を横に振った。
その命令は従えないね、と言った。

「このままで・・・」

最後まで言葉を言わなかった。
それだけで彼女には伝わったはずだった。
マリナがちょっと待って、と慌てて彼の胸に両手をあてて、押しとどめようとしたが、シャルルは雄健な頬を傾けて、マリナの唇をいきなり塞いだ。
外出後時間が経過しているはずなのに、彼の唇は少し冷たかった。
何度となく交わした接吻の序次であるのに。
彼女は今でも躊躇いがちに、そしてそれでも少しずつ受け入れる。
彼女が閉じていた唇を少し開き、シャルルを受け入れる許可を出すと、それを待って居たシャルルは滑らかに彼女の内部に訪れて・・・そして彼女の濡れた舌尖を越えてもっと深くまで入り込み、彼女の声さえも攫っていくかのように、どこまでも深く激しく割り込んでいく。
二人は激しく絡み合った。

この過程をシャルルは愉しんだ。
だがしかし、余裕があって愉しむのではない。

彼は・・・今でも彼女が腕からすり抜けて、どこかに行ってしまうのではないかという軫憂が消えることがない。
こうして強く抱き受けていないと、彼は彼女の存在を確かめることが出来ない。

「おかしいよ」
と先ほどマリナに言われたときには自分はもう、狂っているのかもしれないと思った。

恋に狂う。
愛に堕ちる。

どの表現もすでにシャルルの中では陳腐な表顕だった。
だから彼女に言葉を選んで伝えようとするけれど、彼女はいつも・・・そんな彼に「良いよ」と言う。

光とも影ともなろうと言った彼女が・・・
自分を常に照らし続ける。
狂気を吸い込んで、清麗な空気を運んでくる。
その言葉がどれほど深いものなのか、彼はよく知っていた。

自分がどこまで彼女を求めているのか・・・
どうしたら…どうしたら気がついてもらえるのだろうか。

この香りが彼を狂わせているのかもしれない。
どうしても捨て去ることの出来なかった香り高い薔薇から精製された、彼女と彼の混じり合う香気。
誰にも再現することの出来ないそれを、彼は彼女に贈った。

ものはいらない。
オレが欲しいものはひとつだけだ。
それさえあれば他はいらない。

独りよがりの狂愛かもしれない。
それでも良いよとマリナが言う限り・・・・この愛をやめはしない。
いや・・・マリナが嫌だと言ってもやめるつもりはない。

気がついていたんだ。
マリナがいつも・・・・微睡む彼の頬にキスをすることを。
それが彼女の愛であり、自分の愛と違うことも。

だからこそ、君はオレのファム・ファタルなのだから。

シャルルは眉根を寄せて…
マリナに口吻し続けた。
言葉にすることのない想いを彼女に伝えきれるように。

同時に、マリナの白い肩にあてていた掌をゆっくりと伸ばして、背中に回す。
「シャルル・・・」
マリナが唇を離した瞬間に、彼に困ったように声をかける。
「ああ、君はもうちょっと別の言葉は言えないのかな」
彼は薄く笑い、そして彼女の躰に自分の躰を圧着させると‥‥そのまま彼女が動けないように、マリナが壁に背をあてて逃げられなくなるまで彼女を追い込んだ。

「ここではいや…」
彼女の腿にシャルルが手を伸ばした時、マリナが小さく呻いた。
反対側の手は、マリナの房にやわらかく触れた。
嵩ばりが徐々に・・・柔らかさを失い、シャルルが手の平にそれを収めて指を沈ませると、すでに少し汗ばんでいた。
手の平に吸い付くような手触りだった。
彼女の声が少しだけ震えていた。
シャルルは黙って、と甘く低いテノールで囁いた。
彼女をベッドルームまで連れて行くまでの間がたとえ短い時間だったとしても…この情動をここで中断することはできない。

唇を首元に寄せる。
先ほど付けたファム・ファタルの香りが一段と強く香った。
「マリナ。・・・・こんなに香り立つほど体温が上がっているのに、それでも君はいやだと拒否するの？」
それは無理だね、と彼は笑った。

シャルルは長身を屈めて、彼女の首筋を滑り、マリナの胸元に貌を寄せた。
彼は狭間に顔を埋めて、そして彼女に愛撫を開始する。
彼は唇を開いて、今度はマリナの裾野から孤を描きながら舐め上げていく。
そして頂点に辿り着くと、尖端で慄えているマリナを湿して吸い立てた。
それまで柔らかかったのに、そこはあっという間に、強い弾力を持ち始めて、同時に熱を帯び始める。

「ん‥‥っ」
マリナが震えている。
しかし寒さからではなく・・それはもっと別の震えだとわかっていた。
もっと啼いてオレを求めてくれ、とシャルルは思った。
そして思うがままに彼女の胸元を貪ると、今度はゆっくりと・・・彼女の少し開いた唇に人差し指と中指をあてて、そのまま、顎から首筋をとおり、鎖骨を抜けて、彼は愉楽に戸惑っているマリナの躰の上部から、自らの指を下降させていった。
指の腹ではなく‥‥もっと微細な刺激が伝わるように、彼は少し爪を立てて、彼女の象牙色の肌を傷つけないように、軽く引き下ろしていった。
悲鳴なのか咨嗟なのかわからない震え声がマリナの口から漏れる。 s
マリナが総身を震わせた。
今までにない感覚が、彼女を激しく急速に、高みへと誘う。

マリナの茶色の瞳が、切なさそうに潤み始めた。
先ほどの激昂による涙ではない。
彼女は…感じているのだ。
彼の慰撫を受け入れている。
シャルルは満足そうに目を細めた。

そして太腿まで到達すると‥‥
彼女の下着を引き剥いだ。
彼が贈った今宵のドレスは、はるか向こうの・・居室の中央の床上で静かに役目を終えていた。
肩紐を失ったものの、かろうじて肌を隠していたが、激しく上下する躰の隆起によって、今にも剥がれ落ちそうだった。
マリナの片脚を掴み、シャルルは膝下に腕を差し入れて、マリナの躰を開くために、片脚を持ち上げる。
彼女はバランスを失って、残ったもう片方の足をつま先立てた。
シャルルは腰に手を回して、彼女の首筋に赤い花を落とし始めている最中だった。
‥‥狂おしいほどの香りが、マリナから匂う。
彼女に…薔薇を植えることに没頭していた彼は、マリナがそっと…彼の肩に手を置いていることに気がついた。

顔を赤くして、瞳はぼんやり虚ろになってきている。
全身は熱を帯びて、そして慣れない体勢で壁際に追い込まれているマリナに…シャルルは微笑んで、もう一度深く接吻した。

マリナ。
オレを鎮めてくれ。
でも・・・まだだ。

シャルルは自身の腰を彼女に重ねた。
昂ぶり硬起するものが服越しに彼女に縋る。

彼は彼女の脚の付け根から‥‥
一気に彼女の中心に手を入れた。
マリナが呻く。
もう、シャルルによって力を失い、擡げるだけの躰を、支えきることができていなかった。
彼女のあわいに細く長い指を踏み入れる。
そこはすでに花蜜が溢れていて、彼の指先は濡った。
柔らかな繊毛を梳き上げ、うるみ湧く花弁を摘み取る仕草に、マリナがついに堪えきれないと言った。

「ダメだ・・・マリナ、オレの指にこたえて」

彼はそう言うと、苑の入り口で戯れていた指先に力を込めて…一気に彼女の胎に入った。
あえかな木の芽に、勁風をもたらしたので、彼女は踵立ちの姿勢で、そのままぶるぶると篩えだした。
自分の声でないような…声とありえない温みの音を漏れ聞こえて、マリナがぎゅっと目を瞑った。
シャルルのゆとりが恨めしい。

懇願に近い状態で、マリナはやめて、と言った。
「シャルル‥‥ダメ…やめて」
彼女は彼の肩に額を乗せて、凭れた。
甘い香りが飛び散る。

・・・これはあのトワレの香りと…シャルルの香りだ…

彼の腰元から強烈に香りが揚がった。
先ほどの、零してしまったと言った余香が、彼の体温で変化したのだ。
いや…それは自分に加えられた香りが、昂揚で転化したのだろうか。

どちらにしても、最初とは違う、その官能的で甘い痺れに彼女は我を失いそうだった。

彼が欲しいものはひとつだけ。

でも、それはマリナには与えることが出来ない。

彼の愛し方と自分のそれは違う。
彼と同じ愛し方ができないから、絶え間なく…彼の元で囁き続ける。
時には声を大きくして叫ぶ。
それでも伝わらない言葉には、この余香のように‥‥マリナとシャルルが混じってできる違う愛を作っていけばいい。

互いの発する香気が混じる世界に沈降しながら、マリナは彼の激しい愛を感じていた。

「マリナ…」
シャルルが愛しい人の名前を呼んだ。
朝露に濡れた花芯を宿したマリナに、さらに芳しい潤を加えていたシャルルが、秀でた額を彼女の額に押しつける。
このまま彼女をここで乱して散らしても良かった。
けれども、彼はそうしなかった。
そして、突然、彼は彼女から躰を離した。

短く荒く呼吸するマリナは、天巓に行き着く前にシャルルが突然躰を離したので、平衡を失って、彼の胸に倒れかかった。

「な・・・に？」
マリナは何があったのかわからずに、ただぐったりとシャルルに凭れているだけだった。
彼は彼女に意地悪く言った。
「マリナがやめてというから。中断した」
マリナが少しだけ口を開き、そんな、と言った。

「そんな・・・？やめてくれといったのはマリナだよ。
　オレは相手が厭がることはしない主義でね。相手にもよるが」

先ほどまで、猛々しい情焔を鎮めることができないと言った彼は、彼女の足元に落ちた肌着を引き上げて、彼女に肩紐をかけてやる。

「マリナ・・・ディナーに戻れ。だいぶ、冷たくなっていると思うけれどもね」

冷たくそう言い放ったシャルルに、マリナが唖然とする。
だんだん・・・頭の芯が冷えてきて、シャルルが今までの愛の囁きをやめてしまったことに呆然とした。

「え…」
マリナが唖然としてシャルルの顔を見た。
彼ははだけたシャツと香りが強く残る服に顔をしかめて、シャワーを浴びてくると言った。

そしてまだ微盪するマリナをソファに座らせると、服を着るように、とシャルルは促した。
そして彼女をちらりと見ると、意地悪く微笑む。

「マリナの望み通りの予定だよ。
　・・・オレの支度ができるまで待てるなら、一緒にとっておきのワインでも飲もう」
「・・・酷い」
「何が？」
ここで、ようやく、マリナはシャルルが意地悪を言っているのだとわかった。
本当に底意地が悪い。
「それとも‥‥今の続きが良いのかな。いやだ、と君は言ったのに」

・・・・オレの一番ほしいものは、君からの言葉だよ

シャルルは、そう言いたそうに整った顔を緩ませた。

「この試作品がオレの指示どおりの作になったことは実証できたからね」
彼がたたみかけるように言った。

「さ、躰が冷えるから、早く支度をして‥‥」
「‥‥い」
「聞こえない」
マリナの赤い顔を見ながら、彼はソファに座る彼女に跪いた。
彼が跪くのはたったひとりだけだ。

「‥‥マリナ、もう一度」

彼が欲している言葉は何なのか、マリナにはわかっていた。
でも、決して、その言葉を彼女が言うことはないとシャルルは知っていながら、あえて乞うているのだ。
そして彼女にそれを言わせるために、途中で躰を離した。

彼女は深く息を吸うと、低く囁いた。
茶色の瞳を摘むって。
余香が彼女から薫る。
そして、彼が待ち望んだ言葉を言った。

「‥‥素晴らしい贈り物だよ、マリナ」
シャルルは切れ長の瞳を一瞬細めた。
そして、切ないほど美しい笑みで、マリナを見つめた。

「三度は繰り返さないわよ」
マリナは怒ったように言った。
「・・・・オレは二度は繰り返さない。
だから‥‥」
彼はそう言うと、彼女の躰を引き寄せてきつく抱擁した。

今度は、彼は彼女にいい？と聞いた。

彼女は顔を真っ赤にして、それでも、良いよ、と小さく頷いた。
良いよ、という場面でないだろう、とシャルルは苦笑しながら、彼女に唇を寄せた。

余香が誘った、彼が欲して止まなかった彼女からの交歓の申し出。
これを断るつもりも、これを撤回させるつもりも毛頭なかった。

彼の獣焔は鎮まっていない。
だから、今夜は、彼が愛し足りたと思うほど、マリナに付き合ってもらうよ、と言うと、マリナが、それは無理だと言ったので、彼は、それは承認できないな、と言い返した。

もう二度と、彼女の手を離さない。
もう二度と、彼女と愛をすることを躊躇わない。
もう二度と‥‥

混じり合う吐息と一緒に付随する彼と彼女の合歓の証は、言葉や肌の熱さだけではないことを知った。

マリナは言った。
もう繰り返さないと言ったけれど、シャルル・ドゥ・アルディは何度でも囁いて欲しいのに、と願った。

彼女は言った。

あなたが欲しい‥‥
あなたの余香が欲しい‥‥

（ＦＩＮ）

精霊　2012

■01

今年もこの季節がやって来た。けれども、今夏は少しばかり季節の訪れの時期が違っている。
昨夏は大変な酷暑であった。連日のうだるような暑さに蝉の鳴き声が夜まで続き、盆地のこの土地では普段の涼の取り方では過ごしきれないほどの熱波が訪れて、いつになったら秋がやって来るのだろうかと誰しも思ったはずであった。
それに比べて、今年は若干、涼夏であると言っても良いのかもしれない。
夏の終わりの気配を、もう、感じ始めていたからだ。夜には虫の音が聞こえ、風向きの変化を感じる。朝には空が白む様子がはっきりとわかる。上空に乾燥した空気が流れ込み始めているからであった。入道雲も位置が違うように思えるし、夏の果物や野菜なども旬を越えたという味がした。

弾上藤一郎宗景静香は、こうして夏を過ごして幾度目になるのだろうか、と思うが数えないことにしていた。数えても、家族は戻ってこないし、数えても、年月の遠さを感じるだけだからである。
前向きに生きるために忘れる、というのではなくて、思い出にしがみついて過去を振り返ってばかりではいけないのだと思った。

失って、慌ただしい日々を送っていた頃には、何かを考える余裕などはなかった。
だが、しばらく経過すると・・・様々に、思い出という名前の記録が彼の中で自動再生される。
それは順を追って、というものではなく、まったく関連のない時に、関連のない記憶が甦る。
家族が全員揃って、幸福であった期間はごく僅かであった。
静香の両親は彼が幼い時に離婚し、母は彼が少年という年齢に達するか否かという時期に他界してしまった。だから、母親の記憶があまりない。その後、父に引き取られて、改名し、弾上藤一郎宗景静香として生きてきた。
だからもう、ここで暮らしている年月は、この土地を離れて暮らしていた頃より遥かに長かった。
若き当主を支える地方の名士や遠縁の者たち、卒業後に巡り合わせで地方に後見するような職に就いた彼の地元の友人達など、多くの者によって彼は現在、ここに居る。
ひとりでここまで生きているとは思えなかった。
逝った者たちに恥ずかしくないように、この名前に恥じないように、強い気持ちで日々を過ごしている。

それでも、結婚はしないのか、という問いには答える事は無かった。
舅姑がおらず、地方ではあるが旧家の嫡男ともなれば、様々な縁談話が持ち上がる。彼を担ぎ出して政に参加しないかという者も出てくる。
けれども、彼はそう言ったことは今は考えていないということだけはっきりと言う事にしていた。
家族を持つ、ということがどういう覚悟があってのことなのか、彼は多少なりとも知っている。
けれども、まだ、誰かひとりだけを深く愛して、その人物をここに住まわせて未来を語り合うという

自分が居てはいけないのだろうと思った。
彼の中では、まだ、思い出になりきれていないものが多すぎた。過去に固執しているのではなかったが、まだ、この状況を維持したいと思っているのは彼の本心であった。

特に、毎夏訪れる騒がしさについては、彼は渋い顔をするものの、どこか心待ちにしている。
それとなく客人が来るための用意をしたり、夏の日持ちするような菓子を取り寄せたり・・・決して豪奢ではないがかなり高価な器を、同じものを出さないように記憶を手繰り寄せながら選ぶというような、細々した作業を無言で受け入れる。
彼はそういったものに心配りをすることができないのではなくて、そうする必要がないからそうしていないだけだということを、あの茶色の髪の茶色の瞳の人に知らせてやるのだ。

こういう賑やかさは嫌いではなかった。ただ、騒がしいということではないからだ。夜には眠り、朝には目覚めの挨拶を交わす。時計を見ることが殆ど無い数日間を、彼はとても大切にしていた。

そうして準備が整った頃。
静香の幼少期を知っている者や、彼の幼い友人が彼の家に集ってくる。
招待しているわけでもないのに、毎年そうやって過ごすことが当然であるかのようにやって来る。
何もかもを忘れ、何もかもに笑う。
やり直しているような気にさえなってしまうような、そんな夏があるからこそ、彼は日々を過ごしていられるのかもしれないと思った。

・・・茶色の瞳のあの人と過ごした時間はとても短い。
だからこそ、一瞬一瞬が凝縮されている。かつ、それらは毎夏更新されていく。それが永遠ではないことはわかっているが、今は、彼の拠り所のひとつでもあった。自分の中の何かが・・・彼らとの疑似家族の体験を望んでいるのだろうと思う。

そして、また、今年も夏がやって来た。

■02

「ちょっと、美女丸、聞いているの？」
マリナ・イケダの言葉に、彼は目を片方だけ細めて、締まった頬を動かした。
今夏も、やはり、彼女が最初の到着であった。
というよりも、日付を指定しないでふらりとやって来る彼女には、最初も最後も存在しない。
この声を聞きたかったのだ、と言えば・・・白金の髪の青灰色の瞳のあの男は、嫌な顔をするだろうか。

彼の中では、残酷な期間であったかもしれない。けれども、どうにも忘れられない日々であった。
妹を失い、父を失い・・・まわりの人間を失って、それでもマリナは傍に居た。
本の短い期間、一緒に居たという縁であったのにも関わらず、彼女は時間の長さと新鮮さではないのだと快闊に笑い飛ばした。
彼女のその強さはどこから来るものものなのだろうか。彼も、その強さを持ち得ているのだろうか。
自分が弱いと思わないが、強いとも思っていないし、特別であるとも考えていない。

餓えているのかもしれない。そう認識する。
駆け引きのない会話、対価を要求されない笑顔の往来・・・少年の日々に味わうべき他愛のない経験の数々を・・・・彼は、今になってようやく自分の糧にしているのだ。

「聞いていないのでしょう」
恨みがましく、マリナは静香の目の前に立ちはだかった。そして、彼の腹を両手の腹で軽く押した。
マリナは今朝から訪れているが、その来訪を彼は知らなかった。
所用があり、外出していたからだ。
時差の関係で、彼女は驚くような時間にやってくることがある。
朝、ここに入ってきたことはまったく知らなかったが、玄関先で散乱する荷物の数々から、来訪を知った。少し休ませてやろうと思い、客間に足を向けることもなかった。
・・・眠っている彼女の顔を見て、ただ、見るだけで終わりそうになかったからだ。

今夏は、特に、彼女の寝顔を見ることはしないと決めていた。
幾度も宿泊を許していたが、彼女はいつも大切な客人であった。
一線を越えるつもりはなかったし、そういう感情の対象であってはならなかった。
不可侵の掟がそこにはあった。彼女を見つめる。ただ、それだけが彼のこれまでを埋めて、彼のこれからを彩るのだろうと思う。

・・・彼女の成長を思う度に思う事がある。
妹のことだ。
彼女が育っていれば、どれほど、この土地の若者を魅了したのだろうか、と思う。
我が侭で、時々彼を困らせた彼の妹は、それでも彼の大事な妹であった。
母の若かった頃の笑顔を思い出す。
父はそれを見て微笑んだ。彼は、別れても母を思い出にしなかったのだろうと思った。
何もかもが解決したときに、妹がなぜ生き返られないのだろうかと思った。
父は戻って来ないという覚悟があった。
予感があった。
何かに巻きこまれてしまったのだろうという事実を受け入れられた。
そして、母ももういない。

確実に失われていく命を見つめた。
そして、突然に失われた命も見た。

だからこそ、マリナ・イケダの命が眩しい。彼女は、いつも正直で、朗らかで・・・彼が惑っていることが小さなことだと思わせてしまう。

いつになく、マリナ・イケダが憤っていることに気がつく。
人の心の機微には疎い静香であったが、それでも、彼女が大変に憤慨していることがわかった。
「なんだよ・・・オレの家で不満を漏らすのなら、はっきりと言え」
目の前で、静香を見上げているマリナは、とても幼かった。
同年齢とは思えないほどに、彼女は若い。
そして、マリナは静香に対して遠慮が無い。それが、彼を安堵させている。
姫宮美女丸と言われた時の彼と、弾上藤一郎宗景静香と言われる彼がまったく変わりが無いことを確認できるからだ。
名前が変わっても、彼は彼であり続けた。けれども、彼はそれを確信できない。
しかし、彼女と一緒に居るだけで・・・彼女が静香を「美女丸」と呼ぶだけで、この場所に立っていられるような気がするのだ。

そんな彼女の前で、静香は首を傾ける。短く切り揃えられた髪は昔のままに、眼光鋭く彼はマリナ・イケダの言い返しを待つ。

いつもの通り、彼女はやって来た。相変わらず、予告のない来訪であったが、それは予定のうちであることには間違いない。
マリナ・イケダが訪れることによって、彼の・・・遅い夏が始まる。
そんな夏の陽のような人は、静香が戻るなり、少し勢いをつけて言った。
玄関先の、待ち間で座り込んでいた彼女は、彼の足音を聞きつけて耳を欹てる猫のように、むっくりと立ち上がって、いきなり切り出したのだ。
おかえり、とも言わなかった。彼女が戻る場所はここではないのだと思い知る瞬間に、彼の胸が強烈に締め付けられていることを、彼女は知らない

■ 03

「オレは勝手に上がっても良いという許可を出した覚えはないが」
静香は低い声で言った。
彼女はいつの間にか、この家に入り込む為の術をいつの間に覚えたのだろうか。不幸な出来事のあと、この家の出入りはそれほど緩やかではない。地方とはいえども、簡単に気軽に入り込める場所ではなかった。

「・・・ずっと待っていたのに」
「それなら、連絡くらいしろ」
互いに簡単に連絡できる手段を持っていない。
静香が携帯電話を持たないのは、それに束縛されたくないからだ。誰かに呼び出しをされても、彼はそれで誰かのために自分の行動を変更することはしない。それは、あの白金の髪の人と同じ感覚なのかもしれない。けれども、それは口に出して認めない。

・・・久しぶりに見るマリナ・イケダは、少し前髪が伸びて、左右にわかれていた。ただ、それだけのことであったのに、それだけの年月を感じてどこか落ち着かない。
白い額が見えて、彼はあらぬ方向に視線を向ける。ここは彼の家であるのに、間違って違う場所に入り込んでしまったかのような錯覚を覚える。

どういうわけなのか・・・今夏は、特に、彼の失ってしまった家族のことを思い出す。
マリナ・イケダがそれを呼び込んでいるのだろうか。それとも、彼が・・・マリナに対してそのような期待を持っているからなのだろうか。
どちらにしても、目の前のこどものような人を見て、彼はただ、肩に力を入れてしまう。
「私、随分美女丸のことを待っていたのに」
「待っていると聞いた覚えも、待っていろと言った覚えもないが」
美女丸はそう言って、履物を脱いだ。乱雑であったかもしれない。そういう瑣末なことからして、彼の気に入らない始まりであった。

彼女の脇には、いつもと同じ様に、たくさんの画材道具が詰まった鞄が置いてあった。けれども、たくさんと言ってもそれは彼女が担げる程度のたくさんという意味であった。
マリナはそれだけあれば、どこにでも行けると笑っていたが、本当にそのとおりであった。彼女の必要最小限と最大限というものは、その袋ひとつで済まされてしまう。
捨てきれないものが増えてしまった自分の方が、どんどん、重たくなっているような気がした。かつては、そんな彼女のために、何もかもを・・・この家に戻ってこられなくなることを覚悟しながらも、旅立ったこともあったのに。

待っていたとは言わなかった。彼はいつも、彼女の来訪を確認しない。なぜなら、彼自身が思わぬ時に現れる彼女が、いつ現れるのかを待っているからであり、そして彼女は予定通りに行動することはしない人だと承知しているからだ。
それでも、彼女はいつも真っ先にやって来る。最初に、彼に逢いに来る。

「お前がなぜ、それほど怒っているのかオレは理由を知る権利があると思うぞ」
「権利」
マリナは顔を上げて立ち上がった。頬が紅潮し、彼女が昔のままの怒り顔で彼に向かって行くが見えた。

出先から戻ったばかりの彼に、家の中から吹き付ける涼風が汗を鎮めていく。

今夏は秋の訪れが早いとはいえ、それでもまだ外気は十分に暑かった。
板張りの床の上で蹲っている茶色の髪の人が立ち上がっても、それほど脅威にはならない。同じ床上で仁王立ちになっている彼の目線のはるか下で、彼女は唇を尖らせて憤懣を溢れさせていた。
「美女丸はわからないの？」
「わからないだろ」
彼の答えにマリナが一瞬何かを言おうとして、口を半ばまで開けた。

美女丸の気短はいつものことである。けれども、今回ばかりはマリナは適当に受け流すことをしなかった。
・・・仕掛けてきたのは彼女の方からである。

静香は喉元に手をあてて、着物の襟を正した。
音も立てずに、一足前に出る。

彼の足捌きから武芸の達人の域に達していることはわかる。
今夏も、滞在中にはあの少年の稽古に付き合ってやるつもりであった。
くれぐれも、指や腕を怪我させないようにとマリナ以外からも注意されていたが、体力あってこその日々であることを、少年も静香も知っているし、それほど脆弱な成長ぶりではなかったはずだ。
もう、マリナの背を越して久しい。彼もそうであった。
彼女だけが、変わらない。
いや、見目もだいぶ変化したが、彼女を見ていると昔の自分を思い出すのだ。
そして、少し、後悔する。

もっと、優しくしてやれば良かった、とか。
もっと、語り合っておけば良かった、とか。

母を失った時にも感じたものであるが、最近は殊更に、父や妹のことなどが思い出される。

■04

感慨深く、庭を巡って来て戻った矢先のことであったので、更にこういう話をされることに困惑する。
「いきなりやって来た客が、難癖つけてオレに喧嘩を吹っ掛けてくるとは良い度胸だな。褒めてやろう」
彼の家の造りは風通しが良く、外気よりもずっと涼しく感じる。特に、外から戻ったばかりの彼にと

っては、この空間はとても冷涼であった。
汗も自然に引いていくが、はやく身体を拭かなければ失調することもある。
それほど体力に自信がないわけではなかったが、それでもマリナを湯に入れて、同じ様に体温調節させなければ、彼女の方が具合を悪くしてしまうだろう。
そんな彼の思惑をよそに、マリナがいきなり穏やかではない物言いをしたものだから、静香の腹立ちが一気に音を立てて沸点を越えてしまったのだ。

ぎらりと、睨みおろすと、彼の短髪の下で額と眉が動いた。
「美女丸、私に隠していることがあるでしょう」
こちらに立ち寄るまでに、あちこち放浪したのだろうか。少し日に焼けている顔を、彼に向けてマリナが言った。

昔、彼女は転居が多かった。
ひとつのところに長く滞在しないという家庭の事情であったように記憶している。
が、彼女がその後も同じ様にしていろいろな場所へ出歩いていることは過去の体験に影響していることなのか、彼女の放浪癖が芽生えてしまったのか、どちらとも言いようがなかった。

「お前に隠すようなものは何もない」
そもそも、風来人のマリナにそのような事を言われる理由が理解できない。
「嘘」
「おまえ、誰に向かってものを言っているんだ」
「姫宮美女丸と言う名前の、分からず屋」
ぎらり、と彼の眼光がさらに鋭くなった。きつい眼差しに凄みが加わる。年齢を経た分だけ得た様々な経験が、彼の気質をほんの少しだけ丸くしたと思われたが、それがあっさり元に戻ってしまったような、そんな険しさであった。
「マリナ」
彼の顔つきがますます険しくなった。
「オレと勝負したいというのなら、今からでも道場に来い。手加減しないし、今日という今日は、決着をつけてやる」
何の決着かは言わない。けれども、売られた喧嘩は流さないのが静香のやり方であった。相手にしないというのは相手への礼を失することである。全てを受け止めることはできないが、マリナが静香に憤っていることが何かを口に出さなければ、そう言うしかないと考えていた。
マリナは首を横に振る。
「結構です」
「だったら、理由を言え。戻って来たばかりのオレに、このままここでずっと立たせるつもりなのか」
彼の我慢の耐久時間は人より短い。
それを知っていながらも、こうして回りくどい言い方をするマリナ・イケダに責がある。今にも、マ

リナの襟首を掴み上げて引き摺り回すような勢いであったが、マリナはそれに怯えることはなかった。

・・・彼女は頬を膨らませて、彼を見上げた。
大変に小柄な人物であるので、彼女は天を仰ぐような角度で彼を見ている。
どのくらい、そこに居たのだろうか。
彼女は、彼の帰りを待って、どのくらいここで待っていたのだろうか。
いつものように部屋を用意してあったし、毎年同じ部屋を使わせていたから彼女がこの家の勝手がわからない、ということはない。
しかし、彼女はどんな気持ちで・・・ここで蹲り、獣のように耳を欹てて、彼の足音を待っていたのだろうか。

・・・どうにも、今夏は妹のことを思い出さずにはいられない。
彼女も幼い時にはそうして彼を待ったことがあった。
家庭的であったとは言えない家であった。
母が逝去したことによって父に引き取られ、納得のいかない煩悶を抱えた時期もあった。自分はこの家で必要とされているのかどうなのか、わからなかった時にいつも思い出すのはマリナ・イケダという小さな同級生のことであった。
鬱屈した時には、本気で言い合い、本気で喧嘩し、本音だけしか往来しなかったあの日々のことを思い出してばかりいた。
言いたいことの半分程度しか言えなくなり、大人になった今では、彼の自由にならないことの方が多かった。
何かを決めることができるということは、何も決めることができないものの存在を認めるということなのだ。

・・・あの白金の髪の男も、それを知っているからこそ、マリナを自由にさせているのだろうと思う。
静香がそうしているように。

■05

彼が外出していたのはそれほど長い時間ではない。
いつも、彼女は、使用人達の数が少なくなっている時であるか、不思議なことに人気が殆どない時にやってくる事が多かった。
まるで、彼女の訪れを、待っていたかのように。
何かが、迎えいれるために静寂を用意しているかのようであった。

つい先ほどまで外に出て巡っていた人々の喧騒は、毎夏の通りであった。
それなのに、この家に戻ってくると酷く静かで・・・彼女の訪れを気配で感じる。
説明のできない感覚であるから、誰にも言っていないことであった。
しかし、血縁でもなく恋人同士ということでもなく・・・それなのに、彼女に関して感覚がこれほどまでに鋭敏になるのは、なぜなのだろうか。

「私、美女丸のこと、とても大事に思っているのよ」
彼女はおもむろに、そう切り出したので、今度は静香がその言葉に無言になった。
そう言われた後に、何をどう切り返せば良いというのか。

その言葉に返答し、自分もそうだとは決して言わない。
ひとつだけ確かなことがあるから。
本当のことを言ってしまえば・・・毎夏訪れる彼女との時間は終わってしまう。
それだけは確実であった。
だから、いつも正面から受け止めることにしていた静香の例外に相当するのだ。
これればかりは、譲れなかった。
どれほど詰られようとも、どれほど煽られようとも。

「だから、私に隠れて・・・こっそり何かをしようとするのは、もうしないと約束して欲しいの」
彼女の口調は真剣そのものであった。
静香は声を出さずに呻いた。彼女は昔の彼の行動をあれこれ言うことは無かった。
あまりにも何も言わないので、彼女は今でも、彼のとった行動を許していないのかもしれないとさえ思う時がある。
「マリナに隠れてするような事が、今のオレにあるのか？」
彼が唇の端を歪めてそう言ったので、マリナ・イケダは唇を突き出して、ますます幼い顔になってしまった。
彼女に今の自分の心の蟠りが晴れやかにならないことを訴えても、何の解決にもならない。
「よく考えてみなさいよ」
「よく考えなくてもわかる」
彼は腕を組んだ。
目の前の茶色の髪の人は、静香と喧嘩をしたいのだろうか。支離滅裂と言い切る以上にまったく理解できない。

静香はマリナの様子を眺める。久々に会う彼女と再会を喜ぶ会話で始まることはなかった。
だが、それはいつものことだ。
彼女は、彼に夏の嵐をもたらす。
約束をしないのけれども、彼女はいつも同じ時期に現れる。
今年は少し遅かったのかもしれない。

それでも数日しかずれがないのは、彼女の中でもこの時期が特別であるからなのだろうと思う。
静香の年間予定に入るようになって、どれくらい経過するだろうか。
・・・突然現れて突然に始まる夏のひとときを、彼はいつしか楽しみに待つ驚きとなっていったことを認めざるを得ない。
終わってしまうことを惜しむ始まりではなかった。また次を予感させるからである。なぜなのだろう。
次を約束しているわけではないのに、何も言わなくても次があるのだと思えてしまう。
それは、彼女が「またね」という言葉を口癖にしているからなのだろう。

「来るなり、一体何をそんなに拗ねている」
溜息混じりにそう言った。彼女は長旅で疲れている。
夏のこの時期に、いつも決まって予定を確保しておくというのは、互いに楽な作業ではなかった。けれども、この時期があるから・・・彼は今の彼を認めることができる。流されているわけではない。誰かが自分のことを考えて居てくれる。それだけで・・・彼の憶測にある、夏でも溶けない氷のような何かが、ゆっくりと溶けていくような気がした。

自分の生命に危機が及ぶような場所に行ってもなお、命は惜しくなかった。
けれども、この時期を失ってしまうことは惜しい。
マリナは眼を瞠り、彼を今一度睨み据えた。マリナ・イケダには偽りは言わない。彼女にごまかしはきかない。
マリナは言った。
彼の思いもかけないことを、思いもかけない勢いで。
大きな茶色の瞳の瞬きはゆっくりであった。そ
して、茶色の髪はいつもと同じ様にふわりと綿菓子のように軽やかでそれでいて彼女の顔を縁取っている。
肌理の細かい肌は、相変わらずであったが、彼女が自分の容姿に入念に手入れを行っているからなのではなく、それは・・・彼女が愛し愛される存在が居るからなのだ。

■06

「美女丸は、去年の約束を忘れているわ」
マリナがそう言ったので、彼は、首を傾げる。
何を約束したのだろうか。
昨夏も様々に騒がしい人物達と多くの言葉を交わしたので、そのひとつひとつについて全部を記録しているわけではなかった。
記憶力が劣っているということではないが、当主としてもてなすべき事柄について考える方が優先されたのだ。

特に、昨夏は暑かった。
酷暑と言っても良いほどで、珍しく、この家でも冷房を絶やさなかった。
しかし、暑いからこそ夏なのだと言い張るマリナだけは、その暑ささえ満喫していたようであったが。
冷房の効いた部屋の中で快適に過ごすというのはここでは考えて居ないらしい。
彼女らしいと言えば、確かにそうであった。
贅沢に慣れたかと思えば、彼女はそういうところで季節の移ろいを忘れないように身体に刻むことを忘れない。

それが、彼を懐かしくさせる。
それが、彼の記憶や想い出を蘇らせるのだ。

「ああ、もう！」
それでも、静香が黙っていたので、とうとう、マリナが痺れを切らせてどんどん、と床を踏み叩いた。
板張りの床がぎしぎしと音を立てる。手入れは行き届いているが古い家である。
彼女の踏み荒らしに驚愕したかのように、周囲の蝉の音が急に小さくなった。
幼いこどものように、癇癪を起こしているマリナに彼は額に手をあてる。
「おまえがそのつもりなら、オレも聞く耳は持たん。部屋に戻る」
「ちょっと、美女丸！」
彼女が、彼の袖を掴んだので、静香はかっとなって目を見開いた。
触れられると困る。久方ぶりに逢った人に、優しくできない自分がここに居る。
「おい、おまえ。白黒はっきりつけたいのなら、今、ここで決着つけても良いんだぞ」
彼の目に殺気が灯り始めたので、マリナは唇を思い切り横に引いた。
かみ合わない会話というものは、これほどまでに人を苛立たせるものなのだろうか。
マリナはそこで、自分が考えていることのほんの少ししか、声にしていないことにようやく気がついたようであった。
「ここまでオレを怒らせたからには・・・きちんと説明しろ」
低い声で静香が言い、有無を言わさぬ力でマリナの縋っていた袖を振り払ったので、マリナの手が跳ね上がり、そして勢いよく空を伝って彼女の躰に戻って来た。

「美女丸は去年の言ったこと、忘れてしまったの？」
「忘れた」
あっさりと彼が言ったので、マリナが口を開けて呆然とする。彼は確かに誇り高いがこうやって大雑把なところがある。
そしてかなりはっきりと即座に物事を認める性質も変わらずに彼の中に備わっていた。

マリナは溜め息をつくと、そうだよね、そうに違いないよね、と言って項垂れた。
そして恨めしげに静香を見上げるマリナの眼は少し潤んでいた。
「もう・・・食べ終わっちゃった？」
「・・・・何をだ？」
彼女のこの意気消沈の様に、彼は眉を寄せて額に皺を作った。
弾上藤一郎宗景静香という人物が、これほど小さな人に喜怒哀楽を左右させられるとは、誰にも言えないことであった。
しかし、彼を古くから知る者たちは、皆、知っていた。
この家の不幸な出来事を一緒に体験してなお、彼女はそれでも毎年、夏をここで過ごす。

怖いものは苦手だ、と言っていたのに。
だからであろうか。
年々、彼女を追ってやってくる者たちの数が増えている。
賑やかさで誤魔化しているのか、それとも・・・

・・・いや、違う。

彼は、思った。

彼が、ひとりで夏を過ごすからだ。
だから、できるだけ多くの者に声をかける。
彼がたくさんのことを思い出すように。忘れさせるのではない。それは彼女の表現方法ではなかった。
様々な思い出を・・・あの時には決して思い出そうと決めていなかったことを、彼女は再現することで、彼に与えているのだ。
過去と未来を同時に・・・静香に与えている。

朝餉の賑わしさ、花火の音、空蝉の数を競う他愛のない遊び、そして庭に咲く夏の花たち・・・それらすべてが、繰り返されるのに毎年違うのは、やはり彼女が居るからだ。

■07

マリナは、静香が袖を払った時に目の前に風が通ったので、眼を瞑った。
それで急に視界の均衡を失ってしまったのだろう。一歩、後ろに身体を引いたので、静香は考えるよりも前に腕を伸ばし、彼女の項を掴んでしまう。
彼女は大変に小柄なので、腰や肩を捕らえるよりも前に、マリナの首に手が伸びてしまったのだ。
悲鳴とも呻きともつかないような嗄れた声が聞こえてきて、静香はしまった、と思った。
彼女には細心の注意を払っているつもりであるが、時々・・・幻ではないのかとさえ思ってしまうこ

とがある。
束の間の、特定の時期だけに現れる妖霊のような存在なのではないのかと・・・・
しかし、この重みも湿りもこの声も・・・決して幻などではなかった。
彼の精悍な顔が哀しそうに歪んだ。もし、戻れるとなったのであるならば、どこに戻りたいのだろうか。
母と父が別離を選んだ後でなければ、マリナに出会わなかった。
父の行方を案じる後でなければ、マリナに出会わなかった。

胸の奥が、ちりり、と何かに焼かれる音がした。

「ちょっと、美女丸・・・・」
そこで彼の考えが停止した。
手の平の中にある温度の持ち主が、恨めしそうに静香を見上げていたからだ。

その瞬間、彼が喪の主として取り仕切った様々な場面を思い出した。
思い出すこともなかったのに。
思い出さないことが不思議であるほど、何も感じなかったというのに。
そして、幾度も夏を過ごす度に。この時期を過ごす度に。思い知るのだ。

・・・記憶になっていく映像や音声は、決して更新されることはないのだ、と。

付随する情報が多くなることはあっても、その先は続きがない。
結末がない映像を見て、ただ悶えるだけだ。

そして・・・・
ただ・・・
ただ、残された者は、永遠を絶対とするのだ。

彼は、済まない、許せ、と言わなかった。
静香は傾いた彼女の躰を勢いに任せて正しい角度に戻す。荷物と同じ差配に、マリナが不満に思っても、それは致し方ないことであった。
何か、感情を持って彼女に触れては、いけないのだ。
それがこの夏を続けていく唯一の秘策であるのだから。

「それで、何を忘れているって？」
彼は話を転換させた。
彼女はそれほど根深く、会話や疑問が終了するまで話題を変更しないという人物ではなかった。

彼の貌が間近にあったので、マリナが支えられていた静香の手首を緩衝にして、身体を起こす。
触れても・・・彼女は、まったく動じない。彼は、これほど変異を来しているというのに。

「決まっているでしょう。去年、約束したことよ」
「オレは約束を忘れるほど、怠惰ではないと思うが」
「ええ、そうよね」
マリナの喧嘩口上を聞いて、静香は怒気を募らせる。
なぜ、彼女がこれほど憤っているのか、まったく、心当たりがないからだ。

■08

静香は首を捻った。
何が、彼女をそれほど憤らせているのかまったく思い至る因がなかったからだ。
「おい、マリナ」
静香はとうとう言った。
「おまえの話がまったく見えない。何をして欲しいのかはっきりわかるように言え」
それを聞いた時、マリナは神妙な顔つきになった。
彼は、まずい、と思った。そこで自分が事態を拗らせてしまったと感じる。

マリナという人物は、普段は様々なことに対して積極的に享受しようとする態度を見せるが、何かして欲しいことはあるかと聞くと、何もないと言う。そして、彼女のためだと思い先回りした行動については、彼女は思うところが多々あり、マリナはそのことについて多くを語ろうとしない。
静香の目の前にいる、茶色の髪の人物は、誰かのために行動することはあっても、誰かが自分のために行動することには慣れていない。
そこに、彼女に触れてはいけないものがあるのだろうとわかっていたのに、静香は顔を合わせるなりそう、早速にしてはならないことを彼女に向けてしまったので、目を伏せた。

「約束したということを忘れたのなら、謝る。しかし、オレはおまえとの約束を忘れたりしない」
彼はきっぱりとそう言った。彼女に何をどう思われているかはわからない。けれども、こうして幾度も夏を過ごすマリナと蟠りを残すつもりはなかった。
わかっている。
彼は普段、こうして譲歩することは殆ど無い。
けれども、幾度も夏を巡りたいから、彼は今回ばかりは譲るのだ。これが何を意味しているのか、わからないマリナではないはずであった。
そこで、マリナの顔が僅かに曇った。
本当に静香が忘れているのだと察知したらしい。忘れていることに憤っているのか、忘れられたことが遂行できなくて憤っているのか、自分でもよくわからなくなってしまった様子を、静香は瞳を片方だけ動かしてマリナを見る。

・・・待つという行為が、これほど苦しいものであるとは、思っていなかった。彼はマリナを待たせたから。だから、それが今でも時折疼痛となって甦ることがある。それは、家族を失ってしまった時の痛みと少し種類が違うものであったが、もう、失いたくないと思ったから・・・だから、彼は彼女を置いて、ひとりで旅立ったのだ。
彼女の愛する者を、彼もなくしたくないと思ったから。

今・・・その時に彼女が心から愛していた人物とは違う者とマリナは一緒に居る。
それを今でも、正しい愛だと位置づけていないことも承知していた。
だから、ひとりでこうしてやって来るのだ。
最後はふたりで帰ることがあったとしても、最初は、ひとりでやって来る。

・・・まるで、この時期の魂達のようであった。

彼女は唇を突き出して、しばらく静香を眺め上げていたが、やがて、ひとつ、溜め息を漏らした。短く息継ぎをするような、そんな落とし息であった。
マリナにそんな顔をさせたと、白金髪のあの男に知れれば、早速、道場で果たし合いになることは必至である。

マリナもこういった事は黙っていられない気質であった。唇を閉じたり開いたりしている。
さっさと言え、と言いそうになったが、急かさず待つことにする。
彼女は、静香がそれほど待つことなく、ぽつりと言った。
「今年は、用意しておくって言ったのに」
彼女が言っている用意するべきものが何なのか、と尋ねる前に、マリナの言葉と自分の記憶の照合を始める。そして、その途中ではっと息を呑んだ。

腰から背中にかけて緊張が走る。
武道に秀でている彼は、気配に敏感であったが、他者の気配ではなく、自分の中の驚きをこのように表現するしか方法を知らなかった。

・・・そうか。

そうだったのか。

彼は、そこでようやく・・・彼女が、なぜ、怒りつつも哀しそうな顔をしているのか、察した。

■09

「すまん」
弾上藤一郎宗景静香が謝った。
彼がそういう風にしてマリナとの関係を修復しようとするのは珍しいことであった。
マリナが軽く頷く。
彼女の主張には足りていないものがたくさんあった。
けれども、それを察した瞬間に、静香はしまった、と思ったのだ。
しかし、旧家の当主に謝罪させたことによる満足を感じているわけではなかった。

「用意してない」
その言葉を聞いて、マリナは蝉の合唱が入り込む屋敷の中で、唇を突き出して憤懣を露わにした。
「嘘。だって、匂いがする。入ってすぐにわかった」
「お前のための夏菓ではない」
マリナは目を見開いて、静香に抗議した。
「じゃ、誰がそれを一緒に食べるのよ。なんで、ひとりで食べてしまうのよ」

静香は言葉に詰まってしまった。
マリナは、彼を困らせているわけではないのだ。
彼は屋敷の奥の間にある、彼の家族達の霊室が思い浮かんだ。

マリナが言っているのは・・・魂達に捧げる供菓子のことなのだ。

そうか、と思った。

昨夏は暑かった。
日持ちのする菓子を、逝ってしまった者たちの前に捧げることになっているが、それに加えて彼は、彼の家族が好きだったものを一緒に添えていた。
そうしなければ、忘れてしまうから。薄れてしまうから。
家族として過ごした想い出はとても少なかったし、全員が揃っている風景は本当に数えるほどしか存在しなかった。
それでも。
彼が、忘れない限りは、皆が笑顔である思い出は決してなかったことにはならない。
特に、妹に関しては・・・彼はもっと優しくしてやれば良かったと、してやりたかったことの殆どを実行できていなかったのではないのかと思うことがある。でも、もう、それは取り戻せない時間であった。彼の中では、少し生意気で、強気だけれども、兄に優しい妹の姿が残るばかりだった。

・・・彼は大人になったのに、彼女は大人になれなかった。
孤独に耐えられない時もある。
彼にも感情はある。

しかし、普段であるならそれは乗り越えられる感情だった。
戻らない者に戻って来て欲しいという願いだけを追いかけるほど、彼は日々を空虚に過ごしているわけではなかった。
当主としての責務や、日々考えなければならないことに眼を向ける。
それで一日が終わってしまう。
けれども。
唯一・・・・この時期だけは、家族のことを考える。
家族、という言葉が相応しいかわからないが。

マリナが怒っているのは、自分との約束を違えたからではなかったのだ。

昨夏は酷暑で、妹の好んだ菓子を供えることができなかった。
それを見たマリナが、なぜ、今年はそれがないのかと尋ねたのだ。
静香は事情を説明した。その夏は暑くて、どれほど技術を集めた菓子を探しても、常温のままにしておくことはできないと言われたと言うと。
マリナは、説明を聞くと、そう、とだけ言った。
逝去前に好んだ菓子から、時代は変化して様々な種類のものが出ているが、彼女の好んだものを彼は供え続けた。
「逝ってから知る、その人の好きであった香りや味や・・・様々なことは、忘れたくない」
それだけ言い残した。

妹は、母の気配や好きだったもの、好きだった花や・・・得意だった料理を知り尽くす前にいなくなってしまった。静香が幾年かけても、伝えきれないものがあった。
父の傍に居た妹と、母の傍に居た静香と・・・埋められない空白の期間があった。
継嗣として唯一の男子である静香がなぜ、外に出されてしまったのかという理由は聞いていたが、その時の両親の心中や妹のことなどについては・・・聞けないままになってしまっていた。
そして。
今でも・・・静香の妹は、あの日のままの姿でしか残っていない。

・・・彼女は、大人になれなかったからだ。

その瞬間で止まってしまっているからだ。
大人になったら、どんなものを好むのだろうか。
大人になったら、どんな姿になるのだろうか。

母が、彼と妹を残して逝く時に感じたのは、こんな感情であったのかもしれない。

だからこそ、マリナは・・・妹の好きであったものを残そうとしたのだろう、と思った。
妹は、甘い菓子が好きだった。チョコレート菓子が好きだった。
そして。
その菓子は・・・ふたりぶんあった。
母も好きだった。
好みは遺伝するのね、と妹が・・・・いつか、そう言った声が聞こえそうであった。

・・・・妹の最期の時。

まだ年若い彼女が飲んだ珈琲の傍にあった、チョコレート菓子についてマリナは忘れていなかった。
異臭によってかき消されていたものの、静香の妹は、飲み物と一緒に皿に盛っていた。
そして、幼い時に・・・彼が美女丸と呼ばれていた時に、彼の母親が大変に好物にしているのだと語ったことも、彼女は忘れていなかった。
妹が・・・
あの時。
苦い飲み物を飲下すのではなく、母の好きだった時間を再現したかったのではなかろうか、と今では思う事がある。

凍て付いた心を溶かしたのはマリナであったが、それでも、あの夏の暑さについては、その直前まで日本に居なかったマリナには予想外のことであったのだろう。
そうは言っても、甲府の夏はいつも暑いので、彼女には変化を感じられないのだろうと思っていたが。
本当は、そうではなかったのだ。
マリナは、感じ取っていた。

その夏だけ、いつも在ったものがなかった。マリナはそれを歎き、来夏には日持ちがしないのであれば、きっと、一緒に・・・静香と一緒に、それを食べようと言ったのだ。

どうして、それを忘れていたのだろう。
どうして、それを忘れていられたのだろう。

■10

ショコラを加工できるパティシエがアルディ家に居る、と聞いていたからなのかもしれない。

マリナは、今・・・チョコレートを「ショコラ」と言う国と・・・ここを行き来している。
それを認めるのが、いやだったのだろうなと自分で分析する。
・・・彼女がここで居を構えることはない。
それなのに、彼女は惨劇のあったこの場所に、毎夏やって来る。

彼女が持ち込む技術が厭わしいのではない。
マリナが・・・あの頃の彼女から大人になったのだと改めて認める必要を彼は感じていなかったのだ。
彼女が、あの時と違う・・・・ダイを静香の傍に置こうとするのも、静香に弟が居なかったことが影響するのだろうと思った。
健やかな魂をここに持ち込むことで、何か・・・どこかを変化させることができるのだと思いたかったのかもしれない。

「用意させておこうと思ったのだが、去年と同じで良いと言ってしまった」
静香は正直に事情を説明した。いつも通りの夏であると思ったが、本当はそうではなかった。
マリナは、そのことについて静香を責めているのだろうと思った。

甘い物をあまり好まない静香に、一緒に食べないのかと言った妹の姿が思い浮かぶ。
母が死に、父に引き取られた時。
不安で眠れない彼に向かって、幼い彼女が差し入れてくれた菓子の味を思い出す。

甘いものは心を落ち着けるのよ

彼女はそう言って、恥ずかしそうに笑った。ずっと離れて暮らしていた兄と妹で・・・たくさん愛してやれなかった。うまく表現できなかった。
兄さん、と追いかける彼女を疎ましいと思ったこともあった。けれども、母も死に、父も家庭的で愛情溢れた表現ができるという人物でもなかった。
だから、寂しい思いのまま・・・逝かせてしまった。

「いつも、美女丸が気に懸けているから・・・彼女は、寂しくない。きっと」
マリナの言葉に、彼は苦しそうに目を細める。一度しか生きられないから、その生命を大事にすることが大事なのだ、と言った彼女の言葉が甦る。
「人はね、一度しか生きられないから・・・逝ってしまった人のぶんまで、大事に生きるのよ」
マリナは怒った口調で、横を向きながら、ぼそりとそう言った。
気恥ずかしい台詞であると思ったらしい。大人になってしまった今、生死について誰かを話すこともなかった。
ただ、こうして・・・ひとり過ごす自分の夏が、ひとりきりでないことだけが・・・彼の物思いを優しく撫でて落ち着かせる。

「しかし、本当に、先に食べたどころか、置いていないのだが・・・・」
静香は、この空間の継続に耐えられなくて、そう言った。
マリナが怒っている。自分は、それに狼狽えている。
昔は、そんなことを思ったことはなかったのに。

・・・彼女とはいつも喧嘩ばかりしていた。
だから余計にそう思うのだ。

本気で喧嘩した日々が、彼の幸せな日々であったのかもしれない。
けれども、彼女が怒る時はいつも・・・自分のことではなく、誰かのためのことである時が多かった。
不器用で要領の悪い彼の事にいつも憤っていた。
でも、どうやって彼女の機嫌が直ったのか、どうすれば機嫌が直るのか、彼にはそれがわからない。

今。
彼女を笑顔にさせることができるのは、彼ではないのだ。

マリナは、言った。
「だから、匂いがするのよ。私を誤魔化そうとしても・・・」
「おい」
そこで、静香がマリナの言葉を遮った。
「オレの話を聞いていなかったのか」
「何よ。聞いているわよ。美女丸がひとりで、ぜんぶ、食べてしまったのでしょ。だから、ないのよね。酷い。こんなに甘い香りの中で、私はどうすれば良いのよ」
「おい、おまえ」
行き違う会話に、美女丸の堪忍袋の緒が切れた。
見下ろしていたマリナに一歩近付く。
マリナがその形相に驚いて、一歩引き下がるよりもっと早かった。

彼女の首根をいきなり掴み上げると、彼は中庭に面している縁側に向かって、歩き始めた。
片手でつまみ上げられた彼女の踵が浮き、爪先が廊下を擦っていく。力で解決するのは好まないが、この場合は致し方なかった。

■11

「ちょっと、美女丸！」

彼の幼名が屋敷の中に響き渡った。もう、誰もその名前では彼を呼ばないのに。
静香は、彼女を縁側まで連れてくると、戸を開けた。
・・・暑い空気が風になって入り込んでくる。
そして、よく磨かれた板の上に、彼女を放り投げた。どすん、と音がして床が僅かに振動する。
「痛いじゃないの！」
静香は、むっつりした顔で、マリナを見下ろした。
憤りで、頬がぴくりと動く。彼の激昂ぶりに、マリナはぎゅっと両手を握った。
その掌があまりにも白くて、彼は更に憤りを深めていく。
彼女が、ここではない場所で暮らしているのだとそんなところから知る。
だが、彼はじろりと彼女を睨みながら、言った。
「お前の言う、チョコレートとやらは、これだ」
彼は顎を上げて、庭を指し示した。

ひとりで眺めるには、広すぎる庭だった。
そして、幼い時にはふたりで・・・妹と見た庭であった。季節が巡り、草木の様子は変わった。
あの惨劇で、随分と・・・この家の様子も変わってしまった。
縁側に座り、時には雪で遊び、夏の雨をずっと眺めていたこともあった。

ああ・・・・溜め息の混じった声が聞こえる。

静香は低い声で説明した。彼女はいつも、夏に驚きをもたらす。
彼にとって同じ夏でありながら同じ夏にさせない何かを持ち込んでくる。
「驚き呆れるのは、オレの方だ」
彼はそっと言った。そこに怒りはなかった。
マリナが・・・吸い込まれるように、その風景を見つめ始めたからだ。

目の前に広がる・・・たくさんの・・・群生に彼女はただ、茶色の瞳を向けて瞬きをすることすら忘れたように見つめ続ける。
そこでは、黒紫色の花が、一面に咲いていた。
華奢な茎に柔らかい葉であったが、その甘い芳香は風に乗ってマリナの顔や髪に吹き込んでいた。

「チョコレートコスモスと言うそうだ」
彼は説明した。
黒紫の花片も、その香りも確かに、ショコラそのものであった。
「寒さに弱いから、これほど増えるとは思わなかった。
・・・いつも秋頃に咲くから、おまえは知らないだろう。
昨年は酷暑と多湿が続いて極寒であったので、根が駄目になってしまったと思っていたが・・・今年は咲いた」

マリナは、ああ、とまた声を漏らす。
今年は冷夏だった。だから、早めに咲き始めたのだ。
その香りが・・・屋敷中に充満していたのに、静香は平然としておりながらマリナが察知したのは、これが決して食するための供え物ではなかったからなのだ。
甘い匂いが漂っているが、彼の嗅覚には慣れた空気であった。
そして、マリナには・・・彼女はいつもここにいないからこそ、気がついたのだ。
咲き始めに強く香るその花々を、彼女はただ、感嘆して見つめる。

やがて、彼女がそっと言った。
夏の風に乗ってやって来る甘い薫りを胸一杯に吸いながら。

「そう・・・忘れていなかったのね。あの子は、忘れていなかったのね」

そして、良かった、と言った。

彼が忘れていても。
たとえ、供えることを忘れていても・・・妹は、彼のことを忘れていない。
彼がひとりで眠れない夜に、おとなに叱られるとわかっていながらも彼のために自分の好物を差し出すような、そんな妹であった。

マリナは座り直して、そして何度も頷いた。幾度も、良かった、と言った。

静香は、その彼女の隣にゆっくりと腰を落として座った。
こうして、庭の花を眺めるのは久しぶりのことであった。
忙しさを理由に、妹の供え物をいつも通り、と言ってしまった。
けれども・・・・妹は、いつもの通りにやってきたのだ。
甘い菓子の香りに乗って、菓子がなくても、彼の心を鎮める風になってやって来た。

甘いものは心を落ち着けるのよ

妹の声が聞こえてくるようであった。
名前のとおり、美しい夜のような髪と瞳を持った人だった。
彼女が大きくなったのなら、この辺りを賑わすほどに綺麗になって・・・
そして彼の友達には妹を紹介することはないと言い張り、そして・・・そんな平凡な未来が、普通にあるものだと思っていた。
だから、誇り高く生きることだけを考えることができた。

「来年も・・・来いよ」
彼は、マリナの隣でそう言った。
それは、マリナに言ったものなのか、それとも・・・甘い匂いの風になって彼の傍にやってきた精霊に言ったものなのかはわからなかった。

マリナは少し首を傾げて言った。
「去年と今年・・・続けて逃してしまった茶菓が振る舞われるのであれば」
「だから、オレがひとりで食べたわけではない」
静香が顔を顰めると、マリナは反論した。
「何よ。去年は用意しておくって言ったのに。すっかり忘れてしまうなんて」
それから、マリナは肩を竦めた。ここで言い合っても、彼女の望む品は出てこないからだ。
「こんなに甘い匂いを嗅いだ後には、やっぱり本物が食べたい。匂いだけではお腹は膨れない。・・・今から街に行って買ってきてよ、美女丸」
「断る。おまえが行って来い」

ちらりとマリナが静香を見上げたが、彼は知らないふりをした。
「花の芳香を食べ物と間違えるなんて、おまえしかできない芸当だな」
マリナは口籠もる。
勘違いしたことを認めることはできなくても、菓子がないことを主張することで摩り替えようとしたが、静香には通用しなかった。
「食い意地の張った奴だ。・・・まったく、落ち着かないな」

みんなには、内緒よ、と彼女は笑った。
その笑顔は、彼がよく知る・・・喧嘩をしたあとの、彼女の笑顔だった。
彼女は諍っても必ず笑顔を向けることを忘れていなかった。
彼も・・・そんな彼女だからこそ、本気で怒って容赦しなかった。彼女も同じだった。
そして今は・・・こうして、呆れた顔をしながらも彼女の言葉に心が安らぐのを感じる。

安らぐための風が・・・今の彼は、ただ、心躍るばかりであった。
・・・間もなく、賑わしい夏が始まるから。

妹も・・・父も、母も・・・皆、見ているだろうか。
彼の・・・弾上藤一郎宗景静香の夏が、始まろうとしていた。
ひとりではない。
妹に、花を供えてやろうと思った。
菓子の代わりにしかならないが・・・夏に咲く風変わりな花の甘い薫りで今夏は我慢してくれよ、と心の中で呟いた。

「行くぞ」
彼は立ち上がった。
「どこに？」
マリナが茶色の・・・チョコレートのような濃い茶色の瞳を向けて、静香に怪訝な顔を見せる。彼は冷笑した。
「今、おまえが、菓子が足りないと言っただろう。・・・誰かに使いに行かせるよりこれから買い出しに行った方がはやい。いらないなら、それでも構わないが。オレはこの香りだけで十分に腹が膨れる」
「荷物持ち、是非、同行させてください」
マリナが慌てて立ち上がった。
まったく呆れた人だ、と静香は苦笑する。

今、外から戻ってきたばかりであったのに。
もう一度、外に出る厭わしさをまったく感じなかった。

今年も・・・ゆっくりしていけ。
来年も・・・また来てくれ。

後から来る者たちの分も含めて、たくさん買い込まなければいけないと言いながら走って自分の荷物を取りに行くマリナが静香の前を横切った。

・・・甘い薫りがした。

心を鎮める作用があるはずなのに。
なぜか、彼の胸は少し苦しくなり、そして少し傷んだ。
それでも。
その薫りは、確かに・・・秋の匂いであるはずなのに、彼に夏を届けたので、彼は目を細めて軽く伸びをした。
玄関の方から、マリナが早く行こうと叫ぶ声が聞こえてくる。

まったく休まらないな・・・
そう思ったが、彼もすぐに、マリナの元に向かう。
僅かな時間だけ。彼はマリナを独り占めできる。
僅かな時間かもしれないが、マリナは彼のことを考えて、甲府にやって来る。
今は、それだけで良かった。

静香は、彼の左手を見つめる。

庭で咲き誇る黒紫の花の花言葉は・・・移り変わらぬ気持ち。
移り変わっても。
移り変わらぬものがあるのだ。

美女丸、と彼を呼ぶ声がまた響き渡った。
騒がしいなと呟いたが、彼は微笑んでいた。

弾上藤一郎宗景静香の夏が、始まった。

（FIN）

#next_pages_container { width: 5px; hight: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }

降りみ降らずみ

降りみ降らずみ
（降ったりやんだり　転じて定まらないことのたとえ）

＊＊＊
≡01
寒い日の朝の事だった。

マリナ・イケダは今日こそ部屋の暖房の主電源を入れようと思いながら、アパートの前の一方通行の路を急いで歩いていた。
細い路地で、ここを抜けていくつか曲がり角を過ぎれば、大通りに出る。
住宅と集合住宅が混在するこの場所の雰囲気が好きで、ここを住所地としてから随分と長い年月が経過していた。
呼気が浮かんでいくのが真白で目立った。
雪が降ったりやんだりして、かつ寒気が大気を冷やしている日が続いていることもあって、道路は凍結し、雪の残骸が、日が射さない路影に未だ為残っていた。
彼女は肩に提げている大きな鞄を持ち上げ直して、肩位置を調節した。
非常に小柄な彼女の体躯に不釣り合いな大きな鞄には、彼女のすべてが詰まっている。
家のキー、必要最小限しか持たないサイフ、パスポート、そしてスケッチブックとそれに係る画材道具たち。
鞄の中では、画材道具の小物達がカタカタと乾いた音を立てて、彼女の歩みに伴奏音を付していた。

マリナは茶色の瞳を持ち上げて、歩きながら空を眺める。
今日も雪が降りそうだった。
しかし雨になるかもしれない。

ここのところ、都心では積雪しない。
温暖化現象が進んでいるから、と彼女の恋人は長い講釈をしようとしたが､彼女はそれを聞き流してしまっていた。

白金の髪の外国人の恋人は、今世希なる人物として世界の天才の十指に入るだろうと言われている人物だ。
・・・彼は世界的に有名になることにはまったく興味がないようであったが、それでも彼の偉業の数々が彼をその地位に押し上げる。
彼の・・・静かに生きていきたいという密かな望みはまだ叶えられていない。
人生は一度きりで、自分以外の者にも自分の今の生き方以外も考えられないというシャルル・ドゥ・アルディに対して、マリナはいつもそうではない、と首を振った。

人は変わることが出来る。
人は生まれ変わることが出来る。

昨日の自分を忘れることもできないし、癒えない傷もある。
けれども・・・また新しく生み出すことが出来る。
持っているものがすべてではなく、増やせるものだと思う。
それなのに、彼は「不審な投資を勧誘されているようだ」と冷笑する。

マリナが彼と再び出会って一緒に過ごすようになった今でも、彼はいつも変わらず美しい瞳をマリナだけに注ぐ。そして白金の髪も、男性にしては滑らかな白い頬も、長い手足も彼女のためだけに存在しようと言い切る。それなのに、彼は誇り高くそれでいて孤独でいることを臆さないで生き続けている。
日々の暮らしをどうしようとか、今日の講座のテーマは何にしようと考えるマリナのささやかな物思いとはまったくかけ離れたところで、彼は生きている。

彼女はまた冷たい色をした空を見上げた。
湿った曇天の空はいつも・・・日本に戻ってきたのだと思わせる。
パリの空は雪空でももっと違った色だった。

どちらも現実なのに。パリでの暮らしも、日本での生活も、彼女の中ではどちらも同じくらいの重さがあり、そして比べることはできなかった。
時々、どちらも現実ではないのではないのかと思う時がある。
そういうときに、彼女はもう一つの場所に行く。パリから日本へ。日本からパリへ。時折、シャルルに黙ってふらりと旅に出て叱責される。
「生きているのであれば良いと思っていた頃の方が心が安らかだった」
そう言って彼は溜息をつく。
これがマリナ・イケダであり、どう無理をしても変えることが出来なかった。
それを知ってなお、彼はマリナを離さないよ、と囁く。そして彼女は彼の手を離したくないと思っている。

・・・それだけでは駄目なのだろうか。
それだけでは、生きていけないのだろうか。

小さな事で喜べた頃の方が幸せだとは思わない。
過ぎたことだけが幸福とは思わない。
実際・・・マリナは今、幸せだったから。
不満がないことが幸せだとは考えていない。

マリナは首を振った。
ひとり彼を想って小さな部屋で空を見上げた時と同じだった。
今は外気に触れて、始終快適なアルディ邸の中に居るのではないのだという現実を身に染み込ませておかなければならない。
偽りのない本当の気持ちはそれだけだった。
ただ、傍に居たい。けれども傍に居すぎると苦しくなる。
彼の大人になった姿を夢想して夢中でスケッチしていた素描集を、これ以上増やすつもりはなかった。
もう、想像のシャルルは描くことはしないと決めていた。

「あ」
マリナは声を出した。
誰が聞いているでもなかったが。
・・・彼女の茶色の前髪を越して、白い華が落ちてきたからだ。
降る、と思った瞬間の次には降り始めていた。そして降った雪華をひとつ認識して空を見上げた時には・・・・雪が次々と落ち始めていた。
誰かの涙のようだった。
雨を涙と喩える人が居るが、彼女は雪こそが誰かの涙のようだと思っている。
静かに、音もなく突然現れる。
そして次々に降りしきり、積もる。
水は流れるが雪は積もる。
それはシャルルの涙のようだった。

彼の涙を幾度か見たことがあった。
そして彼の前で涙を流したこともある。幾度も。
だから雪が降るととても切なくなる。彼が涙を流しているように見える。
・・・彼の大切な人達の魂が、雪に交じって彼に涙を落としているようにも見える。音は障ると彼が言うから。雨ではなく雪に姿を変えて。
だから、これほどまでに最近は雪が多いのかなと思うくらいに。

そして、彼が傍に居れば、その孤独な魂や気鬱な時間を一緒に過ごすことが出来るのに。・・・選んだのはマリナ自身であるのに、彼女はそれでも彼のことを考え続けている。
一日目覚めている間も、夢を見ている間もアルディ家の若き当主について考えを巡らせているわけではない。
何かに夢中になって彼を忘れるときもあるし、束縛されることに少し困った時には彼女は彼と距離を置いた。
それが彼を不安にさせるとわかっていても。
愛翫動物のように、彼の寵愛だけを糧に生きていけるほど、彼女は強くなかった。

それでも。彼と過ごしたあの日々のことを忘れていない。短い間だったけれども、彼は彼女の恋人だった。好きだと言って好きだと言われた。
だからもう一度彼の背中を追いかけることになるとは思わなかった。
少女だった時の別れは、彼の背中を見送った。シャルルは片腕を挙げて、眺の中に消えて行った。
アデュウと言われて・・・その意味の深さに気がつかなかった。
永遠の別れのつもりで・・・彼は身を切る思いで言った言葉の意味を考えていなかった。

だから今度は見送らない。

彼の背中を追いかける。そして、時には彼を追い越す。彼を待って振り返る。
でも置いて行って欲しくない。
それなら・・・彼の傍らに居れば良いのに。
誰もがそう言うけれど。

「・・・やめた」
考えることはやめた。やめにした。この瞬間は思考を止める。
彼女は今、日本に居て、明日の講座の打ち合わせに向かうところだった。
雪は都心にはさほど影響しない。
地下に潜ってしまえば特段に降雪を意識しなくても良かった。

≡02

大通りに出た瞬間、ビル風にあてられて、マリナ・イケダは首を竦めた。
マフラーを持って来れば良かったと後悔した。
首周りが勢いの良い冷風に驚いて粟立つ。
パリに居る時の彼女は始終薄着だった。
邸内は温度がいつも一定に保たれていて、外出するときはいつも車だった。
時折ひとりで抜け出してアルディ邸に隣接する広い木立をそぞろ歩き、シャルルにいつも窘められていた。

禁じられるとますますそのことについて固執した。
自分はそういう生活を望んでいたのかというと、本当のところはどうだったのだろうか。

アルディ家の援助を受けたら、作品が何万部も飛ぶように売れていると見せかけることもできるかもしれない。
シャルルの知恵を借りたら、どんな原話でも広げることが出来るのかも知れない。
でも、それは望んでいない。

どこに居ても自分のやりたいことは変わらない。
そしてそれはいつでもどこでもできる。

しかしそう思えば思うほど、できなくなるのだ。

自由は不自由から生まれる。
不自由があるから自由を感じる。
そういうものだ。

マリナ・イケダは、大通りに出る前の幾つ目かの角道で、もうすぐクリスマスが近いのだということに気がついた。
こども達の姿が見えないのだ。
つまり、日本の年次制度を敷いている学校制度では、今は冬期休暇に入っており、学生達は皆、この寒い朝に出歩かなくてはならない強制について不満を漏らす必要のない一日を過ごすことを満喫しているのだ。

そしてあちこちで・・・外から見えることを意識した装飾の施された緑と赤を基色とした眩がこぼれ落ちている。
それが今、降り落ちてきた雪に相まって、何ともいえない景色を浮かび上がらせていた。
目の醒めるほど鮮やかで美しい景色も好きだ。
けれども、こうやって雑多な・・人々が密集している場所の雰囲気や街並みや、人々の雪に対する歓声を聞くことも好きだった。

シャルルとふたりで生きていこうという話になったとき。
シャルルとふたりだけで生きていこうと言った彼に、マリナは最初はノンと言った。
そして、滅多に言葉を改めないシャルルが「ふたりで生きていこう」という言葉に変更したとき、彼女はようやくそこでウイと言うかも知れないという曖昧な承諾をしただけだった。
しかし、マリナが彼の手はもう離さないと言ったので、雪のような彼女の恋人は不承不承その言葉を愛の約束に変換することにした。
彼は雪のようなであるけれど、嵐のような激しさを持ち合わせている。

・・・・やめた、と言ったのに考えがそちらに及んでしまう。

またひとつ、溜息を漏らした。白い嘆きが雪に交じって消えて行く。
彼女はキャスケットを深く被り直した。目深にしても、寒さはどんどん彼女の躯に染み込んでいく。指先を保護するために、厚手の手袋を持ち歩いていたが、あたたかい地下鉄の中ではそれは不要で、かえって都心に居ながらにして厚着をしていると、奇異な人物であるのかもしれないという目線を送られる。

刺すような冷たさという言葉では足りないくらい冷えていた。
切るような冷たさと言った方が近かった。本当に今冬はよく冷え込む。
いや、毎冬そう思うのだが、今年は尋常ではない寒波だった。しかしこの冷寒が次の春を喚ぶのだと思うから、耐えられのだと思った。
それに冬の空気は嫌いではなかった。
空気が澄んでいるときには、日本の空は何とも言い表すことが出来ないほど美しい夜明けと夕暮れを見せる。そしてこんな静かな雪の夜に集う人々の暖かさを感じる。
彼女の来訪のためだけに、暖房をつけて、待つ仕事場の関係者の暖かさを知って、有り難いなと思うことはあっても煩わしいとか逃げ出したいと思うことは決してなかった。

これからまた外出するために、大通りに向かう。彼女はほとんど自宅に居ないか、居ても外に出ないという極端な生活を送っている。
定期的に訪れる仕事のための外出以外には、散歩をして、用事を済ませて、買い物をして・・・それだけだった。
嗜み事や、誰かと遊興のために外出するということはほとんどなかった。
これでは・・・とても忙しい、とばかり口にしていた父のことを揶揄できなかった。彼女はどうして大人はそんなに忙しいのかと尋ねたことがあった。こどもが忙しいのはわかるが、仕事と職場とほんの少しの外出しかしない大人が、なぜが忙しいのか、と言った時に、大人になったらわかると言われて辟易したことを思い出していた。その時になってみないとわからないことを今、知りたいから尋ねているというのに。
しかし今になって思えば、そうなってみないと本当にわからないこともあるのだということを知った。
その時から気の遠くなるような年月を越えて、自分も大人になり・・・同じような生活を送っていることに対して、誰も何も言わなかった。

加えて、彼女はパリと日本を往復するという二重生活を送っている。このままではいけないと思っていながら・・・シャルルの傍にずっと居ることが果たして良策なのかどうかと思う時があった。
だから、彼と少し距離を置く。彼を弄んでいるわけではない。でも周囲から見たらそう見えるのだ。

ふと、彼女は微笑んだ。

考えるのはやめようと思ったのに。また、彼のことを考えている。
彼は念願叶ってアルディ家の当主になった。その間、様々な紆余曲折があった、ということだけ聞いていたが、生死の境を彷徨うような事態に陥ったことや、その後に当主としてだけの業務従事に疑念を抱いて、別の職種に就いていたこともあったことを漏れ聞くと、
彼女は・・・シャルルが彼なりにいろいろと模索して経験してそして大人になっているのだと思った。
それなら、自分はどうだろうか。
シャルルと小菅で別れてから、それからの彼女も彼女なりにいろいろあった。
ひとことでは言い表せないし、言ってもそれは戻って来たり再現したりできないことであるから、シャルルを含めて他の誰にも言わないことにしている。
彼も同じだろうと思った。
何も亡い人生しか持たない人間は存在しないというのが彼女の持論だった。
だから、自分にも何かがあって、そして何かが残って、それが今の自分を作り上げているのだと思う。シャルルと一緒に過ごした月日よりずっと長い時間が経過した。
そして、若い頃・・・そう。シャルルがよく「青春の輝きの時代」と皮肉気に言うあの時代の頃よりもっと長い時間を一緒に過ごしている。
それなのに・・・

今でも彼の傍に居ると苦しい。
一緒に居ないともっと苦しい。
でも、離れるとほっとする。
でも、一緒に居られると思うと心が躍る。

矛盾した気持ちが入れ替わってはまた戻る。
表裏一体の物体であるかのように、不規則に自身を軸に旋回してはそのたびごとにマリナを翻弄していく。

「君を独り占めしたいよ」
シャルルがそう言うと、マリナはいつも困ったように唇を横に引いた。
独り占めしたくてもそうできない、と言ったシャルルを思い出すから。
そしてそんなシャルルをマリナが思い出していることを彼は知っているから。
「ようやく君を独占できると思ったのに、そうすることができない。愛しすぎているからではない。・・・それを実行したらマリナは約束を反古にするとわかっているからだ」
シャルルがそう言ったので、マリナはまた日本に戻ってくることにした。
ちょうど、仕事が入っていたことを理由にした。

あの時。
愛しすぎて独り占めできないから、自分ではない人物にマリナを委ねると彼は言った。
しかし、今は、独り占めにしたら彼女は自分から離れていくだろうから、と言った。誰かと自由に恋愛をしろという意味などではなく、もっと深い意味があるのだとわかったとき。
マリナは、ひとりで考えるからと言ってシャルルから少し距離を置くことにした。

≡03

この世の多くの者が逢着するものの中に「終わりが近づいている時」のもどかしさがあると思う。
マリナ・イケダも体験している。
相手の考えていることが判らなくなり、逆に判りすぎてしまう時もある。
そして、何を言っても言葉が伝わらず、言葉にならない言葉を曲解されてしまう。
しかしシャルル・ドゥ・アルディにはそれは適用できない。

彼はマリナの言葉を理解していないわけでもないし、考えていることが判らないわけではない。
マリナは彼とは逆は発想を持っており、最初から彼のすべてを理解することはできないだろうと思っていたので、その点は、彼がマリナ・イケダをこよなく愛している理由であった。
自分の想像や予定に及ばない行動を取るマリナ・イケダが彼を虚無と怠惰の迷宮から救い出してくれたと考えていた。
しかし、彼は独り占めできない。
そうして欲しいと彼が願うから。
それはできないと彼女は言う。
何かに没頭することもある。
誰かの安否を気遣うこともある。
そしてマリナの知らない人々と交流することで、もっと違った色の世界を知ることができる。

・・・彼のすべてを理解し、すべてを把握することはできない。
マリナよりもっと長い時間を共有しているはずの、シャルルの美しい従妹でさえ、同じだった。
鑑定医という職にも就いていた頃、だいぶ・・・彼女の手を焼いたと聞く。
しかしそれでシャルルの価値観や何かが少しだけでも変化したのであれば・・・

マリナはそれすら愛おしいと思っていた。

変化しないものはない。
マリナも変化した。
だからシャルルが変化することに頑なであって欲しくなかった。
青春の輝きの頃の彼は柔軟で、そして孤独だった。
大人になったらもっと孤独になったのだろうと思う。
繋がりやネットワークが広がるについて、数多の者と関わるようになって・・・彼は誰とも共有できない何かがいつも根底にあることを知っている。

冷たくて、温度も音も彼女の想いも吸い込んでいきそうな雪が、いくつも視界をよぎった。
瞬きを繰り返していく都度、その密度は濃くなっていく。大急ぎで何かを消してしまうかのような振り方だった。
雪がまた本降りになってきたのだ。

・・・傘を持ってくれば良かった、と思った。

僅かな距離しか歩いていないのに、足先が冷えによって痛んできた。
そのうち麻痺するだろうし、歩いていれば暖かくなり、地下に入ってしまえばそれほど問題にならないだろう。

クリスマスや新年を祝う行事には、彼は興味がないと言う。
当主としての参加しなければならない催事には出掛けていくこともあった。
彼は本当に敬虔な信徒の家柄なのだろうかと疑いたくなるくらいに。
他の者はごまかせても、マリナには理解できた。
彼が彼の持つ信念は自分自身でもぎ取ったものであり、目に見えない存在ではなく己の誇りなのだということを。

「シャルルは複雑なのか単純なのかわからない」
彼女が呟いた。すると、自分の声に驚いて、口を噤む。独り言が最近増えた。
これはパリに居る時には現れず、日本に居る時に発生する。
誰かと一緒にいることに慣れてしまうとこうなるのか。
それとも、寂しさを埋めるために呟くのだろうか。

そこで歩いていた足を、ふと止める。
・・・やめると言っておきながら考えを止めることができない。
上を向いては吐息を漏らし、下を向いては降り注ぐ雪にシャルルを重ねる。

「・・・降りみ降らずみ・・・」
彼女はまた呟いた。
降ったりやんだりする天気の模様を、そう言うのだ、とシャルルから教わった。
まさに、今の彼女がその状態だった。
この空のように。
この雪のように。

彼女にシャルルの溜息が降り注いでいるようだった。
大きな嘆きの雪を落とすこともあれば、彼女から音を奪ってすべてを包む。
そうかと思えば切り刺すような冷たさを与え・・・・暖かさというものがいかに得難いものであるのかを知らしめる。
彼との日々は、これまでマリナ・イケダが経験したどんなものと違っているのだと思った。

・・・難しい問題なんてない。

ただ、世の習いのように、クリスマスとかニューイヤーとか・・・日々のそんな区切りや節目に彼の温度を感じていたい。ただ、それだけだった。
彼が夢や幻や雪のような淡さしか遺さない存在ではないことを感じていたかった。シャルルは激しい焔を持ち合わせているのに。
炎も雪も同じだ。
その中心をつかみ取ることは出来ない。

けれども、彼はいつもマリナだけを見続ける。
彼女の願いをすべて叶えてやろうとする。だから願いを口に出来ない。
その代わりに、マリナは「決して離れない」と彼に言った。
それがすべてに勝るとシャルルは微笑んだ。あの時と同じ、美しいこの世のものとは思えない微笑みだ。

しかしそれでも、マリナの都合や気分で彼の予定を変更することができない。
だから・・彼女はシャルルのことをそのままにしておくことができない。
しかしその一方でわかっていた。
こういった定点で立ち止まって欲しいと彼女が言わない限り、彼は休息しない。彼女と一緒に過ごす時間を多く作ろうとしてなお、その時間を捻り出すために、より多くの労力を費やしている。
マリナはそれを知っている。

≡04

また足を踏み出した。
・・・あの時。小菅で別れた時には足を踏み出すことをしなかった。
それは自分で選んだ路であったし、その選択を後悔はしていない。それなのに。
どうして、彼女は、今、迷っているのだろうか。

肩の鞄が重く感じる。それでいて軽く感じる。そこには自分のすべてが入っていると思ったが、決してそうではないのだと知っていたのに・・・それがすべてだと思うことにしていた。
もう、友人の記録を残したリストは持ち歩いていない。
必要なかったから。
思い出すことが出来ない者も居る。
全員を覚えていることが出来ない。
それは記憶の容量の問題ではないことも知っていた。
あれほど大事にしていたのに。

・・・家に戻ったら、シャルルに連絡をしてみようと思った。

ただ、伝えれば良かっただけなのに。
一緒に居たい、と。
何度もそう伝えると、その言葉の価値が薄れるような気がした。
慣れてしまうのが怖かった。
それを言えば、シャルルではない別の人との日々を否定することになると思った。
そんなことは決してなかったのに。
だから繰り返さなかった。
彼は繰り返し彼女に愛しているよと囁くのに。
普段は繰り返さないのに。

でもそれまでは、彼のことを考えることだけに時間を費やすのは、この路を歩いているときだけだ。
何かに気を取られていれば、彼女の雇い主はすぐに気がつく。
そしてとても柔和であるけれども、公私混同はしない。徹底している。
もし、そうして求められた仕事をすることができなければ、彼女を赦さない。
中途半端に考え事をするくらいなら、すべてを破壊してしまい、何もなかったことにした方が良いとさえ考える気質の持ち主であることを知っている。

寒烈な空気がまた、入り込む。

雪とともに吸い込まれて行けばよいのに。
そうなったら、この淡雪は真白でなくなるだろうか。穢れを吸い込んで・・・その後はどうなってしまうのだろうか。

彼女はまた溜息を漏らした。
「シャルルの声が聞きたい」
また、呟いた。
ここを出れば人通りの多い場所に出る。独り言を言う気楽さを自分に許可できるのもこの路地までだった。
そこの路地を曲がったら、彼女は日本で暮らすマリナ・イケダになる。
帰ったら、まずは姉と妹から送られて来たクリスマス・カードの礼を連絡しよう。時差を考えて、シャルルにはメールを送ろう。

自分で予定を調整したのに。なぜか、どういうわけか、離れると次のパリ行きの予定を考え始める。

「・・・それが願い事？」
後ろから、声がしたので、マリナがぎょっとして口を噤んだ。
その声を良く知っていた。
自然に足が止まり、肩の鞄にあてていた両手をぎゅっと握る。
雪が、彼女の肩にも鞄にも沓にも落ちてきた。
心臓が止まったと思うくらいに、驚いた。驚愕したときには一瞬動きが止まり、それから次に何かがふいと持ち上がったような、そんな感覚を味わう。

軽い耳鳴りに似た動悸が唇から漏れそうになった。
・・・今まで溜息ばかり吐き出していたのに、今度は大きく息を吸ったものだから、冷気が器官を刺激して少しばかり肺の動きを感じる。

「シャルル」
彼女は振り向かなくてもその声を知っていた。
淀みなく流れるように日本語を話すが、彼はフランスの華と呼ばれているフランス人だ。
そして、今、ひとり嘆きの言葉を呟きながら考え事をしていた理由になった人物だった。
彼女はここがパリではなく日本の東京であることを頭の中で確認しながら、振り返った。
馴染みのある街並みや住宅壁の狭間を通るアスファルトの上に、彼は、居た。
天使が舞い降りるときはこんな風に静かで予告がないものなのだろうか。
神の降臨を知らせる使いの者というのは、こんなに・・・静かにやって来るのだろうか。それとも、雪が見せる幻影だろうか。

彼は不機嫌そうに立っていた。長身に良く似合う、少し長めのコートを着ていた。
呉須色の外套に、白金の髪が良く映えていた。
そして、白い肌は雪と同じくらい白く、整った顔は無表情だったが、彼女は彼が立腹していることがすぐにわかった。
青灰色の二重の瞳の眦が鋭かったからだ。これは彼が時差を調整しないで移動しなければならないときによく見かける表情だった。
余裕のある旅程ではなく、彼は移動中も機内や車内で仕事をしており、時差を勘案して睡眠をほとんど取っていないからのことだった。
・・・つまりは仕事に疲れており、睡眠不足で、その上、滅多に寒空をこうやって歩くことのない身分の彼が寒空の下にいることに、シャルルは不機嫌になっているのだ。

「シャルル・・」
呆気にとられて、マリナが彼に近寄ることもしないで立ち尽くしていたので、シャルルは低い、怒気を含んだ声で彼女に言った。
彼は腕に光る、スピーク・マリンのピカデリー・コレクション　Q.P.スケルトンを眺めながら、眉を僅かに顰めて、彼女の数歩後ろに立ちながら、言った。
「マリナ。君がいったいいつになったらオレに気がつくのか、アパートを出てからここまでの時間を今、教えてやろうか？」
「気がつかないよ。声をかけてくれないから」
マリナが慌てて言った。
そして彼の言葉に驚いて返答する。
「アパートの前で待っていたの？」
彼は憤慨で表情に乏しくなった顔をマリナに向けた。日本人の柔和な憤りになれてしまっているので、シャルルの険しい顔に鈍感すぎる、とシャルルに窘められたことすら忘れて、彼女はシャルルにそう言ったので、彼は大きな溜息をついた。
マリナよりずっと背が高いので、彼女の漏らす雪の嘆きの位置からだいぶ空に近い場所から・・・彼の吐息は空に戻っていく。
「正確には、到着したらマリナが出てくるところだった。声をかけたが、一心不乱に考え事をし、かつ独り言を言っているのか、雪と交信しているのかわからない状態でふらふら歩いているので、それがいつまで続くのか観察していただけ」
「ふらふら・・・」
「そう、ふらふら。君はこんな細い路地でさえ、まっすぐに歩けないらしい。平衡感覚に異常があると感じるなら一度検査を受けることを、提案するよ」
そうか。
だからこれほど路が長いと感じていたのか。
二直線の和は残る一直線より長いという定理を昔、学習していたが、さらに距離を長くするためにはいなずま状に交互に折れ曲がった線で歩くと当然に距離が伸びるということを思い出していた。
それはシャルルが言っていたことだったが。

「まるでマリナそのもののような歩き方だった。
おまけに雪は降ってくる。
それなのに足を速めるどころか時折立ち止まる」
「ちょっと考え事をしていたのよ」
マリナがそう言って雪の中のシャルルをぼんやりと見つめた。
まるで夢の中のような、幻想的な彼の立ち姿に、彼女は茶色の瞳を向ける。
「それに・・・私はふらふらしてないよ」
「言葉が悪いなら、ふらふらでもよろよろでも蹣跚（まんさん：足元がよろめく様）でも良いが」
彼が何を言いたいのかわかっていたので、それ以上はそのことについて会話をすることをやめた。
パリと日本を往復していることや、マリナがシャルルに対して距離を置こうとしていることを指し示しているのだと思ったが、シャルルはその先の答えを知っているように思ったからだ。
彼は腕時計から目を離して、ゆっくりと美麗な顔を彼女に向けた。

＝05

「私、これから出掛けないといけないの」
「知ってる。だから外に居るのだから」
シャルルがそう言ったので、彼女は首を少し傾げて微笑んだ。
そういう微笑みをするときは、彼女は大人の女性の顔を見せるが、普段はとても幼く見えた。
若く見えるのではない。
・・・幼いのだ。

そのマリナの茶色の少し癖のある髪の毛が雪を受ける。
そしてその雪が溶けて、彼女の髪に雪雫をもたらす。

・・・彼女は気がついているのだろうか。

いつも自分以外のものに目を向けていて・・･彼女は自分自身に降りかかる浄妙について目を向けることはない。
彼女は・・・髪に乗った喜雪の儚さを知っているのだろうか。

「通りに車を待たせてある。それで行けば良い」
「・・・・助かるわ、ありがとう」

素直に彼の申し出を受け入れることにする。

彼女の出で立ちから、きっと・・・あの柔和な表情を絶やさない、眼鏡の奥に知性を備えた人物の元に行くのだろうと予測がついた。
渡さない、と言っても彼女は行くだろう。行くなと言っても彼女の心は止めることは出来ない。
彼だけしか見つめることの出来ない人を愛したわけではない。
そういう人物の愛はいつも一方的であった。しかしマリナ・イケダの愛というものは実に興味深く・・・そしていつも彼の愛でているマリナだからこその発言を心地好く受け入れることにする。
そう、彼女を愛していることにはかわりがない。

けれども・・・
彼は正直にそう伝えることはしなかった。

「でも、オレは君の送迎のために来日したわけではない」
「はい」
マリナが素直に頷いたので、シャルルは意外だと言うように、青灰色の瞳を少し大きく開いた。
「マリナ・イケダが素直だ・・・これは雪が見せた幻聴か幻影か？」
「シャルル」
彼女は縮まらない距離をそのままにしてシャルルの名前を呼んだ。
「来るなら連絡をしてくれても良いのに・・」
シャルルはマリナのアパートに足を踏み入れることも、泊まっていくこともしなかった。
いつも都内のホテルを滞在先にすることにしていた。
それにも理由があったのだが・・・

それでもシャルルのこたえを待たずに彼女は笑った。
「これは贈り物だと思うことにする」
「声があればそれで良いという君の言葉は無効？」
「有効」
彼女は短いこたえで言葉を句切り、そして笑った。
「シャルルはいつも・・私の想像を超える」
「お互い様だ」
そう言い終わるか終わらないかと同時に、彼はふっと動いた。
シャルルはマリナのすぐ近くまで移動する。
誰もがここまで近寄らない。
赦されているのは、特別な・・そう、特別な関係にあり、近寄ることを認めている相手だけだった。
そんな彼女の恋人からは、雪の香りがした。
そして彼の衣類からは・・薔薇の香りがする。懐かしいとさえ思う。
パリのシャルル・ドゥ・アルディの居住邸の香りだった。

見上げれば、彼の精悍な表情が、雪の舞う空に溶け込みそうなほど儚い様を見せた。
もっと近い距離と温度を知っているのに。
マリナはそれ以上近寄ることが出来ない。
あまりにも・・・・あまりにも美しい表情だったから。
神や神の使徒が降り立つ場面はきっとこんな風だったに違いない。
突然・・静かにそれは始まり、そして予定されていない出来事に皆が驚愕する。
・・・人通りの少ない路地で良かったと思った。他の者が居れば、きっと、シャルルの神々しい美しさに自身の時間を止めてしまうのだろうと思った。

≡06

「それで、君の願い事はそれだけ？」
「願い事はたくさんあると叶わない」
彼女がそう言ったので、シャルルは薄い唇を横に引いて、苦笑した。
彼がかつて、たったひとつの願いを叶えるために、すべてを捨てたことをマリナが知っているからだった。
彼女は普段口にしている欲求は多いが、実際にそれを与えよう、というと途端に「いらない」と言う。
他者から与えられたものがいかに虚しいか、大人になって知ったようだった。
いや、あの時代にも知っていたように見受けられる。
それでも彼女の本当に欲しているものが何であるのかということについて、マリナは気付いているように見受けられた。

彼の誇りはすべてを捨てる勇を彼に与える。
白金の髪の青年は、冷たい微笑みを浮かべることが良くあった。
過去を思い出している時・・そしてマリナ・イケダと共に在った時以外の時を思い出している時だ。
青春の輝きと呼んだ時代を除いたそれ以外の時間は、彼にとっては冷たい雪のような時代だったのかもしれない。
決してそうではなかったのに。
彼は、マリナと一緒に居ることによって、マリナと一緒に居なかった時間を切り離しているようだった。
彼女の存在しなかった時間を・・・こうやって冷たい微笑みで凍結してしまっているようだった。

シャルルは腕を伸ばして、そっと・・・彼の恋人に細く長い指を伸ばした。
髪に血管は走っていない。だから体温はない。
それなのに、彼女の温度を感じて、彼は一瞬、指先を浮かせて引いたが、そのまま茶色の髪に指先を絡める。
肩に伸びた茶色の髪に群がる雪片を、彼の体温が奪って玉水に変化させる。
まるで、雪という装飾に覆われた茶の樅木のようだった。
常緑樹である緑より生命力を感じる茶の枝葉を愛おしく思う。
彼女の独特の茶色の髪と瞳は、彼を・・・安堵させるが困惑も呼び起こす。

彼の感情を揺さぶるのは、今ではマリナ・イケダだけだった。
この先もそうで在れば良いのに、と思う。
彼女以外にはそれを赦すことはなかった。
シャルル・ドゥ・アルディがそう決めたから。
巡り会って、再び彼女と時間を過ごすことについて、何も考えていないわけではなかった。

「急ぐのだろう。・・・送るよ」

彼はそう言って、マリナの隣に彼の身体を並べる。
それまではとても遠い距離だと思えたのに。
足を踏み出してしまえば、それはとても短い距離だった。
そこに踏み入れるまでには・・とても長い葛藤があったと言うのに。
彼女の持っている世界について、彼が介入することはほとんどなかった。
こういう関係も悪くはない。
しかし彼女はいずれ、アルディ夫人と呼ばれる身分になる人間であった。
彼女以外は考えられない。
そして、マリナをシャルルの戯れの情人に終わらせるつもりはない。
彼女は数多いた彼の恋人を名乗る者とは違う。彼女こそ・・・雪の恋人なのだ。
雪が降っても降らなくてもマリナ・イケダは彼の想い人だ。
春夏秋冬どんな季節が訪れても。
冬の別れを経験して、その先の春を知る喜びを互いに味わっていると信じて居る。
だから・・だからこそ、冬でも彼は彼女を旅立たせる。
あの冬の思い出は決して幻でないと思っているから。
青春の輝きの時代に味わった、背に浴びるマリナの視線を・・彼は忘れることが出来ないから。

今でも。

ふたりだけで居られる時間も距離もそれほど多くはなかった。
この角を曲がれば・・大通りに出て、人混みに紛れてしまう。
そうなれば通りに待たせている車まで急ぎ足で進しかなく、そして車に乗り込んだとしても、それほど距離のない目的地までの時間にゆっくりと余裕の持った時間の中で、話をすることはできなさそうだった。
彼女はいつも蜻蛉のように、淡く、儚く、そして掴みｓ所がない。

・・・この雪のように。

彼はマリナの肩を軽く叩いた。
神経質そうな指先で、とんとん、と彼女の小さな肩を軽く震動させる。
そして彼女の存在を指先で感じる。
指先に、暖かく炎が点るのを感じる。

でも手の平全体で感じることはない。

・・・彼女の肩を丸ごと・・肩も含めて身体ごと抱いてしまえば、その先の彼女の行動を制限してしまいそうになるからだ。

「・・・私の言葉ばかりではなく、シャルルの言葉は？」
マリナがそう言って、シャルルの顔を見上げた。
あと数歩先を行けば、彼と彼女だけの雪ではなくなる。
降りしきる雪が落ちる中で、マリナはシャルルの静かな願いを確認しようとしおた。
彼が・・・何を願望としているのかはわかっていたが、それを口にするシャルルの言葉を聞きたかった。
言葉にできない願いをマリナは聞き入れることは出来ない。
なぜなら､彼女はシャルルを愛しているから。
黙っていてもわかるだろうという価値観は、シャルルに通用しない。
彼女の言葉にならない言葉を彼が求めているように、彼女も・・・シャルルの言葉を求めている。
直接的ではないのに、それでいて・・・静かな大きな激しい願いを抱いていることを、この時に感じる。

「・・・独り言の声量が大きくなっていくのは、加齢のためなのだろうか」
彼がそう言いながら、空を見上げた。
雪が激しく降ってくると思ったのに・・シャルルが空を見上げたら、その雪は不思議なことに小さく鎮まってしまった。
彼は雪の精霊なのだろうか。それとも・・雪の形を借りた薔薇の精霊で・・・マリナとの時間は淡く儚いものだと強調するための存在なのだろうか。

≡07

「お互いに年齢を重ねたのだから、と言う前向きな言い方にして欲しいものだわ」
マリナ・イケダがそう言ったので、シャルルはまた小さく微笑んだ。魅惑的な微笑みであったが、挑戦的でもあった。
彼はいつも自信に満ちており、それでいてひどく傷つきやすい繊細な神経の持ち主だった。
「独り言というのは、そういう理由から発生しない」
「そう。でも意識して改善する範囲も限られているから、仕方がないなと諦めて」
「諦める。・・・シャルル・ドゥ・アルディが？」
彼がそう言いながら、マリナをちらりと横目で見た。
青灰色の瞳が彼女に注がれるので、歩きながらでもマリナは自分の頬が紅潮するのを感じた。いつになってもこういうやり取りは慣れない。
「そう。私を変えることは出来ない。・・・少しはできるかもしれないけれど。でも私自身にも思い通りにならないから、私なのだと諦めるというよりかはむしろ・・認めて欲しい」
「それなら昔から・・・最初からそうしていたよ」
シャルルはそう言うと、くすくすと自分の言葉に声を漏らして笑った。
彼を包む冷たい空気が一瞬だけ温度が上がったような気がする。彼が意識しない微笑みというものは、年齢相応に若々しい。
それでいて、華のように美しい。
「しかしある意味、諦観しているよ」
「どうして？」
諦めないと言ったシャルルが自身の言葉を覆すような台詞を言ったので、マリナは茶色の瞳を少しだけ大きく開いた。
彼はこういったことに関しては忘却しないし、誤ることはなかったからだ。
シャルルは魅惑的な声で言った。
マリナの問いではない違う話題だった。
「それにしても、マリナの独り言は声量が大きすぎる。それくらいは調節できないのか？」
「努力します」
マリナが澄まして言った。
普段通りの会話のやり取りに、彼女は少し安堵する。

シャルルが今まで憤っていたことは忘れていないとわかっていたが、それでも、彼とのこういうやり取りが・・・懐かしいと思った先ほどの寂しさが、目の前に散る雪のように溶けて消えていく。
・・・今夜の雪は積もらないかもしれない。

「それなら」
彼はマリナの隣に並んで、彼女の歩幅に合わせてゆっくりと歩き出した。
それでも、彼の一歩はマリナには一歩半だった。
大変に身長差があったが、それでもシャルルはマリナを追い越しては行くことはしない。

シャルルの白金の前髪が揺れた。
そして青灰色の物憂げな瞳を空に向ける。
雪が一瞬だけ止んでいたが、今にも再び降り出しそうな空だった。
「・・・マリナが願い事を言うのであれば、オレも希望してみよう」
「何を？」
彼女が興味深そうに、彼の顔を見上げた。
「・・・降りみ降らずみ」
その先に言葉があると知っていたマリナは、彼の続きを待った。
結論から言う時には、彼女に何かを伝えたいときだけだった。彼は帰結のみを述べるので、過程について述べたりしない。彼女に説明するときだけだ。
昔、その過程を述べると誰もが嫌がったから、いつの間にか・・・そうすることをやめてしまっていた。
彼の思考は誰も理解できないのだと思い知る瞬間を多く持つことを放棄した。
それなのに、マリナ・イケダに関してはそうしなかった。
なぜ、どうしてそう考えるのかを、事細かに説明する。
マリナはそれをいつも黙って聞いていた。
途中で話を遮ったりしない。理解できなくても最後まで聞いた。
・・・彼が彼女に理解されていると思う瞬間だった。
「それがシャルルの願い事？」
先ほどマリナが呟いた言葉だった。彼はそれを聞いていたはずなのに、同じ事を繰り返した。降ったりやんだりするという意味合いのその言葉には、短くても多くが含まれていた。
マリナが何かを決めかねており、シャルルに何かを伝えきることができていないことを指していた。でも彼ははっきりとそうは言わない。
「マリナの願い通りに、声を届けた。今度は、オレが願いを届けることにする」
「・・・だから、それがシャルルの願いなの？」
ノンともウイとも言わないで、静かに微笑むシャルルに、マリナが淡い吐息を漏らす。また・・・白い華が空に浮かんでいく。

「・・・・降っても止んでも、傍に居ても居なくても。
・・・どこにいても君のことを考えない日はない」
シャルルが前を向きながらそう言ったので、マリナは足を止めた。シャルルの広い背中がゆっくりと数歩先まで進み・・・そして、彼は立ち止まった。
かつん、と彼の沓音が響く。
音はすべて消し去られた雪の世界が、一瞬だけ・・雪が止んで、元の世界に引き戻されたような感覚が訪れる。
シャルルはこちらを振り向いた。
整った顔が雪のあかりで白く光っているような気さえする。
彼の髪にも背中にも、雪水が煌めいていた。

シャルル・ドゥ・アルディは空を見ながら、言った。
静かに。けれども強い口調で。

「・・・だから諦めてくれ。オレが君を諦めないことを」

マリナ・イケダは息を呑んだ。雪の精霊のような、優麗な人に、そのように囁かれたら誰でも天に昇る心地になるだろう。
けれども・・・マリナは、ただ息を潜めて、彼の立ち姿を見つめているだけだった。

彼は白い天景を眺めながら独り言にしてははっきりとした声で言った。
「・・・君の背中を見ながら思った。誰かの背中を見つめるのはとても・・・そう、とても苦しいことなのだと判った」
あの時のことを言っているのだと思った。
シャルルを背中を彼女が見送った時、マリナが何を思っていたのか・・・
その後に彼女が何を思ったのか、彼は理解しているようだった。
その瞬間にそう思わなくても、その後になって思うこともある。
だから彼はマリナに声をかけなかった。
だから彼はマリナの後ろをついて歩いた。

「・・・・オレは見送らないからそのつもりで」
彼はそう言って微笑んだ。
「・・・随分と大きな独り言ね」
「加齢のせいかな」
シャルルはそう言った。マリナはシャルルのその言葉に目を細めて笑った。
降っても止んでも、彼の気持ちは変わらない、と言われて、彼女は言葉を返すことが出来なかった。
彼の深い愛が・・・寒くて凍えそうな胸に染み入った。

「年齢を重ねることは悪いことではないわ。決して」
「肯定もしていないが、否定もしているつもりはないが」
マリナがくすくすと笑った。
彼のこたえはいつも・・・マリナを微笑ませる。
鞄の中身は変わらなかったのに、どういうわけか、少しずしりと重くなったような気がした。
彼女のすべてが詰まっていると思っていた鞄の中身が・・一度は軽くて何もないのではないのかと思ったのに、シャルルの言葉によって・・重みを増した気がしたのだ。
「荷物を持とうか」
シャルルの申し出に、彼女は微笑みながら、首を振った。
「これは自分で持たなければならないから」

そこには、彼女のすべてが入っている。
だからどんなに重くても・・・重くないことを歎くほど軽いと感じても・・・それは自分で背負わなければならないと思ったから。

たとえ、雪が降っても。そして止んでも。
シャルルのことを思い出さないことはない。パリに居ても、日本に居ても。
そして・・・
彼の背を見て苦しんだ日々があるから。
彼と彼女はあれから長い年月を経て、大人になったから。
だから、シャルルと一緒に居られるのだ。

それはシャルルも同じだと・・・彼は呟いたのだ。
まるで独り言のように軽く言ったが、彼女の負担にならないようにそうしたのだと思った。

けれども。
彼の言葉は・・・どんな贈り物よりも貴かった。

「素敵な贈り物ね」

シャルルに小走りで駆け寄ったマリナは、彼の背中に・・・・身体を傾けて、静かに額をあてた。
もう、立ち止まらないと思った。
立ち止まって、彼の背中を見送らないと思った。
これからは・・・シャルルがそうしたように、彼の背中についていこうと思った。
彼の一歩は彼女の数歩であったけれど、それでも・・・・彼女が追いつくまで、彼はああして背中を向けながらも立ち止まってくれると信じて居たから。
そして、彼はマリナが走り寄ってくるであろうと信じて居るから。

「降りみ降らずみ・・・今度の作品のテーマにしようかな」
彼女はそっと言った。
シャルルの声が背中から震動となって伝わり、彼女の額に響く。

「おい、オレと一緒に居るときには仕事に結びつけないでくれよ」
シャルルが呆れたようにそう言ったが、その声音は柔らかかった。
「・・・・シャルルはいつも私の想像をはるか向こうからやって来る」
「想像を超えるのではなくて？」
「そう。向こうからこちらにやって来る。
だから・・・私を飛び越して行ってしまわないかと思ってしまう」
「それはないな」
彼は冷笑した。
彼の背中に回っていたマリナの肩に腕を回した。
僅かに振り向いて・・・そっと脇に寄せる。
薔薇の香りをもっと近くに感じた。
雪がまたひとひら、落ちてきた。
今度は、ふたりの間に降り落ちるのではなく、静かにそっと・・・彼と彼女が触れている狭間に落ち、そしてすぐに溶けて消えた。

淡雪だからではない。
・・・ふたり分の体温がそこに在ったから。

瞳を閉じて、彼の名前を小さく呟いた後、マリナはそっと彼女の恋人に言った。
「迎えに来てくれてありがとう。でも、もう行かないと」
「・・・マリナ、オレは雪空の中、君を待つ情けない男に成り下がったわけではない」
シャルルはそう言うと、彼女から身体を離しながら言った。
・・・また、雪が降ってきた。
彼女が不思議そうに顔を上げると、シャルルは彼女の頬を両手で押さえる。
雪が本降りになって来た。
降ったり止んだりする、不安定な空の下で、彼は彼女に囁いた。
茶色の瞳に、魅惑的な青灰色の双眸を彼女の瞳に近付ける。
「・・・雪が本降りになって来た。オレは雪空の下で濡れるのは好まない」
シャルルはそう言って、甘い微笑みを浮かべる。
それは彼がかつて・・若い頃に、彼女に向けた微笑みと同じだった。
彼はその時、自信たっぷりに、言ったものだった。
・・・彼なしではいられなくしてやろう、と。いずれそうなるだろうと。
・・・身も心も彼のものになりたいと思うと宣言した。
その時と同じ微笑みで、彼は言った。

「マリナ。仕事の終わりまで待とう。
しかしその後は・・・帰り道は帰り道にならない。
・・・・雪を浴びることはないと思え」
それは彼の布告だった。
・・・今夜は雪がこのまま降りそうであったのに。
傘を持たないマリナが雪を浴びないということは・・・そのまま彼は連れ去るつもりだと言っていたのだ。
「あの、私、今夜は・・・」
「駄目だ」
彼は肩を抱いて、マリナが逃げ出さないように彼の身体に引き寄せながら言った。困惑したマリナの顔は・・・とても幼い。
あの時を思い出すが、それは再現ではなかった。彼と彼女は大人になったから。
距離を感じ、時には共に居られなくても・・・降りみ降らずみの定まらない空気の中で息づいていたとしても。
それでも、声が聞きたいと思い、一緒に居たいと思い、相手のことを考える。

・・・これ以上の何かを求める必要が、あるだろうか。

シャルル・ドゥ・アルディは笑った。そして、少し意地悪く彼女の耳元で囁く。
「オレを待たせるのは、君だけだよ。・・・そしてオレは決して・・受けた仕打ちを忘れないから」

・・・誰も居ない路地で良かったと周囲を気にする余裕さえなかった。

マリナの抗議をまったく無視して、彼は大通りで待たせている車に向かってマリナを連れて行く。
あの角を曲がれば、もう、すぐそこは・・・人通りのある場所が開ける。
独り言を言う時間は終わりだ。
そして空を見上げて何かに思い耽る時間も終わりだ。

「しかし、その鞄の中身は・・・いずれ整理しろ」
整理整頓が不得手な彼の恋人に向かって、彼はじろりと冷たい表情を向ける。
もう、いつもの皮肉屋のシャルル・ドゥ・アルディだった。
「君の部屋は相当に雑然としているのだろうなと容易に想像がつく。
そんな場所を訪れる気になれない」
彼はそう言って、マリナを窘めた。部屋を訪ねてくれば良いのに、と言った彼女に対する返報だった。

マリナ・イケダは、彼の名前をフルネームで呼ぶ。
しかし、彼は、君は時間がないのだろう、と言って、彼女の状況を突いた。
確かに・・・今日の彼は不機嫌だった。彼の立腹を宥めることができるのは、マリナ・イケダだけである。茶色の髪の茶色の瞳の小柄な彼の恋人は、表情をくるくると変化させて、シャルルに抗議したが、決して彼が回した腕を振り払おうとしなかった。

シャルルは微笑む。
雪が降っていて、彼と彼女の躯にいくつも落ちては消えて行く中で、彼は諦めないと言った願いを叶えようとしていた。

・・・・・夜は相当に冷え込みそうだった。
朝はもっと冷えるだろう。

しかし、今夜はマリナ・イケダの部屋の暖房の主電源は入ることはなさそうだった。

（FIN）

海にいこう

海へ行こう
BGM　：SEAMO「海へ行こう」

■前編

海を渡ってきたはずなのに、空港に着くなり、彼女はそう言った。
うんざりするほど海を見て空を見て雲を徒渉してきたしたのに、彼女はそう言って嗤ったので、彼はノンと言うことが出来なかった。
これから遂行しなければならないスケジュールがないことが、彼女に自由な発言をさせていた。
短いけれども珍しいオフの期間をどう過ごそうか、と相談したときに。
彼女は言った。
「どうしようかと言って過ごす時間にしよう」と。
それなら、もう、休暇は始まっているね、と言ってマリナは手を叩いて喜んだ。
彼女はすでにどうやって一緒に過ごそうかということで頭がいっぱいのようだった。
「何をしようかと考えるオフなんて、一番贅沢だよね」
マリナがそう言うので、シャルル・ドゥ・アルディは苦笑いを浮かべた。
確かにそうだ。
学生の時でさえ、シャルルには長い休息はなかった。
皆が過ぎ去ってから羨む特権が備わっていたことはなかった。
自由に自分の行きたいところを目指して誰かと行動を共にする。
義務でそうしたことは多々あったが、こうして・・・何も考えずに取り敢えず行ってみようと最初に決めた行動をシャルルは窘めることは出来なかった。
「シャルルがしたいことをすれば良いのよ」
「オレはこういうバカンスを過ごさなかったからね」
「だから、やってみようという気にならないの？」
「挑戦するには、オレの興味が沸く材料がないね」
マリナが鍔の広い麦わら帽子を取り出して、車の窓辺に寄って、そわそわと景色を眺めていたが、シャルルの素っ気ない返答に、とうとう呆れてしまった。
しかし根負けしているわけではなかった。
紫外線カットの窓ガラスは、本来の空の色をマリナに伝えていない。
時差の関係で、まだ・・・朝が早かった。到着が遅かったので、そこから車に乗り換えて、ここ数日の滞在で、最も天候が良い場所に移動することになった。
そのまま航空機を乗り継げば良かったのに・・・マリナは「車で移動したい」と言った。
だから彼は彼女の申し出を最大限尊重し、こうして・・・何時間も車に揺られて不機嫌な顔を押し殺す努力を認めて欲しいものだと内心思っていた。
これが彼女の言う「気儘なバカンス」なのだろうか。
その割には、彼女は不満があったようだった。
空調の効いた車内は静かで・・・シャルルが長い足を組んで、モバイルを小さなラップトップに接続し、なにやら通信をしながら答えていたので、マリナはそこでシャルルに向き直った。
「バカンスだって言うのに、何をしているのよ。
そういう文明の利器と一緒でないと、生活できないってわけでもないでしょう」
「できないよ」
あっさりと彼はそう言ったので、マリナが頬を膨らませた。
彼の無表情や、素っ気ない冷たい言い方には、慣れたつもりでいた。
が、こうして自分ひとりがはしゃいでいると、気分の高揚感の差が気恥ずかしくなってくる。
「これからの滞在先を確保しなくてはいけない。食料も。
適当なホテルがあればそこに滞在するけれど、マリナの希望する海岸に近接する宿泊施設の空き状況を確認するように細かく指定しなければ、後ろを走る秘書が困惑して、ひっきりなしにオレのモバイルフォンに連絡してきても良いのか？
・・・それからセキュリティチェックも。
ここはオレの持っている通信機能がほとんど通じないから、この国のモバイルをわざわざ用意して、こうして接続しなければ情報収集も手配もできない」

本当は、マリナが、シャルルとふたりだけで、何も煩わしいと思わない空間で静かに過ごしたいだけなのだということはわかっていた。
だから運転手がついて、このような時間であるにも関わらず・・・その後部には身の回りを手配する専用の秘書が乗り込む車が併走しているのを、快く思っていないのだ。
彼女は海に行こう、と言ったが、その言葉を実現するためにどれほどの人が動くのかを、身を持って知ったのだ。
けれども、それを顔に出せば、今回のシャルルの気遣いが無になる。
だから彼女は遅鈍な様子を装っているに過ぎない。
しかし、煩わしいと思わないために、煩わしい雑事を済ませなければならない。
それは、彼女もわかっているから・・・ああしてシャルルの分まで引き受けたとでも言うかのように、海への憧憬をひとりずっと語り続けているのだ。
「マリナは何をしたいの？」
静かに、シャルルはマリナに質問した。
終始彼女を独り占めできる時間はほとんど無い。
長い時間をシャルルと過ごすことを、彼女が畏れている節があった。
彼が愛しているのは、あの少年時代の頃に出会ったマリナ・イケダであって、今の・・・大人になった彼女は酷く凡庸であると自分で定めてしまっているようだった。
彼が惰性で彼女の傍に居ると思っている。まったく残酷な人だ。
彼を時折、マリナが『酷い人』と冗談めかして言うが、彼女の方こそ暴戻の限りを尽くしていると言っても過言ではない。
「二人でどこまでも・・・誰も知らないところで過ごすのは今度のオフにしてくれ。準備しなければならないから」
「それでは意味がないでしょ」
彼女の言葉に、シャルルがその時初めて、ふと、顔を上げた。
白金の髪が揺れて、物憂げで上品な瞳がマリナを見つめる。

彼女はそこで言葉を切った。
あまりにも美しすぎる彼女の思い人は、彼女に微笑んだ。
「君の言うように、海にやってきた。間もなく夜明けだから・・・今日はマリナの希望する海水浴だってできるだろうし、海の幸というやつも堪能できるだろうね。
今日は・・・・マリナの希望のとおり、オレが仕事に集中できない程に通信が途切れそうな場所に滞在することになるだろう。・・・それで、マリナ。君は何をしたいの？」
彼は間もなく目的の場所に到着することを察して、マリナにそう言った。
まだ暗い路を走る車内で、彼女は紫外線を浴びるわけでもないのに麦わら帽子を手に取り、砂丘を歩くために沓を履き替えている。
彼は茶色の瞳の茶色の髪のマリナを見つめた。
大人になって・・・彼女と巡り会った。妄二度と離れないと誓った。
それなのに彼女は時折・・こうしてシャルルを困惑させた。
それでも・・それでももう、彼女を手放すことができない。彼女が離れたいと言っても。
自分が、彼女を愛しているのか、それとも、愛にしがみついているのか・・・時折混同しそうになる。

■中編

「まだ海は冷たいね」
「日が昇って気温が上がれば大丈夫だろう」
マリナが歓声を上げた。
沓を脱いで放り出し、彼女は嬌声を上げて、海に飛び込もうとしたが、水着ではないことと、足首まで使った海水がまだ冷たかったので、そこでようやく我に返ったらしかった。そうでなければ、彼女は服を着たまま・・・黒紫の海に飛び込んで行ったことだろう。
泳げないと言うのに、彼女は水や海に憧れる。これはまったく不思議な現象だった。
彼女の過去に・・・何か、影響されるような出来事があったらしいのだが、覚えていないらしい。
彼女の小さな足跡が砂辺に刻印を押していくが、それはすぐに波音とともに、白い波に消去されてしまっていく。まるで・・・彼女が海から上がってきたかのように、彼女は、陸からではなく海から上がってきたかのように見えた。

スカートの裾を僅かに持ち上げて、彼女は膝まで海に浸かった。
夜の海には出てはいけない。
彼女はそう教えられたそうだ。
でも、夜の海は、綺麗だよね、とマリナは笑う。
このエリアまで来れば、宿泊施設のプライベートビーチだから、誰も人はやってこない。知って知らずか、彼女は海岸に到着するなり、夜明けを待たずに海に出てみたいと言い出した。
人が来ない時間の方が良いでしょ？と悪戯を思いついたかのように言ったので、シャルルはノンと言えずに、そのまま黙って荷物を持たずに、そのままマリナの言葉に従うことになった。
特段眠りたいとも思っていなかったので、シャルルはため息を軽くついて、彼女に車から引っ張り出されながら海岸に出た。
潮の香りが・・・理由もないのに懐かしく感じる。

まだ必要でもないのに、麦わら帽子を深く被っているので、肩にかかるほどまでに伸びた茶色の髪が僅かに見えるばかりで表情は見えない。
マリナが叫んだ。
「ここには月も星もある！もうすぐ夜明けだから・・・太陽も空も雲も一緒くただ！」
少女のような、少年のような口調で彼女は感歎していた。
遠浅の海が続くこの浜辺に吹き寄せる潮風が、シャルルの白金の柔らかい髪を絡め取っていく。
すぐにシャワーを浴びなければ不快になりそうなほどの潮を含んだ風であった。
しかし今はどういうわけか、決して冷涼な風とはいわないこの空気の流れが・・彼にとっては心地よかった。
彼女は髪を揺らし、僅かに持ち上げたスカートの裾が躍り上がっている。
「シャルルもどう？気持ちよいよ」
「断る」
彼は無表情にそう言った。
彼女とともに海に入って、甘い恋人気分を味わい、若い世代のころをやり直すという気持ちにはなれなかった。
この僅かな自由を手に入れる為に、彼が何を犠牲しているのかマリナは知っていたし・・・彼女が何を我慢しているのか、シャルルはよく知っていたからだ。
「夜明けの海遊びに興じる女というのは変わり者だと聞いたけれど」
「あら、最初からわかっていたことではないの？」
彼女は笑った。
「大人になって・・・それまでしなかったことをしてみようと思ったの」
「禁止されていることをやってみるとか？」「そう！」
「それは昔から破っていたことだと思うが」
シャルルが反論した。マリナは紀律を護ることもするが破ることも多々あった。
「違うわよ」
彼女が、彼に向き直った。
波の音が彼と彼女の会話を阻んでいたように感じたが・・・こうして無言になると、その音が会話に障りがもたらしているわけではないと気がつく。

「・・・さっき、私が何をしたいのかって、シャルルは質問した」
「それで、回答する気になった？」
彼女が答えないのは、忘れてしまっているのではなく、答えられないからだった。
いつもそうだった。
彼女はいつも明確明瞭であるのに。
物事について答えられないときには、はっきりと答えられないと言うのに・・自分のことについて尋ねられる途端に距離を置いてしまう。
「私は・・・シャルルと一緒に居たい。それだけだよ」
「それなら、家で寛いでも、海にわざわざ来ても、同じということなのかな」
シャルルが自嘲気味に言った。
「そうじゃなくって・・・・」

彼女は途中で言葉を切った。次に、視線を水平線の向こうにやった。
鍔の広い帽子が彼女の横顔を隠してしまっていたので、表情は見えない。
間もなく夜明けが近くなっていることを告げる鳥の声がし始めた。

海の夜明けというのは、あっという間だ。
日没よりももっと短い時間で夜と朝が切り替わる。
シャルルも顔を上げて、明け方が近いことを観測していた。
空が白んで・・・星の光が淡く小さくなっていく。
月も白くなっていき、輪郭を残して、中央部分が薄くなっていく。
そこから姿を消すのではなく、空が明るくなるから見えなくなっていくだけなのに・・・なぜか、それが自分のようだとさえ思う。
太陽のような人の光がなければ、自分は輝くことができない。
でも、傍に居たら、自分の輝きは太陽のもたらす強烈な光芒に阻まれて・・・見えなくなってしまう。
存在自体はそこにあるのに。
いつも変わらずに同じ光を放ち続けているのに。

■後編

シャルルがマリナを伴って、どこかに行こう、とあまり提案しないのは理由がある。
理由のひとつには、仕事が多忙を極めていることもあるが、彼女とはもう少しだけ、静かに穏やかに過ごす時間を優先して持ちたかったからだ。
彼の母と彼がアルディ邸で過ごした静かな時間が、シャルルの中では大きく影響している、と自分自身を分析している。何をするでもなく、ただ一緒に居る。それだけで良い。
彼の傍を通り過ぎていった人々は、彼と特別な時間を持つことを切望し渇望し、そして彼に要求した。自分の為だけに確保された時間や、特別に用意された場所でシャルルと過ごすことを彼に求める。
自分の安全を顧みずにあの手摺りから飛び降りた熱情を・・・シャルルは再び彼女たちに感じることができなかった。
それなのに、今はどうだろう。
シャルルは念願の・・・マリナ・イケダとともに時間を過ごすようになった。
これでいつ命が絶えても良いと思うのだろうと予測していたのに、結果は逆だった。
彼は死にたくない、と思うようになった。でも命が惜しいというのとはまた違う。
彼女の為になら、いつでも死ねる。その覚悟はある。
そして自分の誇りを護るためにも同様の覚悟があり、それが挫けたということではない。
この相反する・・・パラドクスに彼はまだ迷っていた。
同じように、青春の輝きの時代に得られなかった、彼女との穏やかで静かな時間を填充したいという彼の希望は、マリナには重荷であるだけで、それ以上のものには変化しないということもよくわかっていた。
わかっている。彼女は自分の全部なのに。彼女にとっては、彼は一部分でしかない。
どんなに、彼女が「貴方は私のすべてよ」と言い切ったとしても。それは本当に彼女の全部なのではない。

水平線の一点が、やがて赤みを帯びてきた。間もなく・・・間もなく夜が明ける。
朝日を見たら、車に戻るとマリナは約束していた。
これまで乾燥した密閉された航空機と車内に居たせいか、彼女は波端と砂浜の境界線に沿って、往来を繰り返していた。海水の飛沫が服にかかって、水玉の濃い色に染め上げていくことも気にしていない。彼女は泳げないはずなのに、それでも水に憧れていた。
手が届かないものを焦がれる。手に入らないから焦がれる。
・・・・彼女もパラドクスを持ち合わせているのだろうか。

「シャルル！」
ぼんやりと考えに耽っていたシャルルに、マリナが声をかけた。
「マリナ、あまり大きな声だと・・・人が来るぞ」
彼はそう言って、彼女を見遣った。
アルディ邸に居る彼女とまた少し違った、少女のような幼い動作でもって、波と戯れている。波の音楽に合わせてダンスをしているようだと思った。無秩序に踊っているようで、彼女はシャルルから遠く離れては行かない。
空の星と月の僅かな光を舞台照明に、波を音楽に、砂浜を踊り場にして彼女は海と遊休する。穏やかな波は引き潮のようで、波の勢いは静かだった。白く泡立つ波の縁取りを愛でる彼女を眩しそうに見た。
まだ日が照りつけているわけでもないのに、彼女が眩しかった。
やがて間もなく現れる太陽光の光を影響して、深紫の海は一瞬だけ暁光の緋を含んで、そして蒼くなっていくのだろう。
「シャルルへの答え。・・・・いつか、シャルルが私に『月まで行こう』と言った」
「ああ、今でも・・・それは変わらないよ。すぐにでも、行きたいくらいだ。君を連れて・・」
彼は微笑んだ。波の音が彼の最後の言葉を消した。
あのときの言葉を大事に秘めているのは、彼だけではなかった。
彼女も、覚えていた。

「私はシャルルと月には行かない」
マリナのその言葉に、シャルルは青灰色の瞳を一瞬大きく見開いた。
呼吸が止まる。
彼女の言葉が一瞬、耳に入らなかった。
いや、決して彼女から聞くことはないと思っていた言葉だったから、彼の中でその言葉の意味についてから考えなければならなかった。
彼の次の言葉は掠れていた。
少し距離があって良かった。
手が震えている。
彼はシャルル・ドゥ・アルディなのに。
この事態に・・・うまく対応できていなかった。
「そう・・・」
彼女は逆光で・・麦わら帽子が彼女の顔を半分隠していたので、どんな表情でこの言葉を告げたのか推測するには情報が足りなかった。
「月だけには行かない」
「説明が足りない。・・・・どういうことだ？」
彼は言った。ほんの一瞬だけの思考停止かと思っていたが、しばらく黙っていたらしい。
彼女の背が、赤く染まり始めていた。
朝焼けの光が、彼女の背後の水平線から顔を覗かせて一日の始まりを告げる支度をしていた。
彼は砂浜からマリナに一歩、近寄った。湿った砂を跨ぐ。
彼女は、突然やってきた大きな波に嬌声を上げて一瞬、シャルルから視線を反らせた。
「マリナ・・・どういうことだ。オレは認めないぞ」
シャルルの呼吸が今度は荒くなっていく。

彼女が申し出たこの海への道のりは、別れの路だったのかと考えるだけで・・・足下が砂浜に沈んでいくような錯覚を覚える。
もう、二度とその手を離すことはしない。
彼女が誰を愛していても、構わない。
その心に誰を住まわせていても構わない。
惨めな男だと嗤われても良いと思った。
他の誰にもそんな風にシャルルを呼ばせることは許さないが、彼女ならその資格がある。

彼女は誰と在っても幸せになれる。
誰もを幸せにすることが出来る。
しかし、この暗い路を照らして光にもなり陰にもなり、彼の狂気を一緒に愛してくれる人は、彼女しかいないと定めてしまった。
そう・・・彼女の幸せや笑顔を願っているのに・・・結局は自分の平穏を貪りたいだけなのだ。
だからこれほどまでに心が揺り動かされるのだ。
別れを切り出したり切り出されたりする経験は初回ではない。
何度もある。
けれども・・・けれども、これほどまでに揺さぶられることはなかった。

「マリナ・・・」
彼女は空を見上げた。
朝焼け独特の、薄い青灰色の空が広がっていた。
どこか遠くで鳥と蟲が鳴き始めていた。

「ここには全部がある。
月も、星も、太陽も、空も雲も。風も魚も水も。
生き物も死んで海に流されるものもある。
だから。
シャルルが手に出来る全部を、私にちょうだい。
・・・シャルルがシャルルと私のことだけを考える時間を私に、ちょうだい」
彼女はそう言って言葉を切った。
ここには、たくさんのものがあるから、どれから手をつければ良いのか、困ってしまうわね、と笑った。

「だから、月に行こう、だけではなく。
・・・・海に行こう、と。
本当はシャルルが言わなくてはいけないのよ。
同じように、星に行こう、と。風に乗ろう、と。
シャルルは月だけではなくて、私をたくさんの場所に連れて行かなければいけないのよ」口元が僅かに見えて、彼女が微笑んでいるのだとわかった。
「太陽が西から昇っても・・・間違えないのでしょう？」
彼女は言っているのだ。
彼の選択には間違いがない。
彼がマリナを選んだことは誤りでもなく、彼女を苦しめているのでもなく・・・ただ、還るべくして還ったのだ。

あの広い館で静かに過ごすだけではない。
彼女はかごの鳥ではない。
風のような人だということを忘れていた。

・・・・彼は彼女を月に連れて行くと誓った。
世界を巡ろうと言った。
彼女は本当にそうしたいわけではないのはわかっていた。しかし彼は約束した。
同時に、彼は自分が手に出来るすべてを、彼女に捧げると誓った。
だから、彼女は彼を・・万物が存在する海に行こうと言ったのだろうと思った。

ここには、彼女が言うように、自然のすべての根源がある。
大人になって・・・何をするのか迷うほどに、何から手を伸ばせばよいのか迷うほどに、彼が手に入れられるものはたくさんある。
たくさんあるから・・・たくさんはいらない、と、彼女が言っているように思えた。

けれども・・・彼が彼女の手を離さないと思うように、彼女が彼を離したくないと思っていることや、彼女にも彼女が手に入れられるものをシャルルに渡したいと思っているのだという可能性について・・・少しばかり失念していた。
彼は高慢で気高いが、愛に関してだけはいつも根拠を求めてばかり居た。
根拠ない傲慢な愛に溺れることができなかった。

マリナは言った。
「私もね、ささやかだけど、自分が手にできるものをあげたいと思う人がいるの。
でも、物はいらないって言われてしまうから。
・・・オフの時間を一緒に過ごしたいし、何をしようか迷うというような贅沢な迷いや・・・こんな風に我が侭を伝えてみたり・・・私の中のこれまで私しか入れなかった場所を、あげようと思う。
全部。全部、シャルルにあげる。だから・・・」
「マリナ」
シャルルは彼女の言葉を継いだ。

彼だけが深く愛しすぎていると思った。
だから、苦しかった。今でも苦しい。
自分をわかって欲しいとは思わない。
彼は彼自身にしかわからない。
ただ・・・ただ、こういう愛し方しかできない男なのだとマリナが肯定する限り、彼は昔約束したままに、彼女を伴って・・・どこまでも行き詰めてみたいと思う気持ちに変更はない。

「オレは間違わないし、約束を違えるつもりもないよ。どこへでも連れて行ってやろう。
たとえ・・・たとえ、太陽が西から昇っても・・・・太陽が天高く炎を出しても、ね」
彼はそう言うと、マリナに声をかけなおした。

「マリナ。後ろを見ろ。今すぐに」
え？と彼女が振り返った時。一瞬だけ、海風が強く吹いた。陸風と海風が逆転したのだ。
気温差から生じる現象だが・・・彼女が驚いたのは、マリナの大きな帽子をその風が吹き上げて、彼女の幼い顔が覗いたことに対してではなかった。
「・・・・太陽が！」
朝焼けの太陽が、空高く・・・垂直に赤い光が伸びていた。
炎の柱のように見えるそれは、天高く・・・雲を突き抜けて長く水辺線から垂直に伸びていた。
「シャルル・・・太陽が！」
「サンピラー現象だ」
彼はそう言って笑った。
振り返ると、彼の白い頬も白金の髪も・・赤く染まっていた。まるで・・・暁の天使のようだった。吸い込まれていきそうなほどに鮮やかで、艶やかで・・・そしてその瞳がマリナに注がれていた。
彼女は背後の水辺線から昇る太陽柱の現象と、浜辺のシャルルの美しい佇まいを交互に見遣った。どちらも・・・ため息がでるほど、美しい。
「海岸で、朝焼けで見られるのは珍しいな。どこでも条件が整えば見られる現象だ」
「そうなの？私は・・・初めて見た」
「だろうね。君がこれをオレに見せるために、海に行こうと言ったとは思えない」
彼の辛辣な言葉に、マリナが反論しようとして唇を開いた時だった。
「マリナ・・・こちらにおいで」
彼は手を差しのばした。
「これから気温が高くなるとは言え・・・・体温が海水より低くならない限り、君の体温は海に奪われ続ける。せっかくの余暇を夏風邪で台無しにしたいのなら、休憩を取らずにそのままで遊泳してきてもらって構わないぞ」
「私、泳げないんだけど」
「だったら海に行こうと言うな」
シャルルは冷たくそう言って横を向いたが、それは決して激憤の表情ではなかった。
「何よ、何が『オレは認めないぞ』なのよ」
彼女がそう言ったので、シャルルは少し厭な顔をした。
先ほどの・・・彼女の言葉を的確に捉えなかったために発した自分の言葉を、マリナが繰り返したからだ。
彼女は足を大きく振り上げながら、海から上がってきた。
帽子がずれて、スカートをたくし上げたその格好は、とても・・レディとかマドモアゼルとか言う称号をつけることが躊躇われる程の蛮行だった。
それでも、赤い暁光柱に心が引かれるようで、やがてその柱が細くなり、消えてなくなりそうになるまでは、何度か立ち止まってはじっと見入っていた。
・・いつもは幼い顔立ち故にあどけなく見えるのだが、そのときの横顔だけはひどく大人びていて、彼女が何かを考えており、声をかけてはいけないという厳然とした雰囲気を出していたので、シャルルは黙ってその様子を見つめていた。

「さあね」
彼は滅多にこういう答えを出さないのに。
今回はその答えを曖昧にした。
マリナは少し頬を膨らませたが、あのサンピラー現象への興味が尽きていないらしく、すぐにその話を切り出した。

「どきどきしたわ。・・・シャルルは、ここがこういう現象を観測できる場所だって知っていたの？」
「オレが何を調べものをしていたと思っていたの？」
マリナがようやくシャルルの傍まで距離を詰めたとき、彼女の質問にシャルルは呆れた酔うに言った。
「呆れた」
マリナがはしゃいで海で過ごす休暇についてあれこれ話しかけていたのに、シャルルは一切を無視して、ただモバイルとラップトップを操作して居るだけだった。
一体、いつの間に・・・とマリナが呆然としていると、彼はくすりと笑った。
呆れたのはオレの方だよ、とシャルルが言った。
「限られた時間を有意義に過ごさないとね。マリナのように・・・さて、これからどうしようと考える時間は、君とオレとでは違うから」
ああ、ここも紫外線がきついな、と言って、シャルルは朝焼けの炎で夜の眠りから起こされたかのように満ちてきた潮に目を配りながら言った。
「行こう、マリナ。潮風にあたったまま、朝食を食べるなどとは言わないでくれよ。
ここのホテルのテーブルマナーは煩いので有名だぞ。・・・楽しみだな。箸の使用は一切禁止だから・・・・朝から魚介類を器用にナイフとフォークでさばいてくれよ。もちろん、手づかみしようものなら、その瞬間に皿を下げられるから、そのつもりで」
「何よ、それ。マナー研修に来ているみたいじゃないの」
マリナが目を丸くしてシャルルに抗議したが、彼は澄ました顔で答えた。
整った雄偉な表情が面白そうに彼女を見下ろしている。
このビーチの向こうにそびえ立つ豪奢なホテルでの滞在になりそうだった。
それならアルディ邸でも同じサービスが受けられるのに。
そう思ったが、彼は心が浮き立つのを感じていた。

夏の海が、そういう気持ちにさせるのだろうか。
久しぶりのマリナとの休暇だからだろうか。
目的のない余暇を過ごすことをマリナが提案して・・・そして彼に思いもかけない言葉を捧げた事に対してだろうか。
それとも・・・
それとも・・・。

ああ、マリナ。
君の思惑通りになってしまったよ。
何から手をつけようか。何から考えようか。
そう思う。
君とどう過ごそうか。君の笑顔をどの角度から見ようか。
・・・・・・彼は微笑んだ。
彼はどういうわけか沸き立つ高揚感を抑えることができなかった。

・・・シャルル・ドゥ・アルディの欲しいものは、ひとつだけなのだと。
いつになったら、彼のファム・ファタルは気がつくのだろうか。

「マリナ、行くぞ。オレは砂浜で何時間も過ごすほど・・・暇じゃないんでね」
彼が背中を向けると、マリナが慌てて彼の名前を呼びながら・・・彼の脇に立った。

砂浜で足が取られる、と言って彼の腕にしがみついた。
・・・・シャルルは反対側に持った、彼女の小さな沓を彼女に渡すのはもう少し待つことにした。
今しばし、このまま・・・腕を組んで波の白と海の青と白い雲に囲まれて、二人だけの足跡を刻みながら歩いてみたかった。

マリナは海に行こう、と言った。
次は・・どこに行こうと言うのだろうか。
彼女が行きたい場所に連れて行ってやろう。月でも。星でも。
海の向こうから、こうして違う海に来た。
マリナとなら・・・どこにでも行けるような気がした。

さて。この後はどうして過ごそうか。

彼と彼女の夏が始まった。

（FIN）

海にいこう　2012　muir　前編

●01

また今年も海の季節がやって来た、とマリナが笑ったので、シャルル・ドゥ・アルディはその笑顔に向かって冷笑する。
「海に行くことと、季節は関係ないと思うが」
彼がそう言うと、マリナ・イケダが頬を膨らませてシャルルを軽く睨んだが、彼はまったく動じなかった。
彼女の昂揚感を台無しにするために、そのような言葉をかけたのではなく、ただ事実を述べたまでだから。

実際、その言葉の通りであった。
マリナが希望すれば、彼女は世界中のどんな季節にでも、そしてどんな海にでも行くことが出来る。
シャルルはそれを手配することもできるし、日程調整さえできれば、彼女を希望の場所まで連れて行くこともできる。
かつて、彼女に捧げたとおり、世界を巡って月まで行くことも、やろうと思えばできる。
しかし、彼女は必要ないと言って笑うだけであった。
「今のままで良い」
今のままが良い、という言い間違いを正そうとしたが、彼はそれをしないで放置している。
マリナは自由気儘な今の状況を愉しんでいるというより、彼の負担になるようなことは金輪際言ったり望んだりしないと決めているかのようであった。
かつて、彼女はシャルルに無理を言ったことがあった。
それがどれほど周囲の人間も含めて深く愁いに満ちた結果を生み出したのか、今でも忘れていないからだ。
彼がそれほど気にすることではないと言えば言うほど、彼女はますますそこから抜け出さなくなってしまっていく。
マリナ・イケダは実に不思議な人物で、人との距離を簡単に縮めることのできる才を持っているが、自分の中にある愁いや惑いについては共有することを望まない。
それは今でも変化することはなく、大人になった今では、更に加えてその気質は強くなっているような印象を受けた。
だからこそ、シャルルは魅了され続けるのであるが、それでも彼女は彼に対して、どこか線引きをしているように思えた。

親しき仲にも・・・というやつか。
苦笑いする彼の傍で、彼女がいつもの通り笑っていることが最上の幸福であり、それ以上を望むのはまだ時期が早いと考え直す。
彼が考えを改めることなどは滅多にないことである。決めた結論は覆さないが、実行時期を延期する

ということを受け入れるだけでも相当に屈辱的な事ではあったが、マリナに関することになると、シャルルはいつも彼女を優先にしてしまう。
それが、マリナには気に入らないことなのだと彼女は言うのだ。
人は、誰かから謂れのない恩恵を受けると、無条件で何かしてやりたくなり、何か返したいという心情を持つ。それが交換条件でないことがわかるまでは疑いを持つ。
けれども、彼女は、そういう駆け引きの時間が他者より極端に短いか、持ち合わせていないかのどちらかであった。
それがどれほど価値のあることなのか、彼女は自分で気がついてはいない。
彼は、少年の頃の彼女への恋心をそのまま継続しているのではなく、同じ人を改めて愛するようになった。
大人になった彼女と接するうちに驚き呆れたり憤慨したり涙を流すことができる自分が残っていることに気がついたのだ。失ってしまったのではなく、自分の中に眠っているだけのそれらは、決して損なわれることもなく、ただ、そう・・・冬眠していただけであったのだ。
彼女を倖せにしてやりたいと思った少年時代を経て、彼は、彼女と倖せになりたい、と思うようになった。倖せにしてやりたいと思う。倖せになって欲しいのではなく、自分が倖せになることがマリナの倖せなのだと聞いて、彼は、この人を好きになって良かったと強く感じるから。
そこではじめて、自分も倖せになりたいという気持ちを肯定することができるようになった。
安らぎたいとか己を知りたいとかいうことではなく、ただ、倖せでありたいし、それが継続するために払う努力はなんら苦痛ではなかった。
そんな彼に、マリナはひとつだけ、毎年この時期になるとオフを取って欲しいと言う。単年だけのことかと思っていたが、それが幾回か続くと、さすがに何も聞かないシャルルでも理由を尋ねる気になった。
「海に、何か思い入れがあるのか」
「海は好きよ」
彼女の答えはそれだけであった。そのうち、海に行くことが大きな目的なのではなく、定期的にまとまったオフをシャルルが予定することの方に期待しているのだと気がついた。彼のオフというのはないに等しいし、休暇中であったとしても、彼は切り替えてすべての連絡手段を断ち切って彼女だけを見つめることもしない。
・・・恋や愛だけに溺れることができないのは、一族の多情な恋愛模様を苦々しく思っている名残なのだろうか。
それとも、欠落しているものの一つなのだろうか。失うのではなく、元々、なかったものだからなのだろうか。
そんな疑念を持ち続けるシャルルの傍らで海に行って何をするわけでもなく、ただ、波端で戯れるだけの彼女を見つめ続けて、だいぶ経過する。

「海は好きよ。懐かしいから」
泳ぎが不得手の割には、こういう海面の揺らぎを見るのは好きだと言う。
パリに滞在する時はいつも彼女は出歩いて河沿いを歩く。

しかし、セーヌの河では満足できないのだろう。
彼女は海の国の生まれであったので、海が恋しいと思うのも、文化なのかもしれない。

●02

「海に行くという名目でなくても、湖でも杜でも構わないが」
彼がそう言うと、彼女は首を横に振るのだ。
「海が良い」
今年はどこの海に行こう、と悩むのが楽しいと言う。どこでも好きなところに行けるはずであるのに、彼女は海、と限定し、季節を決めてシャルルと過ごす日程を計画する。しかし、その計画は無謀なものばかりで実現しないことも多かったが、それでも、それも計画のうちで楽しいと言う。
「何度か質問されたわよ、シャルルは繰り返さないのでしょう？」
苦笑交じりで彼女にそう言われると、シャルルは横を向いて黙り込む。
確かに、彼女は彼を稚拙にさせる。

けれども。
海に行くことが反対なのではなく、彼女が行きたいと思っているのか疑わしいから、彼は確認せざるを得ないのだ。
念願の海に辿りつくと、燥ぐ姿を見せるのではなく、彼女は少し寂しそうな顔をする瞬間がある。
この景色を見せたい誰かがいるのだろうと思うが、シャルルはそれを聞いたことがなかった。

彼が傍に居るというのに、誰のことを考えているのか、と彼女の心までを縛り付ける気にはならない。自由であるからこそ、マリナ・イケダであり自分の心は自分だけのものだと言い切って彼を拒絶したときの彼女の言葉は、彼の中で今でも生きているから。
「今回の海は、どこにしようか」
彼女の聞く「どこか」というのは、決まって日本である。
彼が親日家であることは有名な話であるが、それは理由があってのことだ。足繁く日本に行くのは学会関係で発表日時が早い日本での研究発表を必要とするからで、今では、システムの充実化によって遠いパリからでも何ら問題のない状況であった。
それに親日であることにも程度と限度がある。
彼の貴重なオフの度に、恋人の祖国の海だけに限定して観光するほど、彼は熱狂的な日本好きということではなかった。
実家に帰るわけでもなさそうだし、かといって彼女は日本に拘っているわけでもなさそうな言動を見せるので、海に限って懐かしいと感じ毎年欠かさずに海に行こうと言い出す真意が知りたいのだ、と言っているだけなのだが。
「どこにでも。日本であることは変わらない」

「ああ、シャルル。それは無責任過ぎるわよ」
彼に向かってそんな注意をすることができる人物は数少ない。
高慢かつ不遜でその素晴らしい頭脳を駆使して相手を言い負かす人物が、彼よりずっと小柄な少女のような人に叱責されている。
周囲の者が見れば、大変に驚く場面であった。
「無責任？それなら、責任を取らせるのか？」
しまった、とマリナが顔を顰めた。
彼女は、彼が責任を取るという事を言い出すことを何より苦手としている。つまり、シャルルが彼女に結婚しようと話を持ち込んでも、彼女はウイとは言わない。
いつかね、と言って強情に拒み続けている。
シャルルもいつまでもこの状況を続けているつもりはなかった。
事実婚が一般的であるが、それは一般的ではないアルディ家の後継者には適用できない事柄である。結婚しなくては様々な権利を得ることができないというわけではないので、あまり執拗に迫ることもしなかったが、こうしてオフをともに過ごし、決まった時期に彼女の生国に行くということに対して、彼は意味を持たせたかった。

それを逸らかすかのように、マリナが話の筋を変更させる。
「それに、いつもより少し長くオフが取れるのであれば・・・甲府にも行けるよね」
「断る」
彼はぴしゃりと言った。
シャルルはオフの後、マリナは日本に残り彼はひとりで帰国する。
それさえ気に入らないというのに、彼女は毎年ある時期になると甲府を訪れる。
彼も一緒に体験した、あの惨劇のあった土地であるのに、そこに居る友人を訪ねるために彼女は日本に残るのだ。
「ダイも来るのに？」
「WEBで話しているから必要ない」
マリナはくすくすと声を漏らして笑った。シャルルが日本に住む少年のことを大事に思っていることを知っているからだ。その少年を見ていると・・・太陽のようなあの人のことを思い出すのだろうか。彼は年齢の離れた友人のことをかなり、気にかけていた。
「君の希望のところに行くのは同意する。けれども、海に限定することもないし、日本に行く理由にすることもない。オレはそう言っているだけだ」

彼はゆっくりと、長い脚を組み直した。
ここはアルディ邸の、彼の居室であった。
分厚い冊子が積み上げられており、彼はそれらを全て読んだようである。
マリナの話を聞きながら、彼は一冊、本を読み終えてしまう。青灰色の瞳が勢いよく左右上下に動き、あっという間に読み込んでいくが、彼の必要な部分は見当たらなかったようだった。今は電子化された媒体による簡易な検索も珍しくないが、彼が調べている内容というのは、そういう時代の恩恵を

受けなかった書籍の中に答えがあるらしかった。
そしてシャルルが次の本を取り出そうとして腕を伸ばしたところ、マリナに持っていた本を取り上げられ、しかも目の前に仁王立ちされて立ちはだかるマリナの相手をすることになってしまったのだ。
「話を聞いて頂戴」
「聞いているが」
彼が何かをしながら彼女の話を聞くことが我慢できないらしい。
「人の話は、『ついで』にしないで」
彼女がそう言うと、シャルルは白金の髪を自分の神経質そうな指先で掻き上げた。
「君との会話の『ついで』に読書をしていただけだが」
「シャルル」
彼女が険しい目付きになったので、シャルルは肩を竦める。これくらいのことでは、ふたりの間に波風は発生しない。
ただ、シャルルがそれほど素っ気ない態度をとり続けるのは、彼の問いに彼女が逸らかすことを続けていることが要因だと彼女もわかっているはずであった。
何しろ、後ろめたさを憤慨にすり替えているのはマリナの方なのだから。

●03

「どこにでも好きなところを指定すれば良い」
シャルルが素っ気なくそう言ったので、マリナは大きく溜息を漏らした。
「せっかくの休暇なのに有意義に過ごそうと思わないの」
「せっかくの休暇だから無意義であろうと思うのだが」
そこで彼女がそれは単なる言いがかりだと言おうものなら、彼は座っていたソファから立ち上がって早々に退散するつもりであった。誰かと一緒にいる時間は苦痛そのものでしかないと信じて生きてきたが、彼女はその垣根を易々と越えてこちらに近寄る。しかも、かつて、彼女のことをファム・ファタルと呼んで唯一の人として定めたシャルルは、今ふたたび・・・彼女と生涯を過ごすという期待を持ってしまっている。それが叶わないことを苦悶した日々を越えて、これが・・・もう二度と見ることのない夢であるのかもしれないとさえ思う瞬間がある。
彼は感じないのではなく、感じないようにして生きているだけなのだと、マリナは知っているから。だから、彼は隠すことはしない。自分の何かを覆すほどの大きな力の源になるマリナ・イケダという人物の前では、彼は取り繕うことはせず、いつもの通りに振る舞うだけであった。しかし、もう、彼女の居ない日々は考えられない。いや、考えていない。
それは、離れて暮らすことを指し示しているのではない。
彼女を二度と、愛してはいけないのだと思う日々を迎えるつもりはないという意味であった。

これからも彼女に対して愛を捧げることになるが、誰に憚ることもなく遠慮することもなくマリナを愛することが最上かというとそうではないのだろうと考えている。
他者より劣って居るとは考えていないが、他者も彼と同じ様にマリナに愛を感じていることもあり、愛という名前でありながら、表現の仕方も形態も各々違うからだ。
引け目ではなかったが、彼女の心をシャルルが独り占めすることはできないのだから。
だから、彼は一生煩悶し続けるのだろう。
でも、その苦しみも一緒に呑み込んで、彼の晄も闇も受け入れるマリナの温度を感じて、そこでようやく彼は生きている実感を得る。
「海は良いわよ」
「潮風と紫外線をわざわざ浴びに行く理由を教えて欲しいものだな」
彼の辛辣な物言いに、マリナは肩を上げて抗議した。
「シャルルは気が進まないの？」
彼女の顔が見る間に萎れていく花のように翳りを浮かばせ始める。喜怒哀楽が激しいのは美徳でもないが、彼女の場合には激しすぎるのではないのかと忠告したところ、マリナに嫌な顔をされてしまったのはつい最近の話であった。
「日本の海に行くことで、何が変わるのか、オレを納得させられたらいつでも行くよ」
彼女が転居の多い生活を過ごしていたことは知っている。居所について愛着を持つほど長く居た場所がそれほど多くはないことも。だから、彼女が場所より人に対して強く固執するのはそのためなのだろうと推測している。
マリナはますます困った顔をした。
「理由が必要？」
「説明が必要」
彼の言葉には飾りがないが、マリナの同行に納得しなければ今回のオフはどこにも行かないという宣言に聞こえる。
今回に限って、シャルルがなぜ、そのようなことを言うのか、マリナには心当たりがあるようであった。だからいつも彼女なりの説明を理路整然としていないまでもシャルルに披露するのに、どこか躊躇いを感じさせる態度であった。それがシャルルが不機嫌な理由であった。彼も、複雑な理由でないことでも憤ることがあるのだ。彼女はそれをわかっていない。

彼女が海のスケッチを幾枚か描いている事も知っていた。拙い絵だからといって、それを彼に見せないことも。時折、彼女の指先から独特な顔料の匂いが立ち上ることがあったから。しかし、彼は黙っていた。彼女が絵を描いていることを秘匿しているのであれば何も聞くことはない。元々、絵を描く人であるし、自分の絵を誰かに見せたいという欲求が出てくることは上達に繋がる。既に彼女はアマチュアではないから、そのことについてシャルルが助言したり何か後ろ楯になってやることもなかった。それだけは譲れない彼女の聖域であるから、シャルルへの相談なしに彼が踏み込む領域ではなかった。
「ええと・・・」
マリナが人差し指で自分の頬を掻いた。

彼女がうまく物事が運ばないときに見せる仕草であった。
「私、海にはシャルルと行きたいの」
「マリナ」
目の前に立っている人は、大変に小柄で、座っているシャルルとの目線がそれほど変わらない高さに、戸惑った茶色の瞳があった。
「うまく説明しろとは言っていない」そう言うと、マリナは腕をおろして、軽く首を傾げる。彼女は愚かではないが、他者の心には敏感なのに自分の心にはそうでない時があった。これは、彼女が常に見知らぬ者たちの中に居ながらうまくやっていかなければいけないと思うからこその現象である。本人は、そういう環境に対してあまり苦痛を感じていないようであったが、幼少の頃には周囲に順応する力が大きく働くので、その時に疑問は感じなかったかもしれないが、それはこうして大人になった今になって、彼女が自分自身を見つめるきっかけとなって滲み出てくることがあるのだ。
なぜ、海を描きたがるのか理由があるからなのだ。それを彼女は薄々気がついて居るのだが、シャルルに明かそうとしない。
「マリナ。言う事が優先される場合には、その内容を整理するのは後からでも良い」
シャルルは軽く溜息をついて、彼女の手首に触れた。こうして傍近くに居るようになって年月を経過しているのに、彼女に触れる時には彼は壊れ物を扱うようにする。筋力の差がありすぎるからというのも理由であるが、彼女の腕や指先を痛めては絵を描けなくなるかもしれないという懸念が彼に更に慎重にさせる。
彼の母も、絵を描く人だった。最期にはもう、それすらできなかったけれども。
茶色の髪が彼女の肩の上で踊っていた。
東洋人を妻に迎えることには解決しなければならない問題が山積している。彼女があまりいい顔をしないのも、承知している。けれども、彼は、昔の約束を果たすつもりであった。彼女が海を見たいのであれば、世界中の海を見せてやるつもりだった。世界を巡って月まで行こう、と言ったあの言葉は嘘ではなかった。
誰かをこれほど深く激しく愛したことはなかった。そして、再び同じ人を好きになるということもなかった。
彼は、もう一度、恋をして愛をして・・・昔の彼女ではない部分のマリナも愛しているのだと伝える術を持っていなかった。彼女が今でも憂えているのも、シャルルの絵を描こうとしないのも、そのためであった。
それでも、一緒に居る。お互いがお互いを必要とし、年月を重ねて行くことに同意しているからだ。
そのたったひとりが、海に行きたいと言っている。
マリナ・イケダは言った。茶色の瞳がめまぐるしく動いている。回想しているから故の瞳の動きであった。
「海には、ひとりで行ってはいけないと言われた。だから、誰かと行こうと約束しても、その約束が果たされることはないことの方が多かった」
彼女が水が苦手なのは幼少時の体験が影響しているらしかったが、海に拘る原因というのも幼い時の流転の経験からなのか、と思うと、シャルルは無言で彼女の両手を引き、マリナの顔を覗き込んだ。青灰色の瞳が茶色の瞳を見つめるが、彼女の瞳に映り込んだ自分の姿は、どこか寂しそうな顔をして

いた。

●04

シャルルは黙って彼女の話を聞いていた。
マリナは自分のことをあまり多くは話さない。彼女が無口であるということではないのだが、昔のことを思い出したくないというよりかはむしろ、昔のことを現在のことと重ねることに対して思うところがあるようであった。
「マリナは、ひとりで海に行ったことはないのか」
その問いに、彼女は首を横に振った。
「ある」
「・・・どうだった？」
彼の掌が、彼女の手の甲を包んだ。もう、この温もりを失いたくないと思っている。
彼女は彼のファム・ファタルだ。運命の人という意味であるが、それは今も変わらない。
彼の世界を変えた人である。
そして、大人になって再会し、今は一緒に居るが、彼の中で変化したことがある。
彼女に愛されたいと願うようになったのだ。
彼は誇り高く、誰かに依存したり、何かを願うことは卑しいことであると考えている。
しかし、彼の永遠の人が・・・何かを悩んでいたり憂えていたりするのであれば、それは気になるところであり、気にならなければこうして一緒に居たりしない。
彼女はシャルルの問いに、少し躊躇った。
上手に答えようとしなくても良い、と言っているのにもかかわらず、彼女は喉元でつかえている言葉をうまく出せないようであった。
彼女のことは掛け値無しに大事な存在だとは思うが、こうして距離を置かれることを見せつけられるとどうにも苛立たしくなる。
しかし、シャルルは辛抱強く待った。
彼女の為に待つのはあまり苦にならない。どういうわけだろう。彼はシャルル・ドゥ・アルディであるのに。彼が導き出してやることはできないのだ。それはどんな問題よりも法則の証明よりも困難であるかのように見えるが、解決は至って簡単で呆気ないものであるに違いないという確信があった。
「海は、ひとりで行くと哀しくなる。みんなで行こうと思うと切なくなる。・・想い出にするにはちょっと広すぎるよね」
彼女はそう言った後、笑った。
「でも、シャルルと行くと、また行きたいなって・・・海を見ることが出来て、良かったなと思うの。不思議よね」
彼女が海の漣に眼を細めたり、夕暮れが沈む様に感嘆したりするのは、海が懐かしいからではなかったのかと思うと、シャルル・ドゥ・アルディはまだ黙り込んで少し考えこむように青灰色の瞳を彼女

に向けた。

彼女が、どこか自分自身に言い聞かせているような言葉でもって、シャルルに海への誘いを繰り返し囁く。
なぜ、彼女がそんなことを言うのか、彼女のことについて考察しないままになっていた部分について思いを馳せる。
彼女は、永遠というものを口にして良いのか憂悶しており、それはまだ解決されていないし、彼女の中で整理できていないものなのだと思った。
かつて、恋を誓った相手はシャルルだけではなかったはずだ。
シャルルはそれを知っている。そのことについては何も言うつもりはない。
人は恋に堕ちると・・・それが最初で最後になると思い込む。彼は最初で最後にしただけであり、自然に「成立する」ものではないのだと悟るものだけが、永遠という言葉の意味を理解するのだろう。
そして、恋をしているその時には、永遠にそれは続くと思うものだ。けれども、それは有限であり、久遠の過去も未来も含むかというとそうではないことを後に知るのだ。
「マリナ。それは全てではないな」
彼は彼女の茶色の髪の端をそっと握って、それから指先で弄び始めた。軽く引かれた髪が、シャルルの目の前で跳っている。
細く長い指先が、神経質そのものといった動きで彼女に触れる。触れている場所がなければ不安であるかのような、拙い労りの仕草に、彼女は少しだけ微笑んだ。
「シャルルに隠し事はしていないわよ」
「どうかな」
彼が微笑んだ。
いつもの、皮肉気な微笑みではなく、艶やかで端麗で若々しく、彼の年齢相応の綻びであった。くすり、と声を漏らして笑う。こんな風に、静かに、穏やかに、彼女のことを見上げながら微笑む日が来るとは考えていなかった。それこど、永遠にやって来ないと思っていた。
人はひとつ願いが叶うと、次の願いへ情熱が移ってしまう。
けれども、シャルル・ドゥ・アルディはそのひとつだけの願いが継続することを願い続けている。
・・・多くは必要としない。
彼は多くのものを持ち合わせているが、満たされていない。
多くを持っているからといって、それが欠けているものに対する飢餓感を埋めることはない。
「誰かと何かを見るなんて、考えた事はなかった」
シャルルがそっと言う。彼女の身体が彼に近寄らないで立ち尽くしたままであることが憎らしいと思うが、睨み付けるほどの距離はなく、ただ、互いに手を伸ばせば触れられる距離にいるのに、互いにどこか躊躇いという薄衣を間に巻き付けているようであった。
見えているのに、温度を感じるのに、本当には触れあっていない。
もどかしさだけが先に走り、せつなさが声を濁らせ、海に行こうと言うマリナの言葉にすら全部ではないと否定する彼の青灰色の瞳は、深く愁いに沈んでいるが、決してそれに溺れることはなかった。
彼の孤独を知り、彼女の髪が僅かに後ろに引いた。

彼の指先から、茶色の髪が離れて行くが彼はそれを引き戻したりしなかった。

まるで波のようだ、と思った。

満ちて寄せてくるのに、あっという間に引いて乾く。マリナ・イケダという人物は海の潮のような人であった。夕暮れの汐ではなく、朝朗の中の潮のようだ。太陽の眩しさを一緒に連れてくる波間の中で、彼はどこまでも沈んでみたいと願う。
「それなら・・・海を見に行こう。毎年、決まった時期に行くの。そして今年の海とそれまで行った海や季節を比べるの。呆れるほど同じことを繰り返すのよ」
彼女は幼い時に同じ海を連年で見たことがないのだろう。だからこその拘りであったのかもしれない。けれども、その時々に一緒に居る者と海に行きたいという話はせずに、シャルルとこれから毎年のオフの過ごし方について話す。
・・・未来を語らない人が、未来を話すのだ。
マリナは、将来のことも未来のことも、あまり先のことを具体的に述べたりすることはしない。特に、自分だけではなく自分以外の誰かが関与するような夢想は口にしなくなってしまっていた。
それが実現しないからという絶望からではなく・・・誰かと約束したことが果たされなかったことがあり、それを苦い想い出としてしまい込んだままにしているから。
人との約束は守るが、人に約束を強制したり願ったりすることはあまりなくなってしまった。これは、大人になったマリナの大きな特徴のひとつであった。
その彼女が海に行こうと言う。

「好まないことを無理にしているわけではない」
マリナは返答する。それから、シャルルが余りにも彼女の顔をじっと見つめているので、慌てて、顔を横に背けたマリナは、頬を膨らませて目を伏せた。
「そんなに見ても、何も出てきやしない」

■05

「君が強情だからいけない」
シャルルは笑いを含ませながら、言った。彼女を困らせるつもりはなかったが、困った顔の彼女を見ると笑みが漏れてしまう。助けてやりたいと思う一方で、もっと彼の為に心を乱せば良いのにと思う。
矛盾する気持ちがぶつかり合う音を楽しんでいる自分に苦笑いする。
穏やかな海も、躍動する波も、全てを彼女に捧げたいと思う。できることなら、ということではなく、本当にやろうと思えば彼はそれを実行する。しかし、そうしない。
彼女が望まないからだ。人から与えられた倖せは彼女は受け取らない。

彼はそっと手を動かし、彼女の頬の上に手の平を広げた。こういう風に触れられるようになって、長い年月が経過するのにそれでも彼は彼女に触れる時に躊躇いを捨て去ることができないでいる。
そして、マリナも触れられる時に、とても困った顔をする。嫌がっているのではなく、彼女の中にも、シャルルと同じ様に、深いところに流れている哀感をそのまま抱えてしまっているからだ。それは、生涯、消えることは無い。どれだけ強く愛し合っていたとしても、どれだけ激しく求め合っていたとしても、忘れることはない。それがシャルル・ドゥ・アルディであるし、マリナ・イケダの中にある愁いを忘れさせることもできないのも、シャルル・ドゥ・アルディであるからだ。
マリナの顔が綻んだ。彼の掌に顔を包まれると、安心しきった表情になる。こういう顔を見せるようになった彼女のことを更に愛おしく思うのだ、とどんな表現を使っても言い表すことが出来ない。
「オレには言えないこと？」
彼は彼女の前では少年の頃のように「オレ」と言う。それが彼女を喜ばせているのか哀しませているのか、尋ねることはしなかったが。彼女はそんな彼と、海に行きたいと言う。
「そうではない」
マリナが根負けしたように溜息混じりに言った。彼がそう言ってマリナの発言を促すが、それはとても優しくて・・・その先の時間がないから早く言え、という性急さは籠もっていない。
「海の絵が描きたいな、と思っているから」
シャルル・ドゥ・アルディはその言葉を聞いて止めていた呼吸を開始した。彼女の声があまりにもか細くて、彼はその言葉を待つために、聞き漏らさないために、自分の動きをとめて、ただ、彼女に手の平の温度を伝えているばかりであった。
その声は・・・彼女の豁達さや朗らかさは消え失せてしまっていた。しかし、それがいけないのではない。彼女の心の中を束の間、見たような気がした。
彼女が絵を描きたい、と言っているのは単なる風景ではない。シャルルの絵を描かなくなってしまって久しい彼女が、絵を描きたいと言うのは、シャルルの絵を描きたいと言っていることを指し示す。

彼女は描きたいものを描く。それはいつになっても変わらない。彼女の対象は、彼女の心を動かしたものである。その中に、シャルルは居ない。
そのことについて、マリナが静かに苦悩していることをシャルルは知っているし、生涯そうであったとしても、それは構わないことであった。
マリナのためには、何か変化が必要であったのかもしれないが、彼が導き出してやるこたえではマリナは納得しないだろう。
彼女がシャルルに対して心を動かすことがないのではないことも十分に承知しているし、だからこそ、こうして彼女のこたえを待っていることができるのだから。

マリナの茶色の瞳が斜め横を向き、シャルルの青灰色の瞳から逸れた。
彼の掌の中で、彼女の頬が少しずつ熱くなっていく。
彼の親指が、マリナの目尻をそっと軽く押し付けた。
彼女の言葉がそれだけではないとわかっているから、次を促す。
「マリナ」

彼が顎を軽く上げた。彼女の頬、顎、項を滑り降りてマリナの両肩に手をあてた、茶色の髪が彼の手の甲に乗った。こうして・・・切迫した環境でなければ想いを告げることができなかったあの時から、年月を経て、相手の言葉を待つ時間さえ受け入れることができるようになった。
「シャルルはそうやって、意地悪するのね」
「オレはやられたら倍返しすることにしているから」
彼の家訓を持ち出して、彼が微笑んだが、その様子があまりにも美しくてマリナはしばしその貌に見惚れてしまっていた。
彼がそう思うのには、マリナが幾度も夏を過ごしているのに、その真意をなかなか明かさないからだ。そう聞くと、マリナはぎゅっと唇を結び、そしてふっと吐息を漏らす。彼女の睫が伏せられて、今一度シャルルの視線と絡み合った。
それだけで、彼の中に大きく衝き動かされ、震えが走る。まったく酷い人だ、と彼は思う。ただ、ここに居るだけで、触れているだけで彼を乱す人物はたったひとりしか居ないのだから。

■06

「・・・海に行こう、と言って実現したことは殆ど無かったから。海に行こうと毎年言えるということは、これから先もないと思っていたから」
渋々、彼女が言ったそれが全てであった。シャルルは満足そうに目を細める。そして、勝ち誇ったように含み笑いをした。

彼女が毎年海に行こうと約束することはこれまでなかったのだろう。それとも・・・約束したあの人とは、行くことが出来なかったのかもしれない。彼女が、誰かと何かを約束することについて、今でも躊躇いを持っていることが如実現れた言葉であった。
彼は、マリナを見つめながら、決して目を反らせることもなく、はっきりと言った。
「オレと・・・今年も、海に行こう。その次の夏も、その次も」
・・・自分の身体が震えるのを感じる。
自分の言葉に酔ったのではない。
マリナに向かって、海に行こう、という言葉が・・・どれほどの意味を持っているのか、そして自分の何を約束するのか、マリナに伝わったからだ。
生涯、ただひとりだけと決めて、毎夏を約束する。実現しない年もあるかもしれないが、それでも、誰にも言わなかったことを告げる。
「珍しい。・・・シャルルが先のことを約束するなんて」
「はぐらかすなよ」
彼の言葉にマリナが眼を瞑る。そうしても、彼は消えないとわかっているから。しかし、見つめていれば、シャルルの青灰色の瞳に吸い込まれて、彼の囁く何もかもにウイと言ってしまいそうになるから。

君はどう思うの？

眼を瞑ったままのマリナに、彼が囁く。よく通る声であった。大きな声を出さなくても、彼女に容易に届く声が、心地好かった。
そうして、マリナの肩に乗せた手の平に力を込めて、彼女の答えを促すかのように両肘に手を添え直す。
「・・・海に行きたいの。シャルルと。シャルルと海を描きたいの。だから、私に・・・海をくれる？」
「忘れたとは言うなよ・・・オレが手にできるすべてを君に捧げると言ったことを」
彼は艶やかに微笑んだ。華のような綺麗な微笑みであった。
「私はもう一度・・・シャルルに無理なお願いをしている」
ふっと彼が目を細める。彼女が、なぜ、彼に願い事を言わないのか、それで確信した。
もう一度でも、二度でも・・・幾度でも彼女のために願いを叶えようと言っているのにも関わらず、彼女はそれを口に出すことを躊躇う。
「オレは一体、誰なのかな」
その言葉に、マリナは彼の名前を口にしたが、彼は首を横に振った。
「それだけではないだろう」
マリナが言葉に詰まった。彼が何を求めているのか察知したからだ。
短い言葉をいくつか出したが、それは単なる呻きにしかならなかった。けれども、彼女の動きは彼の腕の中にあり、自由に逃げ出すことすらできなくなってしまったマリナは、しまったという顔をした。彼女はいつの間にか、座っている彼の両膝の中に立ち尽くしていていたからだ。
彼女の頬が赤くなった。シャルルは面白そうに彼女の変化を眺める。しかし、愉しんでいるのではなかった。返事を急いているのは、彼の方であった。
・・・しばらくの間、沈黙が続くが、彼は根気よく待った。
その間、幾度か彼女が後退ろうと思って試みたが、彼はその度に力をこめて彼女の両肘の動きを遮る。
恋の悶えを相手に一方的に与える程、彼は彼女を浅く愛しているわけではない。
けれども、自分の為にこうして口籠もる彼女を見つめる特権を誰かに引き渡すつもりはない。
彼が再び顎を上げて、彼女を促した。これで最後の待機であるという宣言であるかのように毅然と顔を上向きにするシャルルに、とうとう、マリナ・イケダが力を抜いて唇を開いた。
「私がこれからずっと海に行きたいと思っている人」
彼は満足そうに微笑んだ。
「muir」
彼女がその言葉の意味がわからずに、首を傾げる。彼は複数言語に精通しており、完璧な発音であったのだろうが、それが何語であったのかわからなかった。
彼はもう一度発音すると、面白そうに説明した。
「海、という意味」

「海・・・」
「そう。どこにいても、どんな時でも・・・海は繋がっている。それを確認したいから海に行こうだなんて、君は随分と我が侭で、それでいて小さな願い事ばかりを繰り返す」
「・・・そう」

■07

だから、彼女は言い淀んで・・・それでいてなお、毎年海に行きたい、と言うのだろうか。
海を一緒に見たいと願う相手は、ひとりだけだ。
幾度も同じようにしてどこに行こうかと問う度に彼女は海に行こうと言う。それがどれほど幸福なことなのか、切ないくらいにかけがえのないことなのか・・・一度では彼女は理解できないだろう。
彼は繰り返さないのに、こうして繰り返し海に行こうと言う彼女を迎えいれる。
「ひとつ、言っておくことがある」
シャルル・ドゥ・アルディは白金の髪を顳顬に散らして横柄に告げる。
彼女が、彼の額に自分の額を押し付けた。
シャルルがこれから言う事は辛辣な言葉になりそうだということがうすうすわかっていたからだ。
その場から逃げられないのであれば、この場で話題をすり替えようとした彼女に嗤う。
彼は自分の言葉を流してしまうつもりはなかった。
「これからは、もう少し・・・計画してから言ってくれ」
「計画しないのが、計画なの」
彼女が笑う。シャルルが取得するオフであり、マリナと過ごす海での時間のことで、すでに頭がいっぱいであるような顔つきだった。
不思議な人だな、と今でも思う。
彼の絵が描けないと悩んでいるのに、そこから眼を逸らさずに、それでいて新しい可能性を探そうとしている。
それなのに、自分の心の中にシャルルを入れることを受け入れるように見えて、戸惑っているマリナの無防備な姿を彼に見せる。
「そうか・・・それなら、まずは、海に行かないといけないわけだ」
「贅沢なのはわかっている」
「少しも」
「そうではなくて」
マリナが困ったように言った。彼女が言っている贅沢というのは、金銭的なものではない。
彼の時間を独り占めすることがどれほど貴重なことなのか、彼女はそのことを言いたかったのだ。そしてシャルルはそれに全くそういうことはない、と言う。
シャルルは自然に、微笑みが溢れてしまう。
海に行くまで、待てないかもしれない。

この不思議な人を壊れるほど強く抱きしめて、どこにも行かず・・・ただ、彼女の温度だけを感じていたいと思うのは、浅はかな夢なのだろうか。彼は生涯分の夢を見た、と彼女にかつて言ったが、この瞬間だけは、もう一度夢を見ているのかもしれないとさえ思えた。
「君が何を思っていても、オレが何をどう反対しても、結局は、君の言うとおりにしてしまうのだ、と思っているのであれば、それは間違いだな」
マリナの茶色の髪を撫でながら、シャルルは傲然と言う。断言するような物言いであったが、瞳や優しかった。
「君の願いを叶えてやる。オレは誓った言葉を覆すことはしない。たとえどんなに、不本意であったとしても、だ」
誇り高い彼らしい宣言に、マリナは唇を横に引いた。いつもの彼女であるならば、そこで傲慢極まりない言い方はやめろ、と彼に注意する豪胆な挑戦を繰り返すはずであるのに。彼女はそうはしなかった。
「・・・どこかに行く、という約束ではなくて・・・海に行くという約束を私にくれる？」
薄い空の色をした瞳の人は、艶然として言った。約束が欲しいというのではなく、海に行くというこれから先のシャルルの予定が欲しいと言う。他の者から言われればノンと即答するであろう言い交わしに、彼はウイと言う代わりにこう言った。
「それより、君は早く支度をしろよ。・・・出発に遅れたら、置いて行く」
「どこに行くのかも決めていないのに、何を言っているの？」
マリナが驚いて言ったので、その驚いた無防備な顔を見ながら、シャルルは冷たく言い放つ。
「行き先は・・・決まっている。『どこか』だ。君だな」
そう言って立ち上がり際に、彼はマリナの唇の端に自分の唇を擦っていく。見つめ合い許可を求める口吻ではなかったので、彼のファム・ファタルは酷く驚いた顔をしていた。
「その顔はやめろと忠告したはずだぞ」
彼は途端に癒そうな顔をした。辛抱強く教え込んでも、彼女は自分の思うとおりにはならないことを知っているというのに。
彼は苦笑いを浮かべる。その顔は、天才と呼ばれたりフランスの華と讃辞されたりする者の顔ではなく、マリナと過ごした輝ける時代の彼が成長した姿であった。
彼はぽんと、軽くマリナの肩を叩くと、もう片方の手で彼女の腕を同じ様に叩いた。それは合図であった。

■08

マリナ・イケダが大きな声を上げる。
彼がやると言ったら本当に実行するからだ。
何も準備していないのに、と言い出すマリナ・イケダに、彼は挑戦的に言った。

「海に行こう、と言ったのは君の方だ。オレは倍返しすると宣言したはずだが、聞いていなかったのか？君の耳は飾りなのか」
「だって、シャルル、オフはまだ先では・・」
彼は鼻先で嗤う。スケジュールの通りに遂行することも当主の責務であるが、その通りに進めていては事が運ばないことがあるときには、最適化するだけであった。それをマリナから見れば「変更」という文字に変換されるのかもしれないが。
「２，３日繰り上げることになるが、機内で調整すれば良いことだ」
「あの、あの・・・」
そこでマリナは気がついて、唇をぶるっと震わせた。
気づき、というものは震駭を伴う。
彼女がどうして言葉を止めたのかと言えば。
・・・・シャルルが勝利を確信した顔をしていた本当の意味が、わかったからだ。
唇の端を歪めてマリナの様子を眺めているシャルルには、時間の余裕やその場で調整できる自由はない。それなのに、こうして出発を即決するということは、つまり・・・
「シャルル」
語尾が僅かに上がるが、シャルル・ドゥ・アルディはそれを無視して、部屋を出て行こうとする。

・・・予め、準備してあったのだ。

彼の落ち着き払った態度はいつものことであるが、それに輪をかけて機嫌良さそうにしている様を見ると、確信せざるを得ない。
しまった、と思ったら良いのか、やられた、と歎いたら良いのか、わからなくなってしまう。

マリナ・イケダが海に行こう、と言い出すことは予定していたものの、彼女にそれを言わせるために・・・敢えてああいう態度を取ったのだと知ると、マリナは語気を荒げた。

「待って、シャルル」
「君は先ほどから、何か反論したそうだけれど」
彼は部屋を出て行く時に、振り向きながらそう言った。
「マリナの望み通りになったのに、何が不満なのか、説明してくれよ。・・・それから今回はこちらが場所を指定する」
そう言うなり彼は意地悪そうに言った。そして、今、思いついたかのように、軽く上を向いて、場所を指定する。確かに、透明度の高い、遠浅の海が続く場所として知られざる美景地とされている海岸の名前であった。
けれども、実際には遠浅で在る場所とそうでない場所が点在する。

それを聞かされていたマリナの顔色がみるみる変化する。
火照った頬から、炎が消えて行き、血の気がすっと引いていく。茶色の眼は大きく見開かれ、かなり

動揺していることは明白であった。
彼は、それを見るなり、くすりとまた声を漏らして笑った。
シャルルはこの反応も想定していたことであり、彼女に大きな影響にならないことも計算の上であった。
「ねえ、シャルル。そこではない場所にしない？」
マリナの額に汗が浮かんでいる。かなり慌てているので、シャルルは顎を上げて彼女を斜めに見下ろした。青灰色の瞳が、何もかもを見透かしているぞと言っていた。
下から見上げる彼の貌も、締まった長身も、今の彼女の足を止めることはしない。
彼の服の裾を引っ張りながら、マリナは説得を試みた。無駄であるとわかっていたが、それでも言う。いや、そのまま素直に従うわけにはいかなかった。
「その場所は・・・その・・・今年はやめておかない？もっと別の場所に・・・」
「なぜ？」
「だって・・・」
そこまで言って彼女は絶句する。彼の顔つきから、また、マリナに理由を言わせようとしていることに気がついたからだ。彼女は頬を膨らませる。そして次に大きく息を吸う。そんな童女のような仕草を見せるので、彼は待ちきれずに、言ってしまう。
彼女は彼のファム・ファタルだ。彼にこんなに・・・夏の休暇を心待ちにさせる人が、他に居るだろうか。
だから、言ってやった。
「そこは貸し切りだからな。・・・偶然なのかな。イケダという名前の女性が、各々二組、近くのリゾートホテルに滞在しているらしい」
マリナが小さく悲鳴を上げる。彼女が何を懼れているのか、もう、すぐにわかってしまうほどに動揺しているが、彼は行き先を変更するつもりはないよ、と言った。なぜ黙って居たの、という詰問ににた口調のマリナに、彼は涼しい顔で答えた。
「近くに到着してから言うつもりだった。・・・忘れたのかな」
彼は決して忘れることはないのに、そう言ったので、マリナが軽く足を踏みならす。
これが怒りが極限に達している合図であった。
シャルルはその様子を嘲ら笑いながら、高慢に言った。
「君が悪い。最初から、転居が多かったので海に三人で行くことがなかった、と言えば良いのに。・・・オレが実現させてやるんだぜ。君の願いを」
彼女が、シャルルが言い終わらないうちに彼の名前を読み上げて、軽く腕を叩いたが、彼は彼の恋人に向かって、行くぞ、と冷たく命じるだけであった。
しかし、彼の満足そうであった。
海に行こう、と彼女が誰かと約束し、海に行きたい、とねだるのは、彼だけなのだと知ったから。こんな些細な事実を知るだけで、オフの予定を繰り上げるのは価値のないことでは決してなかった。

まだ、海に到着していないのに。もう、潮の香りが漂ってくるようであった。
今年の海は、どんな景色なのだろうか。

彼も心待ちにしているのだ、とマリナにまだ言っていないことを思いだしたが、それを言う機会をいつにしようか考え始めていたので・・・彼女の甲高い喚き声は完全に遮断されてしまっていた。

・・・彼女が行かないと言い出さないことだけは、確認していた。
そして、確信していた。

今年の夏は、少々・・いや、うんざりするくらい、静けさと遠い海を見ることになるのかもしれない。

そう思った。

海にいこう　2012　muir　後編　海波を揚げず

■09　epilogue　前編　海波を揚げず

間もなく夕刻になろうとしているのに、無風状態の海というのは珍しいことであった。
そしてここしばらく、海が荒れておらず、干満が穏やかであったことが更にこの海の透明度を高めていた。
・・・マリナ・イケダの詠嘆の声が耳元で響く。
そしてそれは一度ではなく、幾度も彼女の唇から漏れてくる。どちらかといえば、断末魔の悲鳴のようであった。
しかし、その声を耳にしながらも、シャルル・ドゥ・アルディはサングラスを外そうともせず、むっつりとしたままであった。

彼が不機嫌な理由はふたつ。

ひとつめ。
彼のために用意された、波方（波の端のこと。波際）に設置されたチェアが気に入らなかった。
耐湿性と耐炎性を重視したビーチ専用のものではなく、しっかりした造りのデッキチェアを用意しておけと言ってあったのに、彼の好みではない曲線のチェアが用意されていたので、マリナが止めなければそのまま引き返してしまおうと思ったし、今もまだ、このまますぐに帰ろうかと考えている最中であった。

ふたつめ。
マリナ・イケダがここに来ることを最後まで顔を顰めて嫌がったものの、この景色を見るなり気分が反転し、昂揚と言うには度の過ぎる燥ぎ具合を披露したものだから、シャルルはそれで満足するべきところを、逆に機嫌を損ねてしまった。
彼女が笑って居る姿を見るのが何より倖せであるのに。
彼を蔑ろにして。
彼のファム・ファタルは。
スケッチをしないといけない、とか。
ポーズを取れ、とか。

あれこれと、こどもより幼い思い付きを次々とシャルルに投げかけるので、彼はますます無表情になる。本人がそれに気付いていないところが、また、彼の怒りを沸騰させることになる。

そして、極めつけは。

チェアが気に入らないと言って座ろうとしないシャルルに、それなら海に入れば良い、とマリナ・イケダが無謀な提案したことが彼の不機嫌を更に大きくしたのだ。
極限にまで達したと言っても良い。
そしてそんな提案をしたにもかかわらず、当人は水が怖いので適当に磯遊びに興じる程度で済ませるつもりらしい。

彼は強い紫外線の中で肌を痛めないようにマリナに紫外線を防止するのではなく遮断するための融溶液を塗っておけ、と忠告しようとして手に持っていたボトルを砂浜に放り投げた。乾いた砂に密閉容器が沈んでいく。
ここの砂が軽くて、しかも細かい気泡をたくさん含んでいるからであった。死火山が近くにあり、そのために周囲の土砂は急激に冷やされた溶岩を含むが、急冷のために極めて細かい気泡を含んだまま凝固し、その後に海に流れて砂になったので、このような形状になった。
そのため、この海は尋常でないほど澄んでいた。砂が濾過効果を高め、かつ、マグネシウム成分を多く含むので、プランクトンが海際で棲息できないためか、海草などの有機物による濁りがなかった。池や湖のような状態、と言ったら良いだろうか。
しかも、この湾は遠浅に見えるが透明度が高いためにそう見えるだけで、実はかなり深く、そして死火山の麓から流れてくる湧き水が流れ込んだり直接海底から湧いたりしているので、それが長い時間をかけて淡い青さしか残さない海を創り上げていったのだ。

シャルルがこの海の奇妙な現象に興味を持ったのは最初の数分のことだけで、すぐに興味を無くしてしまった。
かつ、次に考えることにしていた、気に入らない点が彼の中から甦り・・・・とうとう、無表情を通り越してマリナを冷凍しそうなほどに冷たい視線を向けるものだから、逃げ場が無くなったマリナは自分が海に出ることができず、シャルルに遊泳に行け、と命令した。いや、提案した。
「オレに命令する気か」
彼はむっつりとそう言った。サングラス越しにでも、その視線の冷たさがわかる。彼は非常に整った顔立ちをしているが、目の表情が覆われてしまうと、芸術の域にまで達する程に美しさが際立つ。
だから、青灰色の双眸を隠すというだけで、周囲はさらに増す冷気を感じるのだ。

■10　epilogue　中編　海波を揚げず

彼はそれで忍耐の限界に達してしまったらしい。
彼女のことになると、冷静さを欠いてしまう。

シャルル・ドゥ・アルディは完璧で、何事にも動じず、冷静沈着であると言われているのに。
彼は、羽織っていたフード付きの上着を脱ぎ捨てると、先ほどの容器と同じ様にして砂浜の小丘に投げ捨てた。
シャルルとマリナとは人種が違う。
だから、シャルルはこの紫外線の強さを楽しむほど肌が鈍感ではない。
もう、不用意に肌を露わにすることはない。安易にバカンスを愉しんだという証拠を彼は残さない。
それなのに、小さく舌打ちした後、彼はマリナ・イケダの表情や態度を確認するより前に彼女の前に立ちはだかり、そして彼女が何かを言おうとする前に、彼は恋人の腰に腕を差し入れて、自分の小脇に抱えてしまった。
「オレに命令するからには、君が手本を見せてくれよ、マリナ」
・・・意地の悪い物言いであった。
当人も承知していたことだろうが、彼はぞんざいな扱いをしたということについてマリナが何かを言う前に、次の行動に出た。

軽々とした動作で、それはあっという間に始まった。

まるで、荷物のような扱いであったものの、それでも細心配慮がそこにはあった。
だがしかし、当事者であるマリナ・イケダにはそれが伝わらなかったので、彼女は大きな悲鳴を上げ、シャルル・ドゥ・アルディの名前を呼んだ。
彼はそれを無視して、白い砂浜を踏締める。

彼の足の甲と、波と、砂が出会った時。
ぱしゃり、と音がして、膝頭に波飛沫が散る。

マリナ・イケダは非常に小柄であったので、彼は容易く持ち上げることができた。
彼女が小鳥のように軽い、ということではない。

・・・もう・・・あの時の少年と少女ではなかった。
彼はもう・・・少年だった頃の彼ではない。
筋肉が増し、骨格も充実し、彼女を小脇に抱えることくらい苦に感じない程度には、成長した。けれども、それが時折嬉しくないと感じることがある。
彼女の容姿は著しく変化したというわけではなかったのに、自分だけが変化してしまったのだと感じるからだ。

「ちょっと！シャルル！シャルル・ドゥ・アルディ！」
マリナ・イケダが、身体を強ばらせて、眼を瞑り、それでいて波を浴びたり揺れを感じる度に声を上げて溺れそうな声を重ね続けてる。
それは一向に止む気配がない。

彼の頬に、波飛沫が飛んだが、それを拭うための両手がふさがっていた。
サングラスをしていて良かったのかもしれない。
そうでなければ、彼女の攻撃をかわすことはできなかった。

同様に、彼女もそう思っただろう。
シャルル・ドゥ・アルディがサングラスをしていて良かった。
そうでなければ、彼の視線の強さを目の当たりにして、更に身を竦ませてしまっただろうから。
そんな緩衝があるために、彼には少し違った色で周囲が見えていたが、それを差し引いてもこの海の蒼さと透明度には、さすがのフランスの華でも眼を瞠る。
透明であるからこそ、薄水色であるそこには濃さ、というものはない。
濃さはないが、どこまでも澄んだ鮮やかさがあった。だからこそ、余計に際立つ。

歩みを進める度に、砂が沈み、独特の音が鳴り、そしてマリナの茶色の髪が揺れる。
彼が片手で持ち上げることができるほど、彼女は小さかった。
軽い、という意味ではない。
小さいのだ。
とても、とても。
その身体のどこに、あれほどの熱情がおさまっているのか、彼が解剖しても・・・きっと分析できないだろうと思われるものが、彼女の中に詰まっていた。

それは、夢であり、希望であり・・・そして未来なのかもしれない。
彼だけの、ではなく。
彼と彼女の未来が、彼女の中に凝縮されている。

が、彼女は、シャルルが波打ち際から飛沫を上げて、そのまま足を止めずに勢いよく海に入ると、悲鳴を上げた。身体を捩らせようとするが、彼女の躰も海に浸っていく。マリナは首を窄めた。そして、腰に回された彼の腕に両手をあててしがみついた。

彼女は水が苦手だ。
苦手を通り越して、身体を固定できない不安定な水場に入れば、意図せずして彼女の小柄な身体は硬直してしまう。
これまでの体験によるところも大きいのだが、それでも海に行きたいと言い放つ彼女の心中を理解するために・・・彼は、敢えて彼女を潮に浸す。
けれども、その時にはひとりにはさせない。
彼女が獣のように彼にしがみついたとしても、それが惑的であるというには・・・かけ離れた態度であっても。
それでも、彼は彼女を抱いたままであった。

「シャルル・・・はなして・・・」
「君が望むのなら」
彼は薄い唇の端を歪めて、彼のファム・ファタルの願いを叶えてやろうとする。
シャルルが腕の力を緩めたので、マリナは目の前に広がる水の広がりに青ざめた。
そして、今、言ったばかりの言葉を覆す。
「だめ！はなさないで！」
彼は、くっと笑い声を籠もらせる。
彼女の手足がその時だけは慌ただしく不規則に蠢き、遠浅の海は、彼と彼女のすべてを沈めるにはまだ遠い距離を必要としていた。
「どちらなのか、はっきりさせろよ」
横抱きにしていた彼女が海面に近付いたので、彼は腕を回し彼女を抱き上げた。普段ではあり得ない彼の所作であった。浮力が彼の誇りも軽くしたのかというとそうではなかった。
・・・海に入り、彼女と過ごす幾度めかの夏の空であるから・・・彼は彼女と海波に浸る。
「シャルル！」
彼女がただ、彼の名前を叫び、そして彼の首に腕を回して身体を震わせる。
シャルルは満足そうに目を細めたが、それは彼女にはわからない視線の機微というものであった。

■11　epilogue　後編　海波を揚げず

マリナ・イケダが、シャルル・ドゥ・アルディに自ら腕を伸ばして縋り付く。
彼女とこうしで抱き合う日々が今ひとたび訪れるとは思っていなかった己を振り返ることはしないが・・・それでも、彼女に傲然と言い放った言葉を今、噛みしめようとは。
シャルルのことを、考えない日はない状態になり、彼に愛されたいと思うほど彼に夢中にならせてみせる、という彼の言葉は偽りではなかった。

シャルルは、彼女の腰と背中に手を回して・・・彼の鳩尾まで入った海の中で彼女をきつく抱きしめる。波の中にあって、彼の抱擁の強弱は彼女には伝わりにくい。こうして、海で戯れると・・・このまま、海の底に彼女と一緒に沈んでしまいたくなる。
凪風の中で、永遠にしてしまいたいとさえ、思うのだ。
彼の昏い望みを敏感に察知して、マリナが怯えていたとしても。
しかし、彼女の髪が濡れて、彼の肩に重みを与える。
波が彼女の項に乗る度に彼女が身を竦ませてシャルルに助けを求める。
他愛のないそんな仕草が・・・彼の餓えを癒す。
「マリナ。目を開けろ」
海水温は震えをもたらすほどの温度ではなかった。それでも、眼を瞑り、彼の視界を遮るようにして

ただ堪えている彼女に、シャルルは囁く。極力、優しい声で。
・・・強い日差しを感じるが、サングラスに水飛沫がかかり、彼は目の前の視界を正確に把握することが出来なかった。それでも・・・波に漂っているのは彼と彼女だけであるということは確認できる。
「これ以上は進まない。・・・だから、目を少しだけで良いから開いてみろ」
彼の物言いは横柄であったが、マリナに安心を与える。彼女が自分で招いた結果であったが、そのことについて反省している余裕すら、マリナにはなかった。
「オレのことを信用しているなら・・・目を開けてくれ」
彼はそう言って、彼女の耳元で囁いた。マリナは擽ったそうに身を捩った。耳元が敏感な彼女は、すぐに、そうして彼から離れてしまいそうになるが、この海の中では無謀という行為そのものであったので、シャルルは腕に力をこめた。
彼の恋人は、まったく、その場の行動ばかりが目立ち、その次に何があるのか想像することすら放棄してしまっている。けれども、それは、彼にはないものであった。
その要素は欲しいと思わないが、そんな彼女が彼に告げる言葉のひとつひとつが、彼の心を動かす限り、彼は彼女に恋を続け、愛を終えることはしない。
彼は、浅はかな彼の運命の人を抱き直した。
水音がして、彼の頬に波が跳ねる。まるで、彼の美しさに見惚れて目に見えない精霊が彼の頬に手を伸ばしたかのように優しかった。

「マリナ」
彼は彼女の顳顬に唇をあてた。
彼が言った通り、歩みがとまり、海がそれ以上彼女を覆うことはないと気がついたのだろうか。
マリナの強ばった肩の力が、ふと、弱くなった。

・・・マリナの息を呑む音が、シャルルの耳に響く。
彼は満足して微笑んだ。
彼女の声は、とても小さかったが、彼は聞き逃さなかった。彼の声を、彼女が聞き漏らすことはないのと同じ様にして、彼は彼女のすべてに耳を欹てるのだから。
柔らかな肌の感触を味わいながら、彼はどうにも言えず・・・・黙って、彼女を抱いたまま海と空の境界を見た。
サングラスによってその色は違って見える。彼が無機質で無色透明だと思っていた全ては、このような感じに近かった。
何を見ても目を引くことはない。
何を見ても心を動かされることはない。
そう思っていた。
果てのない、海と空の淵に向かって歩いているような虚無感が彼を浸食していた日々を経て、今がある。

「シャルル・・・」
掠れた声がマリナから漏れる。
おそらく、彼女には見えるだろう。目の前に広がる、鮮やかな世界が。
限りなく透明であるので、彼と彼女の影が海底で影を作っているのが見える。波があり、彼が勢いよく歩いてきたから、僅かに曇ってはいるが、それはシャルルの足元だけのことであり、周囲からぽっかりと浮かび上がっているような錯覚を覚えるほどに澄んだ水が、彼らを包んでいた。
潮の流れがあまり変化しないこの時間の、この場所であるからこその風景だった。
「私達、浮かんでいるみたい・・・」
「錯覚だな」
彼は嗤う。けれども、嘲りではない。彼女の素直な驚愕に、彼は満ちていく。
「この海には地形上の理由で、プランクトンが浮き上がってこないから」
更に説明を加えようとしたシャルルに、マリナは慌てて言った。彼の胸の中で彼の肩越しに見える風景にただただ、見入っている。
「空の色も綺麗だけれど。こんな風に、透き通って・・・無色透明に近いけれども、青くて・・・シャルルの眸の色みたいよ」
彼女は説明を加える。彼に、サングラスを外して足元の様子を見るか、と尋ねるとシャルルは首を振った。
「必要ない。君が、いるから」
マリナが少し沈黙し、それから、小さく、うん、と頷いた。

それが、答えだった。
シャルルのマリナに対する答えであり、マリナのシャルルに対するこたえであった。

・・・・何方からとも無く身を寄せる。
消えてしまいそうな儚い淡さを愉しむのではなく、果てしない海への憧憬も底の無いことへの畏怖も・・・透明な海も荒れた波も・・・皆、彼と彼女は一緒にこうして歩いて行こうと同時に感じているはずだから。

「まるで、宙に浮いているみたい」
マリナが感激しながら、そう言った。
慣れてきたのか、周囲を見回して白砂の粒が細かく綿雪の用であることも、波が穏やかで決して彼女の顔を濡らしはしないことにも気がつくと、彼女の強ばりは急速に薄れていく。
マリナの絵の題材になるような色であっただろうか。彼女は、溜息をつき、ただただ、綺麗だ、と呟いていた。
「こんなに周囲に何もないと・・・まるで・・・」
そこで彼女は言葉を途切らせた。
「まるで？」
シャルルは彼女に視線を落とさずに、言った。空と海の境を眺め続けている。地球は丸いのだと思わ

せるような、完全なる左右対称の曲線を見ながら、彼女を促す。けれども、マリナが何も言わずに、ただ、絶句しているので・・・シャルルは囁るように言った。

「君はこう言いたいのかな。・・・『まるで、月に行ったみたい』」

ああ・・・と彼女が声を漏らして、彼の腕に再びしがみつく。
シャルル、と呟いた。彼はそっと彼女の背を撫でた。
シャルルの表情は見えない。
けれども、マリナは彼の胸の中で大きく息をする。そうしなければ、彼女はもっと違う震えによって、どうにかなってしまいそうだったから。

それは彼も同じであった。
無表情であったり平静であったりするのは、彼がそう見せているからだ。
彼の心がまったく動いていないということではない。

新婚旅行は・・・世界を巡って、月まで行こう。

まだ、日本の海を巡るだけであるかもしれないけれども。

幾度か、海を巡って・・・世界に繋がる海と交わって・・・・
月に浮かぶようにして・・・・海を、ふたりで見つめる。

ただ、それだけのことであったのに。

海に行きたいという彼女の希望は、これからは、彼の希望でもあるのだ。
マリナには、それが伝わったようだった。

だから。
彼は満足そうに言った。
「マリナ。感激するのは勝手だが、オレはいつまで君を抱き上げていれば良いのかな」
「シャルルが勝手に運んできたのよ」
マリナの声は僅かに湿っていた。
それは、彼女に込み上げているものが余りにも大きかったからだ。
けれども、彼女はそれを簡単には認めはしない。手強い相手だ、とシャルルはひとり嗤う。
どういう方法で彼女にウイと言わせようかと考える。
・・・太陽が西から昇っても間違えないシャルルを悩ませ続ける。
「何か思うところがあるのであれば、オレにキスをしてくれよ。ここまで来たのだから」
どこまでも・・・続く海のような人に向かって、彼は言った。

それでもまだ、マリナが何かを口籠もりながら逃げる口実を呟いているので、彼は更に止めを刺す。

彼の言う事に従わなければ、もっと沖まで行こうと思うかもしれないな、と言う。
マリナはその瞬間に・・・彼のサングラスを片手で引き剥がしたので、彼の精悍な顔が横を向いた。
ぱっと・・・・急に目の前が眩しくなり、刺すような痛みとともに強い日差しが彼の目を焼いた。
・・・・シャルルが目を閉じた瞬間、何かが・・・唇に触れた。とても僅かな瞬間のことで・・・・汐の香りがした。
稚拙で軽く、戸惑うように唇を重ねる。
それがマリナ・イケダのキスの仕方であることも承知しているが、そんな挨拶程度の軽い口付けをねだった訳ではない。

しかし、片方の首に手を延ばして絡み付いたままのマリナが・・・・海を怖がるのにもかかわらず、片手をあけて彼の視界を広げさせる。
溺れるかもしれないという染み付いた恐怖に打ち勝ち、彼女は波の中でシャルルと口吻を交わす。
同時に、彼女は彼に与える。
一度は眩しくて閉じてしまったが、彼は彼女によって・・・色と温度を与えられたのだ。
今ひとたび。あの頃のように、彼女は彼に灼熱の眩と足元に浮かぶ影と、透明な海を見せる。

強烈な光線と海の脱色された波の揺らぎが目に入る。
彼は顔を顰めた。

「乱暴な女だな」
「言うとおりにしたわよ。・・・岸に戻ろう」
彼女が怒ったようにそう言ったので、彼は、鼻を鳴らして嗤った。
「今、戻っても良いのなら」
「もちろんよ。持ってきたフルーツジュースがぬるんでしまう・・・」
そう言いながら、岸辺に目を遣った彼女は、あっと声を呑んだ。
彼女は両生類を踏みつぶしたような声を喉元で鳴らした。

・・・シャルルの身体に回された腕に力が入り、彼の肩越しに見える様子を受け入れたくなさそうに、彼の胸の中に隠れるが、この透明な海で隠れるところはひとつもなかった。加えて、彼女は水が苦手だ。器用に泳ぐこともない。

「シャルル・・・・」
彼女がシャルルを睨み上げた。向きを変えながら、岸に向かおうとするシャルルにマリナは肩を軽く叩いた。ぱしゃん、と音がして彼の締まった肩の筋肉が鳴った。
「あそこに座っているのは・・・」

彼女がただ呻いている。ここまで来て、それを忘れてしまっていた彼女の記憶容量の少なさに呆れながら、シャルルは言ってやった。
「何だよ。・・・ちょうど、座り心地の悪いチェアに座ってくれようという粋狂な人達に貸与しただけだぜ。あのチェア、半ダースほど持ち込んであるのはマリナも知っていることだろう？」
「い、い、一体・・・いつから・・・」
マリナが恐る恐る言う。シャルルは不敵に笑った。
「さあ、いつからかな・・・君は波が怖くて眼を瞑っていたが、オレにはかなり前から、姿が見えていたけれども」
そして、彼は彼女に向かって一撃を加えた。
「君がオレにキスしたあたりには、もう、観察体制に入っていたぜ」
マリナの足がばたついた。見る間に顔が赤くなっていく。

波端に居る者たちが、向きを変えて海を背にして戻って来たマリナとシャルルを囃し立てる声が聞こえてきた。

・・・・今度は、シャルルのファム・ファタルが無言で・・・彼から取り上げたサングラスの柄を持ち、自分の顔にかけた。

「おい、マリナ。もう足が立つのだから、手を離すぞ」
そう言ってみたものの、彼はいつまでも、彼の恋人を手放すことができずに・・・しばし、波間に浮かぶ非常に小柄な人を見つめて笑っていた。

彼女は日除けのサングラスを通しても、この色を忘れない。
彼は、もう、そんな風にして色の違いを憂えたり歎いたりすることはない。

海から戻ったら・・・・日焼けに苦しむ彼女が、その痛みさえ愉しみながら・・・どんな絵を描くのか、最初に知る権利は自分にあると思った。

タイトルはきっと「muir」だろう。

次の海も。
その次も・・・・
きっと、彼女はmuirという名前で色を重ねて行くのだろう。
そしてそれをシャルルは見つめ続ける。

マリナ・イケダが溺れない程度の浅さまで到達すると、シャルルはマリナをホオリ投げた。波が跳ね上がり、彼の身体を濡らす。
また、彼女が怒ってシャルルの名前を叫んだ。

「オレのサングラスをダメにした罰だ。潮で濡れたものはもう使わない」
彼はそう言ってマリナを放置し、砂浜に上がる。
そこで待っているのは、彼女が海に揃って行きたいと思っていた人々と、その者たちが愛する者たちである。

愛は、増えるのよ。
マリナの声が甦る。
確かにそうであった。
愛する者が愛する者たちを呼び、愛は増えていく。

けれども、彼は物憂げな顔を見せただけであった。
微笑んだりはにかんだりする顔を見せることはしない。なぜなら、彼はシャルル・ドゥ・アルディだからだ。
・・・途端に、揶揄いの声が鎮まる。

冷たくなった足裏が、灼けた砂で心地好いと思ったのは一瞬で、次には強烈な熱が伝わってくる。

こんな風にして。
毎回、彼のオフには海にやって来ようと思う彼女と過ごす夏の海も悪くないと思った。

それより何より、彼が手にできるすべてを彼女に捧げると誓ったが、彼女が望むすべてを手に入れられないと憂えた少年の頃の彼はここにはもう、居ない。

それで良かった。
それが良かった。
なぜなら。

彼女の願いが叶ったから。
そして
彼の願いも叶ったから。

ふたりで手にするものも・・・この世にはあるのだ。

シャルルは微笑みながら、想像した。

マリナ・イケダの描く、今年のmuirは・・・・一体、どんな構図なのだろうか。

・・・つまらない退屈な日々であると思ったのに。

僅かばかりであったが、心待ちにするものができた。

夏の海にいるのに。
夏の海に・・・・また・・・海に行こう、と思った。

太陽が彼を祝福し、海の波音が彼のために歌う。
そして、彼の運命の人がmuirから彼を追って走って来た。
怒りなのか羞恥なのかわからないが、真っ赤になっていた。

騒がしいことこの上ないな、と思ったが、そんな彼の貌には笑顔が浮かんでいた。

（FIN）

glycine

glycine：藤の花言葉「至福のとき」「恋に酔う」「懐かしい想い出」

■01

紫紺の昊を想定していた。
シャルル・ドゥ・アルディは、そこに導かれて、一瞬、声を失って昊を見上げた。
これほど濃い紫の天を見たことがなかったから。

細く長い指の先には、短く切り揃えられた丸くて柔らかい爪の持ち主が居た。

身長差があるから、彼と彼女が手を絡めて歩くのは、本当にゆっくりとした速度でないと実現しない。

茶色の瞳と茶色の髪の、少女といっても差し支えないような出で立ちの人は、満面の笑みを浮かべて、少しばかり得意げにシャルル・ドゥ・アルディに言った。
白金の髪の、青灰色の瞳の異国の人は、、東の果ての国をこよなく愛している。
それは、その国に生まれた人が彼の運命の人であるという理由だけではなかった。
これほど、四季を感じて、これほど生命の息吹を感じる場所は、それほど多くない。

生まれた環境がそうさせていたのだが、彼は、諸国を巡った。
様々な人と様々な昊と星と太陽と・・・言葉に尽くせないほどの組み合わせの儘なる景色を記憶してきた。
それでも鮮やかな色彩に出会うのは、数少ないことであった。
彼の心を動かす鮮麗を彼が受け入れたときだけ、それは記憶される。彼の心の奥深くに刻まれる。
それは、マリナ・イケダという人物が居なければ、成立することは難しい方程式だった。
彼女が媒体となって、彼の視界は無機質で無色透明な色から、とたんに、幾通りもの組み合わせについて彼に挑戦する色味になってシャルルに降り注ぐ。

甘い芳香が彼の鼻腔を擽った。
つり下げられたように撓わに実る花房たちが、彼の頭上で揺れていた。

ただ言葉を失って視線を上に向けてばかりいる彼に、マリナは少しつまらなさそうに言った。
彼女はここに来ようと誘ったのに。それなのに、彼女は何かに不満を感じていた。

「シャルル。感想くらい、聞かせて欲しいものだわ。私の、とっておきの場所なのに」
「ここは君の私有地かい？」
彼は短く返事した。聞こえていなかったというわけではないらしい。
そして彼は意地悪く・・・青灰色の瞳を彼女に落とした。
淡紫色だけではなく、様々な色の藤華が、彼らに降り注ぎ、そしてさらに上から降り落ちる太陽光によって。彼らの足元には表現しがたい多色の木漏れ日が色鮮やかに広がっていた。

芳香に酔いそうになる。
昨日までの寒気が一気に通り過ぎて、今日は朝から気温が高く、開花を促したこともあった。
そして、フランスの華という称号を持つ彼の来訪を待ち侘びているかのように、華たちは、一気に咲き乱れて彼の視線が自分に注がれないかと希う精霊のようでもあった。
撓わに落ちそうなほどに房状の花瓣が、シャルルに向かって落ちそうな気配を見せている。
そんな様子を間近で見て、マリナはただ溜息を漏らすばかりであった。

転居を繰り返してきた彼女の記憶に残る場面は多かったが、それでも、この季節のこの藤棚の連なりは今でも・・・眼の裏にはっきりと蘇る。けれども、それを色や絵にすることはできなかった。
理由は、わかっている。
シャルルを絵にすることができない理由と同じだ。
それらは刻一刻と姿形を変えて、瞬きをする瞬間ごとに変化し続ける。
だから、ひとつの姿に留めた絵にすることができないのだ。
デッサンをするたびに、色も形もかわるそれらを一瞬の風景として切り取ることができない。
だからこそ、これほどまでに、色と香りをともなった記憶として、ずっとマリナの中に残っているのだ。

・・・人との記憶が重要だと思っていたのに。だからあれほど友人と連絡先を交わすことに熱心になっていたのに。なぜだろう。
シャルルと居ると、それも、どこか違った意味になっていた。

人というより、命が好きなんだろう？

シャルルの言葉が胸に刺さった。
彼女は、人が好きだ。生きている限り、できるだけ多くの人と関わりたいと思っている。
けれども、それは、交友関係という狭義の繋がりではないのだろう？とシャルルに問われて、その時に初めて気が付いた。
彼女は、命を愛おしんでいるのだ。
すれ違うからこそ。限りがあるからこそ。
そして、この藤の華のように、ある一時の季節にしか出会えないとわかっているからこそ。
だからこそ、命は美しいのだと思う。

マリナは美しいものに対してはとても敏感だから、と彼は言った。そして笑った。
意識しない贅沢な感覚は、贅沢な環境であったから育ったのだと笑う。
それは違うと否定できなかった。

今、目の前にいる白金の髪の人は、流転の人生を歩んできた。
一度は、子の手を離した。
様々な季節を一緒に過ごそうと約束したのに、この藤の華を見る季節には、一緒にいることはなかった。

・・・・だからだろうか。

彼の久々のオフに、どこに行こうかと問われて、真っ先にここを思いついた。

フランスでも、世界のリゾート地でもない、この場所が良い、と言った。
居住していた期間は短かった。自分の住んでいる場所も、もう、区画整理で跡形もなかった。
けれども、この場所は変わらなかった。
いや、年月を経て、さらに花々は大きく成長して彼女を迎えた。
最後に来た時から、年月が経過して、彼女の背もものの見方も少しだけ変わっていたのに。けれども、彼女と藤の房先の距離は縮まったのに、それでも、変化しないと思った。

変化しないのは距離ではなく、彼女の記憶していたとおりの色が、ここで彼女を待っていたからだった。

しばらくふたりで無言で歩く。

こんな日が訪れるとは思ってもみなかった。
誰かと、ここを並んで歩く。
それが、シャルル・ドゥ・アルディだとは・・・・マリナは何とも言えない奇妙な感覚に唇を噤んだままだ。
言葉にならない言葉というものは、声を伴なうことはないのだと知った。

そこでマリナは足を止めた。
彼が、彼女の速度にあわせていることに気が付いたこともあった。
だから本当は気が付かないふりをして、歩みを止めてはいけないのに。
でも、それでも足を止めた。
シャルルは、時折、少しだけ肩を竦めて歩いているのに気が付いたからだ。

眼を細めて、この国特有と言っても良いような静寂と豊香と華の光を受け止めて、彼が何かを少しだけ癒していると感じたからだ。
普段多忙を極めている彼がこんなふうに穏やかな顔をしていることは珍しかった。
下から上を見上げる。
太陽光が眩しく、藤の色に染まった光が眩しかった。
かつ、シャルルの白金髪が乱反射してマリナの眼を射貫いた。

ここに、太陽がある。

白金髪は太陽の光と少し違う色合いだ。
けれども、強く激しく煌めく光が、彼女にそう思わせた。
彼女は太陽のようだと言われる。そして、その光でもってシャルルは月夜見として輝く、とも。
しかし本当はそうではないのだ。
彼こそが太陽なのだ。
その証拠に、藤の筒路の下でなお、彼はこんなにも・・・深紫の光を衣にして、白く輝いているのだから。

甘く薫る華の雫に、マリナは目眩がしそうになる。
華の精霊のような人が傍らに立ち、それでも、生身の人間であるということがかろうじて・・・繋がれた手の平の温度で知ることができる。けれどもそれがなければ、彼はまったく、華に呼ばれて出でた美神か天使のようであると思わざるを得ない。

彼の来訪を考慮して、人のいない時間と、人員配備について、この時ばかりは懸命だと思わざるを得なかった。
誰もが彼の姿に見惚れて、何もかもを放棄してただ見つめるだけになってしまうだろうと予想できたからだ。現に、マリナも、こうして一緒に歩いていなければ・・・そのまま彼の姿をスケッチするためにはどうしたら良いのだろうと考えたに違いない。

それでも、彼の絵を描くことが出来ないと思うほど、彼の微笑む姿は神々しかった。
神様や天使の絵を描くことが出来る人は、どうやって描いたのだろうと思う。
指が止まり、視線が硬直し、それでも絵に描くという行為が勝る時というのは、何もかもを捨てても良いと思うときなのかもしれない。
実際、マリナもそう思ったことがあったから。でも捨てられなかったが。
シャルルの姿を描こうとしたことが何度もあったが、それでも、結局は・・・彼女の満足のいく姿を模することができなかった。
それはこの藤を見つめる気持ちに似ていた。

彼は、一瞬一瞬、どんどん美しくなるから。
だから、その瞬間より、次の瞬間を描きたくなるのだ。だから、描けない。

「マリナ。しかめ面をするほど、ここが気に入らないのなら、説明のつかない行動はよせ」
シャルルの低い声で、マリナは我に返って少し微笑んだ。
「愛想笑いもよせ。不愉快極まりない」
そう言って、シャルルは彼女を強く一度だけ睨んで、そしてまた、昊を見上げた。

■02

「ここの景色に感嘆しているのは、私だけではないでしょう。シャルル・ドゥ・アルディ」
負けずに彼女はそう反論した。

彼は唯美主義者としても有名だった。だからこの場所が彼の興味を引いたのだと知ると、彼女は少しばかり得意になった。自分のとっておきの記憶が彼を刺激したのだから。
しかしシャルル・ドゥ・アルディは辛辣に彼女をやり込めた。
「ここは君の記憶している時より経年しているからこその景観だと思い至らないのかな。・・・君が最後に来た時から何年経過しているのか計算したのか？」
確かに。
彼女が訪れた時より、ここは素晴らしく美しく変化していた。
いつかきっと、また訪れたいと思っていた場所だった。
だからこそ、シャルルと一緒に再訪できて嬉しかった。
それを、いつ伝えようか機会を窺っているのに、彼はまったく隙がなかった。

しかし、まだ、この場所が残っていると調べてくれたのはシャルルだった。
彼は植物学にも通じており、様々な植物の生態にも見識があった。だからだろうか。これほどまでに密集している藤棚を創り上げる日本の技術を調べると言って、それを理由にしてここにやって来た。
シャルルは薔薇の品種改良では大変に経験もあり、幾種類もの薔薇の品種を生み出しているが、その一助になっているのかもしれないと思った。
それらすべてには・・・すべて、どの品種にも、「ファム・ファタル」と名が付けられていた。

彼の視線は彼女から遠すぎて、よく見えなかった。
研究者としての視線なのか、それとも審美眼を持つものとしての視線なのか。
どちらも当てはまっているのだろうと思った。彼はたったひとつの側面だけしか持っていないというわけではなかった。
非常な経営者でもあり、冷徹な医師でもあり、そして慈悲深い孤独な青年でもあった。

尖った顎が見える。白金の密集した睫が見えていたが、いつも彼女を見下ろす青灰色の瞳は見えなかった。彼女ではなく、昊の華の精に見惚れているのだと知ると、それが人ではないのに、なぜか・・・心が穏やかになれなかった。
彼の家は、薔薇に還ると言われている家柄だった。華に呼ばれて・・・・彼はこのまま消えてしまうのかもしれないと愚かな妄想を抱いてしまうほどに。
彼はただ、言葉もなく濃色の光雫を浴びている。

ただ、繋がれた指先だけが、彼をここに留めているのであれば。
マリナはこの手を離してはいけないのだと思った。どういうわけか、とても心許なかった。

「・・・なんだよ」
彼が不機嫌な声を出したので、自分が思っていたよりも強く彼の指先を握っていたことに気が付いたので、マリナは少し力を弱めた。その勢いて、彼から手が離れて・・・・自分の手の平が青紫に色づいた瞬間を見た。それまでは、シャルルと手を絡めていたので、自分の手の平は彼の指と一対だった。
しかし、彼女が手を離してしまったことにより、彼の白い手の甲と同じ色が彼女の手の平にも沈着した。
マリナは吐息を漏らした。落胆したような声音だった。
シャルルは、呆れたように、ようやく彼女に視線を移した。
「マリナがここを希望したのだろう？・・・オレはいくつか候補をだしたつもりだけれども」

彼は忙しくてなかなかこういった時間が取れないことも承知していた。
それなのに・・・何時間もかけて、日本に来ようと言ってくれた。
その間、移動中はしきりに仕事に没頭していたけれども。

「言いたいことがあるなら言えよ」
きらりと彼の青灰色の瞳が光ったので、彼女はまた息を潜めた。青紫の光の下で、彼の青灰色の瞳も、普段より濃く見えた。違う人とは思わなかったが彼が酷く不機嫌であることはわかっていた。
ひとりで見に来たかったのかもしれない。
そう思うと、ただただ、自分の主張を通しただけの行程にシャルルが付き合ってくれたのだと実感せざるを得ない。
彼女が知らないだけで、この世の他の場所には、ここよりもっと素晴らしい華の廊下を演出する場所があるだろうし、アルディ家の財力でもってすれば、そんな造園に対する出費や作業は、微々たる者なのかもしれなかった。

「私はここにシャルルと来たかったの」
ぼそり、とマリナがそう言ったので、シャルルは背中を向けようとして、身体の反転を試みることを取りやめた。

「その割には、何か考え事をしているようだったが」
彼の言葉に、マリナが眉を顰めて、首を横に振った。
乾燥した爽風が彼と彼女に吹き付ける。マリナの肩で、茶色の髪が揺れて躍った。
そして、シャルルの柔らかい白金の髪も揺れる。
・・・・しかし、彼と彼女はあの時の少年と少女ではなかった。
こうしてふたりだけで・・・特定の誰かと、自分の思い入れのある場所にもう一度やって来たいとか。誰かにこの場所を見せたいとか。そんな風に思うことはほとんどなかった。

ああ、そうなんだ。

マリナはそこで思い至った。

誰かと自分の景色を共有したいと思うことは、これほど、大事なことなのだ。

木漏れ日の下で、色の鮮やかな光を受けて、絨毯のように見える花の路を、昊も地も眺めて感嘆しながら、誰かと一緒に歩きたいと思う。
これが、どれほど大事なことなのか、まだ、彼に、伝えていなかった。

マリナは立ち止まったまま、無表情に彼女を見つめるシャルルを見上げた。
彼は少し苦しそうだった。
色濃い光が彼をいつもと違う人物のように見せた。
白金の髪も、白い頬も、青灰色の瞳も・・・・・藤が見せる色光によって、彼の美しさを際立たせているが、彼はやはり、シャルル・ドゥ・アルディであり、フランスの華という形容いがいには表現しがたいほどに美しい傑物だった。

溜息がでるほど美しいという表現があるが、溜息も言葉も失うほどに美しい人物の前では、どう言っての何を言っても、それは真実に近くないと思う程に・・・・シャルルは清かった。

■03

万華鏡のように、一足事に、くるくると色を変える絨毯の上を歩いているようだった。
この庭園では、様々な藤棚を混在させている。赤もあれは濃桜も真白の色もあった。
藤色だけではない色のカーテンが、彼らを覆って、そこから木漏れ日が漏れ、何とも言えない風情をもたらしていた。
普段感じたことはできるだけ口にするようにしているマリナ・イケダでさえ、シニカルなシャルルでさえ、無言でいたくらいだ。
本当に美しいものは、懐かしいと感じる。
これは一度訪れた場所だから、そう思うのだろうか。
いや、あの時の記憶より、さらに枝房が膨らんでいるこの花達はあの時と同じなどではなかった。
それでも、感じる。
懐かしいと。
それなのに、初めての場所であるかのように、何もかもに目を見張る。
過去の記憶を確認しているのではなく、新たな色が、マリナの記憶という景色の上に色を重ねていった。霞んでいた輪郭がはっきりするような清々しさを感じる。だからだろうか。
目の前の彼女の恋人に、どこか、声をかけるのが躊躇われるほどの粛然としたものを感じるのは。

落花する直前の、降り落ちそうなほどの花房が彼女の頭上で風に揺れる。あと数日もすれば花が落ちてしまうのではないのかと思うくらいに最盛であった。息苦しいほどに密集した花の隧道に、マリナは唇を横に引いた。

「・・・シャルルはどんな景色に映っているのかなと思ったの」
「君はどうなの？」
「考えているところ」
彼がそんな風にマリナの心情について尋ねるので、彼女は茶色の髪を少し傾けて、言葉を探した。いつもそんなことをしないのに、なぜか、この場所では・・・彼に告げる言葉には神聖な意味が込められてしまうような気がしたからだ。
広い空間であるはずなのに、とても・・・そう、とても狭く感じる。それは花房が密集しているから感じる空間容積の問題ではなく、彼女がそう感じているからだった。
シャルルは美しい。こんな東洋の国の花路に佇む彼は幻想的とさえ言える。
誰も入場できないように、短い時間を貸し切った。この日が満開であるという計測を立てたシャルルが、どんな準備手配をして、彼女と彼だけの路を確保したのかは尋ねなかった。
ただ、ありがとう、とだけ言った。

でも、彼を愛しているのはその容姿や財力などではない。
マリナが寡言になるほど、花々の息吹が苦しいくらい彼女の何かを刺激していることを知って、彼はだから、黙って居るのだということも理解していた。
彼女の美に対する感覚について、彼は良く承知していた。

「フランスにも藤はあるけれどもね。glycineと言う。刺繍やアンティークのモチーフに使われることも多い。けれども日本の藤はノダフジという名前で少し違う種だ」
そして細い腰に手をあてると、背筋を伸ばして、彼はまた昊を見上げた。柔らかな白金の髪が地上に惹かれて彼の頬から離れた。

「そう」
マリナはそう言って眼を細めた。色素が薄いので、眩しさに敏感だった。しかしシャルル薄い瞳色にはどう映っているのだろう。もっと淡紫の光が、彼を覆っているのだろうか。
「でも私はこの日本の藤が好きよ」
「藤棚にしつらえられた人工的に細工されたものを好むの？」
彼が苦笑した。日本のこういった技術については、彼はある程度評価している。自らも品種改良を行っているが、観賞用に手を加えられた藤の棚の整然とした路について、彼は何か思うところがあったらしい。彼は生まれながらにして、巨大な組織を背負うことを宿命づけられた。そして、それらに一時は見放されたが、その地位を奪還した。文字通り、死闘だった。その場所に彼女は途中までしか立ち会えなかった。
彼を最後まで見届けると言ったのに。
彼女は大きく息を吸った。甘い芳香が漂っていたが、それも慣れてしまった。
こんな風に、彼の傍に居ることについて慣れてしまうのが怖かった。
「そうではない。シャルルにはどんな景色に映るのかなと思っただけ」
「・・・珍しいね」
彼が眼を見開いた。
「他人がどう思っているのか、気にしない人だと思っていたよ」
「失礼ね」
彼女は軽く彼を睨んだ。彼は今日は完全なオフということで認識しているらしい。
薄手の長袖のシャツには、ペイズリー柄が薄く細かく入っており、すべてが手縫いで刺繍されているという豪奢なシャツであったが、まったく嫌味のない出で立ちであった。薄い色を選んだのは、今日、色濃い色彩を眺めることを計算してのことだと思った。カフスはつや消しをした銀色で、小さくて控えめの円形をしていた。彼の体型にしつらえた細身のパンツにモンクストラップを履いていた。すべてにおいて隙がない彼をみて、誰も溜息を零さないわけにはいかないだろう。
シャルルは少しだけ笑った。彼の皮肉も嫌味も慣れないが、それでも決してこういう時間を厭っているわけではないと思った。そもそも、多忙な彼がこうしてやって来ることにも、意味があると思った。
彼女の居住している首都ではなく、この場所に足を運ぶことを選んだシャルルは・・・マリナとの時間を多く持つことによって、何かを取り戻しているように見えた。

彼女は横を向いた。彼の微笑みがあまりにも染み入るほどに眩しかったから。
「私も気にすることはあるわよ。デッサンする相手が何を思っているのか、どんなことを感じているのか、それを知ってからではないと描けないものよ」
シャルルは薄い唇を歪めて冷笑した。しかし、マリナのそんな言葉を否定はしなかった。
彼が親日家の家柄の出であることは理解していた。外国人でありながら、大変に日本文化に造詣が深い。理解もありそして探究心もある。友人やおそらく・・・ビジネス関係も日本がターゲットなのだろう。時折、こうやって日本に滞在することがあったが、それは決してマリナとのバカンスを愉しむだけに存在する時間ではないことは知っていた。
これが、シャルル・ドゥ・アルディなのだと思っていた。

自分だけに溺れる存在を恋人にしたら、マリナは重荷に感じるだろう？

彼にそう言われたことがあったが、彼は決してそんな素振りは見せなかった。
彼女のためにだけ存在するシャルル・ドゥ・アルディであったのなら、マリナは彼の手を取っていたのだろうか。自分と良く似た価値観の持ち主でありながら、マリナを越えてはるかに高潔で、彼の魂はどこにあるのだろうかと思わせるほどの人物であった。
だから、知りたいと思うのだろうか。だから、傍に居たいと思うのだろうか。

「・・・オレを描きたいと思っているなんて、意外だね」
彼は意外だという言葉に強く重みを置いてそう言ったので、マリナは横を向いた。彼から視線を逸らすことなんてできないのに。
「シャルルを描きたいと言ってないわよ」素っ気なく、言ってみたつもりであったが、シャルルのようにはうまく表現することができなかった。彼女は偽ったり装ったりすることができない。
「でも、目の前に居る人の心情を知りたいだけ。これは漫画家としての訓練よ」
「鍛錬？」
「ああ、それはどうでも良いことじゃない」
マリナが足踏みをした。彼は彼女の思い通りにならない。そして彼女は彼の思い通りにならない。だからこそ、彼女はシャルルのファム・ファタルであるのに。
まったく理解も認識も完了していない彼の恋人に、シャルルは苦い笑いを浮かべた。
「オレにどう見えているかって？」
彼は挑戦的に微笑んだ。彼女はまったく・・・彼のことを理解していないと知る瞬間であった。
しかしそれは憤りが残るのではなく、ただ・・・ただ単に、彼女との問答が始まったと感じるだけであった。チェスは最初に一手で数十手先が読める。けれども、彼女はその先の行動がまったく読めない。それが、彼を面白がらせていることに、マリナはまだ気が付いていない。退屈して鬱屈した日々に彼女は万華鏡のように、こどものおもちゃのように、彼に興味を与え続ける。それを彼女は自覚していない。
「私より背が高いから、きっと、とても近くにいろんなものが見えていると思うのよ」
「それなら、貴女も近付いてみる？」
シャルルはそう言うとマリナに向かって、細く長い指先を上向きにした。
「君が近付けば、それで解決するのかな」
マリナは手を振って断った。
「そうじゃない。私が年齢を過ごしたから感じ方が違うというわけではない」
「そうなると、マリナの記憶の通りかどうかを確認しに来たというこの場所の来訪の意味がなくなる」
そうだろうか。
彼は、マリナの目的とは違う目的でここに訪れている。総合的な判断が働いたと思う。けれども、そこだけではない何かが、シャルルを動かしたことには、間違いがないのだ。

■04

彼は細く長い指を天井に向けた。鮮やかでありながら淡い光の天井を指し、青灰色の瞳を彼女に向ける。高い鼻梁が少し持ち上がった。
「肩車でもするか？」
「結構です」
マリナが頬を膨らませたので、彼は微笑んだ。
「ようやくいつものマリナだ」
「いつもの私って、何よ。・・・知らないくせに」
「いいや、知っているよ。君の知らないマリナも知っている」彼が即答したので、マリナは困惑気味に言った。「何かに見惚れるときには、少しだけ唇を開くとか、考え事をしながら歩くときには、足早になるとか。・・・もっと言おうか？眠っている時の君は毛布を身体に巻き付けてオレに譲らないとか・・」
真っ赤になって、マリナがシャルルの言葉を遮った。
「わかった。わかりました。よくわかりました」
「わかっていない」シャルルはそう言った。肩を竦めた。
「わかっていないよ・・・・オレが君をどう見ているのか、少しもわかっていない」
マリナは口を噤んだ。
彼が何を言いたいのか、理解できたからだ。どれほど愛していても、どれほど愛されていると感じていても、マリナはシャルルではない。
だからその愛の深さを知ることはあっても、愛の深さを同じだけ返すことが出来ない。
だからこそ、愛とは素晴らしものだと思うのだが。人によって違う愛し方があり、同じ向きと速度と温度であるわけではない。シャルルの愛が勝っているとは思わないし、マリナの愛し方が至高の愛であるとは考えていない。
「何よ。それなら、教えてよ。シャルルは、私のことをどう見ているの？」
彼は腕を組んだ。
そして、締まった腕の先を、指先でとんとんと軽く叩いた。
「今日は随分と好戦的だね」
「それは尋ねていないわよ、シャルル・ドゥ・アルディ」
彼女はつんと横を向いた。彼の愛について応えてみろと言われると、彼女は決まってそんな表情をした。わかりきっていることを聞かないで欲しい、確認しないで欲しいと思っている考えが身体中から溢れているので、シャルルは可笑しいねと言って笑った。上品で物憂げな双眸が少し細くなった。
これほど穏やかな時間を過ごすために、彼は日々多忙を極めていると言う以上の繁忙さに身を置いていた。僅かな時間のために、その他すべての時間を犠牲にすることが多々あったので、マリナはしばらくぶりのふたりだけの時間に際し、言葉を発しなくても良い場所を選んだ。
滅多に自分の移り住んでいた土地のことを語ることはなかったが、ここは数少ない、彼女がもう一度訪れてみたい場所のひとつだった。いつか、ひとりでも行ってみようと考えていた場所だった。

あの頃は幼くて、人とうまくやっていけないことに苛立っていた。自分は、誰とでも親しくすると思われていると知って、さらに消沈していた。誰とでも仲良くなれると言うことは、誰とも仲良くなれないということだった。
まだ季節は春で、春の出会いというものはとても重要だった。
幼いあの頃は特にそうだ。
そこに出遅れてしまい、いつものペースで友達を作ることができなかった唯一の時期であった。そんなときに、藤花の路を見た。撓わに咲き誇る藤の華を見て、どういうわけか無言になった。
お喋りでいるよりも、こうして静かに・・・ただ顔を上げて、何かに魅入ることを忘れていたと思った。人に押しつけるだけでは距離を縮められない。だから、余計に、自分と他者との距離について、考えるようになった。

だから思いも掛けない場所で、思いも掛けない人物から「シャルルからみたマリナ」について問われることになり、かなり辟易ろいでいた。彼の深い果てのない愛について、自分が当然のように受け止めるべきではい程に、気高さを感じる。時に、口を噤んでしまうほどに。彼と彼女の間には、時間も、言葉も必要なかった。なんと言ったら良いのだろうか。
しかし、シャルルが、マリナに対して明確なこたえを求めることも数少なかった。彼は幾度か彼女の愛を確かめることがあったが、彼の愛について彼は揺るぎのない信念を持っており、それについて疑念を感じて憂えたり、考察する様をマリナに見せることはなか

った。
何も応えられずにいると、シャルルは溜息をついて上を向いた。僅かに哀しみを滲ませていた。
「わからないから、知りたいの」
マリナはぽつりと言った。
彼女も上を見たが、見つめる先は紅藤や薄藤の昊ではなく、白金の髪の青灰色の瞳の青年だった。
「わからないから、知りたいのよ」
彼女がもう一度そう言った。「シャルルに景色を見せたいなと思う。知らない所に行くのも楽しいけれど、いつかもう一度来ようと思った場所に、シャルルと来たかった。シャルルが何を感じてどんな風にして感嘆するのか、知りたいと思ったから」
彼女がそう言ったので、彼は眼を見開いて彼女をじっと静かに見つめていた。
薄い唇が僅かに震えているような気がしたが、木漏れ日の加減でそう見えるだけなのかもしれない。
「・・・それで、オレのことがわかった？」
「わからない」彼女は肩を竦める。
「私とシャルルの目線は違う。感じることも違う。けれども・・・・その色も香りも光も、違う感想を持っているかもしれないけれど、この場所に一緒に来たよね、と言って、その時の話を、もう一度・・・将来話をしたかった。それだけ」
そこまで言って、彼女は低く呟いた。
「こんな風に誰かと何も喋らずにただただ見上げて歩くのは・・・・私にとってはほとんどあり得ないことなのよ」
彼の吐息が聞こえる。しかし、マリナはシャルルから視線を逸らした。気恥ずかしいと思うし、これまで無言でいたのに、急に多くを話しだしたので、彼女はどことなく居心地の悪さを感じていた。
「何よ、私にだけこれほど喋らせるなんて、シャルルも人が悪いわ」
「君が勝手に喋っただけだよ。・・・オレは黙っていただけ」
彼女は唇を突き出して言い返した。彼に理論や理屈で勝てるわけはないのに。
「これで私のこと、少しはわかった？」彼女はそう言ってやり込めた。シャルルの事は分からない。だから知りたい。無言で・・・こんな風に、花の昊と地の間をくぐり抜けて歩いて行きたい。それだけだ。それ以上は求めていないし、彼のすべてが理解できたと思わない。だからこそ、生涯かけて知りたいと思うのだ。喋っているマリナも黙って居るマリナも何もかもを知っているのに、シャルルはそれでもマリナに尋ねるものだから、彼女はそれで憤慨しているのだ、と自分の困惑に理由を付していた。

日が少し動いて、光が強くなった。もうすぐ、二人だけの閑かな時間は終わりを告げる。彼の時間は限られているから。だからこそ、ここに来たかった。目的は達成された。
「今日はここに来られて良かった」戻ろう、とマリナは言った。あと少し歩けば、もうこの路は終わる。名残惜しいが、また来れば良い。もう一度、と言わず。また、何度でも来れば良いことだ。たとえひとりでも。この無音の空間に身を浸すことによって、音が恋しくなった。
「マリナ」シャルルが彼女を呼び止めた。そして、彼は、彼女にこちらに来るようにと言って、今度は彼の神経質そうな指先を動かしたのでマリナは眉を顰める。そうやって指図するのはやめろと言っても彼はマリナの前では、こういうひとつひとつの稚拙な仕種を改めるつもりはないらしい。他の誰にもしないことを、彼女にだけは見せる。

ほら、彼のことを少しだけ・・・知っているじゃない

そう思った時のことだった。

シャルルが、ひょい、と腰を落としたのだ。膝を落とし、彼はマリナと同じ目線になった。
長身のシャルルと、非常に小柄なマリナとの間には身長差がかなりある。けれども、彼は中腰になり、締まった筋肉をさらに引き締めて、屈み込んだ。
さらり、と白金の髪が音をたてて、マリナの耳の横に並んだので、彼女はまた黙った。

「・・・・オレは君が見ているものを見たいと思うよ。このオレが。どう思っているのか知りたいし、オレの知らない場所を知っている君も知りたい。・・・・同じ視線に並びたいと思う。静かに黙ったままの君を見て、オレも黙る。
マリナ。・・・・これがどんなに大きなことなのか、わかっているだろ？」
囁くような声が彼女の近くで聞こえる。
無駄な会話は一切しないと常日頃話している彼は、それでもマリナの他愛のない話に耳を傾ける。それがどれほど重要なことなのかわかっていた。けれども。
沈黙したマリナの傍で、彼は静かに佇んでいたいと言ったのだ。
「オレのことをわかってないよ」
彼はそれだけ言うと、彼女の頬に唇を寄せた。マリナは茶色の瞳を閉じた。彼の唇が押してられるがマリナは抗わなかった。
誰かに見られているかもしれないという配慮は消えてしまう。この光と香りと花の勢いが彼女を少しだけ・・・・そう、少しだけ、安らがせた。

彼が安らぎ鎮まることはないだろう。けれども、ほんの一瞬だけ。彼の漣が一瞬、凪になれば良いのにと思った。自分がこの場所でそう感じたように。
こうして、互いが黙っていても。それでも、伝わるものがあり、伝わりきれないものについて、追いかけていく日々について考えながら、陶酔する。

彼の躰が離れた。シャルルは髪を掻き上げて、行こうか、と言った。
「また来よう」
その言葉に彼女は微笑んだ。はい、と言った。いつかまた来よう。今度は、また、二人で。
「シャルルの品種改良に役だった？」
「いいや。少しも」
彼は横を向いて、並んで歩くマリナに冷たく言った。
落差が激しいのは今に始まったことではないが、彼があまりにも素っ気ないので、彼女は茶色の髪を揺らして首を傾げた。
光の回廊を歩きながら、マリナは不平を言った。
「シャルルが薔薇の品種改良に、藤の花の特徴を入れたいって言っていたから・・・・」
「マリナ、オレの話を聞いていなかったのか？」
呆れたように、彼が言った。
「ついさっき、フランスにも藤はあると話をしたばかりだろう。研究済みだ。オレが調べたいのは、日本の植樹の技術・・・・オレの話を聞いていなかったのか？」
彼は溜息をついた。じろりと、青灰色の冷たい視線を彼女に向ける。
「黙って歩くというのは、話を聞かなくても良いということではないと理解しているが」
「シャルルの講釈は、聞き流すようにしているので・・・」
マリナが視線を泳がせたので、彼は少しむっとしたようだった。
「ああ、そうか。それなら、アルディ家の庭にも藤があることも、藤のモチーフが入っている我が家の美術品を物欲しそうに見つめていることも、オレが何も知らないと思っているのか？相当目が高いなと感心していたのに」「日本の藤と違うから気が付かなかっただけよ」
彼は呆れたと言った。そしてマリナをやり込める。

「オレは君が藤のスケッチをしたいと喚くから、付き添いに来てやっただけだ。
・・・ここには珍しい藤の種があって、国宝級の値段がつく枝があるから、マリナがそれを折らないかと思って、気が気じゃなかったよ。・・・黙って居たのは、そのせいだ」
「失礼ね・・・・もう大人だし、そんなことはしない。それに。それは昔、卒業しました」
「何だと？」
彼が眼をつり上げて絶句した。彼女は満面の笑みを浮かべていた。
「一体何をしたんだ」
大したことではない、という信用できない前置きがあった。
「ここには昔よく来ていて、蔓をロープの代わりにしてぶら下がって遊んでいたのよ。
転校したてで、友達いなくって、寂しかったのね。若気の至りってやつ。で、勢い余って、蔓ごと折ったことがあって。それ以来、何となく足が遠退いてね・・・ひとりではもう来られないと思っていたの」
この場所は樹齢が高いものを寄せ集めた藤棚の回廊であり、これらのどれを折っても相当な額の損失になるだろうと彼が計算する間に、マリナは早口でまくし立てた。
彼は小さく舌打ちした。
静かに歩いてください、歩くだけにしてください、と必要以上に書いてある立て看板の意味を知った。

「・・・シャルル。私、ここでやり残したことがあるの」
「蔓を折って枝を枯らして荒らして、その上、何をしたいんだ」
彼女は笑った。マリナはいつもシャルルの予想を超えた行動をする。次の瞬間には、ぱっと茶色の髪が散った。
満面の笑みで微笑むと、その瞬間に彼女は走り出していた。
「この中を、走ること！」
走らないでください、と書いてあるのに。静かな鑑賞も台無しだった。一瞬で、静寂が破られる。バタバタと足音がして、マリナが光の路を走り抜けていく。
彼は呆気にとられて、彼女の背中を見つめた。
どんどん、彼女の姿が遠くなる。

彼は苦笑いをした。体力にも運動能力にも差があるから、すぐに追いついてしまうだろう。
だから、少しだけ時間を置いた。
その間、一度だけ、光の昊を眺める。

彼女が静かに歩こうと言った場所。そして、彼の知らない・・・彼女の静寂を知っている想い出の場所に、彼を連れて行きたいと彼女が願ったから。だから、やって来た。
それはどんな時間にも代えがたい。

ああ、そうだった。彼は笑った。

藤の花言葉は・・・・「至福の時」「懐かしい想い出」・・・・それから「恋に酔う」だ。

彼は今、愛に陶酔していた。至福の時を迎えていたから。

革靴の踵の音を鳴らして、彼は駆けた。走ってはいけないというのに。彼は駆けていた。もう二度と、彼女を離さないと誓ったから。
彼は、光と花の溢れる回廊を駆け抜けた。彼は彼女の前でだけ、少年に戻る。
挑戦的に微笑むシャルル・ドゥ・アルディは、甘く香る空気を掻き分けて風を作った。
疾走する体勢になった。彼女だけが、彼にそうさせる。

わかってないな、わかってないよ、とまたひとり、呟いた。
そして、走った。全力で。たとえファム・ファタルでも手加減はしない。
彼は大きく息を吸って、身体を傾けて、笑い声を上げながら少女のように走っていくマリナに向かって行く。

彼は走る。
彼女の背中をつかまえるために。

風になった彼らに呼応するかのように、藤の房華が揺れた。

（FIN)

afresh and more

afresh or more

■01

スプリンクラーが水を撒く音と、僅かに芳る水の香で我に返った。
焦点を合わせると、青々とした芝生や植え込みが、水を受けて彼ら独特の生命の吐息を仄かに立ち上らせている。
夕刻と言えども、まだ空の水色が薄くなっている程度で夕焼けの茜色も見えないし、夏の空気は撒いた水をあっという間に蒸発させてしまっている。
今年は乾燥しがちで日陰に入れば割と涼やかであるパリでも、異常気象だった。
温暖化現象なのだろうか。
こうして・・・年を追うごとに、都と名のつく場所から、徐々に季節を奪われていくのだろうか。
幼い頃の記憶とかけ離れていく現実との格差に、ただただ戸惑いを感じる。
それでも、夏は暑くて・・・そして夏の空は薄い青灰色をしており・・・それは薄い色なのにとても眩しく、夕刻のアルディ邸は涙が滲むほど懐かしく感じるくらい美しい。

美とは、懐かしいものだ。

彼女の師がそう言った言葉を思い出していた。
新たなる領域に踏み込む藝術というものはいつも斬新で新鮮でなければならない、という説に抵抗した説であった。しかし、彼女の師はそれに拘らない学問に身を置いている。

マリナは少し前まで滞在していた日本の空気を思い出していた。
高温多湿のあの国でも、異常な暑さが連日、取り沙汰されていた。
しかしこの場所のように、静かではない。
あの国では・・・何処に行っても、音がある。
必ず何かが聞こえる。
無音状態をあの国で再現することは難しい。
いや、音がなければかえって不安になる。

色と、音と・・・匂いのある世界を観じて（＝眺めること）マリナ・イケダはようやく呼吸をすることができる。
だから、この庭園は、息苦しいけれども懐かしい。
・・・懐かしいのに、息が苦しくなる。

ここには・・・ここには彼が居ないから。
彼女が最も懐かしく感じる美の化身が居ないから。

■02

彼と彼女のすれ違いの生活をどれほど続ければ、結論が出るのだろう。
最近、日本に帰る前に、いつもシャルルにそう言われる。
遠回しにごく柔らかく、彼はいつも言葉を変えてマリナに質問するが、彼女はいつも決まって「私の帰る場所はシャルルよ」と言って出発する。
互いに幾つもの憂いと悩みと・・・様々なことを乗り越えて、ようやく・・・

ようやく。
一緒に居るということの意味を知った。
愛をするということの意味を知った。

それなのに、マリナはアルディ邸の彼の私室で寝起きすることを断り、自身のアトリエを持ちたいからという理由を取り繕って、自分の空間を確保した。
最奥の彼の私室で過ごすには・・・彼女にはまだ勇気も覚悟も足りていない。

彼と一緒に暮らす。
この館で。
それが何を言っていることなのかは、そういったことに疎い彼女にもよくわかった。
そして、それを実現するために、何を犠牲にしなければいけないのかも。

ふたつ失うつもりで、ひとつ手に入れろ。

誰の言葉だろう。

懐かしいほどの美が彼女に微笑む度に、その言葉が頭をよぎる。
しかしひとつ手に入れる度に・・彼の愛を実感する度に、失うものはひとつやふたつではない気がした。
わかっている。わかっている。
快適さと便利さだけを享受するつもりはない。

「ORかANDを選択するときには、こたえは決まっている」
シャルルはよくそう言っていた。
この愛の意味について彼は深く考えている。
彼はフランスの華と呼ばれる程に何もかもが完璧であるのに、この問いに関しては、永久に計算し続ける。

難しいことはないはずだ。

でも・・・シャルルは答えが出ても再計算を始める。
白金の髪を掻き上げて、物憂げな上品な青灰色の瞳を、マリナに向ける。

■03

日本から戻るときには、いつもシャルルは邸に居ない。
マリナの帰邸時間を知っているはずなのに、彼はいつも・・・居ない。
見送るときには、彼女の背中を見送るのに。
彼女が・・・シャルルの背中を見送ることに対して、今もなお、とても深く憂えていることを知っているから、彼は・・・シャルル自身をマリナに目送させることはしない。

それでも、彼をこうして待つ時間が短くても・・マリナはとても居心地の悪い思いをしている。冷遇されているわけではない。この家の者たちは一様に親切だった。
マリナが・・いつか、シャルルの寝室でともに休むことの出来る唯一の人物であるということを知っているからだった。
彼は邸の寝室では誰も泊めたことがないのだと言う。
内緒ですよ、と誇らしげにシャルルの従妹はマリナに囁く。
彼は、友人でさえ親族でさえ、ごく限られた者だけしか出入りできない。
その言葉の裏は、はっきり聞かなくても、もう理解できていた。
・・・誰も。
誰もシャルルとともに彼の寝室で眠ることが出来ない。
マリナ以外には。
ここに滞在させようとシャルルが言った女性は居ないということである。
それが嬉しいのではない。
・・・ただ、ただ。
自分がシャルルの運命の人であるということが、今になってもマリナには・・・とても大それたこととして感じていた。

どうして、あたしなの。

そう言って涙を流した若い頃を思い出していた。
今は、そう尋ねることはしない。

どうしてあたしを好きなの。
どうしてあたしを好きになったの。
どうして・・・

それは尋ねないことにした。
彼がマリナに捧げる愛には、理由があってないから。

愛に堕ちるには理由がある。
理由に堕ちる愛はない。

その言葉を噛みしめたいと思う。ただ、まだ、彼女には難解な命題だった。

■04

ぱしゃり、とまたスプリンクラーの水しぶきが、マリナの腕にかかった。
彼女は慌てて立ち上がった。
夕刻には水撒きが始まるので、中庭を離れるように、と言われていたことを思い出した。

日が長くなった、と思っていたら、日が短くなっていた。
彼女がここを出発する時には、空の色がこんな色だったときには・・・もっと違った景色が広がっていたのに。

夏至の頃と違い、夕刻と最も暑い時間とは時間差が生じている。
彼だったら、南中する高度や気温の変化や・・・様々な情報から「今年は平均値より幅のある気温差だね」と涼しい顔で言うに違いない。

彼女の唯一の美中の美は、最後に会った時に・・笑っていた。
高慢だと感じるくらいに、誇り高い微笑みを漏らしていた。
あまりにもそれは綺麗だったので、マリナは困ったように首を傾けた。
「シャルルは綺麗ね・・・溜息が出る」
彼の唇を受けても、彼の腕の中に居ても、マリナはいつも・・・・ふと気がつくと・・・夕暮れや朝焼けの前の一瞬の空のような目の色をしている人が、自分を見つめているので、顔を赤くして視線を反らしてしまう。
造作の整った色素の薄い人は、彼女の母国語を流暢に操って言った。
「そんなに・・・オレにもっと愛されたい？」
マリナが真っ赤になって叫んだ。
「何よ、それ」
彼はくすりと声を漏らして笑った。
「退屈しない人だね、君は」
「シャルル、意味がわからないわ」
彼がマリナと片時も離れたくないという気持ちを越えて、彼女の背中を見送る理由を、マリナは知っていた。
かつて・・・かつて、彼を見送ったから。
今度は、一生分、彼が彼女を見送ろうと思っていることを、マリナは知っている。
「・・・君の国の言葉で言うところの『惚れ直した』？」
瞬間、マリナの顔が更に赤くなって、朱を通り越した色になった。
シャルルはマリナに向かって、笑い声を漏らして、満足げに言った。

「君がどこにいようとも・・・オレに戻る。オレに還る。いいか・・オレの言葉は絶対だよ、マリナ」
「絶対はあり得ないでしょう」
彼は冷笑した。
「いいや、それは君の国に良くある価値観に過ぎない。・・・オレは間違えないよ、マリナ。
君はオレと距離を置くけれど・・・そうするたびに、何を手に入れて、何を捨てるのか、よく考えてご覧」
謎めいた言葉を言って彼はマリナを見送った。

■05

余裕と自信に溢れたシャルルは嫌いではない。
そして、彼は彼女にとって、数多居る「好きな人」ではない。
すべてであり「愛をする人」なのだ。
彼だけが、彼女の中に入ることを許されているし、彼女だけが彼の狂気を包むことを許されている。

愛とは赦しであると聞いたのは、一体、いつの頃だったのだろうか。

相手に何かを許すことではない。
自分が何を許すかということだ。

自分の何かを相手に委ねることであり、自分の一部分を解放することであり・・・何かを手放すことなのだ。

スプリンクラーの勢いが、徐々に強くなり、回転速度が上がっていく。

マリナは身体中で水しぶきを受け止めながら、今度こそその場を離れることにした。
ここは小高い丘の上で・・・アルディ邸の、シャルルの私室の窓がよく見える。彼が戻ってきたら点るはずの室内灯を見守るはずだったのに。
・・・思いもかけない猛追に辟易しながら、立ち上がり、水分を欲して白っぽく変色した、乾燥した腰部の泥や小芝の草を払いのけながら、丘の斜面を下りていく。
まだ日があるので、スプリンクラーの水しぶきが、ところどころ、各々の放物線の頂点で虹の煌めきを創っていた。

シャルルは、いつも・・・彼女を見送る。
マリナは、いつも・・・彼を迎える。
ただふたりで朝を迎えて流れ星に目を細めて・・・・それだけではない明日の奇蹟について、語ることが・・・まだ、怖かった。

愛をして、愛をすることによって、何を失うのだろうか。
失うものがわかっていれば、気持ちの整理がつくのだろうか。
いや、違う。
失うものが何であっても、愛をすることを止めることが出来ないからこそ・・・こうしてマリナはシャルルの胸に飛び込んだ。

■06

得るとか失うとか、そういったことを越えて・・・マリナはシャルルに向かって行った。
あの邂逅がなければ、彼女はシャルルに向かっていくことはなかった。
小菅で見た背中を思い描きながら・・・ずっと、想像の彼を描いていくことだけしかできなかっただろう。

誰かと恋愛をしたかもしれない。
誰かと結ばれたのかもしれない。

でも・・今は、誰でもない、シャルル・ドゥ・アルディの傍に居る。
そうしたいから、そうする。
いらないと言われても。
彼女が一緒に居たいから・・だからまたここに巡ってくる。

マリナは彼の姿を思い浮かべた。
もう・・・少女のような嫋やかさはない。
白金の髪の下の青灰色の瞳は、深く切れ込んでいて、男性らしい卓偉な二重瞼になった。
高い鼻梁に常に微笑んでいるかのように口角が心持ち上がった酷薄そうな唇。
男性的であるのに、肌のきめの細かさは性を感じないほど滑らかだ。
柔らかい髪の毛は・・・以前のような女性的な長髪ではなくなっていたし、肩も広く胸も厚い。
着やせするのは、体質なのか、それとも彼がフェンシングで躰を鍛えているからだろうか。
なぜ、彼が自分を定めたのか・・・その理由を彼の口から尋ねることはしなかった。

愛されていることの確認は必要ない。
愛しているか・・・そう。
どれだけ、彼女が彼を愛しているかということだけが必要だった。

マリナはシャルルの姿を思い浮かべた。
もう一度。目を瞑って・・・息を大きく吸う。
孤独で誇り高く・・この上なく優しい・・・マリナの少女の頃からの知り合い。

彼が、マリナが居ないときにだけ煙草を吸っていることを知っている。
彼が、マリナが居ないときにだけ温室の薔薇の品種改良に手を加えていることを知っている。

■07

彼の帰邸を待つ時間が、マリナ・イケダの苦難の時間であった。
彼が無事に戻る。それだけを祈る。
愛を知ると祈りを知る。
自分でない誰かのことを思い浮かべて・・・・願うのだ。
無事に戻りますように。
無事に逢えますように。
これまでなら、どこにでも随行したのに。
彼の苦境の時には、ともに・・生死を分かつ重大な場面にでさえ、彼女は立ち会ったのに。

彼の顛末を見守れ、とあの人に言われたのに。
今は・・それを護ることも難しい。

彼の言っていた「シャルルの傍に居ろ」というのは・・・当時のあの言葉は、そのときに感じた意味とはもっと違っていたのかもしれない。
今は、そう思うこともあった。でも今となってはもう、聞き返すこともできない。
だから自分で探さなければ行けない答えだった。

マリナは丘を下りきって、左手に聳える薔薇だけを育てている温室にちらりと目を遣った。
シャルルはいつも・・ここで薔薇の品種改良をしている。
彼の唯一の趣味だ。
彼は多趣味で・・・多方面に造形が深いが、本当に好んで継続しているものはとても数少ない。
苦難の道を歩んできたシャルルが唯一・・・捨てなかったものだ。
ファム・ファタルと名前をつけた薔薇を捨てることが出来ない、と聞いたとき。
シャルルから聞かなかったことが更に彼女の身を締め付けた。
シャルルは彼女を拘束しない。シャルルは彼女を自由にする。
シャルルは決して・・・愛を欲しない。いつも愛を与えるだけだった。
そんな彼の大きな愛を本当に理解することができたのだろうか。
大人になった今でも・・・そう考えることがある。
彼と一緒に居続ければ、この疑念は薄れていくだろう。
それくらい、彼の愛は激しく色濃く・・
マリナの戸惑いを忘れさせるほど甘美だった。

マリナは憂悶としながら歩みを進めていたが、やがてすぐに足を止めた。

シャルル。

マリナは呟いた。
シャルルが、ふっと温室を横切ったのだ。
見間違えようもない。彼が・・・戻ってきている。

■08

彼の戻りはもっと遅いはずだった。
シャルルの予定というものは、邸内でさえ全体の流れを知っている者はほとんど居ない。
自らの業務に係るシャルルの予定のほんの一部しか皆は知らない。
けれども、マリナには逐一すべての予定が連絡されている。
モバイルを持たないのに、毎日決まった時間に送られてくる膨大なスケジューラーのインポートファイルを開いてみたことはない。
彼から送られてくるメールを開かないまま・・・日付だけが違うタイトルの未読メールが増えていくばかりだった。
それでは意味がないから、特にそんな手間をかける必要はない、とマリナはいつか懇願したことがあった。
彼の日程は一日として同じものはなく、文字通り分刻みだった。何日も先のスケジュールまでが詰まっており、それらが確定される度に彼女のメールアドレスに届くので、いつしかマリナには予定の通知は不要だと言ったことがあった。
私には難しいことはわからないから、と言って彼女が笑うと、シャルルは苦笑して大きな手の平で彼女の小柄な肩をぽんぽん、と軽く撫で擦っただけだった。
「難しい事なんてないよ」
シャルルの言葉がちくりと胸に突き刺さった。
彼女が知ろうとしていないことをシャルルが見抜いているのは明らかだった。
彼の多忙を極める日々を把握していてもなお・・・彼女は日本に帰ることを止めはしないことを、互いが承知していたから。
シャルルは・・・・賛成はしていないのだろうが。

目の前を横切ったシャルルが目の端に消えていく。
慌てたマリナは、小高い丘を駆け下りた。
スプリンクラーの水を帯びて泥濘が足に纏わり付くが、気にせずに大股で歩いていたのに、やがて小走りになっていく。

それは・・・愛の速度に似ている。
最初はゆっくりと、大きく・・・次に速度を上げてその人に向かっていく。
そうなるともう誰も・・・自分でも止められない。

我を忘れる恋に浮かされた時もあった。
大きく包まれる愛に慢心していた時も、不安で涙したときもあった。
でも今はもっと違っていた。

シャルルの言葉が響く。
彼と距離を置く度に、何を捨てて何を得るのか・・・わからない。まだ、わからない。

■09

「シャルル？」
大急ぎで薔薇園を横切り、併設されているガラス張りの温室に向かう。
そこまでは一本道で、誰にも会わなかった。
そこで気がついた。
まだ外は明るくて・・・邸の電灯は点されない。
だから目の弱いマリナが気がつかなかっただけで、本当はシャルルは予定を変更して帰ってきたのだ。彼女が帰邸している旨の伝言は、受け取っているはずなのに。
シャルルは彼女を探しに来ているのかもしれない。
人を遣らせてマリナを呼び出すことはしない。
彼はいつも彼女には自らが動くように決めているようだった。
日本に来たときもそうだった。
彼は本当に大切な者には・・・掛け値のない愛を注ぐ。
それが、シャルルなのだ。

静かな・・静かな庭園だ。
ここは本当にパリ16区なのかと疑うほどに。
だから彼女は怖いのだ。
音のない世界がまるで・・・創られた御伽の国のような気がするから。
彼はたったひとりで、こんな広大な場所で・・・マリナを待っているのかと思うと、彼女の心魂が揺れる。

かつては、日本に頻繁にやってくることが出来たのに。
今では彼の自由になる時間は・・・こうして彼が入室している間は誰も入り込むことの出来ない温室で、薔薇の品種改良に執心している時だけなのだ。

マリナは時折、彼に残酷だね、と言われることがある。
決して「愛している」と言葉にしないマリナに向かって、シャルルが少し悲しそうに言う時があった。
彼の僅かばかりの抗議だった。
幼い恋愛のように、無邪気にじゃれ合って彼だけを見つめることが出来たら、どんなに楽だろう。
彼はいつも、待っていたのに。
ひとりでこの広い邸に戻り、ひとりで過ごし・・・

「オレが・・・・どれほど、君を行かせたくないのか・・どれほど待ち侘びているのか、思い知ると良いよ」
シャルルの言葉を思い出した。
思い知る？
・・・・こんなに・・・これほどまでにわかりきっていることなのに、彼はマリナに尋ねる。

■10
マリナは、薔薇園の温室の入り口で足を止めた。
急に足を止めたので・・・勢い余って、前に傾倒しそうになる。
額にはいつの間にかうっすらと汗が出ていた。
止まると余計に吹き出してくる汗を手の甲で軽く拭った。
ガラス張りの扉には、乱れた髪の自分が映っていた。
彼女は・・・足を止めて、人の気配がする中に入ろうとする前に、自分の姿をしげしげと見つめた。

乱れた茶色の髪を慌てて両手で軽く整えるが、汗を含んだ手の平ではうまくまとまるはずはなかった。
化粧っ気のない顔に、ひどく小柄な女性がそこに立っていた。
軽易な服装だった。
シャルルはいつも隙のない服装で彼女を迎え入れる。
彼はいつも・・・完璧だ。配慮しているのではなく、自然にそう振る舞っている。
マリナと生きてきた何もかもが違うのだと、こういう些細なことで思い知る。
そのときに、同じであることの安心さを、マリナは捨てる。
違うから好きになったわけではない。同じだから好きになったわけではない。
価値観が違うことによって生じるいろいろな障壁を乗り越えようと思っている間は、これらの事実はマリナの心を動かすことはない。

でも・・・
でも、恋をして愛をして、そしてマリナは大人になった。
だから、シャルルの瞳に映る自分が、あのときの・・・トルソのままであるとは思えなかった。
あのときの無垢な彼女は、今のマリナ・イケダの中に眠っているかもしれないけれど、そのままで表出することはもう・・・ないだろう。
君の自由奔放さの少しでも恥じらいがあればね、とシャルルがマリナをからかったこともあった。
でもそれでも良いのだ、と彼はすぐに付け加える。
シャルルの青灰色の瞳に映る自分は・・・彼をがっかりさせないのだろうか。それだけが、怖い。

半透明の自分の姿なのに、いかにみすぼらしい姿であるのかがよくわかった。
芝生に座り込んだり、ベンチに寝転がったりしてシャルルの室の電灯が光るのを待っていたからだ。

誰も居ないとわかっている館は単なる容れ物でしかない。
だからそこの中で待つのは耐え難い苦痛だった。
誰かを待つ。
シャルルを待つ。
それが悲しくて・・・・こうして時折逃げ出すように、日本に行く。

■11
モザンビークという遠い国に行った友人達を見送れなかったことも、彼女の憂因だった。
彼らは皆・・
マリナのために。
シャルルのために。
誰かのために自分の命の危険を顧みず発った。
その心根が嬉しかったが、同時に悲しかった。

自分がどうするか、彼らはよく承知していた。
だから。
手紙だけを残して行った。
自分を置いて行った。

そしてマリナが喜んで送り出すわけではないと知っていたから、ある者は黙って行った。
ある者は許してくれと言って行った。

彼女が一緒に行きたいと言わないように。

もし・・・もし、シャルルなら、どうしていただろう。
彼に「もし」はあり得ない。
けれども、シャルルなら・・・マリナを連れて行ったと思う。

誰も彼もが・・・危険であるのにも関わらず、一緒に行こうと言わなかった。

・・・どうなるかわからないけれども一緒に行こうと言わなかった。
そう言ってくれた人もいたが、本当に正直に・・・彼女を護りきれないかもしれないからと言って、それでも一緒に行こうと言ったのは、シャルルだけだった。

護ってやるから、と・・・最初に言わなかった。

安心しろとは言わなかった。
完璧な人は約束しなかった。

どこにでも飛び込む用意はあった。
何も準備しなくても、身なりがどうでも、自分のこれからがどうなろうとも。
今、そうしなければ一生悔やむと思う選択を誤ったつもりはない。

だから彼女は着の身着のままで、あちこちに出向いた。
何もなくても良いと笑って出歩いた。

それが今はどうだろう。
髪を整えて、彼に逢うことを考えるだけで、胸の動悸を鎮めることすらできない。
これがシャルルの愛している自分なのだろうか。これが・・・彼の求めるファム・ファタルなのだろうか。
シャルルの求めるままの自分という役割を演じるつもりはない。
彼女の代役は誰かができたとしても・・彼女そのものには誰も成り代わることが出来ない。

■12

マリナは温室の入り口で・・・足を止めて、入り込むことを躊躇った。

ここはシャルルの温室で・・・聖域だった。

マリナが知らない時代のシャルルを知っている場所だった。
マリナの知らない・・・シャルルを知っている場所だった。

そして、シャルルはそこに彼女さえ立ち入ることを赦さない。

それが・・・彼に惹かれてやまない理由なのだと思う。
年齢も国籍も環境も何もかもが違うのに。

彼の中には、絶対的な聖域がある。
誰も踏み込めない。
そこには・・マリナでさえ踏み込めない。

けれども、同じように彼女にも踏み込んではいけない領域がある。
その最も近い場所に入ることを赦されたシャルルでさえも、入れない場所がある。

そんな領域を感じながらも、それでも・・・彼は来い、と行った。
・・・・一緒に行こう、と行った。

マリナは入り口で躊躇ったままだった。
一歩中に入れば、温度も湿度も行き届いた完璧な空気が彼女を迎え入れるだろう。
こちらの外気よりずっと低いから、風が吹くかもしれない。
マリナが帰邸していることを知っているのか知らないのか・・・シャルルは温室に出向いている。
こちらから感じる人影は・・間違いようもなく、あのシャルル・ドゥ・アルディのものだった。飛んでいきたい衝動と・・・堪えなければならないという声が葛藤する。
彼の静かな時間を破ることはできない。
彼の持っている彼だけの時間を大事にしたいから・・・マリナは彼を敢えてひとりにするのに。
すべてのプライベートの時間を、マリナだけに費やして燃やし尽くしてしまいそうだったから。
マリナは、それが怖い。
生命そのものが奇蹟と呼ばれる、彼の時間を・・・彼女のためだけに使って欲しくない。

得るものもあれば、失うものもある。
・・・失うものに畏れないから何かを得る。

シャルルの言葉が響いた。
あれは・・・彼女に向かって言った言葉ではなく、自分への言葉だったのだと思った。

■13

「ぼんやり突っ立っていないで、入ったらどう？」
そう言われて、我に返った。今日で2度目だ。
あまりにも不意のことだったので、一瞬息を止めてしまう。
次に、肩を大きく上げて・・・軽い驚嘆の声を漏らした。
見透かされたような、それでいて知っていたようなシャルルの声だった。
久方ぶりに聞く声だ。
懐かしい声。
聞きたかったのよ、と伝えられないほど、綺麗な声。
そうだ。確かに、美は懐かしい気持ちにさせる。

「この暑い夏の気温は、日が陰ってもまだ涼しくならない。・・・ガラス戸の前でどのくらい外気温と戦っていられるかどうか、時間を計った方が良かった？」
辛辣なそれでいて流暢な声がして・・・シャルルの声がした。
姿は見せなかった。
入り口の両脇には、調温のために背の高い鉢植えがあり、小柄なマリナは彼の姿をその位置から見つけることが出来なかった。
何か、戸口で作業をしているようだった。
扉は足で開閉を操作できるように自動ドアになっていたが、今は手動にセットされていた。だからマリナが近くに寄っても開閉音で彼女の気配を知らせることはなかった。

「どうして、私だとわかったの？」
マリナが扉を開きながら、そう言った。
会話は急に始まった。
手動の扉はかなり重い。
圧力可変式の可動扉は、少しだけ開いていた。
だからシャルルの声もはっきりと聞こえた。
扉に手をかけながら、マリナは言うと、すぐに返事があった。

「足音がしたから。・・・普通、オレがここに入って、扉を外から開かないように手動ロックをかけてしまえば、誰も入ってこないし誰も近づかない。・・・マリナ、君以外はね」

ボイラーや空調音が障ると言って、温室の中の音は漏れないように遮音性を高くしてあった。
こうして扉の中の音は漏れないようにしているのに・・・彼は少しだけ、扉を開いていたのだ。
内線電話や携帯電話でマリナが何処にいるか、誰かに調べさせるか、シャルルが確認すれば、すぐにわかることなのに・・・彼は少しだけ、扉を開いて待っていた。
僅かに開けた場所から、扉の前に立つと温度差で風が吹いた。
整えたばかりの茶色の髪が揺れて、前髪が乱れたが、マリナは構わずに扉を開ける。
軋む音さえこの庭園では吸い込まれてしまうようだった。
音もなく重たい扉は開いたが、一度動きを加えると、後は比較的楽に動きだしたので、「手伝ってくれても良いじゃない」と軽口を叩いてマリナがするりと入り込んだ。

■14

そこには、マリナが逢いたいと思っていた人が居た。
彼は薔薇の状態を見に来ただけのようだった。先ほどマリナが見かけた時からそれほど時間が経過していなかったはずなのに、彼はもうひととおりの作業を終えてしまっていたようだった。
いつもなら別の者がつけるはずのチェックシートに最終確認のタイムスタンプを押しているところだった。
ここはすべて制御棟で管理されているので、クライアントマシンの小型ディスプレイで、空調管理から薔薇の状態までを一目で検索できるようになっていた。
シャルルはディスプレイに指先を伸ばし、軽くタッチをして、この時間の検査を終えた旨を送信していた。
間もなくここの照明も、夜間モードに切り替わる。
整った横顔が見えた。
淡い照明の下に照らされるシャルルの姿は、本当に・・美しい。

「・・・君なら、大声で叫んで、走ってくるかと思っていたから」
「見ていたの？」
「見えたのさ」
マリナが赤くなって叫んだので、シャルルは薄く笑ってそう切り返した。
しかし、マリナが入り口近くでしばらくの間、シャルルに近寄ることもなく、ぼんやりと立ち竦んでいたので、彼はすぐに横を向いて、マリナに物憂げな青灰色の瞳を見せた。
マリナが唇を半開きにして・・・ぽかんとして口を開いたまま茶色の瞳を大きく見開いて瞬きをすることさえ、忘れてしまっているようになっていた。
それなのに、顔は赤い。
遠目でもわかるほどに、彼女が緊張し、紅潮しているのがわかった。

「・・・・・何？」
「ううん」
「マリナ、腎臓でも悪いのか？顔色が・・・なんだか赤いというより赤黒いぞ」
「失礼ね。至って健康よ」
「それなら・・・日焼けでもしたのか？」
「それほど長い時間に日に当たることはしていない」
「だったら理由を言えよ。・・・・自分でわかっているんだろ？」

彼は苦笑いしながら、片付けを手早く済ませると、シャルルの身長に合わせて創られた作業台の縁に寄りかかって、腕を組んだ。
強ばった笑顔しか見せないマリナに、シャルルは溜息をついた。

「オレがマリナが居なくて、何をしているのか知りたかったのか？・・・普通に生活しているよ。戻る時間くらい知らせろ。迎えを遣るといつも言うのに、どうして君は・・・」
彼の小言が始まって、整った顔がどんどん白くなっていくので、紅潮したマリナと対照的になった。彼が怒っているのはわかっている。
いつもふらりと出掛けて、ふらりと戻ってくるマリナの行動については不承不承許可しているのだが、彼女がひとりで行動することに異議を申し立てているのだ。

■15

そこで彼は言葉を句切った。マリナが何も言葉を発せず、絶句している状態だったからだ。シャルルは白金の髪の下で、彼の長い睫をゆっくりと瞬かせた。
マリナの状況が把握しているのに理由がわからない。

「・・・マリナ？」

シャルルがそこで様子のおかしい彼女に気がついて、静かに近寄ってきた。
彼は、グレーのデニムパンツを履いていた。
そして、石竹色のシャツを着ていた。
七分丈で、ぴったりした布質のもので、彼の逞しい躰が露わになっていた。
襟刳りが僅かに濃い色合いで、彼の髪の色や眼の色に良く似合っている。
シャルルは、最初は、マリナがこの格好が気に入らないのかと思った。
彼女の前ではこういう装いはしない。
オフを一緒に過ごす時でさえも。

次に、彼女が別の理由で憤っているのかと考えた。
久しぶりに逢うのに。
彼は彼女の傍に行かなかった。
それを怒っているのかと思った。

もうすぐ咲きそうな新種があった。
彼女が帰ってくる時に合わせて開花を調整していたのだが、予定を変更して帰ってきたと聞いて、再調整をしていたのだ。だから手が離せなかった。

でも。

彼が作業している時には話しかけることはしない。
しかし、それが終わったと告げて、後始末をしている様子は見えてないということはないだろう。
それなのに、なぜ・・・彼女はああして入り口近くで立ち尽くしたまま、放心状態で居るのだろうか。
そして、彼女は理由を言わない。

「マリナ？」
シャルルが彼女の名前を呼んだ。
「はい」
あっさりと返事をしたので、シャルルはほっと安堵の息を漏らし、そして大股で彼女に近づいた。
「そこを開け放していては駄目だ。空調が乱れる。・・・閉めるか出るか、どちらかを選択してくれないか」シャルルが機械的にそう言うと、マリナはそこで茶色の瞳を激しく瞬きさせた。そして・・・次に、シャルルから目をそらし、慌てて「出るわ」と言って背中を向けた。
「邪魔してごめん。・・・一度、部屋に戻るね」

■16

「待てよ」
シャルルが近づいて・・・彼女の腕を摑んだ。
マリナはまだ紅潮している。その様子を見て・・・シャルルは微笑んだ。
彼女が憤っているのであれば、同じ状態では話が通じない。
・・・シャルルは冴えた瞳をマリナにじっと注いだ。
「シャルル。私、ずっと外に居たから・・・汗が冷えて風邪ひきそう」
「それより説明してくれ。マリナ」
彼の先ほどの問いかけに対して、マリナがまだ理由を言っていないことを指していた。
マリナが目元を赤くして、眼を充血させている。
少し涙ぐんでいるようだった。

「何をそんなに動揺しているのか・・・理由をはっきりしてくれよ」
「シャルルでもわからないことがあるの？」
「誤魔化すな」
シャルルが腕をつり上げたまま怒気を含んだ声でそう言ったので、マリナが少し下唇を突き出して、黙り込んでしまった。
「体調不良になったら、オレが治療してやる。それよりオレは気が長い方ではない。さっさと言え、マリナ」

身なりを気にするマリナではないのに、それを口実に退散しようとしている。

・・・やがて、しばらくにらみ合っていたが、マリナが渋々と言った様子で、ぽつりと言った。

「もう一度・・・」
「何だよ、はっきり言えよ。奥歯が虫歯なのか？」
シャルルの言葉に、マリナはきっと顔を上げて、彼の顔を見つめた。唇を噛んでいる。
とても悔しそうだった。

「・・・もう一度、好きになったの。
シャルルに見惚れてしまって、呆然としちゃったのよ。
だって、その服・・・・ルーブルに行った時と同じだよ・・・」

何かを失って、何かを得た。そうだろうか。
シャルルは自分がマリナに問いかけをしたことを思い返していた。
しかし、そうではない。彼女は・・・彼女は・・・。

シャルルはその言葉を聞き終わらないうちに摑んでいた彼女の腕を引いて自分の胸に寄せた。
あの時にはそうできなかったことだった。でも、今はできる。いや、違う。
そうしたいからする。躰が自然に動き・・・彼女の体温を感じたいと全身で叫ぶ己を調整することができない。薔薇の開花のように、調節することができない。

■17

マリナがここに戻ってきたことを確認する。
ただ、それだけなのに万感の思いを込めて、彼は言った。
茶色の髪に顔を埋める。

彼女の茶色の髪からは・・

土の香りがした。
水の薫りがした。
陽の匂いがした。

彼女は・・・シャルルのファム・ファタルで、大地に咲く花なのだ。
マリナはひどく小柄だ。
彼は大人になって・・・・更に逞しくなり男性的になったのに、マリナは少女のまま時を止めてしまったようだった。少し背も髪も伸びても。顔つきが少し変わっても。
それでも、シャルルの瞳に映るマリナ・イケダという運命の人は、いつも変わらない。
そしていつも変化している。・・・不思議な人だ。

シャルルがぎゅっと彼女を抱き締めたので、マリナが声を上げた。
力加減を考えなければ、それこそ彼女の躰は壊れてしまう。
彼女の体温と鼓動が伝わる。
温室の加減された生き物と違う、強い生命の息吹を感じる。

「・・・おかえり、マリナ」
「・・・ただいま、シャルル」

なぜ、彼女が顔を赤くしていたのか。彼は微笑んだ。

そうだった。
あの日。ルーブルに向かった日は、こんな格好をしていた。
そして様々に・・・奇譚とも言えるような出来事をともに経験した。
あのときはこういう風に、アルディ邸の薔薇園の温室で抱き合うことになろうとは思わなかった。そうなると良いなと思ったが、そうならないだろうとも思っていた。

彼女が「もう一度好きになった」と言った。

惚れ直すという言葉は不適切だ、と彼は言ったのに。
その瞬間には、もう惚れていないことを意味する言葉なのに。
ああ・・日本語は多種多様の割に、用法が曖昧すぎる。
彼は苦笑した。

「違うだろ。・・・もっと、愛するようになったという言い方が正解だよ」
「的確な言葉が日本語にはないわ」
マリナが言い返したので・・シャルルはマリナの汗ばんだ額に音を立ててキスをした。

■18

「それにしても、なぜそんなに悔しそうなのか理解できない」
そしてまた、彼女の頬にキスをした。
マリナはシャルルの腕の中で身を捩って抵抗する。
彼らはたいへんに身長差があるので、マリナの踵が宙に浮いていた。
爪先立ちしたままのマリナがバランスを崩して、シャルルの胸に重心を傾ける。
その重みが・・・更に愛おしい。
彼は微笑んで、今度は彼女の唇に自らの唇を重ねようとした。
そのとき。
マリナがまた彼の名前を呼んだ。
堰を切ったような名前の連呼に辟易して、シャルルがマリナの茶色の瞳をのぞき込んだ。

先ほどはあれほど放心していたというのに。

「シャルル！私、本当に汗と泥まみれなの」
「だから？」
「だから、そういうことは・・・後にして」
「どういうこと？」

シャルルが悪戯っぽくそう言ったので、マリナが呆れて口をつぐんだ。
マリナの茶色の髪が揺れたので、彼は腕を伸ばして・・・
扉を勢いよく閉めた。
彼女が大変に苦労して開けた扉を、シャルルはいとも簡単に片腕で引き閉じてしまった。
そして入り口近くのロックを足で操作しながら彼は扉を施錠してしまった。
かちり、と音がなって、閉錠される音がして・・マリナがぎょっとして眼を見開いた。
それでも彼女の躰は動かない。
シャルルの腕の動きを感じて・・・マリナは更に顔を赤くさせる。
もうその様子にシャルルは不審を抱くことはなかった。
余裕たっぷりに・・・妖艶に笑う。

「シャルル！離して」
「イヤだ」

目の前に広がる浅紅色の視界から逃れようとしたが、彼女の腰に彼のグレーのデニムの感触が伝わってくる。
密着していると思うと、マリナはますます茹で上がりそうなほど顔を赤くした。

「このままマリナを連れて、夜のルーブルまで行きたいところだけど」
「それは・・・今度にしよう。それに・・・言っていることと行動が違うような・・・」

シャルルはくすりと笑った。
彼女の戸惑いが手に取るようにわかる。
「いいや、オレはいつも一貫しているよ。君と違ってね」
それから・・・彼はふと、真剣な顔をした。
もう・・・あの頃のように、少女のような顔ではなかった。

■19

「君はあの頃のままだ。
乱れた髪に、走って泥と汗にまみれて・・・場所をわきまえずにドレスアップすらしない鷹揚さは褒めた方が良いのかな？」
「悪かったわね」
マリナは横を向いた。
彼女がこの場所にそぐわない人間であることは、彼女自身が・・・承知していたことだ。

それでも、彼の姿を求めて庭を走って来た。
それでも、彼の帰りを待って暑い外で長らく時間を過ごした。

おかえりと言い合う人が居る。
ただいまと真っ先に伝えたい人が居る。

そして・・・

彼女はまた恋をした。
同じ人物に。
また、愛が動き出した。
同じ人物に向かって。

1度目は、若すぎて、その意味をよく考えないまま伝えてしまった。
2度目は、年月を経過しすぎて、躊躇いながら止められなくなって始まった。
3度目は・・・・・
彼が恋したからではない。

彼女が、彼に、恋をした。

我を忘れるほどに彼のひとつひとつの動作に見入って時間を忘れてしまう。
それなのに・・懐かしい。
ああ、そうだ。
美とは、懐かしいのだ。

戸惑って躊躇って立ち竦んで・・・
また、あのパリの夜空の下で、シャルルの姿に見惚れた時のように・・・

「惚れ直したという言葉が不適切なら・・・・」
彼女はシャルルの胸に寄りかかりながら、考えを纏めようとした。
彼女は考え事をするときには、手が赤子のように丸くなる。
シャルルのシャツの裾を軽く摘んだ。彼は首を横に振った。
「言葉はたいした意味を持たない。特に・・・今はね」
彼はそう言って・・・・・マリナに囁いた。

待っていたよ、と。
逢えて嬉しい、と。
愛しているよ、と。

■20

「・・・もっと好きになったの。何度も・・・何度もその直前よりもっと恋するの。ああ、うまく言えない」
彼女が彼の囁きに問いかける。
滅多に愛の言葉を言わないマリナが・・・シャルルに愛の言葉を贈る。

「アドール　ベレチェ」
彼が流暢な発音をした。
マリナがシャルルの腕の中で、顔を上げた。
聞いたことのない発音だった。
「今のは？」
彼女の質問に、シャルルが答える。
「afresh　and　more」
「もっと意味がわからない」
「最初の言語はベンガル語。次はそれを訳した英単語。・・・日本語では不適だろ？
ああ、金輪際・・・『惚れ直した』は使わないでくれよ」

シャルルの青灰色の瞳が、輝きだした。
まるで、温室の外の・・夕暮れ前の、ほんの一瞬の空の色のようだった。

「ああ、シャルル。私にわかるように言って。回りくどい話はなしよ」
マリナの困惑した声にシャルルは微笑んだ。
宙に浮いたままのマリナの足がふらつき始めたので、彼はようやく腕の力を抜いて、彼女を地上に降り立たせた。
切れ長の・・・青と灰色の混じり合った瞳を細めて・・彼は顔を綻ばせた。

「意味はね・・・『私はもっと愛されるようになりました』」

彼女が、もう一度好きになったと言った。
・・・・あんたが好きよ、と言った・・・あのときのマリナの言葉に嘘はなかった。
マリナは時間を越えて・・もう一度・・いや、何度もそう囁く。

「afresh　or　more」ではない。
片方では足りない。・・・・両方。そう、両方だ。
今ひとたび愛に堕ちて、そして更に深く愛をする。

温室の照明が夜間モードに切り替わり、淡い黄色の光を点しだした。
・・・アルディ邸にも同時に電灯が輝き、静かな邸内は、夜の姿を現し始めた。
「さて。しばらくは・・・誰も来ないから」
彼女の泥だらけの背中に大きな手の平をあてて、シャルルは微笑んだ。
流れるような手つきで、躊躇うこともなく、彼女の服の上から脊椎を下から上に撫で上げた。
マリナが息を呑んだ。
グレーのデニムを身につけた彼の太腿が、マリナの膝を割ったので、彼女は慌てて脚を閉じようとしたが、彼に邪魔され、摑んでいた
薄桃色の衣をぎゅっと・・・力一杯握った。

「シャルル・・・！私、本当に、部屋に戻らないと・・・」
「それは許可してないだろ？」
彼は言った。
そして目を伏せて、彼女の汗ばんだ躰を、今一度抱き締める。

「夏の夜は思ったより静かだ。
・・・・君が居ない間、オレは独り寝を愉しんでいたと思うのか？
君はオレが居ない夜を愉しんだのか？
・・・・確かめてみることにしよう」

奇蹟のような出会いがなければ、この人を愛することはなかった。
運命の人を定めることもなかった。

広大な館でひとり・・・マリナを待つのは、帰ってくることがわかっているからだ。
彼女が戻るから。帰る場所はここだと言うから。だから待つことが出来る。

彼が育てているのは薔薇ではない。
品種改良された薔薇ではない。

大地に根付く・・・強い晄と香気を持つ、マリナ・イケダとともに育てる愛という名前の華なのだと思い知る。

彼はフランスの華なのに。
目の前の・・甘く香るけれど、大層扱いが難解な・・・彼だけの華を抱き締めた。

・・・・・何度でも恋してくれ、マリナ。

オレに・・・オレはマリナからもっと愛されるようになりました、と何度も言わせてみてくれ。

マリナはそんなシャルルの腕の中で、諦めの吐息をはき出しながら・・・それでもまだ高鳴る胸を鎮めることができなかった。

彼が居るから、ここに来る。
惚れ直したと言わないでくれよ、と彼は言った。それなら・・・それなら。

「afresh and more・・・・」彼女は呟いた。
拙い発音だったけれど、彼の耳に届いたようだ。
「そうだね・・・オレは何度も・・・君にもっと愛されたいし・・・オレももっと・・・愛したいよ、マリナ」

彼女は、我を忘れて彼にしがみついた。
瞳を閉じて・・彼の重みと体温を感じる。

同じ人に恋をした。
また、更に深い場所に堕ちた。
呆然とするほど・・・彼に魂が吸い寄せられて行く。
止められない。止める術がわからない。

今日、自分を忘れるのは何度目なのだろう。
彼によって・・・・・何度忘れるのだろう、と思った。

見上げれば・・・空には白い月が浮かんでいた。
空の色は徐々にだが急速に濃い夜の色になっていく。

温室の外では芝生や植木に浴びせられていたスプリンクラーが作動を止めた。

そして本当にふたりの息づかいしか聞こえない・・・・静かな空間が訪れた。

（FIN）

BLUE_blue_Moon　前編

Blue　moon：カクテルの名前。薔薇の品種の名前。
また、ひと月に２回満月が訪れる現象をこのように呼ぶ。
２度目の月は「あり得ないことが実現する」という意味で、「願い事が叶う」とされる。
２０１０年は、１月と３月にこの現象が発生。その代わりに、２月には満月が出なかった。

＊＊＊＊

■01

アルディ邸の図書室と閲覧ブースをしばらく使わせて欲しい、とマリナ・イケダがシャルルに申し出た時、彼はちょうどよい温度に暖められたティーカップにその形のよい唇をつけるところだった。
「・・・好きにすれば良いだろう」
彼がそう言うと、マリナは少し躊躇いがちに唇を横に引く。
頬が持ち上がって、彼女の茶色の瞳が細くなるどころか大きくなった。
シャルルの答えを予測していたものの、実際にそのように冷たく素っ気なく言われたのでどうして良いのかわからない、という様子だった。
アルディ邸の若き当主は僅かにため息をついた。
以前の闊達で落ち着きのない少女の面影はそのままであるのに、マリナはどこか、このアルディ邸では遠慮しているように見えた。
傷つけたとは思ってはいない。でもこれが彼の日常であり、彼女に常に優しく微笑んでやることができない。
本当はそうしたいのに、まるで少年が心の機微に惑ってひどく誰かを傷つけるように、彼は彼女に関してだけは自分を律することができない。

彼はシャルル・ドゥ・アルディであるのに。
いや、それだからこそ、永遠の人と定めたマリナに対してだけは、彼は常に様々な感情を注ぎ続ける。

彼がこよなく愛する人物は、彼にいつも何かを与え続ける。
彼を常に心穏やかにするわけではなく、時に心を乱す。彼女の望んだ穏やかな日々ではないのかもしれない。でも、それでも彼は愛をすることをやめたりはしない。

自分の愛の試練についてシャルルが向き合うことを、マリナが赦し続ける限り。
彼はその生が尽きるまで、自分を含めてもう誰も欺かずに・・・愛にだけは自儘と言われてもその通りにしようと考えている。

叶わない想いほど逃げられないと思った。
叶った想いほど苦しいと思った。

だから・・・だからこそ、彼は彼女を愛することをやめない。
もう二度と・・他の誰かを選ぶ生はあり得ない。
死までの退屈しのぎと思っていた無機的で単色だった彼の世界を彼女が塗り替えてしまった。
傷ついた時に彼はよく逃避をした。
癒されることはないのに、そこから遠ざかることで妥協した。
そうではないよ、と彼女が彼に教えた。

あの・・長い眠りから目を覚ましたときに、もう二度と会ってはいけないと決めたにもかかわらず逢いたいと願った相手が彼を覚醒させたとき。

ああ、もう、だめだと思った。

歯止めがきかなくなり、彼女を愛することに対して最後のシャルルの誇りという砦が決壊した。

マリナ・イケダという人を愛するということは彼の中で常に廻風を呼び起こさせる。
滾る感情が、流されていくのではなく、湧出し旋回しそして彼の中で繰り返される。彼は決して繰り返さないのに、彼の内なる激切の心気はいつも晴れ渡ることはなかった。

彼を「月のようだ」と評する者は多かった。
その一方で、マリナやあの男は「太陽のような人」と言われている。
慈光を彼に注ぎ続ける彼女は、彼だけにその眦を向けることはしない。
それが、マリナであるとわかっていても。

「シャルル？」

少し考え事をしていたようだった。
顔を上げると、マリナの顔がシャルルのすぐ近くにあって、彼はティーカップをさり気なくテーブルの上に置いた。
先ほどの困ったような表情のままだった。

食後に、彼は彼女の居室に移動して、時差で眠れないという彼女のために、ホットワインを用意し、彼はブランデーを数滴含んだそれほど濃くないティーを口にしていた。
小柄な彼女のために用意した足高の低い丸みを帯びたソファに彼が座ると、彼の長い足が持て余し気味になる。
そこに、正面に座っていたマリナがシャルルの顔をのぞき込むために、シャルルの隣に移動した様子を、彼は目にしていたはずなのに、すっかり考えに没頭してしまっていた。
彼に意識させることなく近寄れる人間は少ない。
けれども、マリナだけはシャルルに断りもなく近づく。
そして断りもなく離れていく人物でもあるのだけれども。

■02

マリナが時差を感じて眠れないというのは、彼女が日本からパリに戻ってきたばかりだったからだ。
「戻ってくる」という表現は正確ではない。
まだ、彼女は日本とパリを行ったり来たりする生活を送り続けている。
生活の心配はするなと言っているのに、パリに移住することについて、彼女は首を縦に振らない。それほどまでに日本に居たいのか。
シャルルが長期不在するときに限って、彼女は見計らったようにアルディ邸から抜け出し、ひとり帰国する。

「そろそろ、そういう時期じゃないだろ」
彼はそう言った。
彼にしては曖昧な表現だった。

婉曲に、何年かかっても良いのでアルディ邸の当主とともに、この館の住人になってくれないか、と持ちかけたのに彼女はウイと言わない。
彼女は家族に話をしているようではあるが、詳細は言っていないようだった。
自由奔放で様々な場所に出歩く彼女は、幼いときに彼女の承諾や納得なしに居所を転々とする生活を送っていたが故に、自由になった今になって、何ものにも囚われずに自分の考えのままに移動する生活を選んだのだと、シャルルは考えていた。

誰かのために何かを護れる強さを彼女が持ち合わせていることに対して、シャルルは羨望のまなざしを向けている。
これは彼の一族に欠けている要素だ。
精神が脆く、立ちはだかる困難について、対処することはできるのに、受け入れることはできない。精神疾患を患うことが多い。
・・・だからこそ、彼は試練を与えられた。
愛について「魂の試練」と言った彼は、これは数ある試練のひとつだと思った。
答えのでない愛の試練より、結果を出すことを要求されるこの試練は軽易だと思った。
まだ少年であった彼は、父の死によって当主継承者の第一候補者として、当主に相応しい、強い指導力と精神力を持っていることを証明しなくてはならなかった。
この家を承継するというのはそういうことなのだ。
一時期、彼は自我を保つことができなくなり、鑑定医や他の職種を兼務して、彼自身の根源について深く思考した時期があった。
しかし、それでは結論が出なかった。
彼の求めていた答えはとうとう見つからなかった。

しかし。

・・・こうして、マリナに再会して。

長い時間をかけて、彼が模索していた問いに、あっさり彼女は答えを出した。
そしてそれが彼の求めていたものだと知った。
彼女が答えを導き出したのではないが、マリナが問いかけるシャルルへの言葉に彼のこたえは存在した。

誰かを愛すると言うこと。
誰かを運命の人と定めるということ。
それは自分の中だけで帰結しないのだと思った。
自分が定めたことによって、マリナ・イケダの人生も大きく変化したのではないのかと思う。
「そんなことはないわよ」と彼女は軽やかに笑うが、彼はそれが真実ではないと知っている。

・・・・自らの答えを見つけたとき。

彼は、そのときに。
もうこれで死んでも良い、と思わなかった。

・・・・もっと生きたいと思ったのだ。

死までの退屈しのぎであるはずの生について、彼は考えを改めた。
彼は決して間違えることはしないのに。
太陽が西から昇っても、彼は間違えないのに。
彼は認識を改めた。
これは彼女に関することだけに適用される。
なぜこれほどまでに欣求を渇望するのだろう。

彼女は茶色の瞳を彷徨わせて、シャルルの青灰色の瞳をのぞき込んだ。
彼女がここに居る理由。
そして帰ってくる理由。
それはわかっている。承知している。
シャルルがここに居るからだ。
ここに戻ってくるからだ。

■03

彼は自分の名前を呼ばれて、息を止めた。
どれだけ経過しても、彼女と共に過ごす時間について現実味を帯びてこないこの生活について、彼は深く沈降していたようだった。
「今、考え事をしていたでしょう」
彼女はおもしろそうに言った。
マリナは、シャルルが彼女を目の前にして、考え事をして集中することに対して憤らないし、ある程度理解を示している。
これは数多居た、彼の恋人候補の者たちが持っていない資質だった。

「誰を思っているの、何を考えているの」
そういう咎めを決して言わない。
誰を思っていても何を思っていても、自分自身の揺らぎのない信念について疑いを持たない。
シャルルが誰を思っているかということよりも、マリナ・イケダという人物は、彼女が誰を思っているかに重きを置いていた。
そしてそれが白金の髪の青年である限り、彼女はまたここに戻ってくる。

むしろ、彼女はシャルルが思考の波に漂うことを喜んでいる節がある。
彼が彼である理由のひとつに「誰もが考えない事象について高速で考えを巡らせている」という、彼独自の特質が挙げられることを、マリナはよく承知していた。

それなのに、彼が思い描く未来図について、彼女は困った顔をするばかりだった。
まるで、シャルルの計画通りには物事は運ばないと試されているようだった。
彼女がもうしばらく、このような関係と、日本とパリを行き来する生活をしていきたいと考えていることは明白だった。
しかし、ひとりで決断するものでもないが、彼はこのままマリナ・イケダを情婦のように扱うつもりはなかった。

気持ちだけの問題ではない。
彼はこの国では要人だ。
そんな彼が身分保障することもなく、他国籍の民間人を頻繁にアルディ邸から出入りさせていれば、彼女はきっと様々に利用される。
この世界を知らない彼女が放り出される場所は、決して夢の国などではない。
アルディ邸の中や、彼が同伴する席には常に気を配っていられるが、今のような環境では、いずれ彼女に大きな負担がかかることは容易に想像できた。
「・・・それで、なぜ図書室を使いたいと言い出すのか、理由を尋ねた方が良いのかな」
彼は当初の話題に戻った。
ホットワインを飲んだのに、マリナの瞳は、当分眠気を呼ぶことはなさそうだと訴えていた。ただ滑らかな頬だけは、少し上気していた。

彼女はちょっと笑った。
「・・・少し調べ物をしたい」
「それならオレに聞いた方が早いと思わないの？」
「それでは意味がない」
彼女がまたくすりと笑った。
どうしても理由を明かすつもりはないらしい。
彼は苦笑して、自分が座っているソファの隣に座ったらどうか、とマリナに目線で合図したが、彼女はそれに首を振った。
「これから行ってくる」
彼は眉を上げた。
「これから？」

今の時間はもう随分と夜が更けていた。
各施設の照明は落とされており、必要があれば監視棟の配電管理人にシャルルが指示を出して利用可能にすることはできる。マリナはそれを、今、やれと言うのだろうか。
できないことはないが、彼女は普段からこういった「シャルルが当主であるからできること」や特別扱いについては否定的だったはずなのに。

「急ぎの仕事なの」
・・・またか。
彼女は仕事を持ち帰ってきたのだ。
シャルルは軽くため息をついた。
彼の目の前に立ったままで、彼を上目使いに見下ろすという妙技を披露する彼女に、彼は惘れて声を失った。

彼女は仕事のこの関する事柄は非常にストイックで、あの国の悪い気質を引き継いでいる。
寝食を忘れて没頭し、無理な締め切りを調整するのではなく、締め切りに間に合わせるために自分の生活を調整してしまう。
・・・・ひと頃の彼も同じ状況であったのだが。

「戻ってきたばかりで体を休める方が先だよ」
彼はそう言いながら、タイに細く長い指をかけて、軽く緩めた。
彼の帰邸を彼女が待っていたことを知ったが、それは彼と雑話をするためではなく、彼に図書棟を開かせるためなのだと知って、
少し・・・ほんの僅かに彼は失意の色を露わにした。
彼女は日中十分に休んだと言った。

彼は居室の角に設置されている、彼女の机に目を遣った。
彼女が日本から持ち込んだ鞄の中身が広げられていた。
画材道具の他に、常に彼女は情報を忘れないようにメモを持ち歩き、小さなデジタルカメラを持ち歩いている。
最近ではボイスレコーダーの取り扱いも覚え、それにいろいろ吹き込んでいるようだった。
・・・・何か調べ物をしていることは確かだった。
しかも手元に資料がないらしい。
急ぎの仕事であると言うのは本当のことのようだ。

彼女が肩を竦めた。
シャルルが腕を伸ばして、彼女の手首を掴んだからだ。
「シャルル、シャルルの方こそ休んだ方が良い。・・・顔色が良くないわ」
「君と久しぶりに直接会話をする方が先だ」
彼はそう言って彼女の手を引き寄せて、薄い唇をマリナの手の甲にあてた。
彼の冷えた体が彼女の体温を得て徐々に温む。
青灰色の瞳を伏せて、彼の白金色の睫が精悍な頬に陰を落としているのが、仄明るい程度に光源を絞った室内でもはっきりとわかった。
マリナは少し顔を赤くした。
こういう仕草には未だに平然でいることができない。

「君が一緒に休むというのであれば、話は別だ」
彼の申し出にマリナが慌てて手を引こうとしたが、彼は掴んだ手首を離そうとしなかった。そして彼女の手首の最も薄い部分に、ティ

ーで暖まった唇を押し当てた。
ちくりという軽い痛みと一緒に、陶然とも言い難い感覚が彼女の体を巡る。
青春の輝きの時代を経て、彼女と彼は大人になった。
そして、シャルルが何を言っているのか、彼女は理解できるようになった。
自分が頬を赤らめて恥じらう様をシャルルが見て、彼の何が刺激されているのかを彼女は知っている。

■04

「あの・・・今日はこれから調べ物があるから」
シャルルは腕を引き寄せて立ち上がり、そのままマリナを自分の胸に抱いた。
彼の胸間にマリナの茶色の髪が触れた。
マリナは久しぶりに近く漂う彼の香りに目を細め、シャルルは彼女の髪から昇る太陽の香気に少し苦しくなった。
上質ではあるが硬い生地が彼女の頬に押しつけられて、彼女は彼の胸の中で身動いだ。
シャルル、と彼の名前を呼んだが彼は彼女の躊躇いを無視した。
「駄目だ。許可しない」
シャルルは彼女の火照った頬を、大きな両の掌で包み込んだ。

もう、決して彼女と離れない。
そう誓った。
神でもなく彼女にでもなく・・・自分自身に。

シャルルは整った顔を傾けて、彼女を引き寄せて接吻の嵐を落とす。
彼女の唇は甘かった。
そして重ねた唇から痺れと疼きが同時に彼を浸食していく。

彼女がなかなか戻らないシャルルを待つだけの生活を送りたくないと考えていることをシャルルは知っていた。
そして彼女が一つ場所に留まることができない気質であることも。

「マリナ。・・・今夜はオレと一緒に月を見よう」
彼がその言葉を言うときは、いつも決まっていて、マリナと夜を過ごすという宣言だった。

月光は人を惑わすと彼は言ったことがあった。
彼は月のようで、人を惑わせると言われたこともあった。
しかし、月光の下で彼はいつもマリナへ愛を囁く。
それが幻惑などではなく、決して誤魔化さない自分であることを識認するために。
一夜の夢と思ったあの邂逅の夜から、時間が経過していた。
もう、青春の輝きの時代に彼女と過ごした時間よりも長くなっていた。

・・・彼がマリナを運命の人と定めてからは、気が遠くなるような年月を通り抜けていた。

「シャルル、時間がないから・・・」
彼女のその唇に彼の指を乗せた。
茶色の瞳が揺れてマリナの頬がまた少し赤くなった。今度は首筋まで朱に染まる。
「オレとの時間はないの？」
シャルルは首を傾けて、彼女の髪に頬に額にキスを落としていく。
その都度、彼が口に含んだブランデーが香った。

仕事を持ち込んでもなお、彼の帰邸に合わせて彼女が戻って来ようとしていることについて、嬉しくないと言えばそれは違っているが、非常に困惑することも確かだった。
仕事に貴賤はない。しかし彼女が日本でなければ為し得ない仕事をしているのかというとシャルルは疑問を投げかけることがしばしばあった。
それでも、彼女はそれにはいつも悲しそうに口をつぐんで、反論しない。
その代わりに肯定や承諾もしない。
彼女の仕事とも活動とも言い難い行動についてシャルルはもう少し寛容であったはずなのに・・・どうしても彼女はそのまま戻ってこないのではないのかと思ってしまう。

するりと、彼女はシャルルの腕から抜けた。
マリナは彼がまた思考に耽っている瞬間を見逃さなかった。
「・・・マリナ」
「シャルル、シャルルは・・・・」

■05

シャルル・ドゥ・アルディは、大きく息をついた。
マリナの言葉を最後まで聞かなかった。

「わかった。・・・オレは行くよ」
彼はそう言って胸元を少し緩めて、もう片方の手で髪をかき上げた。
神経質そうな指の間から、白金の絹糸のような髪が漏れた。
秀でた額が浮かびあがり、青灰色の瞳と、髪と同じ色の睫や月の眉が見えた。
彼はかつて、少女と見紛うほどの美しい中性的な顔立ちをしていたが、今はその時の面影を残しつつも、睿哲な妙所を際立たせている男性的な精悍な面輪に変容していた。
ひとつひとつの仕草が音もなく流れるように静かに動いていく。
それだけでも、彼がこの国で「フランスの華」と呼ばれるたったひとりの人物であることを明瞭にしている。
そして、その仕種は美しく浄妙であったが、同時にひどく退廃的だった。

「明日は早いから」

彼の申し出をそう言って断るのはマリナ・イケダだけであった。
久方ぶりに会う永遠の恋人はそう言って笑った。
彼と共に居ると言ったのに、手を離さないと言ったのに。
彼女はこうして・・・彼からいつも離れていこうとする。
こうして近づいている時に痛感する。
彼女をつなぎ止めておくことが決してできないのだということを思い知る。

そうだ。
そうだった。

忘れているのではない。
彼は忘れない。
しかし、忘れたいと・・・そうではないと否定したかった。

彼女は自由だ。
いつもそうだ。
彼のところに戻るのではない。
彼のところに立ち寄っているだけなのだ。
彼女はひとつのところに止まらない。
唯一、戻っていく場所は、あの日本の小さなアパートだけだ。
彼女はそこに住み続けることで、彼女の多くの友との繋がりを断ち切ることを回避している。

マリナは途中まで言葉を言いかけたのに、シャルルの言葉に口をつぐんだ。
いつから、こうして、互いに互いの言葉に切なくなったのだろう。
それがどれだけ愛しているのかという指数であるかのように、募らせる思いがあまりにも苦しくて切なくて、延々と告げることができずに隻語を繰り返しているのだということに、気がついているのに。

マリナは言葉を飲み込む術を覚えた。
大人になって、彼女は愛の苦しみも悲しみも切なさも・・・そして目の前の相手に伝えきれずに悶える自らの愛恋について、知った。
闊達で、言いたいことを言う彼女はそのままに成長したが、目の前の男性が何を憂えているのかについて察して・・・・言葉を燻ぼるように消すようになった。

「そう・・一緒に朝食食べられると良いけれど」
「それはマリナが寝坊しなかったらの話だね」
シャルルは唇を歪めて嗤った。
今は目が冴えて眠れないと言ってはいるが、明け方になれば彼女は深く寝臥することだろう。

彼は少し気怠そうに目を細めて、上着を脱いだ。
かなり遅い時間になっており、邸内はひどく静かだった。
通常なら、このまま彼はこの部屋に泊まるのが常であったので、控えの間にも使用人は誰も居なかった。

恋も愛も知っている。
けれども、マリナと一緒に居ると、苦しい。傍にいなくても、彼女が幸せで元気で暮らしていればそれで良いと思った時間が長かったのに、彼は、どんどん貪欲になる。
貪婪の獣になって、彼はマリナに求め続けている。
愛し愛される喜びを知って、彼は・・・自らの魂の苦しみを少しだけ解放することにした。
それを受け止める相手が。彼のファム・ファタルがそれでも良いよ、と赦したから。
彼女が、彼の憑かれたような愛の質疑について、答えをともに模索しようと言って、微笑むから。

■06

「あのね、シャルル」
今度は彼女が彼に話しかけた。
シャルルは柔らかい視線で、マリナを見下ろす。
長身のシャルルと、小柄なマリナが並ぶと、大変に身長差があることを実感する。
だから、彼はこうして、マリナの居室には彼女の身長に合わせた背の低い家具を用意しているし、マリナと話をするときには、着座している状態で極力話をし、目線を合わせるようにしている。
シャルルのそんなひとつひとつの配慮に、マリナはいつも苦しくなる。
愛されているということを感じることは滅多にない。
彼女自身が「誰かから愛されている」という確認を必要としないからだ。
まず自分がどう思っているのかが重要であり、彼女がシャルルに愛されていることの知足は彼女を満たす要素にならない。
かつて彼女は彼に「自分のことを好きか」と尋ねたことがある。
そのときに、彼は「苦しいくらい、好きだ」と言った。即答だった。
そして、次に再会したときには、彼は「苦しい」と言った。
「苦しいくらい」ではなく、「苦しい」と言った。

愛されていることを感じる。
若いときから、彼女は他人とうまくやっていくことを必須としていた。
たくさんの他人に混じり、マリナはひとりになりたいほどひとりを感じることもあったが、そこで考えを改めた。
そういう孤独について、考え込むのではなく、自分の内を眺める前に目の前の相手との距離を見つめることにした。
だから、自分でない他人を表現したくなり、そういう職種を選んだのだと思う。
今でもその選択は間違っていない。
マリナは人が好きだ。
いろんな人と話をすることで、自分を知ることになると考えている。
だから、たいていの人間とは協調してやっていくことができる。
育った環境の功労とでも言うのだろうか。

しかし、シャルルは違った。
シャルルは違うのだ。

彼との距離は縮められない。
シャルルはそう思っていないと思うが、マリナはそう思っていた。
彼の誇りがそうさせない。
その魂が・・・マリナと非常によく似ている。
彼の中には、マリナへの愛は不可侵であり、マリナでさえも否定することのできない強い念がある。
愛は・・・・彼の愛は、ひとつなのだと彼が定めてしまったのだと知るたびに・・・マリナは酷く切なくなる。
彼の愛は確認をしたり試したりすることはない。揺るぎない愛をマリナだけに注ぐ。
だから・・・だから、何よりも。
自分自身よりも。
何かを大切にすることがないほどにマリナだけを唯一絶対にするシャルルの愛が・・・マリナを困惑させる。
愛をすれば、相手も大事に思うが、自分を大事にするのだと思っていた。
相手を悲しませたくないから自分のことを見つめることが多くなるのだと思っていた。
しかし、シャルルの愛は違う。
何もかもが異なる。
それまでマリナが体験してきた愛とは違う。
愛に不同だ。同じ愛はない。同じ愛し方は存在しない。
でも、彼はひとつの愛しか知らない。
愛も恋も知っているはずなのに、愛をひとつと定めてしまう。

・・・・それでいて、彼の愛が理解できるのだ。
自分も、共感できるから。
自分も、同然だから。
彼の深い鍾愛の深淵の底について、マリナはよく知っている。

自分は彼に何も伝えられないことや、伝える術を知らないことについて、もどかしく感じる。シャルルはマリナよりずっと大人でずっと深く様々なことを考えている。
しかし・・・マリナが応えることができない。これが一番苦しい。

・・・・だから彼と距離を置くのかもしれない。

日本に帰りたいと強烈に思ったり、思いついて突如どうにもならない衝動で行動しているわけではなかった。
帰らなければならない理由もあるが、彼を一人きりで待つことが怖かった。
彼を定めた理由がある。
でも愛をするきっかけに理由や過程は存在するが、愛をし続けることに、理由も動機も定義も必要ない。
・・・・愛堕という言葉がある。
愛に堕ちると言う意味が一般的だが。
愛を堕とすという意味もある。
マリナは愛を堕とすことはしたくないと思っていた。愛を貶めることはしたくない。
シャルルの愛を賛美するだけで終始するのではなく、自分の愛について、彼にどうしたら伝え語ることができるのだろうか、と考えたかった。

それが日本に行く理由だ。

・・・そう。

もう、日本に「帰る」ではないのに。
日本に「行く」と表現している自分の言葉を・・・シャルルに伝えることができない。

マリナは唇を噛んだ。

■07

「話はいつでも聞けるよ、マリナ。・・・・君がここに居る限り」

シャルル・ドゥ・アルディは彼の誇りを込めて静かに言った。
漣立つ湖畔は彼は好まない。
生き方について考えたことがあった。
マリナと知り合ったばかりのころ、彼は自分の中にもっと別の新しい自分を、彼女に触発されて発見した。
あの短い時間が彼のその後の人生に大きく影響することになったとは、きっと・・マリナは今になってもそうは思っていないのかもしれない。

そしてその後、長い年月を経過して・・・そのときに知った自分だけではない、様々な自分について受け入れてきた。

マリナの知らないシャルル・ドゥ・アルディが居る。
マリナのよく知っているシャルル・ドゥ・アルディが居る。
そして・・マリナと出会って再会してから見つけたシャルル・ドゥ・アルディが居る。
これらについて、マリナはよく承知しているのにもかかわらず・・・何かに憂えていた。
憂いを与えたのはシャルルだ。
彼女に物思いや・・憂いや惑いや躊躇いを与えたのは愛という名の狂念だった。

たとえ身のうちに救う狂濤渦巻く想いを抱えていたとしても、それは誰にも知られてはいけないという、彼の誇りに彼女は慨する。

彼は目の前のマリナから視線を外した。
このままここに止まれば、彼女の意志を尊重することもなく、そのまま彼の激情に巻き込んでしまう。それは避けたい。
彼女に望まない結実ほど空しい・・と、昔、教えられた。

だからこそ、彼は彼女の自由にさせてやりたいと思う。
たとえ、彼女がここに戻ってこなくなったとしても。
それでも館の中では日本語を使用する方針を変更することはない。
毎朝、最高の状態の薔薇を彼女の不在時にも届けることを廃止しることはしない。
それが、彼の愛の証だから。
愛を表すというのは、相手にだけ表すということだけではない。
相手にわかるように愛を示し主張するだけではない。
・・・彼は、マリナを愛し続けているということについて、自分自身に証明したいのだ。

「ね、シャルル」
マリナが軽くため息をついた。
彼は帝王学を学んでいるから、自分から視線を反らしたり話を中途で切り上げることはしない。そうするしかない状況の場合にはそれも行使するが。

マリナが彼のスーツの裾をそっと握った。
彼に近寄るだけでも・・・こうして、未だに苦しい。そう、マリナも苦しかった。
彼は美しく完璧だ。会うたびに・・・彼はどんどん変化していく。
いや、その美しい顔容は変わらないが、彼に触れられるとそれだけで、胸が騒ぎ、彼女は自分のしなければならないことについて順序をつけてしまいそうになる。
本当なら、ずっと一緒に居ればこういった気持ちも整理できるのかもしれない。
共に時間を過ごし、一日とされる限られた時の配分を彼との時間を優先して考え振り分けていく。
シャルルが不在の時には、自分の仕事に充てる。

だめ。
それではいけない。
それでは・・・単に愛に焦がれているだけでしかない。
恋を愛しているだけにしかならない。
愛を継続することは難しい。
大人になって、それに気がついたとき。
遅かった、と思ったことは一度ではなかった。

それではだめなのだ。
彼をどんなに愛していても、彼に溺れたら一緒に沈んでしまう。
依存するのではなく、もっと違う愛を・・・彼に伝えきることができるだろうか。
彼女は誰かに靠れることはない。
いつか、彼が彼女を必要としなくなるときがきても良いと思っている。
共に生きていこうと言ったのに。彼女もそう思っているのに。
どうしても・・・もう、離れたくないのに。
それだけを考える時期を過ぎてしまった。

彼が「永遠に、君だけを愛する」と言って愛を囁き続けて、自分自身よりも彼女を最優先にすることについて・・・それを純粋に喜びに転化させるだけではいけないのだと思う。
「シャルル、こっちを向いて」
彼女はそう言って、目の前の繊細で孤独でそして酷く傷ついている白金の髪の男性に声をかけた。
そうしてひとり佇む姿は、かつて彼女が共に過ごした「青春の輝き」の時代の彼そのものだった。シャルルは・・・まだ、愛について軫念し沈淪する。

blue_blue_Moon　後編

■08

「いつも君だけしか見ていないよ、マリナ」
冗談とも本気ともつかないような口調で、シャルルはそう言って艶然と微笑んだ。
その美しい佇まいに、マリナは息をのんで見つめる。
彼が本当に、薔薇の精のようだと思ったことがあったことを思い返していた。
シャルルがどれほど年月を経過しても、どんな苦難に遭遇しても、変わらずに清艶であるのは、彼の顔の造作が整っているということからだけではなく、彼の孤独と同義になりそうなほどに気高い魂を持ち合わせているからなのだ。
その考えを読み取ったかのように、シャルルは唇の端を少し歪めて苦笑した。
その冷笑的な微笑みは昔から変わらない。
恋人にはとことん甘やかす一方で、こうして・・・自分の想いについてはマリナでさえも推し量ることができないと否定するシャルルの誇り高さは、生涯変わることはないだろう。
身持ちを持ち崩しても彼は決して彼女への愛を捨てきることができなかった。
それに縋ることができずに、苦悶した長い年月があってからこそ、今の静かな時間がある。
月が太陽を焦がれても良いのだ、と太陽から言われたから。
その禁忌とでも言うかのような、その秘めたる想いに、彼はもう一度呼気を吹き込んだのだ。自らの意志で。

「マリナ。・・・オレは君が思っているような人間ではない。
前にも言ったことがあったな。
欲しいと思ったらどんなことをしても手に入れたいと思う欲求を止めることをしない。
できない、ではなくて、敢えてしない」
彼はそこまで言うと、彼の袖裾を軽く引いていたマリナの腕に、シャルルが手を伸ばした。
彼の香がマリナに流れ込んでくる。
彼は流暢に日本語を使うので、会話をしていると時折彼が外国人であることを忘れてしまう。
パリにいる今は、マリナの方が外国人なのだが。

マリナはシャルルの顔を見つめた。
こうして・・・彼の成長した顔を間近で見つめることになるとは思っていなかった。
あのとき、彼の背中を見送ってから・・・もう二度と、会えないと思った。
二度と会わないと。
二度と・・・会うことができないと、思っていた。

今は、精悍な顔立ちに変化し、彼の物憂げな青灰色の瞳だけが、変わらずにマリナの視線を受け止めていた。
再会したシャルル・ドゥ・アルディは、もう、マリナの知っている青春の輝きの時代の、中性的なシャルルではなかった。
低いテノールは、出会った頃から変化し、落ち着いた一定音律を保っている。
白金の髪は彼女と一緒に居るようになった年齢からは、彼は頻繁に髪型を変えることをしなくなってしまったが、それでも輝くプラチナブロンドは柔らかく少しの風でもふわりと舞うくらいに細く軽い。
変化を伴わない箇所も多かったが、彼は美しく変化した。
華奢で線が細く、尖った棘を常に全身に纏っていた孤独な少年は、もうそこには居なかった。
彼女だけは、その薔薇で包まれた閉ざされた彼だけの城の中に入り込むことが赦されていた。そして、たったひとりだけ・・マリナだけが彼を救うことができるということについて、マリナは慢心するどころか、深く憂えていた。
傍に居ることが嬉しいのに、傍に居ることが苦しい。
これが恋ではなく愛であるから故のことなのだということを、互いに気付いているのに、どうして・・・どうして次に進めないのだろうか。
シャルルは眉を少し動かした。
憂いの表情をすれば、マリナに気遣いをさせてしまう。
彼女には、屈託のない笑顔で、いつも太陽のように明るく眩しく思うままに生きて欲しかった。

■09

誰からも愛されるマリナには、誰にも愛されなくても唯一の人が向ける愛が得られればそれで良いと思うシャルルの妄望について、理解しているが、酷く畏れていた。
彼女がもう一度・・・彼と別離を迎えることを考えたことはない。
おそらく、シャルルもそうだろう。もう二度と手を離すことはしないと誓ったのだから。
しかし、こうして別離とは違う、ほんの少しばかりの逢えない時間についてさえ、彼が心懸かりを一掃せずに深く沈潜する様子を見ると、マリナはそのことについて、いつか話をしなければならないと思った。
愛の価値観が同じでなければ愛を続けることができないということではない。

「オレから離れられなくなる」と彼は若い頃に彼女に言ったことがあった。
いつか、心から自分を愛するようになって・・・そして彼女が彼の元に飛び込むようになると宣言したことがあった。
しかし、どれほど待っても、彼女は彼の傍にやって来ない。
彼がマリナの居室を訪れるだけで、マリナは決して彼の寝室を自ら訪れることはしない。
離れられないのは、彼の方なのだ。

「シャルルは、案外気短だね」
マリナがぽつり、とそう言ったので、シャルルはくすりと笑い声を漏らした。
彼女の話はいつも突然だ。
思考の途中で言葉を発しているからだ。
しかし何を考えているのかはその豊かな表情から推測できた。
彼が結果結論を急いでいると考えているらしい。
いつも誰かと一緒にいる日々を送ってきたはずであるのに、彼女はこうして、シャルルの傍らに居るようになってからは、自分の考えが口に現れることに気がついているのだろうか。それがたまらなく彼を感悦させていることも。
それなのに、彼女の言葉はシャルルの思考の波に沿っている。彼の考えていることはよくわからないと言うのに、最も彼の杞憂を感じ取る能力が高いのは、彼の従妹ではなく、彼の半身でもなく、目の前の、幼い顔立ちの茶色の瞳の人なのだ。
彼女は誰にでも同じだ。
誰に対しても同じで、媚びたり卑下したりして自分を貶めることをしない。

それなのに、今、彼女はシャルルの腕の中に居る。
こうして愛を囁くことを赦し、彼女はシャルルの想いを受け止めることについてウイと言った。

「今頃気がついた？」
彼がそう言ったので、マリナが困ったように首をかしげた。
ため息をひとつ落とし、シャルルは腕を回して、彼女を抱き寄せた。
髪に冷たい唇を落とす。細く長い神経質そうな指先に、少し力が入るが、彼は無言でいた。

彼が何度となく繰り返し夢想した彼女との生活は、現状と違っていた。
本来の陽気で話し好きの彼女との会話はもっと違ったものだろうと予想していたのだ。
こうしてしばらく会わないで居た時間について、何をしていたのか何を思っていたのか・・・シャルルを考えて愛しすぎて目を閉じてシャルルのことばかり考えていたという甘い囁きが彼を満たすだろうと思っていた。
それが彼を辟易させてきた、一時の儚い夢のような男女の恋というものがそういうものであり、ことごとく皆そういう展開を望んでいたから。
しかし彼女とシャルルの間には駆け引きは存在しない。
彼女の姿が見えないだけで心許なくどこに居るのか知っているのに知りたくなる。
これでは、まるで・・・少年のような拙い片恋をやり直しているだけではないのか。
そう思うからこそ、彼は彼女を送り出す。
日本とパリの往復が破綻をきたすのは、近いうちに明らかになる。
物理的に問題になる。
破綻するのは彼と彼女の関係ではなく、マリナの時間調整能力の方だ。

彼の胸の中で、マリナがくぐもった声で言った。
頬を彼の胸に押しつけたままだった。
「アルディ家の施設にはいつも驚くけれど・・・あの資料をどうしても見たい」
彼は両目を閉じて、身体を屈め、マリナの茶色の髪に顔を埋めた。彼女はひどく小柄なので、こうして腕の中に包んでしまうと、彼女の表情は見えない。
「ああ、マリナ。君の仕事をとやかくいうつもりはないが、せめて、しばらく逢わなかったことに対して、何か言ってくれないか」
「ほら、気短だ」
マリナがそう言って、彼の胸から抜け出た。
シャルルの愛は深くて思い。けれどもマリナはそれで良いと言う。
一緒に居ようと・・・もう手を離さないから覚悟してくれ、と言ったとき。
飾らずに隠さずにいて欲しい。
彼女はシャルルにそう言った。
シャルルは高邁で自らを飾ったり隠したりすることはない。
それはマリナも同じだった。
その点では彼と彼女は非常に良く似ている。
それなのに、あえてそう言ったマリナに、その言葉の理由を尋ねると彼女は少し困ったように笑って「なぜだろうね」と言っただけだった。
マリナは非常に話し好きではあるが、自分のことに関する核心は決して言葉にしない。
それは彼女がシャルルに無理な願いを投げかけた時にも、自分のことではなく、誰かのことを願い出たことからも明らかだった。
彼女は己の領域に踏み込むことは許さない。
こうして、シャルルと一緒に居るというのに、彼女は無意識なのか意識的なのか・・・

声が聞こえるだけで良い。姿を見るだけで良い。・・・こうしてここに立ち寄るだけで良い。

「それが私の一番言いたいことだけれど」
「マリナは言葉が足りない。もっと、わかるように言ってくれ」
彼は腕に力を込めて言った。
痛いよ、とマリナが言ったが彼は無視した。
彼女が仕事の・・日本での生活にかかわる話をする。
一番言いたいことだと言う。
その次の言葉を待っているのに、言って欲しくないと思う。
愛はパラドクスに満ちている、という言葉が思い返された。

ああ、そうだ。
手に入れても・・手に入れなくても・・愛というものは常に矛盾に満ちている。

シャルルはマリナが日本で何をしているのか詳細を聞かせろ、とは言わない。
何を感じてどう思っていたのかは知りたいと思うが、彼女の活動記録については調べればわかることだ。だからそういう報告ではなく・・・。
そう。
シャルル・ドゥ・アルディは、ただ単に「寂しかった。逢いたかった」と言って欲しいだけなのだ。
それが彼を躊躇わせている。
彼が・・・愛をしているのか、愛を繰り返しているのか、愛をやり直そうとしているのか、時折、判別しがたい曖昧さが襲う。彼はシャルル・ドゥ・アルディであるのに。

■10

彼は細く長い指で、マリナの顎先から頬にかけて指を滑らせた。
滑らかな頬を撫で上げられて、マリナが僅かに身動いだ。
それは大人の女性の・・・愛の息吹を知っている者の反応だった。
シャルルはその姿を見て、青灰色の瞳を細めた。
彼と彼女の交歓というのは、夜の帷に身を潜めて、肌を重ねることだけではない。
僅かな視線の纏繞だけで、彼の奥深い焔が蠢き疼き、そしてマリナを愛してやまないと叫び出す。
シャルルは・・マリナの頬や顎や唇の先に、ほんの一瞬かすかに触れて直ぐさま通り過ぎる風のように指先を乗せていく。
マリナが眉根を寄せて、瞳を閉じた。
彼の言葉にならない静かな、けれども激しい慟哭にも似た囁きが彼女に伝わっていく。
彼はどうして・・どうしてこれほどまでに恋々としてマリナだけと定めるのだろう。
それが嬉しくもあるが時折・・・彼を案じる。

マリナに憂いを与えているのが、彼の愛の重さや深さではなく、彼の愛が行き先をなくしたとき・・シャルルがそれに耐えうるほど生に執着していないことへの咨嘆であることに、シャルルは気がついているのだろうか。
生きているからこそ、愛をすることができる。

死んだ者の残す愛は永遠だ。
かつて、マリナにそう言った人が居た。
そのときは、その言葉の意味について深く考えたことがなかった。
しかし後に、マリナは何度となくその言葉を繰り返し考えるようになった。
それは大人になるにつれて、生と死について考えるようになってからだった。
でも・・でもそれ以上変化しない。
揺るぎない愛を、生ある者が受け止めることができるのだろうか。
シャルルがそれに執心している気がしてならない。

生きていくことに一生懸命だった。
でも、ふと、立ち止まって考える出来事があった。
自分のこと、これまでのこと、これからのこと・・・あの太陽のような人との愛、シャルルとの愛・・・

愛は、不変であり、永遠に変化しない。

死にゆく間際にそう言い切った人が居た。
シャルルは生きているのに、同じ事を言う。
それが少し・・・マリナの顔を曇らせていた。

彼女がなかなか滅多にシャルルの絵を描かないのは、そういう憂いが如実に出てしまうからだ。
しかし、彼を描くことがマリナの愛の証であるから、彼女はそれでも描いた。
シャルルには見せられないから、日本でこっそり描いている。
苦しいけれども描く。
彼女が日本とフランスを行き来しているのは、その苦しさを往還しているからなのだということに、シャルルは気がついているのだろうか。
いつも黙って彼女を見送る彼の元にこうして戻る日々が、いつまで続くのだろうと口に漏らしてマリナを日本に送り出したのは、先般のことだった。
ひとり、機内で外の景色を眺めながら・・・マリナは様々なことを考えた、とシャルルに報告することができずにいた。

愛は楽しいことばかりではない。
苦しいから嬉しいことも愛して良かったと思う瞬間も訪れる。

シャルルが、生きていたいと思うのなら。死までの退屈しのぎと思うような生でないのなら。
マリナが傍に居る理由もある。彼女が愛を注ぐことによってシャルルが生きていたいと思うのなら、もっともっと生きていたいと思うくらいの愛で満たしたいと思う。
愛は・・・愛は増える。愛は変化する。愛は生きている。

それを、どうしたらシャルルに伝えられるのだろうか。

「マリナの調べ物って何？」
シャルルが彼女の顔に指先を乗せながら、静かにそう言った。
それがマリナの言いたいことだったということはとうに承知していたようだった。
酷い人、と言おうと思ったが、マリナはその言葉を飲み込んだ。
シャルルは酷くない。
酷いのは、彼の願いを知っていながらそれを知らないふりをしている自分の方なのだ。

■11

「・・・月を描こうと思う」
「それが今度の仕事？」
マリナはシャルルの言葉に少し考えて慎重に答えた。
彼の指先が彼女の顔を横切り、そして茶色の髪に触れる。
僅かに茶色の領髪がシャルルの指先によって持ち上がった。
マリナはこうして何かを躊躇ったように言うことは滅多にしない。
いつも闊達で歯切れ良く話し、目をそらさずに真摯に現実を受け止めようとする。
それは彼に足りないものであり、憬れてやまないものであった。
シャルル・ドゥ・アルディが焦がれるものは数少ない。

しかしその憬を持つマリナ・イケダは、滅多に自分の作品の話をしなくなってしまったことをシャルルは深く憂えていた。
マリナが憂えているのと同じように、自分のことではなく、愛する目の前の運命の人のことを憂えていた。

「そう。機内からよく見えたからこれを題材にしようと思っているの」
シャルルは内心苦笑していた。

雪月花を題にした個展を、彼女の雇い主が周知していることは彼も把握していた。
彼女は日本に戻ると、いつも都内の画廊に顔を出す。
そしてそこで彼女は深く何か感じ取るものがあるようなのだが、言葉にできないと言ってシャルルには話をすることはなかった。
しかし、その場所がマリナの心を穏やかにも躍らせることもできる空間であり、その場所を守護する主が・・・マリナをこよなく愛していることも、シャルルはよく承知していた。
そこのオーナーに言われて、何か作品を作ることにしたらしい。
これには心から賛同するのではなく、何か迷いがあるものの、承諾したといった経緯が、マリナのすっきりしない顔つきから見て取れた。

「・・・タイトルは？」

「それを決めかねていて・・・」
マリナがそう言ったので、シャルルは唇の端を少し歪めて笑った。
「何を作るかも、まだ決めていないわけだ」
「失礼ね・・・だから、それを今から資料を見て・・・考えようと思っていたのよ」
「君が考えて何かを作り上げるまでに、締め切りが到来するのだろうな」
軽口を叩いて、シャルルがマリナをからかったので、マリナはほっとしたような顔になった。
このような気まずい空気を彼女は好まない。
自分で話題を変えることのできない状況だったから尚更困惑していたことだろう。
「そもそも、月という漠然としたものから着手する神経が理解できない」
「シャルルと同じ思考回路と工程で創ったら、つまらないじゃない」
マリナが頬を膨らませてそう言ったので、その貌があまりにも幼くて、シャルルはまた声を漏らして笑った。
彼は彼女とともに居るようになってから佳音を漏らして笑うようになった。
これも彼女がもたらした変化だ。
シャルルは変化を受け入れる。
彼女が自分の内なる新しいシャルル・ドゥ・アルディを引き出し続ける限り。
マリナを愛し続けるということは、決して自分が受容しなかった様々なことが流入することを允許することなのだと思う。

「・・・今年は、ひと月に2回、満月が出る月があって、それで描こうと思ったのよ」
「短絡的だな」
彼が冷笑した。マリナは反論した。
「だから、月を題材にして・・・ああ、オーナーは『雪』だし『花』はもう作品としてあるし・・・・」
彼女の言っているのは、先般彼女が苦労して入手してきた絵画のことを指している。
これを記念して、雪月花という題材で個展を開こうということらしい。
そして、マリナは・・・シャルル・ドゥ・アルディを彷彿とさせる月を選択した。
迷わず。
しかし、当の月の化身のようなシャルル本人を未だ描けずに憂悶しており、その代替として、小作品を作成することにしたというマリナの思考が手に取るように理解できた。
彼女が、本当のシャルルを描きたいと常々考えていることは知っていた。
しかしそれを行動に出したり、経常的に自分のライフワークにしようとするまでには至っていないらしい。
・・・・雇い主に乞われて作品を創るのに、彼女は自分の作品は本当に気が向いたときにしか描いていないようだった。
マリナ・イケダの生活に、シャルル・ドゥ・アルディ以外の、彼が関わることのできない人物達との領域があることにすら、シャルルは沈鬱になるというのに。
目の前の、彼の運命の女性は、彼と距離を置こうとする。
瞬きをゆっくりとした。深く窪まった瞳を覆った。
シャルルは、こういう瞬間に、彼女をどうにもならないほど・・・このまま、彼女をここに閉じ込めておき誰の目にも触れさせないようにしたいという強烈な衝動に駆られる。
もしくは、誰も知らない場所に二人で隠遁し、そこから二度と出られない状況になって初めて安らぐのではないのかと疑っている。
自分自身に疑念を感じる瞬間というのは非常に慷慨甚だしい。

■12

マリナ・イケダにどれほど豪奢な環境を与えても、彼女は横を向いていらない、と素っ気なく言う。彼の手に入るすべてを捧げても、彼女はそれはいらないと言う。
それなら・・・彼女は、一体何を受け入れるのだろうか。
口ではあれこれ、贅沢な日々享楽的な生活について夢見るのに・・彼女は、いざ、そのときになると、やっぱりいらない、とつまらなさそうに言う。
シャルルとの愛も、「いらない」と一言で片付けてしまうのだろうか。
彼は、いつか問いただしそうになる自分が存在することを承知していた。
いつか・・何かの拍子に言ってしまうのかもしれない。
マリナにとって、唯一絶対の存在はないのだ。
自分のように、運命の人をただ一人だけを定めて・・・その人だけを愛し抜くという愛し方を、彼女はしない。

愛は増える。
愛は変化する。
愛は絶対ではない。

だからこそ、愛をすることが素晴らしいのだ、と彼女は言う。
その言葉が・・シャルルをどれだけ深い淵に落としているのかさえ、マリナは気がついていない。
ただひとつと定めてしまうことが、定まらない愛の存在を肯定することなのだ、とマリナが言ったことがあった。
「シャルルが他の人を好きになったことがあっても、それは良いと思うし・・・これから他の人を好きになるとしたら・・・もっと素敵なことだと思う」
彼女が残酷な願いを口にするとき。
その願いは、叶わなければ良いのにという願いを彼が抱いていることを、彼女は知ってか知らずか・・・そう言った時に笑ったマリナの顔は、少し、泣きそうだった。

彼はかつて言った。
神と相手と自分を瞞す、と。
それなら。
一度、マリナに愛を誓ったシャルルの愛は・・・それはマリナとシャルルとあの虧盈を司る神を欺いているのかマリナには判別がつかなかった。
彼の愛はとうに潰えているのではないのだろうか。
ブルームーンは、満月がひと月に、2回やって来る。
滅多にないこの月の満ち欠けに対して、彼は・・・彼はどう思っているのだろうか。
彼の本当の・・・真実の月は、何処にあるのだろうか。彼自身が月なのだろうか。
マリナはそう伝えることが出来ずに、ただ、月を題材にしようと思う、と彼に告げただけだった。

静かな・・・何一つ消えていきそうな程に静かな空間で、シャルルが低く言った。
アルディ邸の本邸は、主の考えで、静穏の中で生活できるような配慮が細微に渡って指示されており、それは完璧なまでに無音状態が創られていた。

「月を題材にすることとブルームーンの関連性がよくわからない。
ひと月に二度満月を望める月の何をテーマにしたいのか・・・はっきりしてから描いた方が良い」
彼は滅多にマリナの作品のことには口出しをしない。彼女も助言を求めない。
けれども、シャルルは今回だけは口を差し挟むことにした。
蒼い月の幻惑的な様を描くだけでは、マリナの表現したいことを表すことが出来ないのだろう。
だから、彼女は資料を掘り起こし、現象を科学的に説明したものや、それにまつわる様々な逸話を収集したいのだと思った。
彼女はシャルルの助言にそうだね、と言って頷いた。
いつもなら、シャルルの提言や助言は的確であるけれども適切ではない、と言って・・・
すぐに口を尖らせて、わかっているわよ、と言うのに。
そしてその次には聞くだけは聞くわ、と言って笑うのに。

「願い事が叶うのですって」
彼にはわからないことはないはずなのに。
それなのに、マリナ・イケダの心だけは推し量ることが出来ない。
何を考えているのかは手に取るようにわかるのに、彼女の心を変えることだけはできないのだ。

■13

「願い事は叶えてもらうためにあるのではなく、叶えるためにあるのだよ、マリナ」
シャルルが皮肉たっぷりに言ったので、マリナは少し頸を傾けて、彼を見上げた。
前髪から覗く茶色の大きな瞳がとても幼い印象を与える。
けれども、彼女はまったく無邪気に彼にそういった視線を向ける。
彼女の無防備な瞬間を、シャルル以外の誰かに見せることがあるのだろうかと思うだけで、シャルルは溜息を吐き出しそうになる。
わかっている。彼女は・・・決してそうは思っていないのに。
「オレは君の願い事は叶えてやれないのかな。・・・オレの願い事は君は聞き入れてくれないのだろうか」
思ってもいないことを口にする。

マリナにはいつも「試さないで」と言われる。
愛を試すことも、彼女の行動を確認するのは止めると決めている。
けれども・・・どうしてもマリナ・イケダを手に入れることが出来ない苛立ちを募らせてしまう。
彼女は一つ所に留まる人物ではないのだ。
永遠を約束したり将来を拘束したりすれば彼女は途端に輝きを失ってしまう。
かといって、今が良ければそれで良いと思っているわけでもない。

・・・彼女の精神構造について、いつか分析してみたいものだと思っていたが、今は、彼女の心を知るのが怖い。
何も怖くないと思っていた。
このまま命を落とすかもしれないと思った時は何度もあったし、屈辱を受けるくらいなら、何を犠牲にしても良いとさえ思ったこともある。
けれども・・・今は、彼女を失うのが怖い。
マリナ・イケダが彼の胸に再び舞い降りてきて・・・そしてもう一度消えることを考えるだけで、彼は狂気の路に走りそうになる。

「私は、まだシャルルが描けない」
マリナが低く言ったので、シャルルは顔を上げた。
この問題については、シャルルはマリナに意見したことがなかった。
なぜなら、無理強いしても描けるものでもないし、内面が如実に表れることで、シャルルはマリナの本当の気持ちをそこで知ってしまうことになりそうだと思っていたからだ。
デッサンの才能云々という問題がマリナに存在しているのではない。彼女はまがりなりにも、商業誌に掲載をしていたこともあり、それで報酬を得ていたのだから、やはり人並み以上の実力はあると思う。
けれども、夢想の世界の住人を描くより・・・夢想の世界の住人のような目の前の恋人を描くことの方が、彼女には相当難しいことらしい。写実的に描けば良いのに。しかしシャルルの内面を描いてみたいと願っているマリナが、まだ彼の絵を描きたいと思ってはいるものの実現できていないことに対して、かなり憂えて居ることも知っていた。
誰かが代行することができないものについて・・・答えは自分で出さなければならない。

だからマリナ・イケダは、シャルルを描きたいという欲求を、色彩で表現してみたり、抽象的なテーマを用いて表現したりする。
彼女は・・・それで彼に愛を示している。

「確かにそうだけれど・・・シャルルの言うとおりだけれど・・・私の月は、ふたつあるから」
彼女はそう言ったので、シャルルは整った顔をマリナにもう一度向けた。
マリナはその視線から逃れるように、横を向いた。
「資料が欲しかったのは、早く仕上げたかったから。思った通りのものは描けないかもしれないけれど、私が今できるのは・・・やろうとしていることは・・・月を描こうとしているということだけ」
「それがマリナの願い事なのか？」
「そうよ」
短い返事に今度はシャルルが押し黙った。

月は、ひとつしか出ない。
シャルルがマリナを太陽だと思うように、彼をマリナは月だと思っているとしたら。
もうひとつの・・・もうひとつの月というのは一体誰のことなのだろうか。
シャルルは唇を噛んだ。
彼女が忘れられないと思う者が存在することは知っている。
けれども・・・シャルルと同列に扱うことはしなかった。
まったく違うから、同じだとみなすことさえ彼女は考えていないのだと思っていたのだ。
それなのにどうして・・・考えもなくそのような残酷な言葉を口にするのだろう。

マリナが・・・マリナがシャルルとあの男のことを比べられないと言いたいのだろうか。
月は同時に２つは出ない。
彼女にとっては絶え間ない恋愛の対象者という意味なのか。

先ほどの「もうそういう時期ではない」と言った言葉を取り消すことはしたくなかった。
彼は・・・どんなに奔放であったとしても、マリナ・イケダを手放すことは決してしないと誓いを立てた。
彼がファム・ファタルと定めた唯一無二の人の代わりもいないし、同前の者も居なかった。
彼女だけなのに。
シャルルにとっては、彼女はただひとつの太陽なのに。
・・・マリナにとってはシャルルは、ブルームーンなのだ。
一度に愛する男はひとりかもしれない。けれどもマリナの月は・・・数多存在するのだ。
シャルルは溜息をついた。
堪えきれない昂然とした感情が湧き上がっては消えていく。

■14

「シャルルの瞳はいつも・・・お月様の晄のようだと思っていた。
だから、ブルームーンは・・・私のブルームーンはここにあるから」
マリナはそう言って、シャルルの瞳を見上げた。
深い・・・美しい白金の睫に彩られた瞳は青灰色だった。

「月の色はこんな色はしていないよ」彼は嗤った。
光線の加減で、月が蒼く見えるときがある。
それは視覚細胞が特定の光線に敏感に反応するからで、決して月が蒼いわけではないことは、彼女はよく知っているはずであったが。
「違う」
マリナは短いが、強くはっきりと発声したので、シャルルは黙って彼の永遠の人を見つめた。
永遠とか。運命とか。
言葉にすることすら憚られるような・・・長い時間彼の胸の中に秘めておいた言葉を簡単に出すことが・・・少し恐ろしかった。
出会い、別れ、また出会い・・・彼女と幾度もなく繰り返したそれらすべてが、彼女がたったひとりの人であるということを告げる。
彼は間違えない。
たとえ、太陽が西から昇っても。
それなのに、彼女はあっさりとシャルルの言葉を否定し、価値観を覆す。
こよなく愛している人に違うと言われて・・・彼は苦しくなるどころか・・・胸が疼くのだ。
間違わないはずなのに、彼はマリナ･イケダという人物の評定をいつも誤り続けている。
シャルルは薄い唇を少し持ち上げて、微笑んだ。
とても興味深いね、と言って目を細める。

その瞳が、謎かけに挑戦するように、ちかりと光った。
彼の探究心は失われていない。憶測や推論で物事を述べることを極端に嫌い、はっきりと確実でないことしか信じない。それなのに、
彼女はマリナの言葉に耳を傾けた。
月の色はシャルルの髪の色よりもっと濃い。
どちらかというと・・・彼は月の精霊ではなく、星の精霊に近い。

太陽のようなマリナとあの男の傍で晄を受け続けることによって存在を示すことの出来る月ではなく・・自ら晄を発している戈星のような存在だと思っていた。
自らを焼き尽くしながら天体を横断する憐れな星のようだと・・・・。
しかしそれとも違う、と彼女は首を振る。

・・・・これは一体どういう問答なのだろうか。

マリナはそんなシャルルの様子を見て・・茶色の瞳を彼に向けたまま、少し首を傾げた。そして少しだけ低い声音で、怒ったように言う。
なぜ、わからないのだと抗議するかのように。
わからない、と彼が決して言わないことを知っているのに。

「・・・・私は月がシャルルのようだとは言っていない。
私は・・・・月の光のようだと言った。
・・・私のブルームーンは・・・月ではなく、月の光のように自由でいろんな色に見えて・・・そしていつも静かで優しい晄をふたつ、持っている人のことを言うのだと思っている」
彼女はそこまで言うと、大きく吐息を吐き出した。

彼が黙ったままだったので、マリナは言葉が足らなかったのかと少し心配そうに彼の様子を窺った。
「私、変なことを言った？」
「ああ、とても奇妙だね」
シャルル・ドゥ・アルディはぽつりと言った。

シャルルは黙ったまま、無表情を崩すことなく・・・ただただ、マリナを見つめていた。
先ほどまで微笑みをうかべていた時の方が・・・・まだ、余裕があった。

「オレのことを月の光だと言った人は・・・なかなかお目にかかれないね」
彼はそう言って軽口を叩こうと思ったが、それは重々しい返事にしかならなかった。

フランスの華と呼ばれて久しかった。彼は様々な美称を与えられており、そのどれもが彼を言い表しており、そのどれもが彼をすべて言い表すことが出来なかった。
月のようだと言われたこともある。
太陽のような人々に比べて、自分は自らを焚いて輝く情熱を滾らせて生きることはしてこなかった時間が長い。
・・・唯一。ほんの僅かな期間だけ、彼は、自分の無色透明な無機的な空気から解放された色彩鮮やかな世界に足を踏み入れたことがあった。
しかし、それを知ったから、今がある。
それを知らなかったら、世界は・・・・本当は非常に色鮮やかだったということすら知らないままで虚無と怠惰に包まれて生きていただろう。

繊細で深い愛に触れることはなかっただろう。

忘れることが出来ないから、単に記憶しておくだけの思い出になっていただろう。

それなのに・・・彼女は他の誰も言わない言葉に七彩を添えて彼に告げる。

自分の・・・・月の光だと。
月、ではなかった。
彼女は大人になってからは特に、そういう言い方をすることはしなかった。
彼の半身を知っているから。
彼が月のようだと言われると太陽のようなあの男を思い出すことを知っていたから。

シャルルはシャルル・ドゥ・アルディ以外の誰でもない。
彼一人だけで個であるのだ。
それなのに・・・マリナはシャルルにブルームーンだと言う。

それを口にする彼女の意図がわからなかった。

「矛盾している言い方をしているよ、マリナ」
シャルルが苦笑して言った。完全に彼女のペースに巻き込まれている。
しかし・・・どういうわけか、あまり腹立たしく感じなかった。
彼女が告げる言葉のひとつひとつを自分の記憶に刻みたかったから。
・・・彼女の紡ぐ言葉の意味を無限に広げたかったから。

■15

「・・・それで、資料の準備はできたのか？」
彼が苦笑混じりに尋ねると、マリナが首を横に振った。
「できてないから図書室と閲覧室を使わせて欲しいのよ」
彼女が締め切りに対してとても過敏な反応をすることは知っていた。
昔からだった。それは相変わらずであるらしい。

「月でも何でも良いのよ。シャルルのその瞳を描いてみたかっただけなのだから」
マリナがそう言ったので、シャルルは軽く溜息をついた。
彼女の彩色は確かに、シャルル・ドゥ・アルディでも少しは認めてやろうと思うくらいのセンスがあった。
しかし、本当の彼を描きたいと言ってから、どれくらいの期間が経過しているのかという計算することについては、彼女は不向きであった。
今でも、彼の瞳や白金の髪や、唇の色と言った部分的な彩色しかしていないのは、何か、心理的な負担がかかっているのだろうか、と医師の視線で見てしまいそうになる。
そうなると、決まって彼女は「いらない」と言って、日本に逃げ帰る。
いや、帰る場所はここだから・・・・日本に逃げ行くと言った方が適切だった。

彼のファム・ファタルは大変に素直でない。
だからこそ、いつも、彼の想定外の言動で彼の物思いを誘発してばかり居るのだが。

「いい加減、そんな時期ではないだろう」
シャルルはまた繰り返して言った。先ほどとは違う意味で。

「シャルルの言いたいことはわかってる。・・・・今年のブルームーンは終わってしまったのでしょう？」
彼女は言った。
どうやら、その様子から、彼女は２回目の満月に間に合うようにするのか、それとも、その直後に提出期限を設定しているらしかった。

「いいや、まだもう１度あるよ」
彼がそう言うと、マリナがえっと声を漏らして茶色の瞳を少し大きく見開いた。
シャルルは青灰色の瞳をマリナに向けながら、甘い笑みを含ませて、微笑んだ。

「今年は・・・・１月と３月に発生する。その代わりに、２月には満月はやって来ないがね。暦の上の問題だから、ひと月に二度、という表現は的確とは言い難いが・・・」

「そう・・・・そうなんだ」
マリナが頷いたので、シャルルは尋ねてみることにする。
この部屋にはカレンダーがないので、彼女は頭の中で、月の暦を思い返しているようだった。
良かったと言って、マリナの唇が持ち上がり、彼女の顔が喜びで綻んだ。

しかし、シャルルは続けて言った。
彼女が上機嫌になって、なぜ、２度目の満月に拘るのか。
「マリナの願い事はそれで成就するわけ？随分と幼い考え方だ。自分の願望は自分で叶えるものであり、他者に願うどころか月に祈るというわけか。・・・たくさんの願いというものは願わないことと同じだぞ」
彼が辛辣な言い方をして、マリナを誘導していることにすら彼女は気がついていなかった。
「私の願い事はひとつだけよ。一度にひとつだけ。でももう一度願うことができるのであれば、それに越したことはないじゃない」
「なぜ？」
そこでマリナはしまったと思った。
シャルルにうまく乗せられて、うっかり口にしてしまうところだったということに気がついたらしい。
慌てて唇を両手で押さえて、首を横に振った。
「シャルルには教えない」

「マリナ」
シャルルが彼女の・・・・運命の人の名前を呼んだ。

柔らかい棘を含んだようなそんな微笑みをするときのシャルルというのは、酷く意地が悪く、それでいて決して話をうやむやにしない。

「オレは月の光なのだろう？君が願い事を捧げているのは月なのだから・・・そのオレに言わないというのは、先ほどの話と矛盾するぞ」
マリナが面白くなさそうに言った。
「シャルルに言ったら願い事にならないでしょう」
そう、とシャルルが笑うが、それはとても挑戦的であった。
それで彼がそのままでも良いよ、と言った試しはない。
「君が理由を明かさないのなら、オレも貸し出しを許可しないよ。・・・それに夜中の使用も禁止する。早くパリの時間に馴染んでくれよ、マリナ」
彼はそう言って、ちょっと困ったように眉を持ち上げた。
整った顔ではあるが、彼はあまり表情を変化させない。・・・彼女の前で以外は。
「シャルル」
「マリナ。君が日本に行くことは構わないが、それをオレが喜んでいるとは思わないでくれよ。・・・・そこまでして題材にしたいというのであれば、テーマをオレに説明しろよ。でなければ、積極的協力は断る」
彼女が何かを口ごもり・・・そしてこたえを待つシャルルが無言でいるので、これは逃げられないと観念して、彼女は大きく溜息をついた。

「・・・シャルルがどんな人なのかと聞かれて。ブルームーンのような人だと言ったら、わからないって言われて・・・・だから絵を見せようと思ったの」

そして彼女は横を向いた。
一度吐き出してしまえば、後は問われなくても理由を明かし始めた。
「出品するつもりではあるけれども。それはまだ少し先の話で良いと言われている。でも、その前に・・・・」
彼女はそこで言葉を句切った。
声が震えて緊張していることがわかった。
シャルルは無言で・・・彼女の言葉を聞いていた。
何が流れてきているのか言の音が判別できにくかった。
それは聞きたくない言葉ではなく・・・・彼が願っていた言葉だったから。
彼の、願いだったから。

だから言い淀んでいたのか。

シャルルは大きく溜息をついた。マリナと同じように。
それは深い落胆を示すものではなく・・・・彼女と同じように・・・・それまで胸の中に秘めておいたそれが、実現すればよいのにと願いをかける、祈りの吐息だった。

誰に絵を見せるか、と彼女ははっきり言わなかった。
しかし、この時期に日本に戻り、誰に会っているのか・・・明白だった。

彼女はシャルルの写真でも画像でもなく、絵を見せようとしたのだ。しかし彼をそのまま写実的に描くことができずに、せめて・・・彼の瞳の色や髪の色を再現しようとしたのか。あるいは・・・とうとう、彼の絵を描く気になったのかもしれない。
資料がどうとかこうとか言うのは、その資料室に、シャルルの写真が保存されているからだ。彼は滅多なことでは画像を撮らせないことで有名だったので、数少ない貴重な資料として保存されているそれらを見てみようと思ったのかもしれない。

「回りくどいぞ、マリナ」
シャルルがそう言うと、彼女はわかっている、とまた違う方向を向いたので、彼は腕を伸ばして、彼女の肩を掴んだ。
そして自分の胸に彼女を引き寄せて、マリナの茶色の瞳を覗き込んだ。
その彼の表情が実に艶やかで・・・マリナが硬直して見入ってしまっている姿に、また笑みを浮かべる。

「実物を見れば良いだろう」
「・・・・じっくり見ていたらおかしいでしょう」
「そうか?随分とまともな発言だな。・・・昔はスケールで、オレの顔を測ろうとしたのに」
彼が面白そうにマリナをからかうと、彼女は唇を尖らせて、シャルルに抗議した。

「君はまったく支離滅裂だ。絵を描くことと、願い事をかけることと・・・まったく別個に考えることが出来ないのか？」
「悪かったわね」
「否定はしないがね」
シャルルはそう言って、彼女を胸の中に抱いた。困惑する彼女の声を無視して、彼は囁く。
「マリナ。・・・君の願いは成就されるよ。なぜって、オレがそうすると決めたから」
「シャルルに保証されても・・・」
「君の願い事はお見通しだよ。ブルームーンの意味を知っているか？
・・・極めて希であることや、起こりえない奇蹟や・・・そして特別な事を示す」
マリナが顔を上げた。
願い事が叶わないようにと祈っているようなものだ、とシャルルに指摘されたからだった。

「だから、特別なことを祈らなければならない。
マリナのその祈りは随分と・・奇抜で悪くない」

月の眩のような人だと言って、曖昧すぎてわからないと指摘されたのだろう。
そして、彼女しか知らないシャルルについて、彼女は懸命に語ったに違いない。それでもシャルルを表現することができず・・・絵を描くことにしたのだろう。
顛末については容易に想像がついた。
しかし、彼女はまだまだ・・・ここに永住するには、説明を加えることができるようにならなければならないと思った。

シャルルは彼女の肩を掴んだまま、彼女に言った。
「いくらでも使え。でも、今夜は駄目だ。・・・今夜は実物を見ておくだけにしろ。飽きるほど、見せてやる」

その言葉にマリナが口ごもった。
彼女はこれから下絵を描くつもりでいたらしい。
彼女のブルームーンが煌めいて、蠱惑的な眩を放ったので、マリナが言葉を詰まらせたあと、すぐにそれは予定にないことだと言って身動ぎをしたが、彼はそれは駄目だとおかしそうに言って、彼女の肩を掴んだまま、手首を持って部屋を移動しようと言った。

それに日本での報告を詳細に聞かねばならない。今後の対応のために。
彼がそう言うと、それは次のお祈り事にして欲しいとマリナが言ったので、出来ない相談だ、とシャルルは即答した。
彼に出来ないことはないのに。・・・次のブルームーンまで待つことは出来なさそうだった。

Blue　Moonとは・・・月が二重に見えることではない。
満月がひと月に、二度ある現象をそのように言う。
希なること、特別な事を指し示し、二度目の満月に祈り事をすると叶うと言われている。
しかし、時期を待たなくても。彼はいつも待っているというのに。
シャルルのファム・ファタルは常に彼の想定外のことばかりを彼に告げる。
そして彼女の存在はいつも・・・彼を幸せな気分にさせるが、滾るような熱情も、疼痛のようなやるせなさも与える。

それは彼女が気がついていないから。
特別な願い事などではない。

彼女が願えば、その瞬間に成就するというのに。
彼はどんなことをしてでも、彼女にすべてを与えるつもりでいるのに。

・・・青い青い月の光のような瞳は、いつも沈まず、消えず、絶えず彼女を見つめていると、いったいいつになったら、彼女はわかるのだろうか。

３年から５年の周期でブルームーンは発生する。
その時に、彼と彼女の「特別な願い事」は一体何になっているのだろうか。
それを彼の名前を呼んで抗議を始めたマリナに聞いてみるのも悪くないと思った。

（FIN）

Punishment

イケダさん？

そう、声をかけられて、彼女は顔を上げた。
もうすぐ夕暮れだった。
日が翳り始めて、そこにはもう誰もいなかった。
廃校になった小学校の校庭をフリースペースとして利用していて、限られた時間内の解放ではあるが、ちゃんとごみ箱も水飲みもベンチも備えてある。

「何しているの？まだ、教室の始まる時間まで相当あるけれど。」
画廊のオーナーはそう笑った。そして、冷えるよ、と言って笑った。
「スケッチしていたんです。…そこの銀杏の葉がもうすぐ全部散りそうだったから。」
旧校舎の入り口近くにそびえ立つ銀杏を、彼女はスケッチしていた。
樹齢は相当なものだと思われる。
大きな銀杏の木が、ほんのわずかな黄金色の葉を残して、そびえ立っていた。
この校舎も間もなく補修工事が入るという。
そうなれば、この銀杏の大木は他の場所に移されるか、切り倒されるであろう。
その前に、この構図であの銀杏を描いておこうと思った、とマリナは説明した。

ふぅん。

オーナーが興味深そうに言った。
そして、彼女の隣に座って良いかと尋ねたので、マリナはどうぞ、と言って少し場所を詰めた。ふわり。彼が動くと優しい香りがする。

「僕もスケッチするけど、やっぱり本当の絵を描く人の構図って違うね」
「スケッチ？スケッチするんですか？」
意外だった。
彼はグラフィックデザイナーで、時々、マリナをモデルにして作品を描いているらしい。
「らしい」というのは、実際の作品を見たり、モデルとしてデッサンをしたりすることが全くなかったからだった。
彼は本当に作品を作っているのだろうか。そう思ってしまうくらい何もしてなかった。
周囲にイメージの合うモデルが見つからない、ということだったので、特にモデルとして何かをするわけでもなく、「イメージ」を使わせて欲しいと言われていた。
彼女は、それなら特段問題在りません、と快諾した。

だから、彼がスケッチやデッサンをするところは見たことがなかった。
彼女は興味深く好奇心に溢れて彼に尋ねた。
「もちろん、何かを創るのだから、最初に構図があって、次にどうしようか想像するよ。過程は絵画とほとんど同じ。」
「それなら、この構図はどのようにされますか？」
貸してご覧、と言って彼がマリナのスケッチブックを取り、鉛筆でさらさらとラフスケッチを描き始めた。
…凄い！
マリナが目を見張る。ものすごいスピードで彼はその銀杏と旧校舎と、そしてほどよい校庭の空間を取り入れた、寂寥感のある風景を書き上げてしまった。
マリナの構図とはまったく違った。
「いつもはペンタブレットで描くのだけれどもね。久々に鉛筆を持ったよ。」
彼が照れくさそうに言った。
彼女が身を乗り出した。この人の見え方は自分と違う。凄い。
どうやったらこんな配置になるのかしら。

…そんなことを思い、夢中で彼の手元のスケッチブックをのぞき込んだ。
寄り添うような格好になり、彼が少し息を呑んだ。

ーーーーーその時だった。

「マリナ」

また、違う声が降ってきた。
土を踏む音がして、そこに現れたのは、シャルル・ドゥ・アルディだった。
流れるような白金の絹の髪、薄い唇、青灰色の瞳、良く鍛えらえた鋼のような長身に焦げ茶色のスーツ。彼は本当にシャルル・ドゥ・アルディだった。
「…シャルル！」
そこで二人の影は離れた。シャルルはその様子を食い入るように見つめていた。
路の向こう側にはロールスロイスが一時停車していた。

なるほどね、彼は苦笑した。

都内で走れるように小回りのきくタイプのロールスロイスに、彼のスーツの出で立ち。
そして、随分時間があるのにスケッチしたいと言って早めに訪れたマリナ。
無表情ながらも憤りを隠すことの出来ないアルディ氏。気がつかないマリナ。

合点がいった。

シャルルとマリナはここで待ち合わせをしていたのだ。
しかも、かなり早くシャルルがここに到着したらしい。
かつ、自分と話し込んでいるところをシャルルが目撃してしまった格好になったのだ。

「…さて。僕は一足先に戻ってるよ。」
彼は小さく笑って、立ち上がった。
「寒いから、教室は少し暖めておくね。」
そう言って、彼はアルディ氏に挨拶をした。
「ご無沙汰しています。」
シャルルは優雅に微笑んだ。「こちらこそ。」
握手を交わしたが、ぎゅっと思わぬ力で握られた。
まったく、何を攻撃的になってるのかなぁ。
内心苦笑して、こちらも強く握り返す。

拗れると良くない。早々に退散することにする。

マリナが早かったのね、と無邪気に笑って立ち上がった。
そこで挨拶をして背中を向けて足早にそこを立ち去ったが、後ろで
「痛いよ！シャルル！ちょっと！」
と叫ぶマリナを無視して、強引に彼女の手を引っ張って車に乗り込むシャルルとマリナの姿を認めた。
彼らの関係を知らなければ、立派な拉致目撃現場だ。

目を細めた。

どんなに文句を言っても、マリナはシャルルに握られた手を振り払おうとしなかった。
そしてシャルルは先ほどのような荒々しい力では彼女の手を握りつぶさない。

…時間には帰ってくるんだよ。

彼はそう呟いた。

「シャルル！痛いよ！」
彼女は車内に押し込められて文句を言い、そして抗議した。
荒々しく扉を閉めて、車を出せ、と命令口調でその運転手に指示すると、じゃっと シャッターを敷いた。
体勢を崩したままの彼女は、突然車が走り出したので、反対側の扉にぶつかりそうになる。
シャルルはそのタイミングを見計らったかのように、握っていた手を今度は強く自分の方へ引いた。
シャルル！シャルル・ドゥ・アルディ！と叫ぼうとするマリナの口を、彼の薄い唇で塞いだ。有無を言わさないその強引なキスにマリナはいつも戸惑う。
言葉を遮られたかのようで、少し悲しくなるときもある。
悲鳴を上げるマリナの冷たくなった唇に彼の体温と熱情が注がれて、徐々に熱くなってきた。頬を傾け、同じように冷たくなった彼女の頬に自分の頬を寄せた。

…そして、彼が強引に自分の欲求を満たそうとしているのではなく、冷えた彼女を暖めているのだということに気がついた。
片方の掌はまだ、繋がれたままで、そしてもう片方の掌で愛おしそうに彼女の髪の毛に指を入れた。
「…手が冷えるのは、良くない。」
「ありがとう。」
素直に、マリナが言った。シャルルは彼女の額にキスを一つ落とした。
彼女の茶色の目の前すぐに、シャルルの青灰色の瞳があった。
シャルルはこのゆっくり瞬きをする茶色い瞳の彼女をしばし見つめた。

…冷えるのも気にしないくらいスケッチに没頭する君を愛おしいと思う。
その自由さが好きでその一生懸命さが羨ましいとさえ思う。
でも、そのほんの一瞬、こちらを見て笑ってくれるその時が何より嬉しい。
こよなく愛おしくて切なくなる。そして不安になる。

また、居なくなってしまうのではないか。
また、腕からすり抜けて「またね！」と行ってしまうのではないか。
それが怖くて、また・・・悲しい思いをさせてしまうのではないか。

「どうしてそんなに確認するの。私は…ここに居るのに。
　シャルルの居るところが私の帰るところだよ。」
彼女はいつもそう言う。でも、それでも不安なんだ。
これが本当は夢で、幻で、目を醒ますと、その夢の残骸だけ残り、指の間からこぼれ落ちていく砂のように、すくって戻すことが出来ない儚い自分の妄想ではないか、といつも思う。

「随分早かったのね…これからまた出かけるのでしょう？」
彼は今日は国内で学会のはずだ。この後予定がないときは、彼はタイをほんの少しだけ緩める。マリナの前でだけ。
でも、今は違った。
マリナはそれでこれからまた彼が出かけなければならないことを知った。

「この後レセプションがある。少しだけ時間が空いたから…」
「その後落ち合いましょうと約束してたのに。」
マリナは少し微笑んだ。
これから自分も講座があり、戻らねばならない身だ。
お互いにやるべき事を済ませたらそのままゆっくりできるのに、その合間のほんの少しの短い時間でもこうして訪れるシャルルを…愛おしいと思った。
そして、切ないと思った。

「それにしても君は本当に迂闊だ」
限られた時間、都内を静かに走る車の中で、シャルルは足を組みなおして横を向いた。
ようやくマリナの体を離したものの、その右手は彼女の左手に絡まり、愛おしそうに親指で彼女の掌をなぞっていた。
「意味がわからない」
「意味がわからない？本当に？」シャルルの言い方に、少しだけかちんとしたマリナはその言葉を聞き流すことができなかった。
「私のどこが迂闊なのよ」
「迂闊だよ。…どうして君はそんなに無防備なんだ。
　いつも、いつも。
　…いつも、男の影がちらつく。誰かの影がちらつく。」
シャルルはまだ横を向いて、窓の外から見える都内の灯りが流れていくのを見つめていた。
「シャルル。私に誰にも会うなと言うの？誰とも話をしてはいけないと言うの？」
「そう」
彼は言った。あまりにもあっさりと言うものだからマリナが絶句した。
「誰にも見せたくない。誰にも話しかけて欲しくない。誰のことも話題にしたり考えたり、そして…誰にも触れさせない。」
その瞳が、紫色に染まり始めた空と同じように、少しだけ仄暗い光を放ち始めたので、マリナは困ったようにひとつ、吐息をついた。
「できないことをわかっていて、そうやって言うのは、シャルル・ドゥ・アルディらしくない。」
「…マリナ、オレらしいって何かわかってるの？」
「わかっているわよ」
即答だった。
「そう。それは面白いね。…オレのことがわかるなんて。誰もオレのことはわからない」

少し、マリナが無言だった。同じように反対側の窓硝子の外を眺めていた。

二人のドライブはすぐ終わってしまった。
先ほどの見慣れた路に戻り、そして、車が止まった。
長くは停車していられない。

行かないと、とマリナが腕時計を見て荷物を持った。

シャルルからそっと手を引き抜いた。残った温度を確かめるかのように、シャルルは軽く、自分の指を曲げたが、そこにはもう彼女の柔らかい手の温度はなかった。

「それじゃ、シャルル。またね。」

最後のまたね、という言葉に、シャルルは反応した。
その後に会いましょうという意味の言葉だったのに、彼には今生の別れのように聞こえた。
そして、シャルルでない違う男と並ぶ彼女の背中を思い出した。
同時に、彼がその昔に向けられた母の後ろ姿と重なった。
そして様々な人が彼に背を向けたあらゆるシーンを思い出して目を瞑った。

軽く曲げていた指を今度はぎゅっと握った。

「…マリナ。行くな。行かないで。」
扉を開けようとする彼女の腕をシャルルは掴んだ。
そして、また、彼女の唇を奪い、強く強く抱きしめた。
「…もう本当に行かないといけないの！」
マリナが懇願する。でも、彼の瞳は暗かった。
「駄目だ。君がオレが満足するほどキスしてくれたら別だけれど。」
後ろで、クラクションが鳴った。

行かせない。このまま、行かせない。どうか、傍に居て。
だから決して彼女ができない要求を言った。
彼女はいつも彼の愛には応えるが決して求めない。

その時だった。

「ーーーー！」

ぐい、と顔を両手で挟まれて、引っ張られた。
シャルルの上に、マリナがのし掛かる。
彼女の茶色い髪の毛が降りかかり、彼の白金の髪に混じった。
彼によって暖められた両の掌が彼を固定した。
そして、彼女が唇を落としてきた。
啄むようなキスではなく、それはとても激しいもので。

マリナは眉根を寄せて頬を傾け、彼の薄い唇に自分の唇を合わせた。
そして彼の中奥深くまで入り込むと、強く舌を吸い、そして次には彼のそれを軽く甘く噛んだ。
彼の下唇を吸い、そして、その余韻を味わうかのようにゆっくりと離した。

シャルルは一瞬息を止めて状況を確認することさえ忘れるほどの痺れを感じた。
動けないくらいの激しい接吻に、シャルルが陶然とした。我を忘れてそれに溺れた。
…余裕がなかった。
予測不能の彼女のキスに、彼がその怜悧な仮面も、皮肉気な微笑みも、次の手を練るための止まったことのない思考回路も。すべてが

一瞬、取り払われて機能を停止した。
車の後ろでクラクションが激しく鳴らされていることも忘却した。

唇を解放されて、静かに目を開いた。
彼女の茶色の瞳も開く瞬間だった。
本当は目を開きたくなかった。このまま甘美な痺れに酔いしれていたかった。
そんな願いを視線に込めた。

…そして二人の視線が交差する。

「マリナ…愛してる」
シャルルがゆっくりとそう言うと、マリナはまた予測不能の行動に出た。
ぱちん！と両の頬を軽く叩いたのだ。
「はい、お終い。私は行くわ。」
その言葉に、シャルルが青灰色の目を見開いた。

ああ、大変。本当に間に合わなくなりそう。

彼女が叫んだ。
マリナは身支度を整えると、扉を開けて、振り向きざまに言った。
いたずらっ子のような笑顔で。でも少し頬を紅潮させて。

「ああ、シャルル。今のはね、罰よ。…愛のないキスだから。
　今度あんなこと言ったら、本当に知らないからね。」

そう言って画廊の入っているビル地下に下がっていく彼女をしばし見つめていたが、やがて、シャルルはくすくすと笑い始めた。そして、久方ぶりに声を上げて破顔した。

…マリナ、君なりのPunishment（刑罰）なのか。

愛があるキスは、彼女は躊躇いそして羞恥で顔を赤らめるのに。
君に行くなと言って困惑させたオレを懲らしめるためにする愛のないキスが、こんなにも激しく情動的で煽動的であることを、彼女は気がついていない。
彼女の愛し方がそうでないからだ。

まったく予測不能だね。
このオレを無防備にさせるなんて。

だからこそ君はオレのファム・ファタルだということに、いつになったら気がついてくれるのかな。

いいよ、売られた喧嘩は買う。そして倍返しだ。

クラクションがまた激しく鳴って、シャルル・ドゥ・アルディを乗せた車はそこでようやく走り出した。

（FIN）

GreenFlash

リングに何を彫るのか決めるときに、マリナ・イケダは「少し考えさせて欲しい」と言った。

急がないから良いよ、と彼女の婚約者は微笑んだ。

その指輪は、ハードプラチナの完全オリジナルだった。
実用性、耐久性そして美しさ…何もかもを兼ね備えた何度見ても飽きのこないリングのデッサンを見たときに、彼の非凡な才能を思い知る。
外側にはアルディ家の家紋を彷彿とさせる、薔薇の花と蔓がからみあった文様が彫り込まれていた。

マリナはそっと、シャルルの細く長い左薬指を眺めた。
彼の指に納められたリングを想像する。きっと素晴らしく優雅に輝くことだろう。

準備は着々と進められていた。

教会の下見にも行った。
ステンドグラスがあまりにも壮大で、醇美に輝く天使たちが空を舞う姿に見惚れていた。
天井高く、いったいどれだけの人が収容できるのかわからないくらいの古く厳粛な雰囲気を創り上げている教会で行われる彼と彼女の挙式というものを想像することができない。
「挙式の段取りは大変だ」と聞くが、マリナは「その日」を待つ程度しかすることがなかった。
すべて、準備は進められており、時々、採寸や歩幅などを計測される位だった。
シャルルでジルに細かく指示をしているようで、ジルは通常の業務に加えて段取りを整えていたので少し疲れた風だった。
自分ができることとは何だろう、と尋ねてみることもあるが、そんなときは彼とジルは良く似た微笑みで、各々、「いつも笑っていること」と言った。
だから、彼女はこの「宿題」について真剣に取り組むことにした。

「シャルルは決めたの？」
マリナがそう言うと、シャルルはもちろん、と言った。
「書き換え不可能なのに、迷ったり候補を絞ったりしないの？」
彼にそう尋ねると、シャルルは青灰色の瞳をふっと煌めかせて、マリナを見つめた。
「オレに変更はない。」
短いけれども自信に溢れた返答だった。
彼はそのメッセージをマリナに教えなかった。
「最後のお楽しみ。‥まぁ　フランス語だから君にはわからないだろ」と冷たく言った。

シャルルは特段忙しいと不平を漏らすことはなかった。
彼が長らく待ち望んでいたことであるから、その煩忙さえも愉しんでいるようだった。
アルディ家内は長らく不在だった当主の配偶者…アルディ夫人を新しく迎えることになり、慌ただしかった。
もう少し閑雅に事を進めてくれ、と眉をひそめたシャルルが注文をつけるくらいだった。
その中で、マリナだけが時間軸が異なっていた。
取り残された感じがする。
でも、それは彼なりの気遣いで、きっと自分には話を聞いても何もできないのだろう。

挙式が近くなって…

様々な事務手続きが進められていた。
彼女が今度日本に帰るときにはもうマリナ・イケダではない。
いくつか、言われるままに書類に署名をして、彼女の遣るべき事は終わった。

後は遠方から来る来客や、マリナ自身が呼び寄せた友達、そして家族をもてなすことが最後の仕事であったけれど、それはまだしばらく先のことだった。

そんなときのことだった。

時間が空いたから、少し外出しないか。

シャルル・ドゥ・アルディが言ってきた。
朝の早い時間のことだった。

シャルルは朝が弱い。日が高くなるまで起きられない。
それは彼の脳が休息を欲しているからで、それだけ彼は常人よりはるかに多い脳領域を活性させているのだと思う。

だからこの朝早い時間の散歩に、彼と遭遇するとは思っても居なかった。

朝の散歩はマリナがここに来てからの日課だった。
食事の前のほんの短い時間を歩き、そして食後にまたそぞろ歩く。
なかなか外出できない状況なので、できるだけ広大な敷地を散策して、季節折々の花々を眺め、気が向けばスケッチした。
朝早いので、まだ少しだけ肌寒い。夜露が園の葉を薄く湿らせていた。

そんな彼女が短い散策を終えて硝子張りの渡り廊下に向かおうとすると、よく磨き込まれたガラス扉に、シャルルがもたれてマリナを待っていた。
「シャルル」
マリナは目を見開いた。
朝の陽光にシャルルの白金の髪が輝いていた。
彼はいつものような仕事用の格好ではなく、軽装だった。
滅多にオフを取らない彼が時々見せる、少しだけリラックスしたような表情から、マリナは彼が何か話があるのではないのかと思った。

昨晩は、遅く帰る予定だと聞いていたので、彼女は自分の部屋で休んでいた。
だからシャルルは寝ないで朝を迎えたのかもしれない。
寝ないで…シャルルは仕事をする。でもマリナは体に気を付けてとしか言えなかった。
彼にしかできないことがある。
それをやるなとは言えなかった。無理をするなとは言い出せなかった。
時には無理をしないといけないこともある。
大人になってからそんなこともあり得るのだと‥マリナは知った。
彼に投げ出せない何かがあるのであれば、自分はそれを支えたいと思う。
だから、彼女は「今を無理してもいいから、必ず休息を取るように」と言った。
それだけは守って欲しいと言って彼は「ウィ」と言ったのに守ってないらしい。
マリナは小さくため息をついた。

「シャルル。おはよう」
努めて明るくマリナは言うと、シャルルは整った顔を少し緩めて、おはようと言った。
そして、いつものように彼女の額にキスをした。
「随分早いのね」
マリナが素直に口に出す。
「今日はね。特別だよ。…一日オフが取れた」
シャルルがそう口にしたので、マリナは驚いて顔を上げた。

この状況でありえない。

彼は、オフが取れたではなく、オフを取ったのだ。

そして、軽く腕を組みシャルルはマリナに提案する。
「食後は外出する。そのつもりで。」
彼はそれだけを言うと、ふいっと渡り廊下を歩いて行ってしまった。

マリナは「外出」の意味がわからなかった。

彼女はここのところアルディ家を出ていない。
セキュリティ上の問題もあったのだが、フランスの華であるシャルルの結婚はたいそう世間を賑わせていた。
しばらくすれば落ち着くから、と言ったが、メディア関係を一切シャットダウンしてマリナの耳に入れないようにしてもなお、その喧噪ぶりが推し量れた。
だから、「外出」とはこの庭園を一緒に散歩する程度…と思って居たのだが、どうやら違うらしい。

屋内の完全空調管理された中でながらく過ごしてきたので、彼女は外出するときの服装をどう選択すれば良いのかわからなかった。そのくらい久しぶりのことだった。

シャルル…どこに行こうとするのかしら

滅多なことではマリナの外出を許さない彼が、外出すると言う。
マリナは眉をひそめて顔を曇らせた。
あの短い会話ではシャルルの考えていることがわからなかった。

出発するときに「着脱可能な服装で」とシャルルが言ったので、帰りが遅くなる外出だと何となくわかっていた。
でも、いくら行き先を尋ねても彼は「ちょっとそこまで」という実に曖昧な発言しかしなかった。
シャルル・ドゥ・アルディに曖昧は存在しないはずだから、行き先は明かさないつもりなのだと思ったので、マリナはこの質問を取り下げることにした。

そしてアルディ邸を車で出て、パリの中心から少し離れた郊外に設けられたアルディ家のヘリポートに到着する。
いくつかある離発着場のうちのひとつだった。
明らかに「ちょっとそこまで」ではない移動距離になりそうだと気がつき、マリナは驚いた。
彼は色素の薄い瞳を保護するために、サングラスをかけているので、表情が読めなかった。
長い脚を組んで、じっと外の様子を見ている。
彼女はそんな彼の様子をしばらく眺めていた。

シャルルは常に他人の目に晒される。
これからもその生活は変わらない。

彼は、それが普通の生活であるかのように、当然のことと受け止めているが、シャルルが人目を忍んで逃亡生活をした時代を知っているだけに、マリナはこうした彼への注目を時々切ない気持ちで見守った。

かつて、ジルに言われた言葉を思い出していた。
不自由な生活を、これまでとまったく違う生活を、マリナは受け入れる覚悟があるだろうかと彼女に問われたことがあった。
その時、彼女は返答に詰まってしまったが、今は、それも人生だ、と言うことができるようになった。

何度かヘリやセスナには乗ったことがあるが、あの離陸の感触が未だに慣れなかった。

小型の飛行機特有の浮遊感が不安を誘う。
エンジンの振動が体に伝わり、心許なくなる感覚とともに彼女と彼は離陸した。

マリナのそんな不安げな表情を察したのだろうか。
彼が離陸と同時に、サングラスを外した。これからもっと眩しくなるはずなのに。
そして
こちらにおいで、と言うかのように隣に座るまりなを呼び寄せた。
そっと、彼女の二の腕を掴んで引き寄せる。
彼の見た目よりもずっと逞しい体に引き寄せられて、マリナはシャルルに寄り添った。
肩を抱き、逞しい均整の取れたシャルルの躰が小さな彼女を抱いた。
そして大丈夫だから、とでも言うかのように軽くマリナの背中を叩く。
茶色の髪を愛おしそうに、細く長い指で撫でた。
彼女はそれだけで安心する。
シャルルの鼓動が伝わってくる。
もうすぐ…･もうすぐ、彼と彼女は永遠を誓う。
すでに二人の間で何度も誓い合った言葉を、今度は皆の前で、神の前で誓う。
それが儀式であるとわかっていても、彼は彼女を名実ともに彼の妻にすることが出来る。

もう、誰にも奪われない。
もう、誰にも渡さない。
もう…･永遠に、離さない。

ーーー激しいエンジン音の中で、二人の空間だけが静かに流れた。

これが挙式の前の最後の時間になるかもしれない。
シャルルはそう思うと…目の前の茶色の瞳の女性を見つめる。
二人だけの時間は案外もてないものだとわかった。
どんなに彼が苦心して時間を割いても、彼の望んだとおりの長さの時間は確保できなかった。

本当なら。

一日中一緒に居たいと思う。
何をするにも一緒に居たいと思う。
彼女が眠る時間にそっと彼女の寝顔を見る時間でさえ…
彼は彼女の視線を浴びたいと願う。

でも、それでは駄目だとも思う。

彼だけの時間と、彼女だけの時間があってこそ‥二人の時間が希有であることを認識できることを十分承知していた。

二人が到着した場所は、小さな孤島だった。

ブレストよりももっと先の、先端とも言える場所だった。
実はアルディ家所有の土地がどれだけあるのかマリナはよく知らない。
彼の一族の財産についてはまったく興味がなかったし、先般のサインしたいくつかの書類に、彼女自身は財産放棄をする旨の署名をしたばかりだった。
ただ静かに彼と一緒に過ごすことが出来る時間が彼女の望みであり財産だった。
だからこの先、彼女とシャルルの間に実子ができてその子が成人する前に財産移譲の問題が生じたときのみ、後見人として登録されることになる。

着陸すると、かなり長い時間離陸していたために、躰が揺れている感じがした。
シャルルは優雅に降り立ち、マリナを当然のようにエスコートした。
しかし彼らが降り立った場所は…
「ここが『ちょっとそこまで』？」
マリナが少し呆れたように、彼に質問した。
取り下げた質問をもう一度することになった。

「ここはアルディ家の私有地だから、誰も来ないよ。」
彼がそう言ったので、マリナはちょっと困惑気味に辺りを見回した。

一周が5キロ程度の小さな島だった。
島と言うには小さかった。岩と言うには大きかった。
最も小高い場所に降り立ったので、周囲がぐるりと見渡せて、向こう岸に半島が見える。
それ以外は、海に囲まれていた。何もない場所だった。
ヘリが離陸して遠のき、強い風が和らいだ。

海風にマリナは目を細めた。
海が好きだと言った彼女の言葉をシャルルが覚えていたらしい。

冷たくて澄んだ風が彼女に吹き付ける。
確かにパリとの温度差は大きい。
準備をしておかないと風邪を引きそうだった。

マリナは辺りを見回した。
アルディ家の私有地にしては…なぜこんな岸壁しかない島を所有しているのかわからなかった。

それでも何度かここは誰かが訪れているらしくて、岸壁で危険そうなところには補助柵があったし、小さいながらもヘリポートや船着き場らしき足場があったりした。

シャルルがなぜ繁忙であるにも関わらずオフを取って、今日この場所に来たのかよくわからなかった。
けれども何か話があってこうしてここに連れてきたのかと思うと、彼女はその瞬間を待つことにした。焦っても仕方がない。
こちらからいくら言っても、彼から話す気にならなければ、どうにもならない。

「何も無いところだろ」
シャルルがそう言ったので、マリナは素直にそうだね、と言った。
「何も無いけれど…ここは特別なんだ」
シャルルの言葉にマリナが首を傾げる。
出発が遅れてしまったので、すでに夕日が沈み始めていた。
オレンジ色の光が差し込み始めて、この場所はとても見晴らしが良いことに気がついた。
周囲を水辺線が囲み、雲と空と海と太陽と…
澄んだ空気が彼と彼女を包んだ。
それだけでも充分素晴らしい場所であり、この景色をゆっくり、シャルルと眺めることができるだけでマリナは大変に嬉しいことだと思うのに。
シャルルは、まだ何かを考えているようだった。

外出できないことをマリナが憂えていると思ったのだろうか。
それとも、静かな二人だけの時間を過ごすことが出来なくて、彼女が寂しく思って居るとシャルルが考えたのだろうか。

出発が遅れたのはどうにもならない理由からだった。
緊急の案件で彼のオフは中断された。
そして彼の貴重な休日が再開されるときには、日も高くなり、朝の出発予定時間より大幅に遅れてしまっていた。

シャルルの白金の髪が揺れてなびいた。
マリナはその姿を見ると本当に彼は何もかもに恵まれた人だと思った。
何もかもに恵まれているけれど、それは彼の望んだことではなかった。
だから、彼は彼女の愛を得て・・・少しは平穏で静かなこの波間のような安息を得ることができれば良いのに、とマリナは思った。

「マリナ。…財産放棄の書類にサインしただろう」
「‥したわ。いらないから」
シャルルがそのことについて激怒して書類を廃棄させたことを後になって知り、もう一度署名をしたいと申し出たばかりだった。
彼は一族の予定外の、勝手な行動を許さなかった。

「君はオレの妻になるのに‥どうしてそう…オレに無断で話を進めるんだ。」
「私はシャルルの妻になるのであってアルディ家の財産の妻になるわけじゃないでしょ」
なぜそこでシャルルが憤怒するのかわからないと言うようにマリナが笑った。
「とにかく、その話は私も譲れないわ。シャルル、知ってた？私って意外に頑固なのよ」
「頭が物理的に固いのは知っていたけれど」
シャルルが切り返した。
「これほど強情な我が婚約者殿の意思を覆すことはできないのだろうか」
「できません」
マリナがつんと横を向いた。シャルルの真似をした。
「とにかく、いらないものはいらないの」
彼女は念を押した。
「どんなにシャルルが言ってもこれだけは駄目。」
シャルルはため息を切なげにはき出すと、わかった、と小さく言った。
今日この場ではどうあってもマリナの意思を変更することは出来なさそうだった。

それより…こんな綺麗な日没は、初めて見たわ

マリナが水平線の彼方に、目をやった。
話を続けるつもりはなかった。
彼と二人だけで過ごす短い時間を愉しむことの方が何倍も基調で重要だと思った。

今日は一日…移動だけで終わり、結局急な日程で、シャルルは半日程度しかオフが取れなかった。

こういう、生活になるのだろうな

マリナは思った。
これからシャルルの生活が変わるとは思えないし、変更は希望していなかった。
彼は彼の成すべき事がある。
モザンビークへの援助や、新薬の開発、臨床試験や学会への論文執筆…‧
その一方でアルディ家当主としての仕事もある。
加えてマリナとの生活のための時間を確保することは、彼の能力として可能ではあったが物理的時間が足りなかった。

「時々、ここに来るんだ」
シャルルはそう言った。
「誰も話しかけない空間は必要だろ。それに…ここは特別だ」
彼が同じ言葉を繰り返したので、マリナは茶色の瞳で、岸壁に片足を乗せてじっと水辺線を眺めるシャルル・ドゥ・アルディを見た。

「シャルルは独りになりたいことってあるの？」
「ないとは言い切れない」
シャルルはそう答えた。
彼の回りには常に人がいて、それが当たり前のことだと思っているのだと思った。
何百人もの大人達の頂点に立ち、人に囲まれているのに、シャルルは賛辞と賞賛を浴びることによってもっと孤独を募らせている。
そんなシャルルを見ると、とても切なくなる。
彼の孤独を解消することは‥・一生できない。
それなら。
彼の孤独ごと愛そう、とマリナは思った。

彼の中に存在する暗闇を、彼女は知っていた。
高潔な彼が、時折見せる狂気について深く苦悩していることもマリナは知っていた。
きわめて繊細な、気高い誇りはシャルル・ドゥ・アルディだけのものであり、それはマリナさえも冒すことの出来ない領域だった。

だから、今までこんな場所に彼がひとりやって来ていることを知らされていなかったことについて憤るつもりはなかった。
彼には彼の聖域があり、独り考え込みたい時だってあるはずだった。
…ここはどうも彼が若い頃から来ているらしかった。
この欄干の錆び具合から見て、そんな気がした。
共有する情報の量は愛の量に比例しない。
そして彼と彼女の気持ちは、測定することが出来ない。

「次からは…独りになりたいときには独りで来ても良いんだよ。そういう場所は必要だと思う」
マリナがシャルルの隣に並んで、そう言った。

すでに同居生活を始めていたから、挙式は形式上のことに思えて仕方がなかった。
結婚というものに憧れた時期がなかったと言えば嘘になるが、彼女はシャルルの気にする決まり事の上の権利義務関係を得ることについてはさほど重要だとは思えなかった。
彼の配偶者になることは問題なかった。
でも、このまま、ずっと、静かに穏やかに自由に‥マリナ・イケダとしての人生を歩むことも選択のひとつであった。彼とは恋人同士のまま永遠を過ごすこともできた。
彼女はそれでも良いと言ったのに、シャルルはそれを許さなかった。
「これで君をすべて手に入れられたとは思わないけれど…」
彼はぽつりとそう言った。
それを聞いた時、マリナは「わかった」とだけ言った。
彼が何を言いたいのか理解できたから。

「一時期、天体観測に凝っていたことがあって。ここは絶好の観測場所だから。
加えて…母が海の風景が好きな人でね。絵を嗜む人だったから、デッサン用資料として、随分とここの島の風景写真を撮ったりして見せた。」
マリナはその言葉を聞いて、胸が疼いた。
彼と母親の関係は、よく知っていた。
長らく病気を患っていたから、彼が自ら撮った写真を見て絵を描くことはもうほとんどなかったはずだった。
なのに、きっと彼はその話を聞いてからずっと、母のためにここに通い…母を失ってからはここでひとり物思いに沈むために足を運んだのだろう、と思った。

今度の挙式では…彼の親族側には父も母もいない式になる…
シャルルが詳細を明かさないのは、そういった事情もマリナに知らせることで余計な杞憂を彼女に与えることのないように、という配慮なのかもしれないと思った。
彼の両親が生きていれば、もっとシャルルは違っていたかもしれない。
「もし」はありえなかったけれどマリナはそう思わずにはいられなかった。

「今度、その写真を見せて。是非、それでデッサンさせて欲しいわ」
マリナがそう言った。シャルルは水平線を眺めていた視線をマリナに戻し、青灰色の気品溢れる瞳を細めて静かに微笑んだ。
「それは必要ない」
「どういうこと？」
風が少しだけ流れる向きが変わった。
夕暮れが近かった。
オレンジ色の光が空を塗り替え始めていた。
「いつでも好きなときにここに来れば良い。…ここはマリナの島だ。」
「言っている意味がわからない」
マリナが訝しげにそう言うと、シャルルはくすりと笑った。
「…名義を書き換えた。ここは君の所有する土地だ。君の個人で所有する財産目録の…一番最初の記載事項になるだろうけれど。登記も終わっている。」
資産価値はあまりないかもしれないね、とシャルルは言った。
「シャルル。私はそういうことは…！」
「これだけは曲げて受けてくれ」
シャルルが強くそう言った。
彼の思い入れのある、彼が安堵できる場所をマリナが侵害することはできなかった。
それなのに彼はこの申し出を取り下げるつもりはまったくなかった。
マリナを強い光で見た。
彼は夕陽を背中にして、マリナを眺めていたら彼女は光を受ける彼の姿を眩しそうに‥でも困惑して見つめる。

それでも困る、とマリナが口を開きかけたとき。
シャルルはマリナにおいで、と言って側に来るように言った。

日没が近かった。

太陽が水平線に沈み始めようとしていた。
日の入りを一緒に見ようと彼は言った。
空がオレンジ色から、やがて真っ赤になった。
反対側の空から…だんだんと青ざめた濃紺が浸食してきて、赤と青の間に挟まれた紫色の帳が音を立てずに太陽に近づいていく。
夜と昼が交代する様があまりにも鮮やかで、マリナは息を呑んでその様子を見つめた。

大気が澄んでいるせいだろうか。
自然の発する鮮明な色彩に言葉を失う。

「…マリナ。よく見ていて。太陽が沈む瞬間を」

彼が彼女を胸に抱き、冷たくなってきた風から彼女を護るように小さなマリナをそっと包んだ。マリナの肩に手を遣り、そして彼女の耳に薄い上品な唇を近づけた。
シャルル・ドゥ・アルディの心地好いテノールが静かに…囁いた。

「…‥さぁ。君に…捧げよう」

マリナはあっと小さく声を上げた。

…日没の瞬間。
それはほんの一瞬のことだった。

目を疑った。

太陽が。

太陽が一瞬、強く碧色に輝いた。

それはエメラルドに輝き、水平線の丸みにそって緩くカーブを描いている。
目の醒めるような鮮烈な碧色に、マリナが瞬きも呼吸も忘れて立ち尽くした。

その晄は強烈な閃光を放ち…そして次の瞬間には水平線の向こう側に消えてしまった。

すっかり日が暮れてその晄をもう見ることが出来ないのだと悟るまでに、大分時間を要した。
その間、シャルルは黙って彼女の肩を抱いたままだった。

冷たい風が向きを変えて吹き始めて…そしてマリナの紅潮した頬に吹き付けたので、そこでようやく我に返った。
「シャルル…･これ！」
「グリーンフラッシュ（緑閃光）だ」
振り返ったマリナに、彼は美しく微笑んだ。

「今日は大気が良い状態だったから。…きっと、見えると思った。どうしても、これを見せたかった」
彼はそう言った。

「これが、グリーンフラッシュ…」
「そう。いろいろな気象条件が整わないと見ることができない。
　いつも見えるとは限らないし…滅多に見ることが出来ない。
　これを僥倖として、見た者は…」

そこまで言うとシャルルは少し言葉を句切った。
マリナの茶色の瞳をのぞき込んだ。
少しだけ可笑しそうに。でも、とても‥切なく激しく遣る瀬無い表情だった。

「これを見た者は、真実の愛に目覚めるという。」

復路は往路と同じだけの時間がかかったはずなのに、とても短く感じられた。
移動中は…シャルル・ドゥ・アルディは細く長い指をずっと、マリナの小さなあたたかい指に絡ませたままだった。少しだけ冷たかった。
まるで、その絆を確かめるかのような、拙い彼の仕草をマリナは黙ったまま受け止めていた。

大人になって…彼らは沈黙による会話を覚えた。
それで気持ちが伝わることもあり、どんなに言葉を尽くしても伝わらないこともあるのだと知った。
シャルルの母には・・・・。
彼の気持ちは伝わっていたのだろうか。
彼の言葉にならない言葉が伝わったのだろうか。
彼の言葉に隠されたーーー愛して欲しいという気持ちは伝わっていたのだろうか。

あの島は、彼の特別の場所だった。

「滅多に遭遇できない」と彼は言ったけれど、あの緑色の閃光を、彼は何度か見ているはずだった。
あの晄を…ひとり眺めながら何を想ったのだろうか。
その都度…「真実の愛」について、彼はあの場所で考えたと想像すると‥遣る瀬無い気持ちが彼女を襲った。

…マリナは時計を見た。
まだ。まだ、間に合う。
彼女は入ったばかりの私室へ入るなり…踵を返して閉じたばかりの自分の部屋の扉を開けた。

シャルルは自室でひとり目を閉じ、静かに瞑想していた。
今日のこの出来事をマリナがどう受け止めたのだろうか。

彼の愛は、いつも…いつも…満たされなかった。

母への愛、父への愛‥そして半身への愛…
ようやく・・・
彼女への愛をようやく手に入れて、シャルルは初めて…
あの場所を誰かと･･･愛した人と共有したい、愛した人へ捧げたいと思うようになった。
長らく、あの場所は彼ひとりの彼だけの場所だった。

アルディ邸に戻ったのは日が暮れて随分夜も更けてからだった。
静かなアルディ邸に戻ると、シャルルは「今日は…良い休日だった」と礼を述べた。
マリナは無言で頷いた。
彼に礼を述べられる理由はなかったけれど、彼がずっとこの外出を考えていたのだと思ったから。

軽い食事を済ませると、シャルルは少し独りになりたいと言って自室に入っていった。
彼は濃いめのエスプレッソを一口、ふた口…口に含んだだけだった。
ーーーシャルル・ドゥ・アルディの短い休暇が終わろうとしていた。

彼の自室へは、直結している執務室から入ることにしている。
休む直前まで、彼は仕事をしていることが多いからだ。
マリナは厚い扉を叩いた。
返事がないので、しばらく考えを巡らせて、渡り廊下を歩き、今度は自室の扉を叩いた。
シャルル自身も含め、この扉を使う者は滅多にいない。
通常は内側から扉は施錠されており、朝、彼女が彼の自室から部屋に戻るとき以外には使われなかった。
使い込まれたとは言い難い分厚い扉をノックする。
「開いてるよ」
マリナの来訪を予期していたかのような答えが返ってきた。

重い扉を開けると、少しだけ音がした。
開閉が盛んでない扉特有の、使い込まれていない扉の音がする。
彼女は躰を傾けて、重たい扉を開いた。

防音を施された扉を開けると…
音量の大きいクラシックが流れていた。
ドビュッシーの「水の反映」だった。
今日の…海を思い出しているのかと思った。
彼はバロックを好むと思って居たので、マリナが少し意外そうに目を見開き、
そして扉の内側に滑り込んで音が漏れないようにすぐさま密閉した。
「音が大きすぎやしない？」
オットマン付きのエッグチェアに深くもたれかかっているシャルルを発見した。
彼は目を瞑り…そして瞑想していた。
「今日は疲れたね」
「…マリナの方が疲れただろう」
そんなことないよ、と彼女は呟いた。
シャルルは‥酷く疲労していて、マリナは声をかけることを少し躊躇った。
「…それならもう、休んだ方が良いね。おやすみ」
マリナがそう言うと、シャルルは瞑想に深く沈んでいた躰を起こして、物憂げな瞳を見開いた。
「その必要はないよ」

彼は身を起こした。
チェアの脇に置かれた、小さなサイドテーブルの上にはブランデーグラスと7.1CHのオーディオスピーカーのリモコンが置いてあった。
彼は再生を止めて、チェアから躰を起こす。
長い脚を降ろして立ち上がった。
青灰色の瞳は疲れのせいか少し潤んでいたが、いつものシャルル・ドゥ・アルディの、静かな表情だった。

彼がワイン以外の軽くはない酒を飲むときは、いつも疲れているときだった。
深く眠りたいときや、瞑想に沈み続けたいときに、彼はその悪癖を復活させる。

「今日のこと…凄く…言葉で上手く表せないけれど…良かった。嬉しかった。ありがとう。」
マリナは先ほどと同じように素直に礼を述べた。
シャルルはどういたしまして、と軽い口調で言った。

「君がオレの妻としての責務も‥一緒に果たしてくれるのであれば‥あの島やこれからのオレのすべてを引き継いで欲しい。オレにはオレだけの護りたいものがあって一一一万が一、オレに何かがあったときにはマリナがすべて引き継いでくれると思うからこそ‥・安心できる」
「…わかった」
マリナは彼の言葉に頷いた。
あの島を継承して欲しいと言われたときに、彼の気持ちが痛いほどよくわかった。
財産ではない。彼の思い出や彼の願いを‥次に引き継いで欲しいという気持ちが彼の中にあり、そしてそれを彼の配偶者になることで受け継ぐことができるのであれば、一緒に背負うことは厭わなかった。
世間の誰になんと言われようとも。財産目当てと言われようとも。
どんなに何を誹謗中傷されても、シャルルの気持ちにマリナは答えたいと思った。
あの緑色の閃光を‥真実の眩を彼が唯一マリナに見せてやりたいと思う限りは、それを後世まで伝え続けるのが自分の役割だと思った。それが彼に対する愛の証しだと思った。

自由な人生の方が楽だった。
内縁の妻という立場の方が楽であった。
でも、彼はそれを望まなかった。だから‥今日、彼女をあの島に連れて行ったのだと思う。
彼の‥母親への思いも含めて「彼の特別の場所」を護りたいと彼は思ったのだと悟った。

シャルル‥私たちは、大人になって…いろいろな哀しみや、煩わしさや…そして愛の歓びも憂いも知った。だから、シャルルと一緒にいるこの奇跡を‥私は一緒に受け止めて行きたいと思う。シャルルと一緒なら、きっとできると思う。

マリナは声にならない思いを彼に投げかけて‥そして小さい声で申し出た。
「シャルル‥今晩は‥ここに泊まっても良い？」

「構わないけれど。…いつもの事だろう？」
「いつもはシャルルが来るけれど…今日はこちらで話がしたい」
「今していることは『話』ではないのかな。」
シャルルが面白そうに笑った。
青灰色の瞳が揺れた。
「ああ、そうなのだけれども。」
マリナが少し顔を赤くして言う。
「今日は…こちらのバルコニーの方が、夜空を眺めるに良いと思うの。それに、忘れ物もあるし」
「忘れ物？」
「部屋にあるから、ちょっと取ってきます」
彼女はそう言って、慌てて部屋を出た。
後で来るから待っていてね！とマリナが念押しした。
シャルルは一息ついて、またチェアに腰をかけた。

…疲れていた。
窓を開けていたが、もう冷たい風になっていた。
今日は慌ただしかった。想定外のことに、彼の予定は乱れてしまった。
それでも。

彼女をあの島に連れて行けて良かったと思う。
そして‥彼女に考えを改めてもらったことは成功だった。

マリナが財産放棄をして・・彼の実子を出産するまではその権利を放棄するという書類にサインをしたと知ったとき。
シャルルは激昂した。その書類はただちに廃棄させた。
その一方で、彼女らしいと思った。
莫大な財産を相続することになると知ったときに、彼女は「それはいらない」とあっさり拒否した。
彼の‥シャルル・ドゥ・アルディの妻になるということをわかっているのかと疑問に思った。
彼女はアルディ家の当主の妻になりたいのではなく、シャルルの傍に居たいと言った。
でも、どうしても彼女には、彼の妻であるという法的権利を手に入れて欲しかった。
…彼は。

マリナより長く生存できる自信がなかったから。

遺された者になりたくなかったから。

彼の脳細胞は常に稼働をしており、常人の何倍もの範囲を使用している。
それゆえに、睡眠時間も長い。でも今の環境はそれを許さなかった。
シャルル・ドゥ・アルディでさえも一日に24時間しか存在しなかった。
だから睡眠時間を削って日々作業を行う。
彼の日々は、マリナと過ごす時間以外は「作業」という言葉そのままだった。
文字通り、命を削って日々生活している。

加えて、若い頃に受けた瑕がまだ癒えてなかった。
時々‥痛む。
彼は、とても短命な人生を送ると覚悟した。
医師であるから自分の体はよくわかっていた。よく分析できた。
このままでいけば、平均寿命までは生きられない。

ただ。

ただ、そこまで自らに客観的になれたのに。
マリナを遺して逝くことだけは考えられなかった。

独りになった彼女を‥今でも想像することは脳が拒否する。

だからこそ。
だからこそ…マリナに受け継いで欲しかった。
彼の「特別の場所」を。

この狂気のような願いを‥マリナが受け止めてくれるだろうか。
今朝はそのことを考えると、眠れなかった。
マリナが心配そうに、茶色の瞳を瞬かせる様を見て、ようやく、彼は微笑むことが出来たくらいだった。

「もっと生きていたいと思う‥」
彼はそう思った。

彼女の愛を手に入れるまでは、退屈な人生だった。
死までの退屈しのぎと言い放ち、日々を怠惰に過ごした。
それでも・・・　彼女によって生の喜びをもう一度味わった。
それだけで充分だ、と思ったはずなのに。

彼は、また生きたいと思ってしまった。

もう少し生きていたい。
もう少し彼女の傍に居たい。
もう少しだけ…マリナを愛する時間が欲しい。

誰にも渡したくなかった。
誰にも。あの太陽のような自分の友にも。
この狂おしい気持ちをマリナが黙って受け止めてくれなければ‥‥
彼は崩壊寸前だった。

だから、今日‥
自分の最後の領域を彼女に明かした。
母へのかなわぬ愛の終焉と‥彼女への愛を何度となく確認したあの場所を。
彼女に打ち明けた。

グリーンフラッシュは条件が整えば見ることが出来る。
しかし、彼は何度も見ているはずなのに‥その真実の愛を疑った時期があった。
マリナへの愛を捨てきれず、でも忘れなければならないと思って…
彼女への愛を捨てた時期があった。

周囲の住人はあの島を「愛の島」と呼ぶが、彼はあの島を密かに「贖罪の島」と呼んだ。
緑閃光は永遠の愛の晄であるが…緑色は悪魔の瞳として忌み嫌われる。
自分は‥悪魔が差し出す愛に、手を染めたのだと思った。

マリナの愛を計ろうとした。

彼女には、母への思いを残した島だから受けとって欲しいと言った。
でも。彼はその申し出をマリナが許諾することによって、マリナが彼の妻としてサインをしてくれるのではないか、と期待していた。

拒否した彼の妻としての地位を…受け入れて、そして縛られてくれないかと彼は願った。

マリナが戻ってきたのは、彼が深く物思いに沈んで‥
かなり時間が経過してからのことだった。
軽い足音がして、彼女が入室したときに、寒さで身を震わせたので、彼は無言で立ち上がり、窓を閉じた。
空調が問題なければ、彼女の悪寒は解消されるだろう。
「シャワーに入って寝るばかりにしてきたから…」
彼女は厚めの濃紺のローブを着ていた。空調が効いていても朝夜は冷える。
髪の毛が少し湿っていたので、明るい茶色の髪が焦げ茶色に見えた。
少し頬が上気していて、茶色の色素の薄い瞳が輝き、彼女の肌理の細かい肌に朱が入った様子を見ると、本当に幼く見える。
シャルルは寄せた眉根を和らげて、入り口で立ったままになっているマリナに声をかけた。
「どうした？」
彼女が室内の温度に寒さを感じているのかと思い、彼は「何か飲むか」と寝酒をすすめた。
マリナはいらない、と言ったが、シャルルは眠れそうもなかったので、ブランデーを飲みかけのグラスに加えた。
とろりとした液体がグラスに注がれる。
マリナがストレートで飲み干すシャルルの白い喉を見た。
茶色の瞳が少し大きくなり、やがて小さな声で彼を窘める。
夜の静けさが、彼女の声音を優しく静かで落ち着いたものにしていた。
陽気に闊達に話す、先ほどまでの彼女とは様子が違っていた。

「…飲み過ぎだよ」
「そうかな」
「そうだよ。今日は疲れているでしょ？」
シャルルは薄く笑った。
馴れない移動に彼女の方こそ疲れているはずだと思った。
だから今晩は、マリナは自分の私室で休むものだと思っていた。

窓際で月の晄を浴びながら、窓辺にもたれかかって、彼はまたブランデーを口に含んだ。
何かを憂えているような青灰色の瞳が、ブランデーに映る月の晄を見つめていた。

シャルル。月を見よう。彼女はそう言った。
寒いよ、と彼が言うと、温かくしてきたよ、と微笑む。
濃紺のローブは確かに、真冬用のものだった。
「マリナ。今日は、もう休め。月は‥・また見られる。
　オレはもう少し…起きているから」
彼は彼女の髪を撫でた。髪の毛が冷たくなっていた。
「…躰が冷える。」
彼はグラスを置いて、彼女の湿った髪を梳いた。
マリナが目を閉じて、安心したような表情を見せるので、彼はくすりと笑って両の手のひらで、彼女の頬を包み、引き寄せてマリナの額にキスをした。
「無防備すぎるよ」
彼女はちょっと泣きそうな顔をした。
シャルルとの距離が近くなって、少し戸惑っていたようだった。
いつもはじっと彼の瞳をのぞき込むのに、今日は少しだけ揺れていた。
「今日はありがとう」彼女はまた礼を述べた。
「それから…シャルルの大切な場所を…ありがとう」
「オレが君に譲りたかっただけだよ」
「確かに、受けとりました。」
その言葉に満足したように、シャルルは言った。
「また…条件が整えば、あの現象はきっと見られる。スケッチには最高だ。
　また…また行こう。今度からはふたりで行こう。」

そうだね、とマリナが微笑んだ。
シャルルも満足そうに頷いた。

「素直で良いね。今日のマリナは何か食べ過ぎたのか？」
そうじゃないよ、とマリナがちょっとだけ赤くなった。
彼のからかいはいつものことだったのに、マリナは口ごもって下を向いた。
「今日は…ゆっくり時間が取れなくてすまない」
「それは良いよ。最高の贈り物をありがとう。時間の長さじゃない。シャルルもわかっているでしょう」
「それでも…」
マリナの言葉に、シャルルは言葉を句切った。苦しそうに囁く。
彼は彼女に気持ちを伝えるときだけ、冷静でいられなくなる。
「オレの全部の時間を君にやりたい。すべてを・・・」
切なげに青灰色の瞳をうつむいたマリナに注ぐ。
「すべて、君にやると言っただろう。なにもかも。すべてを…君に捧げると」
「それなら」
マリナがうつむいていた顔を上げた。
「それなら‥・今、この時間を私にくれない？」
彼女はそう言って、彼に寄り添った。
シャルルは小さく声を上げた。

これまで、彼女から躰を寄せることは皆無だった。
いつも彼が彼女を抱き、そして彼女は彼の愛を受けるだけだった。
彼女が何を言っているのか、シャルルにはわかっていた。
「あの閃光を見て…心を決めた。」
マリナはそう言った。
「ああ、オレもだよ…」
シャルルが掠れた声で囁いた。

あの緑閃光を見て、彼女が何を思ったのかは、本当のところはわからなかった。
しかし、あの閃光を見ると、彼はこの愛を失うことはできないと思い知る。
彼女を失いたくないと思う。
同じ気持ちを…彼女が持ってくれれば良いと思った。

昔、彼女を帰したくなくて、シャンパンを浴びせたことがあった。
彼女の鈍感さに我を忘れて、頭からシャワーをかけたことを思い出した。

彼女の濡れた髪を見て、彼はこれまでの…初めて出会った時から別れを経て、再会し‥こうして今、シャルルの傍らにいるようになるまでの彼女のすべてを思い出した。
彼女の濡れた髪を同じように梳いて、月の晄の下で輝く彼女に、次は何を浴びせられるのかしら、と問われて、彼は「次はフラワーシャワーだ」と言った。

ーーーそしてそれはもうすぐ実現する。

「ああ‥マリナ、泣くな」彼は言った。
マリナは一粒涙をこぼしたから。
「ひとりで泣くな、と言っただろう」
「ひとりじゃないよ。‥シャルルが居る」
「それでも…泣いた顔より笑った顔を見せてくれ。」

マリナが笑う。
彼だけに見せる、特別の微笑みだった。
彼は満足して言った。
「それなら…その言葉は訂正しよう。」
シャルルは静かに言った。

「マリナ。ひとりで泣くな。これから一生。…でも、オレのために泣くのなら良いよ。」

「シャルル…」
彼女が囁いた。それが合図だった。
彼は、彼女をそっと抱き‥そして躰を屈めて彼女にキスをした。
マリナは彼の腰に手を当てて、瞳を閉じた。
拙いけれど、彼女は彼の接吻に応えて眉根を寄せた。
彼がマリナに滑り込んできたが、彼女は彼の慰撫に身を任せた。
静かな口吻からやがて彼らは陶酔して更に深い口付けを交わし始めた。
頬が熱くなり、彼の体に情炎が灯った。

月明かりの下で…彼らは初めて体を寄せた時のように、静かに抱合した。

「マリナ」
彼は堪えきれずに、濃紺のバスローブの狭間から除く彼女の白い喉元から、冷たい手を差し入れた。彼女の体は熱かった。

そして‥そこで一瞬、シャルルは目を開いて手を止めた。

マリナが彼から少し離れた。
泣きそうな顔をしていた。
目が潤んでいた。
愉楽の波に飲まれたという理由以外の感情が彼女を熱くさせていた。

「シャルル…」

彼女は頬を赤くし目の端を羞恥に染めた。
彼女は、ローブの下に純白のキャミソールを身につけていた。
裾には細かくレースと刺繍がほどこされ、プラチナの細い糸であしらわれた刺繍は細かく光り、アルディ家の家紋である薔薇と蔓をデザインしたものだった。
滑らかな最高の絹で織られていて、彼女の体の線にあわせて淡く濃淡の影が揺れていた。
これはジルから贈られたものだった。
シャルルも記憶している。

ーーー婚儀後初夜で身につけるためのもので、小柄な花嫁用に特別にしつらえたものだった。

彼女が何を言いたいのか、シャルル・ドゥ・アルディは理解した。

息を呑む。
言葉が出ない。

マリナは困ったように言った。
彼と目を合わせるのが精一杯だった。

「シャルル、今日…今日…あなたの…妻…にして欲しい」

そう言うと、マリナは彼の胸に飛び込んだ。

■こちらは「夜」ですので、キリリクのご依頼者凛様がご覧になられた後はファン限定書庫に入ります。

ーーーー何度も彼女と肌を合わせたのに。
それはとても神聖な儀式のようだった。
あの緑色の閃光が「神の瞬き」と呼ばれていたから…
海と太陽と空とすべてのものに、祝福を祈って捧げる儀式のようだった。

大きな天蓋付きのベッドに、もつれ込むように沈む。
シャルルは苦しそうに、マリナをきつく抱きしめた。
柔らかなシーツの波に埋もれて、シャルルはマリナの小さな体の上に乗った。
甘い吐息がマリナから漏れて、彼は甘く薫る花に惹かれる蝶のように、顔を寄せた。
薄く整った唇で彼女の口唇を覆う。
そして彼女は彼の背中に手を回し、軽く顔を起こして、彼に更に深い口付けを求めた。
彼は…自分の細く長い指が細かく震えるのを感じた。
彼女に触れるだけで、震えが走る。
マリナは逃げないのに。
わかっているのに、軽く顎を掴んで固定し、もっと奥深く彼女の中に入り込んでいく。

あの島に連れて行かれたとき。
彼に捧げよう、と言われたとき。

マリナは、心を決めた。
彼の切なさも見せたくないと思ってきたこれまでの思いも、何もかもを受け止めようと思った。
彼と彼女だけの問題で済まされないのであれば、彼女は何を言われても彼の望みを叶えたいと思った。
神の前で誓い、そして婚姻のサインをするだけならそれは結婚式を挙げるだけだ。
本当の婚姻を彼が望んでいることを知った。

彼の悲しみも苦しみも何もかもを。

暗闇の、彼女には生涯見せることのないかもしれない部分も、シャルル・ドゥ・アルディなのだと思う。

だから…だから彼女は彼の「妻」にしてくれないかと言った。

指輪の言葉をどうしようかと言ったとき。
すべてを捧げると言った彼に、彼女は返す言葉を少し考えてしまった。
彼はきっとこう記しているだろう。
「すべて、君に捧げよう」と。

それが彼の愛だった。
その愛を受け取ったことを、彼に伝えたかった。

「マリナ…」
彼は何度も何度も彼女の名前を呼んだ。苦しそうに。
ここにいるよ、とマリナは彼に語りかける。

ゆっくりと静かに服を脱ぎ、彼はマリナと直接肌を合わせようとした。
整えられた引き締まった背中が現れて、闇の中に浮かぶ。
彼と彼女の体と…白い衣だけが混じり合って閨の海に沈んでは浮かぶ。
マリナの白い婚礼衣装とでもいうべき衣に触れると、シャルルは少しだけ躊躇った。
その衣を脱ぎ捨ててしまえば‥マリナは天に帰れなくなる仙女のようだと思った。

自分はどんなに堕ちても良い。
あの贖罪の島で何度も考えを巡らせた。
あの閃光は彼にとっては僥倖でも祝福でもなく、悪魔の瞬きのように思えた。
あの場所を彼女に見せれば、彼女は嫌だと言わなくなるだろうと計算した。
それでも…それでも、彼は真実の愛に目覚めるという光をマリナと一緒に見たかった。
彼には‥彼女への愛しか残っていなかったから。もう手放せなかった。
この愛を失ったら、彼は今度こそ生きていけそうもなかった。
またあの暗い路に迷うのかと思うと絶望で足元が崩れていきそうになった。

でも。
この遣る瀬無い気持ちをマリナが受けとったと言い…
そして今夜、彼の妻になる。
神に誓わなくても良い。誰に宣言しなくても良い。
自分と彼女との誓いの儀式が…今、行われようとした。

彼女は少しだけ身を起こすと、ゆっくりと肌に身についていた最後の衣を脱ぎ捨てた。
衣擦れの音がして…彼女の白い体が闇夜に浮かんだ。
そして…シャルルの逞しい胸の中に滑り込む。
「愛しているわ…」
いつもなら、愛の言葉を囁くのは彼の方からだった。彼女はいつも頷くだけだった。

彼女を昂ぶらせるための愛撫も計算できなかった。
ただ、壊れ物に触れるかのようにそっと抱くだけで精一杯だった。
マリナがシャルルの名前を呼んだ。
そして…彼の頬にキスをした。次に、額に。瞼に…動くたびに彼女から薔薇の香りがした。
次にマリナはそっと…ぎこちなくシャルルの首筋に唇を這わせて‥・そして彼の肩を撫で、そのまま背中に手を回し、彼の肩胛骨を撫でた。
シャルルは亢奮で背筋がぞくりとする。
…これは彼が彼女を慰撫するときの仕草だった。

彼女の瞳を見ているだけで昇りつめそうだった。
彼女が瞳をこちらに向けているだけで、心臓が打ち震えた。

彼女は顔を寄せて、シャルルの腕に唇を寄せる。
彼の細い指に舌を這わせて…そして指先にキスをした。

マリナの愛撫で彼はたまらなく…自我を制御できなくなっていた。
ぎこちないけれど、彼が手に入れたくて仕方がなかった彼女からの愛があった。

それほど肌を重ねていないのに、彼と彼女は互いを受け入れる支度が調っていた。

彼女は…彼の上に移動すると、その躰を彼に傾けた。

彼は苦しくなって…そして彼女を導いた。
小腰を浮かせていた彼女は…ゆっくり沈み、そしてため息を漏らした。
彼は彼女の頭をかき抱き、激しく唇を吸った。マリナが応える。
シャルルはマリナの白い喉に頬に、瞼に…先ほど彼女が彼に落としたように同じように接吻の雨を降らした。彼女が小さく微笑んだ。
ーーーマリナがゆっくりと動き始めたので、シャルルは瞳を閉じた。
が、すぐに青灰色の瞳を覗かせる。彼女の姿を確かめるかのように。
熱い摩擦感を感じると、すぐに快美感が渾身にこみ上げてくる。
彼は狂おしく身悶えし始めた。激しく唇を重ねる。
マリナは白い腕をシャルルの首に絡ませた。
苦しそうに瞳を閉じて愉楽の波の浮沈に身を任せていた。
彼女の体から汗が噴き出して、腰を抑えていたシャルルの掌が湿気で滑った。
二人は忘我の世界に飛び込み…薔薇色の夢を見始めた。
彼女の肌の香りと同じだった。
やがて彼女が短く呼吸し始めて、更に細かく震え始めた。
彼女が随喜し身悶えし始める。
シャルルは身を倒した。
マリナがぐったりとし始めたから、間もなく、彼女は喜悦の波に沈む。
今度はマリナに彼が波を与える番だった。
彼女を横たえて…そして今一度…彼が沈む。
マリナが声を上げる。でもそれは悲鳴ではなかった。

彼の律動が彼女の茶色い髪を揺らし始めた。
「…愛してるよ…」
彼はそう言った。マリナが同じ言葉を呟いた。

「…連れて行って」
彼女はそれだけ言うのが精一杯だった。

シャルルは快美に酔いしれながら、彼女に囁いた。

ああ、連れて行こう。

この歓喜の頂上へ。

晄の中へ。
そして闇の中へ。

シャルル・ドゥ・アルディの傍らで、晄にも闇にもなってくれ…。
彼がそう言った瞬間。
彼は目を閉じて小さく声を漏らした。

彼はゆっくり彼女から離れると、白い躰に毛布をかけた。
躰が冷えてきた。
このままだと汗で風邪をひく。彼は‥シャワーを浴びるために体を起こした。
「シャルル…」
「起きていたのか」
「うん、だって眠れそうもない」
シャルルはバスルームへ向けた体を戻し、乱れたシーツにくるまったままの、マリナの傍に寄った。彼女の濡れたこめかみに軽くキスをする。
「…泣くな、と言っただろ」
「嬉しい涙もいけないの？」
「それは特別に除外しよう」
マリナが笑った。

「シャルル‥日付が変わったね」
ああ‥白金の髪をかき上げて、彼は時計を見た。確かに、日付が変わっていた。
この上なく、甘く優しい微笑みで彼は笑い、そして彼女の髪を撫でた。

「マリナ・・・誕生日おめでとう。」
「素敵な誕生日プレゼントをありがとう。」
贈り物をもらったのはこちらの方だよ、とシャルルが微笑んだ。
「今日はディナーしか一緒に過ごすことが出来ないが・・・」
「もう『今日』よ。ディナーは楽しみにしているわ…それに。これから毎年お祝いしてくれるでしょう？」
「ああ、シャボン玉でも気球でも揚げてやろう。お望みのままに・・・」

そして…マリナはじっと茶色の瞳でシャルルを見つめた。
「シャルル…シャルルは私の…唯一の人なのよ…特別なんて言葉で言い表せない。
…一番でも最高でもないの。ーーーあなたしかいないの。」

シャルルはそこで初めて知った。
青灰色の瞳を見開いた。

今日と言う日を…正確には昨日から今日にかけて。

彼女がなぜ、思い定めて妻にして欲しいとやって来たのかを知った。

あのグリーンフラッシュは、誕生日の贈り物のつもりだった。
翌日は終日一緒に過ごせないとわかっていた。オフの日がどうしても前日にしか取れなかった。それでも‥短い時間しか過ごせなかったのに、彼女はありがとうと言った。

彼の脳裏に、雪の日の彼女と…太陽のような友の切ない思い出が蘇った。
正確には…彼女の告白による妄念が見せる幻であったけれど…

「マリナ…」
掠れた声で、彼は呻いた。そして、ぎゅっと彼女を抱きしめた。
「オレの…ファム・ファタル…愛しているよ…」

彼の瞳は少しだけ潤んでいた。

私もよ、とマリナが言った。

彼は永遠の恋人ではなく…永遠を誓った妻を手に入れた。

本当は、挙式の直前にお見せするものではないのですが

ジルがそう言ってマリナをこっそり呼び出した。
「きっとご覧になっていないと思って。…シャルルはすでに検品済みです」
マリナは良いのよ、楽しみは後の方が丁度良いわ。と笑った。
これまではそんな風に待つこともできなかったけれど、この挙式に関しては、彼女はシャルルとジルに任せきりになった。
本当に必要なことは、彼はいつもきちんと尋ねてくる。
だから、それで良いと思った。

でも。

リングぐらいは見せてくれても良いのにね、と女性同士で目を交わす。

本当なら婚儀の夜に身につけるはずのものを使用してしまった、と申し訳なさそうにマリナがジルに打ち明けたとき、ジルは少し驚いたようだった。
決して安価なものではないのに‥
すべての準備に細心の注意を払っているのに、その予定が狂ったことを咎めても仕方がないと思っていた。
それでも‥ジルは何も聞かずに、そうですか、それならもう一度用意しましょう、と言って急ぎ準備に入ってくれた。
少しばかり微笑んで涙ぐんでいたようだった。

薄い白い陶器の中に納められたリングはふたつあった。
挙式の直前まで保管するに過ぎない器にでさえ、彼の思い入れを感じる。
白い陶器の中に敷き詰められた尾篭土の布は、ブルーではなくグリーンだった。
花嫁の幸福の色とされている蒼い色ではなく‥・彼がグリーンを選んだことを知ってマリナは胸が詰まった。
その色がもたらす意味は…
あの閃光のように「真実の愛」でもあったけれど…
調和、静かな愛、そして永遠のEvergreen…それらをあらわす基調色を彼が選んだと知った。
グリーンの象徴するものは‥「確かな愛、永遠の愛」…。

奇跡でも運命でも偶然でもなく…
彼と彼女の選択は確かな愛であって欲しいというシャルルの願いのように思えた。
「薔薇を象徴とするアルディ家の基色ですね」
ジルが説明した。
「薔薇の花弁は様々な色がありますが…その葉も茎も根も …それらはすべてグリーンです。
どんなに…花が美しく色様々に咲き乱れても、その根本は変わらない。 …シャルルの願いですね・・・」
そうだね、とマリナが頷いた。

どうぞ手に取ってみてください

ジルに促されて、マリナはそっとその指輪を手に取った。
まずは、シャルルのリングから…
デッサンのとおり、素晴らしい彫刻だった。ずしり、と重い感じがする。
ハードプラチナの重厚感だった。
そして…内側には日付と、マリナとシャルルの名前と…生涯を誓うためのメッセージが入っていた。彼への伝言だった。
内容は…「あなたの眩となり影となろう。生涯において」と刻まれていた。
「ちょっと長すぎたかしら」
マリナが呟くと、ジルはそんなことないですよ。最も短い愛の言葉ですね、と呟いた。

彼の眩になるのは簡単だった。彼の影になることも簡単だ。
でも…眩にも影にもなり続けることは難しい。
影として彼を支えるジルはそう思った。
マリナなら、きっとできると思った。
時には彼の狂気を受け止めて、彼の眩にもなり、彼の発する眩も受け止める‥・そんな人は彼女しか居ないと思う。

そして…マリナは自分がやがて一生涯身につけることになるリングをつまんだ。
想像したとおりだった。
そこには同じように日付と名前の刻印の他に「すべて、君に捧げよう」と刻まれていた。
マリナが言葉に詰まった。彼は‥・彼は、あのときから言葉を違えることをしなかった。
何年経過したのだろう。何年…この言葉を密やかに思い定めていたのだろう。
忘れることが出来ないから、と言った悲痛な彼の叫びを思い返す。
今…その重さを受け止めることを承諾した彼女の指先に‥その愛の証しが光り輝いた。

「ジル。・・・　これを少し、手直しすることは出来る？」
「サイズが合いませんでしたか？」
ジルが驚いたように尋ねた。完全なオリジナルであり、サイズ変更や刻印の変更は難しい。

「ううん。そうでなくて…」
彼女はジルに囁いた。

ジルはシャルルと同じ、青灰色の瞳を‥・少しだけ大きく見開いた。
「…良いのですか？」
「ええ、もちろん。私が責任を持ちます」
「‥わかりました。アルディ夫人の申し出ですからね…」
ジルはそう言って微笑んだ。マリナの静かな茶色の瞳を見た。

****

ランスの大聖堂には人が密集し‥・ここ数年で最大のセキュリティ体制と思われる物々しい警備が張り巡らされた。
参列者の10倍とも15倍とも言われる人員が配置された。
フランスの華であるシャルル・ドゥ・アルディの挙式となれば…彼の入堂や退堂をひとめ見たいという者が溢れていた。
各界の著名人や、新郎新婦の共通の友人、親族一同、傍系や…繋がりのある元貴族である蒼い血族の者達が古く歴史のある建物に集う。

朝から騒然とした。

一週間前から厳戒態勢が敷かれ、報道関係は完全にシャットアウトされた。
だがしかし、空には報道関係と思われるヘリやセスナが飛び交い、物々しい空気を否応なくあおり立てていた。

これは結婚する、ではなく結婚式をするのだ、とマリナが言っていた言葉を思い出し、シャルルは少し微笑んだ。
彼女に不安を持たせないために、まったくと言っていいほど今回の挙式については詳細を語らなかった。これは儀式でしかない。…すでに彼女とは夫婦の契りを済ませていた。
書類の上でもすでに婚姻関係は成立していた。
それでも‥それも今日のこの日は意味があると思う。
もし、彼女にとって今日に意味が無くても…
…いつか、あの島の近くにある、小さな教会でもう一度ふたりだけで誓いを立てたいと思う。
それが叶わなければ、父母の墓前でも良かったし、あの島の閃光をもう一度観に行っても良いと思っていた。
彼はいつでもどこでも‥彼女に永遠の誓いを立てるつもりだった。
彼の名にかけて。神ではなく自分自身に誓ったから。
生涯、彼女だけを愛すると誓ったから。

大きなステンドグラスが頭上で輝く。今日は最高に天気が良かった。
陽の光を受けて、天使が舞い、そして微妙な色合いを教会全体に落とす。
石造りの古い高い天井の教会は‥どんな小さな音も大きく響き…彼らの誓いの儀式を詳細漏らさず天高く伝えるかのようだった。
荘厳で厳粛な祭壇には‥彼と彼女の愛の証しになるリングが準備されていた。
聖水で浸されている。

その時。
きらりと…指輪が光って、シャルルは目を細めた。
ハードプラチナで彫りが施されているリングが光るということはあまりない。
どちらかというとマット仕様だからだ。
それなのに、マリナとシャルルのリングのどちらも光っている。
長身の彼がマリナの入堂を待つ間、祭壇に掲げられているリングが入った聖杯は前方に軽く斜めに傾けられており、これからの儀式に使用することを皆に告げるためによく見える位置に置かれていた。

シャルルはそのリングを凝視した。
祭壇は一段高くなっているので、よく見えない…

しかし、その眩の色合いから、シャルルは何が光ったのか察した。
傍に控えているジルに視線を投げる。

彼女は…高く結い上げた金髪を傾けて、おかしそうに微笑んだ。
何列も後ろの彼女と目が合う。
彼女は…シャルルの一部始終を見ていたようだった。
『・・・ジル。やったな』
『あら。私からの贈り物ですよ・・。そしてあなたの妻からの贈り物です』
ジルとシャルルは無言で会話をした。
シャルルは青灰色の瞳を細めた。ジルは嬉しそうに目を見開いた。
ジルが‥・彼の姿を目に焼き付けるように強く見つめながら、ゆっくりと唇を動かす。
『シャルル…倖せに…』
シャルルは頷いた。

純白のタキシードに身を包んだシャルルは…天使の降臨に相応しかった。
物憂げな青灰色の瞳と白金の髪によく映える生地を使ったタキシードは、もう二度と着るまいと思っていた。
偽りの結婚を何度か考えた。
でも、どうしても…袖を通すことが出来なかった。
彼女にタキシードを採寸する姿を見られて、とても切ない思いをしたことを思い出した。
…今回の彼の衣装もマリナとの挙式のためだと思っていながら、最初はそれが幻で…かつての偽りの結婚をしようとした自分が見ている夢ではないかと何度も自分を疑った。

だが‥・今はこうしてかつて彼女に語ったランスの教会の最前列に居る。

太陽のような友からは…「行けたら行く」とメッセージが入っていた。
彼は必ず来ていると思った。どういうわけか彼の呼吸を感じる。
これは…この聖堂がなせる奇跡なのか。
参列者の中には古い友人たちの顔が見える。
マリナの入堂を待っていた。
そしてシャルルには同じように、「彼女を倖せにしてくれるのだろうな」といくつもの強い視線に訴えかけられていた。
ああ、もちろんだよ。
シャルルは微笑んだ。

オレを誰だと思っているんだ？
シャルル・ドゥ・アルディに間違いはない。
たとえ…西から太陽が昇ろうとも。
そして誓ったことは違えない。
マリナを‥彼女を生涯愛し抜いて倖せにすると誓ったからには、きっとその通りにする。
誰に約束するでもなく、自分に誓ったから。

パイプオルガンの重低音が響き渡り、教会の参列者の出す音や声が止んだ。
人は死ぬときは走馬燈のように人生の出来事を思い出すという。
でも、シャルルは今、同じように‥マリナとの出会いから様々な出来事や‥彼の堕ちた人生や…マリナとの邂逅を思い返していた。

彼は・・・　もっと生きたいと願った。
もっともっと彼女を愛したい。もっと‥自分が生きていると実感したい。
そして…彼女と共に老いていきたい。
マリナ。オレと君は…オレ達は‥・

ちかり、とまたリングが輝いた。
光の加減なのかもしれない。
彼は微笑んだ。
マリナ。…思いもかけない変更だね。想定外だ。

グリーンに輝くそのリングを横目で見た。
マリナはジルに変更を依頼した。
リングには予定されたメッセージと…そして小さく、グリーンのカラーダイヤモンドが埋め込まれていた。
ふたりのリングの内側が緑色に光る。
彼女が選んだ言葉をシャルルは検品するときに黙って見つめた。
何もコメントできなかった。
感想がないのではない。…感想を述べることが出来なかったのだ。
あなたの晄となろう
あなたの影となろう
そう言った人はこれまでにも居た。

でも。
晄となり影となろうと言った人はマリナだけだった。

彼女の‥愛の深さを知った。
自分の愛が重いことも知った。
でもそれを彼女が受け入れてくれたこともわかって…彼は言葉に出来なかった。

愛することと…愛し合うことは違うと悟った。
愛し合うことは難しい。
それでも彼女は彼に寄り添った。
だから‥・

だから自分はマリナという眩に足を踏み入れ目が眩むことを畏れた。
自ら輝いてマリナに影を落とすことを憂えることを畏れた。
それでも‥彼女は良いと言った。
一緒に生きようと言った。
それを信じようと思う。
根拠のないことを信じないシャルル・ドゥ・アルディだったのに、彼女の言葉は信じることが出来た。

そしてマリナは…
花嫁の喜色でなく‥緑を彼女は選んだ。
真実の愛に目覚めるというあのGreenFlashと同じ眩だった。
そして内側に埋め込むことで…二人だけの永遠の眩になる。
心臓に最も近い指に絡められた緑の眩を、彼と彼女は永遠に密やかに…内包し続ける。

‥何もかも。君にやる。この世界中でオレが手に出来る全部を、君に…

でも。
もう少しだけ一緒に居たいから。
オレの命はまだ捧げられない。
全部をやると誓ったけれど、この愛と命は捧げられない。まだ、ね。
ごめんよ。誓いを立てたのに誓いを早速破ってしまう。

彼は微笑んだ。
愛しているよ…。永遠に、君だけを愛してる。

ひときわパイプオルガンの音が大きくなり、賛美歌が響き渡る。

荘厳で重厚な扉が開き…彼と同じように純白の衣装に身を包んだ、彼が待ちわびた花嫁が入場してきた…。

おめでとう、おめでとう…

厳粛な聖堂であるのに、たくさんの声が響いた。
誰も彼もが歓喜の声を上げた。
まだ、神の前で指輪の交換も誓願も立てていないのに。

あの、ふたつの緑の閃光がまた光った。
緑色の…神の眩が聖堂に参列するすべての列席者を惑わしたかのようだった。
悪魔のような眩であると思ったのに。
今はその眩を合図にしたかのように…大きく聖堂が歓喜の声でどよめいた。

賛美歌もオルガンの音も聞こえなくなるくらい…

ああ、こんな結婚式は想定外だ。
アルディ家当主の結婚式では前代未聞だよ。

シャルル・ドゥ・アルディは微笑んだ。
綺麗な、薔薇の花のような微笑みで。

（FIN）

Trick　OR･･･ C-side　2009

■01

「‥‥遅い」
むっつりした顔でシャルル・ドゥ・アルディは言った。
切れ長の蒼灰色の瞳が冷たく光った。
静かに入ってきたつもりだったが、起こしてしまったか。
最初は起こしてしまってすまないと詫びようと思った。
しかし、彼は眠っていると思っていたのだが、そうではなかったらしい。
ソファに体を横たえたまま、シャルルは目を開いて彼女を睨んだ。

どれくらい前から、彼女を待って居たのだろうか。
マリナは肩をすくめた。
「生徒さんが帰ってから片付けをしていたの。･･･遅くなると言ってあったと思うけれど」
「明日には帰国すると言ってあっただろう」
彼はゆっくりと起き上がり、白金色の髪をかき上げた。
言い方に棘があるのはいつものことだったが、今日は酷く機嫌が悪かった。
「随分と楽しかったようだね‥‥」
彼は気怠そうにソファにもたれた。
マリナは両手一杯の荷物をテーブルの上に置いた。
「シャルル。おみやげ。たくさんもらってきたわ」
「オレは君と違って夜中に食事する習慣はないんだよ」
彼はぴしゃりとそう言った。
ホテルでの食事に飽きてきただろうと思い、彼女なりに気を遣っていることは解っていた。
シャルルは緩めていたタイをはずした。
あと数十分戻らなかったら、彼は会場まで足を運ぶつもりでいたので、着替えていなかった。

今日はマリナが時々絵付け講師をしている画廊でハロウィン・パーティーを行うということで、彼女は朝から忙殺されていた。
それより前から細々した内容の打合せと称して外出し、シャルルの短い滞在で共に時間を過ごすことはほとんどなかった。
「シャルルもホテル暮らしをやめれば良いのよ」
彼女はそう言った。
毎回毎回、こうしてホテルに滞在する彼の元に通うのは、どうにも気が重かった。
「マリナも日本暮らしをやめれば良い」
シャルルは切り返した。
マリナの口調を真似たので、彼女は頬を膨らませて茶色の目を見開いた。

「シャルル。シャルル・ドゥ・アルディ。今回は一緒に過ごせないかもしれない、と最初に言ってあったでしょう」
マリナが腰に手を当てた。
シャルルは目を細めて彼女を見る。

綸子の珍しい布を使った鮮やかな橙のワンピースだった。
胸の下で切り返しがついており、彼女を一層幼く見せる。
彼女は色素が薄いので、こういう濃い色合いが似合う。
茶色の瞳と茶色の髪に良く映えていた。

少しだけ踵の高い靴が、絨毯に深く沈んでいた。
彼女は足が疲れた、と言ってその場で靴を脱ぐ。
彼女は非常に小柄なので、少し離れてこうして見てみると、こどもが大人の真似をしているような様子に見えた。

「･･･楽しかった？」
「充実はしていたわね」
マリナが笑った。
そして、紙袋からたくさんの菓子を取り出す。
中には、画廊の近くにある有名だというケーキもあった。
「シャルルの口に合うと思う」
マリナがそういって、保冷剤に包まれた箱をそっと持ち上げた。
着替えもしないでまず、シャルルへの土産物を気にするマリナに、シャルルは少しだけ顔をほころばせる。

帰ってこない彼女を待った時間が、どれほど長く感じたのかマリナはきっとわからないだろう。
それでも、こうしてシャルルに疲れていても笑顔を向けるマリナにはどうにも弱かった。
彼女は順序をつけない。
仕事も付き合いも友情も‥シャルルとのことも、すべてが一生懸命なのだ。
彼にとってマリナ・イケダは、比べるものがない、唯一絶対の存在なのに。

「オレにその箱から食べろ言うの？」
呆れたようにシャルルがそう言った。
そうじゃないけど
マリナがそう言って、それなら皿を取ってくるから少し待つようにと言った。
相当気を遣っているらしい。
シャルルは苦笑した。
自分が思っている以上に態度に表れてしまっているらしかった。
彼女が外出することを咎めているのではない。

･･･今日のパーティーのエスコート役が彼であるからだ。
画廊の経営者であり、マリナが絶対の信頼を寄せている相手だった。
同じ創作をする者としての共通意識が彼と彼女を引きあわせていた。
彼はマリナをここまで出迎えて、シャルルが彼女のために用意したドレスを見て、マリナをたいそう褒めた。
いつも物静かであまり口数が多い方ではないと聞いている。

マリナから聞かされることで充分に不愉快になったのだが。
「よく似合っている」
マリナは嬉しそうに微笑んだ。
そんな彼女と彼を見送るときに…シャルルは声をかけたのだった。
「今日は早めに戻る」
そう言った。
マリナは振り向いて、わかったと言って出て行った。
彼が会釈をして、それでは連れて行くから、と言って彼女の肩に軽く手を当てたとき。
彼は強烈な眩暈を感じて‥
じっと青灰色の瞳で彼らの背中を見送った。

そして彼女は「わかった」と言ったのに、遅く戻って来た。
これに対してシャルルが嫌味を言っているのだとマリナは承知していたが、こればかりはどうにもならなかった。
「…彼は？」
シャルルに言われた「彼」が、彼女の仕事上のボスのことを指しているのだと気がつくのに少しだけ時間がかかってしまった。
「オーナー？」
「そう」
「帰った。遅いからロビーで別れたけれど…」
何か用事があったのか？とマリナが尋ねるので、君は本当にわかってないなとシャルルは口に出さずに呟いた。

■02

ここのホテルのパティシエだったこともあるそうよ。
マリナがそう言って、箱の蓋を開けた。
特別に注文したという手土産用の焼き菓子に、生ケーキが入っていた。
「マリナ」
シャルルは彼女の背中に声をかけた。
艶やかなテノールが心地好い。
マリナは振り向かずに、なに？と返事をした。
「こっちを向いてくれないか」
マリナが茶色の髪を揺らした。
今日のパーティーにあわせて、少しだけ髪を巻き、そして化粧をしている。
彼女はパーティードレスをまだ着たままだった。

マリナが向き直るのと、シャルルが彼女の二の腕を掴んで、彼の胸に引き寄せるのは、ほぼ同時だった。
「シャルル！」
マリナが小さく悲鳴をあげる。
「…痛いよ」
「我慢してくれ」
シャルルはそう言った。
そしてきつく彼女を抱きしめる。

明日には日本を発つ。
だからどうしても彼女に触れておきたかった。

僅かな時間でも逢いたいと思う。
ほんの数分間のためで良いので、長い時間を移動して彼女の前に立ちたいと思う。
一目会えるのなら。
抱きしめてキスができるのなら。
彼はどんなことでもしようと考えていた。

今、別の男に伴われて帰ってきたマリナに対して冷たく言い放つことしかできなかった。
言葉にしたら、きっと彼女を悲しませる。
…何をやっているんだ、オレは…
シャルル・ドゥ・アルディは苦笑した。

「シャルル」
マリナが戸惑っていた。
彼女の額に頬を寄せる。
そして軽くキスをした。薄い唇を押し当てる。
「‥‥Trick　OR　Treat」（何かもらえるかな。でないと君に悪いことをしそうだ。）
彼はそう言った。
マリナはちょっと笑った。
彼の機嫌が直ったのだと思ったらしい。
彼のために持ち帰ったケーキに再び向き直った。
「一緒に食べよう」
「マリナ、君、食べてきたではないの？」
「別腹」
「…解剖したいよ。君の胃はどうなっているんだ」
シャルルは呆れてそう言ったが、マリナはくすくす笑って、ケーキをどういう配分で切り分けようか真剣に考えていた。

「…Trick　OR　Treat」
シャルルが彼女の背中にもう一度言った。
「ああ、ちょっと待って…」
マリナがそう言った時。
彼はマリナの腰を強く引き寄せた。

「・・・！シャルル！」
マリナが彼の名前を呼んだ。

シャルルは彼女を膝の上に抱き寄せると、そのまま…背中を抱きしめた。
橙色の衣装が目の前一杯に広がる。
彼は目を細めた。
シャルルが自ら、彼女のために用意したドレスだった。
それを着て間接照明にあたる彼女は奇麗だったに違いない。
ほどよく上品でそれでいて若々しい印象を与えたはずだった。
彼の手で魅力を最大限に引き出したはずなのに…シャルルはどういうわけか、そんな彼女を皆の目の前に出したことに少し胸が痛んだ。

特に…今夜の同伴は、彼ではなく、同じようにマリナに焦がれる別の男だったわけなのだから。

「…誰にも触れられなかった？」
「なぜそんなことを聞くの」
「マリナ、オレが質問している」
彼は彼女の項に唇をあてた。両腕は彼女の腰を抱いたままだった。
「…そんなことあるわけないでしょう」
「マリナ。質問に答えてくれ」
彼の欲しい答えをまだ、彼女は言ってなかった。
シャルルは青灰色の瞳を閉じて‥苦しそうに眉根をよせ、そして頬を強く彼女の首筋にあてる。耳元で囁く彼のテノールはこの上なく甘い囁きだった。
マリナは戸惑ったようにシャルル、と呟いた。
彼はひとりで生きてきたのに、ひとりになることが怖いのだと思った。
もう、離れる事なんてないし、離れる事なんてできないと、何度も誓っても彼はまだ時々不安定そうな瞳でマリナを確かめようとする。

「‥‥シャルル」
腰に手を回しているシャルルの手の平を、そっと、上からおさえた。
彼の手は冷たかった。
細く長い指が彼女の胸の下で交差し、少しだけ震えているように感じる。
「…君の外出を許すのではなかった」
「‥‥私がこうすることを赦すのは、シャルルだけよ」
マリナが静かにそう言った。

この鼓動の早さや、アルコールによるものでない頬の紅潮を、どうしたらシャルルに伝えられるのだろうか。
彼女の背中に頬を埋め、きっと彼女には見せたくないと思っている、苦悶の表情をするシャルルのことを考えた。

「シャルル…」
マリナは茶色の瞳を閉じた。
「…Trick　OR　Treat, Charles」(シャルル、私に何かをちょうだい。そうでないとあなたを弄ぶわよ)
軽く軽く、悪戯するこどもが言うように囁いた。
「弄ぶ、ね」
シャルルはくすくす笑った。耳元から彼の含み笑いが聞こえてくる。
「良いだろう…後悔するなよ」
彼はそう言った。

■03

彼はそう言うと、片手を彼女の腰から離し、そしてマリナの背中に触れる。
そして彼女が躰を動かす前に、ワンピースのファスナーを一気に引き下ろした。
「シャルル…！」
「じっとしてて」
シャルルはそう言って、露わになった彼女の白い背中に唇をあてた。
彼の滑らかな舌先が彼女の脊椎をなぞっていく。
マリナは顔を赤くして叫んだ。
彼の次の仕草が見えないから、余計に…敏感になる。
「君が誘ったんだよ、マリナ」
「違う！」
「何が違う？」
シャルルは微笑んだ。彼の理性は吹き飛びそうだった。
彼はマリナの肩に手をかけて、落下を妨げようとしている抗うマリナから、彼女の衣を奪った。
ワンピースが落ちる。橙色の景色が、次には雪のように白い色に変わった。
ほんのりと櫻色だった。
「そう‥シャルル。そうだ、ケーキ！ケーキを食べるところだったのよ」
「…最高に甘いケーキがここにあるよ」
彼はそう言って、彼女の背骨に唇をあて強く吸った。
びくりとマリナが驚きで躰を震わせる。
何度も肌を合わせたのに、彼女はいつまで経過しても彼の慰撫に不慣れであった。

こんなにも君を想っているのに
不安で仕方がない

もっと声が聞きたい
何度も聞きたいんだ…
彼は囁いた。

「Je　te　veux‥」
彼はそう言った。
「Donne toi. je te veux…Tu seras　ma　maîtresse…Marina」
（君が欲しい。オレは君が欲しい。マリナ…オレだけのものになって欲しい）
「シャルル、今の…良く聞こえなかった。」
マリナが困惑したように言った。
それでもそれが愛の言葉であり、曖昧な言葉を彼が求めているのではないのだということはわかった。
彼は声を漏らして笑った。
「マリナ」
シャルルはそう言うと、彼女を抱いたまま、上半身を倒した。
そして、テーブルの上に置かれた箱に長い腕を伸ばし・・無造作に箱の中に手を入れた。
「シャルル！」
マリナが彼の行動を理解できずに叫ぶ。
でも彼は彼女の白い柔らかい肌に頬を押しつけたままだった。
そして身を起こすと…彼は端正な顔をようやく彼女の肌から離した。
次に、薄く笑うと、彼は面白そうに、ゆっくりと…
甘い香りで誘う彼女の肌に・・細く長い指に絡め取った最高級のクリームを撫でつけた。
ひんやりとした感触が彼女の後身を覆う。
マリナは悲鳴をあげた。
顔はすでに羞恥で赤くなっていた。
同じように、彼の愛撫を受けた耳朶や首筋まで朱に染まっている。
「…たまには名前以外の言葉も言ったら？」
シャルルは面白そうに言った。
彼女が身じろいだが、シャルルは逞しい腕の中にようやく捉えた運命の女を離すつもりはなかった。
でも、と彼は言った。
「…オレだけの名前しか言えない君も…良いね」
彼は低く呟くと、マリナの背中に塗られた最上級の蜜に吸い寄せられるようにまた、美しい唇を近づける。
ああ、とマリナがため息を漏らした。
こんな声を…誰に聞かせるというの、誰に触れられたらこんなに切ない気持ちが湧くというの
マリナは目を瞑った。
彼の狂気のような深い激しい愛は、彼女を遣る瀬無くさせる。
たったこれだけの別離で彼は激しくマリナを求める。

ひとりきりで空回りしていると想うよ…
シャルルは一人、心の中で呟いた。
曖昧な台詞では足りない。
もっと君の心の中に・・・君の躰に刻みたい。
マリナ。
唯一人の…運命の人。

「どうして君はオレなしで平気でいられるんだ」
少し怒ったように彼は言った。
「ああ、シャルル。聞いて。ね　聞いて」
彼女はため息を漏らした。
「聞かない…オレを満足させてくれ」
愛の言葉を聞かせても彼女には届かない。
彼女に愛の嵐を落としても、彼女の心は手に入れられない。

「…シャワーを浴びておいで」
彼は静かに言った。
ようやくマリナを離した。
「それとも、その格好のまま…一晩中クリームにまみれていたいのなら好きにしたら良いよ」
マリナが落ちた衣装を持ち上げて、真っ赤になって叫んだ。
「シャルルは意地悪だわ」
シャルルはワイシャツを脱ぎながら、面白そうに言った。
誰かのせいで、汚れてしまったなとマリナをからかうように言った。
「意地悪…どうして？具体的に指摘してくれ」
彼はそう言って笑った。
マリナはまた一瞬で真っ赤になった。

だからTrick　OR　Treat　と言っただろう。
シャルルは歌うように言った。
君をくれないのなら…マリナ、君を‥‥
心の中で叫んでいた。
彼女の声を聞いていたかった。

少し乱れた白金の髪をかき上げた。
「Marina‥Pour calmer ma détresse ‥‥」
（マリナ‥オレの苦しみを鎮めてくれないか…）
そう言った時だった。
言葉もわからないはずのマリナがその言葉に反応した。
「シャルル」
彼女はシャルルを軽く睨んだ。
乱れた衣類を直す手が止まった。

マリナが少し怒ったように眼を反らす。
彼女は立ち上がった。
無言でシャルルを斜眼で通り過ぎようとする。
その時だった。

彼女は小さく言った。
シャルルはマリナの口から漏れる言葉を聞いてぎょっとした。
たどたどしいけれど、それはまさに、彼の問いに対する答えだった。

J'ai compris ta détresse（私にはあなたの苦しみが痛いほどわかる）

「待て」
シャルルは弾かれたように彼女の肩を掴んだ。
マリナの目の縁は少し紅くなっていた。
茶色の瞳も少し赤い。
「意地悪しないで」
マリナはそう言った。

「なぜわかる」
「……」
シャルルはそう言って彼女を自分の方に向かせる。
なぜ彼女が返答をしたのか答えはわかっていた。
しかし、彼女の悲しそうな顔をそのままにしておきたくなかった。
彼女は少し考えたあと、シャルルの顔を見上げた。
シャルルは彼女がそうするまで、無理に顎を掴んで引き寄せることはせずじっと待っていた。
「何もいらない」
彼女はそう言った。
彼女の瞳が揺れて動く。
ゆっくりと瞬きをした。
「何もいらないから‥‥シャルルの傍に居てもいい？」

そうだね。
何もいらない。
ただ…
オレも。
君の心の中に居たいだけだ。
彼は薄く笑った。

こうして互いを見つめる時間があり‥彼女は自分の苦しみがわかると答える。
ハロウィンの夜に乗せて訴えなくても、彼女は彼に向き合っていることは、よく解っている。

「シャルルはわかってない」
彼女はもう、怒っていなかった。
「私は伝えられていない？」
「いいや」彼は否定した。
シャルルは彼女を抱きしめた。
そんなことはどうでも良いよ。

箱にはフランス語が書いてあった。
フランスの偉人の名前を冠するケーキを作ることで知られている。
この菓子の名前は有名な音楽家の名前だった。
ケーキの箱に書かれた詩の文句を彼女が覚えるほど頻繁に、あの男と分かち合っていたとしても。
彼にその文句を習ってシャルルに伝えようとしたことも。
それを食べさせたいと彼女が思う唯一の人間がシャルルである限り…
彼はこうして…マリナに赦された、マリナに触れることのできるたった一人の男なのだ。

「一緒にシャワーに入ろう」
「いや！」
「…オレのことを弄ぶんだろう？悪戯はなし？」
「意地悪ね。」
「ハロウィンだからね」
彼は声を漏らして笑った。
「さぁ　甘い香りに誘われて、今夜は亡霊や精霊がやって来る。‥‥ああ、それも良いな。続きをしようか。彼らがやって来るまで君が菓子になるのも良いね」
マリナが叫んだ。
「シャルル！」
彼は笑った。青灰色の瞳が面白そうに光った。
彼は言い出したら撤回しない。
マリナは先ほどと反転して青くなった。
シャルルは彼女の腕を掴んでバスルームに連れて行く。
どうにも甘い香りと…彼女の白い肌が忘れられない。
「君のせいだよ、マリナ。‥‥‥眠ることは赦さないよ。覚悟しておけ」
そして唖然とするマリナの顔を見ながら、くすくす笑った。

バスルームの扉を閉めた。

（FIN）

ながめせしまに

ながめせしまに

◆前編

シャルル・ドゥ・アルディが柔らかい羽根枕の中で、白金の髪を埋めたまま、僅かに身動ぎをした。
糊の利いたシーツが、少し音を立てたので、それが彼を眠りから現実へ強制的に呼び戻す。
彼が覚醒を始める予兆というか、最初の合図だった。
シャルルは、俯せになったまま、左腕を持ち上げて後頭部を押さえた。

彼の脳は、目覚めの直後はまだ微睡んでいる領域が多い。
闇の中で、肌の色は白いがよく鍛えられた締まった腕だけが気怠いと主張しているかのように、ゆっくりと動く。
それから、そこが間接照明の明度をぎりぎりまで落とした室内の中で、かなりの時間が経過してからようやく少しだけ顔を上げた。
暗冥に身を置いていたので、視点があわなかった。
彼の張り詰めた美しい背中の筋肉が動く。

彼の横たわっている寝具が、まるっきり・・いつもアルディ邸で用意されている、薔薇の精製油を使って焚きしめた花香りの残るシーツではないことを知った。
枕の僅かな音で、彼は酷く不機嫌になった。
そして、そこから彼の物憂げな瞳に、晄が宿り始める。

ああ、そうか。

それで気がついた。
ここはアルディ邸ではない。

彼がいつも指定する寝具を用意できていないことに対する不満。
それから、彼が休みにはちょうど良い広さのベッドとスプリングではあったが、彼だけが休むのではないベッドが、ほんの僅か・・・
そう、ほとんど誰も気がつかない程度に傾いていたことに対する遺憾。また、そのことに最初に気がつかなかった自分への叱責。

それらが、彼を急速に、就眠から揺り起こす。

彼は非常に寝起きが悪い。
脳を酷使するので、疲弊した彼の躰ごと癒そうとするかのように、輾転することもほとんどなく深い闇に入り込んでしまう。
寝る魂（＝夢）は彼を訪問しない。彼は夢を見ない。

大きく息を吸って、肩で大きく息を吸ってから、彼は勢いをつけて寝返りを打った。
深く眠ってしまっていたらしい。
――躰がきしんだ。
これは躰を動かすことを放棄してしまった彼の筋組織が、思い出したように悲鳴をあげて血流を活性化させているからであった。
徐々にはっきりとしてくる視界の中で、清潔ではあるがアルディ邸よりずっと低い天井を目にして、そこで現状を把握することについて集中することにした。
細く長い指で、恐ろしく整った自分の顔を被った。

それから・・・
シャルルは溜息をついて、腕を伸ばした。
だらんと伸ばした腕から伸びる指先が、サイドテーブルの上に置いたタグ・ホイヤーのグランドカレラを探索する。
と硬質の物質と出会って、かちりと音がした。
彼はぞんざいにそれをつまんで持ち上げて、顔の前にぶら下げた。
夜光塗料がぼんやりと浮き上がって、彼に現在時刻を告げた。
顔を近づけるまで、その秒針音がほとんどしない設計のグランドカレラを、無表情で眺めた。

――パリとの時差を計算する。
彼の神経細胞は活性化し始めていたことを確認する。
彼が持ち上げた腕時計は、クロノグラフ ローズゴールドの限定モデルで、盤がブラウンの腕時計の秒針は、かなり遅い時間・・・も

う夜明けの時間を示していた。
ブラウンアリゲーターを使用しているので甘く渋い色を出しているブレスレット部分が、僅かな光源で光った。
シャルルはそれをベッドに放り投げた。
柔らかな翅毛布の上で落下を知らせる音がしたが、彼はまったく無頓着だった。

彼が「青春の輝きの時代」と呼ぶ時代に出会った、運命の人と決めたマリナ・イケダの躰がいつものように彼の傍らで、横臥していないことに気がついていた。
そのことに対する憤りを口にしようとしたのに、彼の薄い唇は目覚めてすぐに言葉を発することができない。
それが口惜しい。

まず、彼が目が醒めてから確認することといえば。
これが、夢ではないということだ。
傍らに誰かが居ると、彼は眠れなかった。
けれども彼女だけは特別だ。
それは最初からではない。
まだとても若かったとき。
彼女と初めてひとつの寝具を共有したときには、彼はまだ眠ることができなかった。
だから・・・これは、彼女と出会って、そして再開して、そして愛を継続することができることの喜びを知った後に発見した彼の中の変化だった。

それが少し腹立たしい。
シャルルの母のように、彼が気がつかないうちに、いつの間にか、夢の中の住人になっているのではないのかといつも確認する。
彼女の存在の有無を確認するより前に、彼はいつも・・・その幸せが夢でないかどうかを確認する自分自身を決して赦しはしない。

そして同時に彼は畏れている。
傍らに彼女が居るという幻を創り出しているのではないのか、と。
目覚めの無意識の状態の時にでさえ、彼女の存在を確認しなくては・・・彼は安らぎの目覚めを享受することができない。

恋も愛も必要ないと思って生きていたのに。
彼はもっと・・もっと自分は、強靱な魄を持っていると思っていた。
しかし実際には、彼女を自分から手放したこともあったのに、次に手を離したらその先の自分を思い描くことができない。
いや、想像しないことにしている。

あり得ないことに時間を割くことはしない。
それがシャルル・ドゥ・アルディだから。
彼はいつも自分自身にそう言い聞かせている。

◆中編

時計を投げ落とした先には、何もなかった。
彼が期待しているような、彼女が眠りを阻害されて彼に向ける抗議の声や、彼女の安らかな寝息を伴った気配はなかった。
シャルルは青灰色の双眸を動かして、白金の髪と同色の睫を瞬かせた。
天井から彼が仰臥している胸上から始まり、そしてこの空間に視線を移すが、彼の探し求めるものはない。

彼はそこでまたひとつ、大きく深呼吸をした。
艶やかな声を小さく漏らしながら、躰をゆっくり起こす。
その時だけは、彼の唇から母国語が漏れる。
血流が勢いよく巡る感覚がして、彼の後頭部が激しく痛んだ。
脳が活性化されている証拠ではあるが、決して心地良いものではない。
それに、若い頃にいくつも負傷した瑕が疼きだしていた。
季節の変わり目や天候によっては、僅かではあるが疼く。
昔、感じた胸中の熱い疼きや痛みに比べれば、さほど深刻なものではなかったが。
だから彼はいつも、目覚めて起き出すまでの時間を人より眺めに過ごす。

それを彼女は「寝起きが悪い」と言っていつもからかうのだが、こればかりは改善するつもりもないし、特に、疲労している今の状態のような時にはなおさら休息する時間を長めに取ることにしていた。

何もかもを彼女に捧げた。
でも、捧げることによって、彼女に与える物がなくなってしまう結果になるのであれば、それは彼女にくれてやった方が良いのか、それとも・・・彼女ごと、自らの内に閉じ込めてしまった方が良いのか。

邪な念が彼の痛みの波に乗ってやって来て、目覚めの後になっても消えゆく素振りを見せないときには、必ずひとりになるようにしていた。
そうでもしなければ・・自分だけでは飽きたらず、彼の狂気は彼女を傷つけてしまうから。

いない。
彼女がいない。

がっかりしているのか、ほっとしているのか。

わからなかった。
いや、きっと両方なのだろう。
彼にわからないことはないはずだから。

彼は起きあがった。
スプリングが鳴って、彼は小さく舌打ちをした。
この音でさえ、ただでさえ不機嫌な彼の目覚めに障った。
白い体が闇の中に浮かび上がって、彼の見事な裸体が浮かび上がる。
彼の習慣では、就寝時には何も身につけない。
それは彼女と休むようになってからも変更されていない。

完全に遮光された部屋で、彼が自ら持ち込んだ加湿器のモーター音が僅かに鳴動していた。

———ここは滞在先の、ホテルの一室だった。
彼の仕事の都合で、来日することになった。
それにあわせて、彼女が一緒に帰国したいと言い出した。

急な訪問であったが、用事を済ませるまでの時間はそれほどではなかった。
シャルルはこうして・・・当主で在り続けるのであれば、マリナとの時間よりもこちらを優先させなくてはならない事柄が多すぎることを懸念していた。
たまたま・・・今回は彼女が同行したいと言ったので。
こうして一緒に来日している。ただそれだけだった。

「当主を辞めようかと思う」と言った時。
彼女は「そう」と小さく言っただけだった。
「シャルルが決めたことなのよね。だったら間違いはないわ」
彼女は闊達にそう言った。
彼の冗談混じりの言葉に、彼女は素っ気なく応えたものだから、彼は一瞬・・彼女が自分を誑かしているのかと思った。
彼女は知っている。
シャルルの気高さを。そしてそれ故の孤独も。

あれほど・・当主の座を巡って、激しく争ったのに。
彼女は、頷いただけだった。
それを捨てようと思う、と言った彼に、彼女は茶色の瞳を煌めかせて「そう」とだけ言った。
彼女は、もっと言いたいことがあったはずなのに。
命の危機を感じたあの日々について、マリナは多くを語らない。
けれども・・・彼女のその後について、何かしら影響を与えた出来事であったことには変わらない。
当時の恋人と魂を引いて分かつような別れも、彼女がシャルルと向き合おうとした健気さも、今に繋がるすべてだから、彼は決して否定はしない。
けれども。
◆03

けれども・・・

彼は足元で存在を知らせることを躊躇うかのように秒針を振動させる時計を眺めた。
シャルルの財力では、その時計の値段は「ちょっとした衝動買い」程度のものだった。
日本限定モデルのそれは、彼女が機内に用意された雑誌の広告頁をあまりにも長く眺めていたので、彼が「それなら」と言ってその場で電話して買ったものである。
男物のそれをなぜ、彼女が興味深そうに眺めていたのか・・・後になって気がついた。
シャルルは時計をほとんど身につけない。

必要がないからだ。
分刻みのスケジュールを確認するのは、彼ではなく、彼の秘書である。
加えて、長らく彼と苦楽をともにしてきた彼女の従妹に至っては、時間を寸分違わぬことが前提ですべてが進んでいる。

彼女の恋人であった、彼の親友でもある太陽のようなあの男はたいそう時計好きだった。
だからであろうか。
彼女が執着しているそぶりを見せたから、だからシャルルは手に入れた。
理由はそれだけだった。
その時計を見て、彼女が彼を思い出す程度の絆であれば、彼はいつでも放棄する覚悟ができていた。
その一方で、それを確認しても、きっと手放すことができないであろうという予感めいたものがあったことは否めない。
・・・単に、彼は、マリナ・イケダの愛を確かめただけだったのかもしれない。
彼女が、親友の恋人という座を捨てて、こちらに向かってやって来た喜びは今でも忘れない。
これが、彼の生涯の生きる糧になるであろうということも、承知している。

それでも、それでも。

彼は、いつも常に誰かと比べられる生を送ってきた。
彼の半身と。彼の先祖と。彼の叔父と。愛を知る前の彼自身と。

だから、何かと比較することでしか、彼は安堵できない。
常々、シャルル・ドゥ・アルディはひとりしか存在しないということと、彼は誰にもなり得ることができないと言っているにもかかわらず、相反する存念を抱えながら、こうして呼吸をしている。

「マリナ」
彼は起きあがりながら声をかけた。
運命の人と定めた女性の名前を呼んだ。
・・・返事はない。

そのかわりに、かたん、と身動ぎする音がしたので、彼はバルコニーに目を遣った。
・・・ああ、そこか。

遮光カーテンで遮られていたので、彼女の影を視認することができなかった。
彼は目を細めて、カーテンの下からほんの僅かに覗く影に吸い込まれるように視線を注いだ。
彼が凝視する人間は限られている。
最も・・こうして、何も纏わずに居ながらにしてなお、誰かの気配を探し求めるとなれば、それはこの世でたったひとりしか存在しない。

数時間前まで、彼と同じ褥で彼と同じように乱れた呼吸を共有し、そして永遠に共に在ると彼の魂に誓った相手はひとりしかいない。
◆04

彼は起きあがると、傍にあったガウンを取り出した。
空調が効いているとはいえ、大きな窓ガラスから冷気が漏れる。
遮光カーテンの裾から彼が設定した温度や湿度を破壊するかのような肌寒い空気が流れ込んでくるのを感じていた。
良く鍛えられた鋼のような躰が白く浮かび上がる。
今は薄くなってほとんど見えないが、彼の躰には無数の瑕があった。
若い頃・・そう。
彼が彼女と一緒にあちらこちらで危険な場面に遭遇する都度、彼の瑕が増えていった。
そして、それは勲章のようで誇らしかった。
痛みが消えると、今度は不安になった。
彼女と一緒に居た時間が瑕とともに消えてしまうと思われたから。
だから、彼の躰には、完治する前に形成手術を施せばもっと目立たなくなったであろうというものも存在する。

しゅっと衣擦れの音がして、彼の滑らかな肌に衣が乗った。
ベッドに腰掛けて・・そして、大きな手の平で、シャルルは彼の美しい顔を被った。
次に、そのまま両の掌を額に持ち上げて、白金の髪の毛をかき上げると、彼の柔らかな髪が撫でつけられたが、細い髪質であったから、すぐにそれらはまた精悍な頬に落ちた。

シャルルは段階を経て、腰を浮かせた。

完全に遮光できるように、と指定したのに、冷気も陽光も僅かに漏れていたので、彼の神経にますます障った。
美しい眉を顰めて、彼は立ち上がる。
音がする方に引き寄せられるように、暗闇の中を歩いた。
闇に目が慣れてきた頃なので、歩みに支障はない。
かえって、晄が差し込む方が目が眩んでしまうだろう。

しかし、シャルルはいつも暗闇の中で目を細める。
闇は恐くなかった。
どんなに暗くても、彼の太陽が傍らに居るから。
光も影もすべてを包む人が傍にいるから、彼はその光を求めて、こうして彷徨う。
僅かな離別も受けれないことにしている。もう、離れないと決めたのだから。
それは彼だけが一方的に宣言したのではない、といつも彼女に問うているのに。
彼女は・・マリナはいつもはにかんだように微笑んで、彼の望む愛の言葉を囁くことはしない。
それが彼女の特質であると理解しているのだが、時々・・・彼女の愛を確認しなければ、彼は安らげない。
疑っているのではない。
嘲っているのではない。
彼女の愛し方と自分の愛し方が異なっていると思い知る瞬間に、その時に、彼はいつも彼女に無愛想になる。
そして、自分の思った結果になるように、何かを仕向ける。
先般の腕時計のように。

それを、彼女が窘めた。
若い頃はたいそう・・彼の資力に感歎した彼女であったが、シャルルが実際にそれらをすべて捧げようとすると、あっさりと「いらない」と言う。
責務を負いたくないからそう言うのか、それとも、彼女が固執しない性質だからなのか・・・
シャルルは自分自身もいつか「いらない」と言われるのが恐いのだろうかと時折苦笑する。
自分が望んでいることは・・・こどもと一緒ではないか。
母の愛を求めて焦がれた幼少の頃と同じなのだろうか。
今でも時折考える。
彼は間違えないが、それ故に、迷宮に彷徨うことがある。
こたえは一つではない、ということを、マリナが彼に教えるまでは、彼はそうして何度もひとり孤独と闘って傷つき、そして癒えることのない傷を抱えてきた。
彼が躰に瑕を遺すのは、それを思い知るためでもあった。
青春の輝きの時代に得た、かけがえのない想いを忘れて・・彼女の愛を求める余り、今の彼女を見失わないために。
彼はこうして未だに瑕の疼きを誰にも漏らさずに耐えている。

「・・・マリナ」
彼女がいる場所はわかっていた。この場所にいないのであれば、隣室の窓辺に座っていると思ったので、そちらに移動することにする。
寝室は静寂と暗影が立ち込めていたが、ドアをひとつ隔てた向こう側はカーテンが開け放たれたままだった。
少し目を細めて・・・青灰色の瞳を探し求めた人に定めた。
それほど広くない空間だったから、小柄な彼女が窓辺に椅子を寄せて蹲っていてもすぐにわかった。
備え付けの椅子の上で膝を抱えて、童女のように身を縮めているマリナを見つめる。
寒そうに、肩から背中にかけてローブの襟を逆立てて全身を包んでいた。

「そこに居たのか」
「おはよう、シャルル」
彼女の闊達な声が聞こえてきた。
幻聴でないことを確認して、彼はほっと息を吐き出した。
◆05

彼女の愛執については、彼は理解しているつもりだった。
彼女は人が好きで、縁を断ち切ることができない。
それ故に、若い頃にはいろいろとトラブルに巻き込まれている。
その禍のひとつにシャルル・ドゥ・アルディと出会ったことも挙げられるのかもしれない。

彼女が何に固執しているのかそうでないのか、彼ははっきりと分類しているはずなのに、時折・・・そうでない結果を得ることがある。

今、目の前にいる彼の運命の人は、何かを考えているようだった。
室内飼いの愛玩動物のように躰を丸めて・・外を眺めていた。

居室はカーテンが開け放たれており、それまで薄暗い、光源を極限まで落とした部屋で休息の睡りに身を浸していたシャルルの瞳には眩しい光が差し込んでいた。

今日は雨だった。

彼は彼女の存在する場所から視線を移して、外を眺める。
窓の外は薄墨の空模様で、日本独特の春の長雨が始まろうとしていた。
外は大変に花冷えする気温のはずだった。
窓ガラスは曇り止めを目的として、二重構造になっているのに、その四隅はわずかながら、白く結露していた。
彼はこのような、室温管理が徹底されていない部屋に宿泊することは決してない。
マリナがここの部屋に泊まりたいと強情に主張しなければ、決して訪れることのない部屋だった。
彼女がなぜ「シャルルが嫌なら、ここで一人でも宿泊する」と言い出したのか、まだ理由を訊いていなかった。

こうして供に泊まり歩くことはほとんどない。
これから彼女との未来を考えなければならない時期にさしかかっているのかもしれないが、こうして・・彼女を仕事の都度、連れ歩くことはできないということだけは明らかであった。

・・・いつもより太陽光が制限されているはずなのに、彼は目を細めて、青灰色の瞳を刺激から護った。

「寒いのなら、いろいろ防寒策を講じることができたのに」
シャルルは開口一番そう言った。
寒そうに身を縮めて蹲っている彼女に呆れて言った。
おはよう、と言ったマリナの朝の挨拶を無視した格好になったので、その次に間髪入れずに「眠っていなかったのか」と言葉をかけたが、それが我ながら批難がましい抗議の声に聞こえて、彼は口を噤んだ。

彼女が何に執着して、何をあっさり手放すのか、未だにシャルル・ドゥ・アルディは把握することができない。
予測不能だと言えばそれまでなのだが、マリナ・イケダに関しては、彼は自分自身以上に分析ができない対象と認識している。
人を知ろうとして、鑑定医になったこともあった。
己を知ることができると思ったからだ。
それなのに、彼女は傍に居るだけで、これまでのシャルル・ドゥ・アルディを払拭してしまう。
これは非常に観察するに値する現象だった。
シャルルは常に自らを客観的に捕らえているし、それは生涯変わらない。
それでも、マリナ・イケダに関することだけは、彼のこれまでの生き方にそぐわない激しい想いをもって、大変に執着する。
しかし、彼女はモノに躊躇するのではないのだということもわかっていた。
何かを通して、誰かを思い出しているのだ。
だから。
だから、彼は・・・あの時計を電話一本で買って。
その次の瞬間には「でも、いらない」と言ってマリナに窘められた。

彼が畏れている言葉を、自分自身で発してしまった。
そして、本当に欲しいものではないのに遊興で興味の無いものを手に入れても、それは満足に値しない、と窘められた。
それはいけないことだとマリナが言ったから。
彼は内から沸き起こる激しい慟哭にも似た激情を僅かながら、彼女に見せてしまったのだ。
◆06

シャルルは声をかけた。
「眠っていないのか」
「よく寝ました。・・・シャルルの方こそ。よく眠れたの？」
彼が自ら起き出してくることが珍しいと、マリナが言外に匂わせたので、彼は薄い唇を歪めて苦笑した。
青灰色の瞳が、徐々に強い晄を放っていく。
「スプリングが最悪だ。・・・・人間の一生のうち、相当時間を睡眠として使用するのだから、最高の状況で睡臥したいという考え方を推奨するのであれば、あのベッドはオレの健康を間違いなく損ねるね」

要は、あまりよく眠れなかったと言いたいわけでしょ。

マリナがそう言ってくすくす笑った。
彼女の思考の回転はシャルルのそれには及ばないが、こうして起臥を供にする者だけが交わすことができる軽口は彼の神経を活性化させることもあって、その会話を彼は嫌ってはいなかった。
そして唯一、彼の揺蕩う、覚醒までの僅かな時間を占領することを、彼は彼女に許可していた。

シャルルは首を軽く回した。
いつも指定する羽根枕ではなく、ちょうど良い角度で頭が沈まないことが原因で、
僅かながら疲労感が残っていた。

彼女は窓辺に居た。
そして、椅子の上で膝を抱えて、じっと外を眺めていた。

「何をしている」
「何も」
彼はマリナを見た。

空調が効いていても、動き回らないので躰は冷えているはずだ。
しかも、彼女はバスローブに身を包んで、象牙色の喉元を覗かせている。
裸足の指先は寒さで白く変色していたし、彼女が外の景色を見霽かすだけではとうてい説明できないほどの時間を、そうして同じ姿勢で過ごしていたはずだった。
・・・「はずだ」

彼がいつもそうやって断定的に物事を言うので、マリナがそれについても指摘をしたことがあった。
彼女は常に彼の想定外であり、彼女に関してだけは断定することができないことを、マリナ本人はわかっているのかいないのか・・
時折、彼はマリナの心の変化を知るために、あれこれと思惑を巡らせていることについては、マリナは知っているようだった。

「雨で・・桜が流れていくので・・それを眺めていた」
彼女はそう言って、目の前の大きな窓ガラスの向こう側で白く燻ぼる桜の群生を見た。
大きな茶色の瞳が、眼を細くして・・・それらを眺める。
桜の下には、このホテルの特徴の一つである、大きな池があった。

彼は窓辺に視線を移した。
精悍な整った顔でマリナの視線が捕らえているものが何であるかを調べようとした。
確かに。
彼女が見つめていたのは、桜であった。
でも、今はもう桜が散りゆく時期だった。

満開の花は先頃、盛りを越えて・・・彼らが昨晩宿泊する際には、もう散ってしまっていた。
観桜するには時期が悪かった。
例年と違う温度変化が、マリナを酷く失望させた。
彼が、彼女の心を試す、と彼女が窘めた直後で、更にマリナを寡黙にさせてしまった。
彼女はいつも闊達に話をする。
シャルルがあまり話をしなくても、聞き入っていなくても、彼女は返事を求めないと宣言してから話をする。
自分の考えていること、気にいったこと、感動したこと、食事の内容。
彼女は・・・彼と離れている時間を埋めようとして、言葉を使って彼との距離を縮めようとしている。
でも、言葉では足りないと、お互いがわかっていた。

言葉にしても不安に思う。
言葉がなくても妄想する。

それなら・・・
それなら、彼女の心は、どうしたら・・・どうしたら自分の方だけを向いてくれるのだろうか。
一生、そんなことはあり得ないだろうと理解しているのに考えずには居られない。
散ってしまった桜を、元に戻すことができないように。
シャルルにも不可能なことがあった。

それは・・・彼女の過去を消すことだ。

過去があるから、今があるのに。
あの時の別れがあるから、今こうして再び巡り合うことが出来たのに。

流れ散りゆく桜の花弁は、桜木達と離別して、すでに枝にはほとんど残っていなかった。
残っているのは、これから大きく勢力を伸ばしていく葉のみだった。
それも、この寒さと雨のために、心なしか小さく縮まって静かに時を過ごしているように見受けられた。

シャルルは窓辺に立った。
冷気が押し寄せる。
それが彼の脳を刺激して、意識の覚醒の速度を上げていく。
彼は・・・そう、彼が眠りに落ちる前に何を考えていたのかを繰り返して思い出すことになった。

桜が散ってしまった。
彼女がそう言った言葉を思い出していた。

彼女の躰に、たくさんの花弁を散らせたのに。
彼女は・・マリナは、それでも、彼の腕からすりぬけて行く。
誰かを恨むことができれば、誰かに怒りを当てることができれば、もっと楽なのかもしれない。
でも、彼は楽になりたくなかった。
愛とは、魂の試練だと彼は定義したから。

手に入れたら、安らぐと思っていた。でもそうではなかった。
一緒に居てなお、マリナの愛を求めて焦がれる自分は、貪欲で罪深いと思った。

池の水面は雨垂れでたくさんの波紋を作っていた。
そして、その上に散り敷くように、桜の花弁が浮かんでいるが、とても寒々しい光景だった。
◆07

こうした会話は彼を切なくさせる。
彼女に何を求めているのか、と訊かれたことがあった。
シャルルは、若い頃の彼女をこよなく愛したが、今の大人になった彼女も同じくらい深く愛している、と伝えているのにも関わらず、マリナ・イケダを困惑させてばかりいた。
肌を重ねても、言葉を重ねても、彼は・・彼はいつもあの男の影を感じながら、彼女を手放すことができずに、こうして自ら創り出した試練に争覇しなければならない。

「桜が見たいのではなかったの？」
彼はそう言った。

彼女がこの部屋に宿泊したいと言い出して、彼がそれに同意したのは、この部屋の間取りが最も良く、観桜できるからだった。
チェックインする直前のことに、シャルルは少し眉を顰めて彼女の滅多にない希望について、何か深い意味があるのだろうかと考えを巡らせた。
だが、結局、彼は同意した。

最上階の特別に用意された居室から変更された桜と同じ高さのこの部屋は、彼が普段決して使用しないクラスの部屋だった。
しかし、窓から池も桜の木々も眺められるこの部屋が良い、とマリナが言った。
それほどまでに・・・日本が恋しいのかとちらりと思ったが、彼はその願いを聞き入れることにした。

マリナ・イケダは、こうして彼と過ごすようになってから、滅多に自分の我が儘を主張することがなくなった。
遠慮深くなったのではない。
彼女が享受する物質的富裕は、彼女の興味の対象外なのだ。
目の前にあればそれを受け取る程度には興味があるが、彼女はそれを押しつけかれると途端に「いらない」という。
あの時計のように。
彼は美しい白金の眉を僅かに歪めた。
彼女が、桜を眺めたいと言ったので、この部屋を取った。
それなのに、もう桜は散ってしまったということを、入室して初めて知って、マリナは非

常に残念だと言っていた。
なぜ、そこまでして桜に固執するのか。
彼女は真っ先に窓際に立って、夜に仄明るく耀く桜を眺めたいと言ったが、部屋に入るなり窓の向こう側に何も映り込んでいない様を見て、「散っている」と呟き、非常に落胆していた。
昨夜から本日の未明にかけて降り注ぐ冷たい雨が更に・・陽射しによって少しばかりあった蕾が花開くのではないかという期待も洗い流してしまった。

なぜ、彼女は桜に焦がれるのだろうか。
桜の国に生まれて育ったからだろうか。
それとも・・・彼女の中に息づく表現者の血が囁いたのかもしれない。
彼の眷恋（※恋い焦がれて身悶えすること）と、彼女のそれは異なるものだ。

彼女は・・・何かに焦がれることはあっても、誰かに焦がれることはあるのだろうか。
あの男以外に。

同じような愛が欲しいわけではない。
ただ、こうして遠く外を見遣る彼女を眺めているだけで、胸が苦しくなる。
彼女が何を考えているのか。何を憂えているのか。何を・・・何を思って桜を眺めたいと強く願い出たのか。彼はそれを知ろうとしたが、彼女が開示する情報は非常に少なかった。
いつもそうだ。
マリナは、自らたやすく人との距離を縮めるのに、自らの領域に踏み込むことを赦しはしない。誰にも。シャルルでさえも入り込めない。

彼は大人になったのに。
そしてあれから様々な出来事を経験して・・・そして、今こうして彼の運命の人と一緒に時を刻んでいるのに。
彼は・・・彼はまだ不安で眠りから覚める都度、彼女の存在を確認しなくては安らげない。
安らぐための眠りなのに、彼は眠りに落ちることも、眠りから覚めることも戸惑う。

「桜は残念だった」
彼はぽつりとそう言った。
臥所から抜け出したばかりの恋人たちの会話にしては静かすぎた。
そうして、窓際に座って物憂げに外を眺める彼の生涯の恋人に細く長い指を伸ばして、小さな肩に触れた。
ローブは薄手のものだったので、布越しで彼女の体温が伝わってくる。
「躰が冷える」
彼は続けてそう言った。
彼女は健康でほとんど失調することはなかったのだが、時折、高熱を出して寝込むことがあった。慣れない異国での生活のせいだろうと、医師でもある彼は判断した。
何がどう悪いというわけではないのに、彼女は時折失調する。
そして、その時にシャルルが傍に居ると、貴方のやるべきことを成せ、と言って彼を追いやろうとする。
だから今回は連れてきた。
マリナが日本を焦がれているのであれば。それが彼女の心を癒すのであれば。躰を慰めるのであれば。
それも良い、と思った。

愛しすぎた。
愛しすぎて、彼女を手放すことができなかったあの若い頃と同じことを繰り返すつもりはなかった。
愛しすぎて・・・彼女を結局独り占めできなかったことを思い出した。
彼女の幸せはシャルルの幸せであり、こうして眠りを共有するようになってからもなお、彼は「いつか」の時のための覚悟を用意しておかなければ、とうてい正気を保つことができそうもなかった。
◆08

流れ落ちて、華礫となって洛流する雨模様を見つめながら、彼の目覚めまでたったひとりで時間を過ごした愛おしい人に、シャルルはそっと囁いた。

「マリナ。考え事をするのも良い。
ひとりで居たいのならそれでも良い。
・・・でも、君の考えていることを知りたいと思う人間が目の前に居るということを失念しないように」

「わかっているわよ」

少し、怒ったような口調で彼女は言った。
薔薇色の唇を突きだした。

彼女は、若いと言うよりは幼い表情をする。
そして、それが、彼の青春の輝きと呼び親しんだあの時代を彷彿とさせる。

昔に戻りたいのではない。

でも、あの男を激しく愛した彼女を愛していたのか、それとも、彼女そのものを愛したのか・・時々、彼は惑ってしまう。
前者ではないことは、彼と彼女が離れていた年月の中ですでに検証済みであったのに・・・彼は、いつまでもあの男の影を感じながら、彼女を愛さずにはいられないという苦しみから自らを救うことができない。

「ただ・・・ただ、私は、桜がまた咲かないかな、と思っていただけ」

彼女がそう言ったので、彼は青灰色の瞳を少し見開いた。
いくら夢見がちな彼女であっても、散ってしまった桜がもう一度、彼女の望むままに枝に蕾を灯すなどとは思っていないはずだった。
それなのに、何を言い出すのだろうか。
ぽつりと言ったので、彼は間を置いた距離を詰めるべきかどうか考えてしまった。

「今年の桜は終わりだよ、マリナ」
彼はようやくそう言った。
彼の知らない・・・あの男とマリナの間で、桜を観賞する機会があったのかもしれない。
この花を春の到来の象徴として愛でるのは、この民族にはよく見受けられる特徴だった。

わかっていないよ、と呟きながら、彼は言った。
彼女が彼と同行したいと言った時に、気がつくべきだった。
シャルルと一緒に居たいのではなく、彼女は・・桜を愛でたいのだということに。

「そんなに桜が恋しいなら・・・アルディの家の庭に、桜並木を植えよう」
彼はそう提案したが、マリナがすぐさま首を横に振ったので、彼は酷薄そうな薄い唇を横に引いた。
彼女を手放すつもりはない。
彼女が桜が好きだと言えば、それをパリのアルディ邸に植えれば良いだけの話だ。
この場所のこの桜を愛でるのが好きだと言っても、彼と一緒にここに訪れることでそれを叶えてやることができる。
でも、彼女はそうではないと言って否定する。
彼の何が・・・彼女の寂しさを助長するのだろうか。

国籍や人種が違うからか。
彼も親日家として高名だったから、桜の風情が理解できないことにマリナが憂えているとは思えない。それなら・・・彼女は何に悲しんでいるのだろうか。

シャルルは軽く目頭を押さえた。
これほど愛しているのに、伝わらない想いというものが・・・愛していると伝えることより難しいのだと知ったのは、彼が大人になってからだった。
そう。
彼女と再会するまでは。
互いに・・・少年と少女のままだった。
体を重ねて大人の時間を過ごしたと言い切れる程には・・・・マリナの心の深淵を覗いていない。
彼は、マリナのすべてが欲しかった。
その心も。体も。そして憂いも哀しみも。あの男との思い出も。何もかもが欲しかった。

◆09

彼女の強靱とも言える健康な精神に対して、時折羨望を通り越して、遺憾だと思うことがある。
いつも闊達で、常にシャルルに嘘偽りを述べることはしない、正直で健康な魂の彼女がこの上なく愛おしいと思う。
けれども・・・時には、嘘でも良いから。
シャルルだけしか見ていないと言ってくれるのではないのかという、身勝手な妄想を抱くことがある。
それを述べれば、彼の愛するマリナ・イケダではないことを承知しているのに。
彼は、彼だけを見つめるマリナを求めて、目の前の本人に、声にならない欲求を放っている。

彼女は人を愛している。
景色を愛でている。
何もかもが、彼と同列であり区別がつかないと公言している。

「マリナ、冷えるなら・・・シャワーを浴びてきたらどうだ」
「そうだね」
彼の提案に、マリナが、賛成の声を上げたのにその場から動かないで膝を抱えなおした。
寒そうだった。
シャルルは彼女に毛布を持ってきてやるべきだったと思った。

彼女は冷気に耐えて、長い時間そこで考え事をしているということは、彼女は自らの冷えの心配よりも、もっと違うことに考えを巡らせていたことを示していた。
しかし、彼がここで視線を反らせば・・彼女はまた想いに耽ってしまう。
彼の目覚めと彼女の没頭は、互いにまったく別のものであるから。

彼は溜息をついた。
彼女に聞こえないように、本当に小さく吐息を漏らした。

ながめせしまに

この言葉が浮かぶ。
物思いに耽っている間に。
桜の花が散りゆく様を眺めている間に。

彼が生涯の愛と定めた、彼の中で鮮やかに咲き誇る・・・決して色あせないと信じて疑わない愛も・・・褪せてしまうのだろうか。

「花がまた咲くように」
彼女はまた呟いた。
彼に聞こえるか聞こえないか、それほど小さな囁きだったが、彼女は茶色の瞳を外に向けたまま、少し怒ったように言った。
椅子の上で、丸く小さくなっている彼女は、本当に・・まだあどけない少女のような風体だった。
彼女は大人になったのに。こうして時々、彼を惑わす。
あの、青春の輝きの頃に、彼女の寝顔を見て。
彼は、彼女を愛して良かったと思った。自分は間違っていないと思った。
そして・・・それが未だに続く思いであることが、彼の誇りであり、生きていく上での糧となっていることを彼女は知っているはずなのに。

こうして、シャルルでない何かや、誰かのことを考えながら時を過ごす様を、シャルルに見せつける。

残酷だな。

そう思うのだが、それでも・・彼女を愛することをやめることなどはできはしない。
それが、彼の愛し方だったから。
◆10

その時。
マリナがまた言った。
ふと、視線を外の景色から彼に移した。
茶色の瞳がシャルルの姿を捕まえた、と言ったように、彼女の視線が渡るだけで、彼は動きを止めて彼女の瞳に吸い込まれそうになる。

「シャルル。私はね、来年も・・・花が咲くように、見ていたの」
最初、彼女が何を言い出しているのか、その前後の言葉が省略されていたために、シャルルは黙ってその言葉を耳に入れるだけだった。
シャルルがあまりにも無表情で居たので、彼女が少し怒ったように茶色の髪を揺らしながら「聞いているの？」と尋ねたので、その言葉にだけ「オレを誰だと思っているんだ」と答えて、マリナの不用意な発言に抗議した。
それから・・・軽く腕を組んで、彼は出窓まで歩んだ。
彼女の言葉がきちんと届く範囲だ。
この施設で出窓がある建築様式は非常に珍しい。
その窓の先にも、散ってしまった桜の枝が、今度は翠色の葉蕾をつけている様子が見えた。
彼は窓辺に近寄って、縁の出た窓と壁の際に体を預け、ゆっくりと腰を凭せ掛けた。

彼女の言葉を聞こうとするとき、彼はいつも・・こうして彼女と少し距離を置く。
言葉だけではなく、彼女の全身から発される音にならない言の葉を・・・すべての音珠を聞き漏らすまいとするかのように。

そしてその様子を見て、彼女は言った。
シャルルが目覚めの直後で不機嫌であるとわかっていたのに、それでも言わずにはいられない。

彼は彼女の言葉を待っている。

「来年も一緒に見てくれる？
たとえ散った桜であっても。
この景色を。
私と。私と一緒に見てくれる？
・・・花は散るから次が咲く」

彼は言葉を失った。
マリナが何を言いたいのか、そこでようやく理解した。
彼は形の良い唇の端を歪めて、いつもの辛辣な表情を作って彼女を見下ろした。
目の前の彼の恋人は、寒そうに身を縮めながら、窓の外の景色を眺めているが、彼の身動ぎの音を聞き分けようとして、こちらに神経を集中させていることは明らかだった。

「マリナ、君は言葉が足りない」
シャルルは白金の髪をかき上げる。これは彼の癖のようなものであったが、彼が非常に・・・心を乱しているときにする仕草であることを、マリナは指摘しないままにしていた。

目覚めたばかりで全身を覆う気怠さが徐々に抜けて行くと同時に、同じ速度で彼の体に愛の波が満たされていく。

それまで緊縛していた彼の喉元から、溜息が漏れた。
彼が望んでいるものが、彼女の願いであると知ったから。

また、来年も。この花を一緒に愛でよう。

彼女はそう言った。

彼女の愛を確認するのは・・肌を合わせているときだけではない。
彼が大人になってなお、彼女をこうしてこよなく愛することができるのは・・・彼が愛されていると。彼が彼女を愛しているのだと。

こうして、マリナが彼に気付かせるからだ。
いつもいつも。
そう、いつでも。
終わりのない繰り返しに、彼女は飽きもせず付き合う。

何気ない一言で。
何気ない動作で。
何気ない視線の端で。
シャルルの揺らぐ愛を蕩かす。
彼女の愛はシャルルと違っている。確かに違う。
彼女の愛はシャルルに溶けていき、いつも同じだ。咲いたり散ったりしない。
散るから咲くと言った。
彼女はこれまでの恋は今に繋がるからと言った。
誰かを好きになって、誰かと別れて、そして彼らはもう一度巡り合った。
だからそれを憂えないで欲しい、と彼女が言ったので、彼は大きく息を吸った。
もう長い時間を共有するようになったのに、それでもこうして・・マリナの口にする話を聞くことが苦しくて切ない。
逢えない時間が耐えられない程に。
こうして一緒に居る時間でさえ、どうしたら安らぐのか模索し続けているシャルルの苦しみを・・・彼女はわかっているからこそ。
だからこそこうして窓辺に寄って眺めている。
春の長雨に打たれる桜を眺める。
また、来年も見たいから。
一緒に見つめていたから。
マリナはひとりで、こうして明け方の空が白んでくる時間になるまで、じっと・・・桜の散る様を眺めていた。
色を覚えるために。形を覚えるために。こうして・・・シャルルがひとり深淵で彷徨わないために、来年もここに訪れて、満開の桜がどれほど美しいのかという感銘を共有するために。

そこで、彼女が・・・桜がよく見えるこの部屋が良いと言った理由に思い当たった。
彼女にとっては、部屋の待遇よりも・・・彼に見せたい景色の方が何よりも勝るのだと、彼は知っていたのに、それを咎めてしまった。

いつも彼女はそうだった。
俗物的で享楽的かと思っていたが、彼女は酷くストイックだった。
みんなが欲しいと言うものは、いざ手にしようとするといらないと言う。
そして誰もが手をさしのべることを躊躇ったシャルルの窮地では、一緒に居たいと言って彼に憑いて来た。
彼女は自らが欲しいものだけを誰からも与えられずに手にするときだけ、本当に満足するのだと思った。
そんな彼女と一緒であるからこそ。

彼は。
彼で居られる。
彼が本当に欲しいものが何であるか、常に自らに刻み続けていくことができる。
誇りだけで生きてきた。
彼はシャルル・ドゥ・アルディであることは、どういうことなのか、考えることがある。同じ血族の中には、同じような資質を兼ね備えた者があまた居るが、それでも彼が彼で在るという唯一絶対の、誰にも模倣できないものの一つに。
愛をすることができるということがあるように思う。
彼があるからこそ。
彼は、シャルル・ドゥ・アルディで居続ける。

彼は、偽らずにいることができる。
ようやく。

長い年月を経て・・・ようやく幸せを得たのに、それを夢ではないかと確認する。
彼は夢を見ないのに。
◆11

シャルル・ドゥ・アルディは小さく笑みを漏らした。
「一緒に居るのは構わないが」
彼は続けた。
「オレは人生の中で、回数は制限されていると考えている。
食事の回数。
睡眠の割合。
・・・マリナと一緒に居ることのできる時間」
彼はそこまで言って言葉を句切った。

こうして愛を囁く回数。
彼の一生のうちに、限られた時間の中で、最もたくさん占有したいと望んでいる時間。
それなのに、彼女はこうしてひとり・・・・桜を眺めている。
彼と一緒でない時間を受容している。
それが彼にはたまらなく苦しくて切ないのに、たまらなく・・・愛おしい。

彼はそこで声にならない声を発した。
彼は底冷えする部屋の中を移動し、もっとも・・彼の温度を高める存在に近寄った。
暖を乞うかのように。

彼が時計を身につけないのには、理由がある。
あの男と区別をつける意味もあるが。
それにも増して、身につけたくないと思ったから。
彼女との時間を推し量る術を身につけることを良いことだと定めなかったからだ。

ながめせしまに

彼はもう一度囁いた。

眺めている間に、彼が起きてきますように。
眺めている間に、この華の散りゆく姿を留めておけますように。
長雨の間に・・・すべてが流されてそして新しい次の華への準備が整いますように。

彼女の祈りにも似たそんな物思いが、彼に静かに語りかける。

どうかこのまま・・・この静かな時間を継続できますように。
シャルルが安らかに眠る時間を、誰も妨げませんように。

彼女らしい考え方だった。
一緒に居る時間が何よりも彼の安らぎの時間であるのに。
彼女の愛し方は彼のそれと違っている。

だからこそ愛おしい。
だからこそ、彼女は彼の運命の人なのだと思い知る。
彼女こそが運命の人だと。

好きになって良かったと思う。
後悔はしない。
そしてもう、その手を離さないと決めたときから、彼の生は新しく塗り替えられたように、無機で単色だった景色が変化した。
この桜の散りゆく様の様に、ただ単に桜の色だけではない様々な色が・・・散って葉を伸ばす様や、枝の鳶色の掠れがある。・・・生命というものは複雑で、それ故に奥が深い。
生きていくと言うことは決して一色で言い表す事のできないものだと知った。
それは彼女がもたらした彼の憂いでもあり喜びでもある。

あの男が好きになった人を、彼も愛して良かった。
あの男が愛して、あの男を愛された人は・・素晴らしい人であることは間違いがない。
彼は間違わない。
決して。

愛し愛された喜びを知り、彼にその喜びを教える唯一の人が、今、ここに居て・・舞い散る花弁を見つめる姿を、シャルルが眺める。
それは変わらないで、これからもずっと続く。

彼女が眺めている景色が、彼の心に入り込んでくる。
彼女が眺めている物思いと希望を、彼も共感する。
溢れそうな想いが・・・今も彼女に伝えきれないもどかしさを感じる。
それでも良い。
一生かかって伝えれば良い。
伝わらなくても・・・もどかしくても・・・彼女が傍に居る。
彼に桜の花を見せたかったと残念がる彼女が傍に居る。

「・・・マリナ。また、来年もここに来よう。今度は・・そうだね、少し長逗留して。
桜の開花から眺めよう」
彼がそう言ったので、マリナが彼を振り仰いだ。
彼が未来の話をすることは珍しい。
常にいつも先のことを考えているのに、それを口にするのは直近の未来になってからでしか話をしないのに。
それが叶わなかったことを畏れる彼が、遠い未来を語ることをやめていたことに、マリナ・イケダはそれを窘めることはしなかった。
不安がることもしなかった。
彼らには、目の前にある確実な現実があり、それが未来まで続くと信じて疑わなかったから。
彼を通り抜けていった誰もが、彼との未来を語った。
でもそれは実現しなかった。
未来を語るあまり、現実の彼との日々をおろそかにした。

それなのに。
目の前の茶色い髪の茶色の瞳に日本人は・・・
彼の温もりだけを信じている。目の前の彼だけを見つめている。
未来はその次のことだと笑う。
鮮やかな晄が彼を照らし出す。
彼女が晄そのものだということに、彼女は気がついていない。

「マリナ・・・冷えるから・・・・」
そうだね、とシャルルの言葉にマリナが頷いた。
彼女がこうして外を眺めたいという限りは、希望通りそのままで居させてやりたいが、今日は冷え込んだ。そして・・・彼は彼女の温もりが欲しかった。
滅多に希望を述べない彼女が、こうして桜を眺めたいという。
そしてそのためだけに、部屋のチャージを変更した。

「シャルルが泊まるには・・・不相応かもね。でも私には最高の部屋だわ」
彼女はそう言ってくすくす笑った。
狭い貸し部屋に住まう彼女からしてみれば、ここも随分豪奢だと言いたいのだ。それに加えて彼がこのグレードの部屋に泊まることを承諾するとは思っていなかったようだった。
彼女はシャルルがもしノンと言えば、ひとりでもこの部屋に逗留したのだろう。
そういう頑固さがあった。

◆12

彼は彼だけの運命の人に言った。
白金の髪をかき上げた。
青灰色の瞳が物憂げに揺れる。
上げた髪から形の良い耳が見えた。

「ああ、マリナ。シャワーを・・・浴びてくる。君もどう？」
彼女は顔を赤くして首を振った。
「遠慮するわ」
彼が寝起きは機嫌がすこぶる悪いことは承知している。
加えて、朝のシャワーなどは、覚醒のための儀式であるから、やれソープの香りがきついだの、タオルの肌触りが良くないだのと文句を言う様に付き合わされることは必至だった。
そして、生憎と、この部屋はシャルルが指定した部屋ではない。
マリナが選んだものに対して、彼が素晴らしいと誉め称えるものは数少ない。

この間、彼女が雑誌を見ていたときに、「そんなものが気に入ったのか」と鼻で笑って、その場で高価な時計を買い付けてしまった。
彼が不機嫌になった理由もわかってはいたが、そんなつもりではなかったのだと説明をする暇を与えられず、マリナはここまでやって来てしまった。
そして。その時計を傍らにして、彼はマリナが悲鳴をあげるほど、激しく彼女を求めた。
それが何を意味しているのかわからなくはなかった。

「私はシャルルに似合うかな、と思っただけよ」
彼女はぽつりと言った。
「マリナ、君は言葉が足りない、と何度言わせるのかな」
オレは繰り返し話をしないぞ、と彼は彼女を軽く睨んだが、怒気は含まれていなかった。
そのこたえから、彼女が何を言いたかったのかは理解していたようだった。

「オレはね。マリナ。全部君にやると言っただろう。それは・・・モノだけではないということを、いい加減・・わかってくれよ」
彼は少し困ったように、横を向いて言った。

心も、体も。彼の未来も。来年の桜を一緒に見たいと言う約束も。
何もかもを彼女に与えよう。でも、彼女の何もかもが欲しい。
その叫びにも似た彼の願いが、届かないことはなかった。
彼女も同じようにして、少し困ったようにはにかんで笑った。

若い笑い声が漏れて・・・そして静かに彼に囁く。
「そうだね。・・・そうだった。来年もここの部屋に泊まるのであれば・・・シャルルはまた文句を言うのかしら」
彼女は冗談めかしてそう言ったので、シャルルは軽く鼻を鳴らして冷笑した。

「オレを誰だと思っているんだよ、マリナ。
この部屋をチャージできたのはたまたまだと・・・それとも、僥倖だと思ったのか？
・・・・そもそも、君がここに泊まりたいと言ったがために、前後左右の部屋までチャージしなければならなかったことを考えると、スイートに泊まった方が、手間がかからなかったんだぞ」

その言葉に、マリナが身を起こした。
弾かれたように立ち上がって、ぽかんとして口を半開きにしている。
「顎関節症か、君は」
辛辣な口調で、彼は言った。
「外科的治療ならいつでも施術するぞ」

「シャルル・・・ひょっとして」
彼が彼女の手首を掴んで、開いた胸元に引き寄せるのと同時に、シャルルは言った。
「ひょっとして？オレに『ひょっとして』というもしもの仮定はないよ、マリナ。
ああ、そうだね。
この薄い壁越しに、オレ達の声が漏れることがあっても、君は気にしないのかな。
・・・・オレは気にする。
セキュリティもサーヴも何もかもがシャルル・ドゥ・アルディの気にいらないこの部屋をチャージしたいという君の願いを叶えるために・・・この上下左右の部屋も借り切った」

「何をもったいないことするのよ！」
彼女は叫んだ。
先般の時計の買い付けにも彼女は文句をつけた。
望まない品を手に入れても虚しいだけだと彼女が言ったものだから。

彼は苦笑した。
蠱惑的な青灰色の瞳で、彼の恋人の顔をのぞき込んだ。
化粧気のないマリナは、ひどく幼く見える。

「望むものだから。・・・・だからいくら積んでも惜しくはない。
まるでオレを放蕩者のように言う君こそ。・・・オレに浪費させないように、せいぜい気を遣ってくれよ」

「マリナ、さ、行くぞ」
彼は彼女の肩を掴んで、バスルームに引きずり込んだ。
彼女の肌の香りを嗅がなければ、彼は覚醒しないと宣言した。
「充分に目覚めているじゃないの」
彼の力強い腕に抱かれながら、マリナが抗議した。
彼はせせら笑った。
「駄目だね。いくら叫んでも、誰にも聞こえやしない。なにせ、この観桜のために・・・君の願いを実現させるために、散った桜を愛でるために、一体どれだけ労力を払ったのか。そうだな。体で弁償してもらおうかな」
彼がそういう陳腐な言葉で彼女を赤面させたので、シャルルはすっかり可笑しくなって声を出して笑った。
マリナが悲鳴をあげたが、シャルルは臆することもなく、彼女とバスルームに消えた。

寝室では。
彼が放り投げた時計がシーツの波に埋もれながら、静かに時を刻んでいた。
後ほど、彼は少し文句を言いながらもそれを腕につけるのだろう。

彼女との時間を計測するためではない。
彼女との時間を愛でるために。
彼は時を刻むそれを身につける。
それはあの男を彷彿とさせる物質ではない。
愛を刻むための・・・彼女との時間を少しでも長く過ごすためのものであるのだとシャルルは考えるようになるまでそれほど時間はかからないだろう。

ながめせしまに。

眺めている間に。
長雨の間に。
それは静かにゆっくりと過ぎていく。
華の色は移りゆき、散ってしまうが、散ってしまうからこそ次の華が咲く。
彼と彼女の愛は、決して散りゆくものではないのだけれども。

バスルームから声があがった。
彼の好む熱め湯温に、マリナが怒って声をあげたのだ。
「もう！だから一緒に入りたくないのよ！」
その声はやがてしばらくすると、消えてなくなった。
シャワーの水温なのか・・・それとも外の雨音なのかわからない静かな水音だけが時を刻む音をかき消すかのように、呼応するかのように、部屋に響いた。

（FIN）

翌檜

【MからCへ】

初めまして。あたしの名前は…Mです。本名を書いてはいけないということだったので、イニシャルでごめんなさい。
文章を書くのも本当はあまり得意ではないので、姉に見てもらいながら書いています。
実は大分漢字を直してもらっています。

つい最近、パリの日本人学校に転校してきました。
あたしは転校が多くて、いつも短い時間しか学校に通うことが出来ません。
でも、必ずお友達を作ろうと決めています。決めて作れるものではないけれど。
だから、この手紙を読んでくれるあなたともお友達になりたいと思います。

こうしてお手紙を書くのは、日本語を忘れないための教育のイッカンだそうです。
国語の先生は「書くのが一番忘れない」ということを良く言います。
そして、この手紙を、日本語を勉強している学生さんに渡すのだそうです。
ゴガクを勉強し始める人には、あたしくらいの年齢のこどもと手紙をやりとりするのが良いのですって。
このお手紙はクラスで回収されたあと、クラスごとに配られるので、一体いつ、誰に届くのかはわかりません。
でも、一度交換が始まると定期的にお手紙を届けてもらえると聞きました。
日本語では「文通」とか「交換日記」とか言います。
あたしは書くのがあまり得意ではないし、あなたのことをまだよく知りません。
だから、あたしのことを少し書こうと思います。

あたしは絵を描くのが好きです。

いつかまんが家になりたいと思っています。
文章を書くことが得意ではないので、絵で伝えたいと思っています。
絵を描いているときやお話を考えている時が一番好きで、よくぼんやりしているので先生に怒られてしまいます。
でも、その瞬間だけは、離ればなれになってしまったお友達と一緒に遊んだ時のことをはっきり思い出すことができます。
おとうさんやおかあさんはあまり似てないわね、と言いますが似顔絵も好きです。

Bというお友達には「へったくそ」と言われてそれで大げんかをしてしまったことがありましたが、それから随分腕を上げたのよ、といつかリッパなまんが家になって見返したいと思います。
ちなみにあたしは、Bクンの方がへたくそだと思っています。

長くなりましたが自己紹介まで。
これからどうぞよろしくお願いします。
お姉ちゃんが最後にはこうやって書くものだとうるさいので、書くことにしました。

****

【CからMへ】

名前を名乗らない決まりなのでこちらもイニシャルCで統一しよう。

語学クラスの単位取得のためにこのコースを選択したので返信をする。

僕の返信の理由は３つある。多い方だ。

他はグループ単位で活動しなければならず、退屈なのでこちらのコースを選んだのがひとつめの理由。

日本人の友人が居たがもうすぐ日本に帰国するという。
その前に日本語でメッセージを書きたいと思ったのが理由の２つめ。
僕の書く文章は老人のようでいけないとその友人に言われたので、リサーチのため、というのが３つめの理由だ。

喧嘩。あいつとはないが、数年前に日本人の女に殴られたことがある。
父が日本びいきなので、いろいろなことを知っているつもりだったが、日本人があれほど我慢が出来ない性質の民族だとは正直驚いた。
僕の知っている日本人像とは随分違う。
帰国を控えた友人も日本人とフランス人のハーフだし、こちらで育ったのであまり意識していなかったが、享楽的で短絡的な傾向が強いようだ。

考察はここまでにしておこう。
また友人に怒られる。

しばらく定期的にやり取りがあるがこちらの方こそどうぞ宜しく頼む。

最後はこうして書くものだと友人がうるさいので。

***

【MからCへ】

お手紙読みました。お返事ありがとう。
最後の一文は冗談？だとしたらあなたはとっても面白い人ですね。
そしてこのお手紙は学生さんで‥あたしよりずっと大人の人なのだと思いました。

日本語、とっても上手ですね。
このブラウンブラックのインクも素敵です。
万年筆というのでしょうか。
一度も書きまちがえない文書を書けるなんてすごいです。
やり直しができないと思うとどきどきしてしまって、かならずまちがえそうです。
あたしよりずっと字もきれいです。

あたしはよく書きまちがえをするので、えんぴつでないと何回も書き直しをすることになってしまいます。
絵なら上から線を重ねれば良いのになぁ。
やっぱり絵を描く方があたしには向いています。

日本人が全員怒りっぽいわけではありません。
確かにお姉ちゃんは怒りっぽいけれど、妹はおっとりしていて、怒るタイミングを忘れているみたいです。
だからその女の人も何か理由があったのだと思います。
違っていたらごめんなさい。
でも理由がないと人は怒らないと思います。

そのお友達にメッセージを送りたいと言ってましたが、離ればなれはさびしいですね。
あたしはいつもさようならを言うときがつらいと思っていました。
でも、最近は、はじめましてを言うのがつらいです。
お別れすることが最初から決まっているはじめましてはさようならに聞こえます。
だから、お別れするときには「さようなら」ではなくて「またね！」と言うことにしています。
また会いたいねと思うからです。

Cさんはどうでしょうか。メッセージに何を書くのか決まったらこっそり教えてくださいね。

【CからMへ】

特段思うこともないので、今日の出来事を書くことにする。

今日は習字の時間があった。
異文化の体験学習だそうだ。
盆栽に習字…日本人は嫌いだが日本の文化は良いと思う。
日本独自の文化も良いが、他国の文化を上手く吸収しているところが良い。
Mは文字を書くより水墨画の方が興味がありそうだな。
あの硯に向かって心を無にする作業は何か心惹かれるものがある。
空々漠々という言葉があるけれど、無の世界は何処の世界でも共通している思想だ。
しかし東洋の方が無に関して積極的空間を作るための技術が長けていると思う。
硯にしても然り、座禅にしても然り。
いつか…いつか日本に行ってみたいと思う。
何度か行ったことはあるが、前述のような日本の様式美を味わう時間がなかった。

日本人は享楽的で短絡的だと前回書いたが、それは民族全体の気質だと断言するには、母集団の少なすぎる観察結果であり、信憑性がないことに気がついた。

よって、先ほどの考察結果は取り下げることにする。
いつか証明するけれど、今はまだ仮説に過ぎない。

僕の持つ日本人への定義が曖昧であることと同じように、友人の定義は個々人によるところが大きいので、彼を友人と呼べるかどうかはわからないが、少なくとも誕生日を祝う間柄であるので、「より親しい」と言える。比較対象がいないけれど。

それから、書き損じの話だが、何を書くのか書く前に決めてしまうことだ。
わからないのに書き始めると怠惰な文章になる。
そして間違える。

僕の書くことには書き損じはない。
それは頭の中で決まったことしか書くようにしていないから。

これで理由になっただろうか。

***

【MからCへ】

漢字がたくさんあって辞書を引きながら読みました。
Cさんはとっても物知りなのですね。
辞書を引きながらお手紙を書く側が違うでしょ、とお姉ちゃんに怒られました。
そのお姉ちゃんもわからない単語があったようで、うっかりそれを口にしてしまったので、あたしはしばらくお姉ちゃんと口を利いてもらえませんでした。

それでもよくわからなかったところもあったのですが、妹の言う「行間を読む」という言葉を実践してみようと思います。
この言葉もよくわからないのですが、言いたいことを感じることなのかな、と思います。

Cさんの言いたいことは、日本人が怒りっぽいと言ったことを謝っているということと、お友だちが大好きなのだ、ということと…あたしが書き損じをしないためにはもうちょっと注意深くいなさいということだと思いました。
違っていたら教えてください。

あたしは上手に言葉にできないので、うまく伝えられないのですが。

日本の文化は良いと思います。日本を離れてそう思います。
まんがも日本の文化です。絵で伝えるリッパな文化だと思います。
盆栽も空手も着物もみんな日本の文化です。

この間、学校で習いました。
日本の文化についてはじめて考えました。
離れているからこそ大事なものに気がつくのだそうです。
こうしてパリにいるから、日本の良さに気がつくのだということなのだと思いました。

あたしがお友だちと離れてさびしいと思うより、離れているから空想ででも絵の中でもお友だちにまた会いたいと思う気持ちは、さっきのお話と共通するわね、と先生が言ってくれました。
日本を離れて日本を良いなと思うことは、いろんなことに共通するというお話でした。

でも‥Cさんが言う「無」は…あたしの今の習ったこととちょっと違いますね。
日本を良いと言ってくれるのは自分のことを褒められているみたいでくすぐったいです。

でも…

Cさんは、ひとりになりたいということでしょうか。
Cさんは、ひとりになりたいくらいひとりなのでしょうか。

あたしはCさんのように何もかもを決めてから書くことができません。
間違えるのも間違えた文を直すことも必要だと思うからです。
絵は間違えたものを直すことができます。
でもそれは元に戻すことができません。
だから文章より絵の方が時々こわくなります。

Cさん。
元に戻せない文章を書いていると、つらくなりませんか。

妹の言う「行間を読む」の意味がよくわからないのですが…
Cさんの間違えない文章を読むと、ちくんと胸がいたいです。

お友だちは離れていても、お友だちです。お友だちでなくなることもありません。
間違えてもいいから、思ったままをその場で伝えるということもCさんならきっとできると思います。
お友だちが喜ぶようなメッセージよりCさんが喜んでメッセージを書くことも大事なのではないでしょうか。

【CからMへ】

鋭い考察をどうも。

だが僕は間違えたくないのではなく、間違えないのだ。
太陽が西から昇っても。

だから間違ったことは言えないし、僕の誇りがそうさせない。
自分を曲げて相手に歩み寄る行為こそ愚行であり、ひいては友を侮辱することになる。

独りになりたいとは常々考えているからこれは正解だ。
無になりたいのではなく無を受け入れることができたら、他人と上手くやれないことに悩んだりすることもないと思ったから。
そう、確かにMの言うとおりだ。

僕は、独りになりたいくらい独りだ。

この言葉は正しい。非常に的確だ。

Mが言うところの「行間を読む」については誤った認識だが、導かれた結論に興味が湧いたので、指摘も補足も訂正もしない。

どちらかというと君たち3人姉妹の人格形成の方が興味があるよ。
いつか是非精神分析学のサンプルとして情報を収集させてくれ。脳のサンプルでも良い。

＊＊＊

【MからCへ】

お返事ありがとう。もう返信が来ないかと思っていました。

まだ数回しかお手紙のやり取りをしていないのに、わかったような口をきいてしまったので後悔しています。
後悔って後で悔やむって言いますけれど、Cさんは間違えないから、後で悔やむことはないですか？
どうしたら後悔しないかしら？

実は最近ともだちとけんかをしてしまいました。
あたしがうっかりしていたことから招いてしまったことなのですが…

日本でお友だちになったSちゃんという子なのですが、彫刻家のおとうさんのお仕事の都合で、パリに立ち寄った際に、あたしに会いに来てくれました。
けれどもあたしは先に別のおともだちとの約束があったので、Sちゃんの知らせを受けとることが出来ませんでした。
最後にお別れをきちんと言う前に、Sちゃんとは別れてしまったので、とても気になっていたのに。
「またね」と伝えることが出来なかったおともだちです。

でも…

Sちゃんは事前に伝えてくれてあったのです。
とっても綺麗な絵はがきで。
でも、その文面はフランス語だったので、あたしは「あとでおとうさんに聞けばいいや」と思ってそのまま放っておいたのです。
Sちゃんはあたしがフランスにいるから、フランス語で書いてよこしてくれたのです。
何度も下書きしたあとが残っていました。
あたしはSちゃんをがっかりさせてしまいました。

けんかはまだ良いです。
けんかは仲直りすることができる人とするものですから。
でも…がっかりさせると一番かなしい。

いつかまた会おうね、またね、と伝えたかったのに、Sちゃんには伝えることができませんでした。
あわてて手紙を書いたのですが返事が来ませんでした。
そのときの手紙を書くときには、とても「前もって決めてから」書くことができませんでした。
相手にきちんと伝えたかったから、Cさんの言葉を思い出して、いっしょうけんめい頭の中で整理したのですが、できませんでした。

そしてCさんのことを思うとやっぱり胸がちくんと痛いのです。

Cさんは間違えることがないって書きました。
でもSちゃんの書き損じだらけの絵はがきには確かに間違ってないかんぺきな文章よりもあたしに何かを伝えてくれました。
それをあたしが見のがしさえしなければ、Sちゃんをがっかりさせることなんてなかったのです。

ごめんなさい

今日はちょっとだけ落ち込んでしまいました。

Cさんのメッセージは決まりましたか。

Cさんがひとりになりたいと言った気持ちが少しわかりました。

でもそんなCさんが友だちだというその人は、本当に仲が良いのでしょうね。

うらやましいです。

【CからMへ】

不完全な美は確かに存在する。
不完全だからこそ完全がある。

そういう表現もあるということは覚えておこう。
美術方面では使える表現だな。

Mの話からではSなる人物は、喧嘩をしたと思っていないはずだ。
会えるという期待に対しては実現しなかったから、失望してるのかもしれない。

失望と絶望は良く似た言葉だか大きく違う。

失った望みはまた取り戻すことが出来るが、絶えてしまった望みは得ることが出来ない。

手紙はエアメールで送ったか？
時差の関係で登校中でないのか？

返信も連絡も来ない理由を考えて、あらゆる可能性を崩す。
ひとつの想像だけで結論を導いてはいけない。
これがあらゆることに必要だ。とくに絶望したいときには。

M、日本人はすべからく気短ではないと君が指摘したばかりなのに。
ひとつの経験だけですべてを結論付けてはいけない。

***

【MからCへ】

お返事読みました。

読んですぐ連絡を取ってみました。
国際電話を初めてかけたから少しドキドキしました。
時差というものがあって、ここと日本では時間の開きがあるのだということもお姉ちゃんに教えてもらい、Sちゃんのいる時間にかけてみました。
彼女はいつも学校から帰ってからは家にいるので、見計らってみました。
あ、おとうさんとおかあさんには内緒でかけたのですが、その後電話料金のせいきゅう書が来て、とても怒られてしまいました。
今度からコレクトコールにしなさいって。

Cさんの言ったとおりでした。

Sちゃんは帰国してすぐにまたおかあさんと旅行に出ていたそうで、それで連絡が取れていなかったそうです。
あたしの手紙は読んだから、また会いましょうと言ってもらえました。

これもウンメイよね、ワタクシのキトウが効いたのよね、と言われたのですが、Sちゃんはこわいものが大好きなので、何か変なおまじないをかけられたのかしらとちょっと心配です。

おともだちはやっぱり良いです。

すぐに話をすることができて良かった。
ケッシンして電話をかけて良かった。

Cさん　ありがとう。

Cさんも同じようなケイケンがあるのでしょうか。
失望と絶望。難しい漢字です。
でも、言いたいことが何となくわかります。

Cさんは絶望しているの？

【CからMへ】

解決できて何より。
「喧嘩は仲直りすることができる者同士の行為」と言ったのはM、ほかならない君だ。
僕の提案ではなく君の智慧であることは明白だ。
日本人は謙遜を美徳とするけれどこういう場合には不適切だ。

絶望しているか？

M.
僕は、あらゆることに絶望しているよ。
まったく退屈な毎日を過ごしている。
死までの退屈しのぎに呼吸している。

絶望したいときにはあらゆる可能性を消去する。
そうすると絶望できる。何も残らないから。

絶望。いい響きだ。

何も無いから期待することもない。
何も無いからもっと深く沈むこともない。

無とは‥これ以上絶望しないための最後の境界線だ。

運命ってなんだろうね。
時々定義を考える。

この至極退屈な世界も運命なのだろうか。

運命とは、思い定めたことを言うと思っていた。
でもどうにもならない引力のことを言うのであれば…とてもつまらないね、人の生というものは。

このまま生きていくと、間もなく、僕はたくさんの人に囲まれてたったひとりになる。

ひとりになりたいくらいひとりだ。

たくさんの人に囲まれているのに…ひとりだ。

追伸
Cさんの「さん」はいらない。敬称略で頼む。

***

【MからCへ】

お返事ありがとう。

Cさん…Cは、寂しいの？哀しいの？そして…そのお友だちが羨ましいのね？

さびしいならそう言わないとわからない。

あたしはお姉ちゃんも妹もいるから、自分で声を出さないと聞いてもらえない。

いろんな人と‘はじめまして’と‘さようなら’を繰り返しているから、思ったことを口に出さないと、その人のことをよく知る前にお別

れをすることになる。

Cは…望みが絶えることを絶望といったけれど、絶えるんじゃないと思うのです。
絶え間なく望むことを言うと思うのです。
Cは絶望しているのではなくて、絶え間なく・・・何かを期待して希望してお願いしているのよね？

そんな気がしました。

違っていたらごめんなさい。

短い手紙でごめんなさい。

傷つけたらごめんなさい。

でもあたし達はともだちだから。

【CからMへ】

名前も知らない人間に精神分析されるとは思ってもいなかった。

寂しいと訴えることができる者は良い。
でもそうできない者もいる。
誇りがそうさせるときもあるし、訴える先がない時もある。

絶望。日本語は素晴らしいね。解釈が自由だ。
望みを絶つ、とも言えるし‥
絶えなく望むとも書くことができる。

あいにくと僕には父親しか傍に居ないので、兄弟姉妹の情愛や母親の叱咤とは無縁の生活だ。言っても詮無きことだ。
父には僕に与えられないものがあり、それを僕は良く承知している。

だから無が欲しい。
無我の境地に浸っていたい。

ともだち…定義が曖昧だ。
顔も知らない名前も知らない相手のこともよく知らないのに、それでも友だちだと言う君が一番胡散臭いよ。

お喋りが過ぎた。

今日はここまでだ。

***

【MからCへ】

お手紙を読みました。
あたしにはCが苦しいと言っているように感じます。
さびしいと言っているように感じます。

家族がたくさんなあたしからはとても想像できないことかもしれません。
でもCがなんだか泣いているような気がします。

グループ参加できなくらい他の人と話せないのは何か理由があるのかしら。
おとうさんにさびしいと言えないのは理由があるのかしら。
それでも友だちにメッセージを何にしようかと考えるCは本当に無が欲しいのかしら。

理由があるからそうしているのでしょう。
そう言ったら簡単だけれど、簡単でないからCは…なやんでいるのですよね？

いつもきれいな字を書くCがおとうさんやおかあさんと書くときは少しだけ‥文字が乱れている気がしました。

国語の先生は「字の乱れは心の乱れ」って良く言います。
あたしは字が汚いので心が乱れているのかもしれません。
でも乱れるってことは心が動いているからだと思うのです。

Cは今、この手紙を書くときには心が乱れたのでしょうか。心が動かされたのでしょうか。

自分でも何を書いているのかよくわからなくなってきました。

でも。

Cがかなしいことを書くと、あたしもかなしいです。

それではともだちになる理由にはなりませんか？

お返事まってます。

【CからMへ】

君の定義は君個人に付随するものであるから、その理由も定義も僕には当てはまらない。

それでも他に適当な称号がないのであれば、僕とMは文通友だちということで良いだろう。
手紙をやり取りするだけの言葉を交わしたこともない君を‘ともだち’と認めるには、僕の唯一の友だちを侮辱することになる。

僕の誕生日にひとりだけ来てくれた彼がずっと傍に居てくれると思っていた。
けれどもどうにもならない理由で彼は日本に帰る。
ひとりでパリに残るわけにはいかない。

…僕たちはまだそのときではない。
また会えると彼は言ったがそれは確約のない約束であり、これから先にどうなるかわからない。

Mはあのとき僕の同級生だったら、誕生日に来てくれたのかもしれないな。
遠く離れた友人のことを杞憂する君が少しばかり羨ましくなった。
そして心配されるSなる友人が羨ましくなった。
僕にはあり得ないから。

この僕が羨ましいと思うなんて。

友人の出発の日が決まった。
だから少しばかり、不安定になっているのだと思う。
予定が繰り上がったそうだ。
いよいよ、お別れの時が近い。

彼は帰国したら僕のことはすぐ忘れるだろう。
友だちとは傍に居なければ知り合いに格下げになる確率が高い称号だ。
まるで立っている位置で役割が変わる将棋の駒みたいだな。

駒…そう、僕は人生の駒のひとつに過ぎない。
自分の回りに集まってくる者は僕のことを見ていない。
僕の駒としての役割がどういうものなのかをいつも値踏みされている。

Mとの話はまったく噛み合わないのに、どういうわけか書く都度、話が長くなるな。

僕は最初に書く行数を決めている。
それが大幅に増えている。

想定外だ。

***

【MからCへ】

C

やっぱりあたしはCのともだちになりたい。

友だちが帰国してさびしいと正直に言えばいい。
言葉はたくさんでなくていいと思います。

むずかしい言葉もいらない。
Cはわかっているからあたしにこうして返信してくれるのだと思います。

だから、Cが文通友だちなら良いよと言ってくれるのであれば、あたしたちはもうともだちです。

はなれていても、ともだちは会いに来てくれる。
Sちゃんがそうだった。会えなかったけれど。
はなれているからともだちでいられることもある。

あたしよりずっと大人の人のCが悩むのは大人だからなのでしょうか。
むずかしいです。

あたしはこどもだけれど、Cのともだちになりたい。
Cの顔を知らなくてもともだちでいたい。
だってこんなにお話してくれる人が　ひとりで良いと思っているわけがない。
ちがいますか？
あたしの想像でしょうか。
絵を描くときのように…勝手にCを空想しているのでしょうか。
でもあたしは現実のことをもとにしてしか空想できません。
ないものは空想できません。

だから、Cから受けるかなしい気持ちを空想することはできても、本当はかなしくない人のことは空想できません。

Cが今　かなしくないのであれば、あたしはこんなにかなしい気持ちにならないと思います。
もしあたしがかってにかなしくなっているのであればCはもう返事を書いてくれないと思っています。

Cの誕生日には呼ばれれば必ず行きます。同級生でなくても必ず。
だってCが生まれてきた日でしょう。
Cがうれしいとあたしもうれしい。
Cがかなしいとあたしもかなしい。

それがともだちでしょ？

【CからMへ】

友人が帰国した。

見送りの時にカードを送った。
ホットラインの電話番号と…日本語で「また今度」と書いた。
友人は僕の肩を抱いて「大切にする」と言った。
さようならではなく「また今度会おう」という趣旨の言葉を書いた。
小さなカードだったから、それはいつも持ち歩けるはずだった。

Mのアイデアを拝借したわけだから、この場を借りて礼を言う。

次の誕生日からは一人で祝うことになる。

贈り物もカードもケーキもいらない。
僕が欲しいのは…彼からのおめでとう、という言葉とキスだけだった。
たくさんの友だちもいらない。友だちと名乗る者もいらない。
たったひとりでいい。
僕を理解してくれる人が欲しい。
彼はそのたったひとりだった。

僕はささやかな願いさえもう無くすことになる。
だから絶望したかった。何も無いと思いたかった。
何かあると思うと遣る瀬無くなるから。

離れていても友だちだと君は言ったが、それはまだ検証していない。
だから検証して結果が出るまではこの問題の結論は保留にしておこう。

最初の話に戻る。

たくさんの母集団がなければ傾向は分析も検証もできない。
それはすでに君が指摘したことだ。
日本人はすべからく気短かという説だ。ひとりがそうだから全員がそうだとは限らないと君は言った。
でも今度は逆だな。
多くの者がそうだからと言って、彼がそうだとは限らない。
今回の論証はたくさんの数がなくても・・・　きっと証明することが出来る。

彼と僕は友だちだ。
離れていても。
これをそれから実証する。

そう。僕は…哀しかった。ただ、それだけのことだった。

M

君はとても面白いね。

***

【MからCへ】

C.
お友だちに伝えたいことが伝わったようで良かったです。
あたしもうれしい。
Cがうれしいとあたしもうれしいです。

いつか、誕生日にはあたしも招待してください。
ケーキにお料理、楽しみです。

でも…

C

今日は最後の手紙です。

この手紙が届くときにはあたしはもうパリにいません。
おとうさんがまた転勤になりました。

クラスのともだちにはお別れを済ませたのですが、Cだけにはまだ伝えられていません。

返信が届くのを待っているのですが、先生は届いたら日本に送ってくれるそうです。

もっとCとお話ししたかったです。

どんなことをしているのか普段の生活は何をしているのか、何を勉強しているのかちっとも聞きませんでした。

決められた行数の中でCが話をしたくなったときに聞ければ良いと思っていたからです。
間違っても良いからCが何を話そうか考えながら手紙を書いてくれるときに聞ければ良いと思っていたからです。

あたしはCの話のほんの少ししかわからなかったけれど、Cはとっても優しいひとだと思いました。
そして少しだけがんこね。あたしもがんこだとお姉ちゃんに言われます。
ほら、共通点があったわね。
Cに言われなければSちゃんに電話をする勇気が出ませんでした。
ありがとう。

実はCのために絵を描きました。
お礼です。

あたしは字を書くのも上手じゃないし、きちんとお話しできるほど文章が上手でもありません。
だから絵を描くことにしました。
言いたいことが文章よりも伝わると良いと思います。

C
言葉は難しいです。でもCの伝えたいことは文字にしたら伝わったでしょう？
だから、頭の中で組み立てる文章も良いけれど、本当に伝えたい言葉は自然に出てくるものだから、それを表現すればいいと思います。
あたしには難しすぎるので、せめて絵にしてお礼をしたいです。

この手紙に同封します。

タイトルは「翌檜」です。「あすなろ」といいます。

学校に植えられていた木です。
想像ではかけないので。

プレートには花言葉が書いてありました。
「不変の友情」だそうです。
あすなろは「明日は檜になろう」という言葉が由来だそうです。
かなしい言葉ではありません。
希望をショウチョウするものだそうです。

明日はあたしはどうなっているだろう。
明日はCはどうなっているだろう。

そんな意味を込めて描きました。
時間がないのでクロッキーだけです。

いつかこの絵に色をつけに行きます。
それまで預かっていてください。

それでは。

C、またね。また会おうね。

今度はあすなろの木の下で会いましょう。

M

【CからMへ】届かなかった手紙

この手紙は届いているだろうか。
君からの手紙が到着してすぐに返信したのだが間に合わなかったかもしれない。

絵は確かに受けとった。

そのときまでこの絵は大切に我が家の美術品管理庫に入れておくことにする。

君は勘違いしているが、僕は君ときっと大して年齢が変わらない。
スキップ制度を利用しているから学年は大分違うが、僕にはそれさえももどかしく感じる。
早く卒業したかったから、単位取得のために煩わしいことはしたくなかっただけだった。
文通なら、一対一だから適当に返信すれば良いと思った。

最初に言っただろう。
君と文通する理由のひとつに「年相応の話し方のリサーチ」があると。
君は随分とそそっかしい傾向にあるようだ。

でも‥君は僕にいろいろと言ってきた。友だちになりたいと言った。
そしていつの間にか友だちだと宣言した。

数回のやり取りで僕の何がわかるのかと思っていた。

そして僕から離れていく友人に捧げる言葉を思案したあげく、君の言葉を試すことにした。
これで彼ががっかりすれば、君のともだち神話を崩してやることが出来ると思った。

君の言葉を使って友人にカードを送ったとき。
彼は「一番嬉しい言葉だ」と言った。
またな、と彼は言った。
もうこれっきりではないと約束した。

そのときに。
自分の言葉でない言葉に感涙する彼を見て …僕は彼の肩を寄せて少しだけ苦しくなった。
「いつか自分の言葉を伝えに行く」と言ったら「この言葉で充分だ」と彼は言った。
それは僕の言葉じゃなくて教えてもらった言葉だと素直に白状すると、彼はくせ髪を揺らして笑った。

「へぇ。お前にもともだちができたか。良かったな！今度そいつと一緒に遊ぼうぜ」と彼は言った。

僕は驚愕した。
彼は…自分以外の友だちが僕にできたことを喜んでいた。

君の言う「友だちがうれしいことは自分もうれしい」と彼は感じていた。
そして僕が感じる「ともだちと離れて寂しい」と思う気持ちを彼も感じていると理解した。

君の言ったとおりだった。

そして彼は「また今度」と言った。僕たちはそれで別れた。

M.
翌檜が植樹されている日本人学校はパリで一カ所しかない。
先日、そこに行ってきた。
確かに‥翌檜の木があり、君の描いたと思われる場所があった。
色を記憶した。

いつか、君が僕を訪ねて来たときのために記憶することにした。
連絡先を教えたけれど、君の連絡先は聞かなかった。
あえて聞かなかった。

M、これは検証だと言っただろう。
いつかパリに君が来て…君が僕を訪ねてきたいと思ったら、できないことではない。
ヒントは残しておいた。
君がいうところの「離れていてもともだちだ」という言葉が正しいかどうか。
君自身が検証するんだ。

だからそのときまでこの絵は預かることにする。
保管期限は無期限だ。

Charles　de Hardie

EPILOGUE　あした、ひのきになろう

「シャルルは文字を書かないの？」
「必要ないから」
「どうして？凄く綺麗な日本語書くじゃない」
マリナがそう言うとシャルルは薄く笑った。
「君の字が汚すぎるんだよ」
彼の指摘を全く無視して、彼女は言った。
「万年筆って字が綺麗に見えるのよね？いいなぁ　私もそのブラウンブラックのインクの万年筆が欲しい」
「道具では左右されないよ」
シャルルがそう言うと、マリナが頬を膨らませる。
「君に最高の画材道具を与えたら最高傑作でも描き上げられるのかい？」
そう言うとマリナが横を向いて不平を言い始めた。
彼はクスクス笑いながら、万年筆をぽい、とマリナに寄越す。
「やるよ」
「え…･･･」
彼の万年筆はハンドメイドだ。長年愛用しているそれは亡き父からの贈り物だった。
「受け取れません」
マリナがあわててシャルルに返す。
「これはあなたが持っているから、意味があるのよ」
「それなら‥同じものを作ろう」
「おそろいは嫌いだったでしょう？」
今度はマリナがくすくす笑う。
「結婚指輪以外はね」
彼は小さく言った。マリナには聞こえなかったようだ。

「オレはあまり文字を書かない。必要ないから。今まで長く文字を書いたのは‥そうだな、随分昔に手紙を書いたときだけだ」
「シャルルが手紙！」
マリナが目を丸くする。
「誰に？」
「・・・・・・」
シャルルは黙って微笑んだ。
「私も文通したことある。昔は転校する度に文通してた・・・転校ばかりだったから、途中で返事が来なくなったけど。」
「それは相手が気の毒だ。悪筆で読めなかっただろうに。」

彼は届かなかった最後の手紙を‥・絵と一緒に保管していた。
Mに見せることのなかった手紙だった。
そして、あの絵はこの館の地下に眠っている。
そして、あの絵はいつか彩色される日を待っている。

「マリナ。・・・久々に、外出しないか。」
「良いけど‥珍しいわね。どこに？」
「翌檜の木を見に。」
「あすなろ！懐かしい…！」
彼女が手を叩いて喜ぶ。
「あしたはひのきになろう…学校の校木だったわ。」
外出の支度をしてくる、と言って部屋を出て行った。
「そう、あすなろ」
出て行ったのを見計らって、彼は呟いた。

彼女の悪筆は相変わらずだ。

今度・・・彼女が彼の筆跡を見るときは結婚誓約書にサインをするときだった。
「そのときまでは自分のサインくらいは書けるようになっていてくれよ」
彼はそう言って青灰色の瞳を細めた。
彼女に同じ色の万年筆を買ってやるつもりだった。
「それから・・・このブラウンブラックのインクは特注でね。・・・オレしか使用してない」
彼はまたそう呟いて、独り言だと気がつき、ちょっと笑った。

あすなろ。
希望の木。不変の友情をあらわす。

・・・彼女は気がつくだろうか。
いや、待てば良いだけの話だ。

一一保管期限は永久だ。

彼も外出の支度をするために立ち上がった。

（FIN）

翌檜　9.5

波打つ黒髪を揺らしながら、マリナ・イケダに微笑む昔の同級生を見て、彼女は少し顔を赤らめた。
黒曜石のようなに濡れた瞳をこちらに向ける度に、彼女はどうにも落ち着かない気持ちになった。

久方ぶりの再会で、彼女は昂揚していた。
言葉が多くなり、隣に彼がいることが、擽ったい。
どうにも静かに行動することができない。

ーーーーパリは芽吹きの季節だった。
蘇りの季節だった。
柔らかな若苗色と濃い新緑の香りがマリナの頬をくすぐった。

郊外から市内に入ると、彼女は外観の美しさに見惚れながらあたりをきょろきょろして歩く。
カズヤ・クロスは苦笑した。
彼女はいつまでも変わらない。
それが少し嬉しかった。

自分は変わってしまったけれど。
あのころの自分ではなくなった。
背も伸びて声も低くなった。
大人になったとは思っていないが、切ない気持ちを知った。
そして…そして、大事な人を探しにパリまでやって来た。

茶色の髪を揺らして、マリナがカズヤの服の裾をつまんだ。
「ね、ね、ね。わたし、行きたいところがあるのだけれど」
好奇心に溢れた彼女の茶色い瞳がカズヤを見つめる。
「おまえ、海外は初めてじゃないの？」
それなら、ひとりで旅する海外は初めてね、とマリナが言い直して笑った。
「あら、そんなこと言ったかしら。ちょっと立ち寄りたいところがあって」
「……おまえ、ひょっとして、帰国子女か？」
「そうとも言うわね。だから国語が苦手なのかな…あはははは」
彼女は頭をかいた。
国語だけじゃないだろう、と彼が言うと、絵は上手だったわよ！とマリナが口答えした。

「絵を描いて人に贈ったのは、その人が初めてのことだったわ」
肩に掛けた鞄から、スケッチブックが覗いていた。

「それでどこに行きたいの？」
「パリの日本人学校。本当に短い時期しかいなかったから、場所もうろ覚えなの」
「場所ぐらい控えて来いよ」
マリナはころころ表情を変えて今度は唇を尖らせた。
大体の場所は絵に描いたわよ、と言ってマリナはメモを取り出した。
記憶に頼って書いたらしいので、いかにも記憶違いとわかるような建物名などの文字が入っていた地図を一瞥してカズヤは呆気にとられた。

「転校が多くて、慌ただしかったから、記録が残ってないのよね」
彼女の知人は非常に多い。
知己に関する連絡先はきちんと記帳して保管しているのに、自分の事になると、どうにも疎いらしかった。

実際、カズヤが彼女の転校後に連絡を取ったことがある。
しかしすでにそこには彼女は居なかった。

「連絡先が入っていない人が居るの…パリに」
新緑の風にそよがれながら、彼女は少し目を細めて言った。
懐かしい空気を思い出した、と言っていた。
彼女の秘蔵のバインダーには、ごくわずかだが、連絡先の入っていない者が居る。
名前がわからないものも居れば、連絡先がわからない者も居た。

その中で。
名前も連絡先もわからない記録があった。
ただ、イニシャルと「Paris」と書かれただけの備考欄しかない記録があった。

マリナはイニシャルを口にした。

日本人ではないだろう。
あまりなじみのないイニシャルだ。
おそらく男性だろうが、それさえよくわかっていなかった。

「それなら先にそこに行こう」
「え…良いの？」
「大体の場所は覚えているんだろう？」
マリナは心許なげに少し頷いた。
カズヤは笑った。
彼女が何を大事にしているのか、よくわかっていたから。
しかしそれを口に出して彼女を褒めそやすほどには、彼は大人になっていなかった。
しょうがないな、と言って大げさに溜息をつく。

「集中できないで、ピンぼけ写真に的外れな取材メモを取られて、やり直しにもう一度パリに連行される方が辛い」
彼女が憤慨してなにやら文句を言いながら横を向いた。
頬が染まり、茶色の大きな瞳が彼から視線をはずす。
「そんなに・・・大切なヤツなんだ」
そう、と彼女はひとつ頷いた。
「あたしにいろいろと教えてくれた。ともだちは離れていても大事にするべきだって。
だから、あたしは、それまでもそれからもたくさん転校したけれど、ともだちは忘れないようにすることにしたの」
彼女が即答したことに、彼は少しだけ胸が疼いた。

「ああ、ないね」
「統合されてしまったようだな」
「そう・・・　残念だわ」
流暢なフランス語を使い、カズヤは目指した建物の近くに住んでいるだろう、事情の詳しい人に幾人か尋ねたあと、そう言った。
中心部ではなく、郊外に統合転設してしまったらしい。
もう、跡形もなかった。
残されたのは、公共施設だった。
外国人居住者達の交流スペースや、サークル等、領事館の分館案内…
フランスの学生がボランティアで詰めており、若い人々の出入りが多かった。
カズヤは創設年月日の入ったアクリル板のプレートを眺めた。
夜になれはこれはライトアップされて、幻想的なプレートが光るように配置されている。

カズヤはそこに書かれた文字を読んで…少しだけ息を呑んだ。
彼がよく知っている名前が設計者の名前に記載されていた。
また、よく知る企業グループの名前も列挙されている。
その人物はこの建物のデザインで賞を取ったらしかった。

確かに……あいつの好みだよな。

近代的でありながら、どこか懐かしい。
…元が日本人学校であったのなら、その雰囲気をそのままに、パリの景観を損なうことは決してしない。
それなのにどこか日本の懐かしさが込められている。その建物を見上げて、カズヤは微笑んだ。

ーーーーあいつは変わらない。

何度も別れと再会を繰り返してなお、カズヤとその人物との関係は変わらない。

「……そうか、残念だわ」
彼女は本当に残念そうに言った。
「翌檜の木を見たかったのに」
「翌檜？」

「そう。翌檜。学校の木でね、その絵を描いたことが…」
そこまで言うと、彼女は瞳を大きく見開いた。
カズヤの背中越しに見える大きな巨木が、彼女の目を惹いたからだ。
「あ……」
「翌檜、だな」
カズヤは振り返ってそれを見た。
ある程度成長した木でも無造作に根を掘り起こすと枯れてしまうことが多い。
細心の注意を払ってまで移設するには費用がかかりすぎることと、滅多にない木ということでもなかったので、そのままここに植えておくことにしたらしい。
建物の設置時期よりもずっと年齢を経てきた翌檜に、マリナは駈け寄った。
「ああ…そうだわ。これだわ。大きくなってしまってわからなかった」
茶色の髪を揺らして、マリナは懐かしそうにそれを見上げた。
非常に小柄な彼女の背をとっくに越してしまっているその木に、カズヤも近寄った。

「翌檜か…あした、ひのきになろう」
「そう。翌檜よ。希望の木よ。確か…意味があって……」
「不変の友情」
そうだそうだ、とマリナが手を叩いた。
「おまえの脳領域を測定したい」
彼はあの人のような台詞を放った。
放っておいて、と彼女はまた軽くカズヤを睨んだ。

不変の友情、と聞いて、カズヤは僅かに安堵する。

それは‥彼女の大切にしている「何か」が、彼が危惧していた「友情でない感情」ではないことを確認できたから。

「追跡調査したいなら、移転先に聞くという手もあるぞ」
カズヤの言葉に、マリナはううん、と首を振った。
「この学校の人ではないの。名前もわからない。ただ、この翌檜の木の下で会おうと言ったから。……この木がまだここにあればそれで良い」
また会えるしね、と彼女は闊達に笑った。
そして茶色の瞳で、じっとその木を見つめた。
調べる手立てはいくらでもあるから、とカズヤはマリナの頭を軽く撫でた。
触れた指先から…何か言いようのない痺れにも似た感覚が彼を包む。

「行こうか」
「うん。・・・カズヤ」
なに？と黒い髪の少年が彼女を振り返った様があまりにも奇麗だったので、マリナはスケッチさせてね、と呟いた。
そして「ありがとう」と言った。
「いつかまた逢える気がしてきた」

後編

彼は彼と彼女の姿をじっと見つめていた。
冴え冴えとした青灰色の瞳で。
線の細い顔立ちに、白金の髪が絹糸のようだった。
薔薇色の薄い唇に、理知的な眉を少しだけひそめて、その様子をじっと見守っていた。

カズヤ・クロスと、非常に小柄な茶色の髪の同伴者が、翌檜の木の下でなにやら話をしている。……
彼女はスケッチブックを持っていた。
そして一度だけ彼女の背よりずっと高くなった木を見上げると、懐かしそうに微笑んでいた。

ここを設計したのは彼だ。
そして植樹の希望を伝えておいたのも、他ならない彼である。
近代的で繊細でかつ日本の伝統家屋のような趣のあるこの建物を建設するにあたって、ひとつだけ彼が出した条件だった。

…この木を伐採しないこと。

そしてその翌檜の木がよく映えて、入り口の出入りで目につくように、建物の設計そのものを変更してしまった時には、少なからず理由を尋ねられた。

彼は薄く笑っただけだった。
「…必要だから」
それだけ答えれば充分だった。彼の中の答えだった。

検証しなくてはならない人物が、いつか彼を訪れるだろう。
その時に、あのプレートを見て。
フランス語がわかれば、翌檜の木が、あの建物が建設される前から存在する木であることを知ることになる。

……ヒントは残しておいたよ、M

そして彼は時々…こうしてお忍びでこの建物にやってきた。
女性のような容貌であったから、スカートを身につければ彼が男性だとわからない。
女装の趣味があるわけではなかったが、大勢いる人々の中で、彼が煩わしい他人の詮索を極力受けない格好の隠れ蓑だった。
大勢の人混みをじっと眺めている。
その時には決まって、彼は昔自らが言った言葉を思い出す。

…ひとりになりたいくらい、ひとりだ

彼女にそう吐露したことを思い出す。
今はこうしてひとりで行動する術を覚えた。
それでも大勢の中で募らせる孤独感は消滅しなかった。

彼に明るい陽光で変わらない友情を与え続けた友が居たから。
孤独に苛まれてなお、気が遠くなりそうな退屈な生を生き抜くことができた。

…彼は偶然を信じない。
でも、偶然としか言いようがなかった。

立ち寄ったこの場所で、今回も何かがあるとは思っていなかった。
家に居るのが煩わしかったので、立ち寄った。それだけが理由だった。
芽吹きの季節になり、翌檜の木の葉も新緑で彩られている頃だろう。

ところが、そこに、彼の友が立っていた。
そして誰かと楽しそうに話をしている。
久しぶりに会ったカズヤ・クロスはもう、彼の事を忘れてしまったのだろうか。
連絡さえ寄越さなかった。
それが少し哀しかった。寂しかった。

・・・　ここしばらくのカズヤの気鬱な事情を知っていたので、カズヤがあれほど楽しそうに破顔する様子を見て、少なからず驚いた。

不思議と、心が穏やかだった。

ああ…M

彼は呟いた。

これが君の言う「ともだちが嬉しいと自分も嬉しい」ということなのだろうか。

沈むような環境に居るカズヤが微笑んでいる。
彼のような、押し殺した無表情な顔をすることなく、楽しそうに笑っている。

彼はカズヤとマリナの後を少しだけ追った。
尾行するというほどの距離でも時間でもなかったけれど、彼らはルーブルに立ち寄って少し押し問答をした後、彼女の方が公衆電話のボックスに入っていった。

鞄を広げると、スケッチブックが見えて、彼女のイニシャルが入った面が見える。

……

彼の躰がぐらりと動いた。

青灰色の瞳が少しだけ大きく見開かれた。

確認できる方法は一つだけ。
そしてその瞬間は時間が限られた一度きりのチャンスしかない。

彼は行動を起こした。

帰りの車の中で、彼はパスポートと財布を取り出した。
カズヤは気がつかなかったようだった。
それほど離れていたわけでもないのだが…
彼は苦笑した。

これらが見つからないとなれば、彼らはきっと尋ねてくるはずだった。
ルーブルでの押し問答の内容はあまり聞こえなかったが、解決出来ない何かがあるに違いない。

…あまり現金は入っていないようだ。
しかしそちらに用事があるのではなく……
彼女のパスポートを取り出した。

細く長い指でそれをつまんだ。

そして名前とサインを確認する。

ーーーー彼は面白そうに小さく笑いを漏らした。

ああ、ようやく見つけた。

彼は微笑んだ。

筆跡と名前と年齢から間違いない。

彼はそれから2本電話をかけた。

彼は彼女の身元照会の電話をかけて、急ぎアルディ邸に報告を入れるように指示をした。彼女の渡航歴はきっと、彼の予想したとおりの内容だろう。

次に領事館に電話をして、パスポートの再発行について足止めするように伝える。

「ああ、このオレの‥シャルル・ドゥ・アルディの客人だ。長らく、長らく待って居た客だから、そのまま帰さないように」
コードネームはどうしようかと、相手が答える。
非常時には、情報漏洩を畏れてパスワードを使うことになっていた。
対象の人物をコードで呼ぶのが習わしだ。

「……そうだね、それでは『あすなろ』と」

彼はそう言って、薄い唇を持ち上げて微笑んだ。
花のような美しい微笑みだった。

そして3本目の電話をかけた。
アルディ家の保管庫に眠る、大切に保存された絵をいつでも取り出せるように、最奥部から移動させておくようにと命じた。

でもね、M。
彼はまた微笑んだ。

オレが見つけてしまったら、君の約束は叶わない。
また会おうといったのに君から来ないなら意味がない。

ヒントはたくさん残しておいたはずだよ、M

君がMとしてオレに会いに来る時まで、これは秘密にしておこう。

……そして、不変の友情を君が検証するんだ。

オレはその結果を引き替えに、絵を返そう。

君が彩色するのはその時だ、M。

「それにしても…カズヤ、厄介な相手を気に入ってるんだな」
彼はパスポートの写真をひらひらさせて、目の前に持ち上げながら言った。
茶色の瞳の茶色の髪の少女がこちらを見て笑っていた。

ともだちがうれしいと自分もうれしい
ともだちがかなしいと自分もかなしい

それなら。

ともだちが好きな者は自分も好きになれるだろうか

ここから得られる情報はすべて得た。
シャルル・ドゥ・アルディは白金の髪をかき上げて、興味が無くなってしまったパスポートを降ろした。
でも、次にはそれを大事にしまった。

ーーーまだ時間がある。彼らがやって来るまでに。

戻りたくないと思っていたアルディ邸に、急いで戻らねば、と思った。

(FIN)

翌檜　阿天

あっと声を上げたときには、もう遅かった。
肩から降ろした大きな鞄が、派手な音を立てて床に落ちた。
よく使い込まれた鞄は口が開いていたので、中身の画材道具一式が、アルディ邸内の床の上を、硬質な音を伴って、自由気ままに躍るように散らばった。
「ああ・・・・」
ちょうど、廊下の角を曲がりきるところだった。
この屋敷は広大だ。
しかも、私邸部分のうち、これほどまでに最奥にはほとんど来訪者はいない。
「自転車で移動したいくらいだわ。誰にもぶつからないから交通事故もないわね」
「そもも、私有地なのだから交通違反もなにもないだろう」
シャルル・ドゥ・アルディが皮肉げに微笑んでそう答えたことがあった。
「だから、ゆっくり邸内を散歩して、早く位置を覚えてくれ」
シャルルはそう言った。
・・・間もなく、永遠に、この屋敷の住人になるのだから。
彼はその言葉は言わなかった。
そんなに広い屋敷のどこになにがあるかなどは、覚えていられない。
常日頃、必要なものは最小限で良いと思っているマリナには、到底達成できそうもない宿題を課せられて、彼女は途方に暮れていた。
足を踏み入れる必要のない場所まで記憶していくことになると、相当な時間を費やさなければならない。
しかし、今、彼女には有り余る時間があった。

まさか、このアルディ邸で誰かにぶつかるなどとは思ってもみなかったマリナ・イケダは顔を上げて、相手に謝罪した。
床に転がる大切な画材道具も気になったが、とにかく、思わぬ不注意で相手にケガをさせていやしないか気になった。
「大丈夫ですか」
マリナより早く、聞き覚えのある深く魅力的でそれでいて艶美な声が聞こえてきた。
マリナはえっと言ってその人物の顔を見た。
艶やかな黒い髪と、野性的な双眸の持ち主は、彼女に微笑んだ。
「ケガはない？マドモアゼル？」
マリナは唇を少し開いた。
驚きのあまり、茶色の目を見開いたまま、その人物を食い入るように見つめる。
彼女は人の顔と名前を記憶することは得意だった。
建物の位置を把握することは苦手だったが。

「・・・カミーユ！」
カミーユ・レールミットは、おやと、男性的な眉を持ち上げて、彼女を見た。
日本語で話さなければならない規則のこの館に、日本語を話す者がいても不思議ではない。
しかし、目の前の小柄な少女というべきか、女性というべきか、判断がつきかねる、非常に幼い印象の彼女には見覚えがあった。
でも名前が思い出せないと。
「・・・マリアン？」
「違う！・・・マリナ！マリナ！マリナ・イケダ！」
少しだけがっかりしたように彼女が顔を曇らせて、そして自分の名前を叫んだものだから、カミーユはその名前を聞いて、それから破顔した。
彼の頭の中で、次々と、映像と音声が消えては浮かぶ。
彼は画家で彫刻家だったから、すべての記憶は映像となって記憶する性質があった。
昔の・・・まだ少年だった彼とその傍らに居た彼女との奇妙な共同生活が、一瞬にして蘇った。
あの、フランスの華の傍らにいた小さな娘の、その後の姿が今、目の前にあった。
「ああ・・・」
彼は微笑んだ。そこでようやく、彼女の名前を口にした。
「久しぶり。・・・マリナ」

彼女に誘われて、話を少しすることにした。
落ちて散らばった画材道具を拾ってくれた御礼だと言っていた。
「ここのケーキは最高なのよ」
彼女は嬉しそうに微笑んだ。
話し相手が欲しかったのだろうか。
カミーユは腕時計をちらりと見た。
芸術家で在る彼は、腕の筋力が均等にならないことを懸念して普段、時計は身につけない。
今日は特別に時間を気にしなければならない日だったので、滅多にしない時計をしていた。
予定の時間までにはまだ大分ある。

「カミーユは・・今日はどうしてここに居るの？」
マリナが着席をして、温かいティーポットから香葉が豊潤な香りを湯気とともに乗せて行く様を見つめながら、話を切り出した。
「随分と成長したな」
彼は微笑んだ。
こうして着席をして話をすることを待つことができるようになった。
昔の、闥達で、シャルルのことだけを案じ、自らカミーユのモデルを裸体でつとめる、その代わりシャルルを助けて欲しい、と言った彼女の姿はもう何処にもなかった。
成人女性にしては非常に小柄な方だ。
かつ、東洋人であるからその骨格から、一般的に彼らが若く見えるのは当然ではあったが、彼女は酷く幼く見えた。
これが、彼の・・・
「カミーユは今日はどうしてここに？」
「仕事」
「仕事？」
「そう。アルディ家貯蔵の絵画と彫刻の修復の依頼があってね。・・・今日は状態を見てきただけ」
「ああ、そうなの・・・あれから、随分経過したのに、シャルルはあなたと連絡を・・・」
彼女は嬉しそうに微笑んだ。
友人が少ない彼は、特に「青春の輝き」で過ごした時代の者には特別に心を寄せる傾向にあった。
彼もその数少ない彼の「友人」であるのかと思うと、マリナは嬉しくなってつい微笑んでしまった。
彼はマリナと共に居なかった時間を、ひとり孤独に過ごしてきたのではなかった。
そう思うだけで彼女の心の内が温かくなる。

カミーユは煎れたてのカップを手に取り、優雅に琥珀色の茶を唇につけた。
ほどよい熱さだ。
豪華な薔薇の紋様の入った薄い陶器に盛られた数種類のケーキは、彼が知る限り、どこの店にもないものだった。
だからそれはマリナのためだけに作成されたものであり、朝、慣例に従って、当日の食事を決める権限を持つ当主が指示をして作らせたものであるということがわかって、カミーユは漆黒の目を細めた。きっと皿から、カップの色から、すべての調和が取れるようにひとつひとつ、神経質なシャルルのことだから、細かく指示をして行くに違いない。
確かに若い女性が好む大きさと色合いと・・季節の果実をふんだんに盛ったその菓子ひとつをとっても、ここの当主が、この小さな女性に細やかな気を配っていることがわかる。
これは昔と変わっていなかった。
シャルルとマリナと、共に過ごした時間の記憶が急速に回復されていく。
この家の当主が、今も彫刻と絵画の分野で活躍するカミーユにコンタクトを取ってきたのは、つい最近の話であることは言わなかった。
「マリナは今も絵を続けて居るんだね」
彼はカップを静かに置きながら、目の前の女性に微笑んだ。
彼女は確か・・・そう、まんが家だとか言っていた。
シャルルのスケッチを自分もしたい、と言っていた。
先ほど散らばった画材道具が拾われて、ようやく元の位置に納められた鞄をちらりと、カミーユは見た。
「うん・・・」
マリナが歯切れの悪い声で答えたので、彼はおやおや、と肩をすくめた。
この手の話は、彼はもう慣れっこだ。
マリナに限らず、誰もが一度は通る路であり、そしてそれをくぐり抜けられない者は、この光の路から去ることになる。
先ほど散らばった道具の中に、真っ白なスケッチブックがあった。
まだ何も描いていないような、そんな新品同様の品だった。
・・・それなのに、彼女は鞄を持ち歩き、すでにそれは大分使い込まれている。
答えは一つしかなかった。

・・・・彼女は絵が描けないのだ。
「‥‥マリナ、シャルルの絵は描かないの？オレに見せてくれよ」
思いついたように、カミーユは言った。
触れないで済ませることもできたのだが、彼女の茶色の瞳がゆっくり瞬く様を見ていると、どうにも放っておけなくなる。
何かに憂えているけれど、きっと、それはシャルルに言えないのだろう。
ひょっとして、倦ねる内容が、彼に関係していることなのかもしれない。
そう、察した。
そこで彼はひとつ、苦笑した。
この小さな日本人と、同じ魂を自分が持って居ることに。
共鳴するのだ。その歎きに。
同じようにものを描く人間だからこそわかる、一種の直感とでも言うべき何かを彼は信じることにしていた。
かつて「くだらないね」と鼻を鳴らして冷笑した、堕天使のような美しさを持つ彼を想いだしていた。
「意地悪ね、カミーユ」
そこまで言われて、マリナがちょっと笑った。
彼女はこんなに穏やかな笑いをする人だったのだろうか。
ああ、オレ達は・・・随分と時間が経過したのだな、とカミーユはあらためて思った。
喜怒哀楽が激しく、常にシャルルの傍にいた彼女は、今も彼の傍らにいるのだろう。
いや・・・最近になって仲を深めたのだろう。
これまで浮き名を流してきたシャルルが、ここのところすっぱりと話を聞かなくなった。
それはこの東洋人女性の影響なのか、と思うと、なぜ、今日、彼がここに呼ばれたのか・・・
カミーユは察しをつけた。

想像するしかないが、きっと、彼は・・・・

「描こうと思うと・・・描けないの」
マリナが突然口を開いた。
近況報告をひとしきりした後のような、突然の話だったが、カミーユは動揺せずに、その話をじっと聞いた。
適当な相づちも肯きも必要がない。
彼女は茶色の眉をひそめて、視線を落とした。
「彼を描けない」
「・・・理由はわかっているんだろう？」
カミーユはマリナにそっと囁きかけた。
この短い時間で彼女のすべてがわかるとは思えなかったけれど、アルディ邸に彼女が居ること、シャルルがかなり心を配っていること・・・そして・・・彼がマリナとシャルルのことについて知っていることはもう少しだけ多かった。
「今まで、想像のシャルルしか描いてこなかった。でも、これからは彼を・・本物の彼を描こうと思った。何度も筆をとったけれど、本当の彼を描ききれるか・・・わからない」
かつて、彼を描いたことのあるカミーユには、自分の事を言われているような気がした。
彼の孤独な美しさを描ききることができるのは、彼の内面を知る者だけだ、とシャルル本人に指摘されて愕然としたことがあった。

「マリナ、君は、それでもシャルルを描きたいと思うんだね」
カミーユはそう言うと、マリナは勿論よ、と言った。
「カミーユには遠く及ばないけれど、私には私の描きたいシャルルが居る」
「謙遜は日本人の特権だけれど、そこで使うべきではないよ、マリナ。・・・・描きたいと思う欲求そのものが芸術を高める何よりの糧であり、それがなければ芸術は成立しない」

「ーーー少し、昔話をしようか」
カミーユは静かに言った。
傲慢で古典的美に執着した、若かった彼はもうそこに居なかった。
「オレとシャルルが、部屋に籠もってデッサンをした時のこと、覚えている？」
勿論よ、と彼女は言った。彼女も懐かしそうに・・・微笑んだ。
そして少し遠くを見た。
目が弱いのは変わらないらしい、潤んだ眼差しをカミーユ越しに遠くに向けた。
「君も素描しようとして、スケッチブックを使い切ってしまったオレを怒鳴ったんだよね」と言うと、マリナは少し顔を赤くした。
「それで、ああ、この子はオレと同じ絵を描く人間なんだ、と思った」
マリナはどう答えて良いのかわからず、ただ話を聞くだけだった。
彼が何を話したいのかが、よくわからなかったから。
「次に、描きたいという欲求がある人間が、常日頃彼と共に過ごすことになったとき、描けなくなるかもしれないな、とも思った」

「どういうこと？」
それでもマリナは心当たりがあるようだった。
ここまで言うと、彼は自分の想像だから、違っていたら遠慮無く言ってくれ、と前置きした。
マリナは頷いた。
彼の話に耳を傾けようとする。
「彼は・・描きたいときに描かせてくれるわけではないだろう？
　しかも、君とシャルルは随分と長い間、会って居なかったのかな？
シャルルがここまで気を遣うのに、君はここの館で客人待遇だから。
・・・そうなると、描きたいという欲求を持つ人間がやることはひとつ。
・・・想像で描き始める」
かたん、とカップを置く音がした。
あたり、だな。
カミーユは目を細めた。
「だから・・・だから、本当に彼のデッサンをする段階になった時に、君は・・きっと躊躇ったんだろう。それが本当の彼なのかどうか。あまりにも夢想の世界で・・・描き続けてしまったから」
「私は・・・シャルルを失望させたくない。私は、シャルルの今までをずっとずっと想像　して描いてきた。
再会した彼は・・・想像で描いたシャルルよりずっといろんな事を経験していた・・・」
ああ、なるほどね。
カミーユは頬を緩めた。
彼女は原因もわかっている。どうすれば良いのかわからないだけだ。
「これまで」のシャルルを夢想して描いてきたから。
「これから」のシャルルを・・・描いて、彼をがっかりさせたくないのだ。
内面を知らぬ者は描くな、と彼がきつく言ったことを、彼女はまだ覚えているのだ。
そのくらい・・・彼と彼女の間に時間が経過していたのだと知った。
しかし、彼女の悩んでいる内容に、カミーユは少なからず驚いていた。
あのフランスの華に、稚拙な画を見せることを臆しているのではない。

彼女は・・・彼の内なるものについて触れてもいいのかどうか、描いても良いのかどうか、悩んでいるようだった。

ああ、そうか。

カミーユはマリナの様子を見て、笑みを浮かべた。
彼女は、自らの気持ちをシャルルに伝えることを臆している。
彼女から見えるシャルルを表現することを憂えている。
技術のことを言っているのではない。
理解したつもりでそうでない彼を描いてしまって、かつてのカミーユのように彼に侮蔑の表情を投げかけられることを畏れているのではない。
彼をがっかりさせると思っているわけではない。

・・・・ただ、彼の奥深くまで入り込んだ彼女だけが見える、彼のそのままの姿を形にすることを憂えているのだ・・・

彼女は空になったカップを弄んでいた。
指先には、少しだけラッカーの色が残っていた。

「・・・話には続きがあってね、マリナ。…その時、オレ達は少しだけだけれども、話をしたんだよ。
ほとんど、オレがデッサンに夢中になっていたから、会話はなかったけれども」
彼はゆっくりと言った。
長らく使っていない日本語が流暢に出てくる。
その時のことが鮮やかに思い出されるからだ。

『あの日本人は本当に、シャルルの恋人なのか？事実を言ってくれよ。
　君の好みを批判するつもりはないけれど』
シャルルは黙っていた。
『この苦境で一緒に行動するには、役不足じゃないのか？・・・彼女は置いて行け』
その時だった。彼は短く回答した。
『彼女だからこそ共に居るんだ』
その強い口調は、これまでの物憂げで気怠げな彼の様子から一変したものだったので、カミーユは少し驚いて、デッサン中の手をとめて顔を上げた。
『オレの何かって？・・・』
シャルルは少し考えた。それを口に出すかどうか少し考えていたようだった。
彼が思考する時間はほんの僅かな時間であるはずなのに、彼はその言葉を言うかどうか、推し量っていたようだった。
『彼女はオレの翌檜だ』
『翌檜・・・』
彼は植物図鑑で見た、その植物の映像を思い返していた。
この辺りではあまり見ない樹木のはずだった。
『どういう意味だ？』
『言葉のままだ。・・・彼女だから連れてきた』
シャルルはそれっきり、答えなかった。

「ああ、ようやく思い出したよ。・・・彼のその言葉を」
カミーユが彼女に向かって言った。
「そして、マリナはどうも『翌檜』という言葉に聞き覚えがあるようだけれど」
マリナの顔を見て、カミーユは頬を緩めた。
マリナが強張った顔をしていたので、女性は笑顔が一番だよ、とカミーユは小さく言った。

彼女のことを話す時の、シャルルの実に美しい顔を思い出していた。
誇り高く、カミーユには常に冷笑しか浮かべなかったのに、マリナにだけは彼は違っていた。
ファム・ファタルという言葉がある。
彼女はシャルルにとって、きっと、ファム・ファタルなのだろう。
運命の人であり、自分で定めた唯一の人として、シャルルはマリナを見つけた。

選んだのではない。
彼女しか居なかったのだ。
あの、逃避行の日々で、彼女だけが彼の暁であり太陽であり温もりだった。
あの彫像を見たときに確信した。

「・・・カミーユは私を驚かせてばかりいるわ」
マリナが静かに言った。
そう？とおかしそうに言い返すと、マリナは笑った。
泣きそうな笑顔だった。
「そう。突然現れて、突然、私の悩みを聞き出してしまった」
「それなら突然ついでに、もうひとつふたつ君を驚かせてやろう」
カミーユは黒い瞳をマリナから、手元にある彼の革製の鞄に目を遣って、大きな手の平を伸ばして中身を取り出した。
硬い革でできた鞄の中身は、マリナと同じ、仕事用の道具が入っている。
今日は作業の内容がわからなかったので、作品を傷つけないための手袋と、汚れ防止の特殊フィルムと、それから・・・カミーユは預かってきた品を出した。
「せっかく、SSSランクの美術評論家が居るのだから。・・・これを見てもらおうかな」
彼は一枚の絵画を取りだした。
そして、テーブルの上に革鞄を置き、その上を軽く乾燥した布で拭いて、彼は手袋をはめた。
価値がどうであれ、アルディ家に依頼された大切な修復絵画だ。少しでも損なってしまえば、カミーユの技量が疑われる。
彼は大事そうにその絵を広げた。
「・・・アルディ家の地下保管庫で眠っていた作品だ。どう？良いだろう？」

マリナががたん、と大きな音を立てて、立ち上がった。

彼は微笑んだ。
「タイトルは日本語だね。『あすなろ』・・・いい絵だ。これを見て、オレは久々に、何かを描きたいな、と思ったよ。描きたいものを描きたいと思った。仕事や依頼で描くのではなく・・・心の赴くままに、久しく描いてないことを思いだした」
芸術的価値はまったくない。
無名の作品だ。
・・・タッチも幼く、これはこどもが描いたと思われる。
それなのに、アルディ家が、別の館に移設せず、長らく奥深くに保管していたこの絵には、手放したくないという当主の意向を感じずにはいられない。

その絵は、安物の画用紙に書かれていた。
良い保存状態のはずだったのに、使用している画材が良くなかった。
だいぶ痛んでいるし、それに、この作品は彩色されていないので、未完の作だった。

「カミーユ・・・！」
「マリナ。当主の依頼は『修復するように』だった。
　誰かが間もなく、彩色することを想定していたのかな？
・・・でもマリナはこれを『完成させるように』と変更することができる。
さて、どうしようか」
マリナがしばし絶句していた。
「C」と、アルファベットを口にした。
大きく目を見開き、唇が震えていた。
そして・・・そして、見る間に、大きな瞳から、大粒の涙をこぼし始めた。
彼女は息をすることも忘れて、ただ、静かに涙を落とし続けた。

ああ、今日はあすなろという単語続きだね。
非常に発音しづらいよ。

カミーユは笑った。
そしてもう一度、君には笑顔が一番だよ、とマリナに声をかける。

「・・・涙で大事な作品を濡らしたら、オレが怒られるからね。
　・・・これはしまっておこう。
　・・・修復が済んで、彩色ににじみが出ない程度に下地を補強したら・・・
　もう一度これを渡そう。それまではお預けだ」
いいね、と言ったカミーユに、マリナは、うんと頷いた。
同時に、また大きな雫がテーブルの上に落ちた。

「そろそろ時間だ」
彼は慣れない手つきで時計を見た。
まだ泣いたままのマリナに近づいて、茶色の頭を撫でる。
同じ、同じ希求を持つ人物に、彼は微笑んだ。

大丈夫。
また、きっと君はきっと描く。
それはシャルルが望んでいることでもあるんだよ。

そう、囁いた。

「泣いたままのレディを置いていくことはできないから・・・涙を拭いてくれないかな」
片付けながら、カミーユは言った。
そして、頷いたマリナに彼は、昔シャルルが言った言葉を繰り返した。
覚えていると良いけれど、と言った。

「愛のためにその身を捧げ、傷つきながら畏れを幸せに感じ、未来を信じることの出来る精神を表現した。たぶん、愛は、そのために自分の身にどれだけの犠牲を受け入れられるか、そしてそれをどれほど喜べるかで、計ることが出来ると思うから」

カミーユは、このシャルルの言葉の高邁さに感嘆した。
そしてそれを心に刻んで、今まで生きてきた。
あの、高潔なシャルル・ドゥ・アルディに恥じないように。
彼の愛に対する・・・彼だけの「あすなろ」への想いを感じ、シャルルがなぜ、彼女を手放すことが出来ないのか、そのときに少しだけ理解した。

それから幾年も経過して。
彼が浮き名を流し、カミーユが知るシャルルと少し違う姿を聞くと、彼は少し哀しかった。
年月が人を・・あのシャルル・ドゥ・アルディさえも変化させてしまったのだと思った。

少しだけ、彼は澱んでしまっていた。
そんなときに、彼が突然、アルディ家の保管品の修復を依頼してきた。
・・・修復士ではない、カミーユを指名した。
最初は断ろうと思ったが、シャルルから直々にメッセージが届いた。
彼は、滅多に筆跡を見せることはない。
書く必要がないからだ。
それなのに、カミーユにどうしても修復してもらいたいものがあるから、アルディ家に来て欲しいという招きの言葉が上品なブラウンブラックのインクで書かれてあった。
署名も確かに、彼のものらしかった。

彼は変わっていなかったのだ。
何年も・・いや、あの保存開始年月日を見ると、もっとずっと前から、彼女を待って居たのだと思うと・・・カミーユは胸が熱くなった。
大人になり、さらにいろいろなことを経験して、それでもなお変わらないシャルルの心根がどうにも切なくなった。
だから、価値のない絵画でも修復することを承諾した。

そしてそれを、仕事場に持ち帰る途中で・・・・
彼女に遭遇した。

彼は自分の持つ革鞄に気を取られていて、マリナがやって来ることに気がつかなかった。
最初再会しても、彼女の名前を覚えていないくらい、彼は記憶の彼方に押しやってしまっていたのに。
でも、すぐに・・・絵画の「M」なのだとわかった。
そしてこの館の主がなぜ、これほどまでに時間に余裕をもって来邸を指定したのかも、わかった。

彼女の憂いは、シャルルでは癒せないから。
そして、彼女に描いて欲しいから。
・・・このあすなろの絵が未完のまま保管される日々に終わりが告げられそうだということは、シャルルの「想定外」なのだろうか。
それとも・・・。

部屋を出て行くときに、カミーユにマリナは声をかけた。
笑顔で。
「カミーユ。・・・ありがとう。・・・またね」
「ああ、マリナ。またな」
彼は鞄を持っていない方の手を挙げて、涙を拭いて満面の笑顔で見送るマリナに手を振った。
何に、ありがとう、と言ったのかは尋ねなかった。
カミーユは漆黒の髪を揺らして、少しだけ微笑んだ。
気鬱な気持ちでこの館を訪れたのに。
今は、この硬質の廊下を歩く自分の踵の音さえ、どうにも心地好い。

「時計もたまには良いな。・・・時間に余裕があるということも」
彼は呟いた。
この修復の見積結果を聞くために、繁忙な時間を割いてカミーユと面会する機会を設けた、フランスの華と再会する時間が差し迫っていた。
今日は忙しいな・・・
彼は微笑みながらひとり言葉を出した。

EPILOGUE

シャルル・ドゥ・アルディの筆跡を何回か見たことがある。
若い頃に、彼女にしたためた手紙。
何度もくり返しは読むことのできないくらい切ない想いが溢れてくるから、それは読んだきりになってしまった。
そして、再会した後に本当に短いメッセージ程度のものを数回。
上品なブラウンブラックで書かれたその流麗な文字を見ると、文字一つとっても、彼は何もかもが特別なのだと思う。

彼が何を思いながら、マリナにその直筆でメッセージを書いていたのかを思うと、彼女は苦しくて切なくてまたひとつ、涙を落とした。
でもそれは哀しみの涙ではない。
・・・嬉しい、と思う涙だった。

マリナは涙を拭いてペンを取った。
久しく書いていなかった手紙を書くことにした。
彼と同じ、ブラウンブラックのインクの万年筆で。
ひと文字ひと文字、丁寧に書いた。

間違っても良い。
思ったことを伝えられれば良い。

かつての自分がそう、自分に囁いた。

・・・・・あの彩色が終わったら、今度こそ、彼にデッサンを依頼しよう。
彼はきっと・・・青灰色の瞳を気怠げに瞬かせて、そして唇を少し曲げて言うに違いない。
「オレのことを描くのなら。オレの内面を描いてくれよ。想像でない、本当のオレをね。君にできるかな？」
挑戦的に微笑む彼に、マリナはきっと、また少しだけ頬を膨らませて意地悪ね、と言い返すのだろうと思った。

【MからCへ】

Mです。
久しぶりに手紙を書きます。
お元気ですか。
私は元気です。

今、私は愛する人と幸せな時間を過ごしています。

C.
約束は覚えていますか。

今度・・・今度、あの絵に彩色をさせてもらえないかしら。
そしてその絵が仕上がったら、Cの絵を描かせて欲しい。

だから、あの　あすなろの木の下で、会いませんか

（FIN）

錦上添花　**addition and subtraction**

錦上添花　addition and subtraction

錦上添花：錦の上。美しいものの上。

美しいものの上に、さらに美しいものを添える。
立派なものに、さらに立派なものを加える。

addition and subtraction　加除式

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

外出して戻ってきたばかりのシャルル・ドゥ・アルディは、執務室に入ると、重厚な一枚板で創られた執務机の上に乗っているクリーム色のメモ用紙を、細く長い指で持ち上げた。

アルディ家のシェフから、ストックしてあったカカオを切らしてしまったという報告だった。
シャルル・ドゥ・アルディが指定したショコラを作ることが出来ないと言う。

シャルルは館の維持管理やその他もろもろのことはすべて別の者に任せていた。
だから、そういう些細な・・・アルディ家の食卓に上る材料の確保について、当主の判断を仰ぐというようなことはこれまで皆無だった。

彼の家は不在がちな当主のために、役割分担が完全に細分化されている。
シャルルは前日にメニューを指定しておけば、翌日には言ったとおりの食事ができるという生活をずっと続けて居た。

これは自分で何もかもを細かく指示しなければ気が済まない、かつての自分と比較して、大きな変化だと思う。
・・それはこの館に住まう、彼の一番大事な人が居るからなのだと気がついていたが、かれは気がつかないフリをした。

自分で指定出来ない時は、彼の従妹が事前にいくつか候補を用意しており、それをシャルルは選択するか一部を変更するだけで良かった。
彼の好みは、長年の彼に仕えている彼女はよく承知していた。

彼と良く似た面立ちの従妹には、彼は全幅の信頼を置いている。
その彼女には、シャルルと同じ様に「うっかり」とか「失念」とかいうような言葉は存在しないはずだった。

滅多にない報告が、彼の従妹を通り越してシャルルに報告されたので、彼は遠山の眉を顰めた。

マリナ・イケダと再会を果たした際に彼女が口にしたショコラは、今でもアルディ家で日持ちのする菓子として常備されている。
日本のホテルが開発した遊び心のあるショコラは、薔薇の形をしており、花弁の開き加減で中身のペースト状の果実の種類が違っている。
彼はその製法と販売権に関して権利を買い取って、アルディ家の菓子として独占することにした。
彼女が好んで食する限り、永遠にこの邸の中で創られる。

彼はメモ用紙を一瞥すると、誰が聞いているわけでもないのに大きく溜め息をついた。

腕を持ち上げて、彼を拘束していたランゲ＆ゾーネの腕時計を素っ気なくはずして、執務机の上に投げ出した。
そして首を左右に軽く振った。
白金の細い髪が揺れて、彼の頬に降りかかった。

大した用事ではなかったが、ここのところ、仕事のスケジュールがタイトで体を休めることがあまりできずにいたので、シャルルは疲れていた。
そのメモを見て、どうして彼に直接口頭で報告しないで、結論だけを書いたメモが置かれていたのか、大体察しがついた。

彼は執務机に着座することなく、手元に内線電話を引き寄せてスピーカーモードにして、内線ボタンを押した。

・・・・応答がない。

シャルルは小さく舌打ちした。

久方ぶりに逢う彼の恋人は、この館のどこかに居るはずであったのに、居室には居なかった。
帰宅時間は知らせてあったのに。

もう、食事も終えて部屋に居る時間である。
いつものシャルルなら、彼女が何処で何をしているのか把握しているのに。
今日は彼の考えていたスケジュールではない行動に出ていたらしい。
まったく、彼女らしい。

マリナ・イケダは予測不能だった。
彼の考えていないような言動を繰り返す彼女を、こよなく愛しているのに。
時々・・・どうしようもなく不安になる。

外出したという連絡は受けていないので、彼女はこの邸内に居るはずなのに。
逢いたくても、彼女は居ない。

数日間、激務で連絡もできずにいた。
いや、できたはずなのに、彼の思考が止まることを畏れて彼は連絡を絶った。

彼女は怒っているだろうか。

シャルルは一度深く思考の波間に沈むと、その問題が解決するか、よほどのことがない限り戻ってこない。
館に戻ってこない、という意味もあるが。
彼は彼独自の世界に浸り、何日も睡眠を放棄し、そして一心不乱にひとつのことを考え続ける。

・・・合間に、マリナの声を聞きたいと思うどころか、彼女の存在を忘れてしまう。
いや、自分という存在も忘れて・・・ただ深念に浸る。

思い出さないようにしていると言った方が正解だ。
忘れているわけではない。
彼の頭脳はそれほど単純ではない。

けれども。

彼女は何にも勝る。
だから、彼が「そうしなくてはいけない思考」に泳いでいるときに、マリナのことを考えると、とたんに、泳ぎを忘れた緋鯉のように溺れてしまう。

そう、彼女に溺れてしまう。

だから、その時は邸に戻らずに泊まり込んで、自分の現実世界を切り捨てて分離して、没頭する。

彼は同時に様々なことを判断し、行動することができるのに。

マリナ・イケダが関わると、いつもできることができなくなってしまう。

当主の座に就いて、そして常に走り続けてきた。
彼は、マリナに夢中になる自分が怖かった。

昔の・・「次期当主」として自由に彼女の生国を行き来した自分とは違っていた。
彼は、大人になり、どうにもならない優先させなければならないことが山積みになっている。
そして、それを放棄して、マリナと遊興に耽る彼のことを、マリナは決して許さない。

忘れることができないのに、忘れることを強要されるフランスの華のことを、彼女は・・運命の人はどのように考えているのだろうか。

彼はこの瞬間がいつも切なかった。

自分の都合で彼女を一瞬忘れて、考思の千波万波に押し寄せられるがままになっていると言うのに。

思考を停止するだけではダメだった。

思い出す瞬間が一番辛かった。
傍に居ない時間を過ごしてしまったことが彼を苛ませる。

一緒に居たくても居られなかった時間を思い出す。
一緒に居られるのにそれを自ら手放す贅沢さを思い知る。

・・・・・そして、ますます彼女に逢いたくなる。

だから、彼はひとりしか愛せない。
たくさんの者を同時に愛することが出来ない。

こういう狂気に満ちた愛を受け流すようで、すべて受け止める彼女しか愛せない。

シャルルは溜め息をついた。
脱いだ上着を執務室の革張りの椅子の背もたれに無造作にかけた。
そしてかけた後に、また彼は上着を持ち上げて、脱いだばかりなのにまた着用した。
部屋の中は彼の帰邸にあわせて適温になるように調整されていたが、どうにも寒い。

でもそれは室温のせいではないこともわかっている。
彼は時間を見た。
内線電話を入れて指示をする時間ではない。
メモに記載された時間から随分経過していた。

今は、朝の仕込みのシェフは居るだろうが、この相談をしてきた食材調達の者はもう退室している時間だった。
全員の勤務シフトを確認しているわけではないが、最近、足繁く厨房に通うマリナ・イケダの姿を何度か目撃していたから、この者がマリナと親しく話をしているのだろうと思った。

「Valentine Dayに女性から男性にチョコレート菓子を贈るのは、日本だけの習慣だよ」
何度もそう言ったのに、彼女はどうしてもチョコレートを手に入れたいと言った。
シャルルはあまり甘味を好まない。
大量に食するものではない。
あれは嗜好品だ。
嗜好品は、少量摂取するから良いと思う程度だった。

それに・・・彼が若い頃訪れた、かの国では、そういう嗜好品もない激しくも不毛の地ではそんなものはなかった。
それを思い出すと、飽食の世界を肯定する気にはなれなかった。
だから、彼はいつも満腹になったり満足したりする直前でその行為をやめてしまう。
マリナ・イケダに関するすべてのこと以外は。

しかし、彼女は困ったと言った。
彼女はそれを口にすると、とても倖せな気分になると言う。

「それなら、アルディ家のショコラで良いじゃないか」
そう言った時。
マリナは、それでは意味がない、と言った。

「柑橘系のショコラは確かに美味しいけれど・・・」
言葉を濁す彼女が何を言いたいのか情報が不足していた。
ここのところ、彼は不在にしがちで、彼女とはほとんど話をすることができない。

仏語が堪能であるとは言い難い彼女が、何処で何をしているのか、だいたい把握はしていた。
行動する範囲も場所も限られている。
それでも何を思ってどう過ごしているのかまでは報告書に記載されていない。

彼は彼女を呼び寄せて、少しだけ・・・後悔していた。
彼女のすべてを手に入れることはできない。
「手に入れる」という言葉そのものが陳腐だ。

彼女はいつも自由であり、シャルルと距離を保っているようで実に近い場所に存在する。
そうかと思えば、彼女が理解できなくて苦しむのに、最大の安らぎをもたらす存在。

彼女こそがシャルルのファム・ファタルであるのに。
運命の人を愛することは、信仰にも似ている。

妄信するのに不安になる。
存在を否定したくなり、その一方で肯定する。
実体を知りたくなり、離れなければならないときには偶像で良いので手元に置きたくなる。

それでも・・・
独りよがりな愛ではないのかと。
時々・・・彼女の愛を確認したくなる。
温もりを感じたい。

マリナ・イケダの行き先はわかっていた。
ここのところ、入り浸りになっていると言う厨房の隣の休憩室だろうと思った。
シャルルはそのまま・・・
荷物を置いただけの格好で、執務室を出た。
執務室はそのまま、彼の私室に繋がっている。

そして、執務室の扉と私室への扉も、自由に行き来できる人間はたったひとりだけだ。
そのたったひとりを求めて、この家の持ち主が広い屋敷を彷徨うことになるなんて。
シャルル・ドゥ・アルディは苦笑した。

彼の白金の髪が揺れて、憂患の面持ちを隠した。

マリナ、いつになったら、オレは安堵するのかな・・・

・・・・やはり、彼女はそこに居た。

近づくにつれて、彼の高い鼻翼に甘い香りが漂う。
彼女はどんなに広い部屋を用意しても、こうして小狭い部屋に入室することを躊躇わない。
いつの間にか、言葉が通じない者もいるのに、親しげに挨拶を交わす。
普段、この屋敷の住人であれば決して近寄らない場所を好んで彼女は出没する。
そして誰もが彼女に魅入られる。

ーーー隠しておきたいのに。

彼女は、いつも太陽のような微笑みで、誰も彼も虜にする。
言葉が通じなくても。
彼女は「デッサンさせて」と言って、彼らの姿を注視する。
最初は当主に命じられて彼らの行動を監視していると思って、頑なに態度を硬化させていた彼らは、邪気のないマリナの微笑みにやがて彼女の来訪を心待ちにするようになる。
彼らが何度もシャルルからノンと言われてやり直しを命じられるショコラの失敗作を口にして「美味しいのにね」と言って笑う。

シャルルがこの家を自由にさせていられるのは、有能な従妹の存在だけではない。
マリナ・イケダがこの家の冷たい雰囲気を緩和し、そして彼が望んで焦がれた世界を、いとも簡単に創り上げていくから。
彼が求めてやまない煖気をもたらす彼女が愛おしい。

彼は彼女を「ファム・ファタル」と呼ぶ。

彼の運命の人という意味だけではない。
彼女は・・・彼を取り巻くすべてを変えてしまうだけの引力をもった人なのだ。

「マリナ」
シャルルは声をかけた。
その引力に惹かれて、彼はやって来た。

彼女は厨房の脇の休憩室を兼ねた事務室に座っていた。
非常に小柄なその人は、背の高い椅子に浮いた足を遊ばせながら、作業台の上で手を動かしていた。

茶色の髪が動き、ようやく再会した恋人はシャルルを見て微笑んだ。

「シャルル！おかえりなさい」

威勢の良い声に、彼は薄い唇の端を持ち上げて微笑んだ。
これまでの激務の疲労さえ吹き飛んでしまうような闊達な声を聞くと安らぐ。
今まで。
使用人以外で、誰かが自分を待っていてくれる邸を彼は想像したこともなかった。
こうして戻る場所を与えてくれるだけで・・彼女は。
マリナ・イケダは偉大だと思う。

還れる場所があるから、彼は没頭できる。
還れる場所があるから、彼は戻って来られる。

彼は時々、もっとも畏れた状態に自分が陥っているのではないのかと思うことがある。
彼の母と同じように、何かをふと、考えていたつもりで、そのまま渇望の世界に入り込んでしまうのではないかと思った。
彼女はそのまま還ってこられなかった。

だからシャルルはこうして確かめる。
この上なく愛おしい人を待たせて確かめる。
それが夢でなく、ずっと長い時間待ち望んだ状態であることを、何度も確認する。

「・・・・一体、何を創っているの？」
「プレゼント」

彼女は、久しぶりに再会する恋人から視線を反らした。
椅子から立ち上がって彼の胸の中に体を預けることはしなかった。

シャルルは立ったまま、彼女の作業を観察した。
たくさんの・・・たくさんの小さな箱に、一生懸命ショコラを詰めていた。
手の平に乗るくらいの、小箱をこれだけ一体、どこで用意したのだろう。
作業台の上はかなり広い面積を持っているのに、そこがすべてショコラと箱と・・・リボンや包装紙で埋め尽くされていた。
平面だけでは足りなくて、いくつも重ね合わされたそれらが、無秩序に積み上げられている。
さながら立体作業上だ。

マリナは、シャルル・ドゥ・アルディが彼女のために用意した 、この家の中だけでしか咲かない薔薇を小さなたくさんの箱にひとつひとつ丁寧に詰め込んでいた。
箱の蓋を閉めると、密封性が高まる構造になっていた。
日持ちする菓子が、更に室温で溶けてしまわないように配慮した包装方法だった。
すでにいくつか作業が完了したものが、彼女の座っている場所の左手に幾重にも積まれていた。

日本人の気質なのだろうか。
それとも彼女の性質なのだろうか。

彼女はとにかく贈り物に頭を悩ませる達人だった。
彼女ほど友人が多いと、贈る品について一年中そうやって考えているのではないのかとさえ疑う。
いつも「ものはいらないよ」とシャルルが告げるのに、常に「何が欲しいのか」とシャルルに尋ねる。
そして、彼女は彼だけではなく、他の者達にも何を贈ろうかいつも悩んでいる。
高価なものは贈らない。

彼女らしい手作りのものであったり、時には彼女がイラストを描いたはがきであったりする。
気が向けば遠方であるのにもかかわらず、自由に気儘にその者に面会しに行ってしまう。

シャルルが少しばかり羨望の眼差しを投げてしまうくらいに。
マリナの自由気ままさが愛おしいと思うのに、束縛してしまいたくなる瞬間だ。

自分のこと以外、考えないで欲しい。

何度もそう言いかけたが、それは言えずにいた。
だから仕事に没頭して、彼女の存在を一瞬でも忘れることもできるのだと、自分を安心させていたいと思って居た。
それくらい、何もないときには彼女のことを考えている自分がどうにも・・・苦しかった。

「君は一体、何人に渡すつもりなのかな」
シャルルが呆れて言った。

ゆっくりと、背を向けた彼女に近づいて、肩に手を遣った。
彼女は誰にも気安く距離を縮めることが出来るが、反対に決して心を許しはしない。
でも、シャルルだけは、彼女の肩に触れて、そして額に軽くキスをすることを許されている。

・・・そう思いたかった。

彼女の髪から、ふわりと軽く、甘い香りが漂った。
白金の髪が揺れて、彼女の額に降りかかった。
マリナが少し身動ぎしたが、彼はその仕草が、帰邸を喜ぶ合図なのだと知っていた。
青灰色の冴えた月夜の眦を持つ、フランスの華にマリナは微笑んだ。

彼女はとても幼く見える。
若く見えるのではない。
幼く見えるのだ。

茶色の双眸はくるくるとよく動くのに、瞬きはゆっくりだ。

「・・・そうね、かなりの数になるわ」
無邪気に答えるマリナの言葉が、彼が唇を寄せて触れた額から振盪となって伝わってくる。
マリナがこうして何かに没頭している時は、彼は彼女に断りを入れずに触れる。
いつも彼女は顔を赤らめて、許可するまでに時間がかかりすぎる。
それまで、待つことはとうていできそうもなかった。
久しぶりに触れるファム・ファタルは暖かかった。
先ほど感じた室内の寒さが、触れた唇の先から和らいでいくような気がする。

「だって、アルディ家のこのショコラを、私が独り占めするのは勿体ない」
彼女はそう言った。
シャルルは微笑んだ。

独り占めするのは勿体ない？
勿体ないから独り占めするんだよ。

昔、彼女を独り占めしたくてもできなかった彼がそう言って微笑んだ。
マリナはちょっと笑った。
同じ事を思い出したのかもしれない。

「シャルルもどうぞ」

彼女は手を動かしながら、すでにラッピングを終えた小箱の山を指して言った。
彼はちょっと眉を顰める。

「中身の組み合わせはバラバラよ。だから、開けてからのお楽しみ。リボンと包装紙の組み合わせもバラバラだから、一つしかない、
アルディ家のショコラ・セットのできあがりね」
マリナは心浮き立つと言って作業に没頭していた。
その一方で、シャルルは嗟咨の溜め息をもらした。

「ーーーいらない」
低い良く通る声で、彼が無愛想に言ったので、マリナが手を止めて顔を上げた。

「オレは『もの』はいらないっていつも言っているよ、マリナ」
少し素っ気なさ過ぎたと思った。
少し強い口調だったのかしれない。
マリナが不安そうな顔をしたので、シャルルは表情を少し和らげて、言い直した。
「だから、マリナのそういう気持ちだけで嬉しいよ」

戻って来たばかりだから一度執務室に戻る、とシャルルは言った。
マリナにちょっと疲れている、と漏らした。

確かに激務の後であったので、疲労していた。
食事も睡眠も不規則であった、などと彼女に言えば、即座に休めと言ってシャルルを厨房から追い出すに違いない。

でも、それでも早く逢いたかった。

マリナの居ない場所は、どんなに空調が効いていても寒い。
ショコラが溶けるのであまり温度を高くしていない室内なのに、マリナが居るだけで暖かいと感じる。
この違いを、彼女はわかっているのだろうか。

これほどまでに、逢いたいと思うシャルルの渇する憂いを知っているのだろうか。

後で行くわね、とマリナが言っていたが、彼を追いかけてくる気配はなかった。
長い静かな廊下を渡りきって、シャルルは執務室に戻ると、大きな革張りの執務椅子に沈んだ。

……目頭を、そっと細く長い指で押さえる。
青灰色の澄んだ瞳を閉じて、眉根を寄せる。

先ほどのやり取りで、シャルルが酷く失望したことを彼女が察知する前に部屋を出てきてしまった。

‥‥逃げるように。避けるように。

彼女の温もりと煌めきを求めて自分から歩み寄ったのに、目が眩んでまた烏夜（※光の差さない夜のこと）に戻ってしまった。

些細なことで思い知る。
彼女は、自分と違うというのだということを。

彼女はたくさんの者に愛を分けることが出来る。
日本のつまらない習慣でさえ、あれだけたくさんの者に回付することを前提に作業に没頭する。
シャルルが久しぶりに帰邸したことに微笑む一方で、彼の恋人は、彼でない誰かを思い浮かべ、元気だろうとか、ひとつひとつの小箱に気持ちを込めていく。
ひとつも同じものがないように、気を遣いながら。

彼がたったひとりの人を思い浮かべて、その人をあまりにも想いすぎないように・・・精励恪勤しているのに。
彼を占めるものは愛だけではない。
仕事もあるし、マリナ以外の人間関係も存在する。
それでも、それでも。

こうして、ふとしたことで彼女の愛し方と自分のそれが違うことを思い知る。

オレはあまたある彼女の「宝物」のひとつでしかない。
愛に優劣はつけられない。
彼女はそう思って居る。

しかし、彼には唯一しかない。
優劣をつける対象そのものが、ない。

マリナ。
君をたったひとりの人と定めたのは、運命ではなくて、自分自身だ。
そして長い年月を経て、ようやく・・ようやく君がオレに微笑むようになった。
それを自分だけに向けてくれないかと願った時もあった。
壟断できなかった。
あまりにも、彼女を見つめすぎて、彼女を愛しすぎて。
諦めた時もあった。

でも。

あの時代にはもう戻らない。
あの時代にはもう戻れない。

なぜなら、深く愛しているから。
そういう愛し方しか知らないから。
誰にも・・・愛され方を教えてもらわなかったから。
マリナは決して自分自身に他人には入り込むことを許さない。
シャルル・ドゥ・アルディ以外は。
大人になって、若い頃に知らなかった彼女を知って。
・・・彼女の心の声を聴いたから。
時々遣る瀬無くなる。

気が狂いそうなほど愛しているのに。
愛しているから気が狂いそうになる。

彼女が自分だけにそれを赦している間は、決して離さない。

そう、決めていた。
・・・いや、今となっては、「まさかの時」が訪れたとしても、彼女を到底話すことは出来そうもなかった。

彼は暗く落とした照明の仲で、ひとり物思いに沈んだ。
深く椅子に体を埋めて、険阻な顔をしていた。

「・・・・シャルル」

意外に違い場所で、そっと小さく囁く声がして、彼は意識的に瞬きをした。
そうでなければ、眩しくて目が開けられそうもなかった。

いつの間にか、照明が明るくなっており、彼はマリナが執務室に入ってきたことにさえ気がつかなかった。

茶色の髪と茶色の瞳が近くにあって、彼は青灰色の瞳の焦点を合わせた。
ああ、戻って来た、とマリナが言った。

「自分の家で何かを考え込むのは、やめたら？」
マリナが声を漏らして笑った。
昔はこれを「発作」と呼んで、たいそうマリナは面白がった。
集中して思考の波間に沈む時には、シャルルには何も聞こえないし何も見えない。
気がつくと、時間だけが経過している。
自分で戻ってくるときには、結論が出ていることが多い。
けれども、こうして・・・誰かに呼び戻されるときや、彼の恋人のことで考え込むときには、いつも解決するべき「次の手」を模索している途中のことが多かった。

マリナ・イケダに関しては、決して・・答えを出すことが出来ない。

時計を見ると、すでに日付が変わりそうなほどに夜が更けていた。

「もうそろそろ休んだら？」

彼女がそれだけを伝えるために、ここまでやって来たのではないと思った。
シャルルはそうだね、と言って体を動かした。
長い時間、ずっと、呼吸さえ忘れてしまうような姿勢で制止していたので、日頃体を鍛えているシャルルでさえ、節々が痛んだ。

アポイントを取らないで、自由にここを行き来できるのは、この館ではたった一人、マリナだけである。
そしてそのような自由を許されているのに、彼女は滅多にここには足を踏み入れない。

「・・・その両手一杯の荷物はなに？」

陶製の籠を抱えていたマリナが、執務机の隅に乗せたので、シャルルは少し眉を上げて非難した。
これは父の代からの机であり、彼が決めた書類の位置に、彼が決めたもの以外を載せることは許していない。
それなのに、彼女はそれを知っていながら、わざと、荷物を載せた。

「・・・ショコラ」

たった今、日付が変わったからね。
マリナはそう言って、籠の底に手を遣り、そしてそれをひっくり返して中身を彼の目の前の机にこぼした。

「・・マリナ！」

先ほどまでひとつひとつ丁寧に扱っていたそれらを、彼女はすべて持ち込んだらしい。
大量の紙製品がこすれる音がした。
リボンが落下の衝撃で歪んだのも気にしないで、マリナはシャルルの前にそれらを積んだ。

彼女は少し怒っていた。
大事に包装していた小箱の包みが音をたてて、彼女が持ち運んだ籠から舞い落ちて、シャルルの前に積まれる。

「シャルル・ドゥ・アルディが特別に選んだショコラよ。これをアルディ家の常備菓子にしようと言った本人が、なぜ興味なさそうにしているのか理解できない」
彼女の声が少し低かった。
そういう時は、マリナが何かに憤慨しているときだ。

彼女はあまり自分の喜怒哀楽を主張しない。
すぐに周囲にはわかるのだが、「私は怒っている」とか「私は悲しんでいる」とは言わない。
でも、彼女は言った。

「私は怒っているのよ、シャルル」

「なぜ？オレは君が怒っている理由を知るための情報がない」
彼は薄く笑った。

整った顔が切なげに歪んだ。
愛する人を困らせるつもりはないのに、彼女を困らせて怒らせたのは自分である。

つまらない盛事に追従するつもりもない。
けれどもそれを理由として、誰かに思いを馳せるマリナを見て居るのは辛い。

「この中から、ひとつ選べば良いの？」
シャルルは少し笑った。
好きなものを選べ、と言われて悩む子どものように、なかなかそれらに手を伸ばすことが出来なかった。

色とりどりの、すべてが組み合わせの違う・・・同じ形であって同一のものがないそれらの、どれを選べと言うのだろう。

マリナ、オレはあまたあるものから何かを選ぶことはしない。
愛は、ひとつだけだと定めているから。
これがオレの愛し方だ。
愛はひとつだけだ。
だから・・・・

その時だった。

「全部よ」
「え？」

滅多に聞き返さないシャルル・ドゥ・アルディが、マリナの言葉を聞き返してしまった。

マリナは、執務室の椅子に深く座るシャルルの前に立った。
執務机の反対側に、彼女は立って、腰に両手をあてていた。
籠は空になったことを確認して、床に追いてから、ゆっくりと・・・彼女はシャルルに視線を移した。
瞬きをして、まっすぐに彼を見る彼女を幾日ぶりに眺めるのだろう。
彼女は非常に小柄な人物であるから、立っているマリナと座っているシャルルと目線が合う。

「だから、全部。全部、シャルルへの贈り物よ」
「これはみんなへの贈り物ではないの？」
「それはもう準備した。これは全部シャルルのためのものよ」
マリナは横を向いた。
少し紅くなっていた。

「あなたは一体、どれだけここを空けていたと思うの？その間にとっくに・・・みんなへの贈り物は準備した。どうして日持ちのするショコラにしたのか、わかっていない」
シャルルはわかっていない、と彼女は低く言った。

「ひとつに選べないから。何にしようか迷った。
アルディ家で私ひとり食べるショコラにできなかった。
だから、シャルルが帰ってくるまで、作り続けたから・・・
これほど多くなってしまった。
・・・シャルル、疲れているときには甘いものよ。
アルディ家が用意したショコラは最高だわ。
そして・・・これを食べるといつも思い出す」

私達の邂逅を、と彼女は小さな声で囁いた。

アルディ家のショコラを切らしてしまったと言ったメモを思い出した。
彼女はシャルルのために、これらを作り続けた。ショコラを切らすくらい。
友人へのギフトは、想定内だった。その分は確保していた。
不足するのは、シャルルの分だ。
シャルルは、自分のために用意する分を想定していなかった。

そこでようやく、彼は彼女の手元を見た。
目の前の茶色の髪の女性は、普段絵を描く。
だから、食品に触れるときには、相当念入りに手を洗わないと、顔料が付着する。
・・・彼女の指先は若い女性に相応しくないほど荒れていた。
彼女は手の油分がなくなるまで、指先を洗浄し、そしていつ帰ると連絡しないシャルルのために、疲れているだろうからと思ってショコラを包み続ける。

彼が毎日少しずつ食べられるように。
外出先でも口にできるように。
そしてそれがただならぬ思いで創られたことを証するために、彼女はすべて内容物の違うショコラを外装した。

シャルルが寝食を忘れて没頭することを知っているから。
せめて、これらを口にして、彼女を・・・何かを思い出して欲しいから。

ああ、マリナ。
シャルル・ドゥ・アルディは苦笑する。

これが彼女の愛し方なのだと思った。

彼女の愛は加えられていく。

ひとりにひとつしか与えられないショコラの小箱を、シャルルには「全部」と言って作り続ける。増やし続けたすべてを与える。

たったひとつではない愛を彼女は持っている。
そして、その愛を増やしていくことを彼女は知っている。

「シャルルは特別だって、どうしたら伝わるのかしら」
彼女がそう言ったので、シャルルは小さく微笑んだ。美しい微笑みだった。
彼女の『特別』は唯一という意味ではない。
ある意味、唯一ではあるが。

蕃息する愛を持つ人を愛したのだ、シャルル・ドゥ・アルディは思った。

彼は声を漏らして笑った。
「マリナ。こんなに食べきれないよ」
「それなら、一日ひとつずつ。違う色合いを愉しみながら、今日は何が出てくるのかなと思って箱を空けるのも、楽しいと思わない？」
「オレを肥満か糖尿病にさせるつもりか？」
シャルルは辛辣に言った。

「君の胃袋と一緒にしないでくれよ」
「シャルル！」
マリナが抗議する。
彼は小さく吐息を漏らして首を振った。
そして椅子から立ち上がり、机を挟んで向こう側に居るマリナに、机越しに手を伸ばした。
非常に大きくて面積の広い机であるのに。
幼い頃は、この机の上で、アルディ家の当主の子息としてあるまじき行為をしたと咎められて、両手を叩かれたことがあった。
こうして腕を伸ばすことができるようになるとは思えないくらい、大きくて‥届かない距離だと思った。
それが今。
自分は、そこから、正面に立つ愛しい女性に手を伸ばすことができるくらいに成長した。
そしてマリナに手を出して、と囁いた。
うっとりするくらい・・美し微笑みは、かつて美少女と見紛うほどに端麗だった中性的で可憐な彼の容姿を彷彿とさせる。

マリナはしばらく躊躇って、そっと、彼女の荒れた手を出した。
何か口ごもっていたが、シャルルはそれを聞かないことにした。
彼女が自分の為に指先を冷やした。彼女は絵を描く人なのに。
それだけでも・・・充分だった。

これが、愛でなかったら一体何だろう。

彼は腕を伸ばし、体を傾けて、彼女の指先に唇を寄せた。
甘いショコラの香りがした。

彼が指を添えた、小さな手首は冷たくなっていた。
ショコラが溶けないように、室温を低くした場所でずっと作業していたせいだろう。
彼女の体が冷えているのだろうと予測できた。

「・・・この執務に支障が出るくらいのショコラは後で何とかするとして」
シャルルは彼女の腕を掴んだまま、薄い綺麗な唇を動かして言った。
「まずは、このショコラから頂戴しよう」

そう言って、彼女の腕を放すことなく、シャルルはゆっくりと執務机の端を渡り、対岸の彼女に近づいた。
「シャルル！」
彼の瞳が怪しく煌めいたので、マリナが慌てて腕を引いたが、彼は彼女の手を解放しなかった。
「ダメだ、離さない」

「シャルル」
マリナが顔を赤くして抗議した。
シャルルはダメだよ、と首を振った。

「オレの疲労は脳の疲労だからね・・・肉体の疲労を伴わないと、眠れそうにない。
そして、ショコラに含まれる成分は、鎮静効果をもたらす一方で、興奮作用もあるのを知らないのか？」
知らないわよ、と叫ぶマリナの手をぐっと押さえて、彼は彼女の指先を滑らかな舌でなぞった。
その妖婉な仕草に、びくり、とマリナが鳴動する。
シャルルは微笑んだ。

「ショコラの香りが漂う・・・アルディ家の銘菓を味わいたいと思うのだが」

この邸で唯一の名菓を味わう特権は、当主である彼だけだ、とシャルルは主張した。
マリナの顔が青ざめて、シャルルは疲れているのよ、と言った。
彼は鼻で笑った。

「マリナ。執務室の隣は、オレの寝室で。そこに自由に出入りできる唯一の人が夜中にやって来たことには意味がないのかな？・・・
オレは疲れている。だから、ゆっくり眠りたい。
眠るには・・・そうだね、甘い香りのする枕が欲しい。

そう・・・今日は、ショコラを食する日なのだろう？」

マリナ・イケダが悲鳴をあげた。
シャルル・ドゥ・アルディは静かな執務室に響き渡る声を聴きながら・・・力任せに、彼女の腕を引いた。

愛は、増える。

だから、オレの君への愛も増える。

彼は笑いながら、愛する人を胸に抱いた。

（FIN）

ひねもす　竟日

一日中。終日。

「・・・君は、同時に複数のことは考えられないのか」
「複数のことを考える？・・・そうする理由がない」
そう答えながらも、彼女は目の前に広げられている最高級透明水彩絵具を眺め回している。
ドイツ製のそれは、数ヶ月の手間と時間をかけて製造される。
ヨーロッパでも最高級のひとつと言っても良いそれは、欲しいと思ってもなかなか手に入らず、取り扱いも難しい。

ケースひとつ、包装ひとつとっても見事な芸術品であった。
菓子包みのような包装が施されているそれを開封して溶解させ、色を混ぜるとなればどんな色でも生み出せそうであった。

マリナが感歎して、シャルル・ドゥ・アルディの言葉を聞き流している理由はそれだけではない。
綺麗な宝石箱の中の宝玉ように、包装されたキューブ状の顔料が陳列されたケースの隣には、完全受注の、顔料の含みが最高に良さそうな高級筆が、保存に最適の巻き型の筆入れに収まっている。

マリナ・イケダの隣で、フランスの華は軽く溜息を漏らす。

呆れるを通り越してもう何も言いたくなくなるほど、マリナの関心が、見事に、目の前のテーブルに広げられた画材道具に注がれている。
それを持ち帰ったシャルルへの労いも感謝の言葉もそこそこに、彼女は夢中になって、どこから手をつけて良いのかわからずに、ただ眺め回しているばかりであった。
それまで彼女がカタログや誰かの持ち物でしか見たことのないそれらが、おそらく最多の色取りで並んでいるのだから、彼女の興奮もただならぬものであることは理解できる。

普段、シャルルがどんなに高価なものを買い与えることができたとしても、彼女は欲しいとねだらない。
大人になって再会した時にシャルルが感じた彼女の変化であった。
彼女は既に自立して生きている期間が長く、今の彼女には分不相応と思っているらしかった。遠慮しているというよりはむしろ、彼女は与えられることに対して無邪気でいられるほど稚拙ではないということなのだろうと、シャルルは理解している。
専門的に分析するのなら、彼女のそれまでの行動をもっと細かく調査しなければわからない。でもそ

うしない。

なぜなら、彼女は患者ではなく彼の最愛の恋人であったから。

その彼女が、ぽつりと何気なく「新しい絵具と筆が欲しい」と言った言葉を彼はだいぶ長い間、覚えていた。
彼女がシャルルの前で人物画を描かないことについては、まだ、解決には時間が必要だと思っている。マリナの中でも、何かまだ蟠りが残っているのだろうと思えた。
でも、それでも良い。
どんなに彼女が憂えていても、シャルルとの未来に戸惑いや躊躇いが混じっていても・・・それでも、彼はもう、彼女に背を向けることは・・・二度としない。そうすることが彼女への愛だと思ったが、今は違う。そうしないことも・・・苦しみから眼を逸らさず背を向けず、受け止めることも愛なのだと思うようになったから。

だから、注文してからだいぶ時間が経過してしまったが、マリナが満面の笑みを浮かべて、手放しで喜ぶ姿を見ることができて・・・シャルルは微笑んだ。
誰かの笑顔が、自分を笑顔にさせる。誰かではなく、マリナが彼を微笑ませる。
これは、これまでの彼には考えられなかったことだ。

「でも、今、私は同時に複数のことを考えているわよ。・・どの色とどの色を混ぜようか、どの筆を使おうか・・・。
ほら、一度にたくさんのことを考えている。シャルルみたいに考えられているかしら」
「まったく違う」
彼はまた苦笑するが、それは苛立ちからではなく、豁達な恋人のこたえが、いつも彼の感情を浮動させるからだ。
沈降させることもあるが、彼女はいつも、シャルルに対して真摯で誠実であった。
嘘はつかないし、誤魔化そうともしない。
すべてを曝け出すという意味ではなく、彼女は少女時代に自分の内に秘めていた殻のようなものが薄皮程度かもしれないが、少し剥けたような印象を受ける。
それがたまらなく魅力的である、と彼は彼女に言うことはない。
人の心には敏感なのに、自分のことには鈍感である彼女の気質は・・・昔から彼を悩ませはするが魅了し続けて久しい。

シャルルが帰邸した折に、それをマリナの部屋に持ち込んだところ、彼女は最初酷く驚き、絶句していた。その品の価値がわからない人ではない。
そして次に歓びのあまりに頬を紅潮させてシャルルにありがとう、と言った。
感謝されたくて、そうしたわけではない。

極力抑揚なくそう言うと、マリナはシャルルに向かって、こう言ったのだ。
「ああ、私、一日中この色の配合のことで頭がいっぱいになりそう。眺めているだけで満足してしまうくらい、素晴らしい」
それを聞いて、シャルルは先ほどの問いかけをしたところ、彼女の返答が彼の正解としていたものと違ったので、美しい貌を無表情にして、それとなく遠回しに彼女に抗議したのである。

「でも、これ、高かったのよね？」
彼女がいつまでも金額のことを気にするので、シャルルは鼻を鳴らして嘲ら笑った。
「高低の基準が曖昧すぎる。オレの労働対価に対して言っているのか？それともアルディ家の財力がこれしきで影響すると？」
「そうではなくて」
少し怒ったようなシャルルの口調に、マリナはそこで初めて顔を上げた。
シャルルは青灰色の瞳を少し細める。茶色の髪の茶色の瞳の人は、眼が弱いので、顔を近付けて見る傾向にある。
けれども、ふと視線を上げて、ほんの一瞬、焦点を失った姿は・・・・彼の腕の中で忘我に溺れる時の表情とよく似ていた。
それは、シャルルしか知らない事実であり、彼女はそのことには気がついていない。
彼は言うつもりもなかったが。誰にも教えるつもりもない。

「私が一日、働いてもこれは買えない」
「だから、何？」
彼女がいつまでも瑣末なことに対して、解決にならない問題提起をし続けるので、シャルルは冷笑した。
伶俐な頭脳を持つフランスの華と呼ばれる人物は、マリナの隣で長い脚を組んだ。
「君の労働が必要なのか？オレの気が変わらないうちに・・・」
そこまで言いかけて、彼は薄い唇を噤んだ。

話の途中で彼が黙り込む時は、思考の波に沈む時だけだ。
それなのに、彼は途中で言葉を切った。

・・・また、マリナがシャルルの賂（※捧げもののこと）に視線を注ぎ始めたからだ。

彼女の集中力というものは、シャルルのそれとは質が違っている。
彼はひとつのことに集中すると、それだけを考え他を排除するが、マリナの場合には、他に気を散らしてもなお、そこに戻ってまた意識を向けるのだ。
つまり、断絶しながらも集中する。
昔、彼が彼女のことを食欲や睡眠欲など欲求に弱いと評したことがあったが、実際はそうではないのだ。

これが脳の作用の違いであるのならば、それはそれで納得できたが。もっと違う何かが、彼女には作用している。

わかっている。彼女の一番は、存在しないのだ。

シャルルは一番になるつもりはない。
最上というものは、比較対象があってこその「最上」なのだ。
しかし、彼は決めていた。
一番ではなく、最高でもなく・・・彼女の「絶対」であり続ける。

彼は、マリナの隣に座っていながら・・・彼を恋人として遇さない冷たい相手に向かって、鋭い視線を向けたが、彼女は軽くいなしてしまうのでまた溜息を漏らす。
彼は、フランスの華と呼ばれているのに。彼にできないことはないというのに。
それなのに、彼女をこちらに向かせることはできないのだ。

彼の判断は一瞬で終わった。
次に、身体を傾けると・・・マリナの横顔に近付き、彼女のこめかみに、キスをする。
強引に、強く押し付ける。彼女の横顔がぐらつく程に。
あっとマリナが声を上げた時には、それはもう終わっていた。
出迎えのキスも終わっていない。マリナから、感謝の口吻を浴びる予定であったのに、彼女はシャルルが傍らに居ながら、まったく違うことを考えている。

これが悋気だとわかってはいるが、彼女は彼に何かをねだらないのは・・・彼女にはひょっとすると物事の軽重や優先順位が存在しないのだろうかとさえ思ってしまう。

彼は無言で身体を起こした。
マリナの身体が揺れて、彼女の側の手摺りに背中があたる。それほど強く唇を押し当てたわけではないのに。別のことに気を取られているから、いけないのだ。彼は自分の行為を正当化した。
・・・彼女の前では、彼はひとりの青年になってしまう。
少年には戻らないが、彼はマリナがこちらを見ないことに立腹している、つまらない男の悋気が湧き上がる過程を客観的に考えることを放棄してしまう。

いつもとは違っていた。
彼女は彼の「日常」を奪う。
いつもと違う行動、いつもと違う感情、いつもと違う渇望・・・マリナが、彼のファム・ファタルであるからなのだろうか。

「マリナは、別のことであれば、一日中没頭できるとひけらかす」

言外に、何を言っているのか明白であった。
詮無き事を言っていると承知しているが、彼の誇りが・・・明確な言葉を彼に言わせない。

マリナの茶色の瞳が何度も激しく瞬いた。
シャルルはそれを見て、彼女に横顔を向ける。

シャルルが用意したものなのに、彼はマリナが自分を見ないと言って憤る。
矛盾していることはわかっている。
そして、途方に暮れる。彼がしていることは誤ったことなのだろうかとさえ思う。
彼は間違えないのに。決して、間違えないのに。
彼は、それでも・・・無表情を装って横を向く。

「シャルル」
マリナが、彼の名前を呼んだ。戸惑いを含んだ声だ。
しかし、彼は横を向いたまま、彼女の方を見ることはしなかった。
今、彼女と近い場所で視線を合わせたら。
彼は、彼女を手酷く傷つけてしまうだろうと確信していた。
彼は彼女の知らない面をたくさん持ち合わせている。

彼女の喜ぶ顔が見たいと思っていたのに。
彼女が羞恥で涙を浮かべる姿を想像する。

彼女の笑顔が見たいと思っているのに。
彼女が自分以外の何かに熱中する姿を苦く思う。

そこで、マリナはシャルルにそっと言った。
ようやく、マリナが彼のことを見たのに、彼女の視線を正面から受け止めることはしない。

シャルル・ドゥ・アルディは、横を向き自分の側の肘当てに肘を置いて、自分の口元を覆った。
細く長い指先が彼の美貌を隠す。表情を隠す。

「シャルル」
「マリナ。これらは君のものだ。・・・オレが用意したもので、君の指図で揃えたものではない」
シャルルが、マリナの願いを叶えてやったわけではない。

・・・最高級の筆も、絵具も。

それは。

彼の母が手にした品と同じものであった。
かつて、母が取り寄せていた画材道具を扱う店が新装したというので案内を受けた。
彼と母が離れていた時期の・・・母の療養時期に出入りしていた店であった。
父と母が逝去したことは新聞など公的機関でも報道されていたので、宛先は現在の受取人となるシャルル・ドゥ・アルディでであったので、それで彼の目にとまった。
顧客名簿を更新したいので、必要があれば連絡をしたいという内容であったが、シャルルはそこで新たに発注をすることにした。

彼の母のためではなく、彼の恋人のために。

そこで知った。
父は、定期的に、母のためにそういった道具を揃えていたことを。
・・・母と別居に近い暮らしをしていてなお、父は母のために・・・発注から納品まで何ヶ月もかかる品を依頼していた。
それは父の罪滅ぼしのひとつであったのかもしれないが、それでも・・・それらを使って、母の描いた「私の夢」というあの絵が誕生したのかと思うと顧客名簿の抹消を依頼できなかった。もういない者へ思いを馳せても仕方が無いと理解しているが、それでも彼の記憶から抹消することはしない。哀しみも彼の一部であるからだ。もういな者を名簿の削除のように扱うことは簡単であるが、彼は簡易な路を選ぶことで得るものはなにもないと考えている。

・・・・しかし、こうして彼女と居ると彼はつまらない追憶のために余計な行動をしてしまう人間に成り下がってしまう。

そんな考えに耽ることができたのなら、どれほど良かったことだろう。いつものように・・・彼は音も色も温度もない世界に揺蕩い、考えることだけに没頭する時間がこの瞬間に訪れれば良いのに、と思う。しかし、彼女はそれを許さない。気持ちだけが走り出してしまう。

そんな彼に、彼女は言った。
「私、ひとつのことしか考えられないけれども・・・」
彼女はそう言って、前置きした。

わかっている。彼女と自分では思考過程が違う。
価値観も違う。シャルルは視線だけを彼女に移した。

彼女が、視線をシャルルに向けて彼の腿に手をあてたからだ。
組んだ脚が、ぴくりと僅かに動く。

彼女は、シャルルを理解しきれていない。
こんな風に触れたのなら、シャルルは彼女が夢の中に入りシャルルを忘れていることを責め立てるために、どんな酷いことでもしてしまいそうになるというのに。・・・彼女は、わかっていない。そんな危険を孕んだシャルルの思考を理解できない。
しかし、彼女は言った。
彼の膝の上で、マリナの両手がぎゅっと握られた。

「あのね」
彼女はそう言って始める。
それに、抗うことができない。

彼が何を思っているのか、なぜ、彼女にそんな品を用意したのか、マリナにはわかっているようであった。
ケースにも筆の絵にもアルディの紋が刻まれている。特注の品だ。だから、通常よりさらに納品までに時間を要した。けれども、その絵具の包装には・・・すべてに小さな文字で刻印があった。

ロベールからエロイーズへ

彼女はフランス語に堪能であるわけではなかったが、誰かの名前であることはわかったようだ。
そしてそれがシャルルからマリナへ、という文言ではないことも。
食い入るように見入っていた彼女にはわかっていたことだろう。

通り過ぎてしまえるような小さなことであった。
けれども。
彼女は見逃さなかった。

彼の囁きに。
彼の、小さな・・・本当に小さな、気がついて欲しいという願いを聞き逃さなかった。

「私には夢中になれることがたくさんある。これは幸せだ。そして幸せは湧き上がるものだけれども、贈られることもある。
これを贈った人も贈られた人も嬉しかったと思う。
だって、私は今・・・とても、嬉しいから。
それは、高価な品を贈られたからではなくて、想い出を・・・その人の大事な思い出を贈られたから。
だから。
私は・・・その人の・・・・その人の絵を、どんな色を使って描いたらいいのだろうかと・・・一日中、考えているの。他のことも考えるけれど、昼も夜も関係なく、考える。

すぐに絵にすることはできないかもしれないけれども、考え続けることは難しいけれども、いつも、シャルルの色はどんな色なのだろうって・・・」
そこまで言ってから、彼女は上目遣いに彼を見上げる。
頬が赤らみ、茶色の瞳がシャルルを見上げていた。
少し怒ったように、唇を尖らせている。

フランスの華は、ふっと淡く笑った。
そこで、緊張した空気が和んだ。
一瞬で。
・・・彼の美しい微笑みは、周囲の空気を変化させる。
恋人の笑みであるのに、マリナ・イケダが彼の微笑みに見惚れて・・・今度は、彼の貌を食い入るように見つめたからだ。

「・・・御喋りな人だ」
彼はそう言った。
彼女が喜ぶ姿を見たくて、これを注文した。
けれども、これが納品される時まで、彼女は彼の恋人であるだろうかという不安があった。

・・・・でも。

彼女は、今、ここに居る。

彼は腕を伸ばした。
先ほど彼が唇を押し当てた、こめかみにかかるマリナの髪を掻き上げると、彼女は気持ちよさそうに眼を細め、顎を引く。そんな仕草が愛おしい。
好きだよ、と言う他に伝える言葉がない。
彼はたくさんの言葉を知っているが、どの言葉も・・・あてはまらない。
けれども、彼は、その言葉の重さを知っている。
過ぎった言葉を囁く。
ひとつだけ。
彼に堕ちてきた言葉を彼女に呟く。

「・・・比禰毛須（ひねもす）」
マリナが、シャルルの顔を覗き込んだ。
彼は笑う。マリナの不思議そうな顔を見つめる。
「終日、という意味だ」
互いに互いのことを、絶え間なく考えることはできない。

彼らは、大人になってしまったから。でも、それで良いのだろう。
それでも、片隅ではいつもそれらは常に休止することはない。
相手を思い遣ることを、忘れることはない。

彼はマリナの茶色の髪を梳きながら、そっと言った。
彼女が眼を伏せて、彼の愛撫に似た梳きを受け止めている間に、囁く。

「この品で・・・君の言うところの傑作を描けるのかな。
マリナ。
今度、この道具を新たに発注するときは・・・『シャルルからマリナへ』と文字を変更することにするけれども。その時には、今の何倍もの時間がかかる手の込んだ品を作る。
だから。
・・・、その時まで君は待てるのだろうか。
・・・待ってくれるのだろうか」
そこで、マリナはおかしそうに笑った。彼が言った言葉をまた聞き流したのかと思ったが、彼女は茶色の瞳を彼の青灰色の瞳に近付けて、また微笑む。

「シャルル。後悔しないでね。
シャルルは、何度も・・・何度も追加発注することになるのよ。その度に、私は夢中になる。でも、わかっているのかしら。
・・・・それが、シャルルが用意してくれたから、夢中になるのよ。
一日中、考えるの。シャルルのことを。シャルルの用意してくれた色のことを。
ああ、私は私だけの時間は持ってはいけないのかしらね」
「当然だ」
彼は即答した。

そして、その次に・・・深呼吸する。一度だけ。彼は繰り返さないから。
だから、一度だけ・・・・青灰色の瞳を瞬かせ、白金の髪の下から、彫刻のような美貌を覗かせて・・・彼の恋人に挑戦する。

彼はそこで不敵に笑った。
「オレを誰だと思っている？
一日中・・・竟日、君を独占することができるのは・・・オレだけだ」
彼女は、そこで声を上げて笑った。
彼のファム・ファタルは笑う。
朗らかな、晴朗な声で笑う。
彼の陰鬱を吹き飛ばすような、激しい勢いで。
しかし、それは清々しい勢いであった。

彼女の一番ではなく、彼女の唯一の人に向かって。
彼の、ファム・ファタルは笑った。
愛のパラドクスについて、彼は苦悩するばかりであった。
けれども、彼女は違った。愛の矛盾について、彼女は眼を逸らさない。
どれほど矛盾していても、それらを飲み込み、包み込み、そして彼を・・・常に退屈させない。
マリナは笑った。そして言った。
「いやね、シャルル。私は、私だけのものよ。
・・・でも、そんなパラドクスは・・・何だか楽しそうね」

そしてシャルルは彼女に傾き、マリナは顔を上げて彼の帰邸のキスを受け止める。
・・・どんなに他に夢中になっても。どんなに、離れていても。
一日中・・・竟日、ともに過ごしたいと思うのは、目の前の相手であると言葉にする必要はなかった。

愛しさに。愛おしさに埋め尽くされても。
それでも、目の前の相手のことを考える。
そんな「ひねもす」を重ねていく。重ね続けていく。

シャルルは、マリナと唇を重ねながら、思った。

顔を傾け身体を彼女に寄せると・・・唇が出逢う。

こんな風にして・・・マリナのことを終日思い浮かぶのではなく、マリナの一日が・・・幸せであるように、と願うことが、竟日ということなのだろう、と。そう思う。

そして。
マリナが次に、何かを描くときには。
おそらく、タイトルは決まっているのだろう。

予感があった。予感というものを信頼していないが。
しかし、それは間違ってはいない。
なぜなら、彼はシャルル・ドゥ・アルディだから。
太陽が西から昇っても・・・彼は間違わないから。

この人を愛して、間違っていなかった。
彼はそう思った。
そして、予想する。

マリナがこれらの道具を使って何かを描く時には、タイトルは決まっている。

「ひねもす」

一日中、という意味だ。

そして、転じて・・・
「永遠」という意味もある。

彼は彼女と重なりながら、囁いた。
繰り返さない彼が、幾度も繰り返す言葉がある。

それが一日中続いているから。
彼女は彼に、永遠というものは瞬間の連続であるのだと思わせる。

永遠に君だけを愛している・・・・

そんな、彼の遠い昔に、彼女に囁いた言葉が。

今、現実となる。

（FIN）

幻日乃至白虹

幻日乃至白虹

史記　【鄒陽伝】白虹日を貫く
白虹事件が有名ですね。
「貫き」とありますが「横切る」という意味もあることから、白虹ではなく、幻日環（幻日とは異なる。）を指しているのではないかという説もあります。

■01

珍しい現象が出ているから空を見てご覧、と言われて、シャルル・ドゥ・アルディに促されるままにマリナがバルコニーに出て、言われたとおりに空を見上げると、目の弱い彼女は一瞬、眩しさに目を細めた。
そして次に室内との温度差を感じて、身震いをした。

今日は寒い。
無風状態で、陽射しが出ていても、かなり冷え込んでいる。

「眩しくて見えない」
「誰が直射日光を見ろと言った」

シャルルがそう言って、見るのはあちらだよ、と少し離れた場所を指さした。
彼に頭を掴まれて、太陽から少し離れた場所に浮かぶ、太陽よりかなり小さめの「もう一つの太陽」を目にして、あっと声をあげた。

「幻日だ。ああ、良く見えるな。・・・非常に珍しいよ。東京でこんな景色が見られるなんて。飛行機からはよく見かけるが・・・」
彼はそう言って薄く笑い、マリナと同じ方向の角度に、青灰色の物憂げな瞳を向けた。
太陽光を受けて、太陽のように明るく輝くそれを、マリナは息を呑んでみつめた。
寒さは忘れていた。

二人で出るには非常に小さいバルコニーだ。

マリナは彼に寄りかかるようにして、その幻の日を見つめた。
長らくここで暮らしているが、こんな現象は初めて見た。

「これ、バースデープレゼント？」
「自分で自分の贈り物を用意するほど奇特じゃないよ、オレは」
シャルルが少しむっとしたように言ったので、マリナは自分でわかっているじゃないの、と言い返そうとして口をつぐんだ。
やめておこう。

彼はどうにも・・・機嫌が悪いようだ。

日本家屋の様式について知らないわけではないはずなのに、小さなアパートに靴のまま上がり込みそうになったし、鍵がないと部屋の前で右往左往するマリナの面前で、どこからともなく針金を2本用意して来て、難なく開錠し、ふんと鼻を鳴らして「どうかしてる」と言い放ったりした。

日本の、マリナ・イケダのアパートで誕生日を過ごしたいとシャルルが言い出したのは、出発する3日前のことだった。
彼女はこの間日本から戻ったばかりだったので、シャルルのその申し出にひどく怪訝な顔をした。
なぜなら、彼から早く帰ってこい、と何度も辟易するくらいの催促を受けていたために、渋々予定を切り上げてアルディ邸に到着し、まだ荷ほどきも終わっていない有様だったからだ。

彼のバースデーにはあまり良い記憶がない。
マリナは溜め息をついた。
部屋に行きたいという申し出は何回かあった。
そしてもっと利便性の高い場所に引っ越しをしたらどうかと言われることもあった。

ほんの数日とはいえ、留守にしていた部屋は寒かった。
昔は暖房器具そのものを買うことが出来なかったことを思い出して苦笑する。

暖房をつけて、暖気がようやく室内を循環する頃、シャルルがいきなり窓ガラスを開けて空を見ろと言い出したので、マリナは彼に文句を言おうと思っていたところだった。
シャルルの奇行は今に始まったことではない。
彼の頭の中では高速でいろいろなことが処理されているから、彼女に結論だけしか言わないこともあったし、理由を話すようにと言っても、彼は非協力的だった。

「今日、出現するのは偶然だけれど・・・・気象状態からして、出そうだなとは思っていた」
シャルルはそう言った。

「幻日って言うのね」
幻の日、とマリナが言ったので、そうだね、とシャルルも言って、ようやく彼女に目を向けた。

■02

「そう。凶兆だ。古代から太陽は統治者を表す。・・・それがふたつ出るというのは、世が乱れるということで、大変な騒ぎになった」
天文や気象にも詳しいシャルルはそう言って、いくつかの文献の名前を口の端にのせた。
淡々と語ってはいたが、彼が何を考えているのかはわかった。

自分の半身と、それから・・・・一族が乱れると言って大変に混乱を呼んだ、ふたつの晄のうちのひとつが自分なのだと言いたげだった。
今は彼がその頂点に立っているが、きっと、この幻日を複雑な思いで眺めているのだろう。
冷気が部屋に入り込んで、断熱効果の期待がほとんどできない室内の温度を下げていく。
それでも・・・マリナは彼の物憂い様子をそのまま眺めていた。

日々忙しいシャルルは、マリナのように、日本にふらりとはやって来られない。
それでもこうして彼が希望を言い、そしてスケジュール調整をしてくるぐらいなのだから、何か理由があってここにやって来たのだろうと思った。

「残念だね、今夜は、雪は降らなさそうだ」
彼はそう言った。
温暖化現象で、東京はもう、ほとんど雪が降らない。
それなのに、誕生日に拘らないシャルルが、雪の誕辰（誕生日のこと）を言い出す理由に、マリナは心当たりがあった。
でも、それを彼に言ってはいけないと思う。

どんなに親しくても、どんなに愛していても‥‥‥寄り添うことは出来るが重なる事が出来ない部分がある。
そこは重ねてはいけないのだ。

どんなに・・・どんなにシャルルを大切に想っていても。
いや、決して手を離さないと約束した相手だからこそ、彼女は一生話すつもりはなかった。

物憂げな青灰色の切れ長の瞳が、彼女に向けられて、彼女は寒いね、中に入ろうよと彼を促した。
「明日の予定、全然考えてない」
マリナはそう言った。
「何もしなくて良いよ」
シャルルのテノールが返ってくる。

シャルルの誕生日をどこで過ごそうが関係なかった。
彼は何かを贈られても興味がないと言う。

その代わりに、マリナのアパートで時間を過ごしたいと言ってきた。
でも、この場所だけはどうにも落ち着かない。
ここは彼女がひとりで・・・長らくひとりで、自分の中だけの妄想のシャルルと向き合い続けた場所だった。
そして、シャルルでない男性をこの部屋に泊めたこともあった。

「それならデッサンさせて」
マリナが良いことを思いついた、と言って目を輝かせた。
彼が外出する気持ちがないのであれば、彼女は先頃から始めたシャルルのデッサンを仕上げようと思いついた。
「その申し出はノンだ。マリナ・・・デッサンを仕上げるのに、一体どれだけ時間をかけているんだ？」

呆れたようにシャルルは横目で睨んだ。

そして溜め息をついて、窓ガラスを閉めた。
しかしまだ薄手のカーテンは開けたままで、彼は両手を腰にあてて、じっと、空を見上げている。

「そうしたら、することがないでしょう」
「・・・・・・あるよ」
彼はその時になって初めて白金の髪を揺らして振り返った。

そして腰を屈めて、マリナの顔をのぞき込む。
彼女は茶色の瞳を少し大きくした。
彼のこういう仕草は非常に魅惑的ではあるが、マリナはいつまでたっても、こういった彼の・・・・彼女を見つめる熱い視線にまっすぐ応えることが出来ない。

彼はふわりと微笑むと、つぎに艶やかに瞳を近づけて来た。
軽く・・・啄むように、彼女の唇に触れる。
何度か軽く唇を重ねていたが、静かに彼女の肩に両手が置くと、シャルルは一気に彼女に深く顔を傾けた。
唇を押し開き、少しだけ声を漏らしたマリナに這い込んで浸す。
彼女に自分を絡めて、そして次に強く啜った。
彼のそんな方途に、マリナはぎこちなく戸惑いながら応える。
上品な瞳を少し開き、彼は彼女の甘い口付けを享受した。

ここは彼女の家だ。
そして、シャルルは彼女のアパートで初めて夜を過ごす。
いつもここまでだった。
シャルルは部屋の前までしか来ない。

それが、彼は彼女に無理強いしてまで入室しようと思っていない。
それは彼が自らに戒めを課しているからなおさらだった。

住人は気がつかない、独特の香りが薫じられた空間に、シャルルは自分の身を浸した。
この中には、彼の知っているあの人とマリナが甘やかに過ごした懐かしい空気も混じっているのだろうか。

「男と女が、部屋の中でやることと言ったら限られていると思うけど」
彼はそう言って、唇を離すと、彼女に言った。

■03

マリナが赤くなって、慌てて彼から躰を離した。
「シャルル、時差ぼけ？」
こういう言い方をすると、シャルルは露骨に嫌な顔をするのに、今回はそうではなかった。
「マリナ、オレに一日早い贈り物をしてもらえないか」
そう言うなり、まだ荷物をほどいて落ち着いてもいない部屋で、彼女の肩を抱いた。

「カーテン開いたままだよ」
「良いよ。見せつけてやろう」
「・・・・誰に」
「幻日の晄に」
冗談はやめて、とマリナが言ったが、シャルルは真顔だった。
そして彼女の額に形の良い唇を寄せた。

「オレは、冗談は言わないよ」
「シャルル、これは贈り物とは言わないよ」
マリナが困ってしまって、ついにそう言った。

彼女はシャルルとこうして肌を重ねる都度、いつも躊躇する。肌を重ねていく都度、戸惑う。
彼は一体、マリナを介して誰に何を語りかけているのだろう。
シャルルはまるでこの空間で交合することが、何か意味があるようだと思っているようだ。

「シャルル！シャルル・ドゥ・アルディ」

彼女は彼の手の動きが止まないことを知ると、少しだけきつめの口調で彼の名前を呼んだ。

「オレは獣じゃないからね。・・・名前を呼んでも命令は聞かないよ」
「獣じゃないなら、名前を呼んだら返事をしてちょうだい」

マリナはそう言い返して、シャルルの広く逞しい胸の中から抜け出した。
そして彼女は無言で作業机の上の画材道具達を片付け始める。
シャルルが来訪するとは思っていなかったので、ここを出発するときにはそのまま出しっぱなしにしてあったものばかりだ。
小物達が、彼女の小さな掌の中でぶつかって小さな音を立てていた。

「とにかく、ここにはシャルルをもてなすものが何も無いから・・・・
何か、買いに行くなり、ホテルに戻るなりしよう」
本当に何にもないの、とマリナが困って言った。
シャルルはフランスの要人だ。
だから、不特定多数が出入りする公共施設より、こういった、誰からもアクセスされない場所に居る事の方が彼にとっては、本当に心休まるオフなのだとわかっていたけれども。
それでも、ここにはシャルルは居たくているのではなく、何かを確認しに来ているという気がしてならない。

この場所は、そういう場所ではない。
誰かと生活を共にするための空間ではない。
だから、シャルルがそこに踏み込みたいと言うのであれば、断りはしないが、それでも彼女にとっては酷く困った状況になってしまったとしか言いようがなかった。

白金の髪を揺らして、彼は首を振った。
そうして、背中を向けたマリナに近寄って、そっと肩に手を当てる。

「いらない。外は寒い。・・・今日から明日まで、ずっと、ここでこうしていよう」

シャルルの言葉にマリナが返答できず、ただ、それには賛同できないと言うかのように黙っていたが、やがて口を開きかけたとき。
それよりも一瞬早く、シャルルが彼女の肩を抱いて、今度は彼の広い胸の中へ強引に引き寄せた。

「否定の言葉は受け付けない」

シャルルはそう言って、マリナの額にキスをした。
彼女は彼から逃れようと身を捩ったが、今度は彼に完全に捕捉されていて、身動きが出来ない。
一歩後ろに足を引いたが、彼女の目論見は成功しなかった。
机にあたって、机上の小物達が音を立てて派手に倒れる。
そして彼女の手に持っていた同じような小瓶達も、シャルルの背中の上で小さな振動を彼に伝える。

「シャルル、どうしてここにシャルルが来たいと言い出したのか、私はまだ聞いてないよ」
彼女は小さく溜め息をついてそう言った。

「マリナの生活を知りたいから」
彼は即答した。
「でも昔と大して変わらないらしい。・・・整理整頓できないのは改善した方が良いよ。
効率化を阻む最大の原因のひとつだから」

心の内を整理しろと言われているようで、マリナは困り果てて頭を振った。

「私の何を知りたいと思うの？」
「全部」

彼は「マリナが欲しい」とか「マリナの全部を知りたい」とは決して言わない。
彼女の心は彼女だけのものだ、と昔、宣言されたから。

すべてを知ることや彼女を拘束することは、彼女を得たことにならない。
マリナは自由だ。
いつもふらりと日本に行き、そして計画立ててパリに戻ってくることはない。
帰るところはシャルルの居るところだと言うけれど、彼女はいつも彼の傍らにいるわけではない。

彼女は言った。
「ラッカーの瓶が危ないから。・・・シャルル、離れて」
マリナがそう言って、今度こそ彼の腕の中から逃れた。

「シャルルへの贈り物は、いつも苦労するわ」
彼女はそう言って、シャルルに背中を向けた。
シャルルは目に見えない、形になかなか表すことが出来ないものばかりを欲しがる。

彼には物欲はないから、精神的充足を求めており、それを口に出して欲することができるのは、マリナ・イケダという人物ただ一人なのだということを、マリナ本人がわかっていながらも・・・・それでも時々戸惑ってしまう。

「ほら、シャルルが邪魔をするから・・・・手が汚れてしまった」
マリナはそう言って、ほとんど用を成さない収納棚にラッカーを戻した。
せめて、この塗料臭が溢れる部屋ではシャルルが落ち着かないだろうから、何とかスペースを確保しようとしていた。
■04

「・・・シャルルはここに何を探しに来たの？」
確認しに来たの、とマリナは言わなかった。
背中を向けて、次々と片付けていく。

「ほら、私だって片付けをしようと思えばできるのよ」
彼の苦笑は聞こえないフリを決め込んだ。

冗談交じりに、そう言った。

彼の言いたいことは何となく理解できた。
シャルルは、彼の知らないマリナを知りたいと言っているだけではなかった。

「それにしても、君の部屋は相変わらず雑然としすぎだな」
辛辣な口調でシャルルがそう言った。
そうだった。
彼は昔、マリナの部屋に忍び込んだことがあった。

彼は鍵を無断であけて部屋に入り込み、そして彼女の秘密を盗んだかのような心の痛みを少しだけ感じながら・・・彼女を知りたいと思った。
その時のマリナは、まだ、自分の領域に踏み込ませない人物だった。
シャルルの心には簡単に踏み込んだのに。
彼女はシャルルでない別の男を愛し、そして毎日を生きていくだけで精一杯の日々なのに、まったく堪えない強靱な生命力の持ち主だった。
それは今でも変わらない。

その時に、彼は彼女の帰りを待つ間・・・・
部屋の中の彼女の息吹に圧倒されそうになった。
マリナの香り、彼女の使いかけの画材道具、そして・・・そして、いつでもあの男が目覚めたときに出立できるように、見える場所にパスポートが置いてあった。
不用心だよ、と言って笑ったことを思い出した。
この狭い空間で、彼女が日々何を思ってどう過ごしているのか、浮かんでくるようだった。
自分でない誰かを思い浮かべて過ごす様を想像して、酷く苦しくなった。
それでも、帰ろうとは思わなかった。
そこに居れば彼女に逢えるから。

その時の伝えなければならなかった用事は、彼にとってもマリナにとっても重要だったけれど、それでもシャルルがそこでじっとマリナの帰りを待つ必要はなかった。
けれども・・・シャルルはそこから移動しなかった。
日本に滞在している旨をメッセージで残せば良かった。
でも、逢いたかったから。
直接、マリナに伝えたかったから。

彼はその時から、彼女にすべてを捧げる用意をしていた。

あの男が行方不明だと聞いても、彼女はシャルルと一緒の方が良い、と言ってくれるのではないかと妄想した。そうしたら、有無を言わさず連れて行くつもりだった。
でも、それはシャルルの愛したマリナではない。
そうではないマリナだからこそ、彼女を運命の女と定めたのに。
自分は何を考えているのだろう・・・・

矛盾する考えを巡らせながら、シャルルはそこで時間を過ごした。

口ではいろいろ言うが、マリナは「それなら全部あげる」と言うと、「いらない」と言う。
だから、シャルルがマリナに「すべてを君に」と言ったことに対して、ある日「いらない」と言い出すのではないのかと思っていた。

今でも、隅々まで記憶している。
あのときの過ごした薄暗い空間の配置は忘れない。
何年も経過したから、その部屋の様子と今はまったく違っているが、彼女の好みや物品の置き方などの傾向は変化がない。

そうか。

シャルルは呟いた。

自分は、また、誰かが自分から離れていくことが怖いのかもしれない。

生まれ落ちたことを喜ぶべき人々は、本当に自分の生を喜んでは居なかった。
もうひとつの命のことを考えていたはずだった。
そして、最も愛された者ではなかった。
誕生日が来る都度、思い出すから憂鬱だった。
おめでとうと言われても心から喜べなかった。
もう、喜ぶという感情さえ、なくしてしまったと思っていた時期が長かった。
マリナが愛したあの男だけが、損得勘定なしに無償の気持ちでおめでとうと言った。
それだけが嬉しかった最後の誕生日の記憶だった。
あの日のことは今でも苦しく思う。

だから、誰かにねだることはしない。
誕生日の贈り物は何がよいか希望を口にすることはしない。

また、あのときのように傷つきたくなかった。

「そうだな・・・忘れていたものを取りに来た」
「シャルルが忘れる事なんて、ないでしょう！」
マリナが振り返った。
何を探しに来たのか、というマリナの問いに、シャルルはそう答えて、マリナの驚愕にシャルルは唇の端を少しあげて、笑った。
「オレの忘れ物じゃない」
「それなら、誰の忘れ物？」

さあね、と彼は言った。

「シャルル。私はシャルルの謎かけに付き合わされているの？」
ああ、これだから頭でっかちの人は困るわ、と彼女は不平を漏らした。

「これくらいの会話について来られないようなら、まだまだだね、マリナ」
何が『まだ』なのよ、とマリナが独り言を言った。

シャルルはまた窓ガラスに近寄って、冷気を遮断しきれない窓から、空を見上げた。
もう、幻日は見えてなかった。
それが見える瞬間はほんの僅かな時間のことだ。

「マリナ。・・・幻日は凶兆と言われている。白虹も同じで、世を乱すと言われている。
オレは確かに・・・幻日なんだと思うよ。今でこそ沈静化されたが、アルディに争いを招いてしまった」
「あれはシャルルが原因ではないでしょう」
マリナが慌ててそう言った。

彼が当主に就任するまでに、長く苦しい時期があったのはマリナも知っていた。
そしてそんな苦闘の最中の彼の背中を見送ってしまったことに、今でも心が痛む。
強い精神力があり、誇り高い彼だからこそ為し得たことであるが、それでも、今の彼に影を落としたことは間違いない事実だった。

「陽日がなければ、幻影も出ない。あの偽りの晄の環がオレだとは思わないけれど、あの幻を生み出しているのは、太陽なのだと思わざるを得ない」
彼は言った。
太陽の晄が幻を作るのだと。
だから、幻日がいけないのではない。
罪がないと自分は言いきれるだろうか、と彼はまだ苦悶していたのだ。
その一方で、マリナが居なければ惑うこともないのに、マリナという太陽がいなければ自分は存在することのできない幻日だと彼は心の内で囁いた。

「だから、マリナ」
彼は空を見上げながら言った。
間もなく、陽が沈みそうな柔らかい茜色が、彼の整った顔を照らし出した。

「オレに、その、忘れ物をくれないかな」
■05

「良いわよ」
あっさりとマリナが言ったので、今度はシャルル・ドゥ・アルディが訝しげな顔をした。
「マリナ、内容を聞いてないのに許可するとは、随分大胆だね」
それとも、君は「いらないから」と言うのかな。
少し悲しそうに、シャルルは呟いた。

彼女は棚にラッカーの小瓶を押し込むと、手が汚れたと言って、簡易キッチンに足を運び、水を流しながら手を洗い始めた。

「だって、シャルルは欲しいのでしょう？それ」

今年の贈り物を悩まなくても良いじゃないの！とマリナが言った。
彼女はシャルルに背中を向けているので、表情がわからなかった。

きっと、泣きそうな顔をしているに違いない。
マリナは人の目を見ないで話をすることはない。
あるとすれば、彼女が心の内を吐露するときと、泣きそうな顔をするときだけだ。
ひとりで泣くな、と言ったシャルルとの約束を守っている。
だから、悲しいと思う気持ちも、涙も、堪えているのだと思った。

マリナ、ひとりで泣くな、とは言ったけれど、オレの前で泣くな、とは言わない。

「オレは君を泣かせるためにここに来た訳じゃないよ、マリナ」
彼はそう言うと、溜め息を漏らす。
後ろから抱き締めてやることは簡単だったが、彼はそうしなかった。
それは彼女が望んでいないと思った。
あの男と同じ愛し方は、シャルルにはできなかった。
マリナ蛇口を捻って、マリナが手元にあったハンドタオルで手を拭きながら、シャルルに向き合った。
勢いよく振り返ったので、彼女の茶色い髪が揺れた。

「あのね、シャルル」
マリナの顔を見た。
彼女は意を決したように、シャルルの顔を見た。

「シャルルは、私がこの部屋にシャルルを入れたくないと思っているでしょう」
「違うのかい？」
彼は苦笑して言った。マリナが話し出すのを待った。
世の大半の者は、過去の恋は捨て去るか、忘れ去る。
そうできない者は、こうしてひとつところに留まり、思い出を抱えて生きていく。

「確かに、ここでの私は、シャルルには見せられないわね」
マリナがそう言った。
ほんの数歩、足を出したら彼女に届くのに、どうにも遠い距離に思える。

あの男を忘れろとは言わない。
彼にとっても大事な友だ。
だからこそ、マリナはいつもシャルルに対して躊躇っているし、シャルルもマリナにはいつも・・・直接的な表現を用いて彼女の気持ちを確認することはしない。

「ここは私が長い時間、シャルルを想って過ごした空間だけれど・・・たずねて来てくれる友達を迎える場所でもある。
逢いたい人に逢えなくなると困るから。私はここを去ることが出来ない。それにね、シャルル」

彼女は窓辺に立つ、美しい人を見た。
茜色の晄を受けて、白金の髪が輝いている。
精悍な頬にも晄が注ぐ。

陽光が彼を祝福しているようだった。
何度も生死を彷徨って重傷を負った彼がこうして生きていることを、大事だと想ってくれるように。
シャルルがこうして生きていることを喜んでいる人が居る事を彼が受け入れてくれるように。
ひとつひとつ、思いを込めて彼に語りかけた。

マリナは自分の手の平を上に向けて、両手を差し出した。
「ここに居る間の私は、指が汚れている。パリに戻ると、私は真っ先に何をすると思う？
ラッカーで汚れた手を洗うのよ。
・・・・・どんなに装っても、どんなに着飾っても、指先はいつも汚れたままだから」
彼女はそう言って、シャルルに近寄った。
先ほど洗浄したのに、落ちきれない色が、彼女の指先に乗っていた。
シャルルの瞳と同じ、青灰色の顔料だった。

それを見て彼は察した。

呼吸を止めていたシャルルは吐息を漏らす。
青灰色の瞳が揺れる。
彼の双眸がマリナの指先に注がれた。

彼女はいつも短く整えられた指先をしている。
そしていつも少し荒れている。
水仕事をしないのに、なぜそうも荒れるのかと言って、彼は彼女の指先に唇を寄せたことがあった。
そう言うと、マリナはいつも顔を赤くして、家事はしてないけれど、女性の手は荒れやすいのだ、と言って彼の唇から指を引き抜いていた。

でも、シャルルは知らなかっただけだった。
日本で、彼女がひとり静かに誰を想いながら、何を想いながら・・・・遠く離れたシャルルを思って何をしているのか、今の言葉から理解した。
想像のシャルルを書くことはしないと言ったマリナは、パリでデッサンをした後、こちらに戻って来た折に何をしているのか、それでわかった。

「また、描き始めたんだね」
「そう・・・・・

そっと、彼女の手の平を細く長い神経質そうな指と手の平で包んだ。
冷たくなった指先を、彼は自らの指の腹でひとつずつゆっくりなぞっていく。

マリナは思い定めたように言った。

「シャルルだけよ。シャルルにしか触れることを赦していない私の秘密。
・・・・私の爪は柔らかくて、ネイルをして補強をしないと割れてしまうくらいだけれど、それよりもシャルルに触れてもらえない方が、もっと辛い」

彼女が先ほど、慌ててラッカーを片付けていた理由がわかった。
色の種類を見れば、マリナが何をしているか、シャルルに悟られてしまうからだった。

「もう・・・今年の贈り物は決まっていたし、後便で送ったから・・・今頃シャルル・ドゥ・アルディ宛てに、パリに到着している頃だわ」
彼女は少し怒ったようにそう言った。
突然彼が日本に行くと言い出さなかったら、彼女は完成したそれをシャルルに手渡しするつもりだったのに、と文句を言った。
マリナがどうしてこちらで過ごすことに賛成しなかったのか、今になってわかった。

「パリで彩色すれば良いのに」
シャルルがぽつりとそう言うと、今度はマリナが苦笑した。

「何をしているのか逐一聞きたがる人に、あなたへの贈り物を彩色しているのよ、と言おうものなら、折角の誕生日へのサプライズが台無しでしょう。だいぶ前から準備していたのに」

それに。
彼女は言った。

・・・・シャルルに触れてもらうことの出来ないくらい汚れた手指で、あなたを抱き締めたくなかったから。

そう言ってマリナは恥ずかしそうに笑った。
彼女は幼く見えるから、この時の笑いは昔の少女の時の笑顔のままだった。

「私は、シャルルが幻日だとも白虹だとも思わない。たとえ、そうだとしても、シャルルがそうだと言っても、私の知っているシャルル・ドゥ・アルディはたったひとりよ」
そう言いきった。

シャルルは言葉に詰まって、自分を見つめる自分が定めた運命の人を見つめた。

そうだった。

シャルル・ドゥ・アルディは狂っていない、目の前に居るシャルルだけだと言い放った彼女を思い出した。
事実は関係ない。
真実を守ることは重要ではない。
彼が言ったことを信じると言った彼女を生涯愛そうと誓ったことを思い返した。

シャルルは柳眉を寄せて、彼女の指をそっと持ち上げて、形の良い唇に寄せた。
まだ指先は冷たかった。
「シャルル、駄目」
マリナが手を引こうとしたが、彼はマリナを離さなかった。

「ああ、マリナ、帰ったら・・・・帰ったら、それをオレに見せてくれ」
「コンクール入賞者に見せるのは恥ずかしいけれど」
マリナがそう前置きした。
「物でない何かをシャルルが欲しいと言うのであれば、私は私にしか作ることのできないものしかあげられない」
「最高の贈り物だよ、マリナ」
彼はそう言って微笑んだ。

彼女は自分のささやかな秘密を明かした。
長らく、彼女が悩んできたことはいくつかある。
本当のシャルルの深淵にまで辿り着いていないのに、彼の絵を描いていいのだろうかといつも考えていた。
マリナがいつも躊躇ったように彼に応える理由も少しだけ理解できた。

でも、もっとシャルルに言っていないことも彼が把握していないこともあるだろう。
それを知ることより・・・事実を確認するより、彼女の愛を信じようと思った。

誕生日のたびに何度も苦悶した秘めたる想いを彼は繰り返し味わうだろう。
マリナに憂いを与えるのはやめようと思ったのに、また、彼女を困らせて泣かせるかもしれない。

それでも・・・・
それでも・・・・
オレだけだ、マリナ。
オレだけにしてくれ。

君を泣かせて良い男は、これから先はオレだけにしてくれ。

その言葉は口に出さなかった。

やがて、タイトルは決めた、と彼女は言った。
「幻日から白虹」
彼女はそう言って、なんだかあまり意味のない言葉のように聞こえるね、と言ったので、シャルルはくすりと笑って提案をした。
「幻日乃至白虹」
「良い響きだわ。・・・・それでは『幻日乃至白虹』をシャルルへ贈ります」
マリナはそう言って微笑んだ。

幻日でも白虹でもない、彼女が夢想したシャルルでない、本当の彼。
マリナという晄を浴びて、ほんの一瞬だけ姿を現す幻の現象。
凶兆だけれども、その言葉を思い出す時、いつも彼は彼女の言葉を思い出すだろう。

真実を守るのは簡単だけれど、その人を信じることは難しい。

でも、マリナはそれを成し遂げた。

だからこそ、今でも、彼は彼女をこよなく愛する。
若い頃に浮かされた熱だけが残っているのではない。
時折見える気象現象のような気紛れでもない。
彼がマリナを今でも愛し続けることができるのは、今でも、マリナは彼に何かを与え続けるからなのだと思った。

「誕生日に渡したかったのに」
マリナがまた不平を言ったが、シャルルはいいや、楽しみは待つことも含まれる、と言った。
「パリに戻るのが楽しみだ」
彼はそう言った。
彼はとうの昔に、何かを待ちわびることはやめたはずだったのに、それを待つことで心が浮き立つ自分が居る事に少し驚嘆した。

「今度は白虹を見に行こう」
「いいけど・・・・科学的解説は、頭が痛くなるので、省略してね」
「そう言うときにでも言わないと、君は学習しないだろ」
■06
「それにしても、忘れ物って何？」
マリナがそう言った。

室内はもう薄暗くなり始めて、だんだん冷えてきた。
「ああ、こんな寒風の入り込む建物にいつまで住んでいるんだ、マリナ」
彼は高慢にそう言った。
いつもの辛辣なシャルル・ドゥ・アルディだった。

マリナの手を離すと、彼は上着を手にとって、こんな場所で食事はできないと言い放った。
「ホテルに戻るぞ、マリナ。車を呼べ」
「ちょっと・・・その態度は何よ」
マリナが呆れて腰に手を当てて抗議した。
彼は白金の髪をかき上げながら、ちらっと青灰色の瞳をマリナに流す。

「忘れ物はもうじきやって来るから。マリナ、オレを満足させてくれよ」

彼の言っていることがわからず、マリナが首を傾げたとき。

玄関の扉を、乱暴に拳で叩く音がした。
こんなたたき方をする人物は、マリナはこの世で3人しか知らない。
ひとりは世界的音楽家の彼女。
もう一人は甲府に住む彼女の幼なじみ。
そして最後のひとりは・・・・

「ダイ。もうちょっと静かにノックできないの？
改装の時には、ここにはチャイムというものも設置されたんじゃなかったかしら」
マリナが少し大袈裟に溜め息をつきながら扉を開ける。

そして、目の前のむっつりとした顔で立ち尽くす、彼女の古い友達であり、ここの大家の息子でもある彼は、マリナを冷たく見下ろした。
その仕草が、彼女の恋人にそっくりだったものだから、マリナは前後から同じような冷凍光線を浴びて、扉を開けた事による冷気からもたらされるのではない、別の寒気を覚えた。

ああ、一体、誰の影響かしら。
彼女より背が高くなり、少し声が低くなったダイは両手に荷物を抱えていた。
部屋に戻らずに、そのままこちらに立ち寄ったらしい。

「この間パリに行ったんじゃないの？」
ダイはそう言って、マリナの部屋に上がり込んだ。
玄関の入り口に荷物を置くと、持っていた楽器ケースだけは大事そうに抱えて室内に入る。
「ちょっと、ダイ・・・！今、お客さんが・・・」

「そのお客さんに呼ばれて、オレは部活を切り上げて帰って来たんだけれど」
むっつりしながらダイがマリナを睨んだ。

「オレはこれでもトップ奏者だからさ。抜けると、冷たい目で見られるんだよ。もうすぐ定期演奏会だしね・・・・」
そう言って、彼は目の前の彼よりもっと背の高いシャルル・ドゥ・アルディに近づいて、ちょっと手を挙げて挨拶をした。

彼がフランスの華と呼ばれる要人であることを知っても、ダイは変わらずに相変わらず生意気な態度でシャルルに接する。

「で、シャルル。オレの頼んだ物を持ってきてくれたの？」

それをどうも、シャルルは文句を言いながらも気にいっている節があり、マリナの居ないところで密かに連絡を取っているのではないかと疑っていたが、これで確信をした。

シャルルは挨拶もできないのかと文句を言ったが、胸ポケットからシガレットケースより小さい河ケースを取り出すと、ダイに投げて寄越した。
彼は小脇に楽器ケースを抱えていたので、それを無事にもう片方の空いた手で受け止めると、危ないな、と文句を言った。

「今の時期は乾燥と湿気のバランスに気を付けろよ」
「おお、最高級のリードだもんな。さすがはシャルル・ドゥ・アルディだ」
ダイはそう言って中身を開けた。
そこには宝石のように等間隔に収められた、ダイの必需品が入っていた。
彼の音色の素晴らしさは、このリードの加工技術から来ている。
彼は自らそれを削って調整するのだが、材質の変わった物を求めて、シャルルに依頼していたのだ、と言っていた。
「オレ達、WEB仲間なんだ。シャルルのところのOSはなかなか快適だぜ」
「いや、おまえのカスタマイズが良いのだろう。この間のバグ指摘は適切だったぞ」

・・・意味不明の言語が飛び交うので、マリナが言葉を失って、口をつぐんだ。
いつもはたった独りしか居ない空間で、酷く広く感じるのに、今はなぜか息苦しい。

「で？オレを呼び出した訳はなに？
餌で釣られて来てやったけど・・・・シャルルのバースデーに部外者を呼び出すなんて無粋な真似、シャルルがわざわざするからには、何かあるんだろ」
ダイがそう言ったので、シャルルはせっかちなところはマリナの悪い影響だな、と言って冷笑した。
マリナよりシャルルの方が知能が高いと言わんばかりのダイの物言いにも呆れて声が出ない。

「・・・・しかも、カーテンも引かずに、窓辺でいちゃつきやがって。丸見えだぞ、二人とも」

「ダイ！」
マリナが悲鳴をあげた。
そしてシャルルに助けを求めるが、彼がにやにやしているので、シャルルの思惑を悟り、低く唸った。

「シャルル・・・・ひょっとして、わかってて・・・・」
彼は涼しげな顔をして返答した。

「いいや、オレは単に幻日を見たいと思っただけさ。それに、通りから丸見えで、下校途中のダイに目撃されるくらい、はっきり見えるとはわからなかったよ。この部屋には久々に入るしね」

彼女はシャルルの名前をフルネームで呼んだ。

「マリナ、さぁ、忘れ物だよ。・・・・君は、ダイにオレのことを『ともだち』と言って紹介しただろ。
オレは執念深くてね。間違った表現を正してもらうために、わざわざ、遠路はるばる日本へやって来た」

茶色の目を見開いているマリナに、シャルルは挑戦的に微笑む。
「良いよ、と君は言ったことも、ちゃんと覚えているよ。オレは決して忘れないからね。
・・・・さぁ、マリナ。
オレのことをダイにきちんと言ってみろよ。
以降、オレの知らない人にオレを紹介するときは同じようにすること。
オレのネットワークを侮ったお仕置きだよ」
彼はそう言うと、ダイに向かってちょっと笑った。
「ダイ、たまには余興でオレにも何か演奏してくれよ。ダイの演奏でワインを飲みながら夜景を眺めるのも悪くはない」
「え！シャルルはいつも最低ランクでもロイヤルスイートにしか泊まらないだろ。そこのゲストルームに泊めてくれるの！」
ダイがぱっと顔を明るくした。
すぐに着替えてくる、と言って荷物を持ったが、シャルルがそこで声を漏らして笑った。

「それはマリナがオレに満足するバースデープレゼントの言葉を用意することが出来たら、という結果次第だな」

「シャルル！ちょっと！」
先ほどの彼の狂気のよう眩は、すでに消え失せていた。
ひでぇ、と口悪く言って、ダイはマリナを睨み付けた。

「マリナ、ほら。オレはちゃんと証人になるからさ。
シャルルはマリナにとって、友達じゃないだろ？」

そう言われると、ますます意固地になって、マリナが口をつぐんでしまう。
顔はすでに真っ赤だった。
唇を半開きにして、わなわなと震える様を、意地悪く見つめる青灰色の瞳と、悪戯好きな理知的な黒い瞳が面白そうに観察していた。

「知らない・・・知らない知らない！」
マリナがそう叫んだので、シャルルは肩をすくめた。
ダイも真似をして、大袈裟に溜め息をつく。

「素直じゃないね」
「それがマリナ・イケダだから」
「シャルル、寛容だね・・・・」
「ダイも大人になればわかるさ」
「大人になってもわからない人がそこに居るけれど」
「あれは反面教師として学んでくれ」
「了解。・・・・シャルル、腹減った」
「そうだな。・・・・それではオレ達だけでも先に行こうか」

気が変わったと言ってシャルルは妖艶に微笑んだ。
「マリナ。戸締まりきちんとして来いよ。それから、ディナーを一緒に済ませたいのなら、そのラッカーまみれの手も洗って、身なりを整えてから来てくれ」

シャルルはそう言うと、ダイと一緒にさっさと部屋を出て行ってしまった。

残されたマリナはぽかん、と口を開いたまま、今の顛末を眺めていた。

何よ・・・何よ！
あの男達は一体、何を考えているのか、さっぱり理解できない。
何もないからと言っているのに、それでもやって来たシャルルの意図が今になってようやくわかった。

彼は仕返しに来たのだ。
マリナは彼の家の家訓が「やられたら倍返し」ということを思い出していた。

そして、自分を置いてさっさと待たせている車に乗り込んで行ってしまったであろう彼らの戦略にまんまとはまってしまった自分の愚かさを悔やんだ。

シャルルは自分のことを「恋人」と紹介しないことに腹を立てていたのだと思った。
だから、日本に居る時のマリナの態度を確認しにきたのだ。
その見張り番役が、おそらく、楽器部品で買収されたと思われるダイなのだろう。

あああああ！
シャルル・ドゥ・アルディ！
ダイ！
覚えてらっしゃい！

マリナが地団駄を踏んだ。

今年の彼のバースデーは、賑やかなものになりそうだった。
ダイは昔のあの人を思い出させる。
きっと・・・ひとりで30人分くらい、騒ぐのだろう。

そう思った。

彼女は急いで上着を着て、家の戸締まりをし、先ほどまで白金の髪の恋人が佇んでいた窓辺に近寄り、カーテンを勢いよく閉めた。

（FIN）

汐の華

■01

波の裾が広がっていく様を見つめていた。
満ち潮になっていく時というのは、入り潮の時よりもその様子がはっきりと見て取れる。乾いた砂がひと波、またひと波と寄せて返す毎に、残されていく色濃い砂が増えていくからだ。

辺りは、まだ仄暗いというには早い時間だった。しかし確実に空は色が変わり、風の向きが変わって・・・これからやがて空は満天の星を随える時刻を迎えるために、徐々に色調を変えるために準備を始める頃だった。

どこまでも粉雪のように白い砂が続く海岸が・・・遥か向こうまで見える。優しい波音と夏の香りを乗せて、潮気を含んだ風が海のほとりに到着するころ。
マリナ・イケダは突如湧き起こった風に髪を巻き上げられて、目を瞑った拍子に、打ち寄せる波飛沫が頬にあたって・・・屈んでいた躰を起こした。
飛沫が目に掛かるまえに瞳を閉じたので、瞑っていて良かったと思ったが、次の瞬間には、残り惜しい声をふんだんに漏らしたので、少し後ろを歩いていたシャルルはからかいの声を上げた。
「上げ潮（満ち潮のこと）の時に、顔を近付けすぎなんだよ」
「でも・・」
マリナは顔を掌で拭いながら、不平を述べる。
「潮に乗って、魚が見えたの。・・・エメラルドグリーンのとても綺麗な小さな魚の群が・・・」
「この後のディナーは、先ほど釣上したばかりの魚のムニエルだそうだ」
携帯電話の電源をオフにしながら、彼はそう言った。シャルルは自分の用事があるときだけ、それを使用し、後は切電する。特にこうしてマリナ・イケダと一緒に居るときには、いつもそのようにすることにしていた。
「シャルル」
マリナが濡れた髪を背中に流した。
「私が話をしているのは、綺麗な魚が美味しそうだったということではない」
彼は皮肉たっぷりの微笑みを浮かべて、辛辣に彼の恋人をやり込めた。
「観賞用の魚と食用は違うって？」
シャルル・ドゥ・アルディ。
彼女が彼の名前を呼んだ。彼女が怒る顔が見たくて敢えてそう言っているのだとマリナは承知しているのに、それでも彼の思い通りの表情を見せてしまう。それが悔しいのだと彼女が言うが、本当はその悔しい顔が見たいのだ、とはシャルルは彼女に教えてやらないことにしていた。
マリナの、良く変わる表情の動きを観察する。感情の起伏が激しいということではない。小さな事でも感心したり、ささやかな事で喜び、そして彼女はいつも・・・シャルルを驚かせる。
彼のファム・ファタルは、少し不満そうに言った。

「シャルルは泳がないの？せっかく・・海に来ているのに」
「地球の何パーセントが海に覆われているのか、よく考えてから言うことだな」
シャルルがそう言うと、マリナが掌の水滴を振り解きながら、彼に背を向けて砂に埋まった脚を引き出し、そしてまた歩き出した。
腰に手をあてて、その両の指先には彼女の小さな沓が乗っており、踵を天に向けられていた。

裸足で砂浜を歩きたい。

純白の砂路を見るなり、彼女がそう言いだしたので、遊泳は持ち越しにすることを条件に彼は散策を承諾した。もう日が陰るので、海水温が下がってくる頃だ。
彼女は泳ぎが不得手の割に・・海を焦がれる傾向にあった。

■02

「海はどこにでもあるし・・・・今度行くところは海ばかりの場所だから」
シャルルは言葉を付け足した。彼は大変に知能が高いが、それ故に語気が素っ気なくなり短い会話しかしない。大変に誤解されやすい気難しい人物であると言われているが、決してそうではなく、繊細で幾度も傷つきそれでいて人の世に留まる勇気を持ち合わせている闌ける魂を持っている。

彼女が海に来たいと言う。遊泳が得意ということもでないのに、彼女はそれでも夏には海が良いと言う。
限りある時間の中で、こうして夏を過ごすための時間を捻出することには苦痛を感じない。
時折、何かを思い出しては、彼女の口から出てくる途方も無い願いを、それでも叶えてやりたいと思う。
どんなことでも。どんな時でも。
もう一度やれ、と言われたらやるだろう。
死せる魂と肉体を蘇らせるくらいのことで彼女が安らぐのなら。

だから。
幾時間も移動のために費やすくらいなら、近くの私邸や湖や海岸に行けば良いのに。
シャルルは何も言わずそれを実行した。

・・・彼女は日本の海が良いと言う。

マリナ・イケダは日本で生まれて育ったので、彼女がこの国を恋しがるのは無理もない事である。リアス式海岸が多く、日本の海は場所によって様々に形態を変えて存在する。由々しき事態により遊泳が禁止されている地区や海浜として脚を踏み入れたいと思うような場所でなくなってしまったところ

が多く見受けられたが・・・それでも、このように、目の前に広がっている白い砂浜が続く長い海岸線を保持しているところはいくつかあった。

マリナの願い事はいつも突拍子もない。
更に、そういった時には、「どうしてそうしたいのか」という理由について語らない時が幾回かあった。
今回もそうであった。
「思いついたから」と彼女は言っただけだった。

「海水浴が趣味だとは知らなかったよ」
シャルルは再び遠回しに彼女に海を訪れる理由を尋ねたが、マリナは声を漏らして笑ってその言葉を受け流した。
「シャルルが今度の・・・長期で不在にする仕事の前に休暇が取れるのであれば・・・・直前のオフは海で過ごすのが良いと思いついたの」
彼女は背中に沓を持ったまま、波を軽く蹴り上げながら波飛沫と戯れている。時折、満ち潮に乗って魚たちが近くまで寄ってくる様に、感嘆の声を上げていた。

彼の業務は多忙を極めており、彼の判断を求める案件が山積しているが、それをマリナに言うことは決してしない。自らが捻出するものであるものについて、そうできない嘆きを誰かに言うつもりはない。これはマリナでない者に対してもそうであった。
彼女に彼女だけの時間があるように、シャルルには彼女のことだけではない多々発生する思索を処理しなければならない時間がある。

「シャルルは、シャルルだけの時間を持っても良いと思うよ」
彼女はぽつりとそう言った。
最近になって、そう言うことが多くなった。

彼が長期の出張に出る、と言った少し後に彼女はここにやって来たいと言ったので、おそらくシャルルの長い不在が彼女に何らかの憂いをもたらしているのだろうと思った。しかし、その場所に彼女は連れて行けない。
遠く離れた離島の・・・未開の地とでも言うような場所に設置されている海洋研究所に招かれて調査に行く。サンプルを送らせ、集められたデータを元にして最新の機器に囲まれて分析するだけで済むのであればそうしたいところだが、電波塔が塩害によって破損し、大容量のデータ送信が出来ないという。
まだ発見されていない原種とも新種とも言えるような生命体の宝庫を直接見て、判断する。
そこに一度踏み込んでしまえば、彼はマリナのことを考えずに、調査に没頭するのだろうな、という予想がついていた。マリナを愛していることを忘れるわけではないが、彼の決断や結論を待っている

者達が居る。

波が打ち寄せて、彼の少し前を歩いている彼女の足首を完全に海水に埋めてしまう。
シャルルはビーチシューズに入り込む海水温が少し低いことに気がついた。間もなく夜が訪れる。
空を見上げると・・・・強い紫外線を伴って自由に天を君臨していた太陽の光は薄く淡くなっていた。

■03

朝焼けも夕暮れも彼女と見た。そしてどの風景もいつも違っていた。
それまでは単色でしかなかった景色が。
無機質であった景色が、突然、色鮮やかになった。
彼女への愛に堕ちたからだ。そしてそれが彼を大きく変えてしまったことに対して、彼は・・・喜んだ。彼女で良かったと思った。

彼女の背中の上で、茶色の風が海の微風に乗って、小さな象牙色の肌が・・項が見え隠れした。
シャルルはその姿を眺めながら、ふと、締め付けられるような苦しさを味わう。
このまま、永遠を約束しようと言ったのなら、彼女はまた、笑って受け流すのだろう。
彼はかつて・・・すべてを捧げるとマリナに言ったが、彼女はそれを望まない節が窺える。
まだ受け取れないと言う。
それなのに・・・彼女は願いを口にする。相矛盾する彼女の言動に、彼は翻弄されているのかもしれないが、それも良いと思っていた。

「今度の滞在場所は、海に囲まれているところなのでしょう？」
「まあね」
徐に彼女がそう話し始めたので、彼は顔を上げた。彼が何をしているのか、興味を示して彼女から尋ねることもあまりなかったが今回は違っていた。
「・・・そんなに気になるなら、一緒に来るか？」
シャルルの言葉は少し掠れていた。
波が彼の脛に弾かれて、彼の足元で小さなうねりを見せる。
そのまま立っていれば満ちた潮に程なく攫われてしまうだろう。

それも良かった。
それでも良かった。

彼女と一緒なら、海の底にでも行けそうな気がした。
月に行こうと言ったあの時とは違う感慨で彼は彼女を見詰め続ける。

彼女を連れて行けないことを承知しているのに。そう口にしてしまう。
マリナが願えばそうするつもりであった。
恋人を同伴させる理由はいくらでも捻り出すことができた。
けれども、それはもうできない年齢と立場にあるシャルル・ドゥ・アルディの言葉は、一度音声になってしまえば実現不可能ではなくなる。
だが、それはマリナがそうしたいと強く願った時だけだ。

彼らは長い年月を越えて・・・いろいろな事ができるようになったが、同時に様々な事ができなくなった。何でも出来ると思った若い頃を越えて、

彼女の片足が波を弾き、その都度、日差しの眩しさが陰っていくようであった。彼女は太陽のようだと思うが、こういう時には、太陽を追う月のようだとも思う。
彼女のひと蹴りごとに、彼女に合わせて陽が柔らかくなっていく。

・・・月光は陽光に近付くことの出来ないことを知っているかのようだ。

「やめておく」
彼女の返答に、シャルルは唇の端を持ち上げた。薄い唇が引き締まった。
・・・わかっている言葉であった。
それでも彼に縋り付いて残される寂しさ訴える可能性を残していた。
それはあり得ないと思っていたのに。

「・・・何もないところだ。マリナが居てもすぐに退屈するだろうな」
彼がそう言ったので、マリナは彼に振り返った。歩みが止まる。

茶色の瞳が夕暮れの日差しに良く映えていた。
マリナは非常に小柄な女性であるので、マリナ・イケダは遠くから見ると童女のようにも見える。
けれども、彼女の視線は、幼い無邪気だけを溢れさせているわけではなかった。

静かに、日が暮れていく。
波音が夜のそれに変化する。
満ちていく潮とともに、明昼の勢いを鎮めていく。

絵が描ければそれで良い、シャルルの傍に居られればそれで良い、と・・・・
目の前のファム・ファタルが他愛もない言葉を彼に投げかけて、海に向かっていくのではなくシャルルに飛び込んで来れば良いのにと願うのに。
彼女は、彼の願いを叶えるという願いは口にしない。決して。
■04

海面が静かに、けれども音を伴って色濃くなり始める。
ここの海砂は真白であるので、透明度の高い海は青やかであるのに、それがゆっくりと空の色に合わせて姿を変えていく。

・・・遠くで魚が跳ねた。
マリナがそれを見て、顔を上げ、目を細める。彼女は眼が弱いので、あまり遠くまでは見ることが出来ないが、それでも、魚達の跳躍を狙って海鵜が波面に飛び込もうとやって来る影は観ることができたらしい。
その後ろ姿と横顔を眺めながら、白金の髪の下から、彼は同じ様に目を細めた。
しかしそれは彼の視力故のことではなく、彼女の姿を・・・記憶に留めるための本の小さな儀式であった。
彼の髪も、夕暮れとともに、色が濃くなっていく。夕波の端より白い砂浜を歩いて行く足跡が、満ちる潮によって、消されていき、そしてまた彼らが歩む度に影を落として海水がそこに流れ込んで、窪みを均していく。

「波より白い砂がずっと続くのね」
彼女はそう言って伸びをした。肩が持ち上がり、踵を僅かに上げて、海風に身を浸す。足元がどんなに濡れていても、彼女は気にならないようだった。
「ガラス質だからな」
シャルルはそう言って薄い唇を引いた。
彼なら、もっと機知に富んだ言葉を探し出すことは造作もないことであるのに。
・・・ここの砂浜に打ち寄せる貝殻さえ、ない。干満の差が激しい地形であるので、波と沖の激しい潮流が何もかもを沖に流してしまうのだ。
だから誰もここでは遊泳しない。
ここで泳げば、最初は遠浅であるから波遊びに興じてしまうが、気がつけば沖に流されて・・・そしていきなり海底が陥没し、あっと思った時にはもう取り返しのつかない場所まで流されてしまう。
これほど近くまで魚が寄ってくるのに、海鵜が遠くで群がるのには理由がある。
そして、白い砂浜がずっと続くのは・・・魚の死骸や漂流物がまったく存在しないのには理由があった。
しがみつく岩もない場所でこれほど静かな海が広がる海の静けさについて、マリナ・イケダはよく知っているようだった。

だから彼女は遊泳を延期しろと言ったシャルルの言葉に素直に従ったのだろう。
彼女の海に関する知識はどこまで深いのか・・・シャルルは知らなかった。
彼女が若い頃、数多の場所を転々としていたことは聞いてはいたが、具体的にどうであったのかは切れ切れにしか知らない。

全部を知りたいと思うのに。
全部を独占したいと思うのに。
そうできない。

彼の心中はこの海に良く似ている。
本当は・・汐の流れが激しいのに、表面は穏やかに・・・静かに美しい。
一度深みに入れば、決して浮き上がって来られないほどの激情という名の急流が海底に流れているのだから。

「海は良い。・・・海は懐かしい」
マリナはそう言って、空を見上げた。
「日の入り・・・見えないね」
彼女はそのまま天を仰ぎ、ゆっくりと視線を旋回させると、海と反対側に聳え立つ山に眼を遣った。
「あの山の向こう側に陽が在るのね」
山側の空は、茜色というより深紅に近い色の名残があった。それは山の袂の僅かな部分にだけ覗いていて、山頂から海にかかる空の色は既に水色から灰色へ、そして仄暗い青鈍に続き、茫々たる墨染の空になっている。

「白い海砂が続くのは、ここの浜だけだ。・・・反対側はもっと粒が大きい黒い砂地が続く」
「それなら、夜明けを観に来た方が良かった」
マリナは西の空を見上げて、そう言った。しかし、すぐに続ける。
「シャルルはいつも朝が遅いから・・・それは無理かしらね」
ここでの滞在期間は短い。彼らの時間は非常に短いものであった。
移動時間がなければもっと長い時間を確保できたのに。それでもマリナはここが良いと言う。海が良いと言う。

「マリナが望むなら、寝ないで起きていることも可能だが」
その言葉にマリナは首を横に振った。
「少しは眠ったら？・・・時間を気にしないで休暇を過ごすのも大事だけれども、時間を気にしないで眠るのも大事なことだと思うわよ」
また起きなくなってしまうかもしれないけれど、必ず起こすわね、と彼女が豁達に笑った。

■05

波が彼の膝まで打ち付けてきたので、シャルルは波の際に移動した。
けれども、マリナはそのまま・・・波に沈み込む足の軌跡を楽しむかのように、温度を失い始めて彼女の温もりを求めるように纏わり付く波から逃れようとする様子はなかった。
彼は彼女に声をかける。彼女が前を歩く。

彼女の髪や横顔や・・・僅かに漂ってくるマリナの香りや膝裏の白さの眩しさや・・・・すべてを脳裏に焼きつけるかのように、瞬きを忘れて彼女を眺め続けた。
海辺の波を遊えて戯れる彼女の姿を、当分見られなくなる。
彼女との距離を哀しむ必要はないが、彼は胸が痛くなった。
シャルルだけの時間を持って欲しいというマリナの心根は、素直に享受したいと思っている。けれども。・・・けれども。

彼女を永遠に抱いていたいと思うのに。
彼女と永遠を語りあっていたいと思うのに。

少しの間でも離れていたくないと思うのは、彼だけなのかもしれない。
彼女は陽気に朗らかに、いってらっしゃいと言って送り出す。
時には、ちょっと行ってくるね、と言って彼を置いて発ってしまう。
彼女は寂しいとか行かないで欲しいと言うことはなかった。
大人になって・・・どうにもならないことを知ったからだ。
我慢すると言えば幼く聞こえるが、堪え忍ぶことのつらさと痛みと・・・そして彼がその先にある何を待っているのか、彼女は知っているはずなのに、そこには触れない。

ひとつになるのが怖い、と彼女は言った。
肌を合わせて指を絡めることを言っているのではない。

そこに居ることが普通になるのではなく、居ないことが普通であるかのように振る舞う。
彼が居なくても、彼女は彼女だけの時間を持ってそれなりに過ごしていると彼に訴えているかのように。
だから、僅かな時間を共有するのが嬉しいと言う。いつも・・・いつも、彼がその時間を待ち焦がれていると知っているのに。
彼女はいつも・・・シャルルに行けと言う。

口に出せない想いの数々を、彼女に刻んでから発とうかと思う。
彼の仄暗い欲心が彼女を哀しませることになるとわかっていても、シャルルは時々・・・そういう情動を抑制する。

彼のことを忘れられない、と。
いつも彼のことを考えている、と。
これからも彼の傍らで眠りたい、と。

そう言うのであれば。彼女が心から、彼だけを見つめるという確信を得られるのであれば・・・・何を捧げても良かった。何を失っても良いとさえ思うほどに、彼女が欲しい

彼女が彼に欲し望むのであれば、彼はいつでもそうする準備ができていたのに。
今回も、長期で彼と彼女は会話をすることすらできない状況に置かれるというのに、マリナはそのことには触れずに、いつものとおりに・・・景色に目を細め、小さな事に驚き、海を愛でて安らかに笑う。

水平線の際が、空の色と溶け合い、海の果てが更に遠くになったかのように見えた。

シャルルはマリナの足跡の形すら記憶しようとしているのに、彼女は足は波に沈み、それを赦さない。
シャルルにマリナの残像を・・・記憶を授けることを許可しない。
「マリナ、潮が満ちてきた。・・・そのまま歩くと足元が・・・」
シャルルがそこまで言った時のことだった。数歩先を歩いていたマリナが、小さな甲高い声を上げて波に囲まれた。

急激な満ち潮に足元の均衡を崩し、倒れ込んだのだ。
後ろ手に沓を持ち、歩行のバランスを保つことをしていなかったことも起因した。
「マリナ」
シャルルの足が止まり、すぐにマリナに近寄るために脚を出すことに時間はかからなかった。反射的に体が動く。彼はシャルル・ドゥ・アルディなのに。彼女のことになると・・・考えずに体が反応するのだ。
■06

この砂浜が、砂ばかり広がる絶無の世界で良かった、とシャルルが思ったのと、マリナが起き上がったのは同時だった。
彼女を傷つけるものは赦さない。それが何であっても。
「・・・満潮というのはあっという間に汐が満ちるのね」
マリナがそう言いながら濡れた体を起こし、夕闇の中でシャルルの前で立ち尽くしていた。シャルルは彼女に近寄り・・・シャツのボタンを外し服を脱いだ。
海水に浸されて張り付いた彼女の躯から、潮の匂いが立ち上る。
彼女の体温によって温められたからだ。
その上から、シャルルはそっと・・・彼女の肩にシャツを掛けたが、すぐにそれも濡れて不均一な濃い色の広がりがいくつも浮かんでくる。
「いいの？」
マリナが尋ねると、シャルルは冷笑した。
「オレは下にまだ着ているし・・・君はそれ以上着るものがないのだから、選択の余地はないと思うが」
そうだね、と言ってマリナが笑った。

「ありがたく借ります」
シャルルは彼女の躯が怪我をしていないことを確認し、砂と海水に塗れたマリナ・イケダを眺めた。
「泳ぎたいのなら最初からそう言え」
「失礼ね・・・」
マリナが大きな彼のシャツを肩からかけながら、前身頃を重ねた。
こうして自然に彼の衣服を纏い僅かに流れる彼の薫りと汐の匂いに眼を細めるマリナは、海を前にすると、あまり口数が多くなくなる。
彼女が水に対してあまり良い想い出がないことにも起因するのだろうが、彼女は、何か深く沈む憂慮について抱えているような、そんな表情を見せる。
「ありがとう」
彼女はもう一度だけそう言った。
マリナの濡れた髪や瞳や頬が・・・彼を眩しくさせる。
その間にも、波は静かにけれども確実に彼らに寄り、大きく白い波が跳ね上がった。しかしそれはもう白波ではなかった。・・・夕暮れが訪れていたから。
色を失いそれでも煌めきを奪われることなく白く輝く砂浜の上を躍るように・・・徐々に裾を広げていく汐の満ちる様を見て、彼はマリナに声をかけた。
これほど近くに居るのに。
彼女が時折遠く感じる。
これほど近くに居るのに。
満ちる汐によって時間を感じるのに、彼女との時間が停止してしまっているかのように感じる。
白金の髪が、海風で揺れた。
潮気を含んで少し重くなったが、それは濡れたマリナより僅かな変化でしかなかった。

ただ・・・静かに、彼女とこんな風に海を眺める時が来るなんて。

これは始まりでしかないのだろうか。それとも・・・水の果ての終わりを受け入れなければならないのだろうか。
想いが実ったら、すべてが・・・すべてが満ちると思った。
けれども・・・そうではなかった。
シャルルは彼女に手を伸ばそうとして、そしてその腕を落とした。
夕刻の海の端に佇むマリナは・・・とても儚く見える。
これが夢ではないのだろうかと思う程に。彼は夢を見ないのに。
・・・かつて見た、一生涯の夢の続きなのかもしれないと思う程に。

愛おしくて、なくしたくないから触れられない。
触れたら、壊してしまいそうだから。

そんな感情を今でも持ち続けていると彼女が知ったら、なんと言うのだろうか。

彼の着衣は、彼女の体格にはそぐわない。
軽く肩にかけただけであるのに、その身長差を歴然とさせるような・・・そんな光景を見て、彼は顎を引く。
帰ろう、と言い出すことが出来なかった。
もっと見ていたかったから。
もっと・・・彼女を見ていたかったから。

間もなく会いたいと思っても会えなくなる。それは仕方の無いことだった。
しかし、シャルル・ドゥ・アルディにとって「仕方の無いこと」の定義は人と違っていた。彼はマリナのことを思い出さなくなるほど没頭する日々を送る。それを知っていながら・・・そこに行きつくシャルルのことを、彼女は笑って見送る。なぜなのだろう。
彼は、彼女を置いて行ったあの遠い青春の輝きの時代のことを考える。
■07

マリナは屈託無く朗らかに笑った。
「シャルルは着やせするのね。私より・・こんなにシャツが大きい」
彼のシャツに包まれて感歎するマリナ・イケダを彼は見て苦笑する。
無邪気を通り越して彼女は無頓着であった。
この姿を誰かに見られて、恥ずかしいと思わないのだろうか。
こどものようにはしゃぐ彼女の姿を眺めながら、シャルルは侃諤に言った。
「・・・知っているのに？」
彼の、体の幅も厚みも熱さも知っているのに、彼女はそうして時折・・・まるで童女のようなあどけない発言をしてシャルルを困惑させる。
大変に幼く見える彼女は、それでも・・・愁いを知っているし、哀しみや別離の苦しみを知っている。彼と同じ様に。
もう二度と戻らない物事にもどかしさを感じたり、己の持つ誇りを持ち続けることの難しさを感じたことがあるからこそ、彼は彼女を・・・大人になった今でもこよなく愛している。
それを何度伝えようとしても、彼女に伝わらない。
永遠に伝わらないのだろうかと思う程、彼女には伝わらない。
それで諦めてしまえば良いのかもしれないが、彼はどうしても・・・忘れることができなかった。
今、こうして、陽の入る海を眺め、汐の満ちる感触を共有し、そして夕暮れを一緒に眺める彼女と・・・いつまでも同じ景色を見ていたい。
同じ色でないかもしれないが、同じ場にいたい。

言語も文化も職業も環境も国籍も影響しない。
それまでの何もかもが違っているのに、彼女に惹かれるのはおそらく、彼女の持っている様々な感覚に、彼が共鳴するからだろう。

彼女ははにかんだ。
小さく声を漏らし、下を向きすぐに上を見上げてシャルルの青灰色の瞳と視線がぶつかると、すぐにまた下を向いて、最後に横を向き・・・・遠くに広がる海原に眼を遣った。そして次に悲鳴を上げる。
濡れた髪の下から雫が堕ちて、そしてそれすら気にならないようであった。
身を乗り出し、発っているのがやっとである満ち始めた潮の中で、彼女は海に向かって歩き出そうとしたので、シャルルがそこでようやく腕を伸ばし・・・彼女の行動を押しとどめた。

「いけない・・・」
彼女が何に驚愕しているのかがわかった。
慌てて海に入ろうとするので、シャルルは彼女に体を傾け、彼女の腕を掴んだ。
ぱしゃり、と波音が際立つ。それは彼の音であった。
波が繁吹く。それに構わず、シャルル・ドゥ・アルディはマリナ・イケダの腕を捉える。
彼は自分を顧みないで行動するときがある。そうする時があるというのは、認識していた。自分には、自己を律しきれない時があるということを。
それは・・・彼女の姿を見失いそうになるときであった。

我を忘れる瞬間。彼にはほとんど訪れないその暫時を・・・彼女は誘うのだ。
「マリナ、オレと・・・あの沓とどちらを選ぶ」
シャルル・ドゥ・アルディはそう言って、彼女に囁いた。
満ち始めた潮の中に体を入れようとしたマリナに、そう言った。
選ばせるつもりはない。彼女の選択に彼は入らない。
どちらが優先されるかという同じ土台に彼は並ばない。
彼は、シャルル・ドゥ・アルディだから。
・・・マリナ・イケダの・・・彼のファム・ファタルの・・・唯一絶対だからだ。
一番ではない。絶対なのだ。
その時に最も優位であるかどうかは問題ではない。彼はいつも・・・そこと違う場所に居る。そうしたいと彼女が言って・・・シャルルがそうであると定めたからだ。
運命の人は複数はいらない。彼の中では、生涯ただひとり・・ひとりだけだ。
静かな始まりではなかった。でも、今は・・・静かに始める。
彼が、彼の運命の人と過ごす僅かで細やかな時間を始める事が出来る。

遠くで波が鳴った。
これほど足元近くに、傍寄るのに。
マリナと同じであった。

近くなのに、遠い。

遠いのに・・近くに聞こえる。

愛していると伝えても、伝わらない。
遠く離れることがこれほど・・・苦しいのに。
それでも離れなければその先の未来がないとわかっているから。
だから、彼は別離の時間を認容する。
マリナ・イケダから離れて、自分が為し遂げなければならない物事を少しでも迅速に解決しようとする。

今まで、それほど苦しいと思わなかったのに。
なぜなのだろう。
どうしてこんなに・・・心がさざめくのだろうか。
この浪のように。
この海のように。
この月のように。
この空のように。
・・・彼は唯一絶対なのに、揺らめく季節のように、変化する波のように、彼女を定一に捉えておくことができない。

■08

「ここは汐が速いから・・・駄目だ」
小さな悲哀の声を出したマリナに向かって、そう言った。
濡れた体を覆うために彼は服を脱いだのに。それなのに、彼女はそれに影響されることなく・・・泳ぎが不得手だというのに、遠く消えていくそれに意識を飛ばす。
「そういう問題じゃない。せっかくシャルルに用意してもらったのに」
マリナは早口でそれだけ言うと、また、波間に浮かんでは消えて姿が見えなくなる都度、溜息の声を漏らす。
「ここはそのまま裸足で戻るしかない。・・・車まで行ければ良いだろう」
彼がそう言うと、マリナはそうではないと首を軽く振った。
彼女からは彼の薫りがした。
重ねた衣から香るそれに・・・シャルルは眼を細める。
自分の風が彼女から流れてくることに・・・大きな喘ぎにも似た呼吸で受け止めたいと思う彼がそこに居る。
「いくらでも代わりがある。それでも行くというのなら止めない。
しかし、君の体が流されたら、オレは迷わず君をとるぞ」
彼が一歩動いた時、満ち始める浪が彼の足を止める。
マリナがもう片方の沓を胸に握りしめ、こちらに戻る寄せ浪の機会を窺っている様子が目に入る。
シャルルは青灰色の瞳に強い光を宿らせた。
あの時・・・彼女が大事だと言っていた品を、濡れるのも構わずに、拾い上げるために河に飛び込んだ男がいた。
何も顧みず、ただ、彼女の為にという考えすら浮かばないうちに、体が動く感覚。それを、彼もシャルルも良く知っていた。
ここに何も打ち寄せていないのは、潮の流れの関係で何も流れ着かないからだ。遠い沖に流されて、そのままになる。だから戻って来ない。しかも具合の悪いことに今は満潮であった。・・・それに間もなく完全に日が落ちて夜になる。このまま浪に埋もれたら、街灯もないこの海の暗さに飲まれて戻れなくなることは明らかで在った。

それでも彼女は一心に目を細めて、浮かんでは遠ざかっていく彼女の沓の色だけを追っていた。彼女の横顔が・・・シャルルを見ていなかった。
遠く・・・凪が見せる気まぐれな汐浪に、彼女は視線を注ぐ。
「マリナ」
「ああ・・・」
マリナの深い落胆の声が聞こえてきたのと、彼が海に入るのは同時であった。

ぽん、と肩に彼の細く長い指先が乗ったかと思うと・・・次に彼が海に飛び込みあっという間に遠浅の砂浜を歩いて行く。泳ぐ、というよりかは水底を渡るような歩みで、浪に押し戻されることなく彼は目的の漂流物を目指してマリナに背中を向けたまま、振り返ることもなく彼は進んで行く。
そうだと決めたら決して躊躇わない彼の生き方のような姿を見て、マリナが小さなな悲鳴を上げたが、シャルルは、それにすら振り返ることも声をかけることもなかった。背後で、途中まで水に入りそこで躊躇して立ち止まり、彼の名前を呼ぶマリナの声と波音が聞こえて来たが、彼はそれをまったく無視して、海に浸かった。
浸る瞬間に感じる、着水が体に入りこみ彼の衣類を重たい枷にしていることすら、無視した。

まだそれほど流されていない沓はすぐに見つかる。
もうあと少しすれば、完全に海底に沈んでしまうような程に海水を含んでいたが、それでも浮かび上がっては沓の踵を沈めた格好で浮沈を繰り返していた。
小さな・・・彼女のためだけに用意した沓であった。
■09

それがどれほどの価値があるのかということは、まったく関係しなかった。
ただ、マリナが・・・彼女が萎れる姿を見たくなかったから。
そう考えるよりも前に彼は海原に飛び込んだ。あの時のように。
あの時のあの男も、同じ様に・・・瞬時に飛び込んだのだろうと思った。
今もう一度・・・同じ気持ちを共有する。
あの時の彼と。
あの時のシャルルと。
あの時は海水ではなかったけれども。
彼は同じ様に・・・危険だと承知しながらも止めることの出来ない激情でもって、波に逆らい、汐を掻き別つ。

シャルルはそれを指先に引き掛けると、手前に引いた。抗力を感じるが、彼の筋肉の発達した腕の力にそれは抗うことをすぐにやめて・・・シャルルの胸に引き寄せられていく。
マリナ・イケダもこんな風にして彼に寄せ付けることができるのであれば、潮の流れも満ち引きもまったく気にすることなく、彼は飛び込んで行くと言うのに。
彼女は・・・この淡い汐の波華と明らかに違った。

間もなく完全な日没を迎える少し前のことであった。
透明な海底が、仄暗い光を放つ。
・・・最後の太陽光の透過により、水底と彼の白金の髪が一瞬・・・仄かに輝く。
もうすぐ、海底が見えなくなる。
夜の海に出てはいけないと言われるのは、足元の深さがわからなくなるからだ。

そして陸がどちらかわからなくなるから。
底を失った闇海に変貌する僅かな狭間の刻を迎えようとしていた。

彼の胸の高さまで昇った満ち潮は意外に流れが速かった。
想定していたことであるのに、彼は足元の不安定さに少し顔を顰めた。
歩く度に彼の頬や首筋に波飛沫が散り、彼は沓を完全に沈めないように僅かに浮かせたままゆっくりと岸に向かう。
どちらが岸でどちらが沖なのか。
それがわからなくなるほど暗くなったら終わりだ。
誰も来ない海岸では誰も遊泳しない。
それはこういう風に・・・戻れなくなりそうな瞬間が訪れるからだ。
彼はどちらに行き着きたいのだろう。
マリナが呼ぶあの世界か、それともももっと深みに堕ちていくか・・・。
どちらにしても、欲しいものはたったひとつだけであるのに。
シャルルが欲しいと思うたったひとつのものは・・・彼と同じ様に彼が欲しいとは言わない。

「シャルル！」
彼女の声が聞こえてきた。
陸に上がり体が海水から離脱していくごとに、浮遊感が抜けていく。
「ほら」
彼は無造作に彼女に彼女の濡れた沓を差し出した。濡れた体から雫が滴り堕ち、彼の体に張り付いた衣服の下から、均整の取れた、鍛えられた鋼のような体が浮かび上がり、マリナは少し眩しそうに彼を見ながら、それを受け取った。
「もう使用目的は持ち得ないと思うが」
履けない沓をそれでも取りに行った。けれどもそれが問題ではなかった。
マリナはありがとう、と小さく言った。
まだ、マリナは彼女の膝下まで海水に浸かっている状況であった。
「冷えるぞ」
彼は無表情であったが、滴り堕ちる汐の雫が頬や毛先に降りかかり・・・彼は本当に海から上がってきた美神のようであった。マリナはしばし彼の姿を見つめていたが、やがてぽつりと言った。
「ありがとう」
「それは、今、聞いた」
不機嫌そうな彼の声音に、マリナは肩で大きく息をついた。
「泳いではいけないと言ったのは、シャルルだったのに」
「マリナがいつまでも執着するから、いけない」
彼がそう言うと、また、ひときわ大きな波が彼らに注ぎ込まれてマリナは小さな悲鳴を上げた。
海の流れが変わり、冷たい海水が流れ込んできたからだ。
彼の言ったとおり、このままこうしていればいくら海水を浴びるに好適な季節だとしても、あっとい

う間に体温が失われていくだろう。
彼は濡れた頬を手の甲で拭った。
「今度は手を離すことはないように・・・それほど大事なものなら、なおさら」
彼は深い意味を込めて言った。
彼女がなぜ、それに執着しているのか。それには興味がない。マリナ・イケダが笑顔でいる為の方策であるなら、それが結論でしかない。
■10

マリナが・・・彼女が肩にかけていた、彼のシャツを脱いで彼に差しだそうとしたので、彼はそれを左腕を上げて制止した。
「意味が無いよ」
彼に戻す行為は意味が無い。
ただ・・・彼女の雫を吸って撓った衣を受け取ったとしても、彼が彼女に捧げた意味を失うから。
誰も彼女の濡れた体を見てはいけない。
誰も・・・そう。
昊に浮かぶものも、海からやってくるものも・・・この白い砂浜さえ、彼女を見ることは許されない。
なぜ、マリナは理解しないのか彼女と彼の頬を撫でる海の香りの混じる風すら、厭わしいとさえ思うのに。
このまま、刻が止まってしまえば良いのにと思う。
透き通る海の風が彼女の髪を攫う。
何を考えているのか時折わからなくなる遠い眼が彼を憂えさせる。
けれども、彼女から流れる風さえ・・彼女の憂いさえ・・・彼は欲しいと思っているのに。

彼女に。

・・・彼女に、すべてを捧げると彼は言った。

でも・・・本当は、彼女の全てが欲しいと思うのだ。
心や体が欲しいが欲しいという意味ではない。

彼女が、欲しい。

ひとつになりたい。
ひとつでありたい。
すべてが知りたい。
すべてが欲しい。

その瞳が見ているものも。
彼女が関心を寄せているものも。

そうできないとわかっているから。

永遠に・・・永遠に愛していると誓ったのに。
いや、そうだと誓ったからこそ。
・・・彼は永遠に彼女を独り占めできない。

「同じ事は繰り返すなよ。・・・ここは潮流が激しいから何も流れ着かない。
・・・マリナの体なんて、あっという間に海の底に沈む」
「シャルルが居る時以外には来ることもないでしょう」
彼女はそういって含み笑いをした。彼女ひとりでは海を眺めることがあっても、遊泳に興じることはないと言ったので、シャルルは眉を顰めた。
それなら、彼女はなぜこれほどまでに海に来たいと言うのだろうか。
ただ・・・懐かしいだけなのだろうか。そうではなさそうな物言いに、シャルルは彼女の両手の沓を眺めながら・・・裾が翻って彼女の躯に巻き付く自分のボタンダウンシャツを眺めた。
間もなく・・・日没が訪れる。
あと幾つか、数を数えるだけでそれがやって来る。

「日没の、満潮の刻には近付かないことだ。忠告を守らないと・・・海に後悔することになる・・・」
彼がそれだけを言うと・・マリナがその言葉を最後まで聞かずに、また数歩、足を上げて波の先を進んだので、シャルルは彼女の名前を溜息混じりに呼んだ。
「おい。オレの言葉が聞こえないのか」
冷たい海水が混じり、彼女の膝上まで満たすそれにマリナは懼れることなく・・・先に進もうとしているので、シャルルは濡れた白金の髪を掻き上げる動作を中断して、彼女の躯を捉えようと腕を伸ばした。
「待って。・・・待って」
マリナがそう言って、おもむろに膝を折って屈んだ。ぱしゃり、とまた・・・彼女の頬に、乱暴な波があたる。
先ほどはそれに驚いて、腰を落としてしまったのに。
今度も繰り返そうとする彼女の行動に、シャルルはまた・・・体を動かす。
「マリナ」
彼女は持っていたふたつの沓を海水に浸し・・・そして海の水を掬った。それは密やかな儀式のようだった。夕暮れを越えて・・・残映さえ残らない海に・・・茜の色は、西の昊の向こうに消えてしまって、もう、あたりは薄暗くなってきていると言うのに。彼女は、その瞬間を待っていたかのよ

うに・・・両手を浸しだしたので、シャルルはその様子をただ見つめるばかりであった。
「シャルル。・・・シャルルはもうすぐ行ってしまうから」
だからここに来たかったと彼女は言った。まだ、彼を見ていなかった。幼い顔に、あどけない唇から、シャルルの名前が漏れる度に、彼はこの海に一緒に沈んでしまいたいと思う仄暗い夕闇のような願いを持っていることを隠すことに専念する。
彼の密計は・・・彼女に言えないまま秘めたるものにするべきであると彼が考える限り。

白金の髪から、海の雫が漏れて堕ちる。海に還る。
それすら気にならない。
マリナが、彼の前で・・・海に向かって、何か物思いを汲み出そうとしているから。

・・・海の音が聞こえる。
波の音と遠くでなく生き物の鳴き声と・・・そして砂と波の擦れる音。
それから・・・光りを失っていくのに、白い砂が日が完全に陰る直前に白く淡く輝く瞬間。
彼と彼女は音と波と色と・・・人が生きている上で持つことの出来る可能性すべてを海と共有しながら、そこに立ち尽くしていた。
汐が満ちて・・・・白い砂浜が、花より白かった。闇に近い昊であるのに。
もう、先ほどシャルルが入った海の色は、海底の景色を隠し、呉須色から搗色に変化しつつあった。

■11

マリナ・イケダが腰を屈めて、沓に汐を浸している様を、シャルルは咎めることはしなかった。彼女の気まぐれではないだろう。何か理由があってのことだ。
そして彼女は満足しなければそれを中断することもなかろうと思った。
それを察知したかのように、マリナが顔を上げて、シャルルを見る。
「・・・叱らないの？」
「そうして欲しいならいつでも始めるよ」
彼がそう言うと、マリナはくすりと嗤った。
・・・波が揺れて、彼女の足元を濡らす。
両手は濡れて、髪も身体もすべて汐に浸されたマリナが、新たに沓を満たしだした。
彼のシャツはマリナの肩の上に乗っているのか、貼り付いているのかさえわからない。シャルルも同じだった。まだ乾くことのない体も、髪も・・・手にできるすべてを捧げると誓ったから、彼女にくれてやった。マリナは海が懐かしいと言う。
海に浸し、親和性を求める。

「汐の華っていうの」
彼女はそう言った。
茶色の髪から雫が堕ちて、また海に還っていく。沓の縫い目からしみ出す海水が雨になってそれも海に戻るが、マリナはくみ上げる行為そのものに意味があると思っているようであった。幾度か・・・両目の高さまで恭しく持ち上げ、彼女は敬拝した。海に。昏くなっていく海に向かって、彼女は何かを呟いた。その間、シャルルは無言だった。彼女は時折、こうやって彼が触れてはいけない瞬間をシャルルに見せる。普段の彼女と比べてずっと口数が少なく、そして何かを考えており、その内容についてシャルルに明かすこともあればそうしないこともあった。

・・・彼は彼女のすべてを知りたいと思うのに。彼女は彼にすべてを明かさない。

「見送る時に、その人が渡っていく海の水をこうして・・・こうして持ち帰る」
「海に囲まれる地域に見られる風習だな」
彼はそっと言った。彼女の言葉が壊れないように、静かに言ったので、それは波間に溶けて消えて行く。
白い波に・・・白い砂が翳りを見せて、日の暮れを知らせる。

この海は、温度で夜を感じるのではない。色で夜を告げるのだ。

「そう。だから、私は、この波を持ち帰りたいな、と。・・・・汐の華を傍に置くことで、シャルルを独り占めしようとしたの」

ちょっと気恥ずかしいね、とマリナが言った。
彼は言葉に詰まる。
彼はフランスの華と呼ばれているのに。彼は・・・できないことはないのに。
誰にも束縛されることもなく、誰も彼を縛ることは出来ない。それはマリナも同じである。それなのに・・・彼は彼女を束縛しようとした。でもできなかった。
あの若い輝いていた時代に・・・彼は、彼女を連れ去ることが出来なかった。
一緒について行くと言った彼女の言葉だけで十分だと思った。
・・・それだけで・・・彼は一生分の夢を見たと思い、その先があるとは思っていなかった。
生涯、もう会うこともないだろうと思っていたのに。
また、出会った。
これは、シャルルだけではなく、マリナにも大きな意味があって・・・運命の人という意味を再考することになった。
彼女は運命の人だ。彼の、ファム・ファタルだ。
しかし、彼の運命の人ではなく・・・彼らの運命なのだと思わざるを得ない。
定められた覆すことのできないことを運命と言わない。彼女はそう思わない。彼女に触れると彼も同

じ様に思う。

・・・この海のように。

ひとつになること。
溶け合うこと。
引き寄せられること。
命を運び命を祈ること。

それが運命だ。
そう思う。
命とは・・心変わりをしないことを誓うことであり、ただ一つの拠り所であることを指し示す。

愛する者が海航したあと、波打ち際に出て、見送った者はその波を持ち帰る。
そして海泡の残る砂を持ち帰り、持ち帰って祀る。

それは祈りだった。

自然の恵みを感謝し、海の平和を願い、愛する者が無事に過ごせることを祈る。
水平線を眺め、潮と汐を見て、ただ・・・祈る。願う。

■12

「シャルルがもうすぐ遠くに行ってしまうから」
彼女は繰り返した。そして笑った。
「見送るのは慣れない。・・・特にシャルルを見送る時は」
彼は笑った。
「何度も見送っているのに？」
「だからこそ」
マリナの言葉に彼も微笑んだ。ひとつになるのが彼等の運命なら・・・彼と彼女は別離の定めを受け入れる必要があった。
「そこに行くことを止められない。そこに行くことはシャルルの願いだから」
冷たくなり始めた海水を足元に受け入れながら、シャルルは彼女を見つめた。

笑顔が愛おしい。
声が愛おしい。
彼女の温度が愛おしい。

香りも。
嘆きも。
無言の涙も。

残酷だと思う。
それでも彼は彼女を必要として・・・
どうしてなのだろう。
理由を求める作業は、後ろ向きなのに。
決して厭わしいとは思わない。彼女の理由を知り、そして彼は優しくなれる。

柔らかい汐の泡は彼と彼女に纏う。
汐の弾ける灼ける痛みは感じなかった。
「オレに付き従いたいと希望しない人が居る。ここに」
シャルルはそう囁いた。
マリナ・イケダのことだ。
彼の傍に居たいと願う者は多い。
しかし、彼女は誰もが彼の傍に居たいというときに居ない。
誰もいない時に居る。

そういう人だ。

心の声が聞こえるのだろうか。焦らされているのではない。
難しい言葉を並べても・・・彼女はただ笑って傍に居る。
それだけだった。
しかしその「それだけ」が彼にどれほど必要なのか、誰も知らない。

けれども、そうして欲しいときにそうされない時はいつも・・・・孤独だった。
彼女のそんな姿に心惹かれる。
彼に従わない彼女が愛おしい。
いつも定律でさざめくこの波のように。
彼女は微笑んだ。
「行って来て。
・・・そしてシャルルだけしかできないことを証明して。
その時は何もかもを忘れて・・・いえ、思い出さずにそのことだけを考えて」
「それは君の希望？」
「いいえ・・・私の欲しいもの」

彼女は笑った。
「シャルルが私にくれると言ったもの。私は・・・少しばかり寂しく思うけれど、それでも後悔しない充実した日々を送るシャルルの背中を見送って、この汐の華に祈りを込めるような日々を送りたい。
・・・私のいないシャルルに、私を思いださないで居て欲しいから」
残酷で狡いよね、と彼女は言った。

彼女と一緒に居ないシャルルには彼女を思い出さないように・・・思い出すことすらないほど懸命になって欲しいと願う。
せめて傍にいなのなら締め出して欲しい。彼女のこともその他のことも。
そういう些細な願いすら、彼女は滅多に口にしない。
恋は勝ち負けではない。
そうではないと、しかりつける彼の恋人がいつまでもそうであったら良いのにと・・・そして彼は彼女を求め続けるのだから。

彼女と一緒に居ない時、彼女を思い出さないで欲しい。
それすら忘れるくらい没頭して欲しい。
汐の華にそんな願いをかけるファム・ファタルの全てが欲しいと思うのに。
彼が居ない時に、彼だけを思い絵描いて泣けば良いのにと思うのに。
彼を焦がれて胸を押さえて眠れば良いのにと思うのに。

「それはオレが手にできるすべての内に入るもの？」
「そう。シャルルが手にできるものだから、私はそれが欲しい」
彼女の言葉に、彼は返さなかった。
マリナが彼女を忘れて欲しいと言う。彼女と離れている間は、彼女を焦がれないで欲しいと言う。それはできない願いであった。
彼女がいてもいなくても、彼は彼女を消すことはできない。残像、余香、熱度・・・そのどれらを忘れろというのだろうか。

彼女はどうしてこれほどまでに誰とも違うのだろうか。
皆と同じであれば彼女を愛さなかった。けれども、彼女は誰とも違うから・・・苦しい思いをする時がある。それが今だった。
■13

「だから何もかも・・そこから放れて・・シャルルは没頭して欲しいと思うの。昔みたいに」
「今も昔も変わらないが」
彼がそう言うと、マリナは笑った。

「そうだった」
彼女の両手は濡れたままだった。
「それを祈ったのか。随分な祈祷だな」
「そう？大きな願い事をするときには、こうして海に願うものよ」
彼女はそう言ってまた昊を見上げた。夕闇が迫ってきて、今にも堕ちそうな昊だった。吸い込まれそうな青の後にだけ訪れる澄んだ紺だった。
彼は白金の髪を両手で掻き上げた。秀でた額が覗き、彼の深い双眸を際立たせる。
彼の切れ長の瞳も、理知的な視線も仄暗い昊の下で昔のままに、そのままに彼女を魅了した。
「これからしばらく逢えない」
マリナが独り呟いたので、彼は彼女の傍らに立った。
海を見つめながら、足を波に浸しながら、彼女は両の手に持っていた沓を片方の手に持ち直した。海の波が彼女に纏わり付き・・・そして彼女の膝を隠していく。白い砂がマリナの小さな足の甲を埋めていく。
「この海で繋がっているから」
彼女はそれだけ言うと、また、くすりと声を漏らして綻んだ。
「シャルルを独り占めしたいけれども、できない時にはこうして祈ることにしているの。何かに御願いするというより自分への確認。満願した」
「・・・おい」
彼がそこで彼女の肩を掴んだ。険しい顔をしていた。
マリナが困ったようにシャルルの顔を見た。彼女は少し気恥ずかしそうに歯を見せた笑った。
「戻ろう。・・・出発前にシャルルの体を冷やして失調させたらいけない」
「待て」
彼はそう言って、息を呑んだ。・・・ふたりの間に波が跳ねて、彼の腿に飛沫があたるが彼はそれを気にせず、岸に移動しようとするマリナを阻む。
「今、言ったことをもう一度・・・」
「言わないわよ。さっきも言った」
マリナはそう言った。
「願いは一度だけ、言葉にするものよ。それすら海の汐に渡すべきもの。
だから、もう、言わない」
「マリナ」
彼の瞳が揺らいだ。彼の肘から雫が漏れて海に溶ける。
そこから動く気配を見せないシャルルに、軽くマリナが溜息をついた。
そして、海に向かって・・・何かを呟き、そしてまたシャルルに向かう。
「だから・・・見送るのは慣れていない。でも見送らなくてはいけないから、そういう時にはこうして汐の華に祈念する」
「違う、そこではない」
シャルルがそう言って首を横に振った。
マリナは青灰色の瞳の青年をじっと見つめて・・・そしてぽつりと無表情に言った。

彼女が酷く緊張している証拠だった。何も感じていないわけではない。
心の中でそれを言ってしまい、更にそれを繰り返すことについて葛藤が発生しているからだった。
茶色の瞳がゆっくりと瞬く。
彼女の言葉の向こう側が知りたい。ただ、それだけだった。
「シャルルを独り占めしたけれども、できない」
彼の手が、マリナの肩から離れた。・・・それ以上彼女に触れていれば・・・壊してしまいそうだからだ。
大きく溜息をついた。次に、深呼吸する。濡れて前髪が彼の瞳や額や頬を同じ様に湿らせていたが、それすら気にならないと言うように。
シャルルは、マリナの頬に顔を近付けて、そっと言った。
「・・・それが聞きたかった」
好きすぎて、好きになりすぎて独占できないという言葉ではない。
大人になって・・・愛する人を残して入念しなければならない時がある。愛だけに溺れていられないから。だから、自分を忘れて行って来いとマリナは言う。

かつて、彼は彼女を置いて行ったことがあった。けれども、マリナはそれについて何も言わなかった。彼が決めたことだからと思っているらしかった。
でも今は違う。彼は一緒に来るか、と行ったが彼女は待っていると言う。
その間、思い切り、没頭してこい、と言う。彼は何かに没入するときには、彼女のことすら忘れて時間さえ忘れてしまうことも多々あったが、それに何も感じてはいけないとマリナが言う。
こういう愛し方もあるのだと知った。
手放すことで更に深く愛するのだ。
この汐のように。
浅く広く見える海は、ひとたび潜れば深い速い流れを潜めている。
けれども、汐は汐なのだ。どんなに激しく流れて居ても緩やかに満ちているように見えても、彼と彼女の見る海は・・・この瞬間は、彼も彼女を独り占めし、彼女も彼を独占する。
愛しすぎてそうできなかった、と言ったシャルルへのこたえだった。
独占したいけれども、そうしないことがマリナの愛だと思った。できないのではない。しないのだ。
いつも、マリナは何も言わない。
どこにも行くなと言わなかった。
行きたいのなら行けば良いと言った。それがシャルルには苦しくて・・・憂いのひとつになっていることも知っていたはずなのに。

■14

シャルルは体を倒し、彼女の茶色の髪に、自分の額をあてた。

沓を持っていないもう片方の手の平に自分の指を伸ばす。
そして・・・緩く絡めた。
こういうことを赦されるようになるとは、思っていなかった。
彼女に触れることは二度とないと思った。
触れられるようになってからは、彼女がますます遠いと感じる瞬間があり、更に近すぎると苦しくなるときもあった。

人は勝手なものだと思う。
満たされれば引き、引けば満たされたくなる。
この汐のようだと思った。

「マリナが傍に居るときだけ、オレは君を独占できるということか」
二人で、海を見る。
マリナが首を傾げて、どうかな、と曖昧に笑った。
「シャルルの傍に居るときだけ、私はシャルルを独占できるのかしら」
それは無理ね、と言って笑った。
「いつもではなくても良いの。すべてでなくても良いの。こういう風に海を見て、海を見たら、元気でいるだろうかと思ってくれればそれで良い」
「思い出さないでくれと言ったり、思い出してくれと言ったり。我が侭な願い事だな。そして矛盾している」
「シャルルならできると思うから」
「随分な期待だな。過大だと思わないか」
「あら・・・・だって、シャルルは間違わないのでしょう？太陽が西から昇っても、シャルルには間違いがない」
マリナがそう言った時に、語尾が消えて、息を呑む音が聞こえた。
彼が満足そうに微笑むのは同時だった。
波間に混じって・・・シャルルに伸ばされた指にぎゅっと力が入った。
もう、空は夕暮れの色をまったく残していなかった。
冷えた波が打ち寄せて・・・空が茜色を消し去った時。
正面に見えるその風景に、彼女は声を失った。
なぜ、あちら側が明るくなっていたのか、それに気がつかなかったのかわからないと言うように。
彼女はしばし黙ったままそれを眺めていた。

正面の水辺線から・・・月が昇ってきたからだ。
水辺線の端から月が・・・昇りそして先ほどと違う白さで淡く海砂が光りだしたので、マリナはただ、その神秘的な帳の瞬間に居合わせた駭きで身を乗り出した。
しかし彼がそれを押しとどめた。指先に力が入る。
「汐が満ちているからそれ以上は近付くな」

シャルルの静かな声に対し、マリナは堪えきれずに感歎の声を漏らした。
「・・・月が水平線から昇ってくる・・・初めて見た」
「じゃ、どこから昇ると思ってたんだ。
ここは東側・・・日の入りと逆の海岸だ」
呆れたようなシャルルの声も、僅かに声量が小さくなっていた。

なぜ、彼が夕暮れの日の入りではなく、山の反対側のこちらに向かったのか、理由がわかった。
汐の流れが速く、決して入ることはしてはいけないと言いながら、彼は流された彼女の沓を拾いに海に入った。

月が。
海の月を見せようと、彼が思ったからだった。何度も海を見た。海が見たいと彼女が言ったから、彼はマリナにまたひとつ・・・違う海を見せたのだ。
世界を繞るように、こうやって・・・海を繞るのだと思った。

しばらくすると、月の道が現れ始めた。
月と海岸を結ぶように直線の光沢が現れる。
黄色の・・・薄い黄色の、シャルルの髪のような光にマリナは黙ったままそれを眺めていた。彼の手を握ったまま。

月が動く音が聞こえてきそうなほどであったが、波の音と、波の揺らめきが月の路を淡くぼんやりとしたものにする。
そこに行き着けそうなのに、行き着けない。
けれども、手を伸ばせばそこに行けるようだった。

「世界中を回って、月に行こう。・・・必ず、約束を果たすよ」
彼はかつてそう言った。そして、たくさんの海と、夕暮れと暁を見た。
「月には今すぐ行けないけれど・・・いつか、行こう」
彼は再び彼女にそう言った。
マリナはうん、と小さく頷いた。

彼は約束を忘れない。
だから、離れている間でも、きっとマリナの約束を守るだろうと思った。
死んではいけないと言って、彼女が彼に生きろと言った時から、彼は約束を守り続けている。
だから、今度もきっとそうだろうと思った。誰が見ていなくても。
マリナは海に向かって、シャルルのこれからを願った。
そうして独り占めしたいのだけれども、そうはしないと言った。

それだけでもう、彼は満たされていく。
この汐のように、急速に満たされていく。

マリナは月を見る度に、シャルルを思い出す。
シャルルは、海を見る度にマリナを思い出す。

月が半分ほど水平線から昇ってきた時に彼はマリナに言った。
「ここでようやく月の出だ。
・・・日は太陽の上端が水平線に達した時を差すが、月は常に満ち欠けしているので、中心部分を基準として水平線に達した時を月の出と言う。
・・・ああ、今日は計算どおりだ。・・・オレの見立てに間違いは無い。
たとえ・・・月が西から昇っても、だ」
彼がそう言うと、彼女はちょっと唇を突き出した。
「汐が乾いてきた」
・・・月の光の中で、魚がまた跳ねた。夜の魚は光に集まる。
今日の満月光に喚ばれて浮かんできたのだろう。
「いつまでも、そんな格好でいるからだよ」
シャルルはそう言って、彼女の指から自分の指を名残惜しそうに離し、そして彼女の肩に乗った自分の濡れたシャツを掛け直した。
意味がないことではあったのに、彼女は嬉しそうに肩を竦めて「あたたかい」と言った。

・・・冷たくなった波が更に彼等の足元を廻るので、彼はとうとうこの場所を切り上げることにした。
「行こうか」
「満月でこの位置からの月の出はとても珍しいのではないの？」
マリナがもう少し見ていたそうにしたが、彼は笑った。夜は長いようで短い。彼女と過ごす時間はとても・・・そう、とても限られている。
だからこそ、彼女にまた逢いたいと思うからこうして短い夏を友に過ごす時間を捻出したいと思う。
彼女と見る時間や時間は何にも代えがたい。
マリナはお腹がすいたと言ったので、シャルルは苦笑いを浮かべた。
跳躍する魚を見て、何を連想したのかはすぐにわかった。
先ほどの会話を繰り返すつもりはなかった。
そして彼女はそれでも、あの風景をスケッチしたいと言う。
そう言っている傍から、月が高く昇り始めて・・・完全なる夜が彼等の上に墜ちてきたので、シャルルはそっと言った。
「・・・また来れば良いよ」
彼女は先ほど海に向かって、何を口遊んでいたのか知っていた。

「またね」
そう言ったのだ。
またここに来たいと小さい声で願った。

その声を叶えるのは汐の華ではなく・・・フランスの華だ。

「君がオレを忘れるなんて、できるわけ、ないだろう？」
「どうかな」
彼女は挑戦的な彼の発言を受け流した。
「じゃ、思い出すようにしてやるよ」
彼はそう言って、彼女の顔を覗き込んだ。
青灰色の瞳と・・・白金の髪が煌めいた。
彼のありったけを・・・彼女に注ぎ込むように。

離れて祈りながら・・・それでもっと近くなる。

マリナの顔が火照るのを感じた。
触れていなくても、彼女の温度がわかる。

・・・彼が欲しかったものだ。

「マリナ。オレを誰だと思っているのかな？・・・そういえば、君の運命の人について聞いたことがなかったな」
マリナが言葉に詰まって、シャルルから少し離れようとしたが、彼はそれを赦さなかった。彼女が彼にそういった愛の囁きや、運命の人のことについて何かを改めて言うというのはほとんど、ない。
いや、皆無に近い。
「ディナーの前に・・・それを聞かなければ、オレをこれほど濡らした人物を赦すことはできないな」

シャルルは微笑む。
綺麗な微笑みだった。
彼女と少しばかり離れて過ごす。けれどもそれは少しも淋しくない。
なぜなら・・・彼女は同じように彼を焦がれて過ごすからだ。
大人になった彼と彼女は、互いのことだけを考えることができなくなった。
それで良い。
それが良いと思った。

それなお、一緒に居たいと思う相手がここに居る。

これが・・彼女の願う汐の華そのものではないのだろうか。
離れているのに共有を感じる相手に祈るものだから。
離れているのに・・・傍に居ると感じる相手に捧げる祈りと約束だから。

シャルルは微笑む。
今日の月光はすべて、マリナに捧げる、と誓う。
「マリナ。マリナの望むものは成就された。それから、君の願うとおり、食事も用意しよう。でもその後は・・順を譲ったオレが自由にしても、文句は言えないよな？」
その挑戦的な物言いに、彼女は声を呑んだ。
見れば、月は水平線の上に乗り、距離を開けていく。
それでも、月と海と汐は一体となり、静かにそこに佇んでいた。

「マリナ。オレの手を離さないと言ったこと。証明しろよ」
そう言った瞬間。
彼女はぱっと彼のシャツを翻して、彼の体から離れた。
「しらない・・・！」
こういった駆け引きは彼女は慣れていない。
それを知っているけれども、確認したいことがある。
離れても一緒だ。
一緒だから離れていられる。

彼は面白そうに彼女に、畳みかけるように言った。
「知らないことはないだろう。
それにオレは・・・月や太陽が西から昇っても決して間違えない。
・・・・マリナ。
君をファム・ファタルと言ったことに間違いはないのだから」

それだけは誓える。
それだけは誇れる。

「・・・しらない、しらない」
彼女は頬を紅くし、そして彼に背中を向けて走り出した。
夜の海岸で。一足一足、埋もれた砂に抗いながら。
それをマリナは汐の華に近い、彼は汐満ちた月に誓った。

彼女の背中と、大きな汐痕と・・そして白い砂浜を見ながら、シャルル・ドゥ・アルディは微笑む。
敷き詰められた純白の・・・永遠を誓うに相応しい絨毯のような砂浜を、シャルルはそのまま歩き始

めた。

今度は、もっと別の場所を・・・ふたり並んで歩くことを誓いながら。

（FIN）

曙光

夜中に息苦しくなって、目を開けたら、胸の上に誰かが正座していて、そして自分の顔をのぞき込んでいた…

そんな怪談話を思い出した。

彼女はこういう類の話が好きではない。
「怖い」という感覚を積極的に味わうことを好む人の嗜好がわからない。
旧友であり悪友の薫が学生時代に厭がるマリナに無理に吹き込んだ怪談話を未だに思い出す。薫がにやにや笑う顔も一緒に思い出され、そのたびにこんな記憶を植え付けた彼女を腹立たしく思う。

その晩はなんだかよく眠れなかった。

普段は寝付きのすこぶる良いマリナ・イケダであったが、ごく希に、理由もないのに眠れないことがあった。

理由。
理由はあった。

ここ数日。
シャルル・ドゥ・アルディが不在だった。
彼は外出の目的や不在期間を明らかにしないで何日も留守にしていた。
それほど長くはかからない、とだけ言い、薄い唇をマリナの額に押し当てて、それっきり帰ってこない。

彼の不在に合わせたかのように、天気はこのところ冷たい雨ばかりで、日課にしていた庭園の散歩やスケッチもずっと中止になっていた。

こういう時に限って、いや、館の主が不在だからこそ、ジルも来客も全くない。

マリナは屋敷に設けられた居室からほとんど外に出ず、これまでスケッチしたラフ画を仕上げたり彩色したりして過ごしていた。

マリナは眠れずに、閉じていた茶色の瞳を開いた。
無理に眠ろうとしても余計疲労するし、考えなくても良いことを考えてしまう。
いつもは、まるで睡眠を取ろうとしないシャルルに「早く寝たら？」と忠告する彼女であったのに、この姿は彼には見せられないなと思いながら、少し夜風にでもあたろうかと考えていたその時。

「…ひぃ」
マリナが目を開けると、そこにはふたつの青灰色の瞳があって、あまりにも近い距離だったので、彼女は少し声を上げて頭を持ち上げた。

恐怖による硬直を体験する。
目を見開き、少しでもその恐怖から離れたいと思う本能でベッドから飛び起きた。
彼女の体を沈めていたベッドからスプリングが軋む音が少しだけ鳴った。
「‥‥出た…」
出た、と思ったが暗闇に目が慣れたマリナは、爛々と目を輝かせて無表情にこちらを眺める相手がシャルル・ドゥ・アルディであることにようやく気がついた。
彼女はベッドサイドのランプのスイッチをひねり、片肘を立てて不機嫌そうにしている美貌の主がシャルル本人であるかどうか、確認する。
反対に、暗闇に目が慣れていないのか、シャルルは突然の光源に少し目を細めた。

「オレは生後6ヶ月からの記憶からあるけれど。」
その瞳の持ち主がゆっくり言った。
聞き覚えのある、耳に心地好いテノールで彼は皮肉たっぷりに言った。
「枕を共にするほど親しい相手に、『出た』と言われたのは初めてだよ」
「シャルル…いつ、帰ってきたの…」
マリナが胸を押さえて、サイドテーブルにかけてあったショールを羽織った。
まだ心臓が早鐘を打っている。
シャルルがベッドに入ってきたことも、そもそも部屋を訪れたことも、まったく気がつかなかった。
ーーーと、いうことは、自分は眠れないのではなくて、眠れない夢を見ていたのか
少しだけ苦笑した。
「意味不明に笑われるのも初めてだよ」
シャルルがたたみかけるように言い、そして体を起こす。
すでに軽い部屋着に着替えていたから、ひととおりの仕事を終えて、寝る前にマリナの居室に立ち寄ったらしい。
「帰ってきたのは3時間18分前。マリナの観察を始めたのは34分前から」
もうすぐ夜明けになるくらいの時間だった。
この時間は冷え込む。マリナはぶるっと身を震わせた。
寒さだけではなく、先ほどの恐怖がぶり返したようだった。
「体調が悪いのか」
彼が尋ねる。
物言いはとても冷たいが、彼がマリナの体調を案じた上の言葉であることはわかったので、マリナが体調は良好だと言った。
「夜中のこんな時間に、目を開けたら、目を見開いてこっちを見ている人に驚いただけ。
そりゃぁ…驚くでしょう。部屋に入るときにはノックくらいして。」
そう言ったマリナにシャルルは反論した。
「マリナ。オレはノックしたぜ。しかも君は『おかえり』とまで言ったぞ」
彼は身を起こしながらベッドから立ち上がると、白金色の髪をかき上げて、物憂げに言った。やれやれ、と言った様子だった。

「久々に再会するオレを誰と間違えていたんだよ」

「･･･夢を見ていたみたい」
「どんな？」
マリナはそう言ったので、シャルルは少しだけ興味深そうに尋ねた。
彼は夢を見ない。
だからマリナがどんな夢を見ているのか･･･眠っている間の深層心理に僅かに好奇心を刺激されたようだった。

――

「夢を見る夢」
「それは『明晰夢』という」
彼は言った。
「夢の中で『自分は今、夢をみているのだ』と自覚しながら見る夢のこと。ある程度訓練すれば自分でコントロールできるようになる」
「見たい夢を見られるってこと？」
「そう。心理学からいうとそれは『夢』でないけれどもね」
素晴らしいわ、とマリナが目を輝かせる。
自分の夢を自在に変更することができたら、どんなに安らかに眠れることだろう。
少なくとも、あんな怪談話は夢に出てこなくなるはずだった。
「シャルルはできるの？」
「オレは夢を見ない」
シャルルはそう言って、もう一度、気怠げに髪の毛をかき上げた。
彼の脳は休むことがないのだろうか。
マリナは夢を見ないと告げるシャルルの口調に憂える。
シャルルはそれに気がついて、表情を和らげた。
マリナにいらぬ憂いを与えてしまったことに気がつく。

大丈夫だから、と小声で言う。

そして、おいで、と言ってマリナを呼び、彼女の手を軽く引いて････彼女を軽く抱きしめた。
茶色の髪の中に頬を埋めて、シャルルは大きく息を吸う。

彼は夢を見ない。
彼の夢そのものが目の前にいるから、人と違う自分の特質に何かを思うことはもうなかった。
「････ただいま」
「･･･おかえりなさい」
久しぶりの彼女の声に彼女の暖かさを感じ、ほっと息をつく。
そして、良い？と尋ねてから、彼は精悍な頬を傾けて、彼女の唇に自分の唇を重ねる。
彼だけに与えられた特権であった。
啄むような軽いキスから始め、そして、彼女の唇の中に滑り込んだ。
「ん･･･シャルル！」
彼女が真っ赤になって抗議する。
けれども、シャルルは彼女の言葉を聞き入れなかった。
マリナの腰に両腕を回し、そのままぐっと深く沈み･･･彼女を充分に賞翫する。
やがてマリナが諦めたように、抵抗するのをやめ、代わりに、彼の広い背中に、おずおずと手を回した。
いつまで経っても、彼女は彼のそんな愛の要求に、稚拙にしか応えられなかった。
この抱擁のために、彼は生きているのだと思う。
つまらないと思った退屈な生に、彼女が新たな息吹を吹き込んでくれた。
彼女は永遠に･･･シャルル・ドゥ・アルディのファム・ファタルだった。

彼女がシャルルの背中に腕を回したので、肩にかけていたショールが床にこぼれ落ちた。
しん、と静まり返った部屋の中で、彼と彼女の衣擦れの音と、ショールが落ちるほんの僅かな音だけが響く。

先に言葉を発したのは意外にもシャルルだった。
「･･･風邪を引く。早く休め。オレも･･･自分の部屋で休む」
マリナの頬に･･･そっと触れて、彼は静かにそう言った。
「シャルル？」
驚いたように、彼女が彼の名前を呼んだ。
彼が部屋を訪れるときはいつも朝まで･･･彼の目が醒めるまでは一緒にいるのが常だった。
彼女がどんなに提案しても、彼は自室に戻ったり、彼の寝室に彼女を呼びつけたりするようなことは決してしなかった。
シャルルはいつも、彼女の部屋に通った。
だから「部屋に帰る」という発言をマリナは初めて聞いたので、驚愕を隠せなかった。
「どうしたの･･･？」
少しだけ、不安そうに尋ねる。
何が彼に起こったのだろうか。
シャルルは、彼女のそんな表情を･･･切なさそうに見つめた。
何か言いたげにじっと彼女の顔を眺める。
「マリナ。･･･すまない。今日はひとりで休んでくれ」
彼はそう言うと、一度だけ彼女の躰を強く抱きしめ、そして額に彼の薄い唇を押しつけた。
そして、床に落ちたショールを拾い上げて軽く払い、彼女の肩にかけ直した。
胸の前で軽くショールを合わせると、シャルルはそのまま静かに部屋を出て行った。

彼女は愕然とした。
シャルルに‥何があったのだろうか。
これまでと違う彼の様子が、マリナの不安を誘う。
優しい仕草は変わらない。
それでも･･･それでも、彼は何かが違っていた。

彼女は･･･出て行ってしまった彼の姿を求めて、息を詰めて扉を見つめた。
扉が開いて、彼が戻ってくると信じたかった。
でも彼の足音は徐々に遠くなり、やがて聞こえなくなってしまった。

彼女はこれが夢なら良いのに、と信じられない思いで扉をじっと見る。

そして…夢をコントロールできるのであれば、良いのにと思う。

今のシャルルとのやり取りは、自分が見たいと決して思わない夢であるのに、と思った。

明晰夢…マリナが呟いた。

——
シャルルの様子が変だ、とマリナがジルに話を持ちかけたのは、それから一週間ほどしてからだった。

彼は日々、早めに帰ってくるようになった。
少なくとも、マリナの起きている時間に戻ってきているようだった。
それでも随分遅い時間ではあったけれど。
彼女の父親も忙しい人間であったが、それを上回る忙しさがシャルルの日常だった。
「戻ってきているようだった」というのは、帰宅後、執務室に籠もって仕事の延長をしているらしく、結局、就寝時間はこれまでと変わらなかったからだ。
マリナは、本来なら済ませてくるべき仕事を持ち帰ってシャルルが処理しているのではないのかと思っている。
でも最近はそんな生活だったので、話す時間もないし、寝室も別にして休んでいた。

「忙しいのはわかるけれど…」
マリナが不満を漏らす。
「あれでは体を壊してしまう」

「それで、マリナさんはどうしたいのですか？」
ジルは柔和な笑顔で、マリナに微笑んだ。
シャルルと良く似た面立ちの女性は、いつも優しかった。
パリに住むようになり、慣れない生活の中で支えとなってくれた女性に、マリナは全幅の信頼を置いていた。
「話がしたい」
「それはいつでもできることですよ」
ジルがそう言ったので、でも彼は仕事でいつも忙しそうだと言うと、彼女は意外なことに、それは違うと首を横に振った。
「マリナさん。…シャルルは、あなたとの時間を作るために仕事のペース配分を変更して…決まった時間までには帰宅するように調整しているのです」
「それでも、いつも執務室に籠もっているわ」
「それなら、いっそのこと、マリナさんが尋ねてみたらどうですか？」
アポイントを取らずに入室することが出来る唯一の人物が躊躇う様子を見て、ジルは薄く微笑んだ。
彼女はその特権が与えられていることに気がついていないのか、それが彼女だけにしか許されていないことを良しとしていないのか・・・
どうにも不思議な思考回路を持つ女性を、主は運命の人と定めたのだな、と思った。
「シャルルからの話ではなく、たまには、マリナさんから語りかけても良いと思いますよ。あなたにはそれが許されているのですから」
ジルはそう言って、目の前の小柄な女性に笑いかけた。
そこまで言われて、マリナは自分から彼に語りかけようとしていなかったとこに気がついた。
金髪の、ブルーグレーの瞳を持つ美しい女性はいつも静かに彼女に正しい路を教えてくれる。自分で気がつくように、そっと導く彼女は天使のようだと思う。
そんな彼女が、彼女自身のために倖せに微笑む姿を見たいと思った。
マリナは少し表情を和らげて、ジルにありがとう、と言った。

アルディ邸のサンルームで。
ジルとマリナは静かな時間を過ごしていた。
ジルはシャルルにいつも伴って不在がちでいるのに、今日はなぜか、彼女とお茶を飲もうと誘ってきた。
珍しいハーブティーが入ったので、一緒にどうか、という誘いだった。
その時に彼女はここ数日の気鬱な悩みを吐露したのだが、彼女はそれを見越してお茶に誘ったのではないのかと思った。ひょっとしたら…シャルルの指示なのかもしれない。
それでも、シャルルからの伝言がないということは、それが彼からのメッセージなのだと思う。彼女から、話をしようと歩み寄れということなのだろうか。

マリナは左薬指に光るハードプラチナの指輪をそっと撫でた。
同じ指輪を持つ人物に、遠慮している自分がいた。
少しだけ、倖せに鈍感になっていた。
シャルルから話しかけられることに慣れてしまっていた。
彼はいつも待っていたのに。
かつての自分は…いつも彼に語りかけていた。彼に愛されるようになっても彼を愛していると確信してからも、彼女はいつもシャルルに話しかけた。
少しだけ迷惑そうに眉根を寄せて、でも、薄く微笑む彼の姿が好きだった。

それなのに…

いつから、自分は毎日の生活に遠慮するようになってしまったのだろう。
いつから、寂しい気持ちを伝えることを我慢してしまったのだろう。

同じように、シャルルも寂しいと感じてくれているだろうか。

「少し…私は自分の殻に閉じこもっていたみたい」
ぽつり、とマリナが言った。そして、ハーブティーを飲み終わらないうちに、席を立った。

「この茶葉を少しもらっても良い？今日、シャルルにも振る舞ってみたいと思う」
もちろんですよ、と彼女の愛する人に良く似た女性は頷いた。

――

シャルルの都合の良い時間を見計らうタイミングは本当に難しい。

彼は今日も遅く帰って来るなり、食事も摂らずに執務室に入り込んでしまった。
それでも、その前にマリナには帰宅の挨拶とキスを欠かさない彼は律儀というか…機械的のような気もする。
一体、彼はいつ、食事を摂っているのだろうか。いつ、休息しているのだろうか。
無表情の彼からは、まったくと言っていいほど様子が伺えなかった。
近い場所で生活しているのに、マリナには彼の行動がまったくわからなかった。

彼女はあれこれ悩んでから、できるだけ「思いついたように」彼の執務室を訪れた。
重厚な扉は、軽くノックしただけではノック音が伝わらない。
少し、大きめに拳で叩き、そして扉の向こうから声をかけた。
「シャルル…入っても良い？」
「問題ない」
彼の声が聞こえてくる。
マリナはほっと息をついて、扉を開けた。
いつもより…その扉が重く感じた。
マリナは唯一、彼のアポイントなしにその扉を開けることが出来る。
彼の許可無く部屋に入ることが出来ないように、彼の業務を邪魔することがないように、その扉も、部屋そのものも、完全防音を施されていた。
逆に、音が漏れないので、セキュリティ上問題があるとジルが常日頃訴えている彼の居室には、彼が在室している上で許可された人間と、マリナだけしか入ることを許されていない。

用意したトレーごと、彼の部屋に入る。
ジルから取り分けてもらったハーブティーはリラックス効果があると教えられていた。
ロイヤルブルーのティーカップと、ティーサーバーはすでに適温にあたためられていて、マリナはジルに教えられたとおりに湯を注いで、砂時計の落ちる頃合いを見計らってカップにティーを注げば良いだけになっていた。

重い扉を開いて中に入ると、シャルルは執務室の椅子に座り、ディスプレイと書類を眺めていた。すでに軽い部屋着に着替えて、彼はデュアルのディスプレイを物憂げな瞳で見つめ続けていた。
広いデスクの上には、処理の束が積み上がっていた。これがこれから彼の処理するべき業務量かと思うと、マリナは驚いて茶色の目を見開いた。
彼の仕事について、尋ねたこともなかった。彼も話さなかった。
話したいときに話せば良いと思って居たし、それらを辛いと彼が漏らせば、即座に辞めろと言うつもりだった。
でも、彼は何も言わず、黙々と仕事をこなしていた。
だから・・　彼女は、彼に尋ねることを怠ってしまっていた。

マリナが努めて明るく、彼に話しかけた。
トレーを引き入れながら目の前の仕事に没頭する彼に話しかける。
普段なら、そのような最中には彼女さえも入室できない。
「‥シャルル、ジルから、ハーブティーをわけてもらったの。一緒に…飲まない？」
そう言うと、彼は初めて、その手を止めて、視線を上げた。
マリナの顔を見て、青灰色の瞳をじっと彼女に注いだ。
彼女の思惑を調査しているかのようだった。

「…ハーブティーは温度と湯を注ぐタイミングが難しい。」
彼はそう言ったのでマリナは微笑んだ。肩から流したショールをもう一度、かけ直しながら朗らかに言う。
「あら。これでも特訓したのよ。夜の睡眠に影響しないように…ノンカフェインか確認したわ。香りを楽しみましょう」
彼は笑った。悪くないね、と言った。

――
彼女は教えられて練習したとおりに、湯を注いだ。
サーバーに適温の湯が注がれて、茶葉から香りが上り立った。
彼女はむせかえるその香りに目を細めた。
砂時計を反転し、必要な所要時間を確保する。
その間‥‥シャルルとマリナの間には沈黙が訪れた。
ほんの数分のことだったのに、マリナは何時間にも感じた。
シャルルは手を休め、そのままマリナの言葉を待つ。
マリナは、立ったまま、左手の薬指に右手を添えて、くるくると回転するハードプラチナの感触を持て余していた。
同じ素材の金属を身につけている目の前の人物は…彼女を眺めるだけだった。
「ねぇ、シャルル。」
彼女から切り出した。
「何？」
「最近、忙しい？」
「まあね」
彼はそう言ったので、マリナが少しだけ困ったように眉根を寄せた。
忙しいのに、定時に戻ってくるシャルルは、明らかに無理をしているのだと思った。
それなのに、彼がマリナと共に過ごす時間はほとんど無い。
「…いろいろと、やることがあってね」
抽象的に、彼が言った。
もっと彼女との会話の時間を持って欲しいとはねだれなかった。
彼は…その責務を充分にわかっていながら毎日を過ごしている。
彼女が口を挟む余地は何処にもなかった。

「言いたいことがあるなら、言えよ」
彼がそう言った。ため息が漏れるのが聞こえて、マリナはますます困惑した。
私はいつから言いたいことが言えなくなってしまったのだろう。

シャルルに言いたいこと、伝えたいことがたくさんあるのに。
もっと、彼女と時間を過ごして欲しかった。
もっと、彼女に話をして欲しいと思った。
もっと･･･もっと、彼女に笑いかけて欲しかった。
もっと、彼女に触れて欲しかった。
それは贅沢な願いなのだろうか。

･･･砂時計の砂はとうに落ちていた。

マリナは少し躊躇いがちに下を向いていたが、･･･やがて意を決したように言った。
「シャルル。私のことを邪魔になったのだったらそう言って欲しい」
シャルルが黙っていたので、マリナはますます彼の顔を見ることが出来なくなってしまう。
お茶を飲もうと切り出したのは、口実に過ぎないことをシャルルはとっくに見越していた。
「･･･言いたいことはそれだけか」
彼が冷たく言ったので、マリナは顔を上げげた。
シャルルは少し疲れたようにため息をついて、そして椅子からゆらりと立ち上がり、扉近くに立ちつくしているマリナに近寄った。

「…どうしてそう思うんだ。」
彼がそう言った。
彼と彼女は向かい合っていた。
とても近い距離で向かい合ったけれど、彼は彼女を抱き寄せなかった。
シャルルが話をするときは、いつも彼女を抱き寄せない。
少し距離を置き、必ず彼女の表情が見える位置、視線を合わせられる位置を選ぶ。

彼と彼女は対等であると言いたげな、彼女の意見に耳を傾けるシャルルのその姿勢が好きだった。

「だって」
彼女は息苦しくなりながら、彼を見た。
「…･シャルルはこの間の長期不在から、ちっとも…私と話をしようとしない。シャルルは私と時間を持とうとしない。シャルルともっと話がしたい。仕事で忙しいなら仕方がない。でもそれなら説明して欲しい…」
そこまで言うと、彼女は茶色の大きな瞳から、ぼろぼろと突然に涙を流し始めた。
シャルルが口を開きかけて、そして言葉を発しないまま口を閉じた。
彼女はいつも静かに泣く。
その瞳の瞬きはとてもゆっくりで、だから、余計に大粒の涙が彼女の頬を伝わって落ちた。
「なぜ、泣くの」
「哀しいから。でも…わからない」
彼女はそう言ってまた涙をこぼした。
ーー

「ああ。君はまったく…こどものようだ」
彼はそう言って、大きな両の手のひらで、彼女の涙を拭った。
それでも彼は彼女の顔をのぞき込んで…参ったというように、青灰色の瞳を瞬かせた。
「マリナ。そんなに、今、辛い？」
「うん」
彼女は素直に頷いた。

なぜもっと、彼に愛していると伝えられないのだろう。
なぜもっと、彼に自分を見て欲しいと言えないのだろう。

もっと自分は自由に彼に気持ちを伝えられたはずなのに。

彼女は上手く言葉に出すことが出来ずに、それでもシャルルを目の前にして、ただ、涙を流して訴えることしかできなかった。
それをこどものようだと言われても、彼女にはなすすべがなかった。

彼は少し、思案していた。
静かに、マリナを見つめて…そして、掌で涙を拭い続けた。
いつまでも泣き止まないマリナの顔を眺めながら、彼はそっと言った。
シャルルは…哀しい表情をした。
ぎゅっと唇を噛んで …不本意な言葉を口に出した。
「それなら…日本に帰るか？」

マリナが、その言葉を聞いて、目を見開いて、また大粒の涙を流した。
そんな言葉を聞きたかったわけではない。

そうじゃない。
そうじゃない。
そうじゃない。

なぜ…そうなるの。

彼の両手のうち、左手の薬指に光るリングが頬にあたり、マリナはまた涙を落とす。
シャルルがため息をついた。
彼の吐息は美しい。
けれども、今の吐息は、彼女をとても・・・絶望の淵に落とした。
永遠の愛を誓ったのはそんなに遠い昔のことではなかった。

それなのに、彼女と彼の誓いの縛めであるリングが、とても…重く感じた。

別れの予感を感じた。

彼女は堪えきれずに嗚咽を漏らし始めた。

———
彼は…困惑して、切れ長の瞳を傾けた。
なぜ、マリナがここまで号泣するのか、わからないと言うようだった。

「マリナ」
一言、彼女の名前を呼ぶ。
そうして、両の手のひらで彼女の頬を挟んだまま、マリナの顔を引き寄せて、そっと、唇を寄せた。
まるで、初めて恋を打ち明ける者同士のように、とても密やかに、静かに、シャルルはマリナの泣き顔に唇を近づけて、彼女の額にキスをした。
額に、こめかみに、頬に、顎に…彼女のすべてに愛おしげに唇を落とす。

その間、マリナはずっと涙を流し続けた。

どうしようもなく哀しかった。
日本に帰れと言われて…彼女は酷く狼狽していた。

彼の慰撫が今は哀しかった。

シャルルは薄い唇を、最後はマリナの唇に合わせた。
彼女は唇を噛んで嗚咽を堪えていたけれど、彼の唇の感触を感じて、我慢の限界を超えた。
ーーー彼女はシャルルの胸に飛び込んだ。
今度はシャルルが驚く番だった。

「マリナ？」
訝しげな声を無視して、彼の胸に顔を埋めて、涙を流す。
どうにも遣る瀬無くなって声を漏らした。
どうしようもなく…涙が溢れた。

シャルルはそんなマリナの肩を抱いて、少しだけ引き離した。
「マリナ。…･お茶を、煎れてくれる？」
とうに砂時計が落ちて茶葉が開ききり、渋くなっているであろうハーブティーを指しながら、シャルルはそう言った。
花のような微笑みだった。
でも、とても静かで…何かを思い定めた、彼が今まで見せたことのない笑みだった。

マリナはシャルルのその申し出を泣きながら聞いていたが、もう一度シャルルが言ったので、
こくんと頷いて支度を始めた。

用意が出来たら、こちらにおいで。

シャルルはそう言って、彼のデスク前に設置されたソファに座るように言った。

彼から何か話があるらしい。

そうは思ったけれど彼女はそれを冷静に聞くことが出来るかどうか、わからなかった。
正直、大人の態度で彼の話を聞くことが出来ないと思った。

シャルルと視線を合わせることが怖くて…彼女は酷く動揺した。冷静で居られなかった。
何を言われるのか怖かった。
かちかちと、ティーサーバーが音を鳴らしてロイヤルブルーのカップの縁にあたった。
シャルルはそんな彼女の様子を、観察するかのように眺めていた。
お互いに無言だったので、とても息苦しく感じる。

防音を施された執務室はまったくと言っていいほど無音だった。
マリナの動作音と、彼のデスク下から聞こえるハイスペックマシンのハードディスクの起動音だけが聞こえてくるだけだった。

ーーー何かを言われるのが怖いと感じたのは、これが初めてだった。

シャルルは与えるばかりでない。
彼女から冷静さも奪う。

彼の存在が、いつの間にか彼女にとっては当たり前の存在になり、そして必要不可欠の存在であることを思い知った。
それは共に生きると誓ったその時よりもっと前から始まっていたのに、彼女はそれに気がついていなかった。

マリナはまた一つ、吐息を漏らしながら涙を流した。
ぐい、と涙を拭った。今度は自分の掌で拭う。

愛していると伝えるのは難しい。

煎れ方を覚えたばかりのハーブティーを振る舞いたいと思う相手は、シャルルだけだった。

それは、愛していると伝えるためのきっかけにはならなかったのだろうか。

このお茶を煎れ終えたら・・・すべて終わってしまうのかな

彼女はそう思った。

目の前が滲んで‥・今度は涙を流すだけでない慟哭が彼女を支配した。

それでも煎れてくれと請われたから、震える手で、シャルルの前にカップを置いた。
対面に自分用のカップを置き、そして…ゆっくりと座る。

長い脚を組んで、シャルルが背もたれにもたれかかっていた体を起こした。
「いただくよ」
静かにそう言う。
白金の髪を揺らし、彼はすっかり濃くなってしまった茶を眺めた。
長く細い指でカップを持ち上げると…ゆっくりと唇をつけた。
先ほど、マリナに重ねた唇が、彼のためだけに用意された液体に口をつける様をマリナは滲む瞳で見つめた。

シャルルは唇を湿らせただけで、そのままカップを置いた。
彼には口に合わないお茶を、口に含もうとする彼の優しさにまた胸が痛くなる。
シャルルは…
この冷めた渋くなってしまったティーを飲む努力をするように‥・マリナにも無理をしているのではないかと疑った。
「手順は悪くないが、時間が経過しすぎている」
薄い唇から言葉が漏れた。
「そう‥気を付けるわ。」
今度から、という言葉を彼女は飲み込んだ。
静かな…静かな空気が流れている。
マリナは自分のカップには口をつけなかった。とても楽しむ気にはなれない。

マリナは膝と同じ高さに置いた、目の前のロイヤルブルーのティーカップを眺めた。
適温とは言えない状態の、渋くなったハーブティーが白い滑らかなカップの内側に茶渋の輪を作っていた。
このお茶を口にしたのであれば、何かが終わってしまうような気がした。

「日本に帰るなら早いほうが良い」
しかし、彼女の躊躇いの間を無視したように、彼がそう言った。
マリナはぎゅっと唇を噛み、膝の上に置かれた自分の手を固く握った。
緊張したときの彼女の動作だった。
握った瞬間に、左手の薬指にはめられた銀の指輪が光った。
…これを外すときが来た。
そう思った。
テーブルを隔てて、これほどまでに・・・シャルルが遠いと思ったことはなかった。

「わかった‥近いうちに日本に帰る」
マリナが絞り出すように言う。
シャルルは早ければ早いほど良いと言った。
マリナはまた…　涙をこぼした。

不用意に涙を流したとき、シャルルは困ったように怒ったように「ひとりで泣いてないだろうな」と言う。そして次には、必ず「ひとりで泣くな」と言った。
でも、このときは何も言わずに彼女の涙をじっと見るだけだった。
この変化を自分が呼び込んだことを、彼女は痛感した。
愛されることに慣れた結果だった。
自分の慢心を恨んだ。シャルルは…いつも変わらなかったのに。

ことり、と指輪を置いた。
よく磨かれたガラステーブルの上に置く。
ここ数日の物思いですっかり緩くなってしまった。
「マリナ…痩せたのか」
シャルルがそう言ったけれど、マリナは返事をしなかった。
この緩慢で静かな空間と時の流れが…恨めしかった。

「シャルル。」
彼女は呟いた。
「ひとつ・・・日本に帰る前に教えて」
「何を？」

シャルルの問いに、彼女が静かに呟いた。
静かに呟くこと、そのものが、すでに彼女の中で耐え難い苦痛であった。
でも声を荒立てて涙を流して訴えても仕方のないことだと思ったので…
彼女はできるだけ、つとめて冷静を装った。
装っただけで、内心は冷静などではなかった。

ぐるぐると…
こめかみの血管が脈打ち、そして全身の緊張のせいか、背中も肩もこれまで経験したことのない激痛が走る。

「明晰夢」
彼女は言った。
シャルルが言葉の続きを待った。これだけでは言葉が足りなかった。
マリナは･･・少しだけ大きく息を吸った。
できるだけ、軽やかに言う。
マリナはたくさんの人と出会いと別れを経験した。
その結果学んだことは、最後の瞬間ほど大事なものはない、と言うことだった。
それは目の前の愛おしい人だけではなく、かつて愛した人や慕わしい友人、すべてに共通することだった。

「…明晰夢の見方を教えて欲しい」
彼女はそう言った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
シャルル・ドゥ・アルディは静かに・・・
こっちにおいで、といつも言う言葉を彼女に投げた。
彼女は黙って・・・涙を堪えながら、正面の位置から、彼の目の前に立つ。
静かに、ゆっくりと。
でも彼女は、内面は激しい葛藤で溢れながら。

彼女の永遠の人は。
ーーー日本に帰れと言う。

どうしたらいいのか、わからなかった。

どうしたら、シャルルがその言葉を撤回してくれるのか、わからなかった。
だから、彼の言う通りに傍近く寄っても、心は遠くなってしまったのかと思うと、とても…苦しくなった。

かつての・・・シャルルでない、愛した人との別れの距離を思い出す。

彼女は苦しくなった。

感極まった。

その言葉が正しい。

シャルルの傍に寄った彼女は、行く道もなすすべも失ってしまい…
シャルルにすがりついた。
ソファに座るシャルルに覆い被さり、こどものように彼の両腿を占領する。

「ーーーマリナ。痩せたな」

彼の言葉を一言一句、漏らさないように。
彼女は、シャルルに最後に笑った。
彼の言葉に返事をする余裕はなかった。
彼の言葉を、全身に刻む込むことが、ほんの少しだけ笑うことが、彼女の精一杯だった。

「明晰夢・・・」
彼が呟いたので、マリナは頷いた。
最後の距離は、とても近かった。

彼の青灰色の瞳は、執務室の照明に光ってとても薄く見える。

しかし、彼女の腰を抱く彼の掌の力強さや、彼の呼気のあたたかさの感触というのは、マリナをどうしようもなく気が遠くなるほど狂おしい世界にいざなった。

「日本に帰る前に教えて欲しい」
彼女は言った。
「急いで帰るから。シャルルからすぐ離れるから」
彼女は泣き笑いの表情で言った。
「教えてもらった明晰夢…。見たいときに見たい夢が見られる夢が見たい。
‥だから私に教えて欲しい。」
マリナは笑った。
こんなに…哀しい笑いを彼の目前で披露するとは想像していなかった。

「…日本に帰っても。夢で逢いたい人はシャルルだけだから。
だから、夢をコントロールしたい。夢だと感じる夢を・・　自由な夢を見たい。
毎晩逢いたいから。毎晩シャルルに逢いたいから。毎晩声を聞きたいから。毎日・･夢と思いたくないくらい、シャルルに触れていたいと思うから。そして…一生。私は夢を見る。
見たい夢を見る。シャルルと…一緒に笑って過ごす夢を見たい。それは…いけないこと？」
絞り出すようなその言葉に、今度は、目の前の・・・シャルル・ドゥ・アルディが目を瞑った。
マリナ、と呻いて、彼は手を伸ばした。
手を伸ばせば触れられる距離に居たのに、彼は触れなかった。
それなのに、夢でも逢いたい、夢で良いから逢いたい、というマリナの言葉に。
彼は、動いた。

そうして、彼はマリナの腰を抱き…座っている自分自身の膝の上に彼女を座らせた。
小さな悲鳴とともに、マリナがシャルルの膝の上に乗った。
彼女はとても小柄だったから、こどもを引き寄せるくらいの力加減で良かった。

「シャルル…‥？」
マリナが不安そうに声を上げる。でも、その時には彼の膝上で、外見から想像できないくらい逞しい腕と胸の中に、マリナは移動していた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――
「日本に帰るな。…オレが許可しない」
シャルルは、先ほどの話を撤回した。
彼が彼の発した言葉を否定したり撤回したりすることは皆無だった。
「駄目だ。帰るな」
シャルルはそう言った。
そしてマリナの・・小さな体を抱いた。
腰に手を回し、そして震える腕で、彼女を絡め取る。
何度も触れたマリナの体に手を回す。
それでも‥・彼は初めて恋する異性を抱き受けるかのように、細かく震えながら、そっと言った。

「マリナ。帰さない。駄目だ…駄目だ…オレは‥オレは君なしでは居られない」
「シャルル。私も同じ気持ちなのに…どうして…どうして‥」
彼女の言葉は…。
最後は嗚咽に変わった。

シャルルのしなやかな体に抱かれているのに、この切ない気持ちを伝える手段がなかった。

彼は…彼女のすべてだったのに。
彼は‥今でも彼女のすべてなのに。

それなのに、どうしてこんなにも‥こんなにも彼女の言葉が届かないのだろう。彼の言葉が届かないのだろう。そう、思った。

彼は彼女に触れると‥
我慢出来ないと言うかのように、マリナの唇を奪った。
滑り込むような奪うようなそのキスに、マリナは静かにこたえた。
完全防音の部屋からは・・・
彼と彼女の混じり合う時だけが発せられた。

「シャルルの考えていることがわからない」
マリナは困って言った。
接吻を受けながら、彼女は彼が繊細な指を彼女の肌に直接触れようとするその瞬間に、シャルルに訴えた。
「私を・・　遠ざけたいの。それならいつでもそうするのに」
「…太陽が西から昇ってもあり得ないね」
彼はそう言った。
彼女のブラウスからその下にある陶器のような肌に触れようと手を伸ばしたシャルルは、そう言った。

目の前の瞳が青灰色より少しだけ強く光って濃い色に見えて、マリナは少し息を呑んだ。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――
「シャルルは狡い」
彼女は壊れかけていた。
「どうして？なんで日本に帰れと言うのにすぐさま、帰るなと言うの？
どうすれば良いの？どうすればあなたは満足するの？あなたは…倖せになれるの？」
マリナが続ける。
「私が居れば倖せになれないのであれば喜んで消える。あなたの倖せが私も倖せだから。」
でも。
彼女は涙を流して訴えた。これが最後の彼との意見交換かと思うと、哀しかった。
それでも‥・彼は長い年月を孤独に過ごしてきたから、彼女ではない誰かと過ごすことを選んだのであれば、祝福しなければならないと思った。
それでもとまらなかった。
彼女は言葉を止めることが出来なかった。

「シャルルは狡い。どうして‥気が向いたときにだけ、私に優しくするの・
私はあなたの帰りを待つ、愛玩動物のような存在なのであれば‥それは違う。

私はあなたを変わらずに愛すると誓った。神様に誓った。そして‥自分に誓った。
それなのに、シャルルは私を手放すの？もう離さないと言ったのに。もう離れないと私は言ったのに。」
マリナが滝のように涙を流した。両の目の端から涙がこぼれて‥
そして流れ落ちる様をシャルルは見つめていた。
彼女は…静かに泣く女性だったのに、今は滂沱の涙を堪えることはしないで泣いた。

「ああ、マリナ」

彼はため息ついて言った。激昂する彼女の背中を、ぽんぽんと叩いた。
まるで・・・子供をあやすように。
「マリナ。マリナ」
彼はそう言って、マリナの頬を、冷たい掌で押さえ込んだ。
涙を流し、我を忘れているマリナの両頬を抑えて…そして少しだけ上向かせる。
「オレはリングを外すつもりはないよ。一生。たとえ君が外しても。
‥オレのファム・ファタル。オレは君ほど柔軟に‥運命の相手を変更できない」
彼は…そう言うと、切ないと言うかのように、マリナの顔をのぞき込んだ。
「だったら、夢の見方を教えて。…私はあなたの夢だけを・・　これから未来永劫見ていることに集中したい。」
マリナがそう言ったのでシャルルは薄く笑った。
「それは許さない」
そう言ったので、マリナが目を見開いた。
彼女は…愛することも赦されないのかと思った。
遠く離れた場所で、彼の倖せを願い、彼の姿を恋い慕うことも、許可されないのかと思った。
なぜ、彼がそこまで彼女に冷酷になれるのか…そこまで考えに及ばなかった。

「残酷な人」
マリナが呟く。

そこで…初めて、シャルルは彼女に語りかけた。
彼女の言葉を‥シャルルは決して聞き漏らしているわけではなかった。

「マリナ」
彼は彼女の名前を呼んだ。
そして、テーブルの上に置かれたリングを、細く長い指で拾い上げた。
それは彼の左薬指に光るそれと同じものだった。
内側には…
「すべて、君に捧げよう」
とフランス語で彫ってあった。
マリナに捧げた言葉だった。

すべて…君にやろう。すべて。すべてのものを。

彼はそう誓ったから。
彼女にすべてを捧げていた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「シャルルが望むのなら・・・　もう。もう、私は帰る。
それでも‥・シャルルを好きだと言う気持ちも‥・シャルルに夢で逢いたいと言う気持ちも。許してくれるのであれば、一緒に持って帰っても良い？」
マリナが泣きそうな顔で言った。
泣いてくれるのであればもっと楽だった。
シャルルは彼女の切ない表情を眺めた。
こんなにも‥こんなにも苦しい瞬間を、彼女はわかっているのだろうか。
シャルルが心の底から、彼女を手放したいと、マリナは思って居るのだろうか。

長らく。本当に長い時間、彼は待った。
彼女が彼の胸に舞い降りる瞬間を夢想し‥・そして懸想した。
現実になったときには、このまま死んでもいいと思った。
それなのに、彼女は…あっさり彼の元を離れると言い、約束のリングを目の前に置いた。

「それは許さない」彼はそう言った。

もう、二度と離さない。
若いころ、日本で手放してしまったあの喪失感は…一生、消えることがない。
だからこそ。
彼はマリナを、本人が嫌だと言っても、手放すつもりはなかった。
シャルルはその名前に誓って彼女を愛すると言った。
彼女は‥それに応えると誓った、
ランスの教会で。
皆の目の前で。
そして…
一糸まとわぬ彼と彼女の密やかな暗がりの時間の中で、彼女は何度も彼に誓った。

シャルルはため息をついた。

「マリナ。…誓った言葉を忘れたのか。オレは許さない。」
彼はそう言った。
「離れることも‥オレが君に捧げる愛も‥すべて無視してはいけないと言ったはずだ。
君の弁解は許されない。オレは君だけを愛する。未来永劫。それは知っているだろう？
わかっているだろう？それなのに‥オレを試すのか」
「試しているのはシャルルの方だ」
マリナが泣きそうな悲痛な声で叫んだ。
「なぜ私を試すの。私の気持ちは変わらない。私はそのリングに誓った言葉を違えていない。どうして…どうして…！！！」
最後は嗚咽に混じり、彼女は言葉を失った。

彼女が、彼への誓いの言葉として刻んだ言葉は …
「あなたの晄となり影となろう。生涯において。」
と書いた。言葉を選ぶときに。彼女は少しも迷わなかった。

晄であるのは簡単だ。
でも、その光が強いほど影も色濃いことを彼女は知っていた。

だから。

彼の晄輝く人生そのものも‥そして濃く出る狂気も‥すべて。すべて愛すると…
彼女は誓った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
大きくため息をついた。
彼女が常々「倖せが逃げる」とたしなめた行為のひとつだった。

彼は白金の髪をかき上げた。
ここのところの激務が彼を疲労させていた。
しかし・・・彼は彼女の腰を抱き寄せて、背中を撫でた。
先ほどより近い距離だった。

晄となり影となると誓った彼女は困ったように、シャルルの胸の中で微笑んだ。
「シャルル。私は約束を守るから。シャルルが困ってもこれは変更できない」
そう言った。
それが彼の‥生涯において求めて止まない言葉だと彼女は知っていたのだろうか。
知らないで、言葉を発したのだろうか。
わからなかった。

ここまでの会話で‥
彼は彼女のとの会話がとても希薄だったことを思い知った。
彼女にすべてを捧げると誓ったのに、彼女を寂しくさせてしまった。
彼女が生涯において、涙を流すのは、彼の予定ではほんの数回のはずだった。

シャルル・ドゥ・アルディは。
アルディ家の若き当主であり、若くて自覚の足りない神に誓った配偶者に、彼は薄く笑った。
「マリナ。ここに・・・　きちんと座れ」
彼の言う「きちんと」という表現にマリナが困惑したように顔を上げげた。
時に、日本人のマリナより美しい日本語を操る夫に、マリナは時々戸惑う。
彼女は居住まいを正した。
それで充分だ、とシャルルは笑った。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
晄となり、影となることを誓ったのに。
マリナは寂寥感に涙を流した。

ああ、シャルル。

明晰夢の話を聞いたときに、何となく‥予感はしていた。
夢で良いから逢いたい。
想像の夢で良いから逢いたい。
…自分の思い通りの夢で良いから…夢で見たくない「別れ」は見たくない。
これが夢であると思うような夢が見たい。
彼女はそう願ったから。
シャルルに、夢の見方を教えて欲しいと言った。

でもそれは、シャルルは彼を試す行為だという。
それならば…これから先、マリナはどうやって生きていけば良いのだろうか。
シャルルの居ない人生を夢に見るのか。耐えられない。
シャルルの居ない人生を…現実として受け止めるのか。それも受け入れられない。

受け入れることも夢として処理することもできないのであれば…
マリナはどうやって、この事実を受け止めればいいのかわからなかった。
彼のいうところの「処理」として作業することができなかった。

マリナは…涙を流しても解決しないとわかっていても、涙を流した。
こんなに自分は涙を流す行為を‥知らなかった。
愛とはこんなにも自分を制御できない感情なのだと…今更ながら思った。

シャルルはそんな彼女を見て、そしてふうっと笑った。
「そんなに日本に帰りたい？」「いいえ。・・・　決して」
彼女の言葉に、彼が少しばかり驚いたように応えた。
夜は更けて‥静かな執務室は更に静かになった。
スリープモードから、省電力OFFモードに切り替わったパソコンのせいで‥
シャルルとマリナの息づかいが大きく聞こえるほど、部屋の中は静まり返った。

「シャルルの居るところが私の居るところだと…何度言えばあなたはわかってくれるのかしら」
彼女は笑った。
「ああ、マリナ。座って」
シャルルは、彼女の寂しい笑いを受け止めながら、彼の隣の僅かなスペースを差し示した。
来客であれば決して差し示さない空間を。
彼はおいでと呼ぶ。彼に許された距離を彼女はいつも、当たり前だと受け止めていた。
互いに刻んだ言葉が愛を永遠に約束するものだと思っていた。

でも‥言葉は時に、繰り返さないと。
更新しないと、その効力を失ってしまうものだと知った。
一度刻めば永遠だということは決してないのだと思った。

現に‥
シャルルのこの行動が、マリナには理解できていなかった。
納得いくかどうかはわからない。でも理解したいと思った。
だから、哀しくてもどんなに受け入れがたい事実であったとしても、マリナは彼に聞かねばならないと思った。

彼の誓った言葉は‥有効だろうか。
そして
彼女の誓った言葉は‥彼に届いているだろうか。

マリナは、シャルルの体にそっと寄り添い･そして首に手を回して、彼の耳に囁いた。
その仕草は、マリナが自発的に行う行為と思えずに、若き当主は戸惑った。

――
「なぜそんなに泣くの」
彼女の永遠の人はそう言って、長く細い指で、先ほどと同じように、彼女の涙を拭った。
誰よりも近い距離に近寄ることを許されているはずなのに、それが苦しかった。
マリナがまた涙を落とす。自分の躰の中から、水分がすべて出てしまうような錯覚に襲われた。

シャルル・ドゥ・アルディは少し笑い‥そして、君は何も気がつかなかったのだね、と言った。
彼も、彼女が気がついていないことに気がつかなかった。
それはマリナとシャルルの会話が足りなかったことを意味した。
だから、彼女をひとり責めるわけにはいかなかった。

「・・マリナ。オレを少しでも…愛していると思ってくれるのなら、ここに座ってくれないか」
シャルルが普段ならありえない依頼方法で彼女に指示した。
マリナは部下でも秘書でもなく、彼の運命の人であり、生涯愛し抜くと誓った相手だった。
その人を‥今、彼は泣かせていた。今、困らせていた。
彼は、少しばかり…「少しばかり」説明の責務を感じていた。

「マリナ。」
よく聞いてくれ、と彼は言った。
彼はこれから、彼女に言わなければならい事を、考えた。
今までのように、これまのでのように、必要最小限では伝わらないとわかっていた。
相手は手強い。
どうしたら…伝わるのか。

彼は彼女の外したリングを持ち上げた。
そして…彼女の左手を取り、静かに…もう一度リングを彼女の左薬指の上に配置した。
「マリナ…もう一度…緩くてもはめてくれ。」
彼はそう言った。赦しを得る前に、彼はそのリングをもう一度、彼女の指に差し込んだ。

「神が約束した誓いでなくても良いから‥オレに誓ってくれ。もう一度。」
シャルルはそう言った。
少しだけ緩くなった彼女のリングを眺めながら言った。
「…生涯。マリナだけを愛する。死ぬまで。死んでからも。生まれ変わっても。そして…その間、君にすべてをやる。すべてを捧げる。なにもかも。なにもかも、君が望むものを…捧げよう。」
彼はそう言って、緩くなったリングをもう一度彼女の指にはめて、そっと細く長い指で押さえた。抑えることで彼女の指から二度と離れないようにするまじないめいた仕草で。

――
「愛しているよ・・・」
彼はマリナにそう囁いた。

それが彼の彼女に対するすべてを表す言葉だった。
その一方で…彼が彼女に日本に帰れと言う言葉が理解できなかった。
マリナは泣いた。泣いても解決しないのに、泣いた。
それしか方法がなかったから。相手に気持ちを伝える方法としては、最低ランクだった。
何も伝わらないと思ったけれど、それでも泣くしか‥できなかった。
そんな彼女の様子を見て。
彼は日本に帰ってはいけないと言った。
日本に帰れと言ったおなじ唇で。

シャルルの行動がわからなかった。

迷いに迷って…彼女は今の気持ちをそのままシャルルにぶつけることにした。
これは彼女が誰にもしなかった行為だった。
彼女は、どんなに親しい者にでも、一定の距離を持つ。それを見分けることができるのは、シャルル・ドゥ・アルディだけだった。
だから、シャルルはマリナの心に…在り続けることが出来た。

「マリナ。本当に・・・　気がついていないのか？」
彼はそう言った。彼が手を握り、その脇で泣きじゃくる彼女のは、シャルルの言葉に頭を振った。
「聞きたくない。」
彼女は何か…誤解しているのかもしれない。

このときに、ようやく。

彼女をよく知っているはずの、完璧であるはずの「フランスの華」は、事情を察した。
そして…青灰色の瞳を大きく見開いた。
それでも、彼女の手を離さなかった。
打ち震えるマリナの小さな掌は本当に…本当に小さくて寄りなく、彼の片方の掌に両の手のひらが埋まってしまうくらいだった。

「ああ、マリナ。どうして‥君はそう、考えが足りないんだ」
彼がそう漏らしたものだから、マリナがきっと彼を睨み付けた。
茶色の潤んだ瞳は、彼を闇で求める瞳の輝きと似ていた。
怒った彼女の顔は‥不謹慎だけれど美しかった。

同時に、久しく触れていない彼女の肌の感触を思い出して、シャルルは全身に流れる電流のような快楽の波を抑えることに集中した。

彼はそれから長い説明をすることになる。
渋くても、ハーブティーを飲んで水分補給をしておくべきだと後悔した。

彼女の手を離さなかった。
それは…彼女と約束したから。
彼女の決して手を離さないと。
彼は彼女との約束だけは、破ることが出来なかった。

彼は薄く笑う。豪快には笑えなかった。あまりにも・・・　すれ違いすぎて。

「マリナ。よく聞いて」
彼女は、はい、と小さく頷いた。
もう一度はめた指輪を気にしていた。
彼はその左薬指ごと…そっと彼女の手の甲を覆った。
もう二度と話してはいけないと小さく言った。
神に誓って、二度と外さないと言ったのに、彼女が安易に彼に差し出したことを彼は少しだけ怒っていた。
指輪はどうでも良い。これは単なる飾りだ。
けれども…マリナはこれから未来永劫、彼から離れられない飾りと言い切れない誓いを立てることになる。
彼は薄く笑った。
マリナのこれまでの動作から‥彼は彼女とすれ違っていたことと、それを説明しきれていなかったことを悟った。
どこから話せば彼女は最も早く笑ってくれるのか。
それを思うと、彼の凍てついた脳細胞が、再び高速で動き出すのを感じた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「…オレがここのところ忙しかったのは、知ってる？」こくんとマリナが頷いた。
彼女に何を想っているのか尋ねてもきっと、的外れの答えが返ってくることだろう。
だから、聞かないことにした。
彼は彼の正解だけを伝えることにする。
そのひとつひとつに‥マリナなりに理由があって、シャルルの行動を勘ぐっていた節があった。
極めつけは、別れの言葉と思い定めて彼に涙を流しながら明晰夢について尋ねるマリナを見て、彼女は何も気がついていないのだと悟った。
思い返してみれば、その可能性について考えていなかったシャルルの失敗だった。
想定外だったから。

けれども彼は「想定外」については敗北を認めないことにしている。
むろん、これはマリナという彼の永遠の女性に関してのみ適用できる規定だった。

「…ジルに指示して、ハーブティーを持ち込んだのはオレだ」
「知ってる」
彼女は言った。
「…ハーブティーの入れ方を学んだのは良い方策だったね。これは君を褒めようと思う。…当面、君はノンカフェインしか飲めない。」
この言葉に、マリナが茶色の瞳を少しだけ大きく見開いた。
まったく‥まったく気がついてない。
彼女の鈍感さを目の当たりにして、シャルルは大きく吐息を吐きだした。
大げさに。
この吐息について、少しぐらい彼女がシャルルに対して罪悪感を持っても良いと思った。

ああ、マリナ。

彼はそう言って、青灰色の瞳を歪めた。

これから・・・　彼は彼女の鈍感さに問答しなければならない。
未来永劫。一生。
そして、彼女の気がつかない彼女の変化を、彼自身が管理しなければならないと思うと‥彼女から少しでも離れることが出来ないのだと思い知る。

「マリナ…」
彼は驚きで呻いた。
「オレの心変わりなんかじゃない。君の・・・　君の変化なんだよ」
シャルルはそう言って、マリナに薄く笑った。鈍感な彼の妻に、少しだけ苛ついた。

ここまで来れば、彼女の表情や様子や…話し始めるタイミングについて考慮する必要はないのだと思った。
これほどまでにすれ違い‥いつ、彼の元に彼女から話が来るのだろうと心待ちにしていた自分が滑稽だった。

「ひとつひとつ…説明するよ。腹立たしいけれど。」
シャルル・ドゥ・アルディはそう言った。次はないからな、と彼女を睨んだ。
マリナの涙が止まり、そしてシャルルの端整な顔立ちをきょとんとした無垢な表情で見る様を眺めると‥シャルルは本当に苛立つ。
彼の配偶者であり、最大の理解者であるはずの運命の女性は…

もっとも理解できない人でもあった。

彼は目を瞑った。
ソファに体を投げ出し、投げやりに言った。
渋い茶も飲む必要がなかった。
彼女に日本行きを勧める必要もなかった。
すべて、すべて「すべてを君にやる」と誓った相手のことを考えてのことだったのに。

彼は…
彼の左薬指にはめられたリングに触れた。

「数週間、口腔内温度が37度を超えている。顕著な情緒不安定。頭痛。胸筋変化による肩こり。香りに対する異常反応。睡眠障害。・・・　思い当たることは？」
そこまで言われて、マリナは口を閉ざして少し考えた。
彼の…唇に滑り込むようなキスや…ここのところ寝室に訪れない理由…そして、この滂沱に流れる涙…

マリナはそこまで言われて、はっと口を開けた。そして…
目の前の男性を見た。
美しい、天使のような人が告げるその事実を…信じられない思いで受け止める。
彼女は。
唇に手を当てて、そして…そして、自分の下腹部にそっと…手をあてた。
「そう。そうだね…正解だ。」
彼は不機嫌そうに、そして、少しだけ・・・勝利したように笑った。
「今、５～６週目だ」
マリナは息を呑んだ。
「超音波をかけないとわからないけれど…もうすぐはっきりとわかるだろう」
彼は足を組み直した。
「オレが心変わり？ありえないよ。たとえ・・・　西から太陽が昇っても。
オレが誓った言葉は絶対だ」
シャルルはそう言って笑った。
綺麗な微笑みだった。ようやく、その笑顔で笑ってくれた。
「国籍のこともあるし‥臨月になると移動できないし…。
　日本に戻れるのは今のうちだけだから。
　ーーでも、さっきのマリナを見て、気が変わった。
　帰さない。日本に帰しはしない。だから‥ここで…ここで。」
そこまで言ったシャルルは、平静を装いながら静かに言った。
でもそれは平静でないことがわかった。目を少しだけそらしたから。
彼はマリナには決して視線をそらさなかった。
青灰色の瞳を切なげに光らせて、彼女の夫は言った。

「ここで、オレに晄を授けてくれないだろうか。」

…ああ。
マリナは目を瞑った。

彼に晄を…彼には晄も影も存在するけれど。

シャルルの求めた晄はここにあったのだ。

マリナは、今初めて気がついた身の内の晄について、思いを巡らせた。

彼は、マリナを遠ざけたかったのではない。気遣っていただけだった。
それを彼女は…距離を置かれたと思って居た。
そうではなかった。
彼女の内なる晄に最初に気がついたのは、彼女自身ではなくて、シャルルだった。

優しく額にキスしたのは、彼女の体温を確認していたから。
寝室に来て、じっと彼女を見ていたのは…体の変化を観察していたから。
ノンカフェインのハーブティーの入れ方を教えて、そして彼も試飲したのは、これから当分彼女は嗜好品を口にすることが出来ないから。
そして…日本に帰れと言ったのは、彼女の体を気遣ったから。
「辛いなら帰れ」と言った彼の心中を考えると胸が詰まった。
彼から離れる生活なんて、マリナは考えたことなどなかった。だから、思い至らなかった。

…同じように、彼がマリナと離れた生活を考えられないと思ってくれているのであれば、彼の様々な行動や言動は…とても辛いものだったと思う。

それなのに、彼は自分の感情よりマリナのこれからを優先させた。

彼の「すべてを捧げる」という言葉は…彼の倖せや願望さえも彼女に捧げることなのだと思った。

彼女は孤高の男性を見つめた。彼女が長らく時間を共にしていた人であったのに…
彼の孤独も激しさも優しさもほんの側面しかみていなかったと思った。
もっと言葉を伝えなければいけないと思った。
彼は…彼はどんな気持ちでここ数週間を過ごしたのだろうか。
自分の仕事を持ち帰ってまで、ここで過ごす時間を作っていたのに、マリナはそれに応えずに、彼に会いに行かなかった。
彼が寝室に訪れないことを、不満に思って居た。
ジルに相談するまで時間をかけてひとりだけで解決しようとした。
そんな自分のつたなさや幼さを彼は…そのまま怒らずに受け止めた。
待っていてくれた。

その彼が帰ってはいけないという。帰らないでくれと言う。

ああ、シャルル。
私の帰るところは…日本じゃない。
シャルルの居るところだと何度言えばわかってくれるのかしら・

私たちは・・・まだ伝え切れていないことが多すぎる。
でも。
この晄が。
夜明けにさしてくるような晄が。
ーーー曙光が。
私たちの暗い幼い影を照らし出してくれるのかしら。
彼女はそっと自分の両の手のひらで腹部を押さえた。

シャルルは意地悪く冷たく言った。
ようやく、マリナの考えがわかったかのようだった。
「オレが忙しかったのは…ここを増改築するための準備や設計書を作ったり‥これからのことをシミュレーションしたり…アルディ家当主の初めての長子への相応しい待遇を考えていたからであって。君の妄想するあれやこれやは忙しくて手が回らなかった。」
彼はそう言った。怒っているかのようだった。
マリナはごめん、と素直に謝った。
「悪いと思うのなら、二度と、…どんなに緩くなってもきつくなってもその指輪は外さないでくれ」
彼は横を向いて訴えた。そうだね、とマリナはまた謝った。
「そんなに謝られると…気味が悪いよ」
「今、普通じゃないから」
マリナはそう言って笑い、シャルルに近づいた。彼はその距離の縮まり方に身構える。
彼のその様子はいつも変わらない。昔から。
でも近づくことを許されているのは彼女だけだった。
間もなく、もうひとり増えることになる。

彼に覆い被さるように…マリナからキスをした。
久しぶりの…愛する人への愛の挨拶だった。

シャルルは瞳を閉じて、その合図を受けとると、彼女の腰に手を当てていきなり立ち上がった。
「シャルル‥！驚かさないで！」
マリナが叫ぶ。彼は、妖しくつややかな笑い顔でマリナを見た。
「驚く‥・？驚かされているのはこちらの方だよ。」彼は薄く笑った。
「しばらく君の肌に触れていなかった。我慢していたオレの気持ちを察してくれ。・・今晩は、マリナ。君の部屋に帰さないよ。」
そう言うと、彼女の肩を掴んで、隣続きの部屋に彼女を引っ張り込んだ。
マリナが悲鳴をあげた。
「シャルル！何！私…！」
「何？」
シャルルは意地悪く笑った。
「オレは医者だよ。そうでなかったとしても…君の躰のことはよく知り尽くしている。」
その言葉を聞いてマリナがまた小さく呻いた。
「さぁ。君の勘違いと、まずいハーブティーを飲ませた罰だ。今日は、オレをがっかりさせたり退屈させないでくれ。楽しみにしているよ」
彼はそう言うと、執務室と居室の間にある厚い扉を勢いよく締めて鍵をかけた。
ここを施錠してしまえば‥誰も入ってくることが出来なかった。
防音を施された扉の向こうからくぐもった声が漏れてくる。
「増改築には分娩台も新設したよ…オレが取り上げるって良いな」
「…絶対にいや！」

「ああ、きっと女の子だ。名前も決めてある。洗礼式の日取りも‥」
「なんで！性別の区別はまだつかないでしょう！…根拠ないよ」

彼は妻の抗議にせせら笑った。
根拠のない確信はしないはずだったのに、彼はなぜか確信していた。
男児なら…息子に注がれるマリナの愛情は許し難かった。
たとえどんな男でも、彼女の視線を独占できるのは自分ひとりと決めていた。
女児なら…シャルルは彼女を「天使」と呼んで、こよなく生涯、マリナほどでないが愛することが出来ると思った。
だから根拠がないけれど、今日の寝室を共に過ごす、小さな「彼女」にシャルルは笑いかけた。
「早く逢おう。」

明晰夢。
彼の運命の人が見たいと言った夢は…果たしてどんな夢になるのだろうか。
彼は夢を見ない。
けれども。夢にしたくない現実を夢でないと認識できるから。
この倖せは決して夢でないと確信できるから。
夢を見なくても良いと思った。

彼女の躰に眠る魂はどんな夢を見ているのだろう。

そう想像するだけで、彼は夢を見ている気分になった。

やがて…扉の向こうから…抗議の声も、面白がる声も消えて…
アルディ邸はひっそりとした闇間に包まれていった。

（FIN)

上下天晄　前編

父はマリナに会ったことがある。
彼はマリナ・イケダを成り行きであったが「オレの恋人です」と言って紹介した。
その時は、まさか本当に彼女が自分の永遠の恋人となり、父と暮らしたこの館に一緒に住むことになろうとは思ってもいなかった。
日本びいきの彼は、日本人の恋人を持つことには反対しなかった。

その時はごたごたした時期でもあったから、ゆっくり落ち着いて話ができたのは随分後になってからだった。
彼は父と話をするときは、ほんの短い時間だけだった。
執務室で打合せを行った後、シャルルは研究所に出かけ、父は別の仕事に移る。

「彼女とは会っているのか？」
おもむろにそう尋ねたので、シャルルは少し口を閉じて、それからそれが最近彼を悩ませているマリナのことを指しているのだと気がつくと、彼は青灰色の物憂げな瞳を細めて、可笑しそうに微笑んだ。
あの小柄な女性は、日本に帰った、と言った。

そうか‥残念だな、食事でもと思ったが。

ゆっくりとした口調で父は言った。
別れたものだと思ったらしい。
シャルルは薄く微笑んで、その会話に一言付け加えた。
でも、もう一度会うことになるだろう、と付け加えた。

その言葉を聞くと、深く椅子に沈んでいた父は、おや、と眉を少しだけ上げて息子を見た。
アルディ家の若い華は、いつも会話が一定で増減しない。
必要最小限の言葉しか発しないので、意思疎通を目的とする場合の会話には足りないと思うことはあっても、彼の発言には追加というものは存在しなかった。
ーーーこれまでは。
「そうか…彼女が、お前のファム・ファタルか。」
予言めいた口調で、誰に言うでもなく、父は口に出した。

ファム・ファタル…
シャルルは呟いた。
まさか、と首を振った。
そんな様子を、父は面白そうに眺めていた。
「運命の人でありながら、永遠の人にもなる。相手が死んでも永遠という意味になるのか、自分が死んでも想いを遺し続けるという意味になるのか…」
不思議なことを呟いて、彼は肩をすくめて言った。
「女性とはすべて神秘的なものさ」

母が亡くなってから、父はうたかたの恋を楽しみ、そして享楽的になったように思う。
人に勧められた恋も受け入れてしまうし、どうしてこういった女性との恋愛に興じるのか理解できないと思ったこともあった。
しかし…彼の胸の内には常に最初の妻への想いがあった。
彼女を壊してしまったのは他ならない、「運命の人」と定めた父本人だった。
どれだけこよなく彼女を愛していたのか‥今となっては聞けなかった。
しかしいつも心から笑うことをしなくなってしまった父と同じように息子も笑わなくなったとき…はじめて父は「すまない」と彼に詫びた。
当主は詫びるものではないと帝王学で習ったばかりのシャルルは驚愕した。
そこで、彼がまだ亡き妻を忘れられないこと、忘れられないから別の記憶を新しく作って塗り替えようとしていること、そして‥そんな彼の血を引く息子は同じ思いをするであろうということ、様々なことを含んで彼は詫びた。

壊れてしまった彼女は、死の間際まで、こちら側に帰ってこなかった。
ほんの一瞬だけ、戻ってくることはあっても、もう夫を見分けることが出来なかった。
シャルルを見分けることが出来なかった。
シャルル達を産んだ瞬間で時が止まっていた。

自分はその狂気の血を引く。
シャルルは時々怖くなる。
怖いなんて思ったことはなかったのに。

愛を知り愛を得て彼は臆病になった。

壊した側と壊れた側の両方の血を持つ彼は自分でなくなる時が来るのかもしれないと思った。

その時には、マリナを見分けることができるだろうか。
マリウスを父ではないと言い切ることが出来るだろうか。
そして、やがて生まれてくる彼の血を引く者も同じ路をたどらないと言い切れることが出来るだろうか。
彼女を壊してしまわないだろうか。

一度だけ…彼女を壊したことがあった。

あの夜の彼女の泣くことを堪えた顔は一生忘れないし…一生自分を赦すことはない。
それは今でも変わらなかった。

だから、マリウスがマリナと接触することは、内心面白くはなかったが、彼のアルディ家の者でありながらそうでない部分をシャルルは必要とした。

父を同じくしながら…
彼は健やかで幸福で、そして良い意味でマリナと同じ「普通の生活」をしている。

そんな彼を見つめながらシャルルは複雑な気分になった。

マリナと並ぶと、彼女はとても幼く見えるので、少しだけ年齢の離れた者同士に見える。
実年齢を聞けば、彼女が早婚で産んだ実子と言っても問題ない年齢差だった。
マリウスが、マリナを姉の様に慕っているのはわかった。
彼女は人を選ばない。いつもいつでも同じように接する。
父のいない寂しさを隠すマリウスの心に近づいたのであれば…
いつか、彼が男としてマリナを見つめる日が来るのかもしれない。

自分の子を宿していても、法律上自分の妻でも…その心は縛れない。
いつか、シャルルを忘れて、狂気のないマリウスを選ぶ日も来ないとは限らない。

ーーーよそう

シャルルはマリナに近づいた。
彼らが眩しすぎるので、少しだけ…目が眩んだだけだ。そう思うことにした。

「ひゃ！」
マリナが声を上げて腹部を触った。少しだけ顔をしかめる。
胎動に驚いたようだった。
「いつものことだろう。子供が元気な証拠だ」
彼はそう言って笑う。マリナが頬を膨らませてシャルルに訴えた。
「シャルルが近づくと、必ず蹴るのよ。いつもそう。きっと、シャルルがわかるのね」
「オレが触っても大人しいのに」
マリウスが苦笑しながら、屈んでマリナの足を丁寧に柔らかいタオルで拭き始めた。
慣れた手つきで足の水気を拭き取り、屈めなくなったマリナの代わりにルームシューズを一足ずつ履かせてやる。
その仕草は何度も経験した者のそれであった。
「母さんによくやっているんだ。それで覚えた。…あの人もハイヒールで足が浮腫むんだ」
マリウスがそう言って笑った。シャルルの視線を感じて答えたようだった。
「マリウスは客人だ。マリナ。こき使うな」
シャルルが顔をしかめる。
彼以外の人物がマリナの肌に触れることは耐え難い。
それを隠すかのように、彼は座っているマリナに屈んで唇を落とす。
額にではなく、唇に。
柔らかく甘い感触があり、彼女の唇を少しだけ甘く噛んだ。
マリナが顔を赤くした。

「いた！」
今度はシャルルから見てもはっきりわかるほど、足でマリナを内側から蹴り上げる胎児に、マリナが顔をしかめた。
絶対、シャルルに反応してる…！
マリナが恨めしそうに言った。
「ああ、静かにおし」
マリウスが優しく微笑んで、そっとマリナの腹部に触れた。
体の締め付けがないようにゆったりとした服装になり、腹帯をするようになって彼女の腹は一段とせり上がっていた。
苦しいはずの状態に、マリナはそれでも「経験よね、何事も」と言って、シャルルにはあまりつらさを話さなかった。
ジルやマリウスからは、つわりが酷く思ったより長引いていて、体もむくみがちであることや、彼女の体が非常に小柄なので、急速に膨らむ胎児と子宮についていけず、皮膚が大分薄くなっているので転倒に気を付けるように言われていた。

それでも彼女は笑った。
腹の上にスケッチブックを乗せられるようになるかと冗談も言う。
こんなに苦しい状態で、それでも笑う彼女をみて、自分達を産んだ母を彷彿とさせた。
だから彼女が時を止めてしまった瞬間が、出産の直後であったことを考えると、それはやむを得ないのかと思った。
そして、彼もマリウスも、マリナさえそうして生まれてきたことを思うと…生命の輪転を感じる。

マリウスが撫でるととたんに胎動が止み、大人しくなった。
彼の言葉も、わかるようだった。
マリナが「マリウスはやっぱり魔法使いだ」と言って手を叩いて喜んだ。

シャルルはそんなやり取りを見て静かに微笑んだ。
「さぁ、食事の時間だ。移動するぞ」
食べ盛りのこどもと、つわりだが食欲はある妊婦は歓声を上げた。

マリウスくらいの年齢の男の子は、世話好きが多いわね

マリナがそう言って笑った。
日本に、彼ぐらいの世代の男の子がやはり世話好きだと言う。
「マリナが世話を焼かせるからだよ」
そう言うとマリナは腹部を押さえて顔をしかめた。
「…痛い。今日はどういうわけか、だいぶ元気だわ…」
その子もきっと、賛同しているからだよ。
マリウスはそう言って笑った。

「ーーーマリナ。シャルルに、もうちょっとこの状況を話したら？」
余計なお節介だとは思うけれど、と前置きして、マリウスは自分と同じくらいの背丈の、小柄な女性を見た。
実はマリナの体調はかなり悪かった。
足のむくみは酷いし、子宮がせり上がってきて、胃腸の調子も良くなかった。
食欲はあるけれど、たくさんは食べられない。
食事をしても後で消化不良で具合が悪そうに横になるマリナの背中を何度もさすった。
そんなマリナを、マリウスは案じた。
加えて、マリナがたいそう小柄であったので、彼女は腹部の膨張にバランスが取れずにいつもふらついて歩いている。
邸内ではせめて車椅子で移動しようというマリウスの提案にも「歩かないと運動にならないでしょう」と言って耳を貸さなかった。
シャルルがこの状況を、知らないで居る時間はそれほど長くはならないと思うけれど･･･

いつか知れてしまうのであれば、今のうちに相談しておいた方が良いと思った。
シャルルは医師だ。
彼が、マリナの躰のことは一番よく知っているはずだった。
そしてこの状況を知らない時期があったことを知ったのなら、他でもない彼が傷つくのである。
それをマリナは知っているのだろうか。

愛とは、よくわからなかったけれど、ひとりで堪え忍ぶものではないはずだった。

母が時々、夜更けに煙草を吸いながら酒を飲んで涙する顔を見るとどうにも切なくなる。
そして、その涙の原因が、マリウスの父と彼自身のことを考えてのことなのかと思うともっと切なくなった。

マリナも‥母としての苦悩を持つのだろうか。

この太陽な朗らかな人が眉根を寄せて苦しむ姿を想像すると、彼女だけはいつまでも誰にも微笑んでいて欲しいと切実に願う。

「でも、初期に随分困らせたしなぁ」
「夫婦ってそういうものじゃないだろう」
「…マリウス。あなたは随分、大人みたいな口の利き方をするのね」
マリナが苦笑した。
「大人もこどももないだろう。とにかく、相談しろ。早めに。」
「こどもならね…そう思った時にその場で大人に言ってしまうのよ。不安で。でも…マリウスはその前に忠告する余裕があるのよね。」
茶色の髪に茶色の瞳の女性はそう言って笑った。
体温はとっくに平熱に戻っているはずなのに、額にはうっすら汗が滲んでいた。
「…マリナ、オレはその状況が改善されなければ、シャルルに言うぞ。告げ口と思われても良いから。…君の躰も心配だが、お腹のこどもを無事に送り出すことも大事だろう」
「あら、シャルルみたいな言い方」
マリナがさらっと受け流した。

「それより、明日は秘密の部屋に行ってみない？」
マリナが面白そうに茶色の瞳を輝かせて言った。
「秘密の部屋？」
「そう。外出もできないし…何か刺激が欲しいところよね」
その胎動は刺激と言わないのだろうか。
マリウスが反論しようとしたが、マリナはくすくす笑って、マリウスの腕を取った。
こうするとバランスが取れて、歩行の補助になる。
シャルルがこの姿を見たら、きっと面白くない顔をするに違いなかった。

彼は…誰も信じなかった。
マリナ以外は。
それでも、彼女の身の回りにマリウスを置くことを許可したのは、マリナが大事で彼女と彼女の中に眠るこどもを優先させるために、シャルルが我慢をしたから故だと思った。
弟と認めて欲しいわけではない。

ただ…マリナには、母のような気鬱な顔をして欲しくなかった。

彼女は幼子だったマリウスに唯一度だけ会っただけなのに、パリで再会した時に、真っ先に「あなたはマリウス？」と話しかけてきた。
パリには就学のために戻ったばかりであり、誰も知りあいが居なかった。
それなのに街中で声をかけられ、マリウスは正直驚いた。
アデリーヌはマリナを誘拐犯だと思ったくらいだった。
でも、それがほんの僅かなシャルルとの共通項をマリウスの中に見つけた故のことだったと思うと…
マリナの彼に対する愛の深さを思い知った。
彼はまだ年若い年齢であったけれど、母子の情愛だけでない愛もあるのだと思った。
まだ愛とはなんだかはっきりわからなかったけれど、マリウスはシャルルが…
フランスの有名人で、孤独で繊細で気むずかしいと評判だった彼が優しく彼女に微笑む姿を見て、心底驚いた。
そして、少しだけ、嬉しかった。

パリに戻るときに、彼は出生の秘密を母から聞いていた。
それでもアルディ家と関わるつもりはなかったのに…
マリナを見て、マリウスはアルディ家を定期的に訪れることを快諾した。

やがて彼女が妊娠して、マリウスの姪か甥にあたるシャルルの長子を身ごもったと知って、彼は喜んだ。
これで‥シャルルが倖せになれるのかと思うと、本当に嬉しかった。
これが母子以外の・・・血肉を分けたきょうだいの愛と知った。
正式には名前も違うから、名乗りあって堂々と「弟です」と言うことはなかったけれど、シャルルは間違いなく、彼の兄だった。

シャルル・ドゥ・アルディが全身全霊をかけて、マリナを愛し抜いていることは、よくわかった。
誰の目から見ても、彼女はシャルルの唯一の女性であり、彼がこよなく愛しているたったひとりの家族なのだと思った。
ここに出入りするようになって、シャルルには同じ遺伝子を持つ弟がいて、長らく離れていることや…母親もとうに死亡していて、彼が本当に孤独であることを知った。
マリウスは母の愛を受けて育った。
父親が不在でも寂しいとは思わなかった。
時々…父親に似ている仕草をする、と母が涙ぐむ姿に心を痛める以外はまったく不自由のない日々だった。
シャルルの家庭環境を知るつけ、マリナが背負っているシャルルへの無償の愛について、幼いながらもマリウスは考えた。
若いときは、随分と自由奔放で思ったことを口に出し、彼の身分や環境を全く考慮しない闊達さがあったという。
そしてその開放的な彼女の魂に、シャルルがどうしようもなく惹かれて‥・運命の恋をしたのだと聞かされた。
この恋の顛末は有名で、アルディ家の伝説となるべき逸話になった。

あまりにも浮腫みが酷い彼女の躰をマッサージするために、彼女が一度だけ結婚指輪を外したことがある。
その際に、マリウスはそのリングの文字が目に入り、そして絶句した。
「すべて、君に捧げよう」
と彫られていた。
これほどまでに狂おしい誓いの言葉が‥この世に存在するのかと思った。
教会でよく聞く説教の言葉は、これほどまでに苦しい愛について教えていなかった。
父親がいないことをちょっとだけ寂しく思うだけで、概ね満足している生活を送るマリウスには衝撃的だった。
シャルルの…
深く沈んだ彼の魂を、マリナが引き上げたのだと思った。
そしてそのとてつもなく重い言葉を、彼女はこともなげに身につける。大事そうに。

少しだけ…夜中の母の涙に近づいた気がした。
そして、自分とシャルルの父について、シャルルが何を想っているのか知りたくなった。
マリウスには父親の記憶が皆無だ。
だから、正直言って遺伝上の父親については興味がない。
母が愛した人だから、知りたくないとかまったく知らなくても良いとか言えば嘘になるが、
それよりなにより。
マリウスはこれから父になるシャルルの孤独な魂を憂えた。

彼はきっと思って居るはずだった。

自分は良い父になれるだろうか。
自分はこの子供を愛することが出来るだろうか。

マリウスの母が、マリウスに感じる戸惑いと同じように。

彼女もよく問答しているようだった。
口に出さなかったけれど。

片親の不在でこどもは悲しい思いをしていないか。
父親のことを知りたいと言って母の元を飛び出して行くのではないか。

マリナが妊娠して、毎日を一緒に過ごす話し相手を欲しがっているということを聞いた時。
母は行きなさいと息子を送り出した。
かつて、彼ら母子を救ったシャルルとマリナに恩義とそれ以上のものを感じているらしかった。
母は…アデリーヌは…
それ以外にも何か思うところがあったようだったがそれについては触れなかった。
少しだけ哀しそうにマリウスを見つめてから、行っておいでと言ってくれた。
何も文句は言われなかった。
帰って来なくなってしまうわけではない、いつも母が積極的に使いにやるのに、何を困惑しているのだ、とマリウスは笑った。
出発の朝、母は…マリウスと良く似た顔を歪めて瞳を潤ませた。

そして今、彼はマリナを見つめることで…
様々なことを知りたいと思う。
母の苦悩と…シャルルという彼の異母兄のことと…何より、マリウス自身と彼の父のことを…
この短い期間で、知ることが出来るのはほんの少しなのかも知れない。
でも、目の前の女性が…
自分に何かをもたらすであろうという予感めいた何かを感じていた。

マリナはそんなマリウスの瞳を見て、彼に微笑む。
こどもなのかおとななのかわからないわね。

彼女はそう言って…それでもマリウスには何も語らなかった。
「教えるのは、与えるのは簡単だけど…知るのは難しい」
彼女はそう言った。

マリウスはマリナが好きだ。シャルルも好きだ。
自分と随分年が離れているのに、まったく年齢差を気にさせない、子供扱いしない彼らがどうにもこうにも好きでたまらなかった。

マリナは子供が好き、なのではなくて人間が好きなのだと思う。

彼女には非常にたくさんの友人がいて、毎日の様にWEBカメラで話し込んだり、メールの返信を拙いタイプで打っていたりする。
夫婦の初めての子供の誕生を心待ちにするメッセージカードが、彼女の部屋には溢れていた。
大雑把な彼女がそういった「友からの贈り物」を唯一きちんと整理して保管していることには少しばかり驚いた。
老若男女問わない彼女の交友関係を、あの閉鎖的なシャルルがよく許諾しているなと感心さえする。

子供心に‥まだ少年のマリウスは彼の孤独な闇というものを何となく察していた。
でもそれを上手く説明することも理解することもできなかったので黙っていることにしていただけだった。

彼の闇には触れてはいけない

本能でそう思っていた。
それ以外は、彼はどこまでも静かでどこまでもマリナだけを愛するひとりの男性でしかなかった。
マリナはその暗闇について理解しているようだった。
時折見せる、彼の屈折した青灰色の視線に気がつくと、彼女は重たくなった躰を動かして、彼に寄り添った。
だいじょうぶか？と彼女が小さく聞くと、その言葉にシャルルは「こちら側」に戻ってくる…そんな様子をマリウスは何度も見た。

そのマリナがマリウスに問いかけをした。
「与えるは易く知るは難い」
彼女の恩師が彼女に言った言葉だという。
そしてもう一つ。「知るは難いが捧げるはなお難い」と言ったそうだ。
この意味がわかるようになれば良いわね、と彼女はマリウスに笑った。
マリナに答えを求めても、きっと笑って「内緒」と言うだろう。
彼女なりの答えを持っているようだった。
それでも敢えて彼女はマリウスに尋ねた。
まだ10代前半の彼に…理解できる言葉かどうか、大人なら考えるだろう。
でもシャルル・ドゥ・アルディの弟であり、小さいながらも聡明さを持つ彼にはきっとわかるはずだから、とマリナは言った。
幼少期のシャルルを思い出させる発言をする、と館の古株の使用人からも言われる。

彼はシャルルと兄弟であることを嬉しく思うけれど、彼に近づく度に・・・
彼の戸惑いや狂気への軫憂を感じ取って、何か落ち着かなくなる。何か‥哀しくなる。

逆にマリナと一緒に居ると安心する。彼女はいつも太陽のようだった。
彼女が太陽ならシャルルは月だった。
月と太陽が一緒に居る。その傍に自分が居る。とても嬉しかった。
だから、マリナが自分の体調よりシャルルのことを懸念している様を見ると‥マリナはもっと彼に我が儘で良いのでないかと思った。

使用人達や彼らをほんの少ししか知らない者達は、シャルルの愛の深さだけを賞賛している。
東洋人の女性を当主の妻として迎え入れ、そして彼女をこよなく愛するフランスの華の配偶者について、彼らはいつもため息混じりに「羨ましい」と言って羨む。
彼が長年恋い焦がれた相手だけに、マリナのために随分と心を砕いているのは明らかだったが、マリウスから見れば、マリナの愛の方も、シャルルに劣らず深いと思った。
彼女の陽の気質がそうは感じさせなかったのだけれど、マリナにも憂いがあり哀しみがあり、そしてシャルルへ深い愛を捧げている。

自分の体調よりシャルルの杞憂を優先するマリナに、シャルルは気がついているのだろうか。

「マリナ。具合が悪いなら横になってこい」
マリウスがそう言うと、マリナはうん、と頷いた。
ここのところ疲れやすいのか、彼女はよく眠る。
そしてシャルルが帰宅したり、食事の時間になると胎動で目が醒める、と言って苦笑して起き出す。
「…何か希望はある？」
マリウスが夕方の食事の後、部屋の前まで送り、軽い仮眠を促すと、マリナは首を振った。
「うつぶせで寝たい」
「そりゃあ無理だ。出産まで諦めな」
「魔術師のマリウスでもできないことがあるのねぇ」
マリナがくすくす笑う。彼女は腰痛にも悩まされていた。
抱き枕か腰枕をもう少し柔らかい素材にしてやろう、とマリウスは思った。

「早い時間だけれど今日はこのまま寝てしまおうと思うの。」
「そうか。後でシャルルが来ると思うよ」
「たぶんね」
マリナはそう言うと、マリウスに念押しした。
「マリウス。明日は、約束よ。探検しよう」
「わかった。それならマリナ、早く寝るんだぞ」
「どっちがこどもかわからないわね。」
そこまで言うと、マリナは茶色の瞳を輝かせて、お休みなさい、と言った。

そして‥「マリウス、いつもありがとう」と礼を述べた。

彼は少し照れくさそうに横を向いた。

「良いんだよ。オレだって休み中で暇だし‥ここは図書室が充実しているから勉強しやすいし、上映室もジムもプールもサウナもある。リゾートホテルに泊まっているつもりで楽しくやってるよ」
彼が肩をすくめてそう笑うと、マリナは微笑んだ。
「シャルルのこと…もうちょっと見ていてね」
マリナがそう言うと、扉を締めた。

マリウスは肩をすくめる。
どうして大人は素直になれないんだろう。
そう思いながら歩き出した。
廊下の…天井まである大きなガラス窓から見える庭園を越えて向こう側の杜からは、白く輝く月が上り始めていた。

シャルルのようだった。

月はいつも一面しか見せない。
太陽の光を受けてしか輝けない。
暗い新月には何を見せているのだろうか。
光らなければ…それすらわからないほど仄暗くなってしまう。

庭園の一角に設置されている温室の照明が付いていた。
月明かりの散歩でもしようかとマリウスが庭園に出ると、シャルルがそこで薔薇の手入れをしている姿を見かけた。
「シャルル」
マリウスが声をかける。
シャルルは物憂げな青灰色の瞳をマリウスに向けた。
「…マリナはどうした」
「もう休むってさ。今日は具合が悪いらしい。」
そうか、とシャルルは言った。
マリウスは少し見学して良いか、と言ったけれどシャルルは無言だった。
駄目なときには必ず拒否の言葉を発するシャルルであるとわかっていたので、それが無言の肯定だと知り、マリウスは温室の中に入り込んだ。

シャルルは前日の晩にこうして温室と薔薇園に立ち寄り、次の日の朝、最高の状態になる薔薇を選んでマリナの部屋に飾るように指示をしてから休む。
これは長い習慣であり、マリナがアルディ邸を不在にしていようが居まいが関係なく絶えることなく続けられていた。彼が不在の折には、ジルがその代理をする。

彼は月の晄の下でまるで月の神のように佇んでいた。
彼の動作には音がしない。
ひとつひとつが計算されていて、無駄な動きがない。
時折剪定する金属音がしたり、薔薇の鉢をひとつずつ包む防湿フィルムの音がするだけだった。
そんな中で、マリウスはシャルルに近づいた。
近づくと、彼は何か用かと言いたげに、マリウスと良く似た瞳をマリウスに移した。
彼は少しだけ躊躇って‥でもこれはチャンスだと思った。

シャルルと2人だけで話をすることは滅多にない。

月の晄を見て切なくなったせいもあった。
母を思い出して遣る瀬無くなったせいもあった。

けれど‥この孤独な人を知りたいと思った。
「マリナ、相当具合が悪いけれど…」
意を決してマリウスがシャルルに話を切り出した。
「知ってる」
彼はそう言うと、作業台の縁に腰をかけた。
腰が落ちて、目線が下がる。マリウスと話すためだ。

「あの状態では来月あたりから歩行困難になるだろう。もう少し様子を見て…問題ない時期が来たら、帝王切開にしようと思う」
「マリナには相談したの？」
「許可を求める話ではないだろ。」
「だって…！」
マリウスは絶句した。
「シャルルの子供だけれど、それよりマリナの子供でもあるんだよ！」
「オレとマリナの子だ」
シャルルが言い直した。
「アルディ家当主の実子となれば…正常に健康に産んでもらわないと困る」
「シャルル、シャルルは言葉が足りない」
マリウスが彼の倍以上の年齢の兄に忠告した。
眉を少しだけ上げて軽く睨み付ける。
「彼女が心配だから、こどもが心配だから、と言えば良い。それに‥マリナがあれほど苦しいのに我慢しているのは、シャルルのためだと思わないの？それなのに、勝手に診断するのは、夫だから？医師だから？それとも…アルディ家の当主だから？」

最後の言葉を選んだのであれば、敵わないとわかっていても彼を殴るつもりだった。
マリウスは拳の準備をした。

シャルルはマリウスから視線をそらさずに、静かに低い声で言った。

作業台の縁に座ったまま、彼はマリウスをじっと見つめた。
薄い唇が開き、そして彼はマリウスの問いに答えた。

「…愛しているから」

マリウスは拳の力をぐっと入れて、そして力を抜いた。
シャルルと良く似た、物憂げな切れ長の二重の瞳から涙が流れた。
涙と気がつかなかった。
温かい液体が、自分の瞳から流れ出た。
苦しい。
苦しかった。

息が出来ないくらいの…この言葉を彼が口に出すことの重さがマリウスにのしかかった。
どうしてかわからなかったけれど、目の前が曇った。
「シャルルの…ばかやろう」

どうしようもないほどの愛に堕ちた目の前の男性は…。

愛しているから、彼女が本当に耐えられなくなるまで黙って見守っていた。
彼女の気持ちがわかっていたから。

愛しているから、彼女の躰を憂えて、たとえ彼女が嫌だと反対しても手術に踏み切るつもりでいた。

愛しているから…彼女を日本に帰すことが出来なかった。

マリウスは常々不思議に思っていた。
なぜ、初産のマリナには誰も付き添いがいないのか。
彼女の親族や友人や近隣に住む知り合いさえ、この館には訪れていなかった。
シャルルは…マリナの身の回りに、誰かを置くことが耐えられなかった。
安全性の問題もあるけれど、マリナを手放すことができないくらい・・・彼は彼女を求めていた。

彼女が誰かに視線を注ぐ瞬間に耐えられないくらい愛しているから。

でもそれでも、出産前の彼女をひとりアルディ邸に置いておけなくて、マリウスを呼び寄せた。

矛盾する彼の気持ちの葛藤に…今ほんの少しだけ触れてしまった。

あれほど、触るなと本能が囁いていたのに。

彼の狂気が…月の晄の下で少しだけ顔を覗かせた。

「なぜマリウスが泣く？感情の抑制が利かないのならこどもと言われても仕方がないぞ」
「うるさい」
マリウスは開いた掌で自分の涙を拭った。鼻声になった。

「シャルルがそれだけマリナのことを大事にしているのだったら…その気持ちを素直に言えば良いだろう。
マリナにすべてを捧げるのだろう？
マリナは永遠の女性なのだろう？
ーーーシャルル。
シャルルの言葉はいつも最小限で無駄がないけれど…時に相手に伝えるための必要以上の言葉もあると思う。」

ーーーその言葉を聞いて、シャルルは顔を動かした。
白金の髪が揺れて彼の白い頬に降りかかった。
頭を軽く振り、驚いているようだった。
やがて‥何かに合点がいったように薄く微笑む。

「マリウス。君は間違いなく‥親父殿の息子だ」
彼がマリウスの出自のことについて口に出すのは初めてだった。
マリウスは驚いてシャルルを見た。
ああ、確かに…
自分はこの人と似ている。

この人の狂気が怖い。でも愛おしい。そして…哀しい。

彼の短い言葉のひとつひとつに込められた、愛の囁きや慟哭をマリウスは聞くことが出来る。

それは自分が半分だけ、同じ血を持っているから。

ーーー血が喚ぶ。

そんな表現が頭に浮かんだ。

こんなに環境も年齢も何もかもが違うのに、シャルルとマリウスを引き寄せる。
そして、彼の切ない叫びを聞く。…聞こえてしまう。
年相応のこどもと遊ぶことよりこの館に滞在することを選んだのは、単なる興味からではなかった。
今ならそう言い切ることが出来る。引き寄せられるのだ。
知りたいという欲求が彼を引き寄せる。

彼が怖いのではなかった。
彼を知ることで…自分以外の誰かを知ることが怖かった。

母がなぜ未婚で自分を産んだのか。
マリナがなぜ彼の狂気を黙って受け入れるのか。
シャルルがなぜ…マリナを愛するのか。

そして自分はなぜ生まれてきたのか。

知ることは難い。

マリナはそう言った。本当にその通りだと思った。

マリウスは…他の者のように、彼に愛されるマリナが羨ましいとは思わなかった。
世の賛辞と逆だった。
マリナに愛される彼が羨ましいと思った。
シャルルの声にならない小さな悲鳴をいつも彼女は聞き耳を立てている。

そしてマリウスは、身の内に天使を宿しているマリナを見つめていたいと思ったけれど、
彼女の受け止めているシャルルの愛については考えたことがなかった。
今になってようやく知った。

彼女は今、その苦しみに耐えて…
彼に家族を作ろうとしている。
狂気でない愛を与えようとしている。
入院してしまえば楽になるのに、彼に日々膨らむ腹を見せて、家族の愛を育もうとしている。
故郷にも帰らず。
友も呼ばず。
シャルルとマリナの間に流れる愛について、静かにシャルルに伝え続けて居る。

それが彼女の愛なのだと知った。
命を生み出す者の愛なのだと知った。

マリウスはまた泣いた。

今度はこどものように。
大粒の涙を、長い睫から滴り落とした。

「そんなこと…言われなくたって…オレはシャルルの傍に居るよ‥いつも。いつまでも。だからシャルル‥ひとりで苦しむな。シャルルの傍には‥・マリナが居る。やがて天使がやって来る。愛は…減りはしない。マリナの愛は増えるけれど、減らない。」

それだけ言うのがやっとだった。
あまりにも苦しい会話だった。

彼は、伝える言葉を選ばずに、その気持ちを吐露した。
立ったまま鼻をすすり、涙を流す小さなナイトに、シャルルは笑いかけた。
花のように美しい微笑みだった。

「マリウスは自分のことは言わないのに、他人のことに夢中になりすぎる。
マリナにそっくりだ。影響されすぎるのはこどもの特徴だな」
でも、悪いことではない。シャルルは付け加えた。

「マリナに似たら‥それは困るな」
「だろう？今から‥おなかのこどもがマリナの性格に似ないかどうか心配だ」
シャルル・ドゥ・アルディの回りにはマリナが増殖することになるな。
マリウスは呟いた。
それは困るな、とシャルルはマリウスと同じ台詞を彼の口調を真似ていった。
シャルルとマリウスはそこまで言うと、互いを見て、くすりと笑った。

「マリウス。彼女にはきちんと話すから、もう少しだけ見ていてくれないか」
シャルル・ドゥ・アルディは滅多に依頼の言葉を口にしない。
けれども、目の前の少年に、彼は妻が言った言葉と同じ言葉を口にした。
マリウスは言った。
「オレはシャルルの様に医者じゃないからわからないけれど…マリナが心底具合が悪そうだったら、すぐさま病院に入れるからな。」
「医者じゃないがマリナの専属の『魔法使い』だからな。…これから胎動が酷くなるようなら辛いはずだから、その時は天使を宥めてやってくれ。それはオレにはできないことだから」

お腹の子供はシャルルに早く逢いたいに違いない。

マリウスはそう思った。

ああ、オレも‥早く逢いたいな。

この夫婦の子供はさぞかし‥さぞかし可愛らしくてその上、憎らしいことだろう。

シャルルが外出した時間を見計らって、マリナとマリウスは予定を決行することにした。

本来の約束した日より随分経過していた。

マリナの具合が悪くなり、検診も兼ねて数日検査入院をしていたからだった。
その時に逆子であり、やはり帝王切開しないと駄目らしいとわかったので、マリナは渋々手術を承諾した。
大きな手術をしたことがない、と言うと、シャルルは冷たく笑った。
「盲腸と同じ下半身麻酔だから大丈夫だ。今は通常分娩でも無痛分娩があるだろ。あれと同じだと思えば良い。後は…歯医者の麻酔くらいはあるだろ。」
お腹を切るんでしょ、とマリナが抗議したが、「綺麗に縫ってやる」とシャルルに言われて、マリナは青ざめた。
シャルルに手術をしてもらうくらいなら、日本に帰ると伝家の宝刀を出してきたが、「臨月では飛行機に乗れない」と知ると、覚悟を決めたようだった。
結局、シャルルは縫合後の形成手術のみを担当することで落ち着いた。
マリナは予定では来月病院に入り、そして予定された日にちで出産することになる。
母子ともに健康であったけれど、マリナには見知らぬ国での慣れない生活が、少しばかり負担のようだった。少し頭痛がしていたのは、緊張によるものだったらしい。

マリナは退院をしても眠っていることが多かった。
そしてようやくこれまでと同じ生活を送れる様になった頃合いを見計らって、マリナが「予定決行」とマリウスに合図した。
一段と腹部が大きくなっていたけれど、子宮が下がってきたらしく、胃や心臓への負担が軽減されて随分楽になったらしい。
何となく‥・根拠はないけれどマリナが母親の顔つきになってきたような気がする。
その穏やかな笑顔を見ると、マリウスは自分の母親を思い出した。

「それにしても探検ってどこを探検するの？」
「だから、秘密の部屋、よ」
彼女はそう言って、マリウスの腕を取った。
そして、マリナの身長を追い越してしまったマリウスに酷く驚いたようだった。
「いつの間に！」
「オレは一応育ち盛りだからね。マリナが居ない分、シャルルとの気まずい会話を何とかしようとマリナの分も含めて食事をした結果がこれさ」
マリウスはくすくす笑って言った。
「アデリーヌに見せてあげたいわ」
確かに身長が伸び、急速に成長しているので関節が痛かった。
だがこれは成長している証拠で、マリナも同じように急速に成長する胎児のためにいろいろと耐えているのだと思うと、この軋みについて不満を漏らすようなことは出来なかった。

「ここが秘密の部屋？」
そう。
マリナが面白そうに言う。
「ここは…」
ここは、マリウスが毎日の様に通っている場所だった。

資料室が併設されたアルディ家の蔵書が保管されている図書室だった。
アルディ家は古書の蒐集家でも知られている。様々な分野の文献が所狭しと並び、分類されていた。
このほかに収容しきれないものは別の館に保管してあるという。
アルディ家の財力と歴史を感じる場所のひとつだった。
加えて、マリナが絵を描く職業にあったということもあり、絵画や美学といった方面は日本語訳が追録として備えられ、日本語の文献も数多くあった。
古い本の匂いがする。
匂いに敏感だったマリナはこの場所をしばらく遠ざかっていたが、彼女はマリウスを伴って、この静かな一角に足を運んだ。
「ああ、良いわね‥古い紙が、音を吸収するようで、この静かな感じが…落ち着くわ」
かつて、こういった図書館で、慣れない論文を書くのに何時間も費やしたとマリナは言った。その時の恩師の言葉は今でも忘れない、と彼女は言う。
…あのときの言葉だろうか。
「与えるは易く知るは難い。…知るは難いが捧げるは尚難い」
マリウスが復唱する。ええ、そうね、とマリナが笑った。
「マリナ。オレはまだ前半しかわからない。いつか‥答えが出たらマリナに聞いてもらっても良いかな」
マリウスがそう言うと、マリナはもうわかったの？と茶色の瞳を丸くした。
彼女の瞬きはゆっくりであるので、目を見開くと、猫の瞳のような印象を受ける。
「私で良ければ、いつでも。」
そう言ってマリナは、手を差し出して、マリウスの陶器のようになめらかな頬を撫でた。
「急いでおとなにならなくても良いよ。」
マリナがそう言った。
「急いでないよ。でも早くおとなになりたい。」
マリウスが言う。マリナはその言葉に少しだけ‥哀しそうに微笑んだ。
「…･シャルルが悲しむよ。…彼は急いで大人になってしまったから、マリウスにはそうなって欲しくないと思っているだろうし。」
マリナは続けた。
「お金で買えないものもある。シャルルでさえ手に入れられないものがある。記憶は買えない。決して。だから、そんなに急いで大人にならなくて良い。今の毎日を大事に生きて」
彼女はそう言った。

マリナとシャルルは、10代後半からの旧知の仲だと聞いている。
それなのに、それでも彼の得られない‥それより前の記憶について憂えるマリナが‥とても切なかった。

「…ここの秘密の部屋って何？オレは毎日来ているけど秘密の部屋なんてないよ …」
マリウスが話題を変えた。マリナは、ポケットから小さい鍵を取り出した。
「これ。魔法の鍵。」
マリナはいたずらっ子のように微笑んだ。
マリウスは驚いて声を漏らした。そんな部屋は見たことがなかったから。
「マリウスは気がつかなかったでしょ。…資料室の奥にある、地下倉庫の鍵なのよ」
ドキドキするでしょう？さぁ　探検よ！とマリナが宣言した。

彼女はそこに何があるのか…わかっているようだった。
それでも「探検」と言ったのは…マリウスに見せたい何かがあり、彼が何かを発見するであろうと期待しているのだと思った。

図書室を抜けて資料室に入る。
そこには補修中の古い文献があって、薄暗い照明の中で何人かが修復作業をしていた。
マリナはこんにちは、と挨拶をするとその脇を通り抜けて、資料室のもっとも奥に入っていった。
「アルディ家は地下がいっぱいあって‥・要塞みたいでドキドキしちゃうわ」
マリナがそう軽口を叩いた。
もう歩幅を大きくして歩くことが出来ないので、マリウスが先頭を歩き、彼女の足元に障害物がないことを確認しながら進んだ。
やがて部屋の最奥に進むと、マリナに渡された小さな鍵がぴったり合いそうな、金属製の扉に行き着いた。
「ここ？」
「そう」
彼女が肯定したので、マリウスは心臓を高鳴らせながら、扉の穴に鍵を差し込んだ。
鍵は比較的新しかった。
さび付いていないし、何度も使用した摩耗の後も付いていた。
「増築したのは、あまり昔のことではないらしい。最近らしいわ」
マリナがマリウスの疑問に答えるように、補足した。
彼女は足元が見えないのでそろりそろりと足場を確認しながらゆっくり降りる。
「マリナ、無理して階段を使わなくても良いよ」とマリウスが言うとマリナは
「もっと楽な時期に来たかったんだけれどねぇ」とぼやいた。
「答えになってないよ」
マリウスが苦笑する。
「魔法使いが居るから平気。」
マリナが笑った。
「マリナ。気を抜くなよ」
それほど傾斜があるわけででもなく、段差も多くなかったので、程なく最下層に行き着いた。
階段には絨毯が施されて、手すりも付いていた。
ひんやりとした地下独特の空気が流れているがかび臭さや古めかしい感じがしない。
最下層の扉も、マリナの言ったとおり比較的新しいものだった。
「これが秘密の部屋？」
そう。開けてみて。今度は鍵がかかってないから。
マリナがそう言った。
やはり彼女はここに足を運んだことがあるらしい。
「それなら探検じゃないだろ」
マリウスが肩をすくめた。
「あら　探検よ…意味はじきにわかると思うけれど」
シャルルの口調を真似たように、マリナがおかしそうに言った。
マリウスは変な大人、と呟いて、厚い扉を開ける。

「…確かに秘密の小部屋だな」
マリウスの第一声はそれだった。
確かに。
日差しが入り込まない以外はまったく普通の部屋だった。
明るい白色の照明が輝き、地下の薄い照明に慣れてしまったマリウスとマリナは少し目を細めた。

大理石のタイルを敷き詰めた床は鈍く光っていた。
壁紙は淡いアイボリーでそれが煙草の煙のためなのか、書棚の本を読むための効果を促すものなのかよくわからなかった。かすかに煙草の匂いがする。その香りも昔のもののようだった。
部屋は案外広くもなく狭くもないといった感じだった。あまり違和感を感じなかった。
少しだけ…古い紙の匂いと、もっと別の匂いが数種類。それ以外は何も無かった。
殺風景だな…何もないからそう思うのかもしれない。
まず、目に入ったのは書棚だった。
その書棚は入り口すぐ右手に備えられており、図書室と同じ板材が使われていた。
スライド式になっている。
だから、マリウスにはあまり違和感がなかったのかもしれない。
セントラルヒーティングのファンが回る音だけがかすかに響く。

その部屋はほとんど何も無かった。
先ほど通り抜けた資料室とあまり変わらない印象を受ける。
作業台のような、デスクマットが置かれたL字型の机と…椅子がある。
中央にはソファが置かれているだけだった。
サイドテーブルがソファの脇に置かれている。

それから…いくつかのグラスと灰皿。グラスはどれも形が違っていて、誰かと愉しむためのグラスではなく、この空間はたったひとりのためだけのものであることを示していた。
グラスはよく磨かれており、ボトルの封が切られていた。
「…ロベールの部屋？」
「そう。」
彼が亡くなって随分経過するというのに、その部屋は誰かがつい最近まで使っていたかのような感じがする。
「シャルルが使っているから」
マリウスの疑問にマリナが回答する。
「と言ってもここは保管庫みたいな役割みたいだけれどね。説明するより見た方が早いでしょ。…好きに書棚を見て良いって」
彼女のその口振りから、この部屋への来訪はシャルルの差し金か、と察した。

マリナがソファに腰を下ろした。
長時間立っているのは腹が張るらしい。
本を読むと疲れる、フランス語だしね。読めないわ。と言ってソファに深く座り込んでしまった。動く気はないらしい。
「じゃ　勝手に見るよ」
マリウスの身長よりずっと高い書棚を見ながら…その膨大な本の背表紙を眺めた。
…本じゃない。
すぐにマリウスは気がついた。
尾篭土の豪華な背表紙ではあったけれど、一冊一冊厚さが違う。
何かが挟んであるらしかった。
大きく膨らんでいるものもあれば、下段に視線をやると、未使用と思われる比較的新しい冊子もあった。

同じ表紙が続いている。経年によって劣化しているものがあるが同じ表紙だ。
それがびっしり書棚を埋め尽くしているのだ。
色が違うものがあるが、みな同じだった。…最初は気がつかなかった。

そのうち、書棚の大半を占めている種類の冊子を手に取った。ずしりと重い。
長期保存を目的として、表紙も裏打ちもしっかりした造りになっている。
一冊一冊が丁寧に作られた特注品だった。
表紙にはアルディ家の紋が入っている。
小さくナンバーが刻印されていて、やはりこれはマリウスの想像したものであると思った。
彼は背伸びして、ナンバーが最も小さいものを手にした。
中身を開く。
そしてしばらくの間、一頁一頁を丁寧にめくりながら呟いた。
「…シャルルだね」

上下天晄　後編

それはたいそう豪華なスクラップブックだった。
アルバムというには文字が多かった。日記に近かった。
その上質紙にはびっちりと…文字が隙間なく書き込まれており、所々に印刷物の切れ端や写真が添付されていた。

シャルルの誕生からのすべての記録が残されていた。
いや、誕生からではなく、彼がこの世に生まれてくることになるとわかった瞬間から、その記録は始まっていた。
思ったより細かい几帳面な字だった。
父の字だと直感した。
そして何もかもを記録していた。
誕生を祝う新聞の告知記事、洗礼式の日取りや日程、最初の銀スプーンの瑕のこと …
ほぼ毎日つけている。時々、親子の予定が入っていた。
観劇会のチケットが挟まれていたり…時にはシャルルの知能指数のテスト結果なども挟んである。
とにかく、彼に関する記録、としか言いようがなかった。

アルディ家の当主は忙しいはずだ。
あのシャルル・ドゥ・アルディでさえこれほど家を不在にしないと処理できないくらいの仕事がある。
それなのに…ほとんど毎日の様に事細かに記録されている内容にマリウスは胸をつかれた。

「こういう記録は全部データベースに保存されているのにね」
マリナがぽつりと言った。
「何もかもを書き込んである…シャルルと名前が入っているものはすべて保存してある。アルバムより、思い入れがあるわよね…」
「彼はとにかく情報収集癖があったようね。シャルルと似ている」
「マリナ。…この色合いが違う背表紙は？」
マリウスがちらりと可動式書庫の棚を見た。
色が違う背表紙がある。

「いつか見せてくれると思うわ」
マリナが遠回しに、色が違う背表紙を見ることを禁じた。
「‥シャルルじゃない人のことが書いてある」
マリナはそう言った。
同じくらい、分厚くて同じ冊数を使っていたが、色合いが違う。
「途中までは別の人が書いていたの」
シャルルの表紙は赤だったが、その色違いの冊子は青だった。
マリナは青い冊子を指してそう言った。
「そしてそれを書いていた人のことを書いたものが、焦げ茶色の冊子」

可動式書庫をスライドさせてみて、とマリナが言った。
マリウスは重いスライドを開けて…･
その冊数に圧倒された。
書庫は背の高いものであったのに、上段から下段まで焦げ茶色の冊子が詰まっていた。
相当前から書いていたのだろう。
かなり古いものもあった。
同じ表紙で整えられた冊子をマリウスは眺めた。

これほど年季の入った冊子が同じデザインで更新されている。
これは後で装丁されたものではなく、毎年のように更新されているものだった。
1年で1冊という程度ではなかった。
きっと1ヶ月に1冊程度は使っているはずだった。
この焦げ茶色の表紙の冊子に書かれた人物は…･マリウスには想像できた。
「シャルルのお母さん」
彼は呟いた。
「そうだね‥記録と言うより、日記だね…」
マリナは言った。読みたければ読んでも良いよ。
異母兄の母。
どんな人だろう。
あのフランスの華を産んだ人。
…そしてマリウスの母親が唯一、気にかける相手。
父が愛した運命の人だと言った。
母はそれでも愛していたと言った。
運命の人を失ってなお彼女を愛し続ける彼が好きだったと言った。

もう少し、一緒に居たかったと言っていた。

男女の気持ちはよくわからない。
けれども…マリウスを産んで、母は何かが変わったと言う。
愛する人の子供を産み出すことは、女を変えるのよ。
母はマリウスにそう言った。
きょとんとするマリウスにわからなくても良いけれどね、と笑った。

母は‥シャルルの母を嫉妬することをやめて、マリウスを授けた父を受け入れた。
そんな父親もマリウスの存在を知らないまま他界したが、それでもマリウスの中には確実に‥シャルルと同じように父の血が流れて

いる。

そしてすべてを包む母の血も流れている。

だから…孤独なシャルルの声が聞こえる。

これは間違いようもなく‥・事実なのだ。

彼はその膨大な数の冊子を見た。
彼女はシャルルが8歳の時に他界している。
この膨大な日記とも言えるような記録簿は…それ以降も更新されているようだった。
きっと、ロベールの死の直前まで。

アルディの男の愛し方は…なんて切ないのだろうと思った。
シャルルだけではない。
父も。
彼らの愛は重い。
苦しくなるくらいの狂気を妊んでいた。

父も…
母を愛していないわけではなかっただろう。
子まで成した仲だ。
でもこの膨大な量の愛の記録を見ると…
母が愛したのは父のこういった狂気も愛したのだろうと思った。

いつか、自分も…
これほど狂おしい愛に我を忘れる時が来るのだろうか。
ひとりの人をとことん愛し抜いて‥

「マリウス」
そっとマリナが声をかけた。
「マリウスの記録簿もあるわよ。…これって正式には『系図原簿』って言うのですって。」
左隅を見て、とマリナが言う。
目の醒めるような…深い青紫の冊子があった。
もう3冊あった。
4冊目が書きかけになっていた。しおりが挟まれていたのでわかった。

「これ…」
「今、シャルルが加筆中。」
「‥オレの記録？」
「そう。一族の記録ですって。お父様の記録は、シャルルが記憶を起こしながら作成中よ。いつか、完成したら見せてもらって。・・・今日は見せられないから、後日だねって言ってたわ。」

本当は、これは記録係という役割のある人がちゃんといて、代々の記録をデータベース化したりしているという。
すでに電磁媒体で記録することもできるのに…彼はこうして亡き父の遣り残したことを引き継いだのだ。
そして…マリウスの記録を撮り始めた。
彼の年齢はまだ若かったけれど、もうこんな冊数になり…そして更新され続けていた。

マリウスはそのときに気がついた。
彼がアルディ家に訪れるとき、シャルルが居ないことが多いことに。
…きっと、その間…母に‥アデリーヌに会いに行っていたのだ。
そしてこの系図原簿を書き込むための情報を収集していたに違いない。
「マリウスに知られずに聞き出すのは至難の業だったわ」
マリナがのんびりと言った。

「阿呆だなぁ。…･こんな面倒な手間をどうして…･・。古い家の人達のやることはわからないよ。」

「…手間だから残すのよ」
マリナがまた言った。
今度は返答できなかった。

…にいさん。

マリウスが呟いた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

系図原簿　本当にあります・・・。

「それから・・・」
マリナが突き出た腹を抱えながら、作業台の上にある小箱を取るようにマリウスに言った。
「お使いだてして悪いわね」
軽くマリナが言ったので、マリウスも冗談交じりに言った。
「いいや‥でも、高く付くよ」
「魔法使いは代償を求めないものよ」
「いや…魔法を使うには代償をもらわないと」
マリウスは言い返した。
「それが代償、で良いかしら」
マリナの言葉に、彼はマリナに手渡そうとしていた小箱に視線をやった。
彼が片手で持てるほど軽い小箱は、アルディ家が好んで使うエバーグリーンの深い緑だった。

開けてみて、とマリナに促されるままに、彼は小箱を開ける。

留め具を外し、彼はその小箱を開いた。
何が入っているのか、皆目見当がつかなかった。

‥‥

‥‥

しばし、その品を見て、彼が絶句する。
唇をぽかんと開けて、目を見開いた。

彼のために用意された品に‥‥彼は言葉を失った。

「マリナ‥！これ！」
マリウスが叫んだ。
「マリウスのものよ」
彼女はゆっくりとそう言った。
「…しばらく、入院になりそうだから、先に渡しておくね。」
彼は小箱の中身を見た。
中身には、外箱と同じ色の絹が敷き詰められて、その中央に、二つの輝きがあった。
ハードプラチナの…ごく控えめだけれど最高の彫金術が施されたそれを、彼は同じ２つの瞳で凝視した。

それは、ピアスだった。

彼は今時のこどもらしく、ピアスをしていた。
クラスの半分以上は同じように小さい頃から自分の誕生石やら誕生花をあしらったピアスをしていた。
だから、この品が最高級の品であることがすぐにわかった。
薔薇と蔓の､アルディ家の紋が下地として入り、片方に各々、狼とキツツキをあしらった丸いピアスだ。
男性用で、やがて彼が成長しても耳朶にあわせて調整できるように留め具が細工されていた。
「これは…聖獣と、聖鳥だね…」
マリウスが呻く。誰がこれを作成するように指示し、誰がデザインしたのか、すぐにわかった。
「そうだね。軍神Mars‥マリウスの名前の由来の神様だね。戦いの神様じゃなくて、勇敢な青年の理想の象徴…。」
彼女はそらんじてきた詩を暗唱するかのように、遠くを見ながら言った。
きっと何度も練習したのかもしれない。
「その神の傍らにいる狼は孤高の象徴。農耕の守護神でもあるから、キツツキは、豊穣の象徴。アルディ家の繁栄を願う、最高の名前ね。」

孤高であるけれど豊かであれ。
豊かであるけれど奢るなかれ。

「ローマ建国の父「ロムルス」とその双子の兄弟「レムス」の父とも言われるグラディウスと同一だね」
双子の父。彼は思い当たる節があった。
この名を、彼が生まれてくると知らずに、考えた人がいたことを知った。
「次に子が生まれたらつける名前の第一候補がその名前だったみたい。…アデリーヌは昔、そんな話を聞いていて、あなたの名前に付けたそうよ。…そしてシャルルはマリウスの記録に書き足した。」

彼は胸が詰まった。

この贈り物を受け取れそうにもなかった。
さっきまで、とても軽い小箱と思っていたのに‥今は持っているのがやっとだった。

自分が生まれてきたことを知らない父が不憫だった。
そして少しだけ恨んだ。
たとえ誕生を見守らなくても、存在を知って逝くのとそうでないのとでは違うと思った。
伝えたいことを伝えられなかった母も不憫だった。

伝える前に、気がつく前に逝ってしまった父を想って涙する母親が哀れだった。

ちょっとだけ…シャルルが羨ましかった。
哀しく狂気に満ちた兄は、誕生を望まれて、幸福に過ごしたと思うと、そんなに幸福なのに、なぜ悲しそうな顔をするのか理解できなかった。
でも、この短い滞在で、彼がとても、苦悩していることを知った。
父になるのに、父を知らないマリウスに心を砕くシャルルが愛おしかった。
マリウスは愛されて生まれてきた、と伝えるために、彼がこの部屋に籠もり、資料を探している姿が想像できた。
父のメッセージを伝えるために、シャルルは黙って遺された膨大な資料の系図原簿に目を通し続けた。
マリナはそんな彼を孤独ごと引き受けて‥‥彼の家族を創り出そうとしている。

そんな彼らから思いもかけない贈り物を受けて、マリウスは戸惑った。
出自をあらわすピアスだ。
これを贈られるということは…アルディ家の当主として、マリウスをマリウス・ドゥ・アルディとして血族関係を認めたことになる。
ピアスの裏側には、送り主の当主のイニシャルが、目立たない僅かな文字で刻まれていた。

「いつの間に…！」
マリウスが呻く。
「ああ、言うのを忘れていたけれど、この家には、魔法使いがもう一人いるのよ」
マリナがくすくす笑った。
「魔法使い、というよりは大魔法使い、よね。本当に。いつの間に用意したのかしら。随分時間がかかる品だと思うけれど。」

そう。彼は魔法を使う。
素知らぬ顔で。

探検しようと言ったのに、自らの按検になった。

「滞在のお礼ですって。きっと、自分では照れくさくて言わないのでしょうね。…ピアスに家紋を入れるのは、知り合いにそういう人が居てね…そのときから考えていたみたいよ。」
困った人、とマリナが肩をすくめた。

困った妻に困った夫だよ、この夫婦は。マリウスは心の中で言い返した。
彼にこれを渡すために…こういう回りくどい方法でしか伝えられないこの家の当主に
一度きっちり「言いたいことは言葉で言え」と伝えなくてはいけないなと思った。

「探検でお宝発見ね！さて。…そろそろシャルルが戻るわ。戻りましょう」

なんだかお腹が苦しいしね。
腹時計ならぬ、赤ちゃん時計ね。
これで彼の帰宅がわかるなんて。
…それに、お腹が空いてしまったわ。

マリナが笑ってそう言った。
マリウスは小箱を閉じて、ありがとう、と言ったけれど、マリナは聞こえないふりをした。

けれども、階段を上るときに、その言葉は、大魔法使いに言ってね、と言った。
マリウスはそうするよ、と答えた。

「‥‥シャルル」
いつもなら、ディナーのメニューを真っ先に尋ねるマリナが、シャルルに短く言った。
彼は彼女に帰宅のキスをしようとして、抱き寄せた彼女の顔をのぞき込んだ。
「マリナ。どうした？」
硬い表情のマリナに、シャルルは声をかけた。
いつも陽気に微笑む彼女の顔は少しばかり青ざめていた。
彼女は言おうかどうかかなり迷っていた。
彼はプラチナが光る指でマリナの顎を軽く掴んで、そっと彼の顔に向ける。
「マリナ」
名前を呼ぶ。マリナは躊躇っていたが、彼の呼びかけに声を出した。
「シャルル。胎動がしない」
「‥‥」
彼は、無言で胸から薄い携帯電話を出した。
細く長い指で記憶している番号を呼び出す。
そして短くいくつか指示を出すと、回線を切断して、マリウスに向き直った。
「マリウス。マリナの上着を持ってきてくれ。」

「シャルル‥何が‥」
「急げ」
厳しい顔でマリウスに言うと、彼は表情を和らげて、彼女に優しく言った。
彼女に不安を感じさせないように、彼は静かに微笑んだ。
「大丈夫だから」
マリナはうん、と頷いた。

何がどうしたと聞くことは後でもできる。

シャルルが車を寄せる指示をしている間に彼は走って、マリナの上着を取った。
そして自分の上着はどうでも良かった。
マリナの上着も、散歩用のものであり、外出着ではない。
しかし選んでいる余裕はなさそうだった。
シャルルがマリナの背をさする。
マリナは…かなり動揺していた。

マリウスはまったく気がついていなかった。
「秘密の部屋」でマリナが口数が少なかったことを。
そして、いつもなら「運動だから」と自分で立ち上がって動き回るのに、その時にはマリウスに「取ってくれ」と言ったり「棚を見ろ」と言ったりしたことに、おかしいと気がつくべきだった。

そして彼女は言ったではないか。
「お腹が苦しい」と。

毎日一緒にいるのに気がつかなかった。
これだけ長い時間いるのに、気がつかなかった。

マリナはシャルルが触れると胎動がすると言っていたが、彼が傍に居るときだけ胎動するわけでないことはマリウスがよく承知していた。
小柄な彼女がいつも顔をしかめたり座りたいと言っているときは、決まって腹のこどもが語りかけているときだった。
今般シャルルが触れても胎動がしないことでマリナは確信したようだった。

シャルルは冗談めかして「分娩室を作らないと」とよく言っていたが、結局はマリナの猛反対でそれは実現していない。
それも含めて、ここには設備がない。
彼女はこの間、入院したばかりだったから‥‥マリウスは彼女の経過を見つめることを忘れてしまっていた。

ーーー何てことだろう。

自分の出自について、亡き父や母の思いについて考えている場合ではなかったのだ。

「シャルル。」
マリウスはマリナに上着をかけた。
彼女はマリウスにありがとう、と言って、ご飯食べ損なってしまったと笑った。
「そんなのは後で腹一杯食べさせてやる。厭だと言っても。‥良いから、早く車に乗れ」
マリウスは怒鳴った。
こんな時なのに、マリウスのことを口にするマリナの気が知れなかった。

先ほど車庫入れしたばかりの車が再び寄せられて‥3人は乗り込む。

「マリナ。座っている方が良い？横になっている方が良い？」
マリウスは青ざめた顔でマリナに話しかけた。
シャルルは行き先を告げると、黙って彼女の手を握っていた。
マリウスはうわずった声で、マリナに話しかける。
「お腹。‥‥触ってて」
マリナがそう言ったので、マリウスはマリナの膨らんだ腹に手を置いた。
いつもなら…元気に胎動するはずの生命の音が聞こえてこない。
マリウスは血の気が引くのを感じていた。
ぶるぶると手が震えて、静かに触れていることが出来ない。
彼は、もう一つの手で、震える手首を押さえた。
そしてちらりと無言の二人を見る。

どうして、この二人はこんなに静かで居られるのだろうか。

「マリナ。…予定日より早いけど、切るぞ」
シャルルは言った。
仕方がない、とマリナは呟く。
「シャルル。例の品、マリウスに渡したわよ」
「‥ありがとう、マリナ」
「マリナ！シャルル！」
マリウスがたまらなくなって叫んだ。
彼女がマリウスに渡したピアスのことをシャルルに報告しているのだと解った。
「どうでも良いよ。そんな話は後でもできる」
「ーーーどうでも良くない」
彼女がいつになくきつい声で言ったので、マリウスは口をつぐんだ。
茶色の瞳がマリウスを見ていた。それから眉根を寄せて、静かに言い直す。
「どうでも良くないよ、マリウス。だって、本当に‥‥本当にマリウスのことが好きだから」
ね？とシャルルを見上げたマリナに、シャルルは答えずに、肩を抱き寄せて髪にキスをした。
狭い車の中の空間で、息の詰まるような想いがマリウスを襲う。
この二人は自分が動揺しないように、静かにしているだけなのだと悟った。
彼らの指も震えていたし、マリナは口を利くのもやっとなくらいだろう。
蒼い顔をしているマリナに労る言葉をかけてやることができない。

「病気じゃないから大丈夫」
「ここまで育てば、早産でも生きられる」
彼らは口々にそう言ったが、それは自分たちへの励ましの言葉ではなく、マリウスに言った言葉だった。
マリウスは呻いた。

「いいから…いいから、少し黙っていろよ。」
彼は抑えていた感情を溢れさせた。
涙が出る。
声が詰まって、目の前が滲んだ。
どうにもならないほど、激しく狼狽えていた。

こいつら、阿呆だ。

マリウスは呟いた。
ぜったい、ぜったい、後で一泡吹かせてやる。
彼はそう呟いた。
幼い彼が咄嗟に言えた言葉はそれだけだった。

そして…震える手を押さえていた手首を離して…そっと、マリナに両手で触れた。

オレのことを魔法使いっていうなら。
おい、聞こえているんだろう？
…生きろ。
オレが言っているんだから。

ーーー帰ってこい。
ーーーいや、こっちに来い。

みんな、待ってるから。

こんな願いでどうにかなるとは思っていない。
でも彼は…祈るしかできなかった。
彼の生まれたときは母がひとりで産んだ。
こんな風に声をかけるべき者がいなかった。
それでも母が何人分もの言葉をかけてくれたと聞く。
マリウスの胎教のために買いそろえたたくさんの音楽や雑誌や絵本の数は相当数だった。

人が誕生するとき…望まない母はいない。
マリナだってそうだ。
シャルルを愛しているけれど、彼のためだけに家族を作ろうとしているわけじゃない。
自分の血肉をわけたこどもを…彼女なりに愛している。
躰が重くなろうと、好きな絵を描けなくなるくらい具合が悪くなっても、それでも身の内の命と一緒に生きている。

命を生み出すことは難しいけれど偉大なことだ。
それは男のマリウスにもシャルルにもわからないことかもしれない。

でも…マリウスは祈った。

そうすることで…彼は、父が不在で生まれてきた彼自身の誕生の瞬間に戻ろうとしたのかもしれない。
母がマリナで…父がシャルルで…そんな疑似体験をしたかったのかもしれなかった。
こうしてお互いが寄り添って、声を掛け合う様は‥‥マリウスの母は決して得られなかった経験だ。

それでも倖せになれる。

現に、マリウスは倖せになれた。
そんなマリウスを見て、母は幸せそうに笑う。

だから。
おまえはもっともっと幸せになれる。
シャルルとマリナのこどもとして。
こんなにみんなの待ち焦がれた晄の天使なのだから。

だから…
だから…

オレ達の天使。

早く‥・早くこっちに来い。

彼は目を瞑った。

それは医学的に証明できないかもしれないけれど。
それはマリウスの気のせいかもしれないけれど。

その瞬間。

ことり、と何かが動く音がした。

海の中に居た。
温かくて、気持ちがよい。
優しい波動を感じる。
天地のない水の中で漂う心地よさに身を任せた。

…これが海でなく、母の胎内だとわかった。

「ーーー生きて」
声が聞こえる。
「愛している。あなたを待っている。…愛している人の命がここにある。だから…だから生きて」
その言葉が・・・遠くで聞こえる。

優しくて暖かかくてすこしだけ切ない海を漂う。

ーーーやがて、輝いて、空も海も上下が眩しい世界に…彼は引き寄せられた。

上下天晄。

この言葉を思い出す。
母が…彼が生まれた瞬間に思い出した言葉だという。

輝いて、天にも地にも晄が満ち溢れた様を、彼はその瞬間、感じていた。
それが‥‥この世に生まれ落ちる瞬間の晄であることを認識できた時間は短かった。
彼はずっと…その晄を忘れてしまっていた。

不意に、大きな手で誰かに抱き上げたれたことを思い出した。
父のような…男の人の手だった。
ああ、どうして今まで忘れていたのだろう。
その人は…父が囁くべき言葉を代理として言った。
彼は記憶していたのに、すっかり忘れてしまっていた。
父本人ではないから、哀しすぎて忘れているように自分に命じていたのかもしれない。
その時の言葉は、こんなにも・・こんなにも今でははっきりと思い出せる。
彼は優しくマリウスに言った。

「マリウスが倖せになれるように」

そうして彼は頬を寄せて、美しい唇を額にあてて祝福のキスをしてくれた。

ーーーなぜ忘れていたのだろう。

父が与えることのできなかった祝福のキスを、目の前の…これから父になろうとしている男性はマリウスに与えてくれた。
なのにマリウスは父になるシャルルが狂気に溢れてマリナを悲しませていると責めてしまった。
シャルルは黙ってそれを受け入れていた。マリナも何も言わなかった。

ああ‥‥

マリウスは目を瞑る。
目を瞑ってもう一度開くと、今感じた奇妙な感覚が、堰を切ったように彼の体から放出されていくのを感じた。
また、記憶が薄れてもう思い出すことの出来ないものになるだろうと悟った。
光輝のように散乱して…彼の内なる物思いと一緒に放出されていくかのような錯覚を感じた。

それはほんの一瞬のことだった。
それなのに、とても長い時間のことのように思えてならなかった。

シャルル。
シャルルは今、同じようにこの瞬間に‥‥
自分の生まれてきたときのことを思い出しているの?
それとも…これから生まれてくる自分のこどもとマリナの痛みを感じているの？

「マリウス」
揺さぶられた彼は目が醒める。
シャルルの憂いのある上品な横顔が目に入った。

…あれから自分はうたた寝をしてしまったらしい。

壁に掛けられた電波時計を見た。
随分遅い時間だった。
目をつむって開いた、今の自分は、夢だったのだろうか。
それとも…自分でない自分が体を離脱して、どこかに行っていたのだろうか。

マリウスは軽く頭を振った。
深夜の病院の廊下はこれほど静かなのだろうか。
マリウスは最初にそう思った。

「.･･･執刀はシャルルがするのだと思っていたけれど」
マリウスがそう言うと、シャルルは冷たく笑った。
「縫合後の形成手術以外は、断わられた」
断られただけで引き下がるシャルルではないと思ったマリウスは、彼がそれまで着ていた服を着崩していることに気がついた。
･･･きっとマリナの気がつかないところで、彼は執刀したか、執刀医に細かく指示をしたか･･･どちらかなのだろうと思った。

彼が揺らいだ海は、消えかかっていた。
こうして呼吸をする都度に、そのあたたかい海の感触が消えていく。

ただ、それは、とても優しく･･･涙が溢れるほど懐かしいものだということだけ思い出していた。

人は、生まれた瞬間に、羊水に漂っていた記憶を持って生まれると言う。
新生児が手を握っているのは･･･記憶を握っていると言う。
大人になるにつれてその掌が開かれて眠るようになるとき、彼らはその記憶を手放してしまう。
マリウスは‥こどもとおとなの狭間に存在する。

まだ・・・掌を完全に開いたまま眠ることの出来ない年齢だった。

その一方で、この夢は‥夢でなく現実のことなのだと思った。
胎内の夢。
彼が自ら呼吸を始める瞬間の、ほんの少し前の状態。

その瞬間を。
どういうわけか、思い出していた。

そしてこれが最後の記憶であり、彼はこれから手の中に宿る記憶を握ることなく、解放して眠ることになるだろうと思った。

ーーーーシャルルの記憶は、生後6ヶ月からあったという。
けれども・・・　マリウスは、生まれる前の記憶を持っていた。
シャルルは根拠のないことは言わない。
言わないけれども、彼の中にも、きっと、あの記憶が眠っていると思った。
解放するのではなく、眠りにつくのかな。
生まれる瞬間の記憶はきっとそうやって、次の世代に受け継がれていくのかも知れない。
そう、思いたかった。

「･･･終わった」
シャルルはそう言って、マリウスを抱き起こした。
あの「フランスの華」であるシャルル・ドゥ・アルディでさえ、この長く暗い廊下を越えて先に進むことが出来ない。

それは‥・産道にも似ていた。

味わうことのできない母の苦しみを‥この暗い廊下と静寂を見つめることで、彼らは生まれる前の記憶を疑似体験する。共有する。

命の誕生の瞬間に、立ち会うことのできなかった男達は、手術室のランプが消えるのを待った。

この瞬間だけは･･･
マリウスは男であることを意識せざるを得ない。
あのシャルル・ドゥ・アルディでさえも、最愛の妻と分かち合うことの出来ないものがあった。

だから、たとえ生きていたとしても、実父が母の苦しみを共有できなかったと知る。
･･･男の痛みは･･･母になる女の痛みとは比べものにならない。
そう知るだけしかできなかった。
体の痛みを知ること出来ないのであれば、マリウス達は･･･心の痛みを分かち合い、心からの悦びを彼女達に伝えるべきだと思う。

命を伝える。
命の誕生を伝えていく。
それはなんて･･･なんて長い間続いてきたことなのだろう。
そしてそれは、男だとか女だとか関係なく、誰もができて、誰もが託されたことなのだ。

だからこそ･･･マリウスは幻を見たのだろうか。
生まれてきたあの瞬間を思い出したのだろうか。
目を開いている時間が経過するほど、その時の鮮やかな残像はだんだんと輪郭を崩してぼやけていく。

でも、それで良いと思った。

胎内であまりにも幸せすぎて、外の瞬間を怯えてこどもは泣く。
温かくてゆっくりとしていて･･･晄に溢れた世界から出てきて、確かにこの世は良いことばかりではない。上下天晄を焦がれて、あらゆるこども達は泣く。それを産声という。

それでも、マリウスはこうしてこの世に生を受けてきたことを素晴らしいと思った。
生まれてこなければこうしてシャルルに会えなかった。
父を失った者と哀悼を共有することもなかった。
生まれてこなければ…母と暮らす日々を、ちょっと哀しいけれどそれでも倖せだと思うことすらなかっただろう。

父さん。

マリウスは心の中で呟いた。

いつか、あなたに会うでしょう。
先に母が会うかも知れない。
その世界は…こんな上下天晄の世界なのでしょうね。
今は、あなただけの運命の人と共にいるのかもしれないけれど・・母を気持ちよく迎えてあげてください。
いつか、遠いいつかの話だけれど。

水に浮かぶ感覚が薄れて現実に戻るにつれて…彼ははっきりと父の気配を感じたことさえも徐々に記憶を薄めていくことになった。

遠くで、猫の仔のような、鳴き声が聞こえた。

この世を畏れて泣く不安な叫びを、マリウスは微笑んで聞いた。
「ようこそ‥‥」

舫う（もやう）：何かと何かが繋がること

シャルル・ドゥ・アルディはあたしを「オレの天使」と呼ぶ。

この日だけは、何があってもシャルルはあたしのためだけに時間を取ってくれる。
彼が上機嫌でいる。
普段無表情で、あまりそういった感情の起伏を表現することは上品なことでないと思っている彼が、まわりにわかるくらいの上機嫌で過ごすということが、あたしには何よりのプレゼントだった。

その日は朝早く起きて、手ずから薔薇を摘んでくれる。
彼は朝が弱いのに。
どこかに出かけようと申し出てくれるけれど、あたしはこの家で夜までバースデーパーティーを一緒に準備したり、薔薇園を散歩したりする方が何倍も嬉しかった。

招待者が事前に届けてくれるカードや花束や、抱えきれないくらいの贈り物に喜ぶあたしの姿を、満足そうに微笑んで見つめるシャルルの姿に、あたしは満足する。

‥‥気にくわないのは、それがいつも「一番」でないことだ。

一番最初に彼がキスをするのはあたしじゃない。
一番最初に彼が薔薇を捧げるのはあたしじゃない。

彼はいつもマリナに「おはよう…今日は一日君に捧げるよ」と囁く。
そして、まだ寝ぼけているマリナに頬を寄せて、キスをする。
甘くため息の出るくらい、素敵なキスだ。
大人のキス。
一日中、彼らはキスを交わす。
ほんとうに呆れるくらい。
こうしてシャルルからのキスを待ちきれずに起き出したあたしが、扉の入り口で呆れて長い時間を立ちっぱなしでいることにもお構いなしだ。
でも、あたしには、額にしかしてくれない。
そしてシャルルは彼女の腹にそっと触れて…
「痛まない？」と聞く。
「もう大分前のことよ」とマリナが笑い出すのはいつものことだ。
「痕も奇麗だし。誰かが厭がる私の形成手術をしてくれたおかげね」
「…ありがとう」
「シャルル、今日を一緒に迎えられて嬉しい」
彼女はそう言って起き出す。

ーーー年に2回。

彼女は朝の弱いシャルルに起こされる。
それがあたしの誕生日とマリナの誕生日の2回ということが口惜しい。
どうして同列なのか、まったく理解できない。
マリナとシャルルの会話であたしの誕生日をなぜ、ありがとう、というのかも理解できない。

マリナの傷を見る度にシャルルの心が痛むのであれば。

あたしだって、生まれてきたときに、あんまりにも眩しくて苦しくて哀しかった。
そう言ったあたしには「天使の記憶が薄れないように、系図原簿に記載しておこう」と言うだけで、ちっとも気にかける気配がない。
あたしの系図原簿は、当主のシャルル・ドゥ・アルディ自らが書き足している。
今は電子ファイル化されているのに、あたしのものだけはシャルルが日々書き込みをしている。
その分量はアルディ家で前代未聞なのだそうだ。

でも、あたしは知っている。

各人によって色の違う原簿には、もう一冊、こっそり彼が書き足している、アルディ家の名を持たない人の原簿があることを。

あたしはシャルルの天使なのに。
シャルルは天使とマリナを同列にする。
系図原簿さえない、アルディ家でないよそからやってきた外国人を、フランスの華が愛でる様は、どうにも遣る瀬無い。
あたしはシャルルの全部が欲しかった。

その年の誕生日には、あたしはシャルルに事前の誕生日プレゼントのリクエストをしなかった。
当日になって言うわ、と言ってやった。
だから最後の客人の来訪が遅れると連絡があり、しめやかに宴が開催されて、いざ、バースデーケーキの蝋燭を吹き消そう、ということになったとき。
「願い事は？」と聞かれて、あたしは頃合いだ、とほくそ笑んだ。
最後の客人は、いつもあたしを抱き上げて「オレ達の天使」と言った。

あたしはその人の天使じゃない。
シャルルだけの天使でいたい。

今年こそ邪魔されないわよ。
これは神様があたしにプレゼントしてくれた貴重なチャンスだった。

「アンジェ。願い事は？」
シャルルが静かに言った。
彼は、あたしが「おねだりはバースデーケーキの蝋燭を吹き消す直前に言う」と言ったことをちゃんと覚えていた。
あたしは立ち上がって、そしてシャルルの席に近寄った。
そして、一度咳払いをして、もったいぶってから宣言した。
「‥‥シャルルのキスが欲しい！あたしのファーストキスの相手を希望します！」

今日はあたしのためだけに集まった、たくさんの人達がいる。
そこであたしが「願い事」を言えば、彼は断れない。
面白がって「いいじゃないか」と言う人がひとりやふたりでない。
その意味で言えば、シャルルとマリナの友人達や、このささやかな宴に集う親しい人達は、なんて、素敵な性格をしている人が多いのだろうと思う。
いつも地団駄を踏まされる側だけれど、このときばかりは彼らのお祭り好きの性分に感謝しようと思った。

あたしの宣言のあと…
一瞬、沈黙が訪れて‥‥
次に、どっと笑いと歓声が響く。
良いね、最高だ！と何人かが叫ぶ声が聞こえた。
やっぱりふたりの娘だよ！とおかしそうに笑う彼らを横目にあたしはほくそ笑んだ。
計算通り。彼は断れない。

「さ、今日のお願い事はなんでも聞いてくれる約束よ。蝋燭が消えないうちに…」
シャルルにしなだれかかろうと、体を傾けたその時…

え？

ひょいと、誰かに抱き上げられた。
シャルルの困った顔が遠のく。
腕を伸ばしたけれど、シャルルに体を傾けたはずのあたしの体は、どんどん遠ざかってしまう。
そして次の瞬間には、逞しい胸に捉えられて息を呑んだ。
あたしをこうやって軽々抱き上げて怒られない人は数少ない。
その人は、あたしが怒るに怒れないことを承知の上で、抱き上げたとわかっていた。
彼は、薔薇と蔓の､アルディ家の紋が下地として入り、片方に各々、狼とキツツキをあしらった丸いピアスをしていた。
いつもしているピアスを見るだけで、彼の正体がわかる。

「…人が悪いわよ、マリウス。」
あたしはシャルルとそっくりの眼差しの彼を、軽く睨んだ。
「おや、最後の招待者を待たずに、先に願い事を唱えようとした君は、オレの魔法にかけられても文句は言えないよ」
「童話の世界の姫様みたいね」
あたしはあたしだけの魔法使いにそう言った。
生まれる前から一緒に居た彼は、唯一、あたしの誕生に居合わせた人だった。

魔法使い。
あたしだけの魔法使い。

泣いてくずるあたしを抱き上げて、夜更けの薔薇園を何度も往復した。
あたしはマリナの方針で乳母がいなかった。
熱を出したり夜泣きするあたしの傍に、彼はいつも居た。

彼と一緒にいると、あたしはいつも心穏やかだった。
遠い記憶の…天地のない眩溢れる世界を思い出して、穏やかな気持ちになる。

「ファーストキスをお望みなら…オレの贈り物にしよう」

彼はそう言って、あたしを抱き上げたまま、驚くあたしの唇に、シャルルに良く似た整った唇を押しつけた。
その唇は冷たく…そしてどこか懐かしかった。

おお、とまわりの人がどよめく声がする。
彼はシャルルと似ているというより、あたしのおじいさま・・つまり、彼らの父親に似ていると言われている。
でも、マリウスは年齢を重ねるにつれて、シャルルと良く似てきた。
アルディの名前を持たない、アルディの薔薇のことを、周囲の人は口に出すことはなかった。
けれど、彼は間違いなく、あたしと同じ血を引く、この家の人間だった。
彼の系図原簿が更新される限り、彼はこの家の人間として記録される。
それが電磁媒体として検索ヒットされない、紙媒体としての記録しか残らなくても。
あたしの系図原簿と一緒に並んで、彼の生き様は記録され続ける。

「なんで…シャルル、なんで怒らないのよ！」
真っ赤になったあたしは、シャルルを睨んだ。
普通、父親はこういう時、怒ってつかみかかるものではないのかしら。

天使のファーストキスなのよ！

マリウスに抱きかかえられたまま、足を宙に浮かせながら、あたしは体をひねってシャルルを振り返った。

シャルルは苦笑していた。
ワイングラスに口をつけて、涼しげにワインを飲み干した。

それより驚いたのは・・マリナの方が口を開けて、顔を真っ赤にして立ち上がったことだった。
「マリウス！」
マリナが大きな声で、彼を呼びつけた。
彼はくすくす笑いながら、彼よりずっと小さいマリナに呼びつけられて、あたしを抱いたまま、彼女の席に足を運んだ。
「愛娘の宴に絶対来いと呼んでおいてご褒美もなしか？」
マリウスは笑った。
ピアスが光って、彼の出自が薔薇の一族であるということが誰の目にもはっきりとわかる。その裏側には、シャルル本人から贈られたことを示す、当主の刻印が入っていることは、マリナとシャルルとあたしだけしか知らない。
「あたしより小さかったのに、そんな大きな口を叩くの？」
「身体的特徴を引き合いに出すくらい、怒っているの？」
マリウスはからかうように言ったので、マリナがますます顔を赤くして怒った。
「娘のファーストキスを奪われて、黙っていられないでしょう」
「…初めてじゃないよ」
「え？」
これはあたしが発した言葉だ。
マリウスとシャルルはくすくす笑っている。

「アンジェが誕生したとき。彼は魔法使いとして贈り物をした」
シャルルが涼しげにそう言った。
長い脚を組んで微笑んだ。
華のような微笑みだった。

「‥‥生まれてすぐ。一番最初にアンジェを抱き上げたのはマリウスだ。そして、マリウスは彼曰く『ぎゃふんと言わせてやる』という行為に出た。」
「ああ、だって。あのときの、ふたりには煮え湯を飲まされたから。絶対に泡を吹かせてやると思ったよ」
マリウスが歌うようにそう言った。あたしを抱いた腕は解かれなかった。
彼はうっとりするくらい甘く笑って、あたしの顔をのぞき込んだ。
シャルルじゃないのに、あたしはぼおっとしてしまっていた。
今のキスのせいなのか、それとも会場の熱気のせいなのかわからなかった。
いたずらっ子のように微笑んで、あたしの魔法使いは囁いた。
「父親が娘に一番最初にすることってね。‥‥ファーストキスを奪うことなんだそうだ。
オレは魔法使いだからね。君が無事に生まれてきた代償をもらった」
「‥‥マリウス！」
マリナとあたしは同時に叫んだものだったから、周囲もマリウスも…シャルルでさえ、声を漏らして笑った。
「ほらねマリナは『ぎゃふん』と言っただろう？」
「この頃合いまで時期を待つのは、やはり特徴的な因子だね」
シャルルとマリウスは笑った。

「さぁ、最後の招待者がやって来た。・・アルディ家の天使に乾杯を」
シャルルが仕切り直しのために、立ち上がった。大勢の人達が賛同して、同じように立ち上がる。
そして、あたしとあたしを抱いたままのマリウスに、祝杯を捧げた。
「オレの天使に…いや、オレ達の天使に・・」彼はそう言って、グラスを高く持ち上げた。

あたしはマリウスに囁いた。
「一体、この話をいつまで黙っているつもりだったの！あたしが怒り出すとは思わなかったの？」
彼はあたしを抱いたまま、肩をすくめた。
「女性とはすべて神秘的なものさ。理由はそれだけ。」
シャルルはそれを見ると…とても倖せそうに微笑んだ。
「ああ、おまえはやはり父上に似ている」
奇麗な微笑みだった。
あたしはその微笑みこそが、あたしに・・この家にもたらされた最高の贈り物なのだと思った。
ああ、もう、足を浮かせたままだから…どちらが天地かわからなくなってきそうだわ。

天井の照明が、強く光って蝋燭の眩がゆらめいた。
…あたしはなぜか懐かしい気持ちになった。

上下のわからない、光った空間が、なぜか…哀しくなるくらい懐かしかった。

（FIN）

寝ても覚めても

この話の続きからです。

▼秘するが花 04 恋河徒情編　88

さぁ　もっと良く顔を見せて。

彼はそう言った。そうして、彼女の手を取り、近くまで引き寄せた。
ゆっくりと。おそるおそる。
でも、胸に抱くことはしなかった。本当の彼女をもっとよく見たかったから。
青灰色の瞳で、彼女を見る。記憶に焼き付けるように。少し距離を取る。
肩まで切りそろえた彼女の髪は、まだなじんでいないのだろうか。
切った毛先が、少しだけ外側にはねていた。
ここまで走って来たために、髪が乱れたのだと後で知る。

彼女を壊した夜は生涯忘れない。
決して自分を許しはしない。
でも、彼女はこうして壊した壁を乗り越えて、こちらに向かってきた。
あまりにも眩しくて。あまりにも・・・あまりにも・・何だろう。
すべての言語で言い表しても良い。でも彼がその知識と知能と経験で知りうる、ありとあらゆる言葉に適当なものが見つからなかった。

ただただ・・・。そう。ただ、居てくれるだけで良かった。

こうして、向かい合ったまま何時間でも見ていたい気持ちと。
今すぐにでも、小さな彼女を胸に抱いて、すぐにでもやって来るであろう、
自らの嵐に巻き込んでしまいたいという気持ちと。
そんな気持ちが混じり合い分裂し、そして融合する。

彼女が小さく、彼の名前を呼んだ。

そうして、彼女から、彼に近寄った。
これまで、彼女は一歩だけ、踏み越えて踏み出したことがあった。

でも、その一歩を彼は見定めると、自分の激情で彼女を荒らした。

今度は。
今度は・・・。彼女から歩み寄るのを待った。

待つ。それはなんて遠くて長くて冷たく暗い時間だったのだろう。
彼はそう思った。
でも、その先には。唯一の晄があった。

彼女は、彼の名前を口にした。小さく、吐息のように。

ーーーーシャルル。

彼は目を閉じた。
こんなにも甘美で穏和な光波が、彼を包んだことはかつてあっただろうか。
いんいんと響くその波動に、彼は目を瞑った。

そうして、やがて彼の両の頬に、彼女の手が触れた。
あたたかかった。
背伸びをして、彼に手を差し出す彼女が白く淡く光ったような錯覚に陥る。
太陽が高く昇り、日が差し込んできて、彼女と彼のいる位置に、晄が当たっているだけだったのに。
自分には光は差し込まず、彼女ただ一人に注がれているような気がした。
戻れない路に迷い込んでしまった暗がりの中で、唯一差し光る出口への陽光のようだった。

目を開くと、彼女の瞳が近くにあって、息をのむ。
どうして髪の毛を切ったんだい？
再会したあの時の髪の先は落とされてしまった。

これは君の決意と思っても良いのか？

彼女なら「また髪の毛は伸びるしね」という言い方しかしないだろう。
青春の輝きの時代も、彼女のそんな髪の毛の伸び縮みなんて、気にすることの出来ないくらいの短い時間しか一緒に在ることができ

なかった。
でも。
君の、その短い髪も。背中まで伸びた髪も。これからはずっと見ていたいと思うけれど、それは贅沢な望みなのかな、とひとり思う。

そんなことを想いながら、彼女を見つめると。
彼女は。少し、笑った。
綺麗な笑い顔だった。そして、迷いのない笑顔だった。

ーーーーそのとき。

シャルルは、彼女の腰に手を当てて。マリナを抱き上げた。

小さな悲鳴と共に、彼女は、先ほどまでスケッチブックのあった作業台の上に乗っていた。
数鉢、作業中だった薔薇が揺れた。

もっと、良く顔を見せて。

彼は先ほどと同じ言葉を繰り返した。

彼と同じ目線になった彼女を、改めて見つめる。
茶色い目の、ゆっくり瞬きをする、そんな女性。

彼が永遠と定めた女性。その彼女が今ここにいる。
それだけで徒事ではないのに。

彼女は、額を寄せた。
彼の両頬を包み、そして額を寄せた。

シャルル。

シャルル、傷つけた。ごめんね。

何を言ってるんだ？傷つけたのは、オレの方だ。

そう、思った。

そうして、彼の永遠の人が。茶色い目を伏せた。
次に。
彼に、唇を寄せた。

静かに、躊躇いがちに。
でも、間違いなく情愛をもって。

唐突ではない。けれども
彼にとっては唐突だった。

彼女からのキス。

どんなに、どんなに待ち望んだことだろう。

彼女は、躊躇いがちにシャルルの薄い唇に近寄った。
躊躇うあまりに、唇の端に、唇をあてた。
息を止めたその接吻に、彼女は唇を隔絶して、そして、また唇を寄せた。
今度も、また、彼の薄い唇の隅に唇を合わせた。

マリナ、マリナ。

彼女はテーブルの上に腰を下ろし、そしてその腰に手をあてたシャルルの手にぎゅっと力が入る。
目を瞑り、そしてその彼女の気配を確かめて、これが夢でないことを思い知る。

「・・・マリナ、オレのことを愛してくれるか？」

絞り出すような、その、声は自分の声でないように聞こえた。

彼の永遠の人は。その言葉を聞いて、少し驚いたように身を固くした。
彼女を感じるのは、その吐息と。今のキスと。
そして、彼女の腰に添えた、自分の掌が彼女の暖かさを感じることだけ。

彼女は、小さく言った。彼の耳元に顔を寄せて。

「ーーーーーーーーーーー寝ても覚めても。いつも。これからも。
　シャルルを・・・。」

最後の言葉は小さすぎて、彼が聞きたいと思いすぎて幻聴を起こしたかのような、
ささやきだった。

「ーーーーーーーーーーてる。」

シャルルは、また眉根を寄せて、今度は彼女を、その熱情に任せて、強く抱き寄せた。

強く抱きしめた瞬間、彼女が小さく呻いた。息をのんで身を固くする。
全身に込めた力を緩める。
力の加減がわからない。
自分に。このシャルル・ドゥ・アルディに、わからないことがあるなんて。

どの位の外力なら、彼女が疼かないか。
どの位の揚力なら、彼女は我を忘れるのか。

まだ、彼には知らないことがあるのだと知った。

この鳴動のような自分の音を留めてしまいたい。
そう、思った。

彼女が小さく声をあげた。
唇が、切れている！
どうしたの、と。

微笑んだ。君を壊したことが耐えられなかったんだ、とは言えなかった。

言わなかった。

そして、耐えられずに自分を傷つけた。
でもそれは、君の受けた傷よりもずっとずっと小さいものであることは変わりがないから。
そう言うことはなしに彼女を見つめる。

・・彼女には、伝わったのだろうか。

そっと、彼女の両の手のひらに自分のそれを添えた。
まるで、暖かさを奪うかのように。
奪う。
マリナ。君から、奪うばかりだ。そう、思った。

君のその優しさを。
君のその物思いを。
君のその輝きを。

すべてを、自分というブラックホールが吸い込むことを、彼女は理解してくれたのだろうか。
彼女は彼のホワイトホールになってくれるのだろうか。

彼は、すべてを奪う。

そして彼女をそれでも愛し続ける。

そんな愛し方を、マリナは受け入れてくれるのだろうか。

もう一度、彼女の頬を、そっと両手で押さえた。
もう、触れること行為そのものが、辛くて、切なくて、そして愛おしい。

だが。

彼女が。

マリナが、そのシャルルの掌の上から、そっと。
自分の手をあてた。

そうして、彼女は。
シャルルの指の間に彼女の指を滑り込ませて、そしてすべてを絡め取った。

・・・！

どんな官能的な仕草より。その行為そのものが彼を惑わせた。

彼女のサインに。

シャルルは目を瞑った。

どんなにこれを待っただろうか。そしてどんなに焦がれただろうか。

そしてそして・・・

これが起因して、これから彼が起こす嵐を。彼女は許容してくれるのだろうか。

目を瞑る。目の前には待ち焦がれた彼女が居る。

そして、あとは、自分次第だと思うと。

もう、自分の中の虎狼が抑えきれなかった。
もう、自分の中の虎狼を抑えることができなかった。

…切れているところは、まだ痛むか、と彼女は聞いた。
彼はいいや、と答えた。
君を傷つけたことに比べたら、これは大したことじゃない。

それを聞くと、彼女は、再び彼に唇を寄せた。
また、少し戸惑いがちに。

彼女は軽く、彼の唇に浮かぶ赤い傷口を舐めた。
親猫が仔猫を優しく包み込むかのように。
でも、そのいたわりと慈愛の行為が、彼の春機を刺激した。

彼女は気がつかなかったようだ。
唇を少し開いて、彼女は甘く彼にキスをした。
ぎこちないキス。彼女は慣れていなかった。
いつか、遠い昔に彼に与えた刻印とまったく同じだった。

シャルルは堪えきれず、今度は同じように彼女の唇を覆った。
マリナの朱唇を奪うように、彼女の息吹をすべて奪うかのように。
最初は、静かに。艱苦から解き放たれたシャルルはすぐに荒々しくなった。
小さく悲鳴を上げる彼女におかまいなしに。
彼女は戸惑いながら恐る恐る彼の熱情に応えた。
ぎこちない反応に、また、シャルルが深く熱く応酬する。
激しく唇を合わせたものだから、また傷が開いて、少し血の味がした。

…二人はしばしそこで静かに、けれども烈しく気持ちを交わした。
想いを伝え合った。
これまでの様々な想いが、そこで交差して混じり合って、そして違う何かになると信じているかのように。
でももう、行き違うことはなかった。

彼女は彼の背中にそっと手を回し、彼は彼女の背中から肩に手を回し、激しく抱擁した。

マリナがやがて座っていることもできず、机に乗せ上げられて宙に浮いていたつま先から膝にかけてを細かく痙攣させ始めた。
愉悦の合図だ。
シャルルは青灰色の目を細めた。
そこでようやく、強く抱きしめた力を緩めて、その激しい抱擁から彼女を解放した。

頬を紅潮させたマリナに、シャルルは、こつん、と額を擦りつけた。
絹のような髪の毛がさらさらとこぼれ落ちて、彼女の茶色い髪に混じった。

そして彼女の顔をまじまじと見る。見つめる。見入る。

胸が苦しい。
・・・苦しい。息が出来ないくらい。
この場に立っていること自体が感じなくなるくらいの眩暈がする。
けれど、嬉しい。この上なく、愛おしい。

マリナ

彼は、彼女の名前を呼んだ。
伏せていた茶色の瞳が、ゆっくりと開いて、シャルルを射た。

シャルルは、一つ一つの言葉を区切るように言った。
彼女だけに、聞こえるように。囁きに近かった。

一度しか言わない。
一度しか言えない。

もう、言わない。

だから・・・だから良く聞いて欲しい。

そうして、軽く目を瞑った。
これまでの。長い長い気の遠くなるような時間を経て。
彼は万感の思いをその言葉一語一語に込めた。

…マリナ

君と生きたい。
君と生きていたい。

…君の傍で死にたい。

マリナが目を上げた。
シャルルは、今までで一番綺麗で倖せそうに笑った。

毎日の生が、死までの退屈しのぎだった。
毎日の生は、暇つぶしに過ぎず、ただ単調で怠惰な呼吸をしているだけだった。
ーーー死んだも同じ日々。

でも。

君に再会した。
会ってしまって、もう、どうにもならなくなった。
君をもう一度好きになって。いや、もっと好きになって。
君を壊して、そして、こうして君が腕の中に居る。

誰かだけのためだけでなく、そして自分だけのためでなく。
二人のために強く願いを込めることもあるのだと知った。
そして、もっと生きていたいと思うようになった。

でも、それが最後の「こたえ」じゃなかった。

ーーーマリナ。君と生きてみたくなった。
オレと生きてくれるだろうか。
一緒にいてくれるだろうか。
共に在ると誓ってくれるだろうか。

彼女は、小さく頷いた。

彼は誰そ時

寝ても覚めても　の続編です。

彼は誰そ時・・明け方のこと　黄昏（たそがれ）は「誰そ彼」という。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

彼女からの「その合図」を待って。

シャルル・ドゥ・アルディは、彼女の腰を掴んで、彼女の肢体を宙に浮かせた。

今度は小さな悲鳴などではなかった。
バランスが崩れて、思わぬ体制になったことに対する叫びを、シャルルはお構いなしに聞き流した。
抗議は聞かないよ。

彼は少し笑った。

彼は背が伸びて筋肉がつき、そして、昔と変わらない彼女を「軽々と」抱き上げるほどに成長した。
この8年間が無駄であったとは思わない。
彼女の悲鳴や、腕の中での抗議を黙殺できるほど。彼は少年から青年になった。

その代わりに、得た物思いも多かったけれども・・・。

君と生きたい・・・

それは彼の心からの叫びだった。
あまたにあるよくある求婚の言葉でなかった。

そしてマリナはその言葉に頷いた。肯定した。

こんな幸福な言葉を浴びせられた瞬間は、彼は死にたいと思うのだろうと自分を分析していた。
でも、そうじゃなかった。
「生きたい」と思った。
そして、生きたいと思わせる人の傍に、ずっといたいと思った。

輪廻転生しても、彼女に逢いたいと思う。
人は死んだらおしまいだと思う彼が、もう一度それでも巡り逢いたいと思う相手。
たとえその時には六道が辻に堕ちて、自分という自我がなくなってしまったとしても。

マリナ。

だから、この想いを受け止めてくれないか。
たとえ、明日にはこの腕の中からすり抜けてしまったとしても。
今、この腕に確かめたいと思うこの気持ちを、君に届けたいと思うのは、そんなに罪なことなのだろうか。

シャルルはそう言って、彼女を腕の中に閉じ込めた。
彼女には自由であって欲しかったけれど、
今、この瞬間だけは閉じた空間に、彼女を留めておきたかった。

薔薇園から、庭を横切り、彼の私室にそのまま足を運ぶ。
彼の私室は、ひんやりとした冷たい空気に満ちていた。

この距離を短いとも長いとも思った。
でも、腕の中の彼女はじっと目を瞑り、これから起こる何かに覚悟していた。

本当に覚悟しているね？

彼は、改めてそう彼女に尋ねた。
彼女は、熱に浮かされたように、赤い顔をしてそっと頷いた。
先ほどのいらえのように。

これが例えば、熱に浮かされたとか。
彼の青灰色の瞳に惑わされてしまったとか。

いろいろな原因が作用していたとしても。

シャルルは、それらの理由を受け入れるつもりはなかった。
決して。

そうして、彼の部屋に。彼女を閉じ込めた。

鍵を閉める。

ついこの間、この部屋に誘うのであれば、彼女を軽蔑すると傷つけた、部屋。

・・・それでも、シャルルは彼女をここにしか閉じ込めることができなかった。
閉じ込める。的確な表現だ。

どうして
どうして自由に羽ばたく彼女を絡め取るような真似しか自分は出来ないのだろう。
どうして
どうして自由に生きる彼女の羽をもぐような行為しか自分は出来ないのだろう。

そう思ったとしても、今、目の前にかいる彼女を。

そのまま愛でることは、もうできなかった。

マリナ。

君はオレと生きてくれるということに頷いていくれた。

それなら、今、気持ちに応じて欲しい。

――今、君と愛を交わしたい。今、君を知りたい。そしてオレが孤独ではないと感じたい

狡い言い方をした。

それでも、彼女をこのままここに留めて起きたかった。
無理だと解っていたけれど、そのまま日本に帰したいと思わなかった。

どうか、このまま、永遠にオレと一緒にいると言ってくれ。

そう、願ったのに。

彼女は儚く小さく笑い、そして、そして、先ほどのキスの続きをした。

マリナ。

君は罪と罰を一緒に背負ってくれるだろうか。

そう想いながら、拙いキスに、しばし溺れた。

静かな愛撫が始まった。

ベッドに腰掛け、マリナは瞳を閉じ、シャルルのその啄むような口付けを受け止めた。

やがてそれが激しいうねりになることも十分に承知していた。

…応えて

彼が囁く。
彼女は言われるがままに、その要求に応えた。

そこには静寂しかなかった。

この激しい情動が彼と彼女を支配していたとしても、そこにはただ穏やかで静かな、それでいて、誰も動かすことの出来ない磁場があった。

彼女の短くなってしまった髪の毛を撫でる。
マリナが、彼の白金の髪に指を差し入れる。

もう、マリナが受け止めるだけの綏撫ではなかった。
シャルルが与えるだけの慰藉などではなかった。

お互いがお互いを求めて与える。

そんな行為がこの世にあるのだと感じる。
馴れた手順であるはずなのに。彼女とこうすることは最初ではないのに。
どうしてこんなにも心悸が激しくなるのだろう。

…静寂が終わった。

シャルルは彼女に深く口づけた。

それが激湍の兆しだった。

開かれた唇にシャルルが滑り込んで絡め取った。

浸された木の実のような彼女の温かい舌を捉える。
彼女の息が徐々に乱れていき、シャルルも体温が上がるのを感じる。

そのまま彼女の唇を味わいながら、長く細い指で彼女に纏わりつく衣を剥がしていく。
ブラウスのボタンをもどかしげに外した。
マリナも、彼の激しい口付けを受けながらシャルルのシャツのボタンを外していく。

肌理の細かい白い肩が現れて、やがてマリナがあまり見ないで欲しいと言ってシャルルの裸身にしがみついた。

見せて…そして、見て、とシャルルは言った。

彼の部屋のカーテンから、光が漏れてその密やかだけれども誰も侵すことの出来ない時間を照らしてしまいそうだったから、マリナがちょっと困ってかぶりを振った。
そしてゆっくりと彼と視線を合わせた。

彼はマリナの手を取り、そしてそのまま静かに自分の胸に手を当てた。

…シャルルの鼓動が聞こえる。

シャルルは、次に、マリナの胸の上に、反対側の手で彼女の小さな手を取って、自分の手を添えた。お互いの手を添えて、お互いの胸にあてがう格好になった。

…今度はマリナの鼓動が聞こえた。

彼女はシャルルの胸に体に、たくさんの薄くなった傷があることに今更ながら気がついた。シャルル・ドゥ・アルディ自身でさえ完全に癒すことのできなかった傷だ。

これまで彼は満身創痍だった。体も、心も。こんなに綺麗なのに。
たとえ、この傷が薄くなったとしても心の傷は目に見えない。
彼のこれまで味わってきた孤独を癒してその傷を薄くすることができるのだろうか。
この自分に。

その時。

一一君が居るなら。君が居るから。

言葉に漏らしていないのに、答えがあった。
シャルルはまたひとつ、彼女にキスを落とした。

そして座ったまま、彼女を抱き留めて、激しく彼女を愛撫した。
愛でるというより渇愛する、そんな激しさがあった。
彼女を長らく求めて止まなかった、その熱情を注ぎ込んだ。

たちまち彼女の体は櫻色になり、そして赤い花が咲き始めた。
体温が上昇して、流汗してくるその体を抱きしめた。

もう、座っていられない…。

マリナが呟いた。
小刻みに体が震え始め、腰のあたりがぶるぶると震えてくる。
潤んだ目元が朱に染まり始めた。

駄目だよ、とシャルルが笑った。

君の背中の汗をシーツが受けるのは、最後だ。まだだよ。

シャルルは彼女の膝に触れて、そのまま腿に上がり、足の付け根まで撫で上げた。
彼女が激しく反応し、小さくため息を漏らした。
座っていられないほど愉楽の波に呑まれてしまった彼女は、シャルルにしがみついた。
彼の胸に、櫻色に染まった磁器のようになめらかな刺激が触れる。

そのまま二人は激しく抱合した。

彼の愛撫に彼女の慰撫が混じって溶け合った。

彼の名前を繰り返しでも切れ切れに呼び続けたマリナが懇願した。

苦しい、と。

眉根を寄せてそう言った。

シャルルは満足そうに、その青灰色の瞳で彼女を見つめた。

裸身をさざ波のように打ち振るわせる彼女を抱いている自分そのものが波に呑まれてしまう気がした。

言葉とも呼べない小さなため息とも叫びとも呼べるような彼女からの合図に、彼は応えた。

ゆっくりと彼女に侵入した。めくるめく瞬間が訪れた。

最初の夜のような、躊躇はなかった。

ただただ、律動という波が彼女を攫い、そして打ち寄せてまた引いた。

彼女も彼も、随喜し、身悶えた。

ひとつになる、ということの合歓の瞬間をこれほどまでに愛おしいと、聖なるものだと、
彼は思ったことがなかった。

彼女との抱合が、これまでの彼をすべて浄化するかのようだった。

マリナの目尻に歓喜の涙が浮かび、そしてシャルルの秀でた額には、鳴動によって汗が浮かんだ。

反ったマリナの首筋を強く吸った。彼女も湿っていた。

彼女は指の色が変わるほど、彼の肩を掴んだ。
ベッドに横たわることを許さない彼の上で、彼女は打ち震えた。
電雷とでも言うかのようなその激しい刺激を彼女は受け入れた。

その表情、その顫動、その涙…

マリナのすべてが、彼の腕の中だった。そして、彼も彼女の腕の中だった。

激しく口付けを交わす。深く強い接吻に、マリナが眉根を寄せた。
彼は彼女の中で躍動した。
その都度、彼女は狂おしく叫んだ。

・・・そして、甘美な陶酔のうねりに溺れた。
溺れる。
シャルル・ドゥ・アルディにはこれまでそんなことは一度としてなかった。
でも、彼女に触れると、彼はこの感覚が、自分の中に備わっているのだと実感する。

やがて、彼女が彼の背中に、軽く爪を立て始めた。
忘我の世界に飛び込んだのだ。

熱く強い陶酔感の波に翻弄されて‥‥

そして、彼と彼女は溶け合った。一つになって、そして終局の嵐に飲み込まれた。

静かな鼓動を感じると、彼はようやくマリナをそっと、シーツの波に横たえた。

彼女は茶色の瞳を少し開いて、まだ、どこかぼんやりと遠くを眺めていた。

彼は彼女の名前を呼んだ。

彼女は彼の名前を呼んだ。

そうして、どちらからともなく、唇を寄せた。

それは聖なる儀式だった。

本当の彼女が、長らくその姿を隠していた罪を浄化する儀式。
彼が本当の彼女を照らし出すために侵した彼女を傷つけた行為を浄化する儀式。

ふたりは少し笑った。

まだ時間はあるよ。
シャルルは笑った。

――まだ、彼女との時間に満足し切れていなかった。

シーツの波でうつらうつらする彼女の髪をそっとなでた。

まだ、汗ばんでいた。湿った彼女の感触を、忘れないように彼は記憶した。

…もう忘れても良いのだ。思い直した。

忘れないように記憶しなくても、忘れたらまたこうやって彼女に刻んでもらえばいいのだ。

シャルルは彼女に寄り添いながら思った。

自分も微睡み始めていたことに、気がつかなかった。
体が温かくなり、そしてゆらゆらと、何かに包まれているような、そんな穏やかな空気が流れてくるのを感じた。

…マリナ、もう、決してこの手を離さないよ…

彼女と生きたい。

もう一度思った。今度は強くそう願った。

このまま、春も夏も秋も冬も、四季を感じる世界にいてもいなくても。

君を感じていたい。

君さえ感じられれば、それで良い。

微睡みの中。

永遠に、君だけを愛する・・・シャルル・ドゥ・アルディの名にかけて。

そう、誓った。

（FIN）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

これで彼らの「夜」は終わりです。

はぁ、こういう夜があったのに、あっさり帰国のマリナ。酷いなぁ。

想起～ **recollections** ～

ーーーーそろそろ、かな。

響谷薫は、切れ長の瞳を少し細めてほくそ笑んだ。
マリナ・イケダはとろんとした目つきで、遠くを見つめていた。
彼女は、いわゆる酩酊状態だった。
茶色い髪の毛が揺れ始め…そして頬はほんのり上気している。
ここはアルディ邸のマリナの私室だった。
このふたり・・・アルディとマリナは恋人同士でありながら、未だに部屋を別にしている。

まったくどういう事なんだよ。

薫が呆れて発した第一声だった。
今日、マリナが滞在しているアルディ邸に初めて訪れた。
世界を飛び回る彼女は、定期的に「メンテナンス」と称した定期検診を受けに、パリにやって来る。
毎年のことではあったけれど、去年までの彼女の主治医は、何も言わず、ただ淡々と診察を行い、適量の処方箋と今後の注意を繰り返すだけだった。
時々、無理をして、倒れることがある。
そういう時には決まって、少し怒ったような、静かなアルディ家の当主で彼女の主治医でもある男性から、収容先の病院に、遅くも早くもないタイミングで指示が入るのが常だった。

そんな彼が、今回は泊まっていけと言う。
おかしいなと思った。
それでも、交通の便が良かったし、なにより身の回りの心配をしなくても良かったので、音楽のこと以外はまったく疎い彼女にはとてもありがたい申し出だった。

そして…彼女は、そのアルディ邸で、彼女の旧友に再会した。

最初は驚いた。
少しばかりその状況を把握するまでに時間がかかった。

そして、シャルルが微笑んでいることにはもっと驚いた。
彼は無表情しか表情がないと思っていたから。

…なるほどね。

太陽のような彼女の傍らで、同じ太陽ではなく、月の精霊が佇むことを、彼女が選んだのだと知った。
薫はあまり多くを聞かなかった。

その代わり…

今夜はマリナと一緒に女同士の語らいをしたいと言った。
ディナーの時間の申し出に、シャルルはかちんと、食器を鳴らした。
彼にあるまじき行為だったので、薫は少し可笑しくなった。

マリナが喜んで、そうしましょう、今夜は私の部屋で泊まりましょうよ、と女学生の頃のようにはしゃいだ。まるで、出会った頃のような、そんな無邪気さだった。

シャルルは薫の意図を読んだのだと確信した。

薫は不敵に、青灰色の瞳を持つマリナの守護神に微笑んだ。

あたしが何を聞いても…それはシャルルは妨げることが出来ない。

かつて、彼女の命を救った恩人に、薫は微笑んだ。
でもその微笑みは、シャルルの内面の情炎を苦笑しているかのような、そんな微笑みだった。

シャルルとマリナに、固い絆があるように。
薫とマリナにも、誰も壊すことの出来ない、誰も侵入することのできない絆があった。

それをシャルルは目の当たりにして、そしてマリナの目の前で不快感を表すことができず…
ただ花のように微笑んで「それは良い考えだね」と付け足すことしかできなかった。

彼女の命を救い、彼女を生き存えさせている、冷たい美神を薫は見つめた。

シャルルの嫉妬、ねぇ。

彼女は少しだけ嬉笑した。

単に面白かった。それだけなのかもしれない。

年に一度は訪れるアルディ邸は、今年はどういう訳か、全体の雰囲気が…空気が変わっていた。
何もかもに、動かない静寂だけしか感じなかったこの館に、躍動感がある。
薫はそう思った。

明らかに、何かが違う。そして、それはマリナ・イケダがもたらしたものだとすぐに理解した。
ディナーでは、シャルルは通常無言なのに。マリナの話に耳を傾けて、そして時折彼女を見て微笑む。
その席図も、客人と主人のその位置ではなかった。
すでに…ふたりは深い仲であることがわかる。

薫は、その様子を一部始終眺めていた。

きっと、マリナからは、彼女自身から説明するからそれまではシャルルは何も言うなと言われてるのであろう、と推測する。その通りだった。

彼は何も言わず、最後のティーを飲み干すと、静かに退室した。
明日の朝食は、一緒に摂ろうと約束して。
マリナがくすくす笑う。そんなに早起きできるかしら、と。

ますます…聞き出さないわけにはいかないねぇ

薫は微笑んだ。

そしてマリナの部屋に移動したとき。
彼女はちょっと待って、と言って、マリナと勝手知ったるアルディ家の倉庫に忍び込んだ。
まるで、かつての10代の頃の冒険譚を繰り返しているような気がして、少しだけわくわくした。
そして目的の場所にたどり着くと、そこには無数の様々な酒が保存状態よく管理されていた。
薫とマリナは、くすくす笑いながら、そのうちの何本かを厳選して、いくつかのアルコールを取り出した。

ーーーそして、今、彼女達は、酒盛りをしている。
グラスも杯も関係なかった。
何本も空き瓶が転んで、床に並んでいた。
「それで？あんたはどうしてここにいるんだい？」
薫は見計らって、そう言った。
何十分か前には、彼女はしらふで、
「そんなこと言えるわけないでしょう…長い話なの」
と怒ったように言っただけだった。

でも、今の、目つきもあやしい彼女は、少し間を置いて…
「薫には隠したって無駄よね」
と、明らかに違う反応を見せた。

「そう。無駄だから、何でも応えて」

彼女のこの微妙な境界は、未だに彼も把握していないらしい。

マリナは酒が好きだが、酒に弱い。いわゆる「喋り上戸」だ。

ある一定の量を超えると、気分が悪くなるらしかったが、そのぎりぎりの境界線では、彼女は自由に、心に思うことを喋る。自白剤より有効だった。

この「適量」については、男どもはちっともわかってないらしい。

薫が苦笑して、同じ量の杯を口につけた。
彼女も酒は好きであったが、相手がいると、どうも酔えない。
一人で飲むときには・・・ついつい飲み過ぎて、彼女にも迷惑をかけたことがあった。

「おまえさんがしゃべらないなら、本当のおまえさんに聞くしかないだろう？」
薫はそう言って、彼女を沈むほどふかふかの長椅子に横たえた。
マリナは、少し微笑んで、ありがとうと言った。
でも手には先ほどの日本酒が握られたままだった。
発泡性のある日本酒だから、吸収も良く、回りも早い。
彼女は口当たりがよいから、すいすい飲んでいたが。

ちろちろと舐めるように味わっていた薫が、かたん、と杯を置いた。

「さぁ・・・あんたに何があったんだい？話してごらん？」

薫はゆっくりと、マリナを誘導した。

マリナは、頭を揺らした。ううん、と少し躊躇ったように髪の毛を揺らした。

茶色の瞳はすでにずっと遠くを見つめていて、薫を通り越していた。

「薫…」
彼女は呟いた。
「なんだよ？あたしの名前じゃない名前を呼ばないと、怒り出す奴が居るだろう？」
薫の言葉に、彼女は少しだけ微笑んだ。
「薫は私の大切な友達よ」
そう言った。
彼女は「一番」とか「とっても」とか言う言い方はしない。
誰もが大切で、彼女のその瞬間瞬間に、目の前にいるその人物が一番大切だった。
順序をつけない彼女が、愛に順序をつけた。
それだけでも、薫には聞く価値があった。

「ところで…」
薫は長い脚をソファに投げ出しながら、彼女に問いかけた。
「あんたは。黒須と付き合っているんだとばっかり思って、何年も過ごしてきたあたしにどうやってイイワケするつもりなの？」
そう言うと、マリナが少し口ごもった。
静かな…静かなアルディ邸で、薔薇の香りだけが色濃く漂う。そんな夜も更けた空間の中で、マリナは呟いた。
「和矢とは…別れたの」
そうか。
薫はそう言っただけだった。
シャルルと居ると言うことは、とどのつまり、そういうことなのだが、それでも彼女の少し哀しそうな顔が‥どういうわけか疑問に思った。

話題を少し変えた。
「あんたは…今、アルディ邸に滞在しているけど、それで倖せ？
どうやら、この館の主に寵愛を受けているようだけど」
シャルル・ドゥ・アルディとは言わなかった。彼女にはそれだけで充分伝わったらしい。
頬を緩めて、そうなの、と倖せそうに呟いた。

「和矢と別れた…」
でも彼女がそう呟いたので。
薫は聞くまいと思っていたことを口に出した。
「おまえさんは、もう、この館の主と随分と深い仲のようだけれど…
ここの主は知っているの？マリナと…和矢のことを。」
「もちろん」
彼女は即答した。だって親友だからと彼女は少しだけ寂しそうに言った。

薫は、もう少し踏み込んだ話をすることにした。

マリナはそこまで言うと、酩酊状態であったにも関わらず、胸元のショールを引き上げた。
彼女に恥じらいと言う言葉が生まれたのだと、薫は驚いた。
薫は面白そうに、また杯に一口、その薔薇形の唇をつけた。

この有様を見たら、彼女の主治医は顔をしかめるだろう。
アルコールは彼女の病には大敵だ。でも適量は彼女の神経を休める。
でも今回ばかりはきっと…何も言わないに違いない。

「・・・マリナ。」
「なあに？」
とろんとした目つきで、彼女は薫を見た。
安心しきったその表情は、きっと、シャルル・ドゥ・アルディにも見せていないのだろう。
だからこそ、シャルルは、不快感を露わにして…無言で退室したのだった。
薫はますます可笑しくなる。
「‥あんたは、和矢とのこと…後悔してないのかい？シャルルと夜を過ごして、和矢と共有した夜を‥思い出さないの？」
酩酊状態であっても、マリナは言葉に詰まった。
薫は聞くべきか否か迷ったものの、その言葉を口に出すことにした。

彼女にとっては、和矢は大切な友だ。
そして、シャルルは同じように大切な友であり、それ以上に彼女の生命を管轄する主治医でもあった。
彼らの間で行き来するマリナと友情を、その状況で変化させるつもりはなかった。
だからこそ…彼女の真意を問いただしたかった。
マリナがここに滞在する理由を知りたかった。

「‥あんたは間違いなく、今は『女』だ。マリナ」
薫は言った。
その体つきや、ショールをかき上げる仕草、そして飲み過ぎないようにしつつも頬を紅潮させるそのひとつひとつが…すべて、シャルルによってもたらされたものなのか。
薫は知りたくなった。

「言っている意味がわからない…薫…」
マリナがぼんやりとして言った。
薫は苦笑した。まったくいつからそんなに酒に弱くなったんだい、と。
彼女は少しだけ、躰を起こして、マリナの茶色くて柔らかい髪をそっとかき分けた。
そして‥そして、その耳元にそっと囁いた。
「あたしは知りたいだけさ…和矢との最初の夜と‥シャルルとの違いについて。」

教えてくれるね？という囁きに、マリナはうん、と呟いた。

そして…

彼女は長い話を始めた。

長い長い夜の、寝物語には充分すぎる話が始まった。

薫は、居住まいを正して、そして、マリナの語りを聞くことにした。
…アルディ邸は暑くも寒くもなく、そして、窓は開放されて、月がうっすらと、彼女たちを照らしていた。

Marinaの想起

想起…以前にあったことを思い出すこと

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「今日、泊まっても良い？」
「はぁ？」
あたしは素っ頓狂な声を上げた。
どこから声を出しているんだよ、と和矢が呆れて言ったけれど、あたしはその状況を受け入れることができなかった。

…寒い冬のある日のことだった。

だんだん温暖化によって都内に雪はほとんど積もらなくなってきた。
あたしや和矢が中学生だったときには、通っている学校のグラウンドに積もりすぎて、小さいあたしはすっぽり全身が沈んでしまうくらいの積雪もあったというのに。
でも、その年は記録的な大雪で、都内の交通はほとんどストップし、高速道路も凍結によりストップ、電線は積雪により断線してしまう地域が出てしまうくらいだった。
都内の普通の生活というものは、なんと危ういのか、とその時だけ、真剣に考えた。
でもあたしは家から出る仕事をしていないので、そこだけが漫画家でありがたいと思った。だからそういった日には、家の中で、じっとしていることに決め込んでいた。

そんなときに、あたしの家のドアを叩く音がして、もしや大家が借金を取りにきたのではないかと思った。
こんなに日に尋ねてくる人が居れば、それは待ち人ではなく、待たざる者でしかないと、過去の経験で学んでいた。

居留守を使おうかどうか迷ったけれど、だんだん激しくなるそのノック音に、あたしは少しだけ不安になった。
来客が多い方だとはいえ、こんな交通機関が麻痺してしまうような、しかもかなり遅い時間に、あたしを訪れる用件がある人がいるとは思えなかった。
息を殺して、様子をうかがった。
廊下側の窓硝子に、人の影が見える。
困ったな。
そう思った時だった。
「…マリナ？居るんだろ？」
良く響く声で、扉の向こうの人物があたしに声をかけてきた。
…和矢だ！
あたしは飛び出して、扉を開けた。

ドアを開けて、まずはその寒くて湿った風に目を瞑った。
室内と室外の温度差で、冷たい風を感じる。
…外は静かだった。
大雪の影響で、誰もが外出を控えているだろうし、道路にもシャーベット状になった雪が固まり積もって、とうてい車で走れる状況ではなかった。

雪が音を吸って、余計に静かだった。

だから、和矢の声だけがはっきりとその闇に響いた。
「…夜遅くにごめん」
彼はライダースーツを着ていて、癖の強い髪の毛は湿気を吸い、いつもよりつややかで、うねりが強く出ていた。
相変わらずの優しげな微笑みを絶やしていなかったけれど、その顔には疲れが少し出ていた。
「…どうしたの！こんなに遅くに‥」
とにかく上がれ、と言ったあたしに、和矢は躊躇っていたようだった。
女の家に夜中に上がることを彼はとても、礼儀知らずだと認識しているようだった。
「バイク」
和矢が言った。
「バイク？」
そう、バイク。
彼は、玄関先で、積もった雪を払い落とした。
はらり、と音がして、雪が玄関先に落ちて、あっという間に水分になった。

バイクでちょっと遠出をしていたら、思ったより雪が降ってきてしまい、道路を走らせることが出来ない。
高速道路も駄目で、駐車場にバイクを置いて電車かタクシーで帰ろうと思ったけれどそれも不可能で、交換したばかりのバイクのパーツやタイヤが痛むのも心苦しい。
…で、そう言えば、マリナの家が近かったな、ということを思いついたので寄ってみた。

彼の説明はこうであった。
帰るに帰れないから、明日の朝、帰る手段が見つかるまで、ここに泊めてもらえないか、という申し出だった。

あたしは彼の雪にまみれた格好を眺め回した。
年齢を重ねるにつれて、ますます日本人離れしてくる容貌に、あたしは少しだけ寂しさを感じる。…最初に出会った頃には感じなかったことだった。

ごく簡単に説明したけれど、相当な距離と時間を、バイクを押して歩いたようだった。
困って訪ねて来たのだったら仕方がない。
あたしはとにかく、上がれと言った。

「一体全体、帰れなくなるほどどこになんで遠出していたのよ」
あたしは呆れながらも、タオルを2枚ほど差し出した。
言っておくけれど、着替えはないわよ。
そう言うと、和矢は「あったら困るだろ」と小さく言った。
彼は濡れた頭をタオルで拭いていたので、その表情はよくわからなかった。

「とにかく助かった。…服を乾かしたいので、暖房のところにこれを置かせてくれないか」
ライダースーツの下は、Tシャツに、デニムだった。あのぴったりしたスーツの下にまだこれだけ着ていてなお体型が崩れて見えない、和矢のスタイルの良さにため息が出る。
「ない」
「ない？」
「そう、ないの。…暖房はホテル・イケダにはありません」
和矢が呆れて、玄関先で靴を脱ぐのを途中で止めた。
「オレ…尋ねてくる場所間違えたかも」
「外よりは温かいでしょ。文句を言うなら、今からもう一度雪まみれになると良いわ。あたしはちっとも困らないから」
そう言うと、彼は酷いな、とくすくす笑いながら、家に上がった。
「バイクは？」
「おまえんちのアパートの軒下。…朝には雪も止むだろうから、それまでは少しだけ場所を借りた」
どうしてこう、周囲にはモーターものが好きな人が多いのだろう。まったく理解できない。

暖房はなかったけれどせめてあたたかい飲み物でも飲むかと思い、ガスに火を点ける。
周囲も本当に静かで、…ガスの湯を沸かす音だけが部屋に響いた。

あたしは男の人を家に泊めたことがない。
だから、こんなに突然、和矢がやってきたことにかなり動揺していた。
「…しかし、相変わらず汚いなぁ…女の部屋か、これ」
大家の息子みたいなことを言わないでよ、とあたしは口を尖らせた。
「和矢が来るってわかっていればもうちょっと片付けたわよ」
「へぇ」
和矢は面白そうに言った。
「普段の心がけが大事だと思うけれど。…この惨状は、とても普段から整理整頓を心がけている人間の部屋とは‥いや、人が住む空間とは思えない」
「締切が近いのよ」
あたしは慌てて言った。そして、着色料で汚れた手を、台所の水道で勢いよく洗い流した。
和矢と逢うときには、いつも外で待ち合わせていた。
家まで送ってくれるけれど、そういった時は、いつも扉の外でお別れしていた。

ふうん。

彼が座って良いかと尋ねたので、あたしは空いている場所に適当にどうぞ、と言った。
空いている場所を探すのも大変なんだけれど、と和矢がまだ面白そうにいうものだから、
あたしは「そんなに文句を言うなら、泊めてあげない」と言い返した。

そして和矢にくるりと背中を向けて…まだ完全に落ちきらない手についた着色料を落とそうと、ごしごしと洗った。
彼の前では、せめて指先はあまり汚れていない自分でいたかった。

「座る場所がないし、寒いのであれば…」
彼が動いた。
そして、あたしにゆっくりと近づくと…彼はあたしを背中から包んだ。
その気配に気づくよりも早く、和矢はあたしをぎゅっと抱きしめた。
あたしは擦っていた手をとめてしまう。

彼からほんのりと良い香りがした。
近くに寄らないとわからないくらいの、わずかな‥彼の香り。

「あたたかいものが、ここにあると思うけれど」
和矢が背中越しにそう言った。あたしは、息を呑んで、和矢が言っている意味を‥理解しようとしたかったのか、そう思うより前に、あまりの驚きで理解不能になってしまったのか、よくわからない状況に陥ってしまった。

「お湯なら、もうすぐ沸くわよ」
あたしは彼の腕を抜け出しながら、そう言うのが精一杯だった。
心臓が破裂しそうだった。
「待って」
和矢があたしの腕を掴んだ。そうして、今度は正面から、彼の胸に抱かれる。
「オレが…ずっと、マリナとこうしていたいって思っていること、知ってた？」
彼が静かに問いかけてきた。

‥酷いよ、和矢。和矢はいつもあたしの思わぬ時に思わぬ事を言うのだから。

全部は言えずに、酷いよ、とだけぽつりと言った。

なんとなく…わかっていた。
泊めて欲しいと言って、あたしが彼を家に入れてしまったときに、彼は決心してきたのだろうと、なんとなくだけれどわかっていた。
そこであたしが断れば、彼はこの雪の中をまた帰っていったに違いない。

どうして今日なの？どうして今夜なの？

きっと困った顔をしていたのだろう。
あたしの顔をのぞき込みながら、和矢は言った。そして優しく笑う。
「おまえにキス、してもいい？」
そう言うと彼はあたしの返事は待たずに、そっと屈んで‥その綺麗な唇をあたしに重ねた。
和矢の唇は、冷たかった。芯まで冷え切っていたようだった。
目を瞑る。何度も交わすキスだったけれど、今日は特に‥どきどきする。
彼のこんな淡いキスは、その次に訪れる激しい口吻への予兆だ。
今日は…とても淡く、薄く、そして、本当に触れる程度の軽いキスだった。
だからその反動で、あたしに訪れる嵐が…少しだけ怖かった。

外は雪が降っていて、静寂が支配している世界だけれど、今この場所は…それとは相反する嵐を前にその静けさをやり過ごしている状態だった。

お湯が沸く音がして、あたしは慌てて火の元を止める。
「お湯…入ったよ」
泣きそうな顔で、あたしは言った。
「コーヒーかお茶でも飲もうよ。暖まるよ」
「いらない」
和矢はそう言った。そして、強くうねる癖髪の間から、人を見据えるような強い視線であたしを見た。

和矢は優しかった。

あたしと和矢はうまくいっていた。
とても、とても。
彼を最後に選んだ後‥・彼とあたしは「やり直し」をすることにした。
再会するときより以前に…そう、出会って、そして淡い恋に染まる頃に戻ろうとした。
和矢は…いつもいつも私を見つめてくれた。
あたしも彼だけを見つめた。
線香花火のように、いつまでも、長く咲く光になると思っていた。

彼は会わなかった時間を埋めるかのように、あたしに頻繁に会いに来てくれた。
和矢は学生で、あたしはそうでなかったけれど、生活のサイクルが違うことはあたしと和矢の障害にはならなかった。

そんな和矢が…これまでの穏やかな付き合いから一歩踏み出したいと思っていることは、なんとなくだけれどわかっていた。けれど、知らないふりをしていた。
女姉妹の中で育ったから、男の人の心の機微がいまひとつよくわからない。
本当に和矢がそんな気持ちでいるのであれば、はっきりと口に出す日が来たときに考えようと思っていた。
だから、「今日」である必要はないと思っていたから、吃驚した。

「好きだ…」
彼はあたしにそう言った。あたしもよ、と呟いた。
「マリナ。オレは、いつまで待てば良い？おまえにとってどうしたら特別になれる？」
「いつも和矢はあたしの特別よ」
あたしは困ってしまった。彼に順序はつけられない。

「それより、どうしてこんな夜更けになるまで、出歩いていたのよ。あたしはそっちの方が気になるわ。あたしの「特別な人」が…こんなに遅く、大雪になるとわかっていながら、バイクで遠出するなんて、おかしいじゃない。気になるじゃない。さぁ。説明してよ。」
和矢は少しだけ笑った。
「おまえにも鋭い洞察なんていうものが備わったんだな」
いつもの口調にちょっとだけ安堵した。
「…おまえを連れて行きたいところがあって。その下見。」
下見？あたしが怪訝な顔をする。
「そう。京都までひとっ走り」
「和矢…それはひとっ走りする距離じゃないでしょう」
呆れて声を出した。和矢はそう言うと思ったから、黙ってたんだ、と肩をすくめた。
京都は短い距離じゃないかと少しだけ笑った。
確かにあたしたちは、日本国内国外の様々なところに行き、そして出会って…別れてまた出会いを繰り返した。
「だってそこにしか工房がないんだ」
「工房？」
そう。
和矢は頷いた。
そしてくすっと笑って、精悍な頬を傾けて、あたしの目をのぞき込んだ。
和矢はあたしの左手を取って、あたしの薬指をつん、と彼の長い指でつまんだ。
「リングをオーダーメイドで作ってくれる工房。きっと気に入ると思う」
あたしは息を呑んだ。

「…なんでひとりで決めちゃうの？」
「そうでもしないと、おまえは『また今度ね』って言いそうだったから。先手必勝。」
あたしは大きく息を吐き出した。
「そういうことはふたりで決めよう」
「そういうこと？」
「…リングを買う、とか。京都に行こう、とかいうこと。

…反対はしないよ。だから、最初に相談して」

「それなら…」
彼は微笑んだ。
首にかけたタオルに両手を添えて、首を傾ける。
黒い瞳が、神秘的に輝いた。
「今、相談しよう。今日、ここに泊まっても良い？」
あたしは笑った。
彼のこの口調には本当に弱い。
「…良いよ」
あたしは…目を閉じて、そう答えた。

その瞬間、和矢に強く抱きしめられた。
彼の躰が‥先ほどまでは冷たかったのに、今は熱かった。
「マリナ、もう一度聞くよ…オレがここに泊まるってことは、どういうことだか…わかってる？」
「うん」
小さくあたしは頷いた。息苦しいほど、強く抱きしめられていて、あたしは身動きが取れなかった。
「…後悔、しないで欲しい」
耳元で和矢が熱っぽく囁いた。
「後悔？なぜ後悔するの？」

そこまで話をすると、和矢はあたしの髪に顔を埋めて…そして呻くように言った。
「好きだ…好きだ」
あたしは切なくなって、ぎゅっと和矢の背中を抱きしめた。
彼はTシャツで薄着だったから、この鼓動が伝わってくる。
精悍な背中の筋肉がぴくり、と動くのを感じた。
「あたしもよ、あたしもよ、和矢。もう…長いこと一緒に居るのに、あたしは…和矢とこうすることが苦しいよ…恋しくて」
素直な気持ちを言った。和矢があたしの頭をかき抱いた。
手が、躰が震えている。
…外は静かだった。
だから、彼の息づかいと‥あたしの心臓の早鐘のような鼓動だけがあたしの耳に伝わっていた。

「あとで優しくするから…」
彼はそう言って、激しくあたしに口付けた。
これまでにない‥大人のキスだった。
冗談めいたキスではなかった。
和矢の手があたしの背中に回り、そして次に腰に手が回された。そこで、和矢はぎゅっと、理性を呼び戻すかのように、一度拳を握った。
でも、次には…彼は眉根を寄せてあたしを再び強く抱きしめて、荒々しく唇を吸った。
あたしは目を瞑って彼に応えた。

もうだいぶ夜も更けたのに…長い夜が始まったと思った。

彼は始終優しかった。
和矢は激しくあたしを抱きしめながら、そして「後悔しないでくれ」ともう一度言った。
あたしは和矢なら、良いよ、と言った。
これから起こることは…ちゃんとわかっているつもりだった。

和矢はあたしに激しくキスをした。もう、どうしようもないくらいに好きだと言った。
一一嬉しかった。
和矢は、いつも自分自身を二の次にする。
だから、そんな和矢が自分の気持ちを露わにして、そしてあたしと一緒に居たいと言ってくれることが、あたしにはとても幸せだった。

彼はあたしを冷たくなったベッドにそのまま倒した。
冷え切った部屋で、あたし達の体だけが、温度を発していた。

外は音がない世界だった。静かだった。
音と言えば、あたしと和矢の息づかいと衣擦れの音だけだった。

彼の長身が、あたしの上にのしかかってきた。
あたしは小さいので和矢の体にすっぽり埋もれてしまう。
今までひとりで休んでいた寝具が、彼の重みが加わったことで、スプリングが今までになくきしむ音を初めて聞いた。

そして、あたし達はもどかしく‥性急に服を脱いだ。
彼の上半身は何度か見たことがあった。けれど今、目の前にいる人は以前に見た彼の裸身よりも…ずっとずっと「男の人」だった。
あたしはどきんとして、息をとめた。
和矢は薄い肌着だけになったあたしのことを、目を細めて‥見た。
あたしは恥ずかしくなって、シーツを引き寄せようとしたけれど、彼とあたしの下にあるシーツをたぐり寄せることもできず、慌てて、枕を取って、胸元に当てた。

彼は黙って‥あたしの手首をそっと掴んだ。
そして、ゆっくりとあたしの手を取ると、手の甲に、キスをした。
その唇から甘い電流が流れたような感覚を受けて、あたしは少しだけ、ため息を漏らしてしまう。
そうして、その握った方の腕を引き寄せると、和矢はあたしをまた‥ゆっくりと抱いた。
彼の黒い瞳が、妖しいまでに強く光っている。
あたしと和矢の間に挟まれた枕は、いつの間にか、あたしの膝の上に落ちてしまった。
あたしと和矢は、直接触れていた。

直接肌を合わせることが…こんなにも切ないことだったなんて、思いも寄らなかった。
和矢はあたしの髪をそっと撫でた。

そして‥次には、ゆっくりとあたしと和矢は倒れ込んだ。
彼はあたしにキスを一つ落とすと、乱れた癖髪をあたしの額に垂らした。
額に落とすだけではなかった。
彼は…彼は、あたしの体の上すべてに彼の前髪を落とした。
あたしは恥ずかしさで真っ赤になっていたと思う。
本当に恥ずかしいときには、頬が紅潮するだけで、何も口に出すことができないのだと知った。
彼の体が熱いと感じたけれど、同じくらい、自分の体が火照るの感じていた。
やがて…やがて、これが愛撫というものなのだとわかった。
彼はあたしの体の隅々まで慰撫して、そして唇を這わせた。
肩にも、…胸にも。腕にも。あたしは慈愛と言う言葉を思い出した。慈しむように、静かに、彼はあたしを愛でた。
あたしは時々、彼があたしの上に落とす切ない口付けに、意図せずため息を漏らした。
体が言うことを聞かなかった。あたしはこれからどうなるのだろうと思った。
その甘美な刺激によって、体のところどころに赤い斑点が散っていく。

彼はずっと、ずっと、あたしの名前を読んだ。
あたしは和矢の名前を呼ぼうとして、違う声になってしまう自分の口を手の甲で押さえた。
彼は我慢しないで、と言って、あたしの手を取り、手首の内側にも赤い刻印を点けた。

あたしは小さく呻いた。

「優しく…するから…」
彼はそう言った。でもすぐ次に、ごめんと言った。

何が起ころうとしているのかわからなかった。

次には、あたしは…和矢があたしの背中を抱き、そしてあたしの両脚を少し開かせた。
あたしは悲鳴を上げた。
そんな格好をしたことがなかったから。
でも和矢は脚を閉じようとしたあたしの間に割り込んできて、そして、片方の脚を掴み、もう一方の手であたしの腰を強く引き寄せた。

マリナ、と彼が小さく呟いた。
その次には…和矢の躰の一番熱い部分でいきなり貫かれていた。
あたしは声を上げて身をよじった。
今まで経験したことのない痛みと…そして自分自身以外の誰かを受け入れる初めての感覚に、ただ戸惑った。
でも彼は、あたしから躰を離さずに、そして、あたしに深く口付けをした。
「オレ達…ひとつだ…」
彼はそう言うと、マリナ、目を開けて、と言った。
あたしは堪えきれずに目を閉じたままだったけれど、和矢に声をかけられて、ゆっくり瞼を開いた。
すぐ…目の前に和矢の瞳があった。和矢も苦しそうだった。
あたし達は激しく口吻を交わした。
彼は額に汗をかいていて、やがて、その口吻を中断すると、今度はあたしの首の下に片腕を差し入れ、そしてもう片方の手が、あたしの差し入れられた腕と反対側の耳脇に置かれた。

彼はゆっくりと動き出した。あたしは…あたしはその感覚を受け止めるだけで精一杯だったから、本当のところはどれくらい時間が経過したのか、何か起こっているのか、その瞬間にはまったくわからなかった。

和矢はあたしの上で、苦しそうに、律動を繰り返した。
瞳を閉じ、眉根を寄せて、彼は渇かした癖髪をまた自分の汗で濡らしていた。
あたしは疼くような痛みと…そして同時に彼とキスをしている時に感じる歓娯の感覚よりも何万倍ものうねりを感じていた。

「優しくするから…大事にするから…今はごめん…」

そう言うと、和矢は大きく細かく体動をし、彼はまた堪えきれずに声を漏らした。
あたしはその瞬間…体が沈むのを感じた。
和矢の体が痺れたように痙攣して…全身を烈しくわななかせた。
そして彼は大きく吐息をつくと…背中から流れる汗が、あたしにかからないようにそっと体を離して、脇に移動した。
あたし自身も、心臓がどうにかなってしまいそうなくらい脈打つ拍数がはやく、汗をかいていることに気がついた。

「ーーーこんな部屋で欲情できるのはオレぐらいだ」
彼はそう言って笑った。
あたしもそうだね、と言って笑った。

彼は腕枕をすると、冷えるから、と言って、あたしに毛布を掛けた。
そして一緒にくるまって、肌を寄せ合った。
朝までそうしていたものだから、翌日はお互いが風邪を引いて寝込んでしまい、大家さんに軒下の大きいバイクはどこの誰のものなの！と怒られる羽目になった。

「マリナ…指輪を買いに行こう。」
和矢はそう言ったから、あたしはまた今度ね、この雪では行けないわ、と言って笑った。
和矢はきっと連れて行くと言ったけれど、それは叶わないままになってしまった。

「…優しくできなくて、ごめん‥」
額にキスをしながら、和矢が言った。

彼が優しくできない人間が唯一あたしだけだとしたら、それはとても特別なことだと思った。あたしは良いよ、良いんだよ、と小さく言った。

日が、変わったね…
和矢が時計を見て言った。
そして、オレは君の特別になれただろうか、と言ったので、あたしはどうして彼が「今日」この日を定めて…ここにやって来たのかという疑問を思いだした。

あたしは….。

あたしはその時になって・・・なぜ、和矢が「後悔しないか」と尋ねたのか、本当の意味を知った。
どうして「今日」なのかも。
今日は…シャルルの。シャルル・ドゥ・アルディの誕生日だった。

あたしは一生、忘れなくなるのだろう。
和矢と過ごす度に、シャルルのことを。
万が一、シャルルに再会することがあっても、彼の誕生日を友として祝う度に、和矢との夜を思い出すのだろう。

ーーー残酷な、けれども唯一のあたしの恋人。

この雪の中に、すべて消えて無くなれば良いのに、と思った。
和矢と肌を合わせる熱さも…そして彼とあたしのため息も。
何もかも。

それでも、その温もりが嬉しかった。
あたしは和矢の「特別」になれただろうか。

静かに…静かに、雪が降り積もっていった。

彼女は一息つくと、また、ぐいっと手元の杯を飲み干して、手酌でまた新しくその杯に酒を注いだ。

少し離れた長椅子で足を投げ出したまま、じっとその話を聞いていた薫が、口を開いた。
「それで、あんたは後悔しているの？」
「後悔？何に？」
「…いろいろさ。」

ああ、薫。はっきり言ってくれないとわからないじゃないの

マリナが目元を赤くしながら薫を軽く睨んだ。
とは言っても、アルコールがかなり入っているので、見つめるだけにしかならなかった。

「あんたは、和矢と最初の夜を過ごして…そしてその後にシャルルの愛を受けて、どうなんだい？どちらかに抱かれているときには、もう片方を思い出すものなのかい？」
「薫。」
マリナが悲鳴を上げた。
「そんなことあるわけないでしょう」
「それなら結構。あいつらは、誰かを思い出させる暇もないくらい、あんたを愛しているってことだろ？」

マリナはまたその杯を一息で飲み干して、反対側の手に持っていた瓶からまた注ぎ足そうとしたが、それが空になっていることに気がついて、床に転がした。
そして、たくさん転がったわね、と言ってくすくす笑った。

「和矢とシャルルを…」
そこで初めて薫は「シャルル」と彼女の現在の想い人の名前を口に出した。
「和矢とシャルルを両方、愛した。それが事実で消えない限り、あいつら両方を不幸にしてはいけないよ。あんたが…あんたが後悔してないなら、それで良い。
自分とシャルルを信じて、決してあいつの手を離さないことだ。今度こそ、ね」

「うん」
「幸せだった時のことは、幸せだったと素直に思うことだ。そしてそれを否定してはいけないし、何かと…誰かと比べてはいけないよ」
「うん」

マリナがひとつひとつの言葉にこくんこくんと頷いているが、意識がはっきりしているかどうかは定かではなかった。

ーーー太陽はひとつだけで、月もひとつだけだった。
ただそれだけのことだ。
同じ太陽は、眩しすぎて…どちらかが太陽そのものではなく、太陽の晄に…陽だまりになるしかなかった。
そういうことだろう？

「たとえばね…こんなにおいしいお酒を、薫と飲んでいるとするでしょう？」
彼女がおもむろに話し始めたので、薫はおや、と目を細めた。
マリナは、やはり遠くを見ながら、少し、哀しそうにでも嬉しそうに言った。

「和矢とは、一緒にこのお酒を飲みたいなぁと思うの。でも、シャルルは‥
このお酒をシャルルに飲ませてあげたいなぁと思うの…」
マリナ。
薫は目を瞑った。切れ長の瞳を少しだけ大きくして、それから、少し息を呑んだ。

マリナ。
分かち合いたいと思うのが恋で、差し出したいと思うのが‥愛なんだよ、と彼女は小さく笑った。
「それでは、駄目なのかな…いけないことなのかしら。
　順序をつけないと、それは違うものになってしまうのかな…」
語尾が消え入りがちだった。
頭が揺れている。

「薫。」
「なんだい？」
「今日は‥嬉しかった。話せて良かった。」
「そうか。あたしもだよ」
「また‥またこうしてお話しようね。だってあたしたち、友達だもんね」
彼女は幼い少女の様に言った。
そして、そのまま、背もたれに寄りかかって眠ってしまったようだった。

薫はマリナに声をかけたけれど、しばらくじっとマリナを見つめ続けて、そのまま深く寝息をたてて眠りに落ちた彼女にやれやれ、と言って腰を上げた。
寝室から毛布を持って来て、彼女にかけてやる。
手に持った空のグラスを、マリナの小さな手のひらから抜き出した。

「…あたし、ちゃんと、シャルルのことが好きなんだよ…」

彼女が突然、はっきりとした寝言を言ったものだから、薫は少しどきりとした。
そして深く眠るマリナの様子をのぞき込んで、毛布を肩までかけてやる。
マリナにしてみれば、相当飲んだから、明日は二日酔いだろう。
薫は音楽家独特の細くて筋張った指で、彼女の茶色い髪をそっと撫でた。

ちゃんと、好き…ねぇ。

この言葉から、シャルルはまだ、和矢とマリナのことに思うところがあるのかもしれないと思った。そしてマリナはそれを敏感に感じ取っている。
どんなにシャルルが隠そうとしても、一緒に居る限り、気がつかないわけがない。

薫は、窓から流れてくる風に、薔薇の香りが混じっていることに気がついた。
立ち上がって、腰に手を当てて‥少しだけ何かを考えていた。

どうして男ってやつはこうも‥女の愛を疑うのだろうな。

「あたしにも一本くれないか」

この家の主に、薫はそう言った。
「病人に煙草は禁物だ‥それに夜風も。」
「主治医に言われたくないね」
そう言って、月明かりの下、薫はシャルル・ドゥ・アルディの隣に座った。
良い風だな、と言った。その言葉にシャルルは応えなかった。

「…煙草は止めたんだと思っていたよ」
「たまには吸うときもある」
「悪癖は解消されてないってわけか」
その悪い癖は、誰かを想いすぎて、焦がれすぎて、どうにもならなくなったときに復活するんだな。
薫はその言葉を言わずに、黙って差し出された煙草を一本受けとった。
そして、シャルルから銀のライターを受けとって、かちん、と蓋を開き、慣れた動作で煙草に火を点けた。
「ほどほどにしろよ」
「シャルルに言われたくないね」
薫は煙草の煙を月に向かって吐きだした。

「一一で？感想は？」
「何のことだ」
「とぼけるなよ。あたしに聞こえないと思っていたのかい？」
シャルルが黙っていたので、薫はおかしそうに煙草をくわえながら、大きく伸びをした。
「窓が開いていて、風に乗って、シャルル。あんたの、ひっきりなしにライターをかちかちさせる音があたしに聞き分けられないと思ったのかい？これは相当見くびられたものだなぁ。」
薫は可笑しそうに微笑んだ。
ここはマリナと薫が居た部屋の真下にあるベンチだった。
彼が何本も煙草を吸った形跡があって‥薫はますます可笑しくなった。
シャルルの白金の髪が横顔にかかっていて、その表情は薫の目線からは見えなかったが、新たに煙草を口にくわえても、火を点けようとしないその仕草から彼の心中が見て取れた。
持っていたライターをほらよ、と言って返す。
シャルルはくわえていた煙草に火を点けようとして…その煙草を薄い綺麗な唇から離した。

「そうそう。ほどほどが大事だ。…何事もね…。シャルル・ドゥ・アルディ。あんまり度が過ぎると、翌朝のキスでマリナにばれるぜ」

そしてそこで言葉を切ってから、薫はシャルルを横目で見ながら言った。

「…マリナはあんたを愛してる。確認しなくたってわかるだろう」

そう言って、また煙草を深く吸った。
久しぶりに吸ったものだから、少しくらくらしてきた。

「諦めな。彼女を運命の女と定めたのは、シャルル・ドゥ・アルディ。あんた自身なんだ。
だから、彼女のこれまでもこれからも全部ひっくるめて受け止めてやらなきゃ。」
「わかっている。…充分すぎるほど。」
彼が短く言った。

「彼女の涙は重いぞ…。あんたはそれを思い知りながら…それでも止めることができないのであれば、彼女に後悔させないように愛しきることだ。躊躇いも戸惑いもしないで、ただひたすら彼女の幸せを考えてやってくれ。」
マリナに言ってやりたい言葉でもあるな、と薫は呟いた。

こうして、シャルル・ドゥ・アルディと月を眺めながら穏やかに話をするなんて、想像もしたことさえなかった。

「だから。だから、あたしとマリナの間の時間は、あんたと知り合う前より…ずっとずっと長いものだし、全部を知ることがすべてを愛することではないってこともわかっているのだったら…」
そこまで言うと、薫はにやりと笑った。不敵な笑みだった。

煙草の火を消して、立ち上がる。
「夜風は躰に毒だ、という主治医の命令だからね。部屋に戻って、窓をしっかり閉めて、男子禁制という張り紙を扉にして、続きを始めることにするよ」
「続き？」
「もちろん、女子だけの秘密の話さ。」

シャルル・ドゥ・アルディは青灰色の瞳を細めた。
「シャルルの聞きたいことは聞いただろ。今度は・・・あたしの聞きたいことを聞くことにするよ」

ああ、今日はマリナの部屋で泊まるから。ベッドは一つだけれど、構わないだろう？
薫は褐色の髪をかき上げながら、シャルルにウインクをした。

くすくす笑いながら、シャルルをその場に置いたまま、彼女はまた部屋に戻って行く。
かちんと、またライターの蓋を開ける音がした。

まったく意地っ張りなんだからな。

そこがまた、突き甲斐があるっていうものなのだけれど。

さて。

部屋に戻ると、マリナは先ほどの体制からまったく微動だにしないで、眠り込んでいた。

窓をぴったりと締めて、わざとらしくカーテンを派手な音を立てて締め切る。
そして薫は眠り込んでいる彼女の近くまで長椅子を寄せると、また新しい酒の封を切った。

「さぁ　マリナちゃん。夜は長いぜ。…あたしの質問に答えるんだな。」

薫に隠し事はできないわね…

マリナが呟く。

マリナの境界は2段階ある。
酩酊状態の直前のその時と…眠りに深く入る前のこの瞬間。
後者は特に…何を聞かれても反論せずに、ただひたすら回答する。

長椅子にもたれかかり、薫はほおづえをついた。
飲み直しだ。
酒の肴は…マリナ、おまえさんのあれこれ、だよ。

薫は微笑んだ。

「さて、どこから始めようか。和矢とシャルルとどっちが躰の相性が良いのか、どっちが一晩中寝かせてくれないのか…ああ、ここだけの話だよ。わかってる。
だってあたし達は…ともだちじゃないか」

夜はまだ明けそうもなかった。

きっと、翌朝には、朝食は3人一緒には摂ることができないだろうと思った。
なぜなら、マリナの目覚めを待って…朝まで寝ないで過ごすであろう、不機嫌なシャルルがマリナを部屋から連れ出して、自分の部屋に押し込み‥そして、彼の嫉妬の恋情を彼女の体に刻み込まなければ、彼は決して鎮まることがないだろうと、予測していたから。

その前に、あたしが楽しませてもらうよ…

薫は笑いながら、質問を始めた。

（FIN）

櫻花

浅緑野辺の霞はつつめども
こぼれて匂ふ花桜かな(『新撰万葉集』より）

一瞬、霊鬼かと思った。
たいそう気高く、神さびた声だったから。
それが、シャルル・ドゥ・アルディの声であることはわかっていたのに。

彼の血族は、薔薇の一族と言われている。
家紋も薔薇のものだし、彼らは死ぬと土に還るのではなく、薔薇に還ると言われている。

けれども、こうして・・・夜桜の下で彼を見ると、彼は桜の精霊ではないかと思えてならない。
マリナ・イケダは溜め息をついてその様子を眺めた。

日本の歌にも精通している彼は、桜の木の下で、古代の幽玄の鬼が詠んだという歌を口にした。
良く響くテノールが、誰に聞かせるわけでもなく韻律を響かせた。

アルディ邸の庭園は広大だ。

その中でも、日本の植物を植えてある一画があった。
代々親日家で有名な彼らの家に相応しい。
日本庭園は世界的にも有名であり、ガーデニングという言葉を知っている者であれば、誰もが一度はその美しさに心を奪われる。
そしてこれほど広大な面積を使って、日本庭園を再現しようとしたアルディ家の日本贔屓の程度が並々ならぬ者であったので、マリナはひどく驚歎した。
何もかもがスケールが違うのである。

確かに、彼女の生国では、櫻花は非常に・・・日常的なものであり、春月を知らせるであり・・・
そして何よりも美しく儚い生命を思わせる素晴らしい植物である。

けれども、このアルディ家の櫻の古木はどういことだろう・・・

ほんの僅かに小高い丘の上に一本だけ、ぽつんと植わっている。

古木を背にして丘から見下ろす景色に、マリナは、最初、息を呑んでそれから声を詰まらせてしまった。
櫻の季節にここに昇って想いを馳せる彼に、話しかけて良いのかどうか、マリナは少し思案していた。
その時に、シャルルがマリナの気配に気がついて、彼女にこちらに来るように、と。
長く細い指で指示をしなければ、マリナはそのまま背を向けて、邸内に戻って行っただろう。
彼女は単に・・今年咲いた櫻のスケッチをしたかっただけだった。

そこからは・・・彼の母が眠る墓地が見えた。

だから、シャルルが時折・・そこにやってきて、腰を下ろし、青灰色の瞳をほとんど動かさずに何かを考えている様を見て・・・
その櫻の陵の上で、シャルルが何かを考えている時には、立ち入ってはいけない場所なのだと定めていた。

「櫻が綺麗ね」
マリナがそう言って、彼に近づいた。
彼はそこでようやく・・・人に戻ったと思った。
頬に赤みがささったかのようだった。
それまでは本当に・・彼は生きているのかさえ疑わしいほどに、白い顔をしていた。
彼女は彼がまだ「戻って来ていない」のだと思い、言葉を続けた。
シャルルが考え込んでいるときに、話しかけると彼は復帰に時間がかかる。
深淵まで想いを巡らせている途中、マリナが邪魔をしたせいだった。
それでも、彼に語りかけないとシャルルはもっと機嫌を損ねることも知っていた。
彼は、マリナ・イケダによってのみ、現世を彷徨う瞬間に呼び戻されることを許可していた。

「あんまりにも、櫻の下のシャルルが美しかったので・・・これでスケッチできないかしらと思って。
声をかけなかった」
彼女は言い訳めいていると思ったが、そう声をかけた。
手に持っていたスケッチブックを少し持ち上げた。
彼は白金の髪をかき上げて、そう、と言いたそうに頷いただけだった。

おいで、と言ったのに、彼は少し・・・
何かに心を奪われているようだった。

シャルルは。フランスの華と呼ばれて久しい。
それなのに、彼は華で在り続けるために、様々に放浪した。

華を渡り歩いたこともあったし、当主の座を奪還するために死闘を繰り広げたこともあった。
愛というものが・・いかに難しく儚くそして彼の求めているものであるのかを知った。

でも。
かつて彷徨った自分とは訣別した。
今は、別の華を求めることはしない。

唯一・・・彼を咲かせるための晄があれば良いと言う。
そして、運命の女と定めた目の前のマリナにだけ、心を許す。
求めて止まない・・・彼の魂の彷徨い歩きを受け止めることができるのは、彼女だけだった。
彼が常にそこを目指してたどり着けるように。

彼女は、彼に言った。
「晄にも陰にもなろう」と言った。
その時に、彼は彼女を愛して良かったと強く思った。
櫻の国からやってきた・・・彼女こそが、彼の守護精霊だと思った。

晄になるだけではなく。
陰になるだけではなく。

彼女は、一緒に空を見つめて一緒に華を愛でて一緒に・・生きようと言った。
鮮やかな晄だけではない、彼の仄暗い闇も一緒に愛していると言った。

それを信じようと思い、そしてそれを魂に刻んだ瞬間、彼は確信できないものを信じることにした。
彼は決して・・・証明できないものは信用しないのに。

彼女の問いかけには、しばし返事ができなかった。
彼が考え事をしているからであるとわかっていたので、マリナは黙って返事を待った。

それから。
少しして。

櫻、と彼は呟いた。

美しい、形の整った櫻色の唇が少し動いた。
そして、伶俐な青灰色の瞳が、ようやく、マリナの姿を捕捉した。
彼が夢幻の世界から戻って来たのだと確認できたので、マリナは安堵の吐息をついた。
彼がこの状態になると、なかなか戻ってこられない。
それは良く理解していた。

「植物分類学上、これはソメイヨシノだ」
「日本の櫻であることにはかわらないわ」

「シャルルが櫻の精霊のように思えたわ」
彼女がそう言ったので、彼は薄く笑った。

彼にとっては、彼女の方が儚い幻の精霊のように思える。
皆が居る時には傍に寄らない。
皆が彼を見捨てる時には傍近くに居たいと言う。
不思議な・・彼の運命の人に、シャルルは笑いかけた。

「櫻はばら科の植物だよ」
彼は面白そうに、からかうように軽く言った。

「君の考えていることはお見通しだよ、マリナ。明日からのアルディ家の茶菓は、桜餅なの？とでも言うのかな？」
その言葉に、マリナが顔を赤くした。
失礼ね！と叫んだが、きっと図星なのだろう。
彼女がパリに来て、この邸内では日本式が浸透しつつある。
けれども、味覚に関しては、彼女は気にいらないことが多いのにそれを口に出していない。
シャルルがこよなく愛でる春の精は、四季の移ろいに敏感な文化で育った。
本人はそうとは意識していないようではあるが。

春の味覚を楽しむためには、前年の収穫物を加工しなければならない。
けれども、彼女はそれを見越して、桜はまだか、と言っているのだ。
シャルルは微笑んだ。
彼女にとっては、去年も今年も・・・春の到来もすべて同じなのだ。
だから、去年と同じように。彼女はこうして、桜の陵にやって来る。
彼が惑っている様を見て、傍に寄り添う。
同じような春がやって来る都度・・・同じように憂えるシャルルに声をかける。

もう、何度目の春なのだろう。
あと、何度同じ春を過ごせるのだろう。

時の流れがあれほど憂鬱で、長く煩わしいと思い、「死までの退屈しのぎ」と言っていた日々が。
これほどまでに・・・これほどまでに愛おしい。
毎日を彼女と過ごし、毎春を彼女と迎えることが。
これほどまでに・・・・嬉しいと思う。
奇跡のようなこの人の存在が、シャルルを変化させたと、いつになったら・・・彼女は理解するのだろうか。

彼は陵の上で。
隣に座り込んだマリナに微笑んだ。
彼女は非常に小柄なので・・・彼が随分視線を下ろさないと、その表情は見えない。

彼は端麗な顔を寄せて、彼女の髪に唇を寄せた。
桜の花弁が彼女の髪に乗っていた。
しかし、それをつまみ上げるようなことはしなかった。
彼女に惹かれて・・・この桜も寄ってきた。
同じように、薔薇の家の彼も・・・彼女に還るのだから。

そう。

薔薇の一族は薔薇に還ると言われている。

けれども。

彼は。

シャルル・ドゥ・アルディは。

薔薇に還るのではない。

ばら科の植物をこよなく愛でる人の元に還る。

「さぁ、夜桜見物はこれで終わりだ。・・・戻ろう」
彼がそう言ったので、マリナは微笑んで立ち上がった。
彼女のスケッチブックは今日は更新されなかった。
でもそれで良いと思った。
これから。
これから先も。

ずっと・・・彼を見続けているのだから、それはいつでも描ける。

そう、思った。

ぼんやりと、桜が赫いた気がした。

パリの夜空に浮かんで春の来訪を祝うかのように。
そして、シャルルがこうして微笑んでいることを喜ぶかのように。

（FIN)

翹望

■翹望　前編

彼の名前はシャルル・ドゥ・アルディという。

アルディ家第31代当主になるべくして生まれた者だと言われている。
そうなのかな、と疑問に思うより、そうなのだ、と納得した方が彼は楽だった。
自分がシャルル・ドゥ・アルディであることを選ぶことが出来ないように、やめることも他の他人になるきおともできないのだということはわかりきったことだった。

くせのない白金の髪に、雪よりも白い肌、上品な青灰色の瞳に、口角が上がり微笑んでいるかのような唇。
華奢な首から背筋にかけては姿勢良く伸びて、人形もこれほど美しくはないだろうというカーブを描いている。
彼の姿勢の良さは、躾によるものだった。
そして少女の様な、年よりずっと幼く見える、ひとつひとつがはっきりとした輪郭を描いている顔立ちが好きではなかった。

早く大きくなりたかった。

大人になって、ママンを助ける。
それが彼のたったひとつの願いだった。
一週間でも一日でも早く医者になって、ママンを助ける。
それは叶わないことではなかった。

近い将来それは実現する。

焦らなくても、誰よりも早く彼は医者になる。

飛び級をして、自分の倍以上の年齢の者と、机を並べて。
誰からも誘われない、声をかけられない、時間にやって来て時間に帰る学生生活を終えれば、彼の希望は予定ではなく夢でもなく、現前する。
強い意志を持っているからこそできることではあったのだが、誰も彼の軌跡を追いかけることは出来なかった。独りで走り続けなければならない孤独を越えてなお、彼は早くそこに到達したかった。

テストで満点を取るごとに。
ママンに逢える、月に一度の、5分間という決められた時間の中で、ママンに微笑んでもらえたときに。
一つずつ、歳をとって大きくなることが出来れば良いのに、と思った。
ママンから卒業するために大人になりたいと思ったこともあった。
でも。
それではママンが救われない。
ママンを救うことが出来ない。

彼はいつもひとりぼっちだった。
たくさんの大人に囲まれて、言いたいことも我慢する。
「年相応」という言葉は彼には適用されない。
求められるのは、アルディ家の長男としての誇りと尊厳だけ。

シャルルがどう思うのか、何を感じるのかはまったく関係のない世界だった。
それが彼の「標準」だったから、冷たい世界であることそのものもわからなかった。
ーーー比べるものがなかったから。

彼は孤独だった。
囲まれている人数の少なさとはそれほど関係がない。
大勢の中に居ても、共感や連帯感を得られずにいた。
すべての人から切り離されて、単独だった。
それも、最初のうちは、そういうものだと思っていた。
そうなのだ、と認識しただけだった。
他の者になろうとも思わないし、なりたいとも思わない。
だから、シャルル自身が孤独だとか寂しいだとか考えることはなかった。
誰かと比べていないから。
それが彼の生の特質なのだと思っていた。

それなのに。
シャルルはママンの愛を求めてしまった。
その時に、シャルルはひどく孤独であることを思い知ることになった。

***
ママンが病気であることが発覚した。
もう長くないという。
長くないと言うことはどういうことなのか、理解した。
頭では理解しているのに、理解できないとシャルルの小さな胸が痛んだ。

シャルルは、白金の髪を膝に埋めて小さくなって……そして呻いた。
泣くのではなく、呻吟した。
静かに。
慟哭することも、泣きわめくこともできなかった。

なぜなら、彼はシャルル・ドゥ・アルディだから。
アルディ家の長子であり、彼が生まれた時には両親はたいそう喜んだと聞く。
だから、がっかりさせたくなかった。

間に合わない、という焦燥感だけがあった。
彼は、間に合わない。
自分の力だけでは、能力だけでは、間に合わせることが出来ない。

ママンが寂しそうに微笑むわけも、父親が難しい顔をして気鬱そうな気配を漂わせたまま執務室に籠もる様子も。
彼はわかっていながら、方策を講じることが出来なかった。

死んでいく者は心を残して死んでいく、と言った人が居た。
躰は還っても、魂は遺されていく。残った者に遺される。
そうシャルルに言った人が居た。
今はもう居ないけれど。

でも、アルディ家の者は、死んだら土に還らない。
死んだら薔薇に還る。

だとしたら‥‥シャルルのママンは、どこに還るのだろう。
どこに行くのだろう。
誰の元に還るのだろう。

そんな折のことだった。
彼の母親が、残り少ない時間を彼と過ごすために、本邸に戻って来た。
シャルルは嬉しい気持ちを隠さずに居た。
でも彼は自分の気持ちを押しつけることはしなかった。
常にママンに寄り添い、いつも彼女の発する言葉を待った。
そして遂に。
「何か願い事はあるか」と尋ね続けたシャルルにママンは答えた。
彼が大人になって医者になるまで、ママンの躰は保たなかった。
シャルルが幼い心でずっと大人になりたいと、想い続けていた理由と彼の毎日の孤独な生活を送る意味が、消えて無くなりそうだった。

ーーー彼の誕生日はもうすぐだった。

「あなたが倖せそうにしているのを見たい。今度の誕生日に、友だちをたくさん連れてきて、みんなでいっぱい遊んで頂戴。あなたのはしゃぐ声や笑う声を聞きたい」
彼の母の願いは、慎ましやかであるように聞こえたが、到底叶わないねだり事だった。

***
母親と一緒に暮らすというのは、彼にとって念願のことであったのに、酷く緊張を強いられた。
同じ屋根の下に、自分が焦がれた者が居る。

毎日逢えるわけではない。

彼女の体調の良いときに、ほんの僅かな時間だけ。
しかも不定期だ。
でも、これまでロワールの館で面会を求めてママンに会いに行くより、ずっと頻繁に逢えるようになった。

それなのに。

人間は貪欲で、慣れる生物なのだと、シャルル・ドゥ・アルディは身をもって知ることになる。

ーーーそれが当然だと思うようになるのだ。

愛を受けることを当然だと思う。
愛を受けなかった時を忘れてしまう。
どうして愛されないのかと不満に思う。

今の状態がどんなに…どんなに倖せかということを、失念してしまう。

だから、シャルルは忘れないように。
去りゆくママンに、とっておきの思い出をプレゼントしたかった。
本来なら、贈り物を受けとるべき人物は、シャルルなのに。

彼は、少女の様な、天使のような微笑みで、ママンに、大丈夫だよ、と言った。
「僕は友だちがたくさんいるからね。きっと、誕生会はママンがびっくりして、眠っていられないくらい、騒がしいと思うけれど、我慢してくれるよね？」

‥‥‥初めて、確定できないことを言った。

彼はシャルル・ドゥ・アルディなのに。
愛する人のために、彼はこれから、とうてい実現できそうもないことを言った。
夢物語は語れない。

でも、彼は言ったからには、それを現実にする必要性を感じた。
そうでなければ悲しむ人がいる。
自分がその人の悲しむ姿を見て、耐えることが出来ない。

「‥‥明日は誕生日だね。きっと、何もかもがうまくいくよ」
そう言ったシャルルは、とても子どもとは思えない美しくて透明な微笑みを浮かべた。
ママンは薄く笑った。

用意した、誕生会用の食器やテーブルウェアの話、当日に飾る最高の状態の薔薇の種類についての話、そして…彼はとても奇麗な笑顔で、ママンに話しかけた。
心中の物思いを隠して。

そこに誰が座るか、誰がやって来るのかは語らなかった。
本当は、誰がやって来るのかわからなかった。
彼は、この短い期間で、非常にたくさんの人に声をかけたから。

彼は、席次や、彼が友だちに願ったプレゼントや出席人数や、ケーキのチョコレートプレートを誰が奪取するのかという予想について、彼は夢想した現実でない数を挙げた。

ママンは嬉しそうに笑った。
楽しみね、と言った。

シャルルは薔薇色の唇をきゅっと結んだ。
…なぜなら、彼女をがっかりさせたくないばっかりに、彼が言った夢想が、どれだけの部分、実現するか彼自身わからなかったから。
わからないことや確実でないことは、決して口にしてはいけないと教えられたのに。

彼は、その禁句を唇に載せてしまった。

‥‥オデット、ごめんよ。

彼は、彼よりずっと年上の、大人であるけれども、彼の唯一の友だちに、心の中で謝罪した。

彼がシャルル・ドゥ・アルディであれと教示してくれた大切な‥・初めての対等な友だちに詫びた。
彼は、そうでもしなければ、彼の若い躰で受け止めるには大きすぎる沈鬱を…
受け流すことが出来なかった。

ママンのために。
去りゆく者が穏やかに逝けるように。

彼は自分に無理を強いた。

***
楽しみなことの直前に感じる気持ちの昂揚が、最も楽しいものなのだと思った。
その瞬間は、あまりにも楽しすぎて時間を忘れてしまうから。
ママンに会っている瞬間より、面会時間になる前に「何を話そうか」と思索に耽っている時間の方が悦びを感じる。
実際に到来した偕楽の時間のほうが何倍も楽しいからこそ、よく記憶できないのだというのに。

明日の誕生会に関するすべての準備を終えたとき、シャルルは満足げに頷いた。
応接室の飾り付けも、彼が明日着るべき衣装もすべてチェックした。
万全の支度だった。
彼が考え得るかぎりの完璧な状態だった。

シャルルは白金の髪をかき上げた。
あとは明日を迎えるばかりなのに、何かを失念していないか、そればかりを考える。
父親の打ったムチの痕が手の甲に赤い模様を描き、それがとても痛々しかった。
自分の誇りを犠牲にしても、彼はやり遂げられると思った。

彼の年上の友人を見送った。
彼の家で用意した車が大きな門をくぐって走り去って、やがて見えなくなる。
今日は早めに寝るようにね、と念を押されたけれど、彼はとうてい眠れそうになかった。
後になればなるほど、次から次へ、自分の手はずに抜かりがあるような気がしてくる。

シャルルはぶるっと身震いをした。
外は寒い。
まだ１月だ。
料峭な風が彼の薔薇色の頬を撫でた。
風邪を引くから、中に入るようにと執事に促されたが、シャルルは「待って」と言った。
「‥‥明日、来訪者にこどもが多いから。
　間違ってアルディ家の面会希望者と間違えないように、もう一度門番に言っておかないと」
彼は呟いた。

どんなに物品が完璧でも、人間を万全にしておくことはできない。
人は忘れる。
勘違いをする。
そしてシャルル・ドゥ・アルディはそうでない。
彼は駆け出して、門番の待機する守衛棟に走った。

明日のシフトを確認して、来訪時に居る者に直接伝えないといけない。

シャルルは白い息を吐き出しながら、今、友人を見送った場所から、かなり距離のある守衛棟に向かって走り出した。
彼の高揚感が足を軽くさせていた。
白金の髪の毛が後ろに流れ、彼の白い頬や天使のような顔立ちや、きらきらと輝く青灰色の上品な瞳が、露わになった秀でた額と相まった。

世の中には、自分の果たすべき義務を喜ばない者が居て、そしてそう言った者達は権利を主張することだけは一生懸命になるのだ、ということをシャルルは知らなかった。
知ったのは、彼の誕生日のことだった。

でも、走るシャルルには、まだ、知り得ない事実だった。

***
「‥‥天使が走ってきた」
外の様子を監視するために、窓ガラスの結露を防ぐため、暖房があまり効かない守衛棟に入るなり、こどもの声が聞こえてきた。
乱れた息を整える。
いくつものモニターや無線が並ぶ一室に、彼女は座っていた。

ーーーー東洋人だ。
しかもかなり幼い。
シャルルはいつも癖で、初対面の相手を観察した。
年齢は‥‥シャルルと同じ頃だろうか。
東洋人は若く見えるから、年齢の判定が難しい。
この間見た人種別骨格標本からすると、大体、シャルルと同じか、少し下だろう。
「‥‥日本語だね」
シャルルはそう言った。
父親が日本贔屓であり、いずれは必要になるということで、帝王学の教育の一環でつい最近覚えたばかりの外国語だった。

「‥‥ここは立ち入り禁止のはずだけれど」
シャルル・ドゥ・アルディがそう言うと、最高責任者がやって来た。
慌てて、シャルルに大変に恐縮をして説明した。
こどもが迷い込んできてしまったこと。
外国人であるのに、身元を証明するものがない。
しかも、誰も彼女の言語を理解できないので、今、警察を呼んで、引き取ってもらうのを待って居ること等々を話し出した。
大きな椅子に腰をかけて、浮いた足をぶらぶらさせながら、彼女はシャルルに向かって言った。
「あんたは日本語わかるのね」
ぞんざいな口の利き方に、シャルルは少し驚いた。
彼のまわりではそんな話し方をする者は居ない。

茶色の瞳の茶色の髪のこどもだった。
日本人だとしたら、かなり色素が薄い。

「どうしてここに入り込んだの？‥‥公道からここまでは、距離もあるし、随分時間がかかったと思うけれど」
「さんぽ」
彼女はそう言った。
目の前に出された、あたたかい湯気ののぼるミルクと菓子に手を伸ばしている。
「親は？‥‥‥フランス語ができないのに、どうしてひとりで出歩くのさ」
シャルルは少しばかり呆れて言った。

彼女はどう見ても、フランスに来たばかりのようだ。
ここがどこだか知らないらしい。
私有地に入り込んでしまったという感覚もないらしかった。

大人達は、シャルルが日本語を話せると知ると、彼女の連絡先を聞いてもらえないかと言ってきた。
アルディ邸の前に警察がやってくることは大変に外聞が悪い。
しかもその旨を主に報告しなくてはならないし、たかだか外国人のこどもが迷い込んでしまったことで大騒ぎにはしたくないという困惑と思惑が、シャルルには手に取るようにわかった。

「報告はしなくて良いよ」
シャルルはそう言った。
「‥‥彼女は僕の誕生日パーティーに一日間違えて来てしまったらしい」
プレゼントも何ももたない軽装で、シャルルの通う学校に通えるほどの語学力のあるこどもではなかった。

***
茶色の瞳の幼女は、遠くを見つめていた。
目が悪いのだろうか。
細かい文字がよく見えないらしかった。
シャルルの事は天使だと言ったのに。
見えても読めないだろうが、彼女はものめずらしそうに、あたりを見廻していた。
自分の置かれた状況を理解していないのか、それとも動じないくらい剛胆な性格なのだろうか。

シャルルは微笑んだ。
大人達に指示をする。
彼女の腰には、小さな文字で、連絡先が書いてあった。
電話番号だった。
そこから、彼女が頻繁に迷子になるほど放浪癖があり、日本でも同じように迷子になることが多かったこと。
そしてフランスにやって来て間もないので、連絡先をフランス語に書き換える暇もなく彼女がまたそぞろ歩いてしまったことを知った。

「君は相当迂闊な子だね」
彼はそう言って笑った。
誰も知らない、言葉も通じない環境にいるのに。
泣きもせずわめきもせず、好奇心をむき出しにしてきょろきょろ辺りを見回す彼女を面白いと思った。
「この番号は、日本の番号だから、ここから電話回線の持ち主をたどって…最近パリに居住登録をした日本人家族を捜して。該当する日本人が住むような、密集居住する地区は少ないはずだから」
彼は滑らかに次々と言った。
このこどもの連絡先電話番号が更新されていないのは、周囲の者が彼女の事をわかるからだ。来仏したばかりの者を…おまけにこどもを周囲が保護できる場所は、同じ日本人が集う居住区くらいだ。

的確な指示を受けて、大人達は動き出した。
「あんた、随分偉いのね」
彼女はそう言った。
飲み干したミルクカップを置いた。もう一杯欲しいと言っていた。

「そうだ、君も明日おいでよ」
シャルルはこの不思議な少女がどうにも気になった。
シャルルの容姿に驚かなかったこと。
この状況に動じていないこと。
すぐに順応し、シャルルの言葉に普通に会話していること。
この順応性は、シャルルにないものだった。
そして･･･食欲と好奇心が、恐怖や不安に勝っていること。
これは彼を非常に驚かせた。

彼は、ポケットから彼の誕生会の招待状を取り出した。
守衛棟に置いていくつもりだった。
これを明日持ってくる者は、すべて本邸に通せと指示するつもりだった。
言葉がわからなくても、日にちと時間がは数字だったし、これを持っていれば言葉が通じなくても、すんなりと邸の者が通してくれるはずだった。

「ねぇ。あたし、これからどうなるの」
「すぐに迎えが来るよ」
彼は微笑んだ。
彼女はその招待状を受けとりながら、彼を見た。
少し潤んだ瞳をしていたが、非常に意志の強そうな顔立ちだった。
ふぅん、と彼女は言った。
「おとなはみんないつもそういうのよね。‥‥なんでひとりで出歩くの、とか。
すぐに迎えが来るから待っていろ、とか」

「‥‥それが普通の反応だと思うけれど」
「でも、誰も『一緒に居るよ』って言わないんだよね」
シャルルは小さなこどもが言った台詞にはっとした。
それは自分にあてはまった。

彼のまわりの者達は、彼には言わない言葉だった。
そして、彼もママンに言ったことがない言葉だった。
ママンに、いつも何をして欲しいのか尋ねた。
そして彼女の願いを叶えようとしている。
でも、彼はいつもママンと一緒に居られない。許可されない。

シャルルには、「一緒に居よう」と言ってくれる者が居ない。
シャルルは、「一緒に居よう」とママンに言えない。

「・・・一緒に居るよ」
シャルルは呟いた。
そして、シャルルはそっと…大きな椅子に浮いている少女を見つめた。
彼女はあどけない顔で、シャルルを見た。
少しだけ目を細めて、あんた天使みたいな顔ね、と言った。
満腹になり、あたたかいミルクを飲んで、彼女は眠くなってしまったらしい。
とろんとした顔つきになって、やがて、背もたれに寄りかかって、目を閉じるとあっというまに眠ってしまった。

シャルルは少し息を吐いて、その様子を眺めていた。
こうも短時間に睡眠に陥る様を見ると、やはりこの子どもは相当幼いはずだった。
彼は、彼女のポケットに、招待状を滑り込ませた。
彼女が来ても来なくても良い。

でも、今、自分は何か大事なことを聞いたような気がする。

シャルルはそう思った。
彼の年上の友だちや使用人達がしつらえてくれた誕生会の準備が、足りないと思っていたことが恥ずかしかった。
自分で全部まかなえないことなのに。

この子どものように、誰かを信用して安心して眠れる夜を今日は迎えることが出来るだろうか。

誰かを信じる。
誰かを心待ちに待つ。
…そして誰かと一緒に居ること。

それはとても難しいけれど、ママンの願いの意味を、シャルルは少しだけ‥
違った角度で見つめなければいけないのかもしれないと思った。
■翹望　後編

ほどなくして彼女の姉という人物が来たと報告が入った。
誰かフランス語のわかる大人を伴っているらしい。
アルディ家の長子ではあるが、彼はまだこどもだったので、残りの手続きを他の大人に任せることにした。
人を信用して後のことを任せるというのは、難しいと思った。
本当なら明日の誕生日のことを、自らが念押ししたかった。
でもこれほど安らかに眠る茶色の髪の少女を起こすことはできなかった。
そこまでして自分の気持ちを押しつけることは、やめておくことにした。

シャルルはそっと部屋を出た。
また、寒い道程を戻る。
応接室の準備を再確認するのはやめた。
明日が…‧明日が早く来れば良いのにと思った。

名も知らない外国人の少女との会話が、シャルルのさざめく気持ちを少しだけ落ち着かせた。

「あ」

薄暗い空を見上げて、シャルルは呟いた。
息が白く空に登って行く。
群青色の空に、ぽっかりと月が浮かんでいた。
冷え込む夜になりそうだった。

レモン色の月をシャルルは見上げた。
白い燐光が月のまわりを囲んでいた。

ーーー彼女の名前を聞きそびれてしまっていた。

シャルル・ドゥ・アルディは間違えたり、忘れたりすることはないのに。
彼は大事なことを忘れてしまった。

***
待つという行為がこれほどまでに苦しいとは思ってもいなかった。

誕生日の当日。

シャルル・ドゥ・アルディの心中は、待ち遠しいと言う言葉を通り越していた。
隔靴掻痒の感が彼を包んでいた。
（※隔靴掻痒：かっかそうよう　気持ちが焦って落ち着かない様）

その日の時間経過速度はとても遅く感じた。
ママンに逢える面会時間を待ちわびる時に良く似ていた。
けれどもそれ以上の何かが彼を落ち着かなくさせている。

朝は早く目覚めたし、使用人達の「誕生日おめでとうございます」という言葉も大変に嬉しく感じた。

でもそれ以上に、朝、ママンからメッセージカードが入っていたことが何より嬉しかった。
「今日の会を楽しみにしています」と直筆で書かれていた。
ママンは筆を執ることが出来ないくらい弱っていたけれど、時間をかけて書いてくれたのかと思うと、シャルルは胸が打ち震えた。
どんなプレゼントよりも勝った。
父は、夜には戻ると言ったが、朝早くから出かけてしまっていた。

シャルルの特別な一日は過ぎていった。
もう何回も経験した日なのに、この日は特別だった。
そしてその後も…この日のことを何度か思い出すことになった。

家に戻るまでの時間は計測通りだったのに酷く長く感じた。
前もって用意していた衣装はやっぱりこれで良かったのだろうかと鏡の前で何度も姿を確かめた。
父に打たれたムチの痕を隠すために、少し眺めのフリルのついたブラウスを身につけた。

どんな言葉をかけようか、どんな遊びをしようか、どんな飲み物を勧めようか。
彼は絶え間なく考えた。

それは間もなくやって来る。

そして彼はママンに話しかける時間配分を考えるのと同じように…
限られたパーティー時間の配分を考えた。

楽しい時間は過ぎゆくことを忘れる。

だから、今、楽しい時間を思い渡して時間を過ごす。
ーーーーー待つ時間があっという間に過ぎゆくように。

彼は待った。

時間が過ぎて、彼に指示された料理をいつ運ぼうかと使用人や執事達がこっそり応接間を覗いていたが、シャルルはじっと…･中央の奥の椅子に座ったままだった。
内線電話が鳴って、誰それが到着です、と伝えられるのを待った。

待ち願った。
冀（こいねが）った。

つい先ほどまでは、時計の針が進む速度がもっと速ければ良いのにと思ったのに。
今度は。
時間が到来して過ぎていき針が巡っても、ママンに彼女が望んだとおりの楽しいはしゃぎ声を伝えられないことを憂えて、彼はもっと時計の速度が遅く進めばいいのにと思った。

その時間が到来して、少しだけ遅刻してしまったとたくさんの者が押しかけることを願った。

夕暮れが近くなっていた。
冬の日の夕暮れは早い。

美しく飾り付けられた応接間のドアが開いて彼の年上の友だちが顔をだした。
でも、彼女では駄目なのだ。
シャルルの望んだ結果にならない。
ひとり座るシャルルを見て、その人はあわてて駈け寄った。
彼は唇を噛んだ。
彼女に憐れまれていることがわかったから。
遠くから走り寄る彼女が近づいてくる度に、彼は彼女との距離の遠さを感じた。
彼が気がついていなかったことを、彼女は想定していた。
大人だったから。

シャルルは美しい青灰色の双眸を彼女に向けた。
「僕と一緒に笑ってくれない？大きな声で笑って、楽しそうな音を立てて、はしゃいでないと、ママンが喜んでくれない。…･心配して、よけい病気が悪くなっちゃう」
そこまで言うと、シャルルは大きな眸から、いくつもいくつも涙を流した。
声を上げて、しゃくり上げながら…シャルルは泣いた。

切なかった。苦しかった。
声が掠れて、涙声になり、目の前が滲んで行く。

「僕はもう、一生、誰も好きにならないし、愛さない。自分の傍にはもう誰も、近寄らせない、絶対に！」
最後の言葉をシャルルは繰り返した。
絶対だ、絶対そうする、と彼は何度もそう言った。
自分に言い聞かせるように。

年上の友だちが心配そうに彼の背中を撫でた。
彼女はそれをわかっていたことを知った。
知らなかったのは…自分だけだった。
使用人達も父も本当は知っていたのかもしれない。
でも、彼のために、とうてい訪れないであろうという人数分の食事を整えた。
だから父は夜に帰ってくると言ったのだと思った。
夕方に戻れば、誇り高いシャルルがひとり傷ついた姿を見ることになるから。
彼の寝た時間を見計らって帰宅することにしたのだと思った。
ママンからはどうかしたのか、という連絡は入らなかった。
具合が悪いのかもしれない。
朝にはメッセージカードを書いて寄越してくれたのに。
それとも…自分の息子が期待に応えられないことにがっかりしたのだろうか。

シャルルは声を上げて泣いた。
上を向いて、泣くことを堪える術を知っていたのに、そうできなかった。
こどものように。
シャルルは本当はこどもなのに。
堰き止められていたこれまでの想いを一気に放出させるように。
彼は潸然と泣いた。

彼の繊細な心に入ったヒビは、音を立てて隙間を広げていった。

***

その時のことだった。

応接間の重厚な扉が鳴った。

コンコンとノックされる音だった。

「お待たせ」
扉が重すぎて開けるのに時間がかかったらしい。
シャルルの座っている席から、茶色の…小さな頭が見えた。
きょろきょろと辺りを見回している。

…彼は頬の涙を拭った。
拭われたのに、また眸から涙がこぼれたから。

「おなかすいた」
幼女はそう言った。日本語だった。

ーーー昨日出会った少女だった。

シャルルは立ち上がって、彼女を出迎えた。

「……ようこそ」
シャルルは優雅に彼女を部屋に招き入れた。
頬が少し紅潮して、唇が震えていた。
彼女は笑った。

彼女は日本人で、フランス語は話せないんだ、とシャルルは年上の友だちに手短に事情を説明した。

「プレゼントはないよ」
彼女はそう言った。
おこづかいがないんだ、ここで買えるおこづかいは今月まだもらってないんだ、と彼女は言った。

まだ慣れない異国なのに、彼女はもう一度やって来た。
シャルルのために、昨日やって来た路をもう一度辿ってきた。
ただ彼の滑り込ませた招待状の地図と時間だけしかわからないであろうに。

約束もしていないのに。

シャルルは微笑んだ。
薔薇のような微笑みだった。

背の低い彼女の背に手をかけて、彼はありがとう、と小さく声をかけた。
正面から声をかけることは気恥ずかしかった。
会ったばかりの彼女に、彼は願い事を言う。

「贈り物は…･いらないよ。だから、僕の病気のママンが喜ぶように、大きな声で遊んでいってくれないか。ママンに、友だちがたくさん来ているように思って欲しい」
少女は茶色の頭を揺らした。
「あんたのママ、病気なの？」
うん、とシャルルが言った。
「ママンがね、言うんだ。『あなたが、倖せそうにしているのを見たいわ。今度の誕生日に、お友だちをたくさん連れてきて、皆でいっぱい遊んでちょうだい。あなたのはしゃぐ声や笑う声を聞きたいのよ』って言うからね」
彼は一言一句間違えないで、ママンの言葉を繰り返した。

う〜ん

茶色の瞳の少女が、首を傾げた。
「それなら、簡単じゃない」
シャルルは青灰色の目を少し大きく見開いた。
「君は大きな声が出るのかな」
「そうじゃないよ」
少女は言った。
そして、冷製のオードブルやフルーツが並ぶテーブルの上を気にして、ちらちらそちらを見ながら言った。

「ちがうよ」
「…何が違うの？」
シャルルは尋ねた。
「あんたのママはね、友だちがたくさん来て欲しいって言ったんじゃなくて…あんたが楽しそうに笑う声が聞きたいって言ったんじゃないの？あんたがいっぱい遊んでいる声が聞きたいのではないの？」

シャルルは上品な目を見開いた。
そして、小さな外国人が言っていることを何度も口の中で繰り返した。
シャルルは、一度聞けば覚えるのに、彼はそれでも何度も繰り返した。

茶色の髪の茶色の瞳の少女が言っていることが…･
シャルルの何かを呼び覚ました。

「ママは病気で寝ているんでしょ。だったら、なおさらあんたの声が聞きたいはずよね。

友だちの声じゃなくって、あんたの声が聞きたいから。でも、きっとあんたは大人しそうだから…･そうやっていつもイイ子にしていて。…･･ママの前ではしゃがないんでしょ。だからママはあんたにそう言ったんだと思うけれど」

シャルルは大きく息を吸って、そしてゆっくり、青灰色の瞳を瞬かせた。
その顔はまだ涙で濡れていたけれど、とても…すっきりしたような顔だった。
何かを吹っ切ったような。それでいて、合点がいったといったような表情をしていた。

彼は年上の友だちに向き直ると、フランス語で言った。
「ねぇ…遅くなったけれど、これからパーティーをしよう。女性に囲まれて過ごす誕生日というのも楽しいだろうね」

言葉が通じなくても、大変に騒がしい宴だった。
小さな彼女は身振り手振りで話を伝え、じっとしておらず、落ち着きがないと言えばそれまでであったが、30人以上とも思えるような大きな声を出して笑い声をあげていた。
その合間によく食べてよく飲み、そして最後には「またね！」と言った。

彼女は今度はきちんと家の者に言ってきたらしく、迎えが来ていると言っていた。

「…･最高の贈り物だよ」
帰り際。
シャルルはそう言って微笑んだ。

***

最後に、彼女はプレゼントがないので、と言って、シャルルにそっと近寄った。
そして小さな躰でシャルルを抱きしめた。
ゆっくり、でも力強く。
幼い彼女の抱擁が、シャルルのひび割れた心の隙間をあっという間に修復した。

「君の名前を聞くのを忘れるところだった」
シャルルは帰り際にそう言った。
「今度は僕が尋ねていくよ」
たくさんのお土産を持たされた少女は、嬉々として顔をほころばせていた。

「あら。…･さっき言ったじゃない」
茶色の瞳の彼女がそう言ったので、シャルルは目を細めて首を傾げた。
「さっき？」

そう。さっき。

彼女はそう言って笑った。
「それに、あんたが迎えに来てくれたんじゃない」

シャルルは口を閉ざした。

「あんたが薔薇庭で遊ぼうと言うから、ずいぶん汗をかいちゃった。でも躰を動かしたからかもしれないけれど、料理はおいしかったわね」

･…シャルルは黙ってその話を聞いていた。

薔薇園の様子は、ママンの病室からよく見える。

「じゃ、またね！こんなおいしい料理をまた食べたいわ！」

茶色の髪の彼女はそう言って帰って行った。
シャルルは…黙ったまま、彼女の姿を見送った。

彼女は・・・・
本当は、時間通りに来た。
でも応接室には遅れてやって来た。

彼が応接室でひとり涙を流していた時間には、すでにここに居た。

来訪を知らせる内線電話が鳴らなかった。
アルディ家の広い間取りを知らないのに、彼女は、誰の案内もなくやって来た。

誰の…･誰の…？

シャルルは美しい曲線を描いた唇を歪めた。

初めてそういう表情を創ることを覚えた。

しばらくして。
数日後のことだった。
ママンがこのところ体調不良だったので、彼がようやく調査することにした時にはもう遅かった。

連絡先として指定されていた場所を調べたところ、彼女はもういなかった。
名前を聞くことが叶わなかった。

彼女の親の仕事の都合で、短期滞在しかしていなかったことを知った。
就学記録もなかった。日本人学校に在学していると思ったがその記録もなかった。

でも、またきっと逢えると思った。

彼女らの今回の訪仏が、居住するための下調べのための滞在であることはわかっていた。
だから、遠くない未来に…また逢える。
アルディ家の受付簿に書かれた名前は、ファミリーネームだけだった。
日本によくある名前だった。
茶色の瞳の彼女の名前はわからなかった。

ーーーー彼女だけではない。

彼女をもたらした人物にも…近いうちに逢うことになる。

シャルルに渡されたカードは、母が到底書けるものではなかった。
彼女はもう、筆を執ることをさえできない程、弱っていた。
だから…ママンに親しい誰かが、彼女の筆跡を真似して書いたものだと推測していた。
今なら、それが誰の仕業なのか、推測がつく。
当時の彼にはわからなかったけれど。

彼は空に浮かぶ月を見上げた。

茶色の髪の彼女が遺した言葉の意味を…今でも考える。
ママンはもう居ない。
でも、少ない面会時間で、彼は囁き続けた。
「ママン。…僕はママンの傍にずっと居るよ。一緒に居るよ」
彼女はそういうと、儚い微笑みをいつも浮かべた。
それは、シャルルが4分30秒で自分のことを話し終えて、ママンがそう、と小さく囁くときの微笑みより、ずっと嬉しそうだった。
言葉ではなかった。
彼の気持ちを伝えるのは、長い言葉を連ねたり、きっかり定められた時間に予定通りに言葉を紡いだりすることではなかった。

誰かと一緒に居ると言うこと。
誰かに一緒に居るとよ言うこと。

それが…シャルルに贈られた言葉だった。

待って居るよ、と小さく言った。

彼は今年の誕生日も、空を見上げて冷たい空気の中、白い息を宙に放つ。

あの日を思い出す。

翹望の宴。
翹望の夜。
翹望の月。

翹望の…‥人。

シャルル・ドゥ・アルディはまたひとつ、白い息をはきだした。

（FIN）

跋渉路　前編

シャルル・ドゥ・アルディがアルディ家の所有する別邸にしばらく滞在する、と言ったときに、マリナ・イケダは自分も同行すると言って聞かなかった。
「狡い」
彼女は唇を尖らせて抗議した。
シャルルはため息をついて、肩をすくめる。
「マリナ。オレは忙しい。バカンスに行きたいのであれば適当な場所に行ってこい」
「適当な場所がそこだと思うから、同行したいと言っているのよ」
彼女はそう言った。
「どうせ仕事を持っていくのでしょう。シャルルが理由もないのに、別邸に滞在すると言い出すなんて、なんかおかしいわ」
彼女は時々とてもカンが鋭い。シャルルは苦笑した。
そして、マリナはそんなシャルルをちろりと見上げた。
茶色の大きな瞳が、くるくると動き、シャルルを見据える。
「だって…そうすれば・・・シャルルともゆっくり話ができる？」

マリナ・イケダがパリにふらっとやって来て、アルディ家に滞在するようになって、一月ほど経過していた。
だが、シャルルはその急な来訪に答えることもできず、予定されたスケジュールを繰り上げて消化し、ようやく彼女と少しだけ話をすることができるようになった。
手元に居るのであれば、いつでも話が出来る。
彼は少しだけ・・・マリナ・イケダに対して油断していた。
油断、という言葉はシャルル・ドゥ・アルディには似つかわしくない。
彼は、彼女が手元に飛び込んできたことを内心喜んでいた。
彼女の待つ館に帰ることが・・・。
あれほど日々虚無と怠慢で満ちた毎日を、まったく違う色に染め上げてしまうのかと思った。

「良いけど…」
彼は微笑んだ。
「そこは日本語は通じないよ。ここほど行き届いていない。」
「それでも良い。だってシャルルが通訳してくれるでしょ？」
彼女のそのすっかり安心した様子に、彼は破顔した。
「あいにくだけれど、オレも居ない時間がある。それでも良いか？」
「良いわ。何とかなるんでしょ、その言い方だと」
「男と旅行に行くという女性は、いつもそんなに気ままに答えるものなのかな」
シャルルが皮肉たっぷりに言うと、マリナがすかさず反論した。
「私とシャルルは恋人同士じゃないでしょう。友達と旅行して何が悪いの？」
その無邪気な回答に、シャルルは少しだけ唇を噛んだ。切れ長の瞳を細めて、彼女の残酷さを少しだけ恨む。
「良いだろう。・・・けれども、マリナ、後悔するなよ」

シャルルは明日出発だと良い、そして準備をしておけと言って、私室に入ってしまった。
彼の白金の髪が翻るのを見つめながら、マリナは少しだけ首を傾げた。
なぜ、シャルルが怒るのかわからなかった。
彼は確かに怒っていた。
同行すると言ったことに憤ってはいなかった。
むしろ、彼女が行きたいと言うことを見透かした申し出だったように思う。

少しだけ大人になったシャルルは、毎日を忙殺されていた。
そしてそれが彼にとって充実したものでないこともわかっていた。
アルディ一族の頂点に立つことが、これほど大変なことだとは、彼女はここに滞在するまで、知らなかったのである。
だから、かつてのように、ふらっと日本に遊びに来ることのできた時代を思い出して欲しかった。
彼にとって、楽しみというものを持って欲しかった。
それが自分と居ることによってもたらされるものだとは決して思ってはいないけれど…
少なくとも、昔の友人が傍に居て、なにくれとなく話しかけていれば、彼も少しだけ、継続し続ける思考を中断するのかもしれないと思った。

「とにかく、シャルルは良いって言ったわ」
そうひとり呟くと、彼女は少しだけ伸びをして、それから、場所も出発時間もまるで聞いてなかったことに気がついた。

「…面白そうな話だね」
シャルルが出て行った扉とは違う扉から、低いバリトンの声が響き、彼女はそちらに目を向ける。
「ミシェル。…立ち聞きはあまり良い趣味とは言えないわよ」
マリナが茶色の瞳で軽く睨んだ。ノックくらいしなさいよ、と付け加える。
ミシェルは面白そうにくすくす笑いながら部屋に入ってきた。
そして今気がついたかのように扉をこんこん、と細く長い指でノックする。
「これで良い？」
「そういうことではないでしょう」
マリナが呆れて言う。

シャルルの双子の片割れは、今ではアルディ家に自分の部屋を持つほど頻繁に出入りしていると言う。
けれども、その知能の高さから、シャルルが在宅しているときにしか滞在を許されていなかった。まだ、シャルルは彼のすべてを信用していなかった。
だから、マリナ・イケダが来訪中にミシェルが滞在したいと申し入れをしたときには、シャルルは難色を示した。
かつて、彼女自身も窮地に追いやられたミシェルと、こういった機会にでも関係を修復すればいいじゃない、というマリナの強い発言がなければ、シャルルは決してミシェルの来訪を許さなかった。

まさに「渋々」だった。

「面白そうな話だね。・・・兄さんと婚前旅行？」
「何を言ってるの？」
マリナが目を丸くして反論する。
先ほどまで同じ顔の人物と話をしていたのに、彼女はあまり区別することなく、まるでそれが当然であるかのように言葉をかけた。
「私とシャルルは婚約してません。ひとりで滞在するというシャルルの付き添いに行くの」
「付き添い、ねぇ・・」
彼は酷薄そうな唇で微笑んだ。シャルルと似ているようでまったく似ていない微笑みだった。そもそも、こんな微笑みは、マリナの前では見せない笑みだったから。

「それなら、マリナの付き添いも必要だな。・・よし、オレが付き添いになろう」
ミシェルはぱちんと、指を鳴らした。まるで今、思いついたかのように言ったが、あらかじめ計画された発言であったことをマリナに知られてはいけない。
マリナはぱっと顔を明るくして言った。
「人数は多い方が良いわ。いいわね。それ。一緒に行きましょう」
彼女の鈍感さがいかにこの館の主を悩ませているのか、彼女はまったく気がついていないようだった。ミシェルは苦笑する。
「あなたのそんなところが・・・兄さんは気に入ったのかもしれないね」
そう言うと、マリナはミシェルに近づいた。ミシェルは少しだけ…息を呑んで、自分よりずっと小柄な彼女を見下ろした。
「…ミシェル。私が思いつきで言ったと思って居るんでしょう」
「違うの？」
彼女は茶色の瞳をまっすぐ彼の顔に注いだ。
こうして彼の瞳から眼を反らさないで話をする人間は、いったい、何人いるのだろうとミシェルは思う。
「これはチャンスよ。シャルルとミシェルが…仲良くなれる良い機会だと思わない？」
「兄さんとオレは充分仲良しだよ」
彼は断言した。そうは思えない、とすぐに彼女は否定した。
「シャルルの居るときにだけしかやってこないミシェルの来訪を、私がおかしいと思わないと思っているの？」
「‥‥」
「シャルルとそのぉ…もう少し話をした方が良いと思うの。いくら双子と言っても、話をしなければ伝わらないこともあるでしょう…」
話をしても伝わらなかったときにはどうすれば良いのかな。
ミシェルは内心そう反論したけれど、マリナの申し出を承諾することにした。これも予定通りだった。
肩をすくめて、仕方がないな、というようにため息をつく。
「我がアルディ一族の頂点に立つ兄さんの古くからの友人が、こう申し出ているからね…
断る理由がない」
それなら、決まりね、と彼女が笑った。
明日、それなら同行してね。きっとよ。
ああ、修学旅行みたいだわ！と彼女は手を叩いて喜んだ。
ミシェルは、ほくそ笑んだ。

彼とミシェルは双子だ。同じ遺伝子を持つから同じものが欲しくなる‥そうは考えなかったが、どうにもこのマリナ・イケダと言う人物は奇妙で‥そしてミシェルの興味を引いた。
アルディ家に今後深く関わりを持つであろうこの人物を見定めるために‥そして、この胸の内のはっきりと形容することの出来ない何かを明らかにするために…
彼は彼女と行動を共にしょうと計画した。

時と場合によっては、この旅は、シャルルとの溝を埋めるどころか、開いてしまうかもしれないという可能性も、充分に彼は承知していた。
目の前で、「ところで滞在先は一体どこなの？」と無邪気に訪ねるマリナを眺めながら、彼は薄く笑った。

「やっぱり海は良いわね」
彼女はそう言った。
アルディ家の所有する別邸は、海辺の屋敷だった。
プライベートビーチがあり、獲れたての魚介類をふんだんに使用したランチに彼女は大変に満足していた。
「昔…海に近いところに住んでいたことがあって、凄く、懐かしい。そこを思い出す。」
波の音。潮の香り。ウミネコの声。何もかもが、彼女を懐かしい記憶に誘った。
「遊泳には残念ながら、季節がはずれてしまったけれど。眺めも良いし、スケッチには最高だわ」

彼女のはしゃぐ様子に、シャルルは苦笑いした。

ベンツでの車中、彼は始終むっつりしていた。
長い脚を組み、ずっと外を向いて、彼女のおしゃべりには半分も聞いていていないようだった。
そのくせ、彼女が意地悪く質問をするとシャルルは的確に答えるものだから、マリナは諦めて喋ることを放棄し、車内では黙っていることにした。

シャルルは不機嫌だった。この上なく。

そもそも、今回の滞在に彼女を伴うことも予定外であったが、それよりなにより、ベンツの後をミシェルが愛車でぴったりと併走する様が彼の癇に障ったのである。

自分と同じ顔をしたサングラスをかけた男が、時々ベンツに向かってにやりと笑う。
オープンカーに乗って彼は白金の髪をなびかせていた。
「良いなぁ、風が気持ちよさそう」
ベンツの窓ガラスから、時々ミシェルに手を振りながら、無邪気に歓声を上げるマリナが心底恨めしかった。

ーーー傍に居ると、苛立たしい。なのに、傍に居ないと、恋しい。

この気持ちを上手く整理できなかった。

シャルルはため息をついた。
酷薄そうな唇からもれるため息は、恋の吐息であったのに、その根本的な原因である彼女は、まったくもってそれに気がついていない。

あろうことか、「ため息をひとつつくと、倖せがひとつ逃げるわよ。そういうときは深呼吸して倖せを吸い上げないと」と言い出す始末だった。

‥マリナ、君のその脳天気さがいつかオレを追い詰めることになるのだろうな。

シャルルは物憂げな青灰色の瞳で彼女を見つめる。
しかし、彼はその一方で薄く笑う。

…この旅は、君にとっても、オレにとっても…意味のあるものになるはずだから。
今のうちに、楽しんでおくと良い。

館に到着すると、彼女は海の見える瀟洒な部屋を選んだ。バルコニーからプライベートビーチの海辺へ繋がっている。
女性は1階は安全性の問題で、2階以上を使用するように、とシャルルが言っても聞かなかった。
そこに、少し遅れて到着したミシェルが、そのやり取りを察したようで、マリナに加勢した。
サングラスを外しながら、シャルルに面白そうに言ってのける。なぜ、そこまで心配するのか、と。
「良いじゃないか。ここは3キロ先までアルディのプライベートビーチだろ。…それに、そんなにセキュリティに問題があるようには思えないけれどもね」
だからオレも1階のゲストルームにするよ、と彼はマリナの居室からほど近いゲストルームに入室してしまった。
‥マスタールームは2階だった。
シャルルは勝手気ままなマリナをまた一度、冷たく睨んだ。
マリナはその視線にまったく気がつかずに、この部屋から望める景色を絶賛し、素晴らしい、とひたすら繰り返している。
廊下と居室を行ったり来たりしながら、他の部屋も見学している様子にシャルルは肩をすくめた。
この陽気な状態では、今は何を言っても聞こえないだろう。

「勝手にしろ」
シャルルはそう言って、マスタールームに荷物を移すよう使用人に指示をすると、ぷいっと背中を向けてしまった。
それに気がついたマリナが慌てて、シャルルの名前を呼んだ。
その声を彼は無視して、螺旋階段を登って行ってしまった。

だって、あまりにも楽しいから。
彼女は呟いた。
シャルルがこんなに素晴らしい海の景色を眺めて、少しでもその疲労を払拭できるのであれば、これほど喜ばしいことはない。
海が懐かしいというのは本当だった。
でも、それ以上に、シャルルののんびりした顔が見たかった。
彼は…一体ここに何の目的でやって来たのだろう。
彼女はそう思ったが、その時に、肩をちょいちょい、と突かれて、振り返るとそこにはシャルルと同じ顔の青年がいたので、少しだけ息を呑んで、目を見開いた。
「オレのこと忘れてない？」
「ミシェル…忘れていたわけではないよ。少し、考え事していたの。」
「マリナが考え事！明日は嵐だね！」
ミシェルのその言い方に、彼女が口を尖らせた。
それでこそマリナ・イケダだね、とミシェルがおかしそうに微笑んだものだから、彼女はつられて笑ってしまい、ミシェルが彼女を慰めているのだと気がついた。
ミシェルはシャルルと違う笑い方をする。
時には冷ややかに、時にはとても…シャルルの若い頃を彷彿とさせるような美しくて花のような笑顔を見せる。それはもう、シャルルは決して見せることのない笑顔だった。
彼女はその笑みを見ると、シャルルのことで胸が痛くなる。
彼が失ってしまったものを思うと、とても遣る瀬無くなった。

でもその時には、その一方で、ミシェルを案じた。
彼はそういう笑みをするときは、瞳が笑ってないことが多く、彼女は少しだけ、ミシェルの言動というものは、仮面のように覆われた演技ではないのだろか、と心配した。

しばらくしたら、外を散歩しないか。
ミシェルの申し出にマリナは快諾した。
そして、互いの部屋に入る。
ミシェルは部屋に入る前に、振り返り、そして妖しく笑った。
「マリナ。寝るときには鍵をかけるのを忘れずに」
「セキュリティは万全なのでしょう？矛盾した忠告ね」
マリナが彼の微笑みにどう答えようか少しだけ迷って、こう切り返した。
「外からのセキュリティは万全だけれどもね。…そうでない攻撃もあるってことだよ」
彼の意味不明な言葉に、マリナはまたミシェルの問答が始まったと思い、そう言うなぞなぞは答えないようにしているの、と憎まれ口を叩いて部屋に入り、扉を閉めた。

かなり露骨な忠告だと思うけれどもね、彼が呟いた言葉はマリナにはもう聞こえなかった。

さて…荷物は少ない。休憩するほど疲れていない。
ミシェルは長距離を運転してきたので、少し休憩が必要なのだろうと思い、彼女は少し考えてから、シャルルの部屋を訪れることにした。
彼の予定と、今後の滞在予定について、車内で確認するのを忘れていた。
先ほど怒ったように機嫌悪く階上に上がってしまったシャルルに、少しばかり聞いてみたいこともあった。

「シャルル、居る？」
部屋をノックするが、彼は返事をしなかった。
「シャルル！入るわよ」
彼女は勢いよく扉を開けた。

ゲストルームより重厚な扉を開けると、彼女は探していた人物がすでに仕事に没頭している姿を見つけることになった。
中央の大きなエグゼクティブデスクの前で大きな革張りの椅子に埋もれるように座り、シャルルは集中して、ラップトップの画面に見入っている。
ものすごい早さで画面をスクロールし、そして何かをチェックしているようだ、ということだけしかマリナはわからなかった。
「…仕事中？」
「そう。仕事中」
シャルルはディスプレイから目を離さずに答えた。
「仕事中？」
「同じ事は二度は言わない。出て行け」
シャルルが冷たくそう言った。彼の集中している時には何を言っても無駄だと充分わかっていたけれど、マリナは言わずにはいられなかった。
「ねぇ…せっかく海近くまで来たのだから、仕事の事は少しセーブできないの？」
「マリナ。」
彼は冷たく彼女の名前を呼んだ。
そこでようやくディスプレイから顔を上げて、突き刺すような視線で彼女を見た。
「オレはバカンスでここに滞在するわけではないと言っただろう」
「じゃあ、何でここに来たのよ。仕事なら、アルディ邸でもできるでしょう。」
マリナが抗議した。
シャルルは、わかってないな、とでも言うかのように彼女に無表情にやり込めた。
「だから、バカンスじゃないから同行しても無駄だと最初に言ったはずだ。」
「無駄かどうかはわらかないじゃない」
マリナがそう言うと、シャルルは呆れて彼女を眺めた。
「君にとっての無駄とオレにとっての無駄は違うだろう。どうしていつもマリナは視点が自分なんだよ」
彼のその言い方に、マリナが少しだけむっとしたようだった。
口を開きかけて、何かを言おうとしたが、止めてしまった。
その代わりに、ぷいと横を向いて、ぽつりと言った。
「‥‥私には無駄じゃないわよ。少なくても、ここまでの道中、シャルルと一緒に居られるということは、私には…無駄ではなかったよ」
それだけ言うと、彼女はもう良いわよ、と言って部屋を出て行こうとする。
「ミシェルと散歩してくる。気分転換に。お邪魔しました。」
そうして、ちょっとだけ荒々しく扉を閉めた。
廊下から、なによ、シャルルの石頭！と怒鳴り散らす声が聞こえて、やがて階下へ声が消えていく。

…無駄ではない、と言った彼女の残像を彼は扉の入り口に感じていた。

君は本当に残酷だね。

シャルルが薄く笑う。
シャルルの前で、気分転換にミシェルと散歩に行くと宣言するマリナに、かける言葉を失ってしまう。
彼女がミシェルに心を開いているのは感じていたけれど、シャルルはそれが‥とても耐え難かった。
自分と同じ容姿の男に、彼女が心を開く。
いっそのこと、誰か別の男の方が、まだ…まだ、この気持ちをストレートに表現できたのに。
彼女の無邪気な言い方が、とても彼を傷つけたことに、マリナはまったく気がついていなかった。

「何を考えているの？ミシェル・ドゥ･アルディ」
マリナがそう言うと、ミシェルは彼女に振り返らずに、まっすぐ前を向きながら言った。
「同じ顔の違う男2人と日がな一日一緒にいるマリナ・イケダの神経回路について」
ミシェルとマリナは約束通り、散歩に出かけていた。
「意味のない徒歩について考察しよう」
ミシェルの言い方にマリナが吹き出した。
「散歩という単語を使えば良いのに、どうして頭のいい人はそうやって難しく表現するのかしら」
「散歩という行為だけではないから」
ミシェルがそう言ったけれど、今度はその意味がわからずに彼女は聞き流すことにした。

滞在先の館の庭から直接海岸に出られる小道を通って、彼と彼女はそのまま海に出た。

日が翳りはじめて、そろそろ夕方になる頃合いだった。
潮風がマリナとミシェルに吹き付けるので、マリナは乱れた髪を後ろに流しながら、目を細めた。
「やっぱり、海は良い」
「そんなに海が好き？」
「海も山も好きよ。」
マリナが即座に答えたので、嗜好がよくわからない人だね、マリナは‥と言ってミシェルが少しだけ笑った。

「そう言えば、マリナの好きなものや嫌いなものを聞いたことがなかった。」
ミシェルがそう言って、水平線に青灰色の瞳を向けた。
色素が薄い瞳の彼は、陽の光が眩しいとでもいうかのように、少しだけ目を細めた。
完璧な造作の、彫刻のような横顔を眺めながら、次は是非スケッチさせて欲しいものだとマリナが無遠慮にミシェルを眺め回した。
「好きなもの？」
「そう。それから、嫌いなもの」
「う〜ん」
マリナが考え込む。
歩く足が止まり、彼女が考えることに没頭し出したので、ミシェルは苦笑して彼女の茶色の頭を撫でた。マリナがその仕草を受け入れたまま、腕を組んで考え込む。
「好きなものは全部。嫌いなものは…あまりない」
「あまりない‥ね」
ミシェルは意味深げにマリナの最後の言葉を繰り返した。
「じゃ、オレは？」
ミシェルが軽く言ったので、マリナは最初何を言われているのか理解できなかった。
「…ん？」
彼女は風を受けながら、ミシェルに視線を移した。
「意味がわからない」
「そう？わからないじゃなくて、聞かないことにしているのではないの？」

彼が薄く笑う。

ーーー二人は、夕方の海辺を歩いていた。

「オレは好きの部類？」
「嫌いな部類ではないわね」
そう、とミシェルが呟く。
マリナは、好きとか嫌いとかそういう言葉で彼を分類できなかった。
だからその回答には答えるつもりはなかった。
「じゃ、好きってこと？」
「…ほんとのミシェルを見せてくれるのであれば」
彼女の言葉に、ミシェルが少しだけ反応した。
「オレはいつでもマリナには本当を見せているつもりだけど。」

その言葉に、マリナが少しだけ笑った。
「いつか、で良いわよ」
彼女の言葉はミシェルの回答を否定していた。

ーーー夕方の海辺の水平線はとても切ない。

マリナがそう言ったものだから、ミシェルはそれまでの会話を中断した。

「なぜそう思うの？」
「うまく言葉にできないけれど・・・」
マリナが、水平線に沈みそうになる陽を眺めながら言った。
ミシェルは、そんな彼女に降りかかる陽光ごと、彼女の全身を眺めた。
彼女は太陽の祝福を受ける者だと思った。

ーーー眩しすぎる。

砂浜を歩くミシェル・ドゥ･アルディを彼女は眺めた。

夕日を浴びて白金の髪が輝き、マリナはミシェルの姿を見て、夕焼けに訪れる月夜見の使徒か神の化身そのものではないかと思う。
ミシェルは完璧な美貌でもって、彼女に笑いかけた。
「本当のオレ…」
「シャルルは少なくとも嘘はつかないわ」
そこで彼の半身の名前が出たので、ミシェルは少しだけ眉根を寄せた。
普段、マリナは彼とシャルルを比べることはしない。話題にも出さない。
それだけに、彼と居るときにシャルルの話が漏れると、ミシェルはあまり愉快でないと言う表情と態度を見せる。
彼は自分の感情を抑制しているのだろうか。
本当に僅かな差であった。
彼をよく知る人でなければわからない、そんな小さな変化だった。
それでも、彼女はこの話はしなくてはならないと思ったのだろうか…
マリナは、ごめんね、と小さく呟いた。

「それなら、オレは君に嘘をついているということかな」
「それはミシェルが自分でよくわかっているでしょう」
彼女は笑った。
「そもそも…なんでここに来たのかしらね…館の人達はみんな日本語か、単語であればフランス語も英語も理解してもらえるようだから、ミシェルの『付き添い』というのは必要不可欠の申し出ではなかったと思うよ」
「マリナはその問いに何て答えて欲しいの？」
夕焼けの陽の光に照らされた彼が、この上なく寂しく切なくそう言ったので、マリナはこの話題を口にしたことを少しだけ後悔した。

「・・・自分を受け入れること、自分を全肯定できること、自分と仲良くなれること・・・」
「『幸福とは』の続きだね。日本の有名作家の言葉だ」
彼は彼女の言いたいことを察したかのように、ミシェルは付け加えた。
「ねぇ、ミシェルは今・・・倖せ？」
唐突に尋ねる彼女の質問はいつも想定外だ。
彼は完璧なカーブを描いた頬を緩ませて、微笑んだ。
「倖せだよ。そして少しだけ、不幸だ」
アルディ一族に迎えられ、彼はシャルルの弟であると言うことを周知の事実として認められた。
でも、彼は彼の存在を認めてもらいたかったのだろうか。
それとも…アルディ一族の頂点に立ちたいという、もっと別の願望があったのだろうか‥
それは彼自身に尋ねてみない限りにはわからなかった。
ミシェル・ドゥ･アルディは穏やかに笑う。時には快豁に笑う。
それがマリナを不安にさせた。
彼の笑いは、どこか、彼の本当の気持ちと真逆のような気がした。
それを尋ねる機会は滅多になかった。
ミシェル・ドゥ･アルディはマリナと長い時間接触しない。

マリナがパリのアルディ邸に滞在するときに、彼らと良く似た面立ちの女性に念を押されたことを思い返す。

「ミシェルと接触するのは、当主が許可したときだけにしてください」

その意味がわからなかった。

シャルルと同じ顔立ちの彼をもっと知りたいと思った。
かつて、彼と一緒に過ごすうちに、シャルルの孤独を知ったように、ミシェルにも孤独があり、それはマリナが解決できるものではなかったけれど、シャルルとミシェルが…お互いをもっとよく知れば、それは解決できるのではないのかと思っていた。

シャルルの孤独と苦悩は、マリナは本人ではないので、分かち合うことができない。
でも、ミシェルであれば・・・　互いの苦悩を軽減することが出来るのではないか‥マリナが短絡的にそう思っていた。
勿論、彼らは育ちも環境も違ったから、まったく同じではないけれど、マリナよりも、少しだけ、ほんの少しだけ、近寄っても良いよという許可された距離が互いに近いような気がした。
彼らには彼女以外に立ち入ってはいけない領域があり、それが彼女を彼女たらしめているのだと、マリナ本人はまったく気がついていなかった。

「今回の滞在は、仕事だよ」
「ミシェルも仕事なの？」
彼が現在、アルディー族の事業にどう関わっているのか、マリナはまったく知らなかった。
シャルルとも仕事の話はしなかった。
彼らの一日のうちに占めるほとんどの割合の時間の過ごし方を、マリナはまったく知らないことに今更ながら彼女は思い知ることになる。
「そうだね…仕事といえばそうであるし、仕事でないと言えばそうでもない。」
日本の「仕事」と「ビジネス」は違うけれどもね。
彼はそう言った。彼の今回の目的をマリナに明かすつもりはなかった。

ミシェルは目の前数歩先を歩く彼女を見つめながら、このまま夕焼けが続けば良いのに、と思った。
彼のほとんど経験したことのない、穏やかな時間…
彼女がもたらした『時の贈り物』に、彼はしばし酔いしれた。

しかし、この瞬間は、ほんの僅かな時間であるからこそ美しいということもまた知っていた。
だからこそ・・・
短い時間でも、短い時間でありながらも、彼に安らぎを運ぶ彼女を、どうにかできないのかと思う。

「さて戻ろうか」
彼はそう言った。
海の向こう側で魚の群れが飛び交う様をはしゃいで眺めるマリナに、彼は薄く微笑んだ。
「食事の時間だよ。散歩はこれで終わり」
「ミシェル…意味がある散歩になったかしら」
「そうだね…」
彼はそこまで言うと、空を眺め、遠い水平線を眺めると、少しだけおかしそうに笑った。
「明日は、マリナが考え事をしたせいで、雨になりそうだ。だから、この滞在中、最初で最後の散歩の時間、ということであれば、これは大いに意味があったものになるだろう」
シャルルが手に入れることの出来ない時間をミシェルは得た。
少しだけ、シャルルの孤独と貪欲さと苦悩を知った気がする。

もっともっと…欲しいと思う気持ちが湧くという現象をミシェルは経験した。

‥‥彼は食事と聞いて嬉しそうにはしゃぐマリナの姿を見て、満足そうに頷いた。

食事の時間にシャルルは現れなかった。
先に食べていて欲しいという伝言を受けて、ミシェルと共に食事を済ませたが、マリナ・イケダは、寝食を放棄するシャルルに対して非常に不満である、とミシェルに漏らした。
「シャルルは一体、何を食べて生きているのかしら」
「さぁね‥霞じゃない？」
「シャルルは仙人じゃないわよ」
マリナが憤って頬を膨らませた。
その仕草があまりにも幼いので、彼とほとんど年齢が変わらない彼女が、時々、童女に見える。まったく東洋人は理解しづらい。
「それより」
ミシェルが言った。
食後に運ばれた、香り高いダージリンが入ったカップを優雅に持ち、花のような艶やかさで彼女に微笑んだ。
「オレ達は今、目の前にいない人物の話をしてばかりいるけれど、もっと違う話も出来るはずだが。」
「私のさっきの質問に答えられない人とはお話ししません」
意地悪く、マリナが横を向いた。
「君はたくさんの質問をしたからね。どの問いのことなのか、わからないな」
彼は努めて明るくそう言って、肩をすくめた。
「オレがここに来た理由を知りたいのであれば、シャルルに聞いたら良いだろう。」
「…私はミシェルに聞いているのよ」
マリナがそう言うと、ミシェルは少しだけ意地悪く回答した。
「私はミシェルと話をしているのよ。それをあなたは、いつもはぐらかす。どう思っているのか、何を憤っているのか、何を・・考えてここにやって来たのか話してくれない人と話をするつもりはないわ」
彼女はぐい、とダージリンを一気に飲み干した。
熱かったのだろうか。少しむせて、そのまま唇を左の掌で拭い、そして席を立った。
全部済ませてから離席することを褒めてやろうか、それともミシェルが彼女に何も明かさないことを感づいたことを褒めてやろうか、ミシェルはどちらが効果的か考えていた。

「明日は、オレもシャルルも不在だ。今回は、本当に用事があってここに来た。
でも、マリナが同行するとは予定していなかった。
シャルルは本来ならパリで済ませるはずの仕事をたくさん持って来たんだ。この後、君との時間を作るために、通常の倍以上の処理件数を引き受けている。」
「シャルルはいつも、あんなに忙しいのかしら」
マリナが心配そうに呟いた。時間なら、いつでも空いているのに、なぜそんな無理をするのかわからない、と彼女はうつむいたまま言ったので、ミシェルの苦笑いには気がつかなかったようだ。
確かに、マリナとシャルルはほとんど会話らしい会話をせずに日々を過ごしていた。
彼がやろうと思ってできないことはない。

それにも関わらず、シャルルには自由がなかった。
滞在中のマリナを放置していることそのものをシャルルが気にしているらしいと知って、少しだけ遣る瀬無い気持ちになった。
加えて、彼が時間を作ることができないほど自由を失ってしまったのかと思うと、哀しくて、どうにもならない気持ちで一杯になった。

「本当はシャルルの話をするつもりはなかった」
ミシェルは言った。彼の擁護をするつもりは毛頭無かった。
「聞きたいことは本人から聞けば良い」
一貫してそう言うつもりだった。
しかし、それはマリナがシャルルの居室に足を運ぶことを意味し、その空間には自分は決して立ち入ることが出来ないとわかっていた。
だから…
彼はマリナをシャルルの元に遣るより、彼自身が彼女の疑問に回答してやる方策を選んだ。
それなのに、シャルルのことしか質問しない彼女へ回答をする際には、どうやったら彼女は自分への興味を惹くようになるのか、言葉を選ぶ自分が居ることに気がつく。
そんな自らを冷笑する。
いつから…自分は自分以外の人間に何かを乞い願うようになったのだろうか、と思った。

「…明日は雨だから。」
ミシェルはおもむろにそう言った。
「この館でひとり留守番だな。悪戯するなよ」
「小さい子供に言い聞かせるようなことを言わないで」
マリナが顎を突き出して憤った。
こどもと一緒だよ。
彼は笑う。
行動予測が出来ず、感情のコントロールが彼のそれとまったく異なるマリナ・イケダは、くるくる表情が変化する。
本当の小児であれば、彼はそのまま放置していたのかもしれないが、この人物に関しては、どうにも目が離せない。

「行けよ。シャルルとは明日は話が出来ないから。今のうちだ。」
考えていることと正反対の言葉を、ミシェル・ドゥ･アルディはマリナに投げかけた。

マリナがシャルルの部屋をノックすると、相変わらず返事がなかった。
また無視するつもりなのね、とぼやいてから、「シャルル、入るわよ」と大きな声で扉の外から呼びかけ、そして中に入った。

「あ…」

シャルル・ドゥ・アルディは、日中、マリナが訪れた時と同じ状態だった。
しかも、誰も部屋に入ってはいけないと言っていたのだろう。
照明も点けないで暗闇の中に居た。
マリナが照明のスイッチを探して、豪華なクリスタルの照明が点灯すると、その異様さに一瞬、息を呑んだ。
思わず声を漏らすが、その気配に気付くこともなく、シャルルは微動だにしなかった。
今度は、忙しなくラップトップに映る画面を見ているわけではなかった。
シャルルはソファに深く埋もれたまま、眉根を寄せて、じっと空を見据えている。
革張りのソファにもたれかかり、細く長い指を交差させて、肘当てに肘をついて空を見据えるその様子は、彫像のように美しかったけれど、まったく生気を感じさせなかった。
一点を凝視しているが何かを見ているわけではない。
彼が何かについて深く考え込んでいるその姿に、彼女は久しぶりに遭遇した。
ディスプレイさえも長時間放置していたのだろう。
オフモードに切り替わっているらしく、画面が消えていた。
「彼は霞を食べて生きている」
ミシェル・ドゥ･アルディがそう言って揶揄したことを思い出した。

この状態の彼は何を言っても聞こえはしない。
マリナは、近くの来賓用ソファに座り、そしてしばらく離れた場所から、シャルルを眺めた。彼の完璧な美貌が、少しだけ疲れているように見えた。
机の上に溢れた書類の束が増えていた。処理した案件なのか、これから処理する件なのか…とにかく彼は常人では扱うことの出来ない様々なことを引き受けているのだと思った。
これが、彼の念願であったアルディ家の頂点に立つことだとしたら…彼は倖せなのだろうか。倖せになったのだろうか。
彼の選んだ道だから。
マリナは、彼の選択した人生と彼自身を否定するつもりはなかった。
でも、健康で倖せであって欲しいと思う。

満腹になり、結構な距離を散歩したので、彼女は少しだけ眠くなった。
ああ、スケッチしたいなぁ‥
動かない美貌の主を眺めながら、彼女はそう思った。
館は静かで…波の音だけが聞こえてくる。
何をするでもなかったけれど、マリナはここを訪れて良かったと思う。

シャルルと話をすることができなかったことが唯一、今日の心残りだった。
でも、まだ日にちがあるはずだった。
環境を変えれば…シャルルも張り詰めた神経が安らぐかもしれない。

マリナは、うつらうつら、微睡み始め‥‥

いつの間にか、ソファにもたれかかって、彼女は眠ってしまう。

夢の中で、シャルルが微笑んでいた。
綺麗な、花のような微笑みで、それはシャルル・ドゥ・アルディが今は決して見せることのない微笑みだった。

オレは倖せだよ、とマリナに囁くシャルルの夢を見た。

私もシャルルが倖せなら、倖せよ、とマリナは微笑んだ。

「おい、にやつくな」
声をかけられて、彼女ははっと目を醒ました。
茶色の目を開けると、目前に不機嫌そうにしているシャルルが立っていた。
腕を組んで、こちらを見下ろしている。
マリナはそのシャルルの刺すように冷たい視線が彼女と随分距離があることに気がつき、身を起こした。彼女は、絨毯の上に転がっていた。
起き上がった瞬間、全身と特に腰に激痛が走って顔をしかめる。
「…痛い」
「それは痛いだろう。寝ぼけてソファから転がり落ちたんだからな。ものすごい派手な音で。それでも起きないなんて、マリナは痛覚異常だと診断するべきだと思うね。」
彼は腕を組んで見下ろしていた。
この不機嫌さからすると、考え事を中断するくらいの振動と落下音だったのだろう。
腕を組み、軽く両脚を開いて、彼女を冷徹に見下ろしていた。
「あはは…シャルルの仕事が終わるまで、待っていようと思ってて…あんまりソファがふかふかしているから、気持ちよくなって寝ちゃったみたい」
マリナは頭を掻いた。
「マリナ・イケダに『待つ』という行為が持続できるとは思えない」
シャルルが辛辣に言ったので、マリナは起き上がって反論した。
全身の痛みに顔をしかめる。
「シャルル！ちょっとね、仕事が忙しいのはわかるけれど、せっかく一緒に来たのだから、部屋から出てきなさいよ。」
「一緒に来たのではないだろ。無理矢理同行してきたマリナになぜオレの予定を合わせないといけないんだ。」
「そういう言い方ないじゃない。たまには、休憩しないと、シャルルはそのうち倒れちゃうわ。それではなくても心配じゃない。そんなに根を詰めて仕事をするほど、何か・・理由があるの？」
マリナ・イケダは時々勘が働く。
シャルルは薄く笑った。
彼がここしばらく、激務をこなしているのは理由があるからだった。

マリナ。
一緒に居ると簡単に言わないでくれ。
その意味は君とオレとでは違うから。
オレの願いを聞き入れてくれるのであれば、何でもしよう。
この退屈な作業も、きっと、意味のあるものになり、オレにとっての無駄はなくなるわけだから。

でもそれは口に出さずに、シャルルは引き締まった腕を差し出した。
「ほら」
マリナは憤慨していたが、シャルルが手を差し出したので、その手を取って立ち上がった。
甘美な心地よさを伴った微弱な電流が、マリナの手から彼の体内に向かって流れた。
その痺れに、シャルルは切れ長の瞳を細めた。
黙考に耽り、「こちら側」に戻る時には、頭が痺れる。その時の感覚に似ていた。
唯一、彼を思考の海から呼び戻すことができる人物を、狂おしげに見つめる。
彼女はそんな彼の視線に気がつかず、着衣の乱れを整えて、ぶつぶつ不平不満を言っていた。

「仕事は一段落したよ」
これは本当だった。中断はさせられたけれど。
「それなら、ねぇ。散歩しましょうよ」
マリナが提案する。
夜も更けた時間だった。シャルルはマリナの唐突な提案に、訝しげに答える。
「さっきミシェルと外出したのに？」
「それは夕焼けの散歩。今回は月夜の散歩。まだ、シャルルとは一緒に歩いていない」

ああ、とシャルルは窓の外に浮かぶ月を見た。
月夜の海岸は静かだろう。
それに、明日からは天候が乱れそうだった。
明日、彼はここを不在にする。
何時に戻れるかわからない。

荒天の中でひとり、館で滞在しなければならないマリナのことを考えた。
彼女のために時間を作れる機会は今しかないと判断する。
明後日にはここを引き払う予定だったから、彼は肩をすくめて、彼女の提案を受け入れることにした。
「良いよ…陸風は案外寒いものだ。あたたかくしておいで」
彼はそう言った。嬉しそうに笑う彼女を見て、微笑した。

ミシェルと歩いた距離を、彼女は彼と歩くという。
どんな話をしたのだろうか、と気になった。
けれども、彼には彼女を詮索する権利も、もちろんそれを咎める権利もなかった。

マリナはいつも自由でそして決してシャルルとミシェルを比べない。
だからこそ、彼はシャルル・ドゥ・アルディで居られるのであると思う。
そうでなければ、彼は「アルディ一族の当主」であるだけだった。
彼の自我は一族の繁栄を維持するためには必要がなく、必要なのはその才と血統だけであることを求められた。
彼がこれほどの激務を黙々とこなすことができるのは、彼を待つ人がいるからだ。
彼女は寝言で言っていた。「シャルルは今、倖せか？」と聞いた。

…ああ、オレは倖せだよ。

静かな微笑みしかできなくなっていた。

彼が彼女を想う気持ちだけは、誰にも必要とされていなくても、それでも、良かった。

シャルルの中で静かに燃え続ける炎が、それまでの小炎であった状態から、僅かに勢いを増したことを彼は感じた。

白く長く続く砂浜を踏みしめると、少し音が鳴ることに気がついた。
日本の砂丘のようだとマリナが思うと、それに気がついたかのようにシャルルは言った。
「鳴き砂だ。ここは、石英を多く含む花崗岩が成分だから。」
静かな夜だった。
先ほどの景色とはまるで違うその様子に、マリナはしばし見とれていた。
水平線の上に浮かぶ丸い月は少しだけ輪郭がぼんやりしていた。
明日の天候を表しているのかもしれない。
波は穏やかで、満潮をやがて迎えるらしかった。
先ほど歩いた地点より陸寄りで2人は歩き出した。
シャルルの言ったように、風が少しだけ冷たかった。

「やっぱり海は良い。」

マリナが静かにそう言った。
月の晄がマリナとシャルルを照らす。

シャルルは美しかった。
大人になってなお、彼の怜悧な美貌は損なわれなかった。
だが時々、マリナに物憂げな印象のする視線を投げかける様が気になっていた。
そして彼は微笑むことはあっても笑わなくなった。
ーーーそれがとても哀しかった。

「今度は遊泳できる季節に来たいな。泳げないけれど。」
彼女はそう言ったので、シャルルはため息をつく。
ーーー今度。
君には「今度」があるのだね。
「次」に巡る季節を、期待しても良いのだね。

彼は何気なく言う彼女の一言一言に･･･気鬱になったり悦喜に酔いしれたりする自分を持て余していた。

平等や公平という言葉は残酷だ。
マリナを表す言葉そのものに感じる。
みんなに平等ということは、みんなに特別でないということだから。

君の「特別」には･････決してなれないのだろうか。
彼女は彼の「特別」だ。

いつでも。
いつまでも。
これまでも。
これからも。
未来永劫。

こんな廉価な言葉では表現できないくらい、彼の中では他のどんなものと比較できないくらいの、唯一無二の特殊な存在だった。
彼を誰とも比較しないマリナに、彼女を誰とも比較できないシャルルが焦がれることは、自然の成り行きだった。

跋渉路　後編

「ねぇ、仕事は…そんなに忙しい？」
「仕事というより作業だね」
彼は短く答えた。
マリナの話はだいたい予測できる。
現在の生活を改めろと説教したいのだ。
「シャルルがそれで納得していればそれで良いのだけれど」
マリナが前置きをした。
「勿論、オレの想定内範囲だ。オレの予定に変更はないし‥不満もないよ」
「そう。それなら良い。でも‥シャルルを心配している人達がいることを忘れないで」
彼女が複数人で表現する該当者は、それほどたくさんは居ると思えないけれど。
それに、彼は目の前に居るたったひとりの人が、自分を思い出してくれればそれで良かった。
「忠告は記憶しておくよ」
「ねぇ　ここには…なぜ、来たの？仕事でしょ？そんなに…私、仕事の邪魔をしたかしら。だから、場所を変えて私が居ないところを選んだのであれば‥私は逆にシャルルの遣りたいことを阻んでいるのかもしれない」
「それは違う」
すぐさま、シャルルはマリナの答えを否定した。
泣きそうな、哀しそうな顔をしたマリナを見た。
彼は、言葉が足りなかったことに気がついた。
マリナはミシェルやジルとは違う。
最小限の言葉で物事の用件のみしか伝えていない生活に慣れてしまい、その口振りが彼女を傷つけていたことに気がついた。
「すまない…」
彼は滅多に言わない言葉を言った。
「マリナが仕事を妨害するのであれば、オレは君をここに連れてくることを承知しなかったよ。急ぎの仕事があって、どうにもならなかった。ミシェルの同行も、君がひとりで…オレの仕事が終わるのを待たせるのは退屈だろうと思ったからで…」
マリナが吹き出した。
ころころと良く表情を変える女性は、シャルルのまじめすぎる答えに、何かを感じたらしい。
感受性が豊かすぎるのも考え物だ。
「凄い！シャルル・ドゥ・アルディが謝った！明日は嵐だわ！」

彼女はミシェルに言われた言葉をそのまま使った。
マリナにとって、シャルルが謝罪することは、天変地異の前触れと同位だった。

「仕事に熱中することは構わないと思うけれど。」
マリナが言った。
「適度に適切にね。そして、私を退屈させてしまうと悩むのであれば、退屈させないようにすることも、主の責務よ」
いたずらっ子のように、彼女はそう言って茶色の瞳をゆっくり瞬かせた。
「シャルルが居ないと…退屈だわ」
「ああ、オレもだよ」

シャルルの言葉は、掠れていた。
そうだね、と言ったマリナを、シャルルはじっと見つめた。

踏みしめる砂が、また鳴った。

彼の心の静かな呻吟を表すかのように。
「さて、帰ろう。月光浴には月の晄が足りない。‥‥もう冷えてくるから。」
この静かな時間がいつまでも続けば良いとシャルルは思った。
波の音と、月の晄と…そしてマリナの微笑みが、少しだけ、彼の疲労した精神を安らぎという静けさに浸した。

二人の予告どおり、翌日は土砂降りの雨だった。
昨日までの快晴が嘘のようで、豪雨のために外が白く見える。
マリナが目を醒まし、朝食を摂るために居間にやって来たとき、シャルルとミシェルが出発するところだった。
「うろうろするなよ」
シャルルが彼女を軽く睨み付ける。落ち着きのないマリナに釘を刺した。
きっと屋内でじっとすることに絶えきれず、あちこち徘徊するか、この悪天の中をそぞろ歩くに違いないと予想する。
「特に、海には出るなよ。…泳げない者が波に攫われて溺死というのは平凡すぎるだろ」
シャルルの言い方には棘があったが、それでもマリナを遣すことを心配しているのだと思うと彼女は少しだけ頷いた。
「水死体ほど解剖しづらいものはないからな。」
死後解剖することを約束していたことを忘れていないらしい。
マリナが頬を膨らませた。
「心配無用よ。ほら、早く。車を待たせているのでしょ。」

二人が公的な用事で外出することは、スーツ姿ですぐにわかった。
シャルルは白金の髪を後ろでゆるく留めていて、ミシェルは明るい色の遊び心のある刺繍の入ったタイを締めていた。

シャルルの前では、ミシェルは発言をしない。

…これは暗黙のルールなのだろうか。

マリナはミシェルに声をかけた。
「ミシェル。行ってらっしゃい。…シャルルをお願いね」
「承知した」
ミシェルはシャルルの視線を無視して、彼女に微笑んだ。低いバリトンが響く。
「時間だ。行くぞ」
シャルルが短く言う。
兄弟の会話というのはこんなに短いものですまされてしまうのだろうかと思うくらい素っ気ない言い方だった。

「シャルル。行ってらっしゃい‥」
彼女は同じように、シャルルにも声をかける。
シャルルはマリナを見た。
不自由のないように指示は出しておいたが、それでも彼女をひとり館に残すのであれば、いっそのこと一緒に連れて行こうかという考えが頭をよぎる。
「…すぐ戻る。」
シャルルはそれだけ言うと、マリナに背中を向けた。
そして足早にガレージへの扉をくぐり、車に乗り込む。
ミシェルは自らの車を運転するのかと思ったが、シャルルと同乗する、と言って同じ車に乗り込んだ。

ゆっくりと速度を上げて、館から随分離れるまで、二人の男たちは無言だった。
「ーーー少し寝たらどうだ。寝てないだろう」
最初に口を開いたのは、ミシェルの方からだった。
「それはミシェルも同じだろ。朝に弱いのに今日は珍しく…早起きだったしな。
　普通ならこの時間に出立することはできないはずだ」
お互い様だろ、ともう一人が呟く。
彼らはお互いの習慣と体質と思考をよく知っていた。

昨晩は、眠れなかった。これも同じだった。
マリナ・イケダから与えられた各々の問いかけに、彼らは考えを巡らせていた。

シャルルは長い脚を組んで…そして胸元から煙草を出した。そして火を点ける。
狭い空間に紫煙が立ち上がり、薄くなって室内を燻らせた。
彼女の前では見せない、彼女の知らない男の仕草だった。
「オレも吸っていいかな」
その声に、シャルルは黙ってケースを差し出した。
細く長い指が伸びてきて、慣れた手つきで一本抜き出した。そして同じ薄い唇にくわえて火を点けた。
ミシェルの煙草の吸い方は、シャルルと異なっていた。
彼は肺の奥深くにまで、一度だけ大きく吸った。
そしてため息ともつかない吐息を煙と共にはき出す。
物思いを煙に混ぜて誤魔化してしまっているかのようだった。
「…マリナには今回の目的を話したのか」
「必要ない」
シャルルは短く答えた。
彼の口調は冷たく、言葉には装飾がない。
いつも通りだった。

ミシェルはそれ以上尋ねなかった。今の答えで充分だった。
才ある者の会話はごく短い。説明の必要がないからだ。
静かに会話が進み、言葉も少ない。
単語のみでもわかり合えるくらい無駄がない。

「それで彼女が納得するのであるのなら」
ひとつだけ、ミシェルが付け加えた。

ミシェルはマリナを観察し続けた。
その結果、あの太陽のような人物から目が離せない自分が存在することを発見した。
これは少しばかり彼を驚かせた。
ミシェルは彼女の会話に耳を傾けた。
シャルルとの会話のように短くはない、一般人との会話はミシェルにとっては苦痛であった。
でも、どういうわけか、彼女との会話は無駄が多く得る情報は皆無なのに、苦痛と感じなかった。シャルルが彼女と会話するときはこのような感覚になるのだろうか。
マリナ・イケダはミシェルが距離を置いて彼と彼女を観察していることを指摘した。
本当のミシェルは幸福か、と彼に尋ねた。
その時…その時、彼は彼女を過小評価していたことに気がついた。
『是非、欲しいね』
そう言おうものなら、即座に主にたたき出されていただろう。
しかしそれが彼の正直なところだった。
マリナがどういう人物なのか、もっと知りたいと思い、そしてそう思う自分に驚く。
ミシェルが他人の好き嫌いを尋ねたのは、あれが初めてのことだった。
他人を知りたいと思ったことなんて、一度もなかったのに…

そしてシャルル・ドゥ・アルディは。
今朝のミシェルとマリナの会話に、苛立ちを感じていた。
彼女が最初にミシェルに声をかけたことにどうしようもなく…苛立った。
煙草をもう一度口に運ぶ。
シャルルと一緒に居ることを無駄ではないと言い切る一方で、ミシェルにシャルルと同じ笑顔を向ける彼女が恨めしかった。
彼の身を案じ、そして無防備に彼の前で眠る彼女を…何度、強引に自分の印をつけてしまおうと思ったことなのだろう。その時の彼女に投げかける視線を、彼女が見ていないことに安堵した自分にも苛立っていた。
月の眩の下、砂を踏みして歩く彼女との時間を継続するためにはどうしたら効率的か、そればかりを考える夜を…彼女は知ったらどう思うのだろうか。

2人の男は、それぞれに物憂げな瞳を宙に向けて、そして煙草を燻らせた。

外は激しく雨が降り‥叩きつけるような音で、雨粒が移動中の車の窓硝子を鳴らす。
それは彼らの胸の内を表すような、そんな天候だった。
遠くで雷が鳴った。

今夜までにやむと良いが‥‥
もう一度あの穏やかな時間を過ごせるのであるなら、目の前の相手に恨まれても構わない。

お互いに同じことを考えていた。
それも、お互いに承知していた。

昨日よりもずっと館が大きく広く感じた。
食事を終えたマリナは、ひとり、サンルームのウッドチェアに座っていた。
今日は豪雨であったので、硝子張りの庭に突き出す格好で作られた部屋には、激しい雨が叩きつけていた。
外は白く霞み、この部屋から見える海は白波が立って荒れていた。
昨日は…あれほど美しい景色であったのに、同じ海と浜辺でありながら、今は荒れた雷雲に支配されていた。
空が光り、遠くで雷が鳴った。彼女は顔をしかめて、目を瞑る。
雷は小さい頃から苦手だった。
マリナは立ち上がって、館内に入った。
この荒天で、シャルルとミシェルを乗せた車が目的地に無事到着できるか案じた。

一体…何処に行っていたのだろうか。
彼らが彼女に見せない姿があるのは何となくだが察していた。
それを見せたくないから、彼女をここに連れてくることに難色を示したのだろうか。
だとしたら…自分は随分と無神経なことをしてしまったと思う。

彼らと接する時間があまりにも少ないから、今回の滞在は良い機会だと思った。
けれども、全部を見せて、長時間を共有することが彼らを知る唯一の手段とは思わなかった。
彼らには彼らの事情がある。
そしてそれを調整してマリナとの時間を作ることが、互いにとって最良のコミュニケーションとか思えなかった。
一方通行なのは‥‥マリナの方だった。
情けないなぁ、と少し笑った。こういう時は考えても解決しないことが多い。
少し、動き回って体を動かした方が良さそうだ。
ひとりで考え込むとロクな結果にならない。

彼女は今の扉を開けて、長く続く廊下に出た。
やはり、人の気配はなく‥
昨日のように、彼女に向かって話しかけるミシェルも、部屋で籠もりきりになり仕事に没頭するシャルルも居ないのだと再度認識する。

広い館には図書室もプレイルームもあったが、フランス語の本は読めないし、ひとり遊びは虚しいだけだった。マリナは少し歩き回ることにした。
館の中に配置されている調度品やさり気なく飾られている美術品は鑑賞に値する。
うろうろするな、とシャルルに釘を刺されたことを思い出す。
他にすることがないから、仕方がないわよね、と呟いて彼女は廊下を歩き始めた。

たくさんの部屋は各々違う造りになっていた。
ベッドルームも趣向を凝らし、使用する家具もカーテンもベッドの形状も異なっていた。この館が来客の滞在を目的とした館であることがわかる。
小さいながらも礼拝堂や、会議室が離れに設置されていて、長期で滞在してもまったく差し支えない構造だった。
ここはアルディ家の所有する館の中でも随分と小さい方であったが、マリナにはこれでも充分広いと感じる。

こんな広い場所にシャルルが単独で来ようとしたことを思うと、どうにも切なくなった。
そして、シャルルが一度仕事を始めてしまえば、彼女が一人きりになることをミシェルが見越して同行したのかと思うと、少しだけ胸が温かくなる。

大切な存在であるはずなのに…互いに向き合おうとしない彼らにマリナは口を差し挟むことを躊躇っていた。口出しは無用だと彼女に話をさせない。
いつも自分でないもう一人のことを話題にすることを避けている。
2人ともわかっているはずだ。

マリナはぼんやりと物思いに耽る。
美術品を見ても、集中して見ることが出来ないから、心に響かない。

そぞろ歩きも楽しくなかった。
…早く帰ってこないかな。

誰かと話をしたかった。
楽しみにしていた、シャルルとミシェルとの会食も叶わぬまま、ここを去ることになりそうだった。

ーーースケッチでもしようか。
そう、思いついたのは、この館に写真が一枚も飾られていないことに気がついたからだった。アルディ邸でも気になっていたのだが、彼らには写真というものがない。
シャルルが当主の座に就いたときにすべて片付けてしまったのだという。

日本では写真をたくさん飾る習慣で育っていなかったので、最初はあまり気にならなかったのだが、彼らが記録として写真を残すことに関心がないことに気がついた。

家族の思い出は大切だと思う。
心の拠り所であり、遠く離れていても思い出すだけで元気になる。
彼女自身もあまり写真を持ち歩かなかったが、それでも家族との写真は何枚か自宅に保存してあった。

特に同じ容姿の彼らは、二人で撮った写真はないはずだ。

それなら…スケッチしてみようか。
彼らの、少しずつ違う優しさのように、彼らは少しずつ違う。
少なくとも、彼女には違って見える。
夕焼けに微笑むミシェルと、月明かりに佇むシャルルとが各々違うように。

それなら…それなら、彼らを描いてみようか。

彼女はその思いつきを実行することにする。

一度自分の部屋に戻り、スケッチブックを取り出した。
彼女の必需品で、マリナが大切にしているものの一つだった。
ベッドに浅く腰掛け、片膝を立ててスケッチブックを固定する。
構図を考えている時だけは、彼女は我を忘れて、雷が鳴り響く空に怯むことはなかった。
シャルルの没頭する様と同じだった。
彼に「発作」と呼んでからかったことがあったが、マリナは密かに自分にも浸潤していると思った。

ひときわ大きな雷鳴が轟いて、それまで描くことに没頭していたマリナは我に返った。
「あ」
驚きのあまり力の加減を間違えてしまう。
デッサン用の鉛筆の先が折れてしまった。
「参ったな…」
替えのほどよい鋭角の鉛筆がなかった。
手持ちのシャープナーの刃を交換していなかったことを思い出して、困ったことになったと思った。
一度手をつけたスケッチへの書き込みを中断することは避けたい。
しばらくどうしようか考えた。
使用人棟に行けば、刃物を貸し出してくれると思ったが、彼女はフランス語が話せない。
それにこの大雨で、少し離れた棟に行くだけでも相当大変そうだと思い、途中まで描き上げたスケッチを断念しようかと思ったとき。
「そうだ」
昨日、ラミーのスクリブルをシャルルが持っていたことを思い出した。
確か…机の上に転がっていた。
書類のチェック用に彼は使っていたが、デッサンに最適だった。

彼女が立ち上がり、そして辺りがすっかり暗くなっていることに気がついた。
もうそんなに時間が経過していたのか、と思う。
昼食を取り忘れてしまった。
誰かに声をかけられた気がするが、生返事をした記憶がある。
ふと気がつくと、部屋の中央のテーブルに軽食が用意されていた。
運ばれたことにも気がついていなかった。
‥シャルルのこと、笑えないわね…
食事を忘れるなんて、何年ぶりのことだろうと思った。
彼女は用意された食事を口にする。
彼らが帰ってくる前に、これは仕上げておきたかった。
簡単に食事を済ませると、マリナは部屋を出て、廊下から階段を上り、シャルルの執務室に足を運ぶ。
すでに館内は照明が灯っていた。
施錠はされていなかった。
誰もいないとわかっていながら、彼女は小さくノックをして、入ります、と小さく断りを入れる。
執務室は綺麗に整頓されていた。誰も訪れていなかったかのように、何もない。
目的の品は、机上の銀のトレーの上にあった。
シャルル、借りるわね、とまた一人で呟く。
そして‥昨日、彼が沈んでいた革張りのソファに手をかけて、トレーに手を伸ばした。
重厚感のある椅子の背もたれに手をかけていたが、彼女の手が沈むくらい弾力があった。
スクリブルを手に取ると思ったより重かった。
マリナの小さな手のひらに丁度良い大きさだった。
それを細く長い指で軽く持つシャルルは、やっぱり男の人なのだと思う。

広いデスクに前屈みになった時に。
マリナはデスクの隅に僅かに積み上げられた書類の中に、違和感を感じて、流した目線を元に戻した。
一番上の書類‥‥
彼女は目を落とす。フランス語で書かれているのでさっぱりわからなかったけれど…
マリナは銀のクリップで留められた書類を手に取った。

その時。
激しい雷鳴が轟いた。

マリナがその書類をぎゅっと握りしめた瞬間のことだった。

シャルルとミシェルが館に戻った時間は随分遅かった。
だが、日中の荒天は嘘のように静かになり、空は雲が切れて夜空が見えるくらいまでに回復していた。
雨も上がり、月が昨日と同じように顔を出していた。

「…もう、寝ているかな」
「さぁ…案外夜更かしだからな」
彼らは主語がなくても、話が通じた。
館に独りで留守番をさせているマリナのことを話していた。
だが、館内に入ると、彼らはぷっつりと話をすることを止めた。

館は静かだった。ひっそりと静まり返っていた。
彼らは同時にタイを緩めて一息つく。
「‥‥静かだな」
ミシェルが呟いた。

彼女が出迎えてくれると思っては居なかった。
けれども、彼女がいないとどこか心許ない。
いないとわかっている空間に目を泳がせてしまう。

「少し休む」
シャルルがそう言った。
「明日の朝食は予定通りの時間だ」
彼は少しばかり口数が多かった。
朝食が予定通りなのは当たり前のことで、ミシェルにわざわざそう告げるということは、彼も一緒に朝食のテーブルにつけ、というシャルルの申し出なのだ。
ーーー随分、機嫌が良いんだな
ミシェルが苦笑する。
「オレも部屋で休むことにするよ‥‥睡眠不足の上に会議疲れだ。なぜ、一同が一つの場所に集まって、あんなに長時間議論しなければ解決できないのか理解できないよ」
そう言って、彼らは散会することにした。
「ーーー待て」
シャルルがミシェルを呼び止めた。
「ボルドーを持って行け…好きなものを飲め」
「お言葉に甘えて」ミシェルがそう言って薄く笑った。
互いに祝杯を交わすつもりはないけれど、祝杯を挙げることを許可されたらしい。

それはシャルルにのみもたらされた祝杯ではないのに…
彼が祝えというのであれば、遠慮をするつもりはなかった。

シャルルはミシェルが部屋を出て行くのを見届けてから、タイを完全に外した。
今日は…移動距離も長かったが、一日息が詰まった。
なぜ、顔をつきあわせて会議をしなければならないのか…
ミシェルの言葉にこのときばかりは賛同する。

そして静かに階段を上り、執務室に戻ったシャルルは、照明を点ける。
マリナの部屋の前を通り過ぎたが、物音がしなかった。
きっともう休んでいるに違いない。
これからまだ少しするべき事があったので、そのまま就寝することもなさそうだった。
部屋に入り、シャルルは一瞬眉をひそめた。
‥‥マリナ、入室したな
うろうろするなと言ったのに、彼女は部屋に入ったらしい。
微妙に、革張りのソファの位置が違っていた。
特段、見られて困るものは置いていかなかった。
困らなくはないが、言いつけを守らないマリナにどう注意しようか迷い、そして少し笑った。
…これではまるで聞くところによる『世間一般の家族』のようではないか。

机の上の書類が僅かに位置がずれている。
彼女には興味も影響も関係もない書類ばかりのはずだった。
だがしかし、最も一番上の書類は、彼の用意した書類ではなかった。

‥‥ミシェル。やったな。

シャルルが呟く。

彼は銀のクリップで留められたその書類を、青灰色の瞳でじっと見つめた。
これは先ほどの会議で使用した書類だった。
会議中、たったふたりだけ、書類を持っていない者が居た。
ひとりはシャルル・ドゥ・アルディ。書類の作成者だ。
そして、もうひとりはミシェル・ドゥ･アルディだった。
彼は始終腕を組んで、面白そうに微笑みながら、最も末席で一部始終を聞いていた。
一度目を通した内容は忘れることが出来ないのは…ミシェル・ドゥ･アルディもシャルル同様だった。

アルディ家親族会議はしめやかに行われた。
シャルルの用意した書類は、直前まで修正に修正を重ねられた。
書類ができあがったのは、今朝のことである。
その書類はここにあり、誰かが触れた形跡があった。

タイトルは‥‥「マリナ・イケダについての報告書」

彼女が、アルディ家にどれだけ必要な遺伝的要素を持ち合わせているのかの考察レポートだった。
シャルル自らが彼女の遺伝配列を分析し、事細かに客観的なレポートを書き上げた。
それがようやく承認されて…彼女は広義ではあるが、当主であるシャルル・ドゥ・アルディとの婚姻資格を付与された。
「広義」と言ったのは、一族の長たるシャルルとの婚姻ではなく、一族の最も優秀な遺伝子と交配することを許されたに過ぎない。
つまり、現在は最も知能指数の高いミシェルも候補者のひとりなのである。
彼女の気質を受け継ぐことにより、長らく一族の隠れた悩みとされた躁鬱気質や分裂気質が解消されるのであれば…ミシェルを捨て駒にしても問題がない、と本人の目の前で親族達は口を揃えた。

このレポートをマリナが理解したとは思えない。
だが自分の名前が書いてあり、本日の日付が入っている文書を目にしたら、うすうすでも察しない方がおかしかった。マリナ・イケダの勘の良さも、彼は本日、利害得失の一点として述べたばかりだった。

ーーーこれをシャルルが部屋を出た後に、こっそりミシェルが置いたことも…彼は瞬時に理解した。

…明日は荒れるな。

シャルルは薄い唇からため息を漏らした。
天候のことではなく、マリナの機嫌のことを予想した。
彼は内線電話の受話器を持ち上げて、マリナに用意するデザートを多めに盛るように指示した。

雨上がりの海辺には出てはいけない

そう教えられたことがあったが、彼女は月夜の海辺を独りで歩いていた。
夜になると豪雨も雷もおさまり、あっという間に素晴らしい月夜になった。
雲がたなびいていて、昨日と違う風情の月夜の海辺に、マリナは誘われるように出てきた。
もう、大分夜遅かった。
けれども、神経が過敏になっていて、どうにもこうにも眠ることなどできそうもなかった。

まだ、二人は帰ってこなかった。

彼女が執務室の書類を手にしたのは、果たして偶然だったのだろうか。
何が書いてあるのかはわからなかったけれど、「Marina　IKEDA」と書かれた文字と‥今日の日付から、今日の彼らの「仕事」に関係するのだと察しがついた。
しかも、あれは故意に置かれたものであることも何となく推測できた。
もし、マリナの目に触れさせたいのであれば、シャルルはもう少し違ったやり方をするであろう。あれを置いたのはミシェルに違いなかった。

天才は‥考えていることが理解できない。

彼女が書類を元に戻しても、シャルルは身に覚えのない書類が置かれていることに気がつくだろうし、ミシェルはマリナが手に取ったことを何らかの方法で確認するだろう。

「言いたいことがあれば、直接言えば良いのに」
彼女は少しだけ憤慨していた。

言わなくてもわかる、というのは彼女には通用しない。
言わなければ伝わらない。

言葉では伝わらないこともあるとわかっているから…彼女は絵を描き続ける。
けれども彼らは伝わらないことは諦めてしまっているのだと思った。

伝わらなくても良いから、伝えたいという気持ちを相手に訴えなければお互いに距離を縮めることはできないはずだ。
彼女はそう考えていた。

シャルルの前では発言を遠慮するミシェルは哀しかった。
当主の仕事を黙々とこなし、自分の時間などはとうに捨ててしまったかのようなシャルルは苦しかった。

不器用な、アルディ家の薔薇たちに切ない気持ちを感じる。

結局、この旅は…何も変化させることができなかったのだろうか。

彼女は月を見上げた。

今日は雲が押し流されて、シャルルとミシェルの髪の色のように輝いていた。

自分は非力だ。
彼らに何ももたらすことができない。
この一ヶ月のパリでの滞在で嫌と言うほどよくわかった。
少しだけ、彼女は意気消沈していた。

シャルルとミシェルの距離はなかなか・・　縮まらない。
そして、マリナとの距離も縮まらなかった。

水分を含んだ砂が、昨日より重く感じる。
波はまだ荒かった。白波が立ち、雨上がりの波が落ち着かない海には出てはいけないという理由がよくわかった。
ここは入り江なので、高波に気を付ける心配はなかったが。
それでも…この海は彼らに似ていると思った。
穏やかな天気の元でも、まだ荒れている波。
静かな月の晄の下でも、高速で動く雲。
ーーー彼らに良く似ていた。

穏やかな表情の下で、彼らはいつも緊迫していた。

同じ顔の同じ遺伝子を持つ者同士なのに。同じ父と母から生まれ落ちたのに。
彼らは、常に…相手を意識して、そして「自分」を時々忘れてしまう。

自分は無力だ。

風が少しだけ冷たく感じた。

そろそろ戻る頃合いかもしれない。

彼女は、腕をさすりながら…来た道を戻るために、向きを反転した。
自分の足跡が波にさらわれていく様を眺めながら…そして小さく声を漏らした。

前方に、人影が見えたから。

その人物は、彼女の足跡を追うかのように、下を向いて歩いていた。
白金の髪、長身の体躯、優雅な物腰…
彼女は月の晄を浴びるその人物をじっと見つめた。
目の弱い彼女は、コンタクトを入れてもあまり遠くまで見ることが出来ない。
少しだけ目を細める。
だが、彼はそんな彼女に近寄って‥‥そして微笑んだ。
花のような微笑みだった。
美しく、そして彫像のように完璧な美貌で彼女に笑いかけた。

どっち‥‥？

普段はシャルルとミシェルを見分けられるのに。
今日は月の晄のせいなのだろうか。
風に吹かれて乱れた髪をかき上げる人物が、どちらなのか、彼女は見分けられなかった。

「彼」は昨日、マリナと一緒に歩いたどちらにも似ているようで似ていないようで…
マリナは判別出来ず、何度か目を擦った。

今夜の晄は、どうにも不思議な発光色だった。
白に近い金髪が…「彼」の白金の髪が、ひときわ輝いて見えた。

月夜のシャルルと違っているように見える
夕暮れのミシェルとも違っているように見える

彼女は「彼」が近づいてくるのを待たずに歩み寄った。
うっかり違う名前を言ってしまえば、たちどころに目の前の相手を傷つけてしまう。
それくらい…彼らに呼びかけるときには彼女なりに神経を尖らせた。

いつもは、注意を払わなくてもすぐに判別出来た。
それでも迷うときには、彼らが話し出すのを待つ。
シャルルは低いテノールで、ミシェルは深いバリトンだった。

彼女に微笑む様はミシェルそのものだった。
でも、彼女を見るとき少しだけ眩しそうに目を細める仕草はシャルルだった。

「おかえりなさい」
彼女はそう言って距離を縮めながら、目の前の人物に行き会った。
彼は足を止めて、そしてふっと笑う。
「今日はお疲れ様でした」
マリナがそう話しかけると、彼は小さく頷いた。
「雨…大丈夫だった？」
彼女の問いかけに、彼はウィと声を発しないで言った。

ああ、どっちだかわからない…！

マリナは困惑した。

その困惑した顔を、面白そうに眺めながら、彼は声を立てずに笑う。
彼女の心の中を見透かしているような、そんな様子だった。

「もう、私が困っているの、わかっているのでしょ！」
マリナが根負けして言った。肩をすくめるが、彼はそれでも微笑むだけで、何も話そうとしない。

波の音だけが聞こえる。
少し離れた館から漏れる光は淡く、ただただ月の晄が彼と彼女を照らして、海面を輝かせていた。
静かな夜を…ただ波の音だけが横切っていく。

海は騒がしいものだと思っていた。
波音は止むことはない。だから…杜の中のように、音を消してしまうような空間ではないと思った。
けれども。

マリナは目の前の彼を見て、少しだけ息苦しくなる。
彼がマリナを眺めるその視線が…とても切なくそして強い光でもって彼女に何かを訴えかけているから。眼を反らすことの出来ない仰望というものを肌で感じる。

「ずるいわね」
思わず、口から漏らした。
ため息と共に。

物憂げな青灰色の瞳が、少しだけ揺れた。
こんなに胸が苦しくなるような視線で見つめられたことがなかった。
頬が紅潮して…そして、彼女はやっとのことで視線を外すことができる。
軽く左を向いて、少しだけ不機嫌そうにマリナは呟いた。
「困っているの。私、今、困ってる。」
そう言って、彼に助けを求めた。

沈黙が怖かった。
だからどんな言葉でも良かったので、彼女は彼の声が聞きたかった。
それを聞けば、彼女は安心していつもの「ともだち」に戻ることが出来そうな気がした。
この無言の対面は、ともだちの域を…明らかに超えていた。

「意地悪をするのであれば、私は先に戻るわよ」
そう言って、彼女は彼の脇をすり抜けた。
急ぎ足になり、水分を吸った鳴き砂が案外にも足にからみついて歩みを重くさせていたことを失念していた。

「・・・あ」
慌てて彼を通り過ぎようとしたものだから。

マリナは足を取られて、バランスを崩した。
鳴き砂が、大きな摩擦で少しだけ音を出した。

転ぶ！

彼女は無意識に両手を砂面に立てようとして、次の瞬間、手のひらが傷つくことをちらりと考えて、そして慌てて手を縮めた。
細かく鋭い貝殻が飛散する砂面に手をつけば…手を怪我する。
彼女は絵を描く人間で、手を怪我すれば、今、最後の仕上げをしているあのデッサンを今夜中に完成させることが出来なくなる。
それは避けたかった。

不自然な格好で転ぶことになり、顔から落ちることになりそうだと覚悟を決めて目を瞑った。
その瞬間に腹をぐっと押さえられ…
そして強い力で引き上げられた。
それが彼の救助によるものだとわかったときには、彼女は彼の腕の中に居た。
咄嗟に彼が彼女の体を自分の方に引き寄せて転倒を防いだのだとわかった。
「あ、ありがとう・・・」
彼女は少し動揺していた。

自分の視線の流れを認識することができなかった。

地面を見て、次に宙に浮くような感じに襲われ、次の瞬間には…彼の厚い胸が目の前に広がった。今の自分の状況と、一連の画像の流れを認識できない。

マリナが視線をあげると…そこにあまりにも近すぎる青灰色の瞳があって、一瞬息を呑んだ。
ため息が出るほどの甘い眩が彼女に注がれていて、彼女はまたしても全身が硬くなった。
人を見つめる側に居るから、見つめられるのには慣れていない。
その瞳は、月の眩より眩しかった。

ねぇ…あなたはどちらの薔薇なの？

マリナが彼の胸の中で呟いた。

これほど息苦しい緊迫した空気なのに…彼女は自分の胸が高鳴る音と波の音が混じり合うのを聞いた。

自分は本当に、沈黙に弱い人間なのだと思う。
マリナはそう思った。

話をすれば、相手が何を思っているのか何を感じているのか、だいたいのことはわかった。
それは彼女がこれまでに、とてもたくさんの友人と築き上げてきた交友関係から得た経験からくるものだった。

だから、言葉のないこのやり取りはとても…息苦しかった。
悪い意味ではない。なんと言っても相手は見知った相手である。
でも、自分が相手のことを知り抜いているわけではないことを、思い知る。
現に、言葉がなければ、彼女は目の前の彼を判別出来なかった。
こんなこと…今までなかったのに。
彼女は唇を噛んだ。

言葉は重要だけれども、必要不可欠ではない。
言葉で表せないときには、それ以外の手段もある。
彼女はずっとそう思ってきた。

アルディ家の双子を見分けるとき…彼女はいつも少しだけ得意になっていたのかもしれない、と自分の慢心を反省した。
これは、自分への戒めであり、懲罰なのかもしれない。
そう思った。
言葉じゃないと思って居たのに、彼女は言葉を発しない彼を見分けることが出来ず混乱している。
言葉を待っている。

だから目の前の彼は、私を怒っているのかもしれない。

先ほどの気鬱な悩みが、彼女の中で蘇る。
彼の胸の中の息苦しさと相まって、彼女はとても‥どうして良いのかわからない頼りなげな寂しい気持ちになる。

本当は、区別をしないことが区別をしていたのかもしれなかった。
長年の友人であるシャルルと、まだ、親しく言葉を交わすようになって日も浅いミシェルとを「同じ」と彼らに言い切ることが、彼らを酷く傷つけていたのかもしれないと思った。
ミシェルはシャルルではない。
シャルルもミシェルではない。

ひとりの個人として向き合うためには、「平等」はときに「不平等」なのだと悟った。
各々と話をして、それから…彼らのひとりひとりと距離を確かめ合わねばならなかったのに、二人に同じ距離を持とうとしたこと自体が間違いだったのだと気がついた。
だから、彼らは、彼女と一定距離を保ち、彼ら自身も彼女が考えを改めない限り、同じように距離を縮めることはしないのだとわかった。

それでもそれを責めずに…こうして無言で彼女に微笑む「彼」は、彼女の傲慢さを罰するために月が落とした裁きの天使なのかもしれない、と思った。

マリナは…
苦しくなって、彼の腰に手を回した。
彼がぴくり、と少しだけ動く。

「ごめんなさい」
彼女が呻いた。くぐもった声で、彼のあたたかい胸の中で呟く。
「ごめんなさい。私は…私は間違っていたのだと思う。」
彼女は続けた。
「本当は…一緒に来たかったのは私の我が儘だったの。シャルルとミシェルが私と距離を置くことが怖かった。私は…無言が怖い。距離を置かれることが怖い。勝手だけれど、シャルルとミシェルには‥二人の心を近く感じることが出来たら、今度は私が二人の距離を縮める手助けをすることができると思っていた。でも、それは私の子供っぽい浅はかな考えで‥‥私が何もしなくても、二人はもう、わかっていたんだよね。」
「…」
彼はそっとマリナの肩を抱いた。
哀しそうなマリナの独り言が続く。
「ねぇ。シャルルでもミシェルでも…どちらでも良いよ。
　怒っても良いよ。
　呆れても良いよ。
　でも、本当に…本当に、私は近くなりたいの。そして二人には幸せになって欲しい。
　この距離を…埋めることは出来ないのかな。二人は…もっと自分と相手を好きになって、相手を肯定して‥そして少しだけ相手に頼るということが…もう、できないのかな」
そう言いながら、マリナは感極まって涙をこぼした。
本来なら双珠とも呼ばれてもおかしくないアルディ家の名華たちをどうしたら、もっと微笑ませることができるのか…彼女は方法がわからずに途方に暮れた。

この月の眩が、彼女の心を照らしだしたのかもしれない。

しばらくの間、感極まって彼の胸で泣いた。
彼はじっと…愛おしそうに彼女の髪を撫でた。
もう片方の大きな手のひらで、彼女の背中を撫でて宥めた。
愛おしげに見る視線と、月の眩が彼女の頭上から注がれた。

「ねぇ…責めても良いから。怒っても良いから。何か言って。」
マリナが呟いた。

すると、彼は…
ふっと綺麗な微笑みを浮かべて、それまでの静かな仕草を止めて、両の手のひらで、彼女の頬を掴んだ。
そして…精悍な頬を傾けて、彼女の唇にそっと触れた。
マリナが目を見張り、体をこわばらせた。
「‥‥！」
それは重ねるだけのキスだった。
彼の唇も…少しだけ震えていた。マリナの震えなのか、彼の震えなのかわからないくらいお互いに緊張していた。

波の音が聞こえる。
自分の心臓の音が聞こえる。
自分の頬が紅潮して熱くなっているから…彼の、冷たい手のひらの感触がわかる。

ほんの数秒の、短い接吻だった。
触れるだけの挨拶のようなキスに、マリナはしばらく呆然とした。
彼の長い睫がゆっくりと開き‥そして、また、艶やかに笑う。
少しだけ、煙草の香りがした。
どちらが煙草を吸うのか、マリナは知らなかった。

彼女の茶色の瞳から涙が止まり、それが目的だったかのように彼は薄く笑った。
そして、そっと、胸から彼女を離すと、今度は優しく小さな彼女の手のひらを包み、そしてゆっくりと、館に向かって手を繋いで歩き出した。

…彼女は無言で、下を向いていた。
今、何が起こったのかわからなかった。

ただ‥‥

自分と彼の、砂を踏みしめる音が波の音に加わり、自分たちがゆっくりと館に向かって歩き始めているということだけはわかった。

月はさっきよりも随分高くなっていた。

今夜の海岸は、大雨で様々なものが流れ着き、そして流れ行き…何か違う世界の扉を開いたかのようだった。

彼女は幻のような距離を…

どういうわけか、このまま続けば良いのに、と思った。

朝食なのに、デザートが豪勢だった。
しかも、マリナのプレートだけ。

マリナは、給仕する使用人がシャルルに目配せをしたので、それがシャルルのはからいであることを知った。

彼女は陽光の中で同じように気怠げにスープのみを口にするシャルルとミシェルをちらちらと盗み見た。
神経質そうな指でスープスプーンを口に運ぶ彼らは、同じ仕草であってもどこか違った。

ああ、ふたりともどちらがどちらだか、今ははっきりわかるのに。

昨晩の「彼」は。マリナを彼女の居室に面したバルコニーまで送ると、ふいっと館の裏口へと姿を消してしまった。彼女が呼び止めるのも聞かずに。
夜も更けた時間だったので、どちらの部屋も訪れることができず、彼女は…彼が一体どちらだったのか、結局確かめることが出来なかった。

ただ、煙草の香りと…彼の唇の感触と、手のひらが彼女の頬を包んだ温度だけが、彼女に残された。

ーーーわからない。

これほど眺めても、昨晩の「彼」がどちらなのかわからなかった。

朝食のテーブルを3人で囲むのは初めてだった。
朝の弱いシャルルとミシェルにはこの時間の食事は、とても珍しいことだった。
マリナにあわせているのだと思うと、少しだけくすぐったい気持ちになる。
「昨日は…仕事はうまくいった？」
彼女の問いにはシャルルが答えた。内心、彼女はどこまで知っているのかと思ったが、彼はそれをおくびにも出さないで、涼しい顔で答えた。
「うまくいったよ。難しい案件だったけれどもね。無事、承認だ。」
「そう…今日の帰り道は明るく帰れるわね」
「そうだね」
シャルルが微笑む。
ミシェルは無表情に濃いめの紅茶を口に運ぶ様子を見ながら、今度は彼女はミシェルに声をかけた。
「今日は疲れているみたいだけれど‥‥車を運転できるの？」
「いや、代理運転を頼むことにした。少し疲れているので…シャルルの車に同乗させてもらっても良いかな」
その申し出に、シャルルがぴくりと、眉を上げた。聞いていなかったらしい。
ミシェルが可笑しそうに笑った。
「…良いじゃないか。3人の方が、帰り道は楽しくおしゃべりできそうだ。」
「構わないが」
明らかに迷惑そうに言うシャルルの言葉に、それはどうも、とミシェルが儀礼的に言った。

「さぁ…ここでの用件は終わった。そろそろ出発の準備をしてくれ」
館の主の声で、ミシェルとマリナは立ち上がった。
「結局、あまり‥のんびりできなかったわね。」
「だからバカンスではないと言っただろう？」
シャルルが少し呆れたように言う。
「また‥次の季節に来れば良いだろう。今度はバカンスで。少し長めに」
シャルルが呟いた。
マリナが、そうね、と言ったので、シャルルは眩しそうに彼女を見つめた。
ーーー次の季節。
「次」を期待しても良い言葉をマリナが言った。
次は…君の寝室は、マスタールームのベッドだよ。
彼は心の中で呟いた。

「代理運転・・・って誰を頼んだの？ここの館の人では、戻ってくるとき大変でしょう」
マリナがふと、気がついて言った。
ミシェルは白金の髪をかき上げて、ああ、と低い声で答えた。
少しばかり気怠げだった。
ふうん、と意味深くマリナが頷いた。

「…ジルが来ると言っていた。彼女も昨日の会議に出席していたから。この近くに宿泊している」
「おい、ジルを私用で使うな」
シャルルが明らかに不愉快だと抗議した。
「我がいとこ殿が自らこちらに来たいと連絡があったんだよ」
ミシェルが切り返した。

ミシェルとジルが連絡を取り合うとは思えなかった。
昨日の会議でも‥遠く離れた場所に座っていたのに。
シャルルは全く知らなかった事実に舌打ちする。
反対に、マリナはジルの名前が出て上機嫌だった。
「ジルもここに泊まれば良かったのに」
彼女はそう残念そうに言った。

ああ、マリナ。
ここは…アルディ家の直系家族だけが過ごす、プライベートビーチなんだ。
だから…当主とその家族しか過ごすことのできない館なんだよ…
シャルルが呟く。
彼女はシャルルのそんなつぶやきに全く気がつかず、ジルの到着を心待ちにすると言って、自分の居室に荷物をまとめに行ってしまった。
彼女が出て行くのを見計らって…シャルルはミシェルを軽く睨む。
「…余計なことはするな」
「余計？」
ミシェルが可笑しそうに言う。
「シャルル。オレには余計も余分も余剰もありえない言葉だとわかっていて…敢えてそう言うのか？」
「敢えて言うんだ」
ミシェルの余裕が苛立ちを誘う。
昨日の親族会議の結果は、シャルルには完全に満足のいく結果ではなかった。
マリナを手に入れるために…親族を納得させる準備もミシェルはせせら笑う。
そして、何もしていない、ミシェルは彼女を得る権利を、シャルル同様に手に入れてしまった。
いや、ミシェルのことだから、根回しをしたのだろう。
彼が「マリナが心配だから同伴する」と言い出した時に、同行を反対するべきだった。
でも他でもないマリナが一緒に行こうと言えば…シャルルは反対できなかった。
それをミシェルが見越していたとしたら…
シャルルは唇を噛んだ。

今回は、オレの負けでも良い。
でも。

彼女を得るのはオレだ。

シャルル・ドゥ・アルディのファム・ファタルは‥唯一、マリナ・イケダであり、彼女との婚姻以外は予定していない。
その時。
マリナが顔を出した。
「ジルが来たみたい」
彼女はそう言った。
あどけない顔をひょこっと出して、マリナは嬉しそうに言う。

「荷物はまとめたのか」
「それほど多くはない。旅というものでもなかったし。荷物は他に積んである」
最後の言葉が理解できなかったので、シャルルは説明を求めようとした。
ミシェルは、腕を組んで考え事をしている。

「じゃ、私は行くわね」
その言葉に、シャルルとミシェルは同じように顔を上げた。
「マリナ？オレ達の車はまだ準備できてないが…」
訝しげにシャルルがそう言うと、彼女は双子をちらりと見て笑った。
「ジルに同乗します。あのオープンカー、良いわね。ミシェル、良い趣味してるわ。」
マリナが笑った。
「この後、今日からしばらくジルとスパに行ってくるわ！やっぱり女同士でゆっくり旅も良いわね・・・その間、ミシェルの車を借りるわ。ああ、シャルル、ジルも借りるわね！じゃ！
良い旅でした！」
マリナがそう言うと、肩に画材道具を詰め込んだ鞄を提げて、そのままダイニングを出て行く。

‥‥暫くの間、二人は、唖然呆然として、マリナの出て行った扉を眺めていた。

「…なんだ？あれ」
「ミシェル。おまえは聞いてなかったのか」
「一一聞いてない。ジルが代理で来るとしか‥‥」
そこまで言うと彼らはどちらからともなく、くすくすと笑い出した。
その笑いはしばらく続いた。

何てことはない。
マリナ・イケダにしてやられたのだ。

彼らの不在時に、マリナはジルと連絡を取ったのだ。
そして…
シャルルとミシェルに一緒に帰れと言うために、ジルを呼び出してミシェルの車を取り上げてしまった。
ミシェルはシャルルとマリナを同乗させるのが嫌で、3人で帰ろうと言ったのに、マリナはシャルルとミシェルと2人で帰れと言う。

要するに‥オレ達の距離を詰めるための旅にしたかったわけだね。

ああ、あの小さな東洋人女性は…本当に予測不能だ。

お互いが同じ事を考えた。そして同じ事を考えていることが手に取るようにわかる。

しばらく…二人で忍び笑いをしていると、そこにひょっこりマリナが現れて、笑いを止めた。

「じゃ！私、本当に行くわね。それから…」
旅のお礼だと言って、帰りがけに車に置き土産をしたと言った。

そして…彼女は「彼」に向かって、「忘れ物」と言って、小さな物体を放り投げた。
「忘れ物よ…バルコニーに落ちていたわ」
「彼」はそれを受け取った。彼女の温もりがまだ残っていた。
「彼」はそっと‥ライターをなぞった。
「彼」のイニシャルが彫られたライターを握りしめる。
もう一人「彼」でない彼が、その様子をじっと見ていたことに、マリナは気がついていただろうか。
「喫煙はほどほどにね」
マリナはそう言って茶色の瞳を瞬かせた。

彼女は「じゃ、しばらく帰りません」と宣言して出て行った。
ガレージの向こうでエンジン音が大きく鳴り、快晴の空の下で、マリナとジルがミシェルの車に乗って楽しそうに声を出しながら出発する様子がだんだん遠くなって消えていく。

残された男達は…しばらく無言でいた。
「…帰るか」
シャルルが呟く。移送手段はもう1台の車しかなかったので、やむを得ない。
きっと、車内では無言で煙草を吸い、そして仮眠を取る間に…到着するだろう。
到着後は、彼女の帰りをジルに催促し…それでも帰ってこない彼女を待ちながら、また毎日を過ごすのだろうと思った。

ミシェルも…
もっと頻繁にアルディ家に足を運ぶことになるだろう。
彼の愛車が獲られてしまったわけだから。これを理由にアルディ邸に訪れ‥マリナはそれを口実に「一緒に食事をしよう。今度は、みんなで」と言うに違いない。
そして彼女の言葉には、彼らは逆らえなかった。

マリナがアルディ家の家族になることは承認された。
しかし、誰の配偶者になるのかは…まだこの先にならないとわからなかった。
それでも、互いに譲らないと心に決めていた。
これは…始まりに過ぎない。
勝負は、これからだ。
双子は自分と同じ顔の相手を少しだけ睨んだ。

そんな見つめ合う彼らをモデルに…帰りの車の中に置かれた、マリナの完成されたデッサンを見た時、二人はどう思うのだろうか。

マリナはジルの長い金髪がなびく様を助手席から眺めながら、良く似た面立ちの双子のことを思い返していた。

彼女のことを親族会議にかけたことはうすうす察していた。
でも、彼女は彼らの思いの通りになるつもりはなかった。
それより前に…もっともっと、彼らのことを知らなければいけないと思った。
あのデッサンは…双子が互いに見つめ合う構図で終わっている。どちらがどちらとわからないくらい似せて描いた。
お互いが「こちら側が自分だ」と主張するようになった時に、改めて修正をしようと思う。
それまでは…
昨晩の「彼」が彼女にしたように。彼女は彼らに無言の問いかけをしようと思う。

「お互いを好きになってお互いを理解しあえるようになって…お互いを肯定できるときに…その時が始まりよ」

彼女はそう告げるつもりだった。
マリナ・イケダは。
オープンカーは日差しが眩しいわね、と言って、これから向かうリゾートのことについて、楽しそうにジルに質問をし始めた。思いの外、ジルは運転が上手で少しだけ荒かった。
マリナはジルが大きくハンドルを切ってカーブを曲がりきる様に、歓声を上げた。

（FIN）

鹵獲_咫尺　前編

■01

立食パーティーといえども、身分の高い「ドゥ」の称号を持つ者は、自分で足を運んで料理を取り分けたりしない。

彼は傲然と言い放って、横を向いた。
「マリナ、のどが渇いた」
とか。
「マリナ、ちょろちょろ動き回って、目立つな」
とか。
低い声で指示をする。
天の声のように、あたしの頭の上から投げかける言葉は短いものだった。
それは天使のような声音であるのにとても冷淡で、シャルルの端然とした立ち姿を見ていなければ、地獄の悪魔使いがあたしを使役しているのだろうと思ってしまうくらいだ。
その落差がシャルルであるという特徴なのかもしれない。
見事な白金の髪を結い上げて、白いうなじを数多居る周囲の人たちに晒しながら、シャルル・ドゥ・アルディはあたしにそう言った。
乱れのない整えられた髪が美しかった。
目立つな、とあたしに厳命したのに、彼は立っているだけで人目を引くのだ。
誰もが驚嘆の眼差しを向ける。
そして、あちらこちらで、さりげなく気品溢れるが最新の流行を取り入れている麗人は、どこの誰だろうかという囁きが聞こえ始めていた。
言葉は理解できなかったが、彼らが投げかける視線で、何となくそのようなことを言っているのだろうなということはわかった。

シャルルは、その視線が多く集まるにつれて、眉を潜めて、一度だけ会場の周囲を見回した。
軽くため息をつくと、優雅に持っていたシャンパングラスをあたしに差しだしたので、「飲んでも良いの？」と尋ねると、彼はあからさまに嫌な顔をした。
「1杯だけだぞ」
シャルルは手を出したあたしに、自分のグラスは持たせなかった。
そのかわりに近くを通りかかった給仕の係員が持ち歩いている銀の丸盆にシャンパンを乗せ置いた。
そして違う色合いのシャンパンが通りかかるのを見ると、彼は今度はふたつ、シャンパンを取り上げた。
それだけの仕草なのに、ため息が出るほど美しい。
祝杯は、新しい杯で。
これが彼の中のマナーであるらしい。
ひとつひとつの仕草が流れるように綺麗で滑らかだった。

係員のお兄さんが立ち止まって、ぼんやりシャルルの顔を眺め回していたので、彼は軽く舌打ちすると、次にあたしの右手首を掴んだ。
掴むと言っても、彼はあたしに過分な力を加えることはしない。
いつも肌に乗るかどうかのような繊細な加減をすることを忘れていない。

この場の雰囲気を愉しむことを諦めたようだった。
シャルル・ドゥ・アルディという人間は、大変に諦めが良いときと悪いときがある。
それが人間というものであるのだけれど、あれだけ紆余曲折があった末にコンクールで最優秀賞を獲得したというのに、彼は作品を眺めに来たのではなく、敵情視察にやってきた。

シャルルは時々、大胆だ。
女装して堂々と会場に正面から乗り込んでくる。
その一方で、彼は必要な情報収集を終えたらしく、ここを去ると言う。
カミーユの家で別れた後、カミーユには会えたのだろうか。
そのほかのいろいろな懸案事項は解決できつつあるのだろうか。
彼の余裕に満ちあふれた態度が気になった。

シャルルの男女性差のない中性的な美しさについて、今更論議するつもりはないけれど、彼はため息が出るほど綺麗だ。
シャルルを綺麗と表現するだけでは言葉が足りないと思う。
けれども、そうとしか言いようがない。
言葉が出なくて、黙ってしまうのだ。

ほら、証拠に、周囲の人達が彼を凝視している。
視線の隅に入っただけなのに、ぎょっとして彼に向き直る。
理由は明白だ。
彼が、美しすぎるのだ。
目立ちすぎるのだ。
■02

「乾杯」
シャルルはそういった視線は、慣れているといった様子だった。
彼は人に囲まれて生きている人なのだと思った。
同時に、少し悲しかった。
本当は堂々と・・・女装なんかしなくったって、彼はここに胸を張って乗り込んで来ても良いはずなのに。
その栄光を自分の力でもぎ取ったのに。
それなのにこうしてシャルル・ドゥ・アルディと名乗ることもできないでいる。
それがとても悔しかった。
彼が軽く持ち上げたシャンパングラスが、あたしの持っているそれとぶつかって、かちんと音を立てた。
「今日はオレの人生で、2番目に素敵な日だ。
1番目はもちろん、君がキスをしてくれた日だよ」」
シャルル・ドゥ・アルディはそう言って、あたしの顔をにやにやして見つめながら、グラスに整った唇をあてた。

「ちょっと、シャルル」
あたしは顔を赤くしながら口ごもった。
「あれは・・・その・・・気の迷いだと説明したでしょ？」
「だから？」
彼は魅惑的な、吸い込まれそうな青灰色の瞳から甘い光を放ち、それを注ぎ込みながらあたしの言葉を促した。
「それはオレが人生最高の日と定める理由にならない？」
「シャルルは狡い。さっきから、質問してばっかりよ」
あたしは横を向いて、彼から少し離れて・・・食べることに専念した。
食べることに夢中になることで、彼の視線を遮断しようとした。
彼はどんどん・・素敵になっていく。
それは困難に打ち勝ち、苦難を乗り越え、そして自分自身が苛まされて押しつぶされそうになる苦しさから乗り越えてきた自信が彼をますます輝かせているのだ。
彼は・・・彼はあたしが居なくても、大丈夫じゃなかろうか。
和矢が言っていたように、「今のシャルルにはマリナが必要だ」と言った言葉を考える暇はなかった。
けれども、その言葉は間違いなのではなかろうか、と思った。
シャルルはあたしが居なくても・・・あなたしなんかが傍に居なくても・・・こうして生々発展する人なのだから。

「おい」
じろり、と彼があたしを睨んで見下ろした。
「今、君は『あたしが居なくても』って思っただろう」
あたしは言い当てられて、どきりとした。
「違うわよ」
「いいや、当たってます、と顔に書いてある」
・・・・あたしはフォークを持った方の手で顔を擦った。
もう片方の手は、一番大きなお皿に伸びていて、大量に持った料理が重くて、片手で支えきれないぐらいだったのに、あたしは、言い当てられて図星です、と自ら主張するかのように、添えていた片方の手を持ち上げてしまったのだ。

「・・・マリナ、皿とオレとフォークを同列にするなよ」
シャルルが呆れてあたしにそう言ったけれど、あたしは小さく笑って誤魔化すしかできなかった。
シャルルから見たあたしは、きっと相当食い意地が張っている生命力に溢れた逞しい人間だと思っているだろう。
でも、あたしから見たら。
シャルルの方が煌めいていた。誰よりも、何よりも。
彼はひとつのことを経験するたびに、１０も１００も何かを得る。
それは普通の人には・・あたしにはとうていできないことだった。
シャルルとあたしを比べても仕方がないし、そうするつもりもない。
けれども、彼があたしを必要だという理由がわからなかった。

でも、これだけは言える。
和矢の手を離して、シャルルと一緒について来たのは、あたし自身の意思なのだということだ。
これは、シャルルがあたしを必要としているから、ではなくて・・・あたしが。

あたしが、シャルルを必要としているのだと・・・・。

あたしはそのときに、気がつかなかった。
あたしはそのときに、知ろうとはしなかった。
あたしはそのときに、考えていなかった。

シャルルにとってのあたし。
あたしにとってのシャルル。
どちらにもとても難しい問いかけが存在することに。

■03

彼は美しい獣のような瞳をするときがある。
知性と理性の申し子のようなシャルル・ドゥ・アルディが・・・時々、自らを抑制できないとでも訴えるかのように。
眺めているだけで溜息が出るほど魅力的であるのに、近くに寄って彼の誇りを穢そうとするようなことがあれば、どんなに慣れた者でも噛みつかれる。
当主の地位を奪還するために、彼はこうして孤独な闘いをすることを決意した。
そしてあたしは彼に追従することを選んだ。
見届けなければならない、とあたしの中で、あたし自身が叫んでいたからだ。
彼と一緒に行って、できることはほとんどない。
どちらかというと、お荷物になる可能性が高い。
けれども、シャルルは・・・自尊心と誇りのために、孤独になることを選んだ。
それはあたしがシャルルと一緒に行くことを選んだことと同じだと思った。
その後に何が待ち受けていたとしても、この瞬間を後悔しない。
その選択を後悔しない。

だから・・・だからだろうか。
彼にうっかりともいって良いほどのキスをしてしまった時。
あたしは自分の気持ちがわからなかった。
だから「気の迷い」と表現するしかなかったのだけれど・・・・
慰めのキスでも励ましのキスでもなかった。
切なくなるほど美しい瞳を見て、そこに吸い込まれるように飛び込んで行ってしまった。
愛の表現かというとそれはよくわからない。
けれども・・・けれども。

あたしは・・・
共感したのだ。
共鳴したのだと思う。

シャルルの孤独な魂に酷く惹かれたのだろうと思う。
自分の信念に従って、突き進む彼と一緒について行きたいと思ったのだ。
そんな彼の姿を見ていたい、と。
見届けたいと思った。
自分を曲げて生きていく自由はいらない、と彼は言う。

人種も国籍も環境も。何もかもが異なったあたしとシャルルがこうして一緒に居る。
これは成り行きではなく、あたしとシャルルが出した結論で・・・
和矢はそれを後押ししてくれた。
行け、と彼は言ってくれた。
それが何を意味するのか・・・結論は出なかった。
でも、シャルルと一緒に居たいという気持ちがあたしを突き動かしたのだ。
連れて行って欲しい。
ついて行きたい。

和矢がモザンビークに行ってしまった時にも、他の人があの国に行ってしまった時にも感じなかったことだった。

・・・誰かを追いかける。

一緒に行きたい。
あたしも行く。

そんな感情があたしを包んで、どうしようもないほどに暴れだし・・そして今、あたしはここに居る。

あたしがどうしたいのか。
誰もがあたしに尋ねるけれど、あたしはあたしの気持ちを、誰かに話したことがあっただろうか。
薫やジルや・・たくさんの人達があたしに尋ねた。
でもあたしは答えなかった。

そういうことをあたしが発言する機会がなかった、というだけが理由かもしれない。
けれども、シャルルはあたしの言葉に・・・時間がない切迫したあの場面で、あたしの言葉を優先して聞いた。

あたしの声を・・・あの時、和矢もシャルルもきちんと耳を傾けてくれた。

和矢はあたしを置いて行ったのに。
シャルルはあたしを連れて行くと言った。
和矢はあたしに行け、と言った。
シャルルはあたしに来い、と言った。
・・・・これは何を意味するのだろうか。

「そろそろ退散する」
シャルルがそう言ったので、あたしは顔を上げて、思わず不平を漏らした。
まだ見つめていたい、という気持ちがあったからだった。
「何だ、まだ食べ足りないのか。・・・諦めろ」
シャルルが青灰色の瞳をこちらに向けて、冷たく言い放った。
あたしは溜息をついた。
シャルルに見惚れていて、まだ見つめていたいから、立ち竦んでいるとは言えなかった。
■04
そんなあたしの態度に、少し苛立ったようだった。
シャルルは手にしていたシャンパングラスを置いて、次にあたしの右手首を掴んで、退場を促した。
「おいで、マリナ」
彼に手首を掴まれて、あたしは声を上げそうになった。
シャルルはとても中性的な顔立ちをしているし、今は女装しているからとても・・・華奢で繊細で嫋やかな印象を与える。
でも、あたしを掴んだその細く長い指先から伝わる力は、まさしく男の人そのものだった。

シャルルと別れ別れになるわけにはいかない。
あたしはそのまま彼に手を引かれて付いていくことにした。手に持っていたフォークを離す暇もなかった。

そう思うのであるならば、よくよく考えてみれば、あたしが彼の手を離さなければ良いだけだ。
シャルルはいつも、自分のことよりあたしのことを優先させるから、いつもあたしの手を離そうとするのは、シャルルの方なのだから。

強烈にそう思ったけれど・・・
強烈に・・・この手を離さないで欲しいとそう思ったけれど・・・

どうして離して欲しくないのか、ということを考える余裕はあたしにはなかった。
これから迎えるだろう、様々な苦難のことを考えると、気鬱になった。

人間の躰は良くできているようで、まったく不便な瞬間がある。
左と右の手は、同時に交互に違うことを行うことができる。
あたしは、彼に手を引かれながら、反対側の手で、持っていたフォークにローストビーフを突き刺しては口に入れて、それがなくなると、通り過ぎて行くワゴンから食べ物を次から次へ口に運んだ。
だって・・そのまま反対側の手に、自分の手を添えてしまいそうになったから、違うことを考えて、違う動作をしなければ・・・あたしはまた、立ち止まって彼の姿に未居てしまうことがわかっていたから。

服より食べ物だと言い聞かせて、あたしは彼のことについて考えることを止めた。
傍に居るだけで強くなれるとシャルルはあたしに言ったけれども。
あたしはそんなに強くない。強くなれない。

どうしてしまったのだろう。
あたしは・・・少し息苦しかった。
口にものを運びながら、急ぎ足で会場を去るために移動しているから、息苦しいのだろうか。

その息苦しさを緩和させるためには、食べるのを止めれば良いと言うことに気がついたが、その時に慌てていて・・・シャルルの着ているドレスに肉汁を飛ばしてしまい、染みをつけてしまった。

あたしの考えは違っていた。

会場を出たときに、あたしの手を引いて、前を歩いていたシャルルが、突然立ち止まったので、あたしは驚いて足を止めた。
シャルルが今にも凍り付きそうな視線で、あたしを見つめなかったら・・・
あたしは言ってしまいそうになったのだ。
「もっと手を繋いでいたい」と。
それは手を携えるという形態ではなかったけれども。
シャルルがあたしの手首を掴んで、足早に会場を去るための誘導でしかなかったけれども。
それでも・・・あたしはしばらく離れていたシャルルと逢えて・・・そして彼が、会場で「オレは行くよ」と言わずに、変わらずにあたしの手を取って「一緒に行こう」と言ってくれたから。
だから、あたしは彼と一緒に居ると足手まといになることは十分に承知していたのに、付いていくことにしたのだ。
そして、今、あたしは気がついていた。

・・・・シャルルはあたしを連れて行くことが当然で、あたしは当然に彼について行くことを受け入れていることに気がついた。

「おい、服にシミをつけたな」
彼が怒気を含んだ声で、あたしに冷たい青灰色の視線を向けたので、あたしは我に返った。
「いいのよ、あたしはちっとも構わないわ」
「オレは構うんだ」
瞬間、彼に睨まれてうっかり軽率な回答をしてしまったことを知った。

他に考え事をしていたからだとシャルルには言えなかった。
あなたのことを考えていたのよ、と言えなかった。
■05

食欲は人間の大事な欲求だと思うけれど、あたしは彼がほとんど食事をしない日があったり、眠ったりすることのない不規則な生活を送っていることがどうにも気になって仕方がなかった。
今は非常時だから仕方がないかもしれない。
シャルルはあたしのことを、食い気だけで色気はないだの、人間じゃないタフさはどこから来るのか、解剖させてくれって言うけれど、そんなあたしを連れて歩くシャルルの方こそ、人間離れしているというものだ。
シャルルはあたしに不自由な思いはさせないって言ったけれど、あたしは自由じゃなかった。それはシャルルを知ることができないという不自由だ。
あたしの無事はシャルルはなんとしてでも確認するのだろう。
でも、あたしにはシャルルは自分の事は離さない。
今も、どういう経緯でここに来たのか・・・後で話すよと言ったけれど、慌ただしく移動している最中で・・・
これほど長い時間一緒に居るのに、あたしはシャルルとたくさん話をしているのに、彼の心の内を聞くゆとりがないことが不満だった。
シャルルは、どうしたいのだろう。
あたしは、シャルルにどこまでも付いていくと言った。

誤魔化そうとしたあたしに、シャルルは青灰色の綺麗な瞳で睨みながら、怒鳴りそうになるのを堪えながらといった様子で、ドレスが高価なものであることを告げた。
彼が値段の話を口にするとは信じがたい驚愕であったので、あたしはちょっと驚いて言った。それが借り物で、相手は大変な苦労をしてそれを調達してきたのだ、と。
シャルルの機嫌を損ねてしまったあたしは、慌てて彼に言った。
「食べる？」
最高に気分を害したシャルルは、背中を向けて歩き出したので、あたしは慌てて彼の背中を追った。
・・・こうして、彼の背中を追いかけて、あたしはどこまでも彼を追いかけるのだろうか。
そしてどこまでもシャルルはあたしを連れて行くのだろうか。
「待って！ね、悪気はなかったのよ。待って」
そう言うと、彼はぴたりと止まって、こちらを向き直った。
まるで、その言葉を待っていたかのようだった。
振り返った時の彼の顔が綺麗で・・・ようやく、シャルルと再会できたのだと感じる瞬間だったのに。
シャルルはあたしに向いて言った。
「オレの代わりにそいつに謝って、納得させてくれるのなら、許す」
「・・・・わかった」
シャルルはあたしがそういう風に言うように、仕向けたのだと思うと、ちょっとあたしは苦笑いをしてしまった。
成り行き上仕方のないことではあったけれど、いつもの皮肉屋のシャルルが戻っていると思い、あたしはほっとした。
どんなに着飾っていても、彼は変わらない。
彼は自分の本質は決して変化しないで、世界で唯一の存在だと言い切った言葉は、本当だった。

でも。
シャルルは、あたしに彼を好きだと言わせることはしない。
そう言わせることは､彼にとっては容易いことなのかもしれないけれど。
ひょっとすると、あたしがそういう雰囲気になったとしても、まったく気がついていないのかもしれないけれど。
そんなあたしの様子に気がついて、シャルルは淡く笑った。
彼の微笑みはいつも綺麗だ。
「そうふくれるなよ」

しかし、彼は誰からそんな高価なドレスを借りてきたのだろうか。
彼はフランスの華と呼ばれて、大変に人気がある人物だ。
こっそり援助してくれそうな人はひとりやふたりではないかもしれない。

けれども、援助には見返りがつきもので・・・・彼が当主復権したあかつきには、というような未来への担保にはウイと言わないのだろうと思った。
となると、彼は何を支払って、これを借りたのだろうか。
そうなると・・・500万分の借り、というものについて酷く気になった。
彼を独り占めしたいと思う者は女の人だけではないはずだ。
あのユカリ・マツモトだって、手を出そうとしたわけだし・・・カミーユに至ってはまさしく愛に近いものがあったような気がする。
今は友情というかもっと違ったものになっているようだけれども。
シャルルの傍に居たいと思う人は、居るのだ。彼はそうではないと言うけれど。
だから・・・だからかもしれない。
彼が傍に居たいという人ではなくて・・
彼が傍に置きたいと思う人がとても少ないのだということを、彼自身がよく知っているのだ。

彼はそのことについては何も言わなかった。
そうなると、これは有償交換ではないことになる。
あたしはおずおずと尋ねた。
「ね、シャルル。その安月給取りって、男の人？」
足早に玄関エントランスに向かうシャルルの足取りが少しだけゆっくりになった。でもそのまま移動しながら、あたしに向かってちょっと笑った。
「慎重184の体重76だ。とても女にはみえないね」
「その人って・・・シャルルに恋していたりとかいうことはないの？」
シャルルは一瞬あたしを見た。
長い白金の睫の下で・・・上品だけれども物憂げな青灰色の瞳が、蠱惑的に光った。
彼がこういう視線をするときはいつも決まっている。
「そうだとしたら、何だい？」
彼は面白そうにそう言った。
あたしに、無言で「妬ける？」と聞いていた。
あたしは顔を赤くした。
そんなことを言おうものなら、シャルルはきっと・・・あたしをずっとからかい続けることだろう。
でも、彼は先ほどの謝罪の約束よりも、もっとストレートにあたしに求めているのだ。
彼の言って欲しい言葉があり、今、ここであたしが言うのを待っている。
あたしは辟易ろいだ。動揺していた。
どうして、先ほどのように、あたしにうっかりでも成り行き上でも言わせるように仕向けないのだろう。
シャルルは狡い、と思った。
彼は賢いけれど、決して狡猾ではない。でも。
あたしさえ気がついていないあたしの何かに気がついているのに・・・シャルルはそれを言わない。

あたしが不自由だと思う理由はそこだった。
シャルルへの気持ちをきちんと考えると。カズヤへの気持ちを整理すると。
あたしは自分にも彼にも言ったのに、それなのに・・・それなのに、一番、自分のことをわかっていないのは、あたし自身なのだ。
■06

会場前から車をひろってあたしとシャルルは乗り込んだ後、目的地に着くまでの間、あたしはずっと黙り込んでいた。
シャルルの答えが気になっていたからだ。
彼が・・・・彼が高価な衣装を借り受ける代わりに支払ったものが何であるのかが気になっていた。
あの答えからすると、相手は男性で・・・
今は非常時だし、手段や方法や道徳を考えている余裕はないのだということはわかっていたけれども。
彼は、目的を達成するためなら、どんなことでもやる、と宣言したから。
その後の、この意味深い行動について、あたしはやっぱり考えざるを得なかった。

恋愛は個人の趣味だから、あたしはシャルルがそれで良いと言うのであれば反対する権利はない。
そして、シャルルは、恋愛そのものさえ、自分の誇りのためには差し出せる覚悟があるのだと思った。
かつて、彼は自分と神と花嫁を瞞すと言って、偽りの結婚をしようとした。
あたしはそれがとても悲しかった。
彼がどこまでも犠牲にして、それを足場にして上り詰める先にあるのは、孤独だけしかないと彼は知っているのに、その路を進んでいこうとしている。
振り返らずに。
後悔しないで自分の選んだ道をまっすぐに進んでいく。
時々、立ち止まって冬眠に耽ってしまうけれど、彼は・・・自分の選んだ路がもたらす結果は、強い信念を持って受け入れている。

だから、あたしは・・・シャルルは自分の意志を曲げて、その衣装を貸してくれた相手に屈することを受け入れたのかも知れないとちょっと考えてしまったのだ。
しかし、彼の様子からすると、それはなさそうだった。
こうしてあたしと普通に話しているシャルルの様子に変化はない。
逆に少し・・・余裕があるような気がした。
こんなに切迫した状況なのに。
でも、それは何となく理解できた。
何しろ、彼はミシェルに勝利したのだから。
彼の受賞を喜んでいるのは、シャルルだけではない。
あたしだって・・・カミーユだってアデリーヌだって嬉しいはずだ。

だから､彼がビジネスライクなやり方で、その豪奢なドレスを調達してきたとは思えなかった。
そうなると・・・考えつく答えはひとつしかない。
シャルルは、その人を好きになったのだろうか。
今の世では、アブノーマルと言われている部類の恋愛に当て嵌められてしまうけれど、シャルルと・・その相手が愛を交わす場面を想像するだけで、赤面し、かっと躰が熱くなる。
あたしはこの衝動というか衝き上げる感情を、何度か体験したことがあった。
カズヤが・・・あたしではない誰かと一晩を一緒に過ごしたと疑った時や。
遠い国の遠き時代の、あたしのよく知る友人に良く似たあの男性が他の女の人と一緒に居ると手紙をもらった時。
あたしはこんな感情を持ったことを思い出していた。

あたしは頸を振った。

それを感じたら・・・あたしはシャルルを応援できなくなる。
独り占めしたいという気持ちや、嫉妬という感情は、この逃避行では不必要だった。
彼が目的を達成するためにあたしはついて行くと言った。
だから・・シャルルの今の様子を見て、決して屈辱的な結果になっているわけではない、と確信して・・・その次のこたえを導き出そうとした。

シャルルが他の人を好きになってもそれはごく当然の気持ちだから。
だから・・・それを応援しようとした。
彼が当主から立場を追われているのに、それでも援助しようとして､安月給なのに便宜を図ってくれる人をないがしろにしてはいけない。
彼は、自分に寄ってくる人間はみんな、何か利益を享受できるかと期待している者ばかりだ、と歎いたことがあった。
せめて、その「彼」は、そうではなく・・・シャルルの純粋な魂に惹かれて、助力しようとしたのだろうと思いたかった。
あたしは、固い決意を棟に、ようやく口を開いてシャルルにたずねてみることにしたのだ。
「ね、その安月給取りってハンサム？」
シャルルは、僅かに、青灰色の瞳を細めてあたしを見た。
その深い双眸は、少し潤んでいるような気がしたのは、あたしの気のせいだろうか。
あたしを見て・・・シャルルは静かに言った。
先ほどの無言の問いと同じように。
彼は、あたしの答えを期待していたのだろうか。
でも、あたしはこたえることができなかった。
彼の言葉が・・・とても印象的だった。
「ああ、最高に」
シャルルは「最高だ」なんて滅多に使わない。
と、いうことは、彼の美的センスに合格している水準であり、そして彼を満足させている程度の人であるということだ。
どういう満足なのかはわからなかったけれども。
■07

あたしはある意味、現実逃避の妄想に浸ることにした。
シャルルと「彼」を題材にした話を幾通りか考えたけれど、ストーリーは二の次で、クライマックスのシーンの構図ばかりが思い浮かばれる。
カミーユの心ない行動のせいで・・・シャルルの背中を見てしまったからだろうか。
彼は天使のように綺麗だった。シミ一つない、滑らかな背中に、彼の産毛が淡く光っていて、どんな精巧な天使の絵の中に描かれている繊毛もこれほど綺麗ではないだろうと思ったほどだった。
まだこの時には、「アブノーマル」というカテゴリに当て込まれていて、とても窮屈な世界だった。恋愛至上というのだろうか。
あたしの作品が売れないのは、恋愛色が強くないからだとか、切なさを感じないとか・・・そういうことを担当者に言われたことがあった。
ちらりと横目でシャルルを見ようと思ったけれど、それすらできないくらい頬が火照っていた。
作品の構想に耽って、ひとりで昂奮しているだけではない「何か」があたしの頬を赤くしていた。
シャルルが他の人を好きになる。
他の誰かが、シャルルを好きになる。
・・・彼を崇拝したり、彼の才能に共感したりした人は知っていたけれど・・・
シャルルがこうやって平然と話をするほどにある程度の近接を赦している人ができたことを、あたしは喜ばなければならないと思った。
そんな人を・・・あたしは数人しか知らない。
彼はそれでも、その親しい人達に全部を見せることはしない。すべてをさらけ出すことが、信頼の証拠だとは思っていないようだった。

そんなことを考えているばかりで、いつものように、シャルルにあれこれ根掘り葉掘り聞き出すことができなかった。
もっと・・・あたしはもっと遠慮のない人間かと自分で思っていたが。

その話の続きをする前に、車はタイヤを大きく軋ませて停車した。
少し前のめりになったので、あたしは自分が間もなく停車すると聞かされていたのに、上の空だったことに気がついた。
車の外から見る景色は、出発時の様相と変わって、閑静な場所が広がっている、ということがすぐにわかった。
目の前に一軒の家が建っている。
白い柵越しに、綺麗に刈り込まれた常緑樹の緑が広がっていた。
そして、その緑色にとても良く似合う淡黄色の壁に赤みがかった焦げ茶色の屋根を乗せた大きな館が聳えていた。
「降りるぞ。・・・ドアを開けろ」
有無を言わさない高慢な物言いに、あたしはいつもなら文句を言うところだったけれど、考えに耽っていたので、そこまで考えることもせず、慌てて躰を起こして、車から飛び降り、ドアをさらに大きく開けた。
ふわり、と緑の香りがする。あの会場での人の多さと様々な匂いとは違う・・・何か懐かしいようなくすぐったくなるような、そんな杜の香りがした。
シャルルはあたしが開けたドアに躰を寄せて、優雅に降りてきた。
本来ならシャルルが乗っている側を開くものだが、と彼は不平を言った。
そして立ち上がると、あたしとシャルルの身長差を痛感する。
彼の青灰色の瞳が、あたしを見下ろして、傲慢な口調で言い放った。
「ごくろう」
あたしはそこで「ようやく」むっとした。
よく考えれば、シャルルは多くの人に仕えられている身分の人だ。だから、ごくろう、などという労いの言葉さえ使用人の人には言わないのかもしれない。
でも、あたしはシャルルのその傲岸不遜の様子に閉口して、次に文句を言ってやろうと思って、シャルルを見上げた。
シャルルとあたしの関係は対等であるはずなのに。
恋はより多く愛した方が負けなのだと言った人が居たけれど、あたしはそうは思わなかった。恋愛には勝ち負けなんてないと思う。恋愛だけじゃない。友情だってそうだ。
だからあたしがシャルルを友達だと思っている以上は・・・シャルルがあたしを友達だと思っている以上は・・・あたしとシャルルは対等なのだ。

ともだち

その言葉を思い浮かべながら、夕暮れの中のシャルルの姿を見て・・・あたしはやはり声を出すことが出来なかった。
白金の髪が風に揺らいでいた。夕暮れ晄の中で、しなやかな躰を仄日に向けて晒しているシャルルは本当に綺麗だった。儚げな美しさというのだろうか。
このまま、消えてしまいそうな・・・・そんな美しさで、手を伸ばせば消えてしまうようなそんな印象だった。

ああ､シャルルはなんて・・・なんて綺麗なのだろう。
「ベルーザ家だ」
シャルルは、白い柵の小さな閂を自分で開けた。
その手つきで、彼がこの場所について初めてではないのだと思った。
そして、その扉を開くと、ゆっくりと玄関までまっすぐに歩いて行く。
その落ち着きぶりは、彼の年齢を考えるととうてい考えられないほどだった。
この家の本当の主のような足取りで、彼は優雅に歩いて行く。

あたしはその後ろ姿について行った。
そして長い小道は少し上り坂になっていて、彼はその路を惑うことなく歩いて渡っている。
・・・・そういえば、彼が名乗った名前は、アンジェリーナ・ドゥ・ベルーザ子爵夫人。と、いうことはここはベルーザ子爵の家で、その人物はこの館の主ということなのだろうか。その割には、シャルルが慣れた足取りで歩いて行くのが気になった。
・・・子爵とシャルルはそこまで懇意なのだろうか。
あたしは少し不安になった。
なぜ、不安になったのかわからないけれど。
何となく・・・誰かに見られているような気がしたからだ。
こんな閑静な館で、誰にも遭遇しないほどの静けさの中で・・・どうしてなのだろう。人の気配を感じる。
でも、安月給取りとシャルルが表現して、500万円の衣装を工面するのも大変だったと聞くと、こんな豪奢な館に住む人が、安月給取りであるわけがない。

わからない。

あれこれと考え込むあたしの前で、彼はやがて足を止めた。
・・・シャルルはやはりこの館を知っているのだ。
来客用の正面玄関ではなく、家人用の玄関を使ったのだ。

来客用の正面玄関ではなく、家人用の玄関を使ったのだ。
シャルルは、古い経年した重厚なドアの前に立つと、腕を上げて細く長い指を伸ばし、ノッカーを２回、叩いた。

鹵獲_咫尺　後編

■08

シャルルの2回目のノックが終わるか終わらないかのうちに、扉が突然開いた。
それまで人の気配なんてしなかったのに、開かれた扉からふっと大きな塊のような影が飛び出してきて、シャルルに突進したので、あたしはその瞬間、シャルルに向かって躰を動かした。
彼がこの逃避行の際にはいつも満身創痍御で、今でも決して万全の体調でないことをわかっていたからだ。
食べ物はほとんど口にしていなかった。
誰がどこで見ているか判らないということもあってのことなのだろうけれども、元々細い食が更に細くなっているのだと思ったのだ。
彼は信念のためになら、餓死も厭わないのだろうか。シャルルだったら遣りかねないので、あたしの差し出したローストビーフに彼が頸を振ったことを思い出した。
ま、先ほどの件は仕方がないとしても。
・・・・さっき、あたしを掴んだ指が、ほんの少し細くなっていることに気がついた。
彼はいくら中性的な容姿をしているからと言っても、シャルルは男の人だ。
女装に違和感の出ない容貌のシャルルだけれど、彼の体格を誤魔化すほどのドレスを調達するのは相当に骨が折れたことだろう。
西洋人の体型は日本人とは違うと思うけが、それでも、彼がかなり痩せたのだと思った。
シャルルは無理をしすぎる。無理して良い結果が得られたとしても、その先にある未来がどうなるかわからないことも承知している。
その先、というものをシャルルは自分自身に関してだけは、思い描いていないかのようで、あたしは時々とても切なくなる。死んでもよい、などと、二度と思って欲しくなかった。二度と口に出して欲しくなかった。
そういう意味で言えば、あたしの存在はシャルルにとって・・・少しは役にたったのだろうか。

案の定、シャルルは少しよろめいて半歩後ろに下がった。
それでも、あの細い踵の沓を履きながらも、彼は地面への転倒を防ぎきった。
あたしはシャルルの背中に居たから・・・彼はあたしを気にして踏みとどまったのだ。
あたしはシャルルの背後に居たから・・・彼を支えようとして腕を伸ばそうとした。

「無事で良かった！心配したんだぞ」
百雷が堕ちたような声がして、驚いて目を見開き、そしてあたしの目の前にあったシャルルの背中に、太い腕が回されたのであたしは驚いて顔を上げた。背はシャルルの胸までしかなく、赤ら顔でたるみがあり、髭の中に顔の部品が埋め込まれているような感じの男性だった。
あたしは声を失ってシャルルを見た。
一体、どういう関係なのかあたしはまるで見当がつかない。
…・そういえば、シャルルの交友関係について、あたしはまったく知らないことに気がついた。
彼はアルディ家の御曹司で、そして小さい時から有名人だったそうだから、たくさんの人が彼を知っているのだろう。
逆に、あたしの方が、シャルルを知る人から見れば「誰？」という不審者なのかもしれない。
確かに・・・確かにあたしとシャルルが共有している時間は累積してもたいした時間ではない。
でも、時間ではないと思っている。シャルルは確かに・・・あたしについておいでと言った。あたしはそれに従うと言った。
時間というものが、誰かと何かを比べる物差しには決してならないことを、シャルルもあたしも知っているから。だから、シャルルはカズヤではなく、あたしを連れて行くと言ったのだろう。
そんな気がした。

「紹介します。マリナ・イケダです」
そう言ったシャルルはそこであたしの方を向いた。
「マリナ、こちらはベルーザ子爵のトーマス・ボイエ氏。日系フランス人だ」
あたしはベルーザ子爵と聞いて低く唸った。
シャルルの相手はこの人なのだろうか。
やっぱり駄目だ、これではとても、許す気になんてなれない。
あたしはそう思った。
そしてそこで自分の思考の矛盾に気がついたのだ。
・・・許す？
ふたりの仲を許す？それはあたしが許可をすることなのだろうか。
恋とは、誰かに許可をもらってするものなのだろうか。
あたしが・・・マリィちゃんがカズヤの思い人だと信じ込んでなお、その気持ちが止められなかったように、シャルルも誰かに遠慮して自己を閉ざしてしまうのは、あたしはとても不本意なことだと思った。
でも・・・唯美主義のシャルルが彼との間を許諾したのは、彼の目的を達成するためだったのかもしれないけれど、それでも・・・そこに一瞬でも愛がなければ、とても悲しいと思った。
シャルルは・・・・自分の目的のためには何もかもを犠牲にするつもりだ。自分の誇りのために、自分の誇りを犠牲にして仕舞いかねないくらいだ。

あたしは子爵を睨んで、たった今、思いついた名案を実行することにした。
「初めまして。あたし、シャルルの恋人です」
驚いて嫉妬すれば良いのに。
あたしの目的はただそれだけだった。
この言葉に、子爵は酷く驚いた様子であたしを見つめた。
それから太い腕を開いて、いっきにあたしを抱き締めたのだった。
彼の二の腕はとても太くて指の太さなどはシャルルの倍くらいありそうだった。
その時にすっぽりと子爵の厚い胸に覆われてしまっていたので、あたしはシャルルの顔を見ることが出来なかったけれど。
・・・シャルルは黙ったままだった。子爵があたしを抱き締めたことによって、シャルルはどちらを怒るのだろうかと思っていた。
子爵か、あたしか。
シャルルがあたしを好きだと言った。でもそれ以上に子爵が好きだったらこれで仲違いをしてくれれば良いのに、と浅はかな考えを持ったあたしは、予想していない結果に目を丸くしているばかりだった。
「マリナ、シャルルをよろしく」
強い力に抱き締められて、あたしは息もできないくらい苦しくなったけれど、シャルルは少しも助けてくれなかった。
「トーマスは、感激屋なんだ」
彼は苦笑してそう言ったが、あたしは乱れた息と、混乱した思考を整理するので懸命だった。

そして、シャルルの視力と判断力が鈍っていると言いながら、あたしは身構えた。
彼に叱咤されるかもしれないと思ったからだ。

もしシャルルが彼に恋していて・・子爵のことを素晴らしい人だと認識していた場合、彼のどこがハンサムじゃないと言うんだ、なぜオレの恋人だなんて言うんだ、とシャルルが激昂するかもしれないと思った。
あたしなら、そう思うからだ。
そして愛憎というものは表裏一体で、愛を排すれば憎しみが残るけれど、憎しみを排すれば愛が残ることをシャルルが知っているから・・・だから、そんな低俗的な質問をしないでくれ、とシャルルは言うのかもしれないと思っていた。
つまり、彼はどんな容姿の人でも、その人の美点を認めればきちんと認めてあげられる人なのだということを、あたしは知っていた。
彼をよく知る人物から見たら、あたしはシャルルと大変に短い時間しか一緒に居ない人間だ。
でも、それがあたしとシャルルと繋ぐ理由であり、彼は共有時間の短さを気にしていない。
もっと彼を知るためには長い時間が必要かと言ったらそうではない。

初めてかもしれない。
・・・こんな風に強烈な衝動があって・・・シャルルの恋人です、と口走ったのは。
■09

誰かと特別な関係にあると自分の口から発したのは数回だ。
虚偽の言葉であったこともあるし、それが何ともつまらないことのように疎んじた言い方になってしまったこともあった。

誰かの恋人です、と名乗りを上げる言葉を発することが出来る勢いが自分にあったとは正直驚いていた。
でもそれ以上に、相手が驚きますように、嫉妬しますようにと願って発した言葉は・・とても重いと思った。
誰かが不愉快になったり、不機嫌になったり・・不幸になったりするような言葉は発してはいけないのだと思っていた。今でもそう思っている。
けれども、その時のあたしは若かった。
とても、幼かった。

あたしはシャルルに言った。
「シャルル、いったいどこが最高のハンサムなのよ」
彼が恋い故に盲目になっているのだとしたら、あたしの言葉に気を悪くするに違いないと思ったからだ。
あたしは・・・わざと、彼に傷つけるような言葉を言った。
あたしを好きだと言ったシャルルが、次の恋に移ったとしたら、あたしは・・・まったくもってまるっきり見当違いなことをしていることになる。
誰かを傷つけるための言葉を故意に投げるようなあたしを・・シャルルは呆れているのだろうか。
でもシャルルの返事は、聞くことが出来なかった。

その時に、後ろで車の気配がして、その車はこの館の前に止まり、ブレーキの軋む音がしたからだ。
勢いよく走り込んできた黒塗りの車は、閑静な館にそぐわない音を立てて止まった。
バタン、と車の扉が開閉する音がした。そして相手の男の人は、車の後部から回り込んで、反対側のドアを開けた。
フェンスの向こうからは、ひと組の若いカップルが降り立ち、こちらに向かって歩いて来るところだった。
若い男女だった。歩き方からそれがわかる。
あたしは目が弱いので、遠目に目を細めてよくよく観察したが、かなり近寄らないとよくわからなかった。でも、その足取りというか、歩く速度や、肩の揺れ具合を見て・・・なんとなく懐かしい奇聞になった。その人は、かなり長いこと着込んだ革のブルゾンにデニムだった。
女性の方は・・・前をあけた毛皮のコートの下には、肌も露わなシルクのパーティードレスを着ている。色の白さによって、肌の露出が際立っていた。
上着は丈の短いもので、むき出しの腕を毛皮のコートに通していた。
腹部も計算されたように見え隠れしているし、ドレスの下は巻きスカートであったけれどかろうじて腰骨に乗っているような大胆なデザインのものだった。
艶やかな若い恋人同士、という印象だった。
男性は女性の腰に腕をからませていたし、自分に引き寄せて、互いに体温を感じていたいと主張しているのではないのかと思うような密着で、あたしはその様子を半分、口を開けて見入っていた。
あたしの中の恋人同士というものの姿とあまりにも違ったから。
ああして、肌を寄せ合い、互いに気持ちを隠さずにいる姿は、自分にはとうてい当てはめて考えることが出来なかったから。
・・・シャルルとあたしは、あんな風にすることは、ないだろう。
さらに加えて、男性のもう一方の手が持ち上がり、彼女の小さな顎を持ち上げて、歩きながら今にもキスしそうなほどだった。
見つめ合ったまま歩いていられる姿にも感心したが、まだ夕刻だというのに、皆の目の前で濃厚な雰囲気で、お互いだけを見つめ合っている。
・・・とうていあたしには考えられないことだった。

何とも言い難い雰囲気に、目を見開いてあたしが見つめていると、ふたりの姿は大きくなってきた。・・・つまり、どんどんこちらに近寄ってきているのだ。
その時にようやく・・・あたしは夕焼けの中に浮かぶ男性の姿がどうして懐かしいと思ったのかを悟った。
・・野性的な感じのする浅黒い肌に、豹のような精悍な躰に、彫りの深い容貌、黒目がちの瞳・・そして何より、背中の真ん中まで伸びている、アーモンド色の髪を見て、あたしは愕然とした。
これほど長髪でありながら、まったく嫌味なく風になびかせていられる人というのは、たくさんは居ないだろう。
しなやかな、野生の豹を思わせる体つきに、端整な貌・・・・
あたしは掠れた声で、その人物の名前を呼んだ。
「・・・カ・・・ク？」
あたしがおずおずと言うと、その男性はふっと足を止めて、こっちを見た。
息を呑み、信じられないといったように目を見開いていた。とても驚愕していた。
それから掠れた声で・・・あたしの名前を言った。
「マリナ」
あたしはこんなところで再会するなんて思わなかった相手と再会してしまった驚きと、喜びで胸声をあげた。それは低く口ごもったようになって・・・声がほとんど出ない。
「カーク」
あたしが彼の名前をもう一度呼ぶ。
すると彼は軽く頷いて、懐かしい声であたしに話しかけた。
「マリナ、会いたかった」
逢いたい時に逢いたい人と会えない寂しさは知っていた。でも、思わぬところで会いたいと思っていた人と再会するときの喜びも知っていた。
ああ・・・。人の巡り会いというのは、なんて素敵なのだろう。
あたしは嬉しくなってしまった。
緊迫した状況だということを一瞬忘れて・・・彼に駆け寄ろうとした。
でも。

傍らに居たシャルルに、それを遮られてしまった。
「マリナ、中に入るんだ」
彼の声は怒気を含んでいた。
そしてそのままあたしを半ば引き摺り込むように、一度は飛び出そうとした玄関ホールの出口方面から引っ張った。
「・・・何するのよ」
あたしが抗議すると、彼は扉を閉めながらちょっと溜息をついた。
「あと30秒もすれば、あいつも入ってくる。・・・それまではおとなしく待っていろ」
彼の声はもう、平静だった。
でも、なぜ、シャルルが怒っているのか・・あたしは意味がわからなかった。
なぜ、彼が怒っているのか。なぜ、彼があたしが飛び出すのを引き留めたのか。

・・・あたしは、カークをすぐにカークだとわかったのに。
・・・あたしは、シャルルをすぐにシャルルだとわからなかった。

いくら綺麗に変装していたとはいえ、最初にシャルルがわからなかった。
シャルルは、あのたくさんの人混みの中から、あたしを見つけてくれたのに。
それが彼を怒らせた理由なのだとわかった。
わからないように工夫していたとはいえ、あたしは・・・彼が見つめているように彼を見つめていないのかもしれないと思った。
そして、胸が苦しくなった。
そして・・・なぜか、少し嬉しかった。

シャルルが怒っているのは、あの男性を卑下するような言葉を発したあたしに対して怒っているのではないから。
シャルルが怒っているのは・・・あたしに対してだったから。
なぜなのだろう。
なぜ、嬉しいのだろう。
なぜ、彼が怒ると嬉しいのだろう。
・・・いいえ、違う。
彼の憤りが嬉しいのではない。
・・・シャルルがあの男性に盲目的な恋に堕ちていないと知ったからだ。

「目が弱いのに、あいつのことは逆光でもわかるんだな」
彼がそう言ったので、あたしはどういう表情をすれば良いのか、わからなくなった。
シャルルが彼だとわからないほどに・・綺麗だったから、わからなかった。
あたしの知っているシャルルはどんどん変化する。
華奢な女の子のような微笑みをするかと思えば、いきなり知らない男の人になる。そうかと思えば、目も醒めるような美しい麗人となって現れる。

あたしはどうすれば良いの

・・・・見上げれば、シャルルの整った綺麗な横顔があった。
彼は物憂げな瞳で、扉をじっと見つめている。
そういった次には、神経を扉の外に向けているようだった。

・・・この空気が苦しかった。

あたしは嬉しいのか怒るべきなのか、わからなかった。
ただ・・・頬が火照った。
どうしてだろう。どうして息苦しいのだろう。

■10

あたしはいたたまれなくなって、カークが早くこちらに入ってこないかと、今か今かと待ち構えていた。
この気まずい雰囲気にあたしは慣れていなかった。

ところが、30秒とシャルルは言ったのに、3分経過してもいっこうにカークはやって来る気配がない。
何をしているのだろうか。
あまりにも遅くなってしまうと、この気まずい空気が余計に思いものになる。

シャルルの言葉に返答できないまま・・あたしはとうとう待ちきれなくなって、扉に寄り、そっと扉を開けてみた。カークはすぐそこまで来ていて、玄関の白い石を敷き詰めたポーチに佇んでいた。
・・・でもあたしはまた目を見開いた。
すぐ近くで・・・先ほどの妖婉な彼女を抱き締めて、熱い抱擁を交わしていたからだ。
抱擁だけじゃない。熱烈なキスシーンを披露していた。
あたしは口をぽかんと開けて、また立ち尽くすしかなかった。
純情素朴なカークが・・・堂々と人前でキスシーンなんて・・・。
あたしが変わらなかっただけなのだろうか。
あたしが変化することを嫌がったからだろうか。
だから、カズヤは・・あたしを突き放して、自分を見つめ直せと言ったのだろうか。
だから、シャルルは、あたしに恋をさせてみせると言ったのだろうか。

会った時のままではいられないことは、あたし自身が一番よく知っているのに。

「今度逢う時までには、もうちょっと大人になっていてよね」
あたしはそう言ってカークと別れた。
でも、変わらないと思ったから、そう言った。
まじめな彼が、その言葉通りに一生懸命自己啓発に勤しんで、変化してしたったとしたら。
あたしは少し青ざめながら、しばしその婉美妖婉たる景色を眺めていた。
そして気がついた。

身長184で体重76の最高にハンサムな人・・・って・・・・。
カークだ。カークに違いない。
そして安月給であるということも、当てはまる。

・・・・カークとシャルルは恋愛関係なの？

あたしは頭に血が上った。
それなら、目の前で繰り広げられている彼らの熱い接吻は一体どういうことなのだろう。
かっと貌が熱くなった。
ふたりとも良く知っている人物だ。あたしは彼らを良く知っているし、その・・キスまがいの場面にも遭遇している。
ああ・・頭がおかしくなりそう。

シャルルとカークの関係がわからない。
カークとあの美女との関係がわからない。
シャルルと子爵の関係がわからない。

要するに、あたしの知らない人間関係がそこにはあり・・・あたしは彼らを良く知らないということだけがわかった。

そんなこんなで顔色を蒼くしたり赤くしたりしているあたしの前で、扉がゆっくりと開き、ようやくカークと彼女は姿を見せた。
ふわり、と風が入ってきた。
薔薇の香りだった。どこかで・・・薔薇が咲いているのだろうと思った。
これはアルディ家で嗅いだ匂いと同じだった。
そういえば、玄関エントランスに入る前に、植え込みがあった。そこには、何も咲いていない常緑樹が茂っているだけだったけれど・・・どこかで薔薇が咲いているのだろうか。

「ご苦労」
子爵が野太い声で厳しい口調で言うと、カークと彼女は、密着していた距離を一気に開いて、姿勢を正した。
「報告します」
あたしはその様子をまた・・・ただただ茫然と見つめていた。
カークと子爵と、彼女の顔を順番に追っていく。そしてまた逆順に見ていく。でも、その様子はあたしの見間違いなんかではなかった。
カークは革のブルゾンを脱ぎながら説明した。
「ひとり・・・・ここまで車で追ってきました。おそらく、多少疑いも抱いていて、この家を見ておきたかったのだと思います」
カークは青色のダンガリーシャツを来ていて、肩に太い革の渋滞を巻いており、脇の下にはホルスターを提げていた。
・・・彼が警官であるということを知る瞬間でもある。
重そうな拳銃が下がっていた。
あたしの生まれた国では、とうてい・・滅多なことでは目にすることのない物体だ。
しかし、彼はそれを持つことのできる職業に居る。カークは警官だから。
けれども、その重装備で彼女のことを力一杯抱き締めたのだとしたら、彼女はとても苦しかったのだろうと思った。気の毒に、と思いながらも、あたしはそこで自分の胸が苦しくないことに気がついた。

・・・カークが彼女と一緒に居ても、彼女が重装備のカークに抱かれて苦しかったのではなかったのか、と思う。

・・・でも。
シャルルにはそう思わなかった。
シャルルの相手には、あたしは・・・・あたしは何をしたのだろうか。
彼の恋人です、と言って、シャルルと子爵を不仲にさせようとした。

この違いは何なのだろうか。

「君たちふたりの関係を疑っているようなことは？」
子爵の言葉に、カークは首を横に振った。そして隣の彼女をちらりと見た。
「大丈夫です。・・・車の中から様子を見ているのがわかりましたから。疑われないように、恋人同士の自然な成り行きを見守っていただいて・・・お帰り頂きました」
子爵はほっと息をついて、カークの肩を軽く叩いた。
・・・拳銃を提げている者は、肩を叩かせない。
しかし、カークはそれを赦していた。
「なにしろ証拠が一つもない。・・囮捜査でいくしかないから、頑張ってくれ」
その言葉に、彼は頷いた。労いの言葉に、少し嬉しそうに微笑んだ。
「それでは今日は解散だ。各々部屋に引き揚げて良し。・・後は待機ということで、プライベートタイムで結構」
その声で・・・ぱっと周囲にあった人気が散ったのであたしは驚いて、きょろきょろと周囲を見た。
霧散した気配達に、あたしは・・・状況が良く掴めていなかった。
緊張が解けて、周囲にいた人達が・・・・いっせいに表情を崩したからだ。
あたしは事情が飲み込めていない唯一の人間だったらしい。
ただひたすら、ほんの数秒前までにあった静けさと緊迫した空気が変化したことについて行けずに、違う世界に放り込まれてしまったかのように所在なさげに、ただただ周囲を見回すだけだった。

シャルルがそこで笑い声を漏らした。
寄りかかっていた壁から身を起こすと、あたしの名前を呼んだ。
・・・こんな時でもシャルルはあたしを見ていたのだろうか。
あたしの様子を窺っていたのだろうか。
それを感じると・・・また、頬が熱くなった。
■11

「おいで」と言われるとあたしはとても動揺する。
妹や姉に良く言われることだが、あたしは「誰にでも無断で近づくけれど誰にも近寄らせない」のだそうだ。
だから、誰かに・・・おいで、と言われると困惑する。
そうやって・・・誰かに入って良いよ、と言われて入り込んだことがないからかもしれない。
自分が特別だとは思ってはいない。

マリナなら良いよ、と特別扱いを受けたわけではない。
それは、あたしは望まない。

「おいで。・・・説明するから」
シャルルは事情を知っているようだった。でもあたしは知らない。
これまでずっと一緒に居たのに、あたしが知らないことが多すぎる。
あたしは困惑した顔をしたまま立ち竦んでいた。
その館の玄関から二階に上がる階段に近づきながら、シャルルはあたしにそう言った。
そして、肩越しにカークに振り返って「君も来いよ」と言った。
視線が行き交う様は・・・シャルルは溜息の出るくらい美しい若き子爵夫人であり、カークは佳人に魂を奪われる野生の豹そのものだった。
嬉しそうに微笑んで、頷いたカークは、脱いだブルゾンを肩にかけて、ホルスターをさり気ない仕草で隠した。あたしがそれに気にした視線を注いだことを察知したからしい。
・・・確かに見慣れないものだった。
でも、良く知っているはずのカークが・・何度か見たことがあるけれど、知ってはいたけれど。
仕事の表情をすることが、嬉しいようであり困惑するようであり・・・とにかく複雑な気持ちだったのだ。
あたしも、同じように、いろいろな表情をするのだろうか。
シャルルは「いろんなマリナを見てきた」と言った。
あたしは・・・単に表情や感情を変えているだけで、内実はちっとも変化していないのではなかろうか。
あたしの変化は・・・シャルルやカークの変化と違うのではないのだろうか。

そんなことを思っていたが、カークがあたしを見下ろして「行こう、マリナ」と言ったとき。
その笑顔に少しほっとした。
別れたままの素楳さがあったから。

ああ、ちっとも変わっていない。

あたしの知っているカークだ。
あたしだけが取り残されたわけではないのだ。
あたしは・・・あたしは自分の変化に戸惑っていた。
だから変化したかもしれないと思う昔から知るカークの本質が変わっていないことを確認できてほっとした。

人は変化する。それを成長とも言う。
あたしはそれを望んでいない矮小な人間なのだと思った。
出会ってすぐに別れる関係ばかりしか知らない。
あたしは出会って仲良くなったとか、ようやく相手を知ったとか思った瞬間にすぐに別れて離れてしまう環境にあった。
だから、次に逢う時には、その人がそれから変化していませんように、と思ったことがあった。そんなことは決してあり得ないのに。

要するに、カークは変わらずに純朴なままで居て欲しかったし・・・シャルルは変わらずに美しく壮麗でいつもあたしに綺麗な青灰色の瞳を向けている、と思っていたかったのかもしれない。
なんと驕った考え方なのだろう、と思う。
カズヤに別れると言われた時。
人の変化というものは、止められないものであり、それが良い風向きに向かって伸びていくことを願うことが友であるべきなのに、あたしは・・・周囲のみんなにそのままで居て欲しいと強烈に思っていたのだ。
だから、カズヤの言葉を受け入れられなかったのだと思う。

あたしは・・・カークが本当にあたしの知っているカークであるか知りたくてたまらなくなった。両腕を広げて、無防備なカークに抱きついてみた。
確認するなんて、あたしは最低だ。
そう思ったけれど、どうしても確認したくなった。時々押さえられない衝動があたしを動かす。わかっている。これが何なのかということをあたしはわかっている。
・・・・これはあたしが変わっていないことを確認するための儀式なのだ。
相手が・・カークが変化したことを確認したいのではない。
あたしが自分自身を見失わないための行為なのだということを・・・あたしは知っていた。
なぜ、今、その行動を取るのか、理由はひとつしかなかった。

・・・あたし自身が変化しているのだ。

「会いたかったわ、カーク」
彼の近くで囁いた。声振が伝わるくらいに近い場所で。
そうして顔を上げると、彼は、浅黒い額の上まで、あっという間に真っ赤になっていくところだった。耳朶まで赤くなり、瞼も朱に染まっている。
そして、口を開いて叫んだ。
「マリナ、オレで遊ぶな！」
あたしは笑った。
ああ、やっぱり、あたしの知っているカークだ。
そしてそんなカークに接しているあたしは・・・いつものマリナ・イケダなのだ。
親しんだその反応に、あたしは、ほっと安堵に胸をなで下ろしながら思い出していた。
仕事をしている間は、彼は集中力が高まって、どんなことがあっても動揺したり赤面ししたりしないということを。
だから・・・だからだ。
あたしはそこでようやく理解した。
これまでのことに首を縦に振ることが出来た。

・・・あの妖婉な人との抱擁も、みんな・・・仕事ゆえのことなのだろう、と。

あたしは微笑んだ。
嬉しくなって微笑んだ。
カークが誰かに心を奪われているわけではないということが嬉しかったのではない。
あたしが見つめるカークは以前と変化することもなく、あたしと彼との距離もまったく変化していないことに安心したのだ。

そう。あたしは何ら変わったところがない。
■12

その時のことだった。
「マリナ。・・・・さっさと来い」
階段上から、シャルルの声がした。
ぞくり、とするほど冷たい視線だったので、あたしは慌ててそこを駆け上り、彼の後について廊下の奥の部屋に飛び込んだ。
階段を上りきったところではなく・・・少し奥まった、階段から死角にあたる部屋だった。
シャルルに続いてその部屋に入る。
すると・・・明るいけれども決して刺激の強くない色彩の壁紙と、落ち着いた毛足の長い絨毯で囲まれた静かな部屋で、大変に趣味が良かった。
窓にはレースにたっぷりのドレープが、撓わな果実のように重く垂れ下がっている。
シャルルは部屋の中央まで進むと、ひとりがけのソファに歩み寄った。
そして、カークは嵌め殺しのベイウインドウの床に、沈みゆく陽光の日差しを受けながら、窓に凭れて、斜めに腰を下ろした。
・・・ふたりとも、この場所を良く知っているような様子だった。自分がどこに位置すれば最も快適か、知っているようだった。
あたしはシャルルの正面に座ることにした。
彼は少し眉を潜めたが、一番長いソファで・・・彼の隣に座ることはできなかった。
ひとりがけのソファの隣に座ることが何を意味するのか、あたしは知っていた。
その部屋の中で主とする人物に継いだ地位の人物が座る。
つまり、ひとりがけのシャルルの隣に座ると言うことは・・・あたしはシャルルの恋人かそれ以上の存在だと自分で認識していることになる。
だからそれはできなかった。
向かい合わせになろうとも・・・最も距離を置く関係の者が座る位置だとしても・・あたしは彼の正面に座った。
シャルルの背中越しにカークのアーモンド色の髪が見えた。
シャルルはカークに背中を見せることを許可していた。よほど気を許していると思った。

しばらくの間、シャルルは巻き上げた白金の髪の間から、あたしの様子をじっと見つめていたけれど、やがて薄い薔薇色の唇を開いて話を始めた。
先ほどの説明をするから、という言葉を実行しようとしていると思った。

「カミーユ・レールミットの家で別れた後・・・」
シャルルはそう言いながら両腕を肘掛けに乗せた。
その仕草はとても優雅だった。
そして、ソファの背もたれに深く躰を埋めて足を組んで話を続ける。
「一度アルディ家に連れ戻された。・・・そこで、カークと出会った」
シャルルはそこで身を起こし、躰を捻って、気品を感じさせる青灰色の眼差しをカークに向けた。
言葉を促されたカークは口を開いた。
彼が、日系人チームで犯罪捜査をしていること。
半年前からひとつの事件を担当しており、アルディ家がそれに深く関わり合いがありそうだということはわかっていながら、名門で秘密徹底の家柄であるが故に、捜査が少しも進まないで途方に暮れていたこと。
そして、先行きに詰まってしまい、アルディ家を観察するために、毎日のように訪問していたところ、複数人に取り囲まれた物々しい様子のシャルルを見かけたことを教えてくれた。

中庭越しに、お互いの姿を見つけたシャルルとカークは、その瞬間に「これは助け合えそうだ」と思ったらしい。
笑みを含んだシャルルの表情はとても美しかった。
「まさしく、状況が生んだ友情というわけだ。・・・お互いに、あれほど切迫していなければ協力しようとはとても思わなかっただろう」
そうだよな、と言ったシャルルの言葉にあたしは深くうなずいてしまった。
これまでの様々な出来事から、彼らはとても相性が良いとは思えなかったからだ。

まあね、と言ってカークが髪を掻き上げた。
「オレはアルディ家から一度出るふりをして、こっそり邸内に潜んだ。・・・その夜のうちにシャルルを助け出して、自分のアパートに匿ったというのが、事の顛末」
短い説明だったが、その間のいろいろなことを二人は割愛していると思った。
夜まであの厳しい監視の邸内に潜んでいることは大変な労苦だろうし、夜の時間を待っていたら、シャルルは移動してしまっていたかもしれないから、これは僥倖と言わざるを得ない絶好の機会だったわけだ。
彼らはそれを逃さず・・・互いの利益のために目線を交わしただけでそれを実行した。
なんていう人達なのだろう。
あたしは半ば呆れて半ば放心して、彼らの顔を交互に見つめていた。
・・・窓辺に座るカークも、ソファに沈むシャルルも、とても綺麗だった。そして・・彼らはあたしの知らない絆を築き上げていた。
言葉に詰まる。
シャルルは、あたしがいなくても、ちゃんとやっていける。
彼を支えてくれる人が居る。
それなのに、それでも、彼があたしを傍に置く理由を、あたしはきちんと考えないといけないのだと思った。
「・・・いけない」
義務感や強制力を伴う考え方は良くないと思っている。
けれどもあたしは、考えなければならない時に、きちんと考えていなかったのではなかろうか、と思った。
いつも、そうだ。
過ぎてから気がつく。
去ってから気がつく。
失ってから、ことの重大さを知る。

シャルルがちょっと肩をすくめて、辛辣に言った。
「素晴らしい部屋だったよ。ベッドは岩石だったし、ソファは柔らかくて躰が軋む。カーテンの色は、一番精神が不安定になる鮮やかな黄色で・・おまけに一重だ。日光を遮る役割さえ放棄している物体を窓に提げて居るのは、何のまじないなのだろう。
・・・極めつけのアトラクションは、シャワーが故障していて、湯が出ないことだ」

あたしはカークが気の毒になってしまった。
おそらく、この何十倍何百倍もの侃諤でもってシャルルはカークに言い募ったのだろう。それを煩わしいと思いつつも、懸命に改善しようと努力するカークの姿が目に浮かぶようだった。
思わず笑みがこぼれる。
彼らふたりでは、犯罪を追求する前に、価値観の相違で一度は築いた信頼関係はあっというまに「趣味」という名の下に崩壊してしま

うのだろう。
それがなければ・・・犯罪追求には良い組み合わせだと思うのだが。
一緒に住むようになったのなら、きっと・・・最悪なのだろう。
カークのおおらかさを理解できるあたしとしては、カークがとても可哀想になった。
だって、価値観が違いすぎる。

・・・そこであたしはふと、思った。
シャルルとカークの価値観が各々違うなら、カークの鷹揚さを自分と似ていると認識しているあたしは、シャルルと決定的に、価値観が違うことになる。
シャルルは価値観の違うあたしをなぜ、傍に置くのか。
生きている世界も、人種も、環境も、何もかもが違うあたしを・・・どうしてシャルルは傍に置くのだろう。
逃避行は楽ではない。
しかも、あたしは女で、シャルルは女神のように美しいけれども男性だ。
きょうだいではないのに・・・あたしはジルのようにシャルルの様々なことを理解しているわけではない。
いろんなことがあたし達は違っている。
それなのに、彼はあたしに来い、と言った。
いえ、あたしが行きたいと言った。

あたしは・・・何か、ちゃんと答えを出さなければならないことを放棄していないだろか。
生理現象だって違う。彼の追っている精神的負担だって全部を共有することができない。
それなのに、彼はあたしにおいで、と言った。これが何を意味するのか・・・あたしはきちんと向き合って考えたのだろうか。
今、シャルルと向き合って座っているように。
■13

カークはあたしに説明してくれた。
つい先ほどまで・・一緒に居た人と熱い抱擁を交わししていた同一人とは思えなかった。
部屋に射し込んでくる柔らかな光に目を細めて、彼は言った。
「シャルルが、あんなところでは一晩だって眠れないと抗議したものだから、急遽この家に移った。
・・・ここは・・・亡くなったお父さんの私邸のひとつで、アルディ家の名簿に載っていない館だから、しばらくの間は発覚することもないだろうというシャルルの話でね。
それで、まずは、ここを根城にして捜査に協力してくれるって言うから、オレ達は捜査チームを全員この館に移して・・ここを拠点とすることにした。
その方が便利だからね。
さっき子爵と名乗ったのは、オレ達のグループのチーフで、上長にあたる警部だ。
執事もメイドも庭師もみんな警官。ここでシャルルの助言に遵って、囮捜査しているところ」
あたしが首を傾げていると、カークは補足説明をした。
「捜査官を、容疑者の仲間に見せかけて、接触させて、現行犯逮捕する捜査方法のこと」
「・・・それなら、カークは今、悪人なの？」
あたしが尋ねると、カークはちょっと笑った。
そしてシャルルを見た。
「オレだけではないよ。シャルルもだ。・・・ただし、彼は子爵夫人アンジェリーナってことになっているんだけれどもね・・・周りの目を欺くためには、女装した方が良いって思ってさ。今日は、どうしても何が何でもパーティーに行くときかないから、金を工面して、なんとかドレスを調達してやったところ。
・・・どこに連中の仲間がうろついているかわからないし、子爵夫人があんまり貧しい服装で外出したら、一目で疑われてしまう。もっともシャルルがそれを赦さないだろうけれども」

その言葉に、あたしはいろいろな疑問を持ったけれども。
最も大きな疑問を最初にぶつけることにしてしまったから。
あたしは・・それをとうとう確認することが出来なかった。
再び赤くなったり蒼くなったりする。それについて聞かずには居られなかった。
だって・・・どう考えても、この状況は異常だ。
シャルルが誰かを好きになるのは、普通のことだと思う。
自分の窮地を救ってくれた人物を心から愛するようになるのは、当然の成り行きだろう。・・・それがたとえ、カークであったとしても。
納得できる気持ちが半分だった。
残りは、なぜ、同性同士なのかという、あたしの凝り固まった気持ちからだった。
自分が少女漫画の世界に浸ってしまっているからなのかもしれない。
しかし、シャルルには「普通」が足りないのだと思った。
恋愛に一喜一憂したり、友人同士の他愛のない喧嘩を悔やんだり・・・そんな普通の日常を過ごしてこなかったシャルルに、穏やかで心安らぐ時間を与えたのは、やっぱりカズヤなのだ。
彼を年相応の男の子として扱う人は、本当に少ないのだと思う。
そして今は「年相応の少年」が味わう苦境ではない。
だから・・・？
だからカークに心惹かれるの？

「そうやって、一緒に住んで、仲良く仕事をしているうちに・・ふたりの間に恋が芽生えたの？」

あたしの言葉に、シャルルとカークは顔を見合わせた。それから険しい顔つきになると、ふたりは同時に立ち上がった。
カークはベイウインドウの傍で。シャルルは深く沈んだソファから。
そしてふたりは素早く扉まで歩いて行き、我先に争って、それを開けて・・・無言のまま次々と、廊下に出て行ってしまった。
ものすごい音をたてて扉が閉まり、ドアノブがかちん、と音を立てた時には、あたしひとりが部屋に残されてしまっていた。

・・・あたしは茫然としていた。

シャルルの正面に座って居たソファに座ったまま・・・ぼんやりとひとり残されていた。

あたしの言葉に憤った彼らが部屋を出て行ってしまった。

・・・だったら、恋愛関係じゃないの？

そうだと肯定して赤らめた顔を互いに見合わせる場面を想像していたのに。

ひとり残された部屋で、しばし、あたしは夕焼けの眩が射し込む部屋の中で・・・くすくすと笑い声を漏らしていた。

なんだ、誤解だったのか。

笑いを抑えることができずに、ひとりで、ずっと笑っていた。
息が出来ないくらい声を出して笑う。

・・・ここしばらく、そういう笑いを忘れていた。

なんだ、誤解だったのか。
・・・でも、どうしてあたしは笑っているのだろう。
誤解だったから笑っているのなら、どうして微笑んでいるのだろう。

・・・がっかりするという選択肢もあったはずだ。

最初に思い込んでいた結果のとおりになっていなかったら、がっかりするものではないのだろうか。

それなのに、あたしは微笑んでいる。

なぜ・・・・？

あたしは自分の口元に手の平をあてた。

それでも笑いが鎮まらない。

・・・・わかっている。

ふたりが、恋人同士ではなかったからだ。

シャルルが子爵ともカークとも恋仲ではないとわかったからだ。

だから・・・だからあたしは微笑んでいる。

・・・・次に、あたしは顔を赤くして、顔を思い切り歪めた。

今の微笑みが、天真爛漫な微笑みではなかったからだ。
安堵の笑みだったからだ。
・・・自分の都合のよい結果になって、安心した笑い声というのは、これほどまでに・・・卑小であるとその時初めてしった。

・・・・あたしは。

あたしは、シャルルが誰にも心を動かされるわけはないと思っている。
あたしは、シャルルがあたしだけを好きでいるに違いないと慢心している。

無条件に愛されることに慣れてしまっていて・・・あたしは、シャルルが誰かを好きにあったら良いのにと言っている傍から、シャルルが誰かを好きになったのかもしれないと思って・・・焦ったのだ。

あたしは、なんて、最低な人間なのだろう。

自分で自分を嘲っているためだけの哄笑なのに。

あたしはその時、自分は誰にも近寄ることが出来るのに、誰も近寄らせない、と言われた言葉を思い出した。

その通りだ。

あたしは・・・こんな惨めで狡くて嫌な面を、誰にも見せたくないのだ。

シャルルはあたしにすべてを見せてくれたのに。
シャルルはあたしのすべてを見てきたよ、とあたしに笑ってくれたのに。

あたしは・・・誰にも自分を見せることが出来ない。

（鹵獲　に続く）

傾聴草子

傾聴：熱心に耳を傾けること
草子：紙を綴じ合わせた形式の書物のこと。または、書き散らかした原稿のこと。

（———それでは始めましょうか。まずは自己紹介をお願いします。長兄の方から順にお願いします。）

赳留：「岩槻赳留（タケル）と申します。長男。大学勤務です。弁護士登録もしています。」
航：「航（ワタル）です。次男です。画廊の経営もしていますが本来はグラフィックを少し。」
惺：「三男の惺（サトル）です。大学生だけどもうすぐ卒業です。」

（みな様、それでは自己紹介に足りません。ご自身で紹介するとそうなってしまうのかな。
それでは、ご自身以外の方の紹介をしてください。お隣の方の紹介が良いでしょうか。『客観的に。でも主観を込めて』
これって「岩槻家の家訓」のひとつだそうですね。それでは次兄の航氏からどうぞ。長めに。これではインタビューになりませんから。）

航：「･･･長男の赳留です。弁護士登録しながら、大学で美学を教えています。論文の発表数が群を抜いて多いので、いつの間に執筆しているのかさえわかりません。社の顧問弁護士ですが、常勤でない理由はこのためです。最近は頻繁に都内に通っているようですが、もう少し実家にも立ち寄って顔を出して欲しいものです。こうして3人で顔を合わせるのも‥久々ですから。」

赳留：「三男の惺は今、大学生です。間もなく卒業して、父の会社への入社が内定しています。親の七光りと言われないように、最初は平社員で修行してもらうことになるでしょう。
彼が一番若いですが、三人の中では最も商才があると感じます。私と年齢差がありますので、贔屓目かもしれませんが。」

惺：「すぐ上の兄の航は、グラフィックデザイナーです。サイトがありますので、是非ご覧ください。内緒のページもありますから‥‥（中断）睨むなよ､航兄。（再開）ええと。——会社のポスターや広告関係、映像に関するすべては航兄が取り扱っています。加えて、画廊を経営しているので、こちらもパンフレットをご希望の方は広報まで。最近、連作の絵画を入手して、画廊の来客数は倍増しているとか。･･･絵付け教室もやっていますので、申込用紙は別途ご連絡ください。
赳留兄は異色の職歴の持ち主と言われていますが、航兄の方が多才ですね。」

（————なるほど。みな様、様々な分野でご活躍されたり将来を期待されているのですね。ところで、三男の惺氏は学生でいらっしゃるのですが、赳留氏、航氏も独身ですね。
今後のご予定も含めて、予定している活動内容を教えてください。）

赳留：「プライベートなことなので･･･（赳留氏、少しだけ微笑む）。今後は学会活動で忙しくなりそうです。半年に一度の学会講演会がありますので、その準備に追われています。
社内では、今のところ安定していますから、今後の維持管理と、方向性の再検討･･･でしょうか。今は、教え子が居ますので、こちらの教育や人材育成をしています。」

航：「予定は‥ありません。（ええ！もったいない！という声に）もったいないですか‥‥
画廊経営は日々忙しくするものでもありませんので、展覧会やイベントなどで幅広く、若い作家さんを発掘していければ良いなと考えています。グラフィックの方は、少しずつ活動を。今度はパリで個展を開きます。それから、社の広報関係では、記念誌を発行するとのことなので、デジタルブックやコンテンツのことを打合せ中です。不動産だけでなく‥今は様々な事業を行っていますのでそれらが集約できるようなものを。」

惺：「結婚したい相手はいます。（一同、どよめく）でもまだ片想いなので。（一同、なぜか安堵とも消沈ともつかないため息）。ウチの3兄弟は、片想い症候群ですからね。
ずっと片想いしかしないから先に進めないんだよ。
——良いじゃないか、本当のことだろ。」

（さ、惺氏。と、言うことはみな様切ない片想い中ということですか？）

惺：「まぁ　そう言うことです。」

赳留：「惺。」

（惺氏、赳留氏の冷たい微笑み攻撃に居竦む。航氏、苦笑。）

航：「兄さん。大人気ないぞ。さぁ　続きをお願いします。インタビューの時間はそう長くないはずですから」

（は、はい。それでは気を取り直して。いえ、話題を戻しましょう。ええと･･･そうそう、こうして3人で並ぶと、赳留氏と惺氏は非常に面立ちが良く似ていますね。航氏は雰囲気が赳留氏と似ています。みな様、ご兄弟仲良いのだなとすぐにわかります。）

赳留：「航は母親に似ていますね。性質は惺の方が母親譲りでしょうか。父と気が合うのは惺のようです。」

（ご母堂様は先般ご逝去されたとか･･･大変にご愁傷様です。）

航：「その節は社葬の際に御世話になりました。」

（そうなると、ますます、ご兄弟とお父上の結束は固くなってきましたか？）

惺：「父が、一番信頼しているのは赳留兄ですよ。意見を求めるときはいつも赳留兄に相談します。航兄は物事を定めてからでないと、動きませんから。でも、兄さんの行動について、父はいつも反対しません。きっとものすごく考えた上の行動だって知っているんだろうな。オレは‥まだ未知数だから観察してるってことでしょう」

航：「年齢が離れていますからね。お互いの良いところを尊重しあえれば良いと思いますよ」

（なるほど。そのご家族の姿勢が、御社の発展を築き上げてきたわけですね）

赳留：「もともと家族経営ですからね。意思疎通は大事だと考えています。ひいては従業員も家族同様ですから。」

（―――ありがとうございます。さて。ここから先はオフレコですので、自由にご発言ください）

航：「（少し訝しげに）え？もう、インタビューは終わりですか？」

（はい、これらのお話しを元に原稿を作成しますので、後ほど確認していただければ。必要な情報は事前に頂戴してますからね。）

惺：「オレ、もうちょっと座談会ちっくになると思ってた。ほら、質問に答えるだけでなくて、いろいろひとつのテーマで話し合うような‥」

（ああ、ここからは座談会ですよ。質問には必ずお答えくださいね。オフレコですから。）

赳留：「‥‥父の言ってた『質問には絶対に答えるように』というあれ、ですか？」

（もちろんです。必ずお答えください。ノーコメントは不可です）

惺：「やるなぁ、親父。遊び好きの親父のことだから、質問内容とか指定してきたな」

（さすがは惺氏。お見通しですね。お父上から、リストを渡されております。わたしが読み上げますので、こちらを即答してください。ああ、すでに座談会ではないですね。
しかし岩槻家の家訓には『やると宣言したことはやり遂げる』とあるではありませんか。）

赳留：「・・・・」

航：「・・・」
惺：「はいはい、良いよ。何でも聞いて（赳留、航、惺を睨む。惺、笑って『だって仕方がないだろ』と答える）」

（それでは、行きますよ！）

恋愛傾聴草子でいきましょう！

――――――――――――――――――――――――――――――――

（なぜ結婚しないの？）

赳留；「まだそのときではないから」
航：「まだそこまで進展してないから」
惺：「片想いで相手には好きな人がいるから。」

（片想い中？それは現在進行形の恋愛ですか？）
赳留：「そうと言えばそう。そうでないと言えばそうでない。」
航：「こちらの一方的な片想い。」
惺：「現在進行形の片想い。でもいつかは振り向かせる予定。」

（その人以外には考えられないの？）
赳留：「ありえない」
航：「考えない」
惺：「考えたらそれはその瞬間に恋ではなく打算になる。赳留兄さんの言葉だね」

（お互いに相手を紹介したことは？または相手を知っている？）
赳留：「二人とも、知っています。でも言わないのがルール。」
航：「惺の相手は知っています。口に出すことではないから言わない。兄さんは･･･うすうす」
惺：「航兄の相手は知っています。赳留兄はわからん。秘密主義だから。」

（応援したりしないの？相談は？）
赳留：「悩みは他人の意見で解決できない」
航：「応援･･複雑ですね。自分のことは干渉して欲しくないので相談しません」
惺：「航兄に応援してもらうくらいなら･･･相手を泣かせてでも攫っていった方がマシだね」

（そうすると相手がいる方に片想いなのですか？）
赳留：「一番でなければならない理由はない」
航：「まだそのときでないし、彼女を傷つけたり、関係が拗れたりするのは良い方策でない」
惺：「熱烈に、ね。」

（素敵な方々に想われている方はどんな方なのでしょう。おひとりずつこっそりで良いので教えてください）
赳留：「もうずっと長いこと会っていなかった人。」
航：「近くに居るようで、遠くにいる人」
惺：「お互い傍にいるのに触れられない人」

（それでは抽象的すぎます）
赳留：「･･･同級生」
航：「･･画廊の講師」
惺：「兄貴のところで働いている人」

（この恋愛を成就したいと思いますか。予定していますか？）
赳留：「ある意味成就した」
航：「あまり考えていない。成就の定義が違うと思う。」
惺：「生涯にわたる予定。一生かかっても良い。今はそう思っている」

（互いの恋愛観について感想がありますか？）
赳留：「関心を持っても仕方がない。人それぞれだから。」
航：「もし兄の想い人が誰なのか、予想があたっているとしたら･･･彼女と一緒に居られることになる。だから兄には頑張って欲しいとは思う。」
惺：「彼女には幸せになって欲しいと思うけれど、彼女と一緒にいるのは自分でありたいと思う。航兄にはいろんな意味で結論はしっかり出して欲しいと思っている。曖昧にしている期間は長くしないで欲しい」

（それでは､最後に、みな様の秘めたる切ない想いを伺いましたが、みな様にとってその想い人とは？ご自身の「愛とは？」という定義でお願いします。）

赳留：「すべてを包みたいと思える者」
航：「太陽。近いと焼き尽くされるが、遠いと暖かさが恋しい」
惺：「向き合うだけでなく、同じ方向を見て、一緒に歩む者」

（う～ん。含蓄ある言葉をありがとうございました。）

（最後に、広報誌臨時増刊号の記事取材にあたりまして、今般はご用命いただきありがとうございました。）

赳留：「（微笑んで、ゆっくりとした口調で）いいえ、こちらの方こそ。先般の『日本に影響を与える外国人研究者100人』の取材コメントの原稿、大変に楽しく拝読しました。
こちらの学会にも原稿チェックの依頼が届いていますよ。
特に･･あのフランスの華のシャルル・ドゥ・アルディ氏の日本滞在中の行動記録記事。ご担当されたのはあなたですね？」

航：「彼は縁が深い方ですからね。くれぐれも･･･オフレコ部分は流出しないようにして頂きたいものです。」

惺：「画廊のパンフレット記事もお願いしたいと思うところですからね。今後ともおつきあいさせていただきたいですね。
それにしてもあの原稿、楽しかったなぁ。シャルル・ドゥ・アルディ氏の熱愛記事。航兄さんが激怒する姿を初めて見たよ。兄さん、我が社の広報担当だったよね。どう？今後もこちらのライターさんにお願いするのはどうしようか。」

（････。････。････。オフレコですよ･･･。オフレコでお願いしますよ･･･）

（FIN）

創作**4**年記念の企画ものです（連載時期：**2013**年**5**月～**6**月）

●01

シャルル・ドゥ・アルディの恋人は、隠し事ができない。
「隠したくないだけだ」と本人は言い逃れようとするが、彼女は表情や態度に出てしまう。視線の不安定さや、唇の持ち上げ方、俯いて何かを堪えているような様子・・・彼がいったい、彼らしかぬ時間のかけ方でもって彼女のことを観察しているのか・・・マリナが知ったらまた困った顔をするのだろうと思った。

シャルル・ドゥ・アルディはマリナが戻って来ていることを聞いていたが、自室にいるものだとばかり思っていた。
彼があらためて当主になった時に、この家の部屋の役割も随分と変わってしまった。
父の思い出を消去してしまうことはないと配慮を重ねたつもりはなかったが、結果的にそうなってしまったことにひとり苦い笑いを漏らしたのはかなり前のことであった。
その時には少女のような顔立ちであったが、今では随分と容貌が変化した。
再会した時。
マリナが、本当に彼なのかと確かめるように茶色の瞳を大きく見開いた表情を今でも忘れることができない。
あれから幾度となく別離を繰り返したが、もう二度と彼女の手を離さないという誓いは守られ続けている。

愛は増えるものだ

彼女はそう言うけれども、彼の愛はそうではない。
深い色と熱を帯び、時間を経る毎に激しいものになっていく。決して安らぐ穏やかな愛にはならない。これが彼の愛し方であり、生涯変わらないだろうと思われた。
たとえ愛がなくても結婚できるし、愛があっても結婚できない時もある。そう言い切ったこともあった。
しかし、今は、その言葉さえ愛おしくなってしまうほどに彼女のことが恋しい。
少しの間、離れているだけなのに。
その間は彼女のことだけではなく、自分のことすら忘れてしまうようにものごとに没頭する彼であったが。

離れていると苦しい、というのはあまり正確な表現ではなかった。

離れていることを認識することが苦しいのだ。
離れていたのだと気がつくことに苦悶するのだ。

彼女はいつもあまりそういうことは言わない。送り出す時もその逆の時にも、屈託なく豁達に「またね」と言って笑顔を見せる。

そんなシャルル・ドゥ・アルディは、マリナを哀しませたままにしてしまっていた。
だから、今回の帰邸で少しばかりいつもと違う手順で居室に戻ってきたのに、そこに彼女がいたものだから、彼は少し奇妙な気持ちになってしまった。
気まずいという気分にはほど遠かったが、彼女が怒って出迎えるか、怒りにまかせて出迎えないかのどちらかだと思ったので、後者を実行しているのだと思っていたのだ。

・・・些細な事であったのかもしれない。

彼が気にする事柄と、彼女のそれは大きく違っている。
いや、何もかもが違っていると言った方が良かった。

きっかけは、彼女の笑顔であった。

彼女と最後に別れの挨拶を交わしたとき。
そんなに嬉しいことなのか、と言ったら。
彼女は何も言わず、ただ、口を噤んで目を見開いたままであった。普段、思ったことは大体口に出してしまっているマリナであったが、その時ばかりは黙ったままであった。
彼女の中で彼女を閉めている、感情と言う名前の色素まで推測できるようなシャルル・ドゥ・アルディの炯眼は、その時に難しい問題を突きつけられたような気がした。
決して愉快な気持ちになっているわけではないのだ、とシャルルでなくても判断できることであった。

彼女を傷つけることは許さない。
それは自分自身にも適用する事柄であった。
「またね」
彼女はそう言った。そして、それ以上何も言わなかった。

彼がもう少し他者に歩み寄るべきだと言うマリナに辛辣に言い返すシャルルの様子を見て、彼女はいつも仕方が無いという顔をしながらも、飽きることも諦めることもしないで常に言い続けていることを、シャルルは苦痛に思った事は無かった。

マリナは運命の人であった。
だからといって、何もかもが赦されるということでもないのは、マリナ本人がよく知っていることであった。

何かを懼れて何かに怯えて、愛を失うことを怖がるあまり、彼女に縋ることはしない。けれども、彼女のいない人生をもう一度歩むことは考えていない。

些末なことが重なっていたと思う。
彼は恋人関係を永らく続けている状態から一歩踏み出したかったし、マリナはこの状態を続けたいと思っている。
結婚だけがすべてではないのだと知ったが、彼だけのマリナであるのだという安心が欲しかった。
彼女の「またね」をもっと違う意味で聞きたいのだ、と思っていた。

彼がそんな風に考えていることは、マリナには簡単には言わない。
彼女に己のすべてを捧げる、と言ったけれど。
彼女に彼女のすべてを捧げてくれ、とは思っていなかったから。

●02

眠っている恋人を強制的に目覚めさせるほどに火急の案件はないと判断する。
彼女が、あまりにも安らぎに満ちた顔で目を閉じていたから。
どういういきさつでここで眠っているのか、目覚めてから聞けば良い。
それほど、安らぎに満ちた眠りを貪っている彼女が、本当は夢が作り出した幻影で、触れれば砂糖菓子のように淡く儚く消えてしますのではないのだろうかと思ってしまう。彼女は、これほどまでに生命に満ちているというのに。

居室で待つと言っていたと伝言を受けたものの、彼女は当主としての執務室には在室していなかった。
最近では外に出ることが多かったが、彼は当主として執務にあたっている時には、マリナがその部屋にやって来ることはない。
公私を別にしているとマリナに言い聞かせているわけではなかったが、彼女の中でそういう決め事が浸透しているようだった。

一緒に暮らすというのは、節度のある境界を設けることなのよ。

彼女はそう言った。

彼女の口からそんな言葉が漏れるとは、と苦笑いするシャルルに、彼女は太陽のような笑みを浮かべて、彼の心にどんどん染み込んでくる。
四六時中一緒にいることが、愛の深さを増していくことではなく、彼女の言うところの「愛が増える」という状況を維持するためには、各々の世界を守っていくことも必要なのだと遠回しに言っている恋人に、シャルルは嘲ら笑う。
彼に対して神のような教えを与えようとする彼女の傲慢さも愛していたが、虚像ではないのだと確かめようとすると、彼女はいつも彼の腕の中からすり抜けてしまう。

ソファの上で、小さな獣のように眠っている彼女は本当にあどけなかった。
彼とそれほど年齢が違っているわけではないのに、童女のような幼さをいつまでも持ち続けている。

ふたりのやり取りが、音声回線からメールになった。それでも、頻繁に連絡を入れるわけではない彼女に生真面目に定期的に連絡を入れるシャルルに対し、マリナは「それほど気に懸けなくても、大丈夫」と言ったので、それがますますシャルルを不機嫌にさせた。

夫と妻という拘束された関係ではないし、この国とマリナの国の制度は異なっていることも承知だ。事実婚に対して国の承認度が異なることでも
なぜ、アルディ家が親日を貫いているのか、彼女は詳細を知らないだろうが、少なくともシャルル・ドゥ・アルディが今でもそのように公言しているのは恋人が日本人であるからというだけではない。
あの国では、常にひとりにつきひとりが番うからだ。今はそうでもないようであったが。
いつでも解消できるような結婚制度を敷いていない。そして、マリナ・イケダは不可解なことに、奔放な性格のようでありながら非常に古典的な価値観を持ったままであった。
つまり、ひとりの人に添い遂げることを自覚しないうちに自分の幹にしている。

シャルルの家系では、ここ数代ではあり得ないことであった。神にその都度誓えば良いのだという疎明が通じるほどに旧い歴史のある家だ。
その瞬間は最上であったとしてもそれが永遠であるとは限らない。
そういう家柄で、決して絶やしてはいけないのだと・・・この家の継嗣として、責務なのだと教えられて来た。
唯一とか絶対とかいう言葉が、彼女の中では、彼と違う意味を持っている。
それならどうして一緒に居るのだ、と聞かれれば、こたえはひとつしかなかった。あの別れから邂逅まで・・・夢が終わったと思っていたのに、夢には続きがあり、そして夢ではなかったことを実感するのは、彼女がこうして眠っている時であった。

マリナの睫が伏せられて、唇はやや開いている。彼女はすでに成人して久しいというのに、手の平を軽く曲げて新生児のように眠る。何かを掴み取ったままのように。
シャルル・ドゥ・アルディはその姿を見て、静かに近寄った。自分の気配で、彼女が起きてしまわな

いように。いつの間にか眠ってしまっているというのではなく、転た寝を決め込んでいたようで、薄い毛布を掛けて少し寒そうに肩を持ち上げて眠っていた。

そしてまた彼は彼女を見つめる。
先ほどの問いにかかるこたえは至って単純だった。

互いに必要だから

これ以上のこたえは存在しない。
彼の中で、唯一と言って良いほどの絶対であった。
おそらく、彼女も同じであろう。

求められたという歓びよりも、戸惑いが大きかった。
何年も連絡を取らなかったのに、それでも彼女のことを気に懸けていた。
だから、互いに思ったはずだ。
惹き合うのは、自分達の過去がそうさせるのか、それとも・・・何か違った期待がそうさせているのではないのだろうか、と。
そして時折思う。
惹かれているのは、自分だけなのではないのだろうか、と。

彼はそっと近寄ると、彼女の肩を覆うことを忘れている毛布に指を伸ばし、彼女の呼吸に合わせて毛布の端を引き上げてやった。
その指先が彼女の衣類に触れるだけで、彼は甘い痺れを味わう。そして次に、彼女を壊してしまいたいという劣情であった。もう二度と、彼女を壊さないと心に決めているというのに。幾度も、その衝動に駆られる。

息もできないほど彼女の躰を抱きしめたくなる。
このまま抱き上げてベッドに連れて行こうかと迷う。

覚醒させることはないと思っているのにもかかわらず、彼女の肌の温度を感じたいと思うのは、愛と言うものが矛盾しているからなのか。それとも・・彼そのものが矛盾した存在だからなのか。どちらなのか。まだ、彼はこたえを導くに至っていない。

マリナが、いったいどういう気持ちで彼といるのか考えたことはあったが、それはシャルルが想像することではないように思えていた。しかし、実際に彼女に尋ねても彼女は笑顔で逸らかすだろう。
これまでずっと想ってきた相手と別れ、そしてその相手も彼女のこともよく知るシャルルに会わずにいたのは、マリナも同じなのだ。彼女の方から豁達に連絡を取ってきたのなら、彼は応じてしまったかもしれない。もう二度と、会わないと決めていたのに。

彼女の顔を見てしまったら、もう止まらないと思った。だから声を聞かず、メールのやり取りだけで終われば良かったのにという後悔めいた新たな可能性を考えたことはあった。会いたい、と思う気持ちがあったにも関わらず、彼は同時にそのようなことを考えていた。
会えば、彼の人生が違うものになるという確信があったから。
そしてその確信は現実になった。

彼は緩めた襟元の下からの覗く白い喉元を動かし、大きく静かに息を吸った。溜息を呑み込んで仕舞わなければ、遣る瀬無い気持ちだったからと理由をつけて彼女を腕に絡め取ってしまう。

今も同じである。彼女と視線が合ってしまったら、彼は疲れも無視して彼女の目に滲む涙を見る為にマリナに優しく扱う気遣いを故意に後回しにするだろう。
どうしたものか、暫くの間、彼は恋人の顔をじっと見つめたままであった。

自分の部屋もあるというのに。自由気ままな彼女が、彼のことを想い、彼を待っていたと思いたい。
もう、こんな日はやって来ないと思っていた。マリナがパリのアルディ邸の中でシャルルを待って眠る。彼女の姿を見ているだけで満足であるのだと言い聞かせているのに、もうひとつの焔が彼をじりじりと灼きこがすのだ。
ゆっくりと、でも確実に。

●03

彼はマリナの隣に座ろうとしてすぐに対角線上にある斜め左のソファに座った。
この家の当主であるのに、気配を殺して座位に移ろうとする。
彼女のために自分が変わっていく。そうしようと決めているわけではないのに。

しばらく見ない間に、前髪が伸びたようだ。
長い人生の間で、ほんの一瞬だと彼女は笑うけれども。
人生が長いとは限らない。
だからこそ、別れの時には彼女は笑顔で見送るのに。彼はそれを不快な表情で受け流した。
それでも、彼女が気にしないと思っているから故の行動であったが、戻り路で彼女が邸で待っていると聞くと、その時のことを思い出し、鬱屈した気持ちになってしまった。
愛しているのに、遠ざけたくなるような言葉を投げつけてしまう。
彼女が、いつ、「もう手を繋いだままではいられない」と言い出すのかと思う。しかし、彼は彼の生き方を変えることはない。マリナもそうだ。それなのに、強烈に惹き合う力が作用することを否定できない。

彼は、彼の親友の恋人を好きになった。
彼女は、恋人の親友を好きになった。

これだけでももう、シャルルは十分に罪深いと考えている。しかし神に懺悔することはない。これは生涯抱えていく苦しみである。
それでも、良かった。
それでも、彼女が欲しかった。
意見が違うと歎くこともあるだろうし、失望も感じるだろう。それでも、彼女は彼のファム・ファタルであることに変わりはない。絶対で何もかもが正しいというわけではない、大人になった彼女を再び愛した。いや、改めて恋に堕ちた。
自分の夢を諦めず、彼女は今でもずっと追いかけ続けている。
そして、その一方で過去と向き合い、シャルルに対して感じている気持ちが何であるのか、自分で理解している。
愛されている自信からそう述べるのではない。
愛されているという確認ができないから、そう考えるのだ。

強情だな、君は。

シャルルは彼女の寝顔を見ながら、腕を伸ばす。
遠く離れた場所から彼女の顔を見るつもりはない。そうできなかった。もっと近寄りたい。もっと傍に居たい。そう思わせる彼女と距離を置いて、手の届かない場所に座ることはない。

彼女を目覚めさせることがないのであれば。
最も近く、手の届く範囲でなければ、彼は満足しない。
求めるのではなく、与えようと誓った相手が目の前にいる。
それだけでも・・・奇蹟に近い状況だと思うが、それを神の導きだとして抗えない運命なのだと言い聞かせることはしない。

彼はそっと腕を伸ばし、寝入ったままの彼女に囁くように、呟いた。
彼女がここにいる。それだけで、彼の疲労は軽減する。それを、彼女はわかっているのだろうか。いいや、わからないのだろう。
だから、いつも彼からすり抜けて行くのだから。
追いかけているばかりの恋愛ではない。
彼女は彼に振り返るようになった。そして彼女が彼を追いかけることもある。
そうして互いに、互いだけしかわからない問答を繰り返し、愛を深め、マリナの言うところの「愛が増えていく」ことを彼女に証明させ続ける。そして、彼はそれが根拠のないかりそめの希望でしかないのだと笑い飛ばすことができなくなった時。

ふたりは、名実ともに離れられない日々を誓うことになる。

少女だった時の彼女の寝顔を幾度も見た。けれども、大人になった彼女の顔を見つめるのは、これからその時の回数よりもずっと増えていくし、実際に増えている。
まったく、情の強い人なのだから。

彼はそう言って溜息を漏らす。
けれども、このまま・・・目覚めないで欲しいとも思うのだ。
なぜなら、彼だけの彼女であることを実感できる瞬間であるから。彼女の眠った顔を、独り占めできるのは、シャルル・ドゥ・アルディだけなのだから。

●04

何もかもが愛おしいと思うかというと、そうではない時もある。
苛立たしいときもあるし、理解できないと感じる時もある。しかし、それでも愛しているのだという事実を目の前にしてしまえば、些事になってしまうほどの事柄の蓄積を「退屈なことの繰り返し」とは思わなかった。
思えなかった。夢の続きと思えないほどの現実の重なりが、彼をもっと生きていたいと思わせる。誇りの為になら死ねる、と思っていたのに、彼にもう少し生きてみても良い世であるのかもしれないと思わせる。
彼は鉛のように重くなってしまった体をソファに凭せかけることもせず、背筋を伸ばして彼女を見つめる。観賞用の花ではないが、彼女の安らぎの表情を見ているだけで、日中の自分はとても殺伐とした空気の中を漂ってきたのだと改めて感じる。
多忙であることが崇拝の証でも秤でもないことは承知している。彼の家柄であれば、このように当主として日々不在にしているような生活ではなく、決断だけ任される役職を幾つも兼務すれば良いだけであろう、とわかっている。
けれども、彼は誰もいない家に戻るという行為が虚無で無駄なことだと考えていた。
それなのに、マリナと一緒に過ごすようになってから。
彼は帰ってくるようになってしまった。
彼を待つ家族はもう誰も残っていないというのに、そんなことはないと断言する恋人のために彼は戻り路を歩くことにした。
彼は戻ってくる。もう、誰も居なくなってしまった家に。
彼は彼女がいるから、生きてみようと思える。
死までの退屈しのぎと思っていた生を、見つめてみようと思える。
だから、帰って来る。
・・・そして、それは彼女がたとえまだ戻って来ていない時であったのだとしても、彼は帰邸する。

何がそうさせたのだろうか。
説明のつかないことに対しては懐疑的であるどころかまったく信じようとしないシャルル・ドゥ・アルディであったが、この時ばかりは、「不図」という言葉が彼にぴったりと重なり合わさった。

シャルルはマリナに向かって、囁いた。
彼女を起こしてしまわないように。
彼の中に秘めておくことができず、漏れてしまった言葉であった。
自分を律せないことはないと自分を定めているというのに。
苦い笑いが込み上げてくる。

「・・・君は、恋なのか？愛なのか？」

彼女が彼の傍に居るのは、どちらなのだろう。
愛しているという言葉も恋しているのだという囁きも、実際の気持ちと合致しているとは限らない。
愛していても愛していると言えない時があり、恋しているだけなのに愛しているのだと断言する者もいる。
そもそも、愛と恋の境界線は目に見えて計測することができるのか。
興味を持たないことにしていた分野であっただけに、シャルルは白金の髪を軽く掻き上げながら、己の物思いに冷笑する。
自分の声が掠れている。
彼はフランスの華と呼ばれ、できないことはないと言われているというのに、彼女の前ではそのような美称もまったく意味を成さないただの男になってしまう。いや、違う。
彼女がいるから、彼はふたりの未来を話さないでいられる。
話さなくても、未来があると思っているから。
言葉だけでは伝えきれない想いを込めて、青灰色の瞳で彼女を見つめた。
彼女の僅かな身動ぎでさえも、記憶していたい。

彼が彼女を愛するのは、まったく出会ったことのない気質の者であったからという理由だけではない。そして親友の恋人であったからということを理由にしたりはしない。

彼女は、彼の惰い部分を知っている。
人と近付くことを嫌い、誰かに傷つけられることよりも、誰かを傷つけてしまうことを嫌う部分を知っている。
行き着く先のない、迷路のような路を歩いていると思ったが、マリナはそこをいとも簡単に乗り越えてこちらにやって来てしまう。

言ってしまった後は、肩の力が抜けていくのを感じる。

マリナへの問いかけなのか、自分への疑問なのか、それすら判断がつかないほどに斑に混じった問いに、困惑しているのは他ならない自分自身であった。

●05

彼の呟きが、空気に溶け終わる直前。
それまで睡臥を貪っていた彼の恋人が体を動かし、そして掠れた声で彼に呼応した。

「恋は、ひとりで抱えるもの。愛は、ふたりで抱えるもの」

神託のようなマリナの声に、シャルルは青灰色の冷然とした瞳に驚愕を滲ませて、彼女の背中を食い入るように見つめる。
無造作に額に手をやる。秀でた額が一瞬、かっと熱くなった。
彼女が眠っていると思ったのに。今の小声を聞いていたのか。
シャルルは誇り高く、羞恥などという言葉を認めることはしない。
後ろめたいことを行うようなことはしないと決めているし、実際にその通りに行動してきたのだから。
それなのに。
腹立たしいことに、彼の恋人はしばしば彼にそのような感情を与える。

一方的に。突然に。

起きていたのならそう言え、と言おうとして彼は薄い唇を閉ざす。
彼女がもし、憤っているのだとしたら、シャルルとの最後のやり取りが影響していることは間違いようのない事実なのだ。
もっとも、彼は決して間違えたりはしないが。
彼女は返事をしなかった。

そこで、シャルルは先ほどから彼女がほとんど身動きしなかったことに気がつく。
謀れたとは思わないが、彼と顔を合わせるのが躊躇われて、彼女が転た寝のふりしていたのか・・・
それとも、本当に意識を失っている途中で彼が帰ってきたのか、どちらなのかはまだ聞く事が出来ない。

いつもなら、マリナの小さな変化にすぐに気がつくシャルルであったのに、物思いに耽り、まったく周囲が見えていない状況に陥っていたと認識する。

マリナ・イケダに言わせればそれは「発作」なのだと言うが。
彼は、思考を優先するために彼女の観察を後回しにした。
だから、気がつかなかった。

彼の中には、そういう部分がある。
たとえ、どんなに愛していても。どんなに大事であると認識していても。彼は思考を止めることはしない。

「質問に答えろと言ってはいないが」
シャルルが静かに声をかけるが、マリナは返事をしない。
しかし、自分の言葉が矛盾していると気付く。
問いかけたのは、彼からだ。
彼は、確かに問いかけた。

彼のファム・ファタルはそれ以上、何も答えようとしない。まるで、神の使徒のように。ただ、一度きりの奇蹟を目の前に広げるだけだ。
息を潜めて、久しぶりに聞く彼女の声を反芻する。
これほど近くに居るのに。
今、聞いたばかりなのに。
彼は、幾度も繰り返す。彼女の声を繰り返す。

恋はひとりで抱くもの。
愛はふたりで抱くもの。

これが、彼女のこたえなのだろうか。
彼の問いかけに対する、彼女なりのこたえなのだろうか。
それとも・・・単に、朦朧とした状態で述べてしまった安易な言葉なのかもしれない。それでも、彼女は確かに、己ひとりだけのことを考えているのではなく、シャルルとマリナというふたりのことについて考えているような声であった。だから、それは気まぐれの言葉ではないのだと確かめる必要などは、最初から存在しなかった。

●06

彼女は黙ったままであった。
シャルルは恋人の茶色の髪が無秩序に波打つ様を見つめる。
彼女は、いつから目覚めていたのか。

それを確認しても、今、彼が浮かべてしまった歎きを遡及して抹消することはできない。
虚無を重ねて、行き着く先は本当の無であると考えていた。
何もかもを拒んでいたわけでもないし、彼の心に入り込んだ者も少なからず、存在した。
マリナを介して出会った者ではない者たちとの関わりが多くなっていった時に、彼女に再会した。
決まりきったことではないのか、と彼女は言わなかった。
愛に決まり事があるのだとしたら、彼と彼女の関係はたちどころになかったことになってしまう。
けれども。
規定されていないのが愛なのだということを前提にしたら、この愛は始まってすらいなかった。
あの時の夢の続きではない。
今、彼と彼女は互いの困阨を抱えて、それでも惹き寄せられる。
「マリナ、返事をしろ」
やや強い口調でシャルルがそう言うと、彼女は目を瞑ったままで、毛布の中に体を埋めてしまう。
最初から、意識がなかったかのような振る舞いであったが、彼女は最初からそれほど身動ぎしなかった。
眠っている者が輾転しないということはあり得ないことであった。
それは、医師として最初に学ぶことである。
彼は長らく鑑定医として、呼気を持たない者との対話しかしてこなかったが、それでも、その程度は当然の現象であるので、医師でなければ知り得ないことという事柄でもなかった。目覚めていたのであれば、彼を出迎えてくれても良いのではないのかという勝手な期待を心の片隅に押しやる。
「ひとりで休みたいのであれば、自室に戻れ」
彼は彼女の顔を見ないままに、そう言った。
顔を見せて欲しい、とねだることはしない。
なぜなら、彼はシャルル・ドゥ・アルディだから。

彼女がわざわざ、ここにやって来ている理由を聞くまでもないと思った。
彼に会いたいからと彼女は言わないだろう。
単に、気が向いたからと言うのだ。
彼のファム・ファタルはいつも気まぐれに見えるようで、彼の期待通りのことはしない。
ある意味、彼が想定した通りに行動している。
自分がどれほど彼女のことを愛しているのか、知っているというのに。
残酷で、それでいて彼は彼女によって、様々なことを知った。もう、それ以上に知ることはないと考えていたのに。彼女は、彼に与え続ける。彼の方こそ、全てを捧げると言ったのにもかかわらず、彼女は彼にいつも新しい彼を教える。

愛を諦めることも、愛を諦めないことも。
恋ではなく愛になった時に、人は更に高みに登ることができることも。
そして、愛がなくても愛していなくても、人はかりそめを承知で愛を求めるものなのだということも知った。

彼は溜息を漏らす。
怒っているのであれば、それを説明するべきだろう。
彼女はいつも自分の考えていることを隠すことはしない。
誰に対しても同じ態度で接し、誰に対しても同じ距離を確保している。
それなのに、あの時・・・
最後に別れた時には、彼は彼女のはからいを否定した。
またね、というのは彼女なりの最大の敬愛表現だ。次に会えるのがいつ、と約束することができない日々を送ってきたからこそ、心がけていることに対して、彼は彼女を拒絶した。だから拗ねているというよりも哀しんでいる様に見える。
彼女は、内なる自分と対話するときは、ひとりで考えてそして結果を出してしまう。
彼は、それがいけないのだと言う事は無い。
なぜなら、彼も同じであったから。
彼女に何も言わず、彼女を置いて去ったことがあったから。
・・・彼女の「またね」という言葉を聞くのが辛かったから。

●07

口も利きたくないのであれば、わざわざ居室から移動してくることもないのではないのか。
そう思ったが、シャルルは黙って上品な口元を引き締めた。
それなら、それで良い。
しかし、彼女は彼に呼応して彼女の内を彼に見せつける。
まったく、狡い人だと思う。
いつもならはっきりと物事を言い切る彼女が、具体的なことを言わない。自分はどう思うのか、と断言しない。
そんな様子を見て、彼は・・・彼女もそれまでの彼女と少し違う変化を受け入れたのだと思った。
変わることは悪いことではない。
同じ場所で立ち止まり続けることはできないのだ、とマリナはよく言う。けれども、周囲を見回しすぎて、自分の位置がわからなくなってしまうのも哀しいことだと彼女は付言する。

彼は深い双眸で彼女を注視する。
聖女のような人ではない。
だからこそ、彼は彼女と生きたいと思うのだ。
またね、と言われて。
シャルルは彼女が彼との別離を受け入れているように感じ、それが彼の心を尖らせた。
風がこちらを向いているから、彼女は彼の傍に居る。

そうではないのだ、とわかっているのに、心が受け入れないままで居る。
単純なことであったが、簡単なことであるからこそ、彼はそれを認めはしない。それでは己が苦しいだけだ、最初に心を開く方が敗者なのではないのだ、とマリナは彼に教える。
それだからこそ、彼女はシャルルのファム・ファタルなのだ。
これまでも、これからも。そして、今、この瞬間も。

「・・・君が、オレのことで哀しむのか。それも良いな」
彼がそう言ったので、マリナは瞑っていた瞼を動かした。そして、華開くようにゆっくりと大きな瞳を持ち上げる。彼女の瞬きは普段もゆっくりとしたものであったが、目覚の瞬間も、とても綽綽然としたものであった。
綺麗な笑みを浮かべながら、彼は恋人に言った。
「君が、オレのことで哀しんだり怒ったりする間は、オレのことを考えているのだから」
問いかけに対するこたえを自分で言ってしまったという悔しさはなかった。

「君には笑顔で見送られ迎えられたい」
普段は彼女への讃辞は言わないシャルルに、マリナはいつも苦笑しながら「フランス人はみんなそうなの？」と尋ねる。
しかし、彼はフランス人であるがそのもっと根柢にシャルル・ドゥ・アルディであるということがあったので、もう少し考慮しろと言うばかりであった。
それは互いに対する信頼がそう言わせるのだ、と彼女はわかっているから。

「それは、謝罪？」
マリナが彼に向かって、小さな声で言った。
彼は間違わないので、謝らないのだとマリナは今でも強く意識しているらしい。
彼女が哀しんでいることも承知の上で、笑顔で彼を迎え入れろと言うシャルルの言葉にある、彼女への想いを彼女は感じているようであった。
本当に彼が拒絶するときには、こんな話はしない。彼は自分の内に深く沈めてしまって、その時のことは忘れてしまったように、何事も感じていないような態度をとる。しかし、今はそうしない。
これは、彼の変化であった。

シャルルは言い返した。
「これは、事実」
彼女は毛布の中で大きく伸びをした。
彼が今述べたことは、彼なりの謝罪であるのに、それを認めることはない恋人に向かって言った。
「強情ね」
「君に言われたくない」
少しむっとしたように、シャルルが言った。彼女の方こそ、まったく剛愎であるというのに。

●08
彼女はソファの背もたれの側に顔を向けて言った。
「シャルル・・・おかえり」
彼女はそれだけ言うと、毛布の中に顔を埋める。
シャルルはその様子をじっと見つめる。
青灰色の瞳で、彼女に対する激しい想いを迸らせたままで。
きっと、今、浮かべている彼の表情を見たら彼女は酷く驚くだろう。
同じ様に、彼女が毛布に隠した感情は、彼女は彼に見せたくないのだと思った。愛しているからこそ、見せないものがある。
これも、彼は彼女を愛して知ったことであった。

それから、更にくぐもった声で言った。
「私が『またね』と言うのは、また会いたいから」
「わかっているよ」
彼は即答する。
けれども、殆ど気がつかれない程度であったが僅かに声が震えていた。
マリナも同じであった。

互いに、少しだけ声調が変わる。
各々が、立っている場所から相手に向かって一歩進む時に感じる心の震えが声に現れる。
しかし、それだけではない。
相手の想いを聞いて、心が揺らされるのだ。
相手の心が自分によって揺れる様を見て、更に自分も変わっていく。
これを愛と呼ばなかったのであれば、一体、何と定義すれば良いのか。
彼にはわからないことはないのに。

彼女の言葉は彼に重く切なく響いた。
マリナが別れについて特別に想いがあることは知っている。
これでいつ別れても良いという意味の言葉ではなくて、彼にまた会えますようにという祈りにも似た願いが込められている。
彼は、彼女に背中を向けて、別れを告げた。彼女にまたね、と言わせなかった。
だから、自分の心の内を隠して素気なく応答してしまったのだ。
そこにある愛について、幸せを噛みしめることもなかった。

彼は吐き出すように、苦しそうに言った。
「・・・オレもまた会いたかった」
認めることが悔しいのではない。彼はこの愛が消えていくかもしれないという可能性に苦しんでいる

。それを今、はっきりと自覚した。
「オレは」と言わず「オレも」と言った。
愛されていないかもしれないと思っていたら、言えなかった言葉だった。

互いの温度で感じる愛もある。けれども、こういう言葉のやり取りや些細なことから感じる密か心ほど、長く激しく燃え続けるのだと知っているから。
だから、彼女に触れずに告げた。

マリナから振り返ることはしない。
彼に対する鑑戒なのか。
まったく、強情で・・・そしてどこまでも彼を乱れさせる人なのだと思った。

彼は立ち上がると、彼女に近付き、そして彼女の背に向かって声をかける。
腰を落とし、他の誰にも見せない姿で・・・膝を折り彼女の躰を毛布の上からそっと腕を回して抱いた。
腕を投げ出し、彼女に自分の胸を押し当てる。
柔らかな肌触りと、彼女の髪の香りが同時に彼に伝播してきた。
思うままに激しく彼女を抱いてしまいたいという衝動が湧き起こるが、彼はそれを抑えて極力静かに言った。
今、この瞬間のふたりに必要なのは、互いを貪り尽くす滾る熱情ではない。
毛布の上から、彼女の肩に口吻を捧げる。
彼が手にできるすべてを彼女に捧げる、と言った。
そして彼女は・・・彼に与え続ける。
捧げると言ったのに。
彼女から捧げて欲しいとは思っていないのに。

そして小さな・・・本当に小さな声で囁く。
「已今当」
「え？」
マリナが身動ぎする。彼の言葉がわからなかったらしい。
已今当とは、過去・現在・未来を表す。
だからこそ、彼は彼女にただいま、と言えない。
過去も、現在も、未来も。
ずっと、帰る場所は彼女の場所なのだと言っているのに。
過去を繰り返し、今を重ね、未来に至っても。
ずっと、彼女のいるところを目指している。
アルディ家の当主にあるまじき言葉であるから、誰にも言ったことはなかった。

しかし、彼女の前でだけは囁くことにする。
幾度も言ったことであったが。

「君が好きだ」

彼は想いを込めて、たった一度だけ言った。
それを聞いた瞬間、マリナの体が強ばった。
懼れているかのように。
それでいて、待ち詫びた言葉であったかのように。

●09

マリナがまた体を少し動かした
「しかし、君の寝相で、ここで夜明かしするのは何とも噪音だと思わないのか」
彼の言葉に、マリナは体を丸めた。完全に覚醒していることは明らかであった。

彼の運命の人が微笑みながらこちらを見ることは、すぐには実現しないのだろう。
失望したから、愛が醒めるということはない。失望してさえなお、愛が続くからこそ・・・彼は彼女を運命の人だと思う。

定められた抗えない力によって、自分ではどうにもできないほどに惹き寄せられるという意味ではない。
彼と、彼女の間にある「運命の人」というものは、もっと違うものになった。
命を運ぶ者、という意味だ。
彼は腕に力を込める。
しかし、彼女を壊さないように注意を払う。
それでいて、彼女が彼の腕から逃れられないように彼女を包む。

彼女が体の向きを変える時に。
彼がそこに居ない夜を寂しく想い・・ここに身を横たえるのだと彼は信じたい。
次には、彼女の承諾を得ない行動に出た。
驚愕の短い言葉を漏らすマリナの声を聴きながら、シャルル・ドゥ・アルディは彼女の躰を抱き起こす。
「シャルル」
彼女の懐かしい声が彼に飛び込んで来る。
僅かに彼女の睡りの香りがした。

疲労した体に生気を与えるような彼女の佳音を聴いて、彼は彼女の体に顔を寄せる。抱き上げたまま、腕に力をこめた。
こんな風に幾度も抱き上げた。
しかしどんな時であったとしても、一度として同じ抱擁は存在しない。
だから、彼女は笑顔で見送る。
「今度は、君を見送る」
いつものことであった。
彼女を見送り、彼は見送られる。彼女も同じだ。
順番を決めているわけではないが。

彼女が彼の腕の中で軽く蹲く。
まだ怒っているのか。それなら、何も言えないほどに強く激しく抱きしめてしまう方が彼の熱が伝わるのか。
自問を繰り返しながら、彼は彼女を抱きしめた。

「・・・これはオレだけの、恋だな」
静かにそう言う。彼女が言うところの、ひとりで抱えている物思いと同じだ。
マリナの意向を聞かずに彼がひとりで彼女を抱え上げている。
独りよがりの恋であっても良いのだ、と思ったこともあった。
いつか、彼女が彼に向くだろうし、彼にはその自信が備わっていた。けれども、彼女は最終的に彼を選ぶことはしなかった。

彼女が彼を待ち、待っている人がいると思うから彼は戻ってくる。
それなのに、彼女に向かって彼は次の約束を告げることもなかった。

恋は、ひとりで抱えるもの。
本当は・・・愛こそがひとりで抱えなければならないものが多いものなのではないのだろうか。
簡単に分かちあい、わかり合うことができるものではないからこそ。
ひとりで苦しむものなのかもしれない。

彼は、彼の恋そのものを抱きしめた。ひとりで抱えるものが恋だと言うのであれば。それを認めようと考える。彼がそう思っていなかったとしても。確かに、マリナは一人抱える苦しさを知っているし、ふたりで生きていくことの痛みも知っている。

「シャルルだけのものなの？」
自分に全てを捧げると言ったのに、と続きそうな声音で彼女は言った。
シャルルは嗤う。
彼はようやくこちらを向いた茶色の瞳を覗き込んだ。
黒眼が大きく、質朴とした表情の・・・飾り気のない視線は、今までと変わらない。

彼の恋人は、どうしていつも彼に問いかけているのだろう。
疑問に思っているわけではない言葉すら、彼にはいつも問いかけられている言葉に感じる。

「そう。今、オレが抱いているのは、恋」
彼はまたそう言って笑いを含む。
「ひとりだから？」
寝起きの彼女の言葉はいつもよりもっと短かった。
瞳が僅かに揺れ動く。

そう、君はわかっている。

シャルル・ドゥ・アルディは美貌を彼女だけに向ける。
彼が独りよがりの恋に溺れていると言う意味ではなく、彼女を抱えているから「恋」と言っていることに気がついていた。
そして、彼が何を求めているのかも。

マリナは彼の腕の中で、もぞもぞと体を動かす。
毛布の中で泳いでいた彼女の腕が現れて、次に・・・彼が望んだ通りになった。

マリナは腕を伸ばして、シャルルの腕に自分の腕を絡ませた。
彼女が体を動かすと、彼の腕に力が入る。
すでに、少年でなくなったシャルルの腕にかかる重みは、歓びも苦しみもすべてが重なったものである。
彼らが離れていた間の重み。
それは時間であったり、距離であったり・・・そして、寄り添いたい相手から離れた煩重。
それでも、彼女は笑顔を見せる。
忘れてしまったわけではない。
過去を振り返らないわけではない。

それは精一杯の彼の譲歩であった。
彼女を哀しませてしまった代わりに、彼ははっきりと口にしない。

彼女に情の強い男だと思われたとしても。
しかし、彼は彼女に言った。愛しているという言葉の代わりに。

「君が、愛に変えてくれ」

それを聴いた彼女は狼狽した声を漏らす。
シャルルが一人きりで抱えている想いではないことを、彼女に託す。

マリナは気恥ずかしそうに、彼に腕を回した。
彼女の問いかけに、シャルルは答える。
「正解」
顔を少し傾ければ、彼女と唇を合せることもできるほどに近い距離にあった。
先ほどは触れたくても触れられなかったのに。
彼に触れてくるマリナを待ち焦がれていた自分の渇望を改めて認識する。
だから、彼は華のように微笑む。
陶然とした表情のマリナを見下ろした。
彼の顔容に見惚れるのは、彼女の悪い気質だ。
彼の内なる声を聞く事が出来るのに、時折それを忘れてこうして彼の貌をじっと見つめる。
彼女はいつも・・・皆が集う時には寄らず、誰もが去った時には添いたいと言う風変わりな人だ。

●11

「そう。今、愛になった」
彼がそう言うと、マリナは顔を僅かに赤くして彼の首にしがみつく。
こうして彼女から抱擁を求める時は、数える程度しかなかった。
昔は、自分から彼に唇を寄せたこともあったというのに。

「シャルルが言ったからそうしたわけではない」
彼女はそう言って唇を尖らせた。
彼は腕を持ち上げると、彼女の額に自分の額を押し当てる。
彼女は位置が上がり、また身を竦ませたが、彼は腕の力を緩めることはしなかった。マリナの腕にも力が込められる。
「もう少し素直さが必要だな」
「シャルルにも必要ね」
マリナはそういって微笑んだ。彼女の声が、近いところで聞こえる。彼が待ち望んだ、彼女の声と温度と髪の感触があった。
彼女の肌の温もりが恋しかったが、それは積もった話が尽きてからだ。

彼女が彼の腕の中で空腹ではないのかと尋ねてくる。こういう時は、彼女の方が空腹なのだ。

素直になれば良いのに

彼は心の底からそう思う。
けれども、もう少し、この意地悪なやり取りを楽しむことにする。
「オレの食事に同席したいのであれば、その寝乱れた格好を何とかしてくれ」
彼が冷たく言うと、マリナは彼の腕の中で身動いで文句を言い始める。

すると、彼は上半身を屈めてマリナを床の上に立たせた。
彼女はとても小柄で、彼との身長差のために顔を上げると髪が床に向かって肩から落ちていく。
彼の恋人は戸惑ったように佇んでいた。
今まで彼の首に腕を回していたが、それは滑り墜ちて、彼の腕の上に手の平を乗せていた。彼の腕の中には、彼女の残した毛布が残る。マリナの温度が残っていた。

もう、決して彼女の手を離さない。

そう決めたから。
彼は、毛布をマリナの茶色の髪の上に無造作に置いた。
「シャルル」
マリナが驚きの声を上げて、彼から手を離し自分の頭の上に乗った毛布を取り払おうとした時。

マリナの小さな悲鳴が聞こえた。無防備に再なった彼女の両手首を彼が握りしめ、再び体を傾けたのだ。
彼女が彼の名前を呼ぼうとした時。それは、もう始まっていた。

・・・毛布越しに、彼女にキスをする。

彼女の素直ではない唇を感じる。
そして毛布の感触の下にある彼女の甘い溜息を自分の唇で塞いだ。
抗おうとするマリナの手首を掴んだまま、彼は彼女に触れると、すぐに体を引いた。
恋人は何が起こったのかは把握していたが、視界が遮られていて無防備であった時のことであったので、ひどく動揺していた。
やがて、小さな声が聞こえてくる。

「酷い人」

ああ、やっと言った。

彼は笑う。
彼女に酷い人だと言われる度に、彼は冷笑する。酷いのは、どちらなのだろうかと思う。
けれども、彼女の心を乱し、酷いと思わせるのが彼ひとりであるのだと確信する。

シャルル・ドゥ・アルディは彼女の躰を惹き寄せて、そっと囁く。
「マリナ。今度は、もっと違う言葉が聞きたい」
またね、と言うのではなく。
彼だけに告げる再会を祈る言葉を聞きたい。
それは、今すぐでなくても良い。
どれだけ時間をかけても、きっと言わせてみせる。
彼にできないことはないのだから。

そう。
彼は、シャルル・ドゥ・アルディなのだから。

彼はマリナの返事を待たずに、彼女の手首を解放した。
そして、慌てて顔を覗かせる彼女を見下ろす。もう、いつものシャルル・ドゥ・アルディの冷然とした美貌がそこにあるばかりであった。

「寝起きのぼやけた格好を整えて来い。時間に遅れたら、部屋から締め出す」
彼はそれだけ言うと、居室を後にするために彼女に背中を向ける。
待ちなさいよ、と激高するマリナの声を懐かしく聴きながら。

「素直じゃないんだから！」
「それは、君だけに当てはまる言葉だな」
彼はそれだけ言い残して部屋を出る。

彼女は気がついているのだろうか。自分の変化に。
奥深い自分の部屋から出て、この場所で彼を待った彼女は、もうあの時の少女の姿をしていない。

まだ、彼女から愛しているともお帰りなさいという言葉も聞いていない。
それは後で聞く事にする。
今は、彼女の素直な声を聞いたから。

マリナ、君がいるから、帰ってきた。
心の中で呟いた後、彼は、マリナに聞こえないように言った。

「・・・・ただいま」

彼の恋人は、その声に気がつかず、まだ大きな声で文句を言っていたが完全に覚醒したようであった。
シャルル・ドゥ・アルディは花のような笑顔を浮かべると、そのまま部屋を後にした。

彼女がそのままどこかに言ってしまうのではないのだろうかという不安は、もうどこにも存在していなかった。
これは、彼の変化なのだろう。

それだけは素直に、認めることにした。

（FIN）

umhal：ゲール語　「素直な」

弄火　**2013**　前編

■FireWorks　2013　01

ワタル・イワツキという人物について、自分から情報を収集しないのに耳に入ると、シャルル・ドゥ・アルディは僅かであるが、青灰色の瞳を動かす。そのような理性や品性から離れた動作について、自分自身に対して許可していない。それなのに、僅かでも反応してしまう己に苛立つのだ。
彼はグラフィック・デザイナーで、最近ではかなり話題に上がっている人物であった。
若手のデザイナーでありながら、最近では様々な分野で自分の作品を発表している。意欲があり才能があると認めざるを得ない。
そして彼は日本の不動産王のひとりと言われている人物の子息でもあり、多方面にわたって彼を後援する動きが目立ってきていた。
それは、時間が経過するごとに大きくなっていく。
今は、副業としていた画廊の経営も多忙を極めているので難しいだろうに、それでも彼は涼しい顔で両立を続けている。
それが気に食わない。
東京の画廊は小規模であるのに、ワタルがその場所に固執しているのは、マリナの働く場所がなくなってしまうからだ。
他にも理由がある。
彼がアルディ家から買い上げた絵画が、今になって大変な話題を呼んでいる。
それは美学を専攻している彼の兄の紹介によるところが大きいが、あの兄弟は三人とも侮れない輩であった。
完全に消滅させるということも考えたが、自分の中にある独占欲がそうさせるのか、美への新しいアプローチに興味を持つ自分の気質に辟易しているのか、どちらなのか区別するだけ愚かしいことだと考える。
彼はフランスの華と呼ばれる人物で、できないことはないと言われている。
それなのに、遠く離れたまったく生きる世界の違う人間を攻撃するのは彼の誇りが許さなかった。
それを実行してしまえば、自分が彼を気に懸けていることを認めてしまうことになるからだ。

彼の作品にいつも出てくる人物は一体誰なのかという話題が絶えることはなかった。
マリナがワタル・イワツキの作品の着想に大きな影響を与えていることは彼も承知のことであったし、マリナからも聞いていた。
しかし、彼女を拘束するようなことは決してしないので、彼女はこのことについて忘れがちになっているようだが、シャルルは決して忘れはしない。口に出さないだけだ。
彼には忘却というものは存在しない。
痛みが薄れることもないが、その代わりに忘れることによって楽にならないからこそ彼女を愛し続けることに誇りを感じている。自分がシャルル・ドゥ・アルディとして生きていることと同じほど、彼女のことを愛していると言い切ることができる。もう少し生きていたいと思う程に、彼女のことを愛

し抜こうと決めた。誰が取り戻しに来ても、誰が連れて行こうとしても、もう、彼女の手を離さない。
その決意を披露する必要があれば、いつでも口にするつもりであった。

彼の恋人はあの画廊を辞めることはしない。
日本で暮らす間の生活費のことなら心配いらないと言っているのに、彼女はそれは必要ではないと言い切る。
彼女は豪華に暮らすことを夢見ているのに、他人から与えられた夢は彼女には必要ないものだと切り捨てられてしまう。
彼の言うことに耳を貸さない強情な恋人のどこを愛おしく思うのか、と聞かれることがあるが、それでもシャルルは彼女が運命の人であると思っている。自分の判断に誤りは無い。彼女を愛して良かったと思えるし、それは今でも継続中であった。彼女を縛ることはしない。彼女が望めば、自由にパリと東京を行き来してもらって構わない。彼女には、アルディ家夫人として相応しい教育など必要ではない。そういう機能を彼女に求めることはしない。
先々代は幾度も再婚を繰り返していたし、先代の夫人は病気がちであり、再婚相手は精神疾患とされてアルディ家夫人としての役割というのはそれほど重要視されなくなってしまっていた。

・・・早く結婚してしまえよ

そう囁く者はひとりやふたりではなかった。彼と彼女を知る者たちにいつになったら決着をつけるのかと言われることほど煩わしい事は無かった。
その逆に、それほど愛していながらも決断することができないのは、そういう定めであり、たとえ運命の人であっても結ばれぬ者だからなのではないのかと言い出す者も少数ではなくなってきていた。
誰に何を言われても自分達だけの問題だからと言い切ることができる環境ではなくなっていた。
彼はアルディ家の当主で、この家を継承する立場にあった。同時に手に入れようと思うのは痴がましいことだと感じる時もあるが、同時に手に入れてはいけないという規定はどこにもなかった。
彼は何も感じないのではなく、感じたことを面に出すかどうかを選別しているだけなのだと知って欲しいとは思わない。特に、彼のことをよく知りもしないのに知った顔をしたり、無遠慮に掻き回そうとする者については彼は容赦がなかった。
そして同時に、彼の心を乱す者についても、彼は常に注意を払っている。
我を忘れることのできる自分が内在していることは認めるが、我を忘れさせる存在が複数あることに対しては認めるつもりはなかった。
彼女だけが、彼にすべてを忘れさせる。決して、忘れないのに。順番を忘れさせる。何をどうしたら良いのか、どのように行動すれば良いのか、彼はいつも間違えることはないのに、彼女だけはいつも正解と違うことを求めるからだ。

■FireWorks　2013　02

ひとつのところに留まりたいと思っているのにそうできない性分なのは、彼女が幼い時に転居を繰り返していたからだと聞く。それだけが理由であるとは思えないが、こうだと思ったらその場所に行き着くまで諦めないという彼女の強い信念がシャルルを圧巻させる。
そして彼は、もう、決して彼女の手を離さないと言った。
彼女がそれほどこの愛に迷っても。
本当は違う愛であったのだ、と言い張っても。
これからは身を退くことはしない。
愚かしい愛に堕ちてしまったと言われても、彼はそれでも良いと思っていた。
美しく清らかであるだけの恋や愛をマリナと継続しようとは思わない。
彼女になら、傷つけられても良いと思っていた。彼女への愛を思い切れずに現実から逃れようとした過去と違い、今はどれほど辛くても生きてきたいと思うほどに彼女のことを深く愛している。
やり直すというより、新しく始めるというより・・・芽吹いた枝葉が違う株になって育ち始めたと言った方が好適な表現であると思われた。

実際に、ふたりには意見の違いも頻繁に露呈していたし、今後のことについて先送りしようとするマリナと、アルディ家にいずれは永住して欲しいと願うシャルルとの間では「未来」というものに随分と差が生じていた。
それがふたりの関係を壊してしまうような程度のものであれば、すでに彼女はシャルルの手を振り切ってでも行ってしまっていることだろう。
しかし、そうではなかった。
ひとつ解決していく毎にふたりの理解は深まっていく。そう感じる。根拠のない、まったく目に見えない確証であったが、彼は誤りであると認めない。

・・・彼女をつかまえておくことは並大抵の男ではつとまらないのだろうと思う。
彼はシャルル・ドゥ・アルディであるのに、彼のファム・ファタルはいつも彼を乱し、勇気づけ、そして時には残酷なことを平気でやってのけるのに、恋愛に関しては保守的でひとりの人と決めてしまうと他の者に対して恋情に近い感情を抱くことすら罪悪だと感じているようなところがある。
まったく矛盾する気質を備える存在であるが、それだからこそ、シャルルはマリナのことをファム・ファタルであると言い続けているのかもしれない。

しかし、今般の件は、シャルル・ドゥ・アルディもいささか不快感で表情が強ばった。
マリナ・イケダが、「ワタル・イワツキと花火鑑賞に行って来た」と報告してきたからだ。
いつものことであるならば内心立腹しながらも聞き流す余裕を見せるのと頃であるが、彼女は己の雇い主のことを「ワタルさん」と呼び、とても楽しかったと詳細を告げたのだ。
どこがどう楽しかったのか、説明してみろと言いたくなったが、シャルルはそこで何も言わずに遣り過ごした。
ひとこと、口に出せばそれは「ひとこと」で終わらなくなることを予感していたからだ。

マリナが極端に束縛を嫌うということもあるが、シャルル自身もそういう小言のようなことは好まない。
貴族的であると揶揄されるが、彼の一族では事細かに詳細を調べ蒐集する傾向があるが、彼は更に加えて万事に完璧でないと気が済まない。
彼女との諍いが相互理解への一助になるのかそうでないのかどうかは、人間嫌いのシャルル・ドゥ・アルディであってもさすがに少し配慮することになった。

それほど、彼女のことを愛しているのだという証そのものであったが、それでも彼はマリナの行動を制限するような要求は極力避けてきた。
いつか、この家の夫人となって永住することになるだろうが、その時には彼女は様々なものを捨てることになる。
捨てるというより、見送ると言った方が良いのかもしれない。
シャルル・ドゥ・アルディは、何もかもを投げ打って日本に永住することも考えた事が無いわけではないが、それではマリナとの関係は永遠ではなくなってしまうという結論に行き着く。彼女のためにすべてを捨てる覚悟でいることには変わりないが、実際にすべてを捨てても彼女はそれで永遠の愛を感じるのかというとそうではないと考えている。

だから。彼女の些細な変化について、ひとつひとつを拾い上げて彼女に詰問することはしない。
そのくらいで感情を逆立ててはマリナのすべてに対し毎回憤っていることになるからだ。しかし今回ばかりはシャルルは秀麗な眉目に苦悶を滲ませた。

ワタル・イワツキが、「弄火」という題材で作品を発表したのだ。
マリナが話をしたすぐ後のことであった。

彼の不機嫌な状態が続く。
周囲は、また彼が何もかもを放棄して、完全に遮断された世界に入り込むか、鑑定医の仕事を新たに受けて長期出張に出てしまうのではないのだろうかと心配し始めた。

しかも、この作品はいつもと違い、彼はコンテストにこの作品を応募したのだ。通常なら、発表順序の判断が曖昧になる懸念や、盗作・摸倣という問題や摩擦を避けるために未発表作品のみを応募することが募集要項に記載されていることが多いが、今回は違った。制作者は一点だけ出品することができる。既出も未出も制限はない。
つまり、「とっておきの一作」であると札をつけて出してきたのだ。

■FireWorks　03

マリナ・イケダには独特の直感力があり、昔から厄介事に近寄ってしまう性質があるが、彼女には本当に厄介な事・・・特に自分自身に関することから逃れるためにはどうしたら良いのかという感覚も

具備しているのではないのかと思われる。
研究に値する特質だとは思うが、彼女には言わないでおくことにしている。生涯かけて研究するのだろうから。

「『弄火』というタイトルなのよ」
わかっていることを彼女は繰り返す。
顛末を聞いていたシャルルは、無邪気に報告するマリナの言葉を聞くふりをして、彼女を胸に抱いた。非常に小柄な彼女はシャルルの腕に囲まれ胸の中におさまると目を細め、安らかな表情を見せる。大きくてあたたかなものに包まれて微睡む赤児のような無垢な表情を見せるが、彼女からは彼の表情は見えない。
彼だけが知っている、彼女の表情だ。
それを確認してシャルルは安堵する。自分が勝手に創り上げた妄想ではないことを確かめ、彼女の重さと温度と匂いを感じ、彼の方こそが夢の微睡みに入り込む。
一生分の夢を見たと言った。
だから、これは夢の続きではないということを調べるための動作であったとしても。彼には、これは必要不可欠の要素である。

高価な浴衣を貸与されたこと。
普段なら見ることのできない場所から花火を鑑賞したこと。
それから、これまで話したことのないようなことについて、ワタル・イワツキと話をしたこと。
彼女の話は尽きることはない。
自分のことは余り話さないのに、他者が関与するととたんに饒舌になる。そういう彼女を愛おしく思うが、他の男のことを考えて記憶を甦らせて話す様については、シャルル・ドゥ・アルディは、寛容で尊大な態度を維持することに疲弊した。

何も変わっていないと思うのに、こういう話を聞くと、自分は変化したのかそれすらわからなくなるほど変化していないのか、時々判断に時間を要してしまうことがあった。
簡単なことを難しくしている、とマリナは言う。
しかし彼女の言葉をそのまま使用するとなれば、彼女の方こそ簡単なことを複雑にさせている当人であるという認識が甘いのだと思われた。

世界を巡って月まで連れて行きたいと思うのは、今でも偽りのない気持ちであった。彼にできないことはない。しかし、マリナは言うのだ。「世界中を回り終わったらね」彼女は人が好きで、人の居ない場所に行き着くことを畏れている様子が見え隠れする。
生に執着するのも、無の極限に立たされることが怖いからだと思わせるような言動を見せる。
少女だった頃の彼女に感じたことがある。
彼女はいつも、愛していた。

それは、生命へ愛であった。
そして彼女は死者にすら愛を向ける。
そういう人を彼は知らなかった。

「命というものは、いつの時代も、言葉を越えて考え続けるものなのね」
ワタル・イワツキとの会合で、彼女はひどく感激したようだ。
彼女が日本を離れがたいと思う理由を、またひとつ、あの男は作ってみせた。
互いにけん制しているわけではない。ワタルは、シャルルとマリナの間柄を引き裂こうと思っているわけではないだろう。そういう愛の示し方をシャルルは知っている。
たとえ自分ではない別の者と一緒でも、彼女が幸せであればそれ良い。
そう思っていた時期がある。

彼女には、彼女の世界が未現に広がっており、ぐるりと彼女を巡らせた絆という線で様々な人物が繋ぎ止められていると思われた。
恋や愛を知ると、人は優先順位を決めたがる傾向にあるが、彼女は違う。恋や愛のみで順位を決めることはしない。
例えば、彼女の知己で困窮している者が居れば、彼女は口で何と言おうが結局はその場所に飛び込んでしまうのだ。自分ができることは限られていることを承知の上で。

「花火というのは、人の生命に似ているわね。どういうわけか・・こう・・・胸に迫るものがある」
マリナが言葉にならない感想を漏らすのは、シャルルの前でだけだと思っていたかったが、最近はそうではないらしい。
とにかく、感動したことを口にしなければ幻で終わってしまうと思うような人であった。
彼女の芸術的感覚については、まったく存在しないとは思わない。ただ、彼女の固執する特定の分野だけに向けられたものではないので、それを自覚するかどうかでその後が決まると思っていた。
シャルル・ドゥ・アルディがトルソを作った時にそう思った。彼女はデッサンにばかり夢中になっていたが、彫刻やその他の分野にも興味を示す余裕がなかっただけで、本当はどういう反応を示したのか見ておきたかったという記憶が、今でもシャルルには残っている。
後悔することはないが、それでもマリナ・イケダという人物の才能を初期から知っていたのはシャルルであり、ワタル・イワツキではないのだと言っておきたかったが、愛の始まりには順番など存在しないことも、彼はまた承知していた。

■FireWorks　04

そのような前提があったからこそ。
シャルル・ドゥ・アルディは、目の前に出現した事態に対し、最初に『無表情でいること』を強行した。

相手の出方を待つ。
攻撃と防御を組み合わせることで最大の攻撃となることも、最高の防御となることも知っていた彼は、そのまま相手が声を発するのを待った。
相手が声を漏らすまで、声を発しない。
「ああ・・・いらっしゃったのですね」
ワタル・イワツキの声はとても近かった。
彼はいつも整った髪型を保っており、眼鏡も曇りがなく着衣も乱れた様子はない。業務多忙で睡眠時間が削られることもあるだろうに、目の前の彼は端然とした印象が強く残る。ボタンダウンのシャツはきっちりとした印象を与えていた。
一番上の釦が開いているのは、まだあの国が涼季に入っていないからだ。

年を経る毎に夏の時間が長くなっている、と彼女は漏らしたことがあった。
けれども、そうではなくて春や秋の時間が短くなっているのではないのだろうか、とシャルルが言うと、マリナはいつも屈託無く微笑む。
「感じ方の違いって、面白い」
彼が誰かの話を聞いて自分の話を重ね合わせるというのは滅多にないことだとマリナは知っているのだろうか。彼女のためなら、春を追って世界中を巡ることも実現できるシャルルの前で、彼女は笑う。シャルルはそう感じるのだ、と実に面白そうに大きな茶色の瞳を見開いて、ゆっくりと瞬かせる。無邪気であるのか鈍感であるのか、時々本人に聞いてみたいという欲求が起こるが、それこそシャルルが求めていた「他人を知ることで自分を知る」という目的地に一番近い行為なのだと判断し、かえって何も言わない方を選ぶことにする。
彼女は学ばなくてもそれを知り、更に学んでシャルルと違う側面を見ることが出来る人になっていった。

ディスプレイに現れるワタルは、シャルルの正面に立っている。
上半しか映っていなかったが、彼には隙が無い。
周囲は薄暗かった。彼が僅かに動く度に、淡い間接照明が見え隠れする。シャルルは青灰色の瞳を少し細めた。

こちらのことは相手にはどう映っているのか。
目の前のWEBカメラの位置を確認する。
同じ程度の近接さを感じさせながらも、表情を崩さないように気を配りながらシャルル・ドゥ・アルディは背凭れに深く体を沈めた。
余裕をもって接しなければならない相手であった。
急に、予告もなく始まってしまった試合についてシャルルは受け流すつもりはない。彼の家の家訓は厳しいもので、投げかけられた勝負にはいつも挑むようにと教えられて育った。
今でもそれが間違いであるとは考えていない。

ワタル・イワツキの身長と、現在視認できる状況からシャルルは推測した。
本来応答するべき相手がではない人物がディスプレイの向こう側にいることと、彼の見える角度から、向こう側はきっと、あの画廊の中なのだろうと判断することができた。奥まった場所にある空間があり、スチール製の椅子と一枚削りのアルミテーブルの上にラップトップは置かれて、ワタルが覗き込んでいるという状況であるらしい。

この接続回線は、マリナ・イケダの自宅に設置されたが主たる目的であったが、別の接続回線を使用した警告が発せられたので、シャルルはそれを確かめるためにリモートでマリナのマシンに附属しているWEBカメラとアプリケーションを起動させたところ、突如、ワタル・イワツキが現れたのだ。
驚かせたいという意図は働いていなかった。どちらも、少なからず驚愕の呼吸を味わった。ワタルは起動させていないプログラムが走ったことに驚愕し、シャルルはあり得ない人物が映り込んでいたことに驚愕した。

マリナ・イケダのために設定されたラップトップを、なぜ、ワタルが使用しているのか。まずはそこから尋ねるべきであったが、それを敢えて保留することにする。人並みの順序で質問すれば、目の前の男は陥落しない。
再生できないほどに打ちのめしたいという、内なる願望が頭を擡げたが、シャルルはそれを抑えて静かに声を発した。
できることなら、今すぐ東の国まで飛んで行き、その足で彼女の勤務する都内の画廊に出向いて詰問するところだ。
シャルルの恋人の私物になぜワタルが映っているのか自分で確かめずにはいられない気持ちに駆られるが、それを悟られたらこちらはいつまでも優勢になることはできないで終わってしまう。

どうしてそこにマリナの自宅にあるべき私物があるのかという問いをしないままにしていると、ワタルの方が先に話を切り出した。
微笑みを浮かべながら、彼はまったく動じない温和な態度でシャルルを迎えた。

あり得ない妄想で目眩がする。
彼だけが独り占めしているはずの彼女の肌のにおいや、髪を頬に受ける時の感触を他の誰かが知っているとしたのなら。
そして、最も知られたくないと思う相手が知っているとしたら。
それを考えるだけで顳顬に鋭い痛みが走る。

彼女を疑っているわけではないのに、なぜ、あの男がこの状況でここに居るのか、その可能性を考える。マリナは恋愛に関しては禁欲的ではあるが、ひとりの者以外に心を動かされないということではないことは、シャルルは身を以て知っているはずであった。
彼女とシャルルの価値観は違っている。それを理由にするつもりはなかった。彼女が、自分以外の男の手に、シャルルが贈った品を委ねるのであれば・・・シャルルは、マリナが自分に向けている感情の正体を見極めなければいけないのだと改めて決心するだけであった。
それがどれほど、彼に屈辱と哀しみと絶望をもたらしたとしても、彼はシャルル・ドゥ・アルディである限り、誇り高く生きることで彼そのものを証明している。マリナが気持ちに偽らないことを誇りにしているように。
「彼女は、兄と一緒に食事に出ました」
ワタルはいくつかの疑問のうちのひとつをあっさりと回答した。
隠していても、焦らしても仕方の無いことであったし、遠く離れたパリと東京の間を結ぶ回線を挟んではできることは限られている。一方的に会話を終えてしまうことも不本意であった。
「今、兄がこちらに仕事で立ち寄ったものですから」
彼の言葉だけを聞くと、被雇用者のマリナとどんな事実関係があるのか、知らない者にはわからないだろう。傍に人がいないかどうか判別が難しいので、そのように情報を絞って話をしてくるところを見ると、温厚そうな物腰とは裏腹に非常に頭の切れる男であることがわかる。
あえてマリナの名前を出さないところや、彼の兄との関係について事細かに事情を説明しないところが策士の片鱗を思い浮かばせる。
そう言えば、マクドゥガル家にも、このような非常に温厚な当主がいたという記録があったことを思い出していた。彼は恵風の君と呼ばれた病弱な主であったが、慧眼の持ち主と言う以上の才覚を持っていたという記録が残っている。夭逝してしまったが。

まったく食えない男だ、と思った。
相手もそう思っているのかもしれないが。
そしてシャルルが応じない様子を見ると、周囲に誰もいないのだということを確認できたらしい。
もし、他の誰かが居たとしたのならば、シャルルは人払いをするはずだろうし、そういう必要のない相手が傍にいるとなれば人の気配も集音マイクで拾うはずであった。
ワタルは微笑みながら、言った。
「それで、久々に食事でも行こうかということになって・・・その間、僕がこちらを預かって、設定変更をしていたのです」
シャルルやジルに依頼するのではなく、ワタルに依頼するマリナの真意が計り兼ねた。シャルルがまだ無言でいると、ワタルはこの時だけ首を少し傾けて、丁寧に説明した。
「僕の使っていたペンタブレットを、少し古いタイプなのですが、イケダさんに譲ることになりまして、その設定がひとりでは心元ないということだったので、それでは僕が設定しましょう、と引き受けたので、ここに移動してきているという経緯です」
まるで先に考えてあったかのような、澱みのない喋り方が気に障った。ここでマリナが世話になったことに礼を述べるつもりはない。

マリナ・イケダはシャルル・ドゥ・アルディの所有物でもないし、シャルルがワタルに礼を言う義理はない。

確かに、見た目は汎用のものと大差ない作りになっているが、構成そのものがかなり違っている独自のOSである。これを扱えるのはダイとダイの友人くらいであろう。あの頃の年齢は何かとソフトにもハードにも好奇心旺盛であるから、それは当然の現象だと思ったが、ワタル・イワツキがそれを目にするとは。
・・・少し相手の能力を低く見ていたようであった。

ワタルがマリナの自宅にまで赴いて同じ作業をするというのは賛成できなかったし、それは流石に雇用関係を逸脱しすぎたものであると考えたのだろう。
十分に逸脱していると思うが、という言葉を呑み込んだ。
寛容であることと気高いことは同一ではない。
そして、人が憤った時には多くの言葉を出さない方が得策であることも知っていた。
また、後ろめたい者ほど口数が多くなる。ワタルはそういう焦りは感じていないようであったので、彼の言ったことは真実だろう。けれども、どうにも納得できなかった。これがダイであったのなら、特段何も言わないだろう。なぜ、ダイに依頼しないで、都内の画廊にまでそれを持ち込んでワタル・イワツキに依頼するのか、そちらの方が疑問であった。

それを読み取ったかのように、ワタルは加えて説明を続ける。
「僕が、イケダさんに今度是非見せてくれと言ったのです。
自分の使っているディスプレイと色の出方が少し違うようだという話を聞いていて、どんなものを使っているのか気になっていたのですが・・・軽率でした」
おそらく、先般のことをマリナは気に留めていたらしい。
先日の花火大会で、相当な品を貸し出してもらい、大変に感激してしまったとシャルルに無邪気に打ち明ける恋人に、彼は激しく狂おしい情念をぶつけたばかりであった。
彼女はそういう激しい恋情に躊躇うことが多かった。
マリナは開放的かと思うと案外そうではない部分がある。
こじ開けるつもりもないし、それがマリナ・イケダであると考えているのに、どうにも激情を鎮めることができない。
そんなシャルルにマリナはいつも困惑しつつも受け入れていた。
ふたりの関係も、少年と少女の頃のままではなくなっていた。

■FireWorks　06

わざわざワタルに見せるためだけに持ち運ぶ品でないことも承知していたようだった。
ペンタブレットの譲渡の申し出は事実だろう。
彼女なら素直に受け取るだろと思った。

しかし、シャルルにひと言告げれば、何でも揃うのに。
それでは彼女はやはり満足しないのだ。それなのに、なぜ、ワタルの申し出は素直に受け入れるのだろうか。

シャルル・ドゥ・アルディはそこでようやく口を開いた。
「私は警告通知を受信したので、確認しただけだ」
普段、マリナの前では「オレ」と言っているが他の者の前では「私」と言う彼の呼称を聞けば、ワタルがシャルルにとっては親しい友人などではないことが明白である。
それなのに、ワタルはとても寛いで気負うこともなく、この場を受けて入れているようであった。
自分の言葉が言い訳のように聞こえる。
通常ならば、どれほど親しい相手でも強制的にログインすることを行使することは殆ど無いだろう。
日本より個人主義であるとされるこの国の者であるのに、と言われないように配慮しただけであると己に言ったばかりであった。
自分の所有物であるとは決して思っていない。
以前にも、マリナに確認したことがあった。
居所を明確にして欲しい、と。
彼女の行動は彼女が決めると怒り出すかと思っていたが、彼はそうしなかった。

しかし、マリナはできるだけ努力すると言った。
これは彼女にとっては、かなりの譲歩である。
そしてラップトップの接続環境については、彼女は特に気にしていないと言ったので、この状態を継続しているだけである。
ただ、もう二度と無断でGPSは付けるなと強く言われたのでそれは断念した。
遠回しに、彼女の許可無くアクセスするなと言いたかったようであった。
けれども彼女が以前に使っていた旧型のラップトップがどういった経緯で今のものに挿げ替えられることになったのか知っているシャルルとしては、彼女との唯一の通信手段のメンテナンスをしているだけだという認識でいることにしていた。

「ああ、通信回線に影響があってはいけないと思いまして、こちらも確認しました」
悪びれた風もなく、ワタルがそのように言った。
確かに、市販のドライバの不適合があるらしいとジルを介してマリナから連絡が入ったことがある。
汎用プログラムに合わせてこちらの用意したものを修正するのではなく、ソフトがシャルルの構築したシステムに合わせれば良いだけなのに。
そう言うと、マリナは少し頬を膨らませて彼に意見するのだ。
歩み寄る努力をしろとシャルルに諭す。
まったく必要のないことだと冷笑すると、彼女は「私に歩み寄ってくれたことよりも簡単なのだから」と言ってのける。

それとこれとはまったく次元が違うことなのに。

「なるほど、素晴らしい構成ですね。この性能であれば大抵の作品も苦もなく作れると思います」
彼がそう言ったので、シャルルは視線を僅かに下げた。

ワタル・イワツキが作品のことに触れたので、シャルルはそこで反撃することに決める。美善な笑みを作り、彼に向かって整った唇で遣り込めることにした。
「今度の作品で受賞すれば、以降は日本で活動することを再考することになるのでしょう」
シャルルが抑揚なくそう言うと、ワタルは温和な微笑みを浮かべた。
「ありがとうございます。しかし、この仕事はどこでもできるものなので、特に活動拠点をどこかに据え置くということはまだ考えていません。それに画廊の経営もありますので」

この男、と内心呟いた。
ワタル・イワツキは、タケル・イワツキ以上に底の知れない男かもしれないという予感は確信に変わった。
シャルルが「再考」と言ったのは、これまでの経歴からワタルが幾度も海外に拠点を置くことを勧められていることをシャルルが把握していることを示す。彼は日本で活動することを変更する予定はないのだ、と言い切ったのだ。繁忙であるならば、副業としている画廊経営も誰かに引き継げば良いだけの話なのに、ワタルはそうしない。仕事はどこでもできる、と言ったのはシャルルに対する棘付きの言葉であった。
パリで暮らすことについて、シャルルも同じなのだから黙っていろと言ったのだ。
それに、「どこでもできる」と言い切るのは、いざとなったら自分はどこでも移動できるのだから、という意味も含まれている。
シャルルと己は違っているけれどもそれは決して劣っているわけではない、という宣言に他ならなかった。

シャルルの眼差しが険しくなった。この男は、非常に知的であるが狡猾で、冷静であるが情熱家であることを認めざるを得ない。
そして最悪なことに、シャルルの恋人の絶大な信頼を勝ち得ている。
彼は穏やかに話をしているが、受賞を確信するほどの自信の作であり、それはマリナ・イケダをモデルにしたものであることについて、口を差し挟むなという忠告をシャルルに投げつけたのだ。

■FireWorks　07

マリナ・イケダには、定期的にパスワードを変更するように伝えていたが、本人が第三者に伝えて使用許諾を与えてしまっているのであればセキュリティという言葉はまったく無意味なものになってしまう。
シャルルが提示する使用方法をマリナは守らないだろう。

彼女は危機管理能力が極めて乏しいと思われる。
本人はそう感じていないようであったが。
僅か数秒で開錠できるような扉の中で暮らしていた少女時代からまったく成長していない部分であった。

彼女は、人間は常に善から始まり、悪に遭遇するということは本当に稀なことなのだと考えている節がある。それで幾度も面倒事に巻き込まれているのに、自分に責があるとは思い至らないようであった。

「すでにご覧になっていただいたのですね」
わかりきったことであるのに。
なぜ、この男は挑戦するのか。

シャルルは薄い唇から吐息を漏らした。
失望なのか絶望なのか、それともももっと別の感情なのか計測することにする。

彼が運営するWEBサイトの隠しページで、ワタルは彼の作品のうち、マリナ・イケダをモデルにした作品を掲載している。
彼女をイメージにしたものである。それを許すか許さないか・・・シャルルが決める感情であったが、シャルルが決めることのできない申し出が彼の知らない間に決定されていたことに憤慨したが、マリナにはそれを伝えていない。
何もかもを束縛することが愛ではないと考える。
かつて、彼は束縛され、心の中すべてを支配しなければいけないと押し付けられることを厭ったことがあった。
新しく誰かと愛を始めることができるかもしれないと考えていたのに、彼が述べた「青春の輝き」の時代を捨てることはしなかった。それを捨ててくれと言われてノンと言った時、相手は去って行った。

だから、彼女に強制することはしない。
しかし、マリナが彼から去ることは許さない。
癒えないほどに傷ついても、彼女であればそれでも良かった。

「これらは単にツールでしかない。しかしながら、持ち得ている者はそうではない者よりも多くの可能性を手に入れることができる」
「そうですね。持ち得ていない者・・・それはとても意味が深い」
ワタルが軽く頷いたが、温和な言葉の端々から、シャルルに対しての問いかけを感じる。
責めるでもなく､詰るでもなく、彼は問いかける。だから厄介なのだ。

持たざる者ではなく、持ち得ていない者について彼は反復してきた。
マリナ・イケダを持ち得ている者とそうではない者との会話であると彼も認めていることなのだ。
マリナが、もし、シャルルと再会していなければワタルと恋に堕ちていたのかもしれない。
しかし、そんな可能性は認めない。あり得た話だと考えることもしない。

シャルルはそこで僅かに視線を伏せた。
指先を動かし、パッドを動かす様子をディスプレイに映してみせた。
あたかも、マルチディスプレイでたった今、捜し当てたかのような様子を見せる。
・・・今のWEB会議システムが起動してサブウインドウに切り替わる前から見ていた画面を、今、開いたかのように装う。

「いずれ、マリナ・イケダを描いたものはすべてアルディ家の所有となるでしょう。マリナ・イケダでなくなる前に」
シャルルは挑戦的に言った。いや、本当に挑発していたのだ。
彼女のことを描いたものをこの世に残しておくのは、シャルル・ドゥ・アルディだけだ。
そして、彼女が描いたものとともに、永遠にアルディ家が保護していく。
だから、これは記録なのだ。いずれ、ワタル・イワツキが彼女のことを題材にしなくなったときには、速やかにすべてを入手する。

彼は青灰色の瞳で、それを眺めた。
それは確かに「弄火」であった。
タイトルと内容が不一致であるものが多い昨今の創作を幾つも見てきたが、確かにワタルの才能は素晴らしいと唸る。
気に入らない相手だから認めないという意識はシャルルにはない。

暗闇に咲き、散っていく華を描いたものであるが、その奥にはひとりの女性が映り込んでいる。斜め上から見下ろした彼女の顔は、シャルルのファム・ファタルであった。
たった一瞬、煌めく光を放つ夜空の華光の下で微笑むひとりの女性を描いたもので・・・それは感歎するほど清麗であった。宗教画に近いと思ったが、神に近い者の深微ではなく、人に内包する愚かさや悲しさや孤独、そして命の煌めきへの憧れと憐愍を表現している。
あっという間に散ってしまう瞬間でありながら永遠を感じさせる。
彼女は、花火を見上げていないのに、あたかもその花火に驚歎しているような表情を見せていた。

・・・ワタルが彼女を見下ろした時の角度だな、とすぐにわかった。
声を荒げて、すぐさまそのファイルを削除しろと怒鳴りたくなるほどに、完璧であった。
マリナ・イケダという人物の・・・彼女のすべてを表現している。

目の錯覚を利用したものであるが、その精巧な作りには、相当時間をかけたと思われた。
グラフィックデザインの域を超えていた。彼は油絵などにも造詣が深いのかもしれない。

■FireWorks　08

ワタル・イワツキが控えめだけれども当然のように自信に満ちた答を返してくる。

「是非、あなたの感想を伺いたいものです」
ワタルはそう言って淡く微笑む。
シャルルは苦笑いを浮かべて、目の端を動かした。
「それなら、受賞の記念には祝辞を贈りましょう。感想は、その時に」
シャルルの言葉がわからないワタルではない。
結果が出るまでは自惚れるなと遣り込めたのだ。
けれども、ディスプレイの向こう側の人物は、まったく動じていなかった。

「こればかりは、自分ではどうにもならないものですから、あとは結果を待つばかりです。・・・落ち着かないですね」
落ち着き払った声音で、ワタルが言った。
「貴方も昔、彼女をモデルに作品を創りましたね」
シャルルは話題を変えてきたワタルに、軽く頷く。調べればわかることだ。
最終的には顔を取り除いたトルソになったが。そして、それで受賞している。
その時のことを言っているのだろうと思われた。
「多方面に才のある方は羨ましい。それ限りにはせず、どうか続けて頂きたい」
ワタルの誘いに、シャルルは苦笑する。確かに、思いつくままに思いついたものを創作する日々とはかけ離れた毎日を送っている。
恋人と自由に会うことできないほどに。
確かに、彼の業務は多忙を極めている。忙しく分刻みであるのだと自慢するのは、それまでがそのような生活を送っていない者が述べる感想でしかない。
彼は生まれながらに貴族の特徴を備えていたが、彼の環境も同様であった。特定の業務に就くことは今はしていないが、肩書きを並べれば相当な数になる。
そういうものに興味がない人物が恋人であったので何も言わないだけであるが、ワタルはそのような身分のシャルル・ドゥ・アルディがワタルと同じことをするのは難しいだろうと言っているので、シャルルは冷笑して応じた。

「私のことは私が決めると言いたいところですが、彼女をモデルにした作品を創ったとしても、今後

は発表するつもりはありませんよ。あの誠次・マクドゥガルがそうであったように」
彼に絵画を売却した際に経験した一連の出来事について触れた。誠次は自分の愛した人の作品を世に出すことはせずただ描き続けた。
最終的にはどのくらいの数になるのかは、まだ、わからない。
シャルルが次にマリナをモデルにする時は、勝負をするときである。
そう決めていた。

「誰かに見せたいという欲求は、興味深いものなので、それを研究するのであれば関わることもあるでしょう」
シャルルは長い脚を組み直した。静かな部屋で、自分の声とスピーカーから漏れるワタルの声が往来するだけであった。WEB会議システムが正式導入されてかなり便利になったが、それでも顔を合わせて話をしなければいけないという古い主張を繰り返す者たちに譲歩して遠出しなければならない時もある。
自分が自由にならないことを受け入れて、自分が自由にならなかったことを自由にできるようにする。だからこそ、マリナ・イケダを迎え入れることができるようになったのだ。
それを、目の前の男に渡すつもりはない。少しも、ない。

「彼女はひとつのところに留まらない。あの時は、それができる状況であったから」
この男に、あの時のことを話してやるつもりはなかった。
青春の輝きと呼んだあの時代、彼女のことをどれほど見つめ、彼女のすべての表情を目に焼きつけ、そしてすべての気持ちを込めて作った。結果ではなく、あの過程こそが大事であったのだろうと、今では考えていた。

だから、同じ様な状況で彼女をモデルとして縛ることがないのに、ワタルは次々と作品を発表する。
しかも、正式に、広く一般に知らしめるのはこれがはじめてだろうと思われた。
それまでも、いくつか作品を発表していたが、彼女の顔をはっきりと描いたものを出してきたのはこれが初回だ。
なぜ、そのような気になったのかという決断までの過程が、気になった。
自分があの時に、彼女をモデルにしようと決めてそして作品を創る時に注いだ情熱を思い返しながら、彼は尋ねる。

誰かと自分を比べることはしない。
シャルル・ドゥ・アルディはたったひとりだからだ。
しかしながら、とらえ所のない目の前の男に何かの変化があったことは確かであった。
彼は、それを解明したいだけだ。
自分に言い聞かせるが、ワタルはどこから話をしても、まったく綻びを見せない。
いつも柔和で温厚な姿勢を崩さない。

恋人のいる相手をモデルにして、しかもひとつの作品だけではなく連作で作り続けるということが何を意味しているのか、説明できない人物ではないだろう。シャルルはそこまで彼を過小に評価するつもりはなかった。
シャルルはその美貌を崩さずに言った。
「私はそこまで彼女を監視するつもりはないが、この通信プログラムに干渉しない程度に調整願う」
ワタルは頷く。まったく余裕の表情で、わかりました、と言った。

■FireWorks　09

「・・・彼女から、貴方が描き直せと仰った絵を修正したいという相談がありまして」
ワタルはそのように説明した。タブレットを譲渡するまでの経緯を説明したのだ。
「彼女はこっそりと使い方を学びたいので、と言ってきたので」
ワタルはその時だけは申し訳なさそうに言った。
彼女との会話を断りもなくシャルルに語ってしまったことについては苦悶しているようだ。
「このことは内密にお願いします」
やむを得ない事情説明であったことを念押しする。
シャルルが頷くと、ワタルは画面の向こうで、安堵する。

「彼女の作品は大変に創作意欲を刺激されますね」
ワタルはそう言って彼女を讃えた。
「そして、彼女の発言も、とても参考になっています。最近では言葉で表現することも優れているのかなと思うこともしばしばです」
それはワタルの兄であるタケル・イワツキに師事しているからだろう。
彼はまず徹底的に言葉で表現することをマリナに指示し、彼女が目眩がすると言うほどに大量の課題を出しているようであった。
成人してからの勉学というのは必要不可欠であることが着手理由になっている事が多く、業務に直結していることも多々あるので成果が目に見えて出せるという利点がある。
その代わり、成果を出せなければ再挑戦することはなかなかできない放置項目になりがちではあるが。

「彼女がタブレットを使って絵を描きたいという新しい試みを受け入れるというのであれば、それをお手伝いしたいと思いました」
「なるほど。貴方の興味も多方面に渡るのですね。発見した後は開発したくなる。次にそれを発表したくなる。これは研究者の心理です」

シャルルは辛辣に言ったが、ワタルは気を悪くした風でもなく、首を横に傾ける。

淡い照明が眼鏡に映り、一瞬だけ閃光を放ったが、それが彼の心の動きであったのだとしたら、かなり腹立たしく思っているだろうと想定する。
考えていることを知るには、怒らせるのが一番だ。
激高すると、当人は言わないでおこうと決めたことも喋ってしまうのだから。

彼女を絵画の発掘と同等にするなと釘を刺したつもりであった。
彼の兄のタケルもそうであったが、人を教えるということに夢中になっているきらいがあった。もっとも、タケルはそのような職に就いているのでそれは当然であったのかもしれないが、ワタルはそうではない。
単なる雇用者と被雇用者の関係を越えている行為に、シャルルが苦言を呈すことも関係を越えていることではあったが、それでもシャルルは踏み込んで彼に言った。
・・・・こうして話をするのは滅多にないことである。
いつもは顔を合わせてもそれほど長くは話をしない。
マリナがそこに居れば、シャルルは彼の心を推し量ろうとしない彼女に憤りを向けることはわかっていたし、そうすることがふたりの仲を深める手段になるとは思っていないからだ。

どうにもならないほど、深く愛してしまった。
愛しすぎたら、それは敗北なのだとは考えていない。
これまではそう思っていたが。
彼がそれを認めるということは、彼の中にある彼ではどうにもならないことを肯定するということだ。彼はフランスの華と呼ばれて久しい。彼にできないことはない。
けれども、たったひとつだけできないことがあった。
それは忘れることだ。

彼が深く愛しているのだという気持ちが自分の中にある、と認めることができるのは、マリナに対してだけである。
しかし、この男は一体何をしたいのだろうか。彼女が幸せであればそれ良いと本気で思っているのだろうか。
シャルルは常に気高く、縋ることはしない。
別れはあり得ないと固く信じることで別れを招くことがあるのだと過去に学んでいる。
彼女に愛の滾りを押し付けて、彼は彼女がどうしたいのか尋ねることはなかった。
ふたりの未来について、彼女の未来について、彼は尋ねなかった。
聞けば、彼女を行かせることになるとわかっていたからだ。

だから、シャルルは彼女が日本に行くことを止めない。
むしろ、パリに戻ってくるための反作用の力だと思えば奨励した方が良いのかもしれないとさえ思う。
彼女には多くの人物との関わり合いが必要で、多くの者たちとの会話が彼女を彼女にしている。

本当ならパリのアルディ邸で閉じ込めておきたいくらいだが、それではマリナでなくなってしまう。

だから、行かせる。
愛しているから、行かせるのだ。

しかし、だからといって、マリナを気に入らない男に渡すという粋狂な真似をするつもりはない。

■FireWorks　10

「一度描き上げた作品を描き直すことほど、葛藤を伴う作業はありませんね」
ワタル・イワツキがそのように言ったので、シャルルは苦い笑いを浮かべる。

彼女が彼の誕生日の記念に描いたあの絵を、ワタルも見ているのだろう。
それで諦めると思っていたが、よほどマリナに心酔しているのか、それともももっと違う想いが彼の中にあるのか・・・どちらでもシャルルとマリナの関係に影響することはない。そう信じていなければ、この愛が揺らぐ。
愛は、信仰に似ているが、少し違っている。
どちらも捨てることができ、他との両立を拒み、そして次の新しいものに目を向けることができる点だ。

けれども、そのふたつは違っている。
捨てた過去を容認できるかどうかだ。

マリナにその選択をさせるつもりはない。
シャルルは不敵に微笑んだ。
「練り上げるための手直しは時には必要ですよ」
「あの作品は、何度も描き直しをして完成度を高める類の作品でしょうか」
ワタルがそう切り返したので、シャルルは不満そうに自分の手を顎に持っていく。
彼が考え始め、そして相手を叩きのめす時に見せる仕草のひとつだ。
もっと早く、彼を滅してしまえば良かったのに、と思う。
後悔はしない主義の彼であったが、それでもシャルル・ドゥ・アルディに挑む者を放置しておくつもりはない。
いつでも自分に挑めと思う一方で、この男はそのような気持ちでいるのではないのだろうと確信に近い想像が頭を巡る。

「・・・それでは、あなたの出品した作品は、練り直したものなのかどうかを伺っても良いということですね」

シャルルは言葉を選んでそのように囁くように言った。

マリナを想って幾度も描き直したと正直に告白するのかどうか、彼は試したのだ。
試してはいけない、とマリナに言われることがある。けれども、彼はマリナに対してはそうしないと誓うことはあっても、他の者に対しては同じであり続ける必要はないと考える。
この世のすべての者が、シャルルがマリナを愛することは間違いだと言っても、彼が間違いではないと言っている限り、それは間違いではない。
正誤を問うような性質のものではないことは、彼もよく承知している。

彼女に、割り切れない数値の場所からはじめようと言ったのは、そういうことだ。
あらゆる事柄に、ウイとノンで区別することができない愛だから。
・・・だから、同じ様に。
シャルルはワタルに尋ねてみることにする。

この男が誤魔化したり逸らかしたりするようであれば、ただちにマリナを日本からパリに永住させるための手続きをとる。
あの画廊にある絵画やあの場所そのものが、彼女にとって必要な場所であると思うからこそ、黙って行かせるのだ。

そうではないと判断できれば、それはもう必要のない配慮ということになる。

マリナからの話があって程なくして、あの作品は公表された。
それほど時間をかけずに完成させたのだろうが、彼の疲労している様をみると、かなり労力を費やしたのではないのだろうかと容易に想像できた。
一度応募してしまえば、その後に手直しをすることは禁じられている。
まったく違うものになってしまう可能性が高いからだ。

「感想をこの場でいただけるとは」
ワタルの言葉に、シャルルは青灰色の瞳を瞬かせる。こうして相対して話をすると、彼はこれまで感じることがなかった心が奮い立つ感覚を味わう。
イワツキ兄弟の長兄もなかなかのくせ者であるが、この次兄はまったくとらえ所がなく、対策を練るのが一苦労させられる相手だとは気がついていた。
しかも、あの画廊の受付に座る女性ではなく、マリナ・イケダをモデルにしたいと言い出すことからしてマリナに興味を持っているのは一目瞭然であるのに、当人であるマリナはまったく気にならない様子であった。
シャルルから「ワタル・イワツキと親しくなりすぎないように」と忠告することはなかったが、それでもマリナが余りにも無防備なので、いつか、彼女に反論されることを前提に話をしなければいけな

いのかもしれないと考えていた。

「感想ではありません。そのように時間をかければかけるほど完成度が増すと考えている内容なのかどうか、ということだけを確認したいだけです」
「それはなぜでしょうか。伺っても宜しいでしょうか」
シャルルの言葉に踏み込んで、ワタルはそのように言ってきた。

彼の作品は、確かに作品名のとおり「弄火」そのものであった。

散りゆく命の煌めきを題材にしたものであることは一目瞭然だった。
命の名残に溜息をつくようなマリナの顔に、すべてが表されていた。彼女がいかに、人の生命について深く考え続けているのかということを、的確に表現した構図だった。

■FireWorks　11

シャルルは言い淀んだ。
彼には滅多にないことであった。
しかし、マリナの事に関しては彼は普通の男になってしまう。
自分だけが自分に干渉できると思っていたが、彼女は彼に作用し続ける。
再び出会って恋に堕ちた時に、気がついた。
彼女は、シャルルを特別な者として見ることはない。誰もが、彼をフランスの華と呼び、そして叢がるように縋るが、彼女はそうしない。
ただ一度だけ。
自分の友を救って欲しいと懇願したことについて、シャルルとマリナは答を出していない。でも、それが相手を傷つけたと想い、今でも忘れていない課題になっていた。
あの時に、シャルルが拒否しなかったのは、彼女を愛していたからだ。
そして彼女がシャルルに懇願した命についての重すぎる希望は、マリナ自身の枷となって今でも彼女の中で、希望とは違う名称で残ったままになっていた。

だから、彼女は命について語る時にはとても注意深くなってしまう。
彼女の大きな特徴でもある、思ったことや感じたことをそのまま口にするということは、その場合には除外されてしまう。

だから。
「弄火」を見て、愕然とした。
シャルルは平静にそれを受け止めることはできない自分に気がついた。
彼女が、シャルル以外の者と、命について語らうということが、彼の中では驚きとして認識された

のだ。
また、彼はもうひとつ発見した。
マリナの深い部分について誰かに語るということがジル以外にほとんどないことに気がついた。

「出品の募集要項による制限があります。創造性の喪失に伴いますので、修正は出品後はできないことになっています。それをご存じの上で、そのように仰有るのであれば、何かお考えがあるのではないのでしょうか」
ワタルの口調はいつまでも温和で、それでいて会話を中断させることを赦さなかった。もしこの話題を別のことに摩り替えられたとしても、彼は微笑んだままだろう。そして二度とシャルルとはこの件では話をしないのだろうと思われた。
それはこちらとしても特に不都合はなかったが、何よりマリナ・イケダに関することで彼が曖昧な言及をすることは、シャルル自身が赦さないことであることをワタルは知っているからこそ、こんな話をしてくるのだ。

「・・・彼女に、弄火という名前の浴衣を着て頂いた折のコメントに心を揺さぶられましたので、これを作品にしようと思いました。
命を弾かせるように生きることも、その名残を惜しむこともすべて大事なのだと教えられましたので」
これは恋の告白なのだろうか。それとも、想い人がいる者に恋慕した懺悔なのだろうか。そう思うが、シャルルは黙ったままだった。
けれども喉が渇き、どうにもならない憤りを感じている。その証拠に、指先が僅かに震えていた。彼も人間だ。全く何も感じないわけではない。
他の者たちと違うのは、それを上手く隠しているかどうかという違いだけであった。

そういう意味で言えば、ワタルはかつてのシャルルなのだろうと思う。情熱の表し方が違うだけで、彼は片恋に悶えながらも相手と幸せに並ぶマリナを見て満足させようと心に言い聞かせている点が同じであった。
ワタルがどう思っているのか、口にすることはなさそうであったが。
それでも、ワタルは彼女のことを愛していることは間違いようのない事実である。そうではなければ、彼女を高額な聴講生として送り出すこともないし、実績のないままに絵付け教室の講師を継続させることもあり得ないだろう。そして、パリに買い付けに行かせるというのも、日本の制度や仕組みの中では考えられない破格の待遇であることは、ワタルもわかっているのだ。
しかし、敢えてそうさせる。
それはなぜなのか。
そこにある理由はひとつしかない。
たったひとつしかない。

彼は言った。

「人の出逢いというものは常に更新されていくもので・・・そして、僕は彼女に常に刺激を与えられているような気がします。それは、グラフィック・デザイナーという肩書きの僕の感想ですが、画廊を経営する立場からしても彼女は得難い逸材だと思っています。実績も出しているし、画廊の収益にも繋がっている」
そして一度、言葉を切るとワタル・イワツキはまた首を傾けて微笑んだ。
まったく余裕の表情に、シャルルは唇を僅かに噛む。

「完成するまでに手を加えて、彼女のイメージを損なっていないかどうかという問いでしたら、否、です。本来の彼女であると思いますし、僕の中で改編されているとも思えない。そのままの、ありのままの彼女だからこそ、僕はイメージモデルとして使いたいと思うわけですし。・・・そういう状況ですから、僕は彼女を塗り替えたりしません。かつてのあなたが、彼女をモデルにした時にどのようにしてトルソに変更されたのかは知る由もありませんが」
この男はどこまで知っているのだろうか。マリナは、どこまで話をしているのだろうか。シャルルはそう思ったが、ワタルに尋ねるくらいなら舌を噛んだ方がましだと思えた。

■FireWorks　12

彼女が出会った人物達をすべて否定するというつもりはない。
シャルルが「青春の輝き」と言った時代以前に出会った者も居たし、その後に出会った者も多かっただろう。
シャルルにも、多くの出逢いと別れがあった。
彼に座右の銘を与えた人物や・・マリナが傍にいないという虚無を埋めた人物が居たことは否定しない。
それらを経て、今の彼と彼女が存在する。
少女や少年であった頃のままに過ごせないことを知っているから、互いに離れることはしないと誓うことができる。約束ではない。誓いなのだ。己に誓い、相手に誓い、これまで過ぎてきた相手に誓う。
最後の恋ではなく、順番すら関係しない、これが他とは何もかも違う愛なのだという確信が彼と彼女を繋ぐ。
他と比べることもできないし、他に勝るといいう言い方もできない。

もう、手を離さないという誓いがどれほどの重さと枷を持っているのかも承知していた。
彼は約束ではなく誓いを持って彼女に告げたのだから。

シャルルがマリナをモデルにした時は、深刻な事情があった。それでも、彼女を通して表現することの歓びを知り、芸術を介して理解できる者がいると知った。彼には、彼を理解できる者を多く必要と

してはいけないのだと思うようなことばかりを経験して、人と接することに対して身構えていたあの頃を思い出す。

マリナ・イケダと・・・邂逅と呼ぶに相応しい、必然と偶然と逢いたいという希望が干渉し合って彼と彼女を引き寄せた。
そして、彼は、また同じ人を好きになった。

ワタルの愛はそうではないのだと彼は言う。決して修正しないと言う。彼女のそのものを描く過程で、彼は過不足なく表現できると言っている。

墨色の昊に浮かぶ、命の煌めきのような昊華に浮かぶ彼女の顔は、見る者によって違う感想を持つのだろう。完璧な構図、完璧な配色。
ワタル・イワツキの才能というものは底知れず、このまま活動を続けていれば、この時代を代表するクリエイターのひとりとなるだろう。
「僕は日本の色が好きです。様々な季節があり、その中で彼女がどんな風に何を感じているのかということを軸にしています。それが僕の表現方法です」
シャルルは息を吸った。ワタルの価値観に同調するつもりもない。
しかし、「弄火」という作品は、彼に深く染み渡るような感慨を与える。
そこには、命の往来があるからだ。消えゆく命、これから輝く命、受け渡す命・・・一瞬の中で、すべてが光となって音となって交錯する。
それを資格のみに訴えると言う彼の自信が窺える。
ワタル・イワツキが日本が好きだと言ったのは・・・あの作品達は、日本の四季や伝統や行事を知っており、かつ、命というものについて考えたことがある者に対してのメッセージなのだと思われた。

火を弄ぶという意味を持つが、火は命のことで、「弄」は本来、心の慰めとして愛することをあらわす。
命を愛するという題材を、ここまで的確にしながら飾らず、それでいて最も労力を注いだ作品を、他の者たちのそれと比べるような場に出すのかとシャルルは疑問に思った。
しかし、自分自身もそうしたことがあった。
彼女への愛が、ひとりよがりではないことを叫びたかったのかもしれない。
人の苦悩と希望を表すと賞されたが、本当は・・・マリナへの愛恋を残したかった。

「なるほど。
・・・日本に居る彼女を描きたいということであれば、間もなく
それは難しくなるでしょう」
「どうでしょうか。僕は、日本にいる彼女を描きたいのではなく、描きたい彼女が日本にいるということだと考えています」

シャルルは執務机の上で、細く長い指先を、神経質にとんとん、と爪先で軽く叩いた。
これは彼が苛立っている証拠であった。人の会話というものはとても退屈で忍耐を必要とするが、彼が耐え忍ばなければならないことに値しないと考えている故の仕草だった。

心が騒めく。マリナ・イケダがなぜ、ワタルの申し出を承諾したのか、シャルルの身体の下で詰問したくなる欲求に駆られる。他の男を愛しているのだとは思わないが、他の男にイメージだとしても一部を与えることを許す彼女の考えが理解できない。
己のことは顧みない。
彼が過去、別の人物のモデルとなったのは要があったからそうしただけだ。
だから、それ以上にはならない。

目の前で、ワタルとマリナがどんな会話をしたのか、どんな風景を共有したのか鮮やかに浮かび上がるような作品を見て、心穏やかに感想を述べろと言う方がどうかしている。シャルルは確かに他の者より多くを考えることも、他の者が気がつかないことも気がつくことができるが、それはシャルルがこの世の者たちが持つ感情を持ち合わせないということではない。
かえって、激しさが増す。それは、確かに弄火という名前の嫉妬であった。

■FireWorks　13

マリナ・イケダはシャルルの所有物ではない。だから、彼女が何を考え何を何を目にしたいと思ったとしてもシャルルはそれを妨げることはできない。
見せたいものだけではなく、彼がみせたくないものも・・・そう、彼は彼女には誓ったからだ。
手にできるものすべてを彼女に捧げると言ったから。
「彼女は、この作品を見て、何と答えたのか」
ワタルは微笑んだ。ディスプレイの向こう側の、僅かな表情さえ見て取れるのに。
彼の微かな溜息が漏らす感情の意味を推し量りかねてシャルルは黙って答えを待った。
「・・・それは貴方自身から聞いた方が良いでしょう」
これまで言い淀むことのなかったワタルが、その時だけは言葉を選ぶ様子をシャルルに見せた。
まだ見せていないのか、それともワタルが思いも寄らない感想を述べたのだろうか。どちらなのだろうか、と尋ねることもなかった。
けれどもシャルルは。聞きたくないと思っているのに、聞かずには居られなかったのだ。
どちらを聞いても彼は満足しなかっただろうけれども。

しかし、ワタルはそのまま話を続けた。
「彼女の使用するツールが増えることは良いことだと思いますよ。刺激にもなりますが、これまでの手法の見直しにもなる」
「そして記録の複製もできる」

「彼女に必要なのは、結果ではなく過程ではないでしょうか。・・・今のところは」
ワタルはそこで腕を組み直す。
彼の指先がちらりと見えた。
創作に携わる者に特有の指先であった。
荒っぽさもなく、物事すべてに丁寧で誠実そうな指であった。

彼の言葉の調子及び仕草や視線、そして身体中から放出されるワタルの空気にマリナが惹かれるのも致し方ないことなのかもしれないと思ってしまうほどに。
彼は、弄火を畏れない。
命が散っていくことも、各々の命が別々の場所で散ろうとも、彼は恐怖したり惜しんだりすることがない。
だから、「弄火」を世に出そうと思ったのだろう。

愛は、甘く切ない気持ちだけで満たされているとは限らない。
「それを世に出すことに対して、他の選択肢はなかったのか」
「ありませんよ」
ワタルの短い言葉に全てが込められていた。

「選択できないということも、あるのですよ」

彼女に対する迸る思いがその言葉に詰められている。
吐き捨てるようにさえ言えない言葉に、彼の思いが凝縮されていた。
冷笑することすらできずただ黙るばかりだ。

ある女性のことを語るのに、彼らは静かに語り会う。
そして、その人を通して愛に対する考えを交わす彼らを見たら、あの女性は何と述べるのだろうか。

数多ある彼女を描いた作品の中で、「弄火」を出そうと思ったワタルの中には、ただ見守るだけではない焔を感じる。
目の前の男は、自分が彼女の隣に立つことがなくても良いのだと考えている。
少し距離を置いて飛び込むことをしない大人の男。しかし余裕に溢れているからそうしているのではなく、一度踏み越えてしまったのなら戻れないことをよく知っているからなのだと思われた。

厳選して出した、練った作品ではなく、どうしてもそれしか選ぶことができなかったのだ、と彼は言う。そこに隠れている穏やかとは言い難い感情を見てシャルルは淡く吐息を押し出した。

彼女が他の者に強烈に愛されることを排除することはしない。

しかし。
もし、彼らがシャルルから彼女が望まないのに奪おうとするのであるのならば、別の話であった。彼女が望まないのに気持ちを傾けて困惑させるのであれば。また、彼女の気持ちを利用するような態度にでることがあれば。彼はいつでも受けて立つつもりであった。今、この瞬間のように。ワタル・イワツキが勝負だと言えばそれは始まるのに、彼は決してそう言わない。だが、始まってしまったのだ。ディスプレイ越しに弄火というものに身を焦がす男がふたり、対峙している。

奪うとか取り返すとか・・・人の言葉は多種多様であるのに、とても種類が少ない表現になってしまうわね。

彼女がそう言って苦笑いするような気がする。豁達な口調で笑い飛ばすこともせず、最近では愛や命について語る時のマリナはとても思慮深い口調であった。
自分の感じるままに生きて、自分の感じることを表現する生業に就いたというのに、自分自身については知らないことが多いのだと本人も言っていた。

■FireWorks　14

「それが貴方の表現か」
何に対する表現なのか、とは聞かなかった。それは質問ではなかった。
薄い唇から漏れた彼の感想だ。
感情に赴くままの表現はすることのないシャルル・ドゥ・アルディであったのに、彼は思わず口にしてしまった。

すると、ワタルはにっこりと微笑んで言った。
「もし、僕の作品が入賞するようなことがあるのでしたら」
彼はそう前置きをした。
「彼女が描き直すことを見届けさせてください」
「許可を求める先が違っている」
シャルル・ドゥ・アルディがそのように言うと、ワタルは軽く首を傾ける。
本当にそうなのか？と問いかけているようだ。

「少なくとも、この作品にはこれ以上手を加えることもないでしょう」
「描き直すことをやめさせろということなのか？」
シャルルが呟くと、ワタルは違うと言いたそうに顎を横に動かした。
彼らは少年ではない。僅かな仕草や声の調子などで向かいあった相手が何を考えているのか、そして何を自分に求めているのか十分に理解できていた。
年齢を重ねて、ようやく、彼の意図がわかるものがちらほらと現れ始めた。

しかし、マリナ・イケダと出会っていなければ決して知ることのなかった経験であった。
マリナは在不在に関係なく、シャルルにいつも変化を与え続ける。彼の中には虚無しか存在しないと思っていた、何もない虚ろな内部に、まったくあり得ないと思うような風を吹き込んだ。
その彼女をファム・ファタルと呼ぶ以外に、適切な呼称は存在しない。
彼女は、彼の傍にいなくなったとしても、いつも彼の傍にいるような気にさせる。

余裕がありそうに見えるが、それは表面上のことかもしれない。
シャルルもほとんど表情を動かさないように配慮しているが、相手も同じ様に自分の心の内を悟られないように神経を尖らせているのかと思われた。
思う、という表現は彼は使わないことにしているし、自分の中の変化を主観的な物言いで表出させることは避けてきた。それが自分の家のしきたりであったし、旧い血というものはみなそのようにして己を消し去らなければならないのだと心得ている。

「いいえ、描き直すかどうかは、彼女の判断です。でも、その心の移り変わりそのものを見ていたいと言ったら贅沢な容貌になるのでしょうね」
「十分過ぎるほどに」
シャルルはそう言って溜息をついた。
この男は見た目に寄らず、かなり貪婪であると思った。
マリナ・イケダがシャルルのために描いた絵をどうするのか、悩む様すら見ていたいと言っているのだから。

溜息と微笑みと無表情の繰り返しに彼は疲弊していた。
ごく僅かな者だけしか気がつかない。シャルルがいつも倦怠の様子を見せているのは、飽きたからではなく、飽きるようなものすら何もないことや無に対する疲労を感じているからなのだと・・・絶望や失望が彼を動かしているのだと気がつく者は少ない。

一生分の夢を見た、と彼は言ったが、夢は終わっていなかったのだと思わせるのは、彼女だけであった。

恋人のために描いた絵の行く先を見ていたいと思うとは、どれほど粋狂なのだろうか。ワタル・イワツキが、彼女のことを単なる使用人と思っていないことは明白であった。そして、雇用者と被雇用者の関係を越えるやり取りをしているのにも関わらず、そこから越えるようなことはワタルからは仕掛けない。

・・・まさに、彼は弄火そのものだ。

自分自身の焔を弄び、そうしていなければ崩れてしまうのだと思っている恐ろしいまでに自尊心の強い、自律に誇りを持って生きている者なのだろうと感じる。

認めるわけにはいかない。それを口に出して称賛などはしない。
一度でも声に出してしまえば、マリナを愛していることを認容してしまうことになるから。シャルルは寛容でありたいと努めているが、他の男がマリナを愛することを許しているわけではない。
強烈に彼女を求める気持ちが渇望となって彼を餓えさせる苦しみを、彼は幾度も経験していた。

けれども。
ワタルの穏やかな表情の下にある弄火という名前の火焔が見え隠れして、シャルルは平静を装いながらも身構えていた。
彼の背には細かい汗が浮かんでいることを、ディスプレイ越しの彼に悟られるわけにはいかない。
シャルルは高潔でフランスの華と呼ばれるほどの稀なる才の持ち主であったが、だからと言って何も感じないわけではないのだ。
シャルルは限りなく普通の男であり、マリナと居るとそれを痛感する。だから、彼女と距離を置く。自分が、自分で居られなくなる様をすべて受け入れることができないから。だから、彼女が・・・目の前の男のいる日本に行くことを許す。許してしまう。でも、それが許せない。彼女にはわからないのだろうが。

■FireWorks　15

描き直すなと言う事もない。
描き直す手ほどきをしたい、とも言わない。
ワタル・イワツキは、ただ、見届けたいと言う。

これはシャルルが決してできないことであった。ただ、見守る。彼女を見守る。
どういう結果になったとしてもそれを受け入れ、途中で放棄するようなことになったとしても激励することはしない。
それが、ワタルの表現なのだ。愛に対する表現なのだと思うと、シャルルはただ自分とは違うのだと実感する。

彼とこうして対面して話をすることは殆どなかった。
いつも彼はシャルルの前にはほとんど出てこないようにしているように思われた。
その一方で、シャルルも同じであった。
画廊に乗り込んだ時もあったが、それでもワタル・イワツキとこうして語りあう時間を持つことはなかった。
必要がなかったからということもあったが、そうしてしまえばいつかははっきりとさせなければならないことを保留にしておくことができなくなると承知していたからだ。

静かに焔を燃やし続けるのであれば、それは煙火という意味ではなくなっている。確かに、彼の作品は「弄火」であって、それ以外の何ものでもない。

シャルルは淡い吐息を漏らす。
負けたとは思わない。
挑まれた勝負であるのなら、決して負けるつもりはなかった。
それなのに、違いを見せつけられて苛立ち、そして言葉を探す。これは自分の中で、ワタルという人物がマリナにとって必要不可欠であるからなのだと認識しているからだ。
タケルを必要としているように。マリナが生きていく上では、多くの人物達との関わりが必要である。
そして、そういう人を好きになった。好きになってしまった。
底のしれない深い海底に沈みながら、沈むことそのものを悦んでいる己に、シャルルが時折愁いを露わにすることがある。
マリナを愛したら、そこから抜け出せると思った。しかし、そうではなく、更に深い場所にまで行くことが出来るようになってしまったということを、彼女に告げれば、彼女はとても哀しそうな顔をするのだろう。
彼女には、様々な表情があるけれども、やはり笑顔で・・・そして幸せでいてくれることが彼にとっても幸せなのだ、という気持ちは今でも変わらない。
目の前の男もそうなのだろう。
自分との幸せというより、マリナ・イケダという女性が幸せに生きることが・・・何よりの優先事項なのだ。

「自分の作品は、分身のようなものです。それを描き直すというのは、相当の決心が必要ですが、同じくらい・・・大きなきっかけがあるからこそ、再描しようと思うのです」
「そうだな」
ワタルの言葉に賛同する。まったく全てを否定するつもりはない。
彼の審美眼はマリナのそれとよく似ている。そして、同じ日本人である故に共通するものも多く存在するだろう。どれほどシャルルが日本を愛していても、マリナが過ごした四季と同じ景色を同じ年月だけ経験したわけではない。
そしてシャルルの育った国で根幹となる信念に近い信仰という名前の価値観があり、マリナにすべて賛同することはできない部分も、確かに存在する。
だからこそ、愛おしいと思うのだが。

目の前の男は、マリナと自分が近すぎることを承知しているのだ。
今、想いを告げても、彼女を困惑させるだけだと思っている。
そういう、想いを告げない人物に対してマリナがひとかたならぬ想いを持っていることを、ワタルは知っているのだ。
恋に近い友情や、友情に近い恋を知っているマリナが、混同して困惑しないように、彼は一定の距離

を保っている。

それなのに・・・あの「弄火」で見せられた、至近距離で眺めるマリナの顔を、ワタルは堂々と曝け出す。
侮れないと思ったが、同時に、この男にだけは彼女は渡せないと思った。
彼女が幸せになるのであれば、他の男に委ねると思った若い日のことを考える。
二度と、同じ過程を経ることはない。
マリナの為を思うのであれば、彼女に尋ねる。先回りして手配することによって彼女がどれほど傷ついたのか・・・そして自分がどれほど傷つけたのかを考えると、同じことを繰り返すことはしないと決めていた。
ワタルの顔を見つめていたが、彼も同じ様にシャルルの顔を眺めていたことを知り、ぐっと顎を引いて青灰色の瞳を挑戦的に見開いた。
これは大変に難しい勝負だ。
チェスのように、手駒を見せることはない。
「・・・マリナに手順の説明をしても、彼女は従わない」
「揺らぎがあるからこそ、彼女だと思いますので」
そんなことは承知の上だ、と言いたそうに、ワタルは静かに言った。
この男は、最初から否定的なことを言わない。
それが、マリナ・イケダと似ていて気に入らない。
シャルルは唇の端に僅かに力をこめた。

■FireWorks　16

「僕は彼女の作品が好きですよ。美というものは、人に託された素晴らしい感覚だと思います」
誰に託されたのか、彼は言わなかった。神によって与えられた、とは言わなかった。
確かに持って生まれたものがあるのかもしれないが、マリナは持っているだけではなく、それを培い育て、別のものに変化させる能力がある。
本人が意識しているのかどうかは判断がつかないこともあったが。
彼はフランスの華と呼ばれて、何もできないことはないと言われているというのに。
なぜ、彼女のことに関してだけは思い通りに進まないのだろうか。
いや、本当は・・・そうあって欲しいと彼が望んでいるところもあるのではないのだろうか。

マリナ・イケダがシャルルを翻弄する人物でありながら、彼を安らぎに導く、実に不可思議な存在であることは認めなければならない。
しかしながら、それが他の人物にも合致する特徴であることを認めることはなく、受け入れることもなかった。

けれども。
この男はどうなのだろうか。
彼女が好きだ、と言うのではない。それは決して口にしない。
それなのに、彼女の作品が好きだと讃辞する時には臆面もなく言ってのける。
「彼女の彩色に特徴があると思われますが。・・・彼女の中には、必ず、希望が混じっているような気がするのです。僕はもっとそれを見ていたい」
彼はそれだけを言うと、また僅かに微笑んだ。

シャルルはどう思うのか、とワタルは尋ねることはない。
推測できているからだろう。
他人に自分の心の内を推し量られることは好まないシャルルであったが、ワタルが静かに彼の裡に入り込むことをいつの間にか許諾している己に気がついた。

弄火という焔がシャルルの中にあることを、彼は知っている。
そして、ワタルの中にも存在する。
ワタルの作品の「弄火」とマリナの描いたあの絵と・・・とても似つかぬものであるのに、どこか似ている。
それを、どちらから言うこともなかったのに、どちらも認識している。
ディスプレイの向こう側のワタルと、こちら側のシャルルと共有している感情がある。
それが、「弄火」という名前であるのならば、そうなのだろう。

彼に、ようやくシャルルは行った。彼女に対する想いや、彼女を独占することができるのは彼だけなのだ、と言っても勝利を感じることはないのだろう。
そこで彼はふと、気がついた。
先ほどから・・・シャルルは、推測を続けているばかりであった。
何もかもが、根拠や証拠から存在を証明できなければ信じない彼が、唯一信じているものを、ワタルも信じている。
激しい嫉妬と同時に、心のどこから安堵している自分の変化に気がついているから。
だから、彼に対して激しく反論することも、この場を解消することもしないでただ座り続けているのだ。

「そろそろ、彼女が戻ってくる頃です」
ワタルはそう言った。ディスプレイの端に表示されている時間を読み取ったようだ。
シャルルがセットアップの指示をしたラップトップはかなり薄型のもので、持ち運びにもそれほど苦痛を感じない程度の重量だ。しかし、彼女がそれを別の場所に持ち込むほどには携帯性に優れているわけではない。
その証拠に、彼女は出歩くときにはそのラップトップを持って出掛けることはしない。それなのに、彼女は都内の画廊の中に、持っていった。
窘め詰るべきなのか、そうまでしてやりたいことがあったのだと許容してやるべきか・・・シャルルは少し考えた。
ひとつしか結果が出ないのに、彼はマリナに関係することは少し長い時間をかけている。これは、彼の判断が誤ってしまうという懸念があるからではなく、彼女がシャルルの出した結論に従わないことが多いという経験からであった。

なるほど、彼女は、彼に経験を教えるのだ。理論でもなく、激情のままに自分が動くことはないと思っていたのに、どういうわけか彼は、決して効率的ではないと思える方法を採択することがあった。

「彼女と話しますか？」
「必要ない」
シャルルは素っ気なく答える。どうしてワタルと話しているのか、どうしてシャルルが回線を接続しているのか、状況と経緯を説明するのは面倒であった。
恋人に対して面倒を感じるのは許せないと拒絶するような人ではない。シャルルが説明をすれば長くなることはわかっていたし、マリナがシャルルの束縛を手放しで喜んでいるわけではないことも知っている。
けれども。
マリナが、モザンビークにいたシャルルの居所がわからなかったことについて、ひとつだけ、意見を言ったことがあった。

黙って消えたわけではないのに、彼女はその時のことを一度だけ、シャルルに言ったことがあった。
「ここに居るよという花火が上がれば良いのに」
見えるほどの距離に互いがいるわけでもないのに、マリナはそう言った。
それはこちらの台詞だ、と言ったところ、マリナは苦笑いを浮かべてそれっきり話をすることはなかった。
ふたりの中にある花火の記憶は、それが最新であった。
いつも居場所のわからないマリナ・イケダに対して、彼が常に居所を明確にしておくようにと言う度に、彼女はこの時の話を思い返しているのだとしたら。
知らずのうちに、シャルルはあの男の考えに賛同していることになる。

まったく、腹立たしいと思った。

■FireWorks　17

「そう・・・それでは、この会話は僕からではなく、貴方からお話するまでは何も言わないことにしておきますね」
強制接続を行ったシャルルの行為を遠回しに責めているような気配を見せる。
確かに、マリナが知ったらあまり良い顔はしないだろう。
公私混同はしないという明確な決め事があるわけではないが、彼女にとってあの画廊はDevaranaそのものなのだから。
居心地が良いという意味ではなく、彼女が生きていくうえで必要な要素があの空間にはあるのだ。
誠次・マクドゥガルの絵画だけではなく、あの画廊に集う人々のことや、そして自分自身を見つめるために必要な場所。
そこを所有するワタル・イワツキが、マリナに対して何も思わないということであれば、シャルルはもっと彼女に「パリに移住しろ」と強く言うこともしただろう。けれども、シャルルは黙って日本に行かせる。
そこで、彼女が何をしていようと関係ないと言い切るつもりはない。
が、ここでは駄目なのだ。ここでずっと彼女を据え置いていれば、彼女はやがて枯れて萎えてしまう。

その昔に・・・温室の花は外に出してもそれほど弱くないが野生の花は温室に入れれば弱ってしまうと説教されたことを思い出した。

「次には実際にお会いしたいものですね、久々に」
ワタルはそういうと、椅子の上で伸ばした体を斜めにしてディスプレイの方にやや前屈みになった。
「受賞式で現実になるでしょう」
シャルルがそこに出席することについての経緯やつてがどれほど広く強いのかということについて、

ワタルは何も言わなかった。
生きる世界が違う者は、自分と違うことに対して受け入れない傾向が強い。崇拝するか拒絶するか、極端に偏ってしまう。
ワタルが何も言わないところをみると、彼はシャルルの日常について、ある程度理解しているらしい。
マリナから聞いているのか、それとも・・・絵画を買い付ける時に、そこまで調査したのだとしたら。彼は侮れない男だという認識から、彼は注意しなければならない人物だと認識を改めることにする。

「貴方の中にあるものを、彼女は描き直すと言う。それは・・・僕には決して経験することのできないことですから」
「腹立たしいことに」
シャルルは他に誰もいないことを確認してから、言った。
誰に聞かせるつもりもない。しかし、彼には伝えなければならない。
矛盾した願いであるのに、彼は静かに・・・緊迫した空気の中で、無言で居続けた。
マリナの前であるのならば、逆であったのだろう。
いや、双方が多くを語らない状態であったのかもしれない。

愛は、愛を伝えることだけが全てではないのだ。
それを知っている者ほど、何も語らない。
だから、彼は言った。
密やかな、自分の思いを・・・言ってはならないと思う相手に言った。
彼の誇りは、それを赦さなかったのに、シャルルはそれを越えて、言った。
言ってしまった。

そこで彼は考えに及ばなかったことを知ったから。
・・・彼にとって、彼女は永遠の人であるが、彼女にとって自分はどんな存在であるのかということについて、彼は彼女に質問していなかったから。
そして、それは忘れていたことではなく、触れていたくないと思っていたことであったから。

「彼女の変わりゆく姿を見ることができる権利を放棄することはないから」
「権利、ですか」
ワタルはシャルルの言葉を繰り返した。
燃えさかる劫火ではなく・・・煌めく弄火のような焔を挟んで問答を交わした。
峻烈な生き様が彼女を魅了するのではないことは、承知している。

ワタルは、シャルルの高慢な言葉を窘めることもなく、言った。
シャルルがワタルのことを認めることができない理由のひとつが、彼が決して誰も咎めることをしな

いということにあった。

「貴方だけが持っている権利ですね。
僕には・・・彼女は・・・与えることはないですし、認めることもないでしょう」
彼の声は心なしか寂しそうであった。彼女が、弄火をともに見ても良いのだと・・・誰に対しても言っているわけではないことを、ワタルは知っている。
彼女の中にあるどうしようもない焔を、ワタルは知っている。マリナはシャルルに添うのが当然とは思っていない。そして、マリナも。
彼らがともにあるということに対して、幸せになれと皆が背中を押しているわけではないことも、承知しているのだ。
シャルルとマリナがきれい事で一緒にいるのではないのだとわかっているからこそ・・・ワタルは何も言わないのだ。
相容れない、誰にも認められない愛かもしれない。けれども、弄火に対してマリナが感じ入った様は真実であるのだ、とワタルはシャルルに告げるから、彼は無言なのだ。

■FireWorks　18

彼らは目を合わせた。
シャルルは無言で、目の前の男を見つめる。
睨みつけてもワタルは動じないだろう。威嚇は彼には脅威ではない。
ただ静かに、彼は見つめ続ける。
彼女がこれまでの人生の中で関わってきた者は、みな、彼女の助けを直接的に必要とするものばかりであった。
窮地に陥った者であったり、何かに憂えていたり、困難に立ち向かうために誰かの理解を必要としていたり・・・。
けれども、自分の中に焔を秘めて見つめるだけの者に対しての距離の取り方をマリナはあまり知らないように見えた。

彼女は、誰かと長い時間を過ごすことを懼れているのではないのだろうか。
こうしてフランスと日本を行き来する彼女の様子を見ていると、シャルルはそう判断せざるを得ない。

はっきりと口に出さないが、この男は彼女を欲している。
心の底から、愛している。
しかし、口に出してしまえば彼女の場所を失ってしまうことになる。
心の拠り所のひとつにしている、あの絵の在る場所に彼女は行かなくなってしまうだろうから。

彼女が永遠にシャルルの傍に居るのだと誓う時は、彼女は多くのものを手放さなければならなくなるだろう。それから、シャルルも。
得るということは同時に失うということなのかもしれない。

眼鏡をかけた、穏やかでどこまでも本心を見せない静かな男。
それでいて、心にあれだけ激しい焔を燃やし続けている。
彼女の心を得たい、と言うのであればいつでも受けて立つつもりであった。
彼は、何も求めていない。
ただ、マリナが幸せになり、微笑み、いつも希望に満ちた睡りにつくことを祈っているだけだ。
だから、彼女を愛することは無駄なのだとシャルルは言わなかった。
人の心の中には弄火が存在する。誰の心の中にも、だ。
それが愛であったり希望であったり自分の未来への渇望であったりと名前を変えているかもしれないが、それは皆、本質は同じである。
生きるために、命を燃やす。祈りを燃やす。
死ぬためにそうすると考えているシャルルでさえ、マリナとの邂逅によって「死までの退屈凌ぎ」と言い切っていた自分の生命について、再考するようになった。

「貴方と僕は違います。何もかも。だからこそ、こうして対極にいるのかもしれませんね」
「対になるものがなければ己を照らし出すことができないというのは、非常に危うい思想だな」
シャルルが呟く。
けれども、それをワタルは聞き逃さなかった。

「僕は貴方ではありません。だから、僕は僕だけしかできないことを僕ひとりで行う。それだけですよ」
シャルルとマリナの間にある絆という言葉では説明しきれない様々な思いの蓄積と同じものをワタルが求めているわけではないことをはっきりと意識した。

そろそろ、彼女が戻る時間なのだろう。
彼が何かを気にするように、僅かに変化を見せる。
シャルルはそれを察知した。彼から切断することはないと言い切っているのだから、マリナにこの場面を見せるかどうかはシャルルが決めろ、と言いたいのだ。
選択権を相手に託しているようで、この男は、結局は自分の望みのとおりに事を運んでしまう。

「久々の兄との食事ではありますが、かなり疲労して帰ってくることでしょうから」
惰い闇の中に浮かび上がる弄火について語る姿を見せても仕方の無いことであった。
それに、彼女の師にあたるワタルの兄も穏やかな風貌であったが、なかなかに手強く、マリナを悩ませるような課題を幾つも与えている。
彼女が生きていく上で、必要な知識や経験や、人との繋がりを惜しげもなく与えるタケル・イワツキ

は彼女の人生で必要不可欠な存在だ。それに、別の意味で、生涯の付き合いをすることになりそうであった。

ワタルは頃合いだと思ったのだろうか。軽く会釈をした。
「貴方と話ができて良かった」
「次からはマリナに連絡を取らせてくれ」
彼は傲慢にそう言ったが、ワタルはまったく気にしていない風に、そうですか、と頷いたが、承知したとは言わなかった。

そしてシャルルは、彼に付け加えるように言った。今、思いついたかのように。
「彼女があの絵を描き直すのは、彼女の意志だ。しかしながら、助力が必要だ。生み出した作品を直すということはそれなりの決断が必要だから。彼女に技術的指導を施してやってくれ。マリナがそう望むのであれば」

■FireWorks　19

彼はほんの一瞬、口を噤んだ。
たとえ、彼が何をしてもマリナとシャルルは決して離れることはないのだ、と言い切ったシャルルに、少しばかり愕然としたようであった。
愛している、と言葉にしなくてもこの男ならわかるだろう、と感じる。
口惜しいことではあるが、確かに、ワタルはシャルルの対極にいるのだ。
しかし、彼女は同時に双方に行き着くことはない。複数の者を愛するほど、彼女は器用ではないし、不誠実でもなかった。
シャルルが彼女を焦がれるのは、彼女が他の者に心を移しながらもシャルルの傍にいるという選択をしないからだ。心を動かされることはあるだろうが、心を奪われることはしない。それが、彼女の誇りであったから。
そして、シャルルは彼女のそういう面を理解し、深く愛し、そして哀しく思う。

この世の誰もがそうでありたいと思い、この世の誰もが相手に求める願い。

・・・自分だけを愛してほしい、自分だけが相手を愛したい。
しかし、それは叶わぬ願いであるから。
だから、自分だけを愛して欲しいという邪な願いは、口にすることはない。
シャルルの中の弄火は、まだ、誰にも見せることはない。マリナは気がついているだろうが。
彼の心の中には、誰かに見せてはいけない部分がある。
それもかなりの範囲で。
彼の中には、なにかがいる。己さえ知らないモノも潜んでいる。
自分の中には、仄暗い弄火がちらちらと燃え続けている。

だから、彼は最後に言ったのだ。
もう、このことで話をすることはないだろう。
彼女が絵を描き直すということは、彼に対する愛を深めることでもあるが、同時に愛を見直すということだ。
シャルルの誕生日に贈られた、彼だけの絵を、彼女はいまひとたび塗り替える。それは一度でないかもしれない。
けれども、それはシャルルのためだけに、彼を思いながら描くのだ。
マリナがシャルルへの愛をなぞっていく様を、ワタルが見るのは勝手だが、彼女が困ったら助けてやれとシャルルは言ったのだ。
マリナは鈍感な部分もあるが、自分を愛する者を利用しようとはしない。
シャルルへの愛に惑ってワタルに相談をするようなことがあれば、それはワタルの気持ちが知られていないことが前提となる。

彼が愛を告げれば、マリナは決して相談するようなことはしないだろう。
どれほど技術的なことであったとしても。
だから、見ていたいのであれば、彼の中の弄火を作品にするのはこれきりにしろ、とシャルルは忠告にかえてそのように言った。

何とも、傲慢で、愚かしい言葉だ。
言わなくても良い内容であった。

しかし、彼は間違いだとは感じていない。
たとえ、太陽が西から昇っても彼に間違いはない。特に、マリナ・イケダに関する判断に曇りはない。どんなことがあっても、彼女を決して離さない。

すると彼は穏やかな表情を崩さずに言った。
眼鏡の奥の、理知的な瞳は何かを決断していた。
「・・・たとえ、この場所がなくなったとしても、彼女が訪れなくなったとしても、彼女の中にある弄火を見てみたいと思っています」
言ったな、とシャルルは軽く息を吸った。

ワタルは軽く額に手を遣って、困ったな、と言った。
「僕はこういう話をするのが何とも不得手で・・・」
そう言った彼は、困っているのではなく、シャルルに宣戦布告をしたことを自覚しているのだ。
彼女のことになると、彼は穏やかな仮面が脆くなってしまう。マリナ・イケダが、彼の創作意欲を刺激し続ける限り、彼は彼女から目を離すことはないのだろう。

「それでは、貴方の作品を見て判断することにする」
シャルルはそれだけ言うと、遡って話を追求することはなかった。今の言葉は、一度聞けば十分であった。二度と、彼にそんな機会は与えるつもりはない。

彼女のすべてを知りたいと思うが、彼女が見せたくないと思っているものは見るつもりはない。
彼女の弄火は、いつ表出してくるのだろうか。
シャルルと一緒に過ごすことには苦しみも伴う。彼らは、それでも惹き合って、それでも生きていたいと思っている。
彼女の想いが、絵になって色になってシャルルに届けられるのであれば。彼は、どんな修正になっても受け止めるつもりであった。

心が苦しくて張り裂けそうに痛い時もあるが、それでも睡りで癒すことは、もう、ない。マリナが居るから。彼女を愛しているという気持ちを、薄れさせることはできなかったから。
だから、どれほど焔で炙られようとも激しく弾ける眩の中に放り込まれたとしても、彼はそれを受け止める。

■FireWorks　20

時が来た、と判断する。
これ以上話しても互いに心静かになれないだろう。少なくとも、シャルル・ドゥ・アルディにとっては愉快な話にはならなかった。
ワタル・イワツキは、今、彼女に対する恋着を見せたのだ。
普段のワタルにあるまじき行為であり、それを引き出したのは他でもないシャルルであるというのに、晴れやかな気持ちになれない。
人の深層を読み解くことが、彼の興味の対象であったが、一度わかってしまえば興味をなくす。興味を持ち続ける必要がないから。
それなのに、同じ様に、興味を失せることがない。
ワタル・イワツキが何を考えているのか、誰を思っているのか知ったというのに。
心は静まることもなかった。
ワタルに視線を送ることすら無意味であると・・・いつものシャルル・ドゥ・アルディであるのならそう考えるのに。

青灰色の瞳で、ワタルを射貫くように見た。
けれども、ディスプレイ越しの彼はまったく動じていない。いや、もっと違うことに心を動かされているからだ。
シャルル・ドゥ・アルディと会話していることよりも、ワタルが彼女のことで心の内の一部を表出させてしまったことの方が、ワタルには動揺するべき事柄であったようだ。

それが・・・ますます、シャルルを苛立たせる。

なぜ、腹立たしいのか。
簡単すぎる問いであった。
容易に導くことのできるごく単純な問答に対して、シャルルは拘っていられないと重いながらも決して離れることがないからだ。

恋というものは、複雑でありながら単純だ。そして、愛はパラドクスに満ちている。
始まりも終わりも、一歩、足を踏み出すことによって動き出す。
恋風と言う通り、恋愛は風だ。
形がないという意味ではない。
恋や愛の始まりは追い風で、その終わりは向かい風だという意味であると理解している。

白金の髪の下にある秀でた額に疼痛が走る。目眩とともに、それはやって来る。
わかっている。
彼にはわからない事はない。

マリナに彼が惹かれる理由も。
マリナが、彼を遠ざけることができない理由も。
そして、シャルルがそこに割って入り、彼女を掠奪するような真似はするなとワタルに告げることができない理由も。

黙認するつもりはない。
ワタルが決断するのであれば、いつでも彼と闘う。

シャルルの中には、そういう血が流れている。
優劣や勝敗に拘り、支配したがるのに一度心に入れてしまうと支配されてしまうことを受け入れてしまう、彼の透明で凛烈で猛り狂いそうな熱情という矛盾を、認識している。

決して愉快な状態ではないし、彼女がシャルルを向かないままに傍に居て欲しいとは願っていない。
彼女の身も心も欲しいというだけではない。片方だけでは満足しない。
過去も未来もすべてが欲しいと思う。
が、彼は誓ったから。
すべてを・・・彼の手にできるすべてを捧げる、と言ったから。
すべてを捧げると言った誓いは今でも有効だ。
彼は、彼女が望めばすべてを捧げる。
彼が抱える孤独であろうと、彼が受け入れなければならない悋気も。

マリナ・イケダは、だから・・・彼に捧げた絵を修正しようと思ったのだから。
言葉にしなくてもわかる。彼女は、絵の仕上がりに不満足なのではない。
彼女の中では、愛は不変ではなく可変なのだ。
輪郭や色を変える。
あの蒼い華のように。
奇蹟は・・・変わらないものではなく変わり続けるのだ、と。
決して存在しない色を持つ花を彼女が描いた時。
それは、彼女の中にある「弄火」のような焔の欠片なのだ。
火を弄ぶのではない。
火は命であり祈りのことだ。そして命を心の癒しとして愛することを指し示す意味の「弄火」という題名でワタルが作品をこの世に出すと決めたのであれば。
シャルルは、それを妨害することはない。

シャルル・ドゥ・アルディは呟く。しかし、それがワタルに聞こえることを承知の上で。
「ある者は命を愛する者として弄火を選び、他者は命を運ぶと言う」
そうだ。
言葉を変えたとしても、意味は同じだ。

マリナが絵を描き直すのも。
ワタルが彼女をイメージして作品を生み出し続けるのも。
・・・シャルルが、ファム・ファタルという言葉で常に彼女のことを表現するのも。

それらはすべて、当人だけが持つ愛の現れなのだ。

■FireWorks　21

「話すことは、もう、ない」
シャルルは呻くように言った。
これ以上話をしていたとしても、何も変わらない。互いの中の弄火を垣間見せたことによって、わかり合うことも分かち合うこともないのだということを確認しただけであった。いや、それはある意味、満足のいく結果を得たということなのだろうか。

「お話できて、本当に良かった」
ワタルがそのように言ったので、シャルルは唇の端を歪める。青灰色の瞳を細めると、涙堂がシャルル自身だけにしかわからない程度に引き攣れる。

ワタルが心の底からそう思っているのだとしたら、相当に警戒しなければならない。
彼がいうところの弄火というものは、遠くで見ていれば儚く美しく煌めくが、近くに寄って手を伸ばした者をたちどころに焦がし尽くすほどに熱を帯びている。
そんな晄に魅せられて、その晄を持つ者の魂を欲しがる者は数知れない。
「それでは、受賞式で」
まだ審査も行われていないのに、シャルルはそう言った。その瞬間を待つまでもなかった。この作品は、人の目に触れることによって彼の想いを弾かせ煌めかせる。
一目見て、わかった。だからシャルルがその作品を定めるような時間は必要としない。
「いつまでも、輝き続けてください。フランスの華の噂を伺うことが僕の楽しみです」
誰から「噂を伺う」のか、彼は言わなかった。
そしてシャルルも訊ねなかった。

そうだ。
ワタル・イワツキは、すべてを言わない。
多くを言わない。
それが雄弁であることを知っているから。
沈黙している限り、彼は彼の弄火を失わないから。
声に出さないで、募る想いを燃やし続けることができるから。

すると、ワタル・イワツキは突然、顔を上げた。
そして温厚そうな横顔を見せる。
・・・何かの気配が近付いているようであった。
「間もなく、やって来ます」
シャルルは、ワタルが「帰ってきます」と言わないだけまだ理性が働いているのだろうな、と思った。
些細な言葉の回し方に、本来考えていることが潜んでいることが多い。
心の襞を観察し続けた結果のことであったので、シャルルはその見極め方は間違っていないのだと考えている。
画廊は地階にあり、来客はすぐに気がつくような工夫が施されている。
これは、受付嬢を置いているための処置であったが、それ以外の多くの目的があるのだと知っていた。
実際、何度かその場所をシャルルが見た時にはっきりと確認している点がいくつかあった。
目立たない場所に防犯カメラがあったり、一定時間以上立ち止まっていたり同一範囲でしか動かなかったりすれば反応するフロアマットの下に隠された感圧シート・・・どれを取っても最新の設備であったが、それを仰々しく見せるということは症例していなかった。
シャルルが何も言わないのは、マリナ・イケダが通う場所としては不適とは言い難いという以上の理由が存在しないからだ。好適でも最適でもなかったが。

「・・・主たる目的を忘れないように伝えてくれ」
シャルル・ドゥ・アルディはそう言った。
携帯性に優れているが、本来は彼女の家に常設しておくことを前提にした品である。そして、彼女はそういった「すぐに居所がわかるもの」を持ち歩くことを好まない。
一度、それで憤慨が沈静化するまでに大変に時間を要したことを思い出し、シャルルは苦いものを噛みしめる。
彼女を手放すつもりもなかったが、束縛しすぎるなと彼女本人の口から出ることもしばしば、あった。
それでも彼女はいつも最後には「次からは気を付けるように」と言うだけである。
次はない、と言わない。それに依存するつもりはなかったが、愛を深めていくことというのは赦しを与えることではなくて、その都度、相手に向き直ることであるのだということを学ぶ。
もう少しだけ、と思うのではない。
選んだものは、選んだ先にあるのだということは、同時に、選ばなかった先に「選ばなかったことを選んだ」ということもあるのだとシャルルは知っている。

彼が言い終わると同時のことであった。
誰か他の者の気配があった。
シャルルの側のディスプレイには、顔認証の境界指定ソフトが自動起動している。
ディスプレイの中に、人と認識する動きがあると、そこにフォーカスして集音する仕組みだ。
だからマリナの在不在もすぐにわかるし、彼女がライブ通信を行っているのか、録画された動画を送信してきているのかも判別できるようになっている。
WEB会議システムの構築は既に完了しているので、シャルルは次の世代のOSに相応しい、起動の高速なタイプの仕様書を仕上げたばかりであった。
これから、世界は小さくなる。情報の伝達が今よりもっと速く正確に大量に入手できる。
しかし、マリナ・イケダに関するものだけは、改良という言葉を使わない。彼女の言うとおり、すべてを情報化するのは不可能であった。少なくとも、彼女に関してだけは。彼に間違いはないし、不可能もないと、彼も含めた誰もがそう思うのに。
彼女に関してだけは、この事実を認めざるを得ない。

「戻りました」
彼の聞き慣れた声を集音マイクが拾い始めた。
シャルルは、きゅっと唇を引き締める。頬も心なしか締まっており、険しい顔つきをしている自分が、相手方には映っているのだろうと思われた。
彼の耳元で、彼を愛していると囁く声が、朗らかに響いてくる。
そして、ワタルは声を聞く前から気配を察知し、心を躍らせている。
それは、どれほど性能の良いラップトップであってもまだそこまでは追いつくことのできない、人の機能であった。

つまり、待ち詫びた相手が近くなってくるという、僅かな気配だけを拾い上げる機能である。

目で見て耳で聞いて、肌で温度を感じ、そして心で輪郭をなぞる。

彼女がよく言っていることであった。

マリナ。
君はわかっているのだろうか。
シャルルは心の中で呟く。
彼女は知っているのか。
ワタルの見せる作品は、まさに、彼女が述べる彼女の言葉そのものを実践しているものという以外のなにものでもないことを。

彼女を見て、彼女の声を聞き、彼女の体温を近くで感じ、そして彼女の心の輪郭を描いた作品が「弄火」なのだということを、彼女は知っているのだろうか。

■FireWorks　22

シャルルは細く長い指先を伸ばした。
本来なら、ディスプレイの向こう側にやがて現れるであろう、彼のファム・ファタルに伸ばすための手の平を一度だけぐっと握り、そして勢いをつけて回線切断のコマンドを打つ。
自分ではそれほど強く叩いたつもりはなかったのだが、机上に光るレーザーキーボードの上で、こつこつと苛立たしい音が響き渡った。

互いに、別れの言葉を交わすような穏やかさは残らないのだろうと考えていた。
だから、これは、最善の方法なのだと考える。
そのように、自分に言い聞かせるように、事象が発生した後から起算して考える「結論」についてシャルルは無言で胸の中にしまう。

彼女が心変わりするかもしれないという不安。
彼から離れていってしまったのなら、という前提の先にある虚無。
愛を失った時の絶望。
愛ではなかったのだと認めたくないあの時の心情が引き起こす葛藤。

人間の感情の中にある、冷負と呼ばれるものは、どうしてこれほど多種なのだろう。
しかし、それを感じているからこそ、彼は生きていると感じる。
痛みや苦しみが、彼は現世に留まっているのだと教える。

誰かに植え付けられたものではない。
彼が、彼の中で育てたものである。それを摘取ることができるのは、シャルル以外には存在しない。
後ろめたい気持ちがあったわけではないのに、彼から「場」を離れてしまった。
彼女の・・・彼のいない世界を垣間見ることがこれほど彼を煽るとは。

彼女は、昔の彼女をシャルルが愛しているのだと思っている。
けれども、シャルルこそ、考えこんでしまう。
彼はフランスの華なのに。
考えてしまうのだ。
彼女は、シャルルへの気持ちを愛だと錯覚しているのではないのだろうか。

しかし、それを言ったら本当に愛ではなくなってしまう。
だから、言わない。
偽りを享受するつもりはない。
しかし、自ら愛を乞うているのに壊すつもりは、ない。
愛は矛盾に満ちているが、矛盾そのものを作り出す愛にするつもりはない。

やはり、あの男は侮れない。
年若い青年が、太陽のような彼の親友とよく似ている気質でマリナがそこに心惹かれたことも、致し方ない。
過去の恋人と決別を迎えるにあたって向き合う時間が必要であったことも、承諾できる。
彼女の生涯の糧になるような知識や経験を与える師となる者が及ぼす影響は彼女にとって好ましいと思えるから、不承不承でも受け入れる。
けれども。
ワタル・イワツキだけは・・・シャルルは、どうにも寛容になれない自分を認めざるを得ない。
優雅に、悠然と構えることがないのは・・・理由はわかっている。
しかし、彼女に気取られるような愚かさは持ち合わせていない。
愛をはじめることより、愛を継続することの方が、ずっと、困難なのだ。

彼は、それを知った。
大人になって、それを知った。

そして、背凭れに勢いよく倚り懸り、天井を見上げた。

青灰色の物憂げな視線が、宙をさまよう。どうにも、煙草が吸いたかった。
体に良くないとマリナはあまり良い顔をしないが、こういう時には無性に・・・煙という手に掴めないものを創り出したくなる。
それが、彼の物思いを象徴したものであるということも承知していた。
彼は人より知能指数が高く、天才と呼ばれるが、天才だから何も感じないというのは誤認である。
彼は人より多くを感じ、多くを考えることができ、そして多くを受け入れてしまえるような広量さがあるのだから、彼は多くの感情を受領してしまう。
本人の意志にかかわらず。
それが、彼に、余計な苦悶を与えているだけであった。

なぜ、自分が後ろめたいと思わなければならないのか。
彼は苛立っていた。今、誰かが室内に居るのであれば、彼の視線で凍りそうになってしまうと感じるほどに。

あの、弄火という作品をこの世に出ないように手を回すことは簡単であった。しかし、それを実行することはないのだろう、と予想している。あれほどの作品を、意図的に抹消してしまったのであるのならば。彼の家に代々伝わる、美への尊崇という血筋を己が断ち切ってしまうことになってしまう。
彼は誇り高いフランスの旧き華なのだ。だから、それは行わない。素晴らしい作であるのならば、それに対抗するだけだ。

■FireWorks　23

己が弾き出されたわけでもないのに、シャルルの方が姿を消す。
マリナ・イケダに問われた時の自分の返答を考えるシャルル・ドゥ・アルディは、白金の髪を軽く振った。
深く窪んだ青灰色の瞳が物憂げに瞬く。
確かに、彼はあの時の彼ではなくなった。愛に餓え、愛を欲し、そしてそれでいて手に入れることに恐怖した。
彼女が、彼無しではいられないようになるのだと断言しておきながら、彼女はきっとそうはならないのだという予感めいた考えが同時に存在していた。
彼女に申し開きのできないことは、一切行っていない。
それなのに、弁明の内容を考えるシャルルは、ワタルとの会話について、少なからず何かを得たのだと思うことにする。
思う、とか。感じる、とか。
数値にすることのできない非常に主観的な基準をシャルルは信用しているわけではない。
内なるさざめきを否定することはできない。
もっと気軽に、享楽に溺れることのできる邂逅であったのなら、彼は彼女のことについてこれほど束縛したいという欲求を感じることもなかっただろう。

彼だけの彼女にしたい。
それでは彼女は、彼に微笑むことはなくなってしまう。
シャルル・ドゥ・アルディの中で燻り続ける焔が、ある瞬間に・・・あの弄火のように、宙に向けて爆発してしまうのではいのか。
彼の中には、狂気がある。それは事実だ。
そしてそれは今でも、彼の中で真火を見せることがある。

ワタルとの会話を頭の中で巡らせる。
幾度も、幾度も。
そして彼は突如、思考を止める。

・・・気に入らない。
まったく、気に入らなかった。
今、ここにマリナ・イケダが居なくて良かった、とさえ思えてくる。
彼女にシャルル以外の男に心を寄せていないかどうか、彼女の口から一晩をかけて聞き続けなければおさまらないような激情を感じていた。
誰が悪いわけでもない。何が障害であるわけでもない。

シャルル・ドゥ・アルディは、また思考しはじめている自分を諫め、軽く呼気を整える。
歎息ではない。
彼の中で、誰もが解明できなかった謎を明かした後のような疲労感が漂っていた。
絶望的な徒労ではなく、確かに、ここ最近ではなかった感覚だ。
チェスの試合であるのなら、簡単であった。
次に何をどうしたら、相手はどう出るのか。
その組み合わせは無限で数が限られているから。
しかし、彼は幾通りも先を考えることができるのに、そのどれもが最善ではないのだという結論に至る。
だから、これは試合とか勝負とかいう類のものではなかったのだ。

彼の虚が満たされることは、永遠にないのだろう。
ファム・ファタルとともにこれからの時間を生きたとしても。
彼は、彼女と同じ様に弄火を絶やすことはなかったし、それを・・・彼女にだけなら、見せても良いのだと思ったのだから。
誰の心の中にも、弄火は存在する。しかし、それを誰かに見せることはしないシャルルと、作品にして無言ながらも心中を見せ続けるワタルとでは、明らかに何もかもが違っているのだ。
ただひとつ、共通していることは・・・瞳の大きな、非常に小柄な、ひとりの日本人女性を求めているということだ。

追いかけても、掴みきれない焦りを楽しむほど、彼は彼女に慣れていない。
まるではじめての恋に戸惑うあの時のように、いつも葛藤を繰り返している。
昔に戻りたいから、彼女を愛しているのではない。彼は、今の彼女に恋をして、愛した。
大人になり、彼女は愁いを覚え、戸惑いや躊躇いや苦しみといった様々な感情を彼女の生きてきたそれまでに相応しい受け入れ方でもって彼女の中に内包させていた。

少女の時に彼女が彼に与えた影響だけで彼女を愛しているのであれば、一方もしくは両方が「こんなはずではなかった」と思う瞬間は、それほど遅い時期に到来することはないだろうと想定していた。
長く続かせるために、互いを偽り誤魔化して生きることはできないからだ。
それでも、いつかやって来る終わりのために生きているのではないのだ、と思える瞬間が・・・彼女と過ごしていると、突然に湧いてくる。
死までの退屈しのぎであった生命が、彼女といると、死ぬまでに彼のすべてでもって愛し抜くことができるのだろうかという挑戦に変化する。
彼は椅子から立ち上がり、上を見上げた。
今頃は、ワタル・イワツキとマリナ・イケダは話をしている頃だろう。
あの男は、彼女に何と言って説明するのだろうか。
虚言を好まない男に見えたので、マリナに尋ねられれば何か答えるだろう。

シャルル・ドゥ・アルディは執務室から出て行った。
勿論、彼女からのメッセージが受信できるように、WEB会議システムを待機状態にしておくことも忘れなかった。

温室の薔薇の様子を見に行くことにする。
彼女が戻ってきた時、部屋に飾ってやるつもりだ。

・・・彼女が戻ってきた日には、あの蒼い薔薇を捧げる予定であった。

■FireWorks　24

先日は興味深いことがあった

マリナ・イケダが唐突にそのように話をし出したので、シャルル・ドゥ・アルディは薄い唇を歪めて、蔑視する。
自分の恋人であるから、何をしても赦されるのだという感覚は、彼には、ない。
特にマリナに関しては、彼は相容れない部分が多々在った。
いつか、パリのアルディ家で暮らすことになる「未来のアルディ夫人」は、ディスプレイ越しの恋人

の様子を気にしていない。

時差の関係もあり、シャルルも不在にしがちであったので、こうしてリアルタイムで会話することができるのはごく稀なことであった。
しかし彼女はここ最近、不規則な生活を送っているようで、目元に疲労を漂わせている。
心身ともにかなり頑強であるマリナが疲労している理由を、シャルルは知っているが口に出さなかった。
そして彼から連絡をすることはない。
いつも、彼女からの連絡であった。待たせる側と待つ側と、どちらが苦しいのか、もう少し想像力を働かせろと言いたくなったが、それを呑み込んだ。

あれから数日が経過している。
その日のうちに、マリナから連絡があるのかと予定していたが、結局何もなかった。
最近では、ジルがシャルルに内密で設定した定型文しか送って寄越さない。
最初の操作説明で、毎日送信をしなければ緊急シグナルを受信するのだと聞かされて、マリナは半信半疑であったようだが、実際にデモを経験して慌てたようだ。
外泊するなということではないが、彼女の予定がまったく把握できないということは避けてくれというシャルルの譲歩とも言えない通告に、マリナは不承不承従っているという状況であった。
もっとも、彼女の予定が実行される確率は極めて低かったが。
定例作業を好まない彼女の譲歩であるから、シャルルはそれで満足している。
そして連絡がなかったとしても、シャルルはそれほど咎めることもなくなった。
言っても無駄だということもあったが、彼女が彼のことを亡失しているわけではないのだと理解しているから。

「結論から先に言え」
シャルルは不機嫌そうに言った。
いや、実際に不機嫌であった。

「何の話だ？」
「オーナーの話」
なぜ、ふたりの会話なのに、あの男の話題になるのか。
シャルルは青灰色の瞳に険を含ませる。
「凍りそうな視線はやめて」
久々に会話するというのに。
マリナ・イケダは唇を突き出して、短く説明した。
「オーナーの作品が、無事、選考を通過しているという通知が来たのに。
どこか少し様子がおかしいっていう話」
「『おかしい』という意味が不明だ」

シャルルは辛辣に遣り込めるが、マリナはまったく動じない。
彼の気質をよく理解しているのか、鈍感なだけなのか。
その両方だと思うが。

「ええと」
彼女は大きな瞳を宙に向けて、言葉を組み立てている。
本当はそんなことをしなくても、彼女のはかなり頭の回転が速いのでシャルルが閉口するほどの言葉を彼に浴びせることができるのだが。
時々、ある特定のことについては言い淀むことがあった。
そのうちのひとつが、ワタル・イワツキに関することであった。
イワツキ氏は三人兄弟で、その全員が彼女と深く関わりがある。
三人のうち、長兄と末弟だけは特に気にも留めずに話題にするのだが、中兄のワタルのことについては、彼女は言葉を選ぶ。
後ろめたいという気持ちではなく、おそらく・・・自分でも意識していないのだろう。
自分の雇用主である以上の敬意を払っているつもりなのだろうが、それがシャルルを苛つかせる。
他のふたりには、そういう気遣いは見せないのに。
彼にだけ、彼女は特別な心の動きを見せる。
「イワツキ先生が、ああ、この間、食事に行ったのだけれど、その後に画廊に立ち寄ったら『ワタルは少し苛立っている』って言うの」
シャルルは黙っていた。マリナは続ける。
「どこも変わった風ではなかったけれども。きょうだいはそういうものがわかるものなのかしら」
マリナも三人姉妹であるので、感じ入るところがあったようだ。

そういった些細な共通点から共感する恋人に、シャルルは視線を逸らすこともなくただ冷然と見つめる。
彼女はその視線に気がついたようだ。
ディスプレイを通してでも、その心の動きがわかる。
「飄々としている感じの人だけれども、さすがに、これほど大きい企画に応募したのだから緊張しているのかもしれないわね」
彼女は言葉が足りていない。
シャルルがそれを補うことができると考えているからだ。
ワタルが「苛立っている」とされているのだとしたら。
彼女の思い当たる理由というのは、先般の「弄火」を出したことによって、ワタルが心穏やかではないのだろう、ということだけであるようだ。

珍しく、シャルルの方から質問することにする。質問を質問で返すのは良くないことなのだとマリナは言うのかもしれないと思いながら。
「マリナはどう思う？」
「私は、きっととても素晴らしい結果になると思う」
彼女は考えずにそう言った。
「君がそう思うのであれば、そうなるだろう」
シャルルはそれだけしか言わない。
心の内に、僅かに焔がちかりと輝いた。
彼女が、シャルルに何とかして欲しいと言えば、彼は彼女の願う通りに実行する手楯を持っていた。
しかし、マリナはそう言わない。
彼に、決して願い事をしない。
今すぐ、月に連れて行って欲しいと願えば、彼は彼女をそこまで連れて行けると囁くことができるのに。
「シャルルも見た？どう思う？」
まったく、無神経な女だな、と思った。
しかし、かえって気を回して何も言わない方が、彼の焔を大きくするのだ、とシャルルは承知していた。
だから、わかっていて敢えて意地悪く言う。
「何を？」
「だから・・・」
マリナはそう言って口を噤んだ。彼の不機嫌の原因を察知したのだろうか。
彼女の笑顔を見つめていたいと思う。しかし、彼以外の前でそれを見せるのは苦しい。矛盾する心情を、彼は抱え続けている。
そしてそこで彼女は肩を竦める。
彼女の背後に映り込む画像は、いつも見る景色であった。
マリナの小さな部屋。彼女のすべてが詰まっている部屋。
何もかもがそこにあり、何もかもがそこにない、パラドクスという名前の彼女が創り上げた空間。
絵を描きながらそれを生業にしたいと願い、それなのに、他者を気に懸けるあまりに不在にすることも厭わない、彼女の執着と無頓着が混在する空間に、映像は戻って来ていた。
ワタルに依頼したことを報告しないのは、彼女が敢えてそう決めていることなのだろう。

ふたりは恋人同士であるというのに、ディスプレイのこちらとあちらで互いに触れることができないと歎くこともなく、会話を続けていた。
「オレは君の近況報告を聞くために、ここにいるのだが」
彼女が言い淀んでいるのを見て、シャルルはつまらなさそうに言った。彼女との時間が退屈ということではない。彼女以外の者の話を聞いてもまったく興味が沸かないという態度を見せなければ、彼女はいつまで経過しても自分のことを語らないからだ。

遠回しに、彼のために絵を描き直しており、そのためにタブレットの設定をワタル・イワツキに依頼するために、わざわざラップトップを持ち出したので彼が今見ている彼女の部屋の様子が、微妙に角度が違うのだとマリナは言えないのだろう。
こちらがかなり譲歩して、話題を提供していると言うのに。彼女はまったく、鈍感なのか、それとも強情なのか、どちらで表現したら良いのか、フランスの華は迷ってしまう。彼が迷うということはあり得ないというのに。
彼女と居ると、あり得ないことが起こる。そして、彼はそれを楽しんでいる。
彼のファム・ファタルは、彼の中にある未知なる力を呼び覚ますことが得意らしい。

青灰色の瞳で、直視しているままのシャルルを、マリナは軽く睨んだ。
「だから、私が何を感じたのか、話しているところなのでしょう」
そして、もう一度、彼女は彼に尋ねた。
「シャルルはどう思うのか、知りたいというのが私の一番最近思ったこと」
・・・そして彼女は彼の心を擽ることも揺さぶることにも長けている。
弄火という文字そのもののような人に向かって、その話題に関しては努めて気のない素振りを見せた。
「落選はしないだろうな」
「ということは、もう観ているということなのね」
マリナがシャルルの言葉に頷く。もっと具体的な評価が欲しかったのだろうが、シャルルはそれ以上は言わないことにする。すでに、最終選考に残っていることや、どの賞の候補に入りそうなのか、情報は得ていたが、彼女に教えてやろうとは思わない。

こういうことは他人から聞くのではなく自分で確認した方が、嬉しいものなのよ

マリナ・イケダであればそのように言うだろう。
そういう彼女だからこそ、彼は再びともに生きようと思ったのだから。
「健康管理くらい、気を付ける時間はあると思うが」
彼が言うと、マリナは首を傾けて、次に肩を竦めて受け流した。手の平を頬にあて、自分がいかに疲れているのかを確認しているようだ。
「もう少し、無理したらあとは休むことにする」
「その時は、パリで。いや、少し外に出ようか」
シャルルの言葉に、マリナは訝しそうな顔を見せた。
彼がどこかに行こう、と言う時は何か思うところがあるからだ。
彼女は負荷が過ぎるのであればその件から手を引くという行為は選ばない。
享楽的であるかのように感じる者もいるだろうが、結局、彼女はいつも自分の希望しているのかどうかにかわらず、遭遇してしまった事柄に関しては途中で放り出したりはしない。

■FireWorks　26

「・・・・何だか、嫌な予感がする」
確かに、そうだろう。彼は微笑む。
ふたりの予定を合わせて出掛けることになれば、彼は彼女に最高の弄火を捧げるつもりであったから。彼が手に入れることのできるすべてを彼女に捧げると言ったあの時の誓いはまだ、守られている。だから。
彼女と花火を眺めるような真似はしない。
・・・・当分の間は。
彼がワタルを意識して同じ様なことをしたとしても、それはマリナにとっては「別の出来事」でしかなく、塗り替えることはできない思い出なのだとマリナは言い切るだろう。
「なぜ」
「いつになく、優しいから」
「オレはいつでも変わらないよ。今までも、これからも」
冷笑する。
そうか、彼女は、こちらの態度の方が気になるのか。
ワタルの様子がおかしいらしいと案じている話をしているというのに。
「気を揉んでも、それは結果には影響しない、と言ってやれ」
シャルルの言葉に、マリナはああ、と頷いた。
ワタルへの対応のアドバイスなのだと気がついた後に、マリナは苦笑した。
「シャルル。話題、前後しているわよ」
「順番通りだ」
そうだ。彼女は彼の考えていることをすべて読み取っているわけではない。
同じ様に、ワタルが何について苛立っているのか、彼女はまだ気がつかないのだろう。
「それに、シャルルは少し機嫌が良いみたいなのだけれど・・・」
「『みたい』という曖昧な言い方はやめておけ」
シャルルは長い脚を組み直した。

こうして、彼女と会話するのは久しぶりのことである。椅子に深く沈み、そして彼女の顔を見ながら会話をやり取りさせる。
もちろん、今すぐにでもパリに戻ってきて欲しいが、シャルルからそのような話は開始しないことにしていた。
多く愛しすぎた方が相手に縋るようになってしまった時に、それは愛ではなくなってしまうと彼は知っているから。だから、マリナと過ごす時間だけが彼のすべてではなかった。そういう彼だからこそ、マリナは自由に日本に行き、そしてパリに戻ってくる。
なぜ、彼女なのか。
理由を述べろと言われたら、いくらでも用意できる。けれども、それらの理由がたったひとつになら

ないほど・・・彼は、彼女を深く愛している。
環境も、国も、人種も何もかもが違うのに、遠い国の彼女のことを思うと、今でも胸が熱くなる。
それは弄火であるかもしれないが、それでも、彼はその炎こそが、生きていることそのものなのだと思うから。
彼女が、弄火を命だと言ったのは、見当違いの評価ではなかった。

「何か、良いことでもあった？」
マリナが上目遣いで言うので、彼は少しだけヒントを与えてやる。
「君の顔が、いつもより大きく見えるから」
その瞬間、マリナが大きな眼を更に大きく見開いて、唇を開く。
こういう表情は、昔から変わらない。
心の内が透けて見えるような無防備さが彼女の中にはまだ存在している。
しかし、透き通って見えるのはごく一部の層で、彼女の奥深くにはまだまだ・・・彼が知らない彼女が潜んでいる。
「シャルル。シャルル・ドゥ・アルディ！」
これは彼女が憤っている時か、慌てている時の兆候だ。彼の名前をこのように呼ぶ時には、彼女はいつも・・・彼にだけ向けて、自分の感情を開かせる。

ああ、どうしてオレと君は・・・また、出会ったのだろう。

彼は、そう思う。それから、彼女は彼が指摘した事柄への回答を述べた。
「少し場所を動かしたのよ」
「少し？・・・君が、設置物を変更させようと思う気になるなんて」
彼が嘲ら笑うと、彼女は語気を乱して言い返してきた。
「そう。ちょっと事情があって。でも、元通りにしたつもりなのに」
「オレにその違いがわからないとでも？」
シャルルが軽くそう言うと、マリナは眉を上げて彼を睨んだ。
「意地悪な人ね」
意地悪。それは、彼女のことを言うのではないのか。言葉を選ばない容赦のない彼女の科白に彼は反論する。
「マリナ。優しいと言ったり、意地悪だと言ったり。オレは君に合わせてオレを変化させているわけではない。君の主観的な感覚がそうさせるだけだ。わかっているだろう？・・・オレが何を聞きたいのか」
マリナは黙り込む。
そして、シャルルは淡く華のような微笑みを見せる。
今回の口論は、圧倒的にシャルルの勝利である。それを確信したからだ。
「・・・オーナーの作品に刺激されて、私も絵に手を入れることにしたの」
描き直す、とは言わなかった。あくまでも、あの絵に上書きを加えていくという意味なのだろう。

彼女がどこか悔しそうな口調なのは、完成したらシャルルに報告するつもりであるからだ。事前に予告してしまえば、それを実行しなければならないから。
シャルル・ドゥ・アルディは決して忘れることはないから。そのうちに、マリナの話がなかったことになるということは、永遠にないのだから。

■FireWorks　27

彼女は少し嫌そうな顔をしたが、すぐに気を取り直して言った。
「パリに戻る時にまでは、何とかする」
それだけで、彼に通じると思ったようだ。シャルルは、その話を受けて、囀るように穏やかに言った。
戻る。
彼女は、パリに戻ると言った。
彼の居るところが、彼女の居場所なのだと無意識に認めていることについては、何も指摘しない。
しかしながら、彼は言った。
「それなら、近いうちに会おう」
マリナは更に眉間に皺を寄せた。
「早く仕上げろということなの？」
彼女が疲労している顔を見せているのは、鋭意努力しているからなのだろうが、彼が督促したことによって彼女は更に予定をいろいろと繰り上げなければならなくなってしまった。
「オレは何も言っていないよ。君に求めることは、多くはないつもりだけれど」
彼が常日頃彼女に言っていることは、はやく名実ともに彼の生涯の伴侶となって欲しいということだけであった。
それがすべてではない。制度に従うのではなく、彼女が彼女の人生を彼に添わせても良いのだという決意を見せて欲しいということだけであった。
彼は、彼女が望めばすぐにでも一族を従わせることができる。しかしマリナはそれを望まない。
彼女はそのまま無言で視線を彷徨わせる。
どう答えて良いのかわからないようだった。
それで良い。
迷うのは、良い兆しだ。
彼は、何度でも彼女に恋をする。
離れた時間も距離も、次があるから待つことができた。

マリナは、あっと声をあげた。ディスプレイに表示される時刻をみて、我に戻ったらしい。
「これから少し作業が残っているので・・・」
そろそろ回線を切断したいという申し出であった。
シャルルも頃合いだと思っていたので、そうか、と頷く。

「手直しの手直しは存在しない。精神を健やかに保ち、良い状態で、直しはこれきりだと思って取り組むように」
「イワツキ先生と同じ事を言っている」
彼女は苦笑していた。なるほど。あのタケル・イワツキも彼女の状況を案じて、何か助言しているようだ。
皆と同じことをするつもりはない。その他大勢と彼を一緒にされては彼の誇りが許さない。

それなら。

シャルル・ドゥ・アルディは、彼女の顔を見つめた。
いつも観る彼女の表情とは少し違う。
角度のせいではない。
彼女の疲労のせいではない。
他者の与える影響が彼の感情を左右させているのではない。

彼が、彼の弄火に炙られながら彼女を眺めているからだ。

「マリナ」
最後に、彼は思いを込めて言った。それは、彼だけが許されていることであるから。だから、厳かに静かに述べる。彼の母国語で述べるのではなく、彼女の国の言葉で誓う。
彼女に伝わるように。己に、もう一度誓うために。

なに？

そう言いそうな彼女の瞳はすでに遠くを見ていた。
これからまた短い時間を捻出して、作業に取りかかるのだろう。
彼女が連絡して来なかったのは、タブレットの使い方について習得できていなかったために遅々として進まなかった状況を報告することを避けるためであったのだろうと思われた。
何もかもが予測でしかなかった。
けれども、今は、それを楽しむ。
彼は、根拠のない推論という名前のものは妄想と言い改めて切り捨てることにしている。
しかし、彼女に関することだけは、その空想すら、受け入れている。愛に盲目になってしまいたいと思うが、互いにそうはできない年齢になっていった。
周囲のことが気になり、相手のことを考える時に自分のことを自分で見つめ返すことが必要なのだと悟ることが出来るようになった。年齢のせいではない。
たくさんの、出逢いと別れを経験してきたからこそ言える真実であった。

だから無防備な彼女に向かって、彼は囁く。少し、身を乗り出して。
彼から身を近付けた。
彼女から見える彼は、いつもと変わらないのだろう。
だから、少しだけ近付く。本当なら、彼女を抱きしめて、彼女の髪の中に顔を埋めて囁き、そして彼女の躰を一晩中離すことのない状況で言うべきことなのだろうが。
「・・・・愛している」
彼は、ディスプレイに向かって、指を伸ばす。
そうすれば、彼女の温度を少し感じることができるかもしれないという祈りを込めて。
彼女と生きていると、一番大切なことを、忘れてしまいそうになる。
彼は決して忘れないのに、あまりにも幸せで忘れてしまいたいという気持ちになってしまう。
それが彼の弄火であることは明白であった。

マリナは驚いた顔をしていた。
それからすぐに真面目な顔つきになり、やや俯き加減になった。
彼女はこういうことに慣れていない。
気持ちを交わすことについて、彼と彼女ではやり方が違う。
ワタルとシャルルの愛した方が違うように。

しかし、マリナは粋狂でそのようなことを言うことがないと知っているので、一瞬だけくすぐったそうな顔つきになったが、すぐに彼と視線を絡めさせた。
「何か、困っている？」
彼女の言葉に、シャルルがくすり、と声を漏らして笑う。
ああ、彼女はいつまでも・・・そうやって助けが欲しい者の声なき声を聞くことができる。

マリナが同じ様にディスプレイに手を伸ばしてきた。
マリナの側に映る彼の掌に自分のそれを添えたのだろう。
彼女の腕が動いて、彼を撫でさするような仕草をみせた。

「ああ、退屈で死にそうだ」

すると、マリナは軽く髪を揺らし、彼に近付いて覗き込むようにして身を屈めてきた。
カメラへ視線を向けているわけではないので、シャルルからみるとそれは少し俯いた様子に見える。
そう。
あの「弄火」に出てくる彼女のように。

物憂げに俯き、手が届かない燦めきを遠目で見ながら自分もそこに行き着きたいと願う思い。
それは、確かに彼女の言う通り「命」そのものなのだろう。
確かに、彼女は彼の「命」であった。そして「弄火」でもある。

・・・そうか

彼はそこで気がついた。
なぜ、ワタル・イワツキがあのような態度を見せたのか。
マリナのあの表情・・・ワタルではない、彼女の恋人を思いながら見つめた弄火を、彼は形に残した。
自惚れではなかった。
マリナが、儚い命を思い返す時というのは過去を振り返る時である。
自分の命を惜しんでいるのではなく、彼女の前を通り過ぎた命達を悼んでいるのだ。
そのような時。
シャルルのことを思い返すことが多いのだろう。
それは、彼と彼女の間で消えない命題になっている。
生涯をかけて考え続けなければならない問題であった。

・・・夜に華開く火花のように、散ってしまえるものであるならば、どれだけ安らげただろうか。しかし、それを選ぶことはしなかった。そのように考えるシャルル・ドゥ・アルディだからこそ、マリナ・イケダは彼に飛び込んで来た。
彼が今の彼女を愛したように。
彼女にも、今の彼に対して心が動いたのだと思う。
それを信じているからこそ、現在がある。
慢心してはいけないと考えているが、それでも、彼女がなぜここに居るのか・・そのことについて、考え続ける必要があった。
だから。
彼女が居ると、彼は退屈しない。
マリナは、シャルルに問いかけるから。そして、それだけではなく、彼女は常にシャルルへの問答と同じものを自分自身で考え続けているから。
彼ができないことはないと信じていた。
けれども、人間に関してはそうではないのだということを知り、彼は苦悶し続けた。
その時に。彼女は、生きることへの問いかけをしたのだ。シャルルに間違いはなく、彼に問うものなどは居なかった。相談することはあったが、彼に根源を覆すような問いかけや願いをかける者について、彼が向き合おうと思った数少ない人間であった。

「だから、君の言葉が欲しい」
彼は囁く。

もし、彼女がここに居て。
彼に抱かれながら囁く言葉だとしたら、その意味は半減してしまう。
愛撫に必要な言葉と彼女が受け止めてしまうからだ。
そうではない。
そうではないのだ。
肌の温度を感じなくても、彼は彼女を感じることができる。
こうして、画像として目にする彼女であったとしても。
彼は、それでも彼女を待つことができる。
面と向かって言うのであれば、決して言う事は無い。
けれども、彼女には直接言わなければ通じない。

まったく、面倒な人であった。

■FireWorks　29

マリナ・イケダが、シャルル・ドゥ・アルディに向かって囁く。
気恥ずかしいのかもしれない。けれども、彼女はそれでも彼に向かって笑顔を向ける。
彼の告白に、彼女は応じた。

「できるだけ、努力します」
それはパリに向かう予定を繰り上げるということであった。
「そうしてくれ」

彼はそれだけを言うと、満足そうに頷く。
彼女が改まった言い方をするときは、本当に実行するときであった。
きっと・・・あの時の絵を少し違った解釈で仕上げて、それとともにシャルルの元に戻ってくる。
彼の言葉を聞くために。
そして、彼は、彼女に捧げる言葉を探しながら、彼女の帰りを待ち侘びる。

「・・・近いうちに会おう」

彼の恋人は、彼の歎きに呼応した。
彼女にはこう聞こえる。

「はやく会いたい」

マリナは微笑んで頷いた。
「シャルルの本音が聞けた」
「君の本心は、なかなかわからないからね」
「そうかしら」
「そうだ。・・・研究に値するよ、君は」
それは彼なりの讃辞であった。
彼が理解できず、理解したいと思う対象であるということは滅多に発生しない事柄であったのだから。

「私も、シャルルの笑顔が描きたいのよ」
彼は知っている。
彼と過ごすようになって、彼女は人物画を描かなくなってしまった。
その奥底にある葛藤を知っているだけに、彼は何も言わないでいた。
けれども。
彼女が、蒼い薔薇の絵を彼に重ねて描き直すというのであれば、彼はそれを受け入れる。彼女の中にある変化を、受け止める用意があった。
何も言わないのに、ただ、互いを求める。
どうしても、彼女でなければならない理由がそこにあった。
一瞬でもいいから、彼女の姿や声を感じていたい。
遠く離れていたとしても。心は、近くにある。

「マリナ。・・・君は？」
彼は尋ねる。
先ほどの彼の言葉に対するこたえを求める。
誇りを捨てて、彼から述べた。
どちらが優位であるのか確認する必要はない。
愛の優劣をつけたがり、彼で彼を縛ろうとし、彼を求めた者たちと違う。
それは、彼女から学んだことであった。
かつての自分と同じ愛し方ではないのだろう。
だから、彼女はここに戻ってくる。

彼女は、愛の見返りを求めない。
愛して欲しいという欲求はあるが、彼だけが彼女に跪くことを求めてはいない。

・・・他の誰にも感じないことであった。
愛とは、矛盾したものである。
そう学んだはずであるのに、彼はいつも・・・愛に対して期待してしまう。そして失望する。
その中で、マリナだけが、彼の涸渇した虚に飛び込もうとする勇気を持ち続けた。

「うん・・・会いたいな」
彼女はそう言った。
恋人に対する言葉にしては淡泊すぎる。
けれども、彼女の最高かつ最大の愛の囁きであった。

「そうか」
彼はそれだけ言った。
ふたりの間には、もう、それだけで十分すぎた。
不器用な会話であることは承知している。けれども、それで良いのだ。

「酷い顔だぞ。過信は禁物だ」
「シャルルに言われたくない」
マリナはいつも通りの彼の憎まれ口に対して唇を尖らせた。
それから、彼女は回線を切断すると言って、短い挨拶を交わした後、ディスプレイから姿を消した。

■FireWorks　30

シャルルは暫くの間、そのまま座ったままであった。ぼんやりと天井を見つめる。
見慣れた風景であったが、彼女から見る景色は、そこまで映り込まない。
彼が座位のままで彼女と対話するのは、広い椅子が背景となってそれ以上の情報を相手側に映し出さないという意味も込めている。
本来なら、顔を出して会話するということも必要ではないのだが。彼女に関しては、何もかもが特別扱いであった。

そして、シャルルは暫く瞑想に耽るが、やがて物憂げな視線をディスプレイに向ける。
彼女が切断したウインドウは暗転表示されたままであったが、もうひとつ、サブウインドウがアクティブになっていた。

・・・そこには、彼女と会話しながらもリロードをし続けた画面がある。

ワタル・イワツキのWEBサイトであった。
彼女をモデルにした作品が掲載されているページは、ブックマークしてあるだけでは再表示されない仕組みになっていた。
つまり、彼の作品を・・・彼女を追いかけていきたいと思うものだけが、そのページを探すことができる。
アーティストとしてその行為は挑発的であり、かつ、彼の支持者を減らす行為なのではないのかと疑問視されるが、これが彼の作品の魅力のひとつでもあり、見る度毎に閲覧累計数が増えていっている

ようであった。

そのページで何ができるというわけでもない。
ただ、見るだけ。
そして、彼女が映り込んだ世界を彼は創り続ける。
減ることはない。増え続ける。
決して触れることはない。

ワタル・イワツキは穏やかな風貌であったが、心の内には弄火を燻らせている。
シャルル・ドゥ・アルディと同じ様に。

そして、シャルルも待っているだけだ。
彼女が、彼のためだけに描いた絵を彼に見せる日を、待っている。

気が遠くなるほどの長い時間を過ごしてきた。
それを無為であるとは思わない。今は、そうは思わない。

そして、新たに更新されているページを見て、彼はまた心をざわつかせた。
マリナや他の者には悟らせない程度の、己の心の葛藤であった。
彼が出品した「弄火」の隣に、またひとつ・・・「弄火２」というタイトルの、未発表の作品カテゴリができていたのだ。
まだ掲載はされていない。タイトルだけであった。

ワタルは、この作品を連作にするつもりのようだ。
なるほど、と僅かに唸る。
作品を修正できないのであれば、作品を連作で出し続ける。

・・・そういう選択をしたのか、あの男は。

改訂版にするのか、また新たな弄火を彼女に見せて、それを作品にするのか。
どちらであっても、シャルルには愉快なことではなかった。
それを承知の上で、あの男は挑戦してきているのだろう。

ワタルは、シャルルに許可を求めなかった。
彼女をモデルにして良いのか、と言わなかった。
そう尋ねたとしても、シャルルは「彼女は物品ではないのだから」と言うしかないことを承知しているからだ。

許可というのは、何を「許す」のだろうか。
そして。
それが、何を意味しているのか・・・わからないシャルルではないし、何をしているのかわからないワタルではないだろう。

彼らの弄火が、各々、彼女にどう映るのかは、彼女でなければわからないことである。
それでも。
シャルルは心の中にある弄火を、彼のように外に出すことはしない。
榾火のように燻り続ける焔を、彼は抱えて生きていく。
彼女を愛し続けるということは、決して楽なことではない。
それでも愛することをやめることはしないし、彼女を誰か他の男にくれてやるつもりもなかった。

彼は不敵な笑みを浮かべた。
負けるつもりはない。
無言で挑まれた闘いに、彼は身を起こす。
そして、すべてのシステムを停止させるコマンドを打つと、そのまま立ち上がった。

ワタル・イワツキのサイトの他に、彼が眺めていたものはもうひとつあった。
それはマリナのラップトップから自動送信されてくる更新ファイルのログであった。
彼女は今、彼のためだけに絵を描き直そうとしている。定期的に自動更新されているらしく、彼のファイル監視システムでは日本時間での更新時間が蓄積されていく。
・・・あの男が設定したものだということはわかっていた。
ワタルほどの者であれば、この設定に気がついただろう。
そしてシャルルはこれほど頻繁に更新するように初期設定を施していない。
シャルルは状況を把握した。
ワタルがそのように再設定し直したのである。

どれほど手を伸ばそうとしても、決して触れることのできない人のために。
それが、ワタルの愛し方なのだ。

苛立ちを通り越して、呆然とする。
それほどまでに、彼女に尽くして見返りを求めないとは。
・・・まるで、いつかの・・・若き日の己を見ているような気分になってくる。

シャルル・ドゥ・アルディは、その画面もすべて消えると、ようやく部屋を出ることにした。
まったく気配の残らない、寒々とした部屋であったが、ここに居れば彼女は戻ってくる。
だから、彼は彼女が戻ってきた後のことを考える。
どうやったら戻ってくるかという問題は、彼には問題にならない。

「早く戻って来い」
彼は呟く。

マリナは今頃、また、没頭していることだろう。
あの絵を仕上げるために。
そして、ワタルは次の「弄火」を描くために準備を進めていることだろう。

シャルル・ドゥ・アルディは・・・
今宵も、彼女のいない夜を過ごす。
彼の弄火を燻らせながら。

また、温室の薔薇の状態を見つめて夜を過ごすことになりそうであった。
こんな風にして眠れない夜を幾度過ごせば、彼のファム・ファタルは戻ってくるのだろうか。
しかし、どれほど美しい薔薇を捧げたとしても。
彼女の笑顔に勝るものはない。そう信じている。
だから、今夜もひとり、内なる弄火を眺めながら時間を過ごす。
マリナも、ワタルも同じ様にして過ごしているだろうか。

目覚めて、次に更新履歴を確認するのが心待ちであった。

芳しい状況とは言えなかったのに。
シャルルは、微笑んでいた。

彼の中にある、不屈の魂という名前の旧き血が滾る音を聞く。
彼女は、シャルルの乾燥した透明な世界に、鮮やかな色をもたらした。
しかも色だけではなく、打上げ花火のように・・・大きな光と音も連れてきた。

それは弄火という名前の・・・彼がもう少し生きていても良いのかもしれないと思える理由に充分な、命の燦めきであった。

そうか、と納得する。
彼女が着たという衣の図案が、シャルルには推測できた。
弄火とは、ひとつだけではなく誰かと誰かの弄火が重なりあっているからこそ「弄火」というのだと悟った。

シャルルは温室へと足を向けた。
薔薇の観察で時間を過ごすことに決める。

彼女が原因の睡眠不足でマリナへの往信を滞ることになったと言って咎めたら、彼女はまた理解できずに困った顔をするだろうか。
シャルルから連絡することはほとんどないのに、と言って唇を尖らせるのだろう。

・・・早く会いたい
彼は心の中で呟いた。

彼女に今度会った時には、「弄火」について夜通し語りあっても良いとさえ思えるほどには、あの作品は良いものだと認めてやってもよい。
そう思っていた。
しかし、それをマリナに言ってやるつもりはない。
彼女が、彼の腕の中で眠っている姿を見て満足しなければ、彼は認めるつもりはない。

フランスの華は自分の中にある焔を静かに燃やし続けていた。
それが「弄火」という名前の・・・命や愛の別の名前であることも、承知していた。

シャルルは微笑みながら、執務室を後にした。
しばらくは眠れない夜が続くだろうと予感しながら、歩きはじめる。

ワタルの次の作品の更新を待つ。
苛立つことではあるが。
彼の作品にはマリナが必ず出てくる。
これを無視することはできない。

そして。
そして・・・・

彼は、彼女の絵の仕上がりを心待ちにしながら。
いつ戻ってくるか、まだわからないのに。
彼は彼のファム・ファタルのために、最高の状態の薔薇を探すことにした。

（FIN）

sparkler　前編

■紙縒　01

寂しい海だね

彼のファム・ファタルがそう言ったので、シャルル・ドゥ・アルディは白金の髪を傾けた。

同時に、整った顔が無表情にマリナの方に向いたので、彼女は少し顔を赤くして横を向いた。

けれども、それは彼の蒼灰色の瞳に吸い込まれそうになって、慌てて踏みとどまろうとしているからではない。

彼に観念的な話をしても「どこがどう寂しいのか」「何を根拠にそう思うのか」と矢継ぎ早に質問するのは目に見えて明らかだったからだ。

美に関しては厳しいと言えるほどに彼の審美眼は卓抜している。

どこの誰と比べてなのかというと、それは世界規模になるのだろうと思うほどであった。彼は人と勝負することは厭わないが、誰かの摸倣と言われたり、誰かと比べられて劣っていると判断されたりすることを極端に拒否する傾向にあった。

それを十分すぎるほどよく承知しているマリナでさえ、今でも閉口することが多々あった。

マリナが夏の休暇は海で過ごすものだ、と言ってから。

彼の予定は固定された。

この時期の海への外出は恒例になっていた。

夏になると海にやって来るようになって、幾度目なのだろうか。

そしてそれはいつも違う海であった。

幾つ、違う海を眺めることができるのだろうかと思うけれども、それはこれからずっと続くのだろう。シャルル・ドゥ・アルディが忘れない限り。そして彼は決して忘れることはしない。

数えることすら、些末なことになっていく。

彼はきちんと累計しているのだろうと思うが。

シャルル・ドゥ・アルディはフランスの華と呼ばれる天才で、成人してもなお、その呼び名を失ってはいない。

彼にできないことはない。

彼が忘れてしまうことはない。

でも。同じ様に、彼が忘れたいと思うことも、忘れてしまうことができない。

マリナは、だから、新しい思い出を作り続ける。

彼がそれらを選んでは杞憂に心を沈める時間さえないほどに、多くの断片を彼に与え続ける。

彼は気難しいけれども、マリナを困らせようとしているわけではない。

彼の思考過程の論理や帰結が人を困惑させるだけであるが、彼は他者と自分が異なる駒運びをすることを知っている。

人と競うことを好むのに人を知ろうとしないとマリナに指摘されてから、彼は違う角度でもって物事について考えるようになった。

もし、自分ではない誰かであったのならどう思うのか」ということについて眺めることを考慮項目として追加したようだった。

目の前の海は、ひとつである。何処に行っても、ひとつになって繋がっている。それなのに、景色が違う。海の色が違う。照り返す光の色が違う。
・・・だから。
シャルルは、違う視線を持つようになった。
マリナ・イケダを永遠の恋人として受け入れるまでに。
そして彼女がシャルルを受け入れるまでに、随分と永い年月を要した。
彼女が、誰と、どんな海を眺めたのかシャルルは訊ねることはない。
マリナは幼い時から転居を繰り返した。そのために、一般的な価値観と違うところがある。
そういう風にシャルルに指摘されても、彼女は自分のことなのだと実感することができなかった。
人と比べてどうであると考える余裕すらないままに、次の風景をいつもの風景として受け入れなければならない日々を送ってきたから。
恋人同士の逢瀬として向き合う景色に、海を選ぶのは珍しいことではない。
しかし、それを見て「寂しい」と感想を漏らしたマリナに、シャルルは陽気とは言い難い口調で彼女に尋ねた。
「砂色が黒いのは、玄武岩質であるからだ」
白く輝くような砂浜を神聖な海と崇める者も多いが、このように黒く底の知れないような海こそ、神域として定められることが多かった。
人は、透き通ったものを神聖なるものとして受け入れるのではなく、底知れないどこまで続くかわからない果てのないものを理解不能として尊崇することもある。
清らかなものだけではなく・・・先が見えないものこそを神聖なものであると言う、マリナの生国の価値観が興味深い、とシャルルは述べる。
彼の家が、親日家であると言うのは、このような理解不能なことが多いからなのではないのだろうか、と思う。
でも。
彼は知りたいという欲求が強いのだと思う。
人が嫌いなのに、人を知りたいと思う。
生きている人間を相手にするのは億劫だと思っているのに、命のない体から生きている時のことを知ろうとする。
「・・・海は、海ごとに違うのね」
マリナの呟きは、すぐに波音に消えた。
小さな、本当に小さな湾に対面していることすら、これは特殊なことなのだ、と思った。
ここに入ることが許可されたのは、マリナの生年に影響する。だから、もうこれから先はそれが巡ってくるまでやって来ることは出来ない場所であった。
禁域、と人は言う。
ここは湾が小さく、かなり遠方まで見渡すことができるのに、遊泳どころか入湾すら許可されない。
それは、この湾が、神社の敷地の中と位置づけられており、この区域を見守る氏神は「ふるとりの神（女神）」と言われているからだ。

番いでやって来ると、女神が嫉妬して海が荒れると言う。
荒天の時には、こんなに小さい、囲まれた湾であってもかなり荒れるらしい。
そういったことを聞いているのにも関わらず、文化に疎いと言いたそうな外見のシャルルとマリナがやって来ることができたのは・・・
マリナの生年が、この禁域を司る聘神（めがみ）と同じ条件を備えているからだ。
彼女の生まれ年が、ここの神と同じ年回りであったから。
それは本当に偶然であったのかもしれない。
しかし、シャルル・ドゥ・アルディはそれすら計算に入れて、この場所を指定したのかもしれないし、きっとそうであるかもしれないという確信の方が、彼女の困惑の内訳を大きく占めていた。
滅多に見ることのできない景色を、マリナに見せる。
それが、シャルルの愛情表現であるのだろう。ただ、嬉しいと思うけれども。
少し、哀しかった。
ふたりで過ごす時間は、とても穏やかで時に激しく、そして誰にも言うことのできない時間である。
けれども、海にやって来るというのは、少し違うような気がした。
なぜ、海に来てしまうのか、マリナ・イケダは考えこむ。

■紙縒　02
マリナ・イケダは目の前に広がる海を見つめる。
今回は久方ぶりの公開であるという。
ここ一体は禁漁区であり遊泳すら禁止されているので、立ち寄ることもできず遠くから眺めるだけしかできない場所であった。
そんな場所をなぜ知っているのか、とシャルルは言いたそうな顔をした。
・・・彼と彼女が一緒に過ごすようになってから、彼は海に出るようになった。東洋人の肌質とは違うので、紫外線を強く浴びることを好まないシャルルは、それでもマリナの希望のままに、海を見に行く。
本当に僅かな、一瞬と言っても良いほどの、夏の休暇出会った。
そして彼らは波と戯れ、夕陽が白浪を緋色に染めるまで波の数を数え、日没の後には空の星が流れる様を見上げる。
ただ、海を見つめるだけだ。
戯れることはない。
彼女にとって、夏の海は神聖なのだと思った。
彼の最愛の人は、流されるのではなく、流されないで佇むことを覚えた。
だから。
彼は今の彼女となら海を見ることができる。
昔は・・・彼女と決して見ることが出来なかった景色だ。
海は、過去と未来とそして現在を混じらせる場所だとマリナは言う。

いつか、彼女にアルディ家の保有する孤島を見せてやりたいと思った。幽閉される場所ではない。けれども、彼女は困惑するだろうと思うから連れていかないだけである。
あの翠の閃光が見える場所に彼女を連れて行けるのは、いつのことだろう。しかしそれは遠い未来ではない。
シャルル・ドゥ・アルディの微笑みに、マリナ・イケダは僅かに頬を染めた。
運命の人を決めたと言ったのなら。
母は何と言ったのだろうか。
そして、遠い昔に彼を理解しようとしてくれたオデットは。
・・・それから。
・・・彼女を絶対に離さないと言った癖髪の親友は、何を言うのだろうか。
マリナはシャルルを見上げた。
非常に小柄な彼女は、シャルルを見上げるだけでも大きく伸びをしなければ彼の貌を覗き込むことはできない。
そうするとき。彼は、感じる。彼女は彼の心を覗き込もうとしているのだと。そして、感じる。
彼は、誰かに己の心を見られることを拒否している。
それが親友であっても。それが愛する人であっても。
だから、彼の許可がなくても彼女は彼に入り込む。
彼に求め無くても、彼女が求めるから。
だから、マリナは海の波のように彼に入り込む。
引いては寄せる。寄せては引く。
押し寄せて、阻んでも入り込む。
「・・・砂が黒いから」
シャルルはそう答えた。白い砂浜と印象が違うのは、海砂の生成物が異なるからだ。それを言っても、彼女は自分の言葉が正しいと主張することはない。
彼女がなぜ、今夏は黒紺に光る海を見に行きたいと思うのか。
だから、それが全てであった。彼女の言葉の通りであった。
「でも、海は海だ」
マリナ・イケダがそう言った。
シャルル・ドゥ・アルディはそれには何も言わなかった。
自分が死んでも、泣かないで欲しい。泣くのは、自分以外のことで・・・そう願って、彼女から離れた。彼女の泣き顔を見たくなかった。けれども、彼女の涙に濡れる顔を見つめ、彼女の失望を感じながら生きることはできないと思った。愛している者達に愛していると告げることは容易いことなのかもしれない。
無軌道に生きることも誤魔化すこともできなかった。
純白の世界に生きることはできない。生きるということは純白ではないからだ。
白く清らかであることが、生きることの条件ではない。
そう教えたのはシャルル・ドゥ・アルディ自身であったから。
「海に色があるのは、その場所の組成が違うからで・・・」

「そうね」
マリナがシャルルの説明を柔らかく遮った。
「うん・・・そうだね。色が違っても、海は海だ」
マリナはそう言った。
ここの海は神域であるから、いつでも見られる光景ということではない。
しかし、誰でも訪れることができる場所でもない。
彼女が海を眺める時には、シャルルは触れてはいけないような、敬虔な空気を感じる。神に会うときにはこのように感じたのだろうか。
彼女は神ではない。
だからこそ、彼女に惹かれる。
神以外で彼を信じさせるものは、とても数少ないものであったから。

■紙縒　03
神を信仰するということと、存在を信じることは違うのだと冷笑を加えながら言ったことがあった。けれども。
マリナ・イケダは考えこんだシャルルの顔をちらりと見て、そして楽しそうに笑う。
浮かれて言葉が増えるのではなく、彼女は海にやって来るとなぜか静かになってしまう。水が怖いのではなく、水に対して何か神聖なものを感じているのだろうか。
彼女は沈んでいるのではなく、浮き立つ心を平らにしているような様子であった。
眺が波間で揺れている様を、マリナは眩しそうに眺めている。けれども、そこに入る気配はなかった。
日が傾いて、緋の光が僅かな時間だけ、海を己と同じ色に染めている。
「・・・綺麗な赤」
マリナが声を上げた。海砂が暗色であるので、夕焼けの色が透過せずに海上にそのまま乗っている。
いつも、マリナは海に行こう、とだけ言う。
深緋の海を見に来たいと言ったのではない。
しかし。
彼女はいつもこうして夕暮れや朝焼けを見たがるようだ、とシャルルは既に気がついていた。
マリナは小さな湾がすべて見渡すことができる場所までやって来ると、砂の丘に座り込んだ。
付き添いも解説する者も必要ないと言ってあった。それだけで十分な指示となり、誰もこの周囲にやって来る気配はなかった。
彼は人の多い中に好んで身を潜めることもあるが、マリナと一緒に居るときは静かな時間を好んだ。
人が恋しいと思うマリナには酷なことであることも承知している。
しかし、ようやく捻出した時間を彼女と自分の為だけに使う時には、余計な音も光も・・・言葉すら必要ないと感じていた。

禁域とされる海であったので、濁りも汚れもなかった。更に今夏だけは公開される。
だから、こうして近くまで寄ることが出来る。
遊泳に適した海岸はここからそれほど近くない場所にある。
公開されていることも周知していないので、人が寄ってくることもなさそうであった。
あと幾つ、こうして海を巡ることができるだろうか。数えることをやめたはずであるのに、彼はそれでも繰り返す。彼は繰り返すことはしないのに。
海に入るのは、明日でも構わないから、海を見に行こうと彼女は言った。
シャルルが傍に居なければ、彼女は一日中、海を見ていたいと思い本当にそうするのだろう。
紫外線も気にしない彼女に苦笑いする。夕刻だから構わないだろうということで彼女は身軽な格好でやって来たが、いつも持ち歩いている鞄を肩に提げている。
砂に足が埋まり、彼女は何か呟いていたが、すぐに靴を脱ぎ捨てた。
それほど長居するつもりはなかったシャルルは、マリナが座り込んで少し小高くなった砂丘に身を埋める。砂で汚れることも気にしないその様子は慣れたもので、彼女はこれだと思う場所ではところ構わずにそのように座り込んで目線を下げて眺めることに没頭する。
スケッチをしたいのだろうと思った。
しかし変わりゆく波の色を見届けたいと思う気持ちが勝っているらしく、彼女は無言でそれらを眺めていた。
すると、彼女は後ろで立ったままのシャルルに顔を向けるために体を捻った。
「座らない？」
「君が頼むのなら、座ってやっても良い」
彼は溜息混じりに言った。長時間の移動で窮屈だと言った為に、暫くの時間を散策に充てるということになった。彼女の言うことに、いつも従うわけではないが、彼女を伴えば禁海を見られるということであったので同意したのだ。
今夏を逃したらもうここにはやって来ることは出来ない。
彼ならできないことはないと言われているが、このような定めがあるものを曲げてまで行うことについてシャルルは否定的であった。
過去、彼らが巡った様々な危険も、これらの海の前では静かな泡となって、日没の光の中で漂う波のように彼らの心の中に染み入っていく。
彼の高慢な物言いに、マリナは笑った。彼女の前では、すべてが彼女の笑顔の源になってしまうかのように、彼女はよく笑う。確かに豁達な人であるが、彼女は弾けたように笑うのではなく、静かに微笑む。
「この海のこの景色は、今しか見ることが出来ないから」
彼女がそう言うと、シャルルは無言で彼女に近寄り、そして躊躇うこともなく彼女の隣に座った。
少しだけ間が開いていた。自分の鞄はシャルルと反対側に置いたマリナは膝を抱える。
海の風が僅かに強くなった。
汐の香りがシャルルの白金の髪の間を抜けていく。

■紙縒　04
海を見ながら。
彼女は呟いた。
「ああ・・・」
ふたりで過ごすようになって。
シャルルとマリナは、黙って過ごす時間の尊さを知った。 会話を楽しむだけではなく、無の会話というものを知った。 同じものを見て、同じものを共有し、そしてただそれを眺めるだけの時間。
しばらくの間、斜暉をふたりで過ごす。
昏い色の海は、緋赤に染まってそのまま黒紺に変わっていく。
雲が無い空と、波の少ない海が、僅かな時間だけ融け交わる。
黙って並ぶという贅沢を、こうしてふたりで共有できるとは思っていなかった。
どこか切なくて、どこか懐かしい。そんな美しさが広がり、そこには静寂だけが漂っている。
風も音も汐の匂いも・・・すべて無に近い細やかさでもって彼らを迎え入れる。
誰も招き入れたことのない禁域の海。
少し前までは、ここには立入禁止の札と注連縄が鎖のように張り巡らしてあったのだろう。
痕跡がそこかしこに残っていた。見せるための場所ではない。
そんな場所にやって来て、彼女は海に入ろうとしない。
それがマリナの特徴だと、シャルル・ドゥ・アルディは思った。
彼女は、真っ先に徴を残したいとは思わない。
これまで見た彼女からはとうてい想像できなかった。
真っ先に、未知なる場所に飛び込んで行く人だと思った。
けれども。
彼女は、入っていけない場所を心得ている。
禁じられた場所について、彼女は自分が足を踏み入れて涜してはいけないのだと思っている。
いつもの通り、何も考えている風もなく走って海辺に飛び込んで行くのであれば。
シャルルは、それでも彼女をファム・ファタルと呼んで愛し抜いたかどうか疑問に思う。
彼女は大人になって愁いを知り、戸惑いを知り、近寄ってはいけない場所を決めてしまうようになった。
傍で見ていて、彼女が何を考えているのかよく理解できる。
彼女は、自分がその風景に入ってはいけないのだと思っている。
だから、彼女は自分と誰かを一緒に描いた絵はほとんど残していない。
いつか・・・彼女の命が弊えるときには彼女は自画像は殆ど残さないのだろうと想定している。
絵を描く者であるのならば、真っ先に描く自分自身というものを、彼女は描かない。
やがて、マリナの方から話を切り出した。
「ここでやってみたいことがあったの」
その言葉から、彼女はこの場所に以前に来たことがあるのだと悟った。
そうだ。彼女は、以前に経験した場所を巡っている。

そう思ったが、シャルルは黙ったままであった。
そのとき、マリナが誰と、いつ、やって来たのかは聞くことはしない。
尋ねても、シャルルは満たされないからだ。逆に、彼の知らないマリナ・イケダをマリナから聞かされることで彼は彼女との距離を感じてしまう。
何もかもが違って生きてきたふたりであったから。
違うことを確認するための海にしたくなかった。そういう意味の鑑賞ではない。
死ぬほど・・・愛しているから
それは、このまま死にたくなってしまうほどに愛しているという意味なのか。
それとも。
愛し抜いた先には死しかなく生きて愛することが難しいと思うほどだという意味なのか。
彼は、補足することもなく口に出した過去を思い返す。ひとりではないと思いながらも、深い孤独を感じていたあの頃。
死ぬほど愛している、というのは・・・海の底に沈んでも、この愛だけは譲れないと思ったのか。それとも・・・諦めるには死でしか購えないと思ったのか。
彼にわからないことはないのに、そのときの彼の言葉にだけは、マリナ・イケダに語れない煩悶が存在する。
「・・・何？」
シャルルがゆっくりと、視線を海に向けたまま言った。
彼の恋人は、そんな彼の様子に慣れていた。変わらない彼の切り取られた写真の破片のような、動きのない動作に少し笑いながら言った。
自分の鞄を引き寄せながら、砂の上で彼女は彼に告げる。
「ここで・・・線香花火を点してみようと思う」
そう言って鞄に手を伸ばす。砂に僅かに沈んだ鞄の中で、マリナが何かを手に取って引き揚げていた。
彼女の鞄には何でも入っている。当面必要な彼女のすべてが詰まっている。
今回は・・・彼の思っていなかったものが投入されていたようだ。

■紙縒　05
彼女が取り出したのは、白い木箱だった。真新しいから白いのではなく、そういう木を使ったもので・・・それはどこか、この国の者が、死者を納める時に使用するものに見える。
彼女の小さな手の平で持ち上げてしまえるほど、中身は軽いらしい。
箱の上面には焼き印で作り元の文字が刻まれていた。
それは赤い紐で縛められていた。
・・・彼が彼女の手首に廻した古代紐のように。
そこには、中身がいかに軽くても決して軽んじてはいけないのだという宣言の祝詞が廻されていた。

「とても綺麗なのよ」
彼女は嬉しそうにそう言う。
焔の花は、箱の中にあった。そういう保存方法をする製造所は珍しい。袋売りされるか、他の花火の付属品のように静かに横たわるものの欠かすことのできない夏の季語のひとつだと認識している。
・・・この国で、花火というものはとても特殊な意味がある。他の国のように、合図の意味よりもっと深いものがある。
それは、命そのものだ。
マリナが、あの男と一緒に観た弄火をそのように感じたように。彼女に弄火という名前の浴衣を纏わせたあの男が考えている生死への考えそのものが・・・そこにあった。
「頂き物なの」
マリナがそう言う。誰から譲渡されたものなのかは、マリナは言わなかった。
立てた膝から伸びる腿の上に乗せて、彼女は昂揚して言った。
「線香花火がこれほど見事な芸術品であると、考えたことはなかった。ああ、本当に素敵ね」
彼と彼女は、海を眺めにきたというのに。
彼女は滅多に眺めることができない禁域の海より、目の前の命の種に目を輝かせている。
そして彼の前で、箱を空けた。赤い紐を大事そうに自分の鞄にしまい込む。ひとつの部品も欠けたらいけないと思っているようだ。
シャルル・ドゥ・アルディは、青灰色の瞳を細める。彼の切り込んだような深い眼窩が僅かに不愉快な光を放ったが、自分の手元に集中しているマリナにはそれに気がつくことはなかった。
「中身を見る余裕はなかったから」
今回の旅の前に、彼女が慌ただしく過ごしていたことは知っている。互いの予定を調整して、決めた日時に出発するということだけは遵守する、という方式であった。すべてを知っているわけではない。でも、彼女のすべてを知りたい。
確かに、白木の箱をマリナが開いた時に、シャルルも目を惹いた。
最高級の手漉きの和紙を縒って作られたそれは、先端が淡い色で着色されていた。四季を表しているのだろうか。四つに分けられ、丁寧に作られたハンドメイドであることがわかる。
一本一本、手で縒ったそれらは形が不揃いであるが、それが美しさを増している。
火薬を受ける「首」の部分が絶妙な細さで縒ってあった。
淡い、淡い色合い。
火を点せば、蕾から牡丹、松葉そして散り菊と人の生涯のように表情を変える儚火を見せる焔の塊は、マリナの手の中にあった。
「花火の種、だね」
マリナは笑う。
彼女には、命の種に見えているのだろう。
彼女がどこから持ち込んだのかは明白であった。誰から贈られたのかということも。
しかし、シャルルは詮索しない。贈り主と愛でるのではなく、シャルルの目の前で広げる彼女を・・・彼は愛しているから。
そして、その「贈り主」に彼女を譲るつもりはなかった。

マリナはそれを聞いたのなら、自分は金品ではないと怒り出すかもしれないが。
彼女は何と同等か、何と交換できるのかと比べることもできないほどの人物なのだと言っても・・シャルルのことを理解する事はないだろう。
それで良いのだ。
シャルル・ドゥ・アルディが彼女のことをファム・ファタルと呼ぶのは、彼女が彼のすべてを知ることは出来ないのだと知っていることと・・・彼のすべてを受け入れる覚悟を持っていること・・・それから、彼の闇も知っているからなのだということを、彼女に教える時は、今ではない。
永遠に、彼と一緒に居るという約束を交わす時だと考えている。
だから、彼は白金の髪を海風に僅かに乱しながら言った。
「ここで点す必要があるとマリナは考えたのか？」
「そう」
彼女は短く答える。
「だから持ってきた。湿度に弱い品だから。保管に気を付けないと」
湿そのものである海の風に吹かれながら、彼女の言葉にシャルルは唇を歪ませる。
捩った紐で留められた紙縒を丁寧にはずしながら、マリナは言った。
茶色の髪が彼女の横顔を隠す。
「全部が完成されていると・・・手を入れるのは憚られるわね」
彼女は美に対して独特の感性を持っている。完成されたものであっても、それは商品だ。使ってこそ価値がわかる。それなのに、彼女はそれを惜しむ。けれども、惜しんで放置するのではない。
命の燦めきを知っているからこその態度であった。

■紙縒　06
煙火とも呼ぶ火薬の塊は、シャルル・ドゥ・アルディも認める芸術と呼べるような品であった。
絶妙の配分で縒られた紙の量感に目を惹かれる。この国は、独特の風合いの色を持っている。そしてそれはマリナの中にも存在している。
持ち手は淡く着色してあった。
よく見かける原色の鮮やかな色合いではなく、どこまでも淡い色だった。
淡色で持ち手の部分だけが着色されており、その他の部分は火薬の縒られている部分でさえも真白だ。
マリナは今一度、小さく吐息を洩らした。
「触れてはいけないもののように思える」
「気のせいだ」
シャルルは断言する。
彼女の今の言葉を、それを贈った者が聞くことになるような事態だけは阻止しなければ、と決めた。
もっとも、そんなことを洩らす彼女ではないのだろうが、それでもその人物に何かしらの感想を述べ

るのだろう。
彼女はそういう人だ。
「花火は、命に似ているから」
シャルルの言葉に、マリナ・イケダは淡く微笑んでそう返答する。
彼の言葉をそのまま信じ込むのではなく、自分自身の中に呑み込んで咀嚼した後に得た回答が先ほどのこたえなのかもしれない。
それらに、厳かに触れるマリナは、海風から陸風に変わった瞬間を読み取るかのように、目を細めた。
海の際の風はいつも不安定であったが、その風を読める者だけが海上で安全を確保できる。
「順番はないの」
マリナは言った。
風に煽られたマリナの髪がシャルルの目の前で気儘に躍る。
何の順番であるのか、聞くまでもなかった。
序列はないと言ったのは彼女本人であるのに、彼女は箱の中に納められた命の種を端から取り出した。
自由気ままに生きているかのように見えるのに、こういう些細なところで彼女の虔しい部分を知る。
シャルルは微笑んだ。
「君が望むところから」
マリナはシャルルに何か言う代わりに、そっと目を伏せた。
本人は意識していないのだろうが、彼女の瞬きの速度はとても遅く、見る者を引き込んでしまう。
彼女の言葉は時に重く響き、時に心を軽くさせる。けれども、言葉を伴わない仕草は海の香りに溶け込んで、彼が呼吸する都度、禁域の海の深くに誘っているのではないのかと感じさせる。
「持っていて」
大事なものを託すことすら不安であるかのように、箱ごとシャルルに手渡したマリナは、砂の上で体を傾けた。
人の足に踏まれていない砂が音を立てる。
潔斎のために、毎朝浄められているという小さな湾は、大きく湾曲している。幾度かこのような入り江を見たことがあったが、これほど屈曲した湾は珍しい。流れ込む汐が速いので遊泳を禁じられたというのが本当のところであろうが、入った者を海の先に押し流し、決して陸に戻さない海であるからこそ、禁域と呼ばれて人の立ち入りを禁じられているのだと理解する。
今年の海は、寂しい海だ。
彼女がそう言ったのは、花火というものが鎮魂を表すものであり、人の命の燦めきだと感じる、そんな出来事を体感したからだ。
空に灯る火花に祈りと命を感じるのであるのならば。
手元に点す火花のことは、どう思うのだろうか。それから、入ればメノカミ（女神）の逆鱗に触れて沈められるのだろうか。
ふたりで沈むのなら、それも悪くない。
シャルルがそう思っているとしたら、彼女はどんな顔をして抗議するのだろうかと考える。

死までの退屈しのぎだと思っていた生を彼女と一緒に絶つのであれば、それも構わない。
それを感じ取っているからなのか。マリナは、命の焔を彼に預ける。それを捧げた相手をシャルルが知っていることを、彼女は知っているのだろうか。残酷な人であると思うが、他の者に譲る積もりはなかった。
どれほど残酷でも。
どれほど失望しても。
シャルルは、マリナとともに海を訪れる。
彼女は鞄の中から、黒いシートを取りだした。
その不燃シートに見覚えがあった。アルディ家の備品だ。薄いフィルム状のもので包めば静電気で互いが圧着し急速に酸素を遮断して燃焼物を数秒で消火することができる。酸素を放出するのに吸収しない。それを、マリナは自分の足元に広げた。
焔の残骸が海辺や海を汚すことを懸念しての行為であった。
人がそのままで入り込むことのできない場所であることを承知しているのは、彼女の方であった。
「予定していたことなのか」
シャルルの質問に、マリナは無言だったが僅かに微笑んでいたので、聞こえなかったのではないと知ると、シャルルは不機嫌そうに押し黙った。
実際、不機嫌であった。
ふたりで過ごす時間に、誰かが入り込むことは彼には許容し難いことであった。
もし、誰かが彼の記憶を取り出すことができるのなら、それは彼女の横顔ばかりであるのだろうと思った。正面から見つめる姿はとても少ないと思われる。
彼女を直視できないという意味ではなく・・・彼は、彼女の何気ない表情を見つめることが長かったから。そして、意識しない彼女の表情を何より愛していたから。

■紙縒　07
海の際にはいつも風が存在し、無風状況は一瞬だけだ。
今もそれは例外ではなく、マリナとシャルルに微風が吹き付ける。
マリナはシャルルの髪が風に揺れるのを見て、破顔した。
「今の横顔、いいね」
途端に、シャルルは不機嫌な顔になった。マリナに決められることが気に入らなかったのか、それとも、男女の会話はこの海では不謹慎だと思ったのか。
彼は彼が思うより以上に敬虔であるのかもしれないとマリナが思っているということが明白であった。
彼女に注がれた青灰色の視線の先には、マリナが居た。
しかし、彼女は既に海に見入っていた。
しばらくの、沈黙が流れる。

耳に風が響き、汐の匂いが強く、海は昏い。
「ありがとう」
マリナは言いながら手を伸ばした。シャルルに持たせたままであった箱を返せと言っているらしい。
このまま、海に投げ込んだら彼女は怒り出すだろうなと思いながら彼は差し出した。
手にできるすべてを彼女に捧げると言った。それは今でも変わらない。
しかし、彼が手にできるすべてを彼女が欲しているわけではなく、彼が手に入らないものを彼女は欲する時がある。
あまり多くを語らないマリナであったが、彼女の手に戻って来た紙縒に興味が注がれていることは明らかだ。
シャルルの頬や項を乱れた白金の髪が弄ぶ。まるで、彼の心の中の状態であるかのように。
彼女の心の内では、何が語られているのかシャルルは見透かそうとしたが、その瞬間に気配を察知したからなのか、マリナはシャルルに目を上げて、屈託無く微笑んだ。
「だめ」
シャルルは僅かに唇を震わせる。
このまま、ここで彼女の身体を倒し、女神の不興を身に受けてしまっても、彼女が彼を愛していることをどうにか確認しようかと考え始める。
彼女はとても感覚が鋭敏で、こういうシャルルの仄暗い気持ちを察することがある。
だから、彼女は「否」と答えた。
シャルルは確信するとともに、彼女に言った。
「随分と用意が良いな」
マリナは肩を竦める。薄い色の髪も、彼の知っているマリナ・イケダのままであった。けれども、彼女は昔のままの彼女ではない。
シャルルの知らない時間を知っている。それはマリナも同じことが言える。彼女と彼は自分の中にある、互いに知らせていないものを抱えているのだから。
彼女は言った。
「準備できた」
マリナは膝を抱えると、傍らに小箱を置き、そしてシャルルを見る。
「火を・・・」
「用意してあるのだろう？」
マリナは困った顔をした。持っていないの？と当てが外れたかもしれないというような顔つきをする。彼女の表情はとても幼くて、そしてシャルルに過去を思い出させる。彼女が幸せであれば、それ以外には何もいらないと思った、あの日々のことだ。結局、彼は彼の誇りは捧げることはできなかった。しかし、だからこそ彼女は今、こうしてここにいる。
彼女は困った、と言った。
シャルルは溜息を洩らす。
そして、腰元からライターを取り出した。
マリナに向かって無造作に放り投げる。
彼女は手に箱を持っていたので、それを受け止めることはなかった。

ライターは着地点を見誤ったマリナの指から弾かれてとシャルルの間で砂に向かって落下した。
白よりも黒の混じりが多い砂が、異物を受け入れることができずに悲鳴をあげた。砂とライターの金属部分が擦れる音がして、シャルルは顔を顰める。
何もかもが気に入らなかった。彼の放つ品より、手元の花火を守ったことも。
そして、彼女はいつも断煙を促すのに、このような時だけはシャルルがまだそれを決行していないことを見透かすかのような行為を披露することも。
持っているだろうという前提で、彼女は何も用意してこなかったのだ。
燃え滓が散らばることを懸念して不燃シートを持参するほど考えてきたことであるというのに。
「オレは君の小間使いではない」
素っ気ない口調であったが、そこには怒りはなかった。
マリナはそうだね、と言ったが、彼女はすぐに、彼のライターを拾い上げて丁寧に砂を払った。その行為は、とても厳かで細心の注意が払われていた。
彼の持つ品はいつもマリナが溜息を洩らすほどのものであったが、そこには思い入れのある品が隠されていることが多かった。
それは、彼の父の遺品であった。滅多に持ち出すことはない。しかし、彼は今夏にはそれを持参してきた。マリナに説明をしていなかったが、彼女も幾度か目撃していることもあり、何か思うところがあったのだろう。
彼が断煙しないのは、執着しているからではない。それが、何故であるのか、マリナは知っている。
だから、火を持っていないのかと彼女は尋ねた。

■紙縒　08

火振りを神事と認識しているのだろうか。
マリナは、自分で炎を生むことを好まないように見えた。
彼女はまたシャルルに言う。
「シャルル、火をつけてくれる？」
「君がやれば良い。・・・手元に注意して」
「お願い」
彼女はそう言った。マリナ・イケダの頼み事というのは、多くなかった。少なくとも、大人になった彼女は、シャルルに気軽に何かを依頼することはなくなってしまった。寂しいことであったが、それが少し、嬉しい。彼女がそのように考える時には、シャルルのことを心に浮かべているという証拠だから。
もっともっと、彼のことを考えれば良いのにとすら思う。

優劣のある恋愛ではないという認識はあった。けれども、彼は彼女のこのような願いに隠された真意を知ろうとして、彼女の言葉に従う。

それは少しも口惜しいことなどではなかった。
他者を知ることによって、己を知ろうとした。それは今でも変わらない。
けれども、彼女を覗き込むことは自分そのものを覗いているような気持ちになる。その一方で、彼女の心を知りたいと思う。
「誰かを通して知った自分」でもない、彼女そのものを知りたい。
このような欲求が彼の中でまだ呼吸していたことそのものが不可思議で分析不可能な事態であった。

しかし、彼は同時に思う。
それは果たして永遠に続くのだろうかという疑問を遮断してしまっている自分に苦く笑う。
「それは高くつくぞ」
シャルルの言葉にマリナは声を漏らして笑う。彼はいつも辛辣な物言いをするが、決して彼女を追いつめるようなことはしない。
「それは困った」
少しも困った様子を見せずに、マリナは言った。
僅かな間が彼と彼女には存在する。最初から隙間なく寄り添うことはない。時間をかけて、互いに触れる。少なくともシャルル・ドゥ・アルディはマリナにそれ以外の方法で触れることはない。
彼女は焔の種を抱えながら、彼に今一度、それを差し出した。
「うまく使えないから、シャルルにお願いしても良いかな」
彼女の言葉は幼い。しかし、何を伝えたいのか良くわかった。
火移りを彼に行えと言っている。
焔の種を、彼女が持っている。そしてそこに彼が焔を点す。
このことが何を意味しているのかわからないマリナではないと信じていた。
「シャルルなら、良いと思うから」
「何を？」
意地の悪い問いだと承知していた。けれども、マリナはそれに朗らかに答える。
「禁忌の海で花火をするなんて後で叱られてしまうわね。
でも、シャルルとならそれも良いなと思うの」
本当に、彼女は残酷極まりない人だと思った。こう言われてしまえば、彼は彼女の言葉に反する行動は選択できない。

彼は大きく呼吸した。浅ましい感情だと認識しているが、受け入れることは彼の誇りに反する。しかし、彼女はシャルルの煩悶を無視して、更に言った。
「使い方がわからないから」
マリナはそう言って、シャルルに顔を向ける。
この間がなければ。
彼女の顔に頬を傾けて彼女の憎らしい唇を塞いでしまうこともできるのに、今はそれができない。
「ここが禁域と知っていてのことなのか」
「火気は贖いの行為でもあるのよ。

水際に、炎を置くのは・・・命を弔うからなのですって」
マリナの言葉に、シャルルは再び黙り込む。この国の命に対する考えた方が、シャルルの生国と異なっていることは承知している。
だからこそ、父も惹かれたのだと思う。
非常に熱心な親日家で、シャルルもその影響を受けた。日本人の親友が彼に大きな影響を与えたということも事実であったが。
何より、この国は常に命に対して神聖であろうとする。
それが、アルディ家の誇り高い生き方と添った考え方であったのだろうと思われた。

矛盾する行動を、彼女は受け入れる。
それこそ、彼が欲していたマリナ・イケダであった。
あの時に・・・若かったあの時代にそのまま結ばれていたのだとしたら、彼らは別離を迎えていただろう。
しかし、こうして巡り逢った。そして、その後はどうにもならない強い力で惹かれ続ける。過去の想いをそのまま継続するのではなく、大人になった彼と彼女は、もう一度恋に堕ちた。そして、すぐに愛になった。
いや・・・別々の時間を過ごし、違う景色を眺めて生きた時間があるからだ。
遠回りしたとしても、この現実がやって来た。
彼は抗えない力でもって、彼女の言葉に従う。それは不本意なことではなく、彼が望んだことなのだ。そう思った。当たり前のように並ぶのではなく、彼が望んだから、こうしてふたり海を眺めて並ぶのだから。

sparkler　後編

■紙縒　09

彼のライターは存在感を主張しないものであった。あくまでも軽量で、そして滑らかな質感であった。それはマリナの手の平には少し大きいものであったが、シャルルの手の中には収まってしまう程度の大きさだ。
彼女が砂上に落としてしまったので、僅かに砂が付着していたが、それは美しさを損ねる要素にはならなかった。
底には小さくアルディ家の紋が入っているが、見ている者には気がつかない。使っている者の誇りでああった。贅を尽くした品であったが、それは外観に豪美な意匠を乗せるということにはならないのだ、と思われた。
時代の流行は存在しない。
代わりに、そこにあるのは不変の輝きと丁寧に手入れされた、その品に対する思い入れであった。
使い込まれた歴史を感じさせるものだ。
マリナは箱の中から1本を取り出して、形を整え、目の前まで持ち上げて風に揺れる様を観察した。
海の匂いがひときわ濃くなり、シャルルは闇の夜が近いことを察知した。
ここには照明などはない。
陽が完全に隠れて、空の色が茜を失ったあとはあっという間に暗くなってしまい、足元さえ覚束無いほどになってしまうのだろう。
彼女はこの世で滅多に手に入れることのできない品を持った時のような、好奇心に満ちた顔を見せた。
彼女はいつも、そんな顔を見せる。無防備に。人を選ぶ事なく、その表情を幾通りにも組み合わせて見せ続ける。大人になれば、自然と身につくものであるのに、彼女はそれを知りながらも、それでも、彼女は彼女の世界を持ち続ける。

シャルルが彼女の腕を突き出し、慣れた手つきで片手で火を点す。
比較的新しい火打ち石が摩擦で火花を散らせた。
古い形態のライターであった。新しいものだけが素晴らしいわけではないのだと彼は彼自身で証明しているところであるが、こういった品にもこだわりがあるようで、そのことについて彼女は尋ねることはなかった。
海の汐が迫ってくるような広がりを見せる。ただ、静かな波音だけが彼と彼女の前に広がっていた。
海はどれほどの深さでどれほどの冷たさなのか、定かではない。しかし、海面は小さな漣が隆起している。
海は白浪を伴うこともなく、なにも伴わない孤独のままで彼女と彼に向かって波を打ち寄せる。
ああ、とマリナが声を漏らした。
風が、シャルルの手の平から焔を奪ったからだ。
彼は無言で今度はもう片方の手を差し出した。両手を捧げる。

彼女に向かって、決して見せたくないと思う花火の燦めきを作るために、自分で焔を誕生させる。
これがシャルルにとってどれほど残酷な供物なのか、マリナは知らない。
彼の手で覆われた空間の中で、もう一度、乾いた音が鳴った。
風が彼の手の甲を通り抜けて、彼の手の周囲で風を落としていく。それほど強風ではない。だから、彼はもっと風が強く吹き付けて彼女がこの場から立ち去ることを決めてしまえば良いのに、と思う。
マリナ・イケダに関しては、彼はいつもの通りの思考過程以上のものを考える。普通の男、という定義を理解するつもりはないが、心のさざめきと安らぎは同時に存在し、片方だけしか存在しないということはあり得ないのだと知ったのは、彼女を愛してからのことだ。

この海のように。
眺めていれば美しいだけの禁忌の海であるが、ひとたび海に入ればそれはどこに行き着くかわからない死への誘いに変化する。生きるものを飲み込み、そしてまた生きるものを創り出し、死を呑み込み、死を創る。そういう場所が海なのだと思われる。
夏の遊興にこの場所を弄んではいけない。マリナがそう感じているからこそ海の際に行こうとしない。
「少し離れて」
シャルルは言う。顔の目の前で着火させるとは危険極まりない行為であるのだと彼女は自覚していない。
「危ないから」
彼はそう言うと、ようやくマリナは腕を伸ばし、自分の身体を引いた。
しかし緊張しているようで、彼女の手から宙に浮く紙縒の垂りは風とは違う揺れを見せている。

ぱちりと何かが燃える音と匂いが広がった。
ちりり、と風林にも似た涼の音がする。
それは焔の音であったが、まったく質の異なるものの始まりと同じ音がした。
彼女から取り除いてしまいたいと思うものはたくさん存在する。
しかし、それがあるからマリナ・イケダなのだと思うと、シャルルは手を伸ばすことができなくなる。
彼にできないものはないと考えられているし、彼もそのように自覚しているが。それでも・・・できないものがある。
いいや、不可能なのではなく、彼がそうしたくないのだ。

薄闇の中で、ライターの強い光が消えて、かちんと蓋を閉める音と同時に、今度はマリナの手元の線香花火から淡い焔が立ち上る。彼女の心の中、そのものであるかのようだ。彼女は意志が強く不屈の精神を持ち、何事にも逃げ出そうとしないと意識して生きている。それでも、心の中はいつも淡い焔があるのだろうとシャルルは推測している。

■紙縒　10　蕾

「君を残念にさせる旅にはしない」
シャルルは呟く。
線香花火は人の一生のようだ、とマリナは言った。
それは断言ではなく、自分自身にそう語りかけているかのようだ。

命が宿ったかのように、焔の蕾がどんどん大きくなっていく。
呼吸をしているようだ。瞬きをする間に・・・呼吸をする間に・・そして海の波音がひとつ増える間に、それは膨張していく。
急激に温度が上がり、そして膨らんでいく時に、見事な茜に染まる。
先ほどの夕焼けのように。淦く煌めいて、吸い込まれそうになる。
光でありながら、様々なものを吸い込んでいく。

その次の瞬間であった。

風が吹いて、マリナが短い声を上げた。
途端に、周囲がふっと暗くなる。
彼女の視線は足元の不燃シートの上に乗った。
その上では、茜色の太陽のような塊が急速に色を失ってシートと同じ色に沈んでいく。
大きい揺れが、彼女の手元から蕾を摘み取ってしまったのだ。

「ああ・・・」
落胆する声は聞きたくない。けれども、この声は届いていないわけではない。
シャルルは、それを聞いて彼女に声をかけた。
「海岸で花火というのは無理がある」
シャルルはマリナに諭すように呟く。無理があっても、無理をしたいという彼女の気持ちを汲んでやる言葉はいくらでも用意できた。
しかし、今回ばかりは彼は彼女に心安らぐ言葉を探して引き渡すつもりはなかった。
この海に対面しているのは、マリナとシャルルだけだ。
一対の、男女が魂を送るかのように、焔を点しそこに視線を注ぐ。
ここに番った者が訪れると、女神が嫉妬して海を荒らすと言われる禁忌の場所に、彼らはやって来て

そして各々、思うところを海に吐き出していく。

彼女は鎮魂の儀式を幾つか知っている。
泡の球体を宙に浮かべることもあるし、海に脚を浸す。
そして、今度は人の生涯を凝縮したような技巧を凝らした火薬に目を向けるのだ。
「花火は素敵だと知って欲しいな」
知って欲しかったとは言わなかった。
彼女は、死者に対して過去形を用いないように配慮していると受け止められることが多く、シャルルは早い段階からそれに気がついていた。
そして、誰に対してそのような言葉を述べたのか、彼は知っている。
彼の家族であった。
死者も生者も同一視しているのかというと、そうでもない。
しかし、シャルルの生きているフランスとは違う価値観でもって、彼女は死生観を抱えて生きている。だからこそ、様々な方法で彼女は魂を弔う。
彼女が毎夏、海にやって来たいというのは、休暇を楽しみたいというよりも、彼と一緒に魂を弔いたいと思う気持ちが強いのではないのか。
シャルル・ドゥ・アルディはそれでも、彼女に尋ねることはしない。なぜなら、彼女はいつか、そのことを明かしてくれると信じているからだ。
愛とは信じることであるが、相手を信じることだけではなく自分の愛を信じることなのだと知った。
マリナがそれを導きシャルルはそれに解を示した。

彼には、わかっている。
あの時。
死んでいく命を助けてやってくれと彼女が叫んだ時に、彼と彼女は生命の理について、それぞれが信じているものを放棄した。
そのことによって、マリナはこれからも、ずっと、鎮魂の儀式をひとつずつ増やしていくのだろう。

「もう一度、挑戦してみる」
マリナは強い口調で言った。代わりがあるから言えるのだという様子ではなかった。
それを示すかのように、途中で弊えてしまった紙縒を丁寧にシートの上に置いた。微風であっても吹き飛ばされそうなほどに軽いそれを、シートの端に包む。燃え滓でさえそれほど大事なのかと詰問したくなってしまう程の配慮にシャルルは再び無言になってしまう。彼女は、彼から言葉を奪う。行動を奪う。彼に、彼がもうそれ以上持つことが出来ないと思うものを与える彼女は、同時にすべてを奪う人物でもある。
・・・光となり、闇となる人物なのだろうと思われた。片側だけではない。
彼女の美しい面や強い部分だけではなく、マリナの弱さや暗さも愛していた。

それすら、彼女は命そのものなのだと言いたそうであったが、すぐに次のひと縒りを取り出した。今

度こそ、と呟く。
「ここで灯すことに意義があるのか？」
シャルルの問いに、傍らでマリナは微笑む。そして答える。
「ある。意義という名前ではないかもしれないけれども」

■紙縒　11　牡丹

「納得させるだけの理由があるのか」
シャルル・ドゥ・アルディの問いに、彼女は頷く。

そうだね、と彼女が少し考えてから、言った。
「もう少し準備をしておきたかった」
少しも理由になっていない、とシャルルが言おうとして、それからはっと声を呑んだ。彼は少々のことでは動じないように教育されていたし、何があっても誰よりも素早く対応できる能力を備えている。
けれども、そのときばかりは自分の考えが正しいのかどうか、躊躇った。彼には間違いなどはない。それは気の所為ではないのだろうという確信があったが、青灰色の瞳を一瞬だけ険しくした。
憤懣のためではない。
彼女が、何を意図してここにやってきたのか知ったからだ。

蕾のまま落ちてしまった紙縒の先端を彼女はしばらくの間見つめていたのは、それを命に見立てているからだ。そして、海に捧げている。火薬を自分の側に近付けては危ないことも承知のうえで。
ここにある本数の分だけ、彼女は命を見送ったのだろうと思われた。そして、自分が遭遇した葬送だけではなく、自分の知りうる限りの去った命に対して、命を送ろうとしているのだ。
彼女は言葉や涙で追悼することはない。ただ静かに、淡い珠や紙縒の焔に思いを託す。

「準備をするような滞在ではないだろう」
ここに逗留できる時間は本当に短いものだ。ただ海の際にやって来るということだけを目標としているようなほどの、慌ただしい時間の都合しか彼女に用意してやれなかった。
それには応えず、彼女はひとり、自分の中の問答を口にした。
「ここには、人が来ないから、きっと寂しいと思う」
彼女はそれだけを言うと、もう一度、火を灯して欲しいと言った。彼は無言で彼女の顔を見つめた後、ウイと言う代わりに腰を浮かせて立ち上がった。
何の負荷もかからない彼の滑らかな動作に、マリナが驚いて顔を上げた。彼の脚元に彼女の不思議そうな顔が見える。腰元から砂粒が落ちて、シャルルの身体から名残惜しそうに落下していく。それを

振り払うこともなく、シャルルは半歩寄って彼女の座っているすぐ後ろに座り直した。
「少し窮屈だ」
彼は文句を言いながら、彼女を抱えるようにして彼女の小さな背中を覆うようにして長い脚を投げ出した。
それから体を傾け、彼女の背に自分の胸を押し当てる。マリナが何か口籠もりながら、体を縮めた。けれども、すぐに俯いた顔を上げて、シャルルに向かって体を捩った。
「・・・いいの？」
彼は恋人の顔を見て、軽く頷いた。
「不本意だけれども」
そのときに、彼女の顔が笑顔で輝いた。嬉しくて堪らないという表情を見て、シャルルは無言であった。
彼女の笑顔を壊してしまいたいという欲求と、彼女の笑顔に勝る幸福はないのだと噛みしめる満足が彼の中で火花を散らす。

彼女が寂しいと言った理由がわかった。
人気がない禁域の海であるからだとか、砂が黒いために色合いが濃く見えるからなのではない。
人の命を捧げる海にするにはとても静か過ぎて、送る魂が哀しまないかと悩んでいるのだ。そんなことはないのだと言っても、彼女はそれをそのまま信じてそうだと思い直すことはないのだろう。

厳選された、ひとつひとつに思いが込められた紙縒の命を、彼女はまた取り上げてシャルルに火を灯せと差し出す。
この行為がどれほど彼を昂ぶらせるのか、彼女は知らない。
遠くの空で輝く散焔を眺めるのではなく、一緒に命のはじまりからおわりまでを見てみることを赦すのだ。シャルルにだけ。

彼は体を屈める。
そして、マリナと手元の焔の種を風から護った。
腕を伸ばし、手の中にあったライターを取り出した。
かちり、と音がする。
マリナが、まだ、ライターを使うのね、と囁くがその言葉は無視する。そうでなければ、今、炎を点すことは不可能であることは承知のうえなのに、彼女はそうしてシャルルに言葉を残す。死者には言葉ではない違うものを捧げるのに、彼女はシャルルに囁く。
前屈した時に、彼は彼女の顳顬に唇を押し当てて頬を擦りあてた。マリナが彼を窘める声を出す。
「シャルル」
「誰も見ていない」
「見ているよ。海の神様が、怒るでしょう」
彼は嘲ら笑った。信奉する文化によって神というものは形態を変える。しかし、常に見張っているものでもないし、今は禁が解けているからこそ、彼と彼女はこうして海際まで近寄ることができるのだ

。
海から独特の汐の香りが立ち上っている。波の音は静かで、人の足の入らない砂浜が音を鎮めているのだとわかる。白い波は灰色に見えて、海の色は目の醒めるような蒼ではなく、深い紺であった。

「怒っても構わない。誰かに赦されなければいけないことは、ここにはひとつもない」
彼は声を落として彼女に言った。呟くように穏やかに、それでいて彼の言葉には熱が籠もっていた。
神の怒りに触れても、それでも良いからこの愛は手放したくないと思う彼の激しさが、この海を荒らすというのであれば。
それも良いだろう、と思われた。挑戦なら受ける。必ず。
それも、マリナへの愛を試すものであるのなら尚更避けることはしない。
今、彼女が背を向けていなければ、彼がどんな顔をして海を睨んでいるのかを見たのなら。
きっと怯えるのだろうなと思う程に、彼は、彼女を怯えさせる海の禁が厭わしかった。

■紙縒　12　松葉

牡丹と呼ばれる激しい火花が散り出した。迷いや歎きを抱えながらも命を燃やしていく過程に似通った形態である。これほど長く着火している花火は他には存在しない。人の生涯を表したもの、とはよく言ったものである。
彼は彼女の手首に自分の手を添えた。
そして、もう片方の手で彼は火を点す。紙縒が揺れる代わりに、彼の白金の髪が翻った。
夜の海に出てはいけない、と繰り返しマリナに聞かされていたが、それでも夜の海は死への誘いに見える。彼女には、鎮魂の海原に見えるのだろうけれども。
彼は身を竦める彼女の手を取り、そして蕾を越えて牡丹に変わる焔の華を眺めていた。
ちりちりと謡うように音を立てる火花は、まさしく命の詩そのものであった。
恋をしていると声に出さなければ苦しくて呼吸ができなかった。それを呑み込まなければならないと自分で思い定め、それでも彼女を忘れることができなかった。彼にもできないことはある。
だからこそ、諦めないという精神が生まれる。
すべてが可能であったのなら、彼はここには存在しなかったかもしれない。

彼女と焔を護るために彼は体を投げだす。
風を除けた彼女の手の平で、焔が躍っていた。

・・・やがて、松葉に変化していく。飛び散った火花はさらに火花を伸ばし、人生の喜びを表していく。
巡り逢い、子を育て、充実した人生そのものように、ひとつの枝から複数の葉が伸びていく様とよく

似ていた。

マリナの表情は見えない。彼女は黙って見つめるままであったが、伸ばした腕が怠いと訴えることもなかった。
彼女の目線であるのなら、きっと、海と空の際に花火が乗っているように見えるのだろう。
直接空に放つこともできないし、海に投げ入れることもできない。だから、彼女の目の先に全てを乗せる。
彼女の目の先には全てがある。
生と死。
海と空。
闇と光と・・・そして命の燦めきである火花をそこに手向ける。

熱を得て、空気を吸って、紙縒は激しく命を燃やす。
同じ様に、彼も命の焔を燃やしている。
マリナへの愛を糧にして、彼は紺色の闇の中に浮かび上がる激しい火花を見つめて、自分の命そのものを見つめる。

優美な曲線を描き、鮮やかな赤橙を見せる。

それらを見つめながら、彼女が何を思っているのか触れた手首から伝われば良いのにと思った。

すると、マリナは彼の胸に自分の背中を預けながら、小さな声で言った。
「シャルルの顔が見えないのは、残念ね。・・・でも安心する」
彼と同じ事を考えていたのか。
そう思うだけで、身が震える。
はじめての恋に溺れる少年のように、彼は自分が彼女の言葉で浮沈することを知っている。
しかし、今回ばかりは彼女の声は哀切に満ちていた。
もっと、自分のことを考えて、彼女のほとんどをそれで満たしてしまうことが出来れば良いのにと思う。

彼は彼女の耳元に唇を寄せて、掠れた声で言った。
誰にも聞こえないように。海の女神にすら、聞こえないように。

人生のうち、もっとも満たされた瞬間を見せる、この花火のように。
彼は今、満たされている。これが倖せの頂点で、後には何も残らないのではないのかと思う程に。

「それなら、今夜はそうしてみる？」
マリナは最初、何を言われたのかまったく理解できていなかったようだが、しばらくしてシャルルが

またマリナの頬に唇を押し当て、ライターを砂の上に落として彼女の膝を撫でたので、大きく息を吸って動転した声を出したがそれは言葉になっていなかった。
「静かに。火が消えてしまう」
彼の忠告は、先ほどよりマリナに近い場所で注がれた。

今。この瞬間。
この火花が消えてしまい、それを待って海の神が彼らを呑んでしまうために波を伸ばしたとしても、少しも後悔しないでいられるだろうと思われた。
彼女が胸の中にあり、鎮魂の焔がここにある。海があり、手を添えて彼と彼女はそれらの命のはじめとおわりを風から護っている。
ここには、すべてがあった。
海が優しく囁くような波音を届ける。それから、海を含んだ風が彼らを撫でる。

■紙縒　13　散り菊

ふっと手が軽くなったような気がした。
目の前の閃光は、多くの枝葉を見せていたのに、それが一枚一枚、空気の中に消えて行く。
実際は、散り菊という最後の段階であるのだが、それらは黄金色に変化していた。
朽ちていくのではなく、散っていく。
これはマリナの国の独特の死生観であるように思われた。
だからこそ、前当主は日本をこよなく愛していたのだろうかと思った。

毎夏、彼女が海に行こうと誘う理由を知った。彼女は海に来て戯れるのではなく海に向かって自分は生きていることと、送っていく者たちへの思いを流しているのではないのだろうかと思った。それなら、彼女がこれまで海に流した思いはどこに行き着くのだろう。

「冗談を言う場所ではないでしょう」
彼女の声は消え入りがちであった。
「・・・オレは冗談は言わない」
シャルルもそのように回答する。

彼はやると言ったことは必ず実行する。そしてそれを誤ったことはなかった。
立ち入りの禁の海に誓うことではなかったのかもしれない。
しかし、彼は言った。
彼女の手の甲は、熱かった。火花によるものではないことは、承知している。

「この国では、神やそれに準じる者の顔を見てはいけないとされている。だから偶像は本当の顔ではないし、自然神は姿を持たない。それでも・・・君は、その禁を破る勇気がある？」
「シャルルは神様でもないし・・・この海の神様はメノカミ（女神）様だから」
シャルルは笑う。
今宵は互いに神になれ、ということなのだろうか。
海の神に挑戦しているかのような行為だ。
水の神の前で、焔を見せつける。それは、決して好まれる行為ではない。だから、ここは通常は火気厳禁なのだということはマリナも承知していることだろうと思われた。
束の間の、禁解の時間である。
だからこそ、彼女は焔を持ってやって来た。風が灯火を消そうとするのなら、彼がそれを阻んでみせた。
彼女が見つめているのは、海なのか。それとも、手の平の紙縒の火花なのか。
きっと、その両方なのだろう。

そして彼は嗤う。
彼女の心の内は、常に彼は推測するしかない。
何を思い、何を哀しみ、何を送ろうとしているのか、彼女はシャルルにすべてを明かすつもりはないのだとわかっていた。
「そう。神ではない」
彼は言った。
だから、彼女を誰かに渡すつもりもないし、焦げ付くような・・・焼け切れるような思いを抱えることもある。ふたりだけの日々を過ごしたいと願うし、彼女が彼の憂悶に近付きすぎると思うこともある。
完璧ではないから、完璧なのだという彼の従妹の言葉を思い出す。そう。
ふたりは、完璧ではない。シャルルも完全ではない。だからこそ、ふたりは寄り添う。

彼女が線香花火に拘るのは、その花火の一生の通りに命を終えることができなかった者たちを知っているからだ。
「シャルル、少しも集中できない」
マリナが言うので、彼は反論した。
「それはオレのせい？」
彼女の表情は見えない。焔の色が徐々に淡く暗くなっていくが、マリナはもう、シャルルに向けて顔を向けることはなかった。

彼女は手の平で消えていく光の華が散っていく様を見て、ああ、と声を洩らした。
「綺麗ね・・・素晴らしい品だ」
彼の掌が僅かに動いたことを、彼女は気がついているのだろうか。
彼の胸の中に居て、彼の掌で包まれていながら・・・彼の中で彼女は呟く。この宝石のような火花が

素晴らしいのだ、と。
「それなら、もっと長い時間を保つものを開発しようか」
「シャルル」
苦笑しながら、マリナは彼の名前を呼んだ。
「長い時間であっては、これは意味がなくなってしまう。わかっているの。限られているから、人の命はとても大事にしなければいけないことを」
彼女は過去に願った命の理を無視したことを、今でも憂えている。きっと、彼女が一生をかけて考えていくことになるのだろう。

そして、彼も同じであった。
マリナの願いであるから。ただ、救いたかった。そして彼にはそれができた。
神ではないと言った時。そのときの痛みが甦った。
当たり前の言葉であるのに、彼と彼女にとってはそれは当たり前の言葉ではなかった。
海が全てを消し去って、流してくれたのなら。
彼女は、毎夏、海に行こうとは言わないのだろうと思う。
毎年違う海を訪れて、それでも彼女は満足しない。それを感じるからこそ、シャルルは毎夏、彼女に付き従う。どれほど時間がなかったとしても、どれほど多忙であったとしても、必ず時間を捻出する。
自分で自分を追いつめることには耐えられる。けれども、彼女を追いつめてしまうことになるから。
だから、彼は全部を教えて欲しいとは言わず、海で燥ぐ彼女の姿を見て、満たされる。
難しい言葉を並べることはしなかった。
ただ、海で夕暮や朝焼けを見て彼らはすべてがそこにあると感じる。

今夏は、彼女は海に花火を捧げた。これは何かの変化なのだろうか。そう思う。
生涯を表すような、そんな焔を持ち込んで、彼女はどうしたいのだろうか。
シャルルは青灰色の瞳で、彼女の髪や背中、そして腕や項などを見つめる。

「・・・最後まで見届けたのなら、君はオレと人生の最後まで行き着くつもりだと思うことにするが」
彼の声は聞こえなかった。
菊花のような火花が色を失い、そして全てが消えてしまったときに、マリナは声を出して終わってしまったと言ったから。その声に混じって、彼の声は彼女に届かないままになってしまった。

今度は、翠の閃光を見に行こうという声も、彼の中で声に出されずに終わってしまった。

焔の塊が色を失い、完全に燃え尽きるまで見届けると、マリナ・イケダは少し身動ぎして紙縒を持った方の腕を降ろした。
「消えてしまったね」
彼女の睫が揺れる気配を感じる。闇に目が慣れるまで僅かな間であったが彼女の輪郭を見失ってしまう。
手の平の中で、人の生涯を見て散っていく様を見届けた。
彼女の髪が、汐を含んだ風を受けてシャルルの腕や胸を擦る。
波が音を抑えて打ち寄せる。

ここには、何もない。
けれども、ここにはすべてがある。

長い時間をかけて湾が出来て、波は穏やかにけれども潮の流れはとても速くて人が踏み込めない。どれほど美しくても、どれほどそこに浸ってみたいと思っても入ってはいけない場所として定められてきた。
右手には大きな岩場があり、波の浸食によって足元を削られた岩が海に向かって大きくせり出している。左手の隆起は穏やかであったが、岩が不連続に見え隠れしている。そういう岩場には海鳥が住み着きやすいのに、ここは汐の流れが速くて生き物があまり寄りつかないことを承知しているのか、鳥たちが夜体を休める場所として選ばれることはなかったようだ。
海水の温度も低いのだろう。打ち寄せられた波には何も混じっていなかった。生物の命を失った殻も、遠い海から流されてくるものも殆ど見かけない。
確かに禁域である。ここに人が立ち入ればあっという間に沖まで流されてしまうのだろう。そして岩場によって傷つき、二度と陸には戻って来られない。
近くに見えるのに、手が届かない。
この海で禁を守っている者たちは、どんな思いでここを保存してきたのだろうか。学術的な価値よりも、今は、そんなことをふと、思う。
生命は海から来て、海に還って行くという信仰が根付いている場所であった。
それなら、今、生まれて消えたマリナとシャルルの手の中の命は海に戻ったのか。

彼は彼女の手を自分の手で覆ったままだった。
「まだ続ける？」
「もう、十分」
残りが幾本も存在するのに、彼女はそれで満足だと言った。
「海で花火は危険だし、それに消えずに見送れたから、これで良い」
「そうか」
シャルルは頷いた。彼女の目的はやはり遊興などではなかった。彼女なりの鎮魂の方法にシャルルは

同席した。彼女がそうすることを許したから。

彼は顔をマリナに寄せる。彼女がどれほど、この場所での近接はいけないのだと言おうとも、彼は彼女に一番近い場所を独り占めする。
マリナは彼の蒼灰色の視線を感じると、小さな声で抗議した。
「集中できない」
「なぜ？」
彼がくすりと声を洩らして零して尋ねる。
「ここを片付けるから」「君が片付けについて文句を言えるようになるとはね・・・」
「シャルル」

彼女が振り返った瞬間。
あっ、と叫ぶ余裕すら与えなかった。
シャルルは顔を勢いよく近付けると、彼女の唇に自分の唇を重ねる。
逃れられないように彼の胸を彼女の背中に押し当て、そして紙縒を握った側の手を重ね、もう片方の手は抗えないように彼女の顔を覆う。神経質そうな細い指が彼女の動きを絡め取った。
マリナがくぐもった声で何かを言ったが、シャルルは無視して続ける。けれども、乱暴な口吻ではなかった。彼女の中に入り込む。
嫌がるような、怖がるようなキスはマリナは望まない。
しかし。
他の誰かのことや、余計な何かを考える余裕を奪う。マリナが彼のことだけしか考えられないと言うようになる日は一体、いつのことなのだろうか。
神が見ていようが誰が咎めようが関係ない、と思った。
マリナは目を閉じて彼の嵐を受け止めていた。彼女の手の平が震えているのを感じ、シャルルは彼女から顔を離した。

「君の方法は、十分わかった」
唇を離すと、マリナの呼吸は少し乱れていた。目が潤み、唇は濡れている。このまま砂の上で抱き合いたい欲求に駆られるが、それを抑えて彼女の顔を覗き込む。
鎮魂の儀式には、いつも禁欲的なマリナであった。彼女はここで生と死を両方見つめて、そしてどこに思いを寄せるのだろう。波に流すのか、海に送るのか、それとも・・・

シャルルがしばらくの間、物思いに耽っていると、マリナは手回りのものを片付け始めた。丁寧に、大事そうに残りの紙縒を小箱に収める。それが何とも時間をかけたものに見えて、シャルルは吐息を夜風に流した。
それを取り上げて全部燃してしまったのなら、どれほど晴れやかな気持ちになるのだろうか。
他の者から・・・特に、あの者から贈られた品で、ふたりの時間に侵入されたようで気に入らない。

■紙縒　15

「ここは寂しい海だね」
またマリナがそう言った。
何もない昏い海であるという意味だけではなかったようだ。
あるはずのもの、あって欲しいものがなくて欠けていると感じているのか。
「でも・・・とても良い海だと思う」
マリナは大きく呼吸する。すでに、前を向いて、遠く見えない海の先を眺めようとしていた。
「この海だから、何にも邪魔されないで静かに・・・過ごすことができるのかもね」
どんな表情をしているのか、シャルルには見ることができない。
しかし、彼女は背を彼に預けて彼の胸の中に居る。
消燃シートの端が、風で音を立てて揺らめいていた。

シャルルは一度だけ強く彼女を抱きしめる。両手を彼女の肩に回し小さな体が壊れてしまわないように、けれども擦り抜けていかないように自分の胸に押し当てて、彼女の身体を抱いた。
いつか、ふたりの肉体も魂が離れて行くことがあるだろう。
シャルルの命が尽きた時、その時にマリナはこうして焔を海に向けようとしてくれたのなら。
それ十分だと思った。しかし、それはまだ先のことであった欲しい。
まだ、彼らの花火は焔が灯ったばかりなのだから。

「風が強くなって来た」
しばらくの間、彼女を抱き留めていた彼はやがてゆっくりとそう言った。
「もう少し」
いつになく、マリナが名残惜しそうに言った。
彼女はここに何も残さないように、シートに燃骸を綴じ込み、温度が下がっていることを確認したうえで彼女の鞄の中にそれらをしまい込んだ。
シャルルがそれをじっと見つめていたので、彼女は肩を竦めて説明する。
「また次回、使うことにするね」
「次回・・・」
「今度、皆で海に行くことになったの。そのときに使おうかと・・・」
シャルルの美貌からすっと表情がなくなる。何と鈍感な女だ、と思ったが彼は何も言わず「そうか」とだけ言った。
「皆？誰？」

束縛するようなことをシャルルは好まない。それなのに、マリナのことだけは別であった。彼女は束縛していないと、すぐにどこかに行ってしまう。けれども締め付けすぎるとそれが困ると言う。
「さあ・・・」
彼女がシャルルを煽るようなことを言うので、彼は不機嫌そうに急に立ち上がった。彼に背を預けていたマリナは急に体が傾いだので、慌てて両手を砂の上に押し当てる。
「何するのよ」
マリナが立ち上がって砂を落としているシャルルを睨みつけた。暗闇の中でも、もう、彼女の顔がわかるほどに十分に・・・慣れた。

ああ、そうだった。
彼女はこういう人であった。
シャルルだけが激しく彼女を求めていると感じるのは、こういう時だ。
大勢のうちのひとりではないのかと思う。胸が痺れる。
すると、彼女はやれやれと言って立ち上がった。自分の手に持った鞄を大事そうに抱え上げて、自分の身体の砂を払うよりも先に鞄の砂を落とすことに専念している。それほど大切な品であるのなら、わざわざ燃焼させることもなかったのに。保存したいという気持ちは彼女の中にはないのだろうか。
そこで彼は少し考えこむ。
大事にしたいということはいつまでも永遠にその状態を保ちたいということとは違う。
はじまりがあればおわりがある。
それらは姿を変えて、いつか終わりが来るから・・・生命は美しいのだと彼女は言いたいのではないのか。

「シャルルがいてくれて良かったと思っている」
マリナは先ほどのシャルルの憤怒を軽く受け流して、そう言った。
「寂しい海も、白い海も、どんな場所でも、海はひとつに繋がっている。それをシャルルと一緒に見る。あと幾つ、違う海を見て歩けるかな」
「数えることが嫌になるくらい」
シャルルは即答する。彼と同じことを考えていた彼女の言葉が、彼のささけた気分を宥めていく。
彼は両肩を大袈裟に持ち上げて、彼女においで、と言って手を伸ばした。
彼女は、砂まみれのままで、彼に近寄る。そして彼の腕に寄って、もう一度海を見た。
「今度は、シャルルの見たい海を見に行こう」
「夏の海に希望するところはない」
彼はむっつりと言った。マリナは笑う。
「夏に拘ることはないと思うけれど・・・」
「拘っているのは君の方だろう」
彼の返事に、マリナは顔を上げて、困ったように首を傾けた。

■紙縒　16

「楽しみにしているわね」
「随分とのどかだな」
シャルルの冷淡な口調に、マリナは唇を尖らせた。彼女はこういうことで動じることはない。シャルルの言葉の裏にあるものを汲み取ることができるからだ。

それから、彼女はシャルルを見上げて、今一度言う。
風に吹かれて、 彼女は鞄を肩に提げて、このままどこかにふらりと消えて行ってしまうような様子でもってシャルルを見上げる。
「この海の祀神は女神だから・・・男女で来ると海が荒れるのですって」
「知っている」
「だからね」
マリナは少し視線を逸らして言った。こういう仕草が彼を煽ることを彼女は気がつかない。 彼と彼女の間にある絆をまるで惜しむ風でもなく、彼女は彼の目の前で追憶と追悼を海に送る。 それが、彼女の海なのかもしれない。

「海を荒らすようなことはしないで」
彼女はそう言うと、唖然とする彼に横顔を向けた。
マリナはシャルルに近寄ってはいけないと言う。彼は苦笑いした。それから大きく溜息も吐き出す。なぜ、彼女はこうしてシャルルの心の内にあっさりと入り込んでしまうのだろうか。
「それは君に近付きすぎる、ということ？」
「そう」
彼はそこまで言うと、腰に手をあてた。そうしなければ、彼女を抱き寄せてしまうからだ。
「・・・それなら、君が近付けば良いのだな？」
マリナは声を詰まらせた。確かに、男女の近接では男が女に近付くことを禁じるが、女が男に近付くことは女神を信仰する場所では禁忌とされない。だから、先ほどシャルルがマリナを覆った時に彼女は何か言いたそうにしていたのだ。
「それなら、君から来いよ」
彼はそう言って腕を軽く広げた。命を花火に託すような人を愛していることを、彼は後悔したことはない。好きになって良かった。愛して良かった。
「困った人」
彼女はそう言って、シャルルの期待に応えるためにマリナは次にどうするべきか知っているのに・・・彼女は躊躇う。
「君が自分で困らせているんだぜ」
「私、線香花火を抱えているのよ」

マリナが言うと、彼は冷笑した。
「だから？」
彼は高慢に言った。
「オレは誰なのか？それをいちいち説明しなければいけないのか？」

海の女神が嫉妬するほどに、彼女が彼を恋い焦がれてくれるのであれば。この海が荒れても、もう二度と足を踏み入れることができなくても。それでも良いから、彼女が欲しい。

マリナは彼の腕の中に体を寄せる。
風に吹かれて、海の波音を聞きながら彼と彼女は寄り添った。
一瞬だけ、風が強く吹く。ふたりの姿に嫉妬した女神の吐息のような風だ。しかし、マリナが彼の体から離れることはい。彼も、吹き飛ばされる事も無く彼女を抱き留める。
シャルルは、腕を閉じた。
もう、離さない。
そう決心する。
幾度も決心したのに、彼は再び決意する。幾度も、幾度も。
「そう。良い子だ」
彼の揶揄いを含む口調に、マリナは慌てて身体を引き離そうとする。
この海は、しばらくは訪れることはできない。
でも、また・・・巡ってくることができるのだろうか。
この海を見つめ、寂しい海だと彼女はまた言うのだろうか。

その刻が来るまで、彼はこの景色を覚えていなければならない。
しかし、それは難しいことではなかった。彼は決して、忘れることはできないのだから。
「海神が嫉妬するくらい・・・今夜は君がオレを困らせてくれよ」
そう言うと、彼女は彼の中で身構えた。
「シャルル。・・・シャルル・ドゥ・アルディ」
彼女が上擦った声で彼の名前を呼んだ。

「それに、誰とどこに海に行くのか。外出計画を提出しておくように」
彼は冷たく言うと、今度は彼女の肩から鞄を取り上げた。あっという声がして、マリナがそれに手を伸ばそうとする。長年の習慣であった。それを自分の身体の一部のように常に身の傍に置いてあった
彼女は途端に不安げな顔を向けた。
「自分で持てる」
「いいや、君から少し取り上げておかなければ」
シャルルはそう言うと、自分の肩にそれを持ち上げた。
「確かに、その花火は素晴らしい品だけれども。海の際で見てみようという粋狂な君につき合ったのだから、今度はオレの言うことに従ってくれ」

彼女は不満そうに口籠もった。しかし、彼がかなり譲歩していることは理解できているようだった。

■紙縒　17

「皆と行くのよ」
彼女は困った顔で説明する。同行する予定者の名前は複数人で、シャルルのよく知る人物達の名前ばかりであった。
「君のその平らな体を人前に晒すのか？」
「失礼ね。・・・泳がないわよ」
マリナはそう言うと、不貞腐れる。
「シャルルと行く海は、夏にはひとつだけと決めているの」
「なぜ？」
「なぜって・・・」
またマリナが言葉に詰まる。しかし彼はそれを許さず、最後まで言わなければ抱擁から解放することもないのだと知ると、諦めて言葉を続けた。

「たくさん、シャルルと海を見に行きたいから。これからも、ずっと」
するとシャルルは声を出して笑った。何だよ、と言った。
この世の海は無数にある。行こうと思えば無限に存在する。彼女が希望するのであれば月の海にまで行くこともできる。それなのに、彼女は夏にひとつずつ海に向かい、それをずっと続けたいと言う。

この人の考えていることは、実に奇抜だ。でも、退屈しない。

シャルルは笑った。たったひとつの海を見るために、彼女は夏にシャルルに海に行こう、と言う。
生涯に数えるほどしか夏の海は訪れない。それらをすべて、マリナと見る海に費やせと・・・彼の運命の人はシャルルに言うのだ。
だから、それも面白いと思った。
限りある夏だから、彼女は彼とふたりだけで海にやって来る。
「シャルルも一緒に行かない？」
「行かない」
たった今、海はひとつだけだと言ったばかりであるのに。彼のファム・ファタルは無邪気に彼を誘う。残念だと言ったマリナの顔には諦めの色はなかった。また折に触れて彼にウイと言わせるまで繰り返すのだろう。

それからシャルルは彼女の肩を抱いた。今一度、昏い海を見る。

「まだ、寂しいか？」
彼はマリナに尋ねた。けれども、彼女は首を横に振る。
「今は、そうは感じない」「そうか」
それなら、良い。
シャルルはそれだけを言うと、また蒼灰色の双眸で海を見た。
「でも、またシャルルとこうして花火を見たいと思う」
マリナはそう言ってシャルルの腕の中で笑顔を向ける。暗がりの中で、彼女はそれでも輝くばかりの笑顔を見せた。

「まずは、戻って着替える」
シャルルはそう言って、マリナの肩を抱いた。海の砂がまだ、纏わり付いていた。マリナに至っては、あちこちが砂だらけだ。
「ねえ、シャルル・・・海の件だけれども」
「それは後で聞くことにする」
「でも、請け合ってしまった」
シャルルは酷薄そうな笑みを浮かべた。
「それはオレに尋ねる前に勝手に約束してきたことだろう」 そんな、というマリナの不満の声が聞こえるがシャルルはそのまま歩き出す。彼女の体を抱きながら、彼は帰り道に向かうことを促した。
幾つも海を知っているが、彼女と知っている海はあとどれほどあるのだろうか。もう一度、巡った海をやってくるようなことがあるのだろうか。

その疑問を解決する時間くらいは、ありそうだった。
「その花火は、誰に貰ったものなのか、それほど大事にするということは、それほど思い入れのあるものなのか？」
「ああ、シャルル。今日は質問してばかりね」
彼女はそう言うと、困ったとまた肩を竦めた。しかし、その肩には彼女が大事にしていた荷物はなかった。
彼に託したままになっている。
それが、彼女が彼に対する愛の証なのだ、と彼女に言わせてやる、と誓う。
「その質問全部に応えてくれよ。オレは、全部に回答を得るまで君を寝かせるつもりはないからな」
そう言うと、彼女は顔を赤くしてシャルルは意地悪だ、と抗議した。
シャルルは微笑む。
ふたりの花火は、まだ始まったばかりだ。そう思えるから。

明日にはまたこの湾の反対側の遠浅の海に行きたいとねだるのだろう。
そのときには、彼女はもう寂しい海だとは言わないという確信があった。

あの紙縒の残骸を彼女が持ち帰って、どこに捧げるのか彼は知っていた。・・・彼が魂の安らぎを願

う者たちの前に捧げるのだろうと思われた。

マリナが夜食が欲しいと言い出したので、シャルルは呆れたと言う。そして、二人は歩きはじめた。

それを追いかけるかのように、また、風が僅かに彼らに向かって噴いたがそれはもう届かず、ただ、海の波の上を滑るように躍っているばかりであった。
波は穏やかで、静謐に満ちていたが、それは本来の姿であり、恋人達の思わぬ来訪に戸惑う女神の風が溜息のように海の汐音と混じり合って、沖に向かって駆け抜けて行ったが、それを見る者はもう海辺には誰もいなかった。

（FIN）

Chimonanthus

■前編

マリナ・イケダが呼ばれて、アルディ家の庭園に出てきた時に、甘い香りがしたので、思わず目を細めてしまった。
懐かしい、と思った。
冬の冷たい空気に乗って、心落ち着く匂いがマリナの肺を温めていく。
パリの冬は、マリナの暮らす東京とそれほど気温が変わらないのに、どこか違っている。
それでも、アルディ家の当主が土の匂いを好み、薔薇以外のものを植えることを許可しているので、マリナは日本でよく知る花木を見かける楽しみを知った。
四季の移り変わりを愛するマリナ・イケダと同じくらいに、シャルルも日本を愛している。前の当主も同じであったようで、大きく成長した木が何種類か存在している。すぐには根を張らないものも、ここには複数種類存在した。

シャルルがそうしたものに対して少なからず配慮していることを、マリナは知っていた。日本が好きだから、というわけではない。日本でなくても存在する木々があるからだ。でも、彼は時々、庭を巡っていることを彼女は知っていた。
シャルルが木々を巡るのは、植えた者への鎮魂が添えられているからだ。
薔薇を重んじる家であるのに、こうして違う花を見かけると、マリナの知らないシャルルの過去に遡っているような気になってしまう。
マリナは、肩にかけたショールを持ち上げた。
非常に小柄な彼女には大きすぎるものであったが、アルディ家の誰かが使用していたものを借り受けていた。
彼の伝言と一緒に届けられたものであった。
冬に入ると、新たにマリナの体軀に合わせたものを用意しようと言われたけれども、必要ないと言ったことをシャルルは覚えているようだ。
もっとも、彼には忘却というものは機能として備わっていないので、たまたま想い出したということではなくそうしようと決めていたのだろうと思われた。

マリナは、寒冬でもよく手入れの行き届いた緑の多い庭を眺める。
これほど見事な庭であるのに。
この庭を愛でる者は、極端に少ない。
彼には多くの親族が存在するが、その者達はここにやって来ても庭に咲く薔薇以外のものに目を遣ることはなかった。
血が繋がっているからわかり合える、という理屈は彼には通用しない。彼の孤独を理解し、ともに添

って歩く者はとても、少ない。
マリナであっても、彼の狂気に近い孤独は癒やせない。でも、彼はそれを承知している。
だからこそ、こうして伐採することなく木々を育てているのかと思われた。

言葉を持たないものが最も雄弁だ。

彼は、常々そう言っている。
鑑定医を経て、彼はそういう結論に至ったようだ。

それに。
日本を愛し、日本の者を妻に迎えた彼の父の心を知るために、こうして木々を廻り歩いているのだとしたら。
彼の求めている、彼が補完しようとしているものを、マリナは一緒に模索することを選んだけれども。
まだ、彼はひとりで庭に出る。

しかし、最近では彼が一巡して暫くしたあとに、マリナにあてて『庭に出てくるように』という伝言を受けるようになった。
ひとりで完結するのではなく、ふたりで眺めようと提案する彼の心が嬉しくて、少し、哀しい。

マリナはショールに体を埋める。
暖かい服装でやって来たが、土から立ち上る冷気がマリナの体温を奪っていく。ショールは古いものであったが、暖かく、寒々しい空気からマリナを囲ってくれている。
新しいものにはない、使い込まれたものの独特の柔らかさがあった。
微かに、良い匂いがするが、それが向こう側から漂ってくる匂いと同じであることに気がついたマリナは、顔を上げてシャルルの姿を探す。

落葉広葉低木である、この時期に強く香る甘い風を吸い込んだ。

遠くで、黄色の花が見える。近付いていくうちに、それが臘月から咲き始める臘梅であることに気がついた。
蝋細工のような花をつけるので、そのように呼ばれているけれども、実際は梅の花弁に似ているが同じ種ではない。
しかし、何とも言えない淡い優しい黄色の花には甘い匂いがあって、それがシャルルの足を止めさせる。優しい、懐かしい匂い。
そして、黄蘗よりも淡い黄がマリナを惹きつける。

それに向かって少し歩き、目を遣れば、フランスの華と呼ばれる傑人はそこに立っていた。
やや上を見上げて、満開の臘梅の木の下で、薔薇の精霊そのもののような雰囲気を纏わせて静かに佇んでいる。
彼が、その木に吸い込まれてそのまま木の精霊になってしまいそうなほどに、近寄りがたかった。
深く思考に耽っているから、誰も近寄れないのだ。

またひとつ、風が吹いてマリナの茶が入った髪とショールの裾を巻き上げていく。
人にはそれほど影響のない風かもしれないが、小柄なマリナにとっては足を止めるほどの強さであった。
それに乗って来た香りは、マリナがいつも臘月の終わりから気がつく薫風だ。

パリでこのような懐かしさを味わうとは。
・・・シャルル・ドゥ・アルディの計らいに感謝する。
声に出したのなら、彼は薄く冷笑して青灰色の瞳を挑戦的に光らせるのだろう。
言うに及ばずとして「君を試しただけだ」と言うだけだ。彼は、愛を試すことをやめたのに。マリナに、彼の心を汲んでくれとは言わない。彼は、自分の中にある求めをマリナに見せることはあっても、同化して欲しいとは願わない。彼が孤独でありながらも孤高である所以のことである。

臘梅とは、蝋の様な花弁を持つ。
そして、蝋細工のような可憐な花は、シャルルを思わせる。
手を伸ばせば、溶けて消えてしまうような、儚い印象の花であった。
それなのに、命を謳歌するかのように強い芳香を迸出し、生命の燦めきを主張する。
このショールからは、同じ匂いがした。匂いがそれほど長く継続するとは思わない。だから、焚きしめる香料に、同じものを指定した者が居るのだと思う。
アルディ邸を訪れると、独特の匂いがあることを感じる。
それは自分の領域ではないのだと感じる警告のようなものだ。
危険だというのではなく・・・線引きをするのだ。ここは自分の知っている場所と少し違うのだ、と。
でも、告げる空気に気がついたからといって、それが異質だとは思わない。
この家の古くから流れる空気が好きであった。懐かしいとは美しいという意味と同義だと思う。
美しいものは、どこか懐かしい。それは風景だけではなく、このような空気であったり、シャルルの持っている孤独を感じたりするときに、感じることが多くなった。
マリナも、大人になったのだと思う。成長したという意味だけではなくて、このような見えない何かについて感じるようになったからだ。

命の淡さを知る。姿の儚さを感じる。

心の扉を叩くことなしに踏み込むマリナを一度は放したシャルルであったけれども。マリナは再び、

シャルルの心の扉を叩く。それでも良いのか、と尋ねる。そして、自分の心の境界を越えることを、マリナは許した。シャルルにだけ。

「シャルル」
彼女は、彼女の恋人の名前を呼んだ。
複雑な事情を経て、彼と彼女は恋人になった。彼は彼の親友の恋人を得たし、彼女は彼女の恋人の親友を得た。
それがどういうことなのか、世で存在を認められるにはとても難しい状況であったことも承知していた。
愛し合っていれば何でも乗り越えられるとは思っていない。
東洋人の妻を迎えることに対してアルディ家は難色を示していたし、過去の遺恨も清算されていなかった。でも、シャルルはそれでもマリナだけを迎えると言った。
マリナは、それに対して覚悟した。思いを定めた。シャルルの孤独を受け入れる事ができる者が他にいるのであれば、自分はいつでもこの場所を退くと言ったけれども。誰も、その次点を名乗らなかった。
それほど、彼の孤独は根深いのだと思う。彼女も彼の冷たく昏い深淵を埋めることができない。

蝋細工のように、温度を加えてしまえば儚く崩れてしまいそうな花の下で。
シャルル・ドゥ・アルディは呼吸していた。
伸びた背筋、通った鼻梁、滑らかな頬の曲線、そして白金の髪は臘梅の花の色よりも薄く、青灰色の瞳の瞬きは溜息が出るほどに美しい。
酷薄そうな薄い唇が結ばれて黄色の花を見つめている。
小さい腰は厚手のオーバーセーターに覆われてしまっているが、長い脚がその裾から伸びている。
これほどまでに完璧な人が、なぜ、不完全な自分を求めるのだろうと思ったこともあった。どうしてマリナなのか、と聞くこともあった。でも。
彼は、彼であるからマリナを求めるのだと思い、マリナはマリナであるからシャルル・ドゥ・アルディを求めるのだと思った。
体を重ねるのではなく魂を重ねることに対して、シャルルは特別な感情を持っている。
温度ではなく、匂いに彼は敏感であった。

あの黄色の花が立ち上らせる匂いに、シャルルが何を思っているのか・・・このショールを纏ってマリナは思いを馳せた。

■中編

「来たわよ」

シャルル、と彼の名前を呼ぼうとして、彼女はつい、素っ気ない言葉を放ってしまう。
どこかに行ってしまいそうな、そんな切ない佇まいを見て、マリナは言葉を減らしてしまう。お喋りで豁達なマリナ・イケダはここには存在しない。
なぜ、彼がここに立っているのか・・・わかっているようでわかっていないようで、それがもどかしい。

「見ればわかる」
彼が招いたというのに、彼はとても味気ない言葉を口にする。でも、彼が声を出したことによってマリナは安心する。彼は、どこにも行かない。ここに、居る。
恋人に対して誠意を尽くすのがフランスの男性の規範だと聞いたが、シャルルはマリナに対してはいつも素っ気ない。
でも、彼は彼女のことをとても大切に扱う。傷つけたりすることはない。
しかし、すべてのことから防御することはしない。それはマリナが望まないことだから。

臘梅のような人だと思った。
蝋細工のような、花弁であるのに。茎も枝も幹も違うものである。
擬態しているのではなく、違うものなのだと主張している。
シャルルは、アルディ家のものでありながら、違うものを取り入れると主張しているように思えた。
マリナを受け入れると決めた時に。
彼には、背負わなくてもよいものが重荷になった。そしてそれを背負うことになった。

マリナ・イケダは、ショールの中に体を埋めて、そして歩く。

このショールには金糸が埋め込まれていて、光を浴びると金色に輝く。

もっと薄い色だ。
金の色というより、白金だ。
シャルルの髪の色と同じだ。

・・・・淡いけれども高貴な光。

艶美であるけれども、どこか儚くて、温度を感じればとたんに消えてしまいそうになる。
マリナは寒さで自分の冷えた指先を屈めて、全身を覆う暖かい布を改めて巻き直す。しかし、こんな寒空の下に呼び出したシャルルを詰る気持ちはなかった。

「見事ね」
感歎の言葉が口を突いて出る。ただ、素晴らしいと言うしかない臘梅の花は、陽光を混ぜてシャルルの身体を淡く金色に輝かせている。

銀杏の黄金とは違う、少し切なくなる色だった。
彼は円い縁取りで囲まれた花々を見つめていた。甘い薫りが、年の終わりを告げている。
今冬は、彼女は彼と新しい年を迎える。
家族と迎えなくて良いのか、とシャルルは一度だけ尋ねたが、マリナはそれで良いのだと言った。

シャルルはその時に、今年の臘梅はとても多く花をつけそうだ、とだけ言った。臘月から新年にかけて咲くそれらを、マリナに見せると約束した。
騒がしいことを好まないシャルルが選んだのは、静かな年の暮れと明けである。
様々な催事をこなすことも当主の務めであるはずなのに、彼はマリナと臘梅の開花を待った。
だから、これほど寒い空の下を出てくるように、という一方的なシャルルの伝言にも素直に従ったのだ。

過ぎ行く年と迎え来る年の準備をするように、と告げるような臘梅の木を見て、マリナは溜息を洩らす。

シャルル・ドゥ・アルディが言った。
「これほど多くの花を咲かせたのは久方ぶりのことだ」
「どれくらい久しぶりのことなの？」
「9,119日ぶり」
即答であったが、マリナは眉間に皺を寄せて首を振った。
「年数に換算してください」
「約25年ぶり」
これも即答であった。マリナは困惑する。
シャルル・ドゥ・アルディの記憶力については疑ったことはなかったが、それでもたった1本の木についての情報をそれほど長く持ち続けていられるというのも、驚愕であった。彼は興味のないものには徹底的に無関心であったから。

家族で見たのかもしれないな、と思った。
まだその時には、父母が健在であった頃だ。母親は病気がちであることは聞いていたけれども、新しい年をアルディ家で過ごすとなれば、この臘梅の木を見たのかもしれない。
それを察したかのように、シャルルが説明をした。
「日本の花を描いてみたい、と・・・」
それはマリナのことではなく、彼の母のことなのだろうと思った。
そのひと言のために、彼はずっと記憶していたのだろうか。そして、冬が訪れる度にこの木の花が、記憶した時と同程度かどうか確認していたのだろうか。
あれから随分と成長しただろうに。
彼も、目線が変わっただろうに。

それでも、待っていたのだろうか。以前に見た花と同じだけの臘細工のような花を見るために、気が遠くなる程の長い年月を待っていたのか。
・・・マリナの心が締め付けられたように痛んだ。

だから。
マリナは、そんなシャルルに手を伸ばすことができずに、ぎゅっと自分の肩を抱いた。彼の背中を抱きしめたかったけれど。彼女は、それすらできずに、ただ肌を切り裂くような空気の中で、息を潜めて彼の様子を眺めるばかりであった。
彼に寄り添うということは、彼の孤独に触れるということだ。
そして、彼は彼女の孤独も知っている。
彼女が彼に寄り添うということは、彼が彼女に添うことも示している。
なぜ・・・
彼がそんな風景を見せるのか。
彼が呼びつけたことで、少しだけかもしれないが理解できているかもしれない、と思わせた。
何もかもが『そうかもしれない』と憶測でしかものを語れないことがもどかしい。
彼の中にある、彼だけしか知らない記憶や記録を、マリナは知ることになって、そしてそれを後悔することはなかった。

「これを見ないでいたのは、勿体無いわね。・・・なぜ、言わなかったの？」
アルディ家の庭で冬を感じるのは、これが初年ではなかった。しかし、シャルルは今回だけは臘梅の開花が見られると言ったことに、マリナは疑問を感じ、彼に質問する。すると、実に素っ気ないこたえが返ってきた。
「君は興味ないだろう」
「そんなことはないわよ」
慌てて言ったが、その時に思い切り冷たい空気を吸い込んでしまったので、彼女は顔を顰めてストールに顔を埋めた。
「・・・そんなことは、ないわよ」
くぐもったマリナの声に、シャルルが振り向いた。青灰色の上品な瞳がマリナを見つめるので、マリナは下唇を突き出した。彼はマリナを記憶に留めるかのように、じっと見つめる時がある。
それは・・・また次にいつこの姿を見る時までの日数を計算し始めているように思えた。彼はこんな風にして何かを自分の中に閉じ込めてしまっているように思う。
忘れたくても忘れられないから。彼は、自分の感情を出さずに、ただ、事実だけを淡々と述べるけれども。そこには本当に何も感じていないからなのかどうかはわからない。

このショールが誰のものであるのか、マリナはわかっていた。
裾に、名前の刺繍が施されていたからだ。
冷え込む空気を避けるように、でも、その冷たく厳しい空気を好んだと思われる故人の匂いが残っていた。

かつて、人は命が尽きたら風にかえると言った人がいた。
このショールの持ち主も・・・薔薇にかえり、そして風にかえったのだろうか。
だから、シャルルが臘梅の開花をひとり静かに迎えていたことをマリナに言わなかったのか。
彼は、マリナのたくさんのことを一緒に背負うことに躊躇いを感じないのに、マリナが彼の物思いを背負うことには戸惑いを見せる。

今、マリナの体を包むようにシャルルを包んで慈しんだ人は・・・成長したシャルルの姿を、どこかで見守ってくれているのだろうか。
そうか、と思った。
「臘梅の花言葉は、『慈愛』だったわね」
いつか聞かされたことを思い出した彼女は、言った。
すると、シャルルは薄い唇を歪めて嗤う。
「先見、先導という意味もある」
年の暮れと年の始まりを予見するかのように咲く花であるから、そんな意味があるのだろうか。臘のように日を受けると柔らかくなってしまうわけではない花を愛おしむこの家の主は、静かに、語った。

何もかもが違う人を好きになった、というだけでは彼はここを見せることはなかったのだろうと思う。マリナが臘梅の咲く頃にいつも不在にすることを承知していた彼は、今冬は臘梅を見せようと言った。それがどういうことなのか、わからないマリナではなかった。彼は、マリナにずっと・・・ここで、黄金の花を見て欲しいのだと告げている。

彼から幾度となく求愛を受けていたけれども。マリナはまだ、ウイと言っていなかった。だから、彼は、敢えて自分を見せないようにしていると思った。弱みを曝け出すことに徹するのではなく、彼女がウイとしか言えないような状況を作り出さないようにという配慮であることを感じる。この人は、そういう人だ、と思った。

過去に、マリナが自分の求愛を同情だと思い、彼女の背を押したことを後悔していない彼だからこそ。今、もうひとたび出会って恋に落ち、そして恋を継続することを決めた時に、彼は決めてしまったのだと思った。
マリナを追いつめることはしないのだ、と。そして自分自身を決して許さないで生きる彼に、マリナは何ができるのだろうかと考え続ける猶予を与える。その期間は永遠であった。

「このショールはとても暖かい」
「先見、だろう？」
彼は微笑んだ。そうだね、とマリナは言う。
静かな・・・とても静かな時間である。こうやって、彼のひとつひとつを知る度に、彼女は愛が深ま

っていくのだと告げたかった。
愛は、増える。増やすことができる。深くすることができる。
それはひとりではできないことだ。シャルルはそれを知り、マリナは深まっていく愛を季節を越える毎に感じる。こうやって、彼が少しずつ、自分の思い出と向き合う瞬間に立ち会うことが増えていく度に感じる。
「そうだね」
彼女はそう言うと、彼の傍に歩み寄った。彼女が寄ることもあったし、彼が彼女に近寄ることもある。
こうしてふたりは距離を保ちながら、それでも誰も踏み入れない場所に、愛する相手が踏み入ることを許す。

すると、彼は微笑んだ。
「君は随分と寒がりだね」
それでマリナは顔を赤らめる。彼が、何を求めているのか知ったから。
「その肩掛けはずっと使われなかったけれども・・・これからは君が使って構わない」
「想い出の品ではないの？」
「使わなければ、それは役割を果たせない」
シャルルは低く言った。
「それに、君はすでに使用しているわけだから。
今の発言は、あまり効果がない」
マリナはシャルルの傍らに立った。非常に小柄なマリナは、シャルルの傍に立っても、同じ距離で臘梅の花を見ることはない。顎を上げて、覗き込むようにして眺める花は、やはり素晴らしかった。

■後編

「スケッチしたいな」
彼女は呟いた。
「気に入ったのなら、君の部屋に・・・」
「いえ、良いの」
マリナは首を振った。
「こちらから歩み寄ることも必要で、この花はここで咲いているから・・・スケッチしたい程に綺麗なのだと思うから」
それを聞いてシャルルは何も返事をしなかった。
彼女の部屋に届けるために、この枝は切られて、そしてあたたかい室内ではあっという間に散ってしまう。
長い年月をかけて、この花はまた巡ってきた。

シャルルの記憶に一番近い状態で、花を咲かせている。
彼の幼少の頃に既にこれほどの花を咲かせているのであれば、これは相当な老木だ。
あと幾度この景色を眺めることができるのかは誰も言い当てることができない。
マリナがスケッチしたい、と言い出すのは久方ぶりのことであった。

新年を迎えるための慌ただしさでざわめくアルディ家の中において、彼女はいつも「いつもの通り」であった。庭を漫ろ歩き、空を眺め、薔薇の匂いを喜ぶ。
けれども、シャルルにはスケッチしたいとはあまり言わない彼女のことを、縛り付けているのではないのだろうかと思っているシャルルは、臘月の景色を一緒に見よう、とマリナに誘うことはなかった。
彼女は絵を描くことを生業にしていて、そして絵を描かない日はないと思われるくらい、様々なことを自分の目を通して見てきた。
けれども、シャルルの前ではそれを抑えていると彼は感じている。
理由は明白だ。
彼の母が、絵を描く人であったからだ。絵を描くことで治療になると思っていたのに。彼女は、絵を描くたびに、壊れていったのだと思われた。シャルルは、それをマリナに重ねているのかもしれない。
そんなことはないのに。マリナは、決して壊れたり崩れたりすることはない。

なぜなら、彼の愛を疑わないからだ。自分の感情については懐疑的であるのに、彼の感情は疑わないから。
だから、彼は彼女を深く愛する。強く求める。

彼の愛し方はとても重いものであるけれども。それをマリナは受け止めたいと思っていた。同時に、マリナが抱えているものを、シャルルは引き受けようとしている。
ふたりで過ごすうちに、気がついたことがあった。
どちらか一方が肩代わりするものは愛ではないことを。だから、分かち合いながらも、愛を増やそう、とマリナは言った。
重さは変わらない。でも、その重さを知りたいのだ、と言った。
軽くなることはないけれども。軽くなることを自分に許してはいけないのだと考えているけれども。
その重さを、知っているものとともに歩き、走り、時にはこうして立ち止まって見上げることができるとしたら。

「新しい年が来るのね」
マリナが呟く。甘い香気が漂っている。目眩がしそうなほどに。それは、臘梅によるものなのか、目の前の人があまりにも儚くて手を伸ばすことができないからなのか・・・わからなかった。

そしてマリナは彼にそっと寄り添った。彼は一瞬、頬を緩めて、腕を伸ばす。
こうして近くにいることすら、奇蹟のような瞬間であるのに。
今は、それがないことは考えられない。・・・考えていない。

すると、彼はマリナの肩から背中を覆っていたショールを手に取り、丁寧に彼女に巻き付け直してやった。
あまりにもきつく締めるので、マリナが困った顔をした。
「梱包されているみたい。・・・身動きできない」
すると、彼はくすりと声を洩らして笑った。艶やかな、臘梅のような微笑みであった。
「身動きできないようにしたから」
彼女がしまったと思った時には、もう遅かった。彼が彼女の肩に手をかけて、マリナの唇に自分の唇を重ねたのだ。
抗おうとして動こうとしたものの、彼の言った通りに身動きができないマリナはシャルルの両手に両肩を掴まれたまま、無防備な状態で彼の接吻を受け続ける。
自然に、両手が自分の胸元で握られた。肩掛けの裾を掴み、震えを抑えるようにして彼の慰撫を受け止める。
彼のキスはとても優しい。激しくて情熱的である時もあるが、こうして黄色の花の下では、彼は彼女に触れることを極力、抑えている。

シャルルにとっては、記憶として留めるに値する黄の華木の下で・・・マリナとシャルルは重なりあい、そしてふたりで冬を越えることを誓うようなキスを交わす。
拙い口付けであった。それでも、マリナは目を瞑り、新しい始まりを告げる空気の中で彼の孤独を知る。
彼は、どれほどの日数を、孤独だと感じて過ごしていたのだろうか。
癒すことも除去することもできないのであれば、彼女は和らげたいと思っていた。
ほんの一時であったとしても。
彼が感じている壮絶なまでの虚無の中にも、希望が残っているのだということを、彼に知って欲しかった。
「新しい年が来て、ひとつ年が去って行く」
彼は頬をマリナの頬にあてて、言った。
「君は、ここにある木のことを知ってしまった」
彼女はシャルルを見上げる。彼の寂しそうな声が、寒空の下で臘の花を揺らす。

シャルルが冬の花をマリナに見せないのは、それを見てしまったマリナが日本に戻ることをやめてしまうからだと思っていることを知り、マリナはいたたまれなくなってしまう。彼は、自分よりもマリナを優先させる。どんなときでも、どんなことがあっても。
そこには、マリナの意思が存在しないのか、と詰ったこともあったけれども。
それでも、シャルルはそういう愛し方しかできないし、自分を優先させる愛し方はしないと定めて

しまっている。
マリナは聖女ではないし、いつも正しいことばかりを選択するわけではない。シャルルはそれを承知で・・・いや、そこまで理解を深めて、マリナの手を取った。忘れられない昔の恋を延長させるのではなく、ふたりは、傍に居て手を離さないことを決めた。
だから、マリナに負い目を感じて欲しくないから。
シャルルは自分の愁いをあまり多く話さない。
そんな彼が冬の花の下で、マリナに見せるものは・・・言葉に変えた彼の言葉そのものなのではないのか、と思う。

「これほど素晴らしい華を見れば・・・また見たくなるわね」
マリナはそう言って笑った。
「帰れなくなるよ」
シャルルは彼女の髪に唇を押し当てる。
「私の帰る場所は、シャルルのいるところだから」
マリナは、幾度となく繰り返した言葉を言う。彼は決して繰り返すこともないというのに、マリナには反復を認めている。

シャルルはそれを聞いて、伶俐な美貌を綻ばせた。
こんなに静かな時間を過ごすようになって・・・彼は考えていたのだろうか。

マリナは想う。

死までの退屈しのぎだと言っていた生命を・・・彼は愛おしんでいるだろうか。他の魂や生命と同じ様に、彼は彼の命を惜しんでくれているのだろうか。
それだけが、マリナが気になっていることであった。

シャルル・ドゥ・アルディは静かに声を漏らす。冷たい空気の中で。
マリナは、頬に流れる体の芯から冷やされる寒さに肌を強張らせながらも、この冷気が嫌いになれない、と思った。これはシャルルそのものだから。
ここの空気も、風も、そして冷たささえも・・・彼はひとりでずっと眺めて感じてきたのかと思うと・・・それだけで、すべてが愛おしくなる。

「来年の冬も・・・また、この華は咲く」
「その時には、今度は私がシャルルを呼びつける」
「この館の主はオレだよ」
「関係ない。この華を見ようと申し出ることに、順番はないでしょう」

彼は無言で彼女の肩を軽く撫でた。

「その時は、君からオレにキスを?」
「さぁ・・・どうかな」
マリナは少し朱くなって、口籠もった。

この冬の華は、いつか散ってしまうけれど。
また来年は、同じ様に黄金の華を咲かせる。
一年後。
シャルルが待った年月よりも、ずっとずっと短いけれども。
マリナは、次の華が咲いた時にここに居ることをシャルルに託されている。許されているのではなく、託されている。そんな気がする。
そして、このショールの持ち主からも、何かを託されているような気がして仕方が無かった。

マリナが気軽に身につけるような品物ではないことも、わかっていた。
想い出の品なのだ、と言うだけでは終えることのできないものを、シャルルはマリナのために引き出すことにした。
マリナに分けようとしているのかもしれない。

「こんなに見事な花を、ずっと独り占めしていたの？」
マリナはシャルルにそう言うと、彼は屈めていた躰を伸ばし、今にも落ちてきそうな程、枝に煌めく金の花たちを見つめた。
「そう。君が夢中になると思っていたから」
彼はそこまで言うと、唇を閉じてまた物憂げな遠い眼差しで一度だけ空を見上げると、マリナに向き直った。

「それは臘梅があまりにも見事だったので、記念に作ったものだ。大事にしてくれ」
彼は敢えて、誰が作ったものなのかは言わなかった。この木が成長するまで見続けることができないと感じたその人は、きっと・・・
だから、マリナもその名前を確認することはなかった。刺繍に名前が入っていたとしても、その人の名前を、マリナから口にしてはいけないのだと思ったからだ。

「冬が越せる。ありがとう」
彼女はそれだけを言うと、嬉しそうに、自分を抱く肩掛けの中に顔を埋めた。柔らかい、懐かしい匂いがする。
・・・その人の残した残り香であろうか。それとも、この鑑賞のためにこの家の主が用意させた香りなのだろうか。その香りは、今、彼らの周りを漂っている風と、同じものであった。

マリナが彼と静かに時間を過ごすと決めたことに対する返礼だと思った。
彼は、説明を求めなければ説明を加えない。けれども、彼女の滞在を喜んでいるのだ、と言葉にする

代わりに・・・彼の思い出のひとつをマリナに分け与えた。
「来年はもっと楽しみだわ」
マリナがそう言うと、面白くなさそうに彼は返事をする。
「来冬が同じ気象状況とは限らない。花をほとんどつけない年もあった」
「それでも、花がひとつもついていなくても、それでも・・・」
マリナはそう言って、僅かに首を傾けて瞬きを繰り返す。
花を見せたいと彼は思うのだろうが、そうでなかったとしても。幾つもの冬を越えていこうと誓ったから。
花の小さい年もあるだろうし、今冬のように多くの花を見る年もあるだろう。きっと、それを繰り返して、彼の記憶される臘梅の花というものが、マリナと過ごす臘梅の季節と書き換えてくれるのだろうと期待する。
過剰な期待をシャルルに追わせることはないが、ささやかな希望を、シャルルに伝える。

・・・彼に、伝わっただろうか。

来年の冬にはマリナが彼を呼び出すのだということは、来年の年の暮れにも彼とここで過ごすということが、伝わっているのだろうか。

「決めた。明日はここでスケッチして過ごす」
「オレは忙しい」
露骨に嫌な顔をしたシャルルに、マリナは不満そうな顔をした。
しかし、顔つきはどこか穏やかであった。
「一度見れば十分だろう。記憶できないのか？」
シャルルに言われてマリナは言い返す。
「少しずつ、表情が違っているものよ。今日と明日では、違っているからスケッチして残したいと思うのだから」
「それなら、君が残したいのは『瞬間』だけか」
「いいえ、それをずっと残したいからよ。シャルルのように、頭の中で留めるのと同じこと。私には、こうやって思い出を記録にしないように残す方法が一番合っているの」
「厄介だな」
「そうよ、厄介なの。・・・でも、それが楽しいのよ」
困ったわね、と言いながらマリナは肩を竦めるが、少しも困った顔をしていなかった。シャルルが何事にも自分が優位で終結させることを望むのは、承知していることであった。ここは彼に勝ちを譲ることにする。物事は、勝ち負けで決められないこともあることを、ふたりは知っているから。だから、今回は、譲ることにする。

「だから、このショール、暫く貸してね」

「汚すなよ」
シャルルが横を向いて注文をつける。まったく、自分からおさめるということをしない人なのだから、と心の中で呟くがそれはシャルルには言わないことにした。

年末年始の時間を、一緒に過ごそうと言うだけで良いのに。回りくどいやり方でしか愛を表現できない人だ。でも、それで良い。彼は、彼女に彼そのものを少しだけ明かしてくれた。生涯かけても全部は聞く事が出来ないかもしれない。彼の煩悶の一部分だけでも表に出してくれた。
今日はそれで満足する。今年の冬は・・・これで充分だ、と思った。

「戻ろう」
シャルルが促すと、マリナは頷いたが、ふと、足を止めて彼に近付いた。
「シャルル。ちょっと、屈んで」
彼女はそう言うと、普段は彼女の言うことをまったく聞かない彼女の恋人の体を傾けさせる。
彼女の言葉は、彼を動かす力が備わっている。本人は気がつかないけれども。

「オレに命令か」
彼はそう言いながらも、彼の恋人に従う。
彼のファム・ファタルは永遠で、そして彼は抗うことができない。
シャルルは顔を傾けて、もう一度キスをしようとした。
マリナはそれに応えずに、ちょっと待って、と言って、自分の羽織っていたショールを彼にかけた。
大判のそれが宙を踊り、そしてシャルルに向かって跳躍する。
ふわり、と陽光の匂いとも花の匂いともつかない香りの乗った金に輝く布が、彼の白金の髪や逞しい肩、そして頬に広がる。

いつものことであったが、彼女の突飛で奇抜な行動は、シャルルを無言にさせる。そして、青灰の双眸が、僅かに開く。
この世の中には虚無だけしか残っていないと考えていた彼に、そうではないのかもしれないと思わせる瞬間であった。

マリナは笑う。寒いわね、と言った。
「帰りはシャルルに譲る」

陽光で金に輝く肩掛けが、シャルルに重なった。
幼い時に・・・同じ様に冬空の下に出るのは寒いからと言って彼に肩掛けを広げてくれた人の姿が重なった。マリナに重ねているわけではないが、恋人が知らずに同じことをする。そして、マリナに対して彼も同じ様に寒さから身を護れと巻き直してやった。

人は、愛する人の健康と多幸を祈る。

何事もなく年が過ぎ去ろうとする瞬間を祝う。
そして。
次の年も同じ様に無病で愛に溢れた日々であるように、と祈る。
自分自身に対して願うのと同じ様に、愛する者も同じであるように、と祈る。

シャルルは俯いたまま、言った。
「君は稚拙過ぎる」
「そう？」
マリナはそれ以上言わなかった。彼が、その温もりから何かを感じ取っていることがよくわかったから。
「髪が乱れた」
「誰も見ていないわよ」
彼女が暢気に言った。

「そういう問題ではない」
「問題そのものが存在しない。整っていないからこそわかることもある。
それに。こんなに素敵な臘梅の花を見せてくれなかったのだから」
彼女はシャルルにそう言うと、背中を向けてひとりで館に向かって歩いて行く。
「シャルルは、せいぜい、自分の髪でも整えてから、あとからゆっくり来ると良いわ」
「待てよ」
彼は白金の髪を掻き上げながら腕に肩掛けを整え直し、大股でマリナに近寄って来た。
シャルルはそうして、自分の腕に残った、マリナの温もりによって呼気を込められたかのような彼にゆかりのある懐かしい品を一瞥した。
普段ならシャルルに言われるようなことを、マリナが今回彼に言ったものだから不機嫌になっているのかと思った。
しかし、彼は、無表情で何かを考えている様子であった。
そういう時には、ひとりにするのが正解だ。マリナからの問いかけに彼が即答しないのは、彼自身の中に潜る必要があるからだ。

・・・年が明ければ、この寒さはもっと厳しくなるのだろう。
そして。
凍った空気の中でも、臘の花は咲き誇り続けるのだろう。
マリナとシャルルはそれを見て、また次の冬の話をする。
そうして、彼と彼女は繰り返し、問答を繰り返すのかもしれない。
問答にならない会話かもしれない。

ふたりは並び歩きながら、寒空の下を闊歩する。

そうやって、ずっと、歩いて行く。

彼は、このあと、少しばかり昔話をするかもしれない。
マリナは、きっと、自分が過去に見た臘梅の思い出を語るかもしれない。
そして、次の花は今年よりももっと多くの花を咲かせるかどうかでどちらも予想を譲らないままに夜になり、また朝を迎えるのだろう。
そういう冬の日々を、臘梅がもたらしたのなら。
シャルルの絶望だった叶わなかった期待は、また希望という名前になって変化するだろうか。
そうだと良いのに、と強く願った。

マリナは鷹揚と言った。
水色の空を見上げながら、いいことを思い付いた、と得意気な顔で切り出す。
「あの花、おいしそうね。食用としてショコラに使ってみることはできるの？」
「種子は有毒だ。カリカンチンを含んでいる。・・・試してみろ」
えっと驚いた顔をしたマリナが真剣な顔つきになり、それは困ったと言い出したので、シャルル・ドゥ・アルディは苦笑いを浮かべる。
君はどうして食べ物に結びつけるのか、と唸るシャルルの傍らで、マリナは冬の空気を肺一杯に吸い込んで、朗笑した。

幸せだからに決まっているでしょう、と彼女は言う。

それを聞いて、シャルルは目を細めた。そんな彼の姿を見て、マリナはひとつ、言い忘れていたことを思い出した。
臘梅の花言葉がもうひとつあることを。

臘梅の花言葉は・・・・愛情。

肌が強張るような寒さなのに、帰りはどういうわけか、肩掛けがないのに寒いと感じなかった。
それは、ひとりで歩いているからではないから。
それを彼に言おうかどうか迷ったマリナは、少し考えて、そしてその言葉を呑み込んだ。
シャルルが同じ様に寒いと感じていない様子であったから。

今回ばかりは、言葉にしなくても、同じであることを確信できたから。

彼らの背中を押すように、背を向けた方角から薫香が強く漂ってくる。
甘く柔らかく・・・まさに、愛という言葉を持つ花の無言の香りが、彼らを寒さから護るように。

（FIN）

後紐　前編

●01

カズヤ・クロスがシャルル・ドゥ・アルディの誕生日の祝会にやって来てから、シャルルは頻繁にカズヤをアルディ邸に招くようになった。
シャルルにとってはとても新鮮であった。
彼はシャルルと感じ方も違うし、結論の導き方も違う。
シャルルの話を面倒だと言って途中で切り上げないし、何より彼はシャルルの友なのだ。

愕くべき最大の事実は・・・彼は自分を優先しないことを知っていることであった。
この国の者であるならば、殆ど全ての者が何かしらの信仰について幼い時から教育を受けていた。
教育、と言ってしまうには適切すぎる刷り込みであると思う時もあるが、神に祈ることで母が重篤な状態から回復するのであれば、いくらでも信奉する素振りを見せるし、母が快癒することがあれば、それこそ神を全身全霊で崇めることもしようと誓っていた。
シャルルの母は、カズヤが最初にアルディ邸を訪れた時には、もう、手遅れの状態だった。それでも、聴覚だけは正常であったので、彼が誕生日に賑やかに過ごす声を聞き分けることができた。
・・・・薬剤投与と終末のための手当の効果が交互に訪れ、シャルルのことがわからない時もあった。
でも、あの時の・・・誕生日の時だけは、母はシャルルを見つめてくれた。
副作用によって角膜が濁り、遠くを見ることができなくなった母は、それでもシャルルの声を聞き届けてくれた。広い邸宅の中で、シャルルの声を聞き分けてくれたのだ。

「ずいぶん賑やであったのね・・・来年はもっと賑やかになるのでしょうね」
咎めではなく、母の精一杯の表現であると思った。

母に来年は、ない。
それでも、シャルルは「来年はママンも一緒に参加して」と言うだけしかできなかった。
母の、うつらうつらとした意識の中で語られる様々なことを聞き始めたのもこの頃からである。
何を秘密にして、何を苦しく思い、何を心残りにしているのか・・・言葉が切れ切れであっても、聡い彼には理解できることばかりであった。他の人にはそうではないのかもしれないけれども。

自分の能力は、人と違うから、人と相容れない生しか自分には与えられないと思ったが、この時ばかりは類稀なる才を受けたことを喜ばしく思った。
・・・彼だから、母の声を聞いて理解することができると思ったのだ。

それは、彼が母の命を救う事が出来ないと悟った時に生まれた代償感情であった。

救えないが、理解する。
救えないから、理解する。

どちらが正しいのだろうか。

母の苦悩を分かちあうことで、シャルルは自分の中に秘密を持った。

誰にも、言えないことであった。
父に問い質すこともしなかった。
母の言葉を確認する手配を指図しなかった。
彼女の言うことはすべて正しいのだと思わざるを得ない、様々なことに合点したからだ。

まだ、彼は成人年齢に遠く及ばない年齢であったのに、大人にならざるを得なかった。

大人の秘密を・・・見て、聞いてしまったから。

そんな中で、カズヤ・クロスは相変わらず少年のままであった。
シャルルが急速に大人になってしまった傍らで、カズヤはいつも幼かった。

アルディ邸にやって来ると、彼はプレイルームが充実していることに驚き、図書室の膨大な蔵書に声を失い、料理長の繊細な味付けに感嘆する。

・・・こどもとはこういうものなのだ、という見本が、彼であった。

カズヤはそれでも、気難しいシャルルに合わせられるから重宝されているというわけではない。
彼はとてもこの国では・・・シャルルの周囲の者の中では珍しい存在であった。

自己犠牲の精神は確かに美しいし、崇高であると思うが、カズヤはどこか・・・この国の者と少し違っているように思える。
それは、彼が日本人の父を持っているからなのだろうか。

●02

人は誰しも、神に使命を与えられている。

そう言われてきたが、シャルル・ドゥ・アルディの使命は、一体何なのだろうと彼自身が考える頻度が高くなってきた。

進展もないし回答も与えられない。

・・・一度考え始めれば、それは永遠に続くのだとわかっていた。

なぜそんな風に思うのか、理由はわかっていた。
母の病気を癒すことができなかったからだ。

自分には不可能がないと思っていたし、ほんの一時期であったが親しくなった者には「太陽が西から上っても、間違えることがないのがシャルル・ドゥ・アルディだ」と言われた。声が、母によく似ていた。

母親のことがあって、シャルルは医学の路に進むことを決めていた。
その他のあらゆる分野に興味があったが、そのどれにも深く関わる気持ちになれなかった。
皆が己と共通する分野を勧める。
しかし、シャルルはどうしたいのか誰も聞かない。

母の具合が悪くなるにつれて、彼は人に言えない秘密を抱えるようになった。
母親との会話を、誰にも言わなくなってしまった。
それには、自分だけではない者への影響も考慮してのことであるが、父にすら報告しないままにしてあったので・・・父との距離が更に開いてしまったように感じる。

彼が外出する時にも誰かが付き添うようになった。
常に、誰かが彼の傍に居る。
大人に囲まれて登下校するシャルルのことを、年上の同級生達は奇異な眼差しで遠くから見る。
そして彼はいつも午後からしか登校しないから、ますます孤立していく。
朝の気怠さを話題にし、放課後はどこで遊ぼうかという相談をすることもない。
彼はいつも、ひとりきりであった。

しかし、そんな彼にも最近友人ができた。
カズヤ・クロスという少年だ。

シャルルの誕生日にたったひとりでやって来た彼を、アルディ邸に招いて遊ぶようになった。既に数回、繰り返している。

黒い癖髪の少年は、あどけない顔でまったく身構えることもなく、邸宅の中を走り回る。迷路のようで楽しい、と彼は喜んだ。
そして、彼は決まっていつも最初にこう言う。

「シャルル。今日はどんな遊びをする？」

だから、シャルルはいつも違う遊びを用意していた。
彼に退屈して欲しくなかったから。

途中で去られるくらいなら、最初から関わりあいにならない方が良い。
そう思っていた。

「シャルルはいつも何をして遊ぶの？」
誕生日の来訪の次の時であった。カズヤはそう言ったので、シャルルは遊ぶという行為について少し考えてから言った。
「チェス。それから読書に、水泳。最近はピアノで作曲することもあるかな」
黒い髪の黒い瞳の少年は、彼の言葉をにこにこ微笑んでいたが、それを聞くと不思議そうに質問する。
「それって、誰かと一緒にできるもの？」
「誰かと一緒にするのが遊ぶということなの？」
シャルルの言葉に、カズヤが困惑した顔をしたので、白金の髪の少年は黙り込んでしまう。
自分は、いつも皆にこんな顔をさせる。
なぜなのか、自分にはわかっている。
彼の答えは、人のそれと違っているから。
でも、それを控えることはできない。
人に話を合わせて、自分の言葉をねじ曲げることは彼の信念に反するからだ。

●03

シャルル・ドゥ・アルディは同じ年頃の者と一緒に過ごす時間は殆どない。
元々・・・彼には彼だけの余暇というものは殆ど存在しない。
外出から戻ればアルディ家の子息として相応しい教育を受ける。それでもすぐに習得してしまうので、全部終えたら何か好きなことに着手できるのか、というとそうではない。
彼には上限がないからだ。だから、次から次へと要求されることばかりであった。

しかし、カズヤと知り合ってからは、彼の中にカズヤと過ごす時間ができた。
誕生日会の後、彼を車で送っていたので、所在地は知っている。
母親がフランス人で、父親が日本人の少年であった。
だから、時々、彼を招く。
ひとりで過ごすには広すぎるアルディ邸の中を案内するだけで彼らの探検は次回へ持ち越されてしまう。
時々という言葉は不適切だ。なぜなら、シャルルは定期的に時間を空けるからだ。
カズヤのためだけに。
けれども、誇り高い彼は、彼のためにそうしてやったのだという言い方はしない。
ごく涼しげに、たまたま時間が合ったので一緒に時間を過ごしているのだという顔をする。それがアルディ家の者としての振る舞いなのだと教えられたし、自分でもそう思っていたから。

だから。
次はいつ遊ぶ？というような約束はしない。
けれども、彼は約束をするということを躊躇っていた。
なぜなら、カズヤが少し、困った顔をするからだ。彼はシャルルの話をとても楽しそうに聞いている。世の大人達のように、理解できない範囲の話題については聞き流すという術を、カズヤは適用しなかった。
なぜ、と聞くし、わからないけれども面白そうだと言う。

シャルルの周囲には、そういう者は居なかった。
適当に彼に付き合うか、彼は最初から理解できないと拒絶するか、彼のすべてに心酔するかのどれかであった。
シャルルの知能指数が人より高いから、すべてが優れているのだと思う者たちと関わって心を失っていき、失望を繰り返すには、彼は賢すぎた。

だから、カズヤも・・そのうち、離れて行くと思っていた。
「シャルルはいつも忙しいな」
カズヤが屈託無く笑いながらそう言う時には、シャルルは返答しないことにしていた。
それをカズヤはあまり苦にしていないらしい。彼が言いたくないから言わないだけなのだという理解で留めているようであった。

彼はサッカーと水泳が得意で、一緒に遊ぼうと言う時にはそれらが必ず選択肢の中に含まれていた。
アルディ家の中に設置されている、プールやフットサル用のコートを見せると彼は躍り上がって喜んだ。

でも、次に言う台詞は決まっている。
癖の強い髪の下から、黒い瞳をきらきらと輝かせて、シャルルに言う。

「一緒に遊ぼう。シャルルは何がしたい？何からはじめる？」

そんなカズヤとの時間を持つために、シャルルは自分の時間を調節するようになった。
人知れず。
そして、偶然にその時間が捻出できたという様子を見せながら、カズヤを迎えにやらせるのだ。
どんな時でも、彼はいつも・・・シャルルの誘いに応じた。

アルディ家の子息の誘いを断る者は居ない。
けれども、彼は信じられないほどの高速でもって学ぶ場所を変えていったので、彼には友人ができなかった。
シャルル・ドゥ・アルディはいつも生真面目で、冗談が通じない。
そう言われていた。
決して間違ったりしないし、道に外れたことをしようとすると途端に不機嫌になる。
しかも、誇り高いので、機嫌を損ねてしまえば大変なことになる・・・と周囲で噂されて、遠く距離を置かれるのは、いつものことであった。

それなのに、どうだろう。
カズヤ・クロスはまったくそんなことを気にしたり、脅えたりすることもなかった。
シャルルが不機嫌になれば「ああ、ごめん」とあっさり謝るし、彼はいつも次から次へと新しい遊びを提案するので、シャルルは自分だけが思考しなければならないという苦から、若干解放された。
それは事実だ。
相手に合わせるために、相手を観察し分析し、考察する。
人でも学問でも同じであった。

けれども。
それは、永遠には続かなかった。
いつまでも、同じ様に・・・同じ周期でカズヤとシャルルが一緒に時間を過ごすというのは永遠ではなかった。
ある日突然、その更新を断つことになってしまった。

●04

最初に知り合ったのは、シャルルの誕生会にカズヤがやって来たことによるものであった。
誰も訪れない、寂しいと言うには惨めと言った方が良いような、そんな宴の器だけを眺めながら、これが自分自身なのだとシャルルは己に言い聞かせていた。

自分を理解してくれる友達は、いない。
それは彼らがシャルルを理解できないこともあるが、シャルルも彼らを理解できないのである。
歩み寄って妥協することについても、検討することがなかった。
それで良いのだから、今は・・・ただ、大事にしたいと思う人のことと、自分自身のことを大事にしなさいと言ったオデットはもう、彼の傍にはいない。

だから、シャルルはカズヤに固執したと思われるのがいやだった。

母親の耳に届くように、こどもらしい嬌声を上げて戯れる様を演じ続けるには、シャルルの母親は存命できなかったのだ。
アルディ家では、シャルルはこの国の頂点に立てるのではないのかとさえ言われている。けれども、母親は・・・彼のたったひとりの母は、シャルルが年齢相当のこどもの行動を好むことを望んだのだ。
一族はそうではなかった。彼に早くから大人になれ、と言い募っていた。
母は・・・なぜ、そのように一族の者たちと違うことを言うのだろう。
そうやって考え続けているうちに、カズヤ・クロスと顔を合わせる回数が増えたのだという言い訳はシャルル・ドゥ・アルディの中で用意されていた。

彼に会うのに、なぜ、言い訳が必要なのか。

このことについては、シャルルは考えていなかった。
考えに及ばないという意味ではなくて、考えても言い訳というものはその都度適合するように変更されるものなのだと知っていたからだ。
多くの者たちが、シャルルを讃辞する。そしてシャルルにとって自分は特別でありたいと媚を売る。
それがシャルルを気鬱にさせるのだと知らないうちは、彼は誰にも心を開くことはないと思っていた。
けれども。
カズヤという少年は、シャルルにはとても特別な存在に見えた。
彼は誰もが阻んだシャルルの催しにやって来た。
たったひとりで。
彼に友人がいなかったというわけではない。彼は、彼の正義を貫いたのだ。
同情で始まる関係は、良い結果をもたらさない。
どちらかが、我慢することになるからだ。
それは、シャルルはオデットとの関わりで学んだことであった。
対等であろうとすればするほど、どちらかが遠慮したり我慢したりする。
それが適正であるのかどうかという問題は別にして・・・シャルルには対等になれる存在が居ないのだと、折に触れて感じるから。
だから、彼には・・カズヤには、その他大勢の友人でないことを示すために、彼を頻繁に呼び出す

のだ。

だからこそ。
シャルル・ドゥ・アルディの呼び出しに応じなかったという報告を聞いて。
シャルルは少女のような繊細な眉を動かし、なぜ、と呟いた。
声に出して自分の感情を述べるのは、はしたないことであると教えられていた。
しかし、それでも声に出してしまう。
カズヤ・クロスが、アルディ家が差し向けた車に乗らずに迎えを断ったと聞いて。
シャルルは信じられない思いで、その報告を聞いた。
そして白金の髪を揺らして、否定の動作を繰り返す。
首を振り、違うと声に出し、青灰色の瞳に憂鬱な影を浮沈させる。
・・・つまり、彼は動揺しているのだ。
それを認められないから、シャルルは次の行動に取りかかる。

●05

迎えにやった車が、目的の人物を連れて来なかった時。
シャルル・ドゥ・アルディは、理由を聞くことはしなかった。
誇り高い彼は、自分から理由を尋ねることはしない。
それなのに、伝言がないかどうか確認し、徒歩で訪れるのではないのかと思い忙しなく部屋の中で視線を巡らせる。

彼にも都合があり、それを聞かなかった自分に落ち度があったのかもしれないが、どこで計算を間違えたのだろうと思い、ふと、思考を止める。
彼は一度考えこむと、そのまま思考に耽ってしまう傾向があった。
注意されることもなかったし、天才が見せる奇蹟の瞬間だと褒めそやす者が多い中で・・・カズヤ・クロスだけは、彼の傍でずっと一緒に時間を過ごすのだ。
シャルルが何を思いつくのか期待するのでもない。
そういう時に、一緒に居る必要はないのだとシャルルが言うと、癖の強い黒髪を額に散らしながら、彼は屈託無く笑う。

「だって、気がついた時にひとりだったら・・・自分が寂しいから」
シャルルが可哀想だから、とか。シャルルが寂しいだろうから、と言わなかった。
彼は、彼が寂しいのだと言った。
「友達にそんな思いをさせるくらいなら、待つよ」

カズヤはそう言ったので、シャルルは白金の髪を揺らし、少し首を傾げた。
薔薇色の頬がぴくりと神経質そうに動く。
「それは対等じゃない。合わせて我慢しているのなら、必要ない」
言い過ぎた、と思った。言葉が足りないとは思わなかったが、それ以上飾ったり補足したりすれば、シャルルはカズヤを侮辱したことになる。
彼を見下して、彼の考えはそうではないと頭ごなしに否定してしまった。
しかし、カズヤは朗らかに笑って、彼に言ったのだ。
「そうか。じゃ、次はシャルルが気がつくまで、待ってみることにする。シャルルのためじゃなくて、ボクのためだ」
結果的に同じではないのか、と言おうと思ったが、カズヤが違う話を始めたので、結局それっきりになってしまった話題であった。
けれども、それが最後の会話になって、その次は、今回にあたる。
そして、カズヤはやって来ない。

黙っていると人形のように美しい天使のような顔立ちのシャルルであるが、彼の口から出る言葉は最近では、有識の者でさえ黙ったり唸ったりすることが多かった。
知能指数が高いということは、そういうことなのだ。
彼と会話できる者が、どんどん限られていく。
そして、彼は自分がまったく未知の言語を使っているわけでもないのに、そうなのかもしれないと思う瞬間が、増えていく。

そんな中で、カズヤ・クロスと会っている時だけが、彼は年相応の少年に戻ることができた。
理由や理屈は必要がなく、ただ、遊ぶ。

彼がシャルルの誕生日を祝ってくれた時。
どうにも、胸が苦しくなって溢れる涙を止められず、ただ泣きながら誰も好きにならないと悲鳴に近い声で言った後のことであった。
だから、シャルルは今まで誰とも培うことのできなかった関係を、どう継続すれば良いのか思案している。そして、戸惑っていた。
始めるのは簡単なのだと知った。けれども、それを続かせるということは、自分だけの考えでまとまることではなかったのだ。
どんなに難しい計算でもできたし、どんなに難しい曲でも弾くことができた。少し学べば、その過程や構成が理解できるからだ。
でも、今回ばかりはそうもいかなかった。

本に書いてある友情というものについて、そのまま適用できないのだと気がついたが、それ以上の情報はどこにも記載されていなかった。
勿論、解決方法もなかったし、なぜ、カズヤがシャルルの元に来なくなったのか、まったく理由が思

い当たらなかった。

それでシャルルは考えた。
そして、結論を出した。

自分に非がないのであれば、カズヤ・クロスに何か問題が発生しているのではないのだろうか。

●06

シャルル・ドゥ・アルディが自分の中で何を思い何を感じていたのか、カズヤに全てを明かすことはなかった。それでも、何となく・・・この少年は自分のことを否定するところからは始めないのだろうなと思った。
それは期待だったのかもしれない。けれども、シャルルは知っているから。
過度な期待は、失望も大きいが・・・それを越えて絶望に陥った時に、何もかもを拒絶することになるのだろうと見越していた。

彼は確かに聡明ではあったが、だからといって全てを達観し、何事にも肯定的に受け入れるということには繋がらないほどにたくさんのもの悲しい経験を経てきた。
まだ少年であった。多感というよりかはむしろ、繊細過ぎた。
触れて消える淡雪のように彼の精神は人々の温度で左右される。それが愛を欲して植えているからなのだと認めることもなかったし、実際にそうではない部分も多分にあった。

確かに、自分は人と違うのだということは認識している。
人から自分の望むとおりには見られていないことも知っている。
人から・・・自分は理解できない人間だと思われ、それなのにアルディ家の子息ということで蔑ろにできないという困惑も、彼にはわかっていることであった。
しかし。
どのように悪し様に言われても。
彼はそのようなことを言って彼の心を傷つけた人々を切り捨てることができなかった。
関心の無いふりをすることは簡単であった。傷つかないように演じることも。
けれども、それは哀しんでいないことと同じということではないのだ。

だから、今回も・・・友人になろうという段階で断念しただけなのだ、という風に思おうと思った。
ある過程で、行き着く目的に達しないことがある。それはよくあることであった。
今回のことも同じ様に・・・研究や実験の過程で訪れる、よくある「不適合」というものであるのだ

ろうと思おうとした。
些細なことで失ってしまうものがあった。今回もその類なのだ。

そう、思った。
誰も悪くはない。誰にも責任はない。彼も、シャルルと一緒に居るよりも興味があることができて・・・だから断ったのだ。
彼の思考と行動を読みとろうとした。

そこで、シャルル・ドゥ・アルディは白金の柔らかな髪をさらり、と動かす。薔薇色の頬が僅かに色濃くなった。上質の砂糖菓子のような唇がきゅっと引結び、上品な青灰色の瞳の端が僅かに開いた。
彼が、何かを考えている瞬間には。
いつも、こんな表情になる。

無表情で何もかもを放棄した人形のような顔つきだと言う者もいるが。
こういうシャルルの考えこむ表情を見て、臆したり気味悪がったり呆れたりする者達と、カズヤ・クロスは明らかに違っていた。
だからこそ、どこか慢心していたのだろうか。
シャルルの幼い体の中で、何かが駆け巡っていた。
どれほど無限の能力があっても。どれほどの才能や自由があっても。
彼の体は、まだ幼い少年であった。

癒やせない病に寝込んだ母のためにはやく大きくなりたいと願ったのは、体だけではなかった。
心も・・・大きくなりたいと思ったのに。
彼は、それをいまでも達成できないでいた。

●07

カズヤ・クロスが唖然とした顔をしていたのは、目の前にシャルル・ドゥ・アルディが立っていたからであった。
シャルルには友人が少ない、と言うよりはむしろ皆無に近い状態であったが、それでも関心が無いというわけではない。

アルディ家の門を出たところで、徒歩で近付く少年に気がつき、シャルルが車を止めろと命じなければ、このまま通り過ぎてしまうところであった。
シャルルが出てくる迄には多くの者が介在している。

まずは運転手が車を止めて、次に彼の供人が扉を開けるために出てきて、自分のこどもよりもずっと小さいシャルルのために、恭しい動作でもって扉を開ける。
彼自身が自ら扉を開けて跳びだそうものなら、安全確認を怠った者たちに責任が問われることになるからだ。
だから、シャルルは合図があるまで外に出てこない。
それが傲慢だとか、お高いのだと言われても、そうするしか仕方が無かった。
他に方法が浮かばないということではなかったけれども、彼はそこまでして人に受け入れられようとすることを諦めてしまっていた。
そして、誰にもわかってもらえないということを歎くより、彼はただ黙ってそれを受け入れる事の方がより大きな労苦であると感じていたから。
自分が正しいと思うことを、投げ出さずにやり遂げることを選んだ。

より安きところに流れるより、苦難の多い方を選ぶ。
なぜなのだろう。最近になって、そういう選択をすることが多くなった。
オデットとのやり取りで、少し考えが変わったような気がした。

自分の気分が安らいだということではなく・・・誰かが自分のことを案じているのだと思うと、元気に過ごさなければいけないのだと自分を鼓舞することが多くなった。

「今、シャルルのところに行こうとしたところ」
見れば事情は明らかであるのに、少年はそう言ってシャルルに笑いかける。
この少年は、彼の同級生達とは違っていた。
年齢のことを言っているのではない。
彼は、いつもシャルルに対してとても自然に接している。
それがシャルルにとっては、不自然なことであったとしても、彼は他の友達にそのように接しているのだろう。

シャルルにとっては唯一の友人であったが、カズヤにとってはその他大勢のうちのひとりなのだと思うと、どういうわけか・・・心が沈む。それを見て、周囲の大人達が心配することのほうが煩わしいので言葉に出すことはなかったけれど。

執事が、カズヤに交通費を渡そうとして彼が拒否したことから車での送迎が始まった。
アルディ家の子息ともなれば、常に危険が伴うので誰か付き人が居なければ外出できないような状況であった。アルディ家に入る時には問題ないかもしれないが、定期的にやってくる少年がまったく安全であるのかというと、そうではなかった。

・・・オデットとの出逢いの時には、少しばかり事情があったけれども。

だが、他の者たちに揶揄されることもなく少しでも平穏に過ごしたいと思っていたので、目的地そのものに車を乗り付けるのではなく、少し離れた場所から僅かでも歩くことにしようと決めたが、その申し出はかなりの確率で却下されることが多かった。

シャルルはいつも一緒に居たいと思ったが、彼はシャルルの下僕ではなく、シャルルの友人なのだ。帰るべき家があり、時には他の者と遊びたいと思うのは仕方の無いことで当然のことで・・・でもそれがシャルルを切なくさせた。
切ないという気持ちは、母が決して癒えない病に陥っていると知った時と、オデットとの別れの時と・・・たったひとりで誕生日の会場に座った時以外には、直近では感じなかった気持ちなのに、カズヤがやって来ないだけで自分はこうして出向くほどに動揺していることを認めなければならなかった。

「シャルル・・・出掛けるのか」
カズヤはそう言うと、微笑んだ。彼が何も答えないでいると、カズヤはくせの強い髪を揺らして、あどけない表情で告げた。
「・・・シャルルが出掛けるのであれば、出直すよ」

そうじゃない。

カズヤを迎えにいくところなのだ。
そう言おうと思い、シャルルは思案する。
いつから自分は・・・誰かにものを言う時に、最初に頭の中で言うべき事をなぞらえてから話し始めるようになったのだろうか。

●08

最初から、何もかも彼の思うとおりであった。
皆がそう言う。
彼は、何もかもを持って生まれてきたのだ、と。
けれども彼らの言う「何もかも」というものそのものが、シャルルのそれとは違っていることを気がつかないのだ。
誰かと何かを比較することは、シャルルには適用されない。
比べる根拠も基準も皆と違い過ぎているから。
だから、理解しあえないのだと思った。

心の痛みは、やがて消えるものだと人の世では言われているけれども。
彼は忘れることができない性質であったので、痛みはいつまでも痛みでしかなかった。
何にも変化しなかった。

でも。
たったひとりだけ、裏切られないかと心配する必要の存在しない人物ができた。
シャルルがひとりでいることが好きなのではなく、ひとりでいることに慣れようとしていることも、ひとりで居れば傷つかなくて済むと思っていることも、言わないのにわかってしまう人物。それがカズヤ・クロスであった。
彼を愛おしみ、彼を友と呼び、彼をいつか・・・救うためなら何を犠牲にしても構わないとさえ思っていることを、カズヤは知らない。
しかし、時折、自分のそういう考えは他の者たちと合致する考え方ではないのだと気がつく。

・・・シャルルは、そこでもうひとつ別のことに気がつく。

自分は、他の者と違うことを恥じたりすることはしないと決めていたが・・・他の者と違うのだと思わせるのも、またカズヤ・クロスなのだと思ったのだ。

だからなのだろうか。
彼が高慢な態度で、カズヤと少し距離を置こうとしているから・・・彼は来なくなってしまったのかもしれないと思い、そして心を平静に保つことができない自分自身に、更にいつもと違う行動を起こさせるカズヤのことが、憎らしいと思うのに、彼と話ができなくて寂しいと思う。

・・・そうか、と思った。

自分は、寂しいのだ。誰かにそれを認めるような発言はしないだろうが。
シャルルは・・・・カズヤが自分だけの友達でいてくれないのだろうか、と思っている自分と、そうしてはいけないのだと常識的な忠告を囁くもうひとりの自分との間で激しく行きつ戻りつを繰り返しているのだと悟った。

シャルルは、形のよい愛らしい口元を少し歪めた。
そして横を向き、白金の髪を滑らかな頬にぱっと散らせた。
「カズヤが来るとは予定に入っていなかったから」

しまった、と思った。
今の言葉は、彼が考え抜いた言葉ではなかった。
彼がやって来るという予定が入っていなかったから外出するのだ、という発言をシャルルはしてしま

ったが、裏を返せば、カズヤがやって来る時には外出しないで彼のために予定を立てていることを認めたようなものであった。
それくらいは、カズヤにもわかってしまうことだろう。
至って単純な事実であったのだから。

「車を用意させたのに、君は断ったから」
恨みがましいな、と思う。
けれども、カズヤは屈託無く笑った。
「なんだ、そんなことか」
シャルルはかっと頬を赤らめた。
彼の中には生まれながらに誇り高い気質が備わっている。
一瞬・・・嘲笑されたのかと思い、彼は頬を染めたのだ。
それは誰に対しても、許せるものではなかった。
彼はシャルル・ドゥ・アルディであり、彼を辱めたりすることや、考えや発言を理解できないことを誰一人として劣っている質であると定義付けることはできないのだ。
黒曜石のような瞳は黒いのに濁りはなかった。
しかし、カズヤは唇を噛んで黙り込んだシャルルに微笑んだ。
「それで怒ったのか？
・・・車で何も話さないでじっとしているより、自転車や・・・そうだな、大きくなったらバイクとかで自分の自由に移動したいから」
シャルル・ドゥ・アルディはその言葉を聞いて、今度はカズヤを青灰色の瞳で正面から強く見据えた。
不思議な色あいの瞳が瞬きを忘れて、カズヤを注視している。
普通の者なら、その人形のような彼の美しさに見惚れて褒めそやすばかりの美貌に、カズヤは屈託無く微笑み、なんだ、そんなことかと言ってのける。

●09

「会いたいに時に、会いに行けないって、何だか窮屈だし、シャルルはそれを望んでいないのかなと思うけれども、どうなのかな。シャルルはどう思うのかな」
こういう風に、自分の意向を尋ねられたことはなかった。自分の考えを述べたあとで、シャルルの考えを尋ねる。それは今まではあり得ないことであった。
誰もが、自分に真っ先に尋ねる。
でも、彼がどう思うかより、「シャルルがどう思うのか」聞き届けることの方が大事であるような態度を取る。つまり、シャルルに対して自分のことを述べるものはおらず、彼はそういう大人達に囲まれながら過ごしていたので、まったくもって他の者に対してどうして欲しいのかと交流する経験が極端に少なかった。

それがシャルルを鬱屈させることになろうとしても、この手順はいつも順番どおりであったし、覆ることはなかった。
書物を読んで、社交術については学んでいる。
けれども、それには例外が書いていない。

カズヤは例外であった。
彼の中には例外が幾人もいた。
この間別れてしまったオデットを除けば、母とカズヤとふたりも例外が存在する。

シャルルの母親には、彼はいつもどうして欲しいのか、尋ねた。
同じ様にして、カズヤに尋ねていたのに、それは本当に自分が聞きたかったことであったのだろうか、と思い直す。

彼はカズヤに向かって、どう話を切り返そうか考え始めていた。
すると、カズヤはくすりと笑って、シャルルに近付いた。
黒い髪と黒い瞳が近付いて来て、シャルルはぎゅっと身を固くする。人に抱きしめられることも誰かを抱きしめることも、慣れていなかった。
彼のことを息苦しくなるまで抱きしめてくれたオデットはもういない。
今、カズヤの優しい抱擁と彼の誕生日に送ってくれた祝福のキスを取り上げられたら、シャルルには何も残らなくなってしまう。
他の者には当然のことでも、シャルル・ドゥ・アルディにとってはそれは当たり前のことではなかった。

カズヤの声はいつも耳に心地好く、そしてすっと入っていく清らかさがあった。
シャルルの友人として、東洋人の血が混じる彼のことを快く思わない者も居る。
けれども、シャルルは彼のことをとても気に入っていた。
彼は、シャルルに聞かないからだ。
不必要に、彼のことを根掘り葉掘り尋ねることはしない。その代わりに、いつもひとつだけ、質問する。
「シャルルは何をして遊びたい？」
それについて、シャルルの回答は、カズヤが望んでいるものではなかったが嘘や偽りや飾りで真実を隠すことはなかった。
人とわかり合えない回答しか用意できないシャルルは、これからも変わらないだろう。けれども、カズヤは根気よく尋ねてくれていた。それを、重要視しなかったのはシャルルの傲慢さであった。
これを認めると、家の者はアルディ家の者らしくないと言って咎めるだろう。
けれども、自分は、いつもどこかで・・・虚を感じていた。
奥の知れない昏い洞の中に声を張り上げているような気がしたのだ。

誰かを従わせるということは、相手の心を消していくことなのだろうと思った。
だから、カズヤが想定しないことを行動すると、シャルルは途端に不機嫌になり、理解できないと諦めてしまいそうになっていたのだと認めた。
決して、口には出さないけれども。

「シャルル。いつも、シャルルは相手のことを考えすぎだよ。何をしたいのか、たとえそれが違っていたとしても聞き合うことができるのが・・・ともだちで、シャルルとはそういうともだちでいたいと思うんだ」
カズヤの言葉はあたたかく、一生懸命に考えてきた言葉なのだとわかった。
心優しいシャルルの友は、シャルルが一方的に自分の隷のように彼を呼びつけることに怒りもせず、その反対にシャルルが本当にしたいことは何なのだろうかと尋ねてくれる。
抗議や詰りの言葉がやって来るのかと覚悟していたのに、カズヤはそうしないで、シャルルに向かってシャルルを黙らせるほどの申し入れをしてのけたのだ。

シャルルは唇を噛んだ。言い返せないことが悔しいのではなく、高潔であることを優先させてカズヤを哀しませていたことが腹立たしかったのだ。自分はなんと、不甲斐ないのだろう。そう思うだけで、体が打ち震える。完璧であろうとするほど、彼は自分が他の人間と理解し合うことができないのだと思い知るからだ。
いつも、それで失望してきた。もう、失望するのはたくさんだと思う。だから、期待しないことにしていた。それでも・・・カズヤには期待してしまう。
その複雑な思いをカズヤは推し量ったようにして、シャルルの肩に、自分の手を添えた。
「シャルルが心配していたのは知っているよ。だから、このことについては謝るよ。来たくなかったから来なかったわけではないよ。いつか、自分から尋ねて行けるような間柄でいたいと思ったからだ」
「・・・君は嘘つきだね、カズヤ」
シャルルは彼の言葉を聞いて、そう答えた。
シャルルの肩の上に乗った手の平が、ぴくりと動いた。黒曜石のような瞳が、僅かに左右に揺れたことをシャルルは見逃さなかった。

●10

自分の願いを正直に口に出せない。
それは、母に対してのみ適用されるものだと思っていた。
感情、と認めることはない。彼が本当は何に憂えているのか、痛いほどに沈鬱な塊を吐き出すことができないから、苦しいのだとシャルルは誰かに言うことはない。
自分の心の中に留めて置かなければならないことを彼は多く抱えている。
他の誰よりも。

彼はアルディ家の跡継ぎだ。誇り高く生きる。
そう決めたわけではない。
彼の中にごく自然にあるものであったから。
彼が生きていることによって、母の思い出は残る。
母と父が彼を生み出したという事実は記録される。
愛されたと確認しなくても良い。もうそれは確かめることができないから。
母に、もう、聞くことはできない。
シャルルのことを愛していたか、と聞くことはもうできない。
シャルルは愛しているのだ、と告げることはもうできない。
だから。
カズヤには、何も言わないでいようと決めていたわけではないのに、そうしていた。
それを察知して、カズヤはシャルルに言うのだ。

『シャルルは、どうしたいのか』

彼は、優しくシャルルに入り込む。そして隣に居る。
向かいあうのではなく、隣に並ぶ。
哀しみで涙した時に、カズヤはシャルルを抱きしめた。彼が本当に欲しかったものを知っていた。

だから。
だから、必要がないのだと思おうとした。
自分にはそれは必要がない。誰かと分かち合いたいと思うことも、誰かを愛そうと努力することも。
・・・そして、誰かの話に耳を傾けようと思うことも。
すべて、それらは誰かとわかり合いたいと思うものが行えば良いのだ、と考えた。
彼は間違えることはない。
だから、この結論も間違いではない。
そう信じ込もうとした。

「嘘つきかな？」
カズヤがどこか、危機的状況だとは思わないような、どこか楽しそうな口調で言った。
「そうだよ。君はいつも、自分がどう思うのか言わないから」
「それはシャルルも同じだよ」
自分と目線の違わない少年は、シャルルに向かって少し首を傾げて言った。
きらきらと輝く瞳は漆黒であるのにとても澄んでいて、覗き込めばそれは完全な闇黒ではなかった。
東洋人の父とフランス人の母を持つカズヤという少年は、不思議な顔立ちであった。
幼さと思慮深さを併せ持っているからだ。

カズヤは、黒い瞳を動かした。すべてのことが満足して円満であるとは言い難い状況の時の仕草であ

った。
まだ、多くは学んでいなかったけれども、シャルルは人の心を分析してみたいと思う理由のひとつになるだろう、と予想していた。己のことをそんな風に述べている様を見て、哀しむような人は、もう、彼の傍にはいない。

・・・だから余計に思うのだ。最初に思ってしまうのだ。
カズヤ・クロスの心の内を知りたいと思うのに。
カズヤの心を観察することのない日々を、期待した。
ああ、また期待してしまった。
シャルルはそう思いながらも、カズヤに向かって少し面白くなさそうな顔を見せた。
彼とは、駆け引きは通用しないのだと思う。
人は、いつか去ってしまうものだと考えていたシャルルに、人は寄りそうこともできるのだと告げるカズヤは、シャルルのまわりに誰もいなかった。
ほんの一瞬だけ、時を過ごした母の声と似た声を持った人物はもう、ここには居ない。
・・・なぜ、彼をこの時代に誕生させたのかと詮無きことを思う。
選んで生まれて来たわけではないのに。
彼を肯定し、彼を優先しようとする者たちに囲まれて生きてきた彼は、彼に対して皆と違うカズヤに途惑う。

・・・そして「いつもの通り」に振る舞おうとした。彼の「いつもの通り」とは何だろう。自分のことなのに、そのように思ってしまう。
シャルルが毎日を過ごす時には、虚無と饑いが常駐している。

●11

そんなカズヤの些細な愁いをシャルルは見逃すことはなかった。
彼のことを嘘つきだと言ったシャルルは、カズヤに向き直った。
「ボクと顔を合わせなかったのは、また怪我をしたからだろう」
彼は黒い瞳を見開く。
シャルルは自分の口調がいつもより少し速いことに気がついていた。
これを言ったら良いのかどうかという駆け引きは存在しない。
他の者には言う事は無いと決めているようなことを、彼に言ってしまう。
・・・彼になら言っても良いのだという気安さからではない。
その逆だ。
彼に言って、彼が距離を置くことになってしまうかもしれないという懸念を感じながらも、シャルルは目の前の黒い瞳の少年に告げるのだ。
言わなければ波は立たない。
けれども、言わなければ澱んだままで終わってしまう。
「ずっと来なかったのは、見た目に傷があったからだ。今も、見えないところにあちこち鬱血のあとがあるのだろう？」
「なぜ、そうだと思うの？」
彼はシャルルにたずねた。打ち明けたわけでもないし、彼が常日頃、誰かに虐められているということをシャルルに告げたこともなかった。実際、カズヤ・クロスという人物は自分のことは詳らかにしない。
それが不満ではなかった。
何から何まで知っていなければ対等ではない、という理論はシャルルにもカズヤにも存在しない。

そのことそのものは、最初から気がついていた。
彼が、なぜ、彼に会いに来なかったのか。
理由はわかっていた。でも、それをカズヤから聞きたかったのだ。
それなのに、カズヤは質問に質問で答える。
まったく仕方の無い人だと思う。自分よりも年下で、シャルルの方がずっと学力は上であったけれども、カズヤは時々自分の最も近い人物であるかもしれないと思わせる瞬間が垣間見える。

だから、シャルルは淡々と説明した。

「自転車や徒歩で来たかったと言うのは、そうできなかったからという意味の裏返しだ。迎えの車に乗らなかったのは、見えないところが痛むから・・・そう、例えば腹部などを屈すると激痛が走るけ

れども、それを誰にも知られたくないからカズヤは言い訳を作ることにした」
シャルルは哀しそうに解説する。わかってしまった時には充実感は得られない。理解してしまった先には、その先には何もないのだという虚無感しか残らない。

それでも、彼は言い続ける。
「誰にやられた」
「シャルルには言わない」
彼は微笑む。なぜ、満身創痍なのに彼は微笑むことができるのか。
彼はいつも自分のことを語らない。
苦しいとか痛むとか、そういうことは主張しない。

あの時もそうだ。
シャルルの誕生日に、喧嘩をして怪我をしてやって来た。
喧嘩にならない諍いであった。一方的であったことは間違いない。けれども、カズヤは抗った。自分の行っていること、信じていることが間違っていないのだと主張したから、相手に力による制裁を受けた。
他の同年代の者であれば、そこで挫けてシャルルのところに行き着こうなどとは考えない。それでも、彼はやって来た。
痛む体で大きな声で笑い、話し、満腹を越えるまで食事を楽しみ、そしてシャルルを笑わせた。彼の心の傷よりかは些細な痛みだと笑い飛ばした。健康な体であれば、いつかそれは癒えるのだと言った。
シャルルの心の傷を気遣っての言葉だった。自分で治そうと思わなければ、癒えない傷を彼は背負っているのだ、ということを知っていた。
・・・そうだ。
彼は、シャルルを微笑ませることができる。その彼を苦しめる者がいれば、それは罰を与えるに値する。
やられたら、倍返しだ。
それは自分にだけ適用させる項目ではない。

彼はシャルルの所有物ではない。
わかりきっていることなのに、沸々と滾る怒りを抑えることはとても難しいと思う。
そこで、ふと、思うのだ。
自分の誇りを傷つけられたわけではないのに。
なぜ、シャルルは憤っているのだろう。

「・・・本当は来ても良いなと思っていた？」
彼は小さく言った。小声で、誰にも聞こえないような小さな声で。

しかし、カズヤは聞き漏らさなかった。彼の小さな、消え入るような声に耳を澄ませた。
「言い訳しなければいけないくらいに」
カズヤは照れながらそう言った。シャルルは言葉にならない声を呑み込む。
母の前でさえ計算しながら話をしたのに、彼は今、カズヤの前では計算できない。

●12

カズヤはシャルルの手をそっと握った。
シャルルには前置きなく誰かに触れられることを常とする生活ではなかった。
だから、彼の手が熱いことにもその時になってようやく気がついた。
いや、本当は頬が紅潮し、彼が辛そうな顔をしていたことも知っていた。
しかし、それを指摘してもカズヤは話が済むまでは大丈夫だと言って何もなかったかのような顔をするのだろうと思った。
「シャルルは、今、仕返しをしてやろうと思って、誰がやったのか考えている？」
シャルルは黙った。見透かされることも好きではなかった。彼が無表情になり、何かを考え始めたのでカズヤがその思考に入り込む前に彼を現実に呼び戻したことを咎めるつもりはない。
けれども、
「止めても無理だよ」
シャルルは俯いて言う。
「シャルル。同じことでやり返したら、その時は気が済むかもしれないけれどもきっと、後悔するよ」
「構わない。言ってもわからない人には、何を言っても無駄だから」
シャルルが吐き出すようにそう言うと、カズヤは彼の片手を両手で握った。
驚いてシャルルが顔を上げると、近い場所にカズヤがいて、シャルルの様子を心配そうに見つめている。
彼が発熱しているのは、喧嘩の時の怪我が原因だろうと推測していた。充分な手当はしているのだろうか。この様子は、話すことも動くことも辛いはずだ。それなのに、必死に堪えてシャルルのことを心配している人物のことを、シャルルは見つめ返す。
静かな憤りが沸いていたことは事実であった。
できることなら、今すぐにでも彼をこんな目に遭わせた者達に同じいやそれ以上の罰を与えて後悔させてやりたいと思っていた。
でも、それでは解決しないのだとカズヤは言う。
「そんなことはない。同じことをして構ってやる必要はない。それにね・・・シャルルが悔しく思ってくれるだけで、十分だから」
カズヤは決して、相手の名前を口にしないだろうと思われた。
そうすることでシャルルの誇りを守った。シャルルが暴力に訴えれば、彼は父親に叱責されるだけで

は終わらない罰を受けることになる。アルディ家の長男として、相応しくない行為だと言われる。
「来たくても、きっとシャルルがそういう顔をするだろうなと思っていたから。だから、来られなかった。来ちゃいけないと思っていた」
カズヤは熱のこもった声で言う。
「シャルル。でも、遠慮して会えないというのは、とても哀しいことだと思う」
シャルルと同じ様に、カズヤもシャルルに会いたいと思ってくれていたのだろうか。
そう聞きたかったが、声にならなかった。カズヤに対して、ねだるような言葉を出すことはいけないと自分を戒めた。どれほど親しい仲であったとしても、絶対に、言ってはいけないことがある。
どちらか一方だけがより多くを求めてはいけない。
それは対等でなくなるからだ。

「ボクは君に何もしてやれないということか」
絶望感が広がっていく。何もするなと言われてシャルルは胸が押し潰されそうになった。必要とされていないと言われたとは考えたくはなかったが、カズヤと自分は何が違っているのだろうかと考えてしまう。

「シャルル」
カズヤはシャルルに言った。包み込むような温かさがシャルルの手の平から全身に広がっていく。
厳しくされたことはあったが、何かを教え諭される時にこうして包まれることはなかった。
それが躾けであり教育なのだと言い聞かされて育った。だから。
彼が、シャルルの誕生日の時にくれた抱擁とキスは、シャルルを酷く驚愕させた。
過去に幾度か、カズヤが言っているようなことと同じ様なことを言われたり、抱きしめられたりしたことはあったけれども。
彼の心を動かしたのは、直近ではカズヤの他にオデットだけであった。彼女は今は、ここには居ない。彼女も、愛する者のところに向かってしまった。それは哀しいことであったけれども良かったと思える結果になったから、オデットが彼の傍からいなくなってしまったことは納得している。
でも。
自分が、カズヤに依存するようになったとしたら、彼が同じ様に自分の傍を去って行ってしまったのなら。彼は途方もなく深い底のない場所に向かってしまうのではないのか、と考え始めていた。

「・・・君には、君だけしかできないことがある。君のことをやっかむ人が出てくる時には、それは、シャルルにはシャルルだけしかないものがあると認めてもらえているんだな、くらいに思って欲しい。シャルルは、ボクの誇りだよ」
その言葉に、シャルルはまた俯いた。
どうして、カズヤは彼の心を大きく揺さぶるのか。彼の言葉のひとつひとつに誠意を感じ取ることができるのか。他者の感情や思惑というものは利用することはあっても信じることはしない方が良いと思い始めてきた時なのに、カズヤはシャルルをいつも立ち止まらせる。いいや、違う。
彼の背中を押し、彼の傍をつかず離れずぴったりと寄り添っている。そんな気がするのだ。

まったくの他人であると言うのに、カズヤは、シャルルが一番欲しいものをよく知っている。

●13

「信奉者はいらないよ」
シャルルは言った。
彼は天使のような愛らしい顔をしているけれども、時々、このような虚を衝くように相手が驚くようなことを言うことがあった。

それを聞いて、一瞬、カズヤは目を見開いた。
そうだ、みんな、シャルルのことをそうやって奇異なものを見てしまった、という取り返しの付かない後悔を交えた視線で見つめる。

「結果は聞いてくれないのかな」
カズヤが得意そうに言ったので、シャルルは顔を上げた。目元が熱を帯びて桜色に染まっていた。彼は東洋人の特徴が良く出ているが、成長すればきっと驚くほど骨格に変化が出ると思われた。そして、そういうことをこんな時でさえ考えてしまう自分がどうにも苛立って仕方が無いシャルルに、カズヤは報告を保留にして彼の反応を楽しんでいる。そう思ったシャルルは顔を横に向けた。誇り高い彼が、カズヤにねだることができないことを知らないカズヤではなかったから。

しかし、カズヤはすぐに唇を突き出して、嬉しそうに言った。
「相も変わらずあちらは大勢だったけれども、結局は、次からは何も言ってこないと思うよ」
そうだろうか。シャルルは訝しんだ。彼がどうやって言葉では理解できない輩を説得したというのだろうか。
カズヤはにっこり笑った。
黒い瞳とくせ髪の少年は、シャルルに臆することもなく顔を寄せて、彼だけにわかるように囁いた。
「暴力で相手を服従させようとする時ってさ。自分と違うから同じにさせたいという気持ちから起こる衝動だということだよ」
少し得意気に、彼は言った。

・・・彼の父は、医師であったそうだ。

シャルルの友人として近付く人間は、それなりに身辺調査が行われる。シャルルの耳に届かないようにしている場合が殆どであったが、それまでシャルルはそのことについては何も言わなかった。

しかし、結果を自分に報告するようにと言ったのはこれが二度目であった。
最初は、母とよく似た声を持ったオデットという女性のことについて、彼ははじめて情報を自分にも開示してくれと言った。
そして以降、シャルルの求めがあったときには、予めシャルルにも連絡をするようにと求めた。
「与えられる人間関係は必要ない」
彼はそう言い切った。アルディ家当主として求められる要素であったが、人を傅かせる力が備わったシャルルのことを対等の立場として見る人間は、これからとても少ないのだろうからと覚悟しろと父に忠告されて、それでも良いと言った。

厳しい父であったが、それ以上に当主として必要なことをシャルルに教えるたったひとりの者であった。

彼がにこにこと満面の笑みに切り替えて、シャルルが何を想像しているのかを推し量ろうとしているものだから。
シャルルは、思わず、笑みをこぼした。
こういう微笑みをするようになってどれくらいだろう。
いいや、意識しないで笑みをこぼすのは、どれくらい久しぶりのことなのだろう。
「カズヤ。君が言おうとしていることはわかっているけれども、それを言わせる気？」
「ああ、報告ではなくて提案にしたいのだけれども」
カズヤはそう言って、笑いを堪えきれずに自分の腕で自分の身体をぎゅっと握りしめた。
小刻みに肩を震わせている。それは悲哀に身を浸しているのではなくて、その時の場面を思い出しているからなのだ。
シャルルはひとり取り残されて、少しむっとしたような顔になった。いいや、「ような」という表現は不適切で、明らかに気分を害しているのだと自覚していた。
目の前の相手が何を思って笑っているのか、だいたい想像することができた。
でも、それを分かち合いたいと思っている自分がここに居るのに、取り残されてしまっているものだから。
だから、シャルルは綺麗な眉を動かして、柔らかい唇をあらぬ方向に引き結んでしまう。

カズヤはそんなシャルルに気がついて、目元に滲んだ涙を指先で拭いながら、シャルルに向かって額に皺を寄せてようやく自分から告げた。
「・・・こいつとはわかり合えないと悟るときに人間というのはとても困った顔をするものなのだって聞いていたけれども、本当に自分が実践することになるとは思わなかったから」
呆れたように、シャルルは言った。カズヤの爆笑の意味が、確信になったからだ。
人は、わからない時には拒絶するか信奉するかのどちらかに傾くものだ。

カズヤはそう言って、また笑った。

カズヤはシャルルができないことをやってのける。
人と関わる時に、傷つきたくないしこれまでも十分に傷ついてきたのだから、と思って拒絶するのがシャルルであるのだとしたら。
カズヤは、相手にその判断を委ねるのだ。
こちらに一歩近寄るのか。それとも離れるのか。
カズヤが決めるのではなくて、相手に決めさせる。
それが、シャルルとカズヤの違いなのだと思った。

●14

カズヤは、シャルルに向かって両手を広げ、そして彼を抱きしめた。

「カズヤ」
シャルルは困惑した声を出す。あの時とは違う。彼は困っていない。そして、キスも抱擁も必要としないと感じ始めていた。でも、カズヤはそんな彼に自分の腕を投げだして、そして彼をぎゅっと抱きしめた。
今日は何かの記念だったのだろうか。自分は、何かを忘れていたのだろうか。
そんなことをシャルル・ドゥ・アルディは考える。自分に落ち度があったのだろうかと考えてしまう。カズヤを目の前にすると、そう考えてしまうのだ。彼が、たったひとりで自分の誕生会に来てくれたあの時以来、シャルルはカズヤのことをその他大勢のひとりという風に考えることはなかった。
皆が去ってしまった時に残るものこそ、最も大切にしなければいけないものなのだ。
オデットは、シャルルに多くの言葉を残した。
それは曖昧すぎて、シャルルには記憶しておくことしかできなかったものばかりであったけれども。
今なら、少しずつ、それを解読することができる。

つまらない独占欲だと思う。
シャルルは言った。
「君には、ボク以外の友達がいても良いと思う」
「シャルル」
驚いたように、黒眼を大きくしてカズヤはシャルルの方を見た。
なぜ、そんなことを言うのかわからないという拒絶を示す表情ではなくて、彼の心の内を悟ったような、そんな顔つきであった。
彼は、これほど幼いのに哀しみを知っていると思った。
シャルルがなぜこんなに苦しいのか、カズヤは知っている。シャルルが学ぶ過程であるのに、彼は、この感情について既に知っている。

そう思った。
「好きな人が、他に目を向けている時には応援してやりたいと思う。でも、それはそうできなさそうだから、強くそう思うことにするんだ」
シャルルは天使のようなあどけない顔を向けて、それでも深い孤独を湛えながら言った。
「意地っ張りだな」
「そうだよ。時には、意地を張らないといけない時もある。その場で堪えなけりゃいけないこともある。そういうの、我慢とは少し違うと思う」
「『やせ我慢』だな」
シャルルの言葉は辛辣であった。カズヤは笑う。
「そうだなぁ、平気を装うことは時にも必要かな」
カズヤはそこまで言うと、ふっと遠くを見た。
「いつかさ、離れて行ってしまう人と、突然いなくなってしまう人と、どちらが残された方は苦しいのだろうって思ったこともあったけれども。・・・結局、どっちも苦しいし寂しいものなんだ」
彼の言い方は断言的であったので、シャルルは、カズヤが誰かと間もなく別離を迎えるのかもしれないと思った。
そういえば、彼は家庭の話をあまりしない。シャルルの家庭環境とあまりにも違うから・・・つまりあまりにも幸福すぎて話す事を差し控えているのだろうと思ったが、そうではなかったのか。
「シャルルだって、ひとりで乗り切ろうとしただろう」
「誰かに話すべきものではないよ」
シャルルは内心、驚いていた。誕生日に同じ年頃の者達を招く為に自分がやったことは、もう二度と彼は繰り返すことはないだろう。その必要がなくなったからだ、ということだけではなくて、彼はその方法では人は彼に集まらないと知ったのだ。
自分が歩み寄ろうとした最後の機会であったが、他者からみれば結局、カズヤ以外、彼の心の内を推し量ろうとする者はいなかった。事情を話せば良かったのかもしれないと思うが、同情で来邸されるくらいなら、誰も来ない方がましだ、と思う。それに、今なら・・・もう少しましな方法で集客させてみせるという考えがあった。
それらのどれもが、彼を友として祝いたいのだ、と思う気持ちではない理由によって集うだけであるが。
カズヤは笑った。
「いいや、誰かに・・・たったひとりで良いから、誰かに話そうと思うことが大事なんだ」
カズヤは気分を害したふうでもなく、飄々と言う。彼の口調には熱っぽさはなかったけれども、実に重みがあった。
「大きくなっても、大人になっても、きっと変わらないものがあると思うんだ」
「夢想家だな」
驚愕するシャルルに、カズヤは素直に頷いた。
「わかっているよ。でも、夢にはならない。現実になる」
「なぜ、そう言い切れる？」
「シャルルとボクで決めることだから。シャルルができると言えば、きっと達成できる」

シャルルは言葉に詰まった。これまでにないことであった。
具合が悪いことを隠して、文字通り痩せるまで我慢している目の前の東洋人の少年が、シャルルのことを誰よりも知り尽くしているからだ。屋敷の中にも、一族の中にもこういう話をする者は存在しない。そしてカズヤはそれも知っている。
「約束してみよう。君ならきっと忘れない。それなら、ボクが忘れても安心だ」
彼が言ったことを違えることはしないということを知っているから。
カズヤはシャルルに約束させようとしていた。
「苦しくなったら、寂しくなったら、いつでも呼んで。」
シャルルに彼は言った。
そして彼も言った。
「カズヤも。約束は一方的であってはいけない」
「それは家訓？」
「そう」
カズヤのからかいを含んだ声に、シャルルは神妙に頷いた。誇り高い彼には、ただ一方的に与えられるものは享受してはいけないという精神があった。
「そうか・・・」
カズヤは目を細めて、頷いた。

●15

「それで十分。さあ、これでボク達はまたいつもの通り・・・何をして遊ぶのかという悩みで唸るんだ」
「その前に、体調を治した方が良い」
シャルルはカズヤの体調を気にしていた。彼は溌剌という状態ではないと思われたから。
「大丈夫。それに、何かあったら医者になりたいという友達に助けてもらうから」
決してそうしないことはわかっていた。カズヤの父は元医師である。
それくらいの調べは行っていた。
しかし、シャルルはそこには触れなかった。
「こんなに喧嘩ばかりのカズヤには苦労させられるだろうな」
「だからさ。シャルルは・・・はやく、医者になって、傷の手当てをしてくれれば話が早い」
「君のために医者になるわけではないよ」
「うん」
そこで曖昧な微笑みをしたので、シャルルはそれが気になって小首を傾げた。
カズヤはシャルルの視線に気がついて、淡く微笑んだ。
「誰かのため、という目的も素晴らしいと思うけれど・・・」
カズヤは一度黙って、そして大きな黒い瞳をシャルルに向ける。覗き込むように。

色の薄い瞳のシャルルとは異なる神秘的な瞳が目の前にあった。
「誰かじゃなくて。シャルルが自分のためにそうしたい、と言ってくれる時には、必ず、どんなことがあっても必ず駆けつけるよ」
シャルルは再び言葉を失った。なぜ、そんなことを言うのか。理由を探す。
しかし彼が回答を見つけ出そうと思考に耽る前に、カズヤはそのこたえをあっさり放出した。
「シャルルが医者になったのなら、たくさんの人の命が助かると思う。でも、シャルルを救うことができるのは、シャルルだけなんだよ」
「どういう意味？」
シャルルは困惑して質問する。彼にはわからないことはない。調べれば、それに行き着くだろう。
でも、そうではなくて、カズヤの口から聞きたかった。
「言ったとおりの意味」
彼は肩を竦めてそう言った。
「はぐらかさないで」
シャルルの声に、カズヤは瞬きを早くした。
「それが約束？」
「そうだね・・・」
カズヤは微笑んだ。
「それでは、こう言い直そう。相手を必要とした時には、きっと思い出す」
「思い出すだけ？」
「そう。でもとても難しい」
カズヤは笑う。
「何かをして欲しいという気持ちではなくて、何かをしたいと思った時に思い浮かぶ相手でありたいな」
シャルルは頷いた。
己を救うことができるのは己だけであるけれども、実現させたい物事に必要とする相手として求める者は数少ないだろう。彼はそう言いたいのだ。シャルルにはひとりで何でも解決できるだけの環境が整っている。しかし、ひとりで為し遂げられないこともあるのだ。
そういう時に・・・シャルルは誰を思い出すのか。苦しい時に、誰にも頼らず遂行することが当主として必要な要素と行動であると教育されている。けれども、敢えて、それを越えて誰かを利用するのではなく誰かに助けを求めるのだとしたら。
それはカズヤであって欲しい、とシャルルは思っている。
カズヤも同じ気持ちになっているのだろうか。
それとも、もう既に、そのような苦境の訪れを予期するような事態が彼を悩ませているのか。
カズヤに今ここで問い質しても、きっと何も言わないだろう。それだけは確信できた。
「わかった」
彼は溜息混じりに約束することを決心する。アルディ家の者が簡単に約束を交わしてはいけないことも承知している。このことを聞けば、何を助力として求められるのかが不明だと言い出す者もいるだろう。

でも、シャルルにはそれを押しのける力が欲しいと思っていた。はやく大人になりたいと思っていた。
その過程で失われて遠ざかっていくものがあったとしても、決して後ろを振り向くことはないのだと決めていた。
きっと、これからもっと、孤独で絶望しかないと思うようなこともあるのだろう。それに備えておくことに邁進してしまうのではなく、誰かを助けるために自分の身に備えることも必要なのだと感じた。
友と呼ぶ同年代でははじめての相手であった。
なくしたくないと思ったが、同時に、独占してしまいたい、他の友人は作らないで欲しいとさえ思った。これがいかに恥ずべき感情なのか、シャルルは知っているからこそ高圧的な態度で隠すしか方策がなかった。
すると、カズヤはそのことで心を痛めていたのだ。体の傷は癒すことができる。でも、心の痛みは癒そうと思わなければ癒えることがない。
己を救うのは己だけ。でも、己を助けるのは己ではない誰か。
そうか、これは真理だな、と思った。
目の前の、にこにこと気さくに笑う少年のどこに、そんな哲学者めいた考えが備わっているのだろうか。
シャルルは軽く溜息をつく。
ああ、してやられた、と思った。
自分の言う通りにさせようとして、結局は、カズヤの言葉に耳を傾けることになってしまった。
白金の柔らかい髪が頬に降りかかり、シャルルは一度だけ深く俯いた。
「シャルル？」
カズヤが心配そうに声をかけた。
なぜ、この少年は自分のことではなく相手のことばかり気遣うのか。彼にも言いたいことはあるのだろうけれども、一言も言わない。
友達は束縛するものではない。でも、束縛したくなるのは、こちらを向いて欲しいからなのだ。
シャルルは知った。所有することはできないが、自分の独占欲は決して消えてなくなることはない。
なぜなら、それは、カズヤのことが誰よりも大切な友なのだと認識しているからだ。
いつか、これをきちんと話すことができるのだろうか。
ずっと先のことになるかもしれない。
それでも、このことを言うのはずっと後になってしまったとしても、きっと忘れないと思った。
なぜなら、彼はシャルル・ドゥ・アルディだから。
「・・・・今日は静かに本でも読んで、過ごそう」
「いいね。アルディ家の貯蔵の本だけではなくて、シャルルのこども時代のアルバムも見たいな」
「こども時代」
シャルルは吹き出した。この少年は、自分のことをこどもと認識していないようだ。
すると、それを察したのかカズヤは面白くなさそうに頬を膨らませた。
「ボク達はこどもじゃないよ」

「それなら何？」
シャルルは笑いながら尋ねた。
カズヤは少し得意気な顔をした。シャルルに何かを教えるということが光栄であるかのような、そんな様子であった。
「『後紐』だよ」
彼の脳の中に、そこだけは日本語で発音したカズヤの声が文字に変換される。
彼は日本人の父を持っているから、時々、引用に日本語を用いることがあった。
後紐とは、こどもである人生のほんの短い時期のこと・・・そして初期の段階という意味もある。
友として最初の段階であり、そしてまたたく間に過ぎ行く一瞬の時代のことだ。過ぎ去ってから感じるものであるのに、カズヤはそれを「今、そうなのだ」と断言する。確かに。確かに、変わった友人だ。シャルルは思った。時を重ねるだけではなく、彼は彼と一緒に時間を駆け抜けていこうとしている。
シャルル・ドゥ・アルディは思った。それも悪くはない、と。
そして、この約束をいつかきっと果たそうと思った。

●16　最終話

まったく、なぜ君はいつもそうなのだ。
シャルル・ドゥ・アルディは心の中で幾度めかの歎きを唱えた。
時々は声に出して本人の前で文句を言ってやる。
医師服を着た彼は、目の前に横たわる、目を瞑ったままの黒髪の少年を見つめる。
心の旅に出てしまった彼は、まだ戻って来ない。名残惜しそうにして日本に戻っていった彼女の声は、彼に届いていたはずなのに。

このまま目を醒まさないで長時間経過すればどんなことに影響が出るのかは予想していた。しかし、外傷は順調に治癒していたし、あとは何かのきっかけで意識が戻れば良いのだが、黒須和矢は目を醒まさない。

覚醒したら、彼は真っ先に彼女の安否を尋ねるだろう。自分のことよりも他人の心配を優先させるような人物だ。
カズヤが目覚めることを強く祈って日本に戻っているよ、待っているんだ。
それを囁くたびに、シャルルの胸が痛む。
彼女はずっとカズヤのことが好きで・・・お前も同じ気持ちだろう？
声に出したくなかったが、彼の聴覚が正常に働いていることを確認するために、彼は耳元で囁く。すると、カズヤの瞼は僅かに痙攣するのだ。
そして、幼い時に交わした約束のことを話す。

カズヤ。君は、自分ではなく彼女を助けてくれとやって来た。自分の母親の探索にはオレの手助けを必要としなかったのに。

シャルルは思う。彼の手で探し出すことが、彼の希望だったのだろう。
シャルルの予想は絶望的なものだった。カズヤも察していたことだろう。彼女はもう生きていないのだ、と。
あれほど探しても、まったく消息がわからなかったのだから、生きてはいないのか、マリィであることを捨てて生きているかのどちらかだと思っていた。しかし、カズヤは諦めなかった。自力で何とか探し出したいと思っていた。

だから。
彼が目覚めた時に聞かせる経緯は、カズヤにとって良いことばかりではない。
マリィが既に死亡していること、それを発見したのが彼女とシャルルであること。それから、シャルルの義母にあたる人物が首謀者であったこと。彼が意識を失う直前までで得た事実の羅列から導き出される結果というものはカズヤにとってひどく残酷な内容であることを、その通りであったのだと肯定させるような話をしなければならない。必要であれば、彼女の亡骸も見せなければならないのだろう。
それが、何ともシャルルを気鬱にさせていた。しかし他の者に任せる役割ではない。
どちらにしても、シャルルとカズヤの関係に大きく影響することは間違いのない事実であった。

彼は失望するだろう。カズヤは助けを求めていないのに、結局はシャルルが彼の問題を解決してしまった。
そして、深く繋がってしまった縁が少年時代からの友情ではなく、因縁という悪しきものに変わっていくかもしれないという覚悟がシャルルにはあった。己が悪くなかったとしても、遺族の感情はそうはいかない。責められる対象を見つけ、それが昔からの知り合いに関わるものだと知れば変わらずに友であり続けることは難しい。

父が再婚するとなった時に、もう少し関心をもってあの人を調べておけば良かった、と思った。魄を病んでしまった人の過去は陰惨なもので、それを思うとシャルルはあの人だけがすべて悪いのだと言い切ることはできなかった。ただ、黙するだけであり、マリィの魄が安らかになることを祈るだけであった。
それでも、彼が眠っている間に話すシャルルの会話は、いつも、あの時のことであった。

己を救うのは、己だけだ。でも本当に助けを求め無ければ実現できないものが出来た時に・・・その時に浮かぶ相手でありたい。
彼の、友に対する想いを感じた。

彼はどうにもならない事態に陥り、彼女を連れてシャルルのところにやって来た。どこでもなく、彼のところに。
彼女を助けてやって欲しい、と。

脳波も心拍数も正常であったけれども、目覚めない。
それは、心の旅なのだと彼女に説明したけれども、本当は目覚めたくないのかもしれないと考えていた。
現実が余りにも辛くて。
切ない結果を、自分で確認するのではなく確認させられる。それはきっと、シャルルの口からもたらされる事になるだろう。その重苦を敢えて引き受けるつもりだった。
カズヤは言うだろう。シャルルは悪くない、と。
しかし、そこで彼を救うのは、確かにシャルルではないのだ。
あの小さな日本人の少女が彼の心を癒すのだろう。
過去のことをだんだん忘れるようになって、現実に目を向けることだろうと言ったけれども。それはシャルルの願望そのものであった。
しかし、そうしてしまえば彼とシャルルの間に交わされた約束もなかったことになってしまう。
カズヤは確かに覚えていたからこそ、シャルルに助けを求めた。
アルディ家にはシャルルはいないとわかっていたのに。
「後紐、か」
彼は呟く。
未だに目覚めない友の顔を見つめる。

後ろ紐をつけた衣服を着ている年頃のことを指し示し、それは少年時代のことを言う。
あの時に、彼は言っていた。
たとえ自分が忘れようとも、きっとシャルルは覚えているだろうから、と。
こんなことを予期していたのだろうか。そう考えると心が押し潰されそうなほどに傷む。彼は天才で人間嫌いであったが、心が無いわけではない。

彼とシャルルの後紐という名前の絆は、今も繋がっているのだろうか。

そして・・・カズヤが思う相手をシャルルも気に懸けるようになると、彼はわかっていたのだろうか。

まだ、たくさんの質問に答えていないよ、カズヤ。

シャルルはそっと、彼だけに聞こえる声で言った。
はやく目覚めて欲しいと思う気持ちは変わりが無い。何より、あの少女が哀しむ。カズヤがあれほど案じた少女の顔を思い返す。ちくり、と胸が傷む。その理由はわかっていたが、封じ込めようとすれ

ばするほどその傷みは激しさを増す。
はやく目覚めて、彼女を抱きしめに行け。そうでなければ・・・

己が実現したいと思う時に、思い浮かべる相手になりたい。

彼はそう言った。
しかし、シャルルの夢は叶わない。
それを叶えたい時に思い浮かぶ相手は、カズヤだから。
彼の、かけがえのない友だから。

カズヤ。
確かに、君の言う通りだな。
シャルルは呟く。

そして、また、思った。
彼の脳裡には、カズヤともう一人、あの目の大きい少女の顔が浮かんだからだ。
後紐の約束は、果たせたのだろうか。それとも果たせなかったのだろうか。
彼は、愁いを含んだ横顔を、眠ったままの彼の親友に向ける。
ひとりで解決しなければならない。この想いは、続けてはいけない。
それを実現するために・・・カズヤ、君が必要だ。

シャルルは今一度、そう呟いた。

聞き入っていたのだろうか。
その時、カズヤの瞼と睫が僅かに動いた。

季節はもう、新緑の時期をとうに過ぎて、秋の気配を越え、更に冬の到来を告げるかのような冷涼な
蒼空に雲が浮かぶ時期になっていた。
目覚めは近い、と思った。
そして、シャルルは決断する。
あと少しのきっかけがカズヤには必要で、そしてそれは彼女の笑顔と呼び掛けなのだ、と。
久々に、彼女の声を聞きたくなった。
それが理由であったけれども、きっと冗談めかして軽く言うだけだ。
・・・彼女の声を聞いて、シャルルが平静でいられるかどうかも確認する必要があった。

カズヤという大事な友の長い旅からの帰還のために。
彼は、彼を救うよりも前に、カズヤを救いたいと思った。

カズヤ、君の解釈は少し変更しなければいけないな。
シャルルは皮肉を含めた微笑みを浮かべる。
しかし、どこか満たされた笑みであった。

カズヤは見えていないはずなのに。
彼に向かって口元を少し緩めたような顔をしていた。
それを医学的に生物学的に説明することはいくらでもできるけれども。
シャルルは、それがカズヤからの挑戦のように思えた。
忘れていないだろうな、と念を押されたのだと思った。
「後紐の約束を、忘れるなよ」
今度は、彼がカズヤにそう言った。

彼はそれに応えるように、指先を軽く震わせた。
間もなく、それはやって来る。
あと、少しだ。
シャルルは躊躇っていた行動を実行に移すことにした。

「国際電話をかける」
そう言って、病室の外に待機していた者に声をかけた。
そうだな・・・カズヤが眠っている隣で、彼女に向かって受話器越しに逢いたい、と言ったのなら。
その声を聞いたのなら、彼は嫉妬で目を冷ますのだろうか。シャルルはくすりと声を洩らして笑った。
後紐からの友は、いまだ目を醒まさないが、もう間もなくその旅は終わる、と思った。
それは確信だった。
間違いではない。
なぜなら、彼はシャルル・ドゥ・アルディで、太陽が西から昇っても彼が間違えることはないからだ。

（FIN）

戀の雲へ吾も行着き　前編

●01

マリナ・イケダが困った顔をしていたが、シャルル・ドゥ・アルディは彼女に背を向けた。
すっかり機嫌を悪くしてしまった彼に、マリナはそっと声をかける。なぜ彼がそこまで彼女を拒絶しているのか、彼女には十分すぎるほどに心当たりがあるからだ。

「ええと・・・ちょっと、バスルームにでも行っているから」
「風呂嫌いのマリナちゃん。隅々まで洗って来い」
いつもなら譲歩などは決してしないのだが、今回はマリナの方が折れた。
とりつく島がないというのはこういうことなのだろう。
まったく取り合わないと決めたシャルルの扱いは酷く難しい。
それでも楽観的で鷹揚に構えていることの多いマリナ・イケダであったけれども、今度ばかりは彼にこちらを向かせることは少々のことでは達成できないかもしれないと思っていた。

しかし諦めることはしない。
彼との生活の中で、こういう諍いやすれ違いについては「諦めなければならないこと」には含まれないと信じている。喧嘩をしない恋人同士が理想ではない。喧嘩をしたり、すれ違ったりしても、なお、それでも信じ合うことのできる者同士でありたいと思っていた。
一方だけが熱烈に好きである、と比べることもない。愛の程度は必要なかった。なぜなら、ふたりとも互いが互いを必要だと認識していたから。

心が駈れてしまうことを怖れてはいない。相手が不機嫌だからという理由で一方的にマリナの方が会話を打ち切ってしまうことは、少しも解決にならないと思う。それだけだ。
マリナを動かし、マリナから言葉を奪い、困った顔をさせるのはシャルル・ドゥ・アルディだけだ。
そしてマリナは、シャルルの心の内を知りたいから。
どんな困難でも諦めてしまった時が、終わりの時だ。そう思って生きてきたし、それは今でも変わらない。

ほんの些細なことであったかもしれないが、それが大きな亀裂となることは、マリナも過去に幾度か経験している。苦い想い出で、少しも優しい思い出にならない。
痛みは薄れるが、苦さは薄れない。
マリナは困った顔から笑顔を浮かべる。笑みを交わすような雰囲気ではない。でも、こういう時にこそ笑顔が必要である。
シャルルは背を向けているが、マリナは自分の前身頃を合わせながら、そっと言った。
「先に、使わせて貰うわね」
彼は無言だった。

剝き出しの背中をこちらに向けて、薄い羽根毛布とシーツの間に汗ばんだ体を押し込んで、マリナの気配を窺っていた。こちらを見ていなかったけれども、マリナにはわかる。彼は身動きひとつしていない。
安らかな呼吸を演出しているけれども、彼はマリナの様子を全身の神経で察知しようとしている。
普段のマリナなら、ここで強引にシャルルの顔を覗き込み、青灰色の瞳を開かせて、彼の不機嫌を吹き飛ばすような言葉をかけるだろう。しかし、今回の問題は厄介そうであった。「厄介そう」というものではなく、「厄介」そのものである。
久々に過ごす、ふたりだけの夜であった。ほんの少し前までは、彼と彼女は仲睦まじく互いの温度を確かめるために肌を重ねて、マリナはシャルルの溜息を全身に浴びていた。
少女と少年であった頃から知っているものだからマリナはこういう時にとても虔しやかになってしまう。
自分は貪欲であると思っていたが、そうではないのだとシャルルによって思い知らされる。
魂を奪われたようになって抱き合う時間は、短いのか長いのかわからない。
それほどシャルルは彼女を深く激しく愛し、シャルルの問いかけにマリナはいつも怖々応じるものの、彼に向かって自分を放っていると感じる。
夢のような、泣きたいくらい嬉しい時間であることには変わらない。

彼は彼女のことを運命の人と呼ぶけれども。それは抗えない力でもって、生まれた時から定められたという意味ではなかった。命を運び、命を考え、命を探す人のことだと考えている。ファム・ファタル、という本来の意味の源に最も近い考え方であるのではないのか、と思うようになった。
マリナはシャルルに命について理を曲げて欲しいと願ったし、シャルルはそれについて応諾し実行に移した。間違っているかどうかという問題をここで論じるつもりはなかった。生涯、抱えていくべき問題であった。そのこたえが見つかったのなら、シャルルの考えを聞いてみたかった。
彼のこたえもまだ出ていないのかもしれない。だから、こうしてふたりきりの時には、乱れた息が安らかになるまでずっと抱き合っているのだと思う。
慰め合っているのではない。労り、励まし、そして愛し合う。愛を交わし、愛を学び合う。それが愛をするということなのだと思っていた。

しかし、シャルルが不意に不機嫌になったのは、その後からのことであった。
久々に時間が作れたので、ふたりは上機嫌であった。食事を時間をかけて共有し、音楽を聴き、シャルルが外出先で得てきた話とマリナの見聞きしてきた話を自分の感想を交えて話した。

●02

「シャルル、シャルル」
彼女はシャルルの剝き出しの肩を叩いた。
不意、などではない。人が憤る時には、それぞれに理由がある。マリナにそれが理解できていないだ

けだ。
シャルルの不機嫌を払拭したくて声をかけているのではない。
彼の哀しんでいる原因を知りたいのだ。
人が憤るのは、哀しいと思うからなのだから。
マリナは、極力落ち着いた声で彼に声をかける。
湿った肌がマリナの手の平に吸いつくような感触を与えるものだから、どきり、と胸が鳴った。
彼の肌は非常に扇情的だ。彼に触れたいと思った者が男女問わず多かったことを思い出すと、シャルル・ドゥ・アルディはフランスの華というよりもフランスの薔薇なのではないのかと思ってしまう。
棘があるのに。
わかっているのに。
触れたくなる。
手を伸ばしたくなる。

それはシャルルが優しいからだ。

棘を持っているのに、彼はマリナを傷つけない。
棘を持つ薔薇という存在であるのに、マリナに触れる時には酷く優しい。
泣き出しそうになってしまうほど、優しい。
逢瀬の間に比例する恋人同士の激しさをシャルルはマリナにぶつけることはない。
誇り高さがそうさせているのかもしれないが。彼女は、いつもシャルルに対して恐怖を感じることはなかった。男と女の性というものは性質が違うのだと頭でわかっているけれども、シャルルはそれを証明することはしない。マリナが躊躇していれば決して彼女に強引に触れようとはしない。
なぜなのか。それは明白なことであった。
マリナは過去にそれでシャルルに拒絶しているからだ。己は自分の所有であるけれども、決して誰かに支配されたり所有されることはないのだと言い切っていたから。
そして、彼は自分自身を保持し続けることについて考えるところがあったものだから。
わかっている。お互いが、最初の恋人ではないから。だから、シャルルはこんなにマリナに優しい。
運命の人と言っていたのに。

・・・愛の言葉は、本当に難しい。今でも悩んで正解が見つからない。

寝台の傍らで膝を立てて恋人の背中を見る。これほど切ないことはない。
マリナとシャルルがひとつの寝屋に身を横たえるのは、これがはじめてではなかったのに。なぜ、こうも彼は冷たく彼女を拒絶するのか。判っているだけに、マリナは余計に言葉を失ってしまう.
心だけではなく、マリナの総てが愛されていると思う時間が恋しかった。受けるだけではなく交わす、という愛の時間がマリナには信じがたい夢のような時間だと思われた。
シャルルも、そう思ってくれれば良いのに。

そう願ってしまう。痴がましい願いであるのに。でも、これほど幸せな時間をシャルルに与えられたのなら。
マリナも、与えてみたいと思うのだ。シャルルの逞しく整った肉体が吐息を洩らしながら最後の囁きをマリナに投げかける瞬間、彼女は彼と一緒に忘我の極致に達する。
ただ、己を満たすだけではなく、相手を満たすような時間を共有できることを喜びたい。
そう思っている。

そもそも、喧嘩にならなかった。シャルルの機嫌を損ねてしまったのは、マリナの応対が良くなかったからだ。
「愛しているか」
彼は頻繁に尋ねる。特に、合歓の空気に混ぜて、彼女が無防備であるときを狙って尋ねる。
愛している、と言うことも。愛しているのか、とたずねることも。
すべて、その答を知っているからこと言えるのだと思う。
少なくとも、思いが通じ合っているということを確認するる時間のときには。
それがマリナの声を奪ってしまう。愛を伝えるために、愛を伝える言葉を捧げてしまった海の姫のように。
マリナは、何も言えなくなってしまう。
自分も、言いたいのに。
愛している、とシャルルに伝えたいのに。

あなたが好きよ

そういう言葉でシャルルに気持ちを伝えたけれども。
ずっと言えなくて、すまない
彼女はそういって謝罪したけれども。それでも、あの時から時間を越えて、マリナとシャルルはもっと違う方法で互いの距離を縮めていく。
額を寄せて、会いたかったと囁く。
髪を撫でて、背に手の平を添えて、彼と彼女はどれほどその温度が欲しかったのかを恋しく訴える。
それなのに。
マリナは、シャルルに添える言葉を間違ってしまった。
素晴らしい時間を創り上げてくれたシャルルに感謝することもなく、マリナはシャルルに「愛している」と言わずに過ごしてしまった。シャルルが、青灰色の瞳を哀しそうに曇らせたのに。マリナは、それでも言えなかったのだ。正直に言うことができなかった。シャルルだけが、愛しているのではないのだと声を出さなければいけなかった瞬間に。
マリナは何も言わずにただ彼の肩に自分の顔を押し当てただけであった。
それがどれほど彼を傷つけることになるのか、その瞬間には想像できなかった。
愛している、というシャルルの声に「自分もそうだ」と言わなければいけない時であったのに。

●03

シャルルは今でも、自分よりマリナの方を優先させる傾向にあるように思う。
傲慢で不遜で横柄で冷酷で・・・いくつも詰る言葉が浮かぶが、それでも彼はいつも彼女に優しかった。
自分はマリナが思う程、彼女を優しく扱わないと言っていたし、若い時には彼は驚くほど人間に興味がない人なのだと思った。しかし、本当はそうではないのだ。
人と過ごしていると、彼は摩耗してしまうから。多くのことを感じ、多くのことを提案し、人よりあらゆることが多いのだ。それに比べて言葉は少なく、行動は突飛に見えていつも正しい答を見つけてしまう。
だからなのかもしれない。
シャルルは、マリナに多くを求めない。
マリナもシャルルにはたくさんのことを求めているようで、それはとても少なかった。
シャルルが彼女に自分が持ち得るものを総て捧げると言った誓いはまだ守られている。でも、彼には自分自身をもっと大事にして欲しいと思っていた。
これらのことを併せても、それでも躊躇してしまう要素はもっと他にもたくさんあった。
それは、自分が越えてはならない願いを口にしてしまったことが原因のひとつだ。
それに加えて、シャルルにとってもマリナにとっても太陽であった人のことを口にできないままでいるからなのだと思っている。
誰を傷つけても良いから彼と一緒に居たい、という想いであったのなら、もう少し苦しくなかったのだろうか。誰も傷つけないで生きていくことはできないのだということもわかっている。でも、シャルルはマリナのことは傷つけたくないと考えている。
だからこそ、言えない言葉があった。
愛している、と連呼することはなかった。
密やかに、夜の闇の中だけで使われる符牒であった。

今宵もシャルルはマリナに囁いた。何度も、絶え間なく。
彼の小さな呻き声と大きな溜息にも似た切ない喘ぎを伴って彼が深く胴震いする直前まで、彼は彼女に囁き続けていた。
愛している、と。
男と女の性というものが違っているということは承知していた。
だから、彼がマリナを怖がらせないように、それでも時折力加減を忘れてしまうほどに逸楽に溺れないようにするためにマリナに語りかけていることもわかっている。
わかっている。なぜなら、自分も同じだから。
でも、彼女は彼が囁く言葉にただ頷くだけしかできない。
それは彼の愛撫がマリナに我を忘れさせるからで・・・それを言ってもなお、彼は白金の髪を彼女に撒き散らしながら、彼の頬を滑らせ、指を潜らせ、そしてマリナという名前の彼の恋人を彼女の内側から激しく揺さぶる。

最高の、最上の愛の表現であると思う。シャルルの身体に包まれて、自分であって自分ではないと思ってしまう程に乱される。

「シャルル」
彼女はぽんぽん、と彼の背中の手前で自分の手の平を落とした。少し湿ったシーツの上で、自分の手の平が思ったよりも乾いていることに気がつき、慌てて手を引き戻した。
ざらつく手の平はシャルルの肌に重ねることはそぐわない。そう感じたから。
が、それは杞憂であった。
非常に小柄な彼女は、ベッドの際からでは手が届かない。
だから、彼に触れたければ体を伸ばして彼に触れれば良いのに。
たったそれだけの動作に禁呪が施されているように、体が思うとおりに動かない。
・・・彼の背中に自分を重ねることができなかった。
まだ体は火照っている。意味を持たないやり取りをしたいとは思わない。
しかし、こんな風に無言でいられるとどうして良いのかわからなくなってしまう。
マリナが彼を心から愛していることは、こうして肌を重ねていることだけでは証明できないのだと思った。
愛を伝え合う手段そのものが、愛そのものではない。愛がなければできないことであったが。少なくとも、マリナ・イケダはそう思っている。
「シャルル。ひとりのバスルームは寂しいわよ、きっと」
それはマリナの譲歩であった。普段は一緒にバスルームに入ることはなかった。明るい場所で剝き出しの体を見せ合うことは、マリナには到底できないことであった。晒すのが羞恥と考えるマリナと、隠すことが不誠実と考えるシャルルの違いが顕著に現れる。
だから、これはマリナが譲ったのだ。
彼が憤っているのは、マリナからの愛の表現がないからだ。ただ抱擁するだけの存在ではないのだとシャルルがマリナに知らしめるように、シャルルもそれを求めているのにマリナはそれに応じることができなかった。
なんと言えば良いのか、何を言えば彼が満足するのか見当がつかない。
彼に直接尋ねるのが正しい答えである。でも、それを聞いたら、マリナはマリナでなくなるように思った。相手に望みの言葉を聞く。そしてそれを復唱する。それがシャルルの望んでいることとは思えなかった。
マリナは唇を突き出して、溜息をついた。
「言われて言ったのなら、満足しないでしょう。私はそれはいやよ」
彼女は正直に言った。復唱するだけの言葉に意味も重さもないと思うから。彼が彼女に対して求めている言葉がどんな種類なのか、わかっている。しかし、言えないこともシャルルは見通しているのに、なぜこんな風に彼女を拒絶するのか。
白金の髪が首筋に乱れて、彼の腕が僅かに動く。

意地悪ね、睡っているわけではないのに

彼女はそう言いそうになって慌てて口を噤んだ。

頭の中で何でも片付けようと思うから違ってしまうのだ。
マリナは大きく深呼吸した。溜息は、よくない。
体の奥深くがまだ痺れたままであったけれども。マリナは、ゆっくりと尋ねる。
「シャルルの質問に、ひとつだけ答える」
すると、彼はそこでようやく体を動かし、マリナの方に体を向ける。
露わな胸が目の前に広がり、逞しい腕が流れるように位置を変えていく。こういうわずかな動作ひとつとっても、彼は美しかった。大人になって、青年になった美貌は、マリナには眩しすぎた。
彼女は頬を赤らめながら、言った。
「オレの問いかけに答えられるとでも？・・・マリナちゃん、君はオレと勝負しようと言うのか」
「ああ、そうではないことはわかっているでしょう」
マリナが困った顔をして、また胸元を抑えた。彼の姿を見ているだけで、乱されるのだと言えば納得するのか。いいや、この底意地の悪い、それでもマリナが心の奥底から必要としている人を目の前にして、彼女はベッドの端に腰掛け直し、居住まいを正した。毅然としている姿を披露しようにも、乱れた髪に涙が滲んだ彼女の瞳は潤んでいるままだったし、彼の残した徴も愛滓も、まだ、彼女に纏わり付いたままであった。

●04

自分でも煮詰まっていると感じる。
マリナはシャルルの姿を眺めながら、そう考えていた。面倒なことは後回しにしがちであったけれども。
それでもシャルルのことは「面倒なこと」とは思えなかった。手数がかかる人であるとは思うが。
煩わしいとは思えなかった。彼が気難しいことは承知している。
同じ様に、マリナもシャルルから見たら扱い難い人間で、何に答が欲しいのかわからない人間に映るのだろうと思われた。そうだ。シャルルのことを切り離すことができないのは、自分の方だから。
特に、そう思う。こうして抱き合った後は強く感じる。彼しか存在しないのだという思い詰めた考えではなくて、彼女が呼吸するために必要であるのだと思うのだ。
美を感じ、愛を信じ、彼女は待つことを選択した。
そしてシャルルと行動をともにすることを望んだ時に。
もう、それは始まっていたのかと思う。
後になって、運命と位置づけることは容易い。でも、そうではなくて・・・彼女が、生涯の恋人であると信じた太陽のような人と別れてもなお、シャルルのことを想い、これまで生きてきた・・・そういう自分の人生を肯諾したかったのかもしれない。これが正解で、彼女は抗えないものに従っただけなのだという言い訳をしたかったのかもしれない。

でも、そうではなかった。
マリナとシャルルが離れていた時間は無駄ではなかったのだと想うようになったから。
抗えない力によって、自分の責任や想いはまったく悪くはないのだという肯定だけが正しいのだとは思えなかった。

自分達の愛だけが正しいのか？

その言葉が、甦ってくる。
自分は、いつも、側面しか見ていない。そう思う。

「それとも」
彼は挑むように、マリナを見た。彼女はその蒼灰色の瞳のさらに奥底を覗き込もうとして、彼の冷笑に迎え撃ちされてしまう。
彼の美貌は少しも乱れておらず・・・いいや、乱れてなお美しかった。
頽廃的な空気を漂わせたままでいる様は、どうしようもなくマリナを惹きつける。
綿菓子のように柔らかくて、雲のように眩しい。そして、触れれば溶けて、手を伸ばせば遠いことを思い知らされるのだろうと想った。それでも、ただ、眺めているだけの存在ではない。
腕に潜り込み、肌に頬を寄せて、溜息を洩らすのは他の誰でもなく、マリナだけが知る秘密にしておきたかった。秘密。秘密なのだろうか。
隠しておきたいことではなく、マリナひとりだけのものにしてしまいたいと思っているだけなのに。
「君がオレにこちらを向かせたことには、それなりに必要性があるからだろう」
「シャルル」
違う、喧嘩をしたいわけではないと叫び出しそうになって、マリナは彼の名前を呼んだ。シャルルはマリナのことを傷つけたいわけではないのだとマリナが言ってはいけないような気がした。誇り高い彼は、マリナに優しい言葉をかけることを半途にしてしまっている。彼も、それに苛ついている。

わかっている。
シャルルは、責めているのではない。
彼は、マリナに対して本当にそう思っている訳ではないのだ。
彼は、誘っている。
彼の問いかけに応じるかどうか、マリナに尋ねているだけだ。
回りくどい前置きにマリナは眉を寄せてほっと浅く呼吸する。
憤慨してしまっては、話が続かなくなってしまう。
だから、切り上げることはしない。諦めたら、それで終わりだから。終わってしまうから。
マリナはゆっくりと瞬きをして、彼を見つめる。
「それなら、オレからはひとつだけ」
きっと彼は、マリナに直接求めることはないのだろう。愛していると言って彼を安らがせて欲しいとは彼は考えて居ない。でも欲している。

愛しているというを彼に捧げることは簡単だ。
でも、声は消えてしまう。彼の記憶に残るだろうけれども、マリナの唇から発してしまえば、彼女の中にある愛が消えてしまうかもしれないという愚かしい妄想が彼女を躊躇わせていた。
互いの想いをわかっているのに、確認しないと済まされないということは、相手を疑っているのではない。
自分の中に不安があるからだ。マリナはそれをよく承知していた。それから、シャルルも。だから、彼は何も言わない。誇り高い彼から、求めるものを多くすることはなかった。

彼は、彼女に言った。優しく問いかけるのではない。シャルルはいつも、解決しない問題に関してはとても厳しい顔をして挑む。
それが・・・シャルルの剝き出しの闘志が彼女を震わせる。
怖くはない。
彼の中にある熱情を肌に受けて、彼女は内心、喜んでいるのだ。
虚無と退廃と無色の中で生きてきた、と言っていた人が、やはり今でも・・・今になっても、マリナと出会って変わったと自ら指摘してくれた状態を維持してくれていたから。
何もなかった、と言っていた彼が、彼だけの色と熱を持ち続けてくれたから。それは生きているということそのものであったから。
だから、彼の声に耳を傾ける。
シャルルは少し間を置いて、彼女に向かって囁いた。彼女だけにしか聞こえないように。
夜を重ねて、温度を交え、肌を擦らせ欣喜し抱き合う時と、同じ様に。
「『戀の雲へ吾も行着き』」
「え？」
彼は微笑んだ。そして、それ以上は何も言わず、マリナの目の前でぱっと目を閉じてしまう。
「シャルル、今のは・・・」
「次は、君だ」
それっきり、彼は目を開けようとしなかった。また、眠ったふりをしていることは明白であったけれども。マリナに何を言われても、今度はまったく取り合おうとしないと決めてしまっているらしい。
情の強い人だ、と思った。
それから、彼はぽつりと言った。
「君はきっと、オレを『酷い人』と言うよ」
シャルルはそれだけ言うと背中を向けてしまった。行け、という合図であった。
マリナは困惑した顔のまま、立ち上がる。彼の指示通りに事を進めることに喜びを感じているわけではないが、彼が何かを感上げろと言って猶予を与えるのであるのならば。
マリナはそうしてみようと思った。

頭を冷やそう、と思いシャワールームに向かう。
彼ひとりで寝台に残して行くことは気になって仕方が無いが、彼が何を言ったのかを考えることが必要だ、と思った。

まだ、自分に燻るものがあったが、それをシャルルに縋って鎮めて貰うのではなく、体を冷やして火照りを消そうと思った。
本当は・・・そんな方法は覚えたくなかったけれども。ひとり静かに考える時間が必要だと思った。
僅かであるかもしれないが、彼の言葉を反芻し、彼の考えを読み取ろうとする。
シャルルは、それを見越して言ったのだとしたら。確かに、彼は酷い人だ。でも嫌いになれない。

●05

考え事をしていたので、シャワーの湯温を調節することを忘れてしまっていた。
肌が記憶していたものと違った温度の湯が勢いよくマリナ・イケダに注がれる。
マリナは、今度こそ、悲鳴を上げた。
しかしそれは小さく短いもので、シャワーの飛沫が放つ音にかき消されてしまう。
慌てて調節した温度こそが自分の想定していたものであったと感じるようになるまでの時間がとても長く感じた。
頭を冷やす、というよりも、肌に乗ったものを洗い流すという方が主たる目的であった。
ぶるっと肩を震わせる。水温と気温と肌の温度は、同じ数値であるのに感じ方が違うのは、なぜなのだろう。
一瞬にしてブースは白い霧に包まれた。
湯気の湿った空気がマリナの鼻腔を通り過ぎていくので、彼女は眼をぎゅっと閉じた。
やがて、長すぎると感じた時間が通り過ぎて自分の求めていた湯が彼女に霧雨のように降って来る。
柔らかい、絹糸のような湯であった。
つい最近、彼女の嗜好を考慮して柔らかく肌を刺激しない噴霧状の突水口が採用されていた。
風呂嫌いのマリナ、とシャルルが言ったのはそのためだ。
肌に刺激がかからないようにという意味もあるが、彼女が少しでも快適に過ごせるようにという配慮からであった。それに気がついたのは前回からで、シャルルは彼女に「まったく鈍感な人だ」と言って彼女を憤慨させたばかりであった。
大変に判りづらい優しさであったけれども、シャルルはマリナにかなり気を遣っている。

すぐにマリナの髪が湿り、マリナの周囲は白い湯気で充満する。
手の平を自分の腕に滑らせると、すでに粒になった水滴がマリナの肌の上で転がるように雫を落としていた。
シャルルと過ごした時間の後、というのは何とも気恥ずかしい。どういう風に行動したら良いのかということでいつも困惑してしまう。誰かに教えて貰うことでもなかったし、シャルルの平然とした様子を見ていると自分だけが気にしてしまっていることは明白であったが、それでも拘ってしまう。
大きく、溜息をついた。誰も聞いていないとわかっていなければ、決して吐き出すことのできない吐息はすぐに水に融けて消えてしまった。

「戀の雲へ吾も行着き」

彼はそう言っていた。それに対する答えとは、一体何だろう。

マリナは湯に打たれながら考えた。霧のような水煙の中で、自分の持ち合わせる知識を総動員させるが、何にも繋がらなかった。
シャルルが求めるもの。マリナが言いたいと思っていること。
確かに、この湯煙は戀の雲だ。戀の時間の後に訪れる、白い雲。吾も行着き、というのはどういうことなのか。シャルルはひとりで浴びてこいと言っていた。マリナは行着いたけれども、シャルルは及んでいない。考えれば考えるほど、まったく理解し難い言葉のように思えてきてしまう。
しかし、シャルル・ドゥ・アルディは答えられないから問いかけたのではなく、マリナがやがてシャルルにこたえを出すのだということを承知しているからこそ言ったのだと信じている。
我等が行着く、のではなくて「吾も」行着く。そこに何かがあるような気がした。
彼に何か手がかりを、と言おうものなら、彼は薄い唇を曲げて微笑み、そしてつれなく言うのだろう。
「名探偵のマリナちゃん。君は、どこまで踏み込むのか」
安易に彼に願ってはいけないのだと自分に言い聞かせている。しかし、今回はお手上げであった。
それでもシャルルの期待を失望に変えてしまいたくなかった。シャルルは、マリナの期待をいつも叶える。彼女の希望が願望を、シャルルは知っている。それから、失望や絶望も。だから、彼は彼女に対して何もかもを共有することはないのだろうと思った。
その代わり・・・
マリナはぎゅっと手の平を握る。戀の靄の中で、彼女は霧雨を浴びながら、考え続けた。
髪が重くなってきて、毛先から雫が垂れ落ちる。目も開けていられないほどに睫にも雫が落ち始めていた。
戀の雫を洗い流しているのに、再び戀の雨に打たれている。
彼の慰撫に、何度も我を忘れてシャルルの身体にしがみついた自分は、自分であって自分ではなかった。知らないマリナ・イケダが表出することが、何より怖かった。人と違うとは思わないけれども、誰かと自分を比較しない分だけ恐ろしいと思う気持ちが大きいのだろうと思う。そこまでわかっているのに・・・でも臆してしまう。それがシャルルの気を曲げさせているのだと、わかっているのに改めることができない。

愚かしいことだと思うけれども。わかり合えないと思うからこそ、理解したいと思うのだとマリナは信じている。
アルディ家の者が多情であることは知っている。だからこそ、シャルルはあれほどマリナに対して運命の人だと決めてしまったのかと思うのだ。そういう人と添うことはとても難しい。わかっているけれども、どうにもならない。義務感で一緒にいるわけではないから。論点はそこではなかった。
戀の雲。そして、行着きたいのか、行着いたのか・・・それはわからなかった。
これが戀の目的地ではなく、愛の始まりであることも判っていた。

マリナは、彼の残した愛の徴をひとつずつ確認していく。それだけで、まだ燻る焔が静かに勢いを増していく。

造りが違うから、という言い訳は存在しない。自分の身体に残されたものを、マリナは愛おしんでいる。洗い流して去らせてしまうことがこんなにも苦痛に思うとは。彼女は微笑む。
マリナはまだ、シャルルの愛を受けたいと思っているのだ。
それが戀の雲とどう繋がっているのか。
まったくわからない。
彼女は上を向いて、湯をふんだんに浴びる。
彼の愛は、確かに・・・恋の雲のようだ。そう思った。自分は、どこに行着くのかわからなかったけれども。
腕を伸ばして、呼吸を止めて上を向く。
戀に溺れて、戀に酔って、それだけしか見つめることができないというわけではなかった。
それをシャルルが哀しんでいるのではなく、マリナに対して求めるものは細やかであることがマリナの心を痛めた。彼は、マリナにたくさんは望まないのだ。
ただ、愛して欲しいと願っているだけである。

マリナは水滴の残る壁に指先を乗せた。
考えてもわからないことは描いてみることにする。
それは昔から変わらなかった。
彼の言った言葉を、そのままに書き出してみる。
発音を追って、文字に起こす。
それは自分の空想を絵に描いていく作業と同じであった。
形のないものを形にする。音も思いも同じだ。
自分の身体が上気せていることも承知していた。
肺に入っていく空気が熱くて重い。

それも、じっと彼女はその文字を見続けた。
壁に描かれた文字は、水蒸気によって輪郭を淡くして露になって消えてしまう。
それをまた文字にして追いかける。
流水の音が響く中で、彼女は自分の胸に拳をあてた。
シャルルの欲しいものはひとつだけだ。マリナが欲しいと彼は言う。
マリナはそれを肌で知る。
そうしてしまった、と歎く代わりに。マリナだけをたったひとりと決めてしまった代わりに、彼は彼女の奥深くに、マリナが壊れてしまいそうな程に激しく踏み込む。

シャルルは、何を言おうとしているのか・・・
マリナはそれを知ろうとして、大きな眼を瞬かせた。何度見つめても、それの意味がわからない。
返歌を求めているのだおるか。
そうではないと思われた。それならば、彼はその場で彼女に求めるはずだ。後朝の戀歌のように。彼は別れを惜しんでいるのか。別れる。マリナははっと息を吸い込んだ。別れることは考えていない。

まったく、あり得ないことだと思っていたから。
いつかそんな時が来たとしても、今はそれを準備しておくことはしたくないと思っていた。
雲間が切れて晴れゆく空を期待しているのだろうか。
それを考えると背筋が痛む。考えていなかったことを考えているからだ。
いつでも、いつまでも一緒にいたい。それを、表現できないマリナに、シャルルは何かを投げてそれをマリナは受け止めた。それを返す時が来たのだと思う。彼が投げて寄越したものに、自分なりの色をつけて投げ返す。終わりではなく、これが永遠に続くのだと思っていた。ようやく、そう感じることができるようになってきた。

それなのに。シャルルは、一体何を言いたいのだろう。
マリナは自分の顔を両手で拭った。戀が迷霧となって彼女の視界を曇らせる。

しかし。
その時に、彼女は声を洩らした。
「あ」
はっとして身を縮める。自分が顔を拭った時に一瞬視界がぼやけて、そして次のその声が発せられた。

なぜなのか。
どうしてなのか。

それが今、目の前に現れて、そしてマリナは声を失ってそれを見続けた。
彼女はしばし放心して、その場に立ち尽くしていた。自分が余り好きではないと言った湯滴の中で、彼女は全身を濡らしながら、そこに立ったままになり、そのままその場で硬直してしまう。
なんてこと、と言いそうになったが、彼女の唇は彼女の髪から流れ出る雫によって湿るばかりであった。
先ほどは、彼にその唇を塞がれて声を出せずに身を仰け反らせていたというのに。

●06

勢いよくシャワールームの扉を開けて、踵で床を歩く。品性のない歩き方だとシャルルに言われるが、憤っている時に品性云々と言っている暇はなかった。
まったくもう、と口籠もりながら、ベッドルームへの扉を勢いをつけて開け放つ。
二重になっているのはシャワー音が不粋だと言ってシャルルが嫌うからであった。ひとりで使うには不粋も何もないのではないのだろうか、と言おうと思ったこともあったが、マリナと過ごすようになってから改められた習慣だと知ると、何も言えなくなってしまう。
彼女は顔を真っ赤にしながら、濡れた髪も軽く拭いただけでバスローブを乱暴に着て、慌てて出てきた。

しかし、ベッドルームに入った途端、ぎょっとして目を見開き、そして口を横に引いた。
むっとした顔になっているのはわかっていた。しかし、それほどシャワールームに長居していたわけではないのにこの有様は何なのか。
「シャルル。・・・シャルル・ドゥ・アルディ！」
怒りが頂点に達した彼女は彼の名前を呼び、足元を踏みならす。
ベッドの上でゆらりと体が揺れて、シャルルがこちらを見た気配がする。
気配がする、というのはマリナの眼が弱い為だけではなかった。
辺り一面が、白い煙で見えない程になっているからだ。
彼女はこれがシャルルの愛飲している煙草の匂いだとすぐに気がついた。
あれほど控えろと言っていたのに。マリナの前では断っているが、彼は時々自分の身体をいたぶるようにして煙草を吸うこともマリナは知っていた。
何をやっているのだ、この人は。
そう思うと呆れてしまい、唖然としてしまうが、唇を開けば煙たい空気が口中に広がるので彼女は顎を引いて彼を睨み付けた。
「警報装置が感知するでしょう。誤作動したら・・・」
「切断してある」
彼は平然と言う。マリナはますます憤慨した。まったく悪怯れた風もない。
「それでは意味がないでしょう」
「何の意味？」
彼は冷然と言った。口元にまた煙草を持っていく姿が見える。照明は極限まで落としてあるので、彼女は目を細めて恋人の姿を確認した。
白金髪が見え隠れしているので、起き上がって下穿きくらいは身につけているのだろう。ベッドの縁に腰掛けているのではなく、堂々とベッドに脚を投げ出して喫煙に勤しんでいる。
寝煙草などとは言語道断である。説教しようとして、マリナは当初の憤慨をふと思い出した。
酷い人とは思わないが、しようのない人だとは思う。この人の頭から水をかけたら。かつてマリナに仕向けたようにシャルルにも頭から液体を降り注ぎたい気持ちで一杯になった。

それほど長い時間ひとりきりにさせていなかったというのに、なぜ、これほどまでに煙っているのか。まったく理解不能であった。
「これが、『戀の雲』？」
マリナは彼に近寄りながら言った。彼は上半身は裸体のままであったが、細く長い指先に煙草を絡めておりそこから新しい煙が次々と雲を作り出していた。
彼が口元に煙草を加えて胸を隆起させる。マリナはそこに近寄ると、ベッドに膝を立てて彼の指先から煙草を取り上げた。勝手がわからないマリナは、それを灰皿の上に押し潰して揉み消してしまう。
どこから持ってきたのであろうか。灰皿もライターもシガレットケースも用意してあった。
そして、投げ込まれた灰皿の中身を見ると、相当本数吸っていたことがわかる。
マリナは目元が痙れているのだろうなと感じながら、シャルルを睨んだ。ベッドが軋む。先ほどの軋みとはまったく違う乾いた音がした。

「シャルル」
彼女は投げ伸ばしていた彼の足の脛を軽く叩いた。
「暴力女」
シャルルが睨みながら言うので、ますます呆れてマリナは彼を見る。
これが戀の雲だとしたら、苦しすぎるではないか。
戀の雲へ行着いた、ということなのか。
シャルルは、こんなに苦しい雲しか知らないのか。
それに、シャルルはマリナの回答が出ていることを知ったようだ。
どことなく気構えることもなく悠然としている様子が垣間見えた。
美貌の青年は、瞳の色が蒼灰色であるので、彼女が覗き込んでもなかなか本心を見せない。
再会してからの彼はますます偏屈で人間嫌いで自分の手の内を明かさない人になっていたが、それでもとても優しい人であった。
見捨てたり、切り捨てたりすることに対して過敏に反応してしまう。だから心を閉ざしてしまう。
彼の悪いところは自分のことを説明しないところだ。理解できないものに対して、敢えて自分から歩み寄る必要はないと考えている。

「それで？わざわざ君に出題したオレを失望させないでくれよ」
彼から差し向けられて、はっとする。そうだ。自分は最初に彼に抗議しようとして出てきたのだ。
煙が目に滲みた。目頭が刺されるように痛い。
それでも、彼女は頬を膨らませてシャルルの前に正座をし、自分の膝をぱちんと叩いた。
本当ならシャルルの膝頭を思い切り拳で殴ってやりたい気持ちであったが。
「どういうことなのよ」
大人になれ、と自分に言い聞かせるがシャルルの前ではどうにも自分の感情を抑えて話すことができなくなる。
それが戀なのだ、と否応なしに気がつかされる。
確かに、彼の予言通りになってしまった。
彼の傍で呼吸していたいと思うし、傍に居れば苦しいのに離れると無性に恋しい。彼の幸せを願うものの、自分以外の誰かとシャルルが描く幸せがあるのかもしれないと考えるだけで気が昏くなる。
自分がこれほど心の狭いことしか考えていないということを知られるのは嫌だと思っていたし、束縛することが愛ではないと考えていた。
しかし、シャルルはマリナの覚悟も決め事も垣根も越えてしまう。君の方が容赦が無い、とシャルルは言うけれども。
自分には許さない線があるのだと知ったのは大人になってからだ。自分自身を見つめる時間が増えてからのことであった。
一度だけ、太陽のようなあの人とのことを考えた時に自分のことをじっくりと考えたことがあったけれども、その時間はとても苦しかった。
今でも、楽しい作業とは言えない。

でも、それをシャルルは乱す。乱されるのが悪いのではなく、ただ困惑するばかりであった。
「本当に意地悪ね」
「褒め言葉として受け取るよ」
意地悪く彼女の恋人は言う。しかし、マリナの憤りは沈静化するどころか、ますます憤怒の焔を拡げていくばかりであった。
「わかったわよ。シャルルが何を言いたいのか」
「名探偵だね」
「探偵も何も・・・」
彼女はそこまで言ってまた唇を尖らせる。
煙草の火を消してようやく薄れてきた靄の中から、彼の美貌が徐々にはっきりと姿を見せてきた。
彼は腕を伸ばし、マリナの湿った髪の先を指先で弄んだ。
それがどうにも扇情的でマリナは怒りを忘れそうになり、慌てて自分自身に踏みとどまるように言い聞かせる。

●07　最終話

目から涙が出てくる。先ほどの愉悦の涙とは違っていた。目頭が痛むのだ。
先ほどは・・・目尻に涙が浮かんだ。涙ひとつにしても、これほど違うのだと知った。
それはシャルルがマリナに教えるものであった。そしてマリナは彼から多くのことを学び、経験する。
しかし、今はこの戀の靄の中で気が乱されそうになる自分を律した。

「アナグラムでしょう」
「ARS MAGNA（偉大なる藝術）？」
シャルルが意地悪く切り返したので、マリナは大袈裟と言えるほどの溜息を洩らした。
「全然、わからない」
「ラテン語」
「ああ、シャルル。そうではない。誤魔化すのはやめて」
「オレは誤魔化さないよ、マリナ」
その時にシャルルははっきりと反抗したので、マリナは目を瞬かせる。
寝乱れた格好のままでマリナを見つめるシャルルに、彼女は何も言えなくなってしまうことを彼は計算しているのだと思うと、またもや怒りが再燃してきた。
彼女は、大きく息を吸った。目を瞬かせるが、少しも楽にならない。
白金髪の男性を見つめて、彼女は話を進めた。
「私がわからないと思ったの？」
「君がわからないとオレが思っていると？」
「シャルル」
目を吊り上げて、マリナが彼の名前を呼ぶと、シャルルは満足そうに微笑んだ。

質問を質問で遣り込めるのは、人を黙らせる初歩的な手段のひとつであった。
「怒った時の君の顔も悪くないね。・・・それで、憤慨の理由は？」マリナは少し顎を引き、そして上目遣いに彼を見た。
「『強れ　妹も　苦役除き出づ』」
シャルルは目を見開いた。彼の端整な顔が興味深くマリナの言葉を分析していることを指し示すように、やや緊張した。彼の知識の豊富さは唸る程であったが、今回のこたえに対しては何か思うところがあったらしい。
彼は薄い唇を開いた。知的欲求を満たそうとする者の顔であった。
「強情な恋人がまるで苦役のように風呂のために渋々と出て行く」
「解釈はどうでも良い」
マリナは憤慨した。
除、というのは暦注十二直のひとつであり、沐浴には吉とされる。しかも、洗い清めて来いという意味で最後の「出づ」は出て行く、という解釈の他にも「斎み浄められる」という意味で「稜威（いつ）」もかけているのだとわかった。妹は恋人のこと、強れというのは強情な、という意味がある。
・・・要するに、マリナに対して、「風呂に入って身綺麗にして来ることを承諾させることすら手強い」と回りくどく言ったのだ。
まったくもう、と彼女は口籠もる。シャルルは薄く笑ったままだった。いつものように、辛辣な返事をするのではなく、黙って興味深そうに、かつ可笑しそうにマリナを眺めているだけであった。
彼女は唇を尖らせて、靄の中の恋人を睨んだ。
「何よ。言いたいことがあるのなら、言いなさいよ」
「君は「妹」と言うくらいなのだから、オレを恋人と認めているわけだ」
マリナは黙った。
そもそも、彼が不機嫌になったのはマリナが彼に対して愛の言葉を告げたり彼のことをどう思っているのか伝えないからであったことを思い出した。
「・・・だから何よ」
意地っ張りであることは承知しているが、素直に認めるのは悔しい。
「そう突っかからなくても良いだろう」
彼の言う通りであったが、振り上げた拳の所在を無くしてしまったかのような感覚がマリナにあった。
いつもは喧嘩にならない喧嘩でしかなかった。こういう風に、他愛のないことで言い合うことも少なくなっていた。マリナは小首を傾げた。
不思議なことに、彼がこんな状況を楽しんでいるとわかったからだ。

「マリナ」
シャルルはふっと、笑みを止めて彼女を見つめる。時々、彼の心の内が透けて見えることがあった。こういう時だ。
わかりやすいというのではなく、何となく、彼が何を哀しんで何を憂えているのかということが理解

できるようになった、ということなのかもしれない。
同じ様にマリナの考えていることも、シャルルはわかっているはずなのにこうして言葉を求める。
愛も恋も、時々迷うことがある。
愛の問答には解答がない、ということなのかもしれない。こたえを出すということそのものが必要なのかもしれない。ふと、そんなことを思った。
「『行着く』というのは想いが成就すること。そして『吾』は『割れ』であれこれ思って心が乱れることを言う」
彼がなぜそれを口にしたのか、マリナは考える。
元々の意味にも、彼の苦悶が混じっているように思えた。
雲というのは、遠いことそのものを意味する。雲の上の人、というような使い方をしているのはそのためだ。遠い場所で暮らしていてもう会わないと決めていた人と、愛を始めたことを後悔していない。
二度と会うことはないと思っていながらも自分の気持ちに決着を付けることができなかったのはマリナもシャルルと同じであったから。
彼は、千々に乱れる心を雲に喩える。
雲のように手が届かない遠い場所に行着いた。
成就したと改めて実感する愛の時間に、恋人がなかなか「自分もそうなのだ」と言わない。
それなのに、彼は「吾も」つまり、自分も、と言った。
彼のそんな歎きが込められている。
嬉しくて楽しくて心が豊かになるばかりが愛ではないのだ、と言いたいのかもしれないと感じた。

「シャルル。あのね」
「もう、良いよ」
彼は微笑んだ。どこか、楽しそうであった。
「君の解釈を聞けて良かった」
煙草の靄ができてしまうくらい、待ったのに。彼の方が強情ではないか。そう思った。しかし、ここで言うべき言葉はひとつしか思い付かなかった。

「シャルルは、恋人なのよ。私の、私だけの恋人」
彼女は口籠もりながらそう言った。早口で、消え入りそうな声だった。
独占したいという気持ちは彼女にも存在する。しかし、彼の心は彼だけのものだ。マリナの心がそうであるように。それなのに、彼女は彼を必要としている。彼も、彼女を必要としてくれていると思う。断言できないのは断言できないほど不安だからではなく、そうしてしまうことで相手を縛ってしまうから。彼は一度約束したことは忘れないし、必ず実行する。マリナは幾度も彼との約束を反故にしたことがあったが、彼がそれを非難することはなかった。目が合うだけで心が弾む。そういう幸せを味わわせてくれているのは、他でもない目の前の男性なのだ。
すると、彼は肩を竦めて、何かを言った。次に、マリナの方に向き直り、両腕を軽く広げた。
「おいで」

「いやよ。煙草の匂いで気分が悪くなりそう」
マリナは頬を膨らませた。余韻に酔い痴れる時間の長短が違っているのは文化なのかそれとも価値観なのか、わからない。シャルルはマリナと何度でも抱き合いたいと感じているのかもしれないが、マリナは際限なく続けるつもりはなかった。だから、シャルルに先にバスルームを使って欲しかったのに。彼女は心の中で呟いた。
「それなら」
彼は笑った。身を起こし、彼女の肘を掴んで自分の方に引き寄せる。
そして自分の胸の中に彼女を抱え込むと、寝台に横たわって毛布の下に潜り込む。マリナが暴れたので、彼は更に彼女を組敷きながら、シーツともうふの狭間で彼女に囁いた。
「これなら、構わないだろう」
「私は構う」
自分の身体を押し当てて、彼は彼女の額に自分の額を押し当てた。こうなってしまえば小柄なマリナはまったく身動きが取れなくなる。それでも、彼から逃れようとして彼女は腰を浮かせるがそれが更に自分の恋人を刺激することになるのだと気がつき、マリナは目を瞑って拒絶と抗議の態度を見せる。
「・・・アナグラムには、階乗分だけ答があるとは思わないか。そのうち、意味を持つものは限られるが」
「え？」
そう言われて、目を開くとすぐ目の前にシャルルの瞳があって、マリナは頬を寄せた。彼の目を見ていると、彼への恋情に絆されて、言われた通りにしてしまう弱い自分を見られているような気になってしまう。だから、頬を寄せて視線を逸らす。
特に、こんな時には。
強く気持ちを持ち続けることができるマリナ・イケダではない部分も、彼は知っているから。羞恥を隠す動作ではあったが、シャルルに対してだけにしかできない甘えであった。
しかしすぐに目を開いた。彼の言葉が気になるからだ。
「と、いうことは・・・」
「君はその他の可能性について、まったく考えない人なのか」
シャルルの両肘が彼女の体の両脇に押し当てられて、そしてマリナの顔に彼の手の平が添えられた。細く長い、神経質そうな指先が彼女の頬を包む。しかしそれは乱暴なものではなくとても静かで優しかった。
それから、彼女の耳元で囁いた。戀の雲の下で。

幾重も　何時も　この際　霧れ」
そうか、と思った。
「霧れ」というのは涙で目が霞むことを言い、転じて見ているものがはっきりと見えないこと、通常の判断ができなくなることを言う。
何度も、何時でも、この瞬間は理性が霧散する。

好きになってはいけない人だと思い、添い遂げることはないと思っていた人の傍に居る。それが、彼から何もかもを奪っていくのではなく、与えてくれることもあるのだ、と彼は言いたかったのかもしれない。
どうして、こういう人を好きになってしまったのだろう、とは思わない。彼女には、彼が必要で、ずっと彼女のことを好きで居て欲しいと願ってしまった。
あの邂逅の時。
自分から、好きだと囁いた。やり直すのではなく、知らない者同士で新たに始めるのではなかった。
彼と彼女の中で動いたものがあった。シャルルだけではない。自分の中でも。
彼が虚無の中で生きてきたがそれが変わった、と言っていたことを思い出した。彼の口から・・・今度はそれを聞かされて、マリナは彼の背に腕を回す。
仕方の無い人ではあるが、同時に、自分も彼を困らせていることなのだろう。
「・・・酷い人」
彼が彼女のローブの中に手を入れて、水の匂いの残るマリナの体に自分を重ね始めたので、マリナは溜息混じりに言った。
シャルルの予告の通りになってしまった。
彼は笑う。そして、何も言わなかった。
・・・剝き出しになった彼女の腕に彼の腕が重ねられた。
「でも、愛してる」
マリナは彼の愛撫に目を閉じながら、そう言った。
これからまた、戀の雲に行着くのだろう。今度は、自分とシャルルとふたりで。

その一方で。シャルル・ドゥ・アルディはマリナ・イケダに身体を絡め、再び体に熱を持ち始めたマリナの首筋に唇を這わせながら、微笑んだ。
マリナが述べたものは彼が意図した解答と違っていた。彼女の思考回路は非常に興味深い。そう思った。
なぜなら、彼が用意したものはもっと違っていたから。
先ほど指摘した通り、彼女はその他に存在するメッセージの可能性を考えていなかった。
もっと、もっと違うことなのに。
この鈍感な人は、いつになったら・・・彼の要求に応じるのだろうか。
「別きも　昏れも　月への息い」
彼は心の中で再び言った。
分別も歎きも飛ばしてしまうほど、月への休息に憧れているということだ。もしくは、理性も悲哀も月への憧れの前ではすべて薄れてしまうほど、月へ行くことは何にも変えがたいものなのだ、という意味を含んでいた。
彼女は、覚えている。
世界を回って月まで行こうとシャルルが彼女に結婚の具体的な案を述べた時のことを。あの時もこんな風にして、ベッドの中で語った。だからこれを知れば彼が何を望んでいるかわかったであろうに。
日本語のアナグラムは濁音と清音を同一視する傾向があるが、シャルルならそんなことはしない。

彼は読み替えをしないと解釈できないものを解答の可能性の高いものとして挙げなかった。
彼なら、「いつ」を「いづ」と読ませることはしないし、「苦役（くえき）」を「くへき」としない。
だからマリナ・イケダの解釈に少しばかり驚かされた。そして彼も「幾重も」を「いくへも」と並び替えた。本当に述べたかったことには、用いなかったが。
しかし、それで良い。解答はひとつではないのだ、と彼女から学んだからだ。
愛を持ち続けることも、愛を諦めることも、愛に生きることも、それから。愛と邂逅することもすべて、マリナが彼に見せてくれた素晴らしい贈り物だと思っていた。
彼女は彼が総てを捧げると言ったことを気にしているが、彼は彼女も彼に捧げているものがあると認識していた。
それは、戀の雲だ。漂う様に美しいけれども遠かったもの。そして、雲雨と言われるように、雲・・・男女の契りを表すものに行着いた。彼女を今、独り占めしている。堪えることなく、浴びせるように愛を注ぐ。
彼女がそうするように。彼をもっと独り占めしたいと言えば良いのに。
確かに、頑固で情の強い人であるけれども。そんな彼女だからこそ、彼は彼の恋人のことを、今でも彼のファム・ファタルと呼ぶ。
「風呂嫌いのマリナちゃん。隅々まで綺麗にしたかい？」
彼は揶揄いながら、彼女の肌に沈み始めた。

ああ、確かにそうだな。彼は確信する。
戀の雲に・・・行き着く。
安堵し、心を安らがせ、そして愛の喜びを知る。それは、彼女がいるから。
彼は叱られることを承知のうえで、煙草の香りが残る唇に笑みを浮かべて恋人にそっとキスを落とした。
「愛しているよ、君だけを永遠に」

（FIN)

Dessin

#Dessin　01

「あの、ちょっと待って」
マリナ・イケダが慌てた声を出したので、ワタルは視線を彼女に向けようとして体を捻った。
「そのままで・・・」
いつもは豁達に物事を濁すような話し方はしない彼女が、語尾を消え入りがちにして話したので、ワタルは意識を彼女に向ける。
そうしたくても、先ほどまで、背後で彼女が心配そうに見上げている様を背中で感じ取ることに集中していたのだが。
しかし、彼の画廊で不定期に働く彼女のことに気を取られていては足元が危なかった。
彼は、木製の脚立に乗って彼女と同じことを言った。
「もう少し、待ってくれる？
今、この電球を取り替えるから・・・」
彼は上擦った声で言う。彼女が待ちきれないのかと思ったからだ。しかし、そう思ってからすぐに考え直した。
彼女も「待って」と言っていたから。
声だけで様子を推し量るというのはなかなかに難しいことなのだと感じた。
いつもは、声さえ聴ければそれで良いのだ、と思っているというのに。ふとした拍子にその考えを覆すような行動を取ってしまいそうになって、慌てて自制する。
いつでも会えるという気軽な関係ではなかったし、そもそも、彼と彼女の間には雇用関係が成立している。いいや、「それのみ」と断言しても良いくらいだ。
その上、互いの身内も知り合いであるから、問題行動を起こしたり、気まずい関係を継続するようなことは避けたいと努めてきた。
彼女の才能というか能力については認めているところであったし、何より、普段物静かな一方で頑固なまでに生真面目な実兄が後継者として育てようとしているような人物であるから、使い捨てのような扱いはできなかったし、そうしたくないと考えていた。その者だけが持つ個性的かつ独創的な強力な引力と能力のことを「才能」と言うのであれば、彼女は才能を持っていると断言できた。人を集め、人に考えさせ、己も同時に様々に煩悶しながらもきちんと答を出そうとし、そしてそのことに責任を持とうとしている。
・・・若い頃はそうではなかったのだ、と苦笑気味に彼女が語ったこともあったが、今はそれすら糧にしているように見受けられた。
大変に小柄な女性で、愛くるしいというより幼くてあどけない顔立ちをしている。くるくると表情が変わり、人を見捨てることや見ないふりということができない性分であることは理解していた。そのため、妥協や諦めに対して頑なまでに拘りがあるのか、本業のオファーが少ないことも承知していた。
豁達で罔明。

若い頃から独立していたということで、かなり世慣れているかと思ったのだが、そうではなく隔離されていたことによって世間知らずなところもあった。
短所と長所を取り混ぜながら彼女のことを表現しても、結局のところ、「目が離せない」という結論に至ってしまう。そうなのだ。彼女からは、意識を逸らすことができない。
それは、ワタルにとって、彼女がインスピレーションの源だから、というだけではない意味を持っていることを彼女は知らない。他の者には・・・もう、薄々わかってしまっていることなのだろうということは自覚していたが。
古参の客や、画廊の受付嬢、果ては実弟に至っても、口を揃えて同じことを言うのだ。
「奪ってしまえ」と。
しかし、彼はそれには応じなかった。
彼女には深く愛し合っている相手がいる。
だから、彼が横から口出しをできる立場にあるわけではないのだ。何より、彼女が笑っていることが最優先で、そして彼女がここで才能を伸ばしていく様を見つめ保護することが彼にしかできないことであると自負しているからこそ、何も言わないでいる。
これが永遠ではないことも承知していたけれども。永遠ではないからこそ、無造作に無作為にやってくる瞬間を欲する。そして、それが彼の作品にひとつずつ残されていく。彼の本業もやはり画廊の経営者ではない職業であった。それは彼女と同じだ。最初は不本意であったけれども、今は満足している。それに、本業のグラフィック・デザイナーとしての職も最近忙しくなってきた。それは、「MARINA」という名前のモデルの連作を出すようになってからだった。自分ではそう感じることはなかったのだが、マリナ・イケダのイメージを作品に使うようになって、作風が変化したと言われていた。
傾いた画廊の経営を任された時には、正直、どうして良いのだろうかと思案した。経営学を身につけて専門的に学んだというわけではなかった。兄が継承すると思っていたし、その兄が弁護士となって、そして美学という、この国では周知されていない学問について学びたいと言い出した時に、家族の中に亀裂が走ってしばらくの間、修復することが難しかった。何より、兄のタケルが実家を嗣がないと言うことがわかった時点で、ワタルは末子のサトルを推挙した。彼は経営者向きだと思ったし、サトルはそのつもりで学生時代から父の会社を手伝っていた。
ワタルはグラフィック・デザイナーの仕事について、思うところがあった。
けれども。
父の経営する不動産会社を含めたグループ会社の広告宣伝の仕事を受けるだけ以上の活動をしたいのだ、と言い出すことを躊躇っていた。
そんな時に言い渡され、押し付けられた格好になった画廊の経営が、これほど長く続くとは当時のワタルには思いもしないことであった。
画廊の経営を軌道に戻すことができたのなら、グラフィック・デザイナーという仕事を認める、と言われて。ワタルは不承不承引き受けたというのが最初であった。
薄暗い、黴が充満する古い雑居ビルの外観から内装までに手を入れて、少しずつ画廊に置く作品を増やしていった。自分で買い付けに行くこともあったし、細い伝手を辿って遠くまで出向くこともあ

った。なぜ、本業を蔑ろにしてまでこのようなことをしなければならないのか、疑問に思ったことは一度や二度ではなかった。
画廊で販売する美術品は頻繁に売却できるわけではないから、細々と絵付け教室を行ったり、絵手紙などのカルチャースクールを開催することによってようやく人の出入りを確保できる程度であった。収支については最初はないに等しく、なぜ、彼がこんなことを課せられるのかさえ理解できていなかった。
しかし。母が、美術品についてとても理解があった人であったことと、父が意味のないことは命じない人間であったということが、彼の放棄を阻んでいた。
それが今はどうだろう。
彼女が講師をしている絵付け教室は定期的な収容が望める。
そして、彼の経営する画廊には華のような風が吹き込んでいた。
マリナ・イケダが不思議なほど、人を呼び込むのだ。
しかし、彼女の人柄だけで達成できているわけではないと知った。
弟や兄はこの画廊の紹介を人に会う毎に行っていただろうし、マリナ・イケダは自分の知己に幅広く周知したのだ。
特に、マリナ・イケダの影響が大きかったと思われた。
そして、それは間違いではない。
彼女の友人を介して広まったというより、彼女を知った者が他の者を介して人を呼び込んでいく、ということに気がついた時には、マリナ・イケダという人物からすっかり眼が離せなくなっていた。
それは彼だけではない。
画廊の受付嬢も、彼の実弟も。そして実兄さえ、彼女を必要としている。
なぜなのだろう。
失われたものを、彼女が持ち続けているからなのか。
それとも・・・もっと違う、根源的なところで彼女に惹かれているからなのか。

#Dessin　02

なぜ、彼女が待てと言ったのかを知りたくなって、体を捻ったのが始まりだった。
ワタル・イワツキはいつもと違う少し高い目線から彼女を見ることになり、かなり動揺したのだ。
事実から述べるとそうしか言いようがなかった。
この画廊の照明は意匠に凝っている。
そうマリナに褒められてワタルは微笑した。彼女は思い付いた褒め詞は、時と場所を選ばず声を大にして伝える傾向にあった。
他者の称賛は他の他者への侮蔑になることもある。だから心せよ。
父からそう教わっていたワタルは、マリナの手放しの讃辞に最初は戸惑った。人を褒めて育てるという心得を得ているから、絵付け教室の臨時の講師に推されたのだろう、とひとりで納得していた。し

かし、実際は違った。
本当に、感激しているのだ。ひとつひとつのことに、疲れてしまうのではないのかと思うくらい心を動かされて、それをいちいち言葉にしている。

彼が乗っているのは木製の脚榻で、外見は湿気や震動に強い材質を組み合わせて作られているものの、中心には大変に軽量で頑強なハイブリッドのウレタンとカーボンフレームを組み合わせて作られている。
外観が柔らかいものを、と考えて計算したわけではないが自分の選んだものがマリナ・イケダの目に止まったことが驚きであった。
今、彼が何をしているのかと言えば、その脚榻でもって彼女が愛して止まない絵画達を照らす間接照明の入れ替えを行っているのだ。マリナでは手が届かないし、特別な照射方法と角度を用いているので、画廊の所有者であるワタルが自ら手を入れているというところであった。
それらの絵について買い付けを命じたのはワタルであったが、マリナがそのことによって様々なに変化していこうとしていると感じるところがあった。それが、自分がもたらしたものであるのならば、自分は最後まで見届ける必要があると感じていた。責任感だけではないでしょう、と杜宇子には指摘されるがそれには答えていない。なぜなら、答を出してしまったのなら、これは終わってしまい、そして始まってしまうからだ。「何」が終わって「何」が始まるのかは言葉にしない。これは、ずっと秘めたる想いとして抱えるものだと、今は、そう思うから。
「照明の交換はもうすぐ終わりますから」
彼は顔を天井に向けながら、言った。
真新しい照明に変更してしまうことに心残りを感じているのであるのならば、残念ではあるが少し照射に変化のある新品に耐えてもらうしかない。
寿命を迎えた物品を置いておくわけにはいかないからだ。それはやがて発火の原因にもなるだろうし、そんなことになってしまえば苦労して手に入れたとある画家の幻の連作を残しておくこともできなくなってしまう。
彼がいつまでも敬語であったり丁寧な言い方をしていることで、マリナ・イケダは彼との距離を感じているようだった。自分は、これ以上距離を詰められない。そう思っていた。言葉の終わり方について変化しなければ、彼女と違う関係になれないのであるならば、彼はずっと彼女との距離を縮めることはできない。なぜなら、それが彼そのものであるからだ。
乱暴な口調が良いとは思わないし、心を許した相手には何を言っても良いのだという思いもなかった。
近しい相手だからこそ・・・思いをいつでも告げられるのだという傲慢な考えは捨てるべきだと思っていた。

「ああ、そのままで・・・少し待ってもらえますか」
彼女の慌てた声が聞こえてくるので、彼は身を捩って斜め下を見つめた。
近くに寄ってはいけないと言ったのに、彼女はいつの間にか、彼の脚元近くに立っていてこちらを眺めていた。壁際の照明であるから安全性には問題はないが、彼女の存在に気がつかないままで体の均

衡を失うようであったのならすぐさま彼女は彼の体の下敷きになってしまったであろう。
何か、会話を交わしていたわけでもないし、気楽な作業というわけでもないのでワタルも無言で作業していた。それを継続しろと言うのか、それともももっと違うことを求めているのか判別しがたい状況にあって、ワタルは交換し終わった装置から手を離した。雲の上から見下ろすかのように、マリナの頭上がとても小さく見える。
彼女の意図がわからずに、困惑した様子を表してしまったようだ。マリナは慌てて、彼を見上げながら説明を始めた。
とても小柄だけれども、大きな瞳は誰よりも煌めいていて、誰よりも綺麗だった。目が弱いせいか時々目を細める仕草をするが、それが彼女の不可思議さを際立たせていた。何より、瞬きをゆっくり行う仕草が人を惹きつける。意識していないのだろう。そんな風に指摘されたこともないのだろう。彼女は、いつも何かを凝視するかのように、彼女の見える風景をすべて取り込むかのように、目を見開いて目に焼きつけているように見えた。
「あの・・・今、眼鏡をかけた人との話を考えていて」
脈絡のない話の前後を考える。
それでワタルは事情を察した。彼女の本業で、眼鏡をかけた人物の話を構想に入れているのだろう。彼自身も、マリナをイメージと言いながらもかなり観察しつつ作品に取り入れている事から、彼女の考えを理解出来ないと拒絶することはできなかった。
確かに、自分ばかりが彼女を見つめすぎている。それが一方的すぎるとも思っていた。彼女から見つめられたいと思うのではなくて、自分の強い一方的な視線が彼女を困惑させているのではないのだろうかと思ってしまうのだ。
だから、逆に・・・決してあり得ないと思っていた事態・・・彼女が彼を見つめる、ということに対してとても動揺している。

#Dessin　03

彼女が口籠もりながらも、彼に視線を向けて何かに没頭しているということに気がついた。
彼女を観察することに慣れてしまっていた彼は、観察することに夢中になっている彼女の視線の先に該当することはないと思っていた。
「次回作だね。もう、大分進んでいるの？」
彼女が日本に居る理由というのは、ひとつしかない。自分の夢を叶えるためだ。そのために、彼女は恋人と離れて暮らしている。そして仕事が終わって気が向くと、彼に会いにパリに行くように見えているが、本当はそうではないのだとワタルは察していた。
彼女がそう求めるからなのだ、と。自分の人生の中で必要不可欠の相手と常に一緒に居たいという願いを越えて、彼女は少し違う場所に立っているような気がしていた。
独占欲もあるだろうし、離れている間の嫉妬もあるのだろう。しかし、彼女はそれすら糧にしてしまっている。夢を叶えるために。今この瞬間でも、彼女は夢中になるものに夢中になっているという瞬間を連続させている。

彼の問いかけに、マリナ・イケダは首を僅かに傾けて、彼を見上げながら言った。
「これから仕上げに入るところなのですが、幾つか、どうしても気に入らないところがあって」
彼女は言った。歯切れの悪い言葉の様子からすると、彼女の言う通り、納得できない箇所が幾つかあるのだろう。しかし、仕事をしている以上は期限があり、彼女はどちらを優先させるべきか悩むこともできずにいる、という状態であるように見えた。
若い頃からの夢を追いかけて叶えて、そして彼女はまた追いかけ続ける。そういう人もこの世にはいるのだ、と思った。自分の夢を叶えてしまった後に残っているものは希望だけではなく、それに伴う責任や枷というものも確実に存在するのだ、ということを彼はすでに十分すぎるほど知ってしまっていた後のことであっただけに、彼女のそのような心がけや人生について彼は自分に作用するものを感じた。自分が満足できないものを期日までに引き渡さなければならないという煩悶は彼もよく知っていた。また、そういう時に限って評価が低いということも。創ることだけに喜びを感じていた時から随分と遠くなってしまっていたのだ、と思っていて、ワタルはそのことについて「そういうものなのかもしれない」と思い始めていた時期のことであったということも相俟って、彼の興味はマリナ・イケダに注がれることになった。
現在制作中の本業については、何も言わなかった。マリナにはそのような禁欲的な部分がある。描いている時には何も語らない。それはワタルも同じであった。
次は何を創るのか、今は何を創っているのか。
残したものしか語らない。
ある時から、彼女はそうなってしまったのだ、とわかった。全部を聞いたわけではないが。彼の実兄を経由して聞くマリナ・イケダという人物と、彼が観察している彼女は少し違っていた。しかし同一人物であることは間違いようのない事実だ。
彼女の理由には、彼は納得できるところがあった。甘やかしすぎるつもりはないが、画廊の中で教室の開催時間中以外のことについてワタルが「こうあるべき」と語ることは契約の範囲外であると思われたし、彼女の思想の自由を阻むことが彼の職務ではないように考えていた。もっとも、そうやって感上げることすら、それは通常の業務形態ではないと実弟は忠告するのだけれども。
彼の問いかけに、マリナは答えた。幼い顔に小柄な体軀が彼女の精神年齢も拙いのだ、と相手に誤認させがちであったが、彼女は若い頃から大人に混じり生活しながらも職業を変えることのなかった希有な人物なのであるのだ、と思わせるのはこんな時であった。
「無理なお願いですが・・・幾つか下図を描かせてもらえますか」
無理だとわかっていながらも、彼女はそれでも申し出たので彼は目を細めた。自分の動作や骨格を図に起こしたい、と言い出す彼女に彼の心はさざめいた。
「僕も、いつもお願いしてばかりですから」
彼がそう言って、脚榻の上で苦笑した。
マリナ・イケダはもっと気安く依頼してくるかと思っていたが、画廊に出入りする者たちに対してはマリナは何かを強く求めることはなかった。彼女は何か一線を引いていた。詮索をするつもりはなかったが、彼女には謎が多すぎた。それが周囲の興味を惹き、途中からは夢中にさせるのだからマリナ・イケダという人の怖さと素晴らしさを強く見せつける。

彼女は僅かな光源の変化を見逃さなかった。間接照明を採用していたので、直接に作品達に照射することはない光の変化について気がつくものはとても少ない。それがどれほど重要なことであるのかを知っている者は、ごく限られていた。来客などではまったく気がつかないだろう。
しかし、マリナが先ほど画廊に入るなり、眸を細めて該当の場所ばかりを気にするように見つめてばかりいるので、ワタルが客の出入りがなくなったことを見はからって画廊を一度閉め、照明を点検することになったのだ。設備点検をしている様子を来訪者に見せることはしない。今日は受付嬢もおらず、ワタルは奥に片付けてあった脚榻を持ち出して腕まくりをし、マリナに少し離れているように言って電源を落とした照明の覆いをついでだからということで清拭しながらひとつひとつ確認していった。すると、やはりひとつだけ接続部分が変形し、光度が下がっている箇所があった。マリナはこれに違和を感じたようで、彼は普段自分が毎日のようにここに通っているからこそわからなかった細やかな違いについて内心驚愕と落胆を混じらせていた。
マリナは非常勤であるから気がついたのだ。
そして来訪者のように短い時間しか滞在しないというわけでもないから、彼女だからこそ気がついたということなのだろう。しかし、そんな細やかな出来事が彼の心から穏やかさを奪っていく。・・・彼女がここに常にいるというわけではない人物なのだということを再認識してしまうから。
久々に顔を合わすことになったワタルよりも照明の変化に気を取られてしまうマリナのことを、酷い人だと思わずに好ましいと思ってしまうのは、やはり彼が彼女のことを・・・
思考を切り替えるために、ワタルは話を続ける。
「イケダさんにはモデルになっていただいているばかりですから」
「私は何もしていないのですが」
今度は、マリナが苦笑いを交えてこたえた。
「その御礼にデッサンのモデルになるとは光栄の極みですね」彼は笑いながら言った。マリナが慌ててそれを打ち消した。
「忙しいことはわかっているのですが・・・他に頼む人が思いあたらなくて・・・」
そうか、と思った。彼女が今日、少し早めにやって来たのは、このことを依頼するためであったのだ。彼は合点した。
それなのに、自分の当初の目的ではなく、僅かに異なる画廊の変化の方を優先させた。それが何を意味するのか。そもそも、彼女はそんなことには頓着しないのだろう。順番というものに対して、拘りがあるとは思えなかった。
「それで僕を思い出してくれたのなら、これは大変に光栄なことですよ」
「仕事以外のことでお願いをするのはどうかと思うのですが」
彼女は言い訳めいたことを言ったが、彼は微笑む。どんな過程であれ、マリナがワタルを頼ってきたのだ。それを拒む理由はどこにもなかった。

彼女が持ち込んだ大きな鞄からスケッチブックと柔らかい芯を挟んだホルダーを取り出してじっとワタルを見上げた。こうして更に上から彼女を見下ろすと、本当に小柄な人なのだと思ってしまう。それなのに、彼女の存在感は反比例していると認めざるを得ない。
「照明をつけるので、少し待っていただけますか」
漏電を防ぐために一度、電源を落としてしまっていた。照明の交換状況も確認しなければいけない。それに。ワタルはこんな風に薄暗い画廊の中で彼女とふたりきりでいることに対して、当然とは思えない場の雰囲気に落ち着かない気持ちを感じ始めていた。
画廊は一度、閉めてしまっている。今日はこれからは特にアポイントも入っていない。だから・・・誰も入ってこないだろう。
「あの、少し薄暗い方が丁度良いのですが」
「そういうもの？」
「そういうものなんです」
彼女が神妙な顔つきでワタルを見上げたので、彼は思わず笑ってしまった。彼女は彼を笑顔にさせる。
「それにしても、面白い脚榻ですね」
彼女はそう言って彼に近寄った。
「危ないよ」
「少し、見ても良いですか」
ワタルの忠告を聞き流しているのか耳に入らないのか、マリナ・イケダは彼の足元に近寄って食い入るように見つめていた。彼女の視点が次々と変わっていく。それが面白くて、ついつい、饒舌になってしまう。
「画廊の中に置いてあるものが金属的なものが多いので、つい、こういう目に付かないものにはそうではないものを用意してしまう」
彼の説明を聞きながら、マリナはそっと指先を伸ばした。反対側の利き手にはしっかりとスケッチブックと芯ホルダーが握られていた。
華奢な風情で軽量でありながら、ワタルの体重も十分に支えることができるという不均衡さが彼女を惹いたらしい。
彼女は、彼の足元でゆっくりと巡回しながら観察を始めてしまう。
「僕は一度降りた方が良い？」
彼はそう言った。彼女が近くにいるので少し離れるように促したものの、マリナには響いていなかったようだ。
「あの、次は幾段か降りていただけますか」
丁寧な口調ではあったが、有無を言わさぬ強さがあって、彼は彼女の申し出のままに降りた。スケッチブックを見ると、大まかな骨格と配分が簡単に描き込まれていた。おおまかな構図を取った上で、後ほど描き直すのだろう。なるほど、彼女はそうやって描くのか。ワタルは冬の日にひとりスケッチをしていた日のマリナの様子を思い出す。
できるだけ沢山の構図を描いておきたいということなのだろう。ただし、彼女が気にしていた眼鏡だけはきちんと描き込まれていて、短髪で眼鏡を装着した男性の各種動きに重きを置いて線描したもの

、ということは明白であった。これらのことから、彼女は何かを描く時には、下書きしてから絵に起こした方が自分の感覚を出すことができるタイプの人であるとわかる。
柔らかいタイプの芯を使っているものの、部屋の中に響く音に眸を細める。スケッチブックの上で奏でられる、躊躇わずに線を起こす音が懐かしくもあり新鮮でもあった。
脚榻に少し寄りかかり、壁際に立つ彼女を見つめるが、彼女はワタルを見ているようで違うものを見ていた。
画廊の中では電源系統を分けてある部分がある。ここに並ぶ絵画達の箇所と絵付け教室などを行う公開スペースの部分で異なっている。

向こう側が明るく、こちら側は薄暗い。半地下の画廊の中で明暗が際立つが、薄暗い側にいる、ということがワタルには長く続けてはいけないことに思えた。穏やかであたたかく安らぎに満ちていながらも彼女の根源が保存されている場所と思うからこそ、マリナ・イケダはここに通ってくるのだから。
「イケダさん。電源を入れるので、少し待っていてもらえますか」
互いに、相手に申し出ばかりしているな、と思った。しかし、彼女の足元は薄暗く、いつ転倒してしまってもおかしくはない。何しろ、彼女は手元に夢中で足元がどうであるのか周囲の視界がどのくら不鮮明なのかさえ気にならない様子であったから。先ほどは、画廊に入るなり何かが違うとでも声高に叫びそうな勢いで周囲を見回していたというのに。
許可を求めるまでもなかった。このまま、誰もやって来ない画廊の中で薄暗い空間の中、無言で見つめ合うには長すぎる時間だと思う。何しろ・・・彼女はまったく動じないでただひたすらに描画することに没頭しているのだから。
「イケダさん？」
「あの、少し私も登らせてもらって良いでしょうか」
彼女は彼の言葉を遮るようなタイミングで申し出た。あまりにも瞳が輝いていたので、彼女の好奇心に満ちた顔を見ていると呆れるよりも、やはり微笑みながら応じてしまう。
「どうぞ」
目線が高い位置での描写が必要なのだ、と彼女は呟いていた。彼女の周囲には、それこそ呆れるほど長身の者がたくさんいるし、何より、彼女に最も近い場所にいる人物はかなりの高身長であった。しかしながら、ワタルにイメージを求めてやって来たマリナは他の候補者の中からワタルを仕方なく選んだのではなく、彼しか思い付かなかったのだという様子でやって来たことを、ワタルは改めて確かめたいと思う気にはなれなかった。
確かめてしまえば、彼のささやかな期待が違うものに変わってしまうということもわかっていたから。
静かな画廊の中で、ワタルが降下する音と、それを見上げるマリナの「ありがとう」という言葉だけが響いていた。
かつん、とワタルの革靴が画廊の中に響いていた。
まったく想像していなかった、彼女との時間に辟易ろいでいた。
交換した照明器具を片手に持ち、彼は場所を交代することに同意する。何がどうということでもない

のに、自分が居た場所と彼女が交代になり、今度は彼女に見下ろされる視線の先に自分が配置されることに対して、平然としていなければいけないことが彼の心を乱していく。
この空間は。
小柄な、ゆっくりと瞬きをする人のことを見つめ続ける自分の心の内そのものだと思う。

しかしながら、彼は脚榻の脚の両端を掴み、彼女の昇段を支えることに神経を集中する。それほど難しい動作ではないが、自分に言い聞かせて行動しなければ別のことに目が向いてしまいそうだから。

マリナ・イケダが上を向いていた。彼の正面で。
ワタルは声を呑み込んでしまう。それほど近い距離に立つことはないからだ。それに、彼女とは久々に会ったので彼女の変化を目の当たりにして彼は声を出せなくなってしまう。
彼の正面で脚をかけて昇り出す彼女の体を補助しようとして手を伸ばしかけたが、彼は慌てて手を引いた。気軽く彼女に触れてはいけない。そういう戒めめいた命令が彼の中に突如として閃光のように射し込んだから。
穏やかに静かに彼女のことを見守る己が変わってしまいそうで、彼は体を引いた。
彼女が笑顔でいることが、彼には最も大切にしたいことであった。自分が倖せにしてやりたいと思うのではなく、彼女に倖せになって欲しいと思う。

彼と同じ目線まで登った彼女は、脚榻越しに彼を見つめて言った。
「そうか、オーナーはこういう風景が見えるのですね。一体、どんなものを見ているのか・・・」
マリナの声が、彼の胸に染みた。彼が見つめているものを見透かされたような気になって、ワタルは話題を逸らそうとした。
目の前に、彼女の大きな瞳があって、彼はどきりとする。目が合って気まずいと思うことはなかった。これまでは。なぜなら、目線を合わせない者との良好な人間関係は期待できないと、これまでの経験からよくわかっていたことであったからだ。
画廊の仕事をしていくうちに、学んだことであった。人は都合が悪くなったり強力できないのに口先だけは色よい返事をするときなどは決まって目を反らした。
傾きかかった画廊に、どれだけのことができるのか。面と向かってそう言われたこともあった。しかし、彼女は最初からずっと、ワタルの眸を見て話をする人だった。それが気に入って彼女を雇用し続けていると言っても良いだろう。
・・・最初のうちの理由は、それだけであったというのに。

#Dessin　05

とても大事にしているものだということは、承知していた。
彼女はスケッチブックをどんな時でも持ち歩いている。

「荷物は一度置いた方が」
ワタルがそう言った時のことだった。
彼女が小脇に抱えたスケッチブックを落としそうになり、彼女がふっとそちらに気を遣ってしまって、足を滑らせてしまったのだ。
あっ、と小さく叫ぶ彼女の声が聞こえてきた。
こんな時には「危ない」とか「大丈夫か」という声があがるものだと思っていた。しかし、そうではなかった。
がたん、と様々なものが不協和音を出して画廊の中に響き渡る。彼女の方に脚榻が倒れかかり、背中から大きく傾いて壁に衝突しそうになる。その瞬間だけ時間軸が違ってしまっているかのようにゆっくりと彼女の体が宙で孤を描いていく様を見て、彼は声を出すよりも前に、彼の体が動いていた。

声もなく。
彼は、彼女の体を抱き留めて、脚榻を蹴飛ばしていた。胸の中に入り込んできたものが何であるのかを確認する余裕すらない僅かな時間の出来事だ。
だから、画廊の中で突然に生まれた、静寂に挑む音というのは複数存在した。
脚榻の倒れる音、ワタルが持っていた交換後の照明器具が落ちて割れる音、そして・・・マリナを抱えたワタルがそのまま壁に肘を突いて自分の身体が彼女に倒れ込まないようにしながらも彼女の体を抱いて傷つかないように守っているために生じた落ち着きのない響きが画廊に行き渡る頃。
彼は、そこでようやく呼吸を始めた。自分がどうなっているのか把握するより前に、胸の中のあたたかく柔らかい存在に声をかけようとしたが、声にならなかった。
驚いたからではない。彼が触れまいと決めていた存在に事情はどうであれ、触れてしまったから。温度が遠ざかるより前に、自分から遠ざけなければいけないと思考が働き始める。
「大丈夫ですか」
彼が声をかけるよりも前に、胸の中のマリナが悲鳴を上げた。
壁に衝突した肘が少し痛んだが、それほど大事には至っていないだろう。骨には異常ない。両脚で直前に体を引いて、手の平を壁に衝いて衝撃を和らげたからだ。それでも、体が少し軋んだ。彼女の踵が宙に浮いていた。壁とワタルの体の間に挟まれて、彼女は苦しそうにしていたので彼は慌てて背を伸ばし、彼女を床に着地させた。そして、心臓の音が聞こえていないかと思いながら彼女の安否を確認する。
・・・こんな時なのに、彼女はそれでも、スケッチブックを手元から落とすこともなく抱えていた。彼は、それごと彼女を抱きしめていた。・・・これは彼の心の内そのものだ、とまた思った。彼女が抱えているものは、彼も大事にしてやりたいと思うのだ。実兄の恋愛を嗤えなかった。自分も、まったく同じではないのか。

彼は大きくひと呼吸してから、ようやく声を出した。
永遠にこのままでいたい、と思ったがそれは叶わない夢だ。
「大丈夫？怪我は？」
「それは貴方のことです」

マリナが怒ったように言って、抱えていたスケッチブックを床に置いた。
ワタルが抱いていた腕の力を緩めて、彼女を解放した時の動作が意外で、彼は目を細める。肘をついた腕はまだ痺れていた。しかし、反対側の、彼女を抱えていた方の手で眼鏡をかけ直した。指先がまだ、震えていた。
背中から転倒しそうになっても手放さなかったスケッチブックを床に置いて、ワタルの安否を気遣う彼女の心がわからなかった。
動転しているから故の思考なのかもしれない。しかし、そのように分析する余裕が生まれてこない。
「ワタルさん、大丈夫ですか。怪我はしていませんか」
彼女は両手で彼の脇を軽く叩き、腕に手を伸ばそうとして顔を上げた。
彼女が彼のことを名前で呼ぶときは仕事以外の時である。それ以外はいつも「オーナー」と呼んでいる。しかし、彼女の額にうっすらと汗が滲んでいて、彼女も酷く動揺しているのだと気がついた。
「私の心配より自分の確認をしてください」
マリナが怒ったように言った。彼の影になった貌は、先ほどのあどけない少女のような顔立ちから少し変わっていて、大人の女性の顔つきになっていた。心配顔をしている彼女はいつもの無邪気さが失せてしまっており、硬い表情で眉を寄せてぽんぽんと軽く彼の体を叩いている。
「ああ、僕は大丈夫だから」
ワタルはそう言うと、壁に衝いていた腕を伸ばした。
「デッサンに夢中になるのは良いけれども、薄暗い場所だから、気を付けて」
苦言めいたことを言うことは好まないが、彼はつい、忠告を口にしてしまう。彼女は何事にも文字通り体当たりであるから危なっかしいのだ、と周囲の者が溢していたことを思い出した。自分の感覚で得たものを重視しているようだが、これではいつか彼女が大怪我をしてしまう。
そこで、ふと、彼は苦笑した。
そんな心配をして良いのは、あの男だけなのだ、と思い直したからだ。彼女を気遣い、彼女への忠言に対して彼女が耳を傾ける相手は自分ではない。
言葉を重ねても彼女にとってはそれは積もらない雪と一緒なのだと思うと胸が痛んだ。
「・・・危ないから」
それでも、彼女がじっとワタルを見上げていたので、彼は途方にくれてしまった。はやく彼女の方から身を引いて、彼から逃れてくれなければ。彼は、彼女を捕まえてしまう。
こんなに近い場所で、彼の体に隠れてしまうほどに小柄な女性と距離の近いところに居続けて、今までの自分で居られる自信はなかった。そしてこれを言い訳にして彼女に触れてしまえば何もかもが壊れてしまう。
優しく穏やかな空間の中に突然の亀裂を、持ち主である自分がもたらすことはあってはならないことなのだ。
そう自分に言い聞かせた。

「この構図も良いな、と思うのですが」
マリナが真剣にそう言ったので、ワタルは目を閉じて自分の肘に手を添えた。痺れはとうに失せていたけれども、今度は違うものが彼の体を巡っていた。棘で刺さたような痛みは苦しいだけではなく、

彼に目眩を誘う。
マリナがスケッチブックを下ろして彼を見上げたのは彼を気遣ってということではなく、次の作品の構想から故のことであったのだ。そう思うと、体の熱が急激に冷えていく。

そして苦くて虚ろな笑いが込み上げて来た。
これほどまでに見えているものが違っているのだ。
でも、諦めることができない。
何と愚かしいことなのだろう。それでも、彼女の笑顔を見ていたいと思う気持ちには変わりは無かった。そして、これは失望ではないのだということも理解していた。彼女に過度な期待をかけていたのは自分の方であったし、何より彼女が自分のことよりもワタルの安否を気にしていることに対して嬉しくないはずはなかった。それなのに、どうしても「さらに加えて」何かを期待してしまう。
こういうことは、良くないな。
彼はそう思った。
この気持ちさえ、彼は作品にしてしまうのだ。見る者が見れば、彼女をモデルにした彼の作品には常ならぬ熱情が迸っていることを感じ取るだろう。実際、彼の連絡に出てくる人物はワタルの恋人なのか妻なのかという問い合わせもあるくらいだ。モデルの情報に関しては何も答えないと回答しているにもかかわらずそれでも時折そのように問われることがあった。
だから、彼女のことを責め立てる理由は何一つないのだ。
彼も、同じだから。

#Dessin　06

「でも、先に手当をしなければ」
「本当に、大丈夫ですよ」
彼は穏やかに言う。しかし、そこには拒絶が含まれていた。相手に失望した後は空しさか怒りか拒絶が生じるものだと頭で理解していたが、彼は最も修復不能なものを披露してしまった。
彼女は自分の大切なものを手から離してなお、彼の安全を気遣ったというのに。
「それより、イケダさんには怪我はなかったのですか？本当に？」
彼の言葉に、マリナは泣きそうな顔になった。どうしてこの人はこんなに他者の心配ばかりをするのだろう。ワタルはそう思った。しかし、それはすぐに答えが出た問題だった。
「自分のことより、他の人のことを優先させる人ばかりだから」
ああ、彼女は悲しんでいる。そう思えた。彼女がワタルのことを気にかけたのは、やはり誰かを思い出していたからなのだろうと思われた。過去、彼女はこうやって誰かに守られていつも守られていたから、それが気になって仕方が無いのだと気がつく。
「それは理由になっていませんよ」
彼女の手から逃れるようにしてワタルは言った。
他者が無事であったから自分のことは気にかけなくて良い、ということはしてはらないと思った。自

分はどうであれ、彼女にはそう思っていて欲しい。
「私は、平気です」
彼女は肩を竦めて両手を彼の前に差し出した。手を怪我すれば彼女の仕事に差し支える。同じことを彼女も考えていたようであった。
「腕・・・本当に無理していませんか」
その質問に「無理をしているのだ」と答える者がいるのだろうか。彼は微笑んだ。こういう心配をされたのは、随分と久しぶりのことであったから。

「私が注意を聞いていなかったから」
彼女は萎れた声で言った。自分のために彼が怪我をしたとなれば、その消沈具合は度合いを増すのだろう。
「しかも、私は・・・」
マリナ・イケダは自分が何に熱中していたのか、それが実に浅慮極まりないことであることなのかを知りつつ、そのように口にしようとしたので、ワタルはそれを遮った。彼女に謝って欲しいのではない。
「僕は異変があればすぐに適切な治療を受けるようにしますよ。だから、それで貴女の構想が挫けてしまう方が勿体無いことだと思っています」
ワタルは強い口調で教え諭した。
彼の母はすでに逝去している。いつかは見送る日が来るかも知れないと思っていたが、それはとても早すぎた。母も、夫やこども達のことを心配してばかりいて、自分のことは二の次にしてしまうような人であった。だからと言って、母と彼女を重ねることはないが。しかし、母が彼女のことを見たら何と言うのだろうか、と思うときはあった。

突き放してしまうような言い方になってしまったのだろうか。
「僕も思いもかけないところから構想を得ることがあります。だから、イケダさんの気持ちも少しかもしれないけれども、理解できるような気がします」
怪我をしていたのなら。彼女をこんな風に彼の胸の近くで背中を壁に押し当てさせたままで立たせることはしない。けれども、怪我をしていると彼女が憂えているからこうして近付けるというのであるのならば・・・どこまでも深みに行ってしまいそうで、彼は言葉をそこで句切った。
しばらくマリナが沈黙していたので、彼は彼女の顔を覗き込んだ。俯いていた彼女がぱっと顔を上げて少し屈んだ彼と近い距離で目を合わせた。あっと思って顔を引いたが、その時には既に彼女と目が合ってしまっていて、動揺した顔を見せてしまっていた。
「それでは、今度、この構図を使わせてもらいます」
彼女はそう言って泣きそうな笑顔になった。弾けるほどの笑顔ではなく、静かに浮かび上がるような切ない笑みに、ワタルは見入ってしまう。
この人は、なぜ、こんな風に時々哀しい笑顔を見せるのだろう。明らかに、大人になって知ったという笑い様だ。

何かを誤魔化すのではなく何かを受け入れたからそんな風に笑うのだろう、と思うと彼が知らない彼女の心の内を覗き込みたくなるが、そこで気がつく。
ああ、彼女は今、近付いて欲しくないのだ、と。
容易く人の心に近付くことができる人であることは認識している。しかし、彼女の心の中には容易く入り込むことはできない。それを今、再認する。

「ありがとう」
「それなら、僕も使わせてもらうことにしましょう」
ワタルの気遣いが彼女には届いたようであった。彼女は決して愚鈍ではない。だからこそ、あれほど人を惹きつけるのだろうと思う。
「思わぬ出来事も創作の材料になりますから」
そう。こんな風に、思わぬ距離で彼女を見ることができるのなら壁に打ち付けられることなどは大したことではなかった。
「本当に、問題ありませんか」
彼女がもう一度だけ繰り返したので、彼は笑った。
「学生時代には随分と怪我をしたものですよ。運動部でこれくらいの打ち身は怪我のうちに入りません」
意外なことを聞いた、というかのようにマリナが目を丸くした。彼の穏やかな様子からまったく予想していなかったことなのだろう。しかし、先ほど彼女が着衣の上から彼に触れた時に思うところがあったのかもしれない。彼女の瞬きはいつもの彼女であって、ゆっくりなままだったものの、興味深そうに唇が動いた。
「一体、何をされていたのですか」
「秘密です」
彼は笑った。そのように逸らかされるとは思わなかったのか、彼女はえっと声を出した。
細やかな抵抗であった。仕返しにさえならないワタルの意地悪にマリナは顔を傾けて一生懸命考え始めたので、彼は軽く深呼吸する。
先ほどの大きなうねりに似た激しい力は今は作用していない。
静かな・・・誰もやって来ない薄暗い画廊の中で、彼女の顔を斜めから見下ろすことを彼は赦されている。
「さあ、これから少し片付けますので、あちらでお待ちください」
「待って。もう一度・・・この構図が」
そこまで言ったマリナの声は、突然に遮られてしまった。

壁が軋む音がして、ワタルが激しく手の平を打ち付けたからだ。マリナは傍らに立てかけて置いたスケッチブックを取り上げようとして手の平をびくりと拳に変えた。

その瞬間、苦しそうにワタルが囁く。
絞り出すような、決して声にしてはいけないものを引き出すかのような苦悶に満ちた声であった。

「危ないから」

小さな声だった。

彼は俯き、それだけ言うと顔を反らして彼女に背を向けた。

乱暴にしたかったわけではない。ただ、彼女がこの状態を維持することを希望したから、それを壅閉しただけだ。
彼は心の底で悔やんだ。
彼女にしてみれば、これは単なる「出来事」でしかないのかもしれない。しかし、彼には･･･彼にとっては、彼女が彼に触れたという幻のような時間であったのだ。それが永遠に続けば良いのにと思ったのは自分であったのに。それを続けようとするマリナを拒んでしまう。何という矛盾なのか。何と、自分勝手な行動なのか。彼は唇をぎゅっと噛んだ。

眼を遣れば、乱れて倒れた脚榻と、割れた照明具が床の上に散乱している。
眼鏡をかけ直す。心を落ち着ける時には眼鏡に手が伸びてしまうのは、昔からの習慣だった。

眼鏡をかけなくても不便はないのにね

過去、そう言った人の声が思い出された。ここのところ思い出すことなどはなかったのに。

すべてをかなぐり捨てて夢中になる様な想いではない。しかし、これを壊してしまったのならこの場所は成立しなくなってしまう。
それでも。
彼は、とうとう、マリナ・イケダに激しい情をぶつけてしまいそうになってしまった。
それを避けるために彼は自分の手の平を打ち付けて放散した。彼女が驚いた顔をしたことにどう言い訳しようか、考えることもなく。

#Dessin　07

「これ、次に使わせてください」
マリナが言った。しかし、それは本意なのかどうかはわからなかった。彼女がこの場を和ませるために言ったのだろうと思ったからだ。
強く壁を打ち付けてしまった。
項垂れたワタルのことを気遣ったのか、本当にそう思っているかわからない。なぜなら、彼女の顔を見ていないから。

どうにもならないほどに強く彼女のことを欲してしまった。それが彼に強い羞恥を呼び起こす。
穏やかに見守るつもりだったのに。これまでも、そうしてきたのに。
「今のは、貴女の作品の参考になりますか？」
彼は極力明るく言った。
大人の狡さかもしれない。こんなごまかしでもって、会話を滑らせることは逃げる術そのものなのだとわかっているのに・・・それを追求することがすべてでも正義でもないと思う時に、少し変わるのかもしれない。ワタルはそう感じる。
「ええ、勿論」
彼女の答はいつものとおり、屈託がなくそしてどこまでも朗らかであった。
ワタルは安堵する。
乱暴に扱ってしまったことを後悔していた。荒々しさは彼女には必要ではない要素だ。少なくとも、この場所には必要のないものである。

失いたくないと思うから。
失いたくないと思うからこそ。

だから、彼女にごまかしを委ねる。
今までのことが、彼の心の内にあったものではなく、彼と彼女の創作の中の演出であったのだ、と思わせるために。
しかし、それは誰に対してのごまかしなのだろう。
マリナに対してなのか。
それとも。
自分に対してなのか。

それを考える前に、彼は言った。間を置いてはいけないと思ったからだ。
「驚かせて申し訳ないね」
彼は素直に謝罪した。そして、床の上に散乱した様々な物体を片付けることにする。
やがて人がやって来るだろう。
いつまでも、ここを閉めておくわけにはいかない。
それに。
二人きりの空間の中で、これ以上胸苦しい空気を作り続けることがもどかしくも切なかった。
大人になり、それ相応の地位とか社会的役割などについて考える年齢になったというのに、そんなささいなことで悶えてしまう己に嫌悪した。
もっと、穏やかに鷹揚に構えて、彼女を待ち受けていたかったのに。
時間が動くことが、惜しいと思った。同時に・・・愛しいとも思った。

マリナの困惑はワタルにも伝わってきた。だから、これを誤魔化すのではなく創作の一助なのだと告げる。それが、哀しいごまかしであったとしても。

Dessinというのは「ものごとのあらすじ」という意味もある。
核心に触れるのではなく、概要をなぞるということで落ち着けたいと思っているワタルの気持ちをマリナはどう受け止めたのか。
それはまだ、わからない。
しかし、彼の申し出にマリナは素直に受け入れて言葉を返してくれた。
「それでは、互いに持ち帰ったものを今度は、見せ合いましょう」
マリナがそれで事を納めたので、彼は微笑んだ。
しかし、背中を向けて床に転倒する脚榻に手を伸ばしていたので、彼女の表情は見えなかった。
それで逃げていたのだろうと思う。彼女の視線を見てしまったのなら、今度は自分に責任が持てなかった。
「そのような機会があれば」
彼は慌てて付け加えた。普段、慌てることのないワタル・イワツキが彼女の言葉に即座に反応しようとする。
そのことすら、彼女は気がついていない。そして、自分も意識していないうちにそうなってしまう。もう、少年ではないのだから。自分の感情を抑制できないというようなことはあってはならないと思うのに。時々、彼女といるとふっと忘却という名前の帳が彼の視界を覆ってしまうのだ。見え方が違うのだと承知しているのに。それすら彼を俘虜にしてしまう。

すると。背中を向けたワタルのシャツを引っ張る力があって、彼は屈んでいた体を持ち上げた。
マリナが彼のシャツを引いたのだ。
自分の小さな指先で、彼女は彼を引き止めた。
背筋が自然に伸びてしまう。
彼はこの画廊の所有者で経営者だ。
経営を建て直したのだから、他の者に譲っても良い空間だった。
しかし、今は少しもそんな気持ちは湧かない。

この空間を穢したくないと思っていた。
昏い空間ではあったが、ここは・・・訪れる者が安らぎを得るような、そんな場所であって欲しいと願っていた。
それなのに、彼の安らぎになる人物は彼に安らぎと同時にもっと違うものも与える。仄暗くて、底がなくて、気がつけば自分は迷宮から出られないのではないのかという不安のような気持ち。しかし、そこから逃れたいと思うのに抱いたままでいたいとも思うのだ。
そんな彼女は、手を伸ばせば届く場所にいるのに。
彼女には届かない。
見下ろすと、近い場所に彼女がいた。
彼が寄りかかればすっぽりと隠れてしまいそうなほどに小柄な人だ。
その彼女が、短く整えられた爪を立てないように彼のシャツの裾を掴んでいる。

距離があまりにも近くて、彼は体を強ばらせた。

危ないよ、と言いそうになる。
これは何度も繰り返してはいけない禁言だ。その場凌ぎで言葉を濁したとしても。言葉は終わらないし変わらない。
満たされることもないし、干上がることもない。
それがこの場所を埋めていく。
Devaranaと称されたこの場所に彼女が染み渡っていく。

「・・・流さないで」
「え？」
彼は聞き直した。マリナは再び、言った。
「怒っているのなら、そう言ってください」
マリナ・イケダの声はとても小さかった。彼女がどうして人と距離を保ちたがるのか、それで理解できた。ほんの僅かであったかもしれないが、彼と彼女の距離は少しだけ縮まった。
それを見逃そうとしたワタルに、マリナが囁きに似た願いを込めた。
それはわかった。
なぜなら、彼女の声に、彼はいつも耳を傾けていたから。
「怒っていますか？」
「いいえ・・・いいえ」
ワタルは否定した。もう、それ以上何も言えなかった。
彼女が彼の服の裾を引いて引き留めた。それ以上の願いが、どこに存在するのだろう。
「どうして、怒らなければいけないのですか」
最も答えにくい問いかけだと思う。
マリナに問うても仕方の無いことなのに。彼女にワタルそのものはわからないのだと思い知らせるような問いかけを無遠慮にしてしまった。
彼女に何の咎もないのに。

#Dessin　08

人は、大きく揺れ動く感情を維持できない代わりに、感情を交互に抱くという性質がある。怒りを持続できないから失望し、そしてそれを越えると諦めや拒絶に進んで行く。
彼女を拒むことができるのなら、どれほど楽になるのだろうかと思う。
「私が、怒って欲しいのかもしれないのかもしれないですね」
彼女は弱った声で言う。いつもは、そんな風にか細い声を出してやるせなさを押し出しすことはなかったのに。

だから、彼は思った。
彼女が、遣り過ごすということができない人なのだ。

摩擦があったとしてもそれを怖れない。それで関係が終わりになるとは思っていない。自信があるからではなく彼女には希望があるからだと思う。諦めるのではなく、諦めることを考慮しない。また構築できると思っている。壊すことを怖がらないのはなぜなのだろうか。
思うとおりにいかないことを回避しようとしたり言い訳したりしない。そんな彼女に惹かれたのに、そんな彼女を否定しようとした。
彼が垣間見せた激しさを、マリナに触れられることが怖いと思っていた。しかし、それは彼が望んだことなのだろうか。それとも彼が拒んだことなのだろうか。
どちらにしても思うことは・・・
目の前にあることから逃げない、という姿勢の彼女を眩しく思うということだ。
彼女の直面する問題のうち、ひとつは相当彼女を悩ませているようだが。
彼女は、あの人とのこれからに足踏みしている。
白金の髪のあの人との未来を具体的に描くことができないのだ、という課題が彼女をここに留めている。

・・・もっと先送りにすれば良いのに。

そのことだけは、ワタルはそう願っていた。誰にも言えないことであったけれども。

心が、燻されていく。
そう思った。

彼は軽く咳払いして、彼女に向き直る。
散乱した画廊の中で。
ワタルは、彼女に告げた。
「怒ると叱るは違っています。そして、僕は貴女に叱ることもできないし、怒りたくもない。でもひとつだけ。・・・貴女はここではいつもの貴女でいて欲しいと思います」
それは彼の言う事の出来る限界に近いものであった。
なぜそう思うのかは、理由は言わない。

彼女の居ない時間も、この空間では時間が流れ続ける。
それでも、彼女の脱け殻だけを拾い集めるような日々になることはない。
でも。彼女がいると、この画廊には風が吹き、そしてどこか空気が変わる。
それを彼は拒絶することはなく、この場所にはそれが必要だと感じるからこそ彼女を待っているのだと思うのだ。在不在を問わず、ここにはここだけの時間が流れている。だからこそ、彼女はやって

来る。変わらないからではなく変わっていくから忘れずに憶えている。そういう場所もひとつくらいは・・・あっても良いのかもしれない。

彼女は彼の言葉を聞いて、顔を上げた。
欲しい言葉であったのだろうか。
嬉しそうな笑みなのに、目元はどこか泣きそうだった。
こんな風に複雑な感情が入り交じった時にどんな表情をすれば良いのかわからなくて戸惑っているという印象を受ける。
その顔は、とても幼かった。

彼は大きく深呼吸した。
彼女が求めているものが、わからなかったから。
いいや、わかっていたのに・・・彼女のそれを受け入れてしまったのなら何もかもがなくなってしまうのではないのか、と思ってしまったから。
狡い選択とわかっていながら、それでも彼は心の内を彼女に語らない。
この場所を彼女が欲するのなら。
彼は、ここを維持することで彼女に主張したいのかもしれない。
彼女のために始めた店ではないし、彼女がいなくなったらなくなってしまう理由になる店ではない。
しかし、彼はどこか、思っていたのだ。

思って欲しかった。
彼女に。
行き場がない、と。

彼女がこの場所と同じ役割のある場所を他で見つけないで欲しいと思っていた。
積極的に願うことは罪だ。ここしかない、と思って欲しいと願うことは彼女を追いつめることになってしまう。
そう想いながらも、彼はそれを口に出すことができないままに、ずっと燻らせていた。
とても苦しくて哀しい願いであった。だから、気取られてはいけない。
誰も幸福にならないものを抱えて、それでも微笑む。
後戻りしたいとは思わない。前に飛び出していきたいたいとも思わない。
なぜなら・・・彼女はただの眩しい光ではなくなってしまっていたから。
創作の源になるほど、彼女のことを考えている。脳が焼き切れそうなくらい彼女のことを思い描いて作品を創る。そんな彼の姿を見せたくないから、彼は彼女前では自分の作品を創る姿を見せない。マリナが「自分をモデルにしていると言うが、ワタルが創作している場を見たことがない」というのはそのような事情からなのだ。

壊れそうな想いを抱いて、彼はやっとのことで言ったのだ。

しかし、切羽詰まった言い方は彼女を追いつめてしまう。
極力、柔らかく。極力、穏やかに。
自分の想いに押し潰されそうになるが、心の中を伝える時には・・・やはり彼はこうして静かな場所の中でしか、ものを言えないのだと思われた。

彼女は、命のへの祈りを知っている。
全うできずに散った命も、もっと生きたいと思った命も。
その年齢に味わうべき惜別以上のものを知っている。
人の生死にかかる話をするとき、彼女はとても強ばった顔をしているから。
過去に、人の生死に深く関わり、その点について自分に問いかけ続けている人に見受けられる特徴だった。彼も知っている。自分も、過去、母を見送ったばかりの時には考え続けていたことだから。
マリナ・イケダの場合には、それが顕著だ。
・・・だから、人々は彼女に惹かれるのかもしれない。
彼も、そのひとりであった。
しかし。
彼は、彼女の特別な『ひとり』になりたいと思うよりも前に。
特別な場所を与え続ける「たったひとり」になりたいと思ったのだ。

だから彼は考える。考えた結果、この燻りが制御できるかと言えばそうではないことも承知の上で。

どうにかなってしまいそうなくらい、彼女を焦がれていると言えば・・・
そう告げれば、彼女の心が動くのか。
それはない。
誰かが彼女の心を持ってきてくれるのか。
そうではない。

もし、告げてしまえば、まだ始まっていないことなのに、終わってしまう。
それが彼には堪え難い苦痛であった。
「私は、ここがとても好きで・・・だから、私の不作法については私に指摘してください。私には、その・・・言われないとわからないところがありますので」
彼女は、そっと伝えた。
その言葉に。
彼は応じた。
「ありがとう」
彼も、そっと言った。

彼だけが言う事の出来る最大限の尊辞であった。

この場所を壊したくない。

それが彼女の願いであるのならば。
彼女が、この場所を大事にしているのならば。

「わかりました。それでは、片付けを一緒に手伝ってください」
彼は笑顔で言った。大丈夫。隠しきれる。
そう言い聞かせながら。
すると、マリナは安堵した笑みを浮かべて脚榻に手を伸ばした。倒れてしまったので役割を果たしていないそれを持ち上げて、軽量でありながらも骨格がしっかりしていると驚きながら様々なところを手で撫でていた。
「私は高いところに手が届かないことが多いので、これはとても便利ですね」と感心している。
マリナの手が届かないものなんて、あるのだろうか。
ワタルは苦笑した。彼女のために手を伸ばして手繰り寄せてやる人物は、彼女の周囲には大勢いる。特に、あの人は自分のために手を伸ばすことは嫌がる傾向が強いのに、彼女のためであるのならどんな労苦も厭わないに違いない。高慢で不遜で誇り高いフランス人の美貌を思い浮かべる。

「怒っていませんか？」
「怒っていませんよ」
マリナがもう一度確かめた。ワタルは微笑んだまま、割れた電球を集める。現在の電球というのは破片が飛散しないように粘性が高い材質を使用している。手で集めれば十分なくらいであるが、後ほど拭き清めておいた方が良さそうだ、と思っていた時。
彼のとなりに彼女が回り込んで、じっと彼を見上げたのだ。
手にはスケッチブックと筆記用具を再び持っている。
それなのに、反対の側には脚榻を持っているものだから。
先ほどの注意を聞いていなかったのか、もしくは目先のものに夢中になって忘れてしまったのかと、首を捻る。
が、彼はどちらの可能性もあると思いながら告げた。
「デッサンの時間は終わりですよ」
彼は眼鏡の奥で眸を細めた。
「やっぱり、眼鏡の角度が難しい」
そう言うので、彼は片付けを続けながら、言う。
「想像で描けるところとそうではないとことがありますから。僕で差し支えなければ、時間が空いた時になら良いですよ」
「本当ですか」
彼女がぱっと笑顔になった。表情がくるくる変わる、大人びたという印象からほど遠い場所に位置する人は、ワタルの目の前で笑顔の花を咲かせる。

「いつもの御礼です。今度の作品にも使わせてください」
彼が申し出ると、彼女は首を縦に振った。それしか答が出ないように彼は申し出た。本当に、自分は狡い。そう思った。
彼女はこれでまた、ここから離れられなくなってしまう。
絵を売却しないのも、彼女がここにやって来る理由であることも承知しているし、彼のために来るわけではないことも知っていた。
それでも。
彼は、彼女のデッサンに姿が残るのなら。
彼女の大事にしているスケッチブックの中に、彼が刻まれるのなら。
それでも良いのだ、と思えた。

「ああ、いつまでもクローズにしてしまってはいけませんね」
マリナが誰もやって来ないことに今さらながら気がついた。
「その前に、その脚榻を片付けてしまいましょう。お客様には見せたくない備品ですから」
「どうして？こんなに素敵なのに」
「ここは画廊ですからね」
彼は曖昧に笑った。隠してしまえるものはすべて隠した後に。
受付嬢が座る席の影に隠してある分別型のゴミ箱に彼は割れてしまった照明器具を入れた。
そしてマリナから脚榻を受け取り、片付けてしまった。次に電源を入れて交換後の間接照明の具合を確認すると、マリナが眩しそうに目を瞬かせた。薄暗い場所で会話していたからだ。
「これでいつもの通りです」
マリナが喜ぶ。
「ここで長く時間を過ごしていると、なかなか気がつかないことでした」
彼は正直な気持ちを言った。確かに、僅かな違いをマリナが指摘しなければ・・・こんな風にふたりきりで彼女と話をすることもなかった。
「やはり、あなたは必要な人なのでしょう」
彼は呟く。その台詞には短いけれどもたくさんの意味が含まれていた。

しかし、彼女はそれに気付かず笑顔を向ける。
「私にも必要です。とても」
ああ、本当に残酷な人だ、と思った。彼の気持ちや言葉はどれだけのものが重ねられているのか、それすら気付かない。
それでも。
彼はそれでも・・・この場所を、いつものままに整える。
大きな変更は行わない。なぜなら、彼女がやって来る場所だから。
時間は流れて展示するものが変わるかもしれないが、この静寂だけはそのままに保持したいと思った。

彼は扉に向かう。
ここが一瞬だけ、時が止まっていた。
それも終わりの時間だ。また、いつものように空気が流れる瞬間を迎えて、再び画廊を開店状態に戻す。
とても短い時間であったが、ワタルにはとても貴重な時間だった。
彼の心の中にたくさんの彼女のデッサンを残したから。
しかし、胸の奥の甘い痺れは・・・腕の痺れのように、薄くなっていくことはなかった。
それが彼を動かす。またひとつ、そんな彼から作品ができるのだろう。

彼は画廊の中を見回した。
いつもの風景。いつもの空気。いつもの照明。
でも、傍らには彼女が居て・・・彼女は奥に飾られた連作の絵を眺め歩いていた。小さな背中を見つめながら、彼女にふわりと注がれる柔らかい光を見ながら彼は微笑んだ。
彼女の視線はいつも自分ではない誰かに注がれている。自分を見上げた彼女の髪の香りを思い出しながら、彼は彼女の姿をしばらくの間、見つめていた。

次の作品の名前は「Dessin」だ。
そう決めた。

（FIN)